國文注釋全書



東宮侍講 本居豐穎
文學博士 木村正辭 校訂
文學博士 井上頼圀

國文註釋全書

東京 國學院大學出版部刊行

目録

以上

上古代ゝ傳文ならぬ清くうるはしく人志承
言葉もあるは後の世乃かくやまとの文をいおもし
ましへゆかしいやしに便よき色目あはれと至よ
宮殿集なるし女てさえ女房の手に
なるいてし一条のいや錦なる世あまるく
本傳はさやさりしをもまて日本紀乃とも
よそ行しみゆかいはみきて出て此ぞ乃

いろせるゝぬき五十巻あまりにおよびしきかへ
たのしみより名目をさだめてはてもなきの
すくなく書きしぬく見えはやさかれし書紀は海
こなたにてめでぬべきふしぶしにあらまほしけれどもてある花
鳥の跡にいろ書によろこびうたは河海の水して
いかにしたきゝ細き流の末にふかき心をつけえて
すなはち世にみなもし至人まもられしおいて

緒みし書を見せたるを懐かしみへなつかしみ給ひ
しかるを國文註釋全書と名づけて世の
学の道の業の書どもを世にあらはしあ
ましかくる方にも思ふ世の人の便な
らんのはかりこと思ひたりけれおのれにあたへ
ゆかりある書どもはよく／＼見るべし詞をよませ
よとこれを記しつけあたへしにこそ河の思ふ

末ヲサマラズトイフコトヨロヅニワタリテツ、シムベキ事ナリ』ト、ヨツテ引用書ハ一々本書ニツキテ根源ヲ考ヘマホシク思ヒタレドモ、時間ト經費トノ關係上ヨリヤムコトヲ得ズ良本ヲ索メテ刊行ノ事ニ定メ、先ヅ內閣文庫本、帝國圖書館本、宮內省圖書寮本、國學院大學圖書館本、下田義照氏所藏本、和田英松氏所藏本、古事類苑編纂所本等、十數種ヲ對照シタルニ、宮內省圖書寮本最モヨロシク、之ニツグハ下田義照氏所藏本ナリ、シカルニ惜ムラクハ宮內省圖書寮本ハ第一卷第八卷ノ二冊ヲ缺ケリ、本書ハ此宮內省圖書寮本ヲ底本トシ、下田義照氏所藏本ヲハジメ以上列記ノ諸書ヲ以テ補缺校合セリ、

一花鳥餘情二十卷、一條兼良ノ著ナリ、河海抄ノ誤レル所々ヲ正シ義理ヲ演述セリ、自序ニ云、『我朝ノ至寶ハ源氏物語ニ過ギタルハナカルベシ、コレニヨリテ世々ノモテアソビモノニナリテ花鳥ノ情ヲアラハシ、家々ノ註釋マチ〳〵ニシテ雪螢ノ功ヲツムトイヘドモ、ナニガシノオトヾノ河海抄ハイニシヘ今ヲ考ヘテ深キ淺キヲワカテリ、モツトモ折中ノムネニカナヒテ指南ノ道ヲ得タ

リ、シカハアレド筆ノ海ニスナドリテアミヲモレタル魚ヲシリ、詞ノ林ニマブシ、テクヒゼヲマモル兎ニアヘリ、殘レルヲヒロヒアヤマレルヲアラタムルハ先達ノシワザニソムカザレハ、後生ノトモガラナンゾシタガハザランヤ、ツヒニ愚眼ノ及ブトコロヲ筆舌ニノベテ花鳥餘情ト名ヅクルコトシカナリ」ト、コレモ傳寫ノ誤謬多ク、內閣文庫ニ三部藏本ノ中一部良書タリ、本書ハ之ヲ底本トシ、帝國圖書館本、三木五百枝氏所藏本、其ノ他數種ノ異本ヲ以テ對照校合セリ、

一紫女七論一卷、安藤爲章ノ著ナリ、源氏物語ノ作者紫式部ノ事ヲ其ノ日記ニ考ヘテ詳論シタルモノニテ、才德兼備、七事共具、修撰年序、文章無雙、作者本意、一部ノ大事、正傳説語ノ七項ニ分テリ、仍テ紫女七論ト名ヅク、又紫家七論トモ呼ブ、卷尾ノ尙友軒月叟ガ跋語ニイヘルガ如ク、奇評確論誠ニ物語ノ指南ト謂ツベシ、本書ハ內閣文庫本ニ據ツテ校合セリ、

明治四拾壹年五月廿五日

室松岩雄識

河海抄

全


國學院大學出版部印

河海抄序

光源氏物語は寛弘のはじめに出來て康和の末にひろまりにけるより世々のもてあそび物として所々の枕ことゝなれりその中に中納言定家は卷々に難義を注して奥入と名づけ大監物光行は家々の口傳を抄して水原抄と號せりしかあるのみにあらず伏見仙院坊におはしまし丶時問題を左右にたてまつらしめて論談のかちまけをあらそはせられ後醍醐院御位のはじめ彼梨壺の歌仙におほせて萬葉集をよみとかしめし例をうつされけるにや黒戸の人數を定て五十四帖を講釋せらるゝ義ありしに先師忠守朝臣七の流の底の心を極て九かさねの撰に應ぜしかばしきりに顧問にあづかりてしばしば秘説を奏しきこゝになまじゐにわかんとをりの末をうけて遙に惟光良清が風をしたふいやしき翁あり桂をおる道をまなびし昔より椎がもとのやどりを尋るいまにいたるまでみどりの袖の色のかはらぬなげきをわすれてむらさきの筆のあとにそむる心ざしをあらはさむとすこの故に中葉の林にあそびてなをなをゆがめるをわかち前修の海をくみてふかきあさきをさだむをのづから岩ねの松の人しれぬことのはをひろひてわづかに軒ばの荻のほにいだすべきかぞとゝせりあつめて二十卷とす名づけて河海抄といふもとより窓の螢をむつびず枝の雪をならさゞればあさくみ寡くきけるあざけりを恥といへども故を温て新をしるなかだちとせんがためにいさゝかこれをしるすといふことしかり

河海抄卷第一

正六位上物語博士源惟良撰

料簡

一此物語のおこりに説々ありといへども西宮左大臣安和二年太宰權帥に左遷せられ給しかは藤式部をさなくよりなれたてまつりておもひなげきける比大齋院（選子内親王村上女十宮）より上東門院へめづらかなる草子や侍ると尋申させ給けるにうつぼ竹取やうの古物語はめなれたればあたらしくつくり出してたてまつるべきよし式部におほせられければ石山寺に通夜してこのことをいのり申すに折しも八月十五夜の月湖水にうつりて心のすみ渡るまゝに物語の風情空にうかびたるを忘ぬさきにとて佛前にありける大般若の料紙を本尊に申うけて先すまあかしの兩巻をかきとゞめけりこれによりてすまの巻にこよひは十五夜也けりとおぼしいでゝとは侍るとかや後に罪障懺悔のために般若一部六百巻をみづから書て奉納しける今に彼寺にありと云々光源氏を左大臣になぞらへ紫の上を式部が身によそへて周公旦白居易の古をかんがへ在納言菅丞相のためしをひきて書出しけるなるべし其後次第に書加て五十四帖になしてたてまつりしを權大納言行成に清書せさせられて齋院へまいらせけるに法成寺入道關白奥書をかゝれて云此物語世皆式部が作とのみ思へり老比丘筆を加るところなりと云々誠に君臣の交仁義の道好色の媒菩提の縁にいたるまでこれをのせずといふことなし其おもむき莊子の寓言におなじき物か詞の妖艶さらに比類なし一部の中に紫の上の事をすぐれてかき出たる故に藤式部の名をあらためて紫式部と號せられけり一説に云藤式部の名幽玄ならずとて後に藤の花の色のゆかりに紫の字にあらためらるゝと云々（清輔朝臣の説也）或説云一條院の御めのとこの子なり上東門院へまいらせらるゝとて我ゆかりの物なりあはれと思召せと申させ給けるによりて此名あり武藏野の義也ともいへり或は又作者觀音の化身也云々水鏡に云紫式部が源氏物語作出して侍るはさらに凡夫の所作とおぼえ侍らず日本紀を始として諸家の日記にいたるまであきらかにさとりもちゐて時の人日本紀の局と號し侍けりとあり凡物語の中の人のふるまひを見る

に高き賤しきにしたがひ男女につけても人の心をさとらしめことのおもむきを敎へずと云事なし一物語の時代は醍醐朱雀村上三代に准ずる歟桐壺御門は延喜朱雀院は天慶冷泉院は天暦光源氏は西宮左大臣如此相當する也桐壺卷には最初に兩所まで取分て亭子院の御事をのせたり是御遺誡なりこの比あけくれ御覧ずる長恨歌の御繪亭子院の書せ給へるたてまくらことにせさせ給と云々又こまうどを宮の中にめさん事は宇多の御門の御いましめなれはと云々又繪合の卷に朱雀院の御事を延喜の御てづからことの心かゝせ給へるに又我御世の事もかゝせ給へるとあり又昭宣公の母は寛平法皇の皇女延喜帝の御妹也致仕大臣の母も桐壺の帝の一御腹とあり此外もその證おほし難者云以前の准據まことに其寄有といへども此物語は光源氏をむねとする也されば西宮左大臣に准ずること一世の源氏左遷の跡は相同じけれども彼公好色の先達とはさして聞えさるにや今の物語は殊に此道を本としたるか如何答云作物語のならひ大綱は其人の面影あれども行跡にをきてはあながちにことごとにかれを摸することなし漢朝の書籍春秋史記などいふ實錄にも少々の異同はある也仍桐壺帝冷泉院を延喜天暦になずらへたてまつりながら或は唐の玄宗の古きためしをひき或は秦の始皇のかくれたる例をうつせり又天慶御門は相續の皇胤おはしまさね共此物語には朱雀院の御子今上冷泉院の御後なし或說此條有二作者之意趣一云々光源氏をも安和の左相に比すといへども好色のかたは道の先達なる故に在中將の風をまねひて五條二條の后を薄雲女院朧月夜尙侍によそへ或はかた野の少將のそしりを思へり又太上天皇の尊號も漢家には太公の舊躅本朝には草壁皇子天武御子等の先蹤を摸するか是作物語の習也初にいづれの御時にかとて分明に書あらはさゞるも此故也さりながら下には延喜帝の御時といふ心を含めり此外或は桓武一條院を桐壺御門に准じ又光大臣伊周公を光源氏に擬すなどいふ一義もあるか皆以謬說也若桓武といはゞ其以後の帝王陽成宇多延喜の御名（御諱イ）初にあり一條院ならば延喜より後五代の事見えず其上須磨の卷に此比上手にすめる千枝つねのりとあり兩人朱雀村上御代の畫工也此頃といへり一條院まで存生せず又繪合卷に朱雀院を當代のよし載レ之無二異論一乎

一或說云此物語をば必光源氏物語と號すべしいにしへ源氏といふ物語あまた有中に光源氏物語は紫式部が製作也と云々是今案之儀歟作者紫式部寛弘六年日記に源氏物語の御前にあるをよませ給とあり水鏡にも紫式部が源氏の物語とかけり代々集の詞これに同じ抑物語の證本一様ならざる歟行成卿自筆の本も悉今世に傳はらず源光行は八本をもて校合取捨して家本とせり所謂二條帥伊房本冷泉中納言朝隆本堀河左大臣俊房本號黄表紙左大臣書從一位麗子本土御門右大臣女號京極北政所一法性寺關白本唐紙小草子號尙侍殿本五條三位俊成本京極中納言定家本號青表紙等也各雖ニ證本一皆有ニ異同一猶勘ニ合古本一且可レ加ニ了見一者耶善者從レ之古人之美言也爰所レ出七本也加ニ光行本一八本歟

一紫式部者鷹司殿從一位倫子一條左大臣雅信女宮女也相繼而陪ニ侍上東門院一父越前守爲時母常陸介爲信女也其祖先者閑院左大臣冬嗣次內舍人良門右中將利基中納言兼輔因幡守雅正爲時也後左衞門權佐宣孝に嫁して大貳三位辨局狹衣作者を生す舊跡は正親町以南京極西頰今東北院向也此院は上東門院御所の跡也式部墓所在ニ雲林院白毫院南一小野篁墓の西なり宇治寶藏日記にも紫野に雲林院有よし見えたり雲林院は淳和離宮也賢木卷に光源氏雲林院にて六十卷といふ文とかせて聞給し所なり式部は檀那贈僧正の許可を蒙て天台一心三觀の血脈に入れりかねてより紫野雲林院の幽閑を思ひしめけるも旁故あるにや

一中古の先達の中に此物語の心をば歌には詠べからず詞をとるはくるしからずといふ一義あれど心をとりたる歌撰集の中にあまた見ゆ

續拾遺集　　　　　　　　　權中納言俊忠

なかめやる心のやみもはるはかりかつらのさとにすめる月かけ

とよめるは彼松風の卷におもひむせびつる心のやみもはるゝやうなりといへるこゝろときこえたり

同集　　　　　　　　　　　典侍親子朝臣

わかさりし袖かと（とやイ）まかふ梅かゝにおもひなくさむあかつきの空

浮舟の君小野にてこと花よりもこれに心よせのあるはわかざりしにほひのしみけるにやといへる心なり

新古今集　　　　　　　　　前太政大臣

しら露のなさけをきけることのはやほの〲見え
し夕かほの花
續古今集　　太上天皇後嵯峨院
袖の香や猶のこるらん橘のこしまによせし夜はの
うきふね
小侍從
うちわたす遠かた人にことゝひて名をしりそめし
夕かほの花
光俊朝臣
このころはゆくせの水をせき入て木かけすゝしき
中川のやと
鷹司院帥
わかしかた浪のをとにやかよふらん浦よりをちの
岡のまつかせ
是等はみな心をとれる歌なり詞をとる歌新古今に
むしのねもなかき夜あかぬ故郷に　見しゆめにや
かてまされぬ我身こそ　有明の月の行衞をなかめ
てそ　續古今になれよ何とてなく聲のなどいへる
たぐひ勝計べからす大方狹衣物語の尋べき草の原
の歌をも猶本歌に用たる歌近代集にあるにやひと

へに心をとるべからずと定がたくや且は俊成卿六
百番判詞にも源氏みざる歌よみは遺恨の事なり云
々又正治奏聞狀にものりなかもきよすけも源氏を
見候はずともにうたてきことに候也とのせられた
り尤和歌の奥造なるものなり

光源氏物語第一　桐壺

桐壺は淑景舍なり此所曹司たるによりて光源氏の母御息所を桐壺更衣といふ仍卷名とせり一名壺前栽詞に御前のつぼせんさいの盛なりとあり奥入云或說此卷分ニ奥端一爲ニ桐壺一壺前栽名云々是謬說也只一卷二名也桐壺者正說壺前栽者異說也云々

いづれの御時にか　延喜の御時といはんとておぼめきたる也河原院をなにがしの院鞍馬寺を北山のなにがし寺といふがごとし伊勢集始云いづれの御時にかありけん大みやす所ときこえけると云々是等例歟御をばいづくにてもおゝんとよむべし日本紀以下の讀樣なり一說おほん是劣說なり

女御更衣あまたさぶらひ給けるなかに　延喜御時后妃あまたの中に更衣周子の御腹に高明御子源氏姓を給り給ひしなり

醍醐天皇後宮

皇太后宮藤原朝臣穩子 太政大臣基經女

中宮藤原穩子 同人四女從二位

妃爲子內親王 光孝天皇之女贈從一位

女御正三位源朝臣和子 同皇女承香殿女御

同正五位下藤原朝臣仁善子 右大臣定方女

同能子 元更衣同人女

同和香子 右大將定國女

同姬子 參議菅根女兼明親王母

更衣源封子

滿子女王

藤原鮮子 伊與介連永女代明親王母

同淑姬 源因明朝臣母

源園子

同正子

滋野幸子

源柔子

同淸子

同俊子

平充子

源暖子

同桑子

同周子 號近江更衣 左大臣高明母右大辨源唱女

仲野親王女 克明親王母

大納言源昇女 重明親王母

中納言兼輔女 章明親王母

右兵衞督敏相女 源允明母

參議伊衡女 源爲明母

桐壺帝後宮

弘徽殿太后 二條太政大臣女朱雀院一品宮前齋院母

薄雲女院 先帝第四皇女

麗景殿女御 花散里上姉

承香殿女御 四宮母

桐壺更衣 贈從三位按察使大納言女六條院母

女御 宇治八宮母大臣女

前尙侍 賢木卷ニ出家

後涼殿更衣

女御事

日本紀 雄略天皇七年求ニ稚媛一吉備上道女爲ニ女御一是女御始也

漢朝に八十一女御あり周禮後漢書等に見えたり
周禮曰女御掌下叙ニ御於王之燕寢一以ニ歳時一獻レ功事上
又曰王者妃百廿人后一人夫人三人嬪九人世婦廿
七人女御八十一人三夫人座論婦禮鄭玄注曰夫人如三台從容論禮九嬪掌教四德九嬪比九卿
韵會曰嬪有婦之法度也四德謂ニ婦德婦容婦言婦功一
也廿七世婦主知喪祭賓客婦服也明其能眼事於人也比廿七大夫後漢書曰以レ備ニ
內職一爲ニ后正位一宮園同ニ體天皇一八十一女御序ニ于
王之燕寢一御謂進御於王也比八十一元士皇代記曰桓武天皇女御從三
位橘三井子從四位下入鹿女

更衣事

仁明天皇承和三年正五位上紀朝臣乙魚女被レ授ニ從
四位下一爲ニ更衣一柏原天皇更衣也是更衣初也
漢書孝章曰更衣者便殿也園中有レ寢有ニ便殿一寢者
陵上正殿便殿者寢側之別殿更レ衣也注曰時於軒中侍帝權主衣裳
案レ之更衣は便殿也主上御衣など着しかへ給とこ
ろなり故に號ニ更衣一歟又寢側の別殿なる故に更衣
を御息所とも稱するか休息の義なり水原抄には更
衣後に御息所と見えたり猶昇進之義か云々只何も
同事なり女御御息所と書る古本も有
史記曰是日武帝起更レ衣子夫侍ニ尙衣一軒中得レ幸上
還レ座驩甚平陽主金千斤主因奏子夫奉送入宮子夫
上車尙主也於主衣車中得幸也
漢書注曰時於ニ軒中一侍レ帝權ニ主衣裳一
案レ之車中にして后妃衣を脫て庶女の服を着して
幸する故に號ニ更衣一歟　本朝更衣は四位相當也
上卿要抄云更衣事尙侍宣下諸司聽レ着ニ禁色一云
々

いとやんことなききはにはあらぬか　無ニ止事一也又
無ニ停事一也花容無レ止万葉

すぐれてときめき給ありけり　絕妙日本紀　時同(トキメク)めく
はよみつくるてには也生をもなまめくとよめり又
人めく春めくなどもいへり

めざましき物に　驚目覺草(メサマシクサ)萬葉奥入水原抄等に載レ之
不審案之此義別事也詩に冷眼と作此心なりたとへ
ばすさまじく見えたるなりそねみたる樣なる心な
り

おとしめそねみ給　劣也陷心歟

いとあつしくなりゆき　後漢書曰生レ男如レ狼猶恐ニ
其尫一生レ女如レ鼠恐ニ其武一　伊弉諾尊神功既畢靈運
當遷日本紀又劣或尫弱故曰レ尫順和名或曰支離也　定家卿說云

おやうき心なり云々日本紀のことくは病などのことなり大都は同心歟

かむたちめうへ人　上達部　殿上人也

あいなうめをそばめつゝ　無愛也　史記曰時人見レ郅側レ目號ニ蒼鷹一莊子注曰桀紂何得下守ニ斯位一而放ニ其毒一使中天下側上レ目哉第十昧隺未レ容君王得レ見レ面已被ニ楊妃一遙側レ目樂府上陽人京師長吏爲レ是側レ目長恨歌傳陳鴻

もろこしにもかゝることのおこりにこそ

殷の紂は妲巳を愛し周の幽王は褒姒を寵て天下を亂る唐玄宗の楊貴妃にいたるまて其例おほし

あめのした　御宇日本紀　御禹同　宇內同　天下同　御宇天下同　率土周禮　天表ノウラ遊仙窟

あぢきなう　無爲史記高紀白氏文集古語拾遺　無道日本紀此心歟　無狀同　無事遊仙窟　何須同　無情同　無端舍利式

いとはしたなきこと　無半事伊勢物語眞名本　同物語の註云はしたなしとはたらぬこともなきなり物の不足にたらぬをはしたなるといふなり云々

御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

無比タクヒナシ又無景同　無類　交マシライ　忝同日本紀

ちゝの大納言　天武天皇元年改ニ御史大夫一蘇我果安臣巨勢比登臣紀大人臣巳上三人始任ニ大納言一　天長五年三月八日夏野始任ニ於大納言一　異朝上古少師少傅少保是言ニ三孤一又云三少三公之貳也助也副也故云ニ亞相一漢以來爲ニ御史大夫一者時轉ニ丞相一依レ之有ニ亞相之號一而御史之職相ニ當今之彈正一其義參差歟稱德天皇御宇暫是改ニ大納言一爲ニ御史大夫一是故大納言唐名稱ニ御史大夫一不レ叶ニ舊式一者也令曰正員四人相當從三位寛平爲ニ正二人權一人一其後權官加增　高倉御宇初爲ニ十人一

はゝ北のかたなんいにしへ人のよしあるにて

後漢書曰陽以ニ博旋一爲レ德陰以レ不レ專爲レ德　男は南女は北向に住へき謂なり陰陽につかさとる故歟仍貴賤共に妻室を北方と號する也后妃を椒房と號するも北向に住給故なり云々

世のおほえはなやかなる　聲華白氏文集

さきの世にも御ちきりやありけんいときよらなる

君と我いかなることを契けんむかしの世こそしらまほしけれ　きよらは清也伊勢物語云いときよらなるろうさうのうへのきぬ云々

たまのおのこみこ　毛詩曰生芻一束其人如レ玉又曰

有レ女如レ玉（德如玉箋曰德如玉者取其堅而潔白也）河陽花作縣宿浦玉爲レ人
李太白玉人といふ褒美詞也
あか玉の光はありと人はいへと君かよそひしたふ
とく有けり　あか玉とは子也子を玉にたとへたる
也日本紀云豐玉姫そのみこきら〳〵しき事をきゝ
てあはれとて又かへりて養はんと思へともよから
しとおほして玉依姫をやりて養はせ給時に豐玉姫
のみこと玉依姫によせてよみ給へる歌なり
めつらかなるちこの御かほかたちなり
老子德經曰法物滋彰盜賊多有（注曰法好也法好之物滋生彰著則農事廢飢寒並至故盜賊）
多有也　梅豆邏（日本紀）　又珍愛珍奇（遊仙窟）　非常　神功
皇后三韓をたいらけ給はんとせし時に松浦河にて
御裳をはつりて釣針をおろして魚をつらせ給に鮎
鉤にかゝりけるを御覽してめつらと被レ仰けるよ
りはしまる詞なり松浦とは梅豆邏をあやまれりめ
つらの河と歌にもよめり長今東南水（イヤメツラナリ）（扶紀抄）　或曰鷲（イヤメ）
新漢語抄（ツラ）（古）　めつらしき人を見んとやしりもせぬ我下ひ
ものとけわたるらん　伊勢物語云みかとはかほか
たちよくおはしまして　貌像（眞名本）
右大臣の女御はよせおもく　寄重　緣（日本紀）　懿德天皇

二年三月申食國政申大夫出雲色命爲二大臣一（見舊事本紀是大臣始也）崇神天皇廿三年秋八月丙申朔丁巳大臣大新河命
卽改二大臣一號曰二大連一（同）景行天皇御宇初以武內宿
禰一爲二棟梁臣一成務天皇三年正月癸酉朔己卯以二武
內宿禰一改立二大臣一仲哀朝又以二大伴武持一號二大連一
大臣大連相並知二政事一皇極天皇四年乙巳始置二左
右大臣一止二大連一孝德天皇大化元年六月以二阿倍倉
橋丸一爲二左大臣一以二蘇我山田石川麿一爲二右大臣一
以二大錦冠一授二中臣鎌子連一爲二內臣一太政大臣左右
大臣謂二之三公一異朝三公皆則闕官也爲二師傅保職一
棟二梁于諸官一鹽二梅于帝道一者也（師以道而教謂之師傅以義而託謂之傅保能守道謂之保）秦漢以來有二相國左右丞之號一已知二庶政一異二于
古之三公一也三公者象二天之三台星一也三槐者周世
外朝植二三槐一三公班二列其下一槐者懷也懷二遠人一之
義也我朝天孫天降給時天兒屋根命（中臣氏祖）天太玉命（齋部氏祖）
奉二天照太神勅一爲二左右之扶翼一如二今之左右相一歟
神武天皇東征之後天下一統二神之孫天種子命天富
命又爲二左右一上古無二大臣一號喚二執政人一稱二食國
政申大夫一
まうけのきみ　儲君　儲皇

はゝ君ははしめよりをしなへてうへ宮つかひなとし給へききはにはあらさりきおほえいとやんことなく上すめかしけれと

案之桐壺更衣を此巻に或は故大納言いまはとなるまてたゝこの人の宮つかへのほいかならすとけさせたてまつれといひ又は故大納言のゆいごんたかへす宮仕のほいふかく物したりしよろこひにとありされは宮仕は父の遺命尤本意のことゝ聞えたるを今こゝにうへ宮仕し給へききはにはあらぬといへり一往は不審あるに似たれども再三これを見るに次のことばにあなかちにおまへさらずもてなさせ給しほどにおのつからかろきかたにも見えしをとあり女御更衣なとは曹司に候て御とのゐにまうのほるへきに此更衣御鍾愛のあまりおまへさらずあればひたすら宮仕のことくなるを本意ならすといふはをしなべてのうへ宮つかひといへる此心なり父の素意は女御更衣の望たるか一義云此更衣父なくなりて後はたよりなきによりてなへてうへ宮仕なと有べきならねど心はへなだらかにて世のおほえやんことなしといふ歟 水原抄

わりなくまとはさせ給あまりに　無別（リリナシ）日本紀　無破
纒（マトフ）

まつまうのほうせ給　参進日本紀　或馳上同　又参上同　啓同　臻同　参昇（萬長哥）八十氏人乃下向須登恐坂尓幣奉（石上乙丸卿作歌）

おほしをきてたれは　掟（チキテ）

坊にもようせすは　春宮坊職員令　ようせすは　不用　不能　不善　（あしくせはといふ心也）

この御かたの御いさめ　諫

かしこき御かけをは　恐（おそろゝ心也 賢にはあらす）　可畏之神日本紀　恐惶同　恐山　恐坂　恐海以上萬葉　威左傳　賢宛字　畏也

（万葉）水底のおきはかしこしいはまよりこきめくりませ月はへぬとも　かけまくもかしこけれとも（同集 人丸奉高市親王短歌）

（拾遺）勅なれはいともかしこし鶯のやとはとはゝいかゝこたへん

おとしめきすをもとめ給　所レ好則鑽レ皮出ニ其毛羽一所レ悪則洗レ垢求ニ其瘢痕一（家語）　好生ニ毛羽一悪生レ瘢（樂府大行路）（高陽御子進帳歌）なをき木にまかれる枝もある物を毛をふききすをいふかわりなき

吹毛求疵漢書文也

御さうしはきりつほ　曹司

あまりにうちしきるおりはうちはしわたとのこゝかしこの道にあやしきわさをしつゝ御をくりむかへの人のもきぬのすそたへかたく

村上御時宣耀殿女御芳子小一條左大臣師尹女　藤壺に候はせ給て時めき給けるを中宮安子九條右大臣師輔女弘徽殿のうへの御局におはしましけるか常に不快事ともありけるよし世繼にあり彼例をいふ歟古今注　花山院御時も女御姫子閑院大將朝光女の繼母權中納言敦忠女大納言延光舊室　さかなくてか樣のことども有けりと世繼に見えたり

さかなきことども　不祥(サガナシ)日本紀第一　無惡善同又江談　惡性　不良

伊勢物語にさかなきえひす心とあり江談　八雲抄云よからぬなり

拾遺こゝにしも何にほふらんをみなへし人の物いひさがにくき世に

えさらぬみち　敢(エ)日本紀　又吉住吉(スミノエ)　日吉(ヒエ)

こうらうてん　後涼殿嬌訛とは女のたゝしからす物云躰なり今のこうらうも其躰のことか

俊成卿說云こうらうてんと可讀かんなかきの物を正字のごとく讀はこはきなり云々

うへつほね　たいのやならで上殿に局を給を云なり

又中宮まうのぼらせ給おりは清涼殿の二間を上の御局にしつらふなりひの御座のかたはらの二間をうへの御局とは申なり

このみこみつになり給とし御はかまきのこと

皇子三歳著袴例冷泉院天暦四年七月廿三日東宮時　圓融院應和元年八月十六日親王時　花山院天祿元年十二月十三日東宮時

天暦御時内裏にて爲平親王はかまき侍けるに

參議小野好古

拾遺百敷にちとせのことはおほかれとけふの君にはめつらしきかな

おとるけちめ　驗(ケチメ)　又結目奥入　式揭目　穴目伊勢物語眞名本

伊勢物語云　おもふをもおもはぬをもけちめみせぬ心なんありける　けちめはしるしといふこゝろなり

くらつかさおさめとの　内藏寮　納殿在後涼殿

およすけもておはする　おとなひたるなり

ことにいてゝ　言なり

ことにいてゝいへはゆゝしみあさかほのほにはさき出ぬ戀もするかな八丸

萬ことにいてゝいはゝゆゝしみ山川のたきつ心をせ

きそかねたる
（古）ことにいてゝいはぬはかりそみなせ川下にかよひて戀しき物を
たゆけにて　墮窳史記　墜徒果反落也懈也　窳兪觀器空中也玉篇
なよ／＼と　柔なりやはらかなり或云なよひか同心か但なよひは麗字なり
われかのけしきにて
（萬）夢にたもなにかも見えず見ゆれとも我かもまとふ戀の茂きに　我耶人耶なとうたかふほとによはき心なり
てくるまのせんし　輦車　清寧天皇三年奉ニ億計一雄計一以ニ王靑蓋車一迎ニ入宮中一仁明天皇女御藤原澤子紀伊守贈左大臣總繼女依レ病退出之時被レ聽ニ輦車一卒逝之後以ニ少納言一被レ贈ニ三位一云々輦車は石はしのたかき門よりのほる中重を出入のため也中重の輦車ともいふ牛車は牛のよる所まて乘なり牛車を聽て上東門を出入するなり
職員令曰　輿輦
註曰擧行曰レ輿輓行曰レ輦也　崔豹曰黄帝與ニ蚩尤一戰ニ於涿鹿ニ有ニ五色雲一金枝玉葉止ニ于帝上一有ニ花葩之像一因而作ニ花盖擧輦一周禮皇后玉輅大車輦車且輓有ニ翼盖一鄭玄曰后居ニ宮中一從容乘也爲ニ輕輪一人輓以行司馬法曰夏后氏謂輦曰ニ金車一殷曰ニ胡奴車一周曰ニ輜車一又曰夏后人廿人而輦殷十八人而輦周十五人而輦尒雅徒御而馬輦者也輓音无遠反引也
周禮戎車但輓鄭玄曰爲ニ輕輪一人輓レ之説文引レ車也
後漢書曰輓レ車而去輓引也卓茂傳
贈官位事　大寶元年始レ之于レ時大納言正廣三（大カ）伴御時（行カ）宿禰也女房贈位例在レ前
かきりとてわかるゝみちのかなしきにいかまほしきは命なりけり　いきまほしきなり或説いかますほう　文德實錄云　延曆廿四年春　最澄（傳教大師）大師入唐以後圓澄法師依レ詔於ニ紫宸殿一修ニ五佛頂法一即預ニ得度一晉朝修法之濫觴也
いとあへなくて　最無敢　專（イト）
御つかひのゆきかふほとも　交加　源氏三歲　時遭ニ母喪一事文彦太子三歲時母左大臣時平女薨也
みこはかくても御らんせまほしけれともかゝるほとにさふらひ給れいなきことなれはまかて給なんとす

無服殤暇事

假寧令云無服之殤生三月至ニ七歲ー本服三月給レ暇
三日一月服二日七日服一日義解云謂未成人死曰レ
殤謂其五月以上服親無服之殤故言ニ本服ー三月案レ
之生三月至ニ七歲ー本服三月以下可レ有レ之其於ニ五
月以上ー服親無服之殤故隨ニ彼本服ー宜レ有ニ暇限ー矣
法曹至要抄

人生七歲以前無服之殤也源氏三歲遭ニ母喪ー專服暇
有へからさる歟しかれともまさしき神事の時は例
人に似へからさるか仍退出なり但本服三月の義も
ある歟

よろしきことにたに　宜とはたとへはさまてならぬ
ことなり夏曆に宜といふも中品の日なり此物語に
もよろしき日とあり

古今
物はみなあたらしきよし人はたゝふりぬるのみそ
よろしかりける是はよき儀なり可レ隨所か此歌は
尚書に器貴レ新人貴レ舊といへる心なり

をたきといふところにいかめしうそのさほうしたる
桓武天皇平安城に遷都の時此地を諸人の葬所に定
らる見延曆遷都記　彼に珍皇寺といふ寺あり弘法大師の聖
跡として今に東寺一長者管領也云々大師遺告書云
宇宕(チタキ)當右寺建立大師吾祖故慶俊僧都道慈律師弟子言也以下略之
清和天皇外祖母贈正一位源氏喪　山城國愛宕墓見延喜式

むなしき御からをみる／＼なをおはする物とおもふ
か　古　うつせみはからをみつゝもなくさめつ深草の山
けふりたにたて

はいになり給はんを　文武天皇四年三月己未道照和
尚遷化廿一本朝火葬自ニ此時ー始
もえはてゝはいとなりなん時にこそ人をおもひの
やまんこにせめ

ひたふるに　敢死(ヒタフル)萬葉　一切同上　永迅日本紀順和名　永同　頓同
悲振布也萬葉
伊勢物語
みよしのゝたのむの雁もひたふるに君かかたにそ
よると鳴なる
八雲抄云なかくと云なりひたふる心は一向又ふて
たるよしなり
案之ひたすらなといふ心なり

女御とたにいはせすなりぬるか　侍臣女猶女御の例
わり其上大中納言女立后の例たにもあれは女御と

たにといふ歟たには猶不足の心歟中古まては女御
も多四位五位也近代は叙從三位後に女御宣下有

大中納言女立后例

藤原高子故中納言長良女 二條后清和天皇后陽成院母后 元慶元年正月立后 皇后宮娍子故大納言濟時女 三條院后 贈皇后超子法興院入道關白女父于時中納言 冷泉院女御

公卿女爲女御例

女御藤原元善子光孝天皇女御中納言山蔭女 女御橘義子宇多院女御參議廣相女
女御藤原和香子醍醐天皇女御右大將定國女 女御藤原姬子同女御參議菅根女
女御藤原姬子花山院女御

侍臣女爲女御例

女御從三位橘三井子桓武天皇女御從四位下入鹿女 女御藤原澤子仁明女御紀伊守總繼女 女御藤原媓子圓融院女御堀川關白兼通女于時父宮內卿 女御贈皇后藤原超子冷泉院女御安和元年十二月七日爲女御于時父法興院關白藏人頭

心はせもなたらかに 心操 平日本紀 巧論語 澤記
古今 いさゝめに時まつまにそ日はへぬる心はせをは人に見えつゝ

すけなう 無人望スケナシ日本紀
なくてそとはかゝるおりにやと
あるときはありのすさみにくかりきなくてそ人は戀しかりける

はかなく 無墓 又無計或量 無道日本紀 いふかひなき心なり

御かた〳〵の御とのゐなともたえてし給はす
榮花物語云宮うせ給て後なに事もおほしめされすゆゝしきまてに見えさせ給この程は女御みやす所の御とのゐたえたり

なみたにひちて
古今 ねになきてひちにしかとも春雨にぬれにし袖ととはゝこたへん

みたてまつる人さへ露けき秋なり
後撰 人はいさことそともなきなかめにそわれは露けきあきもしらるれ

こきてん 弘徽殿後醍醐院御説後高倉院御文庫本點也 コキテム親行說

野わきたちてはたさむき夕くれ 暴風ノワキノカゼ
拾遺 あさほらけ荻のうはゝの露見れはやゝはたさむし秋のはつ風

ゆけいの命婦をつかはす 大同三年七月廿日以衞門府併衞士府又以靭負名號同左右靭負府者 衞門府コケヒミカキモリ見職員令 職員令云內外命婦注曰謂婦人帶五位以

上爲内命婦五位以上妻曰外命婦也又後宮職員令曰其外命婦准夫位次故周禮曰内命婦謂九嬪世婦女御也外命婦謂卿大夫之妻也ゆけいの命婦は左右衞門佐也命婦は五位女藏人六位也靫負藏人もあり婦人の五位以上を帶するを内命婦といふ五位以上の者の妻を外命婦といふ令文也漢家又大概是におなじ但内命婦は九嬪世婦をいふとあれば本朝にはかはるべし禮記喪大記　注曰世婦を爲内命婦卿大夫之妻爲外命婦毛詩注曰公侯夫人は織紞綖卿之内子は大帶大夫命婦成祭服士妻朝服庶士以下各衣其夫葛覃

注續日本紀曰延暦二年春正月戊寅日朔是日勅内親王及内外命婦服色有限不得僭老　分庭皆命婦對院即儲皇日氏文集　東三條院女御におはしましける時圓融院常にわたり給けるを聞侍てゆけいの命婦かもとにつかはしける　　東三條入道前攝政太政大臣

春霞たなびきわたるおりにこそかゝる山へもかひはありけれ　拾一

ゆふつくよ　暮月夜萬　夕附夜同上又日本紀

やみのうつゝには猶おとりけり

奥入　むは玉のやみのうつゝはさたかなる夢にいくらもまさらざりけり

やもめすみなれと　禮記曰少而無父者謂之孤老而無子者謂之獨老而無妻者謂之鰥老而無男者謂之寡此四者天民之窮也戸令曰寡鰥孤獨注曰謂六十一以上而無妻爲鰥也五十以上而無夫爲寡也十六以下而無父爲孤也六十一以上而無子爲獨也此更衣の母儀も其年齡歟

伊勢物語云むかしおとこやもめにてゐて

なかゝらぬ命のほとにわするゝはいかにみしかきこゝろなるらん

月かけはかりぞやへむくらにもさはらすさし入たる

拾遺　八重むくら茂れる宿のさびしきに人こそ見へね秋はきにけり　惠慶

奥入　とふ人もなき宿なれとくる春は八重むくらにもさはらさりけり　貫之

古今　今さらにとふへき人もおもほえすやへむくらして門させりてへ

茂れる宿の歌は時節は秋に叶といへともこれはさはらぬといふ詞を詮としたれは春の歌の心か

はゝきみもとみに物もえいひやり給はす　とみとは

はやきと云也急の心なり伊勢物語云しはすはかり
にとみのこととて御文あり
よもきの露わけ入たまふにつけても
拾遺 いかてかは尋きつらんよもきふの人もかよはぬわ
かやとのみち
けにえたふましくない給ふ　一眉猶匹耐双眼定傷人
遊仙窟
ないしのすけ　尚侍(ナイシノカミ)(ナイシノスケ)　典侍　掌侍
やゝためらひて　狹行(タメライ)白氏文集十三　閒健同廿一　八雲抄云や
ゝは漸也較(ヤヽ)踉蹡(タメライ)
いわけなき人を　稚(イハケナシ)　幼(イトケナシ)
いのちなかさのいとつらうも思ふたまへらるゝに
莊子曰　壽者多辱
まつの思はんことたにはつかしう　いかにしてあり
としられし高砂の松のおもはん事もはづかし
もゝしきに行かひ侍らん　百官の座を敷ゆへに禁中
を百敷といふ也或百城文選金城百雉といへり若此
事歟雉は高一尺廣三丈云々築地の一簣なりそれを
百はかりつゝけたるなりゆきかひは行かよふなり
かひは交の字なり夏と秋と行かふ空も行ちかふな
り古今　かりそめの行かひちとそおもひこしいまは
かきりのかとてなりけり滋春
ゆゝしき身に侍れは
わひぬれはつねはゆゝしき七夕もうらやまれぬる
物にそ有ける人丸
ゆゝしとていむとも今はかひもあらしうきをは風
につけてやみなん
ゆゝしきは善悪に通する詞なり然而多はいま〳〵
しき心か忌の字なり
くれまとふ心のやみもかたへはるゝはかり
後撰 人のおやの心はやみにわらねとも子をおもふ道に
まとひぬるかな
諸(カタヘ)白氏文集一 膚語諸膚　八雲抄云かたはし也傍輩躰なり又か
つはともいへる心なり
おもたゝしき　面立　面目の心歟目たゝしき同心歟
おもひくつをるなと　頽墮也
かくしつゝ　乍(ツヽ)伊勢物語眞名本
よこさまなるやうに　經文に九の横死あり其中に八
者横爲毒藥厭禱咒咀之所中害薬師經　といへり
世にいさゝかも人の心まけたることはとゝめしとお

源親行云六條院の女樂に女三宮を二月はかりのあをやきにたとへたり人のかたちを柳にたとへたる事一部の内に兩所あり無念なるに似たり然而芙蓉柳是又いつれもすてかたきによりて書なから見せけちにしたる歟云々

をみなへしの風になひきたるよりも

從一位麗子京極北政所　本には尾花の風になひきたるとあり或本には此句なし

なよひ　たをやかなる心也　又麗

らうたくなつかしかりし　勞　良　亮日本紀　ほけ〳〵としたる心なり假借ナツカシ貞觀政要

はなとりの色にもねにも

後撰花鳥の色をもねをもいたつらに物うかる身はすくすのみなり雅正

春は櫻鶯夏は橘郭公是等を花鳥と云定家卿說　案之菅家御作に花鳥の鳥のかたに鶴を令レ作給云々如何

あさゆふのことくさには　言種

はねをならへ枝をかはさむと

在レ天願作ニ比翼鳥一在レ地願爲ニ連理枝一長恨歌

尒雅䟽曰南方有ニ比翼鳥一不レ比不レ飛其名謂ニ之鶼一似レ鳧青赤也、木連理者仁木也見晉中興書　或異レ木同レ枝旁出上更還合也孝經援神契云德至ニ草木一則木連理孫氏瑞應圖曰王者德化洽ニ八方一合爲ニ一家一則草木連理以上符瑞圖　符瑞圖云比翼鳥者名曰ニ鶼々一見尒雅　一名蠻々見山海經　其狀如レ鳬一翼一目其色靑赤處南方崇吉金門之山結胸國東不レ比不レ飛見山海經　孫子瑞應圖曰王者有ニ孝德明至一山海經曰見則大水

天曆御集いきての世しにての後ののちの世も羽をかはせる鳥となりなん　御返し　女御芳子宣耀殿　秋ちきることのはたにもかはらすは我もかはせる枝となりなん

連理は仁木也漢武帝元狩元年に生たり其外不レ可ニ勝計一

いとをしたちかと〳〵しく

最押立方日本紀カトヽヽシ　才學同　廉々

ともし火をかゝけつくして

夕殿螢飛思悄然　孤燈挑盡未ニ能眠一長恨歌

右近のつかさのとのゐ申の聲きこゆるはうしになりぬるなるへし

亥一刻左近衞夜行官人初奏レ時終子四刻　丑一刻右近衞

宿申事至ニ卯一刻ニ内竪亥一刻奏ニ宿簡ニ

よるのおとゝ

夜御殿清涼殿にあり　四方に有ニ妻戸ニ南は大妻戸一間也御帳同清涼殿東枕禮記曰寢時東首　疊御座敷也御枕に二階あり神璽寶劔を案せらる有覆蘇芳也　御帳の四角に有ニ燈樓ニ掻燈とて夜火をけたすこれは神璽の御ためなり御帳の南西北に疊をしきて女房の座とす見延暦御記

あくるもしらてとおほしいつるに

玉すたれあくるもしらてねし物を夢にも見しと思ひかけきや　亭子院長恨歌伊勢

なをあさまつりことはおこたり給ぬへかめり

春宵苦レ短日高起　從レ此君主不ニ早朝ニ長恨歌

朝かれゐのけしきはかり　朝餉間二間也於ニ此所ニ朝夕供レ之南に平敷二枚北上東北に立ニ絹屛風ニ夜の御殿の方に副ニ障子ニ御屛風の內外に案ニ御調度ニ二階唐匣筥硯箱螺鈿厨子二脚冠筥二唾筥手拭筥几帳一大床子二脚被レ置レ之春冬は圍火櫃あり和繪なり　陪膳上臈女房典侍或聽色人　候朝餉南間端中臈內侍或小上臈　障子の外に候して取傳ニ下臈ニ得選以下次第に傳レ之朝餉には女房皆上レ髮三位以上は釵子計也女房不候之時は公卿或四位侍臣爲ニ陪膳ニ例也昔は禁野交野等鳥御鷹飼舍人付ニ御厨子所ニ進レ之延暦御記

大床子のをもの　天子のつかせ給床子也號ニ晝御膳ニ大床子の御膳上古は朝夕供之近代一度也昔は主上着御正しく食ニ御之ニ近來不レ然左波を取て御箸を立らる陪膳其御箸を取て又立御箸して折て出無ニ出御ニ時は女房鳴レ扇三音其時陪膳人撤レ之陪膳藏人頭以下四位侍臣役送四位五位六位隨候有ニ陪膳番ニ陪膳より上首も役送常事也上古は公卿陪膳も有之歟又女房陪膳也見寛平御遺誡

「イ本以下ナシ大障子年中行事障子馬形障子類也天子のつかせ給床子也」つれの供御也帝王ノマイル四位殿上人の御ハイセム也大障子のもとにて御陪膳ノ人ヲ供御ノ時分ヲモノト掌ヲ引テヨフ也

たうりをもまけさせ給しに

枉　又曲

いとたい〳〵しきわさなり

退々水原奥入　此字不審也たえ〳〵しき歟あいうえおの五字通する也　事論語ソヽ能本讀

なにわさを我はしつゝかゐまてるやひるめの神をしはしとゝめむ

末摘 いかはかりよきわざしてかあまてるやひるめの神

をしはしとゝめん

ひとの御かとのためしまてひきいてさゝめきなけき

けり

私語サヽメコト 長恨歌 琵琶引　耳言サヽメク 萬葉　楊貴妃うせて後玄宗位をさ

り給し事也これもさやうにやおはしまさむすらん

となけきける也

あくるとしの春坊朱雀院さたまり給にも

神武 天孫生而明達意確如矣年十有五立爲ニ皇子太子一 舊事

本記 神武天皇十二年立ニ神渟名河耳尊一爲ニ皇太子一

よのうけひくましき　承引也

よひともきこえ

御諱字也世の人とよむべし「世の字をすてゝ人も

きこえてとよむへしと云々親行說」

かのおはきたのかた

おはとは祖母をいふ若紫の巻にも在之祖母おほはゝ

拾遺第九 源重之母のあふみのこふに侍けるにむまこのあつ

まよりのほりてひそく事侍とてえこのたびあはで

のほりぬることゝいひて侍ければおはの女のよみ

侍ける

おやのおやと思はましかはとひてましわか子のこ

にはあらぬなるへし

なゝつになり給とし御ふみはしめなとせさせ給て

皇子七歳御書始例　村上天皇親王之時承平二年二月廿二日　一條院寛和二年十二月八日

ものゝふあたかたきなりとも

天物部等廿五部人同帶ニ兵仗一天降供奉舊事本紀 物部氏の

遠祖天津麻良麿神代と兵を取て天孫天降給し時御

前を奉る仍其子孫諸の物部を領して武勇の道を掌

とる其後勇者をはものゝふといひならはせる也

敵アタ　仇同　怨同

なまめかしく　嫉媚ナマメク伊勢物語眞名本　又生日本紀

古今 秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかま

し花もひとゝき

はかなきことの笛のねにも雲ゐをひゝかし

箏 柱附 蒼頡篇曰頌耕反俗曰象乃古度 形似レ瑟而短有ニ十三絃一

柱高三寸 風俗通日本秦聲也　或曰蒙恬造

横笛 律書樂圖云晉猷和名與古不江　本出レ羌也漢張騫使ニ西

域一傳ニ一笛一

風俗通曰武帝時丘仲所レ造或黃帝時伶倫造レ之云

雲井をひゝかすは徹天の樂の心也

こまうと　高麗人應神天皇廿八年高麗王遣レ使朝貢

みやのうちにめさむ事は宇多の御門の御いましめあれは

寛平遺誡云外蕃之人必可二召見一者在二簾中一見レ之不レ可二直對一耳李環朕已失レ之愼レ之　案之如二遺誡一者蕃客に直に對し給ましき由を載らるといへとも宮中にめす事をは不レ被レ誡歟而今の詞本文に違する歟若又此外有二別勅制一歟如何倩思レ之此文指(サシ)て召覽すべき故なくば輙不レ可レ召二宮中一といふ心を含歟作者料簡取レ意不レ依レ文歟

こうろくわんにつかはす　職員令曰玄蕃寮蕃客辭見讌饗送迎及在京夷狄監二當館一舍事（謂鴻臚館也）鴻臚館は玄蕃寮にあり仍此寮頭を鴻臚卿と號す玄は遠也蕃は蕃也遠蕃より來朝の客に接する所也古來於此所渤客に餞する詩句多し漢朝鴻臚寺又以此儀也此館延暦遷都之始東西大宮被レ置レ之而弘仁に以二東鴻臚館一爲二東寺一賜二弘法大師一（不空三藏鴻臚卿大興善寺ヲ立此例歟或又大師三藏ノ再來ト云旁有歟乎）以二西鴻臚館一爲二西寺一賜二修囚僧都一其後七條朱雀に鴻臚館を立て置二三韓館舍於

其中ニ云々

漢書曰鴻臚寺周禮大行人中大夫掌二大賓之禮及大客之儀一小行人下大夫掌二郡國賓客之禮一以措二待四方之使者一至レ秦曰二典客一　漢書百官表曰典客秦官掌三諸侯歸二誼蠻夷狄一中二二千石一景帝更レ名曰二大行令一武帝改曰二大鴻臚一王莽曰二典樂一　胡廣漢官解譜曰鴻聲臚傳也所三以傳レ聲贊二導九賓一

右大辨　元明天皇和銅五年十二月辛巳加二左右辨官史生各六人一通レ前十六員

尙書者管轄之任權衡之職也上象二七星一（七辨也）　故也

漢朝尙書郎親近之官也仍口含鷄舌香手握蘭故云握蘭之職也

ゐてたてまつる　將(ヰテ)

さう人おとろきてあまたゝひかたふきあやしむ

三代實錄曰仁明天皇嘉祥二年渤海國入覲大使王文矩望二見光孝天皇一（于時親王）在二諸親王中一拜起之儀謂所レ親曰此公子有二至貴之相一其登二天位一必矣史記曰章相賢者魯人也以讀書術爲吏至大鴻臚有相工相之當至丞相有男四人使相之至第二子其名其成相工曰此子貴當封侯又曰老父相呂后曰夫人天下貴人令相兩

はゝきさき　左傳曰帝嫡妃曰ニ皇后一帝母曰ニ皇太后
宮ニ帝祖母曰ニ太皇太后一
御せうとの兵部卿の宮なと　あにをもせうとゝいひ
あねをもいもうとゝいふ定事也此兵部卿宮も藤壺
の御兄也
ふちつほ　飛香舍　藤懸蝦手木但上古非此木歟建暦
御記
うけはりて　諾　承諾受張歟　或説うけはり給うけ
給はる心歟
こよなう　無此世　無越（奥入）　閑雅（是ハ幽玄之義也各別歟）
八雲抄曰うるせくものゝまさりたるなと云體也は
るかにと云心に狭衣にもいへり源氏には多事外也
よくゝゝ見るにたゝ事外也たとへはうるせくも同
事也
御あたりさけさせ給はぬはとに　不遠也
なつさひ　昵近
かきりなき御おもひとちにてなうと見給ふそ
共（トチ）萬葉　跡（ウトンス）史記　厭外人（ウトキヒト）　白氏文集
なめしとおほさて　輕（ナメシ）日本紀　無禮新撰萬葉　滑宛字
伊勢物語云いとなめしと思ひけれと心さしはいや
まさりけり
にけなからす　無似氣也につかはしからぬ也但是は
無ニ人間一也おとろくましきやうなる心也隨レ所心
得へし愛增亦也云々奥入
ひかるきみときこゆ　亭子院第四皇子敦慶親王（二品式部卿母太皇后言）號ニ
玉光宮一（延喜八年二月十八日薨）好色無雙之美人也式部卿是忠親王（仁和御後）始
賜ニ源氏姓一號ニ光源中納言一源光（仁明天皇源氏號西三條）延喜元年
任右大臣日野系圖と云物に左大臣高明を光源氏と
書也
かゝやく日のみやときこゆめりし　中宮彰子（御堂女上東門院十二歳入內）のまいらせ給ひしおりこそかゝやく藤壺と世
の人申けれ（榮花物語）　皇女入內事　昌子內親王（朱雀院御女）
十二にて御けんふくし給ふ
人生十二を一周といふ此歲冠禮する和漢例也
禮記曰天子之子十二而冠
左傳曰歲星十二歲一周天道大備故自夏殷天子皆十
二而冠春秋公羊傳云襄公年十二而冠也依八代記即
少昊亦十二而冠即知天子諸侯幼即位者皆十二而冠
矣少昊顓頊夏殷帝王周文王魯襄公皆十二而冠　宋
書志天子諸侯近十二遠十四十五必冠矣寬弘七年七

月十七日甲午今上親王元服一條院十二　長保五年二月廿
日庚辰左大臣男元服宇治關白十二
ゐたちおほしいたつきて　居起也　勞いたはる也
春宮の御元ふく南殿にてありしきしきのよそをしか
りし　紫宸殿謂之南殿御帳間ニ清涼殿ニ無ニ几帳一立ニ御
倚子一北ニ立ニ賢聖障子一御帳間戸ニ書ニ師子狛犬一
又御帳外南面母屋庇南格子ハ常ハ被レ下之由見ニ建
暦御記一　粧ヨソホヒ日本紀
ところ〳〵のきやうくらつかさこくさうゐんなと
所々饗　內藏寮　穀倉院
おはします殿のひんかしのひさしに
清涼殿東庇也清涼殿五ヶ間也北第一間母屋爲御路
次御帳間師子狛犬帳前南北第三間床子三脚第四間奥有御厨子
二脚有書物御厨子　第五間四季御屏風石灰檀　弘廂板九枚北
ニ立荒海障子南手長足長北面障子宇治網代布障子
墨繪也二間奥上御局之際ニ南昆明池障子北嵯峨野
小鷹狩南切妻ニ有鳴板號見參板向上戸被立年中行
事障子見建暦御記
ひきいれの大臣の御さ　引入大臣　加冠人名也
みつらゆひ給へり　髮臥

大藏卿藏人つかうまつる
雄略天皇之世初有大藏官之號即以秦酒公爲大藏官
頭云々一說云大藏卿は理髮藏人は役送兩人名歟又
云理髮役は藏人頭也而故障之時大藏卿勤之歟又云
藏人頭兼大藏卿歟藏人の大藏卿とも大藏卿の藏人
ともいふ歟代々理髮藏人頭例也又云大藏卿藏人所
ともに元服の所役をつとむる歟但親王元服に大藏
省祿を儲事無先規歟然而是は准東宮御元服儀歟詞
にもかきりある事に事をそへ春宮の御元服南殿に
てありしにおとさせ給はすとあり

大藏省
周禮地官吏部之屬歟本朝別置當省不叶異朝之准據
者歟此省掌諸國租稅諸公事之時成切下文令支配國
々者也

藏人所
嵯峨天皇御宇弘仁年中始置之摸異朝侍中內侍等職
歟彼侍中尤爲重任內侍者官者之任也本朝弘仁以往
少納言及侍從爲近習宣傳之職而弘仁初置當所以公
卿第一爲別當左大臣流例也　四位侍臣中撰其人爲頭上古五位頭有例
五位中又撰補三人六位中撰補四人近代五人謂之職事

又爲要籍駈仕六位中撰良家子令候殿上謂之非藏人

きひは　稚日本紀

うつくしけさそひ給へり　愛常（ウツクシ）萬葉

左大臣　孝德天皇大化元年六月日始任左大臣在端

みこはらに　葵上母桐壺帝姉妹也仍御子腹と云也

致仕大臣をも宮はらの中將といへり

うつほの藤原の君一世の源氏にてみめかたち才能世にすくれたりしかは時の太政大臣のひとりむすめに御冠し給ひし夜むことりてかきりなくいたはりてすませ奉り給ふ

御ときよくて

時宜よき也藤裏葉巻にも御ときよくさうときゝ給てとあり

そひふし　横陳（ソヒフシ）注曰在身傍横臥也遊仙窟

延喜十二年十月廿二日保明親王元服之夜故左大臣時平女參俗謂副臥乎李部王記

寬和二年七月十八日三條院于時親王御元服同日皇太子年十一法興院大相國女尙侍綏子爲副臥見大鏡

光源氏通執政臣女事新古今

九條右大臣の女にはしめてつかはしける

西宮左大臣

年月は我身にそへて過ぬれと思ふ心のゆかすもあるかな

さふらひにまかて給ひて　侍殿上事也

親王元服時下侍に儲休所例也殿上六間也神仙門東三間西三間也上戸有小蔀主上殿上を御覽する所也倚子有覆懸揷荄杖和琴臺盤三脚圍碁彈碁局簡在袋　朱辛櫃火櫃夏秋　等あり又横敷の前に在硯瓦硯　春冬は垂幕小板敷の西面有掉間小庭に時簡膳棚あり又近代横敷坤角柱に付蘇芳綱手召小舍人之時藏人引之也二條院御時以後之事也延曆御記

おほみきまいる程　御酒日本紀　酒同　神酒同

舊事本紀云于時吾田鹿葦津姫以下定田狹名田以其田稻釀天甜酒嘗之矣本朝事記云天皇品院　之代於吉野之白檮上作横臼而於其横臼釀大御酒獻大御酒之時擊口鼓爲皮ト或神酒諸神之祭に皆酒を供する故也神字をみと讀也酒をきと讀也又云三季冬造之春熟し夏飮する故に三季と云也文選にも冬釀接夏成テ十旬ノ兼淸ト云ト見えたり又云三寸酒（キ）を飮者去風邪三寸仍號之寸字チキトヨム也又馬をも四寸五寸といふ也

又萬葉にも十寸と書てすき鶴寸と書てたつきとよめり　又云三木杜康造酒蒙求　杜康か妻男のほかへゆきける間に男の日々の飯を園木の三またにそなへをきけるか雨露に潤て酒となりける也これを樹伯に祭るこの事吉野の白かちの古事に相似たり和漢の縁起一同也

ないしせんしうけたまはりつたへて

内侍宣事藏人奉勅宣下也見西宮記　侍中者内侍也見後漢書金日磾傳不付太政官付藏人奏進は内奏といふ也

おとゝ　大臣日本紀　舊事本紀云出雲醜大臣命輕地間狭宮御宇爲大臣奉齋大神其大臣之號始起此時也

ろくの物うへの命婦　上の命婦うへの女房なといふ様也

しろきおほうちき一くたり　白大褂一領也

親王元服加冠祿白大褂天皇御元服御衣一領也

一説褂有大小着衣上云々　うはきの上にうちきを着也いろかさねはきぬにしたかふなかさ小袖とひとし中へうらあり

いときなきはつもとゆひになかきよを契る心はむすひてめつや

稚形イトキナキスカタ日本紀　いとけなきと云は僻事也いときなきと云べし爲家卿説

むすひつる契もふかきもとゆひにこきむらさきの色しあせすは

古今歌 君こすはねやへもいらしこむらさきわかもとゆひに霜はをくとも

拾遺佐忠元服夜能宣歌 ゆひそむるはつもとゆひのこ紫衣の色にうつれとそおもふ

男女のもとゆひ紫の糸にてむすふ故なり　八雲抄云あせたるとは色のかはりそむしたる由也云々但後撰にあまのかはらはあせなゝんと有如何あれたると云心也

なかはしよりおりてふたうし給　長階　舞踏手の舞足の踏也

北山記曰再拜次左右左立次左右左居　揖後立拜次小揖今案先立小揖次再拜次置笏於左立左右左次居左右左次取笏居揖次立再拜次小揖退出已上内院之儀也他所只再拜退出一説前中後揖有無依官也

ひたりのつかさの御むまくら人ところのたかすへて給はり給

左馬寮御馬藏人所は校書殿北面也御鷹飼御隨身は藏人所の被官也常儀には親王元服に馬を引に不及

若有遊宴之興者可引之由新儀式に見えたり　鷹の事有御幸卷凡上古如此の祿に馬鷹定事也臨時客會者以下可然引出物に必從之者也或說云親王元服時賜鷹遡近例也有西宮記云々可勘上卿要抄云御鷹飼事藏人奉勅仰檢非違使馬寮等以所下文仰禁野

おまへのおりひつこものなと　獻物也或籠物（菓籠ともいふ）西宮記云木物枝物（菓子也）籠をくみて薄樣を敷て五菓を入て木枝或松に付なり大臣以下取之後には膳部に給て調せらるる元服の時の人のさゝけたる物也掌中曆曰五菓柑橘栗柿梨

としきろくのからひつ　屯（つゝみいひといふ物食也下﨟に給ふ飯也）祿辛櫃（內藏寮祿也）　春宮御元服に在之親王元服には無之歟但是も結構之儀歟　屯食事延長七年二月十六日當代源氏二人元服垂母屋壁代撤晝御座其所立倚子爲御座孫庇第二間有引入左右大臣座其南第一間置圓座二枚爲冠者座（置西面又圓座前又置圓座又其下置理髮具皆盛柳筥）　先雨大臣被召著圓座引入訖還着本座次冠者二人立座退下於侍所改衣裝此間兩大臣給祿於庭前拜舞（不着沓）　於仙華門退出於射場着沓撤祿次冠者二人入仙華門於庭中拜舞退出參仁和寺仮參先是震儀御侍所倚子親王左右大臣以下近臣等同候有盃酒御遊南源氏候此座（候四位親王之次依御也奧方壁本也）　深更大臣以下給祿南源氏宅各調屯食廿具各分諸陣所也天慶三年親王元服日屯食事內藏寮十具穀倉院十具（以上檢校太政大臣仰之調之）　衞門府五具（督御調之）左馬寮五具（御監仰之調之）　別置南殿飯位東其東春興殿西立辛櫃十合件等物有宣旨自長樂門出入上卿仰辨官分給所々夫二人勾當其事仰檢非違使令給辨官三太政官二左右近衞三左右兵衞二左右衞門二藏人所二內記所一藥殿一畫所一內豎所一校書殿一作物所一內侍所四或采女一內教坊一糸所一御匣殿一

女はすこしすくし給へるほとに
源氏十二歲葵上十六歲也

にけなう　につかはしからぬ心也無似氣也さきにゝけなからすといふ所に心たかひたる也（奧入）

ところせきまて　所もせきあへぬ也たとへは廣く大なる心也

宮の御はらには藏人の少將にてまだいとわかく
藏人少將事
光孝天皇仁和四年十一月始被補之于時正五位下左近少將源湛正五位下左近少將藤原敏行也

執政臣息補例
清愼公實頼貞信公一男母宇多院皇女源順子
延喜十九年正月廿八日任右近衛權少將　延長四年
正月七日叙正五位下二月廿五日補藏人廿七
謙德公伊尹右大臣師輔一男
天暦二年正月卅日任左近少將去七日叙從五位上二月十九日補
藏人此内淸愼公例相叶歟父貞信公于時左大臣母宇
多院皇女醍醐御宇五位藏人等也
こゝら　巨々等奥入　又多々等日本紀　おほくといふ心也
秋の夜の月かも君は雲かくれしはしも見ねはこゝ
ら戀しき
おほしいたつくさま　勞　又煩　かしつく心也
もとのしけいさを　淑景舎　桐壺　舎は殿の次也庶
人の家にも寢殿雜舎と云かごとし
大内の五壺は仙家の五處に象也西王母家五處有十二樓　或又壺
中之儀歟　廣韻云壺臺
桐近年不見但荒癈之間毎庭有桐延暦御記
さとのとのはもくすりたくみつかさ　二條院事也
木工修理　内匠寮
になう　無二

いけの心ひろうしなし　樓額題ニ鵷鴦ニ池心浴ニ鳳凰ニ
白氏文集
苔生ニ石面ニ輕衣短　荷出ニ池心ニ小盖疎物部安貞
散ぬともかけをやとめん藤の花池の心そあるかひ
もなき躬恒

河海抄巻第二

正六位上物語博士源惟良撰

第二　帚木

巻名

はゝき木の心をしらてそのはらの道にあやなくまとひぬる哉

光源氏の名のみこと〳〵しくいひけたれ給とかおほかなるに

光源氏と云名はこと〳〵しくきこゆれと振舞につけていひけたゝるとかおほしと也名のみことことしくとよみきりていひけたれ給ふ以下をはふるまひのことゝ心得へき也ひとつにいひよみつゝけては其心たかふべし

京極北政所従一位麗子　自筆本になのみこと〳〵しとあり是又一義歟

すきことゝもを　逸日本紀　文士多ニ數奇(スキ)ニ白氏文集

人のものいひさかなさよ

こゝにしもなに匂ふらん女郎花人の物いひさかにくき世に古今

まめたち　斂色(マメダツ)遊仙窟又皺眉同上眞立　まこと立たるり

なよひかにおかしきことはなくて

麗心やはらかによはきやうなる心歟　賢木巻に朱雀院を御心なよひたるかたすきてとあり

かたのゝ少將にはわらはれ給けんかし

一説云　業平朝臣たなはたつめにやどからんと詠せる時交野に一宿す仍有此名歟云々又英明中將を號ニ交野少將ト云々又かたのゝ少將と云ふるき物語あり好色の人と見えたり所詮彼かたのゝ少將はなよひすき實すくなき色このみなる故に光源氏のまめたちたるをはかへりてわらひやせんすらんといへる也或説交野勝任といふものありけりと云々何も不レ足ニ信用ニ

しのふのみたれやとうたかひたまふ

かすかのゝ若紫のすり衣忍ふのみたれかきりしられす

なか雨はれまなき頃　霖(ナカアメ)爾雅曰三日以上曰レ霖

うちの御物いみつゝきて

物忌事、夫以(チモンミレハ)迦毗羅衛國在ニ世界ニ名レ胡、其國中

有ニ桃林一東西南北卅六町也、其中有ニ桃木一高卅五丈也、差技方々各卅五丈也、其上平々譬如ニ鏡面一其下有ニ一大鬼王一號曰ニ物忌一其鬼王邊他鬼神不ニ寄就中大通鬼王候ニ百里之内一奏ニ聞於事由一小通鬼王跪ニ千里之外一被レ令レ奏ニ聞於事由大鬼神王一爰大鬼神王誓願言、衆生之中若有ニ病苦疾疫之難者一令ニ早差一若有ニ短命者一延ニ其命一若有ニ無福者一與ニ其福一若有下可レ墮ニ地獄一者上拔ニ苦難一有下未ニ證果一者上令ニ證果一如レ此有ニ利益一六趣之有情持ニ實吾名號一者若人宅物恠屢現惡夢頻示、可レ蒙ニ諸凶害一之時臨ニ其日一吾名立レ門其故他鬼神不レ令ニ來入一但書時讀レ呪書レ之時尋ニ得於陰陽靈驗之師一書ニ吾名一令レ持ニ人々一如レ影可レ令ニ守護一義淨三藏奉詔譯 内裏御物忌之時に參籠之人は丑時より參候する也御物忌に御字を不レ書柳枝を三寸はかりに簡に作て御冠の纓にさゝる或又左御袖に白紙に書て付らる又御殿の御簾ことに付レ之但二間には不レ付レ之也又昔は忍草に物忌を書てみすにもつけ冠にもさしける也是は忍草の一名ことなし草といふにつきて用之無事之由也云々後撰貫之か歌に

かさすともたちとたちにし我名にはことなし草のかひやなからんといへり、冠にさす故也云々、此忍草は裏のしろくてみしかき草也、軒端なとに常に生る草也

宮はらの中將　頭中將 引入左大臣男母桐壺帝姉妹 清愼公 左大臣忠平公男母宇多院皇女此公歴ニ藏人少將并頭中將ニ事一同也 嵯峨天皇大同五年二月始置ニ殿上并藏人頭一從四位上左衛門督巨勢野足從四位下中務太輔藤原冬嗣二人補レ之執政臣息補ニ藏人頭一例

忠仁公 天長十年二月補ニ藏人頭一同十一月十八日叙ニ從四位下、轉ニ中將ニ元從五位下左近權少將 昭宣公 天安二年十月補レ頭貞觀五年二月十日轉ニ中將ニ元從五位上左近少將 清愼公 延長八年九月廿五日補レ頭元右近中將從四位下 謙德公 天曆九年八月十七日補レ頭元從四位下左近權中將 忠義公 康保四年正月廿五日補レ頭

しつらひ　料理 遊仙窟

おさ〳〵　幹了 日本紀 執制同式通事　禁制　漸々 順和名

長々　治天下 正房卿記 番長 實親卿説　治也　優也

十住論云　是儜弱怯劣無有大心非是丈夫志幹之言也日本紀云成務天皇四年甲戌二月始定ニ諸國境一各分ニ郡邑一詔曰自今以後國郡立レ長縣邑置レ首即當國幹了任ニ國郡之首長一是爲ニ中區之蕃屏一又云幹了者國長也伊勢物語云をたわかけれはふみもおさ〳〵しからすことはもいひしらす躬恒假名序云あ

るしのおさ〳〵しけれはおかしく住なれたり、忠
岑長歌「とのへもる身のみかきもりおさ〳〵しく
もおもほえす　古今　此詞日本紀にも色々に書り、
又伊勢物語、大和物語なとにも多在之、所に隨て
まち〳〵なるべき歟、大略は凡漸なといふ樣の詞
也、難ニ一決一者也、淸輔朝臣奥義抄にもおさ〳〵
はなをすくよかなりなと云心也源氏物語等は粗な
といふ心也、又やゝ歟といへり云々おさ〳〵しく
は各別の義也、此物語にも宮つかへをもおさ〳〵
しくしなし給へらはとあり、但おさ〳〵しは長々
しき也、おさ〳〵とは聊かはるべき歟、
むつれきこえ給
おもふとていとしゐ（なにしにイ）人にむつれけんしかならひて
そ（かイ）見ねは戀しき
かたはなるべきもこそ　頑　片輪
をのかしゝ　各競日本紀　或各自恣　八雲抄云われ
〳〵ある心也云々
各寺師人死すらしいもにこひ日ことにやせぬ人に
しられす萬葉十二人丸
拾遺四十九日
あき風のよもの山よりをのかしゝ吹に散ぬる紅葉
かなしな輔相
春は梅秋はまかきの菊の花をのかしゝこそ戀しか
りけれ貫之
惠心僧都作極樂六時讃云　近くも遠くも各かしゝ
おのが心に任せてと云心也
えんずれは　怨　うらむる也
おほそうなるみつし　大惣　大都　厨子
このまち　次のまちといふ也
こゝろあて　八雲抄云、をしはかり也
古今
心おてにおらはやおらん初霜のをきまとはせる白
きくの花躬恒
そこにこそ　足下　秦始皇本紀云足下驕恣、註曰、蔡雍曰、辟巨七廣相共言曰ニ殿下胸下足下侍者執事一皆謙類也
これはしもとなんつくましき
しはやすめ字也、これはといへる也、下にはあら
ず
はしりかき　草書の躰也、眞の字は人の衣冠たたし
き躰、草の字は人の走れる姿、行の字は人のある
く樣なといへり、此卷奥にもはしりかきかいひく
つまをとなどあり、うるはしからぬうはへはかり

のわさ也
すいふによろしき　隨分也その人の分に隨てよろしき心也
そもまことに　それもなり
あかめておいさきこもれるまとのうちなる程は
小大(チイサキ)草の生長に未嫁女をたとへたる也　苗同
楊家有レ女初長成養在ニ深窓ー人未レ識長恨歌
かたかと　片才日本紀　片廉
うちおほときさ　穏(ナン)合序　此字訓おたやかなり然者其心歟
すさひ　なをさりこと也手すさひ同事也
ひとつゆへつけて　由付　ゆへありて也
思ひくたさん　下也或説腐歟云々
とるかたなくくちおしきゝはとおほゆはかりすくれたるとは数ひとしくこそ侍らめ
いたりてよきとわろきとはありかたき物也、されは中の品に人の心は見ゆへきといふなり
しねんにそのけはひ　氣(ケハヒ)日本紀　形勢新猿樂記　景氣
くらゐみしかくて　卑(ミシカシ)也選叙令
なを人のかんたちめなとまてなりのほりたる　直人也諸大夫也中院事書云なを〳〵しき同心歟云々、伊勢物語云ちゝはなを人にてはゝなん藤はらなりける
けちめ　結目　掲目訓イチシルン
世にふるたつき　便(タツキ)萬葉　鶴寸同
かゝつらひ　かけしろふ也
なかのしなのけしうはあらぬ　不下習　下手しくはあらぬなり
或不恠(けしからすはあらぬおとろくましき様の心也)隨レ所可レ得レ意亘ニ兩端ー詞也
なま〳〵のかむたちめ　生君達なといふ躰也、或云なみ〳〵歟云々紫明抄
ひさんきの四位五位
非參議前官事也、散位也
もとのねさし　根本の種姓也
たきつせにねさしとゝめぬうき草のうきたる戀もわれはする哉古今
かはらかなりや　なまめかすきよけなる心也、さはやかなと云同心也、人のしつみおもくれたるをはしめりたると云に對して心得べし、鈴虫の巻に御

ちはいとかはらかなるを心をやりてなくさめ給と
あり　かはきたるこゝろなり
はたなかめるまゝに　無也
はふかすまはゆきまて　不二放埒一也、まはゆきとは
かゝはゆきなと云躰也
にきはゝしきに、　饎(ニキヤカ)和名新猿樂記　又富饒(フネツ)
たかきやにのぼりて見れは煙たつ民のかまとはに
きはにひけり仁德御歌
こと人のいはんやうに心得すおほせらるゝと
こと人とは色このみならぬ人のいはん樣にと、頭
中將の源氏を云也にきはゝしきによるにはあらね
とも女のさのみおちふれぬるはよからぬといへる
なり
むくらの門に　八重葎して門させりてへの歌の心歟
なよゝかなる御そ　やはらかなる也
御ほかけ　火影日本紀、豐玉姫のうの羽ふきあはせすの尊を産給し時、父彦火々出見尊の火をともして御覽しけりと云々、　又側影(ホノカナルカケ)
かみはしもにたすけられしもはかみになひきて　上
以風二化下一々以風二刺上一詩序史記等にあり　上合二淳德(佐イ)一以過二
其下一々懷二忠信一以事二其上一史記　上之仁猶二風靡一レ

草
せはき家の中のあるしとすへき人　適(アルシ)毛詩　國をおさ
めんとおもはゝ先家を治め家を治むるものは先身
を治る心也詩序二以一家之事懸一國事といへり左(邪イ)
傳曰詩曰刑二于寡妻一至二于兄弟一以御二于家國一註曰
詩大雅也言文王之敎自レ近及レ遠也寡妻嫡妻謂二大
姒一也
とすれはかゝりあふさきるさにて
そへにとてとすれはかゝりかくすれはあないひし(古今)
らすあふさきるさに　八雲抄云あふさきるさとは、
とするもかくするも也云々
ものまめやか　眞
なにか世のありさまを見給へあつむるに　なにがし
かと云心也
ことえり　言撰　ことはをえらひてかく也
すへなく　焉慓無　無便(タヨリナキ也)　無爲
あはれ〳〵と歎あまりせんすへなみに庭にいて、
立やすらへは古今長歌
あふくまに霧立わたり明ぬとも君をはやらしまて
はすへなし古今

すみつきほのか　うすゝみなる歟一説云うすくこき
也云々
ことかなかになのめなるまじき人の
殊中ことなるか中也異中日本紀あらぬか中といふ也　或絆中紫明抄
みゝはさみかちにひさうなきいへとうじ
無美相又無貴相主人妻遊仙窟　家童子伊勢物語眞名本　伊勢物
語云昔男有けり宮仕いそかしく心もまめならさり
ける程にいへとうしまめに思はんといふ人につき
て人の國へいにけり
なみたもさしくみ　涙のさしいづる心也歌にもさし
くむ物は涙也けりとあり涙くみ同事也さしくみに
袖ぬらしけるの歌には聊かはるべしそれはやかて
なと云心也八雲抄にはさしわたりてと云心也と有
あはつかに　淡々しき也　君子之交也淡如水韋子
ひたふるにこめき　こめきは勝美制也云々水原抄或
くはしき也云々
一説古めき歟ふるめかしき心也又云小めき歟おさ
なくかたほなる體也
あた事まめこと　眞事
そは〳〵しく　側そはつきされはみといへる同心也

くまなき物いひも　曲日本紀　隈　熊　阿間
おもふてふ人の心のくまことに立かくれつゝ見る
よしもかな
ねちけかましき　佞人日本紀　論語註曰佞人口辭捷給
數爲レ民所レ惛者也又曰佞口才也又曰佞人假ニ仁者
之色ニ行レ之則疑
なら山のこのてかしはの二おもてとにもかくにも
ねちけ人かもこの手柏は大とちと云本也柴の葉風
にふかれてあなたこなたへむく也、それを二おも
てと云也あちこちへ向て物いひする人に似せたる
なりこれをねちけ人と云
あまりのゆへよし心はへ　故つきよしはみたる心也
えんに物はちして　艶
うへはつれなくみさほつくりて
はちす葉のうへはつれなきうらにこそ物あらかひ
はつくといふなれ　操心操也　さりけなく作惘然し
たる樣なる心也たとへはしほうなる體也心をつく
ろひてかざるなり
うみつらなとにはひかくれぬるおり　海頬又海濱日
本紀にはウミヘタトヨメリ海頭伊勢物語眞名本　周太子泰伯仲雍讓ニ弟季歷一

隠荊戀ニ海濱一論詁

ふるこたち　古後達こたちは女の惣名也古は年老たる女也　御白氏文集日本紀　禮記にあり

後漢書註鄭玄曰禮記云后之言後言在ニ夫之後一故以レ女謂ニ後達一

伊勢物語云あるこたちのつはねのまへをわたりけり　後達禮記の文分明也但御の字も又有ニ其謂一歟伊勢のこなどいふも御の字也俗にはゝこあねこなといふ昔此字也かしつく心なり　西京なるこたちはおや千疋かとり千疋くりあけてをるかとしのひきするやぬのひきすなやきり〳〵すのなとかたむかしおきの花や雜藝歌　黒鳥子歌美濃國の宿の後達は俗云後付

ひたすら　太毛詩　疋郎白氏文集　永日本紀　ひたすらにわかおもはなくにをのれさへかり〳〵とのみなきわたるらん後撰

ひたいかみをかいさくりてあへなく心はそけれは（伊勢）　垂尼事也

うちひそみぬかし　嚬蹙文選　舌出遊仙窟　出萬葉

人のなく時に口のすけみ出たる心也、又年老ぬれは口のすけむをも云也

萬葉曰もゝとせにおいくちひそむよとむとも我はいとはし戀はますとも家持卿

顰眉　又竊眉是も泣體也　八雲抄云すこししめりはけたる様也

にこりにしめる程よりも

はちす葉のにこりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあさむく遍昭

みすへしたらん　みすへらかしたる也　空蟬巻にぬきすへしたる衣とあるもぬきすへらかしたるなりよすか　便也

萬葉しかの山いたくなきりそあちをらかよすかの山と見つゝしのはん

あひみるめおきのこ島にふけよりてあまそてみちぬよするなみなり

つなかぬ舟のうきたるためし　觀レ身岸額離レ根草論レ命江頭不レ繫舟　古人釋一同に此詩を載たり然而其心與ニ物語一相違する也詩者以レ是無常に譬たり物語は浮舩の心也文選に在泛乎若ニ不レ繫舟一莊

子註文選賈誼鵩鳥賦曰野鳥入レ室主人將レ去請問子鵩予去何之此心也予以二管見一勘二得之一潜通二作者之意趣一努力自愛云々

うなつく　點頭（ツナツク）　或領狀漢書（同）顔許淮南子（同）領許道仙篇

むまのかみもの定めのはかせになりてひゝちゐたり

物定博士此名曰先例未二勘得一假令物合判者同事歟

輕䡨（ヒヽチヰタリ）日本紀　京極北政所從一位麗子自筆本にひいちゐたりとあり然者如此よむへき歟一說云鵢のすをかまふる時ほこりて羽をたゝくかたち也云々又云ひゝらきゐたりとある本も有同心也共鵢の囀姿也云々輕䡨はかるゝしき姿也、或說云萬葉の長歌に鼻毘之毘之爾志とあるは、人のひらめきてわつまりゐたる義也といへり、同事歟云々

木のみちのたくみ　良匠如レ制レ本帝範

そはつきされはみ　側付と書そはみゆかみたる體也

宿日本紀（サレ）　宿老同　宿雨　宿雷皆同心也　案之左禮は左道儀也人のされたるとはまことしからさる體也俊賴口傳に誹諧歌をされ歌といへりそれもたはふれたる樣也されおとなひたるとは以前の宿老の字歟これも年老て物なれすきよからぬ體也新猿樂記に虛左禮とあり左禮右禮の義也はみは上に付たる體也「よしばみなどいふがごとし」

うるはしきてうと　美麗　調度

すみかきにえらはれて　下繪を極墨にてかくは上手のわさ也朽木書とも云也色とりはそれよりもつきの事也一說墨繪の事也色とり繪はとかくまきらはしても有ぬべし墨繪は上手ならではかきえぬ物也めに見えぬをにのかほなとのひときはめおとろ／＼しくつくり出たるものは心にまかせてひときはめおとろかしてしちにはにさらめとさて有ぬべし

韓子曰客爲二齊王畫者一問レ之對曰狗馬最難鬼魅最易狗馬人所レ知也旦暮於レ前不レ類之故鬼魅無レ形者可レ類改易文選曰畫二鬼魅一易レ成レ好畫二狗馬一難レ爲レ好三都賦

すくよかならぬ山のけしきこふかく世はなれてたゝみなし　健（スクヨカ）音後集

すくよかならぬはつよからぬ也繪のすくみたるはわろきと云也

心しらひ　心知　心つかひ也　恥をはちしらひといふかごとし

つらつえ　吟苦支願（ツランエツク）曉燭前白氏文集

古今 なけ木こる山としたかく成ぬればつらづえのみぞ
まつかれける
六帖 ことしけき心より咲物思の花の枝をやつら杖につ
く
むつこと　親言
古今 むつこともまたつきなくに明にけりいつらは秋の
なかしてふ夜は
はやうまた下らうに
はやうはさきにと云詞也過にし方の事也古今にも
はやうすみ侍けるなどあり
かたちなとまほにも侍らさりしかば　眞帆(マホ)萬葉　まほ
とはうるはしき也まほにはあらすはうるはしから
ぬなり
ものえむし　物怨物うらみ也
心つきなく　開情遊仙窟無心月宛字
うとき人に見えは　外人不レ見見應レ笑白氏文集
すゝめるかたとおもひしかと　强又健　こは／＼し
くつよき心也
かくおそましくは　形チソシ文選
いひそし侍に　言殺いひころす程也詩看殺愁殺なと

多作レ之至極したる心也
つかさくらゐいとゝしく
いとゝく也　速也
およひ　大拇指
手を折てあひ見しことをかそふれはこれひとつや
は君かうきふし
伊勢物語 手を折てへにける年をかそふれはとをといひつゝ
よつはへにけり
請君屈レ指數白氏文集第二
りんしのまつりのてうがく
臨時祭調樂十一月午日北陣構幄屋有儀式有饗膳勸盃等
みそれふる夜　霙　雨雪交下
これかれまかりあるくところ　班(アカツ)禮記云分心也　分散　頒
別　八雲抄云あちこち行也
いへちとおもはんかたはまたなかりけり
いまたなかりける也或説又なかりけるなり兩說也
なま人わろくつめくはるれど　媚心(ナマコヽロ)伊勢物語眞名本　世俗に爪
くふと云はゆかみたる體也
火ほのかにかへにそむけ　耿々殘燈背レ壁影白氏文集
ひきあくへき物のかたひら　几帳ノ帷(カタビラ)也

さうしみ　正身萬葉　正員の事也
せうそこもせて　消息（アルカタチ）　日本紀
ひたやこもり　直隠　或奄宅（アリサマ）　白氏文集
うきによりひたやこもりとおもへともあふみの海
は打いてゝ見よ和泉式部
一説理不盡なるやうなり
そむきもせすとたつねまとはさんともかくれしのひ
すかゝやかしからすいらへつゝ
初に世をそむきぬへき身なめりといひしにいまた
そむかてありとて、男の尋まとはすにも、けしか
らすもかくれ忍はすして、つゐにはいかくれたる
と云也かゝやかしからすははちかゝやく心也
つなひきて見せしかは
引よせはたゝにはよらて春駒のつなひきするそな
はたつときく伊行釋　いふイ　奥入
此歌心不叶つなひくは嫉妬の心也秘説あり
たはふれにくゝ
ありぬやと心みかてらあひ見ねはたはふれにくき
まてそ戀しき古今
たつ田姫といはんにもつきなからす七夕のてにもを

とるましく
龍田姫は　染成事歟七夕は裁縫心歟
見ることに秋にもなるかたつ田姫紅葉そむとや山　後撰
のてるらむ
そのたちぬふかたをのとめて
あふ事はたなはたつめにおなしくてたちぬふわさ　後撰
はあへすそ有ける閑院
案之春は佐保山神より事おこりてさほ山の霞の歌
によせて春を染る神といひ秋は龍田山の神より事
おこりて紅葉を詠する故に秋を染る神と云也、又
共神名也但春の立田姫の歌萬葉にあり櫻歌にわか
ゆきはなぬかはすきし立田ひめゆめこの花を風に
ちらすな秋のさほ姫は不見歟
うるせく　うるはしく也
露のはえなくきえぬる　絶（ハエ）光　榮（ハエ）夕榮　無（ハエ）ㇾ見（ナシ）　日本紀
光若は榮と心に叶歟
見るめもこともなく侍し　無事　殊事なきよし也
すきぬるはかひなくて　過去事也こや君かてをわか
るへき時とよめりし人の事也
しは〳〵　屢　論語曰屢者數也數をかさぬる心也あ

またゝひ也
大納言のいへにまかりとまらん　此大納言何人哉
若右馬頭父歟
かれはたよきぬみちなり
ふく風にあつらへつくる物ならばこの一もとはよきよといはまし古今
いけの水かけ見えて月たにやとるすみかを　池に月の見えけるをよめる伊勢
雲井にてあひかたらはぬ月たにも我宿過て行時はなし
とはかり　しはしはかり也
ふえとりいてゝふきならし　法進云笛漢武帝時丘仲所レ造長一尺四寸今時所レ吹笛者唯有二七孔一風俗通曰笛武帝時丘仲所レ造或黄帝時伶倫造之云々說文曰笛七孔長一尺四寸又曰笛滌也蕩二滌邪穢一納二之雅正一悉曇藏第三元造暦云伶倫造レ笛文此乃取解谷竹學二鳳凰鳴一者也笛有二十二孔一也二孔闕而不レ傳其九孔者以出二五音一翰曰笛本四孔少商聲君明復加二一孔於下一爲二商音一後出兼レ舊則五音畢備也
かけもよしなと　やとりもすへしと云心也

飛鳥井にやとりはすへしかけもよしみもひもさむしみまくさもよし催馬樂飛鳥井律
よくなるわこんを
和琴に能鳴調ありそれによそへていへる也
和琴は伊弉諾伊弉冊尊御時令二作出一給云々仍諸樂器之最上に置之也あつまことゝもあつま共云也鴨長明記云和琴之元は弓六張を引並て用けるを後に琴に作たる也件弓は上總國の古濟物也彼國古注文云弓六張神樂料矣
めてゝ　感情(メテ玉フミコヽロ)日本紀
すのもと　簾下
庭のもみちこそふみわけたるあともなけれなとねたます
秋はきぬもみちは宿にふりしきぬみち踏分てとふ人もなし
妬(ネタマス)　勵也一說不レ妬謬說也
ことのねも月もえならぬやとなから
定家卿本きくもえならぬやとなから云々親行本は月也
あされかゝれは

餧魚餧論語鯘　あされはされ同事也　あの文はさゝけ物也

さうのことをはんしきてうにしらへて　風俗通曰秦聲也或曰蒙恬所レ造五絃筑聲幷ニ涼州ノ箏形如レ瑟不レ知ニ誰改ー或曰秦多ニ善箏者ー故曰ニ秦箏ー釋名ニ箏施絃高箏々然或物云漢恭帝使下素女鼓中五十絃琴上聲悲帝禁不レ得破レ瑟爲ニ二十五絃一丈二尺ー秦始皇時破ニ二十五絃ー爲ニ十三絃ー今箏是也昔以レ竹造レ之其後以桐造之也

おらはおちぬへき萩の露ひろはゝきえなんとする玉さゝのうへのあられなとの

おりて見はおちそしぬへき秋萩の枝もとをゝにおけるしら露古今

いつくにかやとりはとらんあさひこのさすや岡邊の玉さゝのうへ

あえかなる　八雲抄云うつくしくひわつによはき躰也

うちわらひおはさうす　おはしますなり

山かつのかきほあるともおり〳〵はあはれをかけよなてしこの露　山兒止觀山賤同上山下同上下人同上尼兒同上垣本

やまかつのかきほにはへる青つゝら人はくれともことつてもなし古今

むしのねにきをへるけしき　競あらそふ心也

山となてしこをはさし置てまつちりをたにとおやの心をとる

牛麥萬葉　さきにあはれはかけよなてしこの露といひしは玉かつらの君の事也それをはさしをきていもとあかぬる心を云也

われのみやあはれとおもはんきりきりすなくゆふかけのやまとなてしこ古今

ちりをたにすへしとそおもふさきうへしよりいもと我ぬるとこ夏の花古今

鐘愛抽ニ衆草ー故號ニ撫子ー艶色裝ニ千年ー故曰ニ常夏ー　和歌序家經

うちはらふ袖も露けきとこなつにあらし吹そふ秋は來にけり

ひこほしのまれに逢夜の常夏は打はらへとも露けかりけり後撰

さすらふらむ　伶傳又龍鐘　流離日本紀

已忍伶傳十年事　强移ニ栖息一枝安ー杜甫

おもひまつはす　纏
やくなきかたおもひ　無益の片思也
伊勢のあまのあさな夕なにかつくてふあはひの貝の片思にして
人やりならぬむねこかるゝゆふへもあらんと
人やりわか心からなる心也
人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていさかへりてん古今
身のうさをしれははしたに成ぬへみおもへばむねのこかれのみする後撰十八
なみたにしおもひのきゆる物ならはいとかくむねはこかれさらまし
燋心燋身大集經　千思千腸熱一念一心燋遊仙窟
三教指歸云寧莫ニ衞婆伽之燒ヒ胸
なんすべきくさわひ　種クサワヒ也
きちしやう天女を思かけんとすれはほうけ（法氣）つき（付）てくすしからん
大吉祥天女在ニ金光明最勝王經ー吉祥天女は端嚴の天女也しかれども佛眷屬なれは法氣つきてわつらはしと云也くすしからんはわつらはしからん也

わかふたつのみちをうたふをきけとなん　兩道　富家女輕ニ其夫ー貧家女孝ニ於姑ーといふ心也我は貧家なりと名のる也
天下無ニ正聲ー　悅レ耳即爲レ娛　人間無ニ正色ー　悅レ目即爲レ姝　顏色非ニ相遠ー　貧富則有レ殊　貧爲レ時所レ棄　富爲レ時所レ趨　紅樓富家女　金縷繡羅襦　見レ人不レ斂レ手　嬌癡二八初　母兄未レ開レ口　已嫁不ニ須臾ー　綠窓貧家女　寂寞二十餘　荆釵不レ直レ錢　衣上無ニ眞珠ー　幾回人欲レ娉　臨レ日又踟蹰　主人會ニ良媒ー　置酒滿玉壺　四座且勿レ飲　聽吾歌兩途　富家女易レ嫁　嫁早輕ニ其夫ー　貧家女難レ嫁　嫁晩孝ニ於姑ー　聞君欲レ娶レ婦　欲レ娶意何如　白氏文集秦中吟
むへ／＼しく　宜
むさいの人　無才也
ふひやう（風病）おもきによりこくねち（極熱）のさうやく（草藥）をふく（服）して
延喜式云八十種草藥廿四種草藥中蒜是極熱草藥也
又食藥を雜藥と云
さるへからんさうしらは　雜事等

おいらかにをにとこそゐたらめ　誠ニ鬼一車ニ何足レ
畏掉ニ巫三峡一未レ為レ危 前中書王　雄丹 眞名本伊勢物語
むくつけきこといつまはじきをし　蠢(ムクツケシ) 貧 白氏文集
伊勢物語かの夫(ワイ)はあまのさかてをうちてなんのろ
ひけるなりむくつけきこと人ののろひとはおもふ
てふものにやあらむ
あはめにくみて　淡悪　あは〱しくにくむ也
すへておとこもをんなもわろき物はわつかにしれる
方のことをのこりなく見せつくさふとおもへるこそ
いとをしけれ
論語曰知者言未ニ必盡一也　大辨如レ訥 老子経
三史五経のみち〳〵しきかたを　三史　史記漢書後
漢書　五経　毛詩禮記左傳周易尚書　伊行釋には
三史五経三道と書て三道紀傳明経明法と釋した
り
五月のせちにいそきまいるあしたなにのあやめも思
しつめられぬにえならぬねをひきかけ九日のえんに
まつかたきしの心を思めくらして
五日節聖武天皇天平十九年五月天皇御ニ南苑一観ニ騎
射走馬一此日詔曰昔五日節用ニ菖蒲一為ニ比蘰一此来
停ニ此事一従レ今而後非ニ菖蒲一者勿レ入ニ宮中一金谷園
記曰昔楚人屈原字霊均為ニ三閭大夫一破レ讒出而隠ニ
江畔一遂投ニ汨羅水ニ而以死即五月五日是其死日也
後有ニ長沙人歐回一従レ岸屈原在ニ其間一謂レ回曰我今
受ニ飢餓一若(君イ)留恵相済否回曰何者原曰要竹筒盛ニ食
粽葉ニ塞シ頭不レ然即以ニ菱葉一裹レ之五色絲縛レ之投レ
水祭レ我々則得レ食也不レ然即被ニ蛟龍侵奪一人之祭
令ニ我皆不レ得レ食也回依言祭之原饗レ食見而謝之今
人象レ之為ニ竹筒糉(チマキ)及蘆葉裹一未俗作レ粽及與菱葉糉
幷ニ五色絲一繋レ之

九日宴

月令重陽日菊有黄花
天数九ツ秋数九仍曰ニ重陽一見周易
續齊諧記曰桓景家九月九日當大災可レ盡レ家費長房
云登レ高採茱萸挿レ頭折ニ菊花一浮レ酒将攘ニ此災一桓
景暮而帰ニ家内一鶏犬牛馬皆死長房聞之曰汝無レ災
平城天皇四年九月幸ニ神泉苑一兼命ニ文人一賦詩賜レ
物有レ差美寛平遺誡曰五月五日九月九日文人武士
行事繁多不レ可レ怠不レ可レ緩
きくの露を
きくのはな露とおきゐていさおらんぬれなはそて

のかこそにははめ六帖
君は人ひとりの御ありさまを
藤壺の事也
なかかみ
中神也　或長神（両説歟　行説也）光天一神也
金櫃經曰天一立ニ中央一爲ニ十二將一定ニ吉凶一云々立中
央之故號ニ中神一歟　件方古今所違來也（見倘書暦陰陽　雜書安家説）
或曰初日夜有方違者次々夜不レ忌初日夜無ニ方違一
者次々夜件塞方不可宿云々家榮抄
又永久四年十二月二日縫殿頭家榮依法性寺殿命令
注進者云々天一方俗謂之長神
己酉日在艮（ウシトラ）六ケ日虵　乙卯日在震（ヒンガシ）卯五ケ日鯆　庚申日
有巽六ケ日烏　丙寅日在離（ミナミ）午五ケ日鷄　辛未日在坤（ヒツジサル）
六ケ日鹿　丁丑日在兌（ニシ）酉五ケ日馬　壬午日在乾六ケ日龍
戊子日在坎子五ケ日龜　自ニ癸巳ニ至ニ戊申ニ十六日
在ニ天上一佛
まめ人
履季（テンキ）（マメヒト）　又眞人
あなかまとて
なりたかしやなりたかしおほみやちかくてなりた
かしわはれのなりたかし一段
をとなせそやをとなせそ二段
あなかまこむともやみそかなれ三段風俗鳴高
二條院
陽成院を二條院と號云々脱履（屣イ）之後御此院二條以北
大炊御門以南油小路以東（西イ）西（東イ）洞院以西也京都の名跡
なと准據なき事一事もなき也
なか川のわたり（徑）
今京極川是也見李部王記
榮花物語云中川邊に御堂をたてらる法性寺東北院也
舊記曰京極川二條以北を號中川云々
東川賀茂川西川桂川中川京極川
さかしれいはいみたまふかたなり
賢　けにといふ心也
しそきて
退
なめけなること也
滑　無禮心也
よろしきおましところにもとて
清宜也　席（ミマシ）日本紀御座同莚

史記曰衛叔封布ㇾ茲(ミマシ)註曰徐廣曰茲者蘇席之名
おほみや人にみましゝかせん　歌末勘
あるしもさかなもとむとこゆるきのいそきありく
たまたれのこかめをなかにすへてあるしはいもと
やさかなもなきにさかなもとめにこゆるきのいそ
にわかめかりあけに風俗玉垂歌件磯在相摸國
きぬのをとなひはら〱として
喧嚮(チトナヒ)日本紀　夏もすゝしにはりひとへをかさぬる
也仍有音歟云々
けはひことさらひたり
ことさらにつくりて物いふよし歟
むつかり
勘當　世繼にみかとむつかりおはしましてとあり
うちさゝめき
耳言(サヽメク)萬葉
しきぶきやうの宮の姫きみにあさかほたてまつり給
じうたなと
これよりして権宮と號する也齋院事也
すこしはをゆかめてかたるも
方曲也

くつろきかましく
かる〱しく四度(シドケ)計なきよし歟つまやかなるとは
極位の躰也それに對する詞也紫明抄云あはらなる
也云々
とはりちやうもいかにそはさるかたの心もなくては
めさましきわるしならんとの給へはなによけんとも
えうけ給はらすとかしこまりてさふらふ
和加伊戸波止波利帳於毛多禮太留乎於ゝ支美支萬
世无己爾世无美以左可奈爾奈爾與介无安波比左多
宇加與介无安波比左多宇加與介无催馬楽呂我家
あてはかにて
嫉妍(アテハカ)日本紀
このあかねきみやまうとのゝちのおや
眞人は朝臣より次也「改眞人(イネナシ)爲ニ朝臣ー也」
ふいにかくて
不意　或説無爲歟云々謬説也
おもひのほか或又おもはす日本紀點
おろしたてんや　下
しもや　下屋雜舍事也
君はとけてもねられ給はすいたつらぬしとおはさる

るに
いかなりしときくれ竹の一夜たにいたつらふしを
くるしといふらん拾遺
ものけ給はる
物承也
かれたる聲のおかしきにて　枯音
いもうとときゝ給つ　あねをもいもうとゝいふ也
心とゝめてとひきけかし
としふれとわすられはてぬ人のうへは心とゝめて
なをきかれけり伊勢集
まろは　丸也　勘付夕顔卷
しもになんゆにをりて　湯
さゝやかにて　細々許（サヽヤカナリ）遊仙窟　少々　小蠅（サハエ）　いつれも
ちいさき心也
なみ〳〵の人ならはこそ　つき〳〵の人也次の字を
なみと讀也月次等也
とうもなくて　無動　うこきもなき也
いつくよりとうて給ふことの葉にかあらん
取出給也
おほしくたしける　下也

をしたち給へる　押立
うひこと　初事
あはめられたてまつる　阻（アハム）淡　あはめにくむ心也
なよたけの心ちして
やましろの風のさむさにをとめをそかけてねぬよ
のなかきなよ竹萬葉
なよ竹のよなかきうへにはつしものおきゐて物を
おもふころかな古今
なよ竹はなへての竹よりもよなかくてたはみたを
やかにてしかもおれぬ物也
おほゝれ給なん　溺　そらおほれの心也
ありしなからの身にて
とりかへす物にもかなや世の中をありしなからの
我身とおもはん古今
のちせもや
わかさなるのちせの山の後にまたあはんかならす
けふならすとも萬葉
みきとなかけそ
それをだにおもふことゝてわかやどをみきとなか
けそ人のきくかに古今

さしはへて　うちはへて也

とりもしは〳〵なくに心あはたゞしくて

數鳴あまたたびなく也しはなくとも云周章アハタヽシ

こと〻あかくなれば　事也　わざとかましき心也

へたつる關とみえたり

あふさかのなをたのみつ〻こしかともへたつるせきのつらくもあるかな古今

ひこほしに戀はまさりぬあまの川へたつる關をいまはやめてよ

そ〻きあけて

楚々起イナシ勘文「萬葉註釋云そ〻りあかる也云々」

今案戰の字をそ〻めくとも、そよくともよめりそ〻きあけてはそ〻めきあけて也

世のたとひにてむつれ侍らす

繼母の間の事歟　請㆑君掇㆑蜂君莫㆑掇纏㆓君父子㆒成豺狼白氏文集　此外和漢例多也

あて人と見えたり

妙人　高貴人伊勢物語眞名本　おほかたの秋をかなしみみることもあてなる人はしらすそありける千里

御ふみをおもかくしにひろけたり　面隱也

ぬるよなければ

戀しさをなに〻つけてかなくさまむ夢にもみえすぬるよなければ

ついそうしありけは　追從

あこはしらし　吾子日本紀我子あわ五音相通の字也

ふつ〻かなる　下手しき心歟

やりみつのめいほく　面目

わかみくしけとの

御匣殿別當　內藏寮外御服など裁縫所也順德院御抄

庶人も裝束調する人をいふ也

人さけす　不遠サケ也

うれたく　憂也

むしんに心つきなくて　無心也

ふようなるよし　不用もちゐさるよしを申せといふ也

は〻き〻　箒木事先達色々に釋せり但大都は同事也

そのはらやふせやにおふるは〻き〻のありとはみえてあはぬ君哉平定文家歌合坂上是則

能因歌枕云は〻き〻にする木の森の中にあるが下のしげりてとをくして見ればみゆるがちかくよりて見ればみえぬを云也顯昭云信濃國そのはらふせ

やといふ所に森ありその森によそにてみれは箒に似たる木のすゑのあるをたちよりてみれはその木もみえすとなん申つたへたる、はゝきゝとは庭はく木はゝきなり家成卿歌合藤原爲忠歌基俊判詞云昔風土記と申ふみ見侍りしにこそ此はゝきゝのよしは大略みはへりしかされど年ひさにまかりなりてはか〳〵しくもおほえ侍らす件木は美濃信濃兩國境そのはらふせやと云所にある木也とをくてみれははゝ木をたてたるやうにて近くてみれはそれに似たる木もなし然はありとはみれとあはぬ物にたとへ侍云々一說云杜木中にはゝき木一本ましれりと云々承曆歌合師賢「はゝきゝの梢やいつこおほつかなみなその原は紅葉しにけり」此心也經信卿記云此（イ本二字ナシ）歌旁入權辨伯耆（キイ）木歌不ㇾ快事也皆以書改不快（事也）難不知所通而俊賴以二此歌一入二金葉集一如何、綺語抄云はゝきゝに二の論あり一には箒木のある森のある也その森いとしけくて森の中にはゝ木々おひたる也、それをとをくてみれはあるやうにて森の下にゆきてみれは木のしけりてみえぬ也、一には箒ににたる木のその森にある也、それをとをくてみるにはあるやうにてちかくよりてみれはうする也、されはかくよめり是はいとあさまし有難くなん非也、無名抄云此歌の心たしかに書たる物なし、信濃國にそのらはふせやと云所あるにそこに森のあるをよそにてみれは庭はく箒に似たる木のこすゑにみゆるかちかくよりてみれはうせてみなときは木にてなん見ゆると云つたへたるをこの比みたる人にとへはさる木も見えすとそ申す、昔こそはさやうに見えけめこのころは箒とみゆる木の見えはこそ近くよりてもかくれめとそ申、此事或說には彼森には箒木に似たる木あり、よそにてはゝきゝかとみえて近くよりて見ればあらぬ木なりとも云へり或又件箒木は森の梢の最頂にある物也是を森の下に行てみれは木茂りてみえずとをくてみゆる也此說を先達用と云々奥義抄引二後拾遺一云　ゆかはこそあはすもあらめはゝきゝのありとはかりはをとつれよかし

今勘二國史一云仁明天皇承和二年六月勅如聞東海東山兩道河津之處或渡舟數少或橋梁不ㇾ備由ㇾ是貢調擔夫來二集河邊一累ㇾ日經ㇾ旬不ㇾ得二利涉一宜下每ㇾ

河加中増渡舟二艘上其價重者須二正税一又造二浮橋一
令レ得二通行一及建二布施屋一備二于橋一寄二進作料吉用
救レ急稻云々
陽成天皇元慶四年云弘仁十二年國分寺尼法光爲
レ救二百姓濟度之難一於二越後國古志郡渡戸濱一建二布
施屋一施下墾田四十餘町渡舟二艘上令下往還之人得中
其穏便上而年代積久無二人勞濟一屋破損田疇荒廢望
請被レ宛二越後國俗五人一永令二預守一云々
案レ之ふせやはその原にかきるべからず所々に是
をたつる歟信濃國にはその原に立けるにや、俊頼
歌に　山田もるきそのふせやを風ふけはあせつた
ひしてうつらおとのふといへり岐岨そのはら相近
歟たとへは谷のふせや、しつかふせや、皆同物也
或説云信濃には穴をほりてふきいたのかた〳〵を
は土にうつみてかた〳〵に口をあけてそれよりお
りのほる、冬雪の降てふかきおりの料也、かれを
ふせやと號云々

さはれとはおほせと
　さらはさてあれといふ心也

すゝろに　無端
かしこけにときこゆ
恐の字おそるゝ心也　又賢

并一　空蟬
うつせみの身をかへてける木の本になを人からの
なつかしきかな

卷并事
うつほの物語云第三の並春日祭又第五(ふきあけの卷)の並
祭の使菊宴などゝてあり又濱松の物語といふもの
にも並一帖あり是等例なり、凡此物語の並の樣一
偏に同時の事とも見えす、横竪ある歟同つゝきの
事を分てると見ゆる並もあり、是を竪の並といふ
べきにやいまの空蟬の卷これなりされば奥入にも
二の並とあれと箒木の次也ならひといふべくもあ
らす、一説にはかゝやく日のみや(此卷もとよりなし)並の一箒
木(空蟬は此卷にこもる)二夕かほといへり云々玉鬘の並は横竪
相交れり末摘花關屋蓬生は一向に横の並也うつぼ
の物語のならびも横とみえたり濱松の並も唐と日
本との事を同時にならべてかけり、是も横也凡な
らびの本意は横の義たるべきなり、奥入も猶横の
義を存する歟、中院事書云尙書の篇の定(テイ)樣此なら
ひの義に相似歟彼序云以二舜典一合二於堯典一益稷

合ニ於皐陶謨盤庚ニ三篇合爲レ一康王之誥合ニ於顧命ニ等也しかれどもこれは今の並の心にはたかひたる也並は比隣匹方幷配是等皆ならびならふの訓あり　廣韻六並は合也又詩賦序に幷序とかけるを菅家説に序をあはせたりと讀て、自余はならひに序と讀也、是も今の並の心にいさゝか相似たる歟

うれたくも　慨哉慷哉以上日本紀

たはかれと　將計　或方便

女とち

とちは共也、萬葉云思共とあり、友の心也、萬葉に風の共とありそれも風と共にと云心也

夕やみのみちたと〳〵しき

ゆふやみはみちたと〳〵し月まちてかへれわかせこそのまにもみん萬葉四

こうたせ給

博物志云堯造ニ圍碁ニ音期字且作碁此間云五　一云舜造也晉中興書云圍碁堯舜以敎ニ愚子ニ也「丹朱と云人を」

こきあやのひとへかさねなにゝかあらんうへにきて

こきあやは紅の色こき也、うへにきてはこうちきの歟、軒端荻いまひとりもしろきらすもののひとへかさねにふたあひのこうちきと見えたり此巻にもかのうす衣はこうちきのいとなつかしき人かにしめるといへり、しかれとももやの柱にそはみてさたかにみえすとあるは用意ふかきよし也、仍なにゝかあらんとおほめく也

くれなゐのこしひきゆへるほと　袴腰也

はうそくなるもてなし　傍側也わらはなる心也

うつは物語云わかき人は物わらひし給ものなりされとさやうにはうそくにもあらすといふ

そゝろなる人のかしらつき

尖　するとなり

さかりはかたのほといときよけに

下場也勘文紫式部假名記にも此詞あり隱蓑物語に

もつやさかりはありいつれも髪の事也

むへこそ　宜　固宜（マコトニムヘモ）　漢書　諾

けちさす程　圍碁結也　又闕

心とけに　心疾也　心はやき也

さうとけは　早速（ハヤ）　いそかはしく物さわかしき躰也

このわたりのこうをこそ　助　つむる心歟

およひをかゝめてとをはたみそよそなとかそふるさ

ま　請君屈レ指數白氏文集

いよのゆけたもたと〳〵しかるましうみゆ

伊豫のゆのゆけたはいくつかすしらすやかすへす

やかすへすよますやそよやきみそしるらんや　雑纂伊豫

湯温泉記云豫州温泉者其勝迹絶於天下其名著聞ニ人中ニ奕葉々出レ自ニ山頭ニ湧々迸ニ于海口ニ中底白砂潔四隅菁岸斜朝宗是幾許辞海ニ三里觀其温泉上下區以別焉以牟貴賤不混誼故世上則搆郷宇開戸牖其裏備ニ屏息居閑之具ニ下亦左山石右岸樹其間處ニ陰風陽日之氣ニ由レ是來者無レ憚浴者有便以下依繁略之　豫州わをしをの渡の湖中にあり湯のまはりけたのかたち七なみ七十七たん也けたの數五百三拾九也云々

素寂説

めすこしはれたる心地して

目の上腫たる樣也次詞にねひれてと有一説云晴て歟ひたいたかき心歟云々此義謬也

そほれゐたり

たはふれたる也俊成卿女説云ほこりたる心也

あはつけし　以前の淡心也つけしは上にひかれたる詞也むくめくをむくつけしともいふかことし

かいまみ

覗其私屏日本紀垣間見萬葉闚伊勢物語眞字本　伊勢物語云そのさとにいとなまめきたる女はらからすみけりこの男かいまみてけり、かきのひまより見たる心也

こたみ　今度日本紀點字津穗蜻蛉の日記にも如此書之假名書樣也

このさうしくちにまろはねたらん風吹とをせとて

六帖 風吹と人にはいひてとはさゝしあけんと君にいひてしものを

心とけたるいたにねられすなん

拾遺 君こふる涙のかゝる冬のよは心とけたるいやはねらるゝ

ひるはなかめよるはねさめかちなればはるならぬこのめもいとなくなけかしきに

奥入 さくら花にほふものから露けきはこのめもものをおもふなるべし　案之此歌の心不叶歟　謙徳公集云

よるはさめひるはなかめにくらされて春はこのめそいとなかりける女歌也此歌始終其心同也

いとなくは　無暇也

古今 あはれともうしとも物をおもふときなとかなみた

のいとなかるらむ
日くらしの聲もいとなくきこゆるはあき夕くれになれはなりけり
人しりたることよりもかやうなる事はあはれもそふことゝなむむかし人もいひける
なを〳〵しく　直々　御幸の巻になを〳〵しき人のきはこそとありなを人の心歟、いかさまにもよからぬ心也蜻蛉日記云なを〳〵しき手してちうてんかちにといへり是もさすくなる躰を云歟
ぬきすへしたる　興風集女のきぬをとりてかへりてかへすとて　逢までのかたみとてこそとゝめけめ涙にうかふもくつなりけりすへしたるはすべらかしたるなり
おもと　侍者白氏文集御許新猿樂記遊仙窟云從渠(ヨシヤカ)　渠(モト)は汝也備也、大鏡云いふかひもなきはとの物にもあらず、おもとほどのきはにてぞありける、和泉式部か童名を御許丸といひけり
これをつらねてありきけるを
列　行列の心也　あゆみつらねたる也
うつせみの身をかへてける木のもとになを人からのなつかしきかな　うつせみは蟬の蛻(モヌケ)なり文選に蟬蛻とかけりかのぬきすへしたる衣によそへていへり、一義打磬蟬ともいへり、せみの聲磬をうつににたる故也、後撰云、うちはへてねを鳴くらす空蟬のむなしき戀も我はする哉
人かにしみて　人香
伊勢をのあまのしほなれてや
はつかしやいせをのあまのぬれころもしほなれたりと人やみるらん　奥入　すゝかやま伊勢をのあまのすて衣しほなれたりとひとやみるらむ　後撰に伊尹朝臣女のもとにきぬをきてとりにつかはすとてとあり
またしる人もなきことなれは
古今　まくらよりまたしる人もなき物をなみたせきあへすもらしつる哉
あさはかにも　あさくはかなき心歟
萬葉　くれなゐのうすそめころもあさはかにやみにし人をこふるころかな　もゝそめのあさゝのころもあさはかにおもひていもにあはんものかも同
ありしなからのわか身ならはとゝりかへす物ならね

と

とりかへす物にもかなや世の中をありしなからの（古今）
我身とおもはん

めてたき御ありさまも

可愛メテタシ遊仙窟　娃耀同

うつせみのはにをく露の木かくれて忍ひしのひにぬるゝ袖かな

此歌伊勢集にあり如此事古今おほし伊勢物語にもはしめてよみたるやうにかきて万葉歌あまたあり、わたか山かけさへみゆるの歌也又我うへにつゆそをくなるあまの河の歌下句も赤人歌也、このタふりくる雨はひこほしのとわたる舟のかいのしつくかの歌に一同也隠蓑物語にたきものゝゆならぬ人のあまたあれはわすられぬならむかすならぬ身は是も古今の花かたみの歌に五文字のほかはかはらす又此もの語のすきにしもけふわかるゝも二みちの歌も上句齋宮女御の集にあり如斯例勝計すへからず

並二　夕顔

三位中將女折夕顔花置扇送光源氏云歌詞濟々焉

六條わたりの御しのひありきの比　密（シノヒ 日本紀）

六條御息所（秋好中宮母儀 前坊御息所）在所也

中將御息所（貞信公女前坊御息所）後に重明親王の北方になる此例歟齋宮女御母大臣女以下一同也伊勢物語むかし左のおほいまうちきみいまそかりけりかもの河のほとり六條わたりに家いとおもしろくつくりてすみ給けり

大貳のめのと

乳母（賦役令）　有部毗奈耶（ツフイナヤ）曰名二師子胤一其父以兒授八乳母、華嚴經曰檀波羅蜜爲レ乳戸波羅蜜爲二乳母一文字集略曰嬭（メノト）（乃禮反亦作嬭𡣍色立反云乳母也知於毛）　乳人母也或曰傅姆（メノト）　唐式曰皇子皇孫乳母（和名女能度）　史記傳曰武帝小時東武侯母嘗養帝帝壯時號之曰二大乳母（チオモ）一日本紀曰天孫取二婦人（メナヲメ）一爲二乳母湯母及飯嚼湯座一矣凡諸神部備行以奉養焉于時權用（カリニ）他婦以乳養二皇子一焉此世取乳母養兒之縁也令凡親王及子者皆給（イナシ）二乳母一（謂若内親王嫁諸王所生子者不在給限）　親王三人子二人所レ養子年十三以上雖二乳母身死一不得更立替古今集作者紀乳母（陽成院御乳母）　大江高綱女也

五條わたり　伊勢物語むかし男五條わたりなる女を

ええすなりにけり
これみつ　竹とりうつほかくれみのなとの古物語にはおほく實名をあらはす事ありこの物語には名字をのする事稀也、これ光、義清、時方、長信、通定、平重常宮侍はかりなり若有子細歟就中惟光良清は揚名介申文にも此名有旁有由歟九條右丞相記云天暦十一年三月廿日着南間文範朝臣申惟光朝臣可爲所監之由其調次第相違云々此外寛弘比此名字あまたありけり
藤原惟光寛弘元年正月召名任常陸權介同六年三月廿日任中務少輔
平惟光長保六年正月廿四日任左馬權少允寛弘六年正月廿八日任左衛門權少尉同七年二月十六日任左近將監長和六年正月九日補藏人見權記
大藏是光寛弘元年十一月七日任越前權大掾
葛井是光寛弘二年二月廿日任因幡大目冷泉院御給
藤井是光寛弘三年十月三十日任美濃權大目左衛門督當年給
此内以上三人は作名歟
又御堂關白申文に良清惟光申揚名介云々
おほちのさま　路　御路日本紀　大路万葉
萬葉 春の日にはれる柳をとりもちて見れはみやこのおほちおもほゆ

はしとみ　半蔀
さきもをはせ給はす　隱聲(サキノコヱ)
昔は内々のありきにも先をおひけりと云々用心のためなり變化のものもさきのこゑにおそるゝなといへり、西宮左大臣神泉苑の艮角にて變化のものにあはれけるにもさきの聲する時はひき入けるとあり、是はことさらしのひやつしたれはさきもをはすと云也
かとはしとみのやうなる　諸織戸なと歟
いつくかさして
古今 世中はいつくかさしてわかならんゆきとまるをそやとゝさたむる
たまのうてなも
六帖 なにせむに玉のうてなも八重むくらはへらんやとにふたりこそねめ
きりかけたつ物
紫明抄に公良三位か説なとゝて秘事けにいひたれども強不然歟大嘗會のしとみやと云ふもの也、いま陣座の前に立也 裏書私云へいのおひを切懸てしたる也俗ニヘイノチホイチキリカケト云歟
ゑみのまゆひらけたる

早晩升平宅開レ眉見レ君强開二笑口一展二愁眉一以上白氏文集
かす〳〵に君かたよりてひくなれは柳のまゆは今
そひらくる
をちかた人に
（古今）うちわたすをちかた人にもの申すわれそのそこに
しろくさけるはなにの花そも
此本歌は梅花也されとも白くさけるはと云ふにつ
きて今は夕顔のはなに思よそへられたる也
御すいしん
聖德太子甲斐の黑駒に乘給てそらをかけり給ける
に秦川勝一人御馬の口につきてめくりける是隨身
濫觴也
このもかのも　此面彼面也こなたかなたと云詞也遊
仙窟に兩邊をこなたかなたとよすめり
（古今）つくはねのこのもかのもにかけはあれと君か御か
けにますかけはなし（後撰）山かせのふきのまに〳〵
もみち葉はこのもかのもにちりぬへらなりこのも
かのもの事二條院御時人々に問れけるに俊成範兼
卿なとは一向につくは山はかりによむべき詞なり
と申けるを淸輔朝臣躬恒か和歌序に大井川（あまのイ）このも
かのもとかけりしかれは筑波山に不可限と申けり
云々（見顯昭抄）吹のまに〳〵の歌の注定家卿僻案抄に
はこのもかのもとはこの面かの面也よもにちる心
也筑波山にこそよめと云事あれといつこにもある
べき事也云々父子義相違歟如何案之强筑波山にか
きるべからざるものなり貫之大堰行幸和歌序にも
我らみしかき心このもかのもにまとひとありこな
たかなたなと云心なり
むね〳〵しからぬ　不宗々歟廣韻云衆也本也尊也
はいまつはれたる
（よそにイ）あかすみてかへらん人にふちのはなはひまつはれ
よ枝はをるとも古今
されたるやりとくち　左道なるやり戸口也、俊頼口
傳にされ歌といへるも誹諧體也ゆかみなとしたる
戸口也
しろきあふきのいたうこかしたる
しろき扇の香のかにしみたる也俊成卿女說こかす
とは薰にしみたる心也一說しろき扇のつまの香色
なる歟
かきをおきうしなひて　鎰

ふひんなる　不便ひんなき也

物のあやめ　綾目又黒白、文目、文をあやと讀也毛詩云擘成文(アヤ)　古今　ほゝときすなくやさつきのあやめくさあやめもしらぬ戀もするかな　清輔朝臣奥義抄云黒白もしらずといふ樣なること也さしてその事とはいひがたき事なり、かやうの詞は書籍にもたしかにしかしかと見えたる事もなし、たゝ大意をもちてをしはかりていふ事也とそ古人も申ける兼盛歌に

おく山のゆつるはいかて折つらむあやめもしらす雪のふれゝば顯註密勘抄云、定家卿云錦織物をはしめて龜のこう貝のからまで文なきものはすくなしあみのめ、このめ、きぬのめ、ぬのめなどいふより色ふし見えわかれくらからぬ時は先文と目とのみわかるるをくらきやみにもなり、心もほれ〳〵しくいふかひなくなりぬれば其物のすかたをみれとあやめなとのわかれぬをあやめしらすといふとそ申されし

阿闍梨　安惠内供奉慈覺大師弟子天台座主第五　始補阿闍梨

おはしたるよろこひをまたなきことに又なきこととなり、一說云いまたなき也、源氏大貳ののめのとか家におはしましたることといまたなかりけるなり

たゆたひしかと　猶豫(タユタヒ)萬葉やすらふ心也

いむことのしるしによみ返て　受戒也　蘇生(ヨミ)　又活

こゝのしなのかみにも　九品のうち上品上(ヨイ)生の事也

かたほ　倜儻日本紀邐延喜式頑

おさなくかたなりなる心歟

つきしろひ　突さしつきてことばにいはぬ體也

一說月の出やらてまづ月しろあかりたるを云也人もことばにはいひ出さでつきみよしはみたる體をいふなり或又あらはにはさし出すして簾のはづれ障子の口なとにいてかゝりたる體を云歟

人となりて　長而(ヒトゝナリ)史記殷本紀　爲レ人同呂后本紀　長成　爲性

さらぬわかれはなくもかなとなむ

奥入　おいぬれはさらぬわかれのありといへはいよ〳〵みまくほしき君かな伊勢物語

返シ業平朝臣　世中にさらぬわかれのなくもかなちよもといのる人のこのため

所せきまて　廣くおほき心也所もせきあへぬと云也

みすくせそかし　御宿世也

心あてにそれかとぞみるしら露の光そへたるゆふかほのはな

　心あてにおちはやおらむ初霜のおきまとはせる白菊のはな、心あては思ひあて也、光源氏をいまた見しらざれとも、思あてにもしるきといへる也詞にもまたみぬ御さまなりけれといとしるく思あてられ給ひつるとあり又夕顔花を美人にたとふる事秘說あり

てもあてはかにゆへつきたれは　娥妍日本紀

うるさし　むさしあふみさすかにかけておもふには

　とはぬもつらしとふもうるさし

はうさうのことを　病者

やうめいのすけなる人のいゑになん

伊行釋云諸國介也源の人のなる官也、權記云藤原常直申揚名介云々然者不レ限ニ源氏人一歟奧入云此事源氏第一難儀也非可勘知事抑往古除目に揚名介あるへしと見えたり其家になるへき道理なし此事家々所稱闌菊各々不究淵源當流兩家深奧之說依爲殊祕說在ニ口傳一焉

ことこのみて　或好事者募以ニ錢帛一孝經序

はらから　腹族　兄弟也日本紀

たゝうかみに歌をかく事　可勘ふところ紙ともいふ也

よりてこそそれかとも見めたそかれにほのほの見ゆる花の夕顔　花容カホ　無心萬葉

　此歌五文字おりてこそとかける本あり、さてこそ花を折にも又車よりおるゝ心にもかよひたれといふ義もある歟然而古本に皆よりてこそとありほのほのみつるとあるもちかづきてこそそれともみゆれといふなり

あまえて　遮アマエテ

御さきのまつ　御前松明

ほたるよりけに

　ゆふされはほたるよりけにもゆれとも光みねはや人のつれなき古今

けには勝也或又賢也螢よりまさりてもゆるなり、異ケニ萬葉伊勢物語眞名本　これはことにと云心歟　異計ケナルハカリコト日本紀

あさけのすかた

朝明形　又且開容儀萬葉

わかせこかあさけのすかたよくみすてけふのあひたを戀くらすかも萬葉
あさからすいたくなきそわかせこかあさけのすかたみれはかなしも
なかがきのかいまみ
冬なから春のとなりのちかけれはなかかきよりそ花はちりける古今
しひらたつものかことはかり
延喜式 褶（シヒラ）覆レ袴之衣也、内藏式云駕輿丁褶（ノシハモ）勘文
榮花物語云女房四五人はかりうす色のしひらかことはかりゆひつけたり しひらはうはもなり
人のかほこそいとよく侍しか 佳人（カホヨキヒト）日本紀
ねひたれと すこし年老たる心也 年預人（ネビヒト） 同事也 調（ネビ）行
心あはすたゝしくて 周章 燰也
なけのふてつかひに ないかしろなり
秋にもなりぬ人やりならぬ心つくしに
木のまよりもりくる月のかけみれは心つくしのあきはきにけり古今
人やりのみちならなくにおほかたはいきうしといひていさかへりなん同

なのめならむは なべてならんなり
すきかて 難過也
しをんいろのおりにあひたるがうすもの、裳あさやかにひきゆひたる
世の常にはしをん色の裳と心得たる也、僻事也、しをん色のおりにあひたると讀みきるへし紫苑色のきぬにうすもの、裳也紫苑色とは面はうは裏は萌黄也
もの、なさけしらぬ山かつも花のかけにはなをやすらはまほしきにや
大とものくろぬしはそのさまいやしいは、薪おへる山人の花の陰にやすめるかことし古今序
なかや 中屋 俗に中居といふ也やゐ五音通する也
たち花の寺のなかやにわかゐねしうなひはなりはかみ（髪こひきさるイ）あけつらん萬葉十六
あなかまとてかく 手搔也
うちはし 打橋
せの山にたゝにむかへるいものやまことゆるすやもうちはしわたす
かつらきの神こそさかしくしをきたれ

しろきあはせうすいろのなよゝかなる

薄色　柔

心はみたるかた　心有かた也　よしあるをよしはみなといふかことし、はみはよみつくる字也はみはてには也

みたけそうし　みよしのゝみかねのたけ萬葉十三短歌　あさもよひきの川上をけさみれはかねの御嶽に雪ふりにけり明玉集　御嶽は金峯山也清少納言枕草子云あはれなるものわかきおとこのみたけしやうしんしたる定たる人くしたるもあはぬよなく隔るをはくるしきことにこそおもふへかめるをことのほかにきひしくへたてなしてひとりゐてうちをこなひたるあかつきのぬかのはといみしくあはれなり

ぬかつく額突稽首也額拜也

あひおもはぬ人をおもふはおほてらのかき餓鬼のしり(ろイ)へにぬかつくかごと六帖　地祇布之豆額拜可加良受(クニツカミフシテヌカツクカヽラス)毛(モ)萬葉

あしたの露にことならぬよをなにをむさほる身のいのりにかと

居二累卵之危一而圖二太山之安一為二朝露之行一而思二傳世之功一蘇子曰人生一世若三朝露之託二於桐葉一耳其而幾何豈不惑哉云々後漢書列傳三十九王充傳七十而致仕　禮法有二明文一何乃貪レ榮者斯言如不レ聞レ可　可憐八九十　歯落双眸昏　朝露貪名利、夕陽憂子孫白氏文集秦中吟

南無當來導師とそおかむなる

金剛藏王は過去釋迦、現在觀音、當來彌勒也、彌勒出世之時地にしくへき金をまもり給ふ神也、仍みたけ精進に彌勒を禮する歟、彌勒は釋迦の付屬をうけて一生補處菩薩とす第一滅劫のはしめに下生し給て成佛して三會に法を說給へき故に當來導師とは申也

うはそくかをこなふ道をしるへにてこん世もふかきちきりたかふな

涅槃經云若有善男善女人諸根完具受三歸依是則名為優婆塞又曰若受三歸及一戒是名一分優婆塞、優婆塞は俗なから佛弟子に入る人也比丘比丘尼優婆塞優婆夷是を四部弟子といふ也

うはそくかをこなふ山のしゐかもとあなそはそは

しとこにしもあらねばうつほ物語
長生殿のふるきためしはゆゝしくてはねをかはさむとひきたかへて
七月七日長生殿夜半無レ人私語時在レ天願作ニ比翼鳥ー在レ地願爲ニ連理枝ー長恨歌
みろくのよをかね給ふ　從ニ釋尊入滅ー至ニ慈尊出世ー隔ニ五十七倶胝六十百千歳ー往生要集新婆娑意彌勒下生經云將來久遠劫於此國界成佛と說り
こちたし　おほき心也
いさよふ月にゆくりなくあくかれんことを
やまのはにいさよふ月をいてんかもまちつゝをるによそ更にける萬葉
いさよひの月十六日の月の山のはに月しろあかりて出やらぬを云也といへり、これは十五夜のあか月なれば十六日の月といはんもいたく不違歟、但能因歌枕にもいさよふとは山のはにさしいつる月をいふといへり但いざよふはいつれもやすらふ義也猶豫とかけり
もののふのやそうち川のあしろ木にいさよふなみのゆく衞しらすも萬葉
君やこむ我やゆかんのいさよひにまきのいたともさゝすねにけり同
かくらくのはつせの山のやまきはにいさよふくもはいもにやあるらむ
これらもやすらふ心也、或說にはいさよふはいさなふなりさそふ心也云々然るにいさなふと憶によみたる證歌未勘出いまの歌万葉には不知夜歷とかけり强十六日に限らさる者也
ゆくりなく　不意ユクリナク日本紀卒爾同、水原抄云とりあへぬ心歟案之不意の義はとりあへぬ心歟思やりもなき也又卒爾も今の心には叶歟
なにかしの院　河原院歟五條よりそのわたり近きなにかしの院とあれは也六條坊門萬里小路坊門南萬里小路東京極御息所先蹤歟　彼院左大臣融公舊宅也又號六條院後宇多院御跡也、延喜御記曰此日參入六條院此院是故左大臣源融朝臣宅也大納言源朝臣奉進於院
あつかり　諸院に別當預あり、御記云天曆七年閏正月廿八日令レ請ニ小野之盛ー爲ニ院ノ冷泉院　預ー事仰依レ請以ニ之盛ー令レ補レ預
すこし　本の儘
けいめい　おとろきてなと云詞也一說經營歟めとゑ

五音横通字歟蜻蛉日記にもおさなき人けいめいしてとあり
しもけいし　下家司
おきなかかは　にほとりのおきなかかははたえぬとも君にかたらふことつきめやは萬葉　或云おきなかかはとは名所也、おきな川ともよめり　水原抄云汀ミギハ、枝川はひることあれと本體の川沖中は絶ることなし、それかごとく君にかたらふことつきめやはといへる歟是正説也
木立いとうとましくみな秋ののらやうにて
里はあれて人はふりにしやとなれや庭もまかきも秋の野らなる古今
へちなうのかたにそさうし曹司局也なとして
李部王記天慶三年十一月廿七日巳尅冷泉院別納所失火　此外諸院多在之、別納は別に建たる屋也別納にて大饗をこなはれたる事おほし小寢殿也
けうとく　氣疎　又氣外
たよりにみえしえにこそありけれ　緣
光ありとみし夕かほのうは露はたそかれときのそら舊めなりけり

此歌源氏を光ありとみしかいまはそらめにて有けるとそしりたる様につねの人心得たるにやさにはあらずさきに心あてにそれかとそみるといひしは源氏かとみしれりと云心也それをこゝにいひいたして露の光やいかにとゝはれたるにあなかちにつつむけしきなる女のかたよりさしすきていひしりけると思てその人かとみしはそらめにてありけりとおほめきたる心也
そらめをそ君はみたらし河のみつあさしやふかしそれはわれかは拾遺伊勢
あまのこなれは　しらなみのよするなきさに世をつタイくすあまのこなれはやともさためす海人歌
あいたれたり　あまえたるやうなる躰也
われからなり　あまのかるもにすむむしの我からとねをこそなかめよをはうらみし古今藤原直子朝臣
つと御かたはらに　集日本紀
そひふし　副臥
たちをひきぬきて　横刀日本紀
山ひこのこたふるも　山孫ヒコ
うち佗てよはらんこゑにやまひこのこたへぬ山は

あらしとそおもふ古今
六帖つれもなき人をこふとてやまひこのこたへするま
てなけきつるかな
あせもしとゝに　伊勢物語にみのもかさもとりあへ
でしとゝにぬれまとひきにけり、秋きりにしとゝ
にぬれてよふこ鳥さほの山邊になきわたる也
ひるもそらをのみみつる物を
病者のそらをみるは死相の一なり云々
いとおしと　憐
うへわらは　殿上童
われかのけしきにて
夢たにもなにともみえすみゆれともわれかもまと
ふことのしけきに萬葉
案之此歌詞不叶古今に我か人かと身をたとる世に
此歌の心歟
たきくち　瀧口在御所近邊寛平夜ﾚ置ニ衆十八ー廿人隨ニ時儀ー無ニ内官ー有ニ饗食ニ追ﾚ月奏西宮抄ニ見ユ
ゆつる　弓弦　あつさゆみするのゝ原にとかりする
君かゆつるのたえんとおもふな萬葉
火あやうし　誰何ヒアヤウシ火行史記
本朝文粹云夜行翁夜々警ニ火舊府中ー呼曰ニ火危彼
誰河ー源順夜行舍人鳥養有三歌
うちをおほしやりて名たいめんはすきぬらんたきく
ちのとのゐ申いまこそとをしはかり給はまたいたう
ふけぬにこそ
亥一剋侍臣名對面自延喜元年延　同亥一剋侍臣奏之、後瀧
口武士名對面事、延喜九年正月廿日藏人源揚宣
旨云候ニ瀧口ー輩三ヶ夜以上無ﾚ故不ﾚ參早預ニ着到ー
宜ﾚ待ニ後仰ー矣
まろ　丸と云名むかしあまたあり且又男子通稱たる
歟公卿補任にも大寶の比高市朝臣麿石上朝臣麻呂
紀朝臣麻呂なととて時に其數あり藤氏四家にも京
家始左京大夫麿云々又何丸といふ名不可勝計、續
日本紀にも多見えたり上古は人の名字しとけなく
て我とさためてつきたるもあり又後人の喚つけた
りと見ゆるも有也名字たしかならさる物をよそよ
り麿といへるもある歟姓氏錄にも柿本氏に先祖に
麿とてあるに又子孫にも丸ありさのみ父子同名は
あらじとおはゆる也いまの丸も所をえたる人の通
稱につきて名のりたる歟孝經にも子は孔子也師一
而已といふかことし

(頭註)高向麿　巨勢麿　石上丸　阿倍倉橋麿　蘇我山田石川丸　多治比令丸以上公卿

むかし物語などにこそかゝる事はきけと

寛平法皇與ニ京極御息所一同車渡ニ河原院一歷ニ覽山川形勢一入レ夜月明令レ取ニ下御車疊一爲ニ御座一與ニ御息所一被レ行ニ房内術一之間開ニ塗籠之戸一有レ出レ聲法皇令レ問給對云融候欲レ賜ニ御息所一法皇答云汝在生之時爲ニ臣下一我爲ニ天子一何得レ出ニ此語一乎早可ニ退歸一者靈物抱ニ御息所御腰一半死前駈等皆候ニ中門外ニ御聲不レ可レ及レ達牛童頗近侍喰ニ御牛一召ニ件牛童一令レ召ニ人々一差ニ寄御車一令レ乘御御息所顏色無レ之不レ能ニ起立一之扶抱乘 還御之後召ニ淨藏大法師一令ニ加持一纔蘇生 云々法皇依ニ先世之行業一爲ニ日本之帝王一雖レ避ニ寶位一神祇奉ニ守護一追ニ退融靈一也件戸面有ニ打物跡一江談

おかきみ　我君歟　我子をあこと云ふ

けはひ物とをくなりて

人のたましゐに魂魄の二類あり、三魂は肉をまもる魂也天人の姿（形イ）也五陰離散すれは遠はなれゆく隔生の魂也、七魂は屍をまもる其形鬼神のことし五六歳はかりの物にて小神通あり是を無想法身と習也十三年に本有に歸する也十三年迄は屍にそひて居たる也、されば魂去り魄とゝまる程になつかしき氣遠さかり物おそろしくなる也

南殿のおにのなにかしのおとゞをひやかしけん

世繼云此殿貞信公也いつれの御時とはおほえ侍らすおもふに延喜朱雀院の御ほとにこそは侍りけめ、宣旨うけ給はらせ給てをこなひに陣の座さまにおはしますみちに南殿の御帳のうしろのほどとをらせ給に物のけはひして御劍のいしつきをとらへたりければいとあやしくてさぐらせ給に毛はむくむくとおひたる手の爪なかく刀のはの樣なるに鬼なりけりといとおそろしく思食けれど、おくしたるさま見えじと念せさせ給て、おほやけの勅宣うけ給てさためにまいる人とらふるはなにものそゆるさすはあしかりなんとて御太刀をひきぬきてこれか手をとらへさせ給へりければ、まとひてうちはなちてうしとらのすみざまへまかりけり大鏡

むくむくし　蠢也

松のひゝきこふかくきこえてけしきある鳥のから聲

になきたるもふくろうはこれにやとおほえ給
梟古堯反　說文に云食ニ父母一不孝鳥也
梟鳴ニ松桂枝一狐蔵ニ蘭菊叢一蒼苔黃葉地日暮多ニ旋
風一 白氏文集凶宅詩 からころはものとをくからひたるやう
なる歟可勘
火はほのかにまたゝきて
燈のかすかにひらめくは人の目たゝきに似たり
云々一說未レ曉也篝事歟
ありかさためぬ物にて
真本 かせのうへにありかさためぬちりの身はゆくへも
しらすなりぬへらなり
ちとせをすくす心ちし給ふ
いはぬまはちとせをすくす心ちしてまつはまこと
に久しかりけり　奥入云此歌近代歌歟不足此證歌
後拾遺現存作者隆方歌也
れいならぬ御心ち　不例
よゝとなきぬ
君によりよゝよゝよゝとよゝよゝとねをのみぞな
くよゝよゝよゝと
とみの事には　急事歟　俄なる心也　伊勢物語云し

はすはかりにとみの事とて御文あり、おとろきて
みれは歌有老ぬれはの歌也
しはしみぬる人こそ
くるそく　眷屬
みつはくみて　支離　日本紀曰水神罔象女罔象此云
美都波伊弉諾尊所生神也髪白已老嫗體也と云へり
としふれはわかくろかみもしらかはのみつはくむ
まて成にけるかな 後撰檜垣女　一說としよりぬれはこし
かかまりせくゝまりて二の膝とかりいてたる中に
かしらましはりて、三の輪をくみいれたるかごと
く也云々
かこかに　俗にかご／＼としたると云心歟四園とも
いふかこめる心也
うはむしろにをしつゝみて　類聚國史云弘仁八年八
月從三位橘朝臣常子薨延暦年中授從四位下宮車晏
駕出家爲レ尼太上天皇敬ニ重之一叙ニ從三位一及ニ于病
篤一遺言氣絕則以レ席裹葬莫下須ニ時日一棺斂上薨時三十
しはふきやみ　十娘曰兒近來患嗽（シハフキヤミメ）聲音不レ徹（サハヤカ）遊仙窟
嗽病　咳嗽　咳病
けさはたにおちいりぬ

世中のうきたひことに身をなけはふかき谷こそあさくなりなめ古今　此歌不叶案之鳥部山の谷後拾遺集歌にあり彼心歟

いとむらいにて　無禮也

うかひたる心のすさみに　荒(スサヒ)毛詩　少　荒淫

すさひはなをさりこと也

いひなすさまことに侍りなと

異也あらぬさまにいひなす也

なとて　爭　伊勢物語眞名本

とりへのかたみやりたるも　山城國風土記云南鳥部里稱二鳥部一者秦公伊呂具的餅化レ鳥飛而居二其所森一之鳥部、とりへ山たにゝけふりのもえたつははかなくみえしわれとしらなん拾遺

ことう　小堂

こゑたてぬ念佛　萬歳身後抄云喪家佛事次第葬送以前無言念佛以二歸立之剋限一佛事勤レ之、佛經供養事歸(野イ)立之時葬送以前之日數雖二何ヶ日分一今夜可二勤累一也

無言念佛得二十五功德一之由見二聖教一

寺々のそやも　諸寺初夜後夜の長講とてをこなふ也、循(修イ)習善法無令(念其イ)失時初夜後夜亦勿有廢中夜誦經以自消息遺教經

きよみつ　千手經云不爲非分自害死誦持大悲神呪、緣起云清水寺者在山城國愛宕郡八坂鄕東山之上矣、(ニイ)千手觀音靈驗之地、行叡居士孤庵之跡也寶龜十一年初建二立草堂一彫二刻本尊一延曆十七年七月二日更改二造大佛殿一大同二年又造二閣伽藍一法號北觀音寺堂前之額清水寺題大門之額延曆廿四年十月十七日給二太政官符一界二寺領四至一東限二高峯一南限二尾振谷一西限二公田一北限二大道一此佛殿以二坂上田村麻呂私宅一寄二附沙彌賢心一號二延鎭一云々坂大納言建立記略之

大とく　大德日本紀　肅宗制二天下名山一置二大德七人一僧之官也云々

つゝみのほと　陂堤也　蓄水曰陂音碑記註禮纂要云築土遏水曰塘音唐　亦謂之堤音低字亦作隄也

かゝる道の空にてはふれぬべきにや　覊也　放埓也

貞文日記　たちてゆくゆくゑもしらすかくのみをみちのそらにてまとふへらなる

古今にも身はすてつ心をたにもはふらさしとあり

河のみつにて手をあらひて

優婆塞戒經中流洗手文あり可勘入
ふくいとくろくしてかたちなとよからねどかたわにみくるしからぬわかうとなり
清少納言枕草子にふくいとくろき男のしらはりきたるとあり、源光行俊成卿に申談して此物語の何をきり聲をさしける時こゝにいたりて筆をおさへて、右近初參の時分是又隱密の事也着服不可然と申されけるに、清少納言枕草子にもありとてすみて聲をさゝれけり此事を知らさる人々服之義を云歟ふくりとくろき也いとりと五音横通の字也いつれも通用常のことなり、たとへばふくらかにて色黒也、着物(イト)によりて容の善惡をかくへからざるなり、一說服最黑歟、主君の服を着事枇杷大納言延光一生之間着ニ村上天皇御服一不レ憚出仕云々此等例歟俊成卿女阿佛禪尼なと此義を云けり中院事書にも猶服の義を存する歟如何
うちよりの御使あめのあしよりもしけし
しけき事をは如雨脚と詩にも作れり
七日七日に佛かゝせても
七日七日佛事經文多也、地藏菩薩因縁經十輪經等にことに說たるなり
すみわひ給て山さとに
(後)すみわひぬいまはかきりのやまさとにつまきこるべき宿もとめてん
すみわひぬいまはかきりのやまさとに身をかくすべき宿もとめてん 伊勢物語
西の京にめのとの住はへるところに
東京西京、東者左京西者右京也、弘仁十年十一月五日符左右職各置職二員
いゑはと　鴿 和名云伊倍八止 本草云頸(頭イ)短灰色也
いとしも人にと　おもふとていとしも人になれさらめしかならひてそみねは戀しき 拾遺
すくよか　健 菅家萬集
女はたゝやはらかに
陽體剛強自在陰柔順從レ陽婦人有ニ三從之禮一無ニ自專之義一 五行大義第二第三論德
まさになかき夜と
八月九月正長夜千聲万聲無止時 白氏文集
ますたはまことになん
ねぬなはのくるしかるらむ君よりもわれそますた

のいけるかひなき
うつせみの世はうきものとしりにしを
うつせみの世はつねなしと知るものを秋かせさむ
みしのひつるかな萬葉一家持
しにかへりおもふこゝろは
たかやかなるおきにつけて
後撰左大臣小一宮あき大輔かうつまさのかたはらなる家
に侍りしにおきのはに文をさしてつかはしける、
山里のものさひしさはおきのはのなひくことにそ
おもひやらるゝ
こりすまに又もなきなはたちぬへき御心の
こりすまにまたもなき名はたちぬへし人にくから
ぬ世にしすまへは古今
四十九日ひえの法華堂にて
李部王記云天慶八年正月十八日乙卯、戌時室正五
位下藤原朝臣寛子卒年四十二月八日當三七日一於二
叡山東法華堂一修二諷誦一布施名香一褁僧施錢萬百
文たかむらか日記云このおとこ涙つきせすなくそ
の涙を硯の水にて法華經かきてひえの三昧堂にて
七日のわさしけり法華三昧堂在止觀院西　弘仁三年壬辰

四月五日結構秋七月上旬土木之功甫就移二行法華
長講一延暦寺緣起文全篇依繁略之
もんさうはかせ　文章博士
くわんもんつくらせ給　願文日本紀
清和天皇貞觀九年十月勸學院南邊更建一院號延命
院乃至自製願文詞多不載焉身つから願文を作る事
此等の例歟
このほとまてはたゝよふなるをいつれのみちにさた
まりて、中陰四十九日まては中有にたゝよふ心なり
亡者六道輪回未定之間造佛造經出迷津と云經文に
あり
かことにおちて　かこつけにおちて也
おなしこと　如く也
わかきみ　玉かつらの事也女子をも若君と云ふ年若
　心也
ほうし　法事
たむけ　嚮禮　又醮禓餞別送物也　又云手向、或醉祭禮具也
ぬさ　秡麻羈中にては道祖神にたむくる故に是を旅人の送物に古來しけるなり
　この度はぬさもとりあへすたむけ山もみちのにし
き神のまにまに菅家　黄帝四十餘子あり最末の子旅

行の遊を好て敢不レ留ニ于宮中ニ云々遂に旅遊ニの道にて死ぬ其時誓曰吾爲神旅行の客をまもるべし其名を遊子と號す今の道祖神是也人の旅に赴く時餞送といふ事は此故也餞送の所をは祖席とも云此道祖神を世俗にさへの神とも號す又手向の神ともいふなり

おかしきさまなるくしあふきおほくして

帥隆家くたりの時中宮よりはなむけに扇をつかはしける、すゝしさはいきの松原まさるともそふるあふきのかせなわすれそ

あふまてのかたみはかりと見しほとにひたすら袖のくちにけるかな

逢まてのかたみとてこそとゝめけめなみたにうかふもくつなりけり古今

せみのはもたちかへてけるなつころもかへすをみてもねはなかれけり

ありしうす衣に冬の裝束をそへてつかはしける歟

仍立かへてけると云ふ歟

けふそ冬たつ日なりける

過にしもけふわかるゝも二道にゆくかたしらぬあきのくれかな　齋宮女御集に

すきにしもいまゆくすゑも二みちになへて別のなき世なりせは　此歌同心也、物語歌古歌に相似たる例多し或又古歌をとりて今よみたるやうにかける事もあり伊勢物語なとにもみえたり、空蟬卷に註付り

物いひさかなきつみさり所なく

こゝにしもなにゝほふらん女郎花人の物いひさかにくき世に古今

河海抄第三

正六位上物語博士源惟良撰

第三　若紫

巻名　てにつみていつしかもみむ紫のねにかよひける野への若草

わらはやみにわつらひ給て　巻頭詞瘧病(クラハヤミ)　痁俗云發心也

瘧　瘧疾二日一度發也

きた山になにかしてらといふ所に　向南山萬葉

萬きた山にたなひく雲のあをくものはしわかれゆき月も別て

此寺鞍馬寺歟昔は四十九院ありけり佛法盛地也云々河原院をなにかしの院と云同躰也

六帖歌にさゝなみやしかの山ちのつゝらをりくる人たえてかれやしぬらん

此歌につきてつゝらをりは志賀寺かといふ説ありひか事也鞍馬のつゝらをり清少納言枕草子に見えたり鞍馬寺事舊記云

從四位下巨勢丸子武智丸孫治部大輔藤原伊勢人桓武天皇御宇造東寺行事之間所騎用馬於鴨河原放失尋跡行登北山奉拜毘沙門天始建立此堂寺云々水鏡云延暦十五(六ィ)年藤原伊勢人と云人きふねの明神の御をしへにてつくり奉りしなり

しゝこらかしつる時はうたて侍るを

爲發(シナコラカス)或起　世俗にしそひらかすといふやうなる心歟

めしにつかはしたるに老かゝまりてむろの外にもまかてすと申たれは　老死(オヒカヽマル)白氏文集　老屈(カヽマル)

圓融院惱痁疾御時召天台座主慈惠僧正奏老病無術之由不參再三之後隨召參入奉加持即滅御云々

三月つこもりなれは　やよひとよむへし自餘の月同之定家卿説

京の花さかりはみなすきにけり山のさくらはまたさかりにて　ふるさとの花はちりつゝみよしのゝ山の櫻はまたさかりなり赤人

里はみなちりはてにしを足引の山の櫻はまた盛なり躬恒

ぬといふ心也

ところせき御身にて　ひろき心也云々所もせきあへ

ふかきいはほの中にそひしりゐたる

いかならむ岩ほの中にすまはかは世のうき事のきこえこさらむ古今

佛弟子須菩提住ニ西天石窟一吳苑云陳思王遊ニ漁山一忽聞ニ岩裏有ニ誦經聲一清遠寥亮使ニ解レ音者寫レ之爲ニ神仙之聲一道士效レ之作ニ步虛一　寒山詩云余家有ニ一窟一窟中無ニ一物一

けんかたのおこなひも　驗方　修驗也

さるべきふんつくりてすかせ奉る　狩　すかせはのまする也世俗に飲いるゝをすきいるゝといふなり

たゝこのつゝらをりのしもに　盤折通嚴巔 白氏文集遊悟眞寺詩　隧陝　或九折　清少納言枕草子とをくてちかきものくらまのつゝらをり

きよけなるやらうなと　屋廊

なにかし僧都　覺忍僧都號北山僧都見榮花物語

しりへの山　門前秋水後秋山終日蕭々晩望閑紀納言長谷雄卿作

ひとのくに　他國といふなり異朝事にはあらさるなり人の國にはひにゆきてたちのおもまたとかされはよそ明にける萬十二　伊勢物語云人の國にても猶かゝる事なんやまさりける

ふしの山なにがしのたけ　大峯釋迦嵩歟富士山に對揚せるたかき山也云々

なにのいたりふかきくまはなけれと　阿曲　又隈

ゆほひかなる所に侍る　寛　ひろき心也　地窄虛空寛白氏文集

みよしのゝおほかは水のゆほひかにあちぬものから浪のたつらん

さきのかみしほちのむすめ　明石入道也　新發意は初て入釋門人名也初發心の義也經に新發意菩薩といふかごとし

いといたしかし　片腹痛はとなりといふなり

いてたちもすへかりける人の　出身也身をも立出仕をもすへかりける也

いままでに出立ぬ身はもゝ敷の宮のさくらをみてややみなん躬恒集

近衞の中將をすてゝ申給けるつかさなれと

藤原實方朝臣長德元年正月十三日辭左中將任陸奧守即日還昇此外例猶可勘也

かのくにの人にもすこしあなつられてか　あなつられたる也

なにのめいほくにてか　面目

すこしおくまれる山すみをもせて　奥（ヲクマル）日本紀　文選に奥ノ字をふかきとよめり　聚雲（アツマルクモ）奥詞等也是も山ふかき心なり

さいつころ　近曾　萬葉にをとゝひのさいつころ歟とあり一昨日のさきなり

そこらはるかなる　幾多（ソコラ）日本紀　多同　若干（ソコハク）同心歟

になく　無二

けしうはあらぬかたち心はせ　操　心操風操皆同心也　いさゝめに時まつまにそ日はへぬる心はせをは人に見えつゝ

くら人よりことしかうふりえたる也けり　巡給心也

推古天皇十一年十二月戊辰朔壬申始制冠位十二階各有差十二年春正月戊戌朔始制冠位於諸臣各有差是叙位始也　是故比准八義宜制爵位其孝者天也紫冠爲一忠者日也錦冠爲二仁者月也繡冠爲三悌者星也纒冠爲四義者辰也緋冠爲五禮者聖也深緑爲六智者賢也淺緑爲七信者神也深纁爲八祇者祇也淺纁爲九其地者母也因號立身黄冠爲十自今以後永爲恒式以上先代舊事本記

かうふり給ふとは爵を賜也五位より爵位の初也本紀に見えたり凡一位より初位まて合て九の品あり其中正従上下を分は三十階也五位以上は勅受とて君よりさつけらるゝ位なり六位七位は奏受とて大臣以下相はからひて奏聞するなり八位初位は判受とて奏聞まてもなくて大臣以下相計也初て五位に叙するを叙爵とも冠給ともいふなり惣は三十階の名にわたれともこれは初たる所を云也

就中昔は絹笠といふものを冠にす品にしたかひて色々の衫あり大織冠なとは其時の正一位にあたるなりその後に一位二位といふ事は出來る也又今の漆（ウルシ）ぬりの冠を着する事は淨御原天皇御代よりはしまるなり

よきわかうとわらは　若人童也

なさけなき人になりてゆかは　のち〳〵の國可の事をいふなり

素寂はにの字を止て丁見をくはへたり不足信用也

ちふつすへたてまつる　持佛

いぬき　犬公　上東門院の上童に此名あり榮花物語に見えたりこの物語にもあてきなれきとありきは公の字也又君　世俗にあねき、をはき、なといふもあ

ね君をは君といふ心なり
内裏女房の結番に上臈をは何局中下臈をは何君と
かゝるゝ也
つねにかゝるわさをしてさいなまるゝこそ
事(ワサ)日本紀又論語　態(文選)同
すゝめのこしたひ給ほとにつみうることく
籠繋飛鳥沙彌戒經
つらつきおもやう(面様)いとらうたげにて　頰(ツラ)　勞(ツキ)　亮(ラウタシ)日本紀
ほけほけとしたる貌なり
うちけふりいはけなう(稚)　うちけふりはにほいやかなる心歟薫(かほる)也
ねひゆかん　調行(ネヒユク)
かみつやつやと　嚴　又光
おひたちんありか(在所サイ)もしらぬわか草をおくらす露そきえむそらなき
稚草日本紀　をくらすはおくらかすなり露を我身によせたるなり
よきりおはしましける也　過　すきをはしましけるなり
うれはしく　憂

草の御むしろも　そのかみのいもゐの庭におまれりし草のむしろもけふやしくらん樹下集
天台大師の御忌日に慈惠僧正之詠被千僧饗一心也
草座　菩薩共同事也
いふかし　未審
按察大納言　養老三年始置按察使
のちのよのことのふかきなと聞えしらせ給に　ふかきとは
泥梨底心なりと水原抄に釋せり然共只後世の深意をときて演説する心歟
なかなかのさかしら心なく　進(サカシラコヽロ)心萬葉
古今　さかしらに夏は人まねさゝの葉にさやく霜夜を我獨ぬる
六帖　秋の野にゆきて見るへき花の色をたかさかしらに折てきつらん
たきのよとみもまさりて
瀧つせのなかにもよとはありてふをなとわか戀の淵せともなき古今
すゝのけうそくにひきならさるゝをと
枕草子云よひの僧のこと　すゝのけうそくなとに

あたりてなりなりたるこそ心にくけれ
すこしそきて　退也
佛の御しるへはくらきにいりても　從冥入於冥　永不聞佛名法華經
あさはかなりと　あさくはかなき心歟
ところせうをしはかられて
以前の所せうには聊かはるへきか如何是ははるかなる心に云歟
法花三昧をこなふたうのせんほう〈懺法〉の聲　三昧は梵語也此云正受又名正見法華懺法南岳大師所〈智者イ〉行法門也
さしくみに袖ぬらしける　さしよりになりやかてと云心也
〈後撰〉いにしへの野中の清水見るからにさしくむ物は涙なりけり
にしきをしけるとみゆるも
花のかけにしきをしけることよひかなたゝまくおしき庭と見えつゝ元輔集或躬恒
こしん　護身
かれたる聲のいとひたうすきひかめるも
齒落ぬれは聲のすくなりひかめるとは老人の聲調子にのきたる心歟
あはれにくうつきてたらによみたり　陀羅尼は梵語也飜云之總持歟
うとんけの花まちえたる心ちしてみ山さくらにめこそうつらめ
天台云優曇華三千年一現々則金輪王出云々
文句云優曇華者新云鄔曇鉢羅飜爲瑞應華金輪王出海水減少金輪路現此花乃生作金輪王之先兆又云靈瑞華似蓮華故云疑云法華無量劫難聞譬如々々者有所以若三千年此華現者何爲靈瑞乎答云一義云此華開時分歷三千年歟每三千年兆云出現案之優曇華は輪王出世の瑞也故號靈瑞華人壽八萬歲時節金輪王遶四州其時海水半減するにりて此花出現する也是を光源氏を待えたるによそへたる也詞に時〈ミイ〉ありて一たひ開くなるとあるも法花の久遠時一現の心也
御まもりにとこたてまつる　獨鈷也
僧都さうとく太子〈聖德〉のくたちよりえたまへりけるこん〈金〉かうし〈剛子〉のすゝの玉のさうそくしたる　本朝神仙傳江師匡房撰曰上宮太子者用明天皇之子也母后妃嘗〈ムカシ〉夢

有二一金人一曰欲下託(タクシテ)二君胎(タイ)一以弘佛法上誕生之後自二少小吃一聖德被二天下一神異(イナマチシ)遍二海内一遣(ツカハシ)二小野妹子於唐朝一渡二先身持經一取二他經一來太子閉レ戸入定一旦賫二眞經一而出曰吾遣二魂神一所二賫渡一也、半日之間渡二萬里滄溟一後彼山僧曰某日金人乘レ空來取二此經一聖衆圍遶雲霧杳冥(ヨウメイ)略抄　欽明天皇御宇聖德太子六歳冬十月自二百濟國一經論律師禪師比丘尼以下を始て種々の寶物をたてまつる云々但太子金剛子念珠事傳以下に無所見云々或人云法隆寺太子の御たからものゝ中に念珠兩三連今にあり其中金剛子念珠一連あり又彼寺の縁起にも見えたり云々

すきたる袋にいれて　萬葉に婆利袋われはたはりぬすりふくろいまはえてしか翁さたせんとありはりは玉也すり袋はすき袋也きとりと五音相通の響也

五葉の枝につけてこんるりのつほに御くすりとも入て

貴布禰は鞍馬寺の鎭守也鞍馬貴布禰の中間に僧正谷と云所あり藥師佛不動尊靈驗の地也藥師佛の右の御手に紺瑠璃壺を持しめ給僧都の送物に此壺に藥を入て奉るも醫王の藥におもひよそへたる也

御をくり物　贈物　雲衣范升羈中贈風檣瀟湘浪上船 朗詠

たゝいまは　向來(タヽイマ)遊仙窟

頭中將とよらの寺のにしなるやと

可津良支乃天良能末江名留也止與良乃天良乃爾之奈留也江乃波井爾之良太方之津久也之良太末志津久也於止於之止々「之」(イナヽ)可々天波久爾曾左可江无也和伊戸口曾止美世無也於々久止々と无長止於々久長止長止催馬樂呂葛城

ひちりきふくすいしんさうのふえもたせたるすき物

篳篥在末摘花卷笙說文曰笙十三簧象二鳳之身一吳曰列管以象鳳翼也或曰鸞翼鳳音　爾雅曰夫笙謂之簧郭璞曰列管匏中施二黃管端一列仙傳曰王子喬(ケン)好吹レ笙作二鳳鳴一鸞鳳類故通言之李嶠笙詩曰形寫二歌鸞翼一聲隨二舞鳳哀一

僧都琴をみつからもちてまいりて

琴操曰伏犧作長三尺六寸六分也象二三百六十六日一也廣六寸象二六合一也又上曰二池下一曰二岩池一水平也前廣後狹卑尊也　上圓下方法二天地一五絃象五行也大絃君也寬和而溫小絃臣也淸廉不亂文王加二二絃一合

君臣恩也、宮爲君商爲臣角爲民徴爲事羽爲物也、琴書曰自堯相傳善琴者八十餘人有八十餘樣雖少有差大體相似皆長五尺六寸法ニ朞(ミイ)之數ニ也上圓而欲象天也下方相平法地也十三徽配十三律餘一象閏也本五絃宮商角徴羽也加二絃文武也至後漢蔡邕又加二絃象九星在人法九竅、淸御原天皇吉野宮にて日暮に琴を彈し給ひけるに前岫のもとに奇雲聳神女降て曲につきて袖をあくる事五回天皇の外餘人不見歌ていはく　をとめこかをとめさひすもからたまを袂にまきてをとめさひすも是五節濫觴也在乙通女卷

此器曲上古渡來本朝之條勿論允恭天武以下令彈給之由見日本紀其後延喜の比までも間彈人在之歟中古以來樂曲斷絕云々、此器今相殘當家者也　又白虎通曰琴者禁也禁迫於邪氣以正人心也云々此心によらは源氏わらはやみの時分といひひしりの詞にも御物のけなとくははるさま也といへり僧都琴をわなかちにすゝめ申も若有心歟

山の鳥もおとろかし侍らんと　　瓠巴鼓ニ琴瑟ニ鳥舞而鳴魚躍而遊矣列子　琴書曰師曠晋之樂官也、工ニ於琴ニ能易ニ寒暑ニ召ニ風雨ニ晋平公鼓之感ニ玄鶴ニ六下舞

とはぬはつらき物にやあらむと

後撰　忘ねといひしにかなふ君なれととはぬはつらきものにそ有ける

いのちたにとて

命たに心にかなふものならはなにかは人をうらみしもせむ

ひとそうに　一孫

よとゝもに　代と共なり

面影は身をもはなれす山櫻こゝろのかきりとめてこしかと　留てこしなり非ニ迹(アラズトムルニ)也

夜のまのかせもうしろめたくとあり

後拾　朝またきおきてそみつる櫻花(桜のイ)夜のまのかせのうしろめたさに元眞親王

はかなくおしつゝみ給へるさまなともさたすきたる御目ともにはめもあやに　をしつゝむとはたてふみたるなり艶書をもたてふむ事本儀也堀河院艶書合にもあり

おなし大納言紅のうすやうにたてふみて　年ふれといはてくちぬる埋木の思ふ心はふりぬ戀哉さた

は央也顏師古曰未央猶未半又王逸楚辭註曰央釋さた過たるは半過たる年齢也百とせの半の義歟五十あまりの心歟一說云さたは比也、中さたも中比也さた過は比すきたるなり、たとへはさかりのころ過てなり万葉十一云おきのなみへなみのきよるさたのうらのみのさたすきて後こひんかも是も比比也めもあやにとは一說あやめ同事也云々今案其心かはるべし目おとろく心なり

ゆくての御事は　すきさまの御詞也

なをさりにも　平生遊仙窟

ふりはへ　うちはへなり

これはまたなにはつをたにつゝけ侍らざめれは此詞をつねの人は歌をたにもいまたよますと心えたるにやさにはあらす、古今の序に難波津淺香山の歌をてならふ人のはじめにもしけるといへる事也いろはのちやうに一字つゝかきていまた此歌をたにかきえす。といふなり、さて返事にそのはなちかきなんみまくほしといへるなり

少納言のめのとゝいふ人あへし　あるべしなり

まほならねと　舩に片帆眞帆といふ詞よりおこれり眞ほはまさしくさしあてたるやうなる心なり

ことはおほかる人にてつきつきしういひつゝくれと

詞多品少　方便ツキ〳〵シウ　遊仙窟

そのはなちかきなとあるときこえたりたそのはなちかきなんみたまへまほしき

放書也さきにいふかことくにつゝけすして一字つゝかきたる心なり或說放をは學といふ訓あり其心か素寂說

西圓法師は園花近とよみけり異樣說也

あさかやまあさくも人をおもはぬになと山の井のかけはなからん

古今序　あさかやまかけさへみゆる山の井のあさくは人をおもふものかは

くみそめてくやしときゝし山の井のあさきなからや影をみすへき

くやしくそくみそめてける淺けれは袖のみぬるゝ山の井の水

王命婦　王氏の命婦なり又上古は王姓をも給けるなり

續日本紀曰藤津王等言（少納言正月王也）已父存日作請姓之表之臣男

人女四人雖蒙王姓以世言之不殊匹庶
いかゝたはかりけんいとわりなくて　事計為與（タハカリチセヨ）萬葉四
くらふの山にやとりもとらまほしけなれと
拾遺　すみそめのくらふの山にいる人はたとる〳〵
そかへるへらなる（あかへりきなんイ）
奥入云惣て此歌心更に不叶くらふの山の本歌尤有事故歟未勘出歟今案只暗字によせて夜のおそくあくべき心にや
密通繼母事　則天皇后者初太宗皇帝之妾也後爲高宗皇帝后　光仁天皇后井上（イカミ）内親王通桓武天皇給之由見國史
なきねにふしくらし給
あふこともいまはなきねの夢（つゆイ）ならでいつかは君を
又は見るへき上東門院一條院崩御後の歌也
源氏の君もおとろ〳〵しくさまことなる夢を見給てあはするものをめしてとはせ給へはおよひならうおはしもかけぬすちのことをあはせけり
およひならうとは光源氏天子の親となり給へき兆歟
其中にたかひめありてとは左遷の事歟　毛詩曰下莞上簟乃安斯寢乃寐乃興乃占我夢吉夢維何維熊維羆維虺維蛇大人占之維熊維羆男子之祥維虺維蛇維女子之祥斯干篇 又曰召故老訊之占夢文選曰坪一巫咸作占夢號乃貞吉之元府
この夢あふまて人にかたるなと（きねふなイ）
水原抄曰善悪夢不レ可レ語レ人といふ本文あり其心也云々今案只是穏密之心也不可及本文之沙汰矣
ありしにまさる
伊勢物語
出ていなはたれかわかれのかたからんありしにまさるけふはかなしも
みちのほたしにも
古今
世のうきめ見えぬ山ちへ（にイ）いらんには思ふ人こそほたしなりけれ
まめやかなる御とふらひ
鍛色（マメタチ）遊仙窟　正昔（マメヤカ）同
まことしき也眞實也水原抄に米錢の事也と大和物語を引て釋したれともそれまてもあるへからさる歟末摘花卷にきぬあやわたなと老人のきるへき物のたくひをかやうのまめやかなる事もはつかしけならぬとあり
あしまになつむ船そえならぬ

なつむは泥也えならぬはたゞならぬ也

おなし人にやと

みなといりの蘆分をふねさはりおほみ同し人にや

戀んと思ひし　ほり江（古今）こくたなゝしをふねこきか

へり同し人にや戀わたりなん（るらんイ）

手につみていつしかも見ん紫のねにかよひける野へ

の若草

此歌紫の名の元始也此紫の上の名字先達色々に釋

せりいつれも今案の了見也根にかよひけるとは藤

壺の女御のゆかりといふ也古今に紫の一もとゆへ

にむさしの丶草はみなからあはれとそみるといふ

歌の心也或はむさしのといへはかこたれぬともい

ひ或は露分わふる草のゆかりをともあり權卷にも

君こそさはいへとむらさきのゆへこよなからすと

ものし給ゑれとありみな一もとゆへの義也六條内

大臣（有房）紫は色の最頂也云々佛の相好をも紫磨金

の粧といふ也此物語中第一の美人なるか故に有此

號歟云々是もあまりの入ほかなる歟

なけの御ことばゝ　なをざりの詞也　ないがしろ也

あしわかの浦のみるめはかたくとも

あしわかのうらにきよする白波のしらじな君をわ

かおもふとは

なそこえさらん

人しれす身はいそけとも年をへてなそ越かたき相

坂の關

伊行釋にはなそ戀さらんと云々奥入にはこえかた

きとあり理可然

いさ　牽（伊勢物語 眞名本）

わかきみはいとおそろしう

男女共に若君と號す年若き義也

うつくしき御はたつきもそゝろさむけにおほしたる

を

偏愛（淺語抄）　愛色（遊仙窟）　鷄皮とりはたゝつといふ也

いもかゝと　姝之門（催馬楽にあり）　奥

猿丸大夫集云あひしれる女の家のまへをわたると

て草をむすひていれたりける

いもかゝとゆきすきかねて草結ふ風吹とくなあは

ん日までに

立とまり霧の籬のすきうくは草の戸さしにさはりし

もせし

後撰に女のもとにまかりけるに門をあけざりけれは　秋の夜の草の戸さしの侘しきはあくれとあけぬ物にそ有ける兼輔朝臣
女返し　いふからにつらさそまさる秋の夜の草の戸さしにさはるへしやは
あつまをすがゝきてひたちには田をこそつくれといふ歌を
ひたちには田をこそつくれたれをかね山をこえ野をこえ君かあまたきませる風俗常陸歌
あつまは和琴の惣名なれとも又東調とて秘曲有也常陸歌風俗の秘事四首の其一也東調にてすがゝきて此歌をうたふ也今の世に知人稀也云々
しか〳〵なむと　云々シカ〳〵日本紀
さてはづしては　とりはづしては也
よへぬいし御そともひきさけて　提ヒサク
そはこゝろなり　それは心なかといふ也
おとゝのつくりさま　殿の字をおとゝとよむ也家の事也野分の巻にもおとゝの荒なとあり又春のおとゝなともいへり又大臣ならぬ人をも某殿といふ心におとゝと書也うつほの物語にも大將のおとゝとあり又此物語にもあねおとゝともいへり
女は心やはらかなるなんよきと今よりをしへ聞え給
花嚴端嚴如天后大慈心柔輭　陽體剛強自在陰柔順従陽
やう〳〵おきいてゝ見給にひ色のこまやかなるかうちなへたるともをきて
鈍色葉上　祖母の服を着する也
一説み給に、ひ色とよむへし　火色紅也祖母の服中なれともはしめてあたり給吉事なれは紅を着せらるゝ歟今案猶鈍色也紅葉賀巻にも外祖母服三ヶ月と見えたり其儀歟其上今の儀結構にあらす例の事と聞えたりうちなへたるともをき給てとあり只日頭のすかたのまゝ也こまやかは濃の字也色のこき也但今の祖母の服さままてふかゝるべきにあらす或又色をほめたる心にも多オホクいへり然は其心歟
四位五位こきませに
見わたせは柳櫻をこきませて都そ春の錦なりける
延喜廿年京極家歌合の歌み雪ふるかすかのはらの櫻花えこそ見わかねこきませにして
こきませてはかきませて也雨のこきたれてといふもかきたれて降也かとこと五音通する也

むさしのといへはかこたれぬ
しらねともむさしのといへはかこたれぬよしやさ
こそは紫のゆへ
わたさむをひんなしと
ひんなしとはたよりなき也無禮の心にはあらさる
也

並　末摘花

巻名　なつかしき色とはなしになにゝこの末つむ
花を袖にふれけん
おもへともなをあかさりし夕顔の露にをくれしほと
の心ちを年月ふれとおほしわすれす
此巻は若むらさきの巻の横の並也仍夕顔巻につゝ
けて如此書歟紫上を二條院へむかへられしよりも
はるかに以前の事也と見えたる歟
心ふかきかたの御いとましさに　挑（イトマシ）イトムム也
こりすまに
古今　こりすまに又もなき名は立ぬへし人にくから
ぬ世にしすまへは
わかむとをりの兵部大輔　王家無等倫
うつほの物語に云あて宮の御めのとこ一人（三人イ）はわか
むとをり一人は大貮の子王孫を云也王の字をかく
へし經にも世雄無等倫妙智無等倫なといふかこと
し弘安の源氏論義にも親行說とて今の義を證義に
さためられ畢　一說我無等倫又云和漢通（才學通和漢歟云々）
此義無其謂不可用之
かいひそめ人うとくもてなし給つゝ
潜（ヒソカ）也　前巻のひそむにはかはるへしそれは眉をひ
そむる心也潜龍といふも潭（ソコ）底潜伏したる龍也
周易云潜龍勿用何謂也子曰龍德而隱者也といへり
これも其躰の心也
みつの友にて今ひとくさやうたてあらん
白氏文集北窓三友　今日北窓下　自問何所爲　欣然得三友　三友者爲
誰　琴罷輙擧酒　酒罷輙吟詩　三友遞（タカヒニ）相引　循環
無已時　一彈愜（カナフ）中心　一詠暢四支　猶恐中有間
以醉詠纒之
今一くさは女房なれは詩の事歟伊行釋には酒とい
へり
ものゝあはれしる人にこそはあなれ
琴のねを聞しる人のあるなへに今そ立ち出て（たちはてしイ）をゝ

もすくへき
したまつなりけり　下にまつ也
拾遺 こぬ人をしたに待つゝ久かたの月をあはれといは
ぬよそなき貫之
いさめたてまつる　諫
おもきこうに　刧也刧はつむ也他人のいたむへき心
也碁のこうも同心也
心いられしけり
いらいらしきといふ心也切に思ふ事には心のわき
かへる様におほゆるよしなり詩に幽處有鶯煎なと
作れるも此心也鶯の聲を幽處にてきけは時景に心
も煎せらるゝ様におほゆると也煎をあふるともい
るともよむ也
おかしきかたの御かさやとりには
伊毛可々度世奈可々度由支須支可禰天也相可由可
波比知可左乃比知可左乃安免毛布良奈無してたを
左あまやとり可左やとりて末からむしてたをさ
催馬楽 妹之門
わらはやみにわつらひ給
若紫始巻同時也　横並此に見えたり

かゝやしきもことはりなれ　はちかゝやきたる心也
さうさうしきよひゐなとに　宵居
もろともに大内山を出しかと　大内山有仁和寺大内の
心なり寛平法皇大内山に御座の時は仙洞をも稱す
る歟
八月廿日よひすくるまてまたるゝ月の心もとなきに
六帖 したにのみこふれはくるし山のはにまたるゝ月の
あらはれは如何に
たはやすき
たやすきといふ詞に文字をそへていへるなり定家
卿說也
後撰 あられふるみ山の里のさひしきはきてたはやすく
とふ人そなき
御けはひ　氣日本紀　形勢新猿楽記
いなひぬ御心にて　いなともいはぬ心也
をしたちて　つきつきしき心歟
されくつかへる　左禮覆也
よしはみ　由あるなりはみはつくる詞也心はみされ
はみなと皆同事也
えひのかいとなつかしく

拾遺曰中宮安子　ふるきのかはきぬを高光少將入道
横川にすみ侍けるにつかはしける
夏なれと山はさむしといふなれは此皮きぬは風を
ふせかん
御返し　山風もふせきとりつる皮衣うれしき波に袖
はぬれつゝ
六帖　とこしへに夏冬ゆけや皮衣扇はなたす山に住人(なりイ)こ
たいのゆへつき　古代由付
きしきくわんのねりいてたる　儀式官辨大内記等
躰云々
よめにこそしるきなからも　夜めにもしるき物にそ
ありける上句未勘
松の雪のみあたゝかけにて
勁松彰(アラハン)二歳寒一といへり霜雪にも凋まさるは松の性
のあたゝかなる故也又眼前にもこと木よりは松に
かゝりたる雪はあたゝかけにみゆるなり
名にたつすゑのと見ゆる
我袖は名にたつ末の松山か空より(うらイ)浪のこえぬまそ
なき
はしたなるおほきさ　半なる勢分也又云はした物の
事也云々
おとこらすぬるゝあさの袖かな
古今　秋の野の篠分しあさの袖よりもあはてこし夜そひ
ちまさりける
わかきものはかたちかくさす(れ)と
夜深煙火盡　霰雪白紛々　幼者形不レ蔽　老者體無
レ温　悲端與二寒氣一　併入二鼻中一辛　白氏文集　秦中吟
みちのくにかみのあつこえたるに　檀紙也
陸奥國より檀紙をすきはしめけるなり古序にみち
のくにのまゆみのかみといへり　檀はまゆみ也
つゝみにころもはこのおもりかにこたいなるうちを
きこをしいてたり
綾泥繪　暈不具　衣筥　蒔繪已上　見延喜式　古代
袖まきほさむ人もなき身に
六帖　淡雪はけふはなふりそしろ妙の袖まきほさむ人も
なき身に(あへなくにイ)
命婦おもてあかみて　忸怩(カホアカム)漢語抄
いともかしこきかたとはこれをそいふへかりけると
おもふ事(おかしき行本)をかさらすしてさしてとにいひたるたゝ
こと歌の本意なれは是をかへりてかしこしとあさ

ける也

いまやういろのえゆるすましく

聽色　今樣色共紅色也見延喜式しかれはゆるし色同物歟紅にならへてはゆるし色といひ紅に訓する時は今樣色といふ也えゆるすましくとはゆるし色によそへてそしれる歟

なをしのうらうへひとしうこまやかなる　表裏同色の濃也是も舊儀歟

なつかしき色とはなしに何かこの末摘花を袖にふれけん

萬葉人丸 よそにのみ見つゝやこひん紅の末つむ花の色にいてすとも

古今 人しれすおもへはくるし紅の末つむ花の色にいてなむ

紅の花はすゑよりさけはやかてすゑよりつむ也

色こき花と見しかとも

古今 紅の色こきはなと見しかとも人をあくにはうつるてふなり

おり／＼のつまかけなとも

おり／＼のつまなりかけはつきたる詞也おもかけなといふ同儀也近江君詞につまこゑとあるも此躰歟

ひたすらくたす名をしたてすは

太詩疋（ヒタスラ）白氏文集疋如　永（ヒタソルトモアリ）日本紀

後撰 ひたすらに我おもはなくにおのれさへかり／＼とのみなきわたるかな

たゝ梅の花の色のことみかさやまのをとめをはすてゝとうたひすさひて

求子歌也　春日の社にてはみかさの山とうたふ餘社にては各其所をうたふ也云々

あらすやさむきあさしもにかいねりこのめるはなの色あひや見え侍らん

是もさきの歌の心歟可勘かいねりはわかき心をいふ歟搔練兩面ふくさはりにて中重なし紅の色也火色は面裏紅の打物中重ある也

左近命婦ひこのうねへやましらひつらん

履中天皇之代倭直吾子籠等貢二釆女一蓋始二于此時一肥後之釆女と可讀歟古今にも近江釆女なとあり

御そひとゝ　一具

えひそめ　衣服令義解曰　蒲陶（エビゾメ）蒲萄者紫色之最淺也

おとこたうか　天武天皇三年正月朔朝ニ大極殿ニ詔男
女無レ別闇夜踏歌
男踏歌聖武天皇天平元年正月十四日始有ニ男踏歌ニ
女踏歌　天平十四年正月十六日天皇御ニ大安殿ニ
宴ニ群臣ニ酒酣奏ニ五節四舞ニ了更令下ニ小年童女ニ踏
歌上是濫觴也
七日のせちゑはてゝ　天武天皇十年正月七日御ニ向
少殿ニ宴
たをやき給へるけしき　婀娜遊仙窟　窈窕
ひのあし　日脚
きやうたいからくしけからけのはて
鏡臺　唐匣　掻上函　掻鬢の具足入たる物也
かのわりしはこのころもをさなからなりけりさしも
おほしよらすめつらしきもんなとにをられたりしう
はきはかりそわやしとはおほしける
きぬくはりに源氏のをくられたるきぬをさなから
着したる也それとしも源氏思ひわき給はぬにきぬ
のもんのめつらしきにそれかと思ひよられたる也
裘をは裳上に着する也うはきといふ也
けふあるもんつきてしるきはかりをそわやしとはお
はしける　きぬくはりに源氏のをくられたるきぬの
事歟はなそめのをりものなとそれをわかはなに思よ
そへたる歟やかて紫の君を紅はかうなつかしきもわ
りけりといへり
或云貂裘事歟裘をは裳の上に着する也仍うはきと
いふ也　巳上異本
またるゝものはさしをかれて
あら玉の年たちかへるわしたよりまたるゝ物は鶯
の聲
さえつる春は
百千鳥さえつる春はものことにあらたまれとも我
そふり行
ゆめかとそおほゆると
夢とこそ思ふへらなれおほつかなねぬにみしかは
分そかねたる
新聲宛轉夢歟不夢伊行釋　今案わすれては夢かとそ
思ふ思ひきや雪ふみ分て君を見んとはの歌の詞心
歟兩賢釋相違如何
むもんのさくらのほそなか
櫻色は面はうすく裏はこき蘇芳也ほそなかは幼少

の貴女の着する物也

御すゝりのかめの水にみちのくにかみをぬらしてのこひ給へはへいちうかやうに色とりそへ給な

宇治大納言物語云平定仲文女のもとにゆきてなくまねをして硯の水入をふところにもちて目をなんぬらしけるを女心えてすみをすりて入たりけるをしらて又ぬらしけれは女鏡を見せてよめる

我にこそつらさは君か見すれ共人にすみつくかほのけしきよ(かイ)　大和物語にも此事あり

あかゝらむはあへなむ　ありなむといふ心也

いとおかしきいもせと見えたり

いもせはいもうとゝせうとゝをいふ也伊弉諾伊弉冊尊兄弟はしめて夫婦と成給しによりて夫婦をいもせといふなり

むめはけしきはかりほゝゑみわたれる(はイ)

にほはねとほゝゑむ梅の花をこそわれもゆきて(おかしとお)は(りてなかむれイ)おらまほしけれ

河海抄巻第四

正六位上物語博士源惟良撰

第四　紅葉賀

巻名　朱雀院行幸は紅葉の頃也賀の字雖不見巻中花の宴の巻に御紅葉賀といへり此名目に秘說あり

朱雀院の行幸は神無月十日あまりなり
延喜十六年三月七日辛酉　行幸朱雀院法皇五十御賀
同年八月廿八日行幸同院詩題高風送秋都　康保二年十月廿三日行幸同院題飛葉共舟輕
朱雀院は三條朱雀也是後院也古今集にも朱雀院とあるは宇多院御事也脫屣の後此院に御座故也

しかく　御賀試樂也

源氏の中將せいかいはをまひ給ふゑいなとし給へるは　南宮譜云此曲承和御時大納言良峯安世朝臣奏勅命作此舞時依勅改成盤涉調但詠小野篁朝臣作
詠曰
桂殿迎初歲　桐樓媚早年　剪花梅樹下　蝶燕畫梁邊篁作
舞裝束青海波
青色袍表袴文小葵　蒲陶染下襲面大海賦裏蒲陶大海賦浦イ半臂
舞手　向一方摸寄波引波躰也

これやほとけの御かれうひんかのこゑならむと
聖主天中天　伽陵頻伽聲法華經
伽陵頻伽在卯聲勝衆鳥云々或迦樓賓或曰伽陵頻者梵語也唐云敎鳥此鳥鳴時音中囀若空無我常樂我淨土也

神なとのそらにめて給ぬへき
大鏡云いみしく侍し事はやかて同君延喜の大井の行幸に宮の小路の宮す所の御腹の親王重明の七歲にて舞まはせ給へりしばかりの事こそなく侍しか萬人しほたれぬ人は侍らさりき御かたちのひかるやうにうつくしくわたらせ給しかは山神めてゝとりたてまつりにき

ことに侍つとはかり　殊也

いゑのこ　良家子也
若紫の巻に云十月に朱雀院の行幸あるべしとて舞人なとやんことなき家の子ともとあり榮花物語第七東三條院御賀　舞人家の子の君達也事ともやう〳〵はつる程に殿の君達ふた所はわらはにてまひ給ふ高松高明公女

くといふ也仍まはゆき色をは斟酌のよし也
てうはいにまいり給
朝拜朝賀也始自神武天皇云々小朝拜延喜五年被停止之同九年又行之依群臣請也
そゝきゐ給へり　楚々起そゝめく也
なやらふとて　追儺十二月晦日也鬼やらひの事
金谷園記曰爲陰氣時絕陽氣始來陰陽相激化爲疾癘
之鬼爲人家作病黃帝使防相氏黃金四目身着朱衣手
把桿楯口作儺々之聲以駈疫癘之鬼至今歲除夜爲之
月令曰季冬命有大儺旁磔注曰此月有癘鬼將隨强陰
出害人故旁磔於四方之門
隨用齋𥘆曰季冬晦選樂人二百四十人爲儺赤幘絳衣
赤布袴以逐惡鬼于禁中其日戌夜三唱儺集水上刻皂
帝御殿儺入春秋冬皆儺
南都新書曰除夜儺入殿前然蠟燈煌如晝
唐志曰太卜季冬師侲子侲之三日正堂贈大儺天子六
隊太子二隊方相氏右執盾導之唱十二神名以逐惡鬼
皷吹署令師皷角以助子之唱
論語曰鄕人儺朝服而立阼階孔安國曰儺驅逐疫鬼也
恐驚先祖故朝服立阼廗之阼階也
文選曰卒歲大儺駈除群厲方相秉鉞巫覡操茢侲子萬
童丹首玄製桃弧棘矢所レ發無レ臬飛礫雨散剛癉必斃
王建宮詞詩云金吾除夜進儺名畫袴朱衣四隊行院
々燒燈如白日沉香火底坐吹笙
文武天皇慶雲元年甲辰十二月此年天下諸國疫疾百
姓多死始作土牛始追大難　御記曰延喜八年十二月
廿九日仰大臣去年晦日夜處々或不追儺人々云今年
愁咳此依不儺疫鬼云宜仰所司勤令儺除夜に儺を追
事也鬼やらひといふ追の字をやらふとよむ也又儺
の一字を鬼やらひと讀也始自禁中迄于諸家行之
さむさしにとてもあまた所もありき給はす內春宮一
院さてはふちつほの三條の宮にそまいり給
參座參賀事也內桐壺御門春宮朱雀院　一院桐壺帝の旁親准寛平法皇歟
うけはしけにのたまふ　咒咀ウケハシ也
こゝろゆるひなき　無心緩也　心ゆるしなき也しと
ひ同響
又ならひなきとちはけにかよひ給へるにこそ
源氏と若宮冷泉院　容貌無雙ゆへにかよひ給へると
也
花にさかなむと思ふ給へしもかひなき世に侍けれは
我やとにまきしなてしこいつしかも花にさかなむ

よそへても見ん
ちりはかりこの花ひらに
ちりはかりはすこしはかり也されともなてしこの歌なれはちりをたにすへしとそおもふの歌によそへて云也
いりぬるいそのとくちすさひて
古今しほみては入ぬるいその　草なれや見らくすくなくこふらくのおほき
みるめにあくは　伊勢のあまの朝な夕なにかつくてふみるめに人をあくよしもかな
さうのことはなかのほそをのたへかたきこそところせけれとてひやうてうにをしくたしてしらへ給
平調は箏柱をさけてたつれは也十の絃を中のほそ緒と云々
ゆしたまふ　ゆする也
ほそろくせりといふ物
長保樂大食調(カホシキテウ)右樂　破保曾呂倶世利　急賀利夜須
はうしたかはす　拍子也
いわけて　驚駭日本紀
さたすくるまて　さたは央の字也央はなかばとよむ也百年の半と云心歟五十餘許事歟又貞年といふ也
御うちきの人めして
中院事書云御髻とる人の事也云々御梳櫛の人はわらはくひの無文の直衣を給はりて着する也仍御うちきの人と云也一説云御裝束奉仕する人なり云々
かはほりのえならぬを
蝙蝠を見て扇を作始ける也仍夏扇の惣(異イ)名也
まかはいたくくろみおちいりて
師說云眶(マカハ或マカフラ)　文選云高眶(カツキヤツマカフラタカク)　一說眼皮也(マカハ)
遊仙窟云眼皮(マユメ)　瞤(カユカル)今案云眼皮も有其謂歟
老者なれはとてまかふらのおちいる事はなき也目の上の皮は年よれはくろみおちいる也其時まかふらは彌高くなるへき歟
いみしうはつれそゝけたり
扇さしたるはつれの髪そゝけたる歟
もりのした草おいぬれはなと
大あらきの杜のした草おいぬれは駒もすさめすかる人もなし
もりこそ夏のとなむ

ひまもなく茂りにけりな大荒木の杜こそなつのかけはしりけれ
はし柱とうらみかく
つの國のなからのはしの橋柱老ぬる身こそかなしかりけれ
はなまはゆけれとにくからぬ人ゆへなれはぬれきぬをたに
にくからぬ人のきせけるぬれきぬは思ひにあへす今かはきなん
鼻まはゆしとは鼻うちやくなといふ事歟
見まくほしきは猶かきりありけるにや
古今　いたつらにゆきてはかへる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ
戀しさのかきりたにある世なりせはつらきをしゐてなけかさらまし
うむめいてん　温明殿
うりつくりになりやしなましと
山しろのこまのわたりのうりつくりなよやらいしなや左伊之なや(うりつくりうりつくり我をほしといふいかにさむなよやらいしなやさいしなや)イ本
いかにせむ〳〵波禮いかにせむなりやしなまし宇利たつ末天仁也良以之なや宇利たつまてに 催馬樂山城呂
かくしうにありけむむかしの人もかくやおかしかりけむとみゝとまりてきゝ給 三段
此事定家卿本にはかくしうとあり親行本には文君なといひけむむかしの人もとあり兩說何も證本也各可隨所好也
鄂州事 白氏文集第十
夜聞謌者宿鄂州
夜泊鸚鵡州　江秋月澄徹　隣船有歌者　發調堪愁絕　歌罷繼以泣　泣聲通復咽　尋聲見其人　有婦顏如雪　獨倚帆檣立　娉婷十七八　夜淚似眞珠　雙々墮明月　借問誰家婦　謌泣何淒切　一問一霑襟　低眉竟不說
文君事
史記曰是時卓王孫有女文君新寡好音故相如繆與令相重而以琴心挑之相如々臨邛從車騎雍容閑雅甚弄琴文君竊從戶窺之心悅恐不得當也旣罷相如乃使人重賜文君侍者通慇懃文君夜巳奔相如

案之鄂州猶叶物語意歟源內侍聲はいとをかしくて山城の歌をうたひたるを鄂州にて樂天の詩を聞しに思よそへたる歟如何

君あつまやをしのひやかにうたひてたちより給へるにをしひらいてきませとうちそへたり

あつまやのまやのあたりのあまそゝき我たちぬれぬその戸ひらかせ、かすかひもとさしもあらはこそそのとわれさゝめをしひらいてきませ我やひとつま　催馬樂東屋律二段

たゆめきこゆ　頭中將見つけなからなをたゆめて源氏のねいり給をまちける也

すりのかみ　修理大夫　大夫は此職の頭也

くものふるまひはしるかりつらん物を

衣通姬　我せこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも

よしはみなよひたるを

なよひはなよらか同事也

をこになりぬ　嗚呼

うつし心（現心）かとよたはふれにくしや

万十一　ますらをのうつし心も我はなしよるひるいはす戀しわたれは

ありぬやと心みかてらあひみねはたはふれにくきまてそ戀しき

うつし心かとはまことの心かといふ也

うへにとりきはしるからんといふ

紅のこそめの衣したにきてうへにとりきはしるからんかも

かくれなき物としる〳〵夏衣きたるをうすき心とそ見る

頭中將を其人とはかくれなきにかくきたりてをとすをあさき心なりとよめる也

そこもあらはにとあり

わかれての後そかなしき涙川そこもあらはになりぬとおもへは

おもなのさまやと見給　無面　伊勢物語ニおもなくてといへるなるへし

中たえはかことやおもふとあやうさにはなたの帶はとりてたに見す

是は詫（カコツ）也かこたれやせむといへる也返歌にもかくてたえぬる中とかこたむとあり

まことはうしや世の中といひあはせて
紫明曰官途從此心長絕世事自今口不言文集
とこの山なるとかたみに口かため給へり
いぬかみのとこの山なるいさら川いさとこたへて
我名もらすな
ことにさりきこえ給へるを　所をさる也
そのとし十月にそきさきゐ給めりし
左傳曰帝嫡妃曰皇后
後漢書曰以備內職爲后正位宮闈同躰天皇　周禮曰
王者立后又禮云以陰禮敎六宮　鄭玄云陰禮婦人之
禮也六宮後五前一又云六宮謂后也婦人稱寢曰宮々
隱蔽之言一燕寢五也后象王立六宮而居之亦正　鄭
玄註禮記曰后之言後言在夫之後也故以女謂後達皇后旣居後宮也
神武天皇辛酉尊正妃爲皇后蹈韛五十鈴姬是也令曰
中宮職謂皇后宮其太皇太后皇太后亦曰中宮也釋曰今稱皇后者爲中宮也
源氏の君宰相になり給
稱德天皇天平神護二年正月八日中納言弟麿男　石上宅嗣任
參議元中衛中將宰相中將始也
御はゝかたみな御子たちにて源氏のおほやけことし
り給べきすぢならねは
わか宮冷泉院の御外舅親王達にて人臣にて御うし
ろみすへき人なしといふなり、源氏執政右大臣能
有例歟
御こしのうちもおもひやられていとゝをよびなき心
ちし給　伊勢物語二條の后のまた春宮の御息所と申
ける時氏神にまうて給けるに近衛つかさに候ける
おきな　おほはらやをしほの山もけふこそは神代
のこともおもひいつらめとて心にはかなしとや思
ひけむいかゝ思ひけむしらすかし
やむことなき　殊なるをやことなしといふなり

第五　花宴

卷名此卷に南殿花宴あり「度々花宴中に延長四年
例相叶歟探韻以下尤相似たり」
きさらきの廿日あまり南殿の櫻の宴せさせ給
南殿櫻紫宸殿此木殿の巽角にあり是大略草創より
の樹也貞觀に枯といへとも根より纔に萠けるを坂
上瀧守奉勅是をまもり枝葉再盛云々延喜御記にも
群烈櫻樹東頭なとあり天德に燒たりけるを康保元

年十一月植らるすなはち枯同二年正月に又植られて三月に花宴あり兩度之間一は重明親王家樹一は西京より移栽らるその後度々燒亡に毎度植らるゝ者也

花宴事

延喜十七年三月六日乙卯御記曰晩頭常寧殿看花命實頼令吹笛令一兩侍臣唱歌臨昏還清涼殿座東北廂參議保忠朝臣侍殿上櫻下施莚召大內記理平直內御書所勘解由次官諸蔭播磨權大掾橘正臣文章生春淵善規坂上恒蔭藤原高樹等令賦春夜翫櫻花絕句邦基朝臣常驕千古同預其座理平作序子二尅召理平讀詩訖給文人綿又鋪座階前亥上朝臣以下侍唱歌之召備前介善行彈箏藏人所藤原有時吹篳篥讃岐掾千兼彈琵琶保忠朝臣時々彈琴吹笙夜深給保忠朝臣御衣侍臣絹息所殊以女裝束給近侍管歌盃酒者數人、延長四年二月十七日御記曰此日殿前櫻花盛開仰召文人聊開花宴昨暮預令召可候文人今日遣使召常陸太守貞眞親王左大臣云々有所煩不參、申尅常陸太守親王參入同尅仰藏人立倚子東又庇自北第二間敷菅圓座兩三枚於北階南簀子敷爲親王納言座櫻樹下鋪座西面爲文人座酉尅左衛門督藤原朝臣參即着倚子令召親王藤原朝臣等即參來侍座仰令召文人即文章博士公統朝臣民部大輔博文朝臣右中辨文江民部少輔諸蔭侍內御書所大內記橘正臣以下文章生以上七人參入仙花門着樹下座侍臣給紙筆仰令獻題藤原公統朝臣進昇殿藤原朝臣座前給之令書題目奏花房紅蠟珠 仰又令上又書奏書之櫻繁春日斜 仰以後所上爲題又仰令探韻字右近權少將實頼探韻奏上次親王以下就文臺探韻仰淸平朝臣元方在衡維時尹甫等探韻令就進中座于時內藏寮給酒肴中納言藤原朝臣參入仰令探韻其後仰召樂所管絃者四五人時々令奏音聲以助謳吟及子尅終頭取文臺以公統朝臣爲講師讀詩仰文人等近侍砌下令講其後管絃頻奏吟詠不止仰常陸太守親王彈箏中納言藤原朝臣彈琴及丑尅給親王納言御衣文人給綿侍臣及樂所人等給疋絹寅二尅入內侍臣退出

康保二年三月五日丙子今日有花宴事尋其由緒去正月廿七日堀東都櫻樹植南殿巽角白砂埋根朱檻迎朶項月之間逐日鮮明上達部今日留此座共憐其意自日中及夜半詠古詩誦新歌且以眺望且以愛翫而已但此

間行事具見陣記以下略記
于時少外記大江昌言候陣座聊記之
同三年二月廿二日御記云今朝立倚子於庭樹下即就花下座親王公卿又移座同樹北邊奏絃管行盃酌又召爲平親王令候座令伊尹朝臣折花挿王卿頭其後延光朝臣執盃立各令詠和歌巳尅入内公卿等退出云々
拾遺集天德三年三月内裏ニ花宴せさせ給けるに九條右大臣さくらはなこよひかさしにさしなからかくて千とせの春をこそへめ
中宮かくて　桓武天皇御宇始置中宮職
おりふしことに　毎折節也或說折節殊也
かむたちめみこたちよりはしめてその道のはみなたむゐん給はりてふみつくり給　探韵各分一字詩也
宰相春といふもし　眞淳臻韵也
みなおくしかちにはなしろめるおほかり
嗚呼事をは鼻しろむといふ世俗諺なり伊行釋奥入同　今案これもおくしたる體歟
地下の文人なとは　文人は詩作人也呉音によみならはせり是名目也うつほの物語ふきあけの下云文人とも題たまはりてふみたてまつる
としおいたるはかせとものなりおやしくやつれてれいなれたるも
例に馴たる也　物なれたる心也
春のうくひすさえつるといふまひ
春鶯囀　六曲　新樂一名天長寶壽樂　壹越調
南宮横笛譜云昔善僊此曲者有左大臣源信朝臣及巨勢式人等仍承和御時勅信朝臣以此曲令傳習于成康親王合子御笛僊於清凉殿前視之者無不感泣
袖かへす所をひとかへり　飜舞袖也
柳花苑といふまひをいとおもしろくまひ給へは御そ給はりてめつらしきれいに人おもへり
或記云此樂舞闍波羅門僧正將來女形也其姿如吉祥天女舞躰柔々靜々而巳云々
賜御衣延喜延長例也
ことにけちめもみえす　結目　或揭目也
源氏のきみの御をは講師もえよみやらて句ことにすしのゝしる
御詩をはといふへきを略して御をはと云也常事也
或說云廣才の人難字を作にとりて講師もえよみやらさる歟云々今案此儀無謂公宴の講師をつとむる

程の人難字を不讀得乎只毎句秀逸なる故に數反講
頌の間よみやらす誦しのゝしるといへる歟云々
東宮の女御の　東宮の母女御也
心うく（えすイ）そかへさひおもほしける　覆（カヘサヒ）
（藤壺）おほかたに花のすかたを見ましかは露も心のをかれ
ましやは
古今　露ならぬ心を花にをきそへて風ふくことに物
おもひそつく
おの〳〵あかれ　分散也又云頒也
なをあらしに　萬葉點然不有とかけり
なをあらしとことなしくさにいふことをきゝしれ
らくはすくなかりけり
こきてんのほそとのにたちより給へれは　細殿忠教
卿說　秘說云ほそとのとは廊の字をよめり漢語抄
に見えたり舊記に廂をほそどのと點すこれもその
心歟
三のくちあきたり　弘徽殿に北南へほそくとをりた
る戸ありこれは北より第三間にあたる戸なり格子
遣戸云々
おくのくるゝ戸もあきて

くるゝにくきさしかためこし（萬葉長歌）　くるゝ戸（くるゝ木也）とよ
むへし或はたゝき戸とも號する也
おほろ月夜ににる物そなきとうちすして
（大江千里）てりもせすくもりもはてぬ春の夜のおほろ月夜に
（似るイ）しく物そなき（伊行釋奥入）
らうたけになつかし　勞　亮（日本紀）
いと心あはたゝし　周章　又燰
ことはりやきこえたかへたるもしかなとて
水原抄云此事甚不得其意但とかくいひまきらはす
ほとはきゝもあらはさゝりつるを此歌のこゑのな
まめかしさにきゝさためてことはりなりけりとい
へる也云々　案之首尾相かなはすそのゆへは源氏
なをなのりしたまへいかてかきこゆへきといはれ
たる御返事に女君　うき身世にやかてきえなはた
つねても草の原をはとはしとや思ふといへる心は
心さしあらはなのらすともたつねてもとはるへき
になのらすはさてはこのまゝにて草のはらをはた
つねしとうらみたる也よて源氏理におれてことは
りやきこえたかへたるもしかなとて　いつれそと
露のやとりをわかむまに小篠か原に風もこそたて

とよめりこの歌はいつれそとたつねむ程も猶おほつかなかるべしと陳したる心也　しかなとてはさそなといふ心也

つきしろひつゝ　突水原抄

頭中將のすさめぬ四の君なとこそ

不肯（スサメス）日本紀　すさめすとは不愛也

古今春部下
山たかみ人もすさめぬ櫻花いたくなわひそわれみはやさん又おほあらきの杜の下草老ぬれは駒もすさめすかる人もなし是等皆不愛心也されはすさむとは愛する義也手すさみなといふ此心也

ことかはすへきさまを　言かよふなり

まつかのあたりのありさまことなうおくまりたるはやと

葵の上のあたりの事也

かのしるしのあふきはさくらの三重かさねにてこきかたにかすめる月をかきて水にうつしたる心はへなと

清少納言枕草子なまめかしきもの三重かさねのあふき五重になりぬれはあまりあつくて云々檜扇の兩方のうへ三枚つゝをうすやうにてつゝみて色々のいとにてとちてすゑにあはひむすひにむすひてたれたる也五重扇同風情也

さうのことをまさくりつゝやはらかにぬる夜はなくてとうたひすさひつゝ

ぬき可波のせゝの也波良多萬久良也波良加耳ぬ留與波奈久天於也左久留つ末波於也左久留つ末波萬之天留波之天加左良波也波支乃伊知爾久つ加比爾加氣久つ加波之千加伊乃保曾之支乎可戸左之波支天宇波毛と利支天美也知加與波矣　催馬樂 貫河律

こゝらのよはひにて明王の御代四代にあひ侍れと此四代明王或云周文武成康に摸するよと見えたり然して弘安源氏論義には貞信公のおもかけありといへり親行說これに同し桐壺帝を延喜に准せは陽成光孝宇多醍醐たるへき歟

貞信公元慶四年誕生なれは延長まてすてに四代也于時左大臣なり尤比擬するにたれり又彼公は延長八年九月廿二日朱雀院の受禪日蒙關白詔とあり此引入大臣も澪標巻以前は攝政の號なき歟延喜御代も內覽臣ばかりにて無關白號也紫明抄には忠仁公のおもかけありといへり不審也

ふみともきやうさくに
考課令曰凡官人還迹ハ功課應レ附レ考者皆須實錄疏
曰還迹者景像也猶言狀迹也
あらはなゐ心也或云さとくしる心也一説警策歟秘
説あり
おきなもほと／＼まひいてぬへき　殆也
おほやけことかたむものゝしともを　奸也
いと上手ならねともおほやけわさしわたす心歟か
たましくなとやうの詞也
さかゆくはるにたちいてさせ給へらましかは世のめ
いほくにや侍らまし
古今 今こそあれわれもむかしは男山さかゆく時も
ありこし物を
水原抄曰此歌詞違文歟但定家卿所覽本さかゆく時
とありける歟云々　今案兩賢釋共以不究淵源歟此
事秘説あり
やよひの廿餘日みきのおとゝのゆみのけちに
弓結也　踏歌後宴　弓結也
延喜七年二月廿二日御記云掌踏所奉仕踏歌後宴云々
御射場中務卿親王左大臣以下侍更召殿上公卿等預
召立書別如例御賭物臣下賭
やかて藤のはなの宴し給ふ
飛香舍藤花宴有興延喜二年三月廿日此日左大臣於飛香舍藤花下有獻物事云々
うつほの物語云三月中の十日はかりにふちゐの宮
にふちの花の賀し給
ほかのちりなむのちとやをしへられたりけむ
古今 見る人もなき山里のさくら花ほかのちりなむ
後そさかまし
宮たちの御もき　弘徽殿女御の御腹の宮達也
ものゝはえなしとおほして御子の藏人の少將をたて
まつり給ふ　光　榮ハエ同
御よそひなとひきつくろひて　粧只行粧なとの事也
水原抄曰　男女裝束惣名也云々不審如何
さくらのからのきの御なをしゑひそめのしたかさね
しりいとなかくひきてみな人はうへのきぬなるに
からのきとは唐綺也うすきからあや也
直衣布袴事
小右記 寛和元年二月十三日巳尅上皇駕御車令出紫野給左
右丞相大納言爲光　左大將朝光　右大將濟時　中納言文範布衣
權中納言顯光　重光　保光・義懐散三位　參議忠清布衣　右兵衛督公季布衣　右

中將道隆（贈三位）衣布　公卿皆悉騎馬着直衣下襲以櫻指挿
正暦御堂（于時左大臣）被行曲水宴（序者匡房）之時令着此裝束給紅
梅織物直衣之由知足院入道殿令談給云々
勘文云此日御堂關白紅梅の直衣に火色の下重をひ
かせ給火色は裏面打物の中倍ある也云々
（小右記）延暦年中實資卿賀茂祭棧敷御堂于時爲左大臣之時
內大臣公季着此裝束云々又三十講歌合記幷寛治根
合之時判者輔親卿着直衣下襲（用皮帶）云々
永長關白（京極大閤）臨時客日左大臣俊房着之（見中右記）仁
平宇治左大臣頼長（于時內覽臣）　臨時客太政大臣實行着之
古事談云知足院殿被仰けるは御堂宇治殿大殿の御
昇進に一事も無相違內辨官奏除目執筆等皆無殘事
只直衣布袴と云裝束をそせさりし如此之裝束不逢
其事には力不及事也云々此等記源氏物語以後事也
然而有職所爲定存先例歟仍潤爲色載之者也
あされたるおほきみすかたの
鯘（アサレ）論語鮮　宿日本紀宿老同是等字以前卷注之了
此字中鮮字可宜歟只されの義歟又宿老儀も有其謂
平直衣布袴宿老人可着之由見中右記源氏雖非宿老
依爲尊者着之歟おほきみは王の字也古今集にもか

つらきのおほきみかねみのおほきみなと丶てあり
秘説あり
いつかれいり給　寵（イツク）嚴（イツクシ）いつきかしつく心歟
女一宮女三宮おはします
共弘徽殿女御の御腹也一品し給へるよし若菜巻に
みゆ女三宮は葵巻に爲齋院
ひんかしのとくちにおはして
妻戸口歟つまとのみすをひき丶給へはとあれは也
ふさはしからす　不祥日本紀
かしこけれとこのおまへにこそかけにもかくさせ給
はめとて
（伊勢物語業平）さく花の下にかくる丶人おほみありしにまさるふ
ちのかけかも
わひにて侍り　わひたる也にはつきたることは也
よからぬ人こそやむ事なきゆかりはかこち侍なれ
不平（ヨクモアラス）（ヨカラス）　日本紀
源氏六の君を見さためむとてみすをひき丶給へは
かくいふ也やむ事なきゆかりとは源氏のいもうと
の宮たちおはします故也
わふきをとられてからひめをみるとうちおとけたる

聲にいひなしてよりふし給へれはあやしうもさまかへたることまうとかなといふは心えぬ人なるべし

伊之加波乃己末宇止爾於比乎止良禮天可良支久以須留己比須留二段 伊可奈留以可奈留於比曾波奈多乃於比乃奈可波多伊禮多留三段 加可也留可加也留加奈可波太伊禮太留可催馬樂石川呂哥

源氏の扇をとられたるを是によせてさまかへたる高麗人かなと云々

あつさゆみいるさの山にまよふ哉ほの見し月の影やみゆると

側見月 閑（ホノカ）尚書 或髣髴也

あつさ弓いるさの山は朝霧のあたることにや色まさるらん

心いるかたならませはゆみはりの月なき空にまよはましやは

釋云一旁曲一旁直若張弓云々

河海抄卷第五

正六位上物語博士源惟良撰

第六 葵

巻名はかなしや（源内侍）人のかさせるあふひゆへ神のしるしのけふを待ける

世の中かはりてのちよろつものうくおほされて

桐壺の御門位をさらせ給ふ事也

長恨歌傳云 明年大兒歸元大駕還都尊玄宗爲太上皇

こゝもかしこもおほつかなさのなけきをかさね給ふ

むくひにやわれにつれなき人の御心を

古今 われをおもふ人をおもはぬむくひにやわかおもふ人のわれをおもはぬ

大將のきみによろつきこえつけ給ふ

源氏參議大將事

天平神護元年止近衛府

平城天皇大同四年四月廿二日雖改近衛大將藤原朝（大納言眞楯男也）臣内麿爲左近衛大將改中衛大將坂上田村麿（從三位葛田丸男）爲右近衛大將

參議兼大將例

藤原房前（右大臣不比等男）中衛大將

同 豊成（左大臣武智丸男）中衛大將

吉備眞吉備（右男大府生下道國勝男）中衛大將

藤原是公（參議乙丸男）中衛大將

大中臣諸魚（右大臣清丸男）近衛大將

藤原雄友（右大臣是公男）中衛大將

同 内麿 近衛大將

同 乙叡（右大臣繼縄男）中衛大將

同 冬嗣（右大臣内丸男）左近大將

文屋綿麿（正四位下大原男）左近大將

藤原吉野（繼縄男）左近大將

橘氏公（贈太政大臣清友男）左近大將

藤原常行（右大臣良相男）右近大將

同 伊尹（右大臣師輔男）左近大將

前坊（桐壺御門の弟）のひめ宮齋宮にゐ給にしかは

崇神天皇六年以天照大神託豐鍬（ツケテスキ）入姫祭於倭笠縫邑（ヌイノムラ）以大國魂神託渟名城入姫令祭

垂仁天皇廿五年丙辰三月依神宮御託宣奉祝伊勢國五十鈴川上以第二皇子倭姫命令着御祭給是齋宮始也景行天皇廿年庚寅令第二皇女奉仕天照大神宮延喜神事式曰凡天皇即位者定伊勢太神宮齋王仍簡内親王未嫁者卜之若無内親王依世次簡諸女王卜之

そのころ齋院おりゐ給て后はらの女三宮ゐ給ひぬ
嵯峨天皇弘仁元年置齋院司以皇女有智内親王母交野女王　爲齋王延喜神事式云凡天皇即位定賀茂大神
齋王仍簡内親王未嫁者卜定
蓬生巻に侍從かよひまいりし齋院もうせ給ひぬ
とあるは此齋院歟
つねのかむわさなれと　神(カンワサ)日本紀　神態
とりわきたるせんしにて大將の君もつかうまつり給
齋院御禊大將前駈例可勘
年中行事云四月中午日齋院禊事有未日之例先二日
齋院別當辨率陰陽寮及供奉諸司等到河邊點定其地
付藏人奏之當日早旦召王卿家及山城近江等國牛給
彼院先是被召仰件牛但山城近江給所臨祭日同用之
又御覽藏人所陪從其後遣彼院
あやしきたひしかはらまて
度子(ワタシモリ)考羅(カハラ)日本紀仁德天皇巻(ムカハリ)　又云度師　網引又日本
紀に以人爲身代と云所に爲質とあり此義歟民代な
りたとへはいふかひなき下﨟の心歟みとひと五音
通也蟬をせみともせひともかくかことし清少納言
枕草子にもたひしかはらと云事あり紀貫之白河大
相國亭子日會序云草枕たひしかはらまて松のちと
せをは君にのみいのりはなのさかへをは人のため
にと思ふことを今日のあそひによせて人々になん
歌たてまつらせ給ふ
はのみゆる袖くちものすそかざみなと
汗衫也きぬのうへに着するものなり
人たまひのおくに　人給出車名也權記多く此名あり
清少納言枕草子云ときの所の御車の人たまひなと
あまた引つゝきて
しちなともみなをしおられて
昔は女房車にもしちをたてける本儀歟
さゝのくまにたにあらねはにやつれなくすき給ふに
も
古今秋歌　さゝのくまひのくま河に駒とめてしはし水かへか
けをたにみん
かけをのみみたらし河のつれなきに
みたらし河は神山よりなかれ出て賀茂社貴布禰片
岡社の中よりとをれる小河なり御手洗ともかけり
餘社のまへになかるゝ河をもみたらし河とよめる
歌あり松尾社にもみたらし河とよめり但松尾は賀

茂一體の神なる故なり能因歌枕にも神の御前なる水をみたらしと云と云々兼盛歌にあさまなるみたらし河といへり富士のことなり

大將のかりの隨身殿上のそうなとのすることはつねのことにはあらすめづらしき行幸なとのおりのわさなるをけふは右近の藏人のそうつかうまつれり

大將行粧の時一員府官供奉する例なり右近の藏人のせうは藏人右近將監なり一司に皆かみすけせうさくわんあり近衞府は大將はかみ中少將はすけ將監はせう將曹はさくわんにあたるなり六位の侍將監になりたる時左右近のせうと喚なりかりの隨身に供奉身とはかりそめの義なり一員當日はかりかりに隨身に供奉したる由なり

草木もなひかぬはあるましけなり

君子之徳風也小人之徳草也草上之時風必偃論語　訓若風行應如草靡文選

つほさうそくなどいふすかたにて

清少納言枕草子みくるしき物つほさうそくしたる人のいそきはしる市女笠にきぬをきて中ゆひたるを云也云々

あやしのものとものチをつくりてひたいにあてつゝみたてまつりあけたるを

大鏡云一條院春日行幸に御輿に大宮のあひのらせ給ふ云々田舎世界の民百姓まて神佛のやうにひたいに手を合せておかみ奉りけり

いかにおほしうむしけんと　慍ウンスウレヘ　老子

伊勢物語あてなる女の尼になりて世中を思ひうんして

齋宮またもとの宮におはしませはさか木のはゞかりにことつけて

もとの宮とは卜定所歟六條御息所在所なりさかきのはゝかりは神事のはゝかりのこゝろなりさか木とは眞賢木とも眞坂樹とも日本紀にかけり天照大神あまの岩戸をとち給し時八百萬神達天香具山の坂樹をとりていのり給しより神の緣木となす榊は非本字本朝作字也龍眼木と書之

こよみのはかせめして時とはせなとし給　暦博士推古天皇十二年歲次甲子正月戊午朔始用暦日

うきもんのうへのはかまにかゝれる

浮線綾の袴なりわらはのはかまなり若菜の巻にも

あり
はかりなきちいろのそこのみるふさの　かみそきの具足に海松を用也
むまはのおとゝのほとにたてわつらひて
左近馬場宿屋也云々左近馬場は一條西洞院右近馬場は一條大宮也
よしある扇のつまをおりて　檜扇也
しめのうちにはとある手を　古歌の詞歟可勘
ふりかたうもいまめくかなと　難舊　今めくはよみつけたることはなり
かさしける心そあたにおもほゆるやそうち人になへてあふひを　八十氏とは人の氏姓のおほき心なり強(アナガチ)八十にかきるへからす
或は又百姓ともいふ八は和語の數の多き心也八十島とも八百日ゆくともいふはみなおほき心なり八は數の限也
人とおひのりてすたれをたにもおけ給はぬを
大鏡云師宮和泉式部とおひのらせ給てまつりのかへさ御らんせられたり云々
いとましからぬかさしあらそひかなとさう／＼しう不挑也
かくことよなきさまに人も思ひくたすへかめるを　思下也
つりするあまのうけなれやと　泛子(ウケ)
いせの海につりするあまのうけなれや心ひとつを定かねつる　うけはつり針の緒に杉などを付たれは針はしつみもはてすして魚のくひやすくするなり
みそきの河のあらかりし世に
周禮ニ女巫祓除疾病禊ハ潔也故於水上潔除スみそき秡の事なり大嘗會御禊をはとよのみそきと云豊はゆたかなる心なり萬葉には禊身と書り禊は河邊にてすれはみそき河といふなり
ものゝけいきすたまなといふもの
遊仙窟云　窮鬼故調人　註云魂與鬼通をいふなり
御こゝちなをれいならすのみおほさるれはほかにわたりたまひて御修法なとせさせたまふに　大神事には佛事をいむゆへにほかにて修法をおこなはるゝなり延喜式云　凡忌詞内七言佛稱中子經稱染紙塔

稱阿良々岐寺稱瓦葺僧稱髮長尼稱女髮長齋稱片膳
外七言死稱直病稱息嘆稱鹽垂血稱汗打撫完稱菌墓
稱壌是神宮式也加茂同之
やまの井の水もことはりにとそある
くやしくもくみ初てける淺けれは袖のみぬるゝ山
の井の水　袖ぬるゝの歌は御息所の歌なり源氏か
さねて　淺みにや人はおりたつと詠しおくられた
るなり
袖のみぬるゝやいかに深からぬ御かことになん　以
前のうたなり
故父おとゝの御靈なと　大殿の父大臣のことなり
たけくいかきひたふるこゝろいてきて　猛タケシ
辛イカキ也いかかしきなり　ひたふる心とはひたやふる
といふうちふてたるやう也
身をすてゝやいにけん
身をすてゝいにやしにけん思よりほかなるものは
心なりけり躬恒
うつしこゝろならす　現心萬葉現人日本紀
梅の花木つたひちらす鶯のうつし心も我おもはな
くに

おもふもものをおもふなり
おもはしとおもふも物をおもふなりおもはしとた
におもはゝやなそ奥入
齋宮はこそうちにいり給へかりしをさま〳〵さはる
事ありてこの秋入給九月にはやかて野宮にうつろひ
給へけれは二たひの御はらへ　うちに入給とは入諸
司事也九月神宮祭禮月也
延喜式云凡齋王將入大神宮之時自九月一日迄卅日
云々
法華經事敏達天皇二年渡本朝云々羅什三藏譯又云
推古天皇御世聖德太子迎持法花經又遣渡小野妹子
なけきわひ空にみたるゝ我玉をむすひとゝめよした
かひのつま
なけきわひ出にし玉のあるならん夜ふかくみえは
玉むすひせよ
玉はみつぬしは誰ともしらねともむすひとゝめつ
したかひのつま吉備大臣
山のさすなにくれ
義眞和尚天長元年六月廿二日始補天台座主號修禪
大師

御そなともたゝけしの香にしみかへりたり
邪氣祈禱之時護摩に芥子を燒ことあり其香似邪香云々
御ゆするまいり　髮あらふこと也云々或云沐浴こと歟 史記に沐をゆするとよめり
あきのつかさめしあるへきさためにて
春除目を縣召といひ秋を京官と云春はむねと外官を任せらる外官とは外國の守介椽目までを縣召と云也京官とは京にある諸司共をむねと任せらるゝ故なりつかさめしと云は外國の人並に諸司をめして任官をさつけらるゝ故なり除目天武天皇四年三月始云々
をの〳〵いたはりのぞみ給事ありて　以勞望官之心也
こくつかひゆすりみちて（えきこえつかすイ）　動　響日本紀
御枕なともさなから二三日みたてまつり給へと
死人か枕をかふる事あり云々
三位中將 在所未勘　文武天皇四年月日大神高市麿始敍位者延暦廿年十一月日坂上田村麿敍從三位 元左中將是三位中將始歟　一條院御時道綱任也

人ひとりかあまたしもみ給はぬことなれはにや
人一人は夕顏上ことなり其外源氏臨終の儀をみたることなしとなり
にはめる御そたてまつれるも夢の心ちしてわれさきたゝましかはふかくそそめたまはましと
にはめるは鈍色なりいまゝかうすき心なり夫の服は妻の服よりは猶濃かるべき歟物忌令云夫者准父母服三十日服一年嫡子生故云々一等也妻者二等也輕重勿論歟
法界三昧普賢大士とうちのたまへる　法界三昧普賢菩薩之德也天台五佛頂懺過傳教大師御作云南無法界三昧普賢相又大唐西院和尚禮拜詞にも法界三昧普賢菩薩云々文句云大論稱菩薩爲大士亦曰開士大士同事也
法師よりもけなり　勝也古歌に露よりけなる又はたるよりけにみな此心なり又云賢なり又異萬葉
なにしのふといと〳〵露けけれとかゝるかたみさへなからましかはと
後撰兼忠かめのと歟 むすひおく形みの子たになかりせはなにしのふの草をつまし

袖のうへの玉くたけたりけんよりも
伊行釋摯掌上之珠摧心中之丹
奥入云此事非本文歟云々
案之袖上珊瑚といふ事あり
齋宮左衞門のつかさにいり給にければ
齋王三年齋之間卜定の所より諸司へ入給事也左衞
門府は近衞猪熊近衞以北猪熊以東に廳屋とてあり
齋宮入御諸司義兼日上卿著陣令勘御禊日時幷定申
前駈以頭藏人奏聞或殿上辨當日被進扇五位藏人爲勅
使頭若五位藏人兼日奉仰令殿上人調之頭若五位藏
人催遣二三車牛並内侍典侍藏人所前駈次入御野宮
一如入御諸司義
いつくしき御きよまはりに　嚴重　潔齋也
御念佛のあかつきかた　常行三昧引聲　阿彌陀經を誦
するなり
時しもあれねさめかちなるに
時しもあれ秋やは人にわかるべきさるは夜さむに
なれるころしも
風の音身にもしみけるなと
吹よれば身にもしみぬる秋かせを色なきものとお

もひけるかな
菊のけしきはめる枝にこきあをにひの紙なるふみ付
て
菊の枝には白色にても紫の紙にてもあるへけれ共
いまたひらけされはあをにひの紙に付なり紫の色
なり
人の世をあはれときくも露けきにをくるゝ袖をおも
ひこそやれ
東路の草葉をわけん人よりもおくるゝ袖そまつは
露けき拾遺六藏人參河
むらさきのにはめるかみ
むらさきのくろくてにび色にかよひたるなり
かつはおほしけちてよかく御らんせすもやとて
このほとのをこたりをおもひけち給へとあるか神
事なれば穢所の文をはよも御らんせしとうたかふ
なり
心の鬼もわかあやまちぬることを人やしるらんと
おそろしくおほゆる心也鬼とはおそろしき心な
り
野宮の御うつろひのほとにも

野宮は四條の西の末なり
御法事なとへぬれと正日まてはなをこもりおはす
正日とは四十九日の名なり然は御佛事すきぬると
は追善を引上て行はれたる歟
中將の君にひ色のなをしさしぬきうすらかに衣かへ
して
同父兄弟姉妹暇廿日服三月物忌令此心歟
兄弟の服なれはいろうすらかなるか十月の更衣な
り
姉妹の服を着する例可勘
服著更衣事萬壽四年十二月御堂薨長元々年夏有沙
汰宇治關白有更衣被着夏裝束重服猶有例輕服更衣
勿論也經任卿云服着夏冬衣替事公卿幷辨官所爲也
顯官之故也自余人不必着歟
いとおゝしく　雄秡日本紀　雄々敷也　男々しき心な
り
雨となり雲とやなりにけんいまはしらすと打ひとり
こちて
文選宋玉神女賦曰我帝之季女名瑤姫未行而已封于
巫山之臺所謂巫山之女高唐之姫旦爲行雲暮爲行雨
朝々暮々陽臺之下
有所嗟二首　劉夢得
庾令樓中初見時　武昌春柳似腰支
相逢相失兩如夢　爲雨爲雲今不知
鄂渚濛々烟雨微　女郎魂逐暮雨歸
只應長在漢陽渡　化作鴛鴦一雙飛
劉禹錫婦に後れて作詩也
これはいますこしこまやかなる夏の御なをしに
源氏は夫婦なれは三位中將よりは服色こかるへき
なりこまやかは濃字とかけりこき色なり
於夫本妻嫡子生妻也暇卅日服一年物忌令
くつしいたかりけり　苦痛也
かれたる下草のなかにりんたうなてしこなとのさき
いてたるを
拾遺十月はかりにとこ夏をおりて人のおこせたりけ
れは
冬なれと君かかきねにさきけれはむへとこ夏に戀
しかりけり
にほひをとりてや御らんせらるらんときこえ給へり
大宮へ夕霧を葵上にはをとりてや御らんすらんと

源氏のいはれけるなり
宮は吹風につけてたに木の葉よりもろき御なみたは
寄賦云木落葉而隱枝仰神宇之彥々晩雲衣之枝々遇
五悲札堂隅畢途獨韻於秋葉
さのものとなりにたる御ふみなれば
さやうのものといふことばなりそのものなり
そらのいろしたるからのかみに　鈍色唐紙也
いつもしくれはとあり
神無月いつも時雨はふりしかとかく袖ひつるおり伊行尺
はなかりき
大うち山をおもひやりきこえなからえやはとて
白雲の九重にたつみねなれは大うちやまとむへも
いひけり兼輔
此歌の心猶不叶歟此外在大内山歌歟今の歌の心
ならは白雲のかさなりたるをおもひやる歟　遠心
歟
えやはとて　色ならはうつるはかりもそめてまし思
ふ心をえやは見せける
みなれ〳〵てえしもつねにかからすは戀しからしや
みなれ木のみなれそなれてはなれなは戀しからん
や戀しからしや
あてき　紫日記云上東門院の上童にこの名あるよし
みえたり昔はなにきといふ事定まれる事なり
くろきかさみ火さう色のはかま　黒汗衫萱草色紅の
黄ばみたるなり凶服也
をくれさきたつほとの定なきはと
末の露もとのしつくや世の中のをくれさきたつた
めしなるらん
うつせみのむなしき心ちそし給ふ
からのもやまとのも　詩歌也
かしこの御てやと　これは賢字也長恨歌
ふるき枕ふるきふすま誰とともにかと
鴛鴦瓦冷霜花重舊枕故衾誰與共
しもの花しろしとあるところに
以前詩歟重與白參差するにや如此事常習也郢曲な
とにも本字をあらためて當座の景をいふ是故實也
古來其例多此物語中にも大將軍墓草初秋とある詩
を草初滋なと誦せり又四條大納言公任の和漢朗詠
集にはおほく古集の句を一二字を改て入たる事あ
り文選昌宮賦一句に獲落危牖壞宇秋有秋風とある

を有秋聲とあり又樂天の詩に可是禪房無熱到とあるをも不是禪房と改たり此等之例なり

思つきせぬことゞもを

鴈のくるみねの朝きり晴すのみおもひつきせぬ世中のうさ古今

無文のうへの御そにひ色の御下かさねえいまき給へるやつれすかた

無文袍平絹なり鈍色下襲共着服儀也卷纓又同

かのゐなみくんしたりつる　居並也

衣かへの御しつらひ　十月更衣御裝束也

棊うちへんつきなとして　篇突篇築

御ふすまをひきやり給へは　毛詩云衾征把衾與裯註曰衾被也　論語曰必有寢衣長一身有半註曰孔安國云今之被也又曰文綵雙鴛鴦裁爲合歡被鴛鴦被者鴛鴦文錦被也　古詩曰昔時衾同被今年若胡越之也

舊事本紀曰高皇產靈尊以眞床追衾覆於皇孫衾は紅色紅也衾ともいふ四角四方也中重ありうはさしの組あり女御御入内夜女御の御母儀奉り給ふ例なり云々

續日本紀云賜五位以上御衾及衣云々

とけかたき御けしき　難解也

ゐのこのもちゐ　群忌隆集曰十月亥日作餅食之令人無病也

掌中曆曰亥子餅七種粉大豆小豆大角豆胡麻栗柿糖類也

このもちゐから數々所せきさまにはあらてあすの暮にまいらせよけふはいまはしき日なり

亥子餅は色々也三日夜餅は白一色なれは數々にはあらてと云なりいまはしき日とは重日を云なり

ねのこはいくつかつかうまつらすへう侍らん

亥子の次日なれは子のこと惟光か當座申たるなりふるくよりの名目にはあらざる歟秘說あり

みつかひとつにてもあらむかし　紫明抄云三日夜餅三之一事爲殊秘事云々一說云三日夜餅は女の年の數を調する也紫上十四なれは十をはをきてその餘を四といはんをいむ心地に三か一といはれたるかもとより員數定たるものならは惟光いくつかと尋申へからす紫の上の年齡を惟光しらさる故也待賢門院御入内三日夜餅記德大寺左府記　紫檀筥紋鶴丸摺貝也　普通の硯筥よりはたかさも大さも過分也銀小器三に白色

の餅のまろきを御歯固の物具盛たるやうに三に同
様にうつくしく盛て御箸の臺は銀にて洲濱を作て
鶴のたちたるに御箸をくはへさせて御所あらはし
に被取出也
三かの夜の餅はくはしわつらはしきけは淀野にはゝこつむなり拾遺貫方朝臣　此餅又各別歟如何
いまはしめてぬすみもてきたらん心ちするも
伊勢物語云
昔男ありけり女のえうましかりけるを年をへてよはひわたりけるをからうしてぬすみ出てゝいとくらきに來けり
心しらひて　心知也心つかい也
かうこのはこを一さし入たり　香壺匣或香粉筥香壺匣は定れる調度也入諸香器也
士記曰　高倉殿移從時寢殿裝束　南二階一脚上置火取湯汁坏中階
唾壺打亂筥下置硯匣一合兼筥也　次立唐櫛匣次鏡臺北立一脚置厨子二脚其上東置櫛筥一双其下立香壺匣西置菓子匣其下置藥匣
一說云香粉筥歟普通之手箱也件懸子にちいさき箱等有或鏡箱或白粉箱或薫物筥等と號す香は薫物也粉は白粉也是等筥に納るによりて手箱の一名を香粉匣筥と云也
いまはさるもしいませ給へよもましり侍らしとあなることといまはよもましらしといふなり
この箱をまかてさせ給へるにこそ　退　食を退也
けそくいときよらにて　花足臺を筥の中に入たるなり
新手枕の心くるしとて夜をやへたてんとおはしわつらはるれは
にひたまくら　にゐは新なり萬葉に新殿をにゐないのこやとよめり
伊勢物語若草の新手枕をまきそめて夜をやへたてんにくからなくに
いま后三本共になし
宮つかへもおさ〳〵しくたにしなし給へらば
攝論曰敗壞者若無有志𧄍乃至是名敗懷相志𧄍者若有人不能修集善法除滅惡法於此事中有力名爲志𧄍其雖復身若天王光如日月若不能修集善法除滅惡法者各爲無志𧄍也身色醜陋形如餓鬼能修善除惡乃名

有志髒耳本是丈夫志髒之說云々
十住論曰是儜弱怯劣無有大悲非是丈夫志髒之言也
古今集　とのへもる身のみかきもりおさ〳〵しく
もおもほえす伊勢物語またわかけれはおさ〳〵し
からす躬恒序云あるしのおさ〳〵しけれはをかし
くすみなれたりおさ〳〵しは長々也成長の義也た
とへはおとなしきなとも心得へしおさ〳〵の詞に
はかはるべき歟
なれはまさらぬ御けしきの心うきことゝ
みかりするかたのゝをのゝなら柴のなれはまさら
て戀そまされる古今
みそかけの御さうそくなと例のやうにしかけられた
るに女のかならはぬこそ
褷架（ミソカケ）　延喜式　御衣架也　玄荷　神衣　禮記曰男子
不レ同ニ褷枷一不レ敢懸ニ於夫褷枷一（註曰竿謂之）　今案其上存
日には装束同様に源氏と懸しか今はかけならべす
と云なり禮記之心には可替也
色もおりさまもてゝろことなるをかひなくやはとて
かひなくやは卑下のよしなり
春やきぬるとも

あたらしくあへることしをもゝとせの春やきぬる
と鶯ぞなく六帖貫之
あたらしきとしともいはすふるものはふりぬる人の
なみだなりけり
（るイ）あたらしき年はといへどしかすかにふりぬるもの（我身ふりぬる今日にぞ有ける）
は涙なりけり

第七　賢木

巻名　神かきはしるしの杉もなき物をいかにまか
へてをれるさかきそ
ひたみちにおもひたち給ふ　ひたすらにと同心歟
おやそひてくたり給ふれいもことになけれと　殊
に或說毎也たひことに也
圓融院御時齋宮くたり侍けるに母の齋宮のもろと
もに鈴鹿山こゆとて
（拾遺）世にふれは又もこえけり鈴鹿山むかしのいまにな
るにや有らん（徽子女王 齋宮女御）
大淀のうらにて
おほよとの浦たつ波のかへらすはかはらぬ松の色

をみましや齋宮女御徽子 式部卿重明親王女母貞信公女也 承平六年爲
齋宮歸京之後天暦二年十二月入内同三年四月爲女
御生規子女王此女王爲齋宮參向伊勢之時母女御被
相具雖摸此例延喜以後近代の事なれは例もことに
なけれとゝいふ歟此物語のならひ今古准據なき事
をはたのせさるなり

野宮にまうて給九月七八日のほとなれは
　齋宮群行九月十六日御祭前事也

心あはたゝしけれと　周章㥕

いてやとはおほしなから
　われをのみおもふといはゝあるへきにいてやこゝ(をイ)
　ろは大ぬさにして古今

たちならさゝりつらむと

くろ木のとりゐともさすかにかう〳〵しく
　或説くろ木とはくろもんさといふ木なり云々
　ただ又皮つきたる木をもいふか
　くろきの屋仁徳天皇の御時はしまると云々

ひたきやかすかにひかりて
　火燒屋炬舍 火爐順和名 助鋪(ヒタキヤ)又云コヤ

かうしめのほかにはもてなし給はて 注連(シメ)日本紀
　御綱縄舊事本紀

はなやかにさしいてたるゆふつくよに 夕付夜日本紀萬
　葉 暮月夜萬〻 初學記云月七日爲魄云々源氏野宮に
　來臨も九月七八日比なり

かはらぬいろをしるへにてこそいかきもこえ侍りに
けれ
　千はやふる神のいかきもこえぬへし(大宮人の見まくほしさにイ)いまはわか身
　のおしけくもなし伊勢物語
　千やふる神のいかきもこゆる身の草のとさしに何
　かさはらん

神かきはしるしの杉もなきものをいかにまかへてお
れる榊そ
　戀しくはとふらひきませわかやとは三輪の山本杉
　たてる門
　我庵は三輪の山下戀しくはとふらひきませ杉立る
　門古今

をとめ子かあたりとおもへは榊葉のかをなつかしみ
とめてこそおれ
　未通女子(チトメコ)萬葉 少女日本紀 乙通女同
　榊葉の枝さすかたのあまたあれはとかむる神もあ

らしとそおもふ拾遺
置く霜にいろもかはらぬ榊葉のかをやは人のとめ
てきつらん貫之集
さか木葉のかをかくはしみとめくれはやそうち人
もまとひせりけり拾遺神樂歌
あかつきの別はいつも露けきをこは世にしらぬ秋の
そらかな
彼業平朝臣伊勢のかりの使のたよりに齋宮わたり
にて夢かうつゝかとたとりしあかつきの別におも
ひよそへらるゝ歟
おほかたのあきの別もかなしきにねななきそへそ野
への松虫
此歌源氏の歌とみえたり水原抄に源氏二首つゝけ
てよみ給ふに御息所の返歌なき如何と云り詞書わ
りなき御心まとひともにこともゆかぬとあれは返
歌なきもその故歟不可及疑貽歟
十六日御はらへし給ふつねのきしきにまさりてちや（長）
（奉送使）うふそうしなと
天暦御時齋宮くたり侍けるときの長奉送使にてま
かりかへらんとて　中納言朝忠

よろつよのはしめとけふを祈をきて今行末は神そ
しるらん拾遺
かけまくもかしこき御前にとて
かけまくもかしこけれともいはまくもゆかしけれ
とも春日山萬葉短歌人麿
ゆふにつけてなる神たにこそ
復令粟忌部祖天日鷲神造木綿者東木綿（アツマユフ）十二反安藝
木綿四反舊事本紀
あまのはらふみとゝろかしなる神も思中をはさく
るものかは古今
榊葉にゆふしてかけて誰世にか神の御前にいはひ
そめけん拾遺
やしまもるくにつみ神も心あらんあかぬ別の中をこ
とはれ
舊事本紀云伊弉冊尊先産生淡路洲爲胞意所不快故
曰淡路洲即謂吾耻也次生伊豫二名洲次生筑紫洲次
生壹岐洲次生對馬洲次生隱岐洲次生佐渡洲次生大
日本豊秋津洲
因斯以先所生謂大八洲矣
惣産生大八洲次六小島合十四ヶ島其處也　小島皆

是水沫潮凝而成者也
宮の御返のおとなひたるをうちほゝゑみてみたまふ
水原抄云上に宮の御かへしは女別當してとみえたり源氏もし宮の御手跡と存し給ふか又女別當手跡とはみしり給へともおとなひたる詞つゝきはかりをほめ給ふ歟云々
案之女別當之筆跡なりとも歌は齋宮の御歌勿論なり仍おとなひたるとは歌の事たる歟其故は源氏の歌にわかぬ別の中をことはれとあるになをさりことをまつやたゝさんとあるをおとな／＼しきといへるか、又同抄にやしまもるの歌を源氏兩人へ齋宮(御息所)まゐらせらるゝ歟云々これまたしからす御息所へはれいのつきせぬことともきこえ給へりとはかりかきて歌ありともみえさるにやもし又歌あれとも物語家略之歟かけまくもかしこき御前にとは齋宮への心なりくにつかみの歌は齋宮の御歌なり
みやすところ御こしに乘給へるにつけても父おとゝのかきりなきすちにおほしこゝろさしていつきたてまつり給しありさま

世繼云忠平のおとゝの御女前坊のみやす所にておはせしか終に御位もきはめ給はすなりにしかは云々此事歟
十六にてこ宮にまいりたまひて
玄宗末歳始選入之時十六今六十(樂府上陽人)
ゆゝしきまてみえたまふ
ゆゝしきは兩樣に通する詞なり忌の字をゆゝしとよむこれはいま／＼しき心なり又勝美の心にも多用之今のゆゝしきはその心か
わかれの御くしたてまつりたまふほとに(群行儀)
齋王御輿居嘉喜門外舁木等依召入自其門自大極殿北面東戸下御也女房等先下自東昭訓門持几丁等參會主上所給櫛不令落至勢多納給云々其後毎日在御輿云々齋王給櫛後出自大極殿東戸乘輿出昭訓門於御前結付舁木出給也又云小櫛筥中入櫛之時藏人褁檀紙獻之云々白河院仰曰件櫛更不褁紙只入筥云々或云齋王給櫛之後不復本直座出給歟(花園左大臣記) 齋王群行儀上(卿要抄)(太政大臣雅實公記)西河御禊儀如入御諸司野宮儀幣褁内侍早旦向八省(六位藏人進之云々)上卿奏官命草出御南殿如恒乘輿到大極殿後房上卿以頭藏人

奏清書幷使王申御馬由歸出返賜宣命其次可給御馬
旨仰之齋王御輿留嘉喜門前
行事幷付頭若五位藏人奏之
供御手水
頭爲陪膳五位藏人爲役送
主上出御大極殿　六位藏人持御笏或幷齋王額櫛筥
頭若五位藏人供御笏
御拜畢召五位藏人仰齋王可參入給之由五位藏人召
寮頭仰之或仰辨齋王入御着座
主上召額櫛筥
頭若五位藏人執筥付內侍
還宮如恒
はしやうにたてつゝけたるいだしくるまともの
八省　中務　式部　治部　民部　兵部　刑部　大
藏　宮內省也孝德天皇大化四年二月始置之
さかきにさして　西四條齋宮にさかきにさして
伊勢の海ちひろの濱にひろふとも今はかひなくお
もほゆるかな敦忠集
すゞか河やそせのなみ

鈴か河やそせのたきをみな人のめつるもしるくと
きにあへるときにあへるも催馬樂
鈴鹿河やそせわたりて誰ゆへかよこえにこえん妻
もあらなくに
又の日關のあなたより
あふ坂の關のあなたもまたみねはあつまのことも
しられさりけり
御ていとよし〳〵しくなまめきたるにあてなるけを
すこしそへたらましかはとおほす
ことそきてかき給へるとあれは手跡のよしあるに
あてなる心詞をそへばやとあるか又能書中にも隨
分に難あるにや定事也小野道風弘法大師之御筆大
內の額を難したることもあり
人やりならすものさひしきに
人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひて
いさかへりなむ古今
春宮にもひとたびにとおほしめしけれ(し)とものさはか（イうちにもおほしなけきて行幸あり）
しかるへきにより日をへてわたらせ給へり●よろつ
の事をきこえしらせ給へといともはかなき御ほと
なれはうしろめたくかなしとみたてまつらせたまふ

李部王記云延喜御門崩後御樂之間
春宮朱雀院也七歳御時御舅貞信公于時左大臣爲御供御
參内主上御對面之間有五ヶ條之仰一者可專神事二
者可仕寛平法皇三者可聞左大臣貞信公訓四者可哀
古人其外一ヶ條御忘却春宮御退出之時左大臣被奉
問之非記正文取意

おほきおとゝ心いとさかなく(不良)きふ(急)にいちはやう(威强)おは
して

後漢書ニ臣有韋弦といふは韋はをし皮也をし皮と
は鞟也是を帶に用は緩也弦者弓つるなり是を帶に
用は急也これを人の緩急の性にかたどるなり君急
なる時は臣ゆるく君緩なる時は臣急なるべしとみ
えたり朱雀院は御心なよひたるかたすきてとおれ
は性急なる左大臣政を輔然もそのゆへなきにはあ
らさるにや

のち〳〵の御わさなとけうしつかふまつり給へるさ
ま

絶(ワサ)　事(ワサ)論語曰本紀　孝事　孝養のこと也

ふちの御そにやつれ給へるにつけても　纎衣(フチコロモ)也順和名

藤衣とは服者の着するものなり本儀は藤の皮にて
をれる布也御素服に布を用此儀也主上は以日易月
とて十三日着御して令脱御也又裁麻とて麻布をも
用也僧の着する黒衣も佛の御服云々
國史曰仁明天皇承和七年五月癸未後太上天皇崩了
淳和院天皇除素服着堅絹御冠橡(ツルバミ)染御衣以臨朝御簾
及屏風縁幷用墨染細布

御四十九日まては女御みやすところたちみな院につ
とひたまへりつるをすきぬれはちり〳〵にまかてた
まふ

七條后うせ給ひにけるのちによみける伊勢
おきつなみあれのみまさるみやのうちは云々
秋の紅葉と人々はをのか散々わかれなは
ましてはるゝ世なき中宮の御心のうちなり

おほきさきの御こゝろもしり給へれは心にまかせ給
へらん世のはしたなみすみうからむを　呂后爲人剛
毅史記
呂太后の事などをおもひていふなり

かけひろみたのみし松やかれぬらむ(にけんイ)下葉かれ(吹イ)行とし
の暮かな
松は君子樹也

さえわたる池の鏡のさやけきにみなれしかけをみぬそかなしき

大和物語式部卿におはしましける時亭子院にすみ給けりこの宮の御ともに兼盛まいりけりめし出てものし給なとしけりうせ給ひて後又かの院をみるにいとあはれ也池のいと面白きに哀なりけれはよめる　池はなをむかしなからの鏡にて影見しきみかなきそかなしき

粧閣妓樓何寂靜柳似舞腰池似鏡白氏文集雨朱閣

案之池鏡在其心乎此詩貞元双帝子昇仙舊宅爲雨朱閣也舊院仙洞幽連致潜相通歟

としくれて岩井の水も氷とちみし人かけのあせもゆくかな

けふよりやあまのかはらはあせなんそこひともなくたゝわたりなん後撰

ふるき色はかへりて旅こゝちしたまふ

古今秋山のもみちをぬさと手向れはすむ我さへそ旅心地する

さふらいにとのゐものゝふくろおさおさみえず

殿上宿直人の名字かきたる簡殿上日給簡を納むる袋の事なり云々

一說云一年の中の公事の上日をしるして官家より公家執柄大臣家に獻する袋草子事歟云々

此事有殊秘說註別紙なり

きさきは里かちにおはしましてまいり給時の御つほねには梅壺をしたれはこきてんかけてかんの君すみ給とう花殿のむもれたりつるにはれ〳〵しうなりて

梅壺凝花舍也　弘徽殿　登花殿以上后町西殿女御等曹司也

おとゝの御なかもとよりそは〳〵しう　觚稜文選

むかひはらのかきりなきとおほすは　當腹事也

子依ㇾ母被ㇾ抱見史記　子依ㇾ母貴公羊傳

かものいつきにはそむわうゐたまふれはおほくもあらさりけれとさるべき女みこたちやおはせざりけん

孫王爲齋院例　直子内親王文德孫王中務卿惟彦親王女　仁和五年卜定孫王例此一度歟仍おほくもあらさりけりと云也

御かとは院の御ゆいごんたかへす哀におほしたれとわかうおはしますうへにも御心なよひたるかたすきてつよき所おはしまさぬなるべし　麗也うるはしく

なよゝかなる也
史記云孝惠爲人仁弱
五たんの御すほう　五檀御修法不動大威徳降三世軍荼利金剛夜叉也
あさ夕みたてまつる人たにみるめにあかぬ御ありさまなれは
いせの海士のあさなゆふなにかつくてふみるめに人をあくよしも哉
たゝこゝにしもとのゐ申さふらふとこはつくるなり
近衛夜行の事也
又このわたりにかくろへたる近衛つかさそあるへきはらきたなきかたへのをしへをこするそかしと大將はきゝたまふ
大將のほかに又かくろへたる近衛つかさ此邊にあるよし鮒若承香殿のせうとの藤少將大將のほかに
又腹きたなきとははらくろきと云也
夜ふかきあかつき月よのえもいはすきりわたれるに
世繼云一條攝政殿弘徽殿飛香舍の局に入てあさぼらけに冠をしいれて出給ければ隨身さき聲に御さきをおいけり
御いのりともし給てこのこともひとゝめさせ奉らむとまて
伊勢物語云このおとこいかにせん我かゝる心やめ給へと神佛にも申けれといやまさりにのみなりまさりつゝなをわりなく戀しくのみおほえけれは陰陽師かんなきよひて戀せしといふはらへの具していきけるはらへけるまゝにいとかなしきことかすまさりてありしよりけに戀しくのみおほけれは戀せしとみたらし河にせし御祓神はうけすもなりにけるかなといひてなんいきける
ぬりこめにをしいれたてまつりつ
いせ物語にも朱雀院のぬりこめなどあり
ひれふし給へり　蹀臥
よにふれはうきこそまされとおほしたつに
古今世にふれはうきこそまされ御吉野の岩の陰道ふみならしてん
せきふしんの見けんめのやうにはあらすとも
史記云呂后怨戚夫人其子趙王因戚夫人斷手足去眼煇耳飲瘖藥使居厠中命曰人彘(テイ)
冷泉院東宮也宮の御ためもあやうく

孝恵帝元年十二月帝晨出躬趙王少不能蚤起太后聞其獨居使人持酖飲之黎明孝惠還趙王已死史記
式部かやうにてや　紫式部か日記に大式部もと殿の宣旨とし老たる人なりとみえたり
よゐの僧のやうに　夜居僧也二間護持僧也
たまのきすに　白玉之珠尙可磨見毛詩明月之珠不能無瑕
うりん院にまうて給へり
雲林院にて櫻の花の散けるを讀る　承均法師
古今 いさ櫻我もちりなん一さかりありなは人にうきめみせなむ
雲林院は淳和の離宮也仁明天皇に處分し奉給次常康親王傳領本堂は彼親王堂也其後御願寺として天暦に寶性僧都別當拜補せられなとして殊尊敬あり又天暦七年正月八日於雲林院令轉大般若又康保四年五月十四日始從今日於眞言院東寺雲林院蓮臺寺寶相寺講仁王經限廿ヶ日竟之爲息災也本尊千手觀音在靈驗云々又謙德公之康保元年二月廿二日補雲林院別當予時參議従四位上小右記云定覺阿闍梨年來籠居雲林院也
猶うきひとしもそとおほしいてらるゝをしあけかたの月影に
　あまの戸をおしあけかたの月みれはうき人しもそ戀しかりける
念佛衆生攝取不捨とうちのへておこなひたまへる
　一々光明遍照十方世界云々見觀無量壽經
淺茅生の露のやとりに君をおきてよもの嵐そしつ心なき
れいならぬことおもくなりて御ぐしおろし給ける日上東門院中宮と申けるときつかはしける　一條院御歌
淺茅生の露の宿りに君を置て塵を出ぬることそかなしき
吹かふ風もちかきほとにてさい院にもきこえ給けり
雲林院は紫野也仍齋院にちかきと云也
ゆふたすき
　木綿を繦にすると云也舊事本紀曰以天香山之天日蘿縵爲手繦古語拾遺に以日蘿葛爲手繦といへり

むかしをいまにとおもひたまふるもかひなく
いにしへのしつのをたまきくりかへし昔を今にな
すよしもかな
ちかき世にとのみなんらう〳〵しく
良々　亮々日本紀　案之りやう〳〵しきにはかはる
へき歟是は上﨟しき心也　﨟々也
六十巻といふふみよみ給ひおほつかなき所とかせな
としてきゝおはす
天台六十巻
本書卅巻　玄義十巻　文句十巻　止觀十巻
智者大師作　末書卅巻　釋籤十巻　疏記十巻　弘決十巻
妙樂大師作是號三大部也　中右記云近日主上學六十巻給一
條院令學六十巻給例也
このもかのもにあやしきしはふるひ人とも
柴振人也木葉なとかきあつむるいやしきしつのお也木の葉の散かゝりたるを打拂ふ心也
一説に皺古人年老てしはよりたる人也　阿佛房説物かたりの面は
賤者の躰也老人とはみえさるなり
くろき御くるまのうちに　服者車也板車なとをいふ
歟
やまさとのつとに　集日本紀　土産　裹禺案

もみちは獨み給ふる錦もくちおしう思給られ侍は
みる人もなくてちりぬるおく山の紅葉はよるのに
しきなりけり古今
なごやかにそおはします
あつふすまなごやかならて云々
大宮の御はらからの大納言の御子頭辨といふか
同胞日本紀　腹同同　腹族
一腹の事也但この物かたり中同腹ならざる兄弟を
腹からといへることもある歟
れいけいてんはこう日をつらぬけりたいしをちたり
と　麗景殿也
漢書曰荆軻慕燕丹之義欲刺秦王其精誠上感於天白
虹貫日太子畏之註曰後漢書詳節云貫猶屬也虹蜺主
內婬聰明蔽塞政在臣下婚戚干朝君不覺悟虹蜺貫日
燕の太子丹は始皇をかたむけんとせしにいま源氏
をたとへたるなり證本云日につけりをもちふべ
し
かすみも人のとかむかしも侍けることにや
山櫻みに行道をへたつれはかすみも人の心なりけ
り

身のみものうきほとに
　數ならぬ身のみ物うくおもほえてまたるゝまてに
　成りにけるかな
しも月のつゐたちころ御こきなるに　御國忌
　持統天皇元年設國齋於京師諸寺
中宮の御八講たまの軸へうしひもちすのかさり
　玉軸表紙紐軼簀文巻也
　軼簀とは卷物のたけなるすの面に錦をゝしてへり
　をさしてくみの緒をつけたる也經にかきらす書籍
　等をも納物なり
たきゝこるほと　五巻日なり　採薪及菓蓏(コノミクサノミ)隨時恭敬
　與法華經
　法花經をわかえしことは薪こりなつみ水くみつか
　へてそえし行基菩薩
御子たちもさま〳〵のほうもちさゝけてめくり給に
　伊勢物語云田邑のみかとゝ申御門おはしましけり
　そのときの女御たかき子と申いまそかりけりそれ
　うせ給て安祥寺にて御わさしけり奉りあつめたる
　物ちさゝけはかりありそこはくのさゝけ物を木の
　枝に付けて堂の前に立たれは山もさらに堂のまへ
にうこき出たるやうになんみえける
やまのさすめして御いむことうけ給へき　受戒事也
よかはのそうつちかうまいり給て
　惠心僧都隱居横川仍號横川僧都
くろはうにしみてみやうかうのけふり　黒方也
ないえんたうかなと聞給ふも
　内宴者唐太宗之舊風也嵯峨天皇弘仁三年幸神泉苑
　覽花樹命文人賦詩是始也延喜二年正月廿日御記云
　左大臣令菅根朝臣奏先朝雖御僊寢至有内宴多用仁
　壽殿此度内宴可仁壽殿行云々
　廿二日藏人及所司裝束仁壽殿藏人或清涼殿記等廿
　日註曰廿一二三之間若有子日便用之
　新儀式云正月廿日内宴事前一日藏人所雜色以下幷
　所司裝束仁壽殿木工寮立舞臺東庭遣使藏人所於親
　王第示仰明日可參之狀又藏人頭奉仰令廻仰可參文
　人等當日御仁壽殿　踏歌事在初音巻
みやつかさとものくしいたけにおもへり　苦
あを馬はかりそ
　十節録云正月七日看白馬々性以白爲本天有白龍地
　有白馬是日見白馬即年中邪氣遠去不來也皐世記曰

高辛氏之子以正月七日恒登東山岡命靑衣人令列靑馬七疋調靑陽之氣馬者主陽靑者主春山岡者萬物之始人主之居七者七曜之淸徹陽氣之溫始也寶龜六年正月七日天皇御楊梅院安殿設宴於五位以上既而內厩宴進靑御馬兵部省進五位以上裝馬中納言石上朝臣進就版叙イ位宣命其詞曰令詔今日正月七日豊明聞食日爾在是爾以岡爾登遊止云々靑馬見多末位豆退云々承和元年正月七日天皇御豊樂殿覽靑馬助陽氣

　心喪中覽白馬事

貞觀十四年正月七日無節會去九月太后崩心喪中也召左右馬寮御馬於內殿前覽穠人不裝束

　白馬參中宮事

權記云白馬同參中宮給酒祿於寮官

千人にもかへつへき御さまにて　一人當千心也

みすのはしみきちやうもあをにひにてひまくよりほのみえたるうすにひくちなしの袖くち

靑鈍　山梔子色共出家服也

とけわたる池のうすらひ

さほ河にこほりわたれるうすらひの薄き心をわか思はなくに萬葉十

うすらひはうすき氷也と八雲抄にもあり而六帖の樋の所にうすらひの歌を入たり如何

岸の柳のけしきはかりときをわすれぬなと

岸容迎臘將舒柳　山意衝寒欲發梅杜甫

柳は非情にしてしかも心あり風に隨て氣をしる故に人柳といふ漢武帝園中蒔人柳一日三臥三起云々

むへも心あるとしのひやかにうちすんし給

音に聞松かうら島けふそみるむへ心ある海士はすみけり

みふなどの　御封太上天皇二千戶三宮各千五百戶

左のおとゝもおほやけわたくし引かへたる世のありさまものうくおほしなりはてゝちしのへうたてまつり給ふ

七十老致仕懸其所仕之車孝經註

尙書註曰伊尹既致仕老終以三公之禮葬之也正義曰伊尹湯之上相位爲三公必封爲國君之又受邑于畿內告老致政事於君欲歸私邑以自安禮記曰雖其致仕猶可即而謀焉漢丞相韋賢地節三年以老病乞骸骨丞相致仕自是始貞觀政要曰玄齡自以一居端揆十有五年

頻表辭位優詔不許十有六年進拜司空玄齡復以年老請致仕　本朝例孝謙天皇天平勝寶八年二月日正一位治部卿從四位下美努王子行左大臣橘朝臣諸兄致仕辭大臣　大臣致仕始藤原良世寬平八年七月十六日任左大臣十二月廿九日上表致仕詔許七十四　號致仕大臣昌泰三年十一月八日薨七十八　執政臣致仕例謙德公天祿年三十月廿日依病上表乞致仕勅許致太政大臣并隨身如故　東三條關白寬和二年七月廿日辭右大臣致仕永祚二年五月五日上表致仕太政大臣攝政等更蒙關白勅

案之致仕は雖辭官猶政事にわつかるを云也此致仕の准據古來難儀たる歟仍弘安源氏論議にも醍醐天皇御代致仕良世也といへとも執政臣致仕の例にあらすとて終不決云々此事有秘說　延喜八年二月九日庚戌御記曰召大臣給民部大輔大藏善行朝臣言致仕表依請許之

ひとそうのみ　一孫

春秋の御ときやう　春秋御讀經

ゐんふたき　掩韻

古集の韻字をふたきて何文字と推して勝負をするなり

上古掩韻を爲宗不好連句云々見孝筆イ範朝臣記

さるへきしふとも　集　詩集也

ひたりみきにこまとりにかたわかせ給へり

左右にかれこれをぬきとりて番也

はしのもとのさうひ

甕頭竹葉經春熟階底薔薇入夏開　樂天

我は今朝うひにそ見つる花の色をあたなるものといふへかりけり　古今

たかさこをいたしてうたふ　高砂　律　長生樂破

多加左古能左伊佐古能太加左乎能戶爾太天留之良太末太萬津波木多萬也名支曾禮毛加止左牟末之毛可止末之毛可渡禰利乎左美乎能見曾加介爾世牟多萬也名支名爾之加毛沙名爾之加毛名爾之加毛古々呂毛萬多伊介牟由利波名能沙由利波名乃介左々伊多留波津波名爾安波末之毛乃乎左由利波名乃

うちそをれてらうかはしく

そをれ戲たる也　亂又狼

つらゆきかいさめたうる丶かたにて

文王の子武王のおとうと丶うちすし給へる御名のりさへそけにめてたき成王のなにとかのたまはんとすらむ

史記魯世家曰於是卒相成王而使其子伯禽代握封於
魯周公戒伯禽曰我文王之子武王之弟成王之叔父也
於天下亦不賤矣然我一沐三握髮一飯三吐哺起以待
士猶恐失天下之賢人子之魯愼無以國驕人
むら雨　急雨　白雨
けはひのしたとにあはつけきを　形勢新猿樂記舌早也
淡付アハツカシ
ふたあゐなるおひの　二藍帶
時のいうそくとあめのしたなひかし給へる
右族　花族事也云々但是は有職事歟
おほやけの御かたにうしろやすからすみゆるは春宮
の御世心よせことなる人なれは
菅家は御外孫西宮左大臣は聟爲平親王を位につけ
んとて御門を傾申といふ讒によりて左遷せられ給
しことによそへていへる歟
かくのことつみ侍りとも　如斯罪あるとも也
あこへ侍し　過分義也云々あまえたる心也世俗にあ
こやかすと云ことある歟
ことさらにかろめろうせらるゝにこそ
輕哢也

第八　花散里

卷名　橘のかをなつかしみ郭公花散さとをたつね
てそとふ
人しれぬ御こゝろつからの
古今春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつろ
ふとみん　心つからはてつからみつからなといふ
がことしたゝ心から也
なにはかりの御よそひなく　無粧　無行粧也
よくなることをあつまにしらへて　和琴　有二能鳴
調一よそへていへるなり
かつらの木のおいかせに
天稚彦門之湯津楓樹舊事本紀
或馬津桂木日本紀　門に楓を植事是本說歟
たゝひとめみ給しやとりなりとみ給
此所誰人在所哉
すきかてに　難過也
夜やくらき道やまとへる郭公我宿をしもすきかて
になく

よし／＼うへしかきねもとていつるを
かこはねとよもきの離夏くれはうへしかきねも茂りあひにけり奥入
花散し庭の木のはも茂合て植しかきねもみこそわかれね紫明抄
つくしの五節
本朝月令曰五節舞者淨御原天皇之所制也
勘載未通女巻者也
ちかき橘のかほりなつかしう
國史曰垂仁天皇九年辛酉春二(三イ)月庚子朔天皇命田道間守遣常世國令求非時香菓今謂橘也十九年秋七月朔天皇崩明年三月間守至自常世則齎物也非時香菓八竿八縵焉間守於是悲歎之曰受命天朝遠往絶域萬里蹈浪遙度溺水是常世國則神仙秘區俗非所致是以往來之間自經十年豈期獨凌峻嶮之更向本土乎然賴聖帝之神靈僅得還來今天皇已崩不得復命臣雖生之亦何益矣乃向天皇之陵呼哭而自死之群臣皆流涙也
間守是三宮連之始祖也
いかにしりてかなとしのひやかにうちすし給
いにしへのことかたらへは郭公いかにしりてかなくこゑのする伊行尺
橘のかをなつかしみ郭公花散里をたつねてそとふ
奥入 橘の香をなつかしみ郭公かたらひしつゝなかぬ日そなき
万葉 橘の花散里にかよひなは山郭公とよませんかも
赤人集 郭公鳴て日數をたちはなの花散里にすむ人やたれ
万葉 鶯のかいこのなかの郭公ひとりむまれてしやかちちにゝてはなかすしやかはゝにゝてはなかす卯花のさける野へよりとひかへりなきとよまして橘の花をゐちらしひねもすになけはきゝよしまひはせんとをくなゆきそわか宿の花橘にすみわたれとり
とにかくに　左右也
世のさかとおもひなし給ふ
世のならひ歟但よからぬ習也　悪字の儀歟

河海抄卷第六

正六位上物語博士源惟良撰

第九　須磨（賦イ）

「卷名（イ本ナシ）　松島やあまのとまやもいかならん須磨のう
ら人しほたるゝころ源氏」

光源氏謫居此浦之故名之

かのすまはむかしこそ人のすみかなともあれ　光源
氏大將在納言の昔を尋て此所に隱居せらるゝ歟
古來赴謫所の人は配流の宣旨によりて左遷する也
今の源氏大將は讒におそれてわれと城外に籠居せ
らるゝにや周公旦東征の跡をおもへる歟風雷の變
異も相似たり又行平中納言も此義たる歟、古今集
云田むらの御時に事にあたりて津の國すまと云ふ
處にこもり侍りけるに宮のうちに侍ける人につか
はしけるとありかの野相公歌の詞には隱岐國にな
かされ侍ける時なと云々

叩ヒタ、ケ

人しけくひたゝけたらんすまゐは

あふをかきりに

我戀は行衛もしらすはてもなしおふをかきりと思
はかりそ

わかるへきかとて（門出）にもやと

古今集
かりそめのゆきかひちとそ思こしいまはかきりの
かとてなりけり

入道の宮（藤壺女院）よりも

男女に限らす佛法の道に入をは皆入道と號する也
藤原遵子三條關白賴忠女圓融院后　天祿四年三月十九日落飾世
號二入道宮一云々

あしろくるまのうちやつれたるにて

網代車　榮花物語云あやしのあしろくるまにてと
のにかへり給ぬ帥内大臣左遷の時の事也

くらゐをも返したてまつりて

致仕は辭官不辭位云々階位をとゝむるは罪科の時
の義なりいま位をかへすとあり如何
史記秦本紀第五　註云如淳曰嘗有爵而以罪奪爵以皆稱士
位といへりたゝし唐朝には位を辭することある歟
見貞觀政要
或又つかさをもくらゐと云ふことあるべし大臣を
は台位星階といふ和語にはほしのくらゐなどもい

ふ也不審あるへからず
貞觀政要曰玄齡自以一居ニ端揆ニ十有五年頻ニ表辭レ
位優詔不レ許十有六年進テ拜ニ司空ニ玄齡復以ニ年老ニ
請ニ致仕ー
わたくしさまにはこしをのへてなと
腰を屈するは官仕の禮也今腰をのふると有は休退
の心也
いちはやき世の
最強（イチハヤキ）　伊勢物語にいちはやきみやびをなんしける
とあり親行云すみやかなる心也水原　素舜云すくれ
たるといふ詞也紫明抄　案之急なる心也早の字也い
ちは最也いちしるしなともいふ心也
いのちなかきは心うく思たまへらるゝ
莊子曰壽則多辱
あめのしたをさかさまになしても
本文未勘出　經云日月墜墮地なと云體の心歟ある
ましき事也
みつからのおこたりになん
過怠の事也　懈怠の義にはあらす
いへはえにかなしう思へるさま

奥入　いへはえにふかくかなしきふえ竹のよこゑやたれ
と問（かこイ）人もなし
伊勢物語　いへはえにいはねはむねにさはかれて心ひとつに
なけくころかな
とらおほかみたになきぬへし
虎狼莊子　仁なき物は虎狼にすきたるものなしそれ
たにもあはれしりぬへきと云也
佛涅槃の時は虎狼も花をくひ人を舐てかなしむと
云へり
むもんのなをし
平絹直衣也或しゝら雖非凶服散班宿老公卿なとは
常着之今源氏も無官位人也仍着之歟
いはほの中おほしやらる
古今　いかならんいはほの中にすまはかは世の憂きこと
のきこえこさらむ
ことなしひにすくしつる
無爲日本紀
古今　村鳥の立にし我名今更にことなしふともしるしあ
らめや
とこ夏の花をたにみはてことなしに過る月日もみし

かゝりなん

奥入にはあふことなしの草そおいけるの歌をのせたり但其心各別也それはあふことなしとそへたり是は無爲無事と云儀也日本紀分明也ことなしふともの歌同心也ことなし草は忍草の一名なり

けにぬるゝかはなれは

（古今）あひにあひて物思ふ比の我袖にやとる月さへぬるるかほなる

たゝしらぬ涙のみこそ心をくらす物なれとの給て

（後撰第九源わたる）行さきをしらぬ涙のかなしきはたゝめのまへにおつるなりけり

文集なにくれさるへきふみとものいりたるはこなとさて（なイ）は琴ひとつそもたせ給ひける

染琴一張儒道佛書各三兩卷樂天既來爲主（百氏文集 草堂記）

りやうし給所々みさうみまきのけんたつふみ

領給　御庄　御牧　券　立文

あふせなき涙の川にしつみしやなかるゝみおのはしめなりけり

涙の川名所といふ說ある歟

後撰集におとこの伊勢へまかりけるに君か行かたにありてふ泪川まつは袖にそなかるへらなるとありしかれはいせの國の名所たる歟

但同集にいせわたる川は袖よりなかるとあるも猶涙のよし歟文選にも水滔々而日々涙なとあり只泪によせたる也非名所歟一說いせわたるとは五十瀬也非伊勢國云々然共猶以不審俊成卿女は此歌を（たイ）物語の中第一の秀歌と申されけり

伊勢わたる河は袖よりなかるれはとふにとはれぬ身はうきぬめり（後撰續 人不知）

水尾（萬葉）　水深（日本紀）　澪

涙川うかふみなはもきえぬへしなかれて後のせをもまたすて

水沫也　水廻は各別事也

院の御はかおかみたてまつり給とてきた山へまうて給　山陵事

神武天皇七十六年春三月崩橿原宮時年一百廿七歳明年秋九月葬畝傍（ウネビ）山地山陵

榮花物語云帥殿（伊周公）夜半はかりにいみしうしのひて御おちのあきのふはかり御ともに人二三人はかりし

てぬすまはれいてさせ給てこはたゝの御はかへまいり給ふ

見しはなくあるははかなき世のはてをそむきしかひもなく〳〵そふる

新古今小町　あるはなくなきは數そふ世の中にあはれいつれの日まてなけかん

かのみそきの日かりの御すいしんにてつかうまつりし右近のそうの藏人うべき(敍爵人)かうふりの程もすきつるをつゐにみふた(除籍)けつられてつかさもとけ(解官)て

秡除(ミソキシマス)日本紀

齋院御禊日事也かりの隨身事葵巻に先勘畢　解官ニ有二三義一一喪解二病解及百二十日解官也三理解

神にまかり申し給ふ

辭見(マカリマウシ)　日本紀いとま申也　古今紀き宗定かあつまへまかりける時に人の家にやとりて曉いてたつとてまかり申しけれはと云々

御はかはみちの草しけくなりて

古墳何世人　不識姓與名　化作路傍土　年々春草生　樂天

ときしあらはときこえて

おさめみかはやうなとまて

おさめ八雲抄には下女也とあり水原抄云おさめ(長女)とは曹司の事也御河とはひすましの事也云々又おさうる女御かはたもちといふ商人なといへりたとへはいふかひなき下女なとまてと云也案之行幸の後騎に厠長女洗女とてあり此事歟

御舟にのり給ぬ

神武天皇甲寅歳十月天皇親帥諸皇子舟師東征至速吸之門時有一漁人乘艇而至云々天皇勅授椎檣末令執而牽納於皇舟以爲海導者乙夘年春三月徙入吉備國起行宮以居之積三年間備舟檝之

崇神天皇五年十月科伊豆國令造船長十丈船既成之試浮海便輕疾行如馳故名其船曰枯野

おほえとのといひける所はいたうあれて松はかりそしるしなりける

後拾遺集良暹法師歌に

わたのへやおほえのきしにやとりして雲居にみゆるいこま山哉

とあり若此所歟但松はかりそしるし也けるといへり定有古歌歟可勘一說云渡邊橋東に櫻岸といふ所

あり昔此所に驛樓を立と云々
から國に名をのこしける人よりも行衛しられぬいへゐをやせん
楚之屈原かはなたれたりし事を云歟楚辭漁夫序曰漁父者屈原之所作漁父避俗時遇屈原忙而問之遂相應答屈原既放身舟遊江潭戯水側行吟澤畔履刑穢也顏色憔悴杜詩註曰屈原有宅在歸州
後漢書郡國志註曰荊州記稀歸縣北一百里有屈平故宅方七頃累石爲屋基今地名樂平
伊勢物語 いとゝしく過行かたの戀しきにうらやましくもかへる浪かな
うらやましくもとうちすし給ふ
十一月中長至夜三千里外遠行人若爲獨宿楊梅舘冷枕草床一病身白氏文集
まことに三千里のほかの心ちするに
伊行尺 三千里外隨行李十九年間任轉蓬在昌賦蘇武
赤人 此夕へふりくる雨は七夕のとわたる舟のかひのしつくか
かひのしつくもたへかたし
伊勢物語 我うへに露そをくなるあまの川とわたる舟のかひのしつくか
おはする所はゆき平の中納言のもしほたれつゝといひける
古今 田村の御時に事にあたりてつの國すまと云所にこもりて侍りけるに宮のうちに侍りける人につかはしける
在原行平朝臣 わくらはにとふ人あらはすまの浦にもしほたれつゝわふとこたへよ
こりすまのあまのみるめもゆかしきを鹽やくあまやいかゝ思はん
白浪はたちさはけともこりすまのあまのみるめはからんとそ思ふ
かとりの御なをしさしぬき
縑直衣絹なかとりと讀、絁をきぬと讀也、然は是も平絹の直衣也白襲のかとりもうすき絹也
よりゐ給しまきはしらなとをみ給ふにも
六帖 わきもこかきてはよりたつ槇柱そもむつましきゆかりと思へは
やう〳〵わすれ草もおいやすらん
古今 こふれともあふよのなきはわすれ草夢ちにさへやおひしけるらん

すくしくしう

健々也

しほたるゝ事をやくにて松島に年ふるあまもなけき

をそつむ秋までのいのちもしらす春の野のはきのふ

るえをやくとやくかな後拾遺

らうしくしう

此物語の中におほくらうありとかけり同心也上らうしきよし也

やかて御さうしんにてあけくれおこなひ給ふ

聖廟宰府御下向之後不斷御精進にて朝夕法花經を令ニ轉讀一給けりと云々叙意千言の中にも微々抛ニ愛樂一漸々謝ニ葷膻一なとあり又重陽の御作にも菊酒爲レ誰調長齋終不レ破云々

ふりはへ　うちはへて也

伊勢人の浪のうへこく小舟にもうきめはからてのらなし物を風俗伊勢人

いせ人はあやしきものそなとゝいへは小舟にのりて浪の上こく

むくらよりほかのうしろみもなきさまにて　今更に問へき人も思ほえす八重葎して門させりてん

尙侍退出事

或記云九條殿六條尙侍綏子永延元年九月十六日任尙侍初參東宮有寵長德之間雖侍靑園私與彈正大弼賴定朝臣奸後其事漸覺退出

いけるよにとはけによからぬ人のいひをきけん

戀しなん後はなにせんいける身のためこそ人はみまくほしけれ拾遺

すまにはいとゝ心つくしの秋風に

木のまよりもりくる月のかけみれは心つくしの秋は來にけり古今

行平の中納言の關ふきこゆるといひけんたに浦浪

與人云行平中納言歌尋能宣朝臣歌相似之云々

旅人のたもとすゝしくなりぬらむ關吹こゆるすまの浦風續古今行平

案之兩人釋有疑殆續古今集十六津の國すまと云ところに侍ける時よみ侍ける中納言行平旅人はたもと涼しくなりぬらしせきふきこゆるすまの浦風

枕はうきぬはかりになりにけり

ひとりねの床にたまれる涙には石の枕もうきぬへらなり躬恒

戀わひてなくねにまかふうら浪は思かたより風やふくらん

引歌 浪たゝは沖の玉もゝうきぬへし思ふかたより風や吹らん

ひやうふのおもてともなと

屛風の表裏兩說ありと云々然而此物語には繪のかたをおもてに用たり紅葉の賀の巻にも有之或說云宇多西宮兩說也宇多は蘇芳の方を面に用西宮說には繪を面とす仍或は屋の母屋の廂の屛風のしつらひも兩家各別也而此物語はむねと西宮の說を本とするによりて繪を面とする事有其謂云々　水原抄

この比上手にすめる千枝つねのりなとをめして

千枝　常則在二高名錄一共以畫工也

應和四年四月九日御記云召二左衛門志飛鳥部常則一圖畫西廂南壁白澤王像常則名字天曆御記中に多在之

つくりゑつかうまつらせばやと心もとなかりあへり

作繪　新猿樂記

つくり繪とはすみかきのうへを彩するを云也源氏のかゝれたる繪を彼輩に色とらせはやと也

綵色は畫師の口傳ある也云々

しろきあやのなよらかなる御そしほん色などたてまつりてこまやかなる御なをしおひしとけなく

白綾の御衣に紫苑色の指貫欵こまやかなる直衣とは色のこきなり濃の字也紫苑色は面は薄紫裏はもえきなり

釋迦牟尼佛弟子となのりてゆるゝかによみ給へる

釋迦牟尼佛弟子某歸命頂禮白佛言夫菩提道樹之月影遂隱沙羅之愁雲尼連禪河之水音空咽跋提之淚浪　本朝文粹願文

ゆるゝかとは緩也のとかなる心なり管絃郢曲の拍子にも緩急火引と付なり

おきより舟とものうたひのゝしりてこき行なともきこゆほのかにたゝちいさき鳥のうかへるとみやらるるも

鳥船事

日本紀云後生神名鳥之石楠船神亦名謂天鳥船神次生鳥磐櫲樟船神　彥火々出見尊御歌

日本紀 おきつとりかもつくしまにわかいねしいもはわすれしよのことくに　鸍宿萬葉

おきつとりとは鷗の名也舟をは鷗ににせておきつとりとおほくよめり詩にも鳧舟と作れりかもつくしまとは舟つく島と云心なり

萬葉六 おきつ鳥かもといふ舟の歸りこはやかのさきもり
はやくつけこせ
一本ナシ「さきもり萬葉に國々のさきもりつとひふなのりて
云々」
初雁は戀しき人のつらなれや旅の空とふこゑのかな
しき
我爲遷客汝來賓共是蕭々旅漂身欹枕思量歸去日我
知何歲汝明春 聞雁 菅家後集
心からとこ世をすてゝなく雁を雲のよそにもおもひ
けるかな
常世國(トコヨクニ) 日本紀　蓬萊山(トコヨノヤマ) 同
舊事本紀少彥名命行到熊野之御崎遂適於常世國
矣
萬葉松浦仙女よめる和歌 君をまつまつらの浦の未通女等は常世の國のあま
未通女鴨
又詠浦島子長歌白雲の箱より出て常世へに棚引ぬ
れは云々皇神祖の可見能大御世に田道間守常世爾
和多利夜保毛知麻泥許之祭吉田葉 間守 橘長歌
古今 おきもせぬ我とこ世こそかなしけれ春かへりにし
雁も鳴也

今案とこよは常仕世の心なり 仙境の名歟此歌たゝ我床によせてかくよめるなり
日本紀竟宴時從五位下行大外記兼近江少掾三統宿
禰公忠作歌詠思兼神云々とこよなる鳥の聲にそい
はとゝち光なきよは明はしめける
天照太神あまのいは戸をとち給し時思かねの神思
はからひてとこよのなかなき鳥をあつめてなかせ
たりし事をよめるなり見二日本紀一
月のかほのみまもられ給ふ
月顏似鏡無明罪風氣如刀不伐愁 後集
二千里の外故人の心とすし給つる
三五夜中新月色二千里外故人心 樂天八月十五夜
此詩者白樂天八月十五夜禁中に直宿して對月元稹
によする四韵の一句也今夜殿上の昔の遊を思いて
ゝ此句を誦せられける尤爲幽致乎
思賜の御衣はいまこゝにありとすしつゝ
去年今夜侍淸涼秋思詩篇獨斷腸恩賜御衣今在此捧
持每日拜餘香 後集
大貳はのほりけるいかめしくるいひろく 類廣也
このちくせんのかみそまいれる
筑前守隆爲都督所帶守以下官如例

榮花物語帥殿つくしにおはしつきたるにそのおりの大貳有國朝臣なりかくときゝて御まうけいみしうつかうまつり我子の廣業してきこゆ京の事おほつかなくおとろきなからまいるへく侍るに九國の守にてさすかにおもひのまゝにもまいらぬよし申させたり

御ありさまかたるにそちよりはしめ　文武天皇天寶二年八月十六日以大納言正三位石上麿難波朝武部物部宇麻男兼任太宰帥是始也

以前には大貳といひ今は帥といへり如何正帥は擬親王官仍承府務之人任權但有權帥者不大貳任大貳之間不任權帥依例也今大貳知府務之故擬以云帥歟大臣左遷之日任權帥然而不レ可レ知二府務一仍大貳知府務也

すき〳〵しさも人なとかめそときこえたり

古今 いて我を人なとかめそ大船のゆたのたゆたに物おもふころ

いさりせんとはおもはさりしを

古今小野篁 思ひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせんとは

むまやのおさにくしとらする人もありけるを

大鏡第二 菅丞相おもひのほかにつくしへくたり給けるときはりまのあかしのむまやにとゝまり給けるにむまやのおさいみしくおもへるけしき御らんしてつくり給へる

驛長莫驚時變改一榮一落是春秋

くしとは口詩也物にも書つけすして口に云詩なり白氏文集曰因口號絶句云々遊二大林寺一序　たとへは口つうたなとといへるかことし日本紀には口號とかきて口つうたとよめり口宣なといふも同心也

或云句詩四韵絶句にはあらて一句の詩也又云別の櫛をとらせたると云々或又くしとらするはくしせらるゝを書誤也駈仕とはかりつかはるゝ心也とも云へりいつれも今案のあやまり也

おほやけのかうしなる人は

考辭日本紀　勘事　勘當の事也

かのしかをむまといひけん人のひかめるやうについせうするなとあしき事ともきこえけれは

史記曰趙高欲爲亂恐群臣不聽乃先設驗持鹿献於二世曰馬也二世咲曰丞相誤邪謂レ鹿爲レ馬問二左右一

左右或默或言レ馬以阿ニ順趙高ニ或言レ鹿高因ッ陰中ニ
諸ノ言レ鹿者ニ以レ法秦始皇本紀
これやしほやくならんとおほしわたる
古今すまのあまの鹽やくけふり風をいたみ思はぬ方に
たなひきにけり
冬になりて雪ふりあれたるころ空のけしきもことに
すこくなかめ給ひて
悃默不能眠紛々專夜雪近着白屋埋遥知碧鮮所家僕
早逆散凌寒誰掃撒千萬言無効連濡亦嗚咽菅家
しものゝちの夢とすし給ふ
胡角一聲霜後夢漢宮萬里月前腸王昭君 朝綱卿作伊行釋には
血の涙と誦し給とかきて卞和玉なりと釋せり僻事
也詞にも胡のくにゝつかはしけん女をおほしやり
てとあり王君昭事也
たゝこれにしにゆくなりとひとりこち給
幾行南去雁一片西傾月伊行釋
今案両賢釋共以不分明
奥入云未勘云々
蓂發桂芳半且圓三千世界一周天
天廻玄鑒雲將霽唯是西行不左遷菅家代月答
あこの御すくせ
吾子御宿世也
みかとの御めをさへあやまち給ひて
みめとよむへし是師説なり日本紀には妃字をみめ
とよめり白氏文集にも八十一御妻とあり但さきの
やんことなき御めともいとおほくとあるをはおほ
んめとよむへき歟是は人臣の故也
かゝる山かつを心とゝめ給てむやと云にはらたちて
出えしり給はし
史記高祖本紀曰呂公曰臣有息女願爲季箕帚妾酒罷呂
媼怒呂公曰公始欲奇此女與貴人沛令善公求之不與
何自妄許女與劉季呂公曰此非兒女子所知也卒與劉
季呂公女乃呂后也生孝惠魯元
もろこしにもわかみかとにも世にすくれなにことも
人にことになりぬる人のかならすある事也
予歷賢古今歌詩自風騷之後蘇李以還次及鮑謝徒迄
于李杜輩其國詞人聞知者累百詩章流轉者鉅萬觀其
所自多因讒冤譴逐征戎行旅凍餒老病存沒別離情發
於中文形於外故憤憂怨傷之作道計今古什八九焉世

所謂文士多數歌詩人尤命薄於斯見矣 白氏文集序洛都
漢家本朝其例多存、野相公在納言菅家西宮左府師
内大臣以下拔群賢才無辜見配所之月人不可勝計也
ひとつなみたそこほれける
後撰
うれしきもうきも心は一にてわかれぬものはなみ
たなりけり
竹あめるかきしわたして石のはし松のはしら
五架三間新草堂石階松柱竹編垣 白樂天香爐峯下新卜山居草堂
ゆるし色のきかちなるにあをにひのかりきぬさしぬ
きうちやつれて
聽色は紅紫二色也論語曰紅紫不以爲褻服といへる
是也但如延喜式者紅色也而きかちなるとある不審
也紅に黄色のましりたる歟それは萱草色也凶服に
用之只又黄衣たるへき歟一説云禁色也然は黄なる
綾歟云々或云黄直衣は前官宿老人着物也源氏も依
未勘 前官着之歟又野相公配隱岐國之時着黄袍之由有詩
云々西宮記云黄衣無品親王綾源氏及良家子孫弱冠
者着之公卿子孫候殿上無即時用黄衣或說云上にゆ
るすは紅紫下にゆるすは黄也云々
玉鬘卷にうつせみのあま君にあをにひのをり物御
れうにあかくちなしの御そゆるし色なるそへてつ
かはすとあり今の色と同體也彼も源氏前官の時の
事也是もあをにひのかりきぬ指貫とあれは聽色の
衣をかさねられたるよし歟
こすくろくたんきのはんなとやうの物
圍碁　堯造之敎丹朱　双六　孟嘗君造之　彈棊
後漢書梁冀能彈棊註引藝經云々兩人對局白黒棊各
六枚先列棊相當更先彈也其局以石爲之古今詩語曰
求食彈棊有譜一卷皆唐賢所爲棊局方二尺中心高如
覆盆其顚爲小壺四角微起也李商隱詩云玉作彈棊局
中心最不平謂其中尊也道士席謙吳人善彈棊
あまとものあさりしてかいつもの
かいつものはかつぎしたる物也或海津物云々能因
歌枕に海人のかいつものとるをはあさりすと云
いけるかいありとおもへり御むまともちかくたて丶
みやりなるくらかなにそなるいねとりいて丶かふな
と
婆羅訶天馬食噉香稻 有部毘奈耶
えいのかなしみなみたそ丶く春のさかつきのうちと
もろこゑにすし給ふ

十一年三月卄日別微之於澧䣊十四年三月十一日遇
微之於峽中停舟夷陵三宿而別言不盡者以詩終之
七言四十韵　一別五年方見面語到天明竟不眠生涯共寄滄
波上鄕國倶抛白日邊往事渺茫都似夢舊遊零落半歸
泉醉悲泪灑春盃裏吟苦支頤曉燭前 樂天謫所にて元稹に行逢て作れる詩也其を今の宰相中將の對面に思よそへて誦し給へるなり

宮このつとなと
古今 おくろさきみつの小島の人ならはみやこのつとにいさといはましを

くろこまたてまつりたまふ
拾遺人丸 よそにありて雲ゐにみゆるいもか家にはやくいたらんあゆめくろ駒
無名抄 我かへる道のくろ駒心あらは君はこすともをのれいなゝけ

風にあたりてはいはえぬへければ
胡馬嘶北風　越鳥巢南枝
馬はもと胡國の獸なり仍北風にあたれは舊里を慕ていはゆる也

なれきこえ侍ていとしもとくやしう思給へらるゝ
拾遺 おもふとていとしも人にむつれけんしかならひてそみねは戀しき

たつかなき雲ゐにひとり
五十五 たつかなきあしへをさして戀わたるゝゝ

やよひのついたちにいてきたるみの日
世風記云三月上巳桃花水下之時飮食爲餔 大飮酒也歩胡反 招魂請魂拂除不祥續漢書禮儀志云三月上巳日宮人並禊飮於東流水上文選曰於是暮春之禊元巳之辰方軌齋袂幗于陽濱 南都賦　漢代には三月上巳日百官東流水上にして禊飮す自魏以後は用三日不用上巳 續齋諧記 にみえたり應劭風俗通云案周禮女巫掌歲時以祓除疾病禊者潔也故於水上與釁潔す鄭國俗三月桃花水下時に以上巳湊洧二水の上にして執蘭藥招魂續魄祓除不祥 韓子 成都記曰三月三日遠近祈福於龍橋命曰蠶市王義之三月三日蘭亭序云永和九年歲在癸丑暮春之初會山陰之蘭亭修禊事也晉書白樂天開成二年三月三日洛濱ニ宴する詩十二韻あり

せんさうはかりひきめくらして
せんさうとかきてせんしやうと讀へし
軟障有畫圖松也謂高松軟障堂上立軟障堂下引幔叉堂下有立軟障事新儀式曰內宴日妓樂出自綾綺殿軟障南着座

このくにゝかよひけるおんみやうし　道滿法師居住播磨國云々此事歟此物語證本には皆おみやうしとかけり伊勢物語にはおんやうしと書之

人かた　人形

やをよろつの神もあはれと思らんをかせる罪のそれとなけれは　みそきして思ふことをそ祈つるやを萬よの神のまに〳〵

舊事本紀曰高皇産靈尊召八百萬神於天八湍河之川原八百萬神達見日本紀

ひちかさあめとかふりきて

いもか門行過かねつひち笠の雨もふらなんかさやとりせん

笠もとりあへすして袖かさしたるよし也但日本紀に大雨をひさめ或ひちあめとよめり同心歟

よろつふきちらして又なき風なり

暴風卒起屢降惡雨由王暴虎不修善事金光明經　尙書曰武王既喪管叔及其群弟乃流言於國曰公將弗利於孺子周公乃告二公曰我之弗辟我無以告我先王周公居東昌公太公二年則罪人斯得周公告二公遂東征之以二年罪人此得于後公乃爲詩以貽王名之曰鴟鴞王亦未敢誚公秋大熟未穫天大雷電以風二年秋也后蒙恒風若雷以威之故有風雷之異禾則盡偃大木斯拔邦人大恐風災所及邦人皆大恐王與大夫盡辨以啓金縢之書乃得周公所自以爲功代武王之說二公及王乃問諸子與百執事對曰信噫公命我勿敢言王執書以泣曰其勿穆卜金縢篇

古來左遷の人多依配流之宣赴華謫所歟今源氏大將は讒おそれて我と須磨の浦に隱遁せらるるは周公の東征せしに比するにや風雷の變異も又相似たる歟

漢書曰君霧恒風若師古曰凡言恒者謂所行者失道則災害風雨而不時恒久

海の中の龍王のいといたうものめてするものにてみいれたるなりけりとおほすに

彥火々出見尊海にて釣はりをうしなひ給てわたのへにいたりて尋給けるを龍神顏容愁絕世たりとめてたてまつりてむすめ豐玉姬にあはせてわたつみやに三年とゝめたてまつりし也日本紀にみえたり又日本武尊東夷を征し給時相摸國より上總國に渡給ひしに龍神めてゝ尊をとりたてまつらんとしけれは波風あらくて御船沈まんとせしに弟橘姬尊の御命に代りて入海してうせ給けり尊橘姬を思給て上野國碓居

坂にて東方を望てあかつまやとの給けるより東を
あつまと云也我つま云心也吾孀とかきてあつまと
よむ也東は宛字也紀正文略之　天平勝寶元年遣唐使中有
副使陸奥介從五位上玉手人丸山城史生上道人丸者
而柿本人丸集中有入唐之時歌若以前輩令混合也大
夫於途中爲海神被取端正美麗之故也云々見作手丸記

第十　明石

巻名　光源氏自陬磨浦移居此所之故也
空のみだれ
雲のみたれ同事歟
みちかひにてたに
道の行ちがひなり
かたしけなくくしにける
窮屈しける也或云苦しける也云々
みきはまさりぬへく
京にもこのあめかせいとあやしきものゝさとしなり
とてにんわうゑおこなはるへし
仁王會經云講讀般若波羅密七難即滅七福即生萬性
安樂帝王歡喜日月失度星宿失度火雨風旱鬼賊謂之七難也　仁王經持統天皇御宇始渡來本朝　三
月被行仁王會例
天曆六年三月廿七日癸未被行臨時仁王會
地のそことをるはかりの火ふりいかつちのしつまら
ぬ事は侍らさりき
毀諸善人故天降雹(アラレ)金光明經　火(ヒサメ)雨(フリ)雷(イカツチ)電(ナリ)日本紀第廿二
大唐德宗皇帝代貞元四年戊辰四月五日雹落大如彈
石長和二年三月雷鳴氷降大如梅
かほのいとからきにも
辛　辛苦の心歟
いろ〳〵のみてくら
青幣(アヲニキテ)　白幣日本紀　又五色の幣あり
すみよしの神ちかきさかひをしつめまもり給ふ
神功皇后廿一年辛丑住吉明神顯
古語拾遺云至於磐余(イハレ)稚櫻(ワカサクラ)朝住吉大神顯矣日本紀云
浮濯於湖上因以生神凡有九神其表筒男命中筒男命
底筒男命三神鎭坐焉是即今住吉明神者四社中南社
衣通姫云々國基說或神功皇后云々
ふかき御うつくしみおほやしまにあまねく　愛常(ウツクシ)
大八島
古今序にあまねきおほんうつくしみのなみやしま

のはかまてなかれひろき御めくみのかけつくは山のふもとよりもしけくおましく〱て

いへをはなれさかひをさりて

入春纔七日　離家已三年　隋薛道衡

離家三四月落涙百千行菅家

左傳曰公卿非二王命一不レ越レ境事也

うしろのかたなるおほゐとのと

大炊殿新猿楽記　巨炊屋也舊記多大炊殿と書也

空はすみをすりたるやうにて

歸來倚杖自歎息　俄頃風定雲墨色杜詩　杜嶺瘴來雲似墨　洞庭春盡水如天柳子厚詩祕說アリ

しほのやほあひ

四條大納言九品歌中下品

あらしほのしほのやほあひに燒鹽のからくも我は老にけるかな

さきのかみしほち

播磨前司入道也在若紫巻或曰御堂關白出家以後世皆稱入道殿其時はゝかりをなして世間に入道といふことなし仍滿仲も自號新發

人のみかとにも夢を信してくにをたすくるたくひおほく侍り

史記殷本紀曰帝武丁即位思二復興レ殷而未レ得二其佐一三年不レ言二世事一事決二定於家宰一以觀二國風一武丁夜夢得二聖人一名曰レ說以二夢所レ見視二群臣百吏一皆非也於レ是乃使二百工營求一之野一得二說於傅巖中一見二於武丁一云々曰是也得而與レ之語果聖人擧以爲レ相殷國大治武丁は高宗也　此外先例多し

しりぞきてとかなしとこそむかしのさかしき人もいひをきけれ

老子經曰不退有咎進不知退取禍之道也唐書此等心歟猶可考

周易曰知進而不知退知存而不知亡知得而不知喪其唯聖人乎

唐書見可退而不退謂之懷寵云々國之姦也

うれしきつりふねをなん

浪にのみぬれつる物を吹風のたよりうれしきあまのつり船

のこりのよはひつむへきいね

拾遺

屛風におきなのいねはこはするかたかきて侍けるところに

秋ことにかりつる稻はつみつれと老にける身そを

き所なき忠見
あさりするあまともほこらしけなり
矜ホコル日本紀
あさりするよさのあま人ほこるらし浦風ぬるみかすみわたれる
いひしにたかふとおほさんも
ほとふるもおほつかなくもおもほえすいひしにたかふとはかりはしも
さらほひて
髐髊サラホフ　髐髑髏貌也
よのふることゝもくつしいてゝ
にけなきことゝ
是は無二似氣一也隨レ所可二分別一
めのまへに見やらるゝはわはちしまなりけりわはとはるかになとのたまひて
あはちにて淡とはるかにみし月のちかきこよひは所からかも
かうれうといふてを
晋書嵆康傳云嵆康嘗遊洛西暮宿二華陽亭一彈琴除夜分忽有客詣云稱是古人而與レ康共談音律辭致清辯因索琴彈之而爲廣陵散聲調絶倫遂以授康仍誓不傳人亦不言其姓字雜抄云嵆康字叔夜晉時譙國人也康所居之處每聞有人悽切康及覔不有人後復聞聲康更尋探見一髑髏蘆鑚眼眶而生康見愍之乃收爲好埋葬從是以去不聞悽切之聲有頂於夜中夢見一人曰我是伶人也然我骸骨散野爲蘆所傷不堪痛切蒙君憐愍荷德之深所相報令授廣陵散以酬君於夢中度之及覺宛然即得盡異志曰嵆康宿華陽亭探琴而鬪空中稱善中散曰君何不來此答云身是古人幽沒出其數千年矣聞君彈琴幽曲清和故來聽而就終殘毀不宜乃以琴授之作曲亦不出常唯廣陵散絶倫中散受之誓不得敎他人或書云嵆康字叔夜與向子期友善子期傳屋至家者爲妖精被侵叔夜客子期終夜調琴及半夜除骨骸付陰來也叔曰何誰答曰莫怪我堯時之樂士也名伶倫栖此處久矣然至于我胸中積有年憂之故來訴所以已汝爲吾祛之爲幸爰授廣陵散樂名已謝去自是叔夜琴名大震于世矣晉帝詔叔願令授后不應詔是以終被誅嵆康將刑東市顧視日影索琴而彈之曰昔袁孝尼嘗以吾學廣陵散吾每靳之廣陵散於今絶矣
このもかのものしはふるい人
日本紀云折枝薬人

木の葉のちりかゝりたるをうちはらふしつのおしつのめなと也たとへは木のはなとかきあつむる山かつ也一説皺古人しはあるふるき人也云々老人事歟後成卿女説　此段紅葉賀ニ在之

供養法たゆみて

のちの世にねかひ侍るところのありさまも思たまへやらるゝ

極樂の管絃歌舞の菩薩の事也

入道ひはのほうしになりて

兼盛集云琵琶の法師のある所と書り云々

四のをに思ふ心をしらへつゝひきあるけともしる人もなし

めつらしきてひとつふたつ

琵琶の手也

しやうの御ことまいりたれは

風俗通曰箏秦聲也説或曰蒙恬所レ造五絃築聲并涼二州箏形如瑟秦多善箏者故云秦名箏釋名箏施弦高箏々然或説云漢恭帝妻女をして五十絃の琴を皷せしむ琴聲悲帝禁不爲破二十五絃とす又秦皇之時破作十三絃今の箏也云々又天竺にも仙道大王妙解彈箏を有部毗奈耶にいへり

くひなのうちたゝきたるはたかゝとさしてと

またよひにうちきてたゝく水鷄かなたか門さして
入ぬなるらん

なにかし延喜の御てよりひきつたへたること三代になんなり侍ぬるを

古人釋云延喜帝令レ彈ニ琵琶一給事無ニ所見一如何云々因茲清和の御かとゝ書て前大王をは南宮式部卿親王貞保しと釋したる事もある也此事不レ得ニ其心一物語のおもては箏のことゝみえたり明石入道もてまいれるしやうのことを源氏すこしひきてこれは女のなつかしきさまにてしどけなくひきたるこそおかしけれとあるに入道あそはすよりなつかしきさまなるはいつこのか侍らんなにがし延喜の御時よりひきつたへとかけり無ニ不審一哉又明石上の事を嚴親自歎の返事にも源氏あやしうむかしよりしやうは女なんひきとる物也とありかつは烟はおなしかたになひかんと詠するときも源氏琴をかきならされしに彼上涙にそゝのかされてしやうのことをしのひやかにかきしらへたる上手めきたりわくまてひ

きすまし心にくゝねたきは入道の宮の御ことのをのねにもまされりと云々天下無双ときこえたり

箏相承事

宇多院 ── 本院左大臣 ─┬─ 醍醐天皇
　　　　　　　　　　　└─ 伊勢

命婦石川色子於筑紫彦山遇唐人傳之奉授寛平法皇云々 ─ 第四公王（母源唱朝幽女）─ 清愼公 ─ 村上天皇（諸流自此濟々）

或人難云朱雀院を天慶御門に准すといはゝ延喜よりいくはくの時代をへす明石入道延喜御門より三代といへる久しくきこえたるにや答云縦延喜御門御在世なりとも孫弟なかるへきにあらす殊更主上なと直には傳授かたき故に其御弟子に習たる人は三代ならすや況治世も已二代也其疑あるべからす

やまふしのひかみゝに

山伏野臥とはたゝ世をのかれて山林にふす心なり

熊野山の山伏にかきらす

山ふし（イナシ）も野伏もかくて心みついまはとねりのねやそこひしき

松風をきゝわたし侍るにやあらん

ことのねに峯の松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけん（斎宮女御）

さかの御つたへにて女五宮さる世の中の上手に物し給けるをその御すちにてとりたてゝつたふる人なし

嵯峨天皇女五宮繁子（母文屋氏久子嬰病爲尼）

此公主箏事如血脉無所見但上古師弟不詳管絃者名人中猶以多之歟所謂嵯峨天皇玄上宰相（琵琶）大石富門（笛井箏上御師村）敦忠中納言笛幷琵琶等これなり或又相承の人なき時其流斷絶すれは血脉に入さる事もあるなり今女五宮も其餘流なきよしみえたる歟

かきなての心やりはかり

撥撫也

わき人のなかにてたにこそふる事きゝはやす人侍けれ

長安倡家ノ女嘗學琵琶於穆曹二善才年長色衰委身爲商人婦（琵琶引）

白樂天江州司馬に左遷せられて尋陽江上にて船中に夜琵琶を彈するを聞て錚々然として京都の聲ありと感せし心なり我從今年辭帝京謫居病臥尋陽城尋陽少處無音樂終歲不聞絲竹聲今夜聞君琵琶語如

聽仙樂耳暫明といへり今此事をおもひいたす尤有幽致乎
ひはなんまことの音をひきしつむる人いにしへもかたう侍りしを
明石の上ひはにも達したるよし入道源氏にかたりきこえたる也殊以前は箏ときこえたるなり
てつかひいといたうからめきゆのねふかうすましたり
手仕　由音　ゆる音也
いせのうみならねときよきなきさにかひやひろはんなと
伊勢乃宇美能支與起名支左乃之保加比爾名乃利曾也津未牟加比也比呂波牟多末也比路波牟催馬樂伊勢海
しほかひはしほひなり非貝
明石浦なれはいせの海ならねとゝいへる歟
さけしゐそしなと
致　詩にも　酔致と作る也
ひとりねは君もしりぬやつれ〳〵と思ひあかしのうらさひしさを
おもひくれなけきあかしのはまによるみるめすくなく成ぬへらなり
うらなれたまへる人はとてうらなれたるやうらのなみかな風はふかねともさゝら浪たつ葛城催馬樂呂
こまのくるみいろのかみに　高麗紙也
くるみいろとはうらはしろくて表は薄香の色なる紙也
後拾遺云圓融法皇うせさせ給ての又のとし御乳母藤三位のつほねにくるみ色のかみにかきておい法師のてのまねにてさしをかせ給ける
一條院御製
これをたにかたみと思を都にははかへやしつる椎しはの袖
おもふにはとはかりやありけん
思ふにはしのふることそまけにける色には出しと思しものを古今業平
たもとにあまり侍にや
うれしさを昔は袖につゝみけり今夜は身にもあまりぬるかな
うれしさをなにゝつゝまんから衣たもとゆたかにたゝましものを六帖

みちのくにかみ
檀紙の名也件紙を陸奥國よりすきいたしける也萬葉にみちのくのまゆみのかみといへり檀はまゆみの木のかは也
たまもかつけたり
（後撰）いせの海に年へて住しあまなれとかゝるみるめはかつかさりしを
玉はほめたる詞なりすくれたるもといふ心也海邊の事なれは藻にそへていへる也
いふせくも心に物をなやむかなやよやいかにと問人もなみ
やよやはしはしなり古今にやよまやて山時鳥ことつてんといへり
いひかたみとこのたひはいといたうなよひたるうすやうに
れいのとうなきを
動なきなり
たはふれにくゝもあるかな
ありぬやと心みかてらあひみねはたはふれにくきまてそこひしき

内（朱雀院）にも宮（斎宮）にもかきりなくせさせ給ふおほきおとゝ（二條右大臣）うせ給ぬ
三月十三日神なりひらめきあめかせさはかしき夜御かとの御夢に院のうへみはしのもとにたゝせ給て御けしきいとあしうて
後漢靈帝宋皇后諱某扶風平陵人也粛宗宋貴人之從曾孫也建寧三年入掖庭爲貴人明年立爲皇后父酆執金吾封不其鄉侯后無寵而居正位後宮幸姬衆共讃毀初中常侍王甫枉誅勃海王悝及妃宋氏妃即后之姑也甫恐后怨之乃與太中大夫程阿共構言皇后挾左道咒詛帝信之帝後夢見桓帝怒曰宋皇后有何罪過而聽用邪僻徒絶其命勃海王悝既已自貶又受誅斃今宋后及悝自訴於天上帝震怒罪在難救夢殊明察帝既覺而恐以事問於羽林左監許永
にらみきこえ給ふ
瞰（ニラム）鬼瞰文選　斜眼遊仙窟　耶睨日本紀　睚眦新猿樂記
あめなとふり空みたれたる夜は思なしなる事はさそ侍る
周公解夢書云周禮有六夢

一曰正夢　二曰惡夢　三曰思夢　四曰寤夢
五曰喜夢　六曰懼夢
此內無風雨之夜無憂喜醉之時分明爲正夢云々
みやこさりにし人をみとせたにすくさていかゝゆるさむ
毛詩曰東山周公東征也周公東征三年而歸勞歸士大夫美之故作是詩也　五罪梏杖徒流死是也しかれは徒三年と云心也
よごもりてすくすとし月　世にましらすこもりゐたる也
わたらよのときこえたり
わたら夜の月と花とをおなしくはあはれしられん
人に見せはや
伊行釋わたら夜の月と花とをおなしくは心もはれてみる
よしもかな
おもふとちみまほしきいりえの月影にも
思共(トチ)也萬葉
思ふとちいさみにゆかん玉つ島入江のそこにしつ
む月影
秋のよのつきけのこまよ我こふる雲ゐをかけれ時の
まもみん
久方のつきけの駒をうちはやめきぬらんとのみ君
を待かな
いたき所まさりて見ところあるすまゐなり
いといたしかし
片腹痛(カタハライタキ)まて結構したる由歟物語中此詞多皆其心歟
月いれたるまきのとくちけしきことにをし明たり
槇の戸をやすらひにこそさゝさらめいかに明ぬる
秋の夜ならん
むつことをかたりあはせん人も哉うきよの夢もなかはさむやと
六帖今更にむつことのねにひきかゝりこけの山ちをわ
すれさらなん
人さまいとあてにそひえて
ほそやかなるすかた歟俗にそひ／＼としたると云
體歟
ちかひしこともなとかきて
わすれしとちかひしことをあやまたはみかさの山
の神もことはれ
身もなけつへき心ちする

後拾遺風 おなしくは君とならひの池にこそ身をなけつとも
人にきかれめ
うちに御くすりの事あり　御藥事主上御惱の事也
あふまてのかたみにちきるなかのをのしらへはこと
にかはらさらなん
中の緒とは調子の絃也發の絃とも云也
みそひつあまたかけ
御衣櫃あまた荷也
かりの御さうそく
狩衣　短裳カリキヌ 舊事本紀
心のやみはいとゝまとひぬへく
人のおやの心はやみにあらねとも子をおもふみち
にまとひぬるかな
てしともにあはめられて
淡惡也
ことなる御せうえうもなくて
逍遙也
身をはおもはすなとほのめかし給て
わすらるゝ身をは思はすちかひてし人の命の惜く
もあるかな

もとの御くらゐあらたまりてかすよりほかの權大納
言になり給
大納言
正員令四人相當從三位寛平爲正二人其後權官加增
高倉御宇初爲十人
天武天皇元年改御史大夫于時三人爲大納言淳和天
皇天長五年三月八日以夏野始任權大納言
永觀元年八月始置四人
長和二年六月又置五人藤原賴通加任
又慶雲二年四月十七日勅曰依官員令大納言四人職
掌既比大臣官位中納言三人以補大納言不足同日勅
大納言二員爲定更置中納言三人以補大納言不足也
仍至于中納言者是令外也公卿正員者
太政大臣　左右大臣各一人大納言二人中納言三人
參議八人合十六人　寛平遺誡詞也
公卿の正員代々時によりて加增する也且大納言增
減事見端仍光源氏權大納言加任せられける也而每
人員よりほかの大納言を權大納言と心えたる無念
なりされはかすよりほかの大納言とあるへし權大
納言とかくべからす權大納言員數に猶加任せられ

たる也

かれたりし木の春にあへる心ちして

昔周公勤勞王家惟予幼人弗及知今天動威以彰周公之德（發雷風之威以惟明周公之聖德也）朕小子其迎我國家禮亦宜之王出郊天乃雨反風禾則盡起二公命邦人凡大木所偃盡起而築之歳則大熟見尚書（以下一本ナシ）（毛詩曰東山周公東征也周公東征三年而歸勞歸士大夫美之故作是詩也一章言其完也其思三章言其室家之望女曰章示其男女得及時也君子之於人序其情而閔其勞所以說也說以使民々云心其死其淮東山乎）寒吹更煖枯樹復榮見讀日本紀

わたつうみにしなへうらふれひるのこのあしたゝさりし年はへにけり

大海（ワタツウミ）萬葉　海神（ワタツミ）日本紀　海底（ワタツツミ）萬葉　喜撰式曰海若同

わたつうみは海の惣名也日本紀には海神と書之萬葉には海若ともかけり莊子に北海若と云は龍神也山神を日本紀には山つみといへる同心也

蛭兒事　根國底國へなかされしことを源氏我左遷に思よそへていはれたる歟

かそいろはいかにあはれと思ふらんみとせになりぬあしたすして（日本紀竟宴朝綱卿歌）

うらふれきみこふとしるへうらふれ（同十七）　うちなけきしなへうらふれ忍つゝ返歌古今集にも秋萩にうらふれをれはとあり思なつみたる心也

（万葉十六）

みやはしらめくりあひけるときしあれは

伊勢太神宮の造替廿一年にめくる事歟々云々而以前の三年心には相違する歟如何但又人心といへるにや

（古人歌云）

文武天皇朱鳥二年ニ廿一年ニ一度可有遷宮之由宣旨畢堀川百首歌にもあひに逢てあまてる神の宮はしらたてかふるまてあはぬ君かなとあり此心歟

なみのよるよるいかにまくなきつくりてさしをかせたり

蠛此云摩愚那岐日本紀

蠛は虫の名也春季夏始などに蠅のことくなる虫の目の邊に飛まかふ物也云々ひらめきかるかるしき振舞をいふなりつくりてとはその體をまねひたる也

允恭天皇二年立忍坂大姬爲皇后云々隨母在家獨遊苑中時鬪鷄國造從傍經行之乘馬而莅籬謂皇后嘲之曰能作園乎汝且曰厭乞戶母其蘭一莖皇后則採一根

蘭與乘馬者因以問曰何用求蘭耶乘馬者對曰行山撥蠛也時皇后結之意裏乘馬者辭無禮即謂之曰首(オフト)也余不忘矣皇后登祚之年乘馬者謝罪

かへりてはかことやせましよせたりし名殘に袖のひかたかりしを　かこちやせましなり

河海抄卷第七

正六位上物語博士源惟良撰

第十一　澪標　濫同

卷名　みをつくし戀るしるしにこゝまてもめくりあひけるえにはふかしな

さやかにみ給し夢の後院の御門の御ことを

清（サヤカ同）　伶亮　明　其音鏗鏘（サヤカニノ）日本

いまのさやかはさたかと云心也やとたと同響也物のねのゆらめきなるなり又明ノ字も有其謂歟　分明にみ給し夢なり

古語拾遺にアナサヤケとは竹葉の聲なりといへり

舊事本紀等に阿那佐夜劫　桐壺帝御事を院の御門とある聊儀ある歟上古雖無即位之儀追號不レ可ニ勝計一中古寛仁小一條院なとも如然漢書に太公を太上皇と號する註に師古曰天子之父號曰皇不預治國不言帝也云々帝は御門と訓せり尊號ありといふとも國を治せす帝位にのほり給はぬをは御門とは申ましきにや是は帝位につき給へる院にておはしますゆへに御門の字をそへたてまつる歟朱雀院をも山の御門と申冷泉院も同六條院をは院の御門と號す各別の義なり

神無月には御八かうし給ふ　十月寒風（カミナツキサムカセ）日本紀　明石卷十月御八講同時なり

わか心のわかくいはけなきまゝに　稚（イハケナシ）（ワカシ）　幼（イトケナシ）

世の人もあひなくうれしき事に　無愛

うれしきとは眞實にかさらすよろこふ心歟

きさらきに春宮の御元服のことあり十一になり給へと

おなし月の廿日より御くにゆつりのこと　讓國

はうにはそきやうてんの御子ゐ給ひぬ　承香殿（ショキヤウ）

源氏の大納言内大臣になり給ひぬかすさたまりてくつろく所なかりけれはくはゝり給なりけり

内大臣

天智天皇八年十月十五日以ニ内大臣大職冠藤原朝臣鎌子一始任ニ内大臣一此時位ニ左右大臣上一　孝德天皇元年鎌子始任ニ內大臣一其時無ニ太子一　其後此官久絶至ニ光仁御宇一藤原良繼魚名等任レ之初次ニ左右大臣之下一令外官也

左右大臣闕なきによりて内大臣になり給けるなり

數さたまりてとは內大臣は令外の官なれはいふ也
履中天皇二年始置執事四人執政類也譽田天皇代平群
木菟宿禰爲執政

ことしけきそく　繁務職也

ちしのおとゝ攝政し給ふへきよし　致仕大臣執政東三條院關白例也
攝政異朝唐堯時擧舜爲攝政湯殷以伊尹爲阿衡周成
王幼而即位叔父周公旦攝政漢昭帝又幼而即位博陸
侯霍光奉武帝遺詔攝政如周公故事然乃以周公旦霍
光爲濫觴也關白者漢宣帝云霍光猶執政非幼主之故
霍光還政宣帝猶重其人令關白萬機關白號自此而始
云々　本朝仲哀天皇崩後皇后攝政平三韓而歸筑紫
誕生皇子云々在襁褓皇后猶攝政遂臨天下六十餘州
雖同正帝稱攝政其內履中天皇二年以平群給宿禰爲
攝政推古天皇朝皇太子厩戸皇子帝姪也　攝政齊明御宇
皇太子中大兄皇子又攝政清和天皇幼而即位外舅
太政大臣從一位藤原朝臣良房忠仁公　奉文德遺詔而
攝政貞觀八年八月十九日始蒙攝政宣下去天安二年十一月七日始行
內外事　是以人臣爲攝政之初也爾降彼一門爲執柄之臣
關白陽成天皇元慶四年十一月八日詔右大臣正二位
藤原朝臣基經昭宣公　始爲關白元攝政　是又關白之元始也
昔景行天皇五十一年八月以武內宿禰爲棟梁臣無攝
政號履仲天皇二年始置執事四人執政類歟　譽田天皇代平
群木菟宿禰爲攝政

人のくにゝも時うつり世の中しつまらぬおりはふか
き山に跡を絶えたる人たにもしろかみをはちすいて
つかふるたくひをこそまことのひしりにはしためれ
漢高祖欲易太子呂后恐問留侯々々計曰顧上不能致
者天下有四人々々者年老矣爲書使辯士固請宜來於
是呂后奉太子書迎此四人至高祖置酒太子侍四人從
太子年皆八十有餘鬚眉皓白衣冠甚偉上恠之問曰彼
何爲者四人前對各言名姓曰東園公角里先生綺里季
夏黃公上乃驚曰羽翼已成難動矣史記

太政大臣になり給ひぬ御とし六十三にそなりたま
ふ
天智天皇十年正月以大友皇子當代第四皇子　始太政大臣寶
字元年改乾政官爲太政官忠仁公貞觀八年八月十九
日始蒙攝政詔六十三此例歟

大殿はらのわか君
當時攝關之父爲前官以蒙內覽宣旨時稱大殿而今太

太政大臣其身攝政子息權中納言也號大殿之條不審
然而これはたゝおほいとの同心にいへる歟

宰相中將權中納言になり給
持統天皇御宇始置中納言藤原朝道大寶元年止之爲散位慶雲二年四月以粟田眞人高向朝臣麿阿倍宿禰麿更爲中納言天平勝寶八年四月以藤原永平始爲權中納言此後員數定長和四年二月始置八人源經房加任權中納言

よすかつけんことを　便也　從(ヨスカ)日本紀　資同

二條院のひむかしなる宮院の御そ(虚)うふ(分)むなりしを
昔の東院は七條后溫子御在所によりて二條院の東を號東院歟西宮在所も朱雀院の西なれは時の人西の宮へまいるなといひつゝけけるよりやかて稱號となると云々

十六日になん女にてたいらかにものし給ふと
明石中宮贈皇太后宮藤原胤子内大臣高藤女母交野大領彌益女擬此事歟光源氏（于時内大臣）女母明石入道女

あはらや　あはらなるいたしき伊勢物語

御はかしさるべきもの
皇女禎子三條院皇女御母中宮姸子御堂殿女陽明門院是也長和二年七月十六日降誕即日被奉御劔是其例也

をとめこ

おもへはかなし
五月五日はいかにあたるらん　五十日

つなしにくゝぞみえ給や　强顏つれなし也れの字を略していふ也

かたは　片毫也カタホ

うみ松や時そともなきかけにゐて　海松也和名みるの名
おほつかなけふは子日かあまならはうみ松をこそひくへかりけれ六帖貫之
一說荒礒の岩におひたる海藻の松の葉のやうなる物なり浪のそこにあれはときぞともなきといへるなり

こめき　古(ふる)めき也或云子めき歟おさなきやうなる心歟云々

いとたけく　梟帥日本紀　勇猛　武

あはれとなかやかにひとりこち給を
若有古歌歟可勘但此物語中にたゝあはれなることをあはれとなかめ給ふと云ことあまたあり松風卷にも有之

うらよりをちにこくふねのと
み熊野の浦よりをちに漕舟の我をはよそにへたて

つるかな

そらなゝかめそとたのめきこえ給ひしおりのこと

すまの巻に　行めくりつゐにすむへき月影のとおりし歌のことなり

このおとゝの御とのゐ所はむかしのしけいしやなしつほに東宮はおはしませはちかとなりの御心よせに

淑景舎桐壺　昭陽舎梨壺　以上東

入道きさいの宮御くらゐをあらため給べきならねは

太上天皇になすらふるみふたまはり給ふ

本朝の太上天皇は持統天皇よりはしまる女帝也東三條院正暦二年七月一日院號依爲國母也　續日本紀云延暦九年閏三月丙子皇后崩甲申奉誄（詳カ）謚曰天之高藤廣宗照姫之尊雖爲崩後皇后尊號之准據也今のうすくもの尊號は專持統天皇の例たる也

封戸員數

太上天皇二千戸　三宮各千五百戸　東宮千五百戸

一品親王六百戸　二品親王四百五十戸　三品親王三百戸　四品親王二百廿五戸　無品親王百五十戸　入道とは男女に不限佛法の道に入人の名なり

圓融院后藤原遵子三條關白賴忠女　天祿四年三月五イ九日御出家號入道宮

ゐむしとも

院司判官代　廳召次所　仕所　別納所　御膳所　進物所　所衆　武者所　御隨身所

世の中のことたゝなかはをわけておほきおとゝ此おとゝの御まゝなり

執政臣二人例

寛平九年七月三日權大納言兼左近大將藤原時平權大納言右近大將菅家先帝詔云少主未長間一日万機之政權大納言藤原朝臣菅原朝臣可奏所請之上事

延喜十五年十二月五日大納言源昇藤原道明

已上宣云可奏辨官雜文書

たゝはしき神たからともを　糺タヽハシキ

嚴重也　或本いつくしきとあり同心なり

かく人とをつら　十列也

かのかものみつかきうらみし右近のそうゆけいになりて

齋院の御禊に一員つとめたりし人葵かさしゝそのかみと詠せしことなり左衛門權佐になりたるなり

かはらのおとゝの御例をまねひてわらはすいしんを
たまはり給ふ
河原左大臣融賜童隨身事所見未勘出　中右記云御
堂入道殿令賜童隨身九條殿例云々
今案御堂關白長德三年給童隨身六人云々
なにはの御はらへ
神武十年戊午年春二月皇師遂東舳艫相接方到難波
之碕會有奔潮太急因以名浪速國亦曰浪花今謂難波
訛也
ほり江のわたりを御らんして
堀江には玉しかましをおほきみの御舟こかんとか（井出左大臣六帖幸難波時作歟）
ねてしりせは
津の國の長柄へ行はわすれなて又もみまくのほり（六帖貫之）
江なるらん
いまはたおなじなにはなる
わひぬれは今はたおなし難波なる身をつくしても（古今）
あはんとそおもふ
みをつくし　國史云難波江ニ始立澪標之由みえたり
その所をはみをつくしといふと土佐日記にあり萬
葉には水咫衝石（ミチツクシ）とかけり水尾とも書なり又みをと
は澁澪盡水急形、みをつくしとは江海のふかき所
に木をたてゝ是をみをとしらすれはそれをみて舟
をのほせくたすなり
つかみしかきふてなと
旅店筆硯之由歟職事なとは硯紙を隨身すれは是も
其體歟
田簑の島にみそきつかふまつる夕しほみちて入江の
たつもこゑおしまぬほとの
なにはかた鹽みちくらしあま衣たみのゝ島にたつ（古今）
なきわたる
露けさの昔に似たる旅衣たみのゝ島のなにはかくれ
す　雨により田簑の島をけふゆけは名にはかくれぬ（古今）
ものにそ有ける
あそひともの　遊女也
しまこきはなれ
今はとて島こきはなれゆく舟にひれふる袖をみる
そかなしき（おちくほの歌）
六條の御ふるみや
六條京極宮休所舊居也
みやひかにて　媚　閑麗（ミヤヒヤカ）也　閑暇貌（文選）甚云々　膃肭（ミヤヒカ）遊仙窟

萬葉 なにはこそ昔ゐ中といはれけめ今は宮美堵そなはりにけり

ひそやかに　潜字也

空いろのかみのくもらはしきに　薄縹色紙なり

にひ色のかみ　鈍色也

齋宮にもおやたちそひてくたり給ふことはれいなきことなるを　圓融院御時齋宮くたり侍けるに母の齋宮もろともにすゝかやまをこゆるとて齋宮女御

世にふれは又もこえけりすゝか山昔のいまになるにや有らん　此物語桐壺御門を延喜に准するゆへに是は圓融院後代のことなれは例なしといへるなり作去今古の准據なきことは一事もなき也委賢木の巻にのせたり

並一　蓬生

此巻中無蓬生之詞惣常陸宮舊跡蓬競簷而生昇と見たり歌にしけきよもきの露のかことをと詠之蓬生同事なり

蓬生事

杜詩曰蓬生非無根漂蕩隨高風天寒落萬里不復歸本叢容子念故宅三年門巷空　此詩心詞自相通乎

拾遺 いかてかく尋きぬらん蓬生の人もかよはぬわか宿のみち

もしほたれつゝわひ給しころほひ

古今 わくらはにとふ人あらはすまの浦にもしほたれつゝわふとこたへよ

位をさり給へるかりの御よそひをも竹のこのよのうきふしをも

かりのよそひ旅の装束也かりそめの心なり

後撰 今更になにおひいつらん竹のこのうきふしゝけきよとはしらすや

おほ空の星の光をたらいの水にうつしたるこゝちして

七夕祭に手洗に水を入て庭上に置て星合の影をうつしてみることなり云々案之源氏を大空によそへてそのわつかなるなさけを蓬生君の待えたるにたとへたるなり　醽水

なへての世うへおほしみたれし　敢或能ゝ又吉也

ふりはへてえたつねきこえ給はす　うちはへて也

いと丶きつねのすみかになりてうとましくけとをき木たちふくろうの聲を　白氏文集凶宅詩心なり夕顔の卷にあり

こたまなといふなる　樹神(コタマ)順和名 粉神内典 木魅　山鬼玉篇 鬼老　木靈延喜式 物精也

御てうとともいとこたいになれたる　御調度　古代又古躰

そこそはよのつねのこと丶て

それこそはなり異説足下也云々これは不叶

かろ〳〵しき人の家のかさり(サイ)とはならん

宗廟之器不鬻於市禮記

せんしの君

伊勢物語云山科の禪師の御子おはします

きはうしといふなかにも

きすくなる心なり橋姫の卷にこは〳〵しきしうとくの僧都僧正のきは丶きすくにてとある同心なり

葎はにしひんかしのみかとをとちこめたるこそたのもしけれ

八重葎して門させりてへの歌の心なり

はなちかふあけまきの心さへそ　總角　丱兮毛詩　憶汝總角時東坡詩　髫(アケマキ)總角は童名也みつらゆひたるおさなき躰なり牧童のよしなり能因歌枕云冠者或は小童名也云々

けふりたえあはれに

此宮をはふようのものに思すて丶　不要物也　無要同事也

のらやふなる　野等藪

里はあれて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋ののらなる

奥義抄云のらは野なり萬葉には草の字をのらとよめり

から(唐)もり(守)はこやのとしかくやひめ

唐守　藐姑射刀自いつれも古物語なり赫奕姫竹取物語也

まさくりものにはし給　弊(マサク)

うるはしきかんやかみいにしへのみちのくにのかみ

紙屋紙也　陸奥國紙檀紙也陸奥國より檀紙をすきはしむ檀はまゆみの木なり萬葉に陸奥國のまゆみのかみとあり紙屋川とは北野平野の中を南へなかれたる河なり仁和寺川とも號云々此所にて紙をす

き始けり
かよひまいりしさい院もうせ給なとして
葵卷におり給し齋院歟
心すこしなを〳〵しき御をはにて
なを〳〵しきは下すしき心歟なを人と云もつきな
る人なり諸大夫の事なり
やふはらにとしへ給ふ人を大將殿も
藪原　源氏還任大將事不見但兒女房なと日比のこ
とく申つけたるよし也
えんしうけひけり　怨ウラム也
うけひはのろ〳〵しき詞なり呪咀なり日本紀には
誓字をうけひとよめり誓言の義なり
もえいつる春にあひ給はなんと
萬葉 岩そゝくたるひの上のさはらひのもえいつる春に
あひにけるかな
たゝ我身ひとつのためになれるかとおほえしを
萬葉 世の中はむかしよりやはうかりけんわか身ひとつ
の爲になれるか
世のうきときはみえぬ山路たつぬる
古今 世のうきめみえぬ山ちへいらんには思ふ人こそは
たしなりけれ
與人 みよし野の山のあなたに宿もかな世のうきときの
隱家にせん
山人のあかきこのみひとつをかほにはなちたまはぬ
とみえ給ふ
冬になりゆくまゝにいとゝかきつかむかたなくかな
しきになかめすくしたまふかの殿にはこ院の御れう
の御八かう
此時分明石卷の冬なり彼卷に八講をこなはるへき
こと先いそかせ給ふとあり澪標卷に神無月には御
八講し給云々今詞又同之三卷共同時なり又源氏任
大臣は明年二月也此卷禪師君の詞にも權大納言殿
の御八かうといへり是類並の儀なり抑此並の次第
異說ある歟
定家卿本源光行本には並一蓬生並二關屋也伊行本
には關屋を一にたてたりそれは時代前後するなり
關屋ノ卷は源氏歸京の次年常陸介上洛しける道に
て源氏石山詣にあひたてまつる者なり無異論乎
いつゝのにこり　五濁劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁
法華疏曰劫濁無別躰但約四濁立此假名煩惱濁損四

鈍使爲躰見濁損五利使爲躰命濁損使連持色心爲躰
記云准悲花經八萬至三萬亦有未濁至二萬歳爲五濁
始云々

かならすわけたるあとあんなるみつのみちとたとる

蔣翊字元卿舎中竹下開三徑　文選曰三徑就荒陶淵明

三徑は門に行みちゐへゆくみち厠に行みち也是は
いかなる家にもあるみちなり

かたちなとゝしころいたうつひえたれと　頗費歟

身なれ衣近身衣日本紀君かみけしとあり

わか御くしのおちたりけるをとりあつめてかつらに
したまへるか九尺よはかりにて

きぬのたけむかしは八尺或は九尺云々仍鬘もその
なかさにしけるなりきぬのかさなりも廿五重廿重
とあり近代は略したるものなり

むかしのくのえかう　薫衣香

親行云爲家卿申されしは源氏物語にはくのゑかう
とのゐものゝ袋爲殊難儀歟全分不覺悟云々
薫衣香は黒方の一名ともいへり又は薫物の惣名な
り云々
然而各別の方在之註梅枝巻

こまゝのゝ給をきしことも

蓬生君乳母のことなりまゝは乳母の通稱也

玉かつらたえてもやましゆくみちのたむけの神もか
けてちかはむ

玉かつらとは打任ては女の笄の玉を云なり又鬘を
もいふにや玉はほめたる心なり或は男の纓をも云
よし後撰にみえたり伊勢集にものへゆく人にかつ
らやるとて

けつりこし心もありて玉かつら手向の神となるぞ
うれしき

ゐ中へ行く人にかつらとらすとて

君か爲なてしもしるくこのたひの手向の神となる
そうれしき

手向の神は道祖神のことなり羇旅の人にぬさ以下
の物を送る此神のたむけのためなり是途中の祈禱
也昔黄帝四十餘の子の中に最末の子の旅行の遊を
好て敢不㆑留㆓宮中㆒云々遂に羇遊の道にて死す其
時誓曰吾爲神行客をまもるへしと云々昔の名を遊
子と號す其靈つひに神となれり道祖神是也此故に
旅人餞送の所をは祖席ともいふ世俗にはさへの神

とも又たむけの神とも號するなり花間祖席離人醉水上歸帆落日行元稹道祖和名唐韻云禓昔音楊漢語抄云多无介乃賀美論語曰季氏旅於太山註に旅祭名なり聊今の心に通歟如何

わひつゝも　侘漢語抄慘悚同

こしのしら山おもひやらるゝ雪のうちに

古今 君か行こしのしら山しらねともゆきのまに〳〵あとは尋ねん

雲のゐるこしの白山老にけりおほくの年のゆきつもりつゝ

よるもちりかましき御ちやうのうちに　ちりつもりたるなり

かのとのにはめつらしひにいとゝ　めつらしきなりひはつけたることはなりことなしひともいふかことし　或本にめつらし人とあり

あれたる家の木たちしけくもりのやうなるを過給ふおほきなる松に藤さきかゝりて月影にうちなひきたる風につきてさとにほふに

人もなき宿に匂へる藤の花風にのみこそなひくへらなれ 貫之

なき人をこふるたもとのひまなきにあれたる軒の雫さへそふ　ひねもすにふる春さめや古をこふる袂の雫なるらん

ひるねの夢に　宰予晝寢論語

御さきの露をむまのふちしてはらひつゝ入たてまつる

帝王略論曰梁孝元皇帝博極群書才辨冠世不好聲色篤信五行多忌諱庭草無芟令鞭去之江陵既陷王僧辨等立第九子是爲敬帝太平二年禪位于陳封江陰王或説八代記云梁武帝馬の鞭をもちて露を拂ひたることあり云々可勘

春秋獻馬梳及馬鞭日本紀第九

みかさゝふらふ木の下露は雨にまさりてときこゆ

古今 みさふらひ御かさと申せ宮城野の木のした露は雨にまされり

いたうそほちぬめり

心から花の雫にそほちつゝうくひすとのみ鳥のなくらむ

いとむとくなるを　無徳なり
かうの御からひつ　納諸香辛櫃也
すきならぬ木たちのしるきにえすきて
戀しくはとふらひきませわか宿はみわの山もと杉たてる門
いひしにたかふつみもおふへきなと
いとゝこそまさりにまされ忘しといひしにたかふことのつらさは
のたまひすへして　すへらかしてなり
ひきうへしならねと松の木たかくなりにける
ひきうへし人はむへこそ老にけれ松の木高くなりにける哉躬恒
ひなの別れにおとろへし
おもひきやひなの別におとろへてあまのなわたきいさりせんとは古今
むかし物語に丁こほちたる人もありけるをおほしあはするに
古人釋一同顏叔子古事也云々定家卿本には塔こほちたるとあり或又堂と書たる本もあるなり奥入云顏叔子といふ人男の他行のほと其夫のうたかひのために塔のかへをこほちて夜もすからともしあかしてゐたること也云々。毛詩云昔者顏叔子獨處于室鄰之釐婦又獨處於室夜暴風雨至而室壞婦人趍(ハシリテ)而至顏叔子叔子納之而便執燭放乎旦蒸盡搚(コボツテ)屋而繼之自以爲避嫌不審矣若其審者宜如魯人然魯人有男子獨處室者隣之釐婦又獨處室夜暴風雨至而室壞婦人趍而託之男子閉戸而不納也婦人自牖與之言曰子何爲不納我乎男子曰吾聞也男女不六十不同居今子幼吾亦幼不可以納子婦人曰子何不如柳下惠然嫗不逮門之女國人不稱其亂焉男子曰柳下惠固可吾固不可吾將以吾之不可學柳下惠之可孔子曰欲學柳下惠者未有似於是也巷伯篇十二傳此事毛詩史記以下共以爲室歟堂と云事如何或云堂者佛閣人家に通する歟佛閣は堂人家は堂室なり聲各別也塔は一向佛菩薩住所也非室義矣若今物語堂字室字を書誤歟魚魯之疑也又曰註文選中有所見云々未勘或說かつらの中納言物語といふものあり源氏物語以往の物なり彼云貧家の女號少大輔机丁のかたひらをきぬにぬひてきたる事あり若此事歟丁こほつとは破義也云々

まつりこけいなとのほと　賀茂祭　齋院御禊也
いたかきといふものうちかため
はた板なとのこと歟
なけの御すさみにても　ないかしろなりなをざりの
心なり
なのめにたにもあらぬ御ありさまを　よのつねにた
にあらぬといふ心歟
きをひちりわかれし　きをひとは我さきにとちりわ
かれけりと云なり
むもれいたきまて　はれ〳〵しからぬ心なり只むも
れたる也
ひんかしのゐん　東院七條后温子御在所也　是二條
院の東に見えたり仍號之歟
ちかきしめのほとにて　しめゆふあたりといふなり
いますこしとはすかたりもせまほしけれとも
是以後は物語の家省略したる詞なり

並二　關屋

巻名　關屋よりさとはつれ出たる旅すかたともと
有詞也仍號之

かのはゝきゝもいさなはれにけり　空蟬のことなり
はゝきゝの心もしらてとありしことなりいさなふ
はさそふ心なり　引率
つたへきこゆへきよすかたになくつくはねの山を吹
こすかせも　便也
（後撰）筑波ねのみねより落るみなの河戀そつもりてふち
となりける　奥入云此歌不叶此事猶可尋勘也
京にかへりすみ給て又のとしの秋そひたちはのほり
ける　此巻蓬生の次なることこの詞にみえたり
いし山に御くわんはたしに
石山寺聖武天皇御宇金鷲仙人建立云々舊記曰聖武
天皇師僧正朗辨者先生震旦修行者也爲求法向舍衛
國欲渡流沙依無功錢數月逗留天皇者先生流沙船師
也不預功錢濟度修行僧旣畢爾時件修行僧爲酬罔極
之恩可生將來國王之由致誠祈誓以其念力生日本國
王也然而今生樂盡後世可受苦因也朗辨奏云建立大
伽藍可爲後世之資粮天皇依敎喩建立東大寺奉鑄大
佛依無砂金晝夜大息之間夢中有人奏云水邊建立伽
藍祈請砂金出來歟者夢驚令求勝地建立觀音像不經

幾月下野國初貢砂金今之石山寺是也
殿はあはた山こえ給はぬとて
六帖 栗田山こゆともこゆとおもへとも猶あふさかははるけかりけり
みちもさりあへす
古今 梓弓はるのやまへをこえくれはみちもさりあへす花そ散ける
せき山にみなおりゐて
關山のみねの杉むらすきゆけとあふみはなをそはるけかりける
車ともかきおろす　かけはつす也
るゐひろく　類廣
いろ／＼のあをつき／＼しきひものくゝりそめさまも　色々襖　狩襖也　纐纈染様
けふの御關むかへはえおもひすて給はし
客を送迎に四方の關をかきりとす　異朝例（同イ）也
ゆくとくと關とめかたき涙をや絶えぬ清水と人はみるらん
行と來と也
後撰 關こえてあはすの森のあはす共清水にみえし影をわするな
右近のせうとけて　解也
わくらはに行あふみちをたのみしも猶かひなしや鹽ならぬ海
わくらは邂逅也、しほならぬうみは湖海なり近江心也
關守のさもうらやましうめさましかりしなと　合坂なれは常陸守を關守にそへていへる也
ひそ／＼しき心地すれと　此物語中に人のちいさやかなる姿をひそ／＼として云へり是も物はづかしくて身のすつらるゝと云心歟
のこしをくたましゐもかな
古今 あかざりし袖の中にや入にけむ我たましゐのなき心ちする
なさけつくれと　うはべに情有由をつくる也
あいなのさかしらやなんとて　進恐（サカシン）也見二日本紀一
古今 さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやく霜夜を我ひとりぬる
六帖 秋の野に行てみるへき花の色をたかさかしらにをりてきつらむ

河海抄卷第八

正六位上物語博士源惟良撰

第十二　繪合

卷名　齋宮女御與弘徽殿女御有繪合之興故號之

前齋宮の御まいりの事

元正天皇御宇井上内親王（聖武天皇太子時女）養老五年爲齋宮後光仁天皇納爲后光仁天皇女酒人内親王寶龜三年爲齋宮後桓武天皇納之有寵桓武天皇女朝原内親王延暦三年爲齋宮後平城天皇納之無寵朱雀院御時徽子女王（重明親王女）天慶元年爲齋宮後天暦朝爲女御

院はいとくちおしく　最也

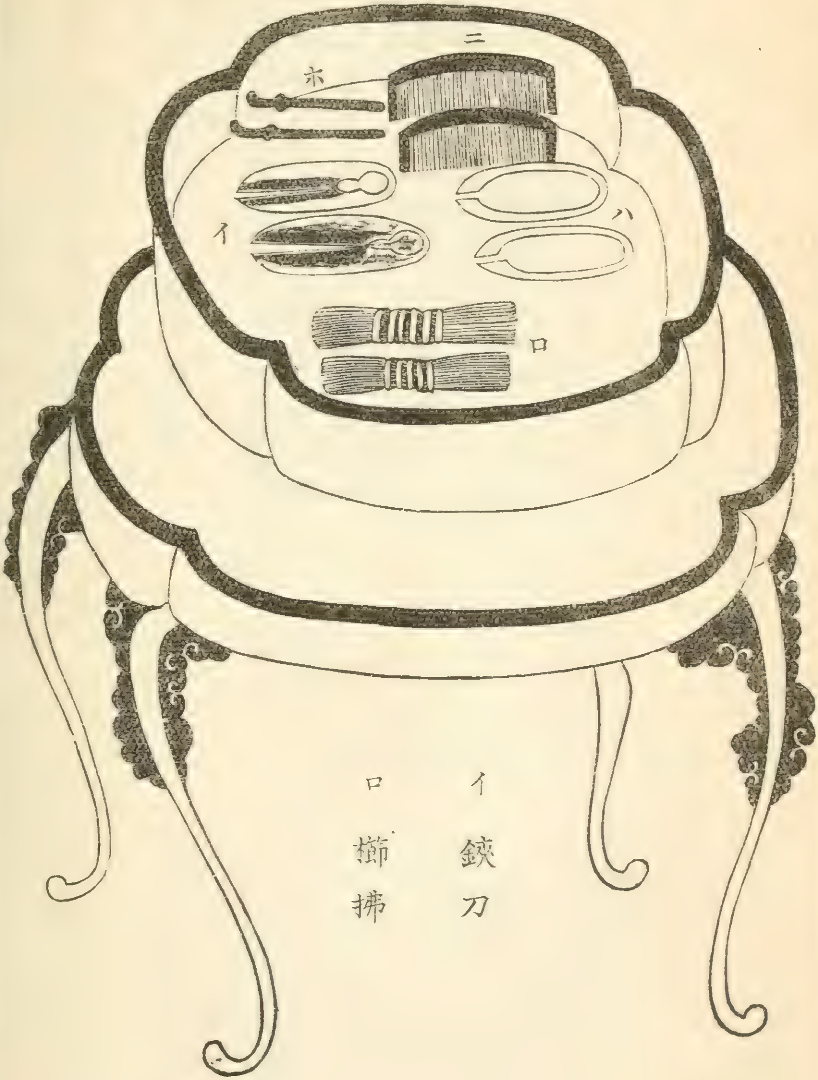
御くしのはこうちみたりのはこかうこのはことも

唐匣筥

ハ銀錡子

ニ櫛

ホ銀耳觿

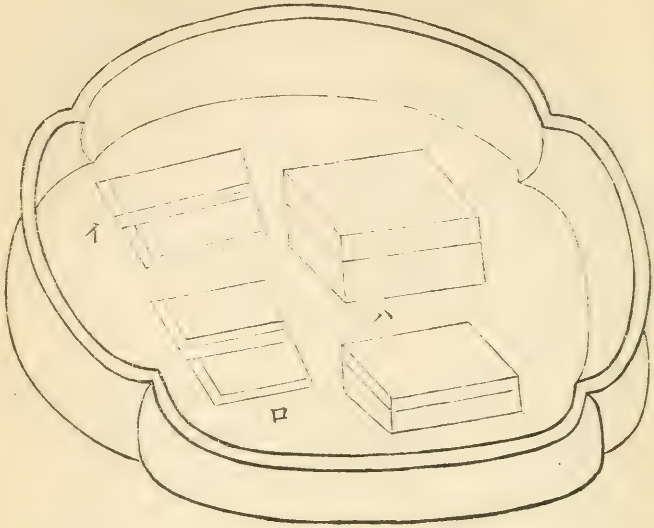


イ鋏刀

ロ櫛拂

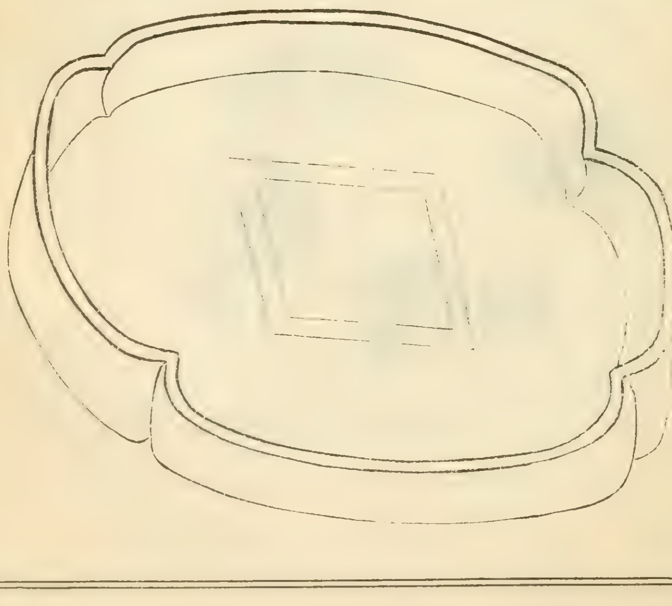
掻上箱

懸子



イ帖紙等
ロ黄
ハ銀筥二合

蓋



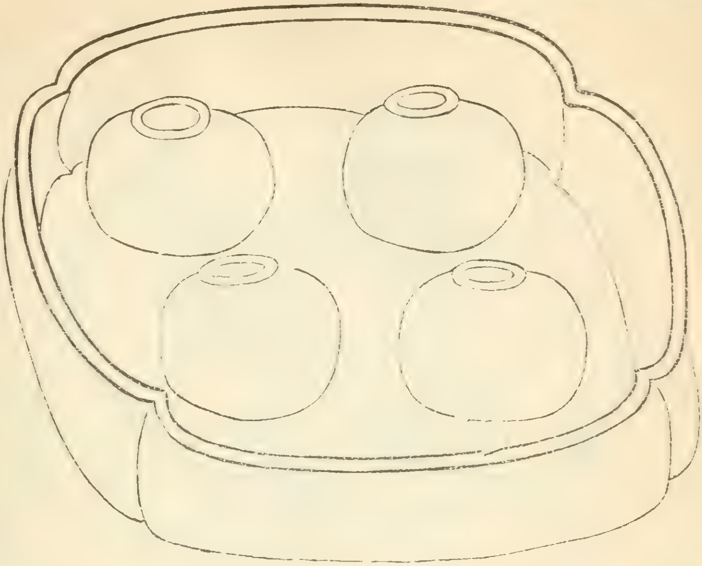
寸尺追可勘加之

此外に筥身あり

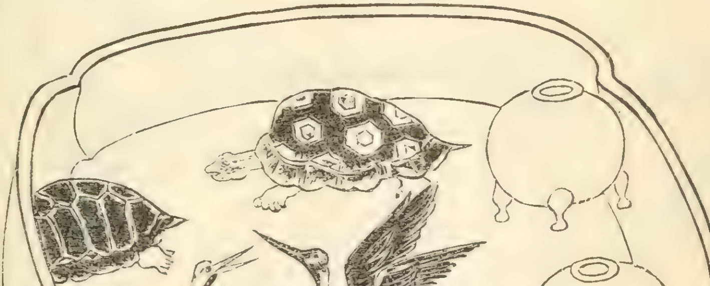
香壺筥圖

身高三寸五分

銀壺四口筥內ニ押黄把錦
此壺トモニキニカラ草チケニウツ



廣九寸七分長同

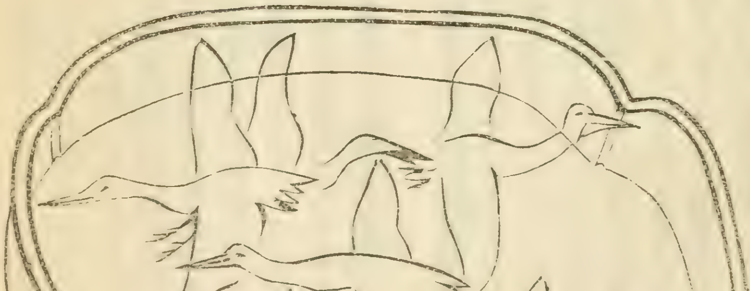


銀壺二口在之高八分高二寸四分

蓋高一寸三分

高二寸四分一口ハ中ヲ蓋覆ニス一口ハ口有在蓋口廣九分銀島長五寸六分廣三寸是に鶴二ナ立鶴高二寸三分着已置羽上五寸四分上同薫爐龜身蓋在之





龜

櫛箱　巾箱　香壺筥或香粉云々

香壺筥事注付二葵卷畢一水原抄云可然所之御厨子の式調度也諸香を被納了此壺身高三寸五分弘九寸七分長同云々

匂くさ〳〵の御たきものともくんえかうまたなき様に百歩の外をおほくすきにほふまて

雜クサ〳〵師說云またなきとはいまだなき也又とはよむべからす云々

案之又なきもあり何事哉無二種類一心歟水原抄云くさ〳〵のたき物とは沈香丁子等一種つゝにて未合をせぬ名歟百歩外とは百歩を指歟但本文可勘一歩は六尺也然者百歩は六十丈にわたる歟

案之くさ〳〵とは種々の薫物也合香方に春梅花夏荷葉秋菊花冬落葉黒方侍從供養香薫衣香補闕方百和香なとゝて數多方あり又百歩外とは　承和百歩方の心なり件方云瓷中盛埋經二三七日一取燒百歩之外聞レ薫香云々梅枝卷勘之

さしくしの箱の心はに

こゝろは心葉也金にて梅の枝を造たる也著二小忌ミ一時冠に指す也女房の調度にも有之一說云組クミの惣名也或緌とも云也心葉は箱の緒のかざり也知人少々

權記云長和二年十月廿日今日新皇女御百日也實經所謂籠物二捧其一枝籠蘇芳色納栢榴付菊枝以蘇芳村濃組結之其一枝青色納松子付松枝以青村濃組結之并以象眼薄物等染表裏色爲折立又有銀心葉又置之銀折敷各一枚云々

拾遺云むすびふくろをやるとて　あさからぬ契むすべる心はゝ手向の神ぞしるべかりける

別路にそへしをくしをかことにてはるけき中と神やいさめし

齋宮下向の時の別櫛事也

戀しくはきてもとへかしちはやふる神のいさむる道ならなくに

とはかり

時ヒトハカリ日本紀　しはしはかり也

いはけなくおはしますめるに

幼　いとけなし同心歟おさなき心也

すりのさいしやうを

參議兼修理大夫也橘常主在原友于此例也

おほしいたつかましと

寵かしつく心也或説勞いたはゝ心也或説云いつかまし云々同心也
あえかなる
　ものよはきやうなる心歟
わさはかならす見ゆれば
　不ニ浅墓一也
いはけたる御ふるまひ
　これもいはけなく同心歟
ふるさまされは
こゝろはへ
　意見日本紀
れいの月なみのゑとも
　十二月の公事をかきたる也古集にも月次の御屏風
　になと云へり
いといたうひめて
　秘也　めは詞字也
こたいの御ゑともの侍るまいらせんとそうし給ひて
　水原抄云是は齋宮に進せらるゝ繪也奏字不審可尋
　案之被レ奏ニ内裏繪一也　詞云あなかちにかくして心
　やすく御覧せさせすなやましきこゆるいとめさま
　しやこたいの御繪ともの侍るまいらせんと奏し給
　ひてとあり然らば奏字不審ある可らず
長恨歌昭君なとやうなるゑはおもしろくあはれなれ
どことのいみあるはこのたみはたてまつらしと
　楊貴妃は馬嵬にうしなはれ王昭君は夷狄にとつく
　共に其憚あるべしとなりこたみは今度也
かのたびの御日きのはこを取り出でさせ給ひて
　すま明石の日記なり菅家宰府間事を令ニ記置一給云
　々又後集も彼時御作也此例歟
むめつぼの御方は
　齋宮女御内侍督ヲ尚侍ト云内侍佐ヲ典侍ト云
心にくきいうそくともに
　有職也此典侍以下非ニ花族一然は以前巻この有職も是に同有族は華族也
まつ物語の始のおやなる竹取の翁にうつぼのとしか
げを合せてあらそふ　左竹取翁不知作者古物語也右うつほの物
語源順作云々有疑　右方勝詞云左にそのことはりなし云々
ひねすみのおもひ片時にきこえたるも
　神異經曰南方有ニ火山一長卅里晝夜火風雨不レ滅火
　中有レ鼠重百斤毛長三尺可レ為レ布若不レ浄火燒レ之
　即浄號ニ火浣布一也
　又十洲記曰大林有ニ大獸一如レ鼠毛長三四寸取レ之以

爲レ布名ニ火浣布ニ有ニ垢汙ニ唯以レ火燒レ布而良久出振レ之白如レ雪李嶠布詩云曝泉非ニ桂鶴ニ浣火有ニ炎光ニ是也委見ニ竹取物語ニ此間詞いづれも竹取の物語の心なり

繪はこせのあふみ手はきの貫之かけり

巨勢相覽一說云巨勢金岡相覽同人也云々但如ニ高名錄ニ者相覽は猶先代人也金岡は仁明天皇御時の人也承和四年九月五日渦ニ御所繪ニ紀貫之道風共以能書也見ニ惟宗直本勘文ニ

かんやかみにからのきをはいしして

紙屋人はしめて色紙をすきいたすと云々

からのきは唐綺也からのうすものなり

としかけはけしき波風におほられしらぬ國にはなたれしかと

うつほの物語第一の卷にとしかけ賢きものにてもろこしへわたさるヽに惡風にあひて波斯國へ行きぬ栴檀木の下に琴を引てあそふ所にいたりて琴をならひ給てけり時ならぬ霜雪をふらせ天地をうこかす日本にかへりて名をあけたる事なり

きなる玉のちくなり

五色の玉あれは黄玉勿論歟

繪はつねのり手はみちかせなれは

左衛門少志飛鳥部常則天暦比畫工也杢頭小野道風正四位下參議篁守孫太宰大貳葛絃男

兩人相遇人歟可勘

伊勢物語業平朝臣作有說上三位古物語名也上は正歟本性も本上と書也

いせ物語に上三位をあはせて

兵衛の大君の心たかさは

上三位物語事也おほいきみとは王氏女也云々後拾遺作者にも小大君とてあり重明親王女也

さい五中將　在原業平朝臣者四品阿保親王第五男也仍號在五中將也顯季卿稱五郎中將母伊豆內親王也從四位下右近衛權中將兼美濃權守元慶四年五月廿八日辛酉卒年五十六見三代實錄　國史云體貌閑麗放縱不拘畧無才學善作和歌

御前にてかちまけ定めんと

古來物合勝負常例也朱雀院寬平菊合永承六年內裡根合郁芳門院前栽合寬子皇后宮扇合上東門院菊合

正子内親王繪合等也後拾遺集正子内親王繪合し侍けるにかの草子にかきて侍ける
相模
見わたせば浪のしがらみかけてけり卯花さける玉川のさと
但同時の歌か如何
ふかきまとをあけて
深窓　秘藏心也
延喜御てつからことの心をかゝせ給へるに又わか御（朱）世（雀）のこともかゝせ給へるまきにかのさい宮のくたり給し日の大極殿のきしき
以桐壺帝擬延喜帝事已分明也不及異論
かくへきやうくはしくおほせられてきんもちかつかうまつれる
公茂（皇イ）〈給在高名錄師〉釆女正巨勢金岡孫公忠子也
えんにすきたるちんのはこにおなしき心はのさまなと　此心葉は若くりかたに梅を造たる歟如何
むかしの御かんさしのはしをいさゝかをりて
取金釵鈿合各折其半授使者曰爲我謝太上天皇謹献是物尋舊好也　〈長恨歌〉
はなたのからのかみにつゝみて
縹（ハナダ）唐紙
院の御門御らんするに
院御門とは御位をたもたせ給うてありし院を申也位をもたもたせ給はねとも院とは申也
院の御ゑはきさいの宮よりつたはりてあの女御の御方にもおほくまいるべし
弘徽殿女御也母二條太政大臣四君●なれは太后より傳進せらるゝか
女房のさふらひにおましよそはせて北みなみかたかたにわかれてざふらふてん上人はこ（後）うらう（涼）殿のすのにおこの／＼心よせつゝさふらふ
女房の侍は臺盤所也天德四年内裏歌合西宮記云其儀西廂皆懸ニ新御簾一納ニ仁壽殿一也第五間〈渡殿間〉立ニ御倚（イシ）子ニ〈臺盤所倚子也〉南方立ニ御几帳一立ニ置物御机一〈在御座南〉南第四間垂ニ御簾一爲ニ左方女房座一奥北二間爲ニ右方座一渡殿南北各敷ニ繧繝疊三枚一爲ニ公卿座一後涼殿東簀子敷從ニ渡殿一南北相分鋪ニ長疊一爲ニ侍臣座一南北庭各敷ニ疊三枚一爲ニ樂所召人座一今案清涼殿西面也御記云暫撤ニ清涼殿南殿中渡殿部一云々

ひたりはしたんの箱にすはうのくゐそくしき物には紫地のからのにしきうちしきはえびそめの唐のきなりわらは六人あか色にさくら重のかざみ袙はくれなゐに藤重のおり物也

花足は机の足也蔽手の體也しき物は地敷也天德童女四人昇二文臺一云々

みきはちんの箱に淺香のしたつくゑうちしきはあをちのこまのにしきあしゆいのくみくゐそくの心はへなとはいまめかしわらはあをにのやなきのかざみ紅梅かさねのあこめをきたり

あしゆいのくみは色々の絲にてまはりにあはひむすびを結て机の四の足をからみて花足よりも長くうちはへたる也　下濃也童女の裝束左は赤色右は青色也舞の裝束にかたどる歟

物合風流事

天德西宮記云右方奩レ持二洲濱二机一一歌懸參三上自二御湯殿西邊一獻二童女一人一著青色實正執二銀花御枝一下二居砌一次小舍人昇二貝指洲濱一置二實正前一如御記者北小廊云々次左方自二殿上侍方一參上童女一人執二地敷一敷二御前一其如レ右次童女四人昇二洲濱一立二地敷上一小舍人二人於二砌下一取傳置二貝指前一云々永承承曆以下依二爲以後例一略レ之風流皆樣々也

うへの女房まへしりへと

前後也

かみゑはかきりありて山みつのゆたかなる心はへをえみせつくさぬものなれは

紙繪は紙のたけみしかくて山水のけしきゆたかならさるよし歟　懸繪本體歟

むかしのあとにはちなく

不恥古也

まほのくはしき日記にはあらて

まことしき日記にはあらて也

御かはらけなとまいる

勸盃事

天德御厨子所供二御菓子干物一次供二御酒一左大臣起レ座獻盃見西宮記

さいかくといふ物は世に重くするものなればにやあらんいたくすゝみぬる人のいのちとさいはひとならひぬるはいとかたき物になむ

論語曰有二顏回者一好レ學不レ遷レ怒不レ貳レ過不幸短命

死矣今也則亡未レ聞二好レ學者一 史記云顔回一簞食一瓢飲不幸短命死仲尼弟子傳白氏文集云文人數奇詩人薄命

ほんさいのかた／＼のものをしへさせ給ひしに

本才文才はかりにかきらす詩書禮樂いつれも才の本たるか

筆取道とごうつことゝこそあやしくたましゐのほとみゆるを　遊仙窟云圍碁出於智惠

ふかきらうなくみゆるをれ物も

らうは勞おれ物とはをろかなる也又きうくつのていにも有か

院の御せんにてみこたち內親王いつれかはさま／＼とり／＼のさまならはせ給はさりけんその文さいをはさるものにていはすさらぬ事の中に琴ひかせ給ふことなん一のさえにてつきにはよこ笛ひはさうのことをなんつき／＼ならひ給へるとうへもおほしのたまはせき繪は猶筆のついてにすさひさせ給ふわたことゝこそ思ひ給へしかいとかうまさなきまて古のすみかきの上ずともあとをくらうなしつへかめるは

源氏文才草書畫工吹レ笛皷琴彈二琵琶一事信大臣嵯峨第一源氏號北邊大臣 傳云大臣好二讀書一兼善二草隷一又工二圖畫一丹青云妙太上天皇親自教習以吹レ笛皷レ琴彈二琵琶一之伎思之所レ涉究二其微旨一云々

ふむのつかさの御ことめしいてゝ

圖書寮（フンノツカサ） 被レ納二累代樂器一所也

物合後御遊事

召二堪能公卿幷殿上人等一令藏入置御遊具 天德地下召レ人相交之由見二御記一承曆永承共無二召人一永承根合之時主上令レ吹二御笛一給見御記

ろくともは中宮の御方よりたまはすみこは御そ又かさねて給はり給ふ

天德大臣夏裝束一襲大納言白合御衣一重參議白單重御衣自餘疋絹

上東門院菊合時人々賜二御衣一之由見二假名記一

かのうら／＼のまきは中宮にさふらはせ給へときこえ給ひければ

或本には中宮にさふらふときこえさせ給ふとあり理不可然彼須磨明石の卷は中宮にまいらせおかれよと源氏おほせられたる也

此御時よりとする人いひつたふへき例をそへんと

天下明德皆自虞舜始 史記第一五帝本紀 例は始レ自二聖代一者也

むかしのためしを見きくにもよはひたえてつかさ位

たかくのぼり世にぬけ出る人なかくたもたぬわざな[illegible]也
りける
金光明經曰獨拔而出成佛正覺
史記曰大名之下久不居　後漢書曰位尊身危財多命
殆　功成名遂而身退者天之道也老子經
木秀二於林一風必摧レ之行高二於人一衆必非レ之文選運命論
杜詩曰
自謂頗挺出立登二要路津一致二君堯舜上一再使二風俗
淳一此意竟蕭條行歌非二隱倫一
大友皇子天智天皇十年正月任太政大臣于時廿五歳
天武天皇元年五月坐レ事被誅廿六
東三條左大臣　承和七年八月七日任右大臣歳廿九
齊衡元年六月十三日薨四十五于時左大臣左大將此
等例歟六條院三十二歳歟

第十三　松風

卷名
身をかへて獨かへれる古郷にきゝしに似たる松風
そ吹く
さるやうありてしんでんはふたけ給はす

寢殿は妻室の居所なり源氏未その仁なし仍さるや
うありてふたけすとある歟
禮記曰聘則爲レ妻奔則爲レ妾註曰聘問也妻之言齊也
以レ禮見問則得二與レ夫敵一レ體妾之言接也言得レ接二
見於君子一不レ得二與レ之敵一レ體也といへり聘以レ禮迎
也奔無レ媒心也野合之義也されば紫の上も猶妾の
義歟仍寢殿に居せさる也
この若君の御おもてふせに
古今かさせとも老もかくれぬ此春そ花のおもてもふせ
うべらなる
むかし母君の御おほち中務の宮ときこえしかりやう
し給ひける所大井川のわたりにおもしろき山里あり
けるを
前中書王兼明事歟號二小倉宮一菟裘賦云余龜山之下
聊卜二幽居一辭レ官休レ身欲レ終レ老於是逮二草堂之漸
成一爲二執政者一被レ枉陷矣君昏臣諛無レ處二于愬一
さるへき物はあけわたさむ
上渡田舍よりのぼせわたさんと云こゝろなり
あやしきのちやふになりて侍れはしもやにそ
野等（ノラ）藪（ヤブ）　下屋雜舍事也

かのとのゝ御かけにかたかけてと思ふことありて
かたかくるとはその人につかふる心也或は肩をや
すむるとも云也世俗に肩をいるゝと云ふ也
文選曰息肩於漢欣戴高祖と云へり此心也
かこかなるならひにて
かこ〳〵なんと云心なり かすかなる心也又こまく〳〵としたる心也
みさうの田はかけなといふ物いたつらにあれ侍りし
かは民部の大いふきみに申し給はりて
民部大輔惟行が事也兼明親王二男從四位上春宮學
士民部大輔也
たくはへの事ともを 畜 產
ひげがちにつなしにくきかほをはならちあかめつゝ
はちふきいへば
強顏ツナシニクキ つれなけににくけなる也はちふくは撥撫ハツフシたとへはらひのくる心也一說はちないとふ時ば必うそなふく也仍はちふくといふ歟 清少納言枕草子に
鬚がちなる男のしゐつみたるとあり
けんなとはこゝになんあれと
劵ケン
よしなからすはありぬへし
由あると云なり

大かくじの南にあたりてたきとのゝ心はへなどおと
らすおもしろき寺なり
大覺寺事
舊記云正子內親王淳和后嵯峨皇女承和七年十二月日入道依淳和崩也貞觀十八年二月廿五日以嵯峨院爲大覺
寺奉淳和院太后令旨請嵯峨院爲大覺寺之由奏狀
見菅家御集應和四年二月廿三日御記曰召左大臣於
前定諸寺別當參議重信朝臣爲大覺寺別當
瀧殿事古人釋云舊名所也在大覺寺南云々李部王記
云延長八年四月廿日栖霞寺清和第七親王周忌設講會云々大納
言及入禮大夫於瀧殿小新堂院南堂に講說了大納言
及入禮大夫於瀧殿小飯進水飯紫明抄云舊名所に소
無瀧殿只瀧與野の心はへおとらすとよむべし云々
今案古人此等の會釋共に推量の義ときこえたり只
泉殿と云心也大覺寺瀧殿にもおとらすおもしろき
といふ也詩に瀧を飛泉懸泉なと作之無差異若也
西行集云大覺寺の瀧殿の石とも閑院へうつされて
跡なくなりぬと聞て見に罷て赤染衛門が歌にあせ
にけりいまたにかゝる瀧つせのはやくそ人はみる
へかりける今たにかゝるとよみけん思ひ出てられ

ていまたにもかゝりといひしたきつせのそのを
りまでは昔なりけり　小倉山黛當簾色大覺寺泉落
枕聲　東北院のわたとのゝやり水に影をみて讀侍
ける紫式部　影みれはわかうき泪おちひそてかこと
かやしき瀧の音哉作者池水を詠瀧歟
四條大納言家集云さかの大覺寺にまかりてこれか
れうたよみはべりけるによめる前大納言公任　瀧の音はた
えて久しくなりぬれど名こそ流て猶聞えけれ見千載集

何のいたはりもなくたてたるしんてんの
勞　何のよせもなくたてたる也

露のかゝらぬたくひうらやましくて
たれによりてかかけとまらむ
明石入道與明石尼としごろ同し庵にだにすまさり
けれはたれかかけもとゝめんと云へる也一説たれ
によりてか影をもとゞむべきと也

みなれそなれて　みなれ木のみなれそなれてはなれ
なは戀しからむや戀しからしや

ありはてぬいのちをかきりとおもひて
古今ありはてぬ命まつまの程はかりうき事しけく思は
ずもかな

わが君はいともうつくしくよるひかりけん玉のやう
にて袖より外にははなちきこえさりつるを
夜光玉　奥入に卞和玉とあり不審也
史記曰尙有二徑寸之珠一照二車前後各十二乘一
楚王臣隋侯蛇の病を癒たりしに七寸の玉を含て夜
來て恩を報しけり隋侯此玉を得て楚王に献す夜中
に常有二光明一故に名二夜光玉一云々

えさるましきよしをいひつゝ
さる事あるましき也一説此浦をえ避(サル)ましき也
もろともに都はいてきこのたひやひとり野中の道に
まとはむ　ふる道に我やまとはんいにしへの野中の
草は茂りあひにけり

おやなきかけをもはつかしめんことの
孝經云詩曰夙興夜寐亡忝爾所生註曰當夙興夜寐進
德修業以無忝辱其父母

やかて世をすつるかとてなりけりと
古今かりそめのゆきかひちとそ思ひこし今はかきりの
門出なりけり

にしきをかへしきこゆらむ
富貴不レ歸二古鄕一如二衣レ錦夜行一朱買臣傳上伊行釋奥入同

案之此心尚不叶可勘
天にむまるゝ人のあやしきみつの道にくたるらんつ
一說ニイみを思ひなすらへて
天人墮三三途一事也勘文天上の樂つきて歸三三途一心なりといへり案之此義前後する也都へかへるを三途をいてゝ天上に生にたとへたるなり明石浦に隱居の程をみつの途の一時といへるにや天よりかへりて三途に墮つるといはゝ今の悅の折節頗不便歟如何天ニ生セントテ先三途ニ墮ル歟
さらぬわかれに御心うこかし給ふな
伊勢物語世の中にさらぬ別のなくもかな千代もと祈る人の子のため
むかしの人もあはれといひける浦のあさきりへたゝりゆくまゝに
ほの／＼と明石の浦の朝きりに島かくれゆく舟をしそ思ふ此うたにあはれと云詞はなけれども其心あるへき也中古先達此歌を或は無常或哀傷或釋敎旅歌なと思ひ／＼にいへり義理甚深の故也
かのきしに
彼岸也
いくかへりゆきかふ秋をすくしつゝうき木にのりてわれかへるらん　槎ウキ、同楂
張騫漢武帝の使として槎に乘て天漢の源を究しに孟津にいたりて牛女にあひて歸りし事なとを思ひて詠する也文選には十年とあり卅歲をへて歸ける也日本紀仁德天皇御時駿河國大井河にふたまたなる木流れ下るをみて彼國人吾子籠此木をとりて始めて舟を作り出て南海へまはして難波浦に着進これを號御艜云々其以前は楂若くは筏を用云々然而如日本紀にも伊弉諾尊蛭子をなかされしにも葦船或は鳥磐櫲樟船以下多あり皇御孫天降給しにも船あり又神武天皇卷にも有之又崇神應神天皇御時にも船を作ると見えたり仁德天皇以前勿論也若今時流布の船の姿を吾子籠始て造出ける歟
身をかへてひとりかへれる山さとにきゝしに似たる松風そふく　明石の卷に入道明石上を先王の御てにかよひてこそ侍れ山伏のひかみゝに松風をきゝわたし侍るにやといひし心なり
かつらの院といふ所

崇峻天皇元年三月始建二法興寺一今元興寺也
水原抄云太秦寺或字豆麻佐日本紀　又號葛野寺然者
葛野院と讀へき歟秦川勝建立藥師佛也且若菜の上
に嵯峨野の御堂にて藥師佛供養し給ふとあり云々
葉之嵯峨與太秦在所懸隔也然者桂院歟桂河邊也
天暦八年八月廿日令元輔仰左大臣以陰陽頭茂樹可
爲桂院別當云々今桂宮院此跡也
をのゝえあらため給はん程やまちとをにと
をのゝえは朽なは又もすけかへん浮世の中にかへ
らすもかな
晉王質石室山にいたりて一局碁を見る程に斧柯の
朽たりし事也しはしと思へとも歸らん期の久しか
るべき心也
述異記云晉王質伐レ木至二信安郡石室山一見二數童子
圍レ碁與二質一物一如二棗核一含レ之不レ亂局未レ終斧柯
爛盡既歸無二復時人一
郡國志云石室山一名橋山一名室石山　晉中朝時有二
王質者一嘗入レ山伐レ木至二石室一有二童子數四一
彈レ琴而歌因放二斧柯一而聽レ之童子以二一物一與レ質
狀如二棗梅一含レ之不二復飢一遂復小停復謂俄頃童子
語云汝來已久何速不レ去質應レ聲而起柯已爛盡
すくれたる人の山くちはしるかりけれと
人よりも思ひのほれる君なれはむへ山口はしるく
なりけり
秋きりの立まふみねみ山口はかねてそしるきうつ
ろはんとて
蜻蛉日記
いちしるき山口ならはこゝなから神のけしきを見
せよとそおもふ
或說云是は伊勢の造宮山口祭事なりその心にはか
はるへし
さてすぐしはてねば立つ時物うく心とまるくるしか
りきなと
けふのみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花
のかけかは
さてすくしはてねはとは前栽立石なとのあれ損し
たるをみすくさてつくろひぬれはたつとき名殘お
しく物うくおはゆへきかといへる也くるしかりき
とはあかしのとまやたちはなれし事を思いてられ
たるにや

いよなめげなるうちきすかた
輕日本紀　無禮心也袿男女共着之貴人の事也
あかのぐなどの
閼伽具
あらいそかけに
奥入みさこゐるあら磯波に袖ぬれてたかため拾ふいけ
る貝そも
二葉の松も今はたのもしき御おひさきといはひきこ
えさするをあさきねさしゆへやいかにと
後撰千代へんとちぎりおきてし姫小イ松のねさしそめてし
宿は忘れす
いさらゐははやくのことも忘れしをもとのあるしや
面かはりせる
イサラ小日本紀　小井也はやくの事は過にし事也古今にも
早くすみし所なとあり
あはれと打なかめて
伊勢物語荒にけりあはれいくよの宿なれや住みけん人のを
とつれもせぬ　此歌の心歟只又あはれとなかめた
ることと此物語に多し
月ことの十四五日つこもりの日おこなはるべき普賢

かうあみたさかの念佛はしめ三昧をはさるものにて
十四日普賢十五日阿彌陀晦日釋迦念佛常行三昧也
云々勘文
めぐらしおほせらるる　以廻文人々に仰せらるゝ心
歟
里遠しやとの給へは　古今里遠み人もすさめぬ櫻花いた
くなわひそわれみはやさん
里遠みいかにせよとかかくいふはしはしもみねは
こひしかるらむ元眞集歌也
此歌心相叶也
かのとけたりしくら人もかへらなりにけりゆけいの
せうにて今年かうふりえてけり　解官也藏人左衞門
尉叙爵號左衞門大夫　推古天皇十一年十二月始
冠位十二年春正月朔始賜冠位於諸臣有差是叙位
始也天武天皇十一年六月丁卯男始結髮仍着漆紗冠
やへたつ山はさらに島かくれにもおとらさりけり
後撰身をうしと人しれぬ世を尋こし雲の八重たつ
山にやはあらぬ
古今奥入たえすたなびく白雲の八重立山の峯にたにすめはすみぬる世にこ
そありけれ

高光少將世をのかれて横河に住ける比御門より都より雲のやへたつ奥山のよ河の水はしみよかるらん

御返事　九重のうちのみつねに戀しくて雲の八重たつ山は住うし

島かくれは明石也ほの〳〵との歌の心也

松もむかしのと

古今
誰をかも知る人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

わすられぬ人も物し給ける　今までに忘れぬ人は世にもあらしをのかさま〳〵年のへぬれは

山のにしきはまたしく侍りける

古今
霜のたて露のぬきこそよはからし山の錦のをれはかつちる

にはかなる御あるしさはきて

あるし　饗應の事也　飯の名也還饗(カヘリアルジ)

あまのさへづりおぼしいでゝ

狂人の物云は海人の物いひににたりと云々

ことりしるしはかりひきつけたる荻の枝なとつとにて

集(ツト)日本紀或産(ツト)　土産の心也　産苞

小鳥付枝事數九を羽の下をはさみて山すけ(一說ふじかづら)もしはほそきかつらにて付也三つゝにわたりたる所をゆひわけたるなりこれをつけといふなり荻にかきらす萩薄菊の枝にも付也延喜二十年十月十八日召(ニ)雅樂寮人於(ニ)清涼殿前(ニ)奏(レ)舞權中納言藤原朝臣(枇杷左大臣仲平卿也)著(ニ)小島於菊枝(ニ)立(ニ)階前(ニ)奏云船木氏有(レ)進(ニ)御贄(ニ)

宇治寶藏日記云永觀年中朱雀院へたてまつる小鳥荻の枝一すちに雲雀五を馬尾にて鼻をとをしてならへ付たるとみえたり　雉をは鳥柴といふ木に付ると云々

西圓法師といふもの草に枝あるへからすと云義を執して木の枝とよみけり親行におひてさま〳〵に問答しけるよし水原抄にも載之親行又草の枝の支證とて古今の

荻の露玉にぬかんととれはけぬよしみん人は枝なからみよ

又六帖の歌に

なよ竹に枝さしかはすしの薄夜(もイ)ませにみゆる君はたのまし

源重之歌にも

夏かりの荻のふる枝はかれにけりむれゐし鳥は空

にやあるらん

此物語の中にも夕顔の枝を扇にそへたる事あり野分卷に女郎花とこ夏の枝とあり薫大將菊を一枝をりてなとおほくありといひけるを西園猶承諾せさりけるか後に枝さしのほる槿の花といふ連歌をして親行におちわはれてなかく鎌倉に跡を晦くしけりと云々案之兩人問答猶理不盡にや惣して草の枝なしと云義更に有へからさる事也和語にはをのつからしとけなき事ありといふとも詩には專鳥獸草木の名をしるを用とすといへり一事も實なき事有へからすそれに猶草の枝を作れる唐人の詩おほし折殘枝なと十日菊にも作れり其例不可勝計而西園是を難せは眼前に枝ある草は無異論萩薄なとは現量に枝なき物也仍萩の枝薄の枝とよめる作例やあるといはゝ其謂有へきなり萩のふるえはかりすてたるふるくは枝ににせたるなり此事猶秘說なり

おほみきわまたゝひすんなかれて

巡流てなり盃の下めくるを云ふ關白攝政御子も位によりてのむなり是によりて云ふ也

けふは六日の御物いみのあく日にて

勘文云六日物忌事長神物忌也長神方違は五日六日連續する也云々九條右丞相記天慶七年正月七日庚辰太政大臣從二十一月廿八日一至二于昨日一合八ヶ日閇レ門物忌仍巳時參レ殿案之君六ヶ日物忌歟如何猶可勘或說云御物忌は甲乙両日也六日物忌とは伊勢恠異八幡恠異加茂恠異各二日合六ヶ日歟云々

かつらのかけ　案天論曰桂花は月也月中仙人桂樹アリ其物初出トキ仙人互見ュ漸成レ形後ニ爲桂樹生ゆる兼名苑云月中有レ河々水上有二桂樹一高五百丈

御つかひの辨はとくかへりまいるに女のしやうそくかつけ給　うつほの物語かつらの卷云内におとゝひさしくまいり給はぬ事を見候と右のおとゝの給ふ右大將ひさしくまいらぬ哉との給へはおとゝかつら川のわたりにけふある所を持侍りてとの給を右近少將なかよりに是かのかつらの家に物してうちのかたにとらせよと仰せ給なかよりいそきかへるひとつ車にてゆきまさすけすみの中將なかすみの侍從なとのりてかつらへまうて給ふかゝるほとに少將久しうなりぬいとかしこしとていそけはあやかいねりのうちき一かさねはかまくしたる女のさ

うそく一くたりかつけ給ふいそきまいりぬこと人々はとゝめ給てあそひあかしてつとめてかへり給ふにおなしやうなる女のさうそくかつけ給ふ

なかにおひたるとうちすし給ふ

古今 久方の中におひたる里なれば光をのみそたのむへらなる

かのあはち島をおほし出てゝ躬恒か所からかとおほめきけん　新古 あはちにてあはとはるかにみし月のちかきこよひは所からかも

右大辨すこしおとなひて故院の御ときにもむつましうつかうまつりなれし人なり

此辨若光源氏元服の時鴻臚館にて高麗人にあひ給し時おりし人歟故院の御時むつましくとある思ひ(面影あるイ)合せらるゝ由先達稱レ之

斧のえもくちぬべければ　古今 古郷はみしこともあらす斧のえのくちし所ぞこひしかりける

近衛つかさのなたかきとねりものゝふしともなとさふらふに　近衛舍人は隨身也神樂の人長は彼所役也よて神樂の其駒をまはせらるゝ也物のふしは色ふし也御神樂の時さいはらにさいはら星朝倉次其駒人長起舞此間內藏人官人執疋絹揮人長腰

さう／＼しければその駒なとみたれあそひて

拾遺 神樂 その駒や我にくさかふくさはとりかへ水はとりかはん

我は我と思ひなし給へと　我はと思ひあかれとゝ云心也紫上にまさる人なしとなり

ひるのこかよはひにもなりにけるを

次生二蛭兒一雖二已三歲一而脚尙不レ立 舊事本紀

かそいろはいかに哀と思らん三年になりぬ足立たずして　明石の姬君三歲になると云心也

いはけなけなるしもつかたもまきらはさんなと

着裳事　しもつかたはこしつきなり紫上に裳の腰ひきゆひ給へとなり

としのわたりにはたちまさりぬへかめるを

後撰 天の川遠きわたりにあらねとも君かふなては年にこそまて　天河たえぬ物からあら玉のとしのわたりにたゝ一夜のみ

第十四　薄雲

卷名　入日さす峯にたなびく薄雲は物思ふそでに

色やまかへる
つらき所おほく見はてんも
かりそめなる所に侍る女に心かはりにける男のこゝにてはかくひんなき所なれは心さしは有ながらえたちよらぬといへりければ所をかへてまちけるにみえざりければ女
宿かへて待つにも見えずなりぬればつらき所のおほくもある哉
いかにいひてかなといふやうに
拾遺 恨ての後さへ人のつらからはいかにいひてかねをも泣くべき
このわか君をかくてのみはひなきことなり
ひんなき也
母かたからこそ御門の御こもきはきはにおはすめれ
朱雀院は延喜第十一村上天皇は第十四皇子にておはしませとも此兩皇御母中宮温子昭宣公女たりしによりて即位ありける也
西宮左大臣高明親王なとは第一皇子にて賢才ありしかとも更衣腹なりしゆゑに人臣になり給ひし心歟是等の例をいふにや
故大納言のいまひときはなりをくれ侍りて更衣腹といはれ給しけちめにこそおはすめれ
大鏡云三條院御時に后にたて奉らんとおほしけるうちよりは大納言のむすめの后に立つ例なかりければ御父濟時大納言を贈太政大臣になしてこそは后に立てさせ給ひしかと
かゝる深山かくれにては何のはえかあらんと
光　榮同　無見日本紀
古今 形こそみ山かくれの朽木なれ心は花になさはなりなん
心のうらみともには
古今 かくこひんものとはかねて思にき心のうらそまさしかりける
あまそきのものにて
ふかそきのこと也 あまそきといふことあればなりあまりなそぐ也
うしろて
うしろすかたの心也
めのと少將とて
これは二人の名なり
御はかしあまかつやうの物

しといひけりさて門を大に高くたつはたして定國大臣になり其子永は御史大夫に成にけり御史大夫（もとのイ）は大納言にあたるなり彈正を御史といへるいまの心にはすこしかはるべき歟

もろこしには春の花のにしきにしくものなしといひ侍るめりやまとことはには秋のあはれをとりたてて思へり

晉石季倫居金谷春花滿朝作五十里錦障逢春不遊樂恐是無心人（樂天）

萬葉第一云天皇詔內大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶秋山千葉之彩時額田王以歌判之歌

冬こもり春さりくれはなかさりしとりも來なきぬさかさりし花もさけれど山をもいりてもとらすくさふかみとりてもみえす秋山の木の葉をみてはもみちをはとりてそしのふあをきをは（とイ）をきてそなけくそこのうらみし秋そわれは

いつれもとき〳〵につけてみ給ふにめうつりて

自古逢秋悲寂寞我言秋日勝春朝（秋詞劉禹錫）

大方の秋に心はよせしかと花みる時はいつれともなし

春秋に思ひみたれてわきかねつときにつけつゝうつる心は

あやしときゝし夕へこそ

（古今）いつとてもこひしからすはあらねとも秋の夕へはあやしかりけり

秋の夜のあやしき程のたそかれに荻ふく風の音そ身にしむ

つらからんとてわたり給ぬ

つらからん人のためにはつらからんつらきはつらき物としらせん

御しとね

茵　詩文茵暢轂

柳か枝にさかせたる御ありさまならん

梅か香を櫻の花ににほはせて柳か枝にさかせてしかな

女御の秋に心よせ給へりしもあはれに若の春のあけほのに心しめ給へるもことはりにこそあれ

ふさはしからぬ

不祥

いさりせしかけわすられぬかゝり火は身のうきふね

やしたひ來にけん

廻島（イサリ）日本紀 求食（同）萬葉

古今 思ひきやひなの別におとろへてあまのなはたきい
さりせんとは

たれうき物とおしかへしうらみ給ふ

うちかへしおもへはかなし世の中をたれうき物と
しらせそめけん

（補遺）

百八十六頁夜ひかる玉のやうにてノ條 以異本補 楚王有ニ一玉ー名ニ夜光ー 昔楚臣隋侯出行テ牧牛ヲ飼フ小兒一ノ蛇ヲ打テ血流レテ沙中ニ伏マロヒテ命已欲レ絕隋侯是哀テ扶取テ水中ニ向テ流テ神藥ヲ水中ニ入テ活ル事ヲ得タリ後彼ノ蛇水中ニ入テ去ヌ其蛇ハ是海龍王ノ子也後ニ七寸ノ玉ヲ含テ夜來向テ隋侯ニ與ヘントス隋侯ノ庭ノ中ニ忽ニ光アルヲ見ルオモヘラク賊人來テ火ヲ以テ入テ照ストオモヘリ隋侯即劔ヲ取テ門ニ向テ立リ動クヘケレトモ賊不レ見門ヲ開テ見ルニ一ノ蛇ノ子玉ヲ含テ戸ノ外ニ立隋侯問云何者ゾ答云我ハ是海龍ノ子也變シテ虵ト爲テ草中ニ遊フ時ニ牛飼ノ小兒我ヲ傷命正欲レ死ニアヘリ而テ先生命ヲ扶テ神藥ヲツケテ生クル事ヲ得タリ故ニ玉ヲ以テ先生恩德ヲ報セントスト云隋侯玉得テ王ニ奉ル王玉ヲ殿上ニ置リ夜中ニ常ニ光明アリ故名ニ夜光玉ー

河海抄巻第九

正六位上物語博士源惟良撰

第十五　槿

巻名

みしおりの露わすられぬ槿の花のさかりは過やしぬらむ 贈答の心歟

齋院は御ふくにておりゐ給にしぞかし

父桃園式部卿宮御服也重服にてはおりさせ給ふ事なり

御くせにて　癖

なか月になりてもゝそのゝ宮にわたり給ぬるを

大和物語云もゝそのゝ兵部卿の宮 二品兵部卿敦國寛平第四御子 母同延喜帝延長五年九月七日薨 うせたまひて御はて九月つこもりにし侍りけるにとしこかの宮のきたのかたにたてまつりける

大方の秋のはてたにかな　きにけふはいかてか君くらすらん

拾遺集にもゝそのに住侍ける前齋院の屏風に 貫之

白妙のいもか衣に梅の花色をも香をもわきそかね

ぬる(ツイ)

桃園在所一條北大宮面一條西中許(程イ)世尊寺南當時號栒(梢イ)抱町歟師氏大納言宅也保光中納言 代明親王男 傳領仍號桃園中納言今案敦國(固イ)親王事歟延喜帝御連枝并九月薨逝事等相似御記云延喜二十年六月八日齋院宣子内親王自夜中所病困篤及曉出院至太宰帥天德三年二月十三日親王桃園家立寢殿 立坊城家 此家本爲寢殿去冬立北對本之北對早陋尤甚仍所改作也

おなししんてんのにしひんかしにそすみ給ける

西ハ齋院　東ハ女五宮

御けはひ　氣 日本紀 形勢 新猿樂記

しはふきかちに　嗽病 本書之　咳病　咳嗽

こゑふつゝかに　太(フツゝカ)

こち〱しく　こと〱しく也 ちと五音通する也 無骨心也

いのちなかさのうらめしき事おほく侍れと　老子曰壽(イノチナカキモノハハヂオホシ)長者多辱

なか〱ときこえ給へは　長々

三宮うらやましく　攝政北方　葵上母

このうせ給ぬるもさやうにこそくひ給おり〱ありしかと　桃園式部卿宮事也齋院の事をおもひより給

類

にび色のみすにくろきみきちやう　御簾の縁鈍色

村上御記云天暦八年正月四日母后崩同廿四日今朝撤尋常御簾改懸芦簾於以鈍色細布以端帽額

せんじたいめして御せうそこ(にイ)きこゆ

齋院宣旨（官女の官也）御せうそこはの給ふ也

文にもかけらす大和物語にも忠岑御はしのもとに松ともしてせうそこしてとあり歌略之

神さひにけるとしつきのらう　神閑　又神宿　閑雅

日本紀

（後撰）ときかきつ衣の玉はすみの江の神さひにけり松の梢に　増基

今案神さひたりとは閑字相叶歟たとへはけたかくしつかなるよし也さひしきこゝろなり宿字もふるめかしき心には可叶歟俊成卿六百番歌合判詞にさひてこそといへり褒美の心也又同人嘉應住吉の歌合の判詞にも左そのすかた詞いひしりてさひてこそみえ侍れとあり神祇ならぬ事にもゆふべき歟定家卿は劔刀をこそさひたるとはいへとて父卿を難すると云々日本紀に宿雨宿雪とあり是はよひの雨よひの雪の事也ふるき心也馬の毛に宿鴾（サビツキ）毛と書たるも古心也猶此物語は俊成卿說相叶歟衣（サビ）（鐵のさび也）或（同）苔

いまはなにのいさめにかかこたせ給はんとすらん

神のいさめの事也

さるはいといたうすくし給へど御くらゐのほとにはあはさめり　ねひすくしたる也

その世のつみはみなしなとの風にたくへてとの給ふあいきやうもこよなしみそきを神はいかゝ侍けんなと

（拾下[illegible]云）つみとかはしなとのかせにまかせたりさすらへぬらん大海のはらに

東南の風を志那との風といふもろ〳〵の不祥を吹去ると云々中臣祓云科戸風（乾方に吹風也）天の八重雲を吹拂かことし先代舊事本紀云伊奘諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薫滿矣乃吹撥之氣化爲神是謂風神也風神名級長津彦次級長戸邊神

（伊行釋）戀せしの御祓を神もうけすとか人をわするゝつみふかしとて

よはひのつもりにはおもなくこそなるわさなりけれ

無面おもてつれなき也
世にしらぬやつれをいまそとたにきこえさすへくや
君か門いまそ過行いてゝみよ戀する人のなれるす
かたを伊勢物語
けさやかなりし御もてなしに
あさやか同心歟たとへは掲焉なる心也
みしおりの露わすられぬあさかほの花の盛は過やし
ぬらん
むかし式部卿宮の姫宮にあさかほたてまつりしと
ありし事也
につかはしき御よそへにつけても
齋院我か御事をあさかほによそへられたるやとい
はれたる也
あをにひのかみのなよひかなる　あをにひの紙とは
服の時の紙なればいへる也
ほゝゆかむことも　方曲
まめ／＼しくおほしなるらんことを　まことしく也
やくとは御ふみをかき給へは　役也
秋までの命もしらす春のゝに萩のふる枝をやくと
やく哉和泉式部

ゆふつかたかむわさなとも　神日本紀
さすかにまかり申はたきこえ給　辭見日本紀　いとま
申也
わか君をもてあそひ　姫君をもおさなき程は若君と
申侍る事定れる事也
しほやき衣のあまりめなれて　すまの海士のしほ燒
衣なれ行はうとくのみこそ成まさりけれ
なれゆくこそけにうき事おほかりけれとはかりにて
なれゆくは浮世なれはやすまの海士のしほ燒衣ま
とをなるらむ
みかともりさむけなるこゑにてうすゝきいてきて
閽人論語又和名　閽音昏守門者也　和名美加度毛利　薄映出來う
すゝきもさむき心也
上のいといたくさびにければあかすとうれふるを
行少馬蹄生易ㇾ蹶用稀印鎖澁難ㇾ開白氏文集
きのふ今日とおほす程に三とせのあなたにもなりに
ける世かな　毛詩曰三月不ㇾ見況於二三年一或曰自二陳
磨一歸洛四年歟
いつのまによもきかかと　蓬門　蓬衡文選　衡門

蓬戸　桑門（サツモン）文選　皆隠居之心也　葺茅爲我廬編蓬爲我門　白氏文集

宮もあくひうちし給て「依申」（イ本ナシ）曲禮　欠伸（アクビ）新猿樂記　はともなくいひきとかきゝしらぬをとすれは

吼鼻（イヒキ・イ）經文

おはおとゝ　祖母にあらされとも老人をもうはおはちと世俗にいふおとゝは殿と云也

源内侍のすけといひし人はあまになりてこの宮の御弟子にてなんおこなふときゝしかと

上﨟女房也尚侍と書ては内侍のかみとよみ典侍と書ては内侍のすけと此二字をよみ侍也かんの君とは内侍のかみの事也御弟子にてなんとは出家の後は男女共に家人を皆以稱弟子歟

おやなしにふせるたひ人とはくゝみ給へかしとて

無禮（チヤヤナシ）日本紀

拾遺　しなてるやかた岡山にいひにうへてふせる旅人あはれおやなし　厩戸皇子連磨和尚片岡山ニ飢臥給へるを御覽する歌

いひこしほとになと　身をうしといひこし程に今は又人のうへともなけくへきかな（きつるイ）

このさかりいとみ給ひし　挑（イトミ）　挑戰同

ひたすら　太疋白氏文集　疋如　永日本紀

ひたすらと我思はなくにおのれさへかり〳〵となみ鳴わたるらん後撰

さすらへ　さすらへはよくもなくて世になからへたる心なり

心ときめきに　ときめきにとはけはひたる心也かみなとをとくもよからんため也又ときめくともあるへしところによるなり花のときめく人の世にしたかひてときめくと云べきなり

少内侍　年ふれと此契こそわすられね親のおやとかいひしひとことと　拾遺九條之母　おやのおやと思はましかはとひてまし我子のこにはあらぬなるへし

ありつる老らくの心けさうもよからぬ物のたとひときゝしと（かイ）　清少納言枕草子すさましき物おうな（老媼）のけさうしはすの月よと云々

たゝひとことにくしなとも人つてならて　今はさはおもひたえなむとはかりを人つてならていふよしもかな後拾遺通雅

さたすぎ　中央白氏文集　さたすきたる（事イ）は中年すぎたる也

つきなきはとにて

無月定家卿説　無付

心つからとの給すさふるを　心（コヽロツカラ）日本紀

折（ナリカラ）同上　身同上　思（オシヒツヽ）同　かけて（伊行尺）いへは涙の川のせを

はやみ心つからや又もなかれむ

（古今）春風は花のわたりをよきてふけ心つからやうつろ

ふとみむ

（中務）戀しきも心つからのわさなれはをきところなくも

てそはつらふ

もらし給ふなよゆめ〳〵いさや川なと

（古今六帖）犬上の床の山なるいさ（さイ）や（らイ）川いさとこたへて我名も

らすな

（伊行尺）たまさか（もらイ）にゆきあふみなるいさ（さイ）や（らイ）川いさとこたへ

て我名なかすな

いとあひなし　無愛　無敢　随所可用之

宮のうちいとかすかになり行まゝに

故宮　河原院賦之　源順

强呉滅兮有二荊棘一姑蘇臺之露瀼々

暴秦衰兮無二虎狼一咸陽宮之煙片々

長門宮事歟文選

とあるかゝるけちめも　結目　掲目訓イチシルシ

いまさらの御わたけも　化日本紀

二條院事　桐壺更衣舊跡也

たはふれにくゝのみおはす　（古今）ありぬやと心みかてら

あひみねはたはふれにくきまてそ戀しき

おほきおとゝものし給はて　引入大臣

雪のいたうなりつもれるうへにいまもちりつゝ松と

竹とのけちめおかしうみゆる　貞松彰於歳寒といふ

心歟松竹同事也詩にも十八公榮霜後露一千年色雪

中源と作れり

時につけても人の心をうつすめる　（拾遺貫之）春秋に思みたれ

てわきかねつ時につけつゝうつる心は

花もみちのさかりよりも冬の夜のすめる月に雪の光

あひたる空こそ　（拾遺元輔）いさかくておりあかしてん冬の月

春の花にもをとらさりけり

すさましきためしにいひをきけん

清少納言枕草子　十列冷物　十二月々夜　十二月

扇　十二月蓼（調イ）水　老女假粧　女醉　胡瓜老　法師

醉舞　無酒神樂勅使　社打內競馬　昆崙　八仙畫

舞　篁日記しはすのもちのころ月いとあかきに物

語しけるを人みてゐなすさまししはすの月夜にもあるかなといひければ

春を待冬のかきりと思ふにはかの月しもそゐはれなりける

みすまきゐけさせ給ふ

遺愛寺鐘欹枕聽香爐峯雪撥簾看　樂天一條院雪のゐしたに香爐峯の雪いかゝあるらんとおほせられけるに清少納言御前に候けるか御返事をは申さて御簾をまきゐけたりけるやさしきためしに時の人申けり

ゆきまろはしせさせ給ふ　雪團　應和三年閏十二月廿日令右衛門督志飛鳥部常則堆雪作蓬萊山於女房小庭今日功了給常則及畫所雜色役者三人祿有差

ひとゝせ中宮の御前に雪の山つくられたり世にふりたることとなれと

枕草子云しはすの十餘日のほとに雪いみしうふりたるを御つかひに式部丞たゝたかまいりたれはしとねいたして物なといふに雪山つくらせ給はぬところこそなけれ御前のつほにもつくらせ給へり中宮にもこき殿の御まへにつくられたり京極殿にもつくらせ給へりといへは

こゝにのみめつらしとみる雪の山所々にふりにけるかな　此雪山長德二年後長保二年の前の事也此物語寛弘の事なれは一とせといふ此事歟又雪山には藏人所毛沓をはきて山をつく本所の雪を荷ひてはこふなり

おひしとけなき殿ゐすかた　帶とは裳袴のこしの事

ちいさきともわらはけて　師說云一說童氣歟かたわけたる心なり次の詞にかたへはひんかしのつまとにいてゐて心もとなけにわらふとあり

あふきなともおとして　女房も式には冬をきらはす用之ひあふき也

いとおほうまろはさんとふくつけかれと　ふくやかなる心歟たとへはおほきにまろはさんとしたるなり

もていてゝらう／＼しう　良々　亮々　日本紀りやう／＼しき詞也せいのちいさきなとをりやう／＼しきと云非其儀稱美詞也

やはらかにおひれたる物からふかうよしつきたる

をひれおさなひれたると云心歟ねをひれも同心歟
君こそさはいへともむらさきのゆゑこよなからす
藤壺に紫上かよひにたる心也
かと／＼しさの　才日本紀　才學　又廉々
しつけさとおもひしたに
閑也
ひんかしの院の事　澪標巻に二條院のひんかしなる
宮院の御所分也しを二なくあらためつくらせ給ふ
と見たり二條院より東たるによりて號東院歟
みすきやうなとせさせ給　延暦元年十二月壬子　勅太
上天皇周忌御齋當今月廿三日宜令天下諸國國分二
寺見僧尼奉爲誦經焉續日本紀
この世のにごりを　法華經五濁悪世刧濁煩惱濁衆生
濁見濁命濁伊行尺
しる人なきせかいにおはすらむを　いさなみのみこ
と火神をうみてやきころされてよみの國へいます
是をいさなきのみことのたつねてをはしたる心也
あみたほとけを心にかけてねんしたてまつり給をな
しはちすにとこそは　伊行尺　一心不亂阿彌陀經
一たひもなむあみた佛といふ人のはちすの上にの
ほらぬはなし　一々池中華盡滿花々惣是往生人各
留半座乘花葉待我閻浮同行人五會讃
なき人をしたふ心にまかせてもかけみぬ水のせにや
まとはん
みつせ川を水にそへたる也三途川事也
伊（覲イ）行本にはかけみぬみつのせきやまとはむとあり
不審也

第十六　乙通女

巻名　乙女子か（もイ）神さひぬらん天津袖古き世の友よ
はひへぬれは　凡此巻五節舞姫之事爲宗仍有此名
としかはりて宮の御はてもすきぬれは　薄雲女院一
周忌也諒闇の色改たる也
いろあらたまれるころもかへのほと　除服事也除服
とは服をぬき侍を云也
御そきの日　齋院御禊日也
ふち衣きしは昨日と思まに今日はみそきのせにか
はる世を
（古今）あすか川淵にもあらぬ我宿もせにかはり行物にそ
有ける

かくさらかへりて　さらにむかしにたちかへりて也

わか君御元服の事　夕霧君于時十二歳也十二元服事

桐壺卷註

やかて四位になしてんかしとおほし

孫王直叙四位事上古定事也見續日本紀等不違具錄

選叙令曰凡蔭皇親者親王子從四位下（諸親王者不限有品無品皆是一部令內稱親王不注品階者皆依此例）

源興基（彈正尹八康親王男）　貞觀八年正月七日叙從四下（元無位）　源博雅（兵部卿克明親王男）承平四年正月七日叙從四位下（元無位）　親王子直叙四位雖爲流例一世源氏大臣息大略叙爵歟源叶（信大臣子）　同靜（光大臣子）　伊渉（兼明親王子）　忠賢（高明大臣子）　皆是叙從五位下者也六條院于時大臣也如何因茲四位になしてんかしと思へとも猶有斟酌歟

わさきにて殿上にかへり給ふ　わさきは六位綠袍童殿上以後還昇也

たゝいまかくおなかちにまたきおいつかすましく侍れと思やうありて　加階をたかくなして人においつかすましき儀也（親行說）　或說云老つゝはいまよりおとな〳〵しき心歟

大（大學道）がくのみちにしはしならはさむのほい侍によりいま二三年をいたつらのとしにおもひなして

尚書大傳曰古帝王必立㆓大學小學㆒使㆔公卿之太子大夫元士之適子十有三年始入㆓小學㆒見㆓小節㆒焉踐㆓小義㆒焉年十五入㆓大學㆒見㆓大節㆒焉踐㆓大義㆒焉入㆓小學㆒知㆓父子之道長幼之序㆒入㆓大學㆒知㆓君臣之義上下之位㆒三代實錄曰大臣在㆓童稚㆒局量開明及㆓於弱冠㆒始學㆓大學㆒稚有㆓才辨㆒論語曰子曰三年學不㆑至㆓於穀㆒不㆑易㆑得而已貞觀格云大學者尚㆑才之處養㆑賢之地也天下之俊咸來海內之英並萃游夏之徒元非㆓公相之子㆒揚馬之輩出㆓自寒素之門㆒高才未㆓必貴種㆒貴種未㆓必高才㆒且夫王者用㆑人唯才是貴朝爲㆓斷養㆒夕登㆓公卿㆒

ふんさいをまなふにもことふえのしらへにもたえすおよはぬところおほかるわさになん侍ける

心のまゝのくわん（官）しやく（爵）にのほりぬれは時によれる人のしたにはめましろきをしなからつい（追）そう（從）し

目ましろき目くはし也或はめましろく　眴（メクハス）（史記項羽本紀）

やまとたましゐ　和國魂（和才魂魄也）

せまりたる大（業）かくのすとて　窮途急（セマル）（日本紀）　窮者（同）

薄才學ノウスキ儀也
うつほの物語にもせまりしれる大かくのしうとあ
り
あさなつくる事　禮記曰已冠而字之成人之道也字所以相
尊也今案六位冠者其姓字を具して江二橘宣源榮なと
曹司にては喚也水原抄云假令藤原をもて大堂の字
とせよと文章院の堂監と申ことの書くたす事侍也
これは當時も彼院の初參の時吉書學生か入學の名
簿を秀才隨身してまいる時堂監かきくたすかたち
也漢家にも侍やうに本朝にも假令中忠臣といへる
か字は達音是體に侍しか近代其義も絶侍り登省の
時必字をつけ侍也
はかせともおくしぬへし　臆
れいあらんにまかせてもの〳〵しくきひしくをこな
へとおほせ給へは
いへよりほかにもとめたるさうそくとものうちあは
すかたくるしきすかたなとを
他所より求出たる裝束也かたくるしくとは古幣の
袍の肩の破裂しぬへきといふ心也　伊勢物語云し
はすのつこもりにうへのきぬをあらいて手つから
はりけり心さしはいたしけれとさるいやしきわさ
もならはさりけれはうへのきぬのかたをはりやり
てけりせんかたもなくてたゝなきになきけり　肩
くるしき是等の心也　一說云かたくなし歟るとな
と相似也此義不可用
へいしなととらせ給へる　瓶子取へいしにてしやく
をとる本儀也てうしにてとるは近代の事也いまも
へいしにて節會の時はとるなり
あさましくとかめいてゝおろす　とかめ出るとは賞
衘の先例に超過することを色代する由歟おろすは
盃をのみくたす心也巡流也
をしかいもとあるしはなはたひざうに侍たふ「儒者
饗應之儀也」此事古人釋皆以不分明
水原抄には垣下之主紫明抄にはおろすをしかいも
とあるしと何を切て漢字を付たり　是又不得其心
是は秘說あり凡垣下主僚ノ心ニ卑下シテ云也
かくはかりのなにかしをしらすしておほやけにつか
へたまふはなはたおこなり　儒者といふはかりの我
身をと卑下したる也
なりたかしなりやまんはなはたひざう也

なりたかしやなりたかしおほみや（大宮）ちかくてなりたかしあはれのなりたかし一段をとなせそやをとなせそ二段あなかまこむともやみそかなれ三段

風俗鳴高又號大宮　西宮記云有政日事辨就結政如常上卿入二外記戸官一掌二唱鳴高一

さをひきてたちたうひはへなんなとをとしいふも

曳座退き侍なんと也

なめけなりとてもとかむ　無禮日本紀

けちえんなるほかけにさるからかましく

揭焉　火影（ホカゲ）　猿（サル）樂

けうまんしまとはされなんとのたまふ　輕慢

はかせの人々は四ゐんの詩たゝの人々はおとゝをはしめたてまつりてせくつくり給ふ

花木被人知以名爲韵　中書王具平親王

年齡稍邁減二詩情一　被レ誘二鄉牧一一句成
應レ咲久抛二風月一賞　桃李之外忘二花名一

江以言

春天花木富二芳榮一　自被二人知一得レ擅レ名
何處未レ承二霞養色一　誰家不審鳥呼レ聲
句同唐帝專二房女一　粧咲秦醫一里兄
莫レ恨翰林零落士　西園今日接二群英一

近代も則如釋奠宴座序者四韻上卿絕句定事也

又けうあるたいのもしえりてもんさうはかせたてまつるみしかき比の夜なれば　四月比歟上旬にまつりの比といへり

まとのほたるをむつひえたの雪をならし給へき心さしの

晉書車胤字武子南平人也好讀レ書無レ油夏月則生絹囊イ盛二數十螢一照レ書後到二司徒一

孫康家貧無レ油常映レ雪讀レ書後到二御史大夫一えたの雪とは枝は燈也九枝ともいへり雪を燈に擬たる心也、仁王經云佛告大王應作九色幡長九丈九色華高一丈千枝燈高五丈　太平御覽第八百七十鄰中記云名虎正平聲會於殿前設百廿枝燈以鐵爲之云々西京雜記云高祖初入咸陽宮周行府庫金玉珍寶不可稱言其尤異者有青玉五枝燈高七尺五寸梁王筠燈詩曰百花曜九枝傳言朝會賦華燈燭百枝之煌々是等皆燈を枝といへる也

おとゝの御はさらなり　御詩をといふへきを略したる也

うちつゝきにうかくといふ物せさせ給
寛平八年十二月十三日齊世親王入學當日早朝召文章博士紀長谷雄御自持名簿賜之長谷雄拜舞親王參堂

二世源氏歷儒業例

源伊行　從四位上民部大輔兼明親王男花山院侍讀
同俊賢　正二位大納言民部卿左大臣高明男
俊賢卿例尤叶今例歟
又執政臣歷儒官例
忠仁公　天長五年閏三月甲午任大學頭予時從五位下
やかてこの院（勸學院）のうちに御さうしつくりて　文章院中有東西曹司摸此歟
つとこもりゐて　集　日本紀
たゝ四五月のうちにしきといふふみよみはて給てけりいまはれうしうけさせんとてまつおまへにてこゝろみせさせ給ふ
史記司馬遷作　裴因集解　本紀十二卷　表十卷　世家三十卷　列傳七十卷　書八卷
都合百三十卷　後爲八帙ツヽメテ爲八十三卷
西京雜記云司馬遷發憤作史記一百三十篇金樓子曰正仲任言夫說一經者爲儒者也傳古今者爲通人也上書奏事者爲文人也能精思著文連篇章爲鴻儒也若劉子政楊子雲之例是也蓋儒生轉爲通人々々轉爲文人々々轉爲鴻儒也今案文人ハ文章生擬生は擬文章生とて文章生に擬する也或は擬進士と云[illegible]

寮試作法

寮頭以下各一員博士以下各一員參着試廳出貢擧交名等博士加署渡寮頭々々見畢下允以下以冊匣三合置試衆座前又以讀書等置頭博士秀才博士之中幷試衆等前次第召試衆々々抱卷進出幔門下允仰云版爾試衆指而就版允又仰云敷居爾試衆指於敷居下脫沓着座衆置帙並頭仰云冊衆准之探冊三史之間今日讀冊也膝行並試博士前試博士對寮頭云史記乃本記乃一乃卷三乃卷世家乃上帙乃五乃卷下帙乃一乃卷傳中乃帙乃七乃卷頭仰云令讀與試衆各披帙抱卷引音讀之頭仰云古今未天試博士對頭云文得頭云書註寮掌捧簡稱註由畢試衆退出堂監於幔門外仰登科酒肴事
はかせのかへさふへき　論語云言可覆　註曰覆猶復
御書所衆にも覆勘とてあり此心歟
いたらぬてもなくかたく〴〵にかよはしてよみ給へる

さまつましるしの心ちす

爪しるしとは詩歌なとに合點せんとてまつ爪にてしるしを付る事也云々然者寮試を合點に擬して令の內々のこゝろみを爪しるしの心ちすと云なり一說云角筆之事也角筆とは假名つけれ事をはゝかりて無點の書につのなとにてしるく假名を付る事ある也然は點なき所々をもつまひらかによみ給ふことつましるしのあるやうなりと云也

れうもんに　大學寮之門也

こゝにてもまたおひのゝしる物ともありて

大學のさかゆるころなれはかみなかしもの人　伊勢物語云その木のもとにおりゐてかさしさしてかみなかしもみな歌讀けり上中下也

もんにんきさうなといふなるも　文人　擬生　才人（エッヒト）

金樓子曰正仲任言夫說一經者爲儒者也傳古今者爲通人也上書奏事者爲文人也能精思著文連篇章爲鴻儒也若劉子政楊子雲之例是也蓋儒生轉爲通人々々轉爲文人々々轉爲鴻儒也今案云文人は文章生擬生は擬文章生とて文章生に擬する也或擬進士と云々

源氏のうちしきり后にゐ給はん事世の人もゆるし聞えす

後朱雀院御時陽明門院（三條院皇女）中宮嫄子（敦康親王女）南宮共依爲源氏春日大明神有御祈大神宮有御託宣事此事雖爲寬弘以後事聊可潤色乎

桓武以後天下の國母おほくは大織冠の御末也忠仁公以來藤氏臣皆外家として必執政する也

王女御にてさふらひ給ふ　王女御例

朱雀院皇女昌子內親王（冷泉院女御）世以稱號王女御云々

惠子女王（文德女御）嘉子女王（清和）兼子女王（同）忠子女王（同）寬子女王（同）班子女王（光孝 中野親王女）熙子女御（朱雀女御 文彥太子女）徽子女御（村上女御 重明親王女）庄子女御（村上女御 代明親王女）

凡王女御にかきらす姓をもむかしはよひ付也　李部王記に藤女御源女御なとあり

おとゝ太政大臣にあかり給て　皇子任太政大臣例

大友皇子（天智天皇御子）天智天皇十年始任太政大臣

高市親王（天武天皇御子）持統天皇四年任太政大臣

大將內大臣になり給て世の中の事ともまつりこち給へくゆつりきこえ給　內大臣執政例

忠義公堀河關白兼通天祿三年十一月廿七日內覽同十一月廿七日內大臣中關白道隆公永祚元年二月廿三

日内大臣二年五月關白師内大臣伊周公正暦五年八月廿四日内大臣長徳元年三月八日内覽

わかうとおりはらにて　宮腹なり末摘花卷にわかうとをりの兵部大輔とあるも王孫也こまの〻物語にも兵部卿の宮のわかうとをり此外うつほ隱蓑物語なとにも此名あり

ところ〲のたいきやうすきて　太政大臣　内大臣新任饗事也としことに饗あれはかくいふ也廂母屋の饗なといへり

おきのうはかせもたゝならぬ心ちして

秋は猶夕まくれこそたゝならね荻の上風萩の下露

ひはこそ女のしたるにくきやうなれと　うつほ物語に云ひはなんさるは女のせんにうたてにくけなるすかたしたる物也

もの〻上手の後に侍れと　明石入道延喜御時より三代といひし事也

ちうさすことなと　柱　さすはをす事なり

イ本ナシ　またをひすかひぬれ　をひつゝけたるなとやうの心也

御くしのさかりは　下場

とりゆのてつき　箏の取由也

風のちからけたしすくなしとうちすし給てきんの手こゑイならねとあやしう物あはれなるゆふへかな

文選高士賦序　落葉俟微風以隕風之力蓋寡孟嘗遭雍門而泣琴之感已未何者欲隕之葉無所假烈風將墮之泣不足繁哀響

しうふうらくかきあはせてしやうかし給ふ

秋風樂盤渉調

笛のねにもふることはつたはる物也

向子期思舊賦序云隣人有吹笛者發聲寥亮追想曩昔遊讌之好　文選

さくはうし　笏拍子也

はきか花すりやなとうたひ給　更衣催馬樂呂

こをしるといふはそらことなめり　明君知臣明父知子史記　擇子莫如父擇臣莫如君左傳　知臣莫如君知子莫如父日本紀

しりうこと

後言見尚書

おゝしうあさやいたる　雄稜日本紀　鯘アサヤク

御あまひたひ　尼額

みかとの御いつきむすめもをのつからわやまつため
しむかし物語にもあり
丞相欲贖子罪陽石汚公孫誅 漢書
康子内親王延喜皇女村上帝御時弘徽殿におはしまし
けるに九條の右丞相しのひてまいらせ給けるかの
ちにはあらはれていていり給けり 閑院太政大臣
公季の母也 世繼
又左京大夫道雅密通前齋宮當子 三條院皇女 母后娍子云々
宮れいはせひしらす 是非不知
風のをとの竹にまちとられて
風生竹夜窓間臥月照松時臺上行
雲非のかりも我ことやと 霧深き雲ゐの雁も我こと
やはれせぬ物のかなしかるらん 古今
身にもしみけるかなと思ひつゝけて
大方の秋のさかとはしりなから荻吹風そまつは身
にしむ 六帖
吹よれは身にもしみける秋風を色なき物と思ける
かな
さくしりおよすけたる人たち 此人は夕霧を指也
觽礪記 或說人のなまさかしきをさくしれたるとい
ふことありと云々又はさかしらといふ心歟くとか
とりとらと五音通する故なり云々此事秘說あり
つれ〳〵に思くして 苦
せいしいさむとも 制諫
十四になんおはしましけるかたなりにみえ給ていと
こめかしうしめやかに
こめきこゑにてはふるめかしきにあらす子めき歟
若は少めき歟
めでたくとも物のはしめの六位すくせよと
三條上乳母冠者君を不受の詞也六位をは冠者と云
無官のものをはくわしやと云也
うちはれたるまみ なき腫たるなり
みちのほと人やりならす 人やりの道ならなくに大
方はいきうしといひていさかへりなん
すきにしとし五節なとゝまりにしか
薄雲女院崩依諒闇被停止也
本朝月令曰 五節舞者淨御原天皇之所制也相傳曰
天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄爾之間前岫之下雲氣
忽起疑如高唐神女髣髴應レ曲而舞 獨入天矚 他人不

見舉袖五變故謂之五節其歌曰
乎度綿度茂爲度綿左備須毛可良多萬乎多茂度邇麻
岐底乎度綿左備須茂
善相公意見内一請減五節妓員事
右臣伏見朝家五節舞妓者大嘗會時五人即皆預叙位其後年々新嘗會時四人無預叙位其例由是至于大嘗會之時權貴之家競進其女以宛此妓尋常之年人皆辭遁可闕神事爰有新制令諸公卿及女御輪轉進之其費甚多不能堪任伏案故實弘仁承和二代尤好内寵故遍令諸家擇進此妓即以爲選納之便也諸家僥倖天恩不顧糜費盡財破産以貢進方今聖朝修其惟薄立其坊閑此等妓女舞畢歸家無預燕寢然則此妓數人遂有何用重案舊記昔者神女來舞未必有定數四五人伏望擇良家女子未嫁者二人置爲五節妓其時服月料稍令饒給節日衣裝亦給公物若負節不嫁經十ヶ年者即預女叙位聽令出嫁若願留侍者預之於藏人之列即擇置其替人亦如前年
寛平遺誡曰每年五節無人進出迫彼期日經營尤切今須公卿之中令貢二人雖非其子必令求貢殿上人一人選入召之當代女御又貢一人公卿女御依次貢之終而復始以爲常事須入十月節召仰各身在前令用意
わらは下つかへ　上童下仕也
うへの五節はよしきよといひしかわふみのかみになりて右中辨なるそたてまつりける
五節は恒の年は公卿二人殿上受領二人四所也代始には公卿二人殿上受領三人五所也それを受領の分をは殿上人にてまいらすれはうへの五節と云也
五節姫四人善相公意見云新嘗會時五人云々今年依爲新嘗會至五人歟公卿二人者按察大納言左衞門督也殿上受領者良清惟光也以上四人也大納言のほかはらの娘をたてまつるに宇多院の御時舞姫可進公卿女之由始仰云々寛平遺誡見歟
くしいたして　苦也
あめにますとよをか姫の宮人も我心さすしめをわするな　とよをかひめとは五節の舞姫の事也我物に領したる所にはしめをさす也是を神事の時なれは注連木綿によそへていへる也
拾遺神樂歌
みてくらは我にはあらすあめにますとよをかひめの宮のみてくら

みつかきのとの給ふ　乙女子か袖ふる山の水かきの久しき代より思そめてき

そゝきつる　撰ゝ文選

なをしなとにまかはれる色にゆるされて　殿上六位聴直衣也蒙禁色雜袍之宣旨歟或說云被加職事歟六位職事着禁色之故也　西宮抄云指貫ハ王者已下衆人所用也古時有制臣下不用近代五位以上昇殿六位皆用之云々

こゝしう　古々歟ふるめかしき心也又云巨々おほきやかなる心也廣韻云巨大也

むかし御めとまりしをとめのすかた　乙女はおさなき女をいふ也萬葉に未通女なと色々にかけりいまた嫁せぬ女の事也といへりあま乙女は天女の事也只女の惣名也されは又萬葉には妻女(ツマヲトメ)ともいへりむかしとは筑紫五節事歟見花散里巻

たつの日のくれかた　十一月中丑日よりはしまる若丑二あれは下の丑也但上の丑も有例此日まいりの日とは辰日は五節の終の節會の日也

あをすりのかみまたとりあえて　靑摺の紙とは靑き蠟紙歟唐紙の文は印にあてゝ蠟にてすりたれは云歟五節のおりふしなれは此紙たよりあるによりて用之歟

ひかけにも　以蘿葛爲手繦　古語拾遺諸社祭にもひかけ草を鬘とする也昔の前也

けゝしうもてなせは　けさやかなる心歟又潔齋歟

あふみのはからさきのはらへつのくにはなにはにといとなみて　五節前後の齋に皆禊をする也何の禊も河邊海邊にて禊をする本儀也辛崎難波七瀬の隨一也仍近江攝津國司たてまつる舞姫此所禊尤有便宜乎舞姫は五節はてゝ曉天退出之時禊をする也上古はからさきなにはまても下向しける也近代は内野にて陰陽寮まいりまうけて勤仕之

七瀬所々　難波　農太　河俣攝津　大島　橘小島山城　佐久那谷　辛崎近江　又洛中七瀬者河合　一條　土御門　近衛　中御門　大炊御門　二條也　應和三年七月廿一日御記曰藏人式部丞藤原雅村供御禊物以明日令天文博士保憲赴難波湖及七瀬三元河臨禊

みそきするけふから崎にをくあみは神のうけ引しるしなりけり

同集云　伊勢歌詞　難波のはらへし侍てまかりかへりける曉に森の侍けるに時鳥のなき侍けるをきゝて
時鳥ねくらなからの聲きけは草の枕そ露けかりける

ましか　古人釋に丸かなりと云々今案汝歟日本紀に今の字をいましとよめりそれを略してましと云歟或は爾とも云也

ちゝぬし　主也世繼云なにかしのぬしの藏人にていますかりしと云々いさゝかゝしつく心也

きんち　汝也世繼に多此詞ありたけとりの物語にもきむちにとありうつほの物語にもきんちはなんその人そといへり

はまゆふはかりのへたて　御熊野の浦のはまゆふもゝへなる心は思へとたゝにあはぬかも（拾遺人丸）

大宮の御かたちことにおはしませと　鏡山君か影もやそひたるとみれはかたちはことにそ有ける（高光日記）　異なるかたちとは出家の故也さまかふるなと云心なり此歌の心にかはるへし

よしふさのおとゝなときこえけるいにしへのれいになすらへてあを馬をひき

光仁天皇寶龜六年正月七日天皇御楊梅院安殿（設宴）於五位以上既而內厩宴進靑御馬兵部省進五位已上裝馬（是日馬始也）忠仁公覽白馬事舊記所見未詳云々但宇治關白以彼例覽之然者勿論歟白馬者引諸院宮之故也忠仁公依蒙准三后宣旨被覽之歟宇治關白同之仍源氏太政大臣同依准三宮覽之者也准后事太后太后宮皇后宮此三になそらへて准三后と云也

執政准三宮例

忠仁公（貞觀十三年四月十日爲准三宮）

昭宣公（元慶六年二月一日准三宮一如忠仁公之故事　仁和〻年二月十九日更賜之依前固辭不受也）

貞信公（天慶二年二月廿八日准三宮如貞觀故事　同九年五月廿日詔賜之）

忠義公（貞元二年三月四日准三宮）

東三條關白兼家（寬和二年六月廿二日爲攝政蒙准三宮宣旨）

きさらきの廿日あまりの程に朱雀院行幸あり

御記曰延喜十八年二月廿六日己巳是日參入六條院云々此月彼例歟凡儀は天暦二年三月九日康保二年十月廿三日兩度例殊相叶歟

みなあをいろのさくらかさねをき給ふ御門はあかいろの御そたてまつりたりおとゝもめしにてまいり給ふ

おなしあか色き給へれは　保元内宴日有沙汰法性寺
關白被着赤色袍之由見松殿記
　櫻下襲事
面は普通也裏は櫻也八幡臨時祭日主上令着櫻下
襲、同半臂着給或又晴の行幸なとにも春は公卿着
樺櫻或蒴木下襲染裝束也
晴儀に諸臣着麴塵袍賜一日之當色也　其時主上令
着赤色御袍給又第一人同着之漢代曆曰大唐景雲三
年壬子　正月五日内外文武官各加階及天下老人與板
授官年九十已上老與緋袍牙笏　西宮記云内宴之日
臣下皆麴塵主上服御赤色而第一上卿服同色之袍是
又例也有舊例中故貞信公並小野宮大臣度々着赤色
但延喜之間國經大納言時々着赤色云々（ツワオロセントテ云ハ地アカ）
（タテ文ハタロキ袍也）（省）
しきふのつかさのこゝろみの題になすらへて御たい
給ふ
延喜四年七月九日御記曰去月廿三日式部省奏有試
判文其判及第者三人登省
記曰康保二年十月廿三日行幸朱雀院御題於藏人所
被行之

飛藥其舟輕シ（勒七言）澄陵氷輿膺
及第一人橘倚平（字橘宣式部丞 飛驒守是輔子）　藤原雅村獻策
幷散樂村上御門也是等其例也
おくたかき物　水原抄曰おくたかき物とはいまた學
問いたらすのほるへき道もはるかなりといふ心な
り奧高也或云奧義をきはめたる高才の心歟勸文今
案贍病甚者歟高慢なといふもはなはだしきを高と
いふ也此卷にもはかせともおくしぬへしとあり
（奧ニ非す）
つなかぬ舟にのりて　放島試事也朱雀院の試には學
生皆舟に乘て中島にゆきて詩を作也文章生試は式
部省にて行之省試とも云也今日朱雀院にて被行之
也　うつほの物語云すゑふさ試の題給はりてたゞと
り舟にのせられていてたりすなはちおもしろきふ
みつくれり進士になされて方略の宣旨くたりぬ
鶯のさえつるこゑはむかしにてむつれし花の影そか
はれる
（後撰）鶯の鳴なる聲は昔にて我身ひとつのあらすもある
かな
むつれし花のとは近付むつれし也

そちのみこときこえしいまは兵部卿にて　六條院の
御弟君花宴に秋風樂舞人歟
かく所まとをにておほつかなければ御前に御ことゝ
もめして兵部卿宮ひはうちのおとゝわこむさうの御
こと院の御前にまいり給てきんはれいのおほきおと
ゝそせめきこえたまふ
李部王記曰天暦二年三月九日歸德是間樂所漸遠絃
音不分明詔右大臣云々操絃者近候宜歟右大臣奏之
上皇令召圖書寮御琴式部卿和琴余琴右衛門督琵琶高明卿
治部卿箏兼明卿又召唱歌者數人候南欄
さう唱歌かのてん上人あまたさふらひ給ふあなたうとあ
そひて次にさくら人　唱歌事有例笛ノソウカニテハナキ也昔ハサウカノノトテ有ケルナリ
安名尊　催馬樂呂　櫻人同
一段あなたうとけふのたうとさやいにしへもはないに二段
しへもかくやありけんけふのたうとさあはれそこ三段
よしやけふのたうとさや
なかしまのわたりにこゝかしこにかゝり火ともして
天暦二年同行幸之日已臨昏主殿寮供庭燎李部王記
かへとのにわたらせ給朱雀院ハテリ井ノ御門ニマシマス其内ノ殿也栢ニテ作故ニ云トモ云リ
栢梁殿在朱雀院艮角東宮故事曰彼宮有素栢局床也

云々此故歟栢殿爲後宮御在所之由見九條右丞相記
御たうはりのつかさかうふりなにくれと　御給　年
官　年爵也
おいもておはするまゝに　誠知老去風情少見此事無
一句詩樂天
大かくのきみその日のふみうつくしくつくり給て進
士に成給ぬとしおとなひかしこき物ともをえらはせ
給しかときうたひの人わつかに三人なんありける
禮記曰大樂正論造士之秀者以告于王而升　諸司馬
曰進士註曰可進受爵祿者也聖武天皇神龜五年始進
士見帝王系圖

進士及第例

承和六年春五星若連珠詩及第三人連珠詩及第三人
三月廿日判少輔藤原氏宗朝臣
孫王茂世王桓武御後仲野親王男　三原永道　文長河
登科記云式部卿是忠親王二男進士及第
式膽王延喜十六年八月廿八日試行幸朱雀院御題高風送秋詩
以鐘爲韵七言六韵及第四人九月廿一日判
藤原高樹字藤原竜近江掾　大江維時字大江二
春淵良規字劉二　藤原春房字藤原[illegible]

已上四人不作關韻及第
わきのつかさめしにかうふりえて侍從になり給ふ
正躬王葛野親王男 弘仁七年補文章生天長八年十一月二日任侍從
源清平是忠親王男（光孝帝イ） 延喜三年九月文章生七年九月卅日侍從
源保光代明親王男 天暦四年十二月廿日奉文章生試同五年遂及第十年正月一日侍從
六條京極のわたりに中宮の御ふるき宮のほとりによまちをしめてつくらせ給
宇津保物語云紀伊國むろの郡に神なひのたね松といふ長者吹上の濱のわたりに四面八丁の内に紫檀蘇芳くろかいからもゝなといふ木ともを材木として金銀瑠璃車渠瑪瑙のおほ殿を作りかさねて東の陣のとには春の山南の陣のとには夏のかけ西の陣のとには秋の林北には松の林四面をめくりうゑたる木草たゝのすかたせす此事を摸する歟たね松孫の源氏の宮のために造て四面八丁のうちに四季をわけてすまひけるといへる相似たり

式部卿宮五十になり給けるを御賀の事御としみの事
御賀事也年の滿たるを賀する故なり後徳大寺左大臣記云試樂也云々不審
八月にそ六條院つくりいてゝわたり給　此六條院は河原院を摸する歟御記に見えたり一世源氏作られたるも其例相似たる歟延喜十七年三月十六日己丑此日參入六條院此院是故左大臣源融朝臣宅也大納言源朝臣奉進於院延長二年正月廿六乙丑　此日參入中六條院今御此院
ひんなきところをはくつしこめて　無便宜所也
嵯峨の大井のわたりの野山もともにうつされたる
くたに　若蘖也苦膽といふ草わりと云々同物歟薔薇荷なといへり古今集物名部にはくたにとかけり
むまはのおとゝつくりちゆひて　馬場殿　埒五月ハ馬ノ月ナレハ夏ノ方ニ馬場アル也
一說云乙殿歟第舍をおとゝと云也殿に有甲殿有乙殿亦寢殿をよるのおとゝと云かことし
今案此儀不然野分卷に寢殿をおとゝのかはらといへり乙殿にあらさる歟唯殿の字の訓をおとゝと云

故也人をも大臣にあらされともをはおとゝなとい
ふ也殿字の訓也
ひかんのころほいわたり給
彼岸齋法成道經云一切衆生依時二八月齋十方世界
一切衆生離苦得樂靈瑞而已乃至彼岸者二月八月幸
會時修到彼岸齋食云々波羅密此云到彼岸
世のそしりもやとはふき給　省（ハブキ）かへりみる也　省略
也
あて〳〵のこまけ　宛々　細分
しほんいろのをり物かさねて　紫苑色おもて蘇芳裏
あをき也
風にちる紅葉はかろし春の色をいつはの松にかけて
こそみめ　このいつはの松もこまかにみれはえなら
ぬつくり事ともなり　いつ葉の松五葉の松也萬葉に
ありえならぬはたゝならぬ也えもいはぬなと云心
也つくりことゝは造花の風情也或本云いはねの松
につけてこそみめとあり詞に相同するか如何
拾遺云元良親王に承香殿としことに春秋いつれか
まさるととひ侍けれは秋なんをかしう侍といひけ
れはおもしろくさきたる櫻をおりて是はいかゝあ
るといひつかはしけれは
おほかたの秋に心はよせしかと花みるころはいつ
れともなし
（イ應和三年七月）宰相中將君たち春秋くらへ給て春をのみをかしき
物にし給ていふかひなく心もとなき物にいひなし
給けりとて桃園の宮の御方より中の十日はかりの
ほとにおもしろき花ともをおりてまきすて給なる
事いと心うしときこえ給へるにつくり花のいとお
もしろきをこれはとあはれなれはとてたてまつり
給へ（らイ）れは花に心をつくる君かなとて返したてまつ
れは松につけて春の御かたへ
かゝる秋を君にまかせて我はたゝのとけき春をま
つそくるしき
返し
さく花も人の心ものとかなる春としりせは春をま
たまし
さしよそきて　退也

河海抄巻第十

正六位上物語博士源惟良撰

第十七　玉鬘

巻名　戀わたる身はそれなから（おとイ）玉鬘いかなるすちを尋きぬらん

年月へたゝりぬれとわかさりし夕顏の露忘れ給はす

此巻の始末摘花巻と同様なり何も其説（註イ）あるも也末摘花巻は若紫の次なれとも横の並なる故に夕顏の巻につゝけん爲めにかけり此巻又玉鬘の君のことを出來へきためによりて先夕顏の上の事を思出せり共以有深致矣

又露わすられすは夕顏の巻に夕露にひもとく花或は光ありとみし夕顏のうは露なとありし心歟

あらましかはとあはれに　世の中にあらましかはと思入（のイ）なきかおほくも成にけるかな　此歌爲頼紫式部大略同時人也難爲證歌之由有一儀矣然而爲頼すこし先達也伊勢物語業平朝臣春日野の若紫のすり衣しのふのみたれかきりしられすを本歌として河原左大臣しのふもちすりたれゆへにと詠せらるゝ歟業平は元慶元年正月廿八日卒五十六其時左大臣五十四歟寛年七年八月廿五日薨七十三云々是等は同時之先達爲證之例也

（イ本）なをうそのかた見とみたまひて

形（真本）見たに今はあたなれこれなくは忘るゝ時もあらまし物を

かいひそめたるものに女君もおほしたれは　ひそむは潜字也しのひやかなる體也龍の未出さるを潜龍と云かことし周易に潜龍勿用註に龍德而隱といへり以前の巻々の纇の心にはあらざる也

おとしあふさすは　あふさすはふれさせす也常陸宮姫君なとのことを云歟孝經曰滿而不溢

わかきみ　玉鬘君也

その御めのとのおとこ少貳になりていきけれは

職員令曰太宰府少貳二人掌同大貳

わかなもらすなとくちかためたまひしを

犬（真本）上の床の山なるいさや河いさとこたへて我名もらすな

かへる浪もうらやましく　いとゝしく過行かたの戀しきにうらやましくもかへる浪哉
ふなこともものあら〳〵しきこゑにてうらかなしくもとをくもきにけるかなとうたふを
毛詩曰匏有苦葉招々舟子 註云舟子舟人也 箋云舟人之子　遥く境 白氏文集

廿六
舟人も誰をこふとかおほしまの浦かなしけにこゑいきこゆる　大島 筑前國也鐘御崎近邊也
こし方も行衛もしらぬおきに出て哀いつゝと君を戀らん
此二首少貳女二人 姉御許 兵部君 歌なり、前の詞にむすめとも丶思こかるゝをといひ又おはせましかは我らはくだらさらましといへりともにむすめともか事なり
ひなのわかれになと　思きやひなの別におとろへてあまのなはたきいさりせむとは 古今
ひなは夷也田舎のわかれなり　或物云南海に一の鳥あり雛をそたてゝ成長の時おきへつれて行てはなつなりそのゝちはたかひに行衛を知らすこれをひなのわかれと云也云々

案之漢朝古事歟孔子在衛國聞桓山之鳥生四子羽翼旣成將分離悲鳴以相送といへり　是を四鳥の別と號す詩にも別離に作來れり此事歟
かねのみさきをすきてもわれはわすれすなと　筑前國也
つくしなるかねのみさきに波立は人のつらさそおもひしらるゝ
萬七
ちはやふるかねのみ崎をすくれともわれは忘れすしかのすへかみ
小貳にんはてゝのほりなんとするに
仁德天皇四年始置諸國史仁明天皇承和元年七月勅諸國守介云以四年可爲限但陸奥出羽太宰府是云官國始自筑前等遐在千里以五ヶ年可爲任限也天平十五年十月辛卯始置鎮西府、寶字二年九月丁丑始以百廿日爲交替程十月甲子國司以四年爲任限 國史 寶龜十一年八月庚申太宰任限增爲五年
わかたちの人にも　我館也
ねさうなとおこなひ給　年三月六 年三は正五九月月六は六齋日也　具云佛說年三長齋殊勝福田功德經云々
年三月長齋經曰若有善男女等修年三之齋戒忍聽諸

難等獲殊勝福利其年齋者於年有三ヶ月所謂天帝釋爲其主領廻四天下撿計衆生所作善惡其正月卅日向南閻浮提二月起西瞿耶尼三月行北鬱單四月有東弗波提也天帝以正月五月九月巡向南州註記衆生作業云々　後撰集（第廿）年三をこなふとて女檀越のもとよりすすをかりて侍けれはくはへてつかはしける

仙祐法師

百年にやとせをそへて祈りくる玉のしるしを君みさらめや　一說云歲星云々

たいふのけんとてひこのくに丶そう（孫）ひろく

太宰府一員（帥權）大貳小貳大監二人少監二人大典少典大少令史等あり少貳敍爵の時少卿といふ件監敍爵の時大夫監と號す丶大監者正六位下少監者從六位上相當也有軍監（軍者有東監者有西武官也）

めくらひなんや　經廻也

ことはそいとたみたりける

吾嫌其說迂（孝經序）

（拾遺）あつまにてやしなはれたる人の子はしたゝみてこそ物をいひけれ　輔相

けさう人はよにかくれたるをこそよはひとはいひけれ

假借人（貞觀政要ニハナツカシウストヨメリ）氣裝人（新猿樂記）又假相人（同）夜這人（同）竹取物語云よるはやすきゐもねすやみのよにいて丶もあなをくしりかいはみまとひあへりか丶る時よりなん夜はひと云ける

あやしかりけりとみゆ　いつとても戀しからすはなけれとも秋の夕はあやしかりけり（あやしかりけり秋の夕くれイ）

をはおと丶　祖母殿

この月はきのはてなり　三月は春季の終也四季の終月世俗說憚之云々（に每事忌也云々イ）

（大夫監歌）君にもし（しもイ）心たかは丶まつらなる鏡の神もかけてちかはむ　或古老物語云武家始祖宇合一男廣繼於西府謀反以大野東人爲官兵令攻彼等之時廣繼自以刀切頸其頭昇空蹶殺官軍成赤鏡見之人悉死云々肥前國松浦郡鏡明神是也（見式家系圖公卿符）風土記曰昔者氣長足姬尊在此山遙覽國形而勅祈云天神地祇爲我助福便用御鏡安置此處其鏡即化爲石見在山中因名曰鏡山

新千載集あさからすたのめたる男の心ならす肥後國へまかり侍けるか便に付て文をおこせて侍ける返事に紫式部

あひみんと思ふ心は松浦なる鏡の神や空にしるらむ

まてやこはいかにおほせらるゝ事そ　まてやはしはしやといふこゝろ歟

まれ／＼のはらからは　親々(ハラカラ)萬葉第八

いきたらしと思しつみ給　不生也

兵部君うき島をこきはなれても行方やいつことまりとしらすもあるかな

玉鬘行さきもみえぬ浪ちに舟てして風にまかする身こそうきたれ

はやふねといふものにて　あしはやを舟萬葉第七舸四聲苑云古我反漢語抄云波夜布祢　高尾舟一云戰士可乘之輕舟也

はこやの刀自物語云女を馬にはえのせたてまつらしはや舟つくるへきやうをおもほせ

後撰朝綱朝臣おほしまに水をはこひしはや舟のはやくも人にあひみてしかな

ひゝきのなたもなたらかにすきか海賊いそくの舟にやあらん

萬十七昨日こそ舟出はせしか伊佐魚とる比治寄(ヒチキ)のなたをけふみつるかな

孫姫式あふときはますみの鏡はなるれはひゝきのなたの(モイ)浪もとゝろに

出見集年をへてひゝきのなたにしつむ舟の浪のよするを待にそありける

此歌の詞には年比攝津國に候けるをといへり然は當國の名所歟袖中抄顯昭云ひちきのなたは播磨にあり俗説にはひゝきのなたとも云と云々李部王記云天德四年六月十一日是日備前備中淡路等飛驛至備前使申云賊二艘純友等也從響奈多捨舟脫遁疑入京歟云々

かのおにしき人　鬼

かはしり　河尻

からとまりよりをすほとはとうたふこゑ

萬葉から泊のこの(能許)浦浪たゝぬ日はあれともいへ(モイ)に戀ぬ日はなし

案之此泊若各別所歟　又をすほとはと云引歌在之歟可尋　善相公意見延喜十四年曰重請修復播磨國魚住泊事(ウヲスミノトマリ)　右臣伏見山陽西海南海三道舟船行之程自檉生泊至韓泊(カラ)一日行自韓泊至魚住泊一日行自魚住泊至大輪田一日行自大輪田泊至河尻一日行也此

昔行基菩薩計程所建立而今公家唯修造韓泊輪田泊
長㢘魚住泊以下略之
ふこのすけ　豐後介
らうとう　郎等
胡の地のせいしをはむなしくすて〳〵つとすしたる
を　梁源卿井不得見胡地妻兒虚棄捐白氏文集傳戎人
いちめあき人　市女　商人
みつとりのくかにまとへる心ちして　如魚鼈之居陸
似鳥雀之覆巣古願文本文猶可勘
ちかきほとにやはたの宮と申すはかしこにてつねに
まうて祈申給しまつらはこさきおなし社なり
筥崎は八幡也松浦宮あまたの説ある歟風土記に神
功皇后御鏡石と成て鏡山にましますとみえたり仍
一躰と云歟、延喜二十一年六月廿一日於觀世音寺
西大門御託宣記當寺講師遣一記之説託若宮神子七才女子橘滋子給曰吾是八幡乃
若宮一御子也大菩薩仰云吾穗浪郡大分宮移住後已
有三意一者竈門宮は我伯母仁御座而年中節會府官
以下國司雜任年來之間暗之輩或乘馬天過遙拜下或
乍着笠渡彼御前其御恨甚有恐二者郡司百姓饗膳
供給ニスル越嶮岨山數日致煩民間苦同我苦三者放生ハ

是海上之事也穗浪宮ハ已非放生地因之避彼地欲移
住筥崎松原有其故昔我國土ヲ鎭護シ始時ニ戒定惠筥ヲ
彼松原地ニ所置也　仍其名ヲ筥崎とは號する也云々
筥崎新宮可向新羅國方又礎面書敵國降伏之由可立
其柱宮殿梁棟可用柏又可安置藥師彌勒觀音等像奏
聞公家早棄穗浪古殿移坐筥崎宮云々略記文　大貳藤
原當犛朝臣言上公家任官符旨少貳眞材朝臣造立件
新宮其官符儀云託宣之旨爲禦所來寇加之外賓通接
之境也營其宮殿殊盡美麗者延長元年遷御筥崎新宮
かのみやのこしとて　八幡宮五師　貞觀八年別當安
宗之時以蓮如法師始補五師安和二年別當貞芳之時
以五師貞善法師始補大五師
はつせなん日のもとにあらたなるしるしあらはし給
ふともろこしにもきこえあなり
長谷寺觀音十一面二丈六尺　文武天皇御宇德道上人造立之
法道仙人是也　神龜元年公家被建立堂一宇同四年三月廿日
供養講師行基菩薩緣記云長谷神河浦北豐山峯德道
聖人造立十一面觀音菩薩之利生道場也　大唐僖宗
皇帝后馬頭夫人文宗孫玄成太子娘形のみにくき事をなけき給
けるに仙人のをしへによりて東に向て日本國長谷

寺觀音に祈請し給けるに夢の中に一人の貴僧紫雲に乘て東方より來て手をのへて瓶水を面にそゝくとみて忽に容貌端正に成にけり是によりて乾府三年丙申七月十八日侍女を引率して明州の津に出向ひて十種の寶物を奉らると云々又吉備大臣入唐時長谷寺觀音住吉明神に祈請して野馬臺をよみけるに靈場あるよし江談に見えたり

わかきみをはましてめくみたてまつり給てむとて　德（法イ）道上人長谷寺建立之時藤原房前卿奏聞助成之間彼上人聖朝安穩藤氏繁昌乃至法界衆生のためと祈請之由緣記にみえたり今の玉鬘君藤氏なれはましてといふなり

かちよりとさためたり　うつほの左大將あて宮を思かけてその祈にはせにまうつるもかちよりとみえたり

つはいちといふところに　椿市大和國名所也つはきのいちともつはいちとも云能因歌枕にみえたり日本紀に海石榴市といへるは別所なりつはきのいちにて土蜘蛛をうちころしたりし所也紫はひさすものをつはいちのやそのちまたにあひしこやたれし　萬葉　清少納言枕草子云つはいちは大和にあまたある中にはつせにまいる人かならすそこに泊りけるは觀音のつけのあるにやあらん心ことなり

つほさうそくして　いちめかさになかゆひたる物なりと云々枕草子に有拾遺集詞にも春物へまかりけるにつほさうそくして侍ける女ともの野へに侍けるをみてといへり

ひすましめくもの　大つほかふる物の名なり云々

かちあゆみはたえかたく　徒歩行（カチヨリユカシ）　大軍　徒涉（カチヨリワタリ）　白氏文集

ひやうとうた　兵藤太

かいねりにきぬなときて　掻練（カイネリ）は紅のうすき色也かいねりのもにきぬきてと云へきを略したりしをん色の裳のことし如此詞不可勝計

のしひとへめく物　古人云うすきぬ歟云々可尋枕草子云やせ色黑き人のすゝしの一重きたるはいとひむなしおなしこととすきたれとのし一重はかたはともみえすかし云々

たうこくのきたのかた　當國々司北方と云也、　大和國司也

大悲者にはことく〳〵申さし　大悲者觀音の事也玉鬘

君の事より外は申さしと也類詠國史長歌云五種の
寶雲は大悲者の千種の御手の人の世をうつほの惣
持院の十禪師の大とくもまたなくはせの大悲者人
のねかひみて給へと云々
かへり申　賽白氏文集日本紀
しみつのみてらの觀世音寺に　在筑前國沙彌滿誓造
筑前國觀世音寺別當見萬葉　都府樓纔看瓦色觀音寺
只聽鐘聲菅家
本願天智天皇以去大化年中臨幸於外都遊獵於此砌
之時仰侍臣曰此處者四神相應之靈窟三寶興隆之勝
地也乃至登極以後爲果件御願白鳳十年初勅下筑前
國建立菩薩院乃至天平神護二年軌摸東大寺之戒壇
遷築當伽藍之幽砌
御あかしふみ　御燈文
ふちはらのるりきみ　藤原瑠璃君玉鬘内侍督童名也
いたゝきをはなれたるひかりやはおはする
上﨟をはなれてよき人有まじと云心歟勘文曰日出
ては先高山を照と云々
いへかまとをすてゝ　家烟　仁德天皇御製高きやにのほりてみれ
は煙たつ民のかまとはにきはひにけり

京にまてこし　詣來也
二もとの杉の立とを尋ねすはふる川のへに君をみま
しや　古今はつせ川古河のへにふたもとある杉年をへて
又もあひみん二本ある杉
うれしき世にもときこゆ　六帖祈つゝたのみそ渡るはつ
せ川うれしきせにも流あふやと
はつせ河はやくのことはしらねともけふのあふせに
身さへなかれぬ
淺みこそ袖はひつらめ涙川身さへなかるときかは
たのまむ
かゝるした草もたのもしくおほしなりぬ
萬人丸我宿に　のイ軒の下草おふれとも戀わすれ草みれとまた
おひす
大和物語百塗仲道柏木の森の下草生の世にかゝる思はあらしとそお
もふ
いつとても　出也
こまかへる　若反萬葉うつほの物語にも大將こまか
へらせ給へかしと云々
同集人丸朝露のけやすき我身老ぬとも又こまかへり君をし
またん

霜枯の草のゆかりそあはれなるこまかへりてもなつかしき哉

蜻蛉日記に堀河太政大臣のつかはしたる文に在之此心相叶歟

わかき人はくるしとてむつかるめり

むつかるは勘當の心也是はわかき人ははらたつといふ心也

いたつらにすき物し給しかはりに　過去の人と云也

紫の上を廿七八といふともまことには今年廿七なるへし玉かつらは廿一なり

右近同年其故は源氏十八の時三才なりき品定の年歟夕顔に合給し年は同年也、夕顔巻に右近おとゝしの春いてき給へりし女にていとゝかうたけふと云り、此年紫上廿七源氏卅六、九年まさる也、玉かつらを廿はかりと云許詞は廿一なり、紫上を廿七八と云さためさる也廿七なり

しらすとも尋てしらん三島江におふるみくりのすちはたえしを

後撰　あふみにかありと云なるみくりおふる人くるしめのつくま江の沼

つくま江におふるみくりの水はやみまたねもみぬに人の戀しき

見くしけしのなとにまうけの物　天子より庶人にいたるまて装束調する人を御匣殿と云なり

さうしみはかことはかりにても　このかことは少事なり

けそうに人しけく　顯證、又見證

にしのたい　禮記曰婦人髪帶麻于房中　註曰房中則西房也天子諸侯有左右房者也　案之女は必西に居住すへき故ある歟

ふとのにてあるを　文殿仙院より執政大臣家に至まて在之文書收らるゝ所なり

いちめ　唯下女をいふ歟　或市女　商人也

おうなになるまて　嫗とは老嫗をいふなりとし老たるよし也

戸を右近かいはなては　掻放也かけ金をはなつなり

このとくちに入へき人は心ことにこそと

おもなの人やとすこしうちわらひ給ふ

伊勢物語云むかし男つれなかりける人のもとにお

もなくていへるなるべし、莫面（眞名本）
あした丶すしつみ侍にける　かそいろ（朝綱）はいかにあは
れと思らん三年に成ぬ足た丶すして蛭子の父母に
すてられしことを玉かつらの我身のうへによそへ
ていへるなり
戀（ルイ）わたる身はそれなれと（からイ）玉かつらいかなる筋を尋來
つらん　玉鬘也すちを尋ぬるとは鬘の筋によそへて
也萬葉には冠の纓（エイ）後撰には緌（チイカガ）なとをも玉鬘とよめ
り　（後撰）いつくとて尋きつらん玉かつら我は昔のわれ
ならなくに
（萬葉）玉かつらかけぬ時なくこふれ共なにそもいもにあ
ふときもなし
（伊勢物語）人はいさ思ひやすらん玉かつら面かけにのみいと
丶みえつ丶
あはれとやかてひとりこち給
（聖徳太子）しなてるや片岡山のい丶にうへてふせる旅人あは
れおやなし
かのけんかいきましきけはひ　いきまくははらたつ
也いきとをる心歟或本にいきさしとかけり僻事也
うちとのよりまいれる物とも　裝束うつ所也うち殿
はり殿なと丶てあり男女裝束うちのり本躰也いた
ひき引のりなとは略儀也
こうはいのいといたくもんうきたるにえひ染の御こ
うちきいまやう色のすくれたるとはこの御れう
紫上の事也　紅梅はきぬ今様色はうすきぬの事也
いつれも如此心得へし
あさはなたのかいふのもん　海浦文　大浪のかたを
をれるなり
をくれたるも又そこひあるものをとて　そこひある
とはそこある也ひはやすめ字也たとへはかきりあ
ると云心也　無涯底也
（古今）そこひなきふちやは（もイ）さはく山川の淺きせにこそあ
たなみ（うはイ）はたて
むめのおり枝のてふとりとひちかいからめきたるし
ろきうきもの丶こきかさねてつや丶かなるくしてあ
かしの御かたに
しろきむめの織ものはきぬうきもの丶こきは紅の
うすきぬ也
うつせみのあまきみにあをにひのをりもの丶いと心
はせあるをみつけ給て御れうにあくるくちなしの御

そゆるし色なるそへて
黄なるゆるし色のこと須磨卷に勘之西宮記云黄衣無品親王孫王綾源氏及良家子孫弱冠者着之公卿子孫候殿上無官即時用黄衣
御手のすちことにあふよりにたり　あふよりたるは昔によりたる也、あふはあなたといふ心なり　又奥歟何も左様也
にけついたるともみんの御心なりけり　似氣付也
こたいのうたよみ　古代歌讀又古躰とも
まとゐはなれぬみもしそかし　おもふとちまとひける夜はからにしきたゝまくをしき物にそ有ける
俊成卿本にはまとゐはなれぬかしとあり定家卿本にはみもしそかしと云々古人釋云みもしそかしは身そかしなりもとしとはやすめ字也云々案之やすめ字二字までは重疊歟三文字と讀へき歟假令不堪の歌讀當座會遇之趣を詠せんとて毎度にまとゐの三文字をはなたすあらする歟蓬生宮のから衣毎度出來るか如し
けさうのおかしきいとみにはあたひとのと云五文字をやすめところにをきて

後撰左大臣
あた人もなきにはあらすありなから我身にはまた聞そならはぬ
是も強不可限此一首惣して艶書歌にあた人と云詞をこのみ詠の由歟
からやかみのさうし　紙屋紙草子
わかのすいなういとゝころせくやまひさるへき心おはかりしかは
有五家髓腦又濱成式には擧七病喜撰式には出四病孫姫髓腦有八病是等也
うこきすへうも見えさりしに　動すへくもなり歌の病ことに避ははたらきぬへくもなしと云心也
ことはりやとそある　古歌詞歟可勘

第十七玉鬘並一初音　六條院卅七紫上廿八玉鬘廿二冷泉院十八今上十一秋好中宮廿九夕霧十七明石上卅八明石中宮十

巻名　とし月を松にひかれてふる人にけふ鶯のはつ音きかせよ
としたちかへるあしたの空のけしき
あら玉の年立かへる朝よりまたるゝ物は鶯のこゑ
かすならぬかきねのうちたに

のへ見れは若菜つみけりむへしこそ垣ねの草も春（拾遺貫之）
めきにけれ
いとゝ玉をしけるおまへの庭よりはしめ　玉墀
ほり江には玉しかましを大君のみふねこかんとか（萬葉井手左大臣）
ねてしりせは
けかしきやとも玉しかましを萬葉
はるのおとゝ　紫上御方也　殿（オトヽ）日本紀　亭
いけるほとけのみくにかと　四土不二同居方便　實
報寂光也
はかためのいはひしてもちゐかゝみをさへとりよせ
て　固齒事
見掌中曆六本爲一前
一本　煮鹽鮪鮎押鮎火干皆上置鮎串差
一本　鯉鳥鹿猪皆隨ニ盛物一串差置レ上但貫レ之
一本　瓜漬茄（ツケナスビ）漬蕪（カブラ）大根
一本　屠蘇（トソ）白散　窪坏（ツキ）空盞　一本酒盞窪坏四口（ヨクチ）
一本　鏡相ニ具鮎大根橘一
元三御藥齒固具事內膳自ニ右青瑣門（ユウセイ）一供ニ御齒固具一
盛ニ青瓷（ハイ）一
大根一杯　瓜串刺二杯或說三杯然而總七杯由有所見

押鮎　切盛置頭　煑鮎一杯圓切置頭二串　猪完以雉代之　鹿完一
杯以レ鴫代レ之
以上七杯之內精進物供ニ於第一御臺一魚類供ニ二御
臺一或說無鹿完有腹赤
皇女禎子（三條院女三宮母中宮姸子御堂關白女陽
明門院是也）
長和三年正月二日于時二才餠鏡御覽是其例也
榮花物語云うへわか宮にもちゐかゝみみせたてま
つらせ給正月者三春之氣節也本爲ニ政月一秦始皇以ニ
此月一生因而名レ政遂改爲ニ正月一也
尙書曰月正元者首也月上元日祀ニ祖禰一進レ酒降レ神
致ニ福祥一　尙書大傳曰夏以ニ平旦一爲レ朔殷以ニ鷄鳴一
爲レ朔周以ニ夜半一爲レ朔々謂ニ月朝一故曰ニ三朝一此
爲ニ歲朔之日一家國同レ時而宗祭也
ちとせのかけにしるきとしのうちの祝ことゝもして
そほ（をイ）れわへるに
萬代を松にそ君をいはひつる千とせのかけにすま（古今）
んとおもへは
そを（ほイ）れはたはふれ也戲也
われことふきせんと　壽詞（コトフキ）日本紀　言吹同　壽文選　或壽詞同

ことふきは年始の祝詞也古事記曰擊口鼓爲レ伎(コトフキ)文
選曰振(アケテ)十城之虛壽(ムナシキコトフキ)掩咸陽以取雋西宮記曰歌合人於
南殿西發調子入自日華門列立東庭踏歌周旋三度列
立御前言吹奏祝詞畢
かねてそみゆるなとこそかゝみのかけにもかたらひ
侍つれ
古今 あふみのや鏡の山をたてたれはかねてそみゆる君
かちとせは　世俗說云覽二餅鏡一之時誦二此歌一云々
さむさしたまはんとて　參座　參賀事也
うす氷とけぬる池の鏡には世にたくひなきかけそな
らへる　柳似舞腰池如鏡白氏文集　氷池如破鏡雫影似
殘花 僧達定 後撰 早春
春の日の影そふ池の鏡には柳のまゆそまつはみえ
ける
けふはねのひなりけりけに千とせの春をかけていは
ゝんにことはりなる日なりひめ君の御かたにわたり
給つれはわらはしもつかへなと御まへの山にこま
つひきあそふ
十節記云正月子日登レ岳遙望二四方一得二陰陽靜氣一
除二憂惱一之術也又云引小松延遐年云々初學記云歲

首祝折松枝男七女二七　倚松樹以摩腰習風霜之難
犯和菜羹而啜口期氣味之克調 菅家扈從雲林院序　本朝事始云
天安元年禁中有曲宴昔者上月之中必有此事時謂之
子日遊今日之宴修舊迹者也
行末も子の日の松のためしには君か千年をひかん
とそ思 拾遺三條太政大臣
ひけこともひはりこなと　鬚籠　檜破子
うつほ物語にひわりこなときよけにてもたせ給へ
りとあり
五えうのえたにうつるうくひすも心あらんかし
とし月を松に引れてふる人にけふ鶯の初音きかせよ
拾遺集曰太后の宮に宮内と云人のわらはなりける
時たいこの御門の御前に候ける程に御前なる五葉
に鶯の鳴けるをかれよめと仰ことありけれはつか
ふまつる　よみ人しらす
松の上に鳴鶯のこゑをこそはつねの日とはいふへ
かりけれ
同集云天暦御時にたいはん所の前に鳥のすを紅梅
の枝につけてたてられたりけるを見て一條攝政
花の色はあかすみるとも鶯のねくらの枝に手なゝ

ふれそも　今風流此両首心歟
をとせぬさとのときこえ給つるを
けふたにも初音きかせよ鶯の音せぬ里はあるかひ(ナヰ)（伊行釋）
もなし
（拾遺）谷の戸をとちやはてつる鶯のまつにをとせて春の
くれぬる
くた〳〵しうそあるや　細砕
いもせのちきりはかり　妹兄(イモセ)日本紀　妻妹萬葉　いもせ
とは日本紀のことくは伊弉諾伊弉册尊兄弟夫婦と
成給へる因縁也いもうとゝせうとゝ云心也云々さ
れは蘭巻に岩もる中將玉鬘君をいもせ山ふかきみ(ネイ)
ちをはたとらすてをたえの橋にふみまよひけると
いへりはしめは姉妹ともしらて尋つるにも實には
いもうとにてありけるとよめる也一説云いもせは
いもとせと云心也云々兄弟夫婦事高津内親王（桓
武御女嵯峨女御他腹即位廢之）又仁徳天皇依二菟道
稚皇子之遺言一彼一腹の妹を女御とし給淡海公妹
五十重夫人爲妻他腹漢朝には同姓猶不レ嫁云々
えひかつらしてそつくろひ給へき　日本紀云伊弉諾
尊投(ナゲ)二黑鬘(エビカツラ)一此即化成蒲萄葛この故にかつらをえひ
かつらといへるなり
心かろき人のつらにて我にそむき給ひなましかはな
と　（伊勢物語）出ていなは心かろしといひやせん世のありさま
を人はしらねは　詞云男女いとかしこく思かはし
たりけるかいさゝかなる事につけて世の中をうし
と思てかゝるうたをよみて出にけりとあり此歌の
心をとりて心かろき人と云歟又花散里の巻に我も
人も情をかはしすくひ給やう也それをあひなしと
思人はとにかくにうちかはるを又ことはりよのさ
かと思なし給ふといへり此事か
こまやかに　子細
にしのたいへわたり給ぬまたいたくもすみなれ給は
ぬほとよりは　玉鬘の君去年十一月にわたり給へは
いまた住なれすと云ふなり
清(サハラカ)かみの少しおち過てさはやかなる心也
かみのすそすこしはそりてさはらかにかゝれるしも
からのとうきやうきのこと〳〵しきはしさしたるし
とねに　唐東京錦也唐にも東京西京あり其内東京の
錦すくれたるか舒明天皇御宇以二唐東京錦一摸二用
吾朝一

よしある火をけにしゝうをくゆらかして物こと(殊又毎)にし
めたるにえひかうのかのまかへる
一說薫物の事也云々案之普通火桶歟
薫(裛イ)衣香方
零陵香七分　沈香二分　丁子二兩　蘇合二兩
簷唐(セントウ)二兩　霍香三兩　欝金一兩　麝香半分
右六種各別擣爲散和合唯蘇合簷唐以手揉(モミ)碎和且好
浥衣香方　千金翼方　沈香　首蓿香各五兩
丁香　甘松香　藿香　青木香
芟納方 薬ノ名歟可尋 薬ニハ非ス教長朝臣說　鷄舌香　雀惱香　各一兩
射香半兩　白檀香三兩　零陵香十兩　一說衣被香麝
香異名也見延喜式云々或衣比香
又古老の尼君の秘事とて申は衣被香は麝香半分　沈
香三分二　白檀三分一　いつれも最上品を取合て少し
なませんしなる甘つらにて合云々
此外ひんらうしを少し粉にして入云々冷き匂のま
さる也云々最少分加へしと云々譬は薫十兩(十分一イ)ならは
檳榔子一分計と云々惣の匂をまとむる様有也云々
譬は當時三草と云薫の同類也

すちかはりゆへあるかきさまなり　明石上手跡當時
世のすちにはかはりて又すくれたる也
さえからす　不才　才學かましからす或本にされか
らす
めつらしや花のねくらに木つたひて谷のふるすをと
へる鶯　紫明抄云とつる鶯と釋せり謬說歟
(惟成家)鶯の鳴音のとかにきこゆなり花のねくらもうこか
さらなん
(拾遺)人しれすまちしもしるく鶯のこゑめつらしきけふ
にもあるかな
こゑまちいてたるなともあり　未勘
さけるをかへに家しあれはなと
(入道)梅花さけるをかへに家しあれはともしくもあらす
鶯のこゑ
まちとり給へるはたなまけやけしとおほす
好物(ケヤケキモノ) 白氏文集尤者(ケヤケキ)同廿六　けやけしとは善惡に付て
すさましくおそきやうなる心也すくれなからもは
けしくとしたるすかたにはあらぬ也
選(エラブ)ニ梨園弟子中尤物(ケヤケキモノノチ)一 李白詩 後序

由來尤物不在大能蕩君心則爲害白氏文集八駿圖

世間ニ尤物難留連々々々易銷歇塞北花江南雪同眞娘墓

意者不ニ但感ニ其事ー亦欲懲ニ尤物ー窒ニ亂階ー垂ニ於將來ー也陳鴻傳長恨歌

大鏡云古今撰せられしおり貫之を召出して和歌つかうまつらせ給けり

こと夏はいかゝ鳴けん郭公この暮はかりあやしきはなし

これをたにけやけきことゝ思たまへしにとありけふはりむしかくのことにまきらはしてそおもかへし給　臨時客とは攝政關白の亭に春の始上達部を招て遊を云也さたまれる公務ならねは臨時客と號する歟自餘をは大饗と云中宮東宮并左右大臣也執政臣朱器の饗を設を臨時客と云自餘の樣器饗を大饗と云也是も源氏執政の故に朱器の饗を設られたる故に臨時客と云也又大饗事正月二日二宮大饗中東關白臨時客四日左大臣饗五日右大臣饗謂母屋饗大臣初任謂廂饗

いというそくおほく　右族　花族心也

花の香さそふゆふかせ

古今 花のかを風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる

後撰 山風の花のかさそふゝもとには春のかすみそほたしなりける

あれはたれときなるに　たそかれ時也

辨の少將 このとのうちいてたる　永篠安人左京大夫又不見左中辨近衞少將延暦廿三年正月廿七日任參議中辨少將如元

此殿催馬樂呂

このとのはむへもとみけりさき草のあはれさき草の花　二段　さき草のみつはよつはのなかにとのつくりせりや殿つくりせりや

さきくさのすゑつかた　さき草に說々有歟後漢書には朱草福草なとかきてよめる歟延喜式にも福草萬葉　又材種と書り風土記には紫草とも書之曾禰好忠集にさき草を若菜につみてとよめり然は春の始に萌生する草歟三葉四葉と有に付て木とも云り此草春の初に必三葉四葉に萌と云々又檜とも云り日本紀少彦名命檜木の種をまきて家を作らすとあれは也又三枝祭とて有されとこれは三枝の花を折て酒樽をかさると令文にもあれは各別の事歟但さき

くさの三葉とつゝけんために令の三枝字も心かよふへき歟　葛(サキクサ)

祟神天皇内侍所同殿をおそれ申されて温明殿を七間に作てあかめ申されし事を三葉四葉に殿作せりとよめるなりされは三葉四葉はあはせて七間也間の字をはとよむ也三間四間なり或説には三段四段也段をあまた重て屋敷をおほく作重たる心也是秘説也と云り

はちすのなかのせかひにまたひらけさらんこゝちもかくやと　於蓮花中經十二大劫觀經下品下生釋云雖得生彼華合經於多劫此等罪人在二花内一時有二三障一乃至除レ此已外更無二諸苦一經云猶如比丘又三禪樂也又觀經疏散善義云在二華内一時有二三種障一一者不レ得レ見二佛及諸聖衆一二者不レ得レ聽二聞正法一三者不レ得二歴事供養一除レ此已外更無二諸苦一

世のうきめみえぬ山ちにおもひなすらへて

古今　世のうきめみえぬ山ちにいらんにはおもふ人こそほたしなりけれ

御わかゝみもとしころにおとろへゆきましてたきのよとみはつかしけなる

古今　おちたきつたきの水上年つもり老にけらしな黒きすちなし

古今　瀧つせのなかにもよとはありてふをなと我戀の淵せともなき

柳はけにこそすさましかりけれと　玉鬘卷に末摘花のもとへ柳のおり物を送られたり人からに思よそへてせられたる事なれはけにこそといふなり

ひかりもなくゝろき掻練　掻練は紅に裏張たる也

いとまめにきすくの人にておはす　木強人也

山ふしのみのしろ衣にゆつり給ひてあへなん

拾遺　山臥も野臥もかくて心みついまはとねりの閨そゆかしき

世をのかれて野山に臥を山臥野臥と云也　みのしろ衣は蓑の代に用たる心也

後撰　降雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおとろかれぬる

山里は草はの露もしけからむ身のしろ衣たゝすともきよ

いたはりなきしろたへの衣はなゝへにもなとかかさねたまはさらん

六帖 ひなつるのしろたへ衣けふよりは千とせの秋に立
や重ねん
後撰 なゝへにはぬいかさねゝと人しれすおもふ心はち
へにそ有ける
たゆき心のをこたりに　隳窳(タユシ)史記　隳玉篇云徒果反落也
懈也　窳愈矩反器空中也　緩
みくらあけさせて　長倉日本紀
まつかうらしまをはるかに思てそやみぬへかりける
後撰 音にきく松か浦島きてみれはむへ心ある海士はす
みけり
かのあさましかりし世のふることをきゝをき給へる
なめりとはつかしう
伊豫守うせてのち紀伊守けさうしける事歟
源氏我にこそつれなかりしかとも紀伊守にはうち
こそとけつらめといふ心をのたまひけるにや
たゝかきりあるみちのわかれのみこそうしろめたけ
れいのちそしらぬなとなつかしくのたまふ
かきりある別のみこそかなしけれたれも命を空に
しらねは

なからへは命そしりぬわすれしとおもふ心はつき
そはりつゝ 信明集敦慶ノミコノ母
ことしはおとこたうかあり　踏歌濫觴注付末摘花巻
畢圓融院天元六年正月十四日有男踏歌太政大臣藤
原頼忠公承香殿東庭左大臣源雅信公桂芳坊右大臣
藤原兼家公藤壺大納言藤原爲光卿神鳴壺權大納言
藤原朝光卿梨壺各差上首有二踏歌一今度以後男踏歌
絶而無レ之　新儀式云正月十四日男踏歌也　西宮
記云延喜十三年正月十四日踏歌参所々尙侍幷一親
王宿所等太后御記云延喜七年正月十四日おとこた
うかありてわたかつけの藏人四人大うへわたりお
はします云々正月十四日男踏歌也其儀新儀式以下
に見えたり持統天皇七年正月丁酉漢人踏歌を奉る
是新年の祝詞也
歌頭以下相引て月花門より入て右近陣の前庭に列
立天皇出御清涼殿の孫廂に御椅子を立て御座とす
内藏寮祿の綿つみたる机をかきて殿前庭にたつ王
卿めしによりて東の小簀子に着座御厨子所酒肴を
供す踏歌の人やうやくすゝみて南殿の西の程より

調子を奏して仙花門より入て東庭に列立周旋三度の後言吹御前にすゝみて祝詞を奏し歌の曲を奏す舞人等東面の階よりのほる内侍二人相分て綿をとりて踏歌の人にかつく其後所々に踏歌暁に及て歸參歌頭舞人等座を庭中に儲られてをの／＼祿をたまひて退出

つきにこの院にまいる　源氏院號以前此院と號する如何不審然而唯是在所に付て此院と申也

みつむまやにてことそかせ給へきをれいあることよりほかにさまことにくはへて

水驛　すえき(えイ)と云事也伊行釋　水原抄云此事宇佐勅使よりおこる陸地下向のときは毎驛給祇候云々雜事也海路には驛定らざる間無之故に空に付て水驛と云也驛家雜事とて上古には有之見延喜式一説云兼て支度したることとの相違したるをすえき(すイ)と云也水路の驛家不中用之儀歟今案云踏歌宴に飯驛水驛と云事有李部王記九條右丞相曆記以下にみえたり今の心は水驛にてあるへきをことをくはへて賞翫せられたる心也有ニ別儀一(衍イ)

あを色のなへはめるにしらかさねの色あひなにのかさりかはみゆるかさしのわたはにほひもなきものなれと　春季着白襲事老年の公卿なとは冬も白重を着する事有歟但是は其儀にはあらす青色袍に白下襲を着する也　踏歌の定儀也李部王記にみえたり

かさしのわた　踏歌人以ㇾ綿造花着冠額也以是號高巾子云々

たけかはうたひてかよれるすかた

新儀式ニ云次王卿以下ニ殿勸盃侍臣所雜色以下行酒三四巡之後漸調子唱竹川曲見奥入　竹河催馬樂呂

竹川のはしのつめなるやはしのつめなるやはなそのに二段　はなそのにわれをははなて我をはなてやめさしたくへてかよれるとは舞の姿をれたる也匂兵部卿卷にもとめこまひてかよれる袖とあり

さるはかうこむしの世はなれたるさまことふきのみたりかはしきおこめきたることをこと／＼しくとりなしたるなか／＼なにはかりのおもしろかるへきはうしもきこえぬ物を例の綿かつきわたりてまかてぬ

高巾子懈冠(カイカン)踏歌式　新儀式　高巾子(コンシ)冠 自所給之正月十四日

打熨斗囊持襖着位袍當夜歌頭以下相率（麴塵袍白下襲）集中院暫而自月華門參入行列右近陣前庭時剋出御御座（孫庇南面間平文御倚子）內藏寮昇祿綿机立前庭（南第四間）王卿依召參上（簀子南第三間菅圓座入多及南廊小板敷）賜酒肴於王卿御厨子所供御酒踏歌人進南殿西頭始奏調子訖入仙花門列立庭上踏歌周旋（三反）後列立御前言吹進出當綿案立奏祝詞喚囊持二聲囊持稱唯進而計綿數奏絹鴨曲次奏此殿訖着座列立門　掃部寮當御階南邊一丈許立床子爲歌頭以下舞人以上座　相對地爲上仁壽殿西階南立床子爲管絃座南廊小板敷東々上敷疊立机爲打熨斗持囊持座又有諸司二分吹管者　同着之內壁下北面西上爲殿上侍臣座　內藏昇四尺臺盤三基立舞人以上座　八尺臺盤一基爲管絃者座并備肴饌　次王卿以下下殿勸盃侍臣所雜色以下行酒三四巡後漸調子唱竹川即起座列立三四唱後舞人以上双舞進中上東階　內侍二人相分被綿且舞且還（女藏人二人持綿匣候內侍後）但彈琴者以下男藏人一人傳取御簾中於庭中被之奏我家曲退　出自北廊戸其後踏歌所々曉及歸參御座如初歌頭舞人

賜座於庭中（西上相對）管絃者在橫切北上西面打熨斗囊持座在南（西上北面打薦座）出御之後卿先候簀子歌頭以下依召參入着座賜酒饌此間奏管絃數巡之後賜祿有差事畢退出歌頭支子染褂各一領歌掌踏掌同色衾一（條）吹物彈物襖子一領打熨斗囊持絹一疋內藏寮立高机積綿百屯延喜十三年正月十四日丁巳御記曰此夜有踏歌事晚頭風雪及戌剋雪晴亥一刻踏歌人等參入於右近陣前理管絃此時節意子中務卿親王常陸太守親王大納言藤原朝臣權中納言藤原朝臣參議仲平朝臣定方朝臣等侍簀子敷舞人等進到竹渠東頭列立先奏調子次奏萬春樂漸進南北惣三度訖當御前分立言吹吐詞持囊荷綿即奏絹鴨曲次奏此殿此間內藏寮立臺盤食竹東邊掃部寮施床子奏歌々行着床子親王公卿等下殿行酒三四巡後管絃吏調歌竹川曲使地列庭中內侍藏人等持被綿給階座歌頭以下舞童以上双舞進上階給綿（彈琴以下樂人等令男藏人付後給之了）歌我家曲退出時子一剋自瀧口到東宮息所曹司踏舞（弘徽殿）次尙侍曹司（飛香舍）次承香殿息所曹司（麗景殿）次克明親王直盧（昭陽舍）次參入東宮寅四刻還參入內裏

候右近陣前召之東庭（掃部給平敷坐）給酒肴令奏絃歌三四曲後給祿（歌頭給袙舞人給袙召人藏人等給襖子雅樂物師等給疋絹）即入內歌舞人等退出于時卯三尅同十七年廿三年同之李部王記延長七年踏歌人裝垂纓冠麴塵闕腋袍白下襲着深沓持白杖以着立加列前官權脫劔振靴高巾子着綿面童子二人在舞人列（右衞門督兒今阿子故貞文字菖蒲町）其裝束如舞人着花加兩鬢房及着絲鞋左少將行扶進中間綿臺東供之唱囊持二聲淸弘稱唯到綿處唱二十百千萬億等數北退詞吹左權中將伊衡左歌頭右權中將實賴右歌頭出北戶參中宮弘徽殿次飛香舍（王公座南緣）次承香殿（右大殿女御）次東宮踏歌參御前左右大臣有障共不參宿所故不踏又云內侍一人相分被綿且舞且還（女藏人持匣候內侍後）但彈琴者已下男藏人二人傳取御簾中於庭中被之奏我家曲退出

踏歌綿事續日本紀曰

天平二年春正月丙戌朔辛丑天皇御大安殿宴五位以上晚頭移幸皇后宮百官主典以上陪從踏歌且奏且行引入宮裏以賜酒食因令探短籍書以仁義禮智信五字隨其字而賜物得仁者絁也義者糸也禮者綿也智者布也信者段常布也今綿を賜は猶禮の殘る心にや

辨の少將　秋篠安人　（左京人父不見）左中辨近衞少將（延曆廿三年任參議中辨）（正月廿七日少將猶如元）

はんすんらく御くちすさみにの給て　萬春樂踏歌曲也催馬樂多氏之外不傳之也

はんすらく一段くはんえんそうおくせんねん二段くゑんせいくゑうねんくわうれい三段　蹈歌に我家此殿萬春樂なはめり四曲をうたふ皆呂也

我皇延祚億仙齡（萬春樂）　元正慶序年光麗々々々
延曆佳朝帝紀昌々々々　百辟陪莚華幄內（天人感）
千般作樂紫宸場々々々　久霑湛露歸休德々々々
日暖春天仰載陽　願以嘉辰常樂事（天人感）
千々億歲奉明王（萬春樂）　事次々々新元當樂（淡海三船撰）

以下略之

わたくしのこえんすへしとのたまひて　踏歌後宴弓結也延喜七年二月廿二日御記曰踏掌所奉仕踏歌後宴云々御射場中務卿親王左大臣以下侍更召殿上公卿等預召立書別如例御賭物臣下賭

御ことゝものうるはしきひめをかせ給へる　祕置也

ふくろともして　管絃の器皆袋に納本儀也

琵琶袋 面錦或赤色浮線綾裏唐綾 箏袋錦二幅 和琴袋如箏 笙笛袋大底同様なり

並二 胡蝶

巻名 こてふにもさそはれなまし心ありて八重山吹をへたてさりせは

からめいたるふねつくらせ給 龍頭鷁首事歟 又摸二唐艤躰一歟

うたつかさの人めして 雅楽寮人なり

らうをめくれる藤のいろもこまやかに

繞廊紫藤架 夾砌紅薬欄 攀枝摘櫻桃 帶花移牡丹 白氏文集 秦中吟

をしのなみのあやにもむをましへたる 柳無氣力條先動池有波文氷盡開

後撰 水の面にあや吹みたる春風や池の氷を今朝はとくらん

伊勢 水のおもにあや吹みたる春風や山のみとりをなへて染らん

まことにおの丶えもくたい(くたイ)つへうおもひつ丶日をくらす

後撰 も丶しきはおの丶えくたす山なれや入にし人のをとつれもせぬ

拾遺 薪こることは昨日につきにしをいさを(まイ)の丶えはこ丶にくたさん

郡國志曰石室山一名石橋山一名空石山晉中朝時有王質者嘗入山伐木至石室有童子數四彈琴而歌質因放斧柯(其イ)而聽之童子以一物與質狀如棗梅含之不復飢遂復小停亦謂俄頃童子語曰汝來已久何速不去質應聲而起柯已爛盡

古今 古郷はみしこともあらすをの丶えの朽しところそ戀しかりける

風ふけはなみの花さへ色みゆるこや名にたてる山吹のさき

古今 浪の花おきからさきてちりくめり水の春とは風や成らん やまふきのさき一說云近江國云々或非名所歟宇治に山吹の瀬あり若此所歟

蜻蛉日記云いし山に詣てかへるとていからさき山吹のさきなといふ所を見やりてあしの中よりこきゆく

かめのうへの山も尋し舟の内に老せぬ名をはこ丶に殘さん 不見蓬萊不敢歸童男丱女舟中老 白氏文集

蓬萊山負鼇背也

ゆくかたもかへらんさともわすれぬへう

續齊諧記曰漢明帝時永平十五年中剡縣有劉晨(晟イ)阮肇二人共入天台山採藥迷失道路糧食乏盡望山頭有一桃樹二人共取食之如覺少健下山得澗水飲之並各澡洗行一里又度一山溪見二女顏容妙絕便喚劉阮姓名如有舊交歡悅因問郎等來何晚也因邀過家廳廊無男兒至女家云來慶女娶各出樂器歌調劉阮就所邀女宿言語巧美行夫婦之道住十五日求還女曰今來至此皆宿福所招得與仙女交會流俗何可樂乎遂住半年天氣恒如二三月求去切女曰罪根不滅使君等此共劉阮還家無相識鄉里怪異○乃驗七世子孫也

劉晨阮肇　天台山へ藥を取に行て桃を取て食之一里計行て仙女にあふ半年夫婦と成て舊里に歸れは七世の孫にあふと云々

わう上といふかく　皇麞 平調拍子各十

遊聲一帖序一帖拍子十無舞遊聲序共斷之破三帖拍子各十第八第九兩帖合舞九帖也九帖打三度拍子急拍子廿可彈十一反南宮譜曰昔善僊此曲者大臣源常朝臣物師安曇絲經等

花をこきませたるにしきにおとらす

みわたせは柳櫻をこきませて都そ春のにしきなりける

そうてうふきたて　雙調

あなたうとあそひ給はと　安名尊 催馬樂呂

春のしらへひゝきはいとことにまさりけり

(古今)浪の音の今朝からことにきこゆるは春のしらへやあらたまるらん

雙調は春につかさとる調子なり仍春の調へと云也春双調夏黄鐘調秋平調冬盤渉調にて壹越調は中央也

かへりこゑに喜春樂たちそひて　反音は律也　喜春樂　黄鐘調也　序拍子十二 破拍子十四 或本双調拍子中曲古樂

南宮譜云大安寺僧安操作此曲者但不儛

あをやきおりかへし

青柳をかたいとによりてをけやうくひすのをけや鶯のぬふといふかさはをけやうめの花かさや　青柳 催馬樂律 拍子十二 長生樂序

いつもはるのひかりをこめ給へる大とのなれと

衆人嬉々如登春臺

心をつくるよすかのはたなきをわかぬことにおはす

紫の上の子のなきこと也親行本云えたなきをとわり

えしもうちいてぬ中のおもひにもえぬへき

さゝれ石のなかの思はありなからうちいつることのさもかたきかな（かたくもあるかなイ）

なよひさうとき給へる　早速也

おとゝもおほしゝさまかなふと　玉鬘卷に玉かつらの君のことをかゝる物ありといかて人にしらせて兵部卿宮なとのこのまかきの內このましくし給心みたりにしかなとありしことなり

むらさきのゆへに心をしめたれはふちにみなけん名やはおしけきとておとゝの君におなしかさしをとてたてまつり給ふ

古今
紫の一もとゆへにむさしのゝ草はみなから哀とそおもふ

後撰
我宿と頼むよしのに（にイ）君しいらはおなしかさしをさしこそはせめ

えたちわかれ給はて　須

けふは中宮のきの御ときやうのはしめなりけり

本朝月令三月云々國史云天平十七年九月平城中宮請僧六百人令讀大般若經是濫觴歟　季御讀經とは春秋に內裏にて大般若を講讀せらるゝ也引茶とて僧に茶をひかるゝ也中宮東宮これにおなし

ひの御よそひにかへ給ふ　緋御裝束也　赤色也

とりにはしろかねの花かめにさくらをさしてふにはこかねのかめにやまふき

法會儀蝶鳥供花定事也迦陵頻胡蝶菩薩（或先菩薩）捧ニ供花ニ一行相分經ニ舞臺上ニ到壇下ニ傳ニ授花於僧ニ又定者二人取ニ火舍也ニ

金銀事　文武天皇御宇自對馬國始獻白銀
聖武天皇御宇自陸奧國始進黃金九百兩

いかめしう　懇　可畏

ひらはりなとも　平張　樂屋の棟もなくてまんはかりを空に引たるを云也

かりにわくらともをめしたり　幄等（アクラ）　輕幄（ケイアク）絹也　幄布也
私云幄等はまく同事歟布のまんな申也

行かうの人々とりつきてわかにくはへさせ給

行香

花その丶こてふをさへやした草に秋まつ虫はうとく
みるらん 乙通女巻に紫上の許へ中宮の歌に心から
春まつそのはとはけましきこえ給たりし返事也
とりのかくはなやかにき丶わたされていけの水鳥と
もなとのそこはかとなくさへつりわたるにきうにな
りはつるはとあかすおもしろしてふはましてはかな
きさまに
鳥一越調 序拍子八破拍子八急拍子八古楽中曲
蝶丶宇多院御時被造之由見ニ李部王記ニ天慶二年紀
しろきひとかさねこしさしなとつき〳〵に給ふ
白細長歟さきに櫻のほそなかとあり其つ丶きなれ
ははそなかと云詞を略したる也
腰差 疋絹也只の巻絹也随身に大將の給ふ也
昨日はねになきぬへうこそ
わか園の梅のほつえに鶯の音になきぬへき戀もする
かな
こてふにもさそはれなまし心ありて八重山吹をへた
てさりせは
名にしおへは八重山吹そうかりけるへたて丶おれ
る君によそへて

すくれたる御らうともにかやうのことはたえぬにや
ありけんおもふやうにこそみえぬ御くちつきともな
めれ 御らうとは上臈の事なり秋好中宮紫上なとの
こと也御くちつきとは歌の事也しかるを思やう
ならすといへる如何者卑下のよし歟又云彼贈答を
其時の人々思やうならすといひける歟云々
ふかき御心もちゐやあさくもいかにもあらんけしき
いとらうありなつかしき心はへとみえて人の心へた
つへくも物したまはぬ
紫上と玉鬘君はいつれも心さまよき人ときこえた
りされは心ふかきあたりにかへりてあさきやうに
なつかしくもてなして人の心へたつへくもなきと
いへるにやなを可了見
けしきはみわひありくをそのかたにはあらてしたに
心くるしうなんひめ君はおほしける
内大臣玉鬘君實父の子息けしきはみわたるを玉鬘の君
そのかたにはあらてまことの兄弟なれはしたに心
くるしくおほゆるとなり
かとめいたる 才日本紀 才學同廉

ほとなくいられかましきわひことゝもを　心いられ
　也いら〳〵しき也
こひの山にはくしのたふれまねひつへきけしきにうれへたる　孔子仆何事乎不審論語長沮(ソ)桀溺(ケツデキ)丈人石門荷簣儀封人楚狂接輿か孔子をあさけりし事なとをいふ也　或又孔子三人の子兒と問答せられし事なと歟私云まめ人の色好を孔子のたふれとは云也
裏書云孔子東荊山の下に遊しに道に三人の小兒ありて土を推て城をつくる孔子曰車の道をさるへし吾過といふ小兒の曰吾聞聖人は上天命を知り下人情を覺る從古至今車まさに城をさるへし城何車をさらんと孔子車をとめて地におりき此等を孔子のたふれとはいふにやひけくろの大將しはうなる人の戀のこゝちにまよふを孔子の仆に似たると云也
孔子の戀の山にまよふにはあらさる歟
「柳下惠か弟盜跖と孔子との事を云り」
思ふとも君はしらしなわきかへりいはもる水の色しみえねは　柏木右衞門督于時中將歌也依之號岩漏中將也
こゝろたつやうにもあり　思たゝるゝ様なる詞也
くちとく心えたるも　返事とくしたる心歟

ちうをもかそへ給へると　功勞也
あかぬ所なく　あく所なくとそあるへき心えかたき
　也但和語のならひ如此詞おほし
中將のきみの御とか　御文とかと云へきを例の略し
　たる也
みるこを　見子　或本みしをこそ
やゝましき　心やましき也
めしうとゝかにくけなるなのりする人とも　思ふ人
　なといふ名也　召人
おひらかなれは　おひらかにいなとはいはて信濃なるきそちのはしのかけたるやなそ
世のたといのちのおやをそれとおほいて　後のおやをおやとせよといへる事也致仕はさきのおや六條院は後のおや也
今更に(朝忠集)いかならん世か若竹のおひはしめけんね(カイ)をは尋ねん　いくよしもあらし物ゆへ若竹のおひそはりける春さへそうき
わして又きよしとうちなし給て　四月天氣和且淸緣槐陰合沙堤平白氏文集十九
なこやか　婀娜　又柔

中將のさらにむかしさまのにほひにもみえぬ習に
夕霧中將は葵上ににす玉鬘君は夕顔上ににたると
源氏のいはれたる也
袖のかをよそふるからに橘のみさへはかなく成もこ
そすれ
萬葉 橘はみさへはなさへその葉さへ枝に霜をけましと
ときはき
古今 五月まつ花橘のかをかけは昔の人の袖のかそする
和泉式部日記云彈正の御子かくれ侍て後帥のみこ
たち花をつかはしていかゝみるといひて侍けれは
かほるかによそふるよりは時鳥きかはやおなしこ（にイ）
ゑやわたると
かせのたけになるほと　風生竹夜窓間臥月照松時臺
上行
ゆくりかにあはつけき　不意（ユクリカ）日本紀　思やりなきやう
なる心也　卒爾同
かきりなうそこひしらぬこゝろさしなれは
古今 そこひなきふちやはさはく山川のあさきせにこそ
あた浪はたて

後撰 かきりなき名におふ藤の花なれは底ひもしらぬ色
のふかさか
同 玉もかる海士にはあらねとわたつうみの底ひもし
らすいる心かな
そこもしらぬ也ひはやすめ字也玉鬘の巻に人のか
たちはをくれたるもなをそこひある物をとあり
ゆめけしきなくてをとて　努也　ゆめ／＼也
うちとけてねもみぬ物をわか草のことありかほにむ
すほゝるらん
伊勢物語 うらわかみねよけにみゆる若草を人のむすはんこ
とをしそおもふ（かくばかりイ）
いろにいてたまひて後は大たのまつのとおもはせた
ることなく
六帖 戀わひぬおほたの松の大かたは色にいてゝやあは
んといはまし
並三　螢
巻名
聲はせて身をのみこかす螢こそいふよりまさる思

なるらめ
かのけむか　肥後國大夫監事也
人さまのわらゝかに　和　やはらかにといふ也
御らうのほとは　積勞心也
みたり心ち　足寒時心亂帝範
御しとね　茵
そらたきもの
はたるをうすきかたに
几丁の帷は三重なる物也表は綾裏は練又紗也中裏
ありうすきかたとは裏の方也素寂説うすき肩云々
不審伊勢物語此事を女車とみてよりきてとかくな
まめくあひたにかの致螢をとりて女車に入たりけ
るをこのほたるのともす火にてや車なりける人み
ゆらん　以螢火女をみる是等の例歟
ほの〳〵ひかりて　曾明(ホン〳〵 アケホン)
けにあのこと　如案
ぬれ〳〵夜ふかく出給ぬ時鳥かならすうち鳴けんか
し　(古今)四五月交雲外語二三更後雨中聲
五月雨に物思をれは時鳥夜深くなきていつち行ら
ん

よへいとめおやたち　妻　女おやの事也(世メキテノ心也)
わか身からのうさそかし
(古今)我身からうき世の中となけき(ツケイ)つゝ人のためさへか
なしかるらん
つやもいろもこほるはかりなる御そに　澁(ツヤ)　又光(カケ)
くすたまなと　續命縷　雲絲　綵(サイ)絲　彩(サイ)索なといへ
り(リイ)いつれも藥玉の躰也
宋書曰元嘉四年斷夏至日五絲縷之屬金門歳節曰端
午朮羹艾酒以花絡樓臺鬟採(採百草花結五綵絲造樓臺等形今藥玉類也)
避兵已佩靈府小續命仍縈綵縷長(文秀端午詩)
御記云延喜十三月(五)五月五日丙午糸所供奉藥玉如常(抑去年九月茱萸以藥玉替懸差御枕前例也)
延長三年五月五日丙申書司立菖蒲瓶糸所奉續命縷
如常
五月五日糸所藥玉を供す去年の菊花茱萸を撤して
御帳の東の柱に結付也
つかさのてつかひ　左近騎射眞手番也五月三日左近
騎射荒手結五日眞手結四日右近騎射荒手結六日右
近騎射眞手結也私云五月四日を荒手結五日眞手結

云々五日荒手結を日折と云歟云々イ本ニ手結トテ
左右ニ各兩度有之云々
むまはのおとゝ　馬場殿　くらへ馬也
ひたりのつかさにいとよしある官人おほかる比なり
官人隨身也殿上人におとるまし（きイ）とは容儀の事歟
すそこの御き丁　下濃
さうふかさねのあこめふたあゐのうすものゝかざみ
菖蒲重　面は青くてうらは白色也　二藍
なてしこのわか葉のいろしたるからきぬ　薄蘇木也
すけたちかきつれまいりて　次將也
身をなけたるてつかひに　身をすてゝ勝負したる歟
たきうらくなそりなとあそひてかち負のらんしやう
とものゝしる
打毬樂　納蘇利
もろ／＼の勝負の後亂聲常事也競馬相撲或鬪雞な
とにもあり延喜十二年亭子院の歌合にも勝負亂聲
あるよしみえたり競馬行幸に蘇芳菲左狛龍右を奏
すと云々又陵王納蘇利常事也打毬樂も定有先例歟
可勘
とねりともの　近衛舍人也

おほきみけしき　王オホキミ　氣色
人のうへをなんつけ　難
おましなともこと／＼にておほとのこもる　各別な
り
[illegible]　その駒もすさめぬ草と名にたてる汀のあやめけふや
引つる
[illegible]　おふれともこまもすさめぬ菖蒲草かりにも人のこ
ぬそわひしき　そのこまそやわれにくさこふくさ
はとりかはむみつはとりかはん神樂其駒
には鳥の影をならふるわか駒はいつかあやめに引わ
かるへき
[illegible]　わか駒とけふにあひつるあやめ草おいをくるゝや
まくるなるらん
わかこまはわかきこもなり萬葉にみしま江の玉江
のこまといへりまともと五音通する也駒にもそへ
たる歟能宣歌は競馬によそふる歟
主税頭　かすへのかみにほと／＼しかりけん
住吉物語のこと也
拾遺　宮つくりひたのたくみかてふの音ほと／＼しかる
めをもみしかな

ほと〳〵しはおとろ〳〵しき心歟

五月雨かみのみたるゝをもしらてかい給はんイよとて

時鳥をちかへりなけうなひこかうちたれかみの五月雨の頃

日本紀なとはたゝかたそはそかしこれらにこそみちみちしくはしきことはあちめとて　日本紀卅巻舍人親王撰　これらにこそとは惣しては物語草子等也別しては此物語をさす歟ならの事歟

ひとの國御かとのさえつくりやうかはイはれるおなしやま佐とイとのくにの事なれは

佛のいとうるはしき心にてとき給ふ御のりにも

佛は四意趣に住して説法し給也所謂別義意別時意長時意平等意是也

はうへんといふ物ありてさとりなき物はこゝかしこたかふうたかひをきつへくなん　法花未得謂得未證謂證之心也

はうとうきやうの中におほかれといひもてゆけはひとつむねにさたまりて

開三顯一の義也五時説教こと〳〵く法華一實道に歸する也

私云開二三乘一顯二一乘一義也三乘者一修多羅乘二毘奈耶乘三阿毘曇乘此等爾前教ト申候三藏教トモ是法花ニ至テ一乘開三顯一申是皆調機ための方便の教に候法華にも方便品の心も五十の上慢の座を立てられては未レ悟機にて候程に不信をなさせしの方便にて候

ほたいとほんなうとのへたゝりなん

煩惱即菩提生死即涅槃妙樂釋

案之此物語一部の大意作者已證のおもむきこれにみえたり方便品とは法花已前の諸教也方等經とは方等部の諸大乘を指て云爾前之諸教雖區至法花調機於一緣悟一實圓融之旨矣煩惱即菩提等是也さとれは菩提となりまよよイへは煩惱と成なり此等心也

よりゐ給へるさまいとあされたり　あされされ同心なるよし以前にみえたり

ふけうなるは佛のみちにも　不孝日本紀

この物語のゑにてあるを　古物語ふるき物語也うつほ物語なといふ歟物語イ清少納言枕草子にも此詞あり又古萬葉集なと順集にもかけり或こまの物語くまのゝ物語なとかきたる

本もある歟おやまり也古本皆如此
うつゝの人　現人
おやのしわさゝへ思やらるゝこそいとをしけれ
（孝經）立身行道揚名於後世以顯父母孝之終也
すへてよからぬ人にいかて人ほめさせしなと　無使
名過實 崔子玉座右銘
てんつかれ給ましくと　世俗にてんさすといふこと
也ほめそしらるましき心也
まゝはゝのはらきたなき　腹黒也 在賢木巻
かの人のもろともにあそひすくしゝとし月の　雲井
雁事なり
みとりの袖をみなをしてしかなと　六位宿世といは
れしことなり
右の中將　いはもる中將也
女御はかくおほしゝことのとゝこほり給　立后の事
歟
さかしらに我といひて　さかしらに夏は人まねさゝ
のはのさやく霜夜を我ひとりぬる
ゆめみたまひていとよくあはする物めしてあはせ給
けるにおむなこの人のこになる事は

下莞上簟乃安斯寢乃寢乃興乃占我夢吉夢維何維
熊維羆維虺維蛇大人占之維熊維羆男子之祥維虺維
蛇女子之祥 毛詩小雅斯干篇

河海抄卷第十一

正六位上物語博士源惟良撰

玉鬘並四　常夏

卷名

なてしこの床なつかしき色をみは本のかきねを人やたつねん

いとあつき日ひんかしのつり殿に出てすゝみたまふ

六條院と見えたり京中名跡記云釣殿今六條院是也

にしかはよりたてまつれるあゆおまへにてゝうし

西河は桂川也東河は賀茂川也此兩河の鮎を供供御云々康保三年閏八月十九日御記云遣左右看督使巡撿洪水其五六條及西河渺々如海夏の泉の會には鮎のかはひき雪の朝には鵬壺熬を必賞翫すべき者也云々庖丁譜に見ゆ

ひをのよるうちにはあらてにし河のあみたにあらばいをもすくはん　道信朝臣

大和物語　かも河のせにふすあゆの魚とりてねてこそゆかめ夢に見えつや

六帖　君ませは物も思はすかも河の瀬にふすあゆのやなこもりして

同　あたら夜のいもともねなてとめかたにあゆとるといはのうへにゐて

イ本ナシ「あさちたなひれとやはらふしときゝよろとや」

ちかき河のいしふしなとやうのせうえうし給に

ちかき河とは賀茂河也京極河かといふ說もあれとも京極河を六條へなかす事近代事也上古にはなき事也云々其上六條院名字河原左大臣の六條院を摸する歟彼院後には亭子院の御領として醍醐天皇行幸なと有し也伊勢物語云昔左のおほいまうち君いまそかりけり賀茂川のほとりに六條わたりに家をいとおもしろく作てすみ給けりとあり然はちかき河は賀茂河勿論歟御記云延喜十七年三月十六日此日參入六條院此院是故左大臣源融朝臣宅也大納言源朝臣奉進於院

いしふしは石臥　士貝　鮖和名　鎚同上

おほみきまいりひ水めしてすいはんなととりゝにさうときつゝ

氷室　仁德天皇六十二年夏五月遠江國司始獻ㇾ氷見日本紀水鏡には仁德天皇三年甲戌はしまるといへり蜻蛉卷に勘付畢日本紀六夏氷を水酒に

漬して用といへり氷水是故歟さうときは早速と書
り
せみの聲などもいとくるしけに　かはむしはこえも
たえぬにせみのはのいとうすき身もくるしけにな
く花山院集
水のうへもむとく無得なりけふのあつかはしさかなむら無禮
いのつみはゆるされなんやとて　清少納言枕草子云
無徳なるものしほひのかたにをるふねと云々
おひゝもとかぬほとに　帯　紐
此春のころほひ夢かたりしたまひけるを　螢巻に内
大臣夢みたまひてあはする人めしてとあるよしの
事也
はかなくも枕さだめすあかすかな夢かたりせし人
をまつとて小町
ふれはひぬへき　觸也
人のためをのつからけそむなるわさに侍れときこゆ
家損家のきすなるへき心也勘文云きずつきたる心也云々　事ワザ日本紀　態
いとおほかるつらにはなれてをくるゝかりをしゐて
尋給らんかいとふくつけきそかし　鴈は父母つきに
兄弟次第にとふ列をみたらすといふ物也云々これ

を鴈行カムカウの禮といふ也
好忠集
るひよりも獨はなれて飛鴈のともにをくるゝわか
身かなしも
いとともしき　乏トモシ
そこきよくすまぬ水にやとれる月のくもりなきやう
のいかてかあらんと　こゝろのくまあるによそへた
るなり案之致仕大臣左道のふるまい共ありて卑賤
の腹にありていてたらん女房のいかてか哢嘲咲心
也とろうし給やうなり　よるへきと源氏のいはれ
たるなり
おなしかさしにてなくさめむなにのとかゝあらんと
ろうし給やうなり　哢ロウス　嘲哢心也
我やとゝたのむよしのに君しいらはおなしかさし
をさしこそはせめ
雲井の鴈近江君姉妹シマイなれは同しかさしと云にやさ
すかにひまありけるに　有隙　たとへは心よからぬ
事のましれる心也
いとしほうの人にてゐてこぬむしん無心なりかし　實法
或質朴
なを〳〵しききはをたにまとのうちなるはとは
直々　聊左道の心也直人も同心也　養立　深窓人不識

くたくしき　細砕白氏文集
なてしこの色をとゝのへたるからのやまとのとませ
いとなつかしくゆひなして　牛麥萬葉（ナテシコ）　石竹（ヤマトナデシコ）　金（カラ）
錢（ナテシコ）白氏文集　ませ　架　籬
おほきみたつすちにておほえかたくなゝりとにやと（かイ）
のたまへはきまさはといふ人も侍けるときこえ給ひ
てそのみさかなもてはやされんほとはねかはしから（なイ）
す　わかいへはとはり帳をもたれたるをおほきみき（にイ）
ませむこにせんみさかなになによけんわはひさた
をかかせよけん（きイ）催馬樂我家呂
おほきみたつは諸王の心也かたくなゝりとは上﨟
しかるへき心也　諸王はみや也
たゝおさなきとちむすひをきけん心もとけす
岩代の野中にたてるむすひ松心もとけすむかしお
もへば　萬葉
いとかしこきやまととはかなくみせて　やまと
こと和琴の名勿論也しかれともこゝにては只和國
の事といへるにや若又そへことなる歟如何又和琴
名すゝが絃六すちあり　くめち　花その　あつま
すかゝき　和琴のかきやうなり和琴にあり左の手に
てつかふをはおちといふ右の手にてはちにてかく
をは菅（スカ）かきと云
ふむのつかさ　圖書寮（フンノツカサ）　裏書累代御物被置所也
ひとのくにはしらすこゝにてはこれを物のおやとし
たるにこそあめれ　和琴は伊弉諾伊弉冊尊御代に令
作出給云々仍諸樂器の最上にをかるゝ也
おやとしつへき御てよりひきとり給へらんは
内大臣すくれたる和琴の上手とありされは玉かつ
らの君彼手よりひきとるへきにいまた露顯せさる
によりておやとしつへきと源氏のいはれたる也
ことつひいとになくいまめかしうおかし
ことつひとは琴粒（リウ）とかけり和琴にことつひことつ
きことさゐ（サイ）といふ事あり狛氏廿巻秘抄に見えたり
云々諸事の字也和琴の琴の字にあらす云々
ぬきかはのせゝのやわらたなといとなつかしううた
ひ給おやさくるつまはすこしうちはらひ給つゝ
貫河催馬樂呂
ぬきかはの、せゝの、やわら、たまくら、やわら
かに、する（カイ）よはなくて、おやさくるつま、一段（しかしやうくハイ）おや
さくる、つまは、まして、うるはし、しはしやうは、

やはきのいちに、くつかひにせん二段くつかはヽせんかいの、ほそしきをかへさしはきて、うはもとかきて、みやちかよはん三段

いてひき給へ　歴賣日本紀

さうふれんはかりこそ心のうちにてまきらはす人もありけめおもなくてこれかれにかきあはせたるなんよきと　相夫恋平調文字につきて此樂はかりこそ女ははヽかるへきといへる心歟　問向來彈了曲着人不導相夫憐

ふるおほきみ女の　王女王孫の女也

みヽかたからぬ人のためには身にしむ風もふきそふぞかし　みヽかたき人と玉かつらを云也源氏の和琴ひき給ふを玉かつらの君いかなる風のふきそひてかくはひヽき侍そといはれたるにわれはみヽかたから程にかくひヽく也玉鬘はみヽかたくて我云事をもきヽ入すと也

まゆこもりも心くるしうとの給ふ　たらちねの親のかふこのまゆこもりいふせくもあるかいもにあはすて

こさらましかばとうちずし給て

もてはなれいさなひとりては　引率日本紀

なたらかに　平日本紀

をのつからせき守つよくとも　（古今）人しれぬ我通ちの關守はよひ〳〵ことにうちもねなヽむ

おもひいりなはしけくともさはらしかしと　つくは山葉山しけ山しけヽれとおもひいるにはさはらさりけり　源重之

よくせすはしちの御子にしもあらしや　實御子

いひおとし給ひて　云下也

いとなかくこちたくなとは　無骨

かうさくは　きやうさく也

うたねはいさめきこゆる物を　謌人諸二切　乙庶假寐同莊子

たらちねのおやのいさめしうたヽねは物おもふ時のわさにそ有ける

ふとうそんのたらによみいんつくりて　不動尊陀羅尼 慈救呪　印 劔索印或刀鞘印

ねきことにしはしなひき給そ　禰宜言　（古今）ねきことをさのみきヽけん社こそはてはなけ木の森となるらめ

おもしろき梅の花のひらけさしたる朝ほらけおほしてのこりおほかりけにほヽゑみ給へるそ

にほはねとはゝゑむ梅の花をこそ我もおかしとおりてなかむれ

すくろくうち給ふいとせちにおしもみてせうさいせうさいとこふこゑそいとしたときや　小簺和名ヤイ

いちにのめのみにはあちすころくさんしさへありけりすころくのさい

御かへしやとて文をひねりつゝとみにもうちいてすなかに思やありやすらんといとあまへたるさまもしけり　さゝれ石の中におもひはありなからうちいつる事のかたくも有かな

つみかろけなるを　過去の善悪の因によりて今生の容貌の好醜あり云々端正忍辱中來なといへりされは近江の君かたちなとさすかにあしからねはつみかろけなりといへる歟一説ねちけ心ふかき人は罪おもき相也此君心あさき躰なるゆへに罪あさけなるといふ歟

ひたひのいとちかきとこゑのあわさとにそ　ひたひのちかきとはひきかるへき歟こゑのあわさとはあはくしき也舌のはやきなり

てうたぬ心ちし侍れと　向掌テウツ　手うたぬとは心もとなき心也要なる事とてをうちて人をよふ心也手をうたさらんは心もとなかるへき歟一説云双六うつおりふしなれはおとゝをつねにみたてまつらねは双方のよき手うたぬ心ちしていやましきといふ歟

なにかそは　なにかそれはなり

おほみおほつほとりにもつかまつり侍るらん

尿壺オホツホ私云しとつゝもつ者をおほつはもちのじちやうと云々

なにかしか　水原抄云しかとは汝といふ心也云々案之しかおりたちてとはさやうにおりたちてといふ心にや然はかの字すむべき歟如何

したの本上にこそあらめ　舌本性　むまれつきの心歟

めうほうしのへたうたいとくの　妙法寺　在近江國神崎東郡高屋郷内興寺有邊をは妙法寺の村と云本尊觀音也

をしことゝもりとそ大そうそしれるつみにもかそへためるかしとの給て　若得爲人聾盲瘖瘂乃至　誹斯經故獲罪如是法花經　訥コトヽモリ

水をくみいたゝきてもつかまつりなん　法花經を我

えしことは薪こりなつみ水くみつかへてそえし
よろしき日なとやいふへからん
暦に宜日といふは中品の日也次の詞にもよろしき
ほとなるをやとわりこれも同又よろしき心あらん
ともきこえすとわりこれは善義歟中品の心也可随
所存
しも人のひなひたるもの丶中にて　夷ゐ中ひたる也
本々 こち〳〵しうことはたみて　迂(ダミ)孝經
拾遺補相 あつまにてやしなはれたる人の子はしたたみてこ
そ物はいひけれ
もとすゑはぬはしたことうちつ丶け　半事　本末
かきゐはぬ也
あしかきのまちかきほとにはさふらひなからいま丶
てかけふむはかりのしるしもあらねは名こそのせき
をやすゑさせ給ふらんとなんしらねともむさしのと
いへはかしこけれとあなかしこ〳〵やとてんかちに
てうらにはまことやくれにもまいりこんと思ふ給へ
たつはいとふにはゆるにや侍らんいてや〳〵あやし
きはみなせ川に侍るをとて
古今 人しれす思やなにそあしかきのまちかけれともあ
ふよしのなみ
古今 立よらは影ふむ計ちかけれとあひみぬせきをたれ
かすへけん
寛平御門御くしおろさせ給ての比三丁のめくりに
のみ人は候はせ給てちかふもよらせ給さりけれ小
八條御息所のよめる歌也
六帖 あひみてはおもてふせやに思ふへしなこその關に
おひよはゝきゝ
しらねともむさしのといへはかこたれぬよしやさ
こそは紫のゆへ
てんかちとは眞名のましりてかと〳〵しき姿歟
六帖 にくさのみますたの池のねぬなはのいとふにはゆ
る物にそ有ける
あしきてを猶よきさまにみなせ川底のみくつの數
ならねとも
草わかみひたちの海のいか丶さきいかてあひみんた
このうら波　蜻蛉日記云いし山にまいりてかへると
ていか丶さき山吹のさきなと云所をみやりて
あしのなかを漕行に近江の君かひすましか歌也
草わかみとは近江の君を我身によそへたる歟ひた
ちの海のいか丶してたこのうら波に立けんといへ
ふ也

おほかは水のと　御吉野のおほかはのへのふちなみ
のなみにおもはゝわれこひめやは
しもしなかに　是もよからぬ右筆の躰歟
はしさまにすちかひてたうれぬへくみゆるを
近代もゐ中人なとの消息は袖かきをゆかめてかく
事あるにや凡俗の所爲歟但中古の假名消息ともを
みるにゆかめて多くかけり如何
口つきは　歌の事也
なてしこの花につけて　ふみをは料紙の色の花につ
くる定事也　わをき色紙をなてしこの花につけた
るもゐ中ひたる事歟但なてしこの若葉色も有歟
ひすましわらはしも　厠長女　洗女などしてある也
さやうの物歟行幸の後騎にも在之
まるかふる下女也
せむしかきめいてはたいとをしけん　仰香の事也
ひたち(常陸)なるする(駿河)かの海のすま(攝津)の浦に波立出よ箱(蓋)崎の
松　一向嘲哢の由歟波たらいてよはかりの詮歟
をしつゝみていたしたり　立文たる也
いとあまへたるたきもの　蜜のすきたるは合香の下

品の事也仍あま(け)へたるといふ歟
へにといふ物いとあからかにかいつけて　粉白氏文集
面子荏苒遊仙窟　これも閨女子の氣粧歟
いたひけやへににもにたる梅の花あこかかほにも
つけたくそある　北野之七歳之時御歌也
玉鬘並五　篝火
卷名　かゝり火に立そふ戀の煙こそ世にはたえせ
ぬほのほなりけれ
はつかせすゝしく吹いてゝせこか衣もうらさひしき
心ちし給ふに　初風の涼しくふけは我せこか衣のす
そのうらそさひしき六帖
いとしは〳〵わたり給　數　たひ〳〵の心也
おきのおともやう〳〵あはれなるほとになりにけり
御まへのかゝり火　篝火　鈴カヽリ
右近の大夫　右近將監　敍爵したる也
まゆみの木のしたにうちまつおとろ〳〵しからぬ程
に　うち松とはかゝりにたく松なりたくときうち入
〳〵するゆへにうちまつといふ也伊勢物語につい
まつのすみしてといへりつきまつ也はそなかにゆ
ひてもゆれはつくなりさてついまつといへり松炬(タイマツ)

續松とも書り
いつまてとかやふすふるならても猶くるしき下もえなりけりと　（古今）夏くれは宿にふすふるかやり火のいつまて我身下もえにせん
風の音秋になりにけりときこえつるふえのねに　楚思蓀茫雲水冷商聲淸脆管絃秋
秋きぬとめにはさやかに見えねとも風の音にそおとろかれぬる
風のをと秋にも成か久堅のあまつ空さへかはるへらなる貫之
御琴ひきいて丶　和琴の事歟次詞に御琴は中將にゆつり給つ丶けにかのち丶おと丶のつまをとにおさ〱をとらすとあり彼内大臣和琴無双の上手といへり又玉かつらの君も和琴を引よし同見えたり
辨の少將はうしうちいて丶しのひやかにうたふ
此歌何歌哉
玉鬘並六　野分　暴風（ホツフツ）
卷名此卷野分をもて（此卷始終一野分所詮也イ）始終爲詮也
よしあるくろきあかきのませゆひ（架）ませつ丶
風流の心歟　能因歌枕云ませをはしめといふ云々
露のひかりもよのつねならす玉と見えつ丶　うへたて丶君はしめゆふ花なれは玉と見えてや露もをくらむ
春秋のあらそひにむかしより秋に心よする人はかすまさりけるを　（拾遺）春はた丶花の一重にさくはかり物のあはれは秋そまされる　萬葉第一集云天智天皇詔内大臣藤原朝臣（鎌足）競憐春山萬花之數秋山千葉之放時額田王以歌判之歌　ふゆこもり春さりくれはなかさりし鳥もきなきぬさかさりし花もさけれとやまをしけみいりてもとらす草ふかみとりてもみえす秋山の木のはを見てはもみちをはとりてそしのふあおきをはをきてそなけくそこしうらみし秋山われは　樹下集云しかのとよぬしおほとものくろぬし等かろんきの歌とよぬし向おもしろのめてたきことをくらふるに春と秋とはいつれまされりくろぬし歌（答イ）　（拾遺）春はた丶花こそはちれのへことにしきをはれる秋はまされり
（同貫之）大方の秋に心はよせしかと花みる時はいつれともなし

なたゝる春のおまへの　（後撰）露たにも名たゝる宿の菊な
れは花のあるしやいく世かさねむ（雅正）　名に立也
此物語にも名たゝるそのゝなとあり
又ひきかへしうつろふけしき世のありさまに似たり
（古今小町）色みえてうつろふ物は世の中の人の心の花にそあ
りける　（拾遺貫之）春秋に思みたれてわきかねつ時につけつ
ゝうつる心は

八月大風事

仁和三年八月廿日自卯尅暴雨酉尅北風抜樹京中人
家顛倒内膳司東檜皮屋倒延喜十三年八月一日自申
尅大風吹折木破屋天慶五年八月十一日大風暴雨如
延喜十三年八月兩京破損不可勝計　康保二年八月
廿八日大風諸司幷京中破損不可勝計　永祚元年八
月十三日酉尅大風出來宮城門舍以顛倒　左右京人
家顛倒破損不可勝計又賀茂上禮御殿幷雜舍石清水
御殿東西廊祇園天神堂顛倒凡一條北邊新舊堂舍東
西山寺等皆顛倒同二年十一月七日改元爲正暦依今
年八月大風也
八月はこせんはうの御忌月なれは　孝謙天皇（寶龜元年八月崩）
朱雀法皇（天暦六年八月廿五日崩）先坊八月薨事例未勘

おほふはかりの袖は秋の空にしもこそほしけなりけ
れ　（後撰）大空におほふ計の袖も哉春さく花を風に散さし
花のうへ　（拾遺）さけばちるさかねは戀し山櫻おもひたえ
せぬ花のうへかな
もとあらのこはきはしたなくまちえたる風のけしき
也　（古今）みやきのゝ本あらのこ萩露を重み風を待こと君
をこそまて　萩のふるえをは春やきて今年のわか
枝に生かはる也本あらの萩とは去年のふる枝にさ
けるをいふ也木萩といひてことしおひのはきより
も枝さしもすくみこは〳〵しき也それか中にも大
小あれはちいさきを本あらの小萩とよめり一説秋
ふかくなりて下葉のちりすきたるをもとあらの萩
といふ也云々もとあらの櫻といふも櫻はことに木よ
りも本こは〳〵しき故也と云々
かはさくら　朝綠春のけしきはつゝめともてほれて
にほふ花櫻かな　かは櫻とは花の色うす紅にてこ
とさら艶なる花也
和名には朱櫻とかけり古今集物名にかには櫻とあ
りこれ也
あはたゝしき風なめり　周章（アハタヽシ）（シウシヤウ）　遽アハタヽシ

風こそはけに岩も吹あけつへき物なりけれ
景行天皇三年初將討賊次柏峡大野其野有石長六尺廣三尺厚一尺五分天皇祈之曰朕得滅土蜘蛛者蹶茲石如柏葉而擧焉因蹶之則如柏上於大虛故號其石曰蹈石　日本紀　顧凱之啓蒙記曰零陵郡有石燕得風雨則飛如眞燕　以上先賢釋此兩條外不勘いつれも風の事にあらさるか愚管所及如此爲之如何
史記項羽本紀曰於是大風從西北起折木發屋揚沙石窈冥晝晦此外御註略之　又衞將軍驃外傳曰且入而大風起沙礫擊面兩軍不相見史記百十一文選風賦　曰蹷石伐木梢殺林莽大王雄風也庶人雌風動沙礫吹灰
うしとらのかたよりふきいつれば　寛平御記云八月丙子從昨暮至于今日雨不霽昨日申刻大風自艮角吹起寅二剋息但餘吹未除日此外延喜十三年八月一日大風古來相傳云于今未有如此之大風云々　師曠秘訣云疾風發屋折木飛揚沙石不出三年五穀不出兵革縱横民無道路　見天祿四年五月十九日晴明勘文
今年正月廿三日夜半天災降發卒　有大風揚石飛沙折木撥屋見寛弘六年二月二日寛業勘文
三條宮と六條院とにまいり御覽せられ給ぬ日なし
九條右丞相遺誡云凡有病患日々必可謁親者有故障早以消息可問夜來寧否又云大風疾雨雷鳴地震水火之變非常之時訪親次參朝
おとゝのかはら　殿死日本紀
むらさめ　楊氏漢語抄云雨一種也　白雨和名無良佐米　急雨琵琶行
またほの〳〵とするに　會明
かうらんにおしかゝりて　高欄
むしのこともに露かはせ給ふ　虫籠　荃語離籠なと詩にも作れり　むしのこは虫屋也
御せうそこけいせさせ給て
せうそこ啓也
ゆるひなき御なからひなと　緩無緩也
おゝしき　雄壯日本紀
人としてかくなんなきは　難
さやかならぬあけくれのほと　上の詞に日のやうやうさし出たるにとあるに又あけくれとあり不審如何
一義八月の日卯　あさほらけ日くらしの聲きこゆなりこやあけくれと人のいふらむ拾遺

しゝうのかにことにはふかうのかほりも　侍從薫物
　一方かうのかほりは麝香の事也
ふれはひ給へる御けはひにや　觸也はひは詞のたすけ也はみなといふかことし秋好中宮の御にほひかとおほゆる也振舞也れる五音通する故也
中將のあさけのすかた
心のやみにやあらん
　重雲未霽陰霧猶暗偏あけくれの空の如なる歟はるかにみやりたればさたかならぬあけくれともいふ歟和琴きゝわたりてとあり　あさはらけうくひの聲きこゆるこやあけくれと人のいふらん　人のおやの心はやみにあらねとも子を思ふ道にまとひぬる哉朝間形萬葉　且開容儀同
かの戸のあきたりしに　彼戸
おもふ事のすちくなけかしくて　筋々
りんたうあさかほ　陶隱居本草註和名衣夜美久作一ニ瀰賀奈　苦破以膽爲名也古今にはりんたんとかけり
けちめみせたるいといたし　掲　勞
はゝつきとかいうやうに　兼名苑云酸漿一名洛神珠
和名保々都岐
赤酸醤日本紀

つゆなんつくへくもあらす　難
むべなりけり　承諸の心也　諸日本紀　宜も同事なるへき歟
　固宜　師古曰理宜然也漢書高紀下
はらからといふとも　日本紀には同胞腹同なとかきてはらからとよめり然は一腹の兄弟歟但此物語にあなかち一腹ならねとも只兄弟はかりをもいへるにやとみゆる所々あり如何
花はかきりこそあれそらけたるしへなとも　颯文選
　灑同　庭樹穢　灑落　襟
なよたけをみ給へかし　靡竹と書り
あさゝむなり　朝寒
ねひこたち　年預後達　或調行年老たる女房也
ほそひつめく物にわたひきかけて　ほそひつ　絹櫃事也　しらぬひのつくしのわたは身につみて又はみねともあたゝかにみゆ六帖八九
いまやうのいろのになく　今様色　紅也　延喜式に紅をは今様色共聽色ともいへり
御前の壺せんさいのえんもとまりぬ　康保三年八月

內裏有前栽宴
御なをしからのけんもんれうをこのころつみいたしたる花して　唐花文綾（ケモンレウ）順和名　唐顯文紗（ケンモンシャノ）事也
天曆御記曰經櫃三台並机一脚之上加花文綾覆　つみいたしたる花は鴨（ツユ）草也移（ウツシ）花と云も露草也
ほと〳〵しくこそふみみたり侍にしか　殆也おとろかしく歟
かみ一まき　一重也
風さはき村雲まよふ夕にも忘るゝまなくわすられぬ君　無復風塵（ナシマタフウヂン）日本紀
かたのゝ少將はかみのいろにこそとゝのへ侍けれと
此交野少將事はゝき木のまきに事舊畢彼少將無双の色このみなるによりて艶色文にもいへる歟大方文を同色の木草につくるさたまれる事也此物語の中にも乙女巻に源氏齋院へたてまつられし紫の紙の文をは藤花に付られたりほたるの巻に兵部卿文玉かつらのもとへ御うすやうにて菖蒲のねに付若菜に源氏女三宮へ白きかみなる文梅に付て浮舟の巻に兵部卿文浮舟のもとへ紫のうすやうにて櫻に付たり源中將すゝ〳〵しきまめ人なれはさはかりの色も思わかさりけるといはれたる也
浪のしめゆふといふ物語にかたのゝ少將といふとあり但源氏已後物語歟不審
ふちの花とやいふへからん木たかき松よりさきかゝりて風になひきたる
ふてうなるむすめ　不調　近江君の事也

玉鬘並七　御幸

巻名　うちきらしあさくもりせし御幸にはさやかに空の光やはみし
このをとなしのたきこそ　拾遺とにかくに人めつゝみをせきかねて下になかるゝ音なしのたき　いかにしていかによからんをの山のうへよりおつる音なしの瀧　上の詞にいかでよからんとはとあるには此歌も相叶歟但次下にみたていとはしくとあれば人めつゝみの歌猶宜歟
そのしはすおほはら野の行幸　仁和二年十二月十四日戊午寅西刻行幸芹河野爲用鷹鶴也

李部王記云延長六年十二月五日大原野行幸夘初上
御輿
うのとき　見李部王記
すさかより五條のおほちを西ざまにおれ給
李記云自朱雀門至五條路西折到桂河邊上降輿就幄
群臣下馬御輿群臣乗馬渡浮橋（方舟力梁上敷板）自桂路入野口
けふはかんたちめみこたちもみな心ごゝろに御馬く
らをとゝのへ　李記云鷹飼親王公卿立本列其裝束御
赤色袍親王公卿及殿上侍臣六位已上着麹塵袍諸衛
官人着褐衣腹卷行縢諸衛服上儀府掌已上着服卷行
縢悉熊皮唯腹卷四位五位用虎皮六位以下阿多良志
及鹿兒皮通用（無毛皮者用白皮）以上武官差小手馬寮内舍人等
同諸衛鷹飼親王公卿差地摺布衣及袴（式用紫色綺袴）木蘭小
褁子餌袋大鷹着豹皮腹卷及到野口着猨皮行縢四位
以下同大井河行幸
むまそひ　馬副
あをいろのうへのきぬえひそめ（葡萄染）のしたかさねを殿上
人五位六位まてきたり　一日の晴儀に諸臣着麹塵袍
也野行幸時左方鷂飼着赤白橡地色摺衣右方鷂飼着

青白橡地色摺衣之由競狩記に見えたり
ゆきたゝいさゝかうちゝりてみちのそらさへえん也
延喜野行幸事也延喜二年十月又有芹河行幸
大鏡に云山口へいらせたまひしはとにしらせうと
いひし御鷹の鳥をとりなから御輿の鳳のうへにと
ひまいりてゐて候ひしやう／＼日は山の端に入か
たに光のいみしうさして山の紅葉にしきをはりた
るやうに鷹の色はいと白く雉は紺青のやうにはね
うちひろけてゐて候し程は實に雪の少うちちりて
おりふしさる事やは候しと身にしむはかり思給へ
候しはつみえ侍けんとて爪はしきはた／＼としけ
ると也雪聊打散てと云事彼記にはみえす裡に此記
をかきのせたり大鏡のうらかきには延喜四年十月
十九日としるせり
みこたちかむたちめなとたかにかゝつらひ給へるは

鷹事

仁德天皇四十三年秋九月庚子朔依網屯倉阿弭古捕
奇鳥獻於天皇曰臣每張網捕鳥未曾得是鳥
之類故奇而獻之天皇召酒君示鳥曰是何鳥矣
酒君對言此鳥之類多在百濟得馴而能從人亦

捉飛之掠諸鳥百済俗號此鳥曰倶知今時鷹也乃授ケテ酒君令養馴未幾ノ時而得タリ馴酒君則以韋緒着其足以小鈴着其尾居腕上獻于天皇是日幸百舌鳥野而遊獵時雌雉多ク起ツ乃チ放テ鷹ヲ令捕忽獲タリ數十雉是ノ月甫メテ定鷹司部ヲ故時人號其養之處ヲ曰鷹司邑ト也日本紀　李記云乘輿林行出日華門自左近陣出朱雀門夫門就路譴人院朝臣伊衡朝臣朝頼朝臣在大將前鷹人茂春秋成武仲源敬在公卿前鷹人陽成院一親王按察大納言鷂人中務卿彈正尹陽成院三親王在公卿前仁和二年芹河行幸日公卿皆着摺衣在前舊記云正五位下藤原朝臣時平着摺衣立列

且獵野

かりの御よそひともをまうけ給　狩衣の事也

伊勢物語に云仁和の御門芹河に行幸し給ける時いまはさることにけなく思けれともとりつきにけることなれはおほたかのたかゝひにてさふらはせ給けりすりかりきぬのたもとにかきつけゝる

中納言行平
翁さひ人なとかめそかり衣けふはかりとそたつもなくなる

そゑのたかゝひ　諸衛鷹飼也令曰主鷹司正一人掌調習鷹犬事上　李記云自桂路入野口鷹飼王公到此狩鷹員外鷹飼祇候武家着青摺衣者四人摺衣者從祠取扈從也又諸衛鷹飼親王公卿摺布衣見上　西宮抄云公卿如例衛府着弓箭鷹飼地摺狩衣綺袴玉帶鷂飼青白橡袍綺袴玉帶卷纓有下襲着劔者有尻鞘王卿鷹飼入野之後着行縢餌袋式部卿已下鷹着供奉裝束扈從乘輿云々四位以下鷹飼着帽子臂鷹令牽犬事列立安福殿春興殿前又公卿以下諸衛及鷹飼等裝束隨遠近相尋鷹飼入野之後解大緒大鷹飼者結懸鷂鷹結腰底示鷹飼又同云々

世になれぬすりころもみたれきつゝ　いせ物語　春日野の若紫のすり衣しのふのみたれかきりしられす　すり衣は狩衣の事也伊勢物語此歌詞にかりきぬのすそをきりて歌を書てやるその男しのふすりのかりきぬをなんきたりけるといへり

あしよはくるまなと　輪のよはき車也

御門のあか色の御そたてまつりて　延長四年十月九日大井河行幸上服赤色袍黄櫨染御袍文竹鳳臨時祭庭座賭弓射場始式又朝覲行幸之後以御時被用之云々晴儀諸臣青衣の袍を着たる時は主上赤色御袍を

着せしめ給也第一座の人又着之是諸臣にことなる
色内宴以下野行幸時定事也イ本ニ内宴野行幸李部王記云卯刻上御輿其装束御赤色袍云々
うこきなき御かたはらめ　是範曰人主之躰如山岳焉
高峻而不動舊記
たゝひと　凡俗ダヽヒト日本紀
あてなる人は　貴人
兵部卿宮もおはす　親王供奉例在奥
いろくろくひげかちに見えて　莊子曰文王曰昔者寡
人夢見良人黑色而顚疏曰文王之父季歷生存之日黑
色多鬚
やなくひおひて　胡籙　いせ物語に男やなくひ
をおひてとくちにおり
かんたちめのひらはりに　平張
野におはしましつきて御こしとゝめかんたちめのひ
らはりに　李云徒獵卒行獵之御輿墳進朝膳親王公卿
着平張座於墳頂眺望乎召中少將右權中將實賴朝臣
少將中正進持彼鷹笛劔上降墳路右兵衛佐仲連候御
前析理鷹人所獲之雉殿上六位昇俎具御廚子所進御
膳御臺二基藏人頭時望朝臣陪膳侍從以衡賜王公饌
侍從乎長益送

六條院より御みき御へすみ火ろなとたてまつらせ給
へり　御酒　御贄御にへ也炭　火爐　同李云六條院被
貢酒二荷炭二荷火爐一具殿上六位昇之立御前即解
一瓶至雉調所宛供御宛公卿析近衛將監　御へは御
にへなり古今にも御へとあるも大嘗會に贄をそな
ふる事也
藏人のせうを御つかひにてきし一えたたてまつらせ
給
李云延長四年十一月六日有北野行幸其日全同物忌
不參未尅上還舟岡茂春最後獲　九條右大臣家集に
朱雀院の御門かりにおはしましたりける御ともに
まいる事有てつかうまつり給ぬにきし一つかいた
まはせたるを申たまひける　かゝるよもありける
ものをとまりゐて身をうち川とおもひけるかな
伊勢物語業平朝臣忠仁公に奉まつる雉九月也梅か
枝につけたり我たのむ君かためにと析花は時しも
分ぬものにそありける
「九條イ本ナシ右丞相集に朱雀院よりきし一双薄につけて
給はせけるとあり」
付鳥枝事

柴高七尺五寸（普通の柏木よりは葉せはく圓くして表裏に毛おいたり是な鳥付柴といふ也一說云たもん柴といふ物也）梅の枝につけたり
年内は立枝をへたてゝ雄を左にわけて付雌鳥をさけて付也年わけては雌を左にわけて付春は雌を賞する故也（付樣口傳わり喙之）式には柴を用といへとも春は梅秋は紅葉に付事賞する故也むねと大臣大饗時に用之又初雪の朝雉を人に遣時の作法也又鷹野より人のもとへ遣には三四尺の柴枝を刀目をつけすして本を折はしらかして付也一双を付樣たしかにしれる人なし（秦兼則說）四條大納言隆親卿說柴高六七尺雌雄一双を付也殿上の儀式にたてらる又大臣家大饗元服移徙如此用之產所へ遣には根引小松に付也是秘事也義氏朝臣說鷹野より人のもとへ雉を送には柴ならねとも萩薄をはしめて何にも付也一說云松に鳩を付事有山鳩也八月以後不付也之鶉をは萩薄の枝に付り小鳥をは紅葉枝に付たり雀をは竹の枝に付之十月にはふし柴に付といへり御鷹飼武久說也
雪ふかきをしほの山にたつきしの　御製勅使藏人
太政大臣のかゝるのゝ行幸につかうまつり給へるためしなとやありけん　光孝天皇仁和二年十二月十四日（戊午）寅四剋行幸芹河野爲ㇾ用ニ鷹鷂一也式部卿本康親王常陸大守貞固（カタ）親王太政大臣藤原（基經）朝臣左大臣源朝臣右大臣源朝臣大納言藤原朝臣良世中納言源朝臣能有在原朝臣行平藤原朝臣山蔭已下參議扈從其狩獵之儀一には依承和故事或考舊記或付故老曰語而行事乘輿於朱雀門留輿砌　上勅召太政大臣ナ三皇子源朝臣定（宇多院）宜ㇾ賜ニ佩劔一ナ太政大臣傳ㇾ勅定拜舞輿前帶劔騎馬皇子源朝臣正五位下藤原時平權着ニ摺衣一ナ午三剋至ル獵野一ナ於淀河邊ニ供ス朝膳一行宮ニ在泉河鴨川宇治河之會一漁人等獻鯉鮒ナ天子命ㇾ飲右衞門督諸葛朝臣奏歌ナ天子和之群臣以次歌謳大納言藤原朝臣起舞未ニ一剋入ニ狩野一放ㇾ鷂擊ㇾ鶉如ㇾ前放ㇾ隼擊ニ水鳥一ナ坂上宿禰某獻ニ鹿一ナ太政大臣馬上テ奏ㇾ之乘輿還ニ幸左衞門權佐高經別墅一供ニ夕膳一高經獻ㇾ贄勅敘ニ正五位下一ニ太政大臣擧ニ高經一拜舞
をし　は山みゆきつもれる松はらにけふはかりなるわとやなからん
國史云光孝天皇仁和三年五月廿八日辛丑勅以山城國乙訓郡大原野爲太政天皇遊獵之地
（中納言行平）おきなさひ人なとかめそかり衣けふはかりとそたつもなくなる
うちきらしわさくもりせしみゆきには　（內須家持）うちきらし

雪は降つゝしかすかに我家のそのに鶯のなく　あかねさす光は空にくもらぬをなとてみゆきにめをきらしけん　(萬葉)天の原あかねさしいつる光にはいつれの沼かさえのこるへき　目をきらすとは目きりなといふ事也

(氏)うちかみの御つとめ　伊勢物語云昔二條の后のまた東宮の御息所と申ける時氏神にまうて給けるに藐姑射刀自物語にも氏神のたゝりとあり

うたゝあるへし　うたてなり　(古今)花とみておらんとすれは女郎花うたゝあるさまのなにこそ有けれ

これよりまさる人こしたゝぬまてかゝまりありくためし昔もいまも侍れと　潜歎曰吾不能爲五斗米折腰拳々事郷里少人邪義熈三年解印去縣乃賦歸去來云々(晋書)　陶潜字ハ淵明彭澤ノ令を辭せし事也令の封米五斗也

いてたちいそきをなん　(伊勢物語)いてゝいなは誰か別のかたからむありしにまさるけふはかなしも

たちそめにし名の　(古今)むら鳥の立にし我名いまさらにことなしふともしるしあらめや

人わろくくひ思たまへて　悔思

すゝいたまはさらんとは思ひたまへなからかうくちおしきにこりのすゑにまちとりふかくすむべき水こそいてきかたくは世なれ

楚辭曰世人皆濁我獨清衆人皆醉我獨醒　是以見放　漁父曰聖人ハ不疑滯於萬物而モ能與世推移ル世皆濁何ソ不穢其泥而揚其波衆人皆醉ハ何ソ不餔其糟而歠其釃又曰滄浪之水清兮可以濯我纓滄浪之水濁兮可以洗我足　(已上漁父)

ふいにたつねとりて　不意

たゝさるものゝくさのすくなきをかことにて　源氏子のすくなきとおほせらるゝ也

ないしのかみつかうまつる人なくては　延喜式云内侍司一百十人　尚侍二人　典侍二人掌侍四人　女孺一百人

こらうのすけ二人　故老典侍也　典侍任尚侍例

尚侍從三位當麻眞人浦虫(父正六位上繼丸右京人也)弘仁七年任典侍未幾遷爲掌侍天安元年任尚侍國史云浦虫爲人眞和早標美擧未掌適於人遂不知伉儷之道自掌宮人職能修尚侍從三位廣井女王嘉祥三年任權典侍天安元年任尚侍尚侍從三位藤原朝臣灌子應

和四年四月正月任尚侍元典侍　村上　冷泉　圓融
　三代尚侍也
いとしうとくに　宿德
御かうしやうゐまし　考事
はねをならふるやうにて　比翼臣者君之羽翼也日本紀
いにしへはけにおんになれて　馴恩
ありしにまさる御ありさま　いて〻いなは誰か別の
　かたからんありし（親）にまさるけふはかなしも
ふとしかうとりおやからんも　而然也
十六日ひかんのはしめにて　彼岸齋法成道經曰一切衆生依持二八日齋十方世界一切衆生離苦得樂靈瑞而已乃至中春中秋晝夜各五十尅を時正といふ也仍吉日たる歟彼岸は二月八月は王華會時修到彼岸齋食法　ふたかたにいひもてゆけば玉くしげ我身はなれぬかけこ成けり　君をのみ思ひかけこのたまくしげあけたつことにこひぬ日はなし
からのたき物心ことにかほりふかくて　薫物方自唐土傳來故如此云歟又唐にて合たる藥も有之見二梅枝卷一
かたのことなんしゐて給ける　如形也
おちくりとかやなにとかやむかしの人のめてたうしけるあはせのはかま　落栗色こきくれなゐ也　合袴は中重のなき袴也うつほの物語にも（あまたあり）
むらさきのしらきにみゆゑおられちの御こうちき
紫のしらみきはみたる色歟よからぬ色たる歟　うはしらみとかきたる本もあり
裏書　此也の袴上古は晴之時用之由舊記等載之或說云下地たうす紫にそめて上を紅にて染たる也也云々又云おちくり也は紫也
し〻かみゑりふかうつようかたうかき給へり
し〻かみはふるひち〻かみたるすかた也ゑりふかくとはゑりいれて書たる歌文字つよなる心也
からころも　韓衣伊勢物語眞名本　いく（うつほ物かたり）たひか夜にかへすらんから衣返〻もうらみらる〻は
ゑうしたるやうにも侍かなと　哢　嘲哢也伊勢物語云なを人をはうらみつへき物になんありけるとてゑうしてよみてやりける
ようなしこと　無用事也
こよひはいとゆくりかなへければ　思やうなる心歟
「心（イ本ナシ）やりたるやうなる詞歟」
こまけ　細分

くちさかなき物は世の人なりけり　衆口鑠金文選
防(フセク)二民之口一甚レ於レ防レ水史記
あふなけにの給へは　無與　おくふかゝらぬ體也
ひたうにもおはしかけらることかな　非道(イナシ)
さかしらにむかへもておはして　さかしらに夏は人
まねさゝの葉のさやくしもよをわかひとりぬる古
今　秋の野にゆきてみるべき花の色をたれさかし
らにおりてきつらん
いとはらあしけにましりひきわけたり　眦(マシリ)　史記
曰瞋レ目視二項王一頭髮上指目(カツ)ノ眦盡ク裂項羽本紀　樊噲か
怒れる姿也
かたきいははもわわ雪になし給ふへき御けしきなれ
は天の岩戸さしこもり給なんやめやすくとてたちぬ
れは　昔素盞烏尊あしきふるまひありし故に天照太
神天磐戸にとちこもり給しかは世の中とこやみに
なりし事也兄弟不和の事をいふ歟彌かたき岩の義
相應する也一本ニハ古語拾遺云天照神赫怒入于天石窟閇天磐戸焉爾乃六合常闇晝夜不分トアリ　故人
何不レ惜レ心乎　近江君と岩もる中將と兄第不和の
ことを云也此事秘說なり
すけなう　無人望

いとかやすくいそしく　いそかしくやすらかなる心
歟
ゆめにとみしたる心ちしてなんむねにてをきたる
やうに侍と申給　富貴を夢にみたるがさめて後寳な
き由歟若本說ある歟たとへば邯鄲の夢なとの心歟
胸に手を置たるとは愁の心むねの中にひしとあり
て胸をおさへられたるやうなる歟
なかうたなとの心はへあらんを　長歌事古今には終
始短歌とかきて事書にはみなゝかうたとあり萬葉
には是を長歌とする歟一說云三十一字歌は五七五
を一句とし七七を一句とせり仍長キ歌也　短歌は五
七を一句とす仍短き歌也云々長歌短歌の事家々の
口傳にも様々にいへりいつれも有謂也俊成卿古來
風體にも雖有兩說彼心猶引長歌歟俊賴曰長歌短歌
共に長歌の名也長歌をも同事を云ならせるを稱長
歌やうやうによめるをは稱短歌云々是難決事歟淸
輔は卅一字を長歌といへり崇德院久安御百首にも
短歌といたさるゝを人皆長歌と詠之案之長歌とは
いまのつゝけあつめたる歌の事也短歌とは長歌の
奥に必反歌有をいふ也仍長歌とも短歌とも云也

とのより申させ給はゝつまこゑのやうにて御とくをもからふり侍らんとて　一説しはらくのこゑ也

つまこゑとは我いふへき事を人にいはせたる風情歟未勘得凡むかしはつねに俗ていに云つけたる詞も今世にはいひたえて人のいとしもしらぬ事ありやかて難儀なとにもなる也答ざるやうのことはか能々尋ぬへし

女御も御おもてあかみて　忸怩(カホアカム)漢語抄

玉鬘並八　蘭

巻名　おなしのゝ露にやつるゝ蘭あはれはかけよかことはかりも

内侍のかみの御宮つかへの事　初參以前に伺侍になされける歟たゝいまも宮仕の事いまたわらましの程ときこえたり如何云々

人わらへなるさまにみきゝなさんとうけひ給人〱も　承引(ウケハシ)水原抄　案之うけひは人のろ〱しく思心也　呪咀日本紀　此心歟又日本紀に誓をうけひとよめるそれも誓言の義也いかさまにもうひけくにはあらさる歟水の上にかすかくことく我命いもにあはんとうけひつるかも　是は猶ちかふ心歟

このおとゝの御こゝろはへの　意見　心はへ日本紀

うけはりてとりはなちけさやき給へき　請日本紀

諸清(ケサヤカ)　倫亮

かけ〱しき　懸々

うすきにひいろの御そ　薄鈍色祖母の服也うす花田也

宰相中將おなし色のいますこしこまやかなるなをしすかたにてゑいまきたまへる　こまやかは例の濃色也服の淺深は志の厚薄によるへき事也此物語にも人より事にこく染たる事多し　巻纓同着服の儀也

かの野わきのあしたの御あさかほは　玉鬘　朝面

萬葉第一并第八巻何も人の顔の事をいへり　よひにあひてあさかほはなしみかくれぬかけなかきいもかいほりせりけん　くれにあひてあさかほはへるかくれのゝ萩はちりゆき紅葉はやつけ

こまやかにきこえ給ふ　仔細(コマヤカ)

十三日にかはらへいてさせ給へきよしの給ひて出ニ

河原ニ解除(ケチヨ)する事也はらいをとく事也

おもむけ給けしきいとらうあり　勞水原抄　案之臈あ
る歟上臈しき體也らう／＼しきともらうたきとも
いへる同事也

中將もらさしとつゝませ給らんこそ心うけれ

三條宮の御服を玉鬘君くはしきさまを人にあまね
くしらせしとおもむけたるを宰相中將かたみなれ(いは)
はぬきすてんたにも物うきをしのひ給心うしとい
(れたる也と)ふ也

この御あらはしころもの色なくはえこそ思ひたまへ
わくましかりけれと　此祖母の着服なくは致任(内大臣)のお
とゝの子ともおもひわくましきと云也光源氏の子
ならは不可有着服故也　裏書　爽鳩(サウキウ)大臣唐名也

しらにの花のいとおもしろきを　紫蘭むとはぬる字をはかなにはいつれもにを用也古今物名部以下に見へたり

うつたへに思もよらてとり給　うつたへとはやかて
といふ心也うちつけ同し詞也

おなしの〻露にやつる〻ふちはかまあはれはかけよ
かことはかりも　おなしの〻露にやつる〻とは玉鬘
と夕霧共に祖母の服にやつれたる心也

みちのはてなるとかや　東路(萬葉)の道のはてなるひたち
帶のかことはかりもあはんとそおもふ

いまはたおなしとおもひたまへわひて　(拾遺)わひぬれは
いまはたおなし難波なる身をつくしてもあはんと
そ思ふ

かのいますこし身にしみておほえし御けはひを　野
分のあした同時に紫の上をみたりし事也

この宮つかへをしふけに　澁(シフル)　しふ／＼也

宮なとのれんし給へる人にて　練　練習の事也

人からは宮の御人にていとよかるへし　玉鬘の螢の
宮にたくひてはよかるへしと也

女は三つにしたかふ物にはあなれと　三從　婦人從レ
人者也幼從父兄嫁從夫老從子禮記

つゐてをたかへてをのか心にまかせん事は　次第を
違へて也次第とは幼嫁老時によりて人に從ふ事也

おほそうの宮つかへにらうろうせむとおほしをきつ
る　牢籠

いとまか／＼しきすちにも　枉(マカ／＼シキ)言　萬葉第三

あむにおつることもあらましかは　案落

心よせのよすか／＼に　從日本紀資同便

よしの〻たきをせかんよりもかたきことなれは

六帖 てをさへて吉野の瀧をせきつとも人の心はいかゝとそおもふ

頭中將心をつくしわひしことはかきたえにたるを

侘漢語抄慘同悚同

月のあかき夜かつらのかけにかくれて　月中有河々水上有二桂樹一高五百丈下有二一人一斫レ樹姓呉名剛父西河人也年六十得レ仙長生兼名苑　たえぬたとへも侍るなるはこたいの事なれとたのもしくこそ思給へけるとて　爲君世々爲兄弟又往來生末了固東破　兄弟事也可勘

きたおもてにめしいれて　北面　内々の方也　南面を晴の方とする故也

しもつかへなとやうの人々とたに　下仕

としころのむもれをも　埋

いもせやまふかきみちをは尋すてをたえのはしにふみまよひける　いもせとは日本紀に妹兄とかけりいもうとせうと也　伊弉諾伊弉册尊兄弟夫婦となり給ひしより夫婦をいもせといふ也頭中將玉かつらを日來は兄弟ともしらて戀しつるにいまはあらはれぬれはふみまとふといふ歟

後撰云はらからたちの中になに事か侍けんよみ人しらす

君とわれいもせの山も秋くれは色かはりぬるものにそありける

はらからの中にいかなる事か侍けんつねならぬさまにみえけれはよみ人しらす

むつましきいもせの山の中にたにへたつる雲の晴すもあるかな

いもせ山とは紀伊國にいもの山せの山とて吉野川をへたてゝさしむかへる二の山あり

萬葉 春の山にたゝにむかへるいもの山ことゆるすかもうちはしわたす

おほなむちすくなひこなの作たるいもせの山もみれはかなしも

後拾遺道雅卿 みちのくのおたえのはしや是ならんふみゝふますみ心まとはす

案之同時歌也近代歌也證歌如何但業平

かすか野のわかむらさきのすり衣しのふのみだれかきりしられす　是は河原左大臣みちのくのしのぶもちすりの歌を本歌として詠云々是近代歌を證

歌に用例也　業平元慶四年卒年五十六河原左大臣
此年六十二歟　寛平七年八月十五日薨七十七　聊先達歟
人やりならす　思やり也顯昭尺　案之人やりの道なら
なくにの歌の心也　（古今）人やりの道ならなくに大方は
いきうしといひていさかへりなん
よしなかゐし侍つらんも　（古今）住吉とあまはつくともな
かゐすな人忘草おふといふなり
やうやうらうつもりてこそはかくこんとてたち給ふ
漸（ヨウヨウ）労　恪（カク）勤（コン）
したかたなるを　したちおなし事也
この大将は今上東宮の女御の御はらからにそおはし
ける　承香殿女御
御おほいきみに　大君　嫡（チャク）女の心歟只又長大の儀歟
業平朝臣女を閑院大君閑院今君と集にもあり（侍るとありイ）
おうなとつけて心にもいれす　嫗　老嫗心也
清少納言枕草子すさましき物しはすの月夜おうな
のけさう
かすならはいとひもせまし九月にいのちをかくる程
そはかなき　九月をは世俗に憚る歟又玉かつらの巻
に季のはてなともありされともかすならぬ身なれ
はいとはすといへり十月には内まいりとさためら
れたれは九月はかりにいのちをかくるよし也
朝日さす光を見ても玉篠の葉分の霜をけたすもあら
なん　（古今）さゝの葉にをく霜よりもひとりぬる我衣てそ
さえまさりける
かしけたるさゝ　悴カンケ　憔悴ヤセタリ
（左兵衛督）忘れなんと思も物のかなしきはいかさまにしていか
さまにせん　（古今）わすれなんと今はの心つくからにな
といひしらぬおもひそふらん
（玉鬘兵部卿宮返し）心もて光にむかふ葵たに朝をく霜ををのれやはけ
つ　傾レ心比二葵藿一朝夕奉二堯曦賦（號百詠）　蘘荷依二陰
時藿一向レ陽綠葵含レ露白韭負レ霜（潘安仁閑居賦）　葵は日にむ
かひて葉を傾て根をかくす物也　孔子曰鮑莊子智
不レ及三葵能衞二其足一葵向レ日傾レ葉蔽二其根一又云文
集第（イ本ナシ）十三其傾レ心向レ日葵云々
鮑牽爲齊使則足被留孔子聞曰鮑莊子之智は不及葵
々能衞其足（モトヽ）云へり
並九　槙柱
巻名　今はとて宿かれぬともなれきつるまきの柱

は我をわするな
いしやまの佛をも辨のおもとをもならへていたゝかまほしう
石山寺在近江國勢多南一説云聖武天皇御宇金鷲仙人建立云々勘付閑居巻并うつほの物語云師いとうれしき事也かしこの事をしなし給へらばますらをはいたゝきにいたゝきたてまつらん云々
そこら　多日本紀　幾多同
心あさき人のためにそてらのけん（驗）もあらはれけんかし　心あさき人とは鬚黒大將の事歟此大將ひたおもむきにすゝみたるまめ人にてなさけふかく色このみにはあらすとみえたり仍心あさきといへる歟かやうなる人をは正直とて佛神のうけ給へきにや此巻に兵部卿宮（兵部卿宮は心ふかくといへりイ）の事を宮の心ふかくといへり或本には寺もけんもなひかしとあり（けんかしとありイ）義は相違あるへからす但證本ことにあらはれけんかしとあり
きしきいとになく　儀式最無二（無音）
なたらかなるさまにておとなく　平　日本紀　抒　論語
墁同注
ほのすいたり　閑（ホノ）尚書　側（ホノ）

あはつけきやうにも　淡付（あはつけ）同詞也
しも月になりぬ神わさともしげく　十一月神事　一日供忌火御飯十日神祇官始供ニ御贖物上卯日相嘗祭賀茂齋王遙拜宗像祭明日齋院神樂上巳日山科祭上申日平野祭同日春日祭同日杜本（イナ）祭同日當麻祭大和也　上酉日梅宮祭　同日率河祭同日當宗（マサムネノ）祭大和也同日松尾祭同日中山祭中子日大原野祭中丑日園并韓神祭五節中寅日鎮魂祭中卯日新嘗祭今曉大殿祭中巳日齋宮鎮魂祭同日大極殿祭中申日吉田祭同日日吉祭下卯日東三條神樂下未日臨時祭下酉日賀茂臨時祭同夜御神樂
女はわらゝかにきはゝしく　和饍（ニキワヽシ）
心もてあらぬさまはしるき事なれと　蓮葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく
すこしけゝしきさまに　賢々　聊うやまふ心歟
おり立てくみはみねともみつせ河人のせとはた（わたりイ）契らさりしを　後撰わび人のそほつてふなる涙河おり立てこそぬれわたりけれ　俊仲　三途河也或は奈（ナセン）川ともいへり十王經に見えたり地獄の繪を見てよめる歌
みつせ川わたるみさほもなかりけりなにゝ衣をぬ

きてかくらん
（玉鬘）みつせ川わたらぬ前にいかで猶泪のみをのあはとき
えなむ　水深（ミチ）日本紀　水尾萬葉　澪
かのせはよき道なりなるを御てのさきはかりはひき
たすけきこえてんとほゝゑみ給て　善道なしといふ
也
渡此河を亡人は必趣三悪道故也一説云過路なき歟
亡人必す此川を渡故によくへき道なしといふ歟又
云善道中歟冥途へおもむく道中歟しかれ共十王経
以下の文に二七亡人渡奈河て受種々苦と説り善道
中の義しかるへからさる歟但よき道なき也又或説
云御手のさきはかりはひきたすけんとあるは源氏
已に玉かつらと本意を遂られたる歟最初に嫁合の
男必此川を引こすと云々
しかれはうはへは隠密のよしにくみはみねともと
いへとも内々はおほししる事（但イ）もあらんかし世にな
きしれ／＼しさもとある歟又うしろやすさもこの
世にたくひなきとはあり（サイ）なからも女の御ためを思
ひて大将をむことり給へる心歟云々
定家卿歌には　せめておもふいまーたひのあふこ
とはわたらん河やちぎりなるへき以前の心歟
案之過（ヨキ）路無かなるをと讀へし其故は六帖第三歌わ
すれ河よくみちなしときゝてしはいとふのうみの
たちはよりけれとあり如此心歟玉鬘の歌にみつせ
川わたらぬさきにあはときえんとあるを源氏此川
をよきて行へきみちなしとの給也但萬葉集　神さ
きのあらいそもみえす波たちていつこよりゆかん
よき道はなし　といへり然は善道一義歟此義可秘
藏矣

玉鬘尚侍通鬚黒大將事　尚侍滿子（内大臣高藤子）通右大將
定國是等例歟

をのか物とらうしはてゝは　領
あやしうしうねき御物のけに　強（シウネシ）
人きゝやさしかるへし　やさしは耻かしき也　（萬葉）松浦
川この川上に家はあれと君をやさしみあらはさす
ありき　（古今）なにをして身のいたつらに老ぬらむ年の
思はんこともやさしき
むもれいたく　埋痛
きはやかに　俄なる心歟云々（水原抄）　案之きはことな
ると云やうなること歟たとへは善悪分明なる躰也

御めしうとたちておもふ人也　大和物語云このさいし君の御いもうとのいせの守にていますかりけるか御ともにかみのめしうとめきてありける　蜻蛉日記云をの丶宮の御めしうと云々日本紀云有宮人生男女者四人
召人立也　妾ニアタレリ　思人ヌキテトイヘル也
身つからはおほけたりし　ほけたりといふ心也　饒病中おほ／＼としたりし也　毛詩語抄　又おほ／＼としたる歟
いとさ丶やかなる人の　細々許遊仙窟　少々挟
ひわつにて　あつし　同字たるへき歟云々
むかひ火つくりて
日本紀第七曰賊有殺王之情王謂日本武尊也　放火燒其野王知被欺則以燧出火向燒而得免
日本武尊東夷を征し給し時駿河國にて賊徒野を燒しに尊十束劔にて草をかり給て向燒たかれし事なり
たとへは人のはらたつへき事をこなたよりも相對して腹立する心を云也

ひたりみきにき丶おほさんことを　ひたりみきにもぬる丶袖かな　此意歟
袖のこほりもとけなんかしなとなこやかに　おもひつ丶ねなくにあくる冬の夜は袖のこほりのとけすもあるかな
おほきなるこの下なりつる火とりをとりて　薫物のこのした煙ふすふとも我ひとりをはしなすへしやは
人のや丶みあふる程もなく　や丶　微也　やう／＼也
さなからまて給へきにもあらす　更啓日本紀
きすくにかき給へり　木強　心さへ空にみたれしゆきもよにひとりさえつるかたしきの袖　後撰に雪のすこしふる日女のもとにつかはしける　兼茂朝臣　かつきえて空にみたる丶あはゆきはものおもふ人の泪なりけり　心さへ空にみたれぬあきのよのあか月山のきりはちらふ風に
つしやきかい給へれと　實法に下すしき心歟
御さうすくの事なとめやすくした丶かにきなともしなさせたまはす　した丶かなるとは合期したる心也

したゝかなるうしろみなともいへりこれは合期せすと云也
見うむし給ひぬへけれは　慍老子　うむしはうとむ心也
まみいといたし　傷イタシ
ちうけんになりぬへき身なめりと　中間いつかたにもつかぬ心歟(也イ)法文に二佛の中間と云也
こちたうおこりて　無骨
おもなう　無面日本紀
ひたふるにしもなとかしたかひくつおれ給は(らイ)んと　頽クツチル永迅日本紀
ひめきみはとなるともかうなるとも　山しろのこまのみその(あたりのイ)ゝうりつくりとなりかくなりなる我身かな
ひわたいろのかみのかさね　檜皮色紙　紫のいさゝかきはみ黒き色也
いまはとて宿かれぬともなれきつる槇の柱はわれを忘るな　披柱日本紀　槇　眞木柱　六帖まき柱つくる杣人いさゝめのかりはのわさた作けるかな　おもひあまり侘しき時は宿かれてあくかれぬへき心ちこそすれ
かくるゝまてそかへりみ給ける　拾遺菅家君か(かなイ)すむ宿の梢([illegible]イ)をゆく〳〵とかくるゝまてに歸みしはや　顧二高木於古里一文選別賦
めてたきよすかと思ひきこえたまへといかはかり昔のあたかたきにかおほしけんと　敵(アタ)史記一人敵不レ足レ學々萬人敵項羽本紀　仇(アタ)史記　讎同寇同文選怨同又後漢書賈復輕(カツクアナツル)レ敵論語距(フセク)レ敵
ほとりまても　邊
身にしお(はイ)ふなる人の　イセ物カタリ罪もなき人をうけへ(うちはへしのぶイ)はわすれ草をのかうへにそおふといふなる　和泉式部わしかれと思はぬ山の嶺にたにおふなる物を人のなけきは
をのれふるし給へる　秋といへはよそにそきゝしあた人のわれをふるせる名にこそ有けれ
世になむつけられたまはぬおとゝを　難
さおもはるゝ我身のふかうなるにこそは　不幸
このさうのめいほくにて　今生面目紫上の父式部卿宮のために五十賀せられたりし事也
この大北方そさかなき物なりける　惡サカナキ日本紀
正さう(身)しみはしかひきゝりにこは(きイ)〳〵しき心もなき物

をひきゝりとはひきはりつよき心歟ひきはなちて
きれたる人の心歟
あをにひのさしぬき　青鈍指貫　大將檢非違使別當
着之
あこをこそは戀しき御かたみにも（ともイ）　吾子日本紀　我子
阿子
兵部卿宮なとゝもえし給ときゝしを　怨しうらむる也
おほやけ人をうちたのみもたるはなくやはあると
尙侍麿女右大臣豐成室　尙侍淑子中納言長良女右
大臣氏宗室
宮の女御　冷泉院女御（式部卿宮女 母同披柱上）
はふき給　はふきはかへりみる也
わらはなる八郎きみはむかひはら　當腹　系圖に不
入
おなしこと　如也
みつむまや　水驛（飯驛はにきはゝしき饗也 水驛はひそきたる饗也）
心けさうしそして　存して也
すか／＼しうやと　速
さも心にかなはぬ世かなとうちなけきて　芹つみし（六帖）
昔の人も我ことや心に物のかなはさりけん

大將はつかさの御さうしにそおはしける　天曆御記（イ本ナシ）
云依左大臣定申皇太子移左近衞昨日遣齊光權見還
來申大將曹司中將曹司共無其使少將曹司屋頗雖短
陋自他屋有便宜然則可令加修理彼曹司后宮等（モ）職
曹司有之定子皇后宮時此所給之時母屋依有鬼物住
庇給其時無南門云々此職曹司或執柄已下公卿宿所
也且天長大納言諸嗣請右大臣外曹北方公地造休局
云々楚忽之時或爲御所西宮抄云宿所大臣納言宿廬
職曹司也一大臣宿在宜陽殿東庇左大將宿所在宣陽
門內廊南右大將宿所在陽明門內南廊左右中將宿所
在玄輝門東西　左右近衞府曹司
深山木に羽うちかはしぬる鳥のまたなくねたき春に（兵部卿宮）
もあるかな　み山木に鬢黑大將をたとへたる也紅
葉賀に頭中將を源氏の中將に立ならひては花のか
たはらのみやま木と云りこれも玉鬘の內侍の督に
ならへてみやま木と兵部卿の宮のそねまれたる也
さえつるこゑもみゝとゝめられて　百千鳥さえつる
春は物ことにあらたまれとも我そふり行
御かたちはいふよしなくきよらにてたゝかのおとゝ
の御けはひに　けはひとは人のすかたことからをも

いふ也あなかちに物いひけはひにかきるへからす
日本紀に形勢と書てけはひとよめる其心歟（也イ）
（冷泉院）なとてかくはひあひかたき紫を心にふかくおもひ
そめけん　（萬葉）紫ははひさす物を椿市のやとのちまた
にあひしこやたれ　（後拾遺）紫にやしほそめたる藤の花池
にはひさす物にそありける（齋宮女御）　紫のいろに心
はあらねともふかくそ人をおもひそめつる
こくなりはつましきにやと　深（日本紀）濃
宮つかへのらうもなくてことしかゝいしたまへる心
にや　從三位加階歟
けにけしからぬ事もいてきぬへき身なりけりと　或
云凡聚宮人爲妻妾者容隱私舍不肯出仕者依法科罪
いとしつ心なう（はイ）　無閑心
人よりさきにすゝめし心さしの人におくれてけしき
とりしたかふよむかしのなにかしかためしもひきい
てつへきことゝちなんするとて　後撰云大納言國經朝
臣の家に侍ける女に平定文いとしのひてかたらひ
侍て行末まて契侍けるころ此女俄に贈太政大臣に
むかへられてわたり侍りにけれは文たにもかよは
すかたなくなりにけれはかの女の子の五はかりな

るか本院の西のたいにあそひありきけるをよひよ
せて母にみせたてまつれとてかひなにかきつけ侍
ける平定文　昔せし我かねことのかなしきはいか
に契し名殘なるらん　返し　うつゝにて誰契けん
さためなき夢ちにまよふ我は我かは
御てぐるまよせていときひしきちかきまもりこそむ
つかしけれと　（[illegible]）近衛大將なれはよそへて仰られたる
いと興あり西宮記云輦車親王大臣老宿人有此息女
親王女御尚侍毎出入藏人經奏聞仰閤門吉上云々
のをなつかしみありいつへきよをおしむへかめる人
も身をつみて　身をつめは露をあはれとおもふかな
あか月ことにいかてをくらん　（赤人）春の野のすみれつ（にイ）
みにとこし我そ野をなつかしみ一夜ねにけり
かはかりは風にもつてよ花のえにたちならふへきに（らねとイ）
ほひなくとも　香はかり
いとみたり風のなやましきを　亂心地同事歟
もとよりしたいならぬ人の　不（ス）進退（シンタイナラ）
女もしほやくけふりのなひきけるかたを　おもはぬ
かたを（とイ）いふ心也　（古今）すまのあまのしほやく煙風をいた
み思はぬかたにたなひきにけり

（玉葉）なかめする軒のしつくに袖ぬれてうたかた人をしのはさらめや
未必（ウタカタ）　日本紀宇多我多　（萬葉十五）はなれそにたてるむろの木（或ウツタヘ）うたかたもひさしき年を過にけるかな　（同十七）天さかるひなにある我をうたかたもひもときかけておもほすらめや　（同十七）鶯のきなく山吹うたかたも君かてふれす花ちらめやも　（後撰いせ）思河たえすなかるゝ水の淡のうたかた人にあはてきえめや　定家卿說云うたかたとは眞名に寧なとつかへる詞のやうにおもひよること歟さなくてはいかてかはと云よし也それをこの歌ひとつをみてうきたる人と云よしにうたかた（うたかたとはうたてといふ詞也それを水のあはとそへて云也）人と六字につゝけてよめりと云說はふかく見わかてしりかほにのへやる說也たゝ四文字の詞也此物語にもあなかしてといや〳〵しく書なし給へる云々いや〳〵しくとある詞に心うきたる人と云んたよりなかるへし以上僻案抄にみえたり順說云うたかたはうたてと云心歟それを水のうたかたにそへたる也一說云さためなき人也又すこしもと云心歟
水原抄　（新千載源親行）思川うたかた波の消かへりむすふ契はゆくゑたになし　此道の祖師歌也尤足二潤色
ほとふる比はけにつれ〳〵まさり侍けりあなかしこと　君すみて程のふる屋のひさしにはあふことなしの草そ生ける
ゐや〳〵しくかき給へり　恭（ヰヤ〳〵シ）尚書　禮（ヰヤ）日本紀　うやまふ心也
たま水のこほるゝやうにおほさるゝを　雨やまぬ軒の玉水かすしらす戀しきことのまさる比かな　なかれ行末せき（いるゝイ）とむる玉水のこほれてもあへすおつる涙か
あつまのしらへをすかゝきてたまもはなかりそとうたひすさひ給ふ　平志多加戸加毛佐戸支井留波良乃伊介乃也多萬毛波萬禰奈加利曾於比毛須加禰也萬禰奈加利曾也（風俗上野歌）
あかもたれひきいにしすかたをとにくけなるふることなれと　（萬葉）たちて思ひゐてもそ思ふわきもこかあかもたれひきいにしすかたを　（同十五）あこの浦に舟のりすらしわきもこかあかものすそにしほみつらんか
色にころもをなとの給ひて　（萬）かたみなる色に衣はなりぬれと花のかはよにつねならなくに　（六帖）くちなしの色に衣を染しよりいはて心にものをこそおもへ

（源氏）思はすにゐての中道へたつともいはてそこふる山ふきの花　中路　（萬十）山吹を宿に植てはみることに思はやます戀こそまされ　（後拾遺和泉式部）あちきなくおもひこそやれつれ〳〵とひとりやゐての山吹の花　大かた玉かつらの上のほこりかなるかたち山ふきの花におもひよそへらるゝ由所々に見えたり玉かつらの巻の色々のきぬくはりにもくもりなくあかきやまふきの花のほそなかをこの御れうにとあり又野分の朝のあさかほをも山吹のさきみたれたるさかりに露かゝれる夕はへにたとへたり仍たゝいまも源氏春のおまへをうちすてゝこなたにわたりて此花をもてあそひておもひいて給ふにや

かほにみえつゝなとの給ふも　（萬葉六帖）いはぬまをつゝみしほとにくちなしの色にやみえし山吹の花　水原抄云非指證歌心歟目のまへの山吹の花かのかほにみえておもひよそへられたる心歟

案之非山吹の歌有本歌人丸集云　夕されはのへになくてふかほ鳥のかほにみえつゝ忘られなくに

かもの子のいとおほかるを御らんして　鴨子（西宮記）献鴨子事在之かるのこ共いへり　（光俊）あしねはふうきねにすたく鴨の子は親にまさるときくはたのもし是はかるの子と云々然者此物語にはかもの子かりの子のなと二樣の本あり只かもゝかりもかるの子なりと心得よと師説に承所也　うつほに云あて宮をさねたゝの宰相思かけてかいのうちに命こめたる鴈の子は君かやとまてかへらさらなん　鴈の子にかきつけやりたりと云々詞のつゝき相似たるか

おなしすにかへりしかひのみえぬかないかなる人かてにゝきるらん

ほふしれて物し給　貞文日記云さたかにはあらすなまほきたる物から云々又云かの文つたへたるは人はもとよりすみしほきたるやうに覺けれは云々

あふなきことやのたまひいてんと　無與

おきつ舟よるへなみちにたゝよはゝさほさしやらむとまりをしへよ　（伊勢物語）みるめかるかたやいつこそさほさして我にをしへよあまのつり舟

たなゝしをふねこきかへりおなし人をや　（古今）ほり江こくたなゝしを舟こきかへりおなし人をや戀わたるへき

河海抄巻第十二

正六位上物語博士源惟良撰

第十八　梅枝

巻名　薫物合之後辨少將取拍子歌梅枝

御もきの事　明石中宮着裳十二歳　うつほの物語に藤原の君の女あて宮十二にてきさらきにもき給よし見えたり

春宮もおなし二月に御かうふりの事

續日本紀曰延暦七年二月甲子　皇太子加元服其儀天皇々后並御前殿令大納言従二位兼皇太子傅藤原朝臣繼縄中納言従三位紀朝臣船守兩人手加其冠了即執笏而拜

冷泉院春宮時應和三年二月廿八日御元服

正月つこもりなるに　此正月は牧柱巻正月同時也

大貳のたてまつれる香ともに　樹下集云大入道殿にたき物あはせてたてまつる時金のたちはなの中に
道雅朝臣于時大貳　末の世になれはなりけり橘の昔の香にはにるへくもあらす

ものゝおほひしき物しとねなとのはしともに　物覆敷設茵詩文茵暢轂注曰茵虎皮也

こまうとのたてまつれりけるあやひてむきともなどの　高麗人光源氏相したる人也　綾緋金錦金を織付たる錦也金襴の類歟　延喜八年大使裴璆色々の物を獻するよし御記に見えたり

あやうす物　綾羅

かなうすのをと　鐵臼　香ヲ細搗着和供入二鐵臼一搗五百杵ト云々茅山太平觀記

そむ王の御いましめのふたつのほうをいかてか御みゝにはつたへ給けむ　古本に大略そむ王とあり頗不レ得二其意一　若そうわを展轉書寫の誤歟そかきくをも承和翁と云説ある也此物語にも大乘を大そうと書けり愚案猶そうわの御いましめとかくへき歟

魚魯の誤者古人之所思也

合香秘方云烏方　沈大四兩　丁子大二兩　白檀大一分　丁香大一兩或ハ大二分加之云々　麝香大一分　薫陸大一分

拾遺方　沈大四兩　丁子大二兩　甲香大一兩

甘松一兩　熟鬱金小一兩一説入二麝香一亦一説用二黄鬱金一　占唐一分

蜜和研合搗三千杵炮甲香以和蜜塗之令黒黄不得過黒此兩種方不傳男耳是承和仰事也延喜六年二月三日故典侍滋野直子朝臣獻方也

心に（ちイ）しめて　染也さしすせその五音通する也
ひんかしの中のはなちいてに　放出一說出居事也云々又廂名也云々
八條の式部卿の御はうをつたへて　行阿（イ本ナシ）云八條式部
卿宮の兩種の方を小一條院につたへ申さるゝ梅花
黑方合する日記
梅花　沈八兩二分　丁子三兩三分二兩二分とも　甲香三兩
三兩一分とも　甘松一分六朱とも白檀三分二分とも薰陸一分
六朱とも　麝香二分　川當歸一分三朱一分四朱とも
黑方　沈四兩　丁子二兩　白檀一分　薰陸一分
甲香一兩三分　麝香二分
又云梅花　沈四兩一分　丁子一兩一分　白檀丁朱
半　甲香一兩三分　麝香一分　甘松三朱
黑方　沈香四兩二分　丁子二兩二分　白檀二分
薰陸三兩　甲香二兩二分　麝香二分
右兩種ノ方ハ八條式部卿親王之孫左大將ニ被ニ相
傳ニ之方然者後幕下竹園之孫也以レ是可レ准ニ孫王ニ
歟如何猶可レ勘レ之以上異本無
本康親王一品式部卿號八條宮仁明天王第七御子母從四位下紀種子名虎女延喜元年薨　高名薰物合
也
黑方　沈四兩　丁子二兩　甲香一兩　薰陸二兩

鬱金二兩
又侍從　沈四兩　丁子二兩　甲一兩　麝二分
薰陸二分　甘松二分
件三方故八條宮方云々
かたみにいとみあはせ給ふ　挑いとみ
ひし給へは　秘
御てうと（調度）ともそこら（幾多）のきよらをつくしたまへるなか
にもかうこの御はこともののやうつほのすかた　香壺
筥
ちりすきたるむめのえたにつけたる御文　高光日記
云ひえの山にすみ侍けるころ人のたき物をこひて
侍けるまゝにすこし梅の花のわつかに散殘りて侍
る枝に付てつかはしける
春過てちりのこりける梅の花只香はかりそ枝にの
これる見拾遺集
ちん（沈）のはこ（筥）にるり（瑠璃器）のつきふたつすへておほきにまろ
かしつゝいれ給へり心はこん（紺）るり（瑠璃）には五えうの枝し
ろきにはむめをゑりておなしくひきむすひたるいと
のさまもなよ（優）ひかに　文よりはしめて草木の枝に物
を付るは皆其色につくる事也これも紺瑠璃器をは

松の枝につけ白瑠璃器をは白梅の枝につけたる也
梅をえりてとは白うすやうなとにて梅の花を雕或は同色のいとにて結たる造花歟云々一説云梅の花のある比なれは造花に付へからす紅白の花の中に白梅を撰ひてつけたる也云々或説云齋院の獻せらるゝ薫物兩種と見えたり黒方をは紺瑠璃の器(イ)に入て松につけ梅花をは白瑠璃の器に入て梅か枝につけられたる歟云々

こうはいかさねのからうのはそなか　紅梅重香細長

くまく／＼しくおほしたるこそ　おはつかなき心歟

曲日本紀　隈　熊　阿間

花のえにいとゝ心をしむるかな人のとかめむかをはつゝめと　古今梅の花たちよるはかりありしより人のとかむる香にそしみける　後選　梅の花かを吹かくる春風に心をそめは人やとかめん

またもなかめる人のうへにてこそはことはりのいとなみなめれと　源氏女子なき心也

いとみにくけれは　醜ミニクシ素寂云挑惡イトミニクシ云々僻事也

うとき人にはかたはらいたきに　外人不見々應笑白氏文集

ことはり申給ふ　裁斷コトハル日本紀

このゆふくれのしめりに心みむときこえ給へれは

薫物はしめりにゝほひまさる物(地イ)也云々仍あるひは水邊にうつみ或は花木の下の土に埋此故也

たれにかみせんときこえ給て　きみならてたれにかみせん梅の花色をも香をもしる人そしる

しる人にあらすやとひけし給へと　さきの歌の心也卑下

わか御ふたくさはいまそとう(取出)てさせ給右近陣のみかは水のほとりになそらへて西のわたとののしたよりいつるみきはちかううつませ給へるを

御溝水　近來東庭潺湲(センエン)任レ舊流昔者立石風流様々也流非二一脉一順徳院御抄　承和御時右近陣の御溝の邊の地にうつまる後代相傳して其所をたかへす云々

埋薫物日數事　長寧公主三日姚家七日極要方盛白瓷中地を掘こと三尺以上用水邊地得朝陽埋之　公忠朝臣方云黒方侍従春秋五日夏三日冬七日埋ニ梅樹下ニ云々　致忠朝臣云合香之後物に入て花木の下の土の中の高きところに埋之　知章朝臣云埋ニ

五葉松下春秋七日夏五日冬十日
これみつの宰相のこの兵衞のせう　任参議有数道其内經七ヶ國受領合格之史勘公文丁拜参議云々惟光前攝津守也
しゝうはおとゝの御は　御薫物はといふへきを略したる也前巻にも詩なとをもおほく御といへり承和侍從方端在之
たいのうへの御はみくさある中にばいくわのはなやかにいかめましくすこしはやき心しらひをそへてめづらしきかほりくはゝれり
梅花方　沉香八兩二分　占唐一分三朱　甲香三兩一分　甘松一分　白檀二分三朱　丁子二兩二分
麝香二分　薫陸一分　已上十五兩三分（加へらイ）
みくさとは黒方侍從の外に梅花をかゝれたるなり
心しらひをそへてかほりくはゝれりとは寛敎僧都說云春は丁子加增あるへしと見えたれはかやうのかをのこされたる歟
かす〳〵にもたちいてすやとけふりをさへ思ひきえ給へる御心にてたゝ荷葉を一くさあはせ給へり　此詞妖艶殊無比類者歟

荷葉方　甘松一分　沈七兩二分（一イ）　甲香二兩二分　白檀二朱（或三朱）　爇金二分（代麝）　藿香四朱（或一分四朱）　丁子二兩二分（或安息香一分一說三兩二分）　以上十三兩二分　天慶六年二月廿一日甲午公忠朝臣所獻之
とき〳〵によれるにほひの定まれるにけれたれんもあやなしと　合香は四季にかたとる方ある也
春は梅花方（紫上はるの御方のすくれたりと見えたり仍この比の風にたくへんにさらにこれにまさるにほひあらしとあり）　夏は荷葉方（花散里上夏方合之）　秋は菊花方　又侍從　冬は落葉方　又黒方
寛敎大僧都說（記イ）云春之丁子夏秋之沈冬之薫陸隨香（季イ）三銖許可加歟　合香古方
（薫衣香）くのえかうのほうのすくれたるはさきの朱雀院のをうつさせ給て公忠の朝臣のことにえらひつかうまつられし百ふのほうなとおもひえて　おもひえてとはいまの薫衣香百歩方なとにかよひておもひよそへらるゝといふなり
千金翼方云薫衣香　薫陸香八兩　藿香　覽探各三兩　甲香二兩　詹唐五兩　青桂皮五兩　料理略之
薫衣香方　沉三兩　甲一兩二分　檀二分　青木香二分　丁子一兩　占一分二朱　麝以上大　凡香附

子代以鷄舌香華若拔茇納香代青木香「麝香（イナシ）」代白檀
　件方故式部卿親王上
又方此方一名體身香　丁子　藿香　零陵　青木
甘松各三兩　白芷　當歸　桂心　檳榔子各一兩
麝香一分
右十物細擣絹篩爲粉以蜜和擣一千杵然後出之丸如
棗核口含咽汁盡一夜三日別含十二丸當日自覺口香
五日自覺體香十日衣被亦香廿日逆風行他人聞香廿
五日洗手面水落地香一月已後抱兒々亦香唯忌蒜及
五辛等耳但口香體潔而已蓋亦治萬病一方有香附子
一兩
承和百歩香方　白檀小八兩　甲香小八兩　零陵香
小八兩　占唐小一斤　蘇合小一斤　藿香小四兩
甘松花小四兩　乳頭香小五兩　白膠小二兩二分
麝香小四兩　鬱金小二兩二分　右十一種擣蜜和之
於瓷器中盛埋經三七日取燒百歩之外聞香件方出自
四條大納言家大江千古所上耳　沈小四兩二分　薫
小一分　檀小一分　丁小二兩　甲小一兩　麝小一
分四朱　又沈小四兩　丁小二兩　甲小一兩　甘小一
分三（二イ）朱　藿小一分三朱　已上朱雀院御方也

薫衣香一名黑方　沈大四兩　丁大二兩　甲大一兩
二分　薫大一分　麝大二分
百和香　字侍從　沈四兩　丁二兩　甲一兩以上大
金一兩　甘一兩　已上小　以上仁和元年三月四日抄
三增損
さきの朱雀院　古今集に朱雀院とあるは亭子院也仍
此さきの朱雀院も寛平の御事たるへき歟然共（異イ）若此
物語の朱雀院よりさきといふ心歟承平の御代合香
を好しめ給よし見えたり
公忠朝臣（號滋野井辨右大辨從四位下天暦二年十月廿八日卒六十光孝天皇御孫大藏卿國紀子）　高名薫物
合好手也云々延喜天慶間右大辨公忠朝臣藏人所小
舍人大和常生相並奉ニ合香之役一
むとくならす　不無德
おとゝのあたり　御殿のあたりなり
月さしいてぬれは　薫物合の事おほしたつ（イ）は正月晦
日と見えたり今の月影は二月の初歟此比薫物とも
被ニ調出一也
くら人ところのかたにてあす（もイ）の御あそひのうちなら
し給御ことゝものさうそくなとして　藏人所殿上に
あり　ことの裝束とは絃かけ柱つけなとする事歟

ことは絃の惣名也箏にかきるへからす次の詞にも
御ことゝもめすとて琵琶さうのことわこんとあり
けさうはかりにて　見參
宰相中將よこふえ吹給ふおりにあひたるてうしくも
ゐとをるはかり吹たてたり　おりにあひたるてうし
とは春なれは双調歟一聲鳳管秋驚秦嶺之雲數拍霓
裳曉送維山之月
ひやうしとりて梅かえいたしたるほと　梅之枝 十四呂催馬樂
千代もへぬへしときこえ給へは　古今素性　いつまてか野へに
心のあくかれん花しちらすは千代もへぬへし
柏木　うくひすのねくらの枝もなひくまて猶吹とをせ夜半
のふえ竹　拾遺　花の色はあかす見るとも鶯のねくらの竹
にてなゝふれそも
辨少將　霞たに月と花とをへたてすはねくらの鳥もほころひ
なまし　或說鳥のこゑ　ほころふるとはおとろく儀
歟花のほころふるはひらくるなれは鳥もこゑを發
する心歟
ことあやまちに　リイ　あさことに見し都ちのたゝなれは
ことあやまちに　リイ　問人もなし　後撰無名

またなき事とおほさるらんとあれはいといたうから
かり給　又なき歟兵部卿の宮の上を又なき人と思は
れたると源氏わらはれたる心にや
御くしあけの內侍　着裳の時髮を上らるゝ歟かんさ
しする心也內侍その役をつとめたるなり
とう宮の御元服は二月廿日の程になん　東宮御元服
二月例先勘之
きをひまいらすへきことを　競參
このとのゝおほしきさすさまの　思萠　思そむるこ
とを草木のはしめて萠によそへたるなり
ひたりのおとゝ左大將なともおほしとゝまるなるを
梅枝左大臣不入系圖これは麗景殿女御の父と見えた
り同人歟別人歟可了見左大將此巻にみえて末にみ
えす若鬚黑大將事歟其比左大將也
榮花物語云東宮 冷泉院 に朱雀院の姫宮 昌子內親王 まいらせ給ふへき
御さためありけれは女御まいらせんとけしきはみ
給人々たゝいまはおほしとまりにけり
そこらきやうさくの姫きみたち　うつほの物語云御
門この朝臣にみゆるこそはつかしけれきやうさく
に心にくゝ見るにかみさひたる翁にて

れいけいてんときこゆ　麗景殿
（明石中宮）この御かたはむかしの御とのゐ所しけいさをあらためしつらひて　淑景舍　桐壺也源氏の母の更衣ならひに源氏代々の曹司なりし所也
四月にとさため給ふ　陽明門院萬壽四年三月廿三日（二十イ）入太子宮 年十五 長元十年二月十三日爲中宮　案之以後例歟然而聊爲潤色歟如何
さうしのはこに入へきさうしとものやかて本にもし給ふへきを　草子匣一双（清涼殿北立二階一脚置厨子二脚其上東置櫛匣其下立香壺匣西置草子匣其下階置藥匣）
手本をは御本といふなり
いにしへのかみなきゝはの御てともの　無上（無際）　際也（きハ）
かんなのみなんいまのよはきはなくなりたるふるきあとはさたまれるやうにはあれとひろき心ゆたかな（不寛）らす　江談云天仁二年八月日向小一條亭言談之次問曰假名手本何時始起乎又何人所作哉答云弘法大師御作云々件事無所見但大后自筆假名法華經供養之時被行御八講之講師南北英才相遞爲導師高名清範慶祚等之輩各振富樓那之辨才之後源信僧都又勤（勸イ）此事說云日本國誠雖如來之金言唯以假名可奉書也弘法大師云傳習諸眞言梵字悉曇等密法之後寄四教法門作イロハニホヘトノ讃チ給以來一切法門聖教史書經傳不レ離ニ此讃文字ーイロハノ字ハ色匂ト云心歟不レ說ニ他事ー只以ニ此一事ー令講人々皆驚耳之由所傳聞也古人日記中在此事云々又問云然者件弘法大師御時以往無假名歟日本紀中假名日本紀在之由慮外令見如何答云此事尤理也雖然只付倭言令書也猶イロハニ者彼時始歟云々
一說伊呂波有三段イロハニホヘトチリヌルヲ大安寺護命僧正作　ワカヨタレソヱヒモセスマテ弘法大師作京（傳教大師作或云慈覺大師）　又云イロハトハ母ノ名也然者梵字ノ義也云々往古の和語は萬葉書日本紀歌の樣に書ける也
とよりてこそかきいつる人々ありけれと　外よりてとはするになりてと云心歟或人云年よりてなりと云々
女てを心にいれて　うつほの物語云たゝそのかきてたてまつられたる本をこそおとこても女てもならひ給めれ
きはことにおほえしはや　はやは詞の字也おほえしや也

あまりそほれてくせそゝひたる　そほれてはすこしたはふれされたる躰歟

まんなのすゝみたるほとにかなはしとけなきもしこそましるめれとて

眞名は文字楷者也假名は文字のかひたかひぬれは議かはる事ある歟　水原抄　案之眞名は文字の姿さだまれる様也假名はあしくかきなせはしとけなき文字すかたあるといふ歟

またかゝぬさうしとものつくりくはへて表紙ひもなといみしうせさせ給ふ　草子の紐不審猶可了見一説草子を組にてとちたる歟云々或草子かたに入たる歟其紐歟云々案之次下にこもんいきの表紙おなしきたまのちくと見えたりしかれは巻物をも草子の匣に加入られたる歟

兵部卿左衛門督なとにも　此左兵衛督何人乎若引入大臣子歟

みつからひとよろひはかくへし　一雙草子二帖也屏風一よろひは二枚也

われはめをし給ふ　自讃也

かへさひ申たまふもあれは　覆申　たゝ返事也

こまのかみの　高麗紙

あしてうたゑを　葦手歌繪

しろきあかきなとけちえんなるひらは　揭焉　ひらは枚也萬葉に枚浦　枚潮と有此字也

なか〳〵に君かこひすはひらの浦のあまならましを玉もかりつゝ

おもなくくたすふてのほと　無面　下筆をくたすと云也

さうかき給へる　草書

はたこまかになこう　精　和ナコヤカ也

なまめきたる　嵌媚

み給人の涙さへみつくきになかれそふ心ちして　獲麟一句涙與筆俱　白氏文集　なき人のかきとゝめたる水くきを見るに涙のなかれぬる哉

こゝのかんやのしきしの　紙屋　色紙

みたれたるさうしのうたをふてにまかせてみたれかきたまへる　文字に眞行草三體あり眞は束帶して人の立てる體也行はありく體也草は走る體也云々此中草の字は殊好手の態也　張芝字伯英善草書絶妙時人謂曰臨池水盡黑　後漢書　仍張生を草聖と號也

しところもところにあいきやうつき　よしとてもよきな
もたゝすかるかやのいさみたれなんしところもところ
に六帖
もしやういしなとの　文字樣　石
けうしめて給なにことも物このみしらんかりおはす
るみこにて　與　感日本紀
さま〳〵のつきかみの本とも　續紙　卷物なり
さかの御かとの古萬葉集をえらひかゝせ給へる四卷
萬葉集廿卷聖武御代撰之或説に萬葉抄五卷貫之撰之云々是は
以後の撰也　順集云天暦五年宣旨ありて始て大和歌えら
ふ所梨壺にをかせ給と云々古萬葉集よみときえら
はせ給也めしをかふれるは河内掾清原元輔近江掾
紀時文學生源順御書所預坂上望城也左近少將藤原
朝臣伊尹をこの所の別當に定めさせ給ふ
からのあさはなたのかみをつきておなし色のこきこ
もんのきのへうしおなしき玉のちくたんのからくみ
のひも　唐淺縹紙　綺表紙　玉軸　淡香紐
まきことに御てのすちをかへつゝいみしうかきつく
させ給へり　昔能書は皆樣々に躰を替て書けり王義
之筆にも種々の躰あり行成卿は十二の樣をかけり

なといへり
掌中暦云高名能書嵯峨天皇　弘法大師　敏行少將
義材大内記　前中書王兼明　道風大工頭　佐理大貳　後中
書王具平　行成侍從大納言
侍從にからの本なとのいとわさとかましきちんの箱
に入てあたらしくうつくしけなり　惜アタラシ
たはふれにくきおりおほかれとあさみとりきこえし
御めのとゝもに　古今ありぬやと心みかてら相みねはた
はふれにくきまてそこひしき　あさみとり六位宿
世にいひし事也
右のおとゝ中務の宮なとの　右大臣は若鬚黒大將の
父歟其比の大臣歟中務宮不入系圖とあり
しりゐに人わろき　しりゐとはことゆかすといふ也
云々案之のちよはくなる心歟俗にしりよはといふ
なり
女のことにてなむかしこき人むかしもみたるゝため
しありける　六條御息所事也
さるましきことに心をつけて人の名をもたてみつか
ら恨をおふなんつゐのはたしとなりける　末摘花の
事歟

とりあやまちつゝみん人のわか心にかなはすみしのはん事かたきふしありとも　丞相欲三以贖二子罪一陽石汚而公孫誅文選　丞相公孫賀か子敬聲御門につみせらる父丞相おほきになけくその時陽陵の朱安世京師の大使也御門めすに安世にけてかへる世擧てもとむるに公孫賀安世をとらへてたてまつる則賞をおこなはるゝ時に敬聲をゆるして安世を禁せらる安世獄の中にてあさわらひていはく南山の竹斜谷の木なを公孫賀かくひかせにはたらしと敬聲をこりのあまりに陽石公主武帝女　を汚よし書をつくりてたてまつる武帝怒て父子公孫敬聲ともに誅せらる漢書に見えたり

寛平遺誡云左大將時平　先年於女事有所失とあり前に注せり世繼に天暦御門安子中宮うせ給ひて御なけきもあさからぬ中に式部卿宮の北方をまいらせ給て世のまつりこともせさせ給はぬさまなれはたゝ今のそしり草にこの御事にてそありける小野宮のおとゝなとあはれ世のためしにしたてまつるへき君の御心の末の世によしなき事のいてきて人のそしりをおひ給事を思ひ歎き給といへり

うへはつれなくおほとかにて　あしねはふうきはうへこそつれなけれしたはえならす思心を讀人不知
たかまことをかとおもひなから　僞と思ふ物から今更にたかまことをか我はたのまん
おとゝひきかへし御むねふたかり　致仕大臣さきには夕霧をきらひ今又したひ給ゆへにひきかへしといふなり

第十九藤裏葉

巻名　詞云さときよくさうときてふちのうら葉のとうち誦し給

關もりのうちもねぬへきけしきに　伊勢物語 人しれぬ我通路の關守はよひ〳〵ことにうちもねなゝん

御もろこひなり　六帖 みこもりの神しまさしきすちならは我かた戀をもろ戀になせ　左右音モロコエ伊勢物語眞名本

大との大宮の御き日にてこくらくしにまうて給へり

極樂寺在深草　昭宣公建立　深草天皇行幸芹河之時昭宣公爲二殿上童一供奉天皇令レ好レ箏給有二一箏彈之人一其指入二作爪一件爪非二巧匠之所レ及自然之寶物也天皇常令二隨身一給自二芹河一還レ宮之間忽以紛失

大鷲給召ニ昭宣公ニ被レ仰下可ニ求進一之由上昭宣公奉ニ勅命一起ニ立本路一心中被ニ願念一云此爪不ニ求獻一者今生之遺恨也三寶可ニ加護給一求得之處必可レ建ニ立一加藍一也願力不レ空求出テ獻レ之天皇殊ニ以テ感シ欲下群臣之中抽被レ仰ニ幼童一之條上定有下被ニ思食一趣上歟其後昭宣公極ニ昇進一爲ニ果往日願念一立ニ極樂寺一給云々　九條右丞相記曰此度啓慶寺々綱所東寺西寺天台前唐院極樂寺法性寺興福寺

なとかこよなうはかうし給へるけふのみのりのえにもたつねおほさはつみゆるし給へよや　考事　或勘事又考辞　うつほの物語このみよにたにかのかうしを今はかくのこりなき身にゆるされなは

なかくにおりやまとはん藤の花たそかれ時のたとくしくは　(貫之集)君にたにゆかてへぬれは藤の花たそかれ時もしらすそありける

くちをしくこそおくしにけれ　臆チクシ

ひさんきの程なにとなきわかうとこそふたあひはよけれ　非參議　二藍　(イ本ナシ)二「非參議先官の人を云々」

おゝしく　雄々　男々しく也

なつにさきかゝるほとなん　(拾遺)夏にこそ咲かゝりけれ藤の花松にとのみも思けるかな

色もはたなつかしきゆかりにしつへしとて　むらさきのゆかりのいろなり

おめのしたのいうそくに　天下有職

文籍にも家禮といふ事あるへくやなにかしのをしへもよくおほしゝるらんと思たまふるをいたう心なやまし給ふ

史記曰漢高祖幸ニ父太公之家一以ニ家禮一敬之高祖雖レ子君也太公雖レ父臣也又曰六年高祖五日一朝太公如ニ家人父子禮一太公家令レ說ニ太公一曰天無ニ二日一土無ニ二主一今高祖雖レ子人主也太公雖レ父人臣也奈何令ニ人主拜ニ人臣一如レ此則威重不レ行高祖朝太公擁レ篲迎レ門却行高祖大驚下扶ニ太公一云々曰帝人主也奈何以我亂ニ天下法一於レ是高祖乃尊ニ太公一爲ニ太上皇一心善ニ家令言一賜ニ金五百斤一　なにかしのをしへ此事歟

ゑひなきにや　(萬葉)かしこしと物いふよりは酒のみてゑいなきするにまさりてあるらし　(同)たゝにゐてさかしくするは酒のみてゑいなきするに猶しかす也

御ときよくさうときて　御時よく也　桐壺巻に勘了

藤のうら葉のとうちすし給へる　後撰春日さす藤の裏は
のうらとけて君し思はゝ我もたのまん
宰相さかつきをもちなからけしきはかりはいしたて
まつり給へる　御前勸盃に大臣盃を納言以下賜はり
て本座に歸りて盃を持なから拜するなり此等の准
據歟
たをやめの袖にまかへるふちの花　婦人日本紀第一
又手弱女人多乎夜米　幼婦萬葉
夕霧いくかへり露けき春をすくしきて花のひもとくおり
に逢らん　能宣集年へて消息つかはす人のむつまし
うは侍らぬに春のすゑつかたつかはす　幾歸りさ
きちる花をすくしつゝ物思ひくらす春にあふらん
つき〳〵すむしなかるめれと　誦流也
七日のゆふつくよかけほのかなるに　月七日爲魄
初學記
あしかきをうたふ　葦垣呂催馬樂　安之可支末可支萬
可支加支和介天不己春止於比己春止希不多禮可太
禮可己乃己止乎於也尒末宇與己之末宇之二段　止己
呂介留己乃以戸乃己乃伊戸乃於止與女於也尒萬字
與己乃介良之毛三段　安女川知乃可見毛可美毛曾宇
之多戸和禮波萬字與己之萬字左須四段　可加乃彌乃
春可奈須可奈支己止乎和禮波支久和禮波久宇之可
名五段

いとけやけうもつかうまつるかな　常尤文選　選梨園
弟子中尤物李白詩後序　由來尤物不在大能蕩君心則爲害
白氏文集八駿圖　世間尤物難留連々々々易銷塞北花江南ノ雪
朝同眞娘墓　意者不但感其事亦欲徵尤物長恨歌傳陳鴻
としへにけるこのいへのとうちくはへ給へる　あし
かきの歌にとしへにけるといふ詞なき歟致仕大臣
年へにける聖曲をいま感にたえす歌はれたる由歟
まかてんそらもほと〳〵しうこそ　拾遺なけきこる人い
る山のおのゝえのほと〳〵しくもなりにけるかな
わそむや　朝臣
まつにちきれるはあたなる花かは　みとりなる松に
ちきれる藤なれとをのか比とそ花はさきける六帖
世のためしにもなりぬへかりつる身を　戀するにし
ぬる物とはきかねとも世のためしにも成ぬへきか
な
かはくちとこそさしいてまほしかりつれ　六帖河口の關
のあらかきまもれともいてゝ我ねぬしのひ〳〵に

河口呂催馬樂　加波久知のせきの安良可支やせきのあらかきや末毛禮とも波禮まもれともいてゝわれねぬやいてゝわれねぬやせきのあらかき今の心はあらかきのまかきかきわけてたれかこのおやにまうしことあるを夕霧關のあらかきまもれともいてゝわれねぬやとこそいはまほしかりつれとむかしを思はれたる也それを女きゝくるしと思はれたる也

もりにけるくきたのせきをかはくちの　菊多剗在陸奥國能因歌枕俗にはきくたのせきと云八雲御抄河内云々弘仁式にみえたり

太政官符　應給考陸奥國外散位三十三人事　擬郡司廿八人　白河菊多剗守六十八人自余略之

右直國府外散位等如件省宜承知依レ件給レ考

延暦十八年十二月十日

物いひさかきこたち　後達宮仕女惣名也

あくるもしらすかほなり　玉すたれあくるもしらすねし物を夢にもみしと思かけきや

ねくたれの御あさかほ見るかひありかし　朝面萬葉

六帖ねくたれのあさかほの花秋霧におもかくしつゝ見えぬ君かな

うこんのせうなる人の　右近將監いまた叙爵せさるをはせうとよふ也

さかしき人も女のすちにはみたるゝためしあるを

寛平遺誡左大將藤原朝臣者功臣之後其年雖レ少已熟二政理一先年於二女事一有レ所レ失　先勘了

色ふかき御なをしにちやうし染のこかるゝまてしめるこゝあやの　西宮左大臣六月の比丁子染帷を着給けるよし舊記に見ゆ

くはん佛ゐてたてまつりて御たうしをそくまいりけれは日くれて御かたくゝよりわらはへいたしてふせなとおほやけさまにかはらす　灌佛卯月八日布施員數寛平八年四月八日定法文法親王錢五百文大納言四百文中納言三百文參議二百文四位百五十文五位百文六位并童五十文親王大臣紙五帖大中納言四帖四位五位二帖六位并童一帖云々推古天皇十四年是年初毎寺四月八日設齋會日本紀

水もちらんやは　伊勢物語なとてかくあふこかたみに成ぬらん水もちらさしと結し物を

紫たいのうへみあれにまうて給ふ　賀茂祭前日於垂跡石上有神事號御形御阿禮者御生也見古語拾遺日本紀云

神聖生其中者或御禊ミアレ　祭の前の一日を御禊日といふ也御生所は神舘にありと云々祭時御旅所也

こんゑつかさのつかひは頭中將なり　賀茂祭　欽明天皇之御世天下擧國風吹雨零爾時勅卜部伊吉君日子令卜乃賀茂神祟也撰四月吉日馬繫鈴人蒙猪影而驅馳以爲祭禮頭中將近衞使例幷近衞使始可勘

とう内侍のすけもつかひなり　惟光宰相女

御まへところしめたるほと　うつほの物語少將とうりうしにわたりて御まへ所

かさしてもかつたとらるゝ草の名は桂をおりし人やしるらむ　はかせならてはときこえたり　文章生の事也　晉書曰郤詵字廣基擧賢良對策爲天下第一爲雍州刺史武帝於東堂會送帝問詵曰卿才自何如詵對曰臣對策爲天下第一猶桂林一枝崑山片玉　今以之課試及第之事に作來也奥入

菅原大臣かうふりし侍ける夜母のよみ侍ける
久方の月の桂もおるはかり家の風をもふかせてしかな　葉風　桂の葉かせ也博士にそへたる歟

御めのとたちなとも見をよふ事の心のいたるかきりあるを　見をよふ事はかりをこそ心のいたるかきりの宮仕をもし侍らめ目にみえぬ事まても思やりけてん事はあるましと云也不足の由也

御てくるまなとゆるされ給て　輦車　上古は女房もてくるまゆるされぬほとは門よりおりて道のほと机丁をからけてまいりける也

なみたのみとゝまらぬはひとつものとそみえさりける　後撰
うれしきもうきも心はひとつにて別れぬ物はなみた成けり

いとみところにて　挑所

あけんとしよそちになり給御賀の事　執政人四十賀例　昭宣公貞觀十七年四十今ほりかはのおほいまうち君の四十賀九條の家にてしける時によめる業平朝臣
櫻花ちりかひくもれ老らくのこんといふなる道まかふかに

卅九院號例　上東門院萬壽三年云々秋院號事東三條院正暦二年九月一日院號

その秋太上天皇になすらふ御くらゐ給はりてみふく年官はゝりつかさ年爵かうふりなとみなそひ給て　漢代曆曰北齊武成帝河清四年四月帝禪太子偉自號太上

皇一改爲二天統元年一
不踐祚太上皇例　漢朝例御門(イ本ナシ)父太上天皇ノ例ハ漢高祖父太公之例　云々」　史記曰於是高祖乃尊二太公一爲二太上皇一(紫雍曰不レ言レ帝言非二天子一也矣)　漢書曰諸侯將軍群卿大夫已尊レ朕爲二皇帝一而太公未レ有レ號今上尊二太公一曰二太上皇一　師古曰太上極尊之親也皇君也天子之父故號曰レ皇不レ豫二治國一故不レ言レ帝ト也
本朝例　草壁皇子追號長岡天皇(天武第二子文武父)　舍人親王追號崇道盡敬天皇(天武第八子𤄃帝父)　施基皇子追號田原天皇(天智第三子光仁父)　日並知皇子實字三年有勅追崇尊號爾岡本宮御宇天皇(天武子文武父)　續日本紀　小一條院(敦明三條院御子)　寛仁元年八月廿五日院號(號小一條院)　太上天皇封戸二千戸勅旨田千町　院司別當公卿(四位或五位)　判官代(五位六位)　或四位　殿上人藏人四人(非藏人有之主典代廳官御服所所衆武者所御隨身所召次所仕所別納所加之)諸國允一人爵一諸國掾一人目一人一分三人太政大臣の封戸は二千二百五十戸也太上天皇は二千戸也而院號によりて御封くはゝると云事如何
あさみとり若はのきくを露にてもこき紫の色とかけきや　淺緋は六位袍也紫は四位已上袍こき紫は三位袍とみえたり一位まては同色也古は四位叙三位之

後着改袍之由舊記に見えたり今世は四位袍も公卿も差別なし後撰に廣明卿參議より中納言に任する時九條右大臣袍をつかはしける歌に　思きや君か衣をぬきかへてこきむらさきの色を見んとは　とあり此事をおもひて今も中納言の事をこきむらさきと云歟
二葉よりなたゝるそのゝ菊なれはあさき色なく露もなかりき　かすしらす君か齡をのはへつゝなたゝる宿の露とならなん(伊勢後撰)
淺き色は淺黄六位袍にそへたる也
せんさいともなとちいさき木ともなりしもいとしけきかけとなりひとむら薄も心にまかせて見たれたるつくろはせ給やり水のみ草もかきあらためて
鬢絲千萬白　池草八九綠　童稚盡成人　園林半喬木(白氏文集)　君かうへし一村薄虫のねのしけきのへとも成にけるかな
やとのまし水　眞淸水也(マコトニスメル水也)　能因歌枕云ましみつとはいつるし水をいふといへりまさる淸水と云心なり　八雲抄云出水なりといふ也
我やとのいさゝ小川のまし水のましてそおもふ君ひとりとは

なき人のかけたにみえすつれなくて心をやれるいさらいの水　小井也いさら小川といふもやり水なとのあさくてなかるゝを云也いつれもすくなき心也

拾遺　なき人の影たに見えぬ遣水の底は涙になかしてそ見し

そのかみの老木はむへも朽ぬらんうへし小松も苔おひにけり　第十一　君こすはかたみにせんとわかふたりうへし松の木君を待けん入丸　いにしへのふるき翁のいはひつゝうへし小松は苔むしにけり入丸集

幸紀伊國見結松

いつれをもかけとそたのむ二葉よりねさしかはせる松のすゑ〳〵

後撰　うちはへて影としたのむみねの松色とる秋の風にもみちな　うつろふな後

神無月の廿日あまりのほとに六條院に行幸あり

康保二年十月廿三日御記曰此日行幸朱雀院辰四刻出紫宸殿自朱雀路到朱雀院入自永寧坊就馬場殿仰左大將源朝臣可令召御馬之狀源朝臣下殿仰畢更參上召左近少將爲光云々進上東階北邊源朝臣仰御馬令馳爲光稱唯退還本陣暫左右近將監以下近衞以上各廿人起陣趁向御厩良久馳御馬向馬駐左右大將下殿執御馬奏參上奏之御馬北上先十列次當年駒各十疋隨次馳了

むまはとのに左右のつかさの御むまひきならへて左右近衞たちそひたるさほう五月のせちにあやめわかれすかよひたりひつしのくたるほとに

御記云乘輿移柏殿自埒東邊行到時未一刻下輿暫入内

御つし所のうかいのおさいむのうかひをめしならへてうをおろさせ給へりちいさきふなゝともくいたり

御厨子所別當一人預膳部瀧口廿人謂鵜飼江人網代等之類職員令云大膳職雜供戸鵜事先代舊事本紀曰獻御饗之時禱白而櫛八玉神化鵜入海底咋出底之埴

いけのいをゝ左の少將とりくら人所のたかかひきたのにかゝりつかふまつれるとり一つかい右のすけさゝけてしん殿のひんかしよりおまへにいてゝみはしの左右にひさをつきてそうすおとゝおほせ事給ててうしてをものにまいる

鷹飼事　康保二年七月廿一日仰藏人頭延光朝臣以左馬助滿仲右近府生多公高右近番長播磨貞任等並爲御鷹飼職員令云主鷹司正一人掌調習鷹犬事御鷹

飼藏人所被官也仍藏人右佐奏之歟供御贄之時一座
人可賜膳部之由仰之
捕鳥奏階下事　延喜廿年十月十八日權中納言藤原
朝臣着小鳥於菊枝立階前奏云船木氏有進御贄
天德四年五月十二日申剋之釣殿召漁者丹波春助下
網捕魚得三(二イ)雉鯉鮒即放入々夜還　應和元年三月卅
日之釣殿覽曳網又令泛舟
をもの　以口女魚不進御(日本紀)
わさとの大樂にはあらて
(賀皇恩)かわうおんといふ物そうする程におほきおと丶の御
おとこの十はかりなるせちにおもしろうまふうちの
御かと御そぬきてたまふおほきおと丶おりてふたう
したまふに　子息預勅祿之時必舞踏定儀也
むらさきの雲にまかへる菊の花濁りなきよの星かと
そ見る　慶雲壽星心歟　南仲記曰膺紫雲之瑞生堯也
雲向於北斗乘南風雲瀧漢之上臻堯母感氣快袖雲愛
之下入堯母之懷妊也文　帝王世記云堯帝生時紫雲覆
於殿上此帝時雖遭九年之洪水人民誇不菜食
ときこそありけれと　秋をおきて時こそありけれ菊
の花うつろふからに色のまされは

やんことなきいゑのことも　良家子也
あをきわかきしらつるはみすわうゑひそめなと　衣
服令義解(制服條)　曰家人奴婢橡黑衣(謂橡櫟木實也以橡染繒云緣橡衣也此條無白橡者文之省略也)又曰(服色條)　凡服色白黃丹紫蘇芳緋紅黃橡纁
蒲萄(謂纁者三染絳也蒲萄者紫色之最淺也)綠紺縹桑黃揩衣蓁柴橡黑(クロツメ)如此之
屬當色以下各兼得服之　僧尼令曰　凡僧尼聽着木
蘭青碧皂黃及壞色等衣(謂木蘭者黃橡也靑碧者碧亦青也壞色者失錯常色漫壞非全者也)
天長格曰太政官符　應貢調緋絁卅疋相博橡絹事
右被大納言正三位兼行左近衛大將民部卿清原眞人
夏野宣奉　勅備諸國所貢調物緋多橡少至于宛用或
致闕乏宜越前國調緋而橡々(人之イ)令貢者宜承知依宣施行
但復舊之事待後符
　天長八年四月廿二日
太政官符　中務民部大藏等省
　應賜番上工衣服生絁事
右被權中納言兼右近衛大將春宮坊大夫藤原朝臣吉
野宣偁奉　勅內匠寮番匠等衣服元來賜橡絁宜改此
例給生絁者三省承和依宣施行
　天長九年十一月廿三日
今案絹訓カトリ　絁訓キヌ

延喜內藏寮式奉諸陵寮條曰蘇芳淡紫淡支子淡紅花淡
白橡淡帛云々又曰御服條　紅花百卅九斤五兩二分搗
橡五斛五斗七升云々已上（石ハ石ニアラズ斛字斛也石ヲ石トツカノコト云石ト云唐人アリケリ毎日酒ヲ一斛ツヽノムホトニイカニモ病ニテソアルト云トテ藥ヲ服スルホトニ腹ノ内ヨリ石一クタリケルヨリシテ酒ヲノムコトナシ故ニ石ヲ石ト云事ハ始ナリ）　順和名云橡（トツルリ俗トクルリト號）
つるはみのきぬきし人はことなしといひし時より
きまほしくおもほゆ
橡衣は四位已上衣也歌の心は橡は上﨟の着する物
なれは此衣着する程の人は科なとにもわたらねは
着たくおほゆるとよめる也
万つるはみのひとへ衣のうらもなくわらんとゆへに
戀わたるかも
万つるはみのときあらひ衣あやしくもことにきまほ
しき此夕哉
万つるはみのあ（むイ）はせのきぬのうらにせは我戀んかも
君かきまさぬ
水原抄云秘說云もろ〳〵のすゝしの物也云々或記（說イ）
云至極の晴の時可然人白橡を着すると見えたり又
云くろきしらつるはみをは出家人着之云々强不然
歟諒闇の時着すると見えたり又云切紫曲とて秘事
舞ありて其時しらつるはみを着也各別の事歟今案大
外記師光記曰建長六年正月廿八日今日余申四品慶
々々仍辰剋着朝衣鶴食袍
青赤白橡事　新儀式曰廿日內宴事前一日藏人所雜
色已下幷所司裝束仁壽殿木工寮立舞臺東庭遣使藏
人所　於親王第示仰明日可參之狀又藏人頭奉仰令廻
御可參文人等當日御仁壽殿赤白橡闕腋御袍幷靴等
云々
昌泰元年十月廿日競狩記曰左方鷹飼裝束赤白橡地
色摺衣右方鷹飼裝束青白橡結立總青色韝青革着青
白橡地色摺衣青卷白袴志遠色上下衣青白橡末濃脛
巾云々又云典藥頭阿保朝臣常世着故弊青白橡衣隨
御藥辛櫃云々
延喜八年五月十一日御記云賜大使裴璆別貢答物其
物御衣一襲青白橡表袍一藍下重具如例（橡木也是ニテ染タル袍也コキ色ハ黑ツルハミアサキハ白ツルハミナリキツルハミハムクラチナリ法師ナトキル也アラツルハミハヤマハト色也黑色ト紫ト云々）
天喜六年十一月五節雜事曰舞姬裝束寅日青白橡袷
襠長袖一領　康平三年十一月雜事寅日同裝束青白
橡唐衣加袷襠
うつほの物語云三月中の十日はかりにふちゐの宮

に藤花の賀し給君たちいて給御さうそくはわきあけのあをきしらつるはみのあやのうへのきぬすわうのしたかさねれうのうへのはかまらてんのたちからくみのをつけてたてまつりて云々赤白橡（内宴一上）卿服之可然（時一上服）

李部王記曰天暦元年正月廿三日内宴云々是日右大（小野宮）臣着赤白橡袍式部卿親王（敦實）咎之上代諸卿或雖着之近年無同御服者太政大臣時々服攝政之重異於他人歟主同服所未案之

（野宮）小左記云康保四年二月廿一日内宴左亟相着赤白異袍

小右記云正暦四年正月廿二（三イ）日内宴攝政着赤色袍先例第一人着之若依臈次左大臣可着　寛弘二年三月八日中宮大原野行啓左大臣着赤白橡袍櫻打下襲

舍人記同四年四月十七日齋院御禊前駈右兵衛佐道雅（禁）色人着赤色織物袍

承暦三年十一月廿七日同行啓關白着赤色袍蘇芳打下襲（裏青）　承保三年十月廿四日大井河行幸關白着赤色袍黄色下襲

（小右記）寛治二年正月十九日朝覲行幸攝政着赤色織物縫腋袍　天仁二年九月六日高陽院御幸競馬攝政着赤色袍　保元三年正月内宴關白着赤色綾袍彼時記曰關白問曰予年六十餘今度内宴着赤色袍頗見苦歟知足院命曰件袍不可依高年如此之時着赤色闕腋袍他公卿着青色闕腋は人のつきの時事なり不可依老若者

已上松殿關白記

案之尋常黒衣袍橡ニテ染ル故ニ袍ノ惣名ヲ橡衣ト號スル歟仍青織物赤織物袍ヲモ青ツルハミト云歟白字ヲカキタルニ文ノアル心也織物ニシロキ糸ツルハミ色ノ糸又可相交條勿論歟赤色御袍モ地ハ黄櫨染ノ色ニテ文ハ黒色橡也又麹塵袍ニモ黒白糸ヤシハル歟タトヘハアカクシロキ色也ノ由歟

一説云令ニ橡衣ニハ白袴アルヘシト見タリ仍橡ニ白袴ヲ着タルヲシラツルハミト云歟ト云々然而猶今案ノ義歟如何

或人云アカシロヲシロノ橡ト可讀云々如何

れいのみつからにひたいはかりのけしきを見せてみしかきものともをほのかにまひつゝ　舞童體也

ひのくるゝもいとおしけなり　惜也

うへの御あそひはしまりてふんのつかさの御ことゝ

もめす　圖書寮事也舊記ニ以書司女官召樂器之由見
たり累代の樂器を納らるゝ所也
ものゝけうせちなるほとに　輿　切
うたほうしのかはらぬこゑも　宇陀法師　和琴名也
以前作之先一條院之御時內裏燒亡之時燒失云々　私云宇多法師ハ朽木ニテ作タル和琴歟御タナラシト云ハ御手ナラシ也
新儀式四月句儀
若有奏絃歌者近衞府音樂訖內侍奉仰出御屛風南邊召大臣々々起座跪候御屛風南頭即勅可召堪管絃親王公卿等大臣奉仰退歸召出居令置草墪於御帳東面一許丈大臣先進着草墪次依召移着大臣召書司々々一人執和琴出東障子戶獻之謂宇陀法師　若奏絲竹或召殿上侍臣能歌者預之王卿遞勸盃數曲之後奏見參
小野宮右大臣記長保二年十一月十五日新宮之後出御南殿同右大臣以下管絃人着御前草墪次召書司々々女孀取宇陀法師出自御障子戶置草墪前又絲竹次々取出皆書司女官役二人見前例或書司女官取出和琴已後次々絲竹近衞次將等執之賜　或記曰延久四年宇治殿命云於南殿御遊之時召宇陀法師和琴　其詞云御タナラシ此詞有故云々
師說云宇陀の法師とよむへし

うらめしけにそおほしたる也　愴恨シテ遂御　朱雀院
我御代にかゝる行幸なきを恨おほしめすなり
きこえしらせ給ふ　冷泉院御自歎の心歟
さうかの殿上人　唱歌　新儀式に見えたり

河海抄巻第十三

正六位上物語博士源惟良撰

第二十　若菜上

巻名　小松原末の齢に引れてや野への若菜も年をつむへき　一名はこ鳥み山木にねくらさたむるはこ鳥の歌故なり當流不用之

一部内立上下事　唐書例　禮記　曲禮上下（第一）　檀弓（第二第三）上下　尚書　太甲　盤庚　説命　泰誓有上中下

周禮　天官　冢宰以下の巻々に上下あり　漢書高紀上高紀下　後漢書列傳第二十巻上下

和語例　日本紀第一第二神代上下　うつほの物語櫻の巻又第五ふきあけの上ふきあけの下十二國讓の上十三同巻下十四さくらの上十五同下和漢の書籍上下をわかつ例如此其中に作者はしめより上下をわけたるもあり後人の追て立たるもあ歟る禮記の曲禮上下は後人分之檀弓上下は記者分之此故に曲禮第一の巻の中に上下を立檀弓は第二を上とし第三を下としたるなり所詮上下を分くる本意は一巻とすれは巻軸おほき故也無別義歟禮記第三正義云實鄭目錄云義同前篇以簡策繁多故分上下二巻云々又第二十巻に上下を分は後漢書列傳を摸する歟

朱雀院の御門ありしみゆきのゝち　藤裏葉に六條院に行幸ありし事なり

あつしくおはします　篤運當遷（アツイタマフ）　伊弉諾尊

藤壺ときこえしはせんたいの源氏にそおはしける

皇女賜源氏姓例　嵯峨天皇々女貞姫（正四位下）潔姫（正三位）全姫（尚侍従二位）善姫以上四人弘仁五年五月八日勅賜源朝臣姓醍醐天皇時女御（正三位）源朝臣和子（承香殿光孝天皇々女）醍醐天皇々女源朝臣兼子源朝臣嚴子宇多院皇女一人賜源姓

たれをたのむかけにて　わひ人のわきて立よる木の下はたのむ陰なく紅葉ちりけり（古今）

西山なる御寺つくりいてゝ　李部王記云天暦三年四月十五日太上天皇遷御仁和寺院康子内親王所領なり去三月十日御出家

さらぬ別にもはたしなりぬへかりける　老ぬれはさらぬ別のありといへはいよ／＼みまくほしき君哉（伊勢物語）

たゝよひさすらへん事

さかしき人といへと身の上になりぬれはことたかひ

て心うこきかならすそのむくひみえゆかめることとな
んいにしへたにおほかりける　以恨報怨事不可勝計
このみちのやみには　人の親の心はやみにあらねと（古今）
も子をおもふ道にまよひぬるかな
この秋の行幸の丶ち　藤裏葉巻に六條院へ行幸あり
しは神な月廿日あまりとありて此秋とある如何
としまかりいり侍て　年よりてと云ふ心也
故院の御ゆいこんのことも　如御遺言也
（六條院）廿日うちには納言にもならすなりにきよし
六條院紅葉賀巻任參議廿歟葵巻兼大將廿一貞信公昌
泰三年三月任參議廿一安和二年三月廿六日
つき〳〵のこのおほえのまさるなめり　次々子
そのあたけこそ　あたなる氣也
すこしもよつきてあらせんとおもはん女こもたらは
かの人のあたりにこそはふれはらせまほしけれ
觸也　うつほの物語云兵部卿のみこはらともいは
すすこしみところある人也まつうちみるにかの君
を女になしてもたらまほしくさならすはわれもた
まほしくなんみゆるましてすこしなさけあらん女
の心とめてかのみこのいひたはふれ人にはいか丶

はさのみしもあらんとみれはことはりなり
をんなのあさむかれんは　嗤せられん也
たちならひてをし給ことは　周易云君以類族辨物　毛詩云窈
いかにたくひたる　匹オス
窕淑女君子好仇注曰窈窕幽閒也淑善也仇匹也后妃
關雎之德是幽閒貞專之善女宜爲君子之好逑也
しか〳〵なん　云々（シカ〳〵）日本紀
むかしは人の心たひらかにて
平 切韻云正也利也易也
なきおやのおりてをふせ　かさせとも老もかくれぬ
このはるを花のおもてはふせつへらなる古今
心つからのしのひあさしいてたるなん女の身にはま
すことなききすとおほゆる　媒妁 媒妁無シテトツクナ野合ト云イヤシキ事也
孟子曰女子生而願ニ爲レ之有レ家父母之心人皆有レ之
不レ待ニ父母之命媒妁之言一鑽ニ穴隙一相窺踰レ牆相從
則父母國人皆賤レ之　寄レ言擬少人家女愼勿ニ將レ身
輕許レ人 白氏文集井底引銀瓶　比ニ婬奔一也
いゑつかさ　家司
むかしもかやうなるえらひにはなにことも人にこと
なるおほえあるによりてこそありけれ　正三位源潔（キヨ）
姫母當麻氏嵯峨天皇之女也天皇選聟未得其人太政大

臣正一位藤原朝臣良房初參之時天皇悦其風操超倫殊勅嫁之　一品康子内親王延喜皇女配九條右丞相生閑院太政大臣公季

あやしくうち〳〵にの給はする御さゝめきことゝもの

私語琵琶引　長恨歌

今さらにたちかへりいかに物をやおもはせきこえん

かねてよりつらさを我にならはせはにはかにものをおもはするかな

やむことなきまつの人に　先也さきたちておはします女御たちの事なり

坊のはしめの女御にていきまき給しかとも　いきまきはいかれる姿也

すさく院には心ちなをそこたるさまにもおはしまさねは　李部王記云天暦六年八月廿七日太上皇御乳母加賀命婦告送云院御惱彌重諸人申遷宮可宜之由去月一日參二條院依御物忌立西門外案内令去廿七日八九日御惱危急卅日晩以後頗平復云々六日從今夜上皇御惱漸篤十三日此曉上皇悶絶良久云々入夜院近臣告御惱重由亥刻重參同十四日落餝入道

御もきの事　同記云天暦六年十一月廿八日昌子内親王初服袴主上親結腰給其膳物從御厨子所辨備之米漆臺四本以銀器備膳同小臺二本以銀土器代備菓子親王家獻鳥犀御帶一腰書法四卷朱雀院幷殿上男女官饗其侍臣十餘人召弘徽殿南廊給酒肴中宮職給祿

御しつらひかへとのゝにしおもてに　朱雀院中有柏梁殿柏殿者皇后御在所也見九條右丞相暦記

東宮故事曰後宮有素柏局床也三月三日侍朱雀院柏殿惜殘春各分一字應　太上法皇製探得濁字幷序菅丞相

三月三日宴于池上蓋思古之曲水也構柏梁以擬蘭亭問花林而栽拱木皆是好閑放樂無爲詠風月重時節之所致之義也請各分一字將惜殘春云尓謹序詩畧之

御記曰康保二年十月廿三日己未此日行幸朱雀院入自永寧坊就馬場殿　乘輿移柏殿檢延喜聖代之例毎秋至イ幸此院而柏殿燒亡之後都無此事而去夏新構柏殿望冬則作了故設今日宴也

李部王記云天暦九年七月十日太上皇遷御朱雀院扈從公卿及非侍從兩馬助等給座柏殿西對

もろこしのきさきのかさりをおほしやりて　嵯峨天皇弘仁八年男女衣服用唐法

御うしゆひにはおほきおとゝ　太后御記云承平三年
八月廿七日女宮御もたてまつるいぬ二にて御もい
こしおとゝゆひたてまつり給ひぬ　李部王記云承
平三年八月廿七日庚子内親王初着裳戌一點小一條
大臣親王外舅結御裳腰滋野内侍理髪尚侍結本結即叙三
品　隱蓑物語云おほゐ殿の御はかまの腰ゆひ給し
にはと所の宮たちえならぬ御よそひを紫檀い螺鈿
のころもはこ一よろひに入てからのきをいれかた
ひらにして世にたかきおひとも宮々のつたへ給へ
るをたてまつり給へり
くら人ところおさめとのゝから物とも　藏人所納殿
共納御物處也
そんしやの大臣の御ひきいて物　着裳の腰ゆひをも
尊者と號歟可勘
さしなから昔を今につたふれは玉の小櫛そ神さひに
ける　秋好中宮齋宮にてくたり給し時えならぬ御よ
そひとも御くしのはこなと有し事也
さしつきにみる物にもか萬代をつけの小櫛の神さふ
るまて　伊勢物語蘆のやのなたのしほ焼いとまなみつけの小
櫛もさゝすきにけり

つとさふらひ給ひて　集日本紀
山のさすよりはしめて御いむことのあさり三人さふ
らひてはらふく
元慶三年五月八日丁酉是夜太上天皇落餝入道
李部記云天暦六年三月十四日亥時朱雀太上天皇落餝入
道延暦寺座主權大僧都延昌爲和上法性寺座主權
律師鎮朝爲親教師剃御髪道照阿闍梨勢祐已講爲師
唄　案之受戒和上猶摩阿闍梨教授阿闍梨とてある
歟
ゆすりみちて　動也
御たうはりのみふなとこそみなおなしことおりゐの
御かとゝひとしくさたまり給へれとまことの太上天
皇のきしきにはうけはり給はす　太上天皇封千五百
戸二千勅旨田千町
けふかあすかとおほえ侍りつゝ　伊勢物語我か世をは今日か
あすかと待かひの涙の瀧といつれたかけん　朝忠集人の
世の老をはてにしせましかはけふかあすかとなけ
かさらまし
すゑのよのまうけのきみと　儲君
いにしへのためしをきゝ侍にも世をたもつさかりの
みこにたに人をえらひてさるさまのことをし給へる

たくひおほかりけり　忠仁公事在端
またとりかへすへきにもあらぬ月日の過ゆけは　日
月流邁歳不我與毛詩日月逝矣歳不我與論語
おほいまうち君にせんせられて　先せられて也
御あるしの事さうし精進の物にて　内膳自西階供御膳其
膳供精進物延喜御記あるしはさき〱のことく飯の
事也或説あるしの院法躰御精進なれは御あるしの
ことく精進と云歟今案設飯也
院の御まへにせんかうのかけはんにて御はちなと
棧香タカツキノヤツナル物也　御鉢
すへてよの人のくちといふものなんたかいひいつる
事ともなくをのつから人のなからひうちほ方ゝゆ忠かみ
おもはすなる事いてくる物なめるを
魯平公將レ出嬖人臧倉者請曰他日君出則必命二有司
所一レ之今乘輿已駕矣有司未レ知レ所レ之敢請公曰將レ
見二孟子一曰何哉君所レ爲輕レ身以先二於匹夫一者以
爲レ賢乎禮義由二賢者一出而孟子之後喪踰二前喪一君
無レ見焉公曰諾孟子
人中を人そさくなるゆめよきみ人の中てときゝた
つなきみ

うけはしけなる　呪咀なりのろふなり　伊勢物語昔
宮の内にてあるこたちのつほねのまへをわたりけ
るになにのあたにかおもひけんよしやくさはよな
らんさかみむといふおとこ　つみもなき人をうけ
へは忘草をのかうへにそおふと云なる
ことしそよそちになり給けれは　御賀の事　昭宣公
四十賀歌有古今集貞觀十四年也貞辰親王四十賀同
前此外其例多　御記云延喜十三年十月十四日是日
於西方賜尚侍藤原朝臣四十筭賀未刻撤西庇障子渡
殿莚等西庇自南四間御座西南　第五間鋪尚侍座南西
みなかへさひ申給　復論語カヘサフ
正月廿三日子の日なるに左大將との下臈ゝ北方若菜まい
り給　御記云御賀事　延長二年正月廿一日右大將藤
原朝臣來自院有仰云々近聞寂然甲子日朝摘若菜奉
入之廿五日甲子此日自院賜子日之宴云々
内宴記曰弘仁四年始有内宴唐太宗之舊風也正月廿イ十
二三日間イ無有二子日一者件日行レ之藏人或清涼記等廿
日注曰廿一二三日之間若有二子日一便用レ之倚二松
樹一以摩レ腰習二風霜之難一レ犯和レ菜羹而啜レ口期二氣
味之克調一菅丞相扈從雲林院序

十二種若菜　若菜　薊　苣　芹　蕨　薺　葵　蓬
水蓼　水雲　芝　菘　此中菘はさま〳〵の說あり白河院に松を奉りける人あり僻事なりと仰ありけり大外記師遠は小大根のよしを申ける其說を用られけるよし舊記にみゆ　七種　薺　蘩蔞　芹
菁　御形　須々代　佛座　四十よりはしめて數の滿を賀する也春の初若菜をつみて是を使にて祝也古今にも仁和御門人にわかな給ける御歌あり是も賀を給ける也

みなみのおとゝのにしのはなちいてにおましよそふ
放出廂の名也云々　或說云出居事也

かへしろいしなとはたてすちしき四十枚御しとねけうそく　壁代又防壁　地敷キ也　茵　脇息
此祭紫上二條院にて御賀にも倚子を立たりと見えたり是は略したる義歟　地鋪　御記云延喜十六年御賀當御座南庇鋪地敷二枚其上鋪四幅帛備蹤踏所　茵事同
御記行幸亭子院　西向東宮座當同庇第一間皆用土敷茵
脇息事同御記云立蒔繪大床子三脚其上立沈香狹息一脚

らてんの御つし二よろひに御ころもはこよつすへて
螺鈿　延喜六年御賀御記云母屋前立二尺塵蒔繪御厨子四基二基納御法服二基納御法具　同十六年御記云立三尺蒔繪御厨子各納御法服冬夏各五具

かうこくすりのはこ御すゝりゆするつきかゝけのはこ
寢殿裝束　二階一脚南上置火取湯汁坏有臺中階唾壺打亂筥下置硯筥一合次置唐櫛匣次鏡臺
一脚北置厨子二脚東置櫛匣一双其下置香壺匣西置楾子匣其下階楾匣

御かさしのたいにはちんしたんをつくりめつらしきあやめをつくしおなしきかねをも　挿頭臺
一切の物にもんのあるをはあやめと云也定家卿の說也是も木のまきめなとの事也あやすきなとも云也延長二年正月廿五日御賀御記云南廂自東第四間立挿頭机一脚有銀山銀水金銀花樹等

ものゝみやひふかく　閑麗

大將のかゝるついてにたに御らんせさせんとてふたり同しやうにふりわけかみのなに心なき　くらへこしふり分かみもかた過ぬ君ならすしてたれかあくへき
鬚黑大將の眞木柱の同胞の男子二人十二十一歲な

り是をふりわけかみといふ歟
人よりことにかそへとり給けるけふのねのひ　上東(千載)
門院より六十賀をこなひ給ける時よみ侍ける(法性寺入)
道前太政大臣　かそへしる人なかりせは奥山の谷の松とや
年をつまゝし
小松原すゑのよはひにひかれてや野邊の若菜もとし
をつむへき　春日野の若菜ならねと君かため年の數
をもつまむとそおもふ
おりたちてさうやくし給てものよそえたおりひつ物
よそち　雜役　籠物四十枝　折櫃物
御かはらけくたりわかなの御あつ物まいる　延喜十
六年御賀御記云請中務卿親王上野太守親王太宰帥
親王給酒于時左衛門督藤原朝臣奉有命召杯屬給即
進杯飮訖强舞　延長御記曰釆女調和若菜羹供進釆
女又以供進餘羹給侍臣盛中垸置中盤　うつはの物
語云しろかねのひさけに若菜のあつものひとなへ
おほんつきとも　御器
朱雀院の御くすりの事　御藥事　御惱事也
かく人なとはめさす　延喜十三年尙侍賀御記云命侍
臣令奏絃歌自彈和琴中務卿親王彈琵琶克明親王彈
琴云々不召樂人事此等例歟
わこんはかのおとゝのたい一にひし給ける御事なり
秘也
かたくいなふるを　固辭也
上すのつきといひなから　繼嗣
心にまかせてたゝかきあはせたるすかゝきに　和琴
和名云日本琴(ヤマトコト)
萬葉集俗用和琴二字也末止古止譜序夫倭琴者依爲
本朝之歌器不載漢字之書籍上始自神皇下至于人倫
之今公宴之庭私遊之時無不相携但云調子云拍子皆
習音曲不傳案譜云々又嵯峨天皇別盡此曲傳之尙侍
廣井女王云々後頗中絕承和聖主深好神琴召慈賀善
門於階下習御其曲左大臣源信卿同習其曲于時相坂
邊有蟬歌翁尤長此道仍遣右近少將良峰宗貞皆令傳
其手又貞觀聖皇召藤原盤井等習御彼時貞保親王蒙
勅命頗作其譜也延喜聖主極絃管之妙其中和琴尤長
更傳賜左兵衛佐藤敦忠朝臣習得其朝臣薨後天慶聖主
勅命云詣式部卿敦實親王許可習兼又左大臣雅信卿
爲彼親王家督深傳此曲以降大納言時仲參河守經相
越前守經宗筑前守兼俊兵庫頭邦家雅樂頭範基等朝

相替相襲備々不絶矣已上右兵衛督高遠進公家　或書云和琴の濫觴は弓六張をもちてはきならしてこれを神樂にもちゐるを後人琴につくりうつせりと申つたへたるを上總國の濟物のふるきしるし文に弓六張とかきて注に御神樂料とかけりとそいみしき事也鴨長明抄

ちゝおとゝはことのをもいとゆるにはりていたうくたしてしらへひゝきおほくあはせてそかきあらし給

これはいとあらゝかにのはふねのなつかしく　いたうくたしてとは下の聲にてはゝく也のほるねとは上の音にてたかき也云々

この御ことはきやうてんの御物にてたいくにたい一の名ありし御ことを　宜陽殿　西宮抄云納殿累代御物有宜陽殿恒例御物納藏人所綾綺殿紙御屛風納仁壽殿以藏人雜色爲預

さうかの人々みはしにめして　御記云延喜十六年三月御賀試樂中務卿親王太宰帥親王在階下唱歌侍臣五六人又唱歌

かへりこゑになる　反音律也

あをやきあそひ給　青柳催馬樂律　長生樂序拍子十二

とし月のゆくゑもしらすかほなるを　年月の行衛もしらぬ山かつはたきのをとにや春を知らむ拾遺

内に參り給人々のこはうをまねひて　源氏院號以後なれは入内の義に准せらるゝ歟　又上東門院事也

御車よせたる所に院わたり給ておろしたてまつり給なともれいにはたかひたる事ともなり　臣下の禮は妻を迎時は身つから車を寄る禮也云々院中の義には此義あるへからさる歟然而六條院たゝ人のことくふるまひて卑下し給由歟

つらつえ　支頤

めにちかくうつれはかはる世中を行すゑとをくたのみけるかな　貫之集云女のもとよりをこせたりける

秋萩の下葉につけてめにちかくよそなる人の心をそみる

わか身までの事はうちをきて　六帖いかにかとおもふ心のあるときは我身をゝきて人そかなしき

あけくれの空にゆきのひかりみえて　明暮の空にこそ我はまとひぬるおもふ心のゆかんまにく

やみはあやなしと　春の夜のやみはあやなし梅の花色こそみえねかやはかくるゝ

なをのこれる雪としのひやかにくちすさひ給つゝ

子城陰處猶殘雪衙鼓聲前未有塵（慶樓曉望　白樂天）
なかみちをへたつるまてはともまつ雪の　（後撰）ふりそめ
てともまつ雪はむはたまのわかくろかみのかはる
なりけり
袖こそにほへと　（古今）折つれは袖こそにほへ梅の花あり
とやこゝに鶯のなく
さくらにうつしては　（拾遺）梅かゝを櫻の花に匂はせて柳
か枝にさかせてしかな
なとてかくおいらかにおほしたて給ひけん　毎人老
らかに心えたる歟さにはわらすさきのことはにも
女三宮をはらこのおもきらいせぬ心ちしてなとあ
りをさ〳〵しくものはかなしときこえたりこれも
おひれたるよしをねをひれてなといふやうなり
えみはなたすみえ給　笑也つねにうちゑみ給歟
むらさきのうへにも御せうそこあり　紫上號自此始
そむきにし此世に殘る心こそ入山道のほたしなりけ
れ　（古今）世のうきめみえぬ山ちへいらんには思ふ人こそ
ほたしなりけれ
二條の宮　朧月夜倘侍在此所　太政大臣舊宅也

心のとはんこそいとはつかしかるへけれと　（後撰）なき名
そと人にはいひてありぬへし心のとはゝいかゝこ
たへん
たちにしわかないまさらに　（古今）村鳥の立にし我名いま
更にことなしふともしるしあらめや
このしのたのもりをみちのしるへにて　和泉守事也
和泉國名所なれは也
たまもにあそふをしのこゑ〳〵なと　（後撰）春の池の玉も
にあそふをし鳥のあしのいとなき戀もするかな
平ちうかまねならねとまとになみたもろに　平仲定
文女にことに心さしあるよしをみえんとて硯の瓶
に水を入てもちて目をぬらしてなくまねをしける
といへり
泪のみせきとめかたきし水にてゆきあふみちははや
くたえにき　（後撰）もる人のありとはきけとあふさかの關
もとゝめぬわか涙かな
しつみしもわすれぬものをこりすまに身もなけつへ
き宿の藤浪　（古今）こりすまに又もなき名は立ぬへし人に
くからぬ世にしすまへは　さほさせとふかさもし
らぬふちなれは色をは人もしらしとそおもふ貫之

藤を淵に寄たる例也
くさむることにしたかふ心ならねは　（雲風集）戀しきにみもなけつへしな
せきもりのかたからぬたゆみにや　（古今）人しれぬわか通
ちの關守はよひ〳〵ことにうちもねなゝん
ありしよりけに　（伊勢物語）忘るらんと思ふ心のうたかひにあ
りしよりけに物そかなしき
むかしをいまにあらためくはへ給ほと　（伊行尺）しつやしつ
しつのをたまきくりかへしむかしをいまになすよ
しもかな（伊勢物語）
身にちかく秋やきぬらんみるまゝに青葉の山もうつ
ろひにけり　水鳥の青葉の色もかはらぬを萩の下は
そけしきことなる
しら露はうへしなりけり水鳥のあをはのやまの色
つくみれは
青葉山童蒙抄といふ物には入若狹國名所清輔抄に
は陸奥國或又尾張國としるせり但是は夏ふかく茂
りたる青葉の山と云也夢の浮橋巻にもみえたり六
帖歌も其心歟
東宮の御方はしちの御はゝよりも　東宮の母女御の
心也古今に二條后を春宮の御休所とあるも春宮の
母御休息所也
おなしかさしを尋きこゆれはかたしけなけれと　（後撰）我
宿とたのむ吉野に君しいらは同しかさしをさしこ
そはせめ　女三宮母儀源氏宮（先帝皇女）は紫上の姨なれ
なり（松風の巻にみゆ）
神無月にたいのうへ院の御賀にさかの御たうにてや
くしほとけくやうしたてまつり給　延喜十三年十月
十四日是日出西方賜尚侍藤原朝臣四十算賀　李部
王記云延長四年九月廿八日京極御息所奉仕法皇六
十賀　延長五年二月廿五日彈正尹親王爲民部卿六
十賀出桃園宮設法會奉造藥師佛像奉寫藥師金剛
壽命般若心經　延長七年九月十七日左大臣諸息四
人共於法性寺設五十賀齋會其儀本堂毗盧遮那像前
安置銀藥師如來像　天暦三年三月十五日右兵衛督
師氏卿爲大相公（貞信公）七十賀於法性寺尊勝堂修法
會圖七佛藥師像寫金字壽命經七十巻已上李部王
記
ほとけ經はこちすのとゝのへ　帙簀
さいそうわうきやうこんかうはんにやすみやう經な
と　最勝王經（十巻題目金光明最勝王經）　金剛般若經（一巻題目金剛般若波羅蜜經）　壽

命經一卷題目佛說一切如來金剛壽命陀羅尼經
廿三日を御としみの日にて　御賀試樂日也云々御としみと云々一說云御年の滿たるを拜見の心也
をきもの丶つくゑふたつからのちのすそこのおほひ
置物机　唐羅末濃覆
ちんのくゑそく　沉花足也
うしろの御ひやうふ四帖は式部卿の宮なんせさせ給へるいみしくつくしてれいのしきのゑなれと　古今云内侍のかみの滿子内大臣高藤女右大將藤原朝臣定國の四十賀しける時に四季のゑかけるうしろの屛風にかきたりける歌と云々
舞臺の左右にかく人のひらはりうちて　平張也
ひつしの時はかりにかく人まいる　御記云延喜十六年三月五日試樂吾即床子時未一尅也樂行事參議保忠朝臣等率樂人參着座
まむさいらくわうしやうなとまひて　萬歲樂　拍子二十新樂中曲　長秋宮橫笛譜云本是舞七帖而今世舞五帖舞出入用調子隋煬帝作
こまのらんしやうしてらくそんのまいいてたるほと
落蹲　南宮譜云昔善舞此曲者有伴田麿古樂小曲

御記延喜六年十二月廿日御賀　先奏萬歲樂次蘇合香次皇麞
いりあやを　舞有取綾平故曰入綾舞入也
きたのまん所のへたう　今時攝政の室家を北政所と號する也
是は已に院號以後なり但日來執政の北政所別當をおかれしをいまもうちたえ院中の義をふるまひ給はぬによりてもとのことくにておかれたるも也院號以後も猶おと丶といへり此心歟但紫上うるはしく本體のよしはみえさるにや寢殿をもさるやうありてふたけ給はすとみえたり然は北政所の號如何猶可加了見
千年をかねてあそふつるのけころもに　催馬樂席田
むしろ田の〳〵いつぬき川にやすむつるのいつぬきかはにやすむつるの一段　すむつるの〳〵千年をかねてそあそひあへるちとせをかねてそあそひあへる二段
みゆきなともあるへくおほしをきてけれと世中のわつらひなむさらにせさせ給ましくなんといなひ申給
吾君在レ位已五載何不三一幸二于其中一西去二都門一幾多地吾君不レ遊有二深意一一人出兮不三容易一六宮從兮

百司備八十一車千萬騎朝有ニ宴飲一暮有レ賜中人之
產數百家未レ足レ充ニ君一日費一吾君之來兮爲ニ一身一
君之不レ來兮爲ニ萬人一 白氏文集 驪宮高
於仁和寺設法會
しはすの廿日あまりの程に　御記云延喜十六年十二
月廿一日中務卿親王奉爲院御筭賀奉寫壽命經此日
ならの京の七大寺にみすきやうぬの四千たんそのち
かきみやこの四十寺にきぬ四百疋
李部王記云延長四年十二月十九日內裏奉修六條院
御六十賀誦經平城七大寺合布六千端進京七寺絹六
百疋則於朱雀獄賑給初欲依例奉仕御賀然自彼院有
御消息停止如故是而已耳
御記延長四年十二月十九日壬寅此日奉爲太上天皇
息災增寶壽於京邊七ヶ寺南京七大寺 東大元興大安藥師西大興福法隆寺
御誦經事其布施用絹六百疋布六千端云々貞觀十三
年遣使於邊京四十ヶ寺平城四十ヶ寺修轉經功德錢
寺別有數賀皇太后四十筭也
四十の賀といふことはさき／＼をきゝ侍るにのこりの
よはひ久しきためしなんすくなかりけるを
仁明天皇四十御賀四十一崩天曆四十二崩東三條院

四十崩右大將定國延喜六年行ニ四十賀一同年七月薨
是等事歟
のちにたゝん事を　五十賀事也
大饗になすらへてみこたちには女のさうぞくひさん
きの四位まうち君たちなとたゝの殿上人にはしろき
ほそなか　六條院の御賀を中宮のせさせ給也大饗と
は中宮の饗になすらへられたる歟正月二日二宮の
大饗なとの事歟　太后御說云承平四年十二月九日
御賀みこたちかんたちめには女のよそひ宰相には
さくら色のほそなるか
名たかきおひ　高名錄云韓狩　落花形　垂無生角也
鵝形　雲形　鶴通天　鴛通天
むかし物語にもものえさせたるをかしてき事にはか
そへつゝけためれ　孝經曰明君之政設利以致之又曰
愛利俱行衆乃悅　史記曰堯乃賜舜絺衣與琴爲築倉
廩予牛羊 五帝本紀 又曰帝紂乃囚西伯於備里閎夭之徒患
之乃求有莘氏美女驪戎之文馬有熊九駟及他奇怪
物因殷嬖臣費仲而獻之紂々大說曰此一物足以釋西
伯況其多乎 周本紀
孟子曰大夫有賜於士不得受於其家則往拜其門陽貨

矙孔子之亡也而饋孔子蒸豚孔子亦矙其亡也而往拜
之
そのころの右大將やまひしてし丶給けるを　大納言
安倍安仁天安二年十一月十七日依病辭右大將同三
年四月廿三日薨　大納言藤原道明延喜十九年八月
十三日依不上十月三日辭右大將勅授帶劍同廿年六
月十七日薨
頭中將せんしうけ給て　新儀式云藏人頭奉仰先書出
可造仕御調度等用途物召內藏寮穀倉院天皇奉賀上
皇御筭儀也中宮も此儀をうつさる丶歟
左右のおと丶大納言二人中納言三人宰相五人　公卿
正員太政大臣左右大臣各一人大納言二人中納言三
人參議八人合十六人見寛平遺誡
ところ〱のきやう　所々饗
さかりのしうとくに　宿德
御屏風四帖にうちの御手かゝせ給へるからのあやの
うすたんにしたゑのさまなと
新儀式云註母屋四間副北障子立淳和御手跡御屏風
三帖御張東立同御屏風一帖御賀天皇御筭所
延長七年三月廿八日太后御記云おと丶の御賀を賓
賴の中將つかうまつれり四尺の御屏風二よろひ御
てをうへにかゝせたてまつらせ給拾遺集右大將定
國四十賀に內より屏風調してたまひける云々　絹
屏風を唐綾にてはりたる歟
或云うすたんはうすたみなり
をきもの丶御つしひき物ふき物なと
清凉殿置物御厨子置樣孝道記
第一階無置物第二階右笛筥左琵琶筥第三階箏
第四階和琴
打物をはみなみにをくべし　先羯鼓
次大鼓次鉦鼓

拍子　篳篥　太笛　箏　横笛　拍子

六ゑふの官人　六衛府左右近衛府左右兵衛府左右衛門府
延喜十六年三月七日御賀御記曰左右少將諸衛佐馬
寮助等引御馬十疋奏覽
延長二年正月廿五日御賀御記云左右大臣起座事院
御馬被奉入仰令早牽大臣稱唯下殿仰之即分御馬卌
疋入自日花門時酉一尅
かわうをん　賀皇恩大食調曲拍子十六可彈五反合拍子八十新樂南宮譜云古樂中曲舞出入用調子
延喜六年幷同十六年御賀共賀皇恩万歲樂有出御記
に見えたり
御をくり物にすくれたる和琴一このみ旃こまのふえ

そへてしたんのはこ一よろひにからのほんともなと

唐手本也　梁書ニ曰西湯王大鈞字仁傳年七歳高祖重之賜王義之書一巻

延喜十六年御賀之時内の御引出物に嵯峨御手跡一鑿琴和琴各一面一枝云々又延長御賀に横笛琴箏和琴次第取一物各有其袋笛着松枝同御引出物也見御記　太后御記承平四年十二月九日御賀おとゝとくまかて給ひぬ又をくり物沈のはこ一よろひいれたりせむたいの御てのまんようしう今一には本五まきやまとことと一云々

御馬共むかへとりて右のつかさ共駒のかくしてのゝしる　延長二年正月廿五日御賀御記御馬引出之後主殿擧炬雅樂寮入自日花月花兩門東兩相立承明門前時酉上刻也　遞奏舞曲唐高麗各二曲　夕霧右大將なれは右馬寮の御監也

ところをかへて　榮花物語上東門院おなしやうなれと所を替へさせ給

よしめきそして　存して也

昔のよにもかやうなるふる人はつみゆるされてなん侍けると　皤々國老乃父乃兄文選　名例律曰年七十以上十六以下犯流罪以下收贖八十以上十歳以下犯反逆殺人應死者上請九十以上七歳以下雖有死罪不加刑疏云老少之人皆少智力但是被教作罪皆以所犯之罪坐所教令者

おとこみこにさへおはすれは　明石中宮今上后東宮并六條院御女母入道播磨守女　皇太后宮胤子醍醐天皇御母　内大臣高藤女母交野大領彌益女

しろき御さうそくし給て　御産當日上下着ニ白装束一九夜改ニ白装束一復ニ尋常一也九條右丞相記曰女房等各着ニ白裳唐衣一冷泉院降誕

御むかへゆにおりたち給へるも　勘御湯殿日時以後七箇日毎日在之讀書紀傳明法　鳴絃以下在之同記云少將伊尹之乳母大和奉ニ仕御湯殿一依此女能知ニ此道一也故平中納言室菅根朝臣奉ニ仕御對湯一

七日の夜内より御うふやしなひのことありすさくいんのかく世をすておはしますかはりにやくら人ところよりとうのへんせんしうけ給てめつらかなるさまにつかうまつれりろくのきぬなと

新儀式云皇后有御産事先遣中使被奉問之七夜仰内藏寮令設甕餼有賜祿或被責院設也食寺也　女御更衣産所七夜遣

使賜物九條右丞相記戌剋藏人頭內藏頭有相朝臣
爲勅使有給物縑廿疋絹八十疋白三十赤五十綿二百屯調布
三百端件給物頗似過差
朱雀院　中宮內裏藏人所式部卿重明親王左大臣右
大臣大納言藤原朝臣顯忠左衞門督源朝臣高明大夫
藤原朝臣師尹治部卿源朝臣兼明亮源朝臣雅信權亮
藤原朝臣有相一品康子內親王　女御內記云同御時
令奏

まことのおほきみは　祖母君

おとゝのきみもわか宮をほとなくいたきたてまつり
給て　源氏院號の後なれとも猶日ころ申つけたるま
まに云歟殿の心也此物語中如此事おほし載先段訖

うつくしみ　愛

ゆめにみしやうにみつからすみの山をみきの手にさ
ゝけたり山の左右より月日のひかりさやかにさしい
てゝ世をてらすみつからは山のしもにかけにかくれ
てその光にわたらす　拾遺記云帝浩之常夢呑レ日則
生レ子　帝王年代曆曰晉ノ懷帝時前趙劉聰字玄明張
氏夢日入レ懷十五月生レ聰

日月夢事　推古天皇元年癸丑　正月に法興寺を立四
月に厩戶豐聰耳皇子を立て爲二皇太子一萬機悉ニ委
ヌ內外博達也始て四天王寺を建立二年甲寅　三寶を
興隆して寺を競ひ造る六月十五日夜御夢想に云頂
上寶冠を着し給へる無上の俗形おはします大寶蓮
花の上に安座し給て左右の手に日月輪を差上て光
明を放給ふ黃金白銀の七寶の城郭あり是皇子所住
城との給ふすなはち告給はゝ汝等ともに三寶を興
隆して天照大神を崇め祭たてまつるへしと云々御
夢さめて後則夜半に上宮太子をむかへたてまつり
て此よしをかたり申給太子大に驚畏て月讀明神の
昔祭所を尋て七ヶ國の內七ヶ郡を點定して御厨に
奉寄せしめ給と云々見懷中抄　榮花物語に二位新發意皇
后宮定子による恩て參て御物語きこゆる中御祈つか
うまつりてねて侍し夢に男御子生給はんと思夢を
みて侍しかは云々雖爲吉夢兆其人不幸事

大鏡云九條殿御夢に朱雀門の前にて左右足を東西
宮へさしやりて北向にて內裏をいたきたるとみ
たると仰ありけれは御前になまさかしき女房の有
けるかいかに御またのいたくわたらせ給つらんと
おはせたりける此ゆへにや御子孫さかえましませ

と其御身はつゐに攝政關白はし給はざりけり
むまれ給しこなたそのかたのふみを見侍しにも又な
いけうの心を尋る中にも夢をしんすへき事多く侍し
かは　周禮六夢中有正夢無風雨之夜無憂喜醒之時分
明爲正夢
訖栗枳王ノ文十夢有又普賢經ノ六根懺悔ニモ尋ニ於夢
中ニ見ニ釋迦牟尼佛ニ與ニ大衆ニ在ニ耆闍崛山ニ法花經
演ニ一實義ニ說れたり法花經には常有是好夢と有凡經
論に夢を信すへき事不可勝計律宗之好相なとも多
は夢を本とせり又佛本行集經云摩耶夫人白象在脇
入と夢に見給淨飯王占夢の波羅門を召て問れしか
は若母人夢白象入右脇彼母所生子三界無極尊淨土
祖師善導和尚經疏にも夢をもて證定とせり
漢書曰後漢明帝夢見金人即遣中郎蔡愔等十八人往
於西域尋訪佛法至天竺國見沙門迦葉摩騰竺法蘭等
二人經負白馬來蔡愔等乃求請之即共愔等還涉流沙
至於洛陽立精舍今ノ白馬寺是也私教類聚
くにのはゝとなり給て　國母也
はるかに西のかた十萬をくのくにへたてたる　從是
西方過十萬億佛土有世界名爲極樂阿彌陀經

水くささよき山のすゑまて　漢書穢撞粥枚居子邊地
水草遷移徙
ひかりいてん曉ちかく成にけりいまそみし世の夢語
する　大鏡云院より大宮にきこし給冷泉圓融不審可勘殿道長云々　光
いつるあふひのかけをみてしより年へにけるも嬉
しかりけり　御返事もろかつら二葉なからに君に
かくあふひや神のしるしなるらん
古より人の染をさけんふちの衣にもなにかやつれ給
へき　藤衣
わかみはへむくゑの物とおほしなして　變化四生本化生の所歟
さはのほかのきしにいたりて　娑婆到彼岸也梵婆羅密
ちんのふはこにふしこめて　封籠
かいなき身をはくまおほかみにもせし　薩埵王子飢
虎に身を施し給し心歟
身をすてゝ山に入にし我なれと熊のくらはん事も
しられす
たへなるみねになむ　妙高山歟須彌山の事なり
ほとけにまかり申て　辭　いとま申也
はるけき山の雲かすみにもましり給にし　郭公嶺の
雲にやましりにしありとはきけとみるよしもなき

佛の御てしのさかしきひしりたにわしのみねをはたと〳〵しからすたのみきこえなからなをたきゝつきけるよのまとひはふかゝりけるを　常在靈鷲山の心也佛假に滅度し給へとも常住此不滅也と說れたる也たきゝつくは佛涅槃の事也佛此夜滅度如薪盡火滅と說也

とりの音のきこえぬ山さとにとなむ　飛鳥の聲もきこえぬおく山の深き心を人はしらなむ

かのせんそのおとゝはいとかしこくありかたき心さしをつくしておほやけにつかうまつり給けるほとに物のたかひめ有てそのむくひにかくすゑはなきなり

忠文民部卿將門征伐の大將軍たりけるに勳賞の定ありける時淸愼公賞疑(ウタカハ)しきをはおこなはされと申されたうけるを弟の右丞相の疑しきをは行され賞の疑しきをは行へとこそあれと申されけれともつゐに沙汰なかりけり翌朝に民部卿右丞相に參して最申て富家(富家は名所也)の劵契(ケンケイ)(劵契は文書也)を奉りけり家に歸て手をにきりて立たりけるか十指の爪手のこうまておひいてゝ血は紅をしほりたるやうにて思死にけりやかて惡靈と成れり其故にや淸愼公子孫は末なくなりて小野宮も他家へ傳けりと云々見舊記

このゆめのわたりに目とゝめ給　世の中は夢のわたりのうきはしか打渡りつゝ物をこそおもへ

これはまたくしてたてまつるへき物侍り　明石入道願書に源氏みつからのをもくしてたてまつらんと仰られたる也

ひたゝけて　泥

かくしもくしたまへる　具

ふくち(福地)のそのにたねまきてとやうなりし　耶輸陀羅かふくちのそのに種まきてあはんかならす有爲の宮こに(もイ)　奥入云雖レ有二此說一此歌證據不レ知誰カ說頗凡俗事歟云々

かたち人　貌人

こゆみいさせて

まりもてあそはしてみ給　劉向別錄曰蹴鞠者傳云黃帝所作或曰起戰國時記黃帝蹋鞠之勢也以練武士知有才也今軍士無事得使蹋鞠有書廿五篇

延喜五年三月廿一日御記云晚頭綾綺殿前令侍臣蹴鞠覽之　同五月八日仁壽殿蹴鞠五月廿二日殿前十三日御常寧殿有蹴鞠興　元興寺(本名法興寺)に大なる槻

木ありこれをかゝ　として天智天皇内大臣鎌足入
鹿なとして蹴鞠ありけり
けうして　興
はなの木ともわつかなるもえきのかけに　萌黄　い
また淺緑なる木のかけ也
かふりのひたいすこしくつろきたり　朝候日高冠額
拔夜行沙厚沓聲忙連句剛詠
みはしのなかのしなのほとに　中階　先例未勘京極
殿の南階の間にて見證二條殿階半分座給之由見た
り雖爲近例定有其故歟云々
はなみたりかはしくちるめりやさくらはよきてとこ
そなと　吹風も心しあらは此春は櫻をよきてちらさ
さらなん　落花猥籍風狂後
はるのたむけのぬさふくろにやとなん　手向　無禮
又手蔡　又享禮　ぬさふくろはすきふくろ也
拾遺云物へまかりける人のもとにぬさをむすひふ
くろにいれてつかはすとて能宣　あさからぬ契むす
へる心をは手向の神そしるへかりける
後撰云あひかたらひける人のあからさまにこしへ

まかりけるにぬさふくろなとつかはすとてよみ人しらす
われをのみおもひつるかいこしならはかへる山に
はまとはさらまし
春のたむけとはやよひのすゑなれは春の暮て行た
むけと云ふ也ぬさをは旅のたむけにすれは也春の
くれ行を旅に行にたとへたる也
からねこ　野王案曰猫似虎而小能捕鼠爲粮音苗和名禰古
つはゐもちゐなしからしやうの物とも　椿餅椿の葉
に入たるもちゐなり云々椿ノハチアハセテ餅ノコ
ニアマツラチカケテツヽミタル物チ鞠ノ所ニテ食
スル也うつほの上國譲　大臣殿の御方よりひわりこみき
つはいもちゐなと奉り給へり左のおほいとのより
はなしからうし橘あらまきなとあり
猶うちとのようゐ　内外用意也
いゑのかせさしもふきつたへ侍らんに　久方の月の
桂もおる計家の風をもふかせてしかな
さしもあらてくし給にたらんこそ　若
深山木にねくらさたむるはこ鳥もいかてか花の色に
あくへき　果鳥萬葉　箱鳥同　或は貌鳥異名也貌鳥は梟
の一名也

みやま木によるはきてぬるはこどりのあけはかへらんことをこそおもへ

あさいてにきなくはこ鳥なれたにも君にこふれは時をすへなく万葉人丸

雄略天皇御時美作國つるき山と云所に相見乙人と云人の婦子をおいて山中を行とて鷲にとられてはやこ〳〵とよひしに死たりける故にはこ鳥とは云也はことははやこといふ心也

このゆふへよりくつしいたく　苦痛也

ふかきまとのうちに　養在深窓人不識長恨歌

風にさそはれてみかきかはらをわけ入て侍しに

みかきかはらとは名所ならねとも御垣によせていふ也御かきの松ともよめり同事也　應徳二年三月十六日中殿宴　京極太閤

千世までもさきそはしむる櫻花みかきか原にほりうへしより

大納言源信歌入新拾遺　もゝしきやみかきか原のさくらはな春したゝすはにははさらめや

あやなくけふもなかめくらし侍なと　みすもあらすみもせぬ人の戀しくはあやなくけふやなかめくらさむ伊勢物語

れいのかく　例の書也

つれなしかほなん　義孝集　花ぬれはつれなしかほをつくれともたもとにかゝる雨のわひしさ

今更に色にな出そ山櫻およはぬ枝に心かけきと

つほ　白雲と見ゆる櫻もあるものをおよはぬ枝とおもはさらなん

若菜下

此巻に一名もろかつら云々おちはをなにゝひろひけんの歌による歟當流不用之

ことはりとはおもへともうれたくもいへるかなうれはしく也

殿上のゝりゆみきさらきとありしをすきて三月はた御き月なれは　賭弓正月十八日於弓場殿射之四府公卿已下束帶　賭射　的

西宮抄云殿上賭弓前後頭於殿上取方人取文不依次仍改書押小壁四府中點便所各爲出居所云々設饗定陰陽師出居丁參内解除事召文作事主上御射場射手着座王卿依召定方人奏前後奏出居令懸的矢取渡的付着座以前判着座召方々頭被仰度數念人賭物主繼

射勝方拜王卿以下立繼射進錢出懸物上卿召所掌介書分
李部王記云天暦五年三月十六日殿上賭射忌月事後所掌着的付座侍座次ニ射弓云々有中科人者
この院にかゝるまとゐあるへしと　的射也
古今に思とちまとゐせるよはとあるは圓居也居まはりたる也詩には團欒〔ダンラン〕なと作れりそれをいま的射にそへていへる也
左右の大將さる御なからひにてまいり給へはすけたちなと　すけたちは次將也　中少將
こゆみとの給しかとかちゆみのすくれたる上すとも有けれは　歩射　騎射むまゆみ也歩射はかちゆみ也
李太尉歩射法云夫歩射以目先領其持心歩射和名如知由美
今案持心者的名乎
みなまへしりへの心わけてこまとりにかたわけて
弓の前後也　狛取合手をそろふる也云々
はなのかけいとゝたつことやすからて　けふのみと
春をおもはぬ時たにも立ことやすき花の陰かは
えんなるかけものとも　西宮記云賭弓注進錢白縠倉院進
出懸物藏人持出結付延喜廿一息所被出裝束延長四年中宮被出女裝束

やなきの葉をもゝたひあてつへきとねりとものうけはりていとむしんなりやすこしこゝしきてつきともをこそいとまめとて　史記云楚有ニ養由基ニ者善射者也去ニ柳葉ニ百歩而射レ之百發而百中レ之左右觀者數千人皆曰善射
人にてんつかるへきふるまゐは　古人詩冊に批點なと云はいさゝか褒貶したる心也されはてんつかるましきとは人にほめそしらるましきと云歟
ろなうかよひ給へる所もあらんかしと　無論　東宮女三宮に似給ふへき也
けいし給へは　啓　申たまふなり
あのことゝきりつほの御方より　如案
うちの御ねこ
寛平御記云寛平元年十二月六日〔猫イ〕　朕閑時述猫消息曰驪猫一喉太宰少貳源精秩滿來朝所献於先帝愛其毛色之不類餘猫々皆淺黑色也此獨深黑如黑烏其形容惡似韓盧長尺有五寸高六寸許也其屈也小如秬粒其伸也長如張弓眼精晶熒如針芒之亂眩耳鋒直竪如匙上之不搖其伏臥時團圓不見足尾宛如堀中之玄璧其行歩時寂寞不聞音聲恰如雲上黑龍性好道引暗合五禽常低頭尾

着地而曲聳皆脊高二尺許毛色悅澤盖由是乎亦能捕
夜鼠捷於他猫先帝愛翫數日之後賜之于朕々撫養五
年于今每旦給之以乳粥豈啻取材能之翹捷誠同先帝
所賜雖微物殊有情於懷育耳仍而曰汝猫食陰陽之氣
修支竅之形心有必寧知我乎猫乃歎息舉首作(仰イ)睨吾顏
似咽心盈臆口不能言

これもむかしのちきりにやと　これもまたさそなむかしの契そとおもふ物からあさましきかな

大みやは　式部卿宮　紫上父

すさみ　怠荒(毛詩)　取蚍尾(宛字 荘子)

内のみかと御くらゐにつかせ給て十八年にならせ給ぬつきの君と成給へきみこもおはしまさす　仁明天皇治十七年(承和十四 嘉祥三)十八年にておりさせ給今年は新(本ノマヽ)清和天皇治十八年是帝の御宇にとるへき故なり

貞觀

無繼嗣例　朱雀院(昌子内親王)　後一條院(章子内親王 馨子内親王)

おもくなやみ給ことありてにはかにおもゐさせ給ぬ

依御藥俄脫履摸延喜御例(歟李部王記)

としふかき身のかうふりをかけんなにかおしからんと　東觀漢記曰王莽居ニ椅子一字諫レ莽而莽誅レ之逢萠謂ニ其友人一曰三綱絕矣不レ去レ禍將及レ人即解レ冠掛ニ東門一而去後漢書逢萠字子康北海人掛レ冠避ニ世墻東一陶弘景衞(神イ)武門掛レ冠去

左大將右大臣になり給てそ世の中のまつりことつかうまつり給ける　粟田關白(道兼)于時右大臣攝籙

ものゝうしろの心ちしてかいなかりけり　人のみぬ心なり

源氏の打つゝき后にゐ給へき事をよ人もおかすおもへるに　榮花物語ニ源氏の打續き后に居給事は春日の神の御とかめ有とみえたり嫄子中宮の時の事也

冷泉院世次おりゐの御門冷泉院にておはしますされは冷泉院ときこえ給へり

冷泉院ハ大炊御門南二條北堀河西大宮東四町累代後院也嵯峨天皇御宇此院弘仁十四年四月十一日天皇遷冷泉院十七日讓位於皇太弟(淳和)

承和元年八月遷冷泉院天長十四年帝朝冷然院嘉祥三年正月同仁壽三年二月晦日幸ニ冷然院一覽ニ櫻花一

天曆三年九月廿八日陽成院以ニ冷然院一被レ奉ニ朱雀院一八年三月十一(イキホヒ)日改ニ冷然院一爲ニ冷泉院一

御いきほひ　德　又勢

めをさへのこひたゝらして　闌ヌ、ル
べいしうもいはし水かものりんしのまつりなとゝめ
す人々の道々の事にすくれたるかきりをとゝのへさ
せ給へりくはゝりたる二人なん近衛兵イのつかさのなた
かきかきりをめしたりける　加陪從二人　近衛兵イ司例
可勘
人のみありさまの　御ありさま也
御かたかたのみたまひ　後車を申にや
十月なかの十日なれは神のいかきにはふくすも色か
はり松の下はのもみちなとをとにのみあきをきかぬ
かほなり　千はやふる神のいかきにはふくすも秋に古今貫之
はあへすうつろひにけり
一說云松の下葉の紅葉にあらす下廻紅葉云々
なへては下葉と心得たる歟
をとにのみるイ秋を　紅葉せぬときはの山は吹風の音に
や秋をきゝわたるらん
ことごとしきこまもろこしのかくよりもあつまあそ
ひのみゝなれたるは　東遊神樂也
うちあはせたるひやうしもつゝみをはなれてとゝの
へとりたるかた　神樂はうち物なとにて拍木をとゝ
のへさる故也
やまあゐにすれる竹のふしは　山藍　小忌チミオミチハ山アイニテスル也
もとめこはつるするに　求子歌
松原枝しけみ千代も八千代も色はかはらし　千はやふるひらの拾遺
にほひもなくくろきうへのきぬすわうかさねのえび
そめの袖をにはかにひきほころはしたるにくれなゐ
ふかきあこめのたもとの
いとしろうかれたるおきをたかやかにかさして
荻挿頭事　人長の事也尋常には榊をもつ也但淸暑
堂の御神樂の試樂執柄家にてをこなはるゝ時かれ
たる荻の枝を持なり
御かとよりとの物みはおさおさし給はす　君耳唯
聞ニ堂上言一君眼不レ見ニ門前事一白氏文集
たかむらのあそんのひらの山さへといひけるゆきの
あしたをおほしやれはまつりのこゝろうけ給しるし
にやといよいよたのもしうなん女御君
かみ人のてに取もたる榊はにゆふかけそふる深き夜
の霜
浪起ニ粲田一行變レ海花開ニ月令一不レ依レ春野相公對雪琴

今案古人尺載此詩不叶歟或人云野相公詠にひらの
山さへゆふかつらせりと云歌有之云々未勘出
ひもろきは神の心にうけつへしひらの山さへゆふ
かつらせり是は文時卿歌なり如何

はふりこ　祝子

しもはいよ〳〵ふかくてもと（本）すゑ（末）もたと〳〵しきま
てゑひすきにたるかくらおもて　神樂面とはこむき
顔色歟或云顔をさしあはせて並居たるを云也　神
樂譜云本歌なにわさを（いかはかりよきわさしてかイ）我はしつゝか天てるやひる
めの神をしはしとゝめん　末歌　いかにしてなに
わさしてか（いつこにか駒はつなかむあさひさすさすや岡部の玉さゝのうへにイ本）天てるやひるめの神をしはしとゝめん

には火も影しめりたるになをまんさい〳〵と榊はを
とりかへしつゝ　庭燎四聲字苑云燎力照反和名爾波
比毛詩有庭燎篇神樂有千歳早歌本方せむさいせむ
さいせんさいやちとせのせんさいや末方まんさい
まんさいまんさいやよろつよの萬歳や

ちよを一夜になさまほしきよの　（伊勢物語）秋の夜の千夜を一
よになせりともことは殘て鳥や鳴なん

うへのきぬのいろ〳〵けちめをきて　四位紫　五位
緋　六位緑袍也

せんかう（送香）のおしきにあをにひのおもてをしてさうし（精進）
物をまいるとて　折敷の面に張たる絹も尼なれは純
色なる心歟

しりうこちけり　後言　うしろにていふ言也

わつらはしきかんたから　神寶

かの入道のきかすみぬよにかけはなれたうつる　給
へゑ也

よの中の人これをためしにて心たかうなりぬへき比
也　長恨歌傳曰男不レ封レ侯女作レ妃君看女却為二門
楣一其天下心羨慕如レ此

春秋の行幸に　春秋行幸朝覲　禮記云春見云レ朝秋見
云レ覲孟子曰天子適二諸侯一曰二巡狩一巡狩者巡レ所レ守
也諸侯朝二於天子一曰二述職一述職者述レ所レ職也無二非
事一者春省レ耕而補二不足一秋省レ斂而助二不給一

内侍のすけはらの君　掌侍惟光朝臣女

かの昔のかけ〳〵しきすき思はなれ給にや　王かつ
らを源氏の思はなれ給也

このたひたり給はむ年わかかなとてうしてやとおほ
してさま〳〵の御法ふくの事いもゐのまうけのしつ
らひ　齋（イモ井）日本紀　潔　精色事也調はこしらふる也

白氏文集曰十三年寒座對由唯將無事化人間齋時往々開鐘笑一食如何不食閑韓康伯曰洒心曰齋防患曰戒延喜式云齋稱片膳齋宮寮　菅家御集云紙裹生薑稱藥種竹籠毘昆イ布記齋儲

人の御心しらひともいりつゝ　心知へ　心調

兵部卿の宮のわらはそむわう　常孫王

をもしろき大曲こととものしらへにつけてかはるへきひゝきそらのさむさぬるさをとゝのへいてゝやうことになかるへき手のかきりを　蔡邕女訓曰舅姑若命之鼓琴必正座操琴而奏曲若同曲名則捨琴興對曰其曲小曲五終則止大曲三終則止琴有大曲中曲小曲也出太平御覽　琴之大曲也春ハ角夏ハ徵秋ハ商冬ハ羽土用ハ宮也律ハ寒呂ハ溫也分清濁語五音法曲也僧書曰聲ハ依詠律和聲聲ハ謂五聲宮商角徵羽也律ハ謂六律六呂十二月之音氣也主當依聲律以和樂也

ひとたひもゆしあんするいとまも　由按　押をす也手仕也

五月はかりにそなり給へは神わさなとに事つけて

宮女懷姙者散齋之前退出有ニ月事一者祭日以前退ニ出宿廬ニ不レ得レ上レ殿其三月九月潔齋預前退ニ出宮外一物忌令

十一日すくしてはまいり給へき御せうそこ　十二月十一日神今食事歟

冬の夜の月は人にたかひてめてたまふ　枕草紙にすさましきものしはすの月よとある心なり

女かく心みさせん

左傳襄公十一年曰鄭人賂晉侯以女樂晉侯以樂之半賜魏絳史記曰孔子爲政齊人懼犁鉏乃選齊國中女樂好音八十人御記曰天德三年十月十九日召内教坊妓女十人令奏絲竹

あをしのかきりにて　釋云五位裝束也青衫事也云々

青磁青イ是は茶垸名也其色ににたる物也

案之襖アヲ子歟延喜十三年正月十四日踏歌御記云歌頭給襖ヲ舞人給襖召人藏人所人等給襖子云々

うちめなとえならて　裝束はうちてきらをつくる本儀也仍うち殿とてありいたひきは略儀也

あをにゝやなきかのさみ　青丹アヲニ　萬葉にあをによしならのといへり　昔彼所の土あをくあかゝりけるにて土器をつくりそめけるよりいひそめたる也一説ニ緑青うつほ物語ニ春日祭ニしもつかへはあをにゝ柳かさねきたり云々

こんちのふくろ　紺地袋

鶯さそふつまにしつへく　花のかを風のたよりにた古今
くへてそ鶯さそふしるへにはやる友則
鶯聲誘引來花下草色抱留座水邊
いちこちてうのこゑにはちのをゝたてゝ　發絃箏調
子絃也双調以三爲發盤渉調以五爲發也
この御まこのきんたちいとうつくしきとのゐ姿共に
て　宿衣也　直衣姿也
ふかき御らうのほとあらはにきこえておもしろきに
御らうとは上臈の心也或云琴を稽古の勞といふ歟
但是はさもきこえさる也此物語に人のしなを臈と
いへる事あまたあり
二月の中の十日あまりはかりのあをやきのわつかに
したりはしめたらん心ちしてうくひすの羽風にもみ
たれぬべし　白雪華繁空拂地綵絲縈不勝鶯白氏文集柳
紫記云小少將の君はそこはかとなくあてになまめ
かしく二月はかりのしたり柳のさましたり鶯の羽
風になひく青柳のみたれてものをおもふ比かな
具平親王
櫻にたとへてもなをものよりすくれたり　さくらよ
りまさる花なき春なれはあたし草木は物ならなく
に
五月まつはなたち花の花もみもくしておしおれる
たち花はみさへ花さへそのはさへ枝にしもをけと万葉
ましときはの木
心のいとぬるきそくやしきや　緩也
ふしまちの月わつかにさしいてたる心もとなしや春
のおほろ月夜に　春宵一刻直千金花有清香月有陰歌
管樓臺聲細々鞦韆院落夜沈々蘇東坡
女は春をあはれふとふるき人のいひをき侍ける
女感二陽氣一春思レ男男感二陰氣一秋思レ女毛詩
いにしへより人のわきかねたることをすへの世に
春秋の勝負の事也　拾遺躬恒　昔よりいひしをき
たることなれはわれらはいかゝいまはさためむ
物のしらへてくの物ともはしもけにりちをはつきの
物にしたる　曲　呂は春のしらへ律は秌のしらへと
いふ也
ひときさみ　第一
のほりてのよを　上代
なたちかに　折論語
きんなむ猶わつらはしうてふれにくき物にはありけ

る

白虎通曰琴者禁也禁二止於邪氣一以正二人心一也

文選曰曠三奏而神物下降何琴德之深哉馬融琴賦

このことをまことにあとのまゝに尋とりたる昔の人はてむちをなひかしおにかみの心をやはらけ萬の物のねのうちにしたかひてかなしひ深き物もよろこひにかはりいやしくまつしき物も尊き世にあらたまりたからにあつかり世にゆるさるゝたくひ多かりけり

此國にひきつたふる始つかたまてふかくこのことを心えたる人はおほくのとしをしらぬくにゝすくしけにはたあきらかに空の月星をうこかし時ならぬ霜雪をふらせくもいかつちをさはかしたるためしあかりたる世にはありけり

禮記曰樂者天地之和又曰移風易俗天下皆寧言八音用即正人ノ理和二陰陽一

漢書禮樂志曰象二天地一而制二禮樂一所三以通二神明一立二人倫一師古曰倫理也又曰孔子曰安レ上治レ民莫レ善二於禮一移レ風易レ俗莫レ善二於樂一師古曰此孝經載二孔子之言一也善古善字

文選琴賦曰至人攄思制爲二雅琴一又曰能盡二雅琴一唯至人兮　大周正樂曰賀韜吳人也常夜彈レ琴感二鬼神一見レ舞數曲斯亦妙之至也

五音得失事　文選嘯賦註曰發レ徵則隆冬二熙蒸一騁レ羽則嚴霜夏凋動レ商則秋霖春降奏レ角則谷風鳴レ條調イ翰曰悲美也徵夏音也故冬發二此聲一感炎蒸至羽冬音也夏聘二此聲一感嚴霜至商秋音也春動二此聲一則秋霖降角春音也秋奏二此聲一感溫風鳴レ條也谷風則春風也皆音律至妙感應有二如レ此者一善曰列子曰鄭師文學二琴於師襄一々々曰子之琴何如師文曰請嘗試レ之於レ是當レ春而叩二商絃一以召二南呂一涼風穆至草木成レ實及レ秋而叩二角絃一以激二夾鐘一溫風徐廻草木發レ榮當レ夏而叩二羽絃一以召二黄鐘一霜雪交下川池暴冱及レ冬而叩二徵絃一以激二蕤賓一陽光熾烈堅氷立散師襄曰雖二師曠之淸角鄒衍之吹律一無二以加レ之張湛曰商金音屬レ秋南呂八月律角木音屬レ春夾鐘二月律羽水音屬レ冬黄鐘十一月律徵火音屬レ夏蕤賓五月律鄭玄禮記註曰喜蒸也聲類曰喜熙字也

うつほの物語にとしかけ琴をつかまつるにおとゝのうへのかはらくたけて花のことくにちる今一つつかうまつるに六月の中の十日のほとに雪ふすまのことくこりてふるみかとおほきにおとろきての

たまふけに此しらへはめつらしき手なりけりこれはゑいらくといふ手なりもろこしの御かとのひき給にかはらくたけて雪ふるとなんいひたるこの國にはいまたみぬ事をあやしくめつらしき人のさえかな云々

おにかみのみゝとゝめかたふきそめにける物なれはにやなま〳〵にまねひて思かなはぬたくひありけりのちこれをひく人よからすとかいふ難つけて

琴書曰堯大德堯彈感天神降聽儼然言和之至也故堯制神人暢　禮記曰夫禮樂通ニ乎鬼神一　靡蕪香散楚江頭湘竹叢邊淚不レ收莫下把ニ悲絲一寫中離怨上夜深簾外鬼愁聽琴永順

こゝにつたはりたるふといふものゝかきりを　譜日本見在書目錄藤原佐世撰　樂家二十三部二百七卷琴經一卷蔡伯喈撰　樂圖四卷　琴操三卷晉廣陵相徭撰　琴法二卷犄耶梨撰　琴祿一卷琴德譜五卷　雜琴譜百二十卷　琴用手法一卷　彈琴用手法一卷　雅琴祿一卷　彈琴手勢法一卷　既戚圖一卷

きんの音をはなれて何事をかは物をとゝのへしるしるへとはせん　衆器之中琴德最優文選嵇叔夜琴賦

よの中にいてははなれて　出離

のち〳〵はしとすへき人もなく　佛智も無師智とてあり祖師にも無師獨悟の人あり何事もいたりぬれは自得する事也

あかりての人にあたるへうもあらしや　上古の人相當すましきとなり

かつらきあそひて　かつらきの寺のまへなるやとよ（初段）らの寺のやにしなるやえのはゐにしら玉しつくや（二段）ましらたましつくやをしとゞ〳〵しかくしてはく（三段）にそさかえんやわいへこそとみせんやをしとゞをしとゞ〳〵〳〵　催馬樂葛城呂

此後といひてもつたふへき末もなき　源氏の弟子といはむ器用の人のなきとわひ給也（をイ）

二宮今より　今上の御子

ゆのねふかく　由音

りむので　輪手　輪說也

かへりこゑにみなしらへかはりてりちのかきあはせとも　將律調　琵琶にあり呂より律になる時彈也

きむはこかのしらへ　琴五ヶ調　掻手（カクテ）　片垂（カタダリ）　水宇（スイツ）　瓶（ヘイ）　蒼海波（サウカイハ）　雁鳴調（カンメイシラベ）　一說胡茄鮓　白氏六帖第十

八曰笳者胡人卷蘆葉吹之以作樂也胡曰笳播爲琴曲
五六のはらをいとおもしろくすまして引給ふ　萬秋
樂　五六帖なかはより破にかへるがゆへに五六の
破樂といふ也五帖の破六破の帖と云心也
今案御遊盤涉調有先蹤歟可勘無此儀者萬秋樂猶不
審五ヶ調中有五六破之名乎
みゝとからぬ　耳不敏　耳のおそき心也
いとうるせう　うるはしく也
いとかくくしぬる人は　具也
かの一ふしのわかれ　須磨のわかれなり
つゐによるかたありてこそあめれ　與人伊行尺 よる方もありと
いふなるありそ海の立白波も同し所に
今案之大ぬさと名にこそたてれなかれてもつゐに
よるせはありてふ物を伊勢物語
わたつ海のおきつ鹽あひにうかふ淡のあはれいつ
くによる方もなし
此等の歌の心も相通歟
身もぬるみて御心ちもいとあしけれと　小町集 人しれぬ我
おもふ人にあはぬ夜は身さへぬるみておもほゆる
かな

そことなくをきてひろきうつはものにはさいはひも
それにしたかひせはき心ある人はさるへきにてたか
き身となりてもゆたかにゆるへる方はおくれ　少取
レ焉小得レ福大取レ焉大得レ福 孝經至德要道篇也
帝範曰烹レ牛之鼎不レ可レ處ニ以烹レ鷄捕レ鼠之狸不レ
可レ使ニ之搏一レ獸一釣之器不レ能レ容ニ以江漢之流一百石
之車不レ可レ滿ニ以斗筲之粟一何則大非ニ小之量一輕
非ニ重之宜一
きうなる人は久しくつねならす心ぬるくなたらかな
る人はなかきためしおほかりけり　老子經曰　柔之
勝レ剛 舌柔齒剛齒先舌亡 天下莫ニ不一レ知ニ知柔敬者久長剛強者折
傷也
よゐなとにても　夜居
なくさめかたきをはすてにて　大和物語 我心なくさめかねつ
さらしなやをはすて山にてる月をみて
すこしくひおはしたる　悔也
このころすこし物々しう御（勅イ）その色も深くなり給へと
天武天皇十四年七月庚午　初定明位以下進位已上朝
服色淨位已上並（并イ）著朱花 此云波泥孺 　正位深紫直位淺紫勤
位緑務位淺緑追位深蒲萄進位淺蒲萄文武天皇大寶

元年三月甲午　始依新令改制官位號云々服制親王四品以上諸王諸臣一位者皆黒紫諸王二位以下諸臣三位以上者皆赤紫直冠上四階深緋下四階淺緋勤冠四階深緑務冠四階淺緑追冠四階深縹進冠四階淺縹皆淺冠綺帶白襪黒革舃其袴者直冠以上者皆白縛口袴勤以下赤白脛裳

柏木此卷初は參議右衞門督後に權中納言とみえたり上古は位にしたかひて袍色も淺深あり廣明卿天暦五年二月任權中納言叙從三位元參議正四位下左大辨時に九條右大臣送袍歌在後撰集　思きや君か衣をぬきかへてこきむらさきの色をみんとは

資房記にも叙三位着改袍よしみえたり

なにしにまいりつらんとはちふく　撥撫　はらひすつる也

女御さゝきもあるやうありてものし給たくひなくや

五條二條后の業平朝臣に通給し事なと歟後撰云ことといてきてのち京こくのみやす所につかはしける

元良の御子わひぬれは今はたおなし難波なる身をつくしてもあはんとそ思ふ

世の中はいとつねなき物を　古今　戀しなは誰か名はたし世の中のつねなき物といひはなすとも深養父

はしたなくついきりなることなの給ひそ　ふつきりなる心歟

あいなき御おとしめことはになん　劣也

えいなひはてゝ　辭イナフ遊仙窟

四月十よ日はかりの事なりみそきあすとて　四月中午日齋内親王禊ケイ事年中行事

ゆかのしもにいたきおろしたてまつるに　床の高さ三尺鬼氣の及ざる也見養性抄

いかはかりしみにけるにか　深着日本紀

かけ〳〵しきすちはなくてやみなん　ひんなき心也

かけまくもかしこきなと同事也又云かけしろひたる心にや

いつちも〳〵ゐてかくしたてまつりて　將隱也

いさゝかまとろむともなきゆめに　睡マトロム遊仙窟

坐イ非カラ

人の御なみたをさへのこふ袖はいとゝ露けさのみそまさる　下官乃將二衣袖一與二娘子一拭レ涙遊仙窟

さらはふようなめり身をいたつらにやはなしはてぬ

不用　古今　夏虫の身をいたつらになすことも一つ思ひ

によりてなりけり
おきて行空もしられぬあけくれにいつくの露のかゝる袖なりおきて行かたもしられすまよふかな涙も袖もめにさはりつゝ　元良親王歌合
いてぬる玉しゐはまことに身をはなれてとまりぬる心ちす　古今 あかさりし袖の中にや入にけむわか玉しゐのなき心ちする
みかとの御めをあやまちて　妃ミメ日本紀　御妻周禮
まかく＼しう　枉言マカコト萬葉
かの院のほとりのおほちまて　路オホチ　御路日本紀　大路萬葉十九
かきりある御いのちにてこの世つき給ぬともたゝいましはしのとめ給へふとうそむの御もとのちかひありその日かすをたにかけとゝめ給へと　大般若經曰定業亦能轉正報盡者能延六月住不動義軌　金剛手光明灌頂經曰世號不動立印軌復次觀自身成就尊形狀一百由旬內所有難調御鬼神所持者皆悉能散懷
きつねなとのたふれたる　誑タフレ
心のしうなん　執
ゆめ御宮つかひのほと　努々

齋宮におはしましゝほとの御つみかろむへからんくとくの事　大鏡云むかしの齋宮齋院は佛經なとの事はいませ給けれとこの院には佛法をさへあかめ給て每朝の御念佛かゝせ給はす
おもへともいむとていはぬ事なれはそなたにむきて音をのみそなく　大齋院選子
ふんしこめて　封籠
あめはそほふるなりけりと　伊勢物語にやよひのついたちにあめそほふるに云々　曾保零眞名本　萬葉にあられそほふるともいへり　案之そほはすこし也あけのそほふねといへるも丹ぬりたる小舟なり日本紀には赭を曾保爾云々
なにをさくらにといふることもあるは　古今 まてとい ふにちらてしとまる物ならは何を櫻に思まさましなにかうき世に久しかるへきとてうちすしひとりこちて　ちれはこそいとゝ櫻はめてたけれうき世に何かひさしかるへき 何かうき世にイ
古今 のこりなくちるそめてたき櫻花ありてよの中はてのうけれは
かゝるらうろうならすは　牢籠

いひもてゆけは女のみはみなおなしつみふかきもと
ゐそかしと　所有三千界　男子諸煩惱　合集爲一人
女人爲業障　女人地獄使　能斷佛種子　外面似菩
薩　內心如夜叉涅槃經
五かいはかりうけさせたてまつり給御かいのしのい
むことのすくれたるよし　五戒龍王經云一日一夜間
持三歸五戒人生卅三天中所守護又持五戒人廿五神
王被護又以淸淨心合掌不生他念人者命終時生日摩
尼天經意要法文云言五戒者是優婆塞此云近事男　優婆
夷此云近事女
つふやく　詢ツフヤク 日同
もぬけたるむしのからなとのやうに　蛻モヌケ
いろはさおきまて　佐青　又小靑　ひとたまのさを
なるさみかたゝひとりおひしおまりはひさしとそ
おもふ
ゆめ心をき給な　努々
いはけたる　驚　騃　幼
日くらしのはなやかになくにさらはみちたと〳〵し
からぬ程にとて御そなとたてまつりなをす月まちて
ともいふなる物をとゝわかやかなるさましての給
はにくからすかしそのまにもとやおほすと
夕闇はみちたと〳〵し月まちてかへれわかせこそ万葉豊前国娘女
のまにもみむ
夕露に袖ぬらせとや日くらしのなくを〳〵おき
て行らん　から衣たつ日はきかし白露のおきてしゆ古今
けはけぬへき物を
よへのかはほりをおとして　蝙蝠の羽をみて扇をつ
くりはしめしゆへに扇の名を云也
御かとのみめをおやまつたくひ　五條后仁明后冬嗣大臣女　二條后清和后
后中納言長良女　通二業平中將一　華山院女御三條院皇后元方民部卿女　通二小野宮
關白並道信中將一　麗景殿女御二條院法興院入道女　承香殿女御顯光
大臣女　以上二人通二右兵衛督賴定一
あさみとりのうすやう　淺綠
ねきこと　禰宜言　祝同　摩埒同　ねきことをさのみき
ゝけん社こそはてはなけきの杜となりけれ
つまはしき　彈指
戀の山ちはえもとくましき御心ましりけり　いか計
戀の山ちのしけゝれはいりと入ぬる人迷まとふイふらん
そらにめつきたるやうにおほえしを　天眼の事歟い
かに隱密する事も四知とて天地人我の四はしる事

也其中にも天の照覽は第一也

あさゆふすゝみもなきころなれは　夏の日も朝夕すすみある物をなと我戀のひまなかるらん

身のいたつらになりぬる心ちすれは　後撰 あはれともいふへき人はおもほえて身のいたつらに成ぬへき哉

あなかちになんつけたてまつらまほしき　難

女御のあまりやはらかにをひれ給へることそ　をひれはおさなき心也ねをひれなとやう也

むしんの女房に心あはせて　無心

ゑかうにはあまねきかとにてもいかゝはとあり

廻向文願以此功德普及於一切我等與衆生皆共成佛道あまねき門とは普門示現の心歟ひろくあまねき廻向の心也

けさ抔は　東宮切韻云 釋氏曰袈裟二音俗云計佐天竺語也此云無垢衣又功德衣[illegible]悔云傳法衣即沙門之服也

うるはしきはうふくたちて　法服立

つくもところの人めして　作物所

八月は大將の御き月にて　夕霧大將母葵の上の忌月と也　龍朔二年六月詔奉常寺每五月六月停教音樂以太宗文皇帝文德太后忌月故也

すき〳〵　次々　近江國湯次莊也

てうかくのやうに　調樂

つき〳〵とゝこほることしけくてかくとしもせめくれは　月々　迫セメ

みたりかくひやう　順和名云醫家書有脚氣論脚氣一名脚病俗云阿之乃介　うつほの十五源中納言嵯峨院にまいり給てみたりかくひやういたはり侍てとあり案之みたりは病の惣名歟みたり心ち也世繼に東三條殿みたり風なとあり

かうふりをかけくるまをおしますすてし身にて

掛冠事有端　古文孝經曰七十老致仕懸ニ其所レ仕之車一置ニ諸廟一永使下子孫監而則上正而立レ身之終其要然也　漢薩廣德爲ニ御史大夫一凡十月免歸沛太守迎ニ之界上一沛以爲レ策懸ニ其安車一傳ニ子孫一師古曰懸ニ其所レ賜安車一以乘レ策致仕懸レ車亦古說也

おもきやまひをあひたすけて　今日正閑天又暖可ニ能レ扶病暫來 由白氏文集

かの御賀の日はあかきしらつるはみにえひそめのしたかさねをきるへし今日はあをいろにすわうかさね

赤白橡　蒲萄染下襲　青色 麴塵蘇芳重

かく人卅人けふはしらかさねをきたり　三十仙人誰

得レ聽含元殿角管絃聲章孝標
仙遊霞と云物あそひて　仙遊霞大食調曲拍子十舞古樂小曲南宮横笛譜爲性調曲
春のとなりちかくむめの氣色みるかひ有てほゝゑみ
たり　古今深養父 冬なから春の隣のちかけれは中かき
よりそ花はちりける
匂はねとほ(にイ)ゝえむ梅の花をこそ我もをかしと折て
なかむれ
兵部卿宮のそむわう　五世まては孫王といふ也
ゑひなきこそ　萬葉三 かしこしといふものよりも酒の
みてゑひなきするそまして有るらし
同 世中のあそひのみちにましらはゝゑひなきする
にありぬなるへし
同 たゝにゐてかたらひするは酒のみてゑひなきす
るに猶しかすなり
さかさまにゆかぬとしつきよおいはのかれぬわさな
りとて　古今 さかさまに年もゆかなんとりもあへす過く
る齢(月日イ)やともにかへると
またこともはてぬにまかて給ぬるまゝにいといたく
まとひて　明順奉咒咀後一條院之由御堂關白令聞給
召明順直召問給明順歸家吐血死云々見榮花物語此等例歟

けののほりぬるにや　氣上歟
人よりさきに　致仕大臣の柏木は嫡子と云也
あやしくたゆくおろかなる本上にて　墮(タユシ)窳史記
れい(例)の五十寺の御すきやう又かのおはしますてらに
もまかひるさなの
摩訶毗盧遮那　毘盧遮那　舍那如次配法報應三身
玄義七取意　天武天皇四年始於諸寺誦經云々
李部王記云延長七年九月十七日左大臣諸息四人共
於法性寺設五十賀齋會其儀本堂毗盧遮那如來像云
々
朱雀院五十の御賀なれは五十寺の御誦經ある也
是常例也摩訶毗盧遮那は大日也彼西山の御寺五十
寺の隨一として大日の御誦經ありと云也彼御寺の
本尊大日たる由也をはりにのとゝまりたるうちま
かせてはめつらしき樣なれとも心はきこえたるに
や古今歌にもうつりもゆくか人の心のといへり同
躰也のゝ字にて猶すゑの心こもる也此字めつらし
きにつきて紫明抄なとにも樣々の了見を加へたり
皆以今案義也不足信用也一說云五十寺ハ寺名也云
々是亦謬說也且は一寺にては五十御賀詮なきにや

河海抄巻第十四

正六位上物語博士源惟良撰

第廿一　柏木

巻名　かしは木にはもりの神はまさすとも人なら
すへき宿の梢か

右衛門のかむの君　衛門を柏木と云

なへての世中すさましう

おほかたの我身ひとつのうきからになへての世を
もうらみつる哉

野山にもわくかれむ道のおもきほたしなるへく

古今 いつくにか世をはいとはむ心こそ野にも山にもま
とふへらなれ

古今 いつまてかのへに心のあくかれん花しちらすは千
世もへぬへし

古今 世のうきめ見えぬ山ちへいらむにはおもふ人こそ
ほたしなりけれ

拾遺 御かりする駒のつまつく青つゝら君こそわれはほ
たしなりけれ

たれもちとせのまつならぬ身は

六帖 うくも世に心にものゝかなはぬはたれもちとせの
松ならなくに小野小町

ひとつおもひにもえぬるしるしには

古今 夏虫の身をいたつらになすこともひとつおもひに
よりてなりけり

まくらもうきぬはかり

古今 涙河枕なかるゝうきねには夢もさたかにみえすそ
ありける

いまはとてもえむけふりもむすほゝれたえぬおもひ
の猶やのこらむ

むすほゝれもえむ煙をいかゝせむ君たにこめよな
かきちきりを

この世をものちをもいかに／＼せむもえむ煙のむ
すほゝれつゝ

人やりならぬやみにまとはむみちのひかりにもし侍
らむ

古今 人やりのみちならなく(なイ)におふかたはいきうしとい
ひていさかへりてん

しゝうにもこりすまにあはれなることゝも

古今 こりすまに又もなき名は立ぬへし人にくからぬ世

にしすまへは

われも今日かわすかの心ちして

人の世をおいをはてにしせましかはけふかわすな

といそかさらまし

つしやかなるにしもあらねと　おもく〵しからぬ心

歟

かしこきおこなひ人かつらき山よりしやうしいてた

る

或物語云役君小角住於葛城山相傳云能使鬼神汲水採薪若不用命即以咒縛之云々　文武天皇代人追此事歟役「優婆塞の跡を住云々」

そこはかとなく物をのみ心ほそくおもひ

神無月風に紅葉のちる時はそこはかとなく物そかなしき

おむみやうしなともおほくは女のりやうとのみ　陰陽師　定家卿幷親行本にはおむみやうしと書之伊勢物語におんやうしとかけりおんやうしかんなきよひて戀せしといふはらへとありうつほ物語云宮おとゝにきこえ給このほとかくわつらふを物とはせつれは女のりやうとなんいひける

まふしつへたましく　まふしは目也つへたましくはつへ〳〵しきなとやうなる心歟

たらによむを　陀羅尼

さる御しうの身にそひたるならは　御執　執心也經諸佛既離我執といへり菩薩まてはいまた執をはなれさる也

あやまちをひきいてゝひとの御名をたて身をもかへりみぬたくひむかしの世にもなきことにやはありける

伊勢物語云かゝるほとにみかときこしめしつけて此おとこをはなかしつかはしてけれは此女のいとこのみやす所五條后號大息所　女をはまかてさせてくらにこめてしほりけれはこもりてなく

あまのかるもにすむ蟲のわれからとねをこそなかめ世をは恨みし

まとひそめにしたましゐの身にもかへらすなりにしをかの院のうちにおくかれありかはむすひとゝめ給へよなと

思あまり出にし玉のあるならむよふかく見えは玉むすひせよ

戀わひてよな〱まとふわか玉は中々身にもかへらさりけり

からのやうなるさまして

うつせみはからを見つゝもなくさめつふか草の山けふりたにたて

見し夢を心ひとつにのみおもひあはせてまたかたる人のなき　見若菜卷下

けふりくらへに

あやしき鳥のあとのやうにて

蒼頡觀鳥跡作文字史記　帝王世記曰蒼頡又取像鳥跡始作文字史官之作蓋自此始記其言行策而藏之名曰書契

ゆふへはわきてなかめさせ給へ

いかなるむかしのちきりにていとゝかゝることしも心にしみけんと

わかれてふことはいろにもあらなくに心にしみてわひしかるらむ

れいはむこにむかへすへて　無期

はむ僧とものなかに　伴僧　花嚴經曰互爲伴文臺上盧遮那は主葉中葉上の億千の釋迦は伴也

この世にてかく思ひかけぬことにむかはりぬれはのちの世のつみもすこしかろみなんや

要集云有智之人以智惠力能令地獄極重之業現世輕受愚癡之人現世輕業地獄重受轉重輕受出彌鉢經

御かゆとしき五十具

圍碁屯食等事勘若菜卷

ところ〱のきやうゐむのちやうのめしつき所

所々饗　廳召次所

みやつかさ大夫よりはしめて　宮司　中宮職

さはれ　さらは也

朱雀院夜にかくれていてさせ給へり

李部王記云延長八年九月廿八日申剋法皇御加持院奉訪上先是上詔侍臣令辨備法皇御座用大床子二脚鋪物上加褥々奉詔役上法皇臨御座傍脇息及誘靈男女別々なれとも法皇臨幸加持事勅相似歟此時御法名事あり

このみちのやみになむ侍けれは

六帖人のおやの心はやみにあらねとも子を思ふ道にまとひぬるかな

をくれさきたつみちのたうりのまゝならて　道理

またけんつくはかりのをこなひにもあらぬに

驗付寛平法皇御加持事歟

おとゝのきみ　源氏院號以後也この巻にもわるしの院ともあり又おとゝとも多くありたゝ女房なとの日比申つけたるまゝに申たるよし歟又殿の心歟此物語の中にもかやうの事おほし

なとかくいくよしもあるましき身を（古今）（そもイ）

いく世しもあらし我身をなとてかくあまのかるもにおもひ亂るゝ（古今）

またしる人もなくて

枕より又しる人もなき戀を涙せきあへすもらしつるかな（古今）

こやの御かちに御ものゝけいてきて（後長）（加持）　宮息所怨靈歟（六條）

人ひとりをはとりかへしつとは紫の上の事を云歟

いまはかへりなんとてうちわらふ　榮花物語に小一條院女御顯光公女の物氣にて御堂の御女のひさしくわつらひ給てついに御くしおろさせ給ふその時邪氣人につきていまこそうれしけれとて手をうちてわらひくるふよしみえたり此事歟

こなたにいらせ給へいとらうかはしきさまに待つみはをのつからおほしゆるされなんとて　榮花物語衆田殿御病の中に關白になり給御よろこひに小野の宮殿まいり給へりけるをもやの御すをおろしてよひ入たてまつり給へりふしなから御對面ありてみたり心ちいとあしう侍てとにはまかりいてねはかくて申侍なりとしころはかなきにつけても心のうちによろこひ申事なく侍つれとさせる事なきほとはこと〳〵くにもえ申侍らてなん今はかくまかりなりて侍れは公私に付て大小事も申合せんと思給ふれは無禮をもはゝからすかうらうかはしき方に案内申つるなとこまやかにの給へとことはもつゝかす御いきさしなといとくるしけなり風のみすを吹あけたるはさまよりみいれ給へは御いろもたかひてきらゝかにおはする人ともみえす事のほかに不覺に成給へり

病中の任官臥なから客人に對面の事以下あまた相似たり

さらほひたり　皺（サラホフ）莊子

をくれさきたつへたてもなくてこそ

すゑの露もとのしつくや世中のをくれさきたつためしなるらん遍昭僧正

うつし心もうせたるやうにて　現心
君につかうまつる事もなかはのほとにて
禮記に五十指仕といへりなかはゝ柏木權大納言今
年廿五六の程歟
院の御賀のかくその心みの日　御賀試樂の日也
いかなるさうけむ　讒言
ろなう　無論
このかうしゆるされ侍らんなむ　考辭　勘事歟
けふあすとしもやはとみつからしらぬ命のほとを思
ひのとめ侍ける
伊勢物語伊行尺つゐに行道とはかねてきゝしかと昨日けふとは思
はさりしを
今日不知死明日不知死何故造作栖安穩無常身　雪山
鳥唱云
やむくすりならねはいとかひなきわざになんありけ
る
われこそはみぬ人こふるやまひすれあふよりほか
にやむくすりなし
たゝあはのきえいるやうにてうせ給ぬ
世皆不牢固　如水沫泡焔法花經

幻世春來夢　浮生水上泡　白氏文集
古今水のあはのきえてうき世としりながらなかれて猶
もたのまるゝ哉友則
中務集うきながらきえせぬものは身なりけりうらやまし
きは水のあは哉
御いかにもちゐまいらせ給　五十日餅也
大鏡云延喜此御時そかし村上御かと生させ給へる
御五十日の餅殿上へいたさせ給へるに伊衡中將の
歌つかうまつり給へるはとておほゆるめる
ひとゝせに今夜かそふるいまよりはもゝとせまて
の月かけをみん
とよめりし御返し御門のせさせおはしましけるか
たしけなさよ
いはひつることたまならはもゝとせの後もつきせ
ぬ月をこそみめ
うちにもとにもことの心をしらねはとりちらしなに
心なきをいと心くるしくさはゆきわざなりやと御ら
んす
六條院入道みやのわかきみ右衛門督の子なるにか
やうにもてなさるゝをさはゆきといへる歟　一説

云たとひ柏木の子なりとも女三宮の御腹致仕の大臣の孫也あなかちにさほとまはゆかるへきにはあらすいまた右衛門督の五句の中なるにかやうの祝の儀あるを冥加のため心くるしくとある歟

御くしをはおしみきこえてなかくそきたれは　垂尼也

いまやういろなときたまひて　今様色紅也聴色ともいまやう色ともいふ也見延喜式紅にならへてはゆるし色と云紅に擬する時はいまやう色と云也水原抄

とりかへす物にもかなやとうちなけき給て

古今 とりかへす物にもかなや世中をありしなからの我身とおもはん

明石中宮 女御の宮たちはちゝみかとの御かたさまにわうけつきけたかうこそおはしまさへ　王氣付或王家　おはしまさへはおはしませ也

後撰 けふそくをおさへてまさへ萬代に花のさかりを心しつかに仁教僧都

まなこゐ　眼子遊仙窟　又肝髏　横波　眼尾なとかけり

しつかに思ひてなけくにたえたりとうちすし給五十八をとをとりすてたる御よはひなれと末になりたる心ちし給ていと物あはれにおほさるなれちからゝにいさめまほしうおほしけむかし

五十八翁方有後　靜思堪喜亦堪嗟　持盃祝願無他語　愼勿頑愚似汝爺白樂天自嘲詩

樂天は子なくして老にのそむ人也五十八にしてはしめて男子を生すむまれたる事おそきによりて生遲となつくそれにむかひて作りける詩なり六條院源氏イは四十八にて薫大將を生する也五十を十とりすてたるとある本あり僻說也

伊行釋云しつかに思ひていとふにたらんとかきて白氏文集の此身何足厭一聚虛空塵といふ句を載たる僻事也

わか御とかあることはあへなんふたついはむには女の御名こそふひんにいとをしけれなとおほして

あへなんはありなん也二をいはゝ男のためよりも女の御ためふびんなりといふ也一說云源氏かゝるふるまひをしたる我とかも二事ありと思いて給歟薄雲女院朧月夜尚侍事歟云々此說不相叶

たか世にかたねをまきしと人とはゝいかゝ岩根の松

はこたへむ
古今 あつさ弓いそへの小松たか世にか萬世かけてたね
をまきけん
ひれふし　蹀臥
はかなくすきにけるひかすをもしり給はす
物おもふとすくる月日もしらぬまに鴈こそ鳴て秋
もつけくれ
なかくくみちさまたけにもこそとて
拾遺 思ふことありてこそゆけ春霞みちさまたけにたち
なかくしそ
このみ給したかむまなと　大鏡云延喜相撲節のとま
らんか口惜にと仰られけれと九月にうせさせ給て
九日の節はそれよりとゝまりける也其日左衛門陣
の前にて御鷹ともはなたれける也
かきりありけれはきこえさせやるかたなうてよのつ
ねになり侍りにけり
戀しさはうき世のつねに成行を心はなをそ物思ひ
ける
神わさしけきころほひ　神(カミワサ)日本紀　神態
うきにもうれしきせはまし侍にけるとて

うれしきもうきも心はひとつにてわかれぬ物はな
みたなりけり
あまり世のことはりを思しりものふかくなりぬる人
のすみすきて
紫明抄 とにかくに物はおもはすひたゝくみらつすみなは
のたゝひとすちに
水原抄云大きなる心也　案之本文はまことに大き
なる事にいひたれとも本意はよき事もあまりすき
ぬれはかへりて不○(中イ)用なるよし也秘説あり
あいたれてそ物し給し　なよひすきたるけはひをい
ふ歟
ことしはかりはとうちおほゆるも
古今 ふかくさの野へのさくらし心あらはことしはかり
は墨染にさけ峯雄
あひみむことはとくちすさみて
古今 春ことに花のさかりはありなめとあひみんことは
命なりけり
このはるはやなきのめにそ玉はぬくさきちる花のゆ
くゑしらねは
古今 あさみとりいとよりかけてしら露を玉にもぬける

春の柳か遍昭
後撰よりわはせなくなるこゝろをいとにして我か泪をは
玉にぬかなむ

おやのけうよりもけにやつれ給へり
孝經曰孝子之喪親也父母没斬衰居憂謂之喪親也　哭弗依禮亡容斬衰之哭其聲若往而不反無依違餘音也喪事質素無容儀所以主於長也
親の喪にかたちつくろはすとみえたりそれよりも猶いま前後相違の歎にやつれたりとなり　一義云譏イ致仕大臣をはもとより三條宮の六條院に對面の時も大様なるよしを申されたりされは母宮の孝養の時よりも此時は猶なけきやつれたりといふ歟

いとゝしく春雨かとみゆるまてのきのしつくにことならす

空をわふきてなかめ給へる夕暮の雲のけしきにひ色にかすみて
ゆふくれの雲のけしきをみるからになかめしと思ふ心こそつけ
木の下のしつくにぬれてさかさまに霞の衣きたる春かな

ひとつ色なるよものこすゑも
みとりなるひとつ草とそ春はみし秋は色々の花にそ有ける

物思ふやとはよろつの事につけて
なきわたる鴈の泪やをちつらん物思ふ宿の萩の上の露

ひとむらすゝきもたのもしけにひろこりてむしのねそはむ秋思やらるゝ
古今君かうへし一むらすゝき蟲の音のしけき野へとも成にけるかな有助

いよすかけわたして　伊豫簾　蘆簾也
かさみのつま　汗衫

柏木とかへてとのものよりけにわかやかなるいろしにイて枝さしかはしたるをいかなるちきりあるにかすゑあへるたのもしさよなとの給ひて　在レ地願爲ニ連理枝一長恨歌　ことならはならしの枝にならさなん葉もりの神のゆるし有きと
柏木に葉守の神はまさすとも人ならすへきやとのこつえイしつ枝か
後撰柏木に葉もりの神のましけるをしらてそおりした

ゝりなさるな
大和物語云枇杷殿左大臣仲平よりとしこか家に柏木のありけるをおりにたまへりけりおらせてかきつけてたてまつりける
我宿をいつならひてかならの葉のならしかほにはは折におこする侈子(ネイ)
大臣御返し
かしは木に葉もりの神のましけるをしらてそおりしたゝりなさるか　此贈答の心歟
葉守の神は樹神の名也基俊云葉守神はなへての木をは非守唯柏をのみ守也弘仁式の三綱柏の所に委見云々雖然古人皆餘木に詠之如何奥義抄
俊成卿自筆本にはかしは木定家卿本にはかしはきと有如何
おもほしなけくは世のことはりなれと
秋風のふけはさすかにわひしはた世のことはりとおもふ物から
みるめより
古今
いせのあまのあさな夕なにかつくてふみるめに人をあくよしもかな
そゝろか　実(スルト)也　たけたかき姿也

右將軍がつかにくさはしめてあをしとくちすさひて
それもいとちかき世の事なれは
本朝秀句
天與善人吾不信右將軍墓草初秋紀在昌
八條
右大將保忠事を作れる詩也左大臣時平息母基康親王女　仍近代と云也此韻字本詩は秋とあるを今あらためて青と誦せられたる其心優美なる者歟夘月の比なれは秋の字にては季節相違す青の字にて時分も物にかなひ本詩の心も違はす眼前の景氣も浮へり詞に庭はやうやう青み出る若草みえわたりこゝかしこのすなこのうすきものゝかくれ〳〵のかたはよもきもところえかほ也とあり　如此事又准據なきにあらす四條大納言公任撰の和漢朗詠に陰森枯柳疎槐春無春色獲落花牖壞字秋有秋聲とあるは公乘僑(信イ)か連昌宮賦の中の一句也賦には東韻の別にて有秋風とあるを色與風爲對に思はれけるにや聲字にとりかへられたり色聲の對もこまやかに風の心もありて興あるよしいひつたへたりこの物語にも霜花重を白と誦したる所もあり大方郢曲の故實にもかやうの事おほし中比の先達の所爲なれとも是も定上古よりの口傳たる歟大納言成通齋院に參て御遊ありける

にうへ木をせしことはうくひす鳴せむとにもわらすくつ〱ほうしをなめすへてときやうせさせむとそ思と云今様を當座にうたひかへてかうなきめをなめすへてそめかみよませんとうたひたりけるを時の人感しけると云り妙音院相國出家の後は昔爲京洛聲花容と云朗詠の下句をは江湖潦倒僧たりとせられけり本文を變て景氣を誦する事不可勝計

あたらしからぬは　惜アタラシ

第廿二　横笛

卷名　よこふえのしらへはことにかはらぬをむなしく成しねこそつきせね

御心のうちに又心さし給てこかね百兩をなむへちにせさせ給ける

李部王記云天慶十年三月十九日御八講結願太皇太后御柏殿設法華八講　參入于時夕講也余修誦調布百端南侍沙金百兩納瑠璃壺等一口北講畢

薫大將のために柏木大納言の追善を別にせらるゝ也

山の御かとは二宮もかく人わらはれなるやうにて

朱雀院　二宮落葉宮也

みてらのかたはらちかきはやしにぬきいてたるたかうなそのわたりのやまにほれるところなとの山さとにつけてはあはれなれはたてまつれ給

逆筍未抽鳴鳳管盤根纔點臥龍文朗詠

尋泉上山遠看笋出林遲白氏文集

大宮日記云延長六年亭子院よりたかうなたてまつれ給へり御使よしふかいねりの大うちき給

河花 冷泉院へたかうなたてまつらせ給とてよませ給ける

花山院御製

世中にふるかひもなき竹の子はわかつむとしをたてまつるなり

御返し　冷泉院御製

としへぬる竹のよはひはかへしてもこの世をなかくなさんとそおもふ

拾遺十六 春ものへまかりけるにつほさうそくして侍ける女とものへに侍けるをみてなにわさするそととひけれはところほるなりといらへけれは　賀朝法師

延喜比定額御導師

春のゝにところもとむといふなるはふたりぬ(ねイ)はか
りみてたりや君
返し　　　　　よみ人しらす
春のゝにはる〳〵みれはなかりけり世にところせ
き人のためには
いとかたきわさになむあるときこえ給へるを
地藏本願經曰父子至親岐路各別縦然相逢無肯代受
御まへちかきらいしともを
罍子　又櫑子和名　罍子同上　罍(音雷又作鐳)　玉罍遊仙窟　た
かつきのすかたにて上はぬりをけのふたをわをの
けたるやうなる物也をきふちをたかくしたる物也
內は朱漆外は黑漆也螺鈿樣々也菓子なとを入らる
ゝ也內藏寮へ被納之
詩ニ金罍とあるは酒罇也もたいと訓之禮記山罍其
形似壺容一斛刻而畫之爲雲雷之形也云々
韓詩云天子以玉飾諸侯大夫皆以黃金士以梓是等皆
酒器也然而我朝檜皮形歟
けふかあすかの心ちするを
(拾遺十九)けふかともあすともしらぬ白菊のしらすいく世を
ふへき我身そ

うき世にはあらぬ所のゆかしくてそむく山ちに思こ
そいれ
(拾遺無名)世中にあらぬ所もえてしかなとしふりわたるかた
ちかくさん
いとらうたけにしろくそひやかになきをけつりて
つくりたらんやうなりかしらはつゆくさしてことさ
らにいろとりたらんこゝちして　楊柳を白色にたと
へ鴨頭草花をあをき色によそへたりともに現量歟
いとあはたゝしうとりちらして　うつほ物語いぬ宮
はいらて給て物ともにとりかゝり給てつかみこほ
し給へはちゝ君この人こそいとまさなけれかゝる
わさはせぬ物そや
まみのひらかにはつかしう　展眉(物思なき躰歟惣して柔和の姿也云々)
花のさかりはありなめとうちまほりきこえ給
春ことに花のさかりはありなめとあひみんことは
命なりけり
うきふしもわすれすなからくれ竹のこはすてかたき
物にそ有ける
(古今)いまさらになにおひいつらん竹のこのうきふしし
けき世とはしらすや躬恒

秋のゆふへの物あはれなるに
拾遺春はたゝ花の一へにさくはかり物のあはれは秋そ
まされる
おさなき君たちなとすたきあはて給にならひて
あしかものすたく池水まさるともゐせきのかたに
われこひめやは貫之
多集萬葉　潜同上　には鳥のすたく
せんさいの花ともむしの音しけき野邊とみたれたる
ゆふはへをみわたし給
古今藤原利基朝臣右近中將にてすみ侍ける曹司の身ま
かりて後人もすまますなりにけるに秋の夜更て物よ
りまうてきけるつゐてにみいれけれはもとありし
せんさいもいとしけくあれたりけるをみてはやう
そこにはへりけれはむかしをおもひやりてよめる
君かうへし一むらすゝきむしの音のしけき野へと
も成にけるかな御春有助
ことのをたえにしよりのち
後拾遺なき人はおとつれもせすことのをゝたちし月日そ
めくりきにける
昔伯牙鐘子期といひて二人の琴の好手ありけり鐘
子期死して後いまはきゝしる人あるましけれはよ
しなしとて伯牙絃を絶てひかさりし事也
むかしの御わらはあそひのなこりをたに
おもふとはつみしらせてきみゝなくさわらはあそ
ひのてたはふれより
世のうきつまといふやうになん
あさちふの小さゝかはらにをく露そにのイ世のうきつま
と思みたるゝ
かきりたにあるとうちなかめて　いかて世をうらみ
はつへき伊行尺　としへて物は思はさらまし奥人
戀しさのかきりたにある世ならせはつらきをしゐ
てなけかさらまし
さらはこゑにつたはる事もやときゝわくはかりなら
させ給へ
琴の音をきゝわく人のあふなへにいまそたちいて
ゝをゝもすくへき
こゑにつたはるとは笛の音にもふることはつたは
るとありし心歟
みゝをたにあきらめ侍らんと　如聽仙樂耳暫明琵琶引
しかつたはるなかのをは　和琴第二絃也

月さしいてゝくもりなきそらにはねうちかはす鴈か
ねもつらをはなれぬうらやましくきゝ給らんかし
古今 しら雲にはねうちかはしとふかりの數さへみゆる
秋の夜の月
秋風につらをはなれぬかりかねは春はくるともか
へらさらなん
風はたさむく物あはれなるにさそはれて
はたさむく風は夜ことに吹まさる我かおもふいも
はをとつれもせす
さうふれんをひき給　相夫戀 摂イ　平調也
ことにいてゝいはぬもいふにまさるとは人にはちた
るけしきをそみる
心にはしたゆく水のわきかへりいはて思ふそいふ
にまされる
玉のをにせむ心ちもし侍らぬのこりおほくなんとて
古今 かたいとをこなたかなたによりかけてあはすはな
にを玉のをにせむ
かゝるよもきにうつゝるゝもあはれにみ給ふるをみ
さきにきおはむこゑなむよそなからもいふかしう侍
ときこえ給へは

いまの笛の音の大將の穏聲にあらそふへきといふ
也きおふはあらそふ也
むかしをしのふひとりことはさてもつみゆるされ侍
けりこれはまはゆくなとていて給に　ひとりことは
琴によそへたる也　まはゆくは昔の右衛門督の笛
の音におもひくらへられむとまはゆしといふ也
よこふえの　横笛一聲天地秋
いもと我と入さの山のところはいとおかしうてひと
りこちうたひて
以毛土安禮土以留佐乃也万乃山安良々支天名止利
不禮曾也可保萬左留可爾也止久末左留可爾也催馬
樂呂妹與我
かゝる夜の月に心やすく夢みる人はあるものか
古今 かくはかりおしとおもふよをいたつらにねてあか
すらん人さへそうき
ふえ竹にふきよる風のをとならはすゑのよなかきね
につたへなん
拾遺 おもひそめしねよりそしるき笛竹のすゑの世なか
くならん物とは
このきみいたくなき給ひてつたみなとし給へは　現ツタ

吐ミ

夜ふかき御月めてに

おほかたは月をもめてしこれそこのつもれは人の老となるもの

まことにこのきみなつみてなきわかし給つ　煩ナツミ萬葉

かのとちめの一ねんのうちめしきもしはあはれとも思ふにまつはれてこそはなかき世のやみにもまとふわさなゝれかゝれはこそなに事にもしふはとゝめしと思ふ世なれなとおほしつゝけてをたきにす經せさせ給

とちめは閉眼時分也　臨終一念生處是定釋文　貫之集世中心ほそくおほえてつねの心ちせさりけれは源公忠朝臣許に此歌をなんよみておくりけるあひたことに病おもくなりてむなしくなりにけり

手にむすふ水にうつれる月影のあるかなきかの世にこそ有けれ

返しせむと思しもせぬほとにうせにけれはきゝおとろきてあはれかりてかのおくりし歌の返よみくはへてをたきに誦經せさせて河原にてやかせけるとそ

こなたにも二宮のわか君とひとつにましりてあそひ給を

二宮は今上御子蜻蛉巻に式部卿　若君は薫大將也おほやけの御ちかきまもりをわたくしのすいしむにりやうせむとあらそひ給に　近衞大將也隨身も近衞の被官なれはわたくしの隨身と云歟

宮のわか君は　薫大將也

ふたあひのなをしのかきりをきて　二藍直衣也

かきりをきてとはおさなき人こと衣裳をはぬきすて直衣はかりをきてといふ也おひしとけなき姿也

ことなのりいてくる人たになきと　子也

式部卿萩宴事　可勘

此式部卿宮誰人歟陽成院の御傅とあれは彼皇子歟然者元良親王二品式部卿母王氏元利親王三品式部卿母同兩人の間歟但此人々強管絃之名譽不聞如何　案之南院式部卿貞保親王事歟此大王絲竹之長者陽成院御弟也尤有其寄乎又云式部卿宮は樺齋院父桐壺帝御弟也事歟彼を貞保親王に擬する歟

かのゆめはおもひあはせてなむきこえ給へきよるかたらすとか女のつたへにいふなりとの給て　孫眞人

云夜夢不須說　女のつたへとは夢を信するは兒女子やうの物所好歟

並　鈴虫

卷名　おほかたの秋をはうしとしりにしをふりすてかたきすゝむしの聲

花つくえのおほひなとのおかしきめそめもなつかしうきよらなるに

花机覆練文紗目染也　應和元年五月十八日御記曰　經横各置花足下机加花文綾覆二色綾地敷

よおもて　四面也

法華のまたら　曼陀羅

みやうかうにはからの百ふのくのえかうをたれ給へり　百歩香也

あみた佛けうしのほさつをの〳〵ひやくたむしてつくりたてまつりたる

阿彌陀　脇士　菩薩　觀音勢至也

唐太祖大武皇常爲太祖元皇帝元貞皇后造栴檀等身像三軀　延喜式盧舍那幷脇侍菩薩栴檀像一合龍

あかのく　閼伽具　閼伽梵語也

かえうのほうをあはせたる名かうみちをかくしほゝろけて

荷葉方　蓮華によそへての故に此方をあはせらるゝ歟蜜をとゝめて抹香のことくにたかるゝ歟ほゝろけはほろ〳〵としたる事也

けかけたるかねのすちよりも　計又堺　金ちむのけそくのつくゑにすゑてほとけの御おなしちやうたいのうへにかさられ給へり　沉花足机也

御おなしは頂也ちやうたい頂戴也一說云同帳臺歟經の机を佛の頂上に案すへからさる也此卷始にもよるの御帳のかたひらを四おもてなからあけて法花の曼陀羅懸られたりと云々佛のおはします同御帳の内に經机を案置せられたる歟云々

きやうかうの人々　行香事　見賢愚經云々

みねよりけにくゆりみちいてたるは

關白朝座夕座中間結願朝暮兩座訖被行之諸卿人數或八人或四人也

よしのちの世にたにかの花のなかのやとりにへたてなくおもほせとて

一々池中花盡滿花々惣是往生人各留二半座一垂二花葉一待レ我閻浮同行人五會讚

七そうのほうふく　七僧法服講師 讀師 咒願 三禮 唄 散花 堂達謂之七僧 御記云天德四年六月九日丁丑 此日理子內親王家於圓城寺修四十九日御法事其佛經具及七僧法服料物等預給令調備使左近少將伊陟誦經布施調布二百端又差侍臣五六人宛行香役

あやのよそひにて　粧也裝束の事也

さえもすくれゆたけきさきらを　舌サキラ　辨舌の事也

ゆふへのてらにをきところなけなるまてところせきいきおひになりてなむそうともはかへりけり

蒼茫霧雨之霽初寒汀鷺立重疊煙嵐之斷處晩寺僧歸　閑賦

けにありはてぬ世いくはくあるましけれは

ありはてぬ命まつまの程はかりうきことしけくおもはすもかな

みふの物とも國々の御さうみまきなとよりたてまつるものともはか〳〵しきさまのはみなかの三條の宮のみくらにおさめ給

令₂諸國₁興田部長倉ミアケ　日本紀

あみたの大す　阿彌陀大咒

くさのやとり　草舍

月のえんあるへかりつるを　延喜御時八月十五夜弘徽殿の萩さきて藏人所のをのことも月の宴し侍ける時の歌拾遺にあり藤原經清イ臣歌

月みるよひのいつとても物あはれならぬおりはなき中にこよひあらたなる月の色にはけに猶我世のほかまてこそよろつおもひなかさるれ

いつとても月みぬ秋はなき物をわきてこよひのめつらしき哉

三五夜中新月色　二千里外故人心白樂天

あらたなる月の色なとあるも旁此句の心ときこえたるにや伊行尺并水原抄長谷雄卿十二廻中句を書載たる參着する也

おほかたの秋をはうしとしりにしをふりすてかたきすゝむしの聲

すゝむしのこゑみたれたる秋の野はふりすてかたき物にそ有ける敏行朝臣

左大辨紅梅右大臣　式部大輔　梅枝左大臣歟不ㇾ入₂系圖₁

おなしくはときこえ給へり

あたら夜の月と花とをおなしくはあはれしれらん

人にみせはや
月かけはおなし雲井にみえなからわかやとからの秋
そかはれる
詞花花山院
心見にほかの月をも見てし哉我宿からのあはれな
るかと
ろくいとになし　禄最無二
夕霧
大將　左衛門督 致仕子也　藤宰相 同　不レ入二系圖一
したかさねはかりたてまつりくはへて　直衣布袴事
西宮抄云上﨟者直衣下着下襲　隨便不常事
いとつねなき世の心ほそさの
古今
戀しなはたか名はたゝし世のなかのつねなき物と
いひはなすとも
おほつかなさのまさるやうに
拾遺
なかめやる山へはいとゝかすみつゝおほつかなさ
のまさる春かな
みな人のそむきゆくすゑの世を
齋宮女御集
みな人のそむきはてぬる世中にふるのやしろの身
をいかにせむ
あさつゆのかゝれるほとは
涅槃經曰亦 如朝露勢不久停　蘇子曰人生一生若

朝露之託於桐葉耳其而幾何豈不惑哉云々　後漢書列傳第三十九王
龔(充)傳
もくれんかほとけにちかきひしりの身にてたちまち
にすくひけんためしにも　目連救母經に見えたり目
連母地獄に墮せしをすくひて次第に餓鬼畜生道よ
り天上に生せし也　盂蘭盆經免一切餓鬼之苦一目
連其云摩訶目健連羅耶那 唐之大族氏　盂蘭盆經云落餓鬼
中目連救母生天經云在大焦勢地獄中二經參差する
歟但救母經大藏目錄外也　或說云初得道眼見母生
所而隨地獄碎骨燒膚

河海抄巻第十五

正六位上物語博士源惟良撰

第廿三　夕霧

巻名　山里のあはれをそふる夕霧に立出ん空もなき心ちして

まめ人のなをとりてさかしかり給ふ大將　展季 文選
又眞人（まめ人とはまことある人也隨心の人なり）

むかしをわすれぬようゐにみせつゝ　用意

をのといふ所に山さともたまへるに　伊勢物語惟喬の御子頭おろして小野に住給うつほの物語千景の大臣多くこをうしなひて後山里の心ほそけなるとの設給てこのわたりはひえ哀にきこゆる所なり

（律師）りしの山こもりしてさとに出しとちかひたるをふもとちかくてさうしおろし給ゆへなりけり　惠心僧都千日山籠間に安養尼所勞有けるにさかり松まておりあひて對面ことあり猶此事歟小野は比叡坂本也いまの大原也

ことわさしけきをのかしゝの　世中に有人ことわさしけきものなれは古今序

辨のきみはた　柏木權大納言舍弟紅梅右大臣也

清愼公（准我仕大臣）（母寛平御女）　敦敏少將（號人汁柏木）（天暦元年十一月十七日卒年卅母早世時平大臣女）　父公悲歎事見後撰　またしらぬ人もありけり東路に我もゆきてそすむへかりける

賴忠右大臣（准紅梅右大臣）諡廉義公母同敦忠天慶五年十二月十七日侍從七年四月廿二日春宮亮九年九月十三（十六）日左兵衛佐天暦二年正月卅（七イ）日右少將十年三月十四日任左中辨天德四年四月廿二日右大辨々少將右大辨右大臣等事相同歟

僧のふせ上えなと　布施　淨衣

八月中の十日はかりなれは　横笛　鈴蟲　同秋歟 奥入

かりころもにてさふらふ　狩衣　（貫之）かり衣心のうちにほさなくになとかみたれて物思する

松かさきのをやまの色なともさるいはほなれと　松崎山 山城國

しむ（壇）てむとおほしきひむかしのはなちいてにすほう（修法）のたむぬりて（塗）

（寝）宮の御かたのすのまへに　簾前也

すく〳〵しうおれてとしふる人は　おれさる也

心くるしき御なやみを身にかふはかりなけきゝこえ

させ侍るも　私云未得師説若三日目のいたはしき心歟散花を身にかふはかりおしめともかなはてとしの老にけるかな

日入かたに成行まゝに空のけしきもあはれけに霧渡て山のかけはをくらき心ちするにひくらしの鳴しきりてかきほにをふるなてしこの　ひくらしの聲もいとなく聞ゆるは秋夕暮になれは成けり

日くらしの鳴つるなへに日はくれぬと思へは山のかけにそありける

我のみそあはれとはみる日くらしの鳴夕暮のやまとなてしこ　あな戀し今もみてしか山かつのかきほにさけるやまとなてしこ

ふたむ經よむ時かはりて

きりのたゝこゝもとにまて立わたれはまかてむかたもみしらす　漢書に陰陽みたれて霧になるといへり

山さとのあはれをそふる夕霧にたちいてん空もなき心ちして　夕霧に衣はぬれて草枕旅ねするかもあはぬ君ゆへ此歌によりてゆふ霧の大將といへり

雖愁夕霧埋人枕猶愛朝雲出馬鞍山庄秋望 江相公

まとにかへるさはわすれはてぬなか空なるわさかな

いへちはみえすきりのまかきはたちとまるへくもあらす　曹公と云人雲夢澤に行きて大霧に逢てみちを迷失云々　朝ほらけ霧の籬をへたてすはをち方人の袖はみてまし好忠

やらはせ給　逐ヤラフ　日本紀　しれとてやとりもあへすはやらはるゝいといきかたき心ちこそすれ

御つかさのそうよりかうふりえたるむつましき人

右近大夫將監也　右近將監の叙爵したる也

くるすのゝそうちかゝらむ見まくさなとゝりかはせて　さしすきのくるすのをのゝ萩の花ちりなん時に行てたむけん大伴卿

そのこまわれにくさこういさとりかはん水はとりかへ　みまくさとりかへ、まゆとしめ、まゆとしめ、まゆとしめ、まゆとしめ、まゆとしめ、まゆとしめ、まゆとしめ眉止白女呂

くるすのをのゝ近邊也　山城國賀茂社領也

寛仁二年十一月廿五日官符被奉寄賀茂社　御祖社四ヶ郷　蓼倉郷　栗栖野郷　上粟田郷　出雲郷

別雷社四ヶ郷　賀茂郷　小野郷　錦部郷　大野郷

さすかね　かけかねの事歟

いかはかりちゝにくたけ侍る思にたえぬそや　君こふる心はちゝにくたくれとひとつもちらぬ物にそ有ける

ぬれころもはえほさせ給はし　六帖人丸 よとゝもに我ねれきぬに成物をわふる涙のきする成へし　後撰 諸ともに君もほさなんぬれ衣かゝるうき名は我のみそたつ　人丸

心のとはゝいかゝこたへむ

心のとはむにたに　後撰 無名そと人にはいひて有ぬへし心のとはゝいかゝこたへむ

としころ人にたかへる心はせ人になりてさま／＼に心操をたてたるなり

人の物いひかくれなき世なれは　古今 こゝにしも何にほふらん女郎花人の物いひさかにくき世に

玉しゐをつれなき袖にとゝめ置て我心からまとはるゝかな　古今 あかさりし袖のなかにや入にけん我か玉しゐのなき心ちする

ほのかなる物をとかむかしもたくひありけると　身を捨てゝいにやしにけんと思ふよりほかなる物は心なりけり 古今

あさりひとりとゝまりて　律師なれとも修法阿闍梨などゝ云也

あくらうはしうねきやうなれとこうさうにまとはれたる　悪霊　興盛迷 今案纒也

いとせちにもあらぬことなり　大切ならぬなり

いかうにさるへき事　一向

いとやくなし　無益の事云といふ也

ほんさい年比つよく物し給　本妻　うつほ物語を大臣と只いまかれひとつをなんもて侍る本妻ともみなわすれ侍てとかうし給へは

そうるい　總類

もはらうけひかす　專

このふつか三かはかり見たてまつらさりつるほとのとし月の心ちするも　一日不見如三月 白氏文集

見さうしのかためとは　御障子の戸さしのことなり

わかれたてまつりなん後かならすたいめんの侍るへきにも侍らさるなり　万五 一よたに二たひみえぬちゝはゝをゝきてやなかくあかわかれなん

親子は一世の契といふ也

をみなへしゝほるゝのへをいつことて一夜はかりの宿をかりけん　躬恒集秋の野にかりそくれぬる女郎花一夜斗の宿もかさなん

ちゝにものおもひかさねて　或本ちへに
（六帖）心にはちへにおもへと人にいはぬわか戀つまを見
むよしもかな
なを／＼しの御さまや　直人のやうなりと云也下す
めかしき心也
物をちしたるとりのせうやうのものゝやうなるは
鷹の事也小は雄大は雌也雌鳥沓て雄鳥をなやます
といへり女はおこり男はまけたるにたとへたるな
り
かくおきなのなにかしまもりけむやうに　竹取の翁
かくやひめをまほりたる事歟（イ本）　一説韓詩外傳に守
株而伺兎とある事歟云々水原云赫姫の空に登りし
時兼て守しかと翁時にのそみてはほれたりしこと
なりと云々
をこつりとらんの心にて　誘（ヲコツリ・コシラフ）　攎（ヲコツル）
かねてよりそならはし給はまし　兼てよりつらきを
人にならはさて俄に物を思はするかな
みとりの袖のなこりあなつらはしきに　大夫乳母六
位宿世といひしことなり　（拾遺）松ならは引人けふはあ
りなまし袖のみとりそかひなかりける

あさりとして　求歟　搜也
むねはしりて　（古今小町）人にあはん月のなき夜は思をきてむ
ねはしり火に心やけゝり（を）
けんきなきふみなめりと　無嫌疑（うたかひなき）也
一夜のみやまかせに　落葉ノ宮ヨリ歸給シチ風ノ心地トノ給シテ深山ニ宮マ風ニコトヨセテノ給事
也
大將なやましうてとあるを三條の（雲井ノカリ）上のあさけりて
一條の宮によそへてみやま風といへり（有襲イ）尤巧也
このふみをあたえ（にイ）かくしていてや我ならはしそやと
さま／＼　あたにとりかくして也　（古今）海士のかるもに
住蟲の我からと音をこそなかめ世をは恨めし（みイ）
いかならむかん日にもありけり　九坎日
みまやにあしとき御むまにうつし（移鞍）をかせ給て　駿足
馬
たゝ人たにすこしよろしくなりぬるをんなの人ふた
りとみるためしは　忠臣不事二君　貞女不見二夫
我あやまちならぬにおほ空（さうい）をかこちて　身の憂を世
の憂とのみなかむれはいかに大そうくるしかるら
ん或云おほそら歟大惣也
にしのひさしをやつして宮はおはします　國史云延

暦八年十二月皇太后宮崩天皇錫紵避正殿御西廂幸
皇太子及群臣擧哀
いのちさへ心にかなはすといとはしうゐみしうおは
す　命さへ心にかなふ物ならはしにはやすくそある
へかりける
みねのくすはも心あはたゝしう　風早きみねの葛葉
のともすれは露ちりやすき君か心か
山田のひたにもおとろかす
色こきいねとものなかに　穀穗黃白氏文集
能宣りんたうのわれひとりのみ心なからいひいてゝ　古今
隱題　我宿の花ふみしたく鳥うたんのはなけれはや
こゝにしもくる
つるはみの裳きぬひとかさね　橡ツルリ順和名ト黑色也是に
て黑服を染也又四位以上袍をも是にて染ゆへに
つるはみの衣と云國々より打橡をたてまつる榕に
見えたり　奧に注之
われかの御けしきにてなん　夢にたに何かもみえす
みゆれともわれかもまよふ戀のしけきに
しかのいといたくなくをわれをとらめやとて　秋な
れは山とよむまて鳴鹿に我おとらめやひとりぬる

夜は
里遠み小野の篠原分てきて我もしかこそ聲もおしま
ね　あさちふのをのゝしの原とは近江の名所なり是
は山城の小野をもをのゝ篠原と云也しけき心也
能宣集山城のをのゝ山人里とをみかりの宿りをとりそか
ねつる
をくらの山もたとるましうをはするに　秋の夜の月
の光し清けれはをくらの山もこえぬへらなり
見し人のかけすみはてぬ池水に獨やともる秋の夜の
月　後撰　侍たにイらすなりける人の家にまかりて　なき人
のかけさへ見えぬ遣水の底に涙をなかしてそこし
伊勢
ありしやうにもはひたまはす　奪
うへよりおつるなとやかい給つらむおしつゝみてな
こりもいかてよからんなとかイくちすさみ給へり
六帖いかにしていかによるらんをの山のうへよりおつ
る音なしの瀧
おほしたてけんおやもいとくちおしかるへきことに
かゝる身におほしたてけんたらちねのおやさへつ
らき戀もする哉

心にのみこめてむこんたいしとかこほうし[小法師]はう[房 らイ]のか
なしきものかたりにする
定家釋　無言太子波羅奈王之太子其名休魄容端正生而十三年不言人不聞聲諸臣婆羅門道士等誹謗地下作城欲埋之時大臣休其車前重悲此事太子云我得不言生而欲埋將言怖入地獄自全身不害欲救魂脱苦謗我不言者皆欲生聾盲于時國王夵夫人行迎太子太子曰我昔先身爲國王以正道雖治國有所過墮地獄六萬餘歳苦難忍我怖地獄餘卷舌不言遂請出家父母聞之許之入深山求道命終生兜卒天[太子者釋尊因位也 太子休魄經]無言童子經云尒時城中師子將軍第一夫人孕有德男天於虚空唱大音聲而告之曰童子姿當懷抱潜教思惟經典愼莫宣說世云言談曉了方便度世之法少言勘辭捨身俗事當歸正義不取美辭嚴飾之說童子遥開如是音教未曾啼泣亦不出聲初不自現嬰兒之相至于七日顏貌悅豫無有頻頼衆人未觀視之者無厭或有人言此兒無聲用爲育養父母答曰是非隨宿吾當育之所以者何夵觀此兒威容顏貌端正殊妙巍々難計非是凡庶之所能及實不虚妄於時父母親屬知識見兒無聲因其字之號曰無言於是無言童子漸遂長大至于八歳[見本經幷大集經第]

[十七無言菩薩涅槃經]又或經に飢たる烏蛤をくはへて食せんとするに不破童子是をみていはく石におとしかけて破へしと云々烏をしへのまゝにして食す太子其罪によりて墮惡道後に王子と生る無言太子是也生て十三年まて物をいはす仍て土にうつまんとするに太子のいはく當罪不言當答云々太子は今釋迦如來なり[見妙樂釋]

きのふとけふとおもふほとにみとせあなたの事になる世にこそあれ　三月不見況於三年[毛詩]

さしもやうの物とあらそひ給はんもうたてあるへし
同樣の物といふ心なり朱雀院も御出家あり女三宮又同御さまなれは女二宮のおなし樣に成給はんをとゝめ給也

のほりにしみねのけふりに立ましり思はぬ方になひかすもかな　帝王の崩し給へるをは昇霞なとゝ云義歟

須磨のあまのしほやく煙風をいたみ思はぬ方にたなひきにけり

うらしまのこか心ちのみなむ

丹後國風土記曰日下部首等先祖名三箇川嶼子爲人姿容秀美風流無類斯所謂水江浦島子者也長谷朝倉宮御宇天皇御世嶼子獨乘小船汎出海中爲釣經三日三夜不得一魚乃得五色龜心思奇異置于船中即寐忽爲婦人其容美麗更不可比嶼子問曰人邈遠海底人之誰人忽來女娘微咲對曰風流之士獨不勝近談就風雲來嶼子復問云風雲何處來女娘答曰天上仙家人也女娘曰君宜廻棹赴于蓬萊山嶼子從往女娘教令眠目即不意之間至海中博大之島其地如敷玉其爲歡宴萬億人間於玆不知日暮但黃昏之時群仙侶等漸々退散即女娘獨留双眉接袖成夫婦之理于時嶼子遺舊俗遊仙都既逕三歲忽起懷土之心女娘拭涙歎曰吾心等金石共期萬歲何眷鄉里棄遺一時即相携徘徊相談慟哀遂接袂退去女娘取玉匣授嶼子謂曰君終不遺賤妾有眷尋者堅握匣愼莫開見即相分乘船仍教令眠目忽到本土爰問鄉人曰水江浦嶼子之家人今在何處鄉人答曰吾聞古老等相傳曰先世有水江浦嶼子獨遊蒼海復不還來今經三百餘歲者何忽問此乎乃撫玉匣而感思神女於嶼子忘前日期忽開玉匣即未瞻之間芳蘭之體率于風雲翩飜蒼天于斯拭涙歌曰

等許余蘇爾久母多智和多留美頭能叙能宇良志麻能古賀許等母知和多留

神女遙飛芳音歌曰

夜麻等弊爾加是布企阿義天久母波奈禮所企遠理等母與和遠和須良須奈

浦嶋子傳記曰浦島子者不知何許人蓋上古仙人也齡雖過三百歲形容如童子爲人好仙學與秘術也獨乘釣魚舟常游澄江浦釣魚之處曳得靈龜也靈龜變化忽作美女島子問曰神女有何因緣而變化來哉何處爲居誰人爲祖乎神女曰妾是蓬山之女也妾在昔之世結夫婦之義而我成天仙主蓬萊之宮中子作地仙遊澄江之波上今感宿昔之因而來隨俗境之緣也宜向蓬萊之宮將遂曩時之志願令眼眠島子唯諾隨神女語而須臾之間向於蓬山外雖成仙宮之遊宴而内生舊鄉之戀慕宜還故鄉以繡衣被島子而匿玉匣拳以五綵之錦繡緘以萬端之金玉而誡島子曰若欲見再逢之期莫開玉匣之緘島子乘舟眠目歸去忽到故鄉澄江之浦而廻見舊里桑田變改而家園爲河濱也水陸遷移而山岳成江海水也僅遇於浣衣之老嫗而問舊里故人嫗曰我年百有七歲未聞島子名唯從我祖父之世古老口傳而經數百歲傳

來語曰昔有水江浦島子者而好釣乘舟久游江浦遂不歸來蓋入海中也於是島子悲歎日舊郷之遷變想像仙遊之末央戀慕之情胸臆似求春悲哀之志以府如割不堪悲戀而忽開玉匣于時紫雲出於玉匣指蓬山飛去也島子玉匣開之後紫雲飛之處老太忽來遂不知所終後代號地仙也不堪至感代島子詠七言廿四韻以三百八字曰成篇名浦島傳記于時延喜廿年庚辰八月朔日也

元長の御子のすみ侍にける時にてまさくりになに入て侍にけるはこにかありけんしたおひしてゆひて又こんときにあけんとて物のかみにさしをきていて侍りにける後つねあきらの御子にとりかくされて月日ひさしく侍てありし家にかへりてこのはこをもとなかの御子におくるとて

あけてたになにゝかはせんみつのえの浦島か子をおもひやりつゝ

夏の夜は浦島かこのはこなれやはかなくあけてくやしかるらん

やまとりの心ちそしける　人丸　足引の山鳥のをのしたり尾のなかくしよをひとりかもねん　ひるはきてよるはわかるゝ山鳥のかげみるときそものはかなしき

ひたおもて　面つれなきやうなるこゝろ歟

うらみわひむねあきかたき冬夜にまたさしまさるせきのいはとよ　關のいはとゝはあまの岩戸同事歟古歌にひさかたのいはとの關とよめり八雲御抄云いはとのせきとよむは空なり非關あくと云は夜の明るなり

あやしうよの人こそ物いひさかなき物はあれと　こゝにしもなに匂ふらん女郎花人のものいひさかにくき世に

けんきはなれても　嫌疑

いへつかさたまはり侍なり　家司

いとおにしう侍さかな物をとて　鬼

かしこけれと　あなかしこと云心也ひんなけれと也

たいしとおほいて　大事

君たちすきくうつくしけにて　次々也　近江國湯次庄

さかしたつ人のをのかうへしらぬやうに　賢人も身上の是非をしらさる歟

よみちのいそきよ　日本紀泉門といへりちとゝとと五

音通する也或又黄泉(ヨモツクニ)和の字也　又泉津(ヨモツ)平坂(ヒラサカ)又泉守(ヨモツモリ)道者
をのつからなこみつゝ　やはちきつゝといふ心也
千盤破人乎和爲跡不奉(ハヤフルヒトチナツムトツカマツラヌ)萬葉二
なるゝ身を恨みむよりは松島のあまの衣にたちやか
へまし
後撰 松島やをしまか崎にあさりせしあまの袖こそかく
はぬれしか重之
たはふれにくゝめつらかなり　ありぬやと心みかて
らあひみねはたわふれにくきまてそ戀しき
現人 うつし人にては　かひすらもいもせになれてある物
をうつし人にて我ひとりぬる
とりかへす物ならぬうちに　とりかへす物にもかな
や世中をありしなからの我身と思はん
おもふにかなはぬ時身をなくるためしも侍るなるを
たゝかゝる心さしをふかきふちとおほしなすらへて
身を捨てふかき淵にも入ぬへしそこの心のしらま
ほしさに道濟
世の中のうきたひことに身をなけはふかき谷こそ
あさく成なめ古今
いはきよりけになひきかたきは　初一念　識異ニ木

石一生得レ善生得レ惡仁王經人非ニ木石一皆有レ情白氏文集今
案此等の義にはあらさる歟萬葉第十二卷盤城とか
きていはきとよめり若この義歟不動の心也
ゆかたなとけちかうしつらひて　或説床の高さ三尺
云々養生抄云鬼氣の及はさるほと也云々
床嫌ニ短脚一棊聲閑(イソカハシ)壁厭ニ空心一鼠孔穿朗詠
らてんのと〳〵しきゐやうみえぬ沈のにかいやうの
ものたてゝ　沈二階蠻繪螺鈿ならぬは繪様みえぬと
云也
うすいろのも　裳　。
いとひきゝりにはなやき給へり　ひきゝりとは急に
心みしかきやうなる風情歟ひきゝりはたましゐと
も云也
契あれや君を心に留置て哀と思ふらめしときく　よ朝忠
集 そにわか人をこと〳〵をきしかはあはれともきく
あなうともきく
なみたみつくきにさきたつ心ちしてかきやり給はす
獲麟一句涙與筆倶白氏文集
ないけなとも　内外
なまけやけしとはみたまへと　尤前勘了

第廿四　御法

巻名　たえぬへき御法なからそたのまるゝ世々に
とむすふなかき契に
うしろめたき御ほたしたにとまらぬ御身なれは　紫上子のをはせぬとを云也
しはしもかゝつらはんいのちまつまは　ありはてぬ命まつまのほとはかりうきことしけく思はすもかな
後の世にはおなしはちすのさをわけんと契かはし
一々池中花蘂滿華々惣是往生人各留ニ半座ニ乘ニ花葉ニ待我閻浮同行人　法照禪師五會讃
山水のすみかにこりぬへくおほしとゝこほるほとに
なかなかあさへたる思のまゝのたうしんおこす人には　あさへたるは古人釋云あされたる也云々今案あさき歟へは例のやすめ詞也幻の巻に六條院遁世のことを明石上いさめ申さるゝ詞にさやうにあさへたる事はかへりてかるかるしきもとかしさなともたちいてゝとある返事に　院さまておもひのとめん心ふかさこそあさきにおとりぬへけれと云々同心也

七僧しやうし給てそうふくけさなと　法服　袈裟
ほうもちなとのことをし給　捧物
けにちりのかすのよゝへたる御願にやとみえける
法花の本門五百塵點劫の心也或はいこのかみのとかける本もあり用捨可隨所好
ちりひちの世々のみかすにありへてそ思わつむるともおほかる
しんてんのにしのぬりこめ　塗籠
さうしはかりをへたてゝ　障子
佛のおはするところとをからすおもひやる　佛觀經に阿彌陀佛者此不遠とあり極樂の莊嚴思やらるゝ也
たきゝこるさむたむのこゑにそ　採ニ薪及菓蓏ニ隨レ時恭敬與　法花經提婆品
法花經を我えしことは薪こりなつみ水くみつかへてそえし　行基菩薩
拾遺爲雅朝臣普門寺にて經供養し侍て又の日もろともにかへり侍ける次にをのにまかりて侍けるに花のおもしろかりけれは東宮大夫道綱母

たきゝこることは昨日につきにしをいさをのゝえはこゝにくたさむ
惜からぬこのみなからもかきりとて薪つきなんことのかなしさ　入ニ無餘涅槃一如ニ薪盡火滅方便品　佛化の緣つきて涅槃に入給ふをたとへたりこれより人の茶毘にも云つけたるなり
たきゝこる思はけふを始にて此身にねかふ法そはるけき　採レ菓汲レ水拾レ薪設レ食乃至于時奉事經ニ於千歳ニ提婆品　此身を木の實にそへたる也心はそきすちはのちのきこえも心おくれにと斟酌して千歳給仕の昔のことくに此身なからひさしくねかふへしとたきゝつきなんの歌を同經ふみにて祝の心にとりなされたる心詞尤たくみなる也
もゝ千ちとりのさえつりも　古今 もゝちとりさえつるはるは物ことにあらたまれともわきそふりゆく
れうわうのまひいてゝきうになるほとのすゑつかた　陵王一名羅陵王古樂長曲荒序八帖拍子各一合拍子八破拍子十六絲帖加拍子舞入時吹案摩　序三切破三切ある舞也而破四切中古より八也
通典云大面於北齊蘭陵王長恭才武而貌美常着假面以對敵嘗擊周師金墉城下勇冠三軍齊人壯之爲此舞以効其拍麾擊刺之容謂蘭陵王入陣曲
尾張濱主云高野天皇例好此曲仍奏御前還入時又吹沙陀調入有勅以案麻爲入音聲此古老所傳也　案之陵王急なし如何只早を急になると云歟緩急の急の心歟若或本イ又新羅陵王急歟件曲急上大皷也
たえぬへきみのりなからそたのまるゝ世々にとむすふ長き契を　願我生々見ニ諸佛一世々恒聞ニ深妙典一恒修ニ不退菩薩行一
なたいめむなとをきゝ給にも　名對面后宮行啓儀水原抄山北イ　六府次將以下一員近衞等供奉裝束同行啓其外　宮司兼中少將者帶ニ弓箭一供奉入御之後上卿名對面宮司問之諸衞不レ脱ニ弓箭一著ニ饗座一矣
みときやうなとによりてそ　中宮季御讀經
花のおり／＼には御心とゝめてもてなしあそひ給へさりぬへからんおりには佛にもたてまつり給へなと
若人散亂心乃至以ニ一華一供養於畫像漸見ニ無數佛一法花經　曾非種處思元毫爲是華時供世尊宥家
さるは身にしむはかりおほさるへき秋かせならねと
和泉式部 秋吹はいかなる風の色なれは身にしむはかり人の戀しき

やゝもせはきえをあらそふ露の世にをくれさきたつほとへすもかな　すゑの露もとのしつくや世の中のをくれさきたつためしなるらん
やゝもせは風にしたかふ雨のをとをたらぬ心にかけすもあらなん伊勢物語異本歌
やゝもせはきえそしぬへきとにかくに思みたゝるかるかやの露和泉式部
秋風にしはしとまらぬ露のよをたれか草葉のうへとのみゝん　曉の露は枕にをきけるを草葉の上となにおもひけん高内侍
かくて千とせをすくす世にもかなと　とはぬまは千とせを過す心ちしてまつはまことに久しかりけり
あけくれのゆめにまとひ給事さらなりや
そうかうの中に　僧綱
一日一夜にてもいむことのしるしこそ　一日一夜受ニ持八戒齋ヲ一日一夜持ニ沙彌戒ヲ一日一夜持ニ具足戒ヲ以ニ此功德ヲ回向願求レ生ニ極樂國ニ觀經
御こゑをたにきかぬ事なと　聲をたにきかてわかるゝ玉よりもなきとこにねん君そかなしき古今
からを見つゝもえすくし給ましかりけるそ心うき世の中なりける　空蟬はからを見つゝもなくさめつふかくさの山けふりたにたて
空をあゆむ心ちして人にかゝりておはしけるを　榮花物語云院の女御の御葬送の夜御車の後に院あゆみ續かせ給へり
十四日にうせ給てこれは十五日の曉なりけり　十四日に終焉十五日曉葬送也或抄に十四日は昔の葵上十五日は紫上とある僻事也
をくるとてもいくよかはふへき
すゝの聲にまきらはしてそ涙のたまをもてけち給ける　念珠　涙の珠をひきよせたる尤有興
ほくゑせんほうなと　法華懺法
れいのさほう　作法　南岳大師依ニ普賢行法經ニ作ニ六根懺悔法一奉レ請ニ法華經中一切三寶一懺悔夫切衆玉爲ニ懺悔證明一誦ニ安樂行品初親近段一爲ニ滅罪之方軌一日本慈覺大師渡唐之時持ニ來之一於ニ叡山杉洞一始行レ之云々
やゝましきを　わつらはしきなり　疾ヤヽマシ
身を心とせぬなけきをうちそへおはす　後撰伊勢　いなせともいひはなたれすうき物は身を心ともせぬ世なりけ

り
うすゝみかとの給しいろよりはいますこしこまやかにて　令第九云主君父母夫服一年　葵巻に葵上うせてのち六條院の歌に　かきりあれはうすゝみ衣淺けれは涙そ袖をふちとなしけるとて我さきたゝましかはふかくそゝめ給はましとありしこと也
かれはつる野へをうしとやなき人の秋にこゝろをとゝめさりけむ　霜かれの野へをはうしと思へはやかきほの草と人のあるらむ
（イ本ナシ）おもひたつもありけり　浄名居士も身在家心出家といへり
いまははちすの露もこと〳〵にまさるましく　はちす葉のにこりにしまぬ心もて何かは露を玉とあさむく
涙のこほるゝを袖のいとまなくけふやとのみ我身も心つかひせられて
（拾遺いイ）わひつゝも昨日はかりはすこしてき今日やわか世のかきり成らむ

第廿五　幻

巻名　大空をかよふまほろし夢にたにみえこぬ玉の行ゑたつねよ
春のひかりを見たまふにつけてもいとゝくれまとひたるやうにのみ　（古今）いつくとも春の光はわかなくにまたみよしの山は雪ふる
（イ〳〵）我宿は花もてはやす人もなしなにゝか春のたつねきつらん　（後撰七）なにゝ菊色染かへし匂ふらん花もてはやす君もこなくに
こうはいのしたにあゆみいて給へり　蜻蛉日記云八日に未の時はかりに大臣のおはしますとのゝしれは紅梅の唯今盛なる下よりさしあゆみたるにけなくも有よし打見あけてあな面白のと云つゝあゆみのほり給ぬ
かなしさのあらたまるへくもあらぬに　（古今）百千鳥さえつる春は物ことにあらたまれとも我そふり行く
これよりほかに見はやすへき人もなくやと　（古今）山たかみ人もすさめぬ櫻花いたくなわひそ我みはやさん
すみそめの色こまやかにて　濃　宇（コマヤカ）
おましのわたり引（ヒキ）さけつゝ　遠（サケ）　放（萬葉）振ー　離（同）振ー天ーー

なかころものうらめしうおぼしたるけしきの　女三
宮のおりのことなり
むねよりもあまる心ちし給ふ　憂喜塡胸なと云心也
あけぼのにしもさうしにおるゝ女房なるへし　曹司
也しもはおりしも也
うき世にはゆきゝえなんと思ひつゝ思の外に猶そ程
ふる　拾遺　うき世にはゆきかくれなんかきくもりふるは
心のほかにもあるかな
御ひおけまいらす　火桶
よろしう思はむことにてたに　是もよろしうは中品
の儀也よきほとらかに思はんことにてたにと云也
桐壺巻にあり
袖のしからみせきあへぬまて　後撰　あすかゝは心の内に
なかるれは袖のしからみいつかよとまむ
ほとけなとのをきて給へる身なるへし　掟(チキテ)
とちめ　閉目歟
うなひまつにおほえたるけはひ　文選曰馬鬣(ツナイマツ)松青簇
禮記曰檀弓孔子之喪有自燕來觀者舍於子夏子夏
曰聖人之葬人與人之葬聖人也子何觀焉昔者夫子言
之曰吾見封之若堂者矣(封築土爲壟堂形四方而高)見若坊者矣

(坊形旁殺平上而長)見覆夏屋者矣(覆謂茨瓦也夏屋今之門序也其形旁屋而昇)見若斧者矣(斧形
旁殺双上而長)從若斧者焉(孔子以爲双上難登扶又易爲功)馬鬣封之謂也(俗間名)白
氏六帖曰馬鬣(墓形)大堂前有五鬣松　本朝文粹(第二)
云菅贈大相國詔書(巨勢爲時作)馬鬣年深蒼煙之松雖老龍
光露暖紫泥之草再新　太平御覽云周景式廬山記曰
石門巖即松林也南臨石門洞中仰視之離々駢麈尾號
爲麈尾松西嶺巽然如馬鬣亦葉五粒者名五粒松豫章
記曰徐孺子墓在郡南時杜牧守徐與於墓邊種松(童賢
頌碑)廣州先賢傳曰頓琦(頓イ)至孝母喪琦獨立墳歷年乃就
居喪踰制種松柏成行　鬣(タテカミ)(廣韻云毛鬣長也良渉切)髮鬣
又常陸國風土記に香島郡內に童子女松原と云事あ
り起緣今物語の心にはあいかなはす仍略之水原抄
云大國には人の墓のしるしに小松をならへうふる
事ありと云々若は又峯つゝきなみ木なとにもひと
しくおなしすかたなる松を馬鬣松と號する歟此松
を馬のたちかみにたとへたりたとへはたけひとし
かるへき心也然は紫上のたけすかたに中將君思よ
そへられてたゝならましよりはらう〳〵しとある
歟如何此事俊成卿殊難儀也云々
案之紫上中將の君たけすかたおなしほとにおもひ

よゝへらるゝゆへにうなひ松と號すといへるは不可然者也詞に心はせかたちなともめやすくてうなひまつにおほしたるけはひとありすてに心はせ又けはひといへりたけたちにあらす文選のうなひ松の訓分明なり不審あるへからす禮記に馬鬣は墓の形と見えたり是は若異朝に墳には必松を殖たる事なれは其形馬のたちかみに似たれは云歟
或又童男女又髫髪或は垂髪なと書てうなひとよめはいまた小松の心歟所詮彼墓上の松をなき人のかたみとみるかことくにこの中將の君紫上のかたみにおほえたるなり此外無別義歟

かたくなしき　頑

なみたのあめのみふりまされは　古今 黒染の君か袂は雲なれやたえす涙の雨とのみふる

かの御かたのみこうはいに　万葉 わきもこか植し梅の木みることに心見へつゝなみたなかるゝ
六帖 みるからに袖そひちぬる無き人のかたみにみよとうへし花かは
植てみし花のあるしもなき宿にしらすかほにてきゐる鶯　菅家 こちふかは匂おこせよ梅の花あるしなしとて春なわすれな
古今 梅かえにきゐる鶯春かけて鳴ともいまた雪はふりつゝ

とりの音もきこえさらむ山のすみゆかしく　古今 とふ鳥の聲もきこえぬおく山のふかき心を人はしらなん

山ふきなとの心ちよけにさきみたれたるもうちつけに露しけくのみ見なされ給ふ

かはさくら　朱櫻 和名 樺櫻　朝みとり春のかすみ（けしきイ）はつゝめともこほれてにほふかは櫻哉

きのめくりに丁をたてゝかたひらをあけすは風もえふきよらし　共愁日照芳難駐仍張帷幕垂陰凉 白氏文集 杜丹芳

おほふはかりの袖もとめけむ人よりは　大空におほふ斗の袖もかな春さく花を風にまかせし

まかくしう　枉 日本紀 マカコト 禍

身つから御なをしも色はよのつねなれとことさらにやつしてむもむをたてまつれり　或人云妻服は一期の中に一度着之云々六條院葵上の時已着服の儀あり何重て着せらるへき哉云々案之着服の淺深は志

の厚薄によるへしされは主君の服を一生着する人
在之異朝彼の道武は繦嬰の服を三年まて着しけり
此院もとより宮仕の義にあらす悲歎切なるにより
て重て着し給ふとも何事有哉物忌令曰本妻嫡子生
妻也暇卅日服一年子不レ生レ當レ妾暇廿日服三月云
々若は妾の儀にて三月の服歟幻巻に次年の春みつ
からの御なをしいろは世のつねなれとゝみえたり
又愛にも同く色は尋常（ヨシツ字）なれとゝみえたり旁無文な
る平絹の直衣は凶服ならても前官宿老大臣なとは
着之此院も須磨の浦にては被着之顯露の着服なら
てことさらやつして着せらるゝなり
はなをしみたまふ　（古今）年ふれは齢は老ぬしかはあれと
　花をしみれは物おもひもなし
あさへ給へる　これもあさき歟
うへし人なき春ともしらすかほにてつねよりもにほ
ひかさねたるこそあはれに侍れ　植てみし主なき宿
の櫻花色はかりこそむかしなりけれ　（古今）色もかも昔
のこさに匂へともうえけん人の影そ戀しき
に（イ本ナシ）ほひかさねたるは昔のこさにの歌の心相近歟
たにゝは春もとなに心なくきこえ給を　（古今）光なき谷
には春もよそなれは咲てとく散物思もなし
いのちをもみつからすてつへく野山のするにはふら
かさむに　身は（をイ）すてつ心をたにもはふらさしつゐに
はいかゝなるとしるへく
おほしたつほとはにふきやうにはへらんや　鈍　遲
鈍心也
六條院世をそむくへきよしをの給ふに明石上大か
たのよの人もはしめて道心思たつときはにふき心
なくすみやかなれとをのつから心にかゝるほたし
おほう侍れは心もすみはてぬ事もあるにやこの宮
たちのをとなひ給うこきなかるへき御ありさまに
みたてまつりなし給てみたれなくおほしたつへき
にやといさめ申さるゝ也これをこの比にの字をか
みによみつけて不義に侍らんやとよみて上にした
かはさる心也或又物狂なと云儀侍し程に委しるし
つけ侍也
花の色をみてもまことに心あらはとおほえし　深草
の山のさくらし心あらはことしはかりはすみそめ
にさけ
なく〳〵も歸にしかなかりのよはいつこもつゐのと

こよならぬに　おきもせぬ我とこよこそかなしけれ
春歸にしかりも鳴也赤染
　雁のとこよ載須磨卷是は床によせたる也
雁かゐし苗代水のたえしよりうつりし花の影をたに
みす　雁かのかの字は定事也かりかねと云定也萬葉
にも鳥か鳴あつまといへり　紫式部歌に
いつかたの雲ちとしらは尋ねましつらはなれけむ
かりか行ゑを
さもこそはよるへの水にみ草ゐめけふのかさしよ名
さへ忘るゝ　さもこそはよるへの水にかけたえめか
けしあふひをわするへしやは古今袖中抄
此よるへの水の事先達いろ〳〵に申めり或は賀茂
一社にかきると云々或又餘社にもありと云々八雲
御抄にも社頭にある水歟云々
喜應住吉社歌合に社頭月を清輔朝臣詠云月かけは
さえにけらしなかみかきやよるへの水につらゝゐ
るまて　判者俊成卿云よるへの水といふことは源
氏物語にそかもの祭の日の歌に　さもこそはよる
への水にみくさゐめとよめるを見侍也さらては古
き歌にも見及侍らす此水おろ〳〵承にたとへはい
つれの社にも侍らめと當社御前月には海の面凍を
みかき濱の沙玉をしけらんをゝきてよるへの水は
かりにむかひて月をさらにけりとおもはん事いか
ゝと云々
清輔朝臣陳云よるへの水なとはいつれの社にも侍
るにこそと又歌によめること源氏のみにあらす和
泉式部か集なとは御覽せさりけるにや云々
和泉式部集云稻荷祭みしにかたはらなる車のちま
きなとゝとり入てみくるしきをくるまにとりいれし
ときむのふの少將藏人の少將のいひけるときゝし
を一日まつりみるとて車のまへを過るほといふか
けてとりいれさせ給し　いなりにもいはると聞し
なき事をけふはたゝすの神にまかする　返し　な
にことゝしらぬ人にはゆふたすきなにかたゝすの
神にかくらむ　といひたれはみてくらのやうにか
みをしてかきてやる
神かけて君はあらかふたれかさはよるへにたまる
水といひけむ
此歌を袖中抄に顯昭源氏歌といへり俊成卿の申さ
れたるは源氏みさらん歌讀にやといへり袖中抄に

はよるへの水といへり顯輔卿說云々顯昭云よるへ
の水とは神社にかめをゝきたるにたまれる水也そ
のかめをよるへといふ也神にはよると云事おほか
り託宣には神人の口によりてつき給事也よりきと
みこを申すも神のつきて物をおほせらるゝ物也さ
れはよるへの水といふもこのかめの水に神のたよ
り給て神水とてのみつれはなき事の憶にあらはる
る心也又物つきをよりましといふも同心也又寄占
とかきてはようらとよめり神のより給占にこそ萬
葉に神依板するすきといふ歌あり
神さひのふるえにたまるあま水のみくる井るまて
いもをみぬかも
雨なとの降入てたまる水の事也天水の心也奧義抄
云神社に瓶をおきてそれなる水をなき事おひたる
ものは神水とて是をのむ也たゝすの社なとに今も
有と云々
花たち花の月かけもいときはやかにみゆるかほりも
ちよをならせるこゑもせなんとまたるゝほとに　色
かへぬ花橘に時鳥千世をならせるこゑきこゆなり
まとをうつこゑなと　耿々殘燈背壁影　蕭々晴雨打

窓聲白氏文集
いもかゝきねにをとなはせまほしき御こゑ也　獨し
て聞はかなしき時鳥いもかゝきねにをとなはせは
や
かの心さしをかれたるこくらくのまむたらなと
極樂曼陀羅事　白氏文集云繡西方幀讃序　有女弟
子弘農郡君姓楊號ニ蓮花一性　發ニ弘願一捨ニ淨財一繡ニ
西方阿彌陀佛像及本國土眷屬一部一奉ニ爲故季氏長
姉楊夫人一滅ニ宿殃一追ニ冥祐一也乃至讃曰　金方刹
金色身　資聖力　福幽魂　造者誰　弘農君　受者
誰　楊夫人
當麻寺極樂曼陀羅緣起云右大臣藤原號中將姫豊成
女厭離穢土之志不レ淺欣求淨土之望是深晝夜戀ニ慕
極樂一之依正二報戀慕渇仰之餘手自書ニ寫稱讃淨土
經一千卷一云々不レ願ニ禁中之交遊一遂背ニ人間之榮
耀一爲ニ比丘尼一受ニ如來戒一天平寶字七年六月十五日
發ニ一誓願一一食長齋參ニ籠當麻寺一我不レ見ニ生身阿
彌陀如來一者永不レ出ニ此寺一懇念無ニ二稱名不レ退也
信心切々故感應是不レ空纔經ニ五箇日一同月廿日一
化尼來曰欲レ見ニ生身彌陀一者可レ調ニ設蓮莖百駄許一

言畢去是故申二下宣旨於近國一募二年貢一設二蓮茎一同
廿三日化尼又來伴二端嚴女人一其齡三十許也化尼
與二化女一取二蓮茎繆糸一去寺乾六町許乃至化人令レ堀二
彼清浄之地一靈水忽涌出　浸二蓮絲一於二其水一染　爲二
五色一化女即以二五色蓮糸一廿三日夜自二亥剋一乇二寅
剋一織二極樂曼陀羅一織之間寺乾角有二織レ機之音一聞
化尼與二發心禪尼一相對爰化女織二出曼陀羅一置二兩
人前一懸レ之奉二禮極樂變相一也其分量高一丈三尺廣
一丈三尺三寸也化女放二光明一入レ雲西去化尼暫留
敎變相之功能於禪尼一權化之開導聞レ法銘レ肝　文略抄
極樂曼陀羅女人のために故和漢の先蹤有歟（イ本ナン）これに
よりて今紫上も心さしをかれけるにや　彼まんた
らは尙鹿のまんたらなるへき歟
そこにこそこのかとはひろけ給はめなとのたまふ
于公高門の心歟夕霧大臣子息おほけれは也
いかにしりてかときく人たゝならす　古のことかた
らへは時鳥いかにしりてかふる聲に鳴
いけのはちすのさかりなるを見給に　時移事去樂盡
悲來每至春之日冬之夜池蓮夏開宮槐秋落　長恨歌傳
いかにおほかるなとまつおほしいてらるゝに　かな

しさそまさりにまさる人の身にいかにおほかる（おほかるものはイ）涙
なる（りけりイ）らん
ひくらしのこゑはなやかなるにおまへのなてしこの
ゆふはえ　我のみそあはれとはみる日くらしの鳴夕
かけのやまと撫子
つれ〳〵と我鳴くらす夏の日をかことかましき虫の
聲かな　ひくらしをたゝむしのこゑといへり後撰に
やへむくらしけれる宿は夏むしのこゑよりほかに
とふ人もなしとよめるも蟬のとなり
夕殿にほたるとむてとれいのふるとも　夕殿螢飛思
悄然秋燈挑盡未能眠　長恨歌
ほしあひみる人もなし　金谷園記云七月七日夜灑二
掃於庭一露施二机莚甘酒醋一兼散二香粉於庭上一以
請二河鼓織女一言此二星歡會夜也俗人候レ之或見天
漢中見二奕々白氣壽　裁石反美容也光耀五色一以爲徵　應見者
使拜而願乞レ富乞レ壽乞レ子　六帖
せんさいの露いとしけく　をく露をわかれし君とみ
るからに朝な〳〵そ戀しかりける
風のをとさへたゝならすなりゆくころ　秋は猶夕ま
くれこそたゝならね荻の上風はきの下露

いまゝてへにける月日よとおほすにも　人の身もな（はイ）らはし物をいまゝてにかくてもへぬる物にそ有ける（世にこそありけれイ）
御正日にはかみしもの人々みないもゐして　正日とは四十九日をいふか但是は周忌也いつれも佛事の日をいふ也　齋（イモヰ）　齋食也
君こふる涙はきはもなき物をけふをは何のはてといふらむ　我身にはかなしき事のつきせねはきのふをはてとおもはさりけり
九月になりて九日わたおほいたる菊を御らんして
もろともにをきゐし菊の朝露もひとり袂にかゝる秋かな　明までをきゐる菊の白露はかりの世おもふなみたなるへし（奥入）　もろともにをきゐし菊の露はかりかゝらん物をと思かけきや（後撰）
ふりしかとゝひとりこちおはす　神無月いつも時雨はふりしかとかく袖ひつるおりはかなりき（後撰）
まほろし　まほろしは幻術事也仍術者をまほろしと云也此歌の心は蜀方士か揚貴妃に尋合たりし事也方士は術士の惣名也かりのつはさもうらやましくといへるも彼方士か碧落をきはめて奔こと雷のとしといへる心歟
をみにてゐをすりのすかたとも　小忌　青摺山藍摺也
いにしへあやしかりしひかけのおりさすかにおほえいてら（たイ）るへし　乙女の巻にむかし御目とまりしをとめのすかたとありし事歟筑紫五節事なとなり
いまはとよをさり給ふへきほとちかくおほしまうくるに　聖人避レ世事　和漢之例先蹤不可勝計
やれはおしとおほされけるにや　やれはおしやらねは人に見えぬへしなくなくも猶返すまされり（後撰）
けに千とせのかたみにしつへかりけるを　かひなしとおもひなわひそ水くきの跡そちとせの形見なりける（六帖）　かきつくる跡は千とせもありぬへしわすれすしのふ人やなからん
此歌若西行の歌歟然は不足爲證歌本説
ふりおつる御なみたのみつくきになかれそふを
涕與翰倶悲且吟曰黄壤誰知我白頭徒念君唯將老年涙一灑故人文（樂天元少尹文集序）
しての山こえにし人をしたふとて跡をみつゝも猶まとふかな（古今）　しての山ふもとを見てそ帰にしつらき人より先こえしとて（伊勢）　しての山こえてやきつる時鳥

戀しき人のうへかたらなむ
或說云しての山は四天の闇也みとまと五音通する
也云々ゑかれとも十王經文死天山門集鬼神云々う
つは物語菊宴　古の跡を見つゝもまとひしをいま
行末をいか(よイ)にせよとか
御こゝろまとひもめゝしく　目たゝしく歟或云女々
メヽシ
御佛名もことしは(斯イ)かりにこそと　光仁天皇寶龜五年
始レ之云々見二官束事類一或天長七年十二月始有二佛
名一又或說承和五年十二月十九日始レ之云々貞觀格
云太政官符應行佛名懺悔事
さくちやうのこゑ〳〵　錫杖經曰錫杖亦名二智杖一
彰二顯聖智一也亦名二德行一功德本故也佛名夜初日後
夜御導師着二禮盤一唱二佛名一畢錫杖又第三夜錫杖後
藏人受取內侍所出綿被二於御導師弟子僧等一
たうしのまかつるをおまへにめしてさか月なとつね
のさほうよりも　禁中御佛名第二夜被レ着柏梨　第三
夜內藏寮酒肴薯蕷等也
西三條右大臣集
春までの命もしらす雪のうちに色つく梅をけふか
さしてむ

延喜十九年十二月十九日內の佛名の御導師にて雲
晴法師か參りて侍けるかその夜御遊ありけるにめ
しいたされて侍けるを賀して御かさしたてまつら
れけるつゐてに奏しける
雪のうちに山のふもとの雲晴てさきたる花(梅イ)はちる
よしもなし
御門此御歌を雲晴に給はすとて　あちきなや(レイ)春を
見るとてかへるさに道やまとはん山のしら雪
貫之集屛風歌佛名のあしたに導師のかへるに人々
あつまりて雪梅をもてあそふ法師おとこともにを
りたちてある程に雪の降かゝれる梅を折る
梅花折しまとへは足引の山ちの雪のおもほゆるか
な
わか宮のなやらはんにをとたかゝるへきことなにわ
さをせむと　爆竹驚二鄰鬼一驅儺聚二少兒一東坡
追儺儀禁中亥一剋左右近立レ陣即開二承明門一不開長樂永安門
儺人等參陰湯師奠祭讀二咒文一畢方相先作二儺聲一
以レ戈擊レ楯如レ此三反若羣臣相承和呼追レ之或放矢於南殿御覽
時此間還御候御後入於長橋下忌行逢方相云々仍逐電入殿內甚狼籍可有用心　侍臣相分殿內幷四方
驅逐尤盛方相入レ自二仙花門一經二御殿前一出自二北廊一

畢羽林風　内匠寮儺木振鼓をたてまつる廻限に殿上の男女房にわかち給いさゝか動揺あり委見ニ紅葉賀巻注一[illegible]

禁花云うへわらはにをはしませはつこもりのつゐなにふりつゝみしてまいらせたれはふりけうし給ふ云々

物思ふと過る月日もしらぬまにとしも我か身もけふやつきぬる　大和物語中納言敦忠　物おもふと過る月日もしらぬまにことしもけふにはてぬとかきく

ついたちのほとの事つねよりことなるへくとをきてさせ給みこたち大臣の御ひきいてものしな〳〵のろくともなとになうおほしまうけてとそ　六條院拜禮之事歟今年世をさり給ふへきなこりにことに結構せられける歟

第廿六　雲隱

巻名　匂兵部卿宮巻にひかりかくれ給にしとといへりそのこゝろ歟

一雪隱と名つくる事　此巻はもとよりなし只名をもて其心を顯す也此名題にて六條院ひかりかくれ給心しらるゝ也此詞代々集にもあまたあれとも萬葉集に人の逝去するをは皆雲かくれといへり

萬葉第二弓削皇子薨時置始東人作歌　おほきみは神にしませはあま雲のいほへ五百重のしたにかくれ給ぬ

同第三大伴皇子被死之時作歌　もゝつての石はねのいけになくかもをけふのみゝてや雲かくれなん

神龜六年左大臣長屋王賜死之時作歌　おほきみのみことかしこみおほあらきの時にはあらねと雲かくれます

天平七年新羅尼理願死去大伴郎女悲嘆作歌　とこめえぬ命にしあれは敷妙の家より出て雲かくれにき此外おほし作者の歌にも此詞あり

めくりあひて見しやそれともわかぬまに雲かくれにし夜はの月かな

一名はかりをきゝて巻を見ぬ事　天台所立四教 三藏教 通教 別教 圓教　四門 有門 空門 亦有亦空門 非有非空門　也

有門の得道は毘曇論空門得道は成實論にあかせり非有非空門は迦旃經に説亦有亦空門は毘勒論にあかせりと聞とも此經論天竺にとゝまりて漢土に持來せすしかるを大師有門空門の義にとりていまた

經論を見さる圓別二教を判し給へる不思議是也今の雲隱の卷も作者の胸中にとゝまりて世につたはらすやなりにけん詮する所六條院の崩御をあらはにいはすして此卷の名にこめたる猶甚深の義たるにや凡上古の賢哲の中にをはりの樣を人しらさる事武內大臣以下其例おほし本朝神仙傳なとにも多くみえたり又好色の道の先達業平朝臣も芳野川川上の石窟てんの川に入定しけるよし彼所の緣起にみゆと云々

一六條院頓滅の事　黃帝の天に登りしに比擬すなと中古の先達申置る歟物語の面に所見なし今案ときこえたり宿木の卷に薰大將の詞に故院うせ給て後二三年はかりの末に世をそむき給しさかの院にも六條院にもさしのそく人の心おさめむかたなくなん侍りけるといひつる世をのかれて嵯峨院に隱居し給ときこえたり只雲隱卷とて一帖あるうへはその卷の中の久遠はかりかたし其間に朱雀院兵部卿宮致仕太政大臣鬚黑大臣以下の人々おほくうせられたり何とて六條院はかりを頓滅とはいふへきにや又匂兵部卿宮薰中將幻卷の春無下に幼稚と見えたり三四歲歟しかるを匂兵部卿卷にみな元服ありり中將は侍從とみえたり是等にておもひあはすへし

河海抄巻第十六

正六位上物語博士源惟良撰

第廿七　匂兵部卿　一名薫中將

巻名　れいの世人はにほふ兵部卿かほる中將とき
ゝにくゝいひつゝけて

ひかりかくれ給にしのち　六條院崩給事也

深草の御門の御國忌に　文屋康秀

古今 草深き霞の谷に影かくしてる日のくれしけふにや
はあらぬ・

たう代の三の宮とおなしおとゝにておひいて給し宮 女三宮
のわか君とおなし殿にて也

つきの坊かねにて　坊さきかねなと此物語にもあ
り其器用也

おとゝもなにかはやうのものとさのみうるはしくは
としつめ給へとまたさる御けしきあらんをはもては
なれてもあるましうおもむけて　樣の物同樣の物と
云心也夕霧大臣兵部卿宮の外舅也そのうへ大姫君
參二入東宮一また此宮を聟にとりたてまつらむ事あ
まりに同樣なりと斟酌せらるゝ也さりなからさる
御け色あらむをはもてはなれしと也

六の君なむ　夕霧右大臣女 母典侍惟光女

ほとりのおほちなと　御路 日本紀　大路 萬葉集

うしとらのまちにかの夕霧御妻室并ノ嫡事也一條院宮イをわたしたてまつらせ
給てなん三條とのとよことに十五日つゝうるはしく
かよひすみ給ける

月十五日分別事　謂黒白兩月也倶舎論有二二師儀一
一儀云自二一日一至二十五日一月輪次第增レ光故名二白
月一自二十六日一至二卅日一月輪次第減レ光故名二黒月一
是正義　一儀云自二一日一至二十五日一白衣天子十五人
一夜別一人參二入月宮一故名二白月一自二十六日一至二
三十日一黒衣天子十五人一夜別一人參二入月宮一故
名二黒月一是傍儀

とにかくにたゝ世は火をけちたるやうにて

左右トニカクニ 史記　佛此夜滅度如薪盡火滅　法花經

春のさくらけになかゝらぬにしもおほえまさる物と
なむ

古今 殘なくちるそめてたき櫻花有て世中はてのうけれ
は

ちれはこそいとゝ櫻はめてたけれうき世になにか

薫中將 久しかるへき
十四にて二月に侍従になり給ふ秋右近中將になりて
御たうはりのかゝるなと　冷泉院御給也
いとなうくるしういかて身をわけてしかなと
無暇也
古今 あはれともうしとも物を思ふ時なとかなみたのいとなかるらん
古今 おもへとも身をし分ねはめにみえぬ心を君にたくへてそやる
いつかたもよかるゝことのわりなきに二つに分る我身ともかな
おさなき心ちにはのきゝ給し事のおりおり
薫中將爲柏木權大納言子事聞及歟
側聞はのきくとは髣髴(ホノカニ)にきゝたる也 或本てんけう大しの給ひ
くいたいしのわか身にとひけるさとりをもえてしかなとそひとりこたれ給ける
金光明經曰　爾時虎者今瞿夷(グイ)是(セ) 薩埵王子ノ身ヲアタヘシ飢虎ノ事也
花嚴經曰迦毘羅城有二釋迦女一名曰二瞿夷一「法花經文(イ本)句第十二曰天台釋未曾(ミツ)有羅(ラ)云(ウン)是瞿夷(クイ)子文」同疏記第二曰妙樂記　昔時瞿夷是今日耶輸落字(イ本)「今日瞿夷乃是天女記」
耶輸多羅比丘尼之子羅睺羅尊者佛出家之後經二於六年一誕生大臣等疑レ之耶輸多羅抱レ兒一放レ火投レ之全不燒是則誓言也 此因縁見悲花經
瞿夷太子はらこら也佛出家の後六年に生給し故に人うたかひける云々太子の我に問得けんさとりも佛の御子らこ羅のことゝ云々
おほとき給へる女の御さとりのほとにはちすの露も明らかに玉とみかき給はん事もかたし
穩オホトカ同事也
古今遍照 蓮葉のにこりにしまぬ心もて何かは露を玉とあさむく
いつゝのなにかしも猶うたかはしきを
女人身猶有五障 法花經　一者不得作梵天王二者帝釋三者魔王四者轉輪聖王五者佛身也
かのすき給にけむもやすからぬ思ひにむすはゝれてやなとおしはかるに　過去者也柏木もえむ 權大納言 煙のむすはゝれし事也
おひ風まことに百歩の外もかほりぬへき　百歩香
おまへの花の木もはかなく袖ふれ給梅のかは春 雨

しつくにもぬれ身にしむる人おほく秋の野にぬしなきふちはかまも丶とのかほりはかくれてなつかしきおひかせにことにおりなしからなんまさりける
後撰河原左大臣
けふ櫻しつくに我身いさぬれむかこめにさそふ風のこぬまに
古今素性
主しらぬかこそにほへれ秋の野に誰かぬきかけしふちはかまそも
いとあやしきまて人のとかむるかにしみ給へるを
古今
梅の花たちよるはかりありしより人のとかむるかにそしみける
春は梅の花そのをなかめ給秋はよの人のめつるをみなへしとさをしかのつまにすめる萩の露もおさ〳〵御心うつし給はすおいをわする丶きくおとろへゆくふちはかまものけなきわれもかうなとは
梅　女郎花
古今
名にめて丶なれる斗そ女郎花われおちにきと人にかたるな
萩　有鹿鳴之一
「わかをかにさをしかきなくあきはきの花つまこひてきなくさをしか 一本
秋萩をしからみふせて鳴鹿のめにはみえすてをとのさやけき萬葉
菊　有レ却二老術一
みな人の老をわするといふ菊に百年をやる花にそありける六帖
蘭　前頭更有蕭條物　老菊衰蘭兩三叢白樂天
わかきとち　若共　薫大將此卷十四侍從十九三位宰相
た丶人にてはは丶かりなく　凡俗（タヽヒト）日本紀
ましらひよらす　交　參マシラヒ日本紀
なけのことの葉を　なをさり也　ないかしろなる心也
いさなはれつ丶　引率
御めかれす　不レ離カレス
のりゆみのかへりあるしのまうけ六條院にていと心ことにし給て
還饗　人をもてなすを云也
賭射　清和天皇貞觀二年正月十八日始之北山抄曰
賭射還饗　大將先着座　垣下座也儲管圓座親王來着次將土座　次將着奥座賭弓不儲大敷圓座依着牽也相撲時敷有敷圓座或莚上敷之　次垣下公卿着座　相對次將　次立机　或次將机先立　三獻訖有絃哥之興給レ祿有レ差或命二東遊一將

監以下舞　天祿例也（小將臨監相撲之時三獻之後亦次將令召相撲人等事小將臨監相撲所用仰手番云々小將臨監召相撲所將監仰之數巡之後有相撲布引事少將仰手番云々）

北山抄部他本

延喜三年正月十八日御記云賭弓記左大臣向其第而左近官人以下以其賭弓勝奉至其第賭弓は天子弓場殿幸して弓を覽する也仲春の月弓をみる事禮記よりいてたり四府（左右近衛左右兵衛）舍人射之左右大將射手の奏をとる事はてゝ後大將射手に祿を給也近衛の管領なるか故也　後撰相撲のかへりあるしに女郎花をおりてあるしの御このかさしにさすとて三條右大臣

女郎花はなの名ならぬ物ならは何かは君かゝさしにもせむ

行阿尺私云かへりあるしの事賭弓の後大將かたのすけをひきて我亭にて種々の饗應儀式ありあるしをは饗と云字によめり又亭と云字は遊仙窟にあはらやといふよみあり仍吉事には此亭の字を避へし方のすけとは左大將ならは左中將左小將右大將ならは右中將右少將是也

つねのこと　如常

むかへにゑかのみこたちかむたちめの御座あり

垣下（ゑか）　えんかをゑかとよめり

もとめこまひてかよれる袖　かよれるはひるかへる心也

八乙女風俗柏子合十二　二段各六

やをとめはわかやをとめそたつややをとめたつややをとめ　二段

神のますこのみやしろに（神のやすともうたふ也多呼方説）　求子の歌

拾遺集はしめて平野祭に男使たちしときうたふへき歌とてよめる　大中臣能宣朝臣

千早振平野の松の枝滋み千代も八千代も色はかはらし

やみはあやなく心もとなきほとなれとかにこそにたる物なかりけれとめてあえり

（古今）春の夜の闇はあやなし梅の花色こそみえねかやはかくるゝ

（拾遺貫之）ふる雪に色はまかひぬ梅の花香にこそにたる物なかりけれ

神のますなと　一方の大將かへりあるしの日風俗の

神のますと云歌をうたふ定事也云々

紅梅匂兵部卿並一

巻名　按察大納言折ニ紅梅一奉ニ兵部卿宮一

そのころあせちの大納言ときこゆるは故致仕大臣のおとゝの二らう也　此巻別而按察大納言傳也仍竹河巻と並の一二をも定かたし薫中將竹川に始四位侍從中央に宰相終に中納言也此巻には始より源中納言とありしかれは竹川の次かとみゆるに又竹川の末に按察大納言右大臣になる所詮此巻は竹川の中央たるへしこゝには按察大納言と云へり此その比の諸人々不其措心歟是は橋姫巻の始にその比世にかすまへられ給はぬと云同時分としらせんため也薫中將を源中納言といへる事（竹川の終椎本の初中納言に任す）兵部卿宮宇治のひめ君に通給といへる事等也奥にみえたり所詮此巻宇治はしひめ椎本總角同時也

いま物したまふはのちのおほきおとゝの御むすめまきはしらはなれかたくし給し君を

野道太政大臣　鬚黒大臣一名也　素寂抄云野道の字人とにおほつかなき事に申さるれと重代の本にかき置て侍うへ行成卿自筆本に野道とかゝれたりしかは仰て信をとり侍き双岡大臣（夏野）一名野道大臣と號すと云々或説には後のおほきおとゝか今上の御世のころほひ太政大臣二人あり致仕太政大臣（藤のうら葉に任之わかなに致仕）鬚黒大臣（紅梅太政大臣に任）是也仍後といふ歟惣して此物語中の太政大臣五人也引入大臣二條太政大臣六條院致仕大臣鬚黒也その中にも後也古今集忠仁公をさきのおほいまうち君とかけるは前官の儀にはあらす延喜の比太政大臣只二人也仍雖レ不レ辞レ官前後のよしに書也若是等之儀歟

御子うせ給て後しのひつゝかよひ給しかと

鬚黒大臣女故兵部卿宮室有女子

ひけせんも　卑下

かすかの神の御とはりも我よにやもしいてきて故おとゝの院の女御の御ことをむねいたくおほしてやみにし　閑院左大臣冬嗣以來代々藤氏執政臣帝の外祖たる事歟　上古は外祖外舅として攝政する也

こなたをしのやうに　師

おなしことゝこそつかうまつらんと　事

にしのかたに侍る人はひはを心にいれてはへること

まねひとりつへくやおほえ侍らん
こもとはわれもといふ心歟　吾字也
このころ世にのこり給へる源中納言兵部卿宮なにことにもむかしの人におとるましう
ひははをしてしつやかなるをよきにするものなるにちうさすほとはちをとのさま
押手　柱　撥音
とのゐすかたにて　宿衣姿
つまひきに　爪彈
かはふえふつゝかになれたるこゑして
ふつゝかとはふとしと云心歟　太（フトシ）　太笛（フトフエ）
皮笛「歌笛」嘯也　文選嘯賦云動レ脣有レ曲發レ口成レ音註曰善曰鄭玄毛詩箋曰嘯蹙レ口而出レ聲也九條殿記曰天慶五年正月七日壬戌雖甚雨依レ無ニ止例一荷引ニ青馬一今日酒盃十一巡王卿有ニ酒氣一吹ニ皮笛一式部卿敦定親王云年來更不有如此之時今日似ニ古時一甚感悅多云々原事簡要在ニ李部王記一爲レ嘯也云々
早職事之皮笛新裝樂記
中古自異朝笛を渡せり以レ皮裹レ上左近將監大神式賢成皮笛之疑云々胡角一聲霜後夢云々胡角則皮笛也云々
このひんかしのつまにのきちかきこうはいの
春風北戸千莖竹曉日東簷一樹花白氏文集
しる人そしるとて
君ならてたれにかみせん梅の花色をもかをもしる人そしる
はしかはしにもおほえ給はぬは
古今
木にもあらす草にもあらぬ竹のよのはしに我身はなりぬへらなり
むかし戀しき御かたみにはこの宮はかりこそは佛のかくれ給けむ御なこりにはあなむかひかりはなちけんをふたゝひ出給へるかとうたかふさかしきひしりのありけるをやみにまとふはるけところにきこえをかさんかしとて
大論云釋迦佛入涅槃之後阿難登高座結集諸經之時其形如レ佛仍衆會疑ニ佛再出給一
まつうくひすのとはすやあるへき　先也　又云待

也
案之兩說共證本に聲をさせり而猶先の心相叶歟
万葉三 あら玉の年行歸る春はたゝまつ鶯は我宿になけ
紅の色にとられてかなんしろき梅にはをとれる
後撰躬恒 紅に色をはかへて梅の花かそこ〳〵ににほはさり
ける
この花のあるしは
花のあるしと云古歌ある歟可勘そは菅家のあるし
なしとて春を忘るなの御歌濫觴也
古今 春きてそ人もとひける山里は花こそ宿のあるしな
りけれ
しらす心しらむ人になとこそゝきしか
あたら夜の月と花とをおなしくは哀しれらん人に
みせはや 伊行釋與入栽此歌猶不相叶歟
あた人とせんに
他人日本紀 越人孟子 他心日本紀 異意萬葉
櫻かりまさる花なき春ならはあたしくさきはもの
ならなくに
しりうこちて 後言シリウコト
もとつかのにほへる君か袖ふれは花もえならぬ名を

やちらさん
本の香也 萬葉本人モトツヒトとあり
宮は御ふさいのかたにきゝつたへ給ひて ふさいと
は我おもふすちの心歟ふさめしからぬと云へり是
はふさはしき也耳よりなる心也 緣あるやうなる
事をも云なり
八の宮のひめ君にも御心さしあさからていとしけう
まかてありき給ふ 宇治八宮相壺帝第八御子也 兵部卿宮通二宇
治宮中君一事總角卷也但椎本卷に宇治中やとりあ
りいつれも同時分也官位の次第分明に見えたり
はゝ君ぞたまさかにさかしらかりきこえ給
さのみ宮の御返なからんもひんなけれは母君とき
〳〵御返をきこえ給といへるさかしらなり
古今 さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやく霜夜をわ
かひとりぬる
竹河 並二
卷名 竹川贈答在二兩所一四位侍從送二藤侍從一歌幷
藏人少將與冷泉院女房贈答歌也又正月廿餘日四位
侍從來會藤侍從之時同音歌二此曲一 案之横並也句

兵部卿巻二月薫中將侍従十四才同年秋右近中將加階其後三位宰相于時十九才云々此巻始又始號四位侍従終十四五才任二中納言一以レ是可二思合一

わるこたち　惡後達

むらさきのゆかりにもにさめれと　鬚黒大臣を光源氏のゆかりにもあらすと云心歟されはかの大殿わたりの後達のものかたりをもしひかことにやと云歟

人のひかおほえにやなとあやしかりけるいつれかはまことならむ　此巻の始より此詞にいたるまていたく何の故ともきこえさるにやさためて意趣ある歟若此物語の時代の准據なと其人とはみゆれとも一篇に其行跡を守さる事おほき故に其難を遁れんかために如此書之歟桐壺帝准延喜光源氏比西宮大臣事等也

としのかすつもりほけたりける人の　耄ホケ

人のこゝろときにのみよるわさなりけれは　人心好惡太不常白氏文集

らうし給ところ〳〵　領給

はるかにめをそはめられたてまつらんもわつらはし　已被二楊妃遙側一レ目白氏文集上陽人　在桐壺巻

とりかへしうらみきこえ給て

とりかへす物にもかなや世中をありしなからの我身と思はん

ゆるし給はすはぬすみもとりつへく　伊勢物語云からうしてぬすみ出ていとくらきにきにけりとあり

六條院の御すゑすさく院の宮の御はらにむまれ給へりし君冷泉院の御このやうになほしかしつく四位の侍従その比十四五はかりにて

かむのきみもむこにて見まほしくおほしたる　伊勢物語にむこかねとあり

わかきをのこともは　男共チノコトモ　傍人チノコトモ　遊仙窟

うちふるまひ給へるにほひかなとよのつねならす

匂香也

よそにてはもきゝなりとやさたむらんしたにゝほへる梅の初花

もき木は枯木也枝なともなきやうなる木を云也

杭コツ廣韻云樹無枝也

野宮歌合判詞云順、ちくさにゝほふ花のあたりはもきゝのやうにてましりにくゝ侍れとといへり

さらは袖ふれて見たまへかしなといひすさふにまこ

とはいろよりもとくちく
色よりも香こそ哀とおもほゆれたか袖ふれし宿の
梅そも
ようこそおもなけれと　おもなけれはつれなけれ也
おもてつれなしなといふこゝろ也
いとくつしたる名かなと　苦　くるしき心歟
せんかうのおしき　淺香折敷也
めてくつかへる　感しかへる也
むめかえをうそふきて　梅枝催馬樂呂
あつまをいとよくかきあはせたり女の事にてりよの
うたはかうしもあはせぬをいたしと思ひて　梅枝は
呂の曲也
うくひすにもさそはれ給へりし
古今 鶯聲誘引來花下草色拘留唯水邊
花の香を風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへ
にはやる
さきくさうたふ　此殿呂
ことふきをたにせむや　言吹(コトブキ)　壽(同)
たけかはをおなしこゑにいたしてうたふ
竹河呂

竹河の橋のつめなる花そのに我をはなてめさし
くはへて　おなしこゑと云は未練の人なる故に兩
人して同音にいたし歌をしらふる歟
ゑいすゝみてはしのふることもつゝまれす
酒顯ニ本心ヲと云事歟伊行尺
古今 思ふにはしのふることそまけにける色には出しと
思ひし物を
なにそもそなとさうときて
みつむまやにてよふけにけり
水驛　此物語男踏歌所より云はしめたり無饗應之儀
也是は俗にすゑきしつると云事也心は同事也
わか身はいとゝくんしいたく　是も苦也　但怨たる心
也物えんし
なとの
心歟
たけかはのはしうちいたしひとふしに
拾遺別恨 紅葉はのなかるゝ時は竹川の淵の綠も色かはるら
ん
大和國宇陀郡有竹川流之由見舊記河内國名所とい
ふ歟
みつむまやをなんとかめきこゆめりし
さく櫻あれは散かひくもり大かたのさかりなるころ
櫻さくさくらの山の櫻花さく櫻あれはちる櫻あり

古今業平 櫻花ちりかひくもれおひらくいこんと云なる道ま
かふかに
やなきのいとのやうにたを／＼とみゆ
侍従の君けそし給とて　見助
此櫻のおい木になりにけるにつけてもすきにけるよ
はひを思給いつれは
童稚悉成人園林半喬木 白氏文集
身のうれへとてとめかたうこそなと
難留　身の憂なかたりいてなはとゝめかたかるへしと也
さくらいろのあやめもそれと見わきつけにちりなん
後のかたみにもみまほしく
古今有時 櫻色に衣は深く染てきむ花の散なん後のかたみに
右かたせ給ひぬこまのらさうをそしやなとはやりか
にいふもあり高麗亂聲　高麗は右の物なれは也
負方の姬君櫻故風に心のさはく哉思ひくまなき花と
見る／＼　後撰少將内侍 人はかゝる心のくまはきたなくて清きなき
さをいかて過けん　思ひくまなき文字此歌の心歟
心ありて池の汀におつる花淡となりても我かたによ
れ
古今高世 枝よりもあたに散にし花なれは落ても水の淡とこ
そなれ
なれき　馴公也
櫻花にほひあまたに散さしとおほふはかりの袖はあ
りやは
大空におほふはかりの袖もかな春さく花を風にし
らせし
いひおとす　いひおとすはいひくたすなり
よにかたくるしきやみのまとひになん
人の親の心はやみにあらねとも子をおもふみちに
まとひぬる哉
うはひとりつ　奪取
ひとへにものそおほえける
うしとのみひとへに物はおもほえて左右にもぬる
ゝ袖哉
このまへ申も　御前にてとり申心也
つらきもあはれといふことこそまことなりけれと
かのゆふくれのけんそうなりけむに
顯證　あらはるゝ也　見證 伊勢物語眞名本
むかひ火つくれは　向燒 日本紀
人のはらたちぬへきことをはいはれぬさきにこな

たより又はらたちかくる心歟
めしいれてやはめくはせたてまつらましかは
世をうみのわまとし人をみるからにめくはせよと
もたのまるゝかな
めくはしはおしふる心也
わりなしやつよきによらんかちまけ勝負を心一にいかゝ
まかする
圍棊の好手の强弱によりてあるへき勝負なれはめ
くはしせんによるへからすとよめる也
あはれとて手をゆるせかしいきしにを君にまかする
我身とならは　圍棊にいきしにと云事あれはわか身
によそへて云也
九日にそまいり給
鬢黑大臣大君參ニ入冷泉院一四月九日
太上天皇納妃例后妃也裏書云　寛平法皇以ニ京極御息
所一時平女左大臣爲レ妃
さうやくにとて　雜役
たかなはたゝしなとかことかましくて
古今戀しなはたか名はたゝし世の中のつねなき物とい
ひはなすとも

つかのうへにもかけ給へき御心のほとゝおもひ給へ
ましかはひたみちにもいそかれ侍らましをなとある
に
史記曰季札之初使ニ北方一過ニ徐君一徐君好ニ季札劍一
口不ニ敢言一季札心知レ之爲レ使ニ上國一未レ獻還至徐君
已死於レ是乃解ニ其寶劍一繫ニ之徐君家樹一而去從者
曰徐君已死尙誰予乎季札曰不レ然始吾心已許レ之豈
以レ死倍ニ吾心一吳世家
漢主手中吹不駐徐君塚上仰猶懸朗詠
まほにはあらねと　眞帆
そのとしかはりておとこたうかせられけり
男踏歌正月十四日
その四位の侍從右のかとうなり　右歌頭　前勘畢
すきにし世のはかなかりしあそひも思いてられて
藤侍從竹河うたひし事也
はむすらくを御くちすさみにしたまひつゝ　萬春樂
踏歌曲　勘初音卷畢
かつらのかけにいへるにはあらすやありけん雲のう
へちかくはさしも見えさりきなとかたり給へは
此歌猶不叶春霞たな引にけり久かたの月のかつらも花やさく

らん
やみはあやなきを
　春の夜のやみはあやなし梅の花色こそみえねかやはかくるゝ
このとのなとあそひ給ふ　此殿呂
いかのほとにまいり給ぬ　五十日
かくいひ〳〵てのはていかならむ
　拾遺 世中をかくいひ〳〵てはて〳〵はいかにやいかにならんとすらん
ひさしくなりにけるむかしのれいなとひきいてゝ此事かなひ給ひぬ　以二尚侍一讓レ子例可レ勘
みちのはてなるひたちおひのとてならひにもことくさにもするは
　古今 東路の道のはてなるひたち帶のかことはかりもあはんとそ思ふ
左大臣うせ給て右は夕霧左に藤紅梅大納言左大將かけ給へる右大臣になり給ふつき〳〵の人なりあかりてこのかほる中將は中納言に三位の君は宰相になりてよろこひし給へる
國史云右大臣藤號二條原朝臣三守阿波守從五位上眞作之第五子也三守早入二大學一受二習五經一歷二文章生一人任二大臣並大將一例 付轉左大臣事
菅家　貞觀四年五月十七日補文章生九年月日得業生十一年三月對策及第十八年四月一日侍從 白余中央略之 裏書云タイシヤクキウタイハ儒筆ノ名也 寬平五年二月十六日任二參議一 元式部權大輔 從四位下 同七年任二中納言一叙從三位同九年六月十九日任二權大納言兼右近衛大將一昌泰二位二月十四日任二右大臣一五十六 大將如元
藤原道明 號山井大將
寬平二年補二文章生一延喜十三年正月廿八日任二中納言一同四月十五日兼右近衛大將
藤原在衡 粟田左大臣 延喜十三年五月日補二文章生一十八年十二月九日得業生對策及第 中央略之 安和二年三月廿六日任二右大臣一七十七　天祿元年正月七日轉二左大臣一
薰中將權本秋自二宰相中將一任二中納言一仍此卷與二椎本卷一同時節也
紅梅右大臣稱藤大納言事
貫之集云天慶六年正月藤大納言殿の御せうそくに

てとしころありつる魚袋を氷とけぬる池の魚の歌
也○九條右丞相を藤大納言と申けりとみえたり執
柄次男なる事右大臣たる事相似たる也孫王娘女
御まへのにはにてはいしたてまつり給　拜
あはの御ことはりやとうちわらひておはする　あは
〳〵しやといへるなり
人のおやにてはか〳〵しかり給へるほと冷泉院よりはいと
わかやかにおほといたるこゝちすみやすところもか
やうにおはすへかめるうちのひめ君の心とまりてお
ほゆるもかうさまなるけはひのをかしきそかしとお
もひゐたまへり　宇治宮姫君事紅梅巻に見えたり同
時也
大うへはちかうも見ましかはとうちおほしけり
玉鬘の事也薫中將を聟にて見ましかはといへる也
たいきやうのゑかのきんたち　大饗　垣下　君達
兵部卿宮左の大殿のりゆみのかへりたちすまひのあ
るしなとにはおはしましゝを　賭弓　還饗在端
後撰第四すまひのかへりあるしにをみなへしをお
りてあつよしの御子のかさしにさすとて三條右大
臣女郎花はなの名ならぬ物ならはなにかは君かか
さしにもせん
きふのひかりにとさうしたてまつり給けれとおはし
まさす
左大臣のりゆみのかへりたちすまひのあるしなと
に兵部卿宮を請し申されしかは右大臣の大饗の尊
者にも請し申ける也
故宮うせ給てほとなく此おとゝの通給しとを　槙柱
の君螢兵部卿宮うせ給てのちやかて紅梅右大臣に
あひ給しことのあはつけきやうなりしにもかくて
おはするも中〳〵めやすしと玉鬘の我女たちのこ
ゝろくるしさにおもひあはせられたる也
つかさくらゐをもなにともおもへらすすくしいます
からふや　古本に皆かくのことしたゝいますやと云
心也むかしの詞なりける歟

河海抄巻第十七

正六位上物語博士源惟良撰

第廿八　橋姫

巻名　橋姫の心をくみてたかせさすさほのしつくに袖そぬれけるといふ歌の心也一名優婆塞是又優婆塞かおこなふ山のふかき心と詞にもあり

そのころ世にかすまへられたまはぬふる宮おはしけり　宇治宮（桐壺帝第八御子也）號八宮又優婆塞宮（母左大臣女）　其比は今上御位時也此時分紅梅巻始詞一同也同時のよし也薫中將昇進以下にて思あはすへし

わかきみの御めのと　女子をも若君といふ年わかき心なり

たゝ宮にはくゝみ給ふ　養育（ハクヽム）　省（ハクヽム ハノクヽカヘリミル）

軒のしのふにところえかほにあをみわたれるち佛の御かさり　持佛莊嚴也

こうちへんつき　篇突（ヘンツヽ）　玉篇梁大同九年三月廿八日黄門侍郎兼大學博士顧野王撰字廿萬九千七百七十字三十巻五百六部

すゝりにはかきつけさなりとて　硯は文珠の御眼なり此ゆへに眼石といふ此聲を假て硯石とは書也云々仍此面に物をかゝさるなり菅家の御日記にも硯面不書とあり

（菅家）みる石の面に物はかゝさりきふしのやうしはつかはさらめや

なくくもはねうちきする君なくは我そすもりになるへかりける　（大和物語）故中務宮の北方うせ給て後ちいさき君たちを引くして三條右大臣殿にすみ給けり御いみなとすくしてはつゐにひとりはすくし給ましかりけれはかの北方の御おとうと九君をやかてえ給はむとなんおほしけるをなにかはさもとおやはらからもおほしたりけるにいかゝありけん左兵衛督の君侍從にものし給ひける比その御文もてくとなんきゝ給けるさて心つきなしとやおほしけむもとの宮になんわたり給にけるその時にみやす所の御もとより　無人のすもりにたにもなるへきをいまはと歸るけふのかなしさ

宮の御返し　すもりにと思ふ心はとゝむれとかひあるへくもなしとこそきけ

鳥の子はまたひなゝから立ていぬかひのみゆるはすもりなるへし

きやうをかたてにもたまうてかつよみつゝ
應神天皇十五年甲辰八月百濟遣ニ阿直岐一々々能讀ニ經典一即太子菟道稚郎子師焉天皇問曰如勝レ汝博士亦有邪對曰有ニ王仁者一是秀（スクレタリ）也時遣ニ荒田別於百濟一徵ニ王仁一十六年乙巳王仁來太子師レ之習ニ諸典籍一欽明天皇十三年百濟獻ニ經論一
さうかもし給　唱歌　唱歌の秘事師説ある也
うたつかさのもののしとも　雅樂寮物師也
職員令云雅樂寮頭一人乃至　歌師四人儛師四人笛師二人唐國樂師十二人高麗樂師四人百濟樂師四人新羅樂師四人伎樂師一人腰皷師二人以下略之
あひなくあなたさまの御なからひには　あなたさまは六條院の御事也
いけるかひなくそおほしこかるゝや　大和物語 雲井にてよそふる比は五月雨のあめのしたにそいけるかひなき
いとゝ山かさなれる御すみかに　山重　江復
月よみの光にまかせあし引の山かさなりて遠からなくに
すなとり人　漁人　海士ならて河邊の釣魚人をも云可勘しほかまの浦には海士やたえにけんなとすな 大和物語 とりのみゆる時なき
みねの朝霧はるゝをりなくて　古今 鴈の來る嶺の朝霧はれすのみ思ひつきせぬ世の中のうさ
心はかりははちすの上に思のほりにこりなき池にもすみぬへきを　極樂國土有ニ七寳池一八功德水充ニ滿其中一池底純以ニ金沙一布レ地　乃至　池中蓮花大如ニ車輪一阿彌陀經
ないけうの御さえ　內敎　內典才也
そくひしりとか　淨名居士云身在レ家心出家云々俗形にて戒行を持する人也四部弟子の中優婆塞是也唐土にも龐（ホウ）居士なと云て多く此類あり凡聲聞は必令出家十地以上菩薩者無ニ其儀一也
河なみにきをひてきこえ侍いとおもしろくかうさくになん　万葉 千はやひと宇治川なみをきよみかも旅行人のたちかてにする
この院の御かと十の御子にそおはしましける　院の御かととは冷泉院の御事也前勘畢
御かとは御ことつてにて　冷泉院御事也院號の後なれともさきに院の御かとゝありつれはその心歟
跡たえて心すむとはなけれとも世を宇治山に宿をこ

そかれ　我いほは都のたつみしかそすむよをうち山と人はいふなり

よるなと心とけて夢をたにみるへきほともなけに

宇治川の浪の枕に夢さめてよる橋姫のゐやねさるらん　與入云此歌同時歌歟不可爲證歌歟云々

うはそくなからをこなふ山のふかきこゝろ　優婆塞

しうとくの僧都僧正のきはゝ　宿德也

いむことをたもつはかりのたうとさは　受持禁戒の心也戒行と惠解とは各別事也

こと葉たみてこちなきに　迂　其說迂孝經

あつまにてやしなはれたる人の子はこと葉たみてそ物はいひける

ひるはおほやけことにいとまなくしつゝしめやかなるよひのほとけちかき御まくらかみなとにめしいれ

かたらひ給にもいとさすかに物むつかしう　設自帝何益　泥彼仕慢舉　天仙彈指耻　聖賢嗣心悲高野正覺上人

よき人はものゝ心をえ給ふかたの　天道無親唯與善人佛教にも善性人惡性人あり又孟子にも性善性惡といへり

有明の月のまた夜ふかくさし出る程に　よひより曉までの月を有明といふと云々然而たゝ朝までのこる月を云歟これも秋のすゑつかたとあれは九月下旬の比たる歟能因歌枕には十五日より後の月を有明といふといへり匡房卿續本朝往生傳云十五日已後月をは稱二晨月一云々

道もみえぬしけき野中をも分給に　親行說云しけき野中とよむへきにや風のきほひにほろ〳〵とおちみたるゝ木のはの露とあり野の露ならは木の葉の露のちりかゝるとは心得かたくや侍らむ且は宇治の通路山路木立しけき所なり但證本ことに野中とかけり如何云々水原抄

案之しけ木の中あまりのいりほかなる歟古歌にもしけ山なとゝ云ことはあれとしけ木といふ詞未二見及一野中にも木蔭なかるへきにあらす野中の森野中の松櫻なとおほくよめり野中にて事たりぬへし此しけきの丁見桐壺巻の草むらのむしもよほしかは同事なり何も今案の義也不可用

しはのまかき

ぬしゝらぬかとおとろくねさめのいゑ〳〵　主しら古今ぬ香こそにほへれ秋のゝにたかぬきかけし藤はか

まそも
わうしきてうにしらへて世のつねのかきわはせなれ
と所からにやみなれぬ心ちしてかきかへすはちの音
も　此黄鐘調は笛の黄鐘調箏琵琶の風香調也琵琶の
黄鐘調にはあらぬ歟凡箏琵琶は風香調返風香調に秘
曲あり楊眞採流泉等曲也仍以二此兩調子一爲レ先琵
琶の黄鐘調は笛の平調にあはするなり掃部頭貞敏
四調をさためたり風香調合笛黄鐘調　返風香調合笛一越調双調　黄
鐘調合笛平調　清調合笛平調盤渉調　是也今世此外返黄鐘調合笛大食調　双
調合笛一越調　平調合笛盤渉調　等あり不レ及二委註一
たけわめるすいかきしこめて　五架三間新草堂石階
桧柱竹編墻白氏文集
ひはをまへにをきてはちをてまさくりにしつゝゐた
るに　後撰云元良親王のすみ侍ける時みこのてまさ
くりになにいれたるはこにかありけむしたをひし
て云々
雲かくれたりつる月のにはかにいとあかくさしいて
たれはあふきならてこれにても月は招きつへかりけ
るとて　月隱重山兮擧扇喩之伊行尺奥入止觀　あふ事はかたはれ拾遺
月の雲かくれおほろけにやは人の戀しき　秋のよ
の月かも君は雲かくれしはしもみねはこゝら戀し
き
後嵯峨院御時此物語の御談義ありけるに以レ扇招
レ月事諸道に尋られけるにいつれも無二所見一後日
業長卿云漢書以レ扇月をまなふと云事ありつとふ
五音通する故也然はまなふと可二心得一歟永原　杜詩
云月生初學扇雲細不レ成レ衣　註曰初學扇謂レ未二甚
圓一也不レ成レ衣言細也趙日李義山詞鏤月成歌扇裁レ
雲作二舞衣一案之まねくとあるを押てまなふと心得
ん事もすこし理不盡にや扇をは古來月に喩たる事
勿論也されは扇こそ月にはたとへあれとも撥も月
にはなるゝ物ならねはあふきならてもまねきつへ
かりけりと女の心になにとなくいへるにや次の詞
にも入日をかへすはちこそありけれとあるも偏に
まねく心なり學にはあらさる歟或詩注云月圓似扇
故云二月扇一
いる日をかへすはちこそありけれ　淮南子曰魯陽公
與レ韓搆レ難戰酣日暮採レ戈而麾レ之日爲反二三舍一又
史記云魯陽以レ戈廻二落日一奥入又還城樂陵王をおや
ふめんとす日のくるゝに撥して日を午にかきかへ
すといへり

陵王隨舞吹傳云我等胡兒吐レ氣如レ雷我採レ項當レ踏
匣如レ泥右得ニ士刀ニ左得レ鞭廻ニ日光西沒ニ東西若ニ月
舞樂ニ打去緣之長曲
これも月にはなるゝ物かは　琵琶の撥は隱月におさ
むる故也　王元長月詩曰於月如可明　李嶠琵琶詩
曰半月分ニ絃上ニ吳均詩一箭一列作ニ琵琶ニ自辟規心
覺ニ照月ニ
山のかけちに思ふたまふるを　古今世にふれはうきこそ
まされみよしのゝ岩のかけ道ふみならしてん
きえかへりかゝやかしけなるも　はちかゝやく心な
り
夜のまのほとしらぬいのちのたのむへきにも侍らぬ
を　人命不レ停過ニ於山水ニ今日雖レ存明亦難レ保何縱レ
心令レ住ニ惡法ニ涅槃經炎經卌卌經炎なればはんと讀事は棺中より七の火出て燒ゆへに炎と書り卌卌經と讀事佛八
十にて涅槃し給故也雪山鳥唱云今日不レ知レ死明日不レ知レ死何
故造ニ作栖ニ安穩無ニ常身ニ
てをおりてかそへ侍れは　伊勢物語手をおりてあひみし事を
かそふれは十といひつゝ四つはへにけり
かんなきやうの物　巫覡文選男カンナキ女カンナキ
さしくみに　さしよりに也やかてといふ心也
おもなく　無面面目なくなり

嶺の八重雲思やるへたておほくあはれなるにまきの
を山　槇尾山宇治也山城國椎本まきの山邊とあり
あしろは人さはかしけなりされとひをもよらぬにや
あらむ　六帖宇治川のひをもよらねはねをそなく網代も
るてふ人のつらさに貫之
鮒和名氷魚　後撰になか月の御こもりの日紅葉にひおを
つけてをこせて侍けれはちかぬか女　うち山の紅葉をみ
すはなか月のすき行ひをもしらすそあらまし
おなしことなる世のつねなき也　如也
玉のうてなに　樓臺有イ日本紀　拾遺今日みれは玉のうてなも
なかりけりあやめの草のいほりのみして
はし姫の心をくみてたかせさすさほのしつくに袖そ
ぬれける　橋姫は宇治の橋の神也此故に萬葉にもち
はやふるうちといへり　古今さむしろに衣かたしき今
夜もや我をまつらん宇治のはしひめ
宇治の橋姫と云と古物語にあり宇治はし孝德天皇
大化二年沙門道證登イ始造之云々
さむけにいよ〳〵ひゝらきたるかほして　さむき時
鳥はたの立を云也詩に鷄皮と云是也
身さへうきてと　さすさほのしつくにぬるゝ物袖の露にイゆへ

に身さへうきてもおもはゆる哉
かりの御そとも　狩衣歟　短褐舊事本紀
をのつからはへるかめり　侍へるへかめり也
おとろ／＼しきひしりことは　聖人詞也
あしろをこそのころは御らむせめときこゆる人
／＼あれとなにかそのひを虫にあらそふ心にてあし
ろにもよらむとそきすて給て　蜉蝣(ヒヲムシ)(フユウ)無常の喩にいへ
り蜉　朝生夕死蟲也
西圓法師はやかて氷魚と申けり常にかやうに心得
たる無念事也蜉蝣は朝ニ生て夕をまたぬ無常の喩
の虫のしかも氷魚の名にかよひたるをいひたれは
こそ有興事なれたゝ氷魚はかりにては何の興かあ
るへき大かた此物語ををしよみにてはことはりあ
らはれかたき事おほかるへし
かとりのなをしさしぬきぬはせてことさらひき給へ
り　縑直衣　指貫　故着給也ひはやすめ字也
あさりもさうしおろしてきなといはせ給ふ　義　請下(ザツシオロス)
川かせのいとあらましきに木葉のちりかふをと　色
をも香をも思ひすてゝしのち　奥入　君ならて誰にか見せ
ん梅の花色をも香をもしる人そしる

かたへは峯の松かせのもてはやすなるへし　松風入
夜琴といふ事を　琴の音に峯のまつ風かよふらし
いつれのをよりしらへそめけん　齋宮女御
ろなうものゝようにすはかりのはうしなとも　拍子　無論
ちかういてまうてきて　持也　もちてまうてきてな
り
ふち衣たちかさねかなしきことを　綵衣(フヂコロモ)　喪衣、和名
六帖 一重たにきるはわひしき藤衣かさなる秋をおもひ
やらなむ　貫之
同 藤衣かさぬる思ひおもひやる心は今日もやすまさ
りけり
あら玉の年のはたちにならさりしときはの山の山
さむみ風もさはらぬ藤衣ふたゝひたちしあさきり
に
人をはかりこちて　詐(ハカリコツ)
深山かくれのくち木になりて侍也　古今 かたちこそ深山
かくれのくち木なれ
さゝやかにをしまきあはせたるはくともの　細々許(サヽヤカ)
遊仙窟　ほそくまきたる心か　反古(ホク)

きのふはいとまひなりしを　暇日
からのふせんれうをぬひて上といふ文字を上に書たり　唐浮線綾
あやしき鳥のあとのやうにかきて　蒼頡見二鳥跡一はしめて文字を作りし也
しみといふむしのすみかになりて　蠹　蟫　又白魚和名食書蟲名　衣魚同紙魚同　幽蠹落書棚韓文　杜陵詩積蠹鄙獄鈒生苔白氏文集
あとはきえせすたゝいまかきたらむにも　かきつくる跡は千とせもありぬへしわすれす忍ふ人やなからん
たんき　彈棊
第廿九　椎本
巻名　立よらむかけとたのみししゐかもとむなしき床に成にけるかな
きさらきの廿日のほとに兵部卿の宮の初瀬にまうて給　長谷寺事在玉鬘巻
うらめしといふ人もありけり里の名の　本歌未勘出たゝ世をうち山の歌の大意歟　わすらるゝ身をうち橋の中絶て人もかよはぬ年そへにける古今
川よりをちに　をちとは遠心也又あなたといふ心にも用歟貫之歌に昨日よりをちをはしらすとよめり心はいつれも不可違　遠方ヲチカタ　遠近ヲチコチ
こすくろくたんきのはむともなと　圍棊堯始作之双六自天竺出之云々又孟嘗君事持統天皇三年禁制　彈棊後漢書云梁冀傳云彈棊蓋經彈棊兩人對局白黒各十八枚先列棊相當更先彈也棊局以石爲之先勘畢
ちしのおとゝの御そふの　御孫也一族の心也
ちるさくらあれはいまひらけそむるなと　櫻さく櫻の山のさくら花ちるさくらあれはさく櫻あり六帖
河そひ柳のおきふしなひくみつかけ　いな莚川そひ柳水行はおきふしみれとそのねたえせす貫之
かんすいらく遊ひて水にのそきたるらうに　酣酔樂右樂　かすいらくとかきたる本もあり河水樂一越同元舞新樂
河邊の逍遥なれはまことにそのたよりあるか然は古本にはおほくかんすいらくとあり若書寫の誤歟又勸盃の席なれは酣酔樂も其寄なきにあらさる歟但酒宴は管絃以後と見えたり兼て此曲を賞翫せんも前後するにや或說には宇治初度の逍遥也やかて右樂をひらゝかさんも不可然歟といへり詞にも水

にのそきたる篩なとあれは猶河水楽にてやあるへき共おほえはへり

山さとひたるあしろひやうふ　普通のあしろにて張たる屏風也むかしは山庄なとの古めかしき調度には定事なり漆骨に片面を張て細組にて間合たる物なり簾屏風と云也又ひあしろの屏風といふ物ある歟車のひあしろとは竹を日にしろく爆てくみたる物也其の體の物歟

一こつてうの心にさくら人あそひ給ふ　櫻人（一説地久破同歌高麗双調）　さくら人そのふねちゝめしまつたをとまちりつくれるみてかへりこんやそよやあすかへりこんやそよや、（二ゝ）ことをろそかすともいはめをちかたにつまさるせなゝれはあすもさねこしやそよやあす・もさねこしやそよや（催馬楽呂）

なまそむわうめくいやしからぬ人あまたおほ君四位のふるめきたるなと　生孫王（此物語にも生王家無等倫とあり）　おほ君四位古人正四位と釋せり古今序に人丸正三位をおほきみつの位とかけりそれにおもひわたる歟但是も有説おほきみつのくらゐとあれは正三位無二子細一歟これはおほきみ也下の字也王氏の四位と云心也生孫王めくとある同心也へいしとる人も　瓶子取人うへわらはの　殿上童也

山櫻匂あたりに尋來ておなしかさしをおりてける哉

（伊勢）我宿とたのむ吉野に君しいらはおなしかさしをさしてそはせめ

野をむつましみとやありけん　春の野にすみれつみにとこし我そ野をなつかしみ一夜ねにける（赤人奥入）むつましみの詞參差歟但心は同事也（古今）紫の一もとゆへにむさしのゝ野をむつましみあはれとそ思ふ

普通本草はみなから也若異本説歟不審

野をわきてしもと（奥入）分てしも何匂ふらん秋のゝにいつれともなくなひく尾花に

（藤大納言）きほひかへり給　各いそきてかへり給心也

からのもやまとのも歌とも　唐詩　和歌　詩（訓ウタ）（古今序）そも〳〵歌のさま六なりからの歌もかくそあるへき

なけのいらへ　ないかしろの返事也又なをさり

宰相中將その秋中納言になり給ひぬ　此宰相中將竹

河巻に中納言とみえたり今又此秋中納言とあり仍
同時分明也
七月はかりになりにけり都にはまたいりたゝぬ秋の
けしきを音羽の山ちかく風のをともいとひやゝかに
槇の山邊もわつかにいろ付てなを尋きたるに
九重くちうなとにて　離騷曰君門多九重　王逸云天門凡
有九重　洛陽城閶闔門西向大道門九重也　白氏文
集曰君門九重閉
みつほね〳〵の　御局
人のけしめりぬるに　氣　或本にはのを略して人け
しめりぬるにとあり春本
心やましくかいしらへ　搔調
この道のやみをおもひやるにも　子の道也
こゝろにめつる心こそそむきかたきことに侍けれさか
しうひしりたつかせうもされはやたちてまひ侍ける
なと　香山大樹緊那羅於二佛前一彈二瑠璃琴一奏二八萬四
千音樂一迦葉尊者忘二威儀一而起舞　出大樹緊那羅經 法華文句第二卷　乾闥
婆王奏レ樂直得須彌震動大海騰波迦葉起舞傳灯錄
すまひなとおほやけことゝ　垂仁天皇七年戊戌七月
當麻蹶速與二出雲國野見宿禰一令二捔力一二人相對立
各擧レ足相蹶則蹶二折當麻蹶速之脇骨一亦蹈二折其腰
骨一殺レ之故奪二蹶速之地一賜二野見宿禰一是以其邑有二
腰折田一之緣也　神龜三年令三諸國始進二相撲人一
七月十六七日間相撲召仰也廿六日內取小月廿五日　廿八
日召合小月廿七日　廿九日拔出小月廿八日也　諸國の供御人をめ
しあつめて御らんする也初は召合後にすくりて御
らんするを拔出といふ也
秋ふかくなり行まゝに宮はいみしう物心ほそく思ひ
給ければ　悲哉秋之爲レ氣蕭瑟文選秋は菩提門なるか
ゆへに物にふれて愁の心有也
れいのしつかなる所にて念佛をもまきれなくせんと
傳敎大師云當三捨レ惡見二諸緣事一當レ發二最勝菩提心一
應三當速向二蘭若所一於レ彼當レ成二如來德一阿彌陁佛執
持名號若一日乃至七日一心不亂阿彌陀經文
なきよのやみにさへまとはれんかやくなきを
壽命八千不レ願出冥々長夜從二生死一十住心論　親々
絕二知門一獨流二長夜臺一同
ひとり〳〵ならましかは　古今思ふとちひとり〳〵か戀
しなはたれによそへて藤衣きん
かのをこなひ給三まい今日ははてぬらんと　傳敎大

師云以二諸方便一樂二閑靜一接二心於彼一得二三昧一　我
於二佛法中一知二一行三昧一所謂念二佛三昧一花嚴經　是
も念佛を三昧といふ歟
御そともわたあつくて　しらぬひのつくしのわたは
身に付てまたはみねともわたゝかにみゆ六帖人丸
あり明の月いとはなやかにさしいてゝ　八月廿日の
程とあり有明の時分前卷の月におもひあはすへし
いとゝかゝる事には涙もいつちかいにけむ　史記曰
孝惠帝崩太后哭泣不レ下呂后本紀　顏淵死子痛哭レ之
慟
哭は泣とも涙おちさる心也歟の切なる時涙くたら
すといへり
きのふけふとはおもはさりけるを　古今つゐに行道とは
かねてきゝしかと昨日今日とは思はさりしを業平
あけぬよの心ちなから九月にもなりぬ　明ぬよの心
なからにやみにしをあくそといひしこゑはきゝき
や實方朝臣
袖のしくれも古今長歌秋はしくれに袖をかし
涙のたきも伊勢物語我世をは今日か明日かと待よひの涙の
瀧といつれたかけん

かれゆく野へもわきてなかめらるゝころになん
涙のみきりふたかれるやまさとは
まかきにしかそもろこゑになく　左右音伊勢物語眞名本
くろきかみによるのすみつきもたと〱しけれは
黒紙　服者の料紙なり　黒き紙に夜のすみつき詞
のたより無二比類一者歟
こはた山の程もゆめもよにいとおそろしけれと
後撰みかさ山さしはなれぬといひしかと雨もよにとは
思ひし物を
さゝのくまをこま引とゝむる程もなくうちはやめて
古今さゝのくまひのくま川に駒とめてしはし水かへ影
をたにみん
けうとく　氣外
ことゝいへはかきりなき御心のふかさになむ
くろき木丁のすき影　服者の調度也
はつるゝいとはと　古今藤衣はつるゝいとはわひ人のな
みたの玉のをとそ成ける
かけ〱しきやうなれと　かけまくもかしこき心歟
又いま〱しきこゝろ歟或はこと〱しきやうな
る心にもいへる歟

おほゝれゐたり　溺居也

としころとをきくにゝあくかれはゝ君もうせ給て後かの殿にはうとくなりこの宮にはたつねとりてあらせ給なり　水原抄云母君もうせ給て後とは辨か母と見えたり而給の詞以外にうやまひたる不審也云々

案之母君とは宇治の姫君の母の事歟彼辨尼はひめ君の母北方の母かたのおち左中辨か子なれは母儀うせて後外家のよしみに此姫君のうしろみに候けると見えたり如何

いまはたひねもそゝろなるこゝちして　そゝろはしき也すとそと五音通する故也

御ねんすのくとも　御念誦具とも

秋霧のはれぬ雲井にいとゝしくこの世をかりといひしらすらむ　古今 鴈のくるみねの朝霧はれすのみおもひつきせぬ世中のうさ　後撰 行かへりこゝもかしこも旅なれやくる秋ごとにかりかりと鳴

同 ひたすらに我おもはなくにをのれさへかりかりとのみ鳴渡らん

かくたのみかたかりける御世をきのふ今日とはおもはて　つゐに行道とはかねてきゝしかと昨日今日とはおもはさりしを前勘畢

我も人もをくれ先立ほとしもやへんなと　すゑの露もとのしつくや世の中のをくれさきたつためしなるらん

心をけたす　本性をうしなはぬ心也

この比の事とてたきゝこのみひろひてまいる山人ともあり　好心也　菓子の儀にあらす水原抄 案之ひろふは菓拾の事歟経文にも採レ薪汲ニ菓蓏一なとあり

君なくて岩のかけ道絶しより松の雪をもなにとかはみる　古今 世にふれはうさこそまされ見よしのゝ岩のかけ道ふみならしてん

すみそめならぬ御火おけ　服者の調度は毎物黒色にあり火桶までも黒染なるへきか

里のしるへいとこよなくもあらかひきこえぬを

古今 海士のすむ里のしるへにあらなくにうらみんとのみ人のいふらん

くつれ初てはたつたの川のにごる名をもけかし　古今 神なひの御室の岸やくつるらん立田の川の水のにこれる

御なか道のほとみたりあしこそいたからめと　中媒

のあなたこなたありくへき心のよし歟
さらはしも影さへ見ゆるしるしもあさうは侍らしと
万葉 淺香山影さへみゆる山の井のあさくは人をおもふ
ものかは
雪ひとゝ空もとぢぬへう侍ると　雲とつるなといふ
同事歟　凍雲合なと雪の詩に多作れり
殿ゐ人そかつらひけとかいふつらつき　鬖髿　鬢鬟
同 おもつらひけ也かつらをかけたるやうに生たる
心也
立よらむ陰とたのみし椎か本むなしき床に成にける
かな　六帖八九 かたをかのむかひのをかに椎つまはことし
ことの夏陰になれ
同 我宿と君こししゐのなかたえてつみのむくひやあ
ひみさるらん
ちかき所にみさうなとつかうまつる人〳〵にみまく
さとりやりける　之子于歸　言秣(ワレマクサカハン)其馬 毛詩漢廣
みまくさとりかへまゆとしめまゆとしめ　まゆと
しめ　まゆとしめ　まゆとしめ　まゆとしめ　ま
ゆとしめ　まゆとしめ 催馬樂眉止自女呂
この岡に草かるをのこしかなかりそありつゝも君
かきまさんみまくさにせん
ゆきゝえにつみて侍なりとてさはのせりみねのわら
ひなとたてまつりたり　芹をたてまつる事　文選曰 第四十三
野人有快炙背而美芹子者欲獻之至尊雖有區々之意
亦已疏矣 嵇叔夜與山巨源絶交書　註曰善曰列子曰宋國有田父常
衣縕黂至春自暴於日當爾時不知有廣夏澳室綿纊
狐貉顧謂其妻曰負日之暄人莫知之以獻吾君將有賞
也其室告之曰昔人有美戎菽甘枲莖芹萍子對鄕豪稱
之鄕豪取嘗之　陟彼南山言采其蕨 毛詩草蟲
いもゐの御たいにまいれる　齋(イモリ)　潔齋(イサギヨキイモヰ)本書　精進潔齋
の心也 或又齋食心歟
万葉八九 神垣にひほろきたてゝいもへとも人の心はまもり
あへぬ物を
花さかりの比宮かさしをおほしいてゝ　此巻の始に
おなしかさしをおりてけるかなとありし事也
いつことか尋ておらむ黒染にかすみこめたる宿の櫻
を　いつくとか也五音通する也
あさすゝみの程にいて給　夏の日もあさゆふすゝみ
ある物を

こきにひ色の一重にくわんさうのはかまのもてはやしたる　濃鈍色黑色也　萱草色くれなゐのきはみたる色也服者着物なり
くろきあはせ一かさね　鈍色のあはせきぬ也
かみさはらかなる程におちたるなるへし　さはらか
さきにあり
色なりとかいふなるひすいたちて　翡翠鳥の名也うつくしきすかた也
むらさきのかみにかきたる經をかたてにもち給へる
紫色吉事勿論也又凶服にも通用與紙の色も同事也紫上祖母の服はぬきなからまはゆき色にはあらて紅うす色むらさきのちのかきりおれるこうちきを着すとあり又六條御息所をくるゝ袖をとある返事もむらさきのにはめる紙也乙女巻に齋院御服のときたてまつられし源氏の文も紫の紙にたてふみにて藤の花の枝につけられたるなり

河海抄巻第十八

正六位上物語博士源惟良撰

第三十　總角

巻名　あけまきになかき契を結こめておなし所に
よりもあはなん

みやうかうのいとひきみたりてかくてもへぬるなと

名香絲　行香机の四角に結垂絲也　身をうしとお（世にとそ有けるイ）
もふにきえぬ物なれはかくてもへぬるものにそあ
りける

たゝり　いとをくる物也　万十三 をとめこかうみをのたゝ
りうちをかけうむ時なしに戀渡るかも

わか涙をは玉にぬかなんとうちすし給へる　伊勢集七條后崩 うへ人
時 あつまりて御わさのくみをなむしけるしもなる人
はいまはよりいて給ふつなりたゝいまなにわさを
かし給こゝにはいとはよりはてゝいまはねをなん
よりあはせてなき侍るといひをこせたれはしもな
る人よりあはせてなくなるこゑをいとにして我涙
をは玉にぬかなん

いせの御もかうこそはありけめと　御は女房をかし
つきたる也四條大納言新撰髄腦云いせの御か中務
君にをしへける歌云々本朝文粹云徒跣彈琴者開卷
稱ニ辨御ノ俗ニ謂ニ貴女ノ爲ニ御蓋取ニ夫人女御之義ヲ藤
相公兼ニ辨官ノ故稱ニ其女ノ也菅家御作慰ニ小男女ノ

物とはなしにとつらゆきかこの世なからのわかれを
古今貫之 いとによる物とはなしに別路の心ほそくもおもほ
ゆるかな

あけまきになかきちきりを結こめて　總角日本紀　舉
巻催馬楽

あはすはなにをとうらめしけになかめ給ふ　古今 かたい
とをこなたかなたによりかけてあはすは何を玉の
をにせん

深山かくれに御心くるしうみえたまふ人の御うへを
いとかく朽木にはなしはてすもかなと　かたちこそ
深山かくれの朽木なれ心は花になさはなさなむ

あつかはしくおほえ侍れと　もちあつかひたる心也

こゝろをしむるかたなかりつるを　思しつむるかた
なき也

たのもしけあるこのもとのかくろへも侍らさりき

（古今[illegible]）わひ人のわきて立よる木のもとはたのむ陰なく紅葉散けり

まつの葉をすきてつとむる山ふしたに　仙人年姜食二松葉一不レ飢壽百七十餘年 すきてとはこのみいるゝ也　菱荷爲衣松葉爲レ食沙門隱士行也

とのこいたるさまならす　事殘す也

袖のいろをひきかけたまふはしも　奥山の晴ぬ時雨

そわひ人の袖の色をはいとゝましける

秋の夜のけはひはかゝらぬ所たにをのつからあはれおほかるをいきたなかりつる物のみかなしうてみつのをとになかれそふ心ちし給

邊風吹斷秋ノ心緒　瀧水流添夜淚行 後江相公

明かたになりにけり御ともの人々おきてこはつくりむまとものいはゆるをともたひのやとりのある樣なと　晨鷄再鳴殘月沒　征馬連嘶行人出 白氏文集

むちとりのたちさまよふはかせちかうきこゆ　むら鳥の立にし我名いまさらにことなしふともしるしあらめや

いとすへなしとおほしたれは　せんすへなしといふ也　無便たよりなしと也

鳥の音もきこえぬ山と思しを世の憂事は尋きにけり

（古今）飛鳥のこゑも聞えぬ奥山の深き心を人はしらなんわか世はかくてすくしはてむと　かくしても我世はへなん菅原や伏見の里の荒まくもおし 古今

わけまきをたはふれにとりなしゝも心もてひろはかりのへたてにてもたいめんしけるとや

安介萬支也止宇々々比呂波加利也止宇々々左加利天爾田禮止毛萬呂比安比計利止宇々々加與利安比 催馬樂大宮本滋同音 アケマキ

介利止宇々々擧卷呂 八尺爲レ尋 左傳註一尋ヲ八尺ト讀又五尺ヲモヒロトヨムナリ裏書 旨尋ヲ一ヒ

なかつきもしつ心なくて　男女初會合忌正五九云々やうのものと　樣かましきといふ心歟かみのことは

ところにしたかひて心得へし

（宿世）すくせといふなるかたにつけて身を心ともせぬ世なれは　後撰伊勢　いなせともいひはなたれすうき物は身を心ともせぬ世なりけり

とうせられ給はす　不動

山なしの花そのかれんかたなかりける　世中をうしといひてもいつくにか身をはかくさん山なしの花けそうに　顯證

はかりことさらにもつくりいてまほしけなる　籌策
雲かすみをやなとずへてことおほく　仙人以二雲
霓一爲レ裳文選　裏書に雲是淮王宅なといへり仙人
の事也
ひれふし　蟀臥
おいのしはのふる心ちして　老皺
おそろしき神そつきたてまつりたらんと　能因歌枕
云人の中さくる神をはわらみさき又わらみかげと
いふ荒神事歟皇御孫尊此國にくたらんとし給しに
諸荒神此國を領して螢火のかゝやくかことし五月
蠅のさはくかことくつとひとよみけり又草木岩石
まても皆ものいふ此荒神をは大己貴神素盞烏尊御子　領し
給し也　玉かつらみならぬ木にはちはやふる神そ
つくてふならぬ木毎に萬葉
ははうちすきて　歯透
わふ人からにもあらぬ秋の夜なれと　なかしとも思
そはてぬ昔よりわふ人からの秋の夜なれは古今
かへのなかのきり〳〵すはほひいてたまへる　蟋蟀
居壁月令　遶レ壁暗蛩無レ限思　戀レ巣寒燕未レ能レ歸
白樂天

身もなけつへき心ちする　尋くる身をしとはすはよ
さの海に身もなけつへき心ちこそすれ
うちわはぬ人々のさかしらにくしとおほす　進心
おなしえをわきてそめける山姫に何れかふかき色と
とはゝや　古今勝臣おなしえを分て木の葉のうつろふは西こ
そ秋の初なりけれ
ことなしひにかき給へる　無爲
おなしわたりにてきめくらんいと人わらへなる　た
なゝしをふねめいたるへし　ほり江こくたなゝしを古今
舟こき歸り同人にや戀わたるへき
なへてやはなとねたましきこゆれは　妬聞　勵きこ
ゆる也
山とりの心ちして　人丸足引の山鳥のおのしたりおの長
〳〵し夜を獨かもねん　又尾をへたつる心にや
よをやへたてんと思ひなやみ給へり　伊勢物語若草の新手枕
をまきそめてよをやへたてんにくからなくに
みへかさねのはかま　中倍ある袴也一説中重ある躰なり
こよいはさうやくもやと　雑役
おなし御さはかれにこそおはすなれ

おいつきこはたの山にむまはいかゝ侍へき　萬葉 山城のこはたの里に馬はあれとかちよりそ行君をこひつゝ

めもはなもなをしとおほゆるは　直也　ほめたる詞也

しはつむ船のかすかに行かふあとの白波　世中をなにゝたとへん朝ほらけこき行舟の跡の白浪

ふるの山里いかならんとおとろかしきこえ給　いそのかみふるの山里いかならんをちの里人かすみへたてゝ　初時雨ふるの山里いかならし住人さへや袖ぬらすらん寛和殿上歌合

つねよりもわか面影にはつる比なれは　六帖伊勢 夢にたにみゆとはみえし朝な〳〵我面影にはつる身なれは

とを山とりにてわけぬ　雲ゐにて遠山鳥のはつかにもありとしきかは戀つゝをらん

みちやうのかたひらかへしろなと　御帳帷　壁代

たなはたはかりにてもかゝるひこほしの光をこそ

かいせんらくといふものをふきて　海仙樂　又海青樂　黄鐘調

宮はあふみのうみの心ちして　いかなれはあふみの海のかゝりてふ人をみるめのたえておひねは

宮の大夫　明石 中宮大夫

あしろのひをも心よせたてまつりて色〳〵のこの葉にかきませもてあそふを　六帖貫之 紅葉はのなかれてとまる網代にはしら浪もまたよらぬ日そなき

いはかきに　古今 奥山の岩かき紅葉散ぬへみてる日の光みる時なくて　石をかきのやうにつみたる也　岩かき紅葉いはかき清水なといへり

つきくさの色なる御心なりけり　古今 いて人はことのみそよきつき草のうつし心は色ことにして（あひおもはたくに伊行尺）

さい五かものかたりかきていもうとにきむをしへたる所の人のむすはんといひたるをみてわか草のねみん物とはおもはねとむすほゝれたる心ちこそすれ

伊勢物語むかし男いもうとのおかしきをみをりてうら若みねよけにみゆる若草を人のむすはんことをしそおもふときこえける返し　初草のなとめつらしきことの葉そうらなく物を思ひける哉　琴の事　伊勢物語には無所見在大和物語　うらなくものをといひたるひめ君もされて　以前返歌也

ものおもふときのわさときゝしうたゝねの御さま

たらちねのおやのいさめしうたゝねは物思ふ時の
　わさにそ有ける
他國 ひとのくにゝありけむかうのけふりをいとえまほし
うおほさるゝ　九華帳深夜悄々反魂香反ニ夫人魂ニ夫
人之魂在ニ何ノ許ニ香煙引到ニ焚レ香處ニ 白氏文集李夫人
うせての後漢武帝甘泉殿の裏に彼貌を圖して方士
をして靈藥を合せしめて金爐に焚しかは香の煙の
中に夫人の姿みえし事也
あすしらぬ世のさすかになけかしきも　明日しらぬ
我身と思へは暮ぬまのけふは人こそかなしかりけ
れ
たかためおしきいのちにかはとて　岩くゝる山井の
水を結あけてたかためおしき命とかしる
かく袖ひつるなといふふることもやありけん　古も
いまも昔も行末もかく袖ひつるおりはなかりき
なをあらしてとゝみるにてよひ／＼とおほしつゝさ
はりおほくなるほとに
みなと入のあし分をふねさはりおほみ我思人にあ
はぬころかな 拾遺人丸
あさりもよゐにさふらひて　夜居

くうつきて　功付たる也
さいつころ　近曾
法師はら五六人してなにかしの念佛なむつかうまつ
らせ侍　阿彌陀の念佛をいふにや
常不輕をなんつかせ侍る 或本侍るなと申　我深敬ニ汝ヵ等ニ不ニ
敢輕慢ニ所以者何汝等皆行ニ菩薩道ニ當レ得レ作レ佛
法華經常不輕所品　釋尊因位に不輕菩薩として此廿四字の偈
を唱て四衆を禮拜し給ひし也これは一切衆生の佛
性あるゆへにおかみ給ひし也
まてゝ　詣て也
いとたうとくつく　禮拜の事也　ぬかつくといふ也
ゑかうのすゑつかた　廻向
とよのあかりはけふそかしと　豐明節會　日本紀に
宴の字をとよのあかりとよめるされは何の宴をも
とよのあかりといふへし　但是は五節の豐明節會
の事也
れいになして　いたはるをは例に乖なといへ
は也
あしすりもしつへく　いせ物語にゐてこし女もなし
あしすりをしてなけともかひなし

かくなからむしのからのやうにてもみるわさならましかはと　うつ蟬はからをみつゝもなくさめつ深草の山煙たにたて
おろかならすけうし給へと　孝養也
ゆるし色のつやなとこほりとけぬかとみゆるをいととぬらしそへつゝ　薫大將ゆるし色を着たる歟歌にくれなゐにおつる涙もとあれは涙の紅をゆるし色にとそれによそへたる歟氷とけぬとは涙にぬれたるよしにや袖のつらゝなと云也
よの人のすさましきことにいふなるしはすの月夜のくもりなくさしいてたるを　清少納言枕草子にすさましき物しはすの月夜おうなのけさう　おうなとは嫗也老嫗の事也
在端裏書には老たる女也
むかひの寺のかねのこゑ枕をそはたてゝけふもくれぬとかすかなるを　遺愛寺鐘欹枕聽　香爐峯雪撥簾看樂天　山寺のいりあひの鐘のこゑことに今日も暮ぬと聞そかなしき拾遺
戀わひてしぬる藥のゆかしきに雪の山にや跡をけなまし
なかはなるけ偈をしへけんおにもかなとことつけて身もなけんとおほすそ心きたなきひしりの心成ける
諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂涅槃經　雪山童子求レ法有二千丈夜叉一現二半偈一先說復同以求二半偈一日飢求レ能レ說曰食何新血肉童子爲レ法乃捨二全身一佛因中也夜叉帝釋化身也　中阿含經　涅槃經說同之仍畧之
月ころのつみはさも思きこえぬへきことなれとにくからぬさまにこそかうかへたてまつり給はめ　勘事の心也
ちゝのやしろをひきかけて　ちかひつることのあまたに成ぬれはちゝの社もみゝなれぬらん
つれなきはくるしき物をと一ふしおほししらせまほしくて　いかて我つれなき人に身をかへてくるしき物と思しらせん
かくおはしならひてそうもそくも　僧　俗

第三十一　早蕨

卷名　此春はたれにかみせんなき人のかたみにつめるみねのさはらひ
やふしわかねは春のひかりを見たまふに　日の光や

ふしわかねはいそのかみふりにしさとに花もさき
けり古今
わらひつく〳〵し　蕨毛詩　薇同　虌同註　土筆(ツクツクシ)　本
草疏云　周秦曰レ蕨齊魯曰レ虌　俗云其初生似二虌
脚一故名レ之云々薇各別物歟園豆也といへり然而和
國には通用歟
いやめに　もの思ひしみくる
この春はたれにかみせむなき人のかたみにつめる峯
のさはらひ　行てみぬ人もしのへと春の野の形見
につめるわかなゝりけり貫之
おほとのあふらもきえつゝやみはあやなきたと〳〵
しさ　古今春の夜のやみはあやなし梅の花色こそみえね
かやはかくるゝ
いはせのもりのよふこ鳥めいたりしよのことはのこ
したり　伊行釋載入戀しくはきてもみよかし人傳にいはせの森
のよふこ鳥かな　万葉鏡王女神なひのいはせの森のよふこ鳥
いたくな鳴そ我戀まさる
案之此兩歌猶いまの心にかなはさる歟可勘薫大將
にあね君の中君をゆつられし事をは兵部卿宮に語
たてまつれともまさしく會合の事をのこしたゝと
いふ心也其由の本歌さためてあるへき歟猶可勘
いまはとてこのふしみあらしはてんも　ふしみは大
和國也　日本紀云安康天皇崩菅原伏見野中陵葬
古今すか原や伏見のさとの荒しよりかよひし人の跡は
たえにき　あらしはてんといはんためにこのふし
みといへる歟　宇治をふしみといふにはあらさる
也此本歌は大和國にすか原ふしみと云所ありかし
この仙人のよめる也是を本歌にて菅原院をふしみ
とも云也
みねのかすみのたつをみすてんこともをのかとこよ
にてたにあらぬ　古今伊勢春霞立をみすてゝ行鴈は花なき里
にすみやならへる　をのかとこよは歸雁によせて
いへる也　常世(トコヨ)日本紀　蓬莱山(トコヨノクニ)同
御ふくもかきりあることなれはぬきすて給に　道信朝臣かき
りあれはけふぬきすてつふち衣はてなき物は涙な
りけり
みそきもあさきこゝちそする　除(チヨ)服事也
河原にいてゝ解除するなりあさきは兄弟の服三月
なりかきりあることなれはぬきすて給へとも心に

は父母の服のことくに着はやと思はるゝ故にあさきこゝちすると云也
中の宮はましてもよほさるゝ御なみたの川にあすの御わたりも覺え給はす　もよほさるゝ涙の川にあすの御わたり詞の奇絶無比類者也
姫宮はおもかけさらぬ人の御ことをさへ思いてきこえ給ふに　故姉君の事也
やとをはかれしとおもふ心ふかく侍を　古今業平　いまそしるくるしき物と人またんやとをはかれすとふへかりけり　此外にやとをはかれしと云歌ある歟只又詞にも云へき也
春やむかしのと心をまとはし給とちの御物語に　月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして　伊勢物語
花のかもまらうとの御にほひもたち花ならねと昔おもひ出らるゝつまなり　古今　さ月まつ花橘の香をかけはむかしの人の袖のかそする
袖ふれし梅はかはらぬ匂にてねこめうつろふやとやことなる　後撰伊勢　かきこしに散くる花をみるよりはねこめに風の吹もこさなん

いとふにはえてのひ侍るいのちのつらく　にくさのみますたの池のねぬなはのいとふにはゆる物にそ有ける　後撰　あやしくもいとふにはゆる心かないかにしてかは思やむへき
なへての世を思給へしつむるに　拾遺　大かたの我身ひとつのうきからになへての世をも恨つるかな
みやひかなり　閑麗　又遊仙窟　文選　又閑（ミヤヒカ）白氏文集
又臘（ミヤヒカナリ）朒遊仙
すへてなへてむなしく思とるへき世になんなとの給ふ
躬尼　人はみないそきたちぬる袖の浦に獨もしほをたるゝあまかな　唐衣　後撰　袖しの浦のうつせかひむなしき戀に年やへぬらむ
しほたるゝあまの衣にことなれやうきたる浪にぬるゝわか袖　後撰小町　心からうきたる舟にのりそめてひと日も浪にぬれぬ日そなき
さきの世にもとりわきたる契やものし給けんと　君とわれいかなることを契けん昔の世こそしらまほしけれ
ありふれはうれしきせにもあひけるを身をうち川に

なけてましかは（六帖三）いのりつゝたのみそわたるはつせ
川うれしきせ（せゝにイ）にもなかれあふやと（後撰）こゝろみに猶
をりたゝむ涙川うれしきせにもなかれあふやと（後仲）
かゝる瀬もありける物をとまり居て身を宇治川と
おもひけるかな（九條右大臣集）
けふはたまつもゆく心かな　將先
とのつくりのみつはよつはなる中に　此殿はむへも
とみけりさき草のみつはよつはに殿作せり
おほろけならす　不少縁
ものにもかなやと返々ひとりこたれて　とりかへす
物にもかなや世の中をあらしなからの我身とおも
はん
しなてるやにほの水海にこく舟のまほならねとも逢
みし物を（万葉八九）しなてるや鳰の水うみにこく舟のまほ
にもいもにあひみてしかな　此歌の意は人丸妻に
依（ヨ）羅（サミ）娘子と云物あり娘子死後人丸歎之よみたる歌
也しなてるやにほのみつうみとは海の惣名也たと
へは久かたの空足引の山なとゝつゝける心也如此
の詞をはさゝけ物と云（以上異本）此歌は大略同物也然而
先達説にいはく萬葉歌取すくす強非難云々

或又中古まても法性寺關白くにつみかみの浦さひ
てと詠し後徳大寺左大臣なからのはしをきてみれ
はなとよまれたり或又伊勢物語にもはしめてよみ
たるやうに書て萬葉の歌あまたありあさか山の歌
以下也作物語なとは如然事常事歟空蟬卷に勘付た
りしなてるは水うみの惣名歟にほてる同心歟湖を
はしなとよみ光をはてるとよむ白氏文集に湖光と
かけり此事歟萬葉にしほてるやかたをか山あすは
かはともよめりかたしなもろしなといふ事あるに
やをしてるは鹽海也又拾和歌に三曲あり第一しな
てる岡事也　第二をしてる鹽海事也　第三にほて
る湖の事也就之重々說在之此歌釋大概如此　し
なてるやかたをかあすは川とあり
或又難波にかきる堀江をさしていへるといふ心歟（也イ）
いひくたさまほしき　腐也
二條院のさくらを見やり給にぬしなきやとのまつ（先）思
やられ給へは心やすくやなとひとりうちあまりて
植てみしぬしなき宿の櫻花色はかりこそむかしな
りけれ　谷深（みちはらイ）みみる人もなき櫻花心やすくやかせ

にちるらん
されとしちの心はへは　實

第卌二　宿木　寄生ヤトリヤ
巻名　やとり木とおもひはてすは木の本の旅ねも
いかゝさひしからまし
一名　貌鳥
貌鳥の聲もきゝしにかよふやとしけみを分て今日
そたつぬる
そのころ藤壺ときこゆるは故左大臣の女御になん
梅か枝に麗景殿とわり相違おほつかなし
いたつらに日をゝくるたはふれにて之なんよかるへ
きとてこはんめしいてゝ　銷レ日不レ如レ碁　延喜七
年正月三日御記朝覲行幸也　大臣等日還御之時可ニ寂寥一
宜レ園レ碁持ニ懸物一有ニ好馬一則召ニ碁局一式部卿親王
與ニ左大臣一碁其間御厩別當春野牽ニ鹿毛御馬ニ立ニ
庭中ニ一局給ニ左大臣勝一
よきのり物は、　賭ノリモノカケモノ
みつもるましく思さたむとも　伊勢物語云むかし色
このみなる女いてゝいにければ　なとてかくあふ

こかたみに成ぬらん水もらさしと結しものを
つゝみをはとよらの寺につきそめて世々をへぬれ
と水はもらさす貞信公
むかしありけむかうのけふりにつけてたに　反魂香
前勘
草のもとをかれにける
こゝろのそこのつしやかなる　したゝかなる心也
めゝしくものくるをしく　めたゝしく也
かねてよりならはしきこえ給をも　かねてよりつら
き心をならはさて
めゝしく物くるをしく　めたゝしく也
あくるまさきてとかつねなき世になすらふるか
譬日及之在レ條エダニ垣一雖レ盡而不レ悟　注日朝菌者世
謂ニ之木菫ムクゲ一或謂ニ之日及一也文選歎逝賦　日及はあさかほ
の名也
きたの院　二條院の事也三條宮より北なれは也
北おもてなとやうのかくれそかし　北面は女房の居
住すへきかた也北の方なといふも此故也内々の方
と云心也内家内房なと云也
なにゝかゝれるなといとしのひてこともつゝかす

與君結ノ新婚ニ菟絲附ニ女蘿ニ（古詩女蘿ハ松ノコケ也）　松蘿契夫妻
といふ事也（伊行釋奥入水原以下同）
藤浪に松のあらしの音せすはなにゝかゝれる花と
しらまし　今案是は中君の詞也女のかたよりして
此文の心を云へきにあらす朝顔の本歌有歟可勘付
庭もまかきもまことにいとゝあれはてゝ侍し　里は
荒て人はふりにし宿なれや庭も離も秋のゝらなる
こ院のうせ給てのち二三年はかりの末に世をそむき
給しさかの院にも六條の院にも　六條院遁世し給け
る事此詞にみえたり　嵯峨院は桂院歟（桂宮院イ）又栖霞寺歟
わすれ草おほしてのちなん　毛詩云北堂栽ニ萱草ニ能
忘ㇾ憂このゆへに萱草を忘草と云也
住吉の岸のわすれ草も此草也いまに（もイ）神供をこの草
にて褁て供云々
よのうきよりはなと人はいひしを　（古今）山里は物さひし（のこひ）
かる（しょ事イ）ことこそあれ世のうきよりは住よかりけり
そのまゝにまたさうしにて（古今）　精進
いくよしもあらしを　いくよしもあらし我身をなそ
もかくあまのかるもに思みたるゝ
あないし給へは　案内

人かすなるやうなる　人流（ヒトカス）遊仙窟
さらにをはすて山の月すみのほりて　（古今）我心なくさめ
かねつさらしなやをはすて山にてる月をみて
しゐの葉のをとにはおとりておほゆ　家にてはけに
もるいゐを草枕旅にしあれは椎の葉にもる
月みるはいみ侍ものを　後撰第十云月をうつくしみ
あはれといふはいむなりと申人のありけれは讀人
不知　ひとりねのわひしき時はおきゐつゝ月をあ
はれといみそかねつる
いのちまつまもつらき御心なれは　ありはてぬ命ま
つまの程はかりうきこととしけく思（なけかイ）はすもかな古今
なをこりすまに又もたのまれぬへけれとて　こりす
まに又もうき名は立ぬへし人にくからぬ世にしす
まへは
身を心ともせぬありさまなりかし　いなせともいひ
はなたれすうき物は身を心ともせぬ世なりけり
あまのかるめつらしきたま藻にかつきうつもれたる
を
かことかましけなるも　かこつ也
ひくらしの鳴こゑに山のかけのみてひしくて　日く

らしの鳴つるなへに日はくれぬと思ふは山のかけ
にそ有ける古今
あまもつりするはかりなるも　戀せしとねをのみな
けはしきたへの枕の下にあまそつりする
御たいやつれいの御さらなとうるはしけにきよらに
て又ちいさきたいふたつに花そくのさらともいまめ
かしくせさせ給てもちゐまいらせ給へり
うちわたし世にゆるしなきせき川を　關川　會坂關
川にあり寛平菊合元良親王イあさくこそ人はみるともせき川のたゆる
心はあらしとそおもふ
おやにては心もまとはし給ぬへかりけり　人のおや
の心はやみにあらねとも
世やはうきなとやうにおもはせて　よやはうき人や
はつらきあまのかるもにすむ蟲の我からそうき
ものにもかなやとゝりかへさまほしき　取かへす物
にもかなや世の中をありしなからの我身とおもは
ん
かくやすからす物を思ふ事とくやしきにも又けにね
はなかれけり　ならはねは人のとはぬもつらからす
くやしきにこそねはなかれけれ

いにしへをくゆる心のしのひかたさなと　後悔也
御けしきの心うさはことはりしらぬつらさのみなむ
身をしれは恨みぬ物をなそもかくことはりしらぬ
つらさなるらん
いとうき身なりけりとたゝきえせぬ程はあるにまか
せて　うきなから消せぬ物は身なりけりうら山しき
は水のあは哉
あやのれう給はせなと　綾料糸事也
けにそしたやすからぬ　拾遺水鳥の下やすからぬ思ひに
はあたりの水もこほらさりけり
たれも千とせの松ならぬよをと　うくも世の思ふ心
にかなはぬかたれも千とせの松ならなくに
かきりたにあるなと　六帖戀しさのかきりたにある世な
りせはつらきをしゐてなけかさらまし
をとなしのさともとめまほしきを　戀わひぬねをた
になかんこゑたてゝいつこなるらん音無の里
むかしおほゆる人かたをもつくりゑにもかきとりて
をこなひ侍らむと　白氏文集曰香爐峯北有レ寺號ニ遺
愛寺一件寺者高宗皇帝有ニ最愛王子一至ニ七歳一忽薨
不レ堪ニ哀傷一建ニ立堂舍一王子形安ニ置其寺一草堂記

畫圖事漢武帝初喪二李夫人甘泉殿裏令レ寫レ眞丹青畫出竟何益不レ言不レ笑愁二殺君一 丹青ヱチモヱノ具ヲモ云也 彫刻テウコク事ハエリチリハメタル也 温石ハ和ナル石也 武帝以二董仲君一李夫人貌ナ作以二温石一

あはれなる御ねかひに又うたてみたらし川ちかき心ちする　戀せしとみたらし川にせし御祓神はうけすも成にけるかな

こかねもとむる名師もこそなとうしろめたくてそ侍やと　蒼舒云漢元帝宮人頗多常令二畫工圖一レ之有二欲レ呼者一被レ圖以召故宮人多行賂二於畫工一王昭君姿容甚麗無レ所二苟求一レ工遂毀二其狀一後匈奴求二美女一帝以二昭君一宛行既召見帝悅レ之而名字已去遂不二復留一帝怒殺二畫工毛延壽一 杜詩注　毛延壽と云人王照君のかたちを名にかきし事也金をえてかたちのわろき后のかほをはめてたくかき昭君のうつくしきかたちをは金をえさりしかはわろくかきたりし也仍わね君のかたちをも金をえさせすはわろくやかゝんすらんと也

ちかき(ろイ)世にはなふらせたるたくみも侍けるをさやうならんへんけ(變化)の人もかな　ひたのたくみか事也云々

勘付可

しのふ草つみをきたりけるなるへし　結をくかたみのこたになかりせはなにゝしのふの草をつまゝしよをうみなかにもたまのありかをたつねんには心のかきりすゝみぬへきを

又旁求二四虛上下一東極絕二天海一跨二蓬壺一見二最高仙山一上多二樓閣一西廂下有二洞戶一東嚮闔ヒラク其門署曰二玉妃太眞院一 長恨歌傳陳鴻

いとくちかるけれとへんけのたくみもとめ給ふいとほしさもこそ　口輕かろ〱しくものいふ心也

けせうにはしたなきさま　顯證あらはなる心也

おりたちてれんしたる心ならねは　練

いつと侍らぬなかにも秋の風は身にしみてつらくおほえ侍りて　秋ふくはいかなる色の風なれは身にしむはかり人の戀しき

おくれさきたつほとは　末の露もとのしつくや世の中のおくれさきたつならひ成らん

むかしの人のゆへある御すまゐにしめつくり給ひけむ所をひきこほたんなさけなきやうなれと　比レ屋

齊人何處居憶レ昨平陽宅初置呑併平人幾多家地仙

去双々作二梵宮一漸恐人家盡爲レ寺（兩朱閣判二佛寺一寢多一也白氏文集）
むかしわかれをかなしひてかはねをつゝみてあまた
のとしくびにかけて侍ける人も　或傳記云觀音勢至
因位にむかし人の子にておはしましけるに繼母の
ためにころされけれはそのおやかはねをくびにか
けてつゐに佛道に入給ける也經文にあり云々
ひじりのみちにもいり侍ける　聖道門事也
こよみのはかせ　暦博士（推古天皇十年甲子正月戊午始用二暦日一）
こゝろうきいのちの程にてさま〳〵の事を見給すく
し思給しり侍なんいとはつかしう　なにをして身の
いたつらに老ぬらん（にけんイ）年の思はん事そかなしき
（此次在所見合本可書入）
見なれぬる中の衣とたのみしをかはかりにてやかけ
はなれなん　衣たに中にありしはうとかりきあはぬ
世をさへへたてつる哉人丸
こたになとすこしひきとらせ給て　木蜩（つたのたくひなり）
やとり木と思いてすは木の下の旅ねもいかにさひし
からまし　寄生（ヤトリキ）
峯の朝きりにまとひ　鷹のくるみねのあさきりはれ
すのみ思ひつきせぬ世中のうさ
いはほのなかもとめんよりは　いかならんいはほの
中にすまはかは世のうきことのきこえこさらん
わか身ひとつのとて　大かたのわか身ひとつのうき
からになへての世をも恨つる哉
花のなかにひとへにとすし給てなにかしのみこのは
なめてたるゆふへそかしいにしへ天人のかけりてひ
はのてをしへけるは　不二是花中偏愛一レ菊此花開盡更
無レ花元稹　西宮左大臣庭前靈物降二居樹上一託二前遊
小兒一詠二此詩一敎二作者之本意盡字一兼請二琵琶一授二
秘手曲一小兒醒了廉承武之靈也授二上元石上流泉
曲一又天人琵琶をおしふることは寢覺（サメ）物語にもあ
り云々ねさめの中の君といへり
伊勢のうみうたひ給　伊勢の宇美乃引支與支ぃ名ぁ
支左爾一之保加ぁ比爾名乃利曾也川末ぁ丶牟宇加比
也比呂波ぁ丶牟也引多末ぁ丶也比呂波ぁ丶牟也伊勢海
つくもところ　作物所
なをしものとかいふことに　除目直物　縣召或京官
除目以後執筆直物を申行也或除目以後兩三月を經
てもある也先度除目參着の事等をなをすゆへに直
物と云也其次に書入らるゝ事ある也

おさやかなる御なをしたてまつりひきつくろひておりてたうはいし給　答拝宮直衣

やかてこよひつかさの人にろく給あるしの所にとさうしたてまつり給ふ　大將初任饗の尊者兵部卿宮を請申たる也　親王尊者例可勘

ゑんかの御こたちかんたちめたいきやうにおとらす　大饗垣下公卿に列して公事をつとむる親王也

五日のよは大將殿よりとんしき五十具菓子出こてのせに錢こもちの御まへのついかさね挨飯廾ちこの御そ五かさねたにイて御むつきなんとそわうはんなと　天暦四年閏五月五日此日自ニ中宮一給ニ産餉一息所前衡重廾枚面打敷等用ニ蟬翼一有ニ銀筒一箸上洲濱等酒壺具如レ例有ニ男女房饗一各用ニ朱臺盤一荒屯食十具皇子御衣十襲九條右丞相記

五具唐綾五具平絹五具納ニ深折櫃四合一置中取ニ一脚一前イ

同記日當ニ第七夜一姫宮政所設ニ饗饌一息所御膳衡重廾前線面打敷有ニ銀筒一四枚箸上洲濱又有ニ酒壺俱一具ニ又親王公卿料廾前毎前繪打敷四枚碁手五十貫屯食五具冷泉院御誕生記也　四條抄曰右衛門府奉ニ碁手錢盛レ机ニ立ニ砌前ニ召ニ使裏ニ別置ニ高坏ニ官人取立ニ王卿傍ニ新依ニ制令ニ停ニ止之ニ　依例或有ニ碁闘之興ニ此間或府督勸盃之

ふすくまいらせ給へり　粉熟　俞谷甍記云獻赤粉餅云々私云今ノフンザウノ様ナル物ナリ

すかしくしく　速々

大くら卿よりはしめて

宮のわか君のいかになり給日かそへとりてそのもちゐいのそき　五十日或百日供餅事也

天暦四年八月五日儲宮降誕之後當ニ百日一仍任ニ世俗例一供ニ御餅一朱小御臺六基一基御七筋乾荷葉四種以上銀器二基唐菓子八種二基餅八種一基等四種以上盛ニ平盤ニ九條記

おりつれはとかいふやうにうくひすも尋きぬへかめりなと　折つれは袖こそにほへ梅の花ありとやこゝに鶯のなく古今

せちぶとかいふ事　節分四月節也

ふちの花のえんせさせ給ふ　飛香舎藤花宴事　延喜二年三月廾日御記云此日左大臣於ニ飛香舎藤花下一有ニ獻物事一左大臣執ニ獻物一稱ニ菅根一獻ニ御贄一可レ爲ニ作御息所宣旨別當一也而後列ニ坐藤花下一盃酒數巡後左大臣殊仰ニ右大將ニ令レ獻題目一飛香舎藤花和歌則左大臣置ニ御硯筥一奉ニ手跡筥一暫獻ニ横笛和琴一其横笛箱是承和逢物耳酒盃同擧群臣酩酊管絃歌舞

亂召二敦固親王一備前介忠房令レ吹レ笛暫給二蘇群臣一
有レ差
きんのふ二卷　琴德譜五卷　雜琴譜百廿卷見在書目六
ふちのむらこのうちしき　藤村濃打敷
しろかねのやうき　銀楊器装イ　或藥器　親行說
御さかつきさゝけてをしとの給へることはつかひ　進
シス日本紀
食第七　案之若稱唯事歟
御門の御むこ
御むこにてもてはやされ奉り給へり　漢書曰女子公
主注曰如淳日公羊傳曰天子嫁女於諸侯必使諸侯同
姓者主之故謂之公主百官表列侯所食曰國皇后公主
所食曰邑帝姉妹曰長公主正三位源朝臣潔姫者嵯峨
天皇之女也天皇選智未得其人太政大臣正一位藤原
朝臣良房初參之時天皇悅其時採超倫殊初嫁之
くたれるさにかへりつき給ほと　下座
はてはえんやなにやと　宴
かみのまちも　第一と云心歟二のまちとあるに思あ
はすへし
よろつ代をかけてにほはん花なれはけふをもあかぬ
色とこそみれ　飛香舍　藤宴　延喜御歌　かくてこ
そみまくほしけれ萬代をかけて匂へる藤浪の花

藤に萬歲藤の號あり
むらさきの雲　紫の雲拾遺とそみゆる藤の花いかなる宿
のしるしなるらん
ひさしの御くるまにてひさしなきいとけみつこかね
つくりむつたゝのひらうけ廿あしろ二　庇御車
糸毛　金造　檳榔毛　網代
れいのくちきのもとをみ給へすきんか　辨の尼か事
也　深山かくれの朽木なれの歌の心也
かや〳〵といふをせいし給　かしかましき也
やゝみて　良見　よく〳〵みる也云々
わかなへいろのこうちき　若苗色　わかかえての色
したるといへる本あり同前歟　若鷄冠木ワカカヘテ
いつみかはのふなわたり　泉川　木津川を云也　日
本紀には挑川とありつと五音通する也　崇神天皇發兵此川を
中にして挑戰ありし故也　都古今いてゝけふみかのは
ら泉川かはかせさむし衣かせ山
ふなわたし　造舟フナワタシ　文選第二
しそき給へと　退
みさうのあつかり　御莊預
けさもむこに　無期

ほうらいまてたつねてかん、しのかきりつたへて見
給けん御かとは　取二金釵鈿合一各折二其半一授二使者一
曰爲レ我謝二太上皇一謹獻二是物一尋二舊好一也（長恨傳）
かほ鳥聲もきゝしにかよふやとしけみを分てけふそ
尋ぬる　（万葉八九）夕されは野へになくなるかほ鳥のかほにみ
えつゝわすられなくに　（同）かほ鳥のまなくしは鳴春
のゝの草のねしける戀もしるかな　（同）春のゝになく
かほ鳥のこゑたてゝいたくはなかし人しりぬへみ
毛詩云流離梟少而貌（カホヨシ）好老甚醜　此故に梟鳥の一名
を貌鳥といふなり　或說云杜若をかほ花といふ彼
花さく比此鳥なく故なり　又八雲抄云かほ鳥は春
日山によめりかた戀するものと云へりよるひるた
えす戀すといへりまなくしはなく春の野といへり
源氏物語にもあり是其鳥と定歟（也イ）但定家卿不知之と
いふ推之只うつくしき鳥歟但未決

河海抄巻第十九

正六位上物語博士源惟良撰

第卅三　東屋　四阿

巻名　さしこむる葎やしけき東やのあまり程ふる雨そゝきかな

つくは山をわけみまほしき御心はありなから　つくは山は山しげやましげゝれど思入にはさはらさりけり

かみのこともは　守子共或本是は常陸介子共也　太守は爲親王畄之親王任時不知吏務仍以介爲守乃介勘吏務云々此故今の介を守といふ歟又當國守凡人任時止大字唯守に任する例もあるなり　裏書云常陸上野兩國之外親王不レ任諸王は宮遂御事なり

すき／＼に五六人ありければ　次々歟すとつと同響也或は過々

おなしこととおもはせて　同子也

さま／＼にくはりて　賦

とくいかめしうなとあれは　徳

こととこのみしたるも　好事者慕以ニ餞帛一孝經

すこしたみたるやうにて　迂

かうけのあたり　豪家

こしをれたるうた合物かたりあはせかうしんなとし

腰折　歌合　物語合　庚申

まきゑらてん　蒔繪　螺鈿

めをはつかにさしいつはかりにて　うつもれたる心なり

ないけうばうのわたりよりむかへとりつゝならはすて手ひとつひきとれはしをたちゐをかみてよろこひろくをとらすることとうつむはかりにて　内教坊知女楽事　別當大納言中堪ニ其道一之人補レ之裏書云　内教坊は大内殿舎名也大内は大内裏事也

はやりかなることくの物なとをしへてし師と　萬秋樂に内教坊説といふ事あり然ははやりかなる曲の物とは五六帖の事歟孝行説　十三學ニ得琵琶一成名屬ニ教坊第一部一琵琶引　内教坊の琵琶の師和漢の古事有ニ其心一也

あこをは思おとし給へりとうらみけり　吾子日本紀

我子　阿子　家子

しか／＼なんと　云々シカ／＼イフ日本紀

かのかんのぬしの　守主也　何の主と云は聊かしつく詞也大鏡にもなにかしの主の藏人にていますかりしなと多あり
もはらかほかたちの　專
このにしの御方　東屋君也
うちの御かた　內房の心也
てにさゝけたること　如捧手　掌上珠と云躰なり掌ハタナコヽロ也
いゑのこにてみたてまつりしに　高家子
しむしちのやむことなく思をきてたまひつらんをこそほいかなふにはせめもはらさやういほとりはみたらんふるまひ　ほとりはみとはふれはみたる心也
またころの御とくなきやうなれと　ころとは身づからと云心也又云比歟いまたさかりの御とくならすと云歟のちの守かことはにてのころの御とくなどの心もとなからんことはなのたまひそとあり
なを人のかきりなきと　直人諸大夫也
めのわらはゝあまたのなかに　女孺事 延喜神式　女童 兒 毛 萬葉
らい年四位になり給なんこたみのとうは　今度 日本紀　頭　藏人頭也
御かとの御くちつからこて給へるなり　こて給ふはこち給也いひこち給也てとち五音通する故なり
ひなひたるかみにて　雛　夷　非中ひたる 枕草子
大臣にならんそくらうをとらんそ　續勞　古記權大納言去年献二續勞一申二官云々
かみとよりいりきて　外より入來て也
わこの御けしやう人をむはゝんとし給けるか　新猿樂記云十二君氣裝人十二君　假相人
えうせさせ給きみたちわらしや　用或要
わふなく　わふなく讀無與也おくふかゝらすあさしゝしき心也
たなはたはかりにても　古今 契りけん心そつらき七夕の年に一たひあふはあふかは
ひともとゆへにこそはと　むらさきの一もと故にむさしのゝ草はみなから哀れとそみる
うきしまのあはれなりし事も　後拾遺 へたてける人の心をうき嶋のあやうきまてもふみみつるかな
我身ひとつとのみいひあはする人もなき　世中はむかしよりやはうかりけん我身ひとつのためになれるか　大かたの我身ひとつのうきからになへての

世をもうらみつるかな
つくは山のありさまも　つくは山はやましけ山しげけれと思ひ入るにはさはらさりけり
いは木ならねは　人非二木石一皆有レ情白氏文集心非二木石一遊仙窟
かゝる御心をやむるみそきを　戀せしとみたらし河にせしみそき神はうけすそ成にけらしも
みし人のかたしろならは身にそへて戀しきせゝのなて物にせん　人形　祭祀具　一撫　一吻
ひくてあまたにとかやいとをしくそ侍やと　（伊勢物語）大ぬさの引てあまたに成ぬれは思へとえこそたのまさりけれ
つゐによるせはさらなりや　（伊勢物語）大ぬさと名にこそたてれなかれてもつゐによるせはありてふ物を
あまの川をへたてゝも　（伊勢物語）ひこほしに戀はまさりぬ天の河へたつる關を今はやめても
よりゐ給へりつるまきはしらも　わきもこかきてはより立愼柱そもむつましきゆかりと思へは
經なとよみてくとくのすくれたる事あめるにもかのかうはしきをやんことなき事に佛の給をさけるもことはりなりや　やくわうはんなとにもとりわきての給へるこつせんたんとかや　若有レ人聞二是藥王菩薩本事品一能隨喜讃善者是人現世口中常出二青蓮花香一身毛孔レ中常出二牛頭栴檀之香一法華經
とりのねきこえさらんすまゐにて　（古今）とふ鳥の聲もきこえぬおく山のふかき心を人はしらなむ
かすならぬ身に物思ひのたねをやいとゞまかせてみ侍らん　數ならぬ身には思ひのなかれかし人なみなみにぬるゝ袖かな　（伊勢物語）今はとてわするゝ草のたねをたに人の心にまかせすもかな
なき名はたてしとうちそむき給も　思はむとたのめしこともある物をなき名をたてゝたゝにわすれね
きちやうすにそへてたてたり　簾
ひやうふのふくろにいれこめたる　屛風納袋事今世いたくなき事にや上古の事歟但舊記無所見ゐ中ひだる躰也
はやりかにをそき人にて　物おそけしきを云心也
みこうして　みる事も至極したる心也看殺おなし心也
かのめのとこそおすましかりけれ　おそましき也そ

とす同音なり
かまのさうを　降魔相
うつしむまとは　鞍置馬也
ゆするのなごりにや風心ちもなやましくて
洗レ髪後首風發醫書　沐ユスル左傳曰辭以レ沐謂ニ僕人一
曰沐則心覆則圖反宜
めましろきをして　道理承　瞬メマシロク
しちならぬ事　不實
いはてうしと思はん事いとはつかしけに　心には下
行水のわきかへりいはて思ふそいふにまされる伊勢物語
思ふことといはてそたゝにやみぬへき我とひとしき
人しなければ
宮をおひてもおはぬやうなる心はへにそうちうそぶ
き　ふす程もなくて明ぬる夏の夜はおひてもおはぬ
心ちこそすれ
いたちの侍らん心ちして侍ればよからぬ物共に　い
たちのまかけと云事歟たとへはおほつかなき心に
や中君の御返事にもうしろめたげにけしきはみた
る御まかけこそとあり
ふかき山のほいはみさほに侍へきを　操ミサホ　心操也

心から也
かたはらいたうゆるしなかりしすぢはなにゝかかけ
てもきこえさせ侍らんそのかたならておほしはなつ
ましきつな侍るをなんと　八宮の浮舟君を我子とゆ
るし給はさりし事也そのかたならておほしはなつ
ましきとは中君の母儀と常陸介妻としたしき事也
さうしくに　曹司々々
もろこゑにいとなますと　左右音コヱ萬葉
ことたにおしきと宮のうちすし給へりしを　うつろ
はんことたに惜き秋萩にをれぬはかりもをける露
かな
宮城のゝ小萩かもとゝしらませは露も心をおかすそ
あらまし　宮城のゝ本あらの小萩露をおもみ風を待
こと君をこそまて　宮城のゝこはきかもとは宮の
子としらましかはとそへていへるなり
こみやの御こときゝたるなめり　御子也
はゝきみのたつやと　屋戸　宿　古人注如レ此但惣
不レ得ニ其心一猶可ニ了見一
あらぬ所　拾遺世の中にあらぬ所もえてしかな年ふりに
たるかたちかくさん

まとはしはふるゝ　迷　放埒
そうはうのくに　僧坊共
まろこそふりかたくわけくれ　難舊
あたこのひしりたに時にしたがひていてすやはあり
ける　愛岩聖者空也上人事歟　彼山緣起曰空也上人
於二淸水寺一發二誓願一曰念佛行何所にしてか慈尊の
出世に至まて相續の靈地たるへきと祈念せられけ
るに觀音告給はく愛宕山月輪寺は是補陀落山同淨
土也魔界斷レ跡聖衆影向之所也於二彼所一此行を可レ
始之由有二夢想一仍彼山にして多年練行其後於二洛中一
念佛行を弘通して諸人を度せらるゝと云々（取意略抄）
三代格僧正眞濟空海大師に從て眞言を傳愛宕高雄
に十二年住けると云々
人わたすことも侍らぬに　衆生無邊誓願（四弘誓願之隨一也）　四弘
誓願（衆生無邊誓願度　法門無邊誓願字　煩悩無邊誓願斷　無上菩提誓願證）
ゆめをこかましう　努力
ふりはへさかしらめきて心しらひのやうにおもはれ
侍らんもいま更なるいかたうめのかたてにやとつゝ
ましくて　ふりはへはうちはへ也心しらひは心知也
煖熱（コヽロシラヒ）漢語抄

いかたうめ　伊賀部女（中媒事也狐にそへていへる也）
又云伊賀刀女（釋云女孺々々　刀女は孤なり）　齋宮寮部女（是狐事也）　一說伊賀
伊勢國には白狐をたうめの御前と云々　新猿樂記
云野干（キツネ）坂之伊賀專之男祭　專今俗呼二老女一爲レ專
漢語抄　裏書云私くらへとてかんなきのやうなる女
の事云々
かほしらぬうしかひ　牛飼應神天皇之御時はしまる
と云々
夜行うちしてやかのたつみのすみのくつれいとあや
うしこの人の御くるま　家の辰巳也秦始皇本紀註曰
西京賦曰徼道外周千廬內傳薩綜曰士傳宮外白爲廬
舍晝則巡行非常夜行則警備不虞也家の字をやかと
よむ也中納言家持ともいへり源順夜行歌在夕顏卷
おきつとりかもといふ船のかへりにはやかのさき
もりはやくつけこそ　伊勢物語門よりもえいらて
わらはへのふみあけたるついちのくつれよりかよ
ひけり（古今にはかきのくつれとあり）
みとも人　御供人
さのゝわたりにいゑもあらなくになとくちすさひて
（万葉）くるしくもふりくる雨か三輪か崎さのゝわたりに

家もあらなくに
さしとむるむくらやしけき東やのあまり程ふる雨そ
そき哉　四阿（アツマヤ）令新猿楽記　阿屋順和名四屋同上　東屋催馬楽
庶令云宮殿皆四阿辨色立成云四阿阿都末夜末屋雨下同令云庶人門舎不
得過一門辨色立成云雨下屋夜
ひたのたくみうちめしきへたてかな　とにかくに物
はをもはすひたゝくみうつ墨縄のたゝ一すちに
おほとれたるこゝろして　溺
かゝるよもきのまろねにならひ給はぬ心ちに　東都
曹徳詩轉蓬送車輪とあり蓬葉の車輪のまろきかこ
とくにゆくをみて車をつくりはしめし也仍蓬とは
車の心を云歟
まろねはしちのまろねの心歟此事秘説有　異本云淮南子
曰見ニ敎逢轉一而知レ爲レ車文又曰太平御覽云秋蓬獨
何華飃飈隨レ風轉　轉蓬は車名也云々　裏書云私云唯草
の庵なとの旅寝の丸ねなり
なか月はあすこそせちふときゝしか　節分　九月節
也
ほうさうしのわたり　法性寺也
うすものゝほそなかをくろまのなかにひきへたてた

れは　車中にひき物をして貴賤同車する事也
おとしかけのたかきところに　道あしき所を云也
或云自レ高至レ低車の輪の事也
むなしきそらにもみちぬへかめり　古今我戀はむなしき
空にみちぬへし思やれとも行方のなき
あはれなき玉やとまりてみたまふらむ　亡魂
かたしろふようならましと　不要　不用
あはれわかつまといふ事はさりともてならし給け
んなとゝひたまふ　あはれわかつまあつまやのまや
のあまりのあまそゝきわれたちぬれぬそのとひら
かせ　かすかひもとさしもあらはこそそのとのをわ
れさゝめをしひらいてきませわれや人つま催馬楽東屋律
そわうのたいのうへの夜のきむのこゑとすんし給へ
るも　班女閨中秋扇色　楚王臺上夜琴聲順
こととこそあれあやしくもうちいてつるかなと　古今山里
は物のさひしき事こそあれ世のうきよりは住よか
りけり
古今やとり木は色かはりぬる秋なれと昔おほえてすめる
月かな　以前巻にやとりきと思ひいてすはこの本の
とありしことを思ひいてゝよめる也

第卅四　浮舟

巻名　橋のこ島の色はかはらしを此うき舟そ行ゑしられぬ

物いひさかなくて　愛にしも何匂ふらん女郎花人の物いひさかにくき世に

神のいさむるみちよりもわりなし　戀しくはきてもみよかしちはやふる神のいさむる道ならなくに

つゝみふみ　たてふみの事なり

大夫のおとゝ　大夫殿へと云也殿の字をおとゝとよむなり

わか宮の御まへにとてうつちまいらせたまふおほき(兵部卿宮)御前の御らんせむほとに　卯槌　持統天皇三年正月天皇朝ニ萬國於前殿一乙卯大學寮獻ニ杖(杖イ)八十枚一年中行事云正月上卯日御杖事(東宮大舍人兵衛作物所者當ニ節會ニ湿ニ諸司一奏ニ付内侍所一)　江次第曰春宮被レ獻ニ卯杖一大進着ニ腋陣一付ニ藏人一進レ之次大舍人進ニ卯杖六十束一次糸所進ニ卯槌一(如糸所或者可レ居レ机獻)　其料糸卯槌御机組并縫覆敷料十兩貳分(参河糸)結組料七兩二分(丹波糸也)已上申ニ請納殿一藏人取レ之結ニ付晝御帳一懸ニ角柱一副ニ立細木一爲レ柱槌末出ニ五尺許一

またふかき山たちはなつくりてつらぬきそへたる枝に　杈椏(マタフリ)　方言曰江東謂ニ樹枝一曰ニ砂鴉(二音末太布利和名)

のりゆみ内宴なとすくして　賭弓　正月十八日也年始に文傳博士とも内裏にて祝の詩を作云々　清和天皇貞觀二年正月十八日車駕幸ニ豐樂院一觀ニ賭射一内射之事　仁德天皇十二年七月高麗國貢ニ鐵楯鐵的一八月集ニ群臣及百寮一令レ射ニ高麗所レ獻鐵楯的一諸人不レ能ニ射通一唯的之臣之祖楯人宿禰射ニ鐵的一通焉時高麗客等見畏ニ其射之勝巧一共起以拜朝天智天皇九年正月詔士大夫等大射宮門内　延喜(ニイ)二年三月廿二日同十七年三月廿日同廿二年三月九日延長四年三月六日有ニ殿上賭弓一之由見ニ御記一

やゝましけれは　心やましき心なり

なにはかりのしそくにかあらん　親族

いけるかきりのためにこそ人はみまくほしけれ　戀しなん後はなにせんいける日のためこそ人はみまくほしけれ

かうかへたまふことゝもの　勘事　勘當事也

のとけき春の日に　久堅の光のとけき春の日にしつ

心なく花のちるらむ
ゐなとをみところおほくかきたまへれは　繪事
漢書霍光傳曰武帝心欲下以爲レ嗣命ニ大臣一輔上レ之上
察ニ群臣一唯光（字子孟）任太重可レ屬ニ社稷一（師古曰任堪也屬委也任齋王）
（竊音之欲反）上迺使下黄門畫中者畫周公負ニ成王一朝上ニ諸侯一
以賜レ光　師古曰黄門之四者職任ニ親近一以レ供ニ天子
百物一在焉故亦有レ念レ子　繪事後素（論語）
そゝろなりけむそうの人をさへまとはし給てそらこ
とをさへせさせ給よといへは（頭證極位の人　頭證歟見證歟）
いかにそや世のたとひにいふこともあれはまちとを
なる我をこたりもしらすうらみられ給はんをさへお
もふ
袖のなかにはとゝめ給へらんかし　（古今）あかさりし袖の
なかにや入にけん我たましひのなき心ちする（人丸）
をのかきぬ〳〵もひやゝかなる心ちして　しのゝめ
のほから〳〵と明行はおのか衣々なるそわひしき
ときかたとめして大輔のすさの　從者
いふにはまさりて　心には下行水のわきかへりいは
て思ふそいふにまされる
ついたちころのゆふつくよに　陰陽家に晦用にて晦
日の月を用ことと在之云々又眞言教にも金剛薩埵を
晦合宿の月にたとへられたる晦日の月あらは朔日
月も勿論歟此事猶秘說あり　倶舍云近日自陽覆故
見ニ月輪闕一　又毎月一日月宿事月藏經說　正月一
日室二日奎三日胃四日畢五日參六日鬼七日張八日
角九日亞十心十一斗十二虛
さむきすさきにたてるかさゝきのすかたも　蒼茫霧
雨之晴初寒汀鷺立重疊煙嵐之斷處晚寺僧歸（朗詠張讀）
すさきにたてるさきとかける本も有まことに此句
い心によらは尤可レ然歟能因歌枕にも鳥をかさゝ
きと云とあり鳥鵲一様相なり然而和漢のならひか
よはしていはんもいたく非難歟如何又たま〳〵さ
きとある本あれは可レ用レ之歟
ありしにまさりけり　いてゝいなはたれか別れの難
からん有しにまさるけふはかなしも
やみはあやなしとおほゆ　春の夜のやみはあやなし
梅花
衣かたしきこよひもやとうちすんし給へるも　さむ
しろに衣かたしきこよひもやわれをまつらむ宇治
の橋姫

もとつ人を　本人　古人萬葉
まれのほそみち
たちはなのこしまと申て御ふねしはしさしとゝめた
るを　（古今）いまもかもさき匂ふらん橘のこしまの崎の山
吹の花　萬葉には橘島又小島又島のくまはなとよ
めり此所は皇子尊の在所也歌枕には河内國と有如
何但七瀬祓所には大島橘小島山城國と注せり
わか名もらすなとくちかため給ふ　（古今）犬上の床の山な
るいさやかはいさとこたへて我名もらすな
まうとのぬし　眞人主也
わかすむかたをみやり給へれは　晴る夜のほしか河
邊の螢かも我住かたのあまのたく火か（なるイ）
山はかゝみをかけたるやうにて　（古今）近江のや鏡の山を
立たれは兼てそみゆる君かちとせは
こはたのさとにむまはあれと　山城のこはたの里に
馬はあれとかちよりそくる君思かね
あやしきしひらきたりしをあさやきたれはそのもを
とり給てきみにきせ給て御てうつまいらせ給　しひ
らうは裳の事とこゝに分明也
さらにめのまへにたに思ひうつらぬなめりと
うらみてもなきてもよろつのたまひあかして　恨て
も泣てもいはん方そなきかゝみにみゆる影ならす
して
おやのかうこはところせき物にこそと　たらちねの
おやのかうこのまゆこもり
あやしかりしゆふくれの　いつとてもこひしからす
はあらねともあきの夕はあやしかりけり
ましりなはやときこえたるを　行船の跡なきかたに
ましりなはたれかは水の淡とたにみむ
つれ〳〵とみをしる雨のおやまねは　（伊勢物語）かす〳〵に思
ひおもはすとひかたみ身をしる雨はふりそまされ
る
さそふ水あらはとは　わひぬれは身をうき草のねを
たえてさそふ水あらはいなんとそ思ふ
やへたつ山にこもるとも　白雲の八重立山にこもる
とも思たちなは尋さらめや　白雲の八重立山の嶺
にたにすめは住ぬる世にこそ有けれ
みたらし河にみそきせまほしけなるを　戀せしと御
手洗川にせしみそき
たけふのこうにうつろひたまふにも　見知乃久知太
介不乃古不尓和禮波安利止於也爾萬字志太也己々

呂安火比乃加世也左支無太安知也道口律
いかにおはしたゝよふそ風のなひかん方もうしろめ
たくなん　浦風になひきにけりなさといあまのたく
もの煙心よはさは
かの内記は上くわんなれはをくれてそまいれる　上
官は政官なり太政官被官なる故也　上官とは宛字に書來るなり
この宮の御くにては　具　一具の心なり
この君はさうしより　曹司　府曹司也
いみしきふてうの物ともにていとひとるい　不調
一類也
うとねり　内舍人
かくうきことあるためしはけすなとの中にたにもお
ほくやはあなるとて　忠臣不レ仕二二君一貞女不レ更二
二夫一史記
さうしともおほせられつるついてに　雜事共也
さのこときひしやうのこと　如然　非常事也
ふくろうのなかんよりもいと物おそろし　おそろし
き山の梟と云世俗言あるなり
みな身のかはりそといひて　皆代官也
こけのみたるゝわりなさを　君にあはむ其日はいつ
そ松の木の苔のみたれて物をこそおもへ　松蘿の
契と云事也夫婦のたとへ也
むかしはけさうする人のありさまいつれとなきに思
わひてたにこそ身をなくるためしもありけれ　大和
物語云昔津の國に住女ありけりよはふ男二人あり
一人はその國のうちにすむ男性はむはらとなん云
ひけるいまひとりはいつみの國の人なり性はちぬ
となん云ひけるこの男共としの齢顔貌人のほとな
と唯同しはかりそある心さしまさらんにこそあは
せめと思ふに心さしのほとたゝおなしやうなりけ
れはもろともにきあひぬ物をこすれはおなしやう
にをこすいつれまされりといふへくもあらす女思
ひわひぬこの人の心さしのおろかならはいつれに
も〳〵あふましけれとこれもかれも月日にそへて
家のかとにたちてよろつにこゝろさしをみせてな
きあふ物をこすれはこれもかれもおなしやうにを
こすとり入れねと是よりも彼よりもたえすおやあ
りてかくみくるしく年月をへて人のなけきをもい
たつきをも思ふにいと〳〵をしひとり〳〵にあひ
なは人の思ひもたえなんと云女心にもさなん思を

人の心さしのおなしやうなるにみわつらひぬるさらはいかゝすへきといふそのかみいくたかはのつらにいてゝひらはりなとうちてゐたりけりかゝれはこのよはひ人ともをよひにやりておやのいふやう誰も御心指の同様なれはこのをさなき物なん思わつらひて侍るけふいかにまれ〳〵このことを思ひさためてんあるはとをきほとよりいまするもありあるは爰なから其身いたつきかきりなしこれも彼もいと〳〵をしきことなりといふ時にいとかしこう悦ゐへり申さんに思給ふるやうこの川にうきて侍る水鳥をいたまへそれにいあて給はん人にたてまつらんといふにいとよきことなりといひているに一人はかしらのかた一人は尾のかたをいつそのかみにいつれといふへくもあらぬに思わひて女
すみわひぬ我身なけてんつの國の生田の川は名の（に）
みなりけれ（こゝそ有けれイ）とよみてこのひらはりは河をのそみてそしたりけるにつふとおち入にけるおやあきれさはきてのゝしるほとにこのよはふ人ふたりなからやかておなしところにおち入ぬ
古のさゝた男のつま戀しうなひおとめのそのおく

つかそこれ　うなひ乙女は身なけし女なりさゝた男とは鳥いし二人の男なりおくつかはおきつきと云なりおきは息なりつきは盡なりいきのつくる名なり

すこしおすかるへきことを　おそかるへきなり

むつかしきほく（ホウク）なと　反古也

とうたいの火に　燈臺

おやをおきてなくなる人はいとゝつみふかくなる物なと　おやにさきたつ不孝の一なりといへり

むなしき空にみちぬる心ちし給へは　我戀はむなしき空にみちぬらし思やれとも行方もなし

いさとけなり　いさよふ卒

さとひたるこゑして犬ともいてきてのゝしるも
犬吠村背　闇蟬鳴　織婦蚰（イ）白氏文集守家一犬迎人吠
放野群牛引犢休

山かつのかきねのをとろむくらのかけにむかはきといふ物をしきて　或本あふりと云物をとあり　行縢（ムカハキ）泥障（アヲリ）　すこも敷あをなにもてこうつはりにむかはきかけてやすむこのきみ

むこになしたり　無期

あけたては川のかたをみやりつゝひつしのあゆみよ
りもほとなきこゝちす　古今あけたては蟬のをりはへ鳴
暮し夜は螢のもえこそわたれ　歩々近死地人命思
如是經文　屠所羊歩の事也唐土には羊牛を飼置て食
時にのそみて屠所へ相具して行殺すなり歩々にし
たかひて死地にちかつく是を無常に喩なり
からをたにうき世中にとゝめすはいつこをはかと君
も恨みん　空蟬はからをみつゝもなくさめつ　深草
の山煙たにたて　後漢けふすきてしなまし物を夢にて
もいつくをはかと君かとはまし中將更衣
ひるねしてはへる夢に人のいむといふことなんみえ
たまへれは　解夢書曰夢見二病人一必死
めのとあやしく心はしりのするかな　人にあはむつ
きのなきには思おきてむねはしり火に心やけをり
小町　心はしりとはむねはしる同事也　漢書高紀下
曰上欲レ宿心動

河海抄巻第二十

正六位上物語博士源惟良撰

第三十五　蜻蛉

巻名　ありとみて手にはとられすみれは又行衛も
しらすきえしかけろふ

かしこには人々おはせぬを　彼毛詩

物かたりの姫君の人にぬすまれたるあしたのやうな
れは　古物語の今世につたはらぬおほし如然物歟

いみしう物を思ふ給へりしさまを思ひ出るに身をな
け給へるかとは思ひたりける　(異本)世中のうきたひこと
に身をなけは深き谷こそあさくなりなめ

こよひは夢にたにうちとけてもみえす　(異人)戀しさをな
にゝつけてかなくさめむぬる夜なけれは夢にたに
みす

あしすりといふことをしてなくさまわかきことゝもの
やうなり　伊勢物語前勘

ろなう　無論也

むなしきからをたにみたてまつらぬか　うつせみは
からをみつゝもなくさめつ

人のいみしくおしむ人をはたいしやくも返し給なり
宋玉為二屈原一作二招魂詞一曰帝告二巫陽一曰有レ人在レ
下我欲レ輔レ之魂魄離散汝巫與レ之　王逸楚詞章句
帝謂二天帝一也巫陽神醫也　餘生欲レ老海南村帝二遣
巫陽一招二我魂一　東坡

女のみちにまとひ給ことはひとの御かとにもふるき
ためしとも　楊貴妃歸唐帝思李夫人去漢皇情類

おにやくひつらん　鬼はや一口にくひてけり　伊勢
物語

なきかけにとかきすさひ給へるものゝ　なけきわひ
身をはすつともなきかけに浮名なかさむことをこ
そ思へと手習君よめりしこと也

いとやさしきはとならぬを　やさしきとはなつかし
きといふ心なり　なにをしてみのいたつらに老ぬ
らん年の思はん事そやさしき古今

ゆくゑもしらぬ大海のはらにこそおはしましにけめ
大海日本紀ニ溟渤をおほうみとよめりはらとは大
海うなはらなと云儀歟水原抄云かたのゝ物語に有
可勘

車よせさせておましともけちかくつかひ給し御てう
とゝもみなゝからぬきをき給へるふすまなとやうの

物をとり入て云々このくるまをむかひの山のまへなるはらまてやりて人も近くもよせすこのおなひしりたる法師のかきりしてやかす

葬衣衾事　上孝武皇帝曰吾聞黄帝不レ死今有レ冢家イ何也或曰黄帝已僊二上天一群臣葬二其衣冠一史記

舊事本紀第五饒速日尊稟二天神御祖詔一乘二天磐船一而天降既神殞去坐矣高皇産靈尊以二爲哀泣一即使二速飄命一將三上於天上二處二其神屍骸一於二天上一斂竟矣饒速日尊以レ夢教二於妻御炊屋姬一云汝子如レ吾形見物即授二天璽瑞寶一矣亦天羽々弓天羽々矢復神衣帶手貫三物葬二斂於登美白庭邑一以レ此爲レ墓者也略記　日本紀第七時日本武尊化二白鳥一從レ陵出指二倭國一而飛之群臣等因以開二其棺櫬一而視レ之明衣空留而屍骨無レ之然遂高翔二上天一徒葬二衣冠一　衣衾を葬する是等例歟

ふと入つてに　付附日本紀　傳

そらとふ鳥のなきわたるにももよほされて　可レ増恰イレ

病雀半夜驚レ人薄媚狂鷄三更唱レ曉遊仙窟

まきはしらもあはれなり　わきもこかきてはよりたつまきはしらそもむつましみゆかりとおもへは

人はくせきにあらされはみなゝさけありとうちすしてふし給へり　人非二木石一皆有レ情不レ如レ不レ遇二傾城色一白氏文集　心非二木石一豈忘二深恩一遊仙窟

伊勢物語むかしおのこありけり女をとかくいふこと月日へにけりいは木にしあらねは心くるしとや思けん

仁王經云初一念識異木石生得善生得惡

なかこもりし給はんも　長籠也

日も夕暮はいと物あはれなり　から本イ衣ひも夕暮に成時はかへす〳〵そ人は戀しき

郭公ふたこゑはかりなきてわたるやとにかよはゝと

無本イ人の宿にかよはゝ時鳥かけて音にのみ鳴とつけなん

しのひ音にきみもなくらん郭公してのたをさにこゝろかよはゝ　いくはくの田をつくれはか時鳥してのたをさをあさな〳〵よふ　郭公は冥途より來る鳥なり來て農耕をすゝむるなり過時不熟となく仍してのたをさをよふとよめる也萬葉にはもとな鳴ともよめり我名をよふ故なり又古へてふる鳥共よめり

かのくわんすに　巻數也

くしのはこ一よろひころもはこ一よろひ　櫛筥一雙
衣箱
ことに出てはの給はせねと　ことにいてヽいはヽゆかしみ山河の
かのつくは山も　浮舟君の母の事也常陸介か妻なれは當國の名所をいふなり
心に身をもまかせす　いなせともいひはなたれすうき物は身を心ともせぬ世なりけり後撰
せきあへ給はす　をろかなる涙そ袖に玉はなす我はせきあへすたきつせなれは
ふかきたにをもとめいてまし　世中のうきたひことに身をなけは深き谷こそあさく成なめ古今
御車のしちをめして　車榻也けかれたる所にてはしぢの上に居と云々
こけをおましにて　みよしのヽあをねか嶺の苔むしろ誰かをりけん立ぬきなしに萬葉『私云莚を御ましといふ事常陸國鹿島明神社内に御莚石とてあり此石をおましと云也明神御詠云（以下イ本ナシ）
尋ても今こそみつれちはやふる山とのおくの石の御ましを　此歌を一日に三度詠せし所へは一日一度神御行なるへきよし申傳たりと承及しより基重此詠を朝ことに詠せし故にやふしきに常陸にしりやうする所出來にけり』
つみいとふかくなるわさとおほせはかろむへきことをそすへき　如溺水之人急須偏救岸上之人何用濟爲又自殺者殺生之隨一也云々此故歟觀經玄義
うつふし〳〵て侍と　世をいとひこのもとことに立よれはうつふし染のあさのきぬなり古今
いつれのそこのうつせにまじりにけん　かたのヽ物語にありと云々水原抄
うつせとはむなしき瀬なりうつせ貝なといへり
まいていかなるやみにかまとはれ給らむと　人のおやの心はやみにあらねとも
よきはんさいのをひ　斑犀帶（ハンサイノオビ）
たヽ人はたあやしき　凡俗日本紀
六十そうのふせなと　六十僧六波羅密若は六道にあてヽおこなはるヽ歟
もろこしのしらきのかきりをもまつへきに　萬葉十五に悲別贈答云鯖作挽歌　新羅へかいへにかヽかへるゆきのしまゆかんたときも思かねつも

かへたらはとゆへあるかみにかきたり　浮舟君の事を大将思なけきたるをみて一品宮女房小宰相君我身にかへたらはといへるなり若また古歌ある歟可勘

あまりひけしてもあらて　卑下

てすさみ　手談

ひをものゝふたにをきて　仁徳天皇六十二年甲戌五月此歳額田大中彦皇子獵二于闘鶏一時皇子自二山上一望レ之瞻二野中一有レ物其形如レ廬仍遣二使者一令レ視還來之曰窟也因喚二闘鶏稲置大山主一問レ之曰有二其野中一者何窟矣啓レ之曰氷室也皇子曰其藏如何亦奚用焉曰掘レ土丈餘以レ草蓋二其上一敦敷二茅荻一取レ氷以置二其上一經二夏月一而不レ泮其用レ之即當二熱月一漬二水酒一以用也皇子則持二來其氷一獻二于御所一天皇歡レ之自レ是以後毎レ當二季冬一必藏レ氷至二春分始一散氷也

御まへなる人はまことにつちなとの心ちそする　顧二左右前後一粉色如レ土　長恨歌傳

（兵部卿）れいの宮もおはしけり丁子にふかくそめたるうす物のひとへをこまやかなる御なをしき給へり　西宮左大臣六月の比丁子染の帷子を著給ふと舊記に見えたり

せりかはの大将のとをきみの女一の宮思ひかけたる秋の夕くれに　古物語歟水原抄云遠君歟云々或又十君云々此儀（一説イ）行成卿自筆本をみ侍りしはせり川の中将とありき悪心僧都の勸女往生文といふ物にいまめきの中将長井の侍従伏見の翁なと云古物語ありといへり是皆今の世に不傳此せり川の中将さやうのたくひ歟

そもむつましく思きこゆへき　ゆきも子かきてはよりたつ槇柱そもむつましや

宮の君（[illegible]）なといひて　拾遺東三條院御四十九日のうちに子日いてきたりけるに宮の君といひける人のもとにつかはしける右衛門督公任　誰により松をもひかん鶯の初音かひなきけふにも有かな

をみなへしみたるゝのへにましるとも露のあた名を我にかけめや　女郎花おほかるのへにやとりせは（さーりなにイ）あやなくあたの名をや立なん

御。おきなことにくゝ侍るとて　翁歌　老人詞也

なかについてはらわたをたゆるはこれ秋の天といふ

ことを　大底四時心惣苦就中腸斷是秋天白樂天
ゆかしけなくきこゆるなさしよ　名なり
なとねたましかほにかきならし給とのたまふに
故々將纖手時々弄小絃耳聞猶氣絶眼見若爲憐遊仙窟
にるへきこのかみや侍るへきとていらふる聲中將の
おもとゝかいひしなりけりまろこそ御はゝかたのを
ちなれと　容貌似ㇾ舅潘安仁之外甥氣調如ㇾ兄崔季桂之小妹遊仙窟
りちのしらへおやしくおりにあふときこゆる聲なれ
は　呂は春　律調は秋にかなひたる心なり
ことよりほかをもとめられ侍るとの給へは　思ふて
ふことよりほかにまたもかな君はかりをはわきて
しのはん
なみ／＼の人めきて　濟次（ナミ）つき／＼の人めきてなり
まつもむかしのとのみ　古今誰をかも知人にせん高砂の
松も昔の友ならなくに
ありとみて手にもとられすとれはまた行へもしらす
きえしかけろふあるかなきかのとれいのひとりこち
給ふ　陽炎涅槃經云受者熱時之炎疏曰熱炎輪但有ニ其名ニ而無ニ其實ニ華嚴經曰譬如ニ春月時ニ衆生見ニ炎氣ニ愚者謂爲ㇾ水又同經に野馬と多あり　夏の月光
をましてゝる時はなかるゝ水にかけろふのたつ
たとへてもはかなき物はかけろふのあるか無かの
世にこそ有けれ　かけろふのそれかあらぬか春雨
のふるひとなれは袖そぬれける　かけろふのさや
にこそみめむは玉のよるの人めは戀しかりけり以上六帖歌　かけろふのほのめきつれは夕暮の夢かとの
みそ身をたとりける後撰
淮南子曰水蠆爲ㇾ蟌カケロフ　列子曰蠛蠓生ニ朽壤之上ニ因雨生視ㇾ陽而死
かけろふは詩にも色／＼にいひて一樣ならす遊絲
或野馬なともいへりされと莊子にも野馬は塵埃也
といひて天地の氣のことくなる物なり或は陽炎と
もいふこれも日の光にけふりのやうにみゆるを云
なり或又能因歌枕には春の空にとふ小虫をいへる
なり軒端に遊ふ蜻蛉とはこれ歟

第三十六　手習

卷名　浮舟君身をなけし涙の川のはやき瀬にとあ
りしより手ならひと云詞卷の中に四ヶ所あり野山

の雪をなかめてもとある所にもれいのなくさめの手習をおこなひのひまにはし給といへり仍號手習君也

其比横川になにかしのそうつとかいひていとたうとき人すみけりやそちあまりのはゝ五十計のいもうとありけりふかき願ありて初瀨にまうてたりけり

比叡山三塔東塔 西塔 横川なにかし僧都とは惠心僧都の事歟遁世之後隱居横川谷仍號横川僧都母事妹安養尼 事相似たり　傳記曰件僧都者大和國葛城下郡人父者占部正親母清原氏也母夢三天人下二授一男三女一見畢覺後四人共可レ成二聖人一歟思レ之其後彼母令レ祈二請子息於觀音一長谷寺 之處夢中僧來令レ與二一珠一見畢不レ久懷姙生二男子一即惠心僧都是也成人之後有事緣登レ山出家授レ戒修レ學之業既成論義決擇聞レ世被レ召二公請一預二種々祿一畢爲最初得レ物之間爲レ令レ悅令レ送二其物於母之許一母返報云吾所レ送之物敢不レ悅所レ願者偏遁レ世修レ道之營也云々即隨二母命一止二諸緣一隱二居横川谷一修二淨土之業一 寬弘元年五月廿四日任二權大僧都一 同日辭表一期所レ修善根者念佛二十俱胝反轉二讀大乘經五萬五千五百卷一奉レ念二阿彌陀大呪百萬反尊勝陀羅尼三十萬反千手阿羅尼七十萬反佛眼不動光明眞言二不レ遑二注進一又所レ造書籍雖レ多其中往生要集三卷一乘要決三卷殊勝宋朝明聖等見二往生要集一權化所二稱美讚嘆一寬弘二年十二月十日朝飲食如レ常淨二身口一無レ所レ痛補二佛御手糸一念佛數百反如レ眠終給年七十六而已

大和物語云なに計ふかくもあらす世のつねのひえを山とはみる計なり　となんいひたりけるよかはといふ所にあるなりけり

よかはにせうそこしたり山こもりのはいふかくことしは出しと思ひけれとかきりの樣なるおやのみちのそらにてなくやならんとおとろきて

惠心僧都妹安養尼 終焉之時者必可二來會一之由僧都契約云々而僧都千日山籠之間自二尼許一示遣云老病少憑罷成畢今一度對面大切云々雖レ然限二日數一之山籠難レ出二洛一可レ然者乘輿可レ來二會西坂本一之由返答畢於二下松邊一相待之所輿已到來僧都進寄褰レ簾見之處尼上既逝去相共與到二淸義修學院 房一淸義先心經七卷讀レ之次以二火界呪一令レ加持一惠心又奉レ念二地藏一則蘇生云々古事談

みつからもてしのなかにもけむあるしてかちしさは
くを　加持　加者佛三密也持者行者三業也彼三密を
此三業に持するを加持と云なり
なかゝみふたかりて　古人尺云長神なり云々然而中
神歟天一神有中央故なり箒木卷に勘付畢
故朱雀院の御りやうにてうちの院といひし所　平等
院建立以前有宇治院號歟可引勘也
さやうの物しそくへきいむをつくりつゝさすかにま
もる　退なり　印也
かしらのかみあらはふとりぬへき心ちするに　たと
へは身毛豎躰の心歟唐人詩にも髪如竹と作れり同
心なり
きつねの人にへんくゑするはむかしよりきけと　水
鏡云欽明天皇御宇美濃國にある男かほよき女をも
とむとて物へまかりしに野中に女にあひ侍にきか
れを妻にして男子一人うめりかくて月日をすくす
に家にある犬十二月十五日に子をうみておとなし
く成たるに彼女をみるたひにほえしかれは女いみ
しくおちて男にころせと云けれときかさりきこの
女よねしらくる女ともに物くはせんとてからうす
のやにいりにき其時この犬はしりきて妻の女をく
はんとす女えたへすして野干になりてまかきのう
へに上ておりけり　帝王系圖云同御宇參河國狐
成二人妻一云々古塚有狐妖且老化爲二婦人一顏色好頭
變二雲鬟一面變レ粧大尾曳作二長紅裳一徐々行傍荒村
落日欲レ沒時人靜處或歌或歎或悲啼白氏文集　夕顏卷
注載之
きつねこたまやうの物のあさむきとりもて來たるに
こそ侍らめ　樹神（コダマ）　木神魑魅魍魎　空谷響（コダマ）大日經　左
傳注曰魑魅山林異氣所レ生爲二人害一者也　欺（アザム）
ク和名　又詐
やまひこのこたふるもいとおそろし　つれもなき人（六帖）
をこふとて山ひこのこたへするまて歎つる哉貫之
昔ありけんめもはなもなかりけんめおにゝやあらん
と　文殊樓目無鬼事歟舊記に目鬼と號す
いかきさまを　辛（イカシ）（カラシ）　詐（ハカリ）（コツ）
人にこたれても
神なとの御ために經よみつゝいのる　神分經
あやしきふようの人なり　不用
人の心まとはさんとて出來たるかりの物にやとうた

かふ　假色迷人猶苦是眞色迷人應過此（白氏文集古塚狐）
その御さうそうのさうしとも　葬送　雜事
ひえさかもとにをのといふ所にそすみ給ける　小野（伊勢物語）
にまうてたるにひえの山のふもとなれは雪いとた
かし　小野は大原也仍比叡坂本といふなり小野鄕
內大原村也（布薩と云物にあり）　皇太后宮太原に住給云々時人
號小野皇太后宮也
けしやく事せさせ給　邪氣祈禱に護摩壇に燒芥子事
あるなり
こうつきにけりと　命業盡（經文）
御よそめいかな　よそほひ歟
くとくのむくひにこそかゝるかたちにもおひいて給
けれ　端正者忍辱中來（大集經文）
われむさんのほうしにて　無慚法師（或懺）
いむことのなかにやふるかいはおほからめと　諸戒
の中に麁强罪はをのつから止といへとも細隱罪は
ことくにとゝめかたき者也五戒八戒十戒等は
麁强なり二百五十戒五百戒十無盡戒一切威儀戒等
は細隱なるへき歟
てうせられて　調伏也

昔はおこなひせしほうしのいさゝかなる世に恨みを
とゝめてたゝよひありきしほとに　貞觀七年比染殿
皇后爲天狗被惱稍經數月所有驗僧侶無敢能降之者
天狗放言云自非三世諸佛出現者誰降我亦知我名云
々爰相應和尙應召參入兩三日伺候無有其驗還於本
山奉對無動寺不動明王啓白事由愁恨祈請于時明王
背而向西和尙隨座西亦背而向東和尙又隨座東亦背
而如元向南和尙亦座南流淚（作イ）彈指稽首和尙白而言
相應奉戴明王更無他念而今有何犯過相背如此乎願
垂悲愍可告示也云々胡跪合掌奉念明王本誓合眼之
間非夢非覺明王示云我依生々加護之本誓有難去
之事今顯說其本緣昔紀僧正眞濟存生之日持我明呪
而今以邪執故墮天狗道著惱皇后爲思本誓爲彼天狗
仍以我呪難縛彼天狗也以大威德呪加持者得結縛之
便歟云々此告之後不堪感淚頭面接足禮拜恭敬後日
依召渡參住明王敎戒之旨奉加持之間結縛天狗自今
已後不可復來之由歸伏之後解脫畢則皇后復壽常
云々（古事談）　或記云昔染殿皇后御なやみの時金峯山
より久修練行の行者まいりて加持し奉る平癒の後
本山に歸りて年來の行業を廻向して誓て鬼となれ

り紺青鬼と云つねに后をわつらはしたてまつりけるを智證大師ねんころに教誡し給けれは紺青鬼はちたる色ありてその座にありなから灰のやうになりてきえにけり其後后本のことくに成給てけり云々善相公の記にもみえたゝり大師の御事はなきにや此滋賀上人朝勲上人等如此例おほし如何松月上人記

よき女のすみ給し所にすみつきて　如有女人端嚴巨富若無強夫所攝護者爲惡人之凌辱大般若經

ひとゝせたらぬつくもかみおほかる所に　百年に一とせたらぬつくもかみ我をこふらし面かけにみゆ伊勢物語

かと田のいねかるとて所につけたる物まねひしつゝわかき女こは歌うたひ　伊勢物語云色このみなる男長岡と云所に家つくりをりけりそこの隣なりける宮はらにこともなき女とものゐ中なりけれは田からむとて男のありけるをみていみしのすき物のしわさやとて

ひたひきならすをともおかし

かたかけたる家なれは　山かたかけてすむいはなと歌にもよめり

身をなけし涙の川の早き瀬をしからみかけて誰かととめし　菅家 流行我はみくつと成ぬとも君しからみと成てとゝめよ

こもきとて　上東門院のうへわらはにいぬきと云物ありと榮花物語にみえたゝり此物語の中にもいぬきなれきわてきなとゝてありきは公の心歟又野宮の歌合源順判作者にもなてしこのうた左こもきなとあり見順家集

むかしみしみやことりににたることなし　古今業平朝臣 名にしをはゝいさことゝはん都鳥我思ふ人は有やなしやと

かきほにうへたるなてしこもけふはみなはふきすてゝ　略省

しめゆはん　能因歌枕にませをはしめといふ

人々にすいはんなとやうの物くはせきみにもはすのみやうの物いたしたれは　水飯　蓮子　遊仙窟

蓮子數盃宊令酒栢柘イ一曲試春歡樂天　酒釣送盞推蓮子燭涙黏盤壘蒲萄同　一說云水飯幷盃をそへていたしける歟　菓子の中に藕實を加たる事いたく先蹤なき歟又云夏の會なれは藕實もなかるへきにあらすさかつきにはすの實といはんもあまりに上手めきたる歟用捨可隨好

わすれかたみをたに　さくら色に衣はふかくそめてきむそをたに後の忘かたみに古今

はかまもひはた色にならひたるにや　檜皮色袴也　蘇芳とふしかれにて染たる物也　出家の人多分着せん歟

をみなへしをおりてなににほふらんとくちすさひてひとりこちたてり人の物いひをさすかに　こゝにしも何句ふらん女郎花人の物いひさかにくき世に　拾遺遍昭

藤中納言のおほんあたりには　髭黒大臣息小野尼の聟の中將只今は又此人の聟君たるにや

御まひなひの　賄賂也

あたしの　承暦歌合にさかのをすきてあたしのまて行けんもあちきなしと云へり是名所歟又野宮歌合判云あたし野は名たかゝらねはにやあらん有所しれる人すくなし云々清輔朝臣抄云名所けにみえたれともたゝあたなる事によせていへる歟あたし心なと云躰歟

八月十よ日の程にこたかゝりのついてにおはしたり　いはせ野に秋はきしのき駒なへて小鷹かりたにせてやわかれん　萬葉十九新點に小鷹狩をはつとかりとも云貫之集云題小鷹かり　秋のゝにかりそ暮ぬる女郎花今宵はかりの宿はかさなん

あま君まつちの山のとなん見給ふると　誰をかもまつちの山の女郎花秋をちきれる人そ有らし小町

うたゝあるまて　花とみて折らんとすれは女郎花うたゝあるさまの名にこそ有けれ古今

「秋をちきれるすかし給ふにこそ　以前尼君まつちの山のとなん見給なと云し歌の心也」

しかのなくねになんとひとりこつ　山里は秋こそことにわひしけれ鹿の鳴音にめをさましつゝ古今

見えぬ山ちにも　世のうきめみえぬ山路へいらんには云々

あたら夜を御らんしさしつるとて　可惜アタラ日本紀　あたら夜の月と花とをおなしくは心しられむ人に見せはや

なにかをちなるさともみ侍ぬれは

いつらくそたち　古本にいつらくそたちと句を切たる僻事なりくそたちとは今時こそたちといふ詞なり今も何こそなといふ賤女の通稱たる也くとこ通響なり又古今作者にも屎とてあり貫之か童名を内

敎坊阿古屎といへり當時も邊土の下女の中に何くそなと云名あり此心歟

いてやこれはひかことになりて侍らんといひなからひく　嗟々俗人耳好今不好古所以北窓琴日々生塵土 文集秦中吟

まつかせもいとよくもてはやす　松風入夜琴 百詠

念佛よりはかのあたわさなせそと　萬事家生皆捨離專心發願向西方

いてとのもりのくそ　さきにおなし主殿こそなり

おきの葉にをとらぬ程にをとつれわたる

いのちさへ心にかなはす　命たに心にかなふ物ならはなにか別のかなしからまし 古今

ふたもとはまたもあひきこえんと思給人あるへしと　古今旋頭歌 はつせ川ふる河のへに二本ある杉としをへて又もあひ見む　二本有杉

又てなをして　手直也

きせいたいとくになりて　恭勢大德 肥前掾橘良利法名寛蓮子園恭好手也

私云法名に三字をつくこと公家樣には今もあり四辻宮直人に成給て于時從二位中納言春庭國師に法名御申ありけるに三字法名也寛蓮子も不可疑也とあり

たまにきすあらん心ちし侍れといふ　玷 タマノキス 毛詩曰白圭之玷尙可磨也明月之珠不能無瑕

れいの心よはさはひとつはしあやうかりてかへり來りけんものゝやうにわひしくおほゆ　狼梁 ヒトツハシ 此事未勘

しはふきおほゝれて　咳溺也

いたちとかいふなる物かまかわさするひたいに手をあてゝ　鼬のまかけさすといふ事也

はしめよりうすきなからものとやかに　拾遺 夏衣薄きなからもたのまるゝひとへなるしもみにちかけれは

心ひとつをかへさふ　覆　心の中に案しかへすなり

かゝれとてしもとひとりこちゐ給へり　後撰 たらちねはかゝれとてしもむは玉の我くろかみをなてすや有けん 僧正遍昭

るてん三かいちうなといふも　流轉三界中恩愛不能斷奇恩入無爲眞實報恩者

こうちきけさなとしたり　小袿　袈裟

よひにさふらはせ給　夜居　二間の夜居也

いとあやしくけうのことをなむみ給へし　希有事

りうの中より佛むまれ給はすはこそ　龍女成佛の事

也
このあらん命ははのうすきことしといひしらせて
陵園妾云々顔色如花命如葉々々薄將奈何白氏文集
松門にあか月いたりて月に徘徊すと　松門曉到月徘
徊同
けふはひねもすにふく風のおともいと心はそきに
柏城盡日風蕭瑟同
はるかなるのきはよりかゝりきぬすかた色〱に　夢
の浮橋の卷に谷の軒端とあり其意同也
くろたにとかいふ方より　黑谷叡山にあり
かみは五へのあふきをひろけたるやうに　冬扇に有
三重五重云々櫻の三重かさねなとありしたくひ也
すへてくちきなとのやうにて　形固可レ使レ如レ橋レ木
莊子　かたちこそみ山かくれのくち木なれ云々
君にそまとふとの給ひし人は　兵部卿の宮の事也峯
の雪みきはの氷とありし事也
あかなをおろそかなるこに入て　實方朝臣銀の籠に
若菜を入て圓融院に獻とあり
春やむかしのとこと花よりも　古今 月やあらぬ春やむか
しの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

あかさりし匂ひのしみにけるにや　あかさりし君か
匂ひの戀しさに梅の花をそ今朝は折つる
ほと〱すけもし給ひつへかりし　出家
あやしくやうの物とかしこにてもうせ給にける
同樣の物と云心也やうかましき心にもいへり但是
はさにあらず
世中の一の所もなにとも思ひ侍らす　左大臣一上を
一の所といふ也或又一の人とも云也又執柄家（家宗皆イ）一座
故稱一人又謂一所
きよらにしうとくにて　宿德
わか御つかさのそうになしなと　右近將監也薫大將右也
さいつころ　近會おとゝいよりさきなり萬葉におと
ゝいのさいつとあり
うつし人に成てすゑの世にはきなるいつみのほとり
はかりをかたらひよる風のまきれもありなん　黃泉
日本紀　冥途の名なり
月ことの八日はかならすたうときわささせさせ給へは
毎月八日は六齋日の始なり其上藥師の緣日なれは
中堂もたよりある歟
ちうたうには時々まいり給へり　根本中堂

延暦十七年傳敎大師之建立本尊藥師如來者大師造立之其已後梵天帝釋四天王忠仁公日光月光菩薩宇治關白十二神將御堂關白被造副之云々

第三十七　夢浮橋

此物語の卷名桐壺より手習にいたるまては或は詞の字をとりて名つけ或は歌の心をもちて名とせりしかるに爰に此卷を夢浮橋と題する事詞にもみえす歌にもなし古來の不審なり凡夢のうきはしとつゝけたる事是よりはしまれり夢のわたりのうき橋とある歌につきていへる歟或說に曰く手習君薫大將の文をみるまてもなくて返したるによりてふみ見ぬかゆへにうき橋と云歟此卷に夢といふ詞五ヶ所にあり又大將歌に思はぬ山にふみまとふ哉とあるもまとふはたとる義也さたかならぬ心によせて夢といへる歟云々此義淺海也かの文をひらきみて有しなからの御手にてかみのかなとれいの世つかぬまてしみたるといへり大方此物語のおこる心さし全く色にふけり言をかさるにあらす唯無常迅速のことはりをあらはし盛者必衰のおもむきをしらしめんか爲也今の題目を案するに先夢と云はむなしき心也有無の諸法いつれも夢にあらすと云事なし涅槃經には生死無常は猶如昨夢と說き大圓覺經には始知衆生本來成佛生死涅槃猶如昨夢善男子如昨夢故當知生死及與涅槃無起無滅無來無去唯識論にも未得眞覺常所夢中故佛說解生死長夜とあり內外の經書に此夢に付てさま〴〵の義ありしかるにいとまあらず香山居士詞に言下忘言一時畢夢中說夢兩重虛となるも此心にや次浮橋といふは伊弉諾伊弉册尊天浮橋の上にして共爲夫婦し給て陰陽をさため洲國を生せし我國の始也是みな男女のなからひよりおこれりかの漢家の風を移し俗を易まつりことも三百篇の中に關雎麟趾の化より鵲巢騶虞の德に至るまて此夫婦の道をもて周公の風をのへたり陰陽萬物を生する故なり詩序曰關雎后妃之德也風之始也所以風化天下而正夫婦焉故用之鄕人焉用之郡國焉といへりされは浮橋は生死のおこり煩惱の根元也夢とは世間出世の法皆如幻如夢也と云心也無相の理也是菩提也煩惱即菩提生死即涅槃の義此名にあらはれたり作者已證の分すてに爰にあきらかなる者歟次に讀經の說相皆序正流通の三段

あり流通分に至ては題名をあらはす常途の義也今物語も終の卷を夢浮橋と號す別しては一卷の名惣しては一部の號なるべし例は光源氏物語といふがことし或は夢浮橋物語第卅七法の師ともいふへき歟且は物語を光源氏となつけ卷の數を卅七帖にさたむるも心城の卅七尊の光をおもひよそへたるにや此卷名師說如此聊又以愚案加潤色也但再三案之眞實の義は夢の一字の外に別の心なし浮橋は夢にひかれて出來詞なり凡當流の義は諸事やすきを以て正說とするゆへ也されは本歌の世中は夢のわたりのうきはしかうきわたしつゝ物をこそ思へといへるも浮はしに別の義なし定家卿の春の夜の夢のうきはしとたえしての歌も同心なり所詮作者の本意を推するに此物語は始にいふかことくに其趣莊子寓言に一同せり而彼莊周は胡蝶夢に死生の變をおかせり是物化の謂なり且有大覺而後知其大夢ともいへり漢家の寓言も百年の夢に化し和國の寓言も一期の夢にきはまる也花嚴經には知一功佛及與我心皆悉如夢と說り古人云生死涅槃如昨夢天堂地獄道遙自在文莊子齊物曰方其夢也不知其夢夢中又占其夢焉覺而後知其夢也且有大覺而後知此其大夢也而愚者自以爲覺竊々焉知之君乎牧乎固哉丘也與汝皆夢也予謂汝夢也亦夢也是其言也其名爲弔詭萬世之後而一遇大聖知其解者是旦暮遇之昔者莊周夢爲胡蝶栩々然胡蝶也自喩適志與不知周也俄然覺則遽々然周也不知周之夢爲胡蝶與胡蝶之夢爲周與周與胡蝶則必有分矣此之謂物化

一名法の師　のりのしと尋ぬる道をしるへにて思はぬ山にふみまとふかな

山におはしてれいせさせ給やうに　比叡山

すくれ給へるけん物し給けりと　驗

をのゝわたり　小野徑(ワタリ)　此所(ワタリ)遊仙窟

もらしきこえめなと　洩聞

母のあまのらうけにはかにおこりて　老氣　老病也

一云勞氣也

さゝきめて　私語(ササメゴト)白氏文集　私語わたくしこと也　耳言萬葉　耳にさゝやく心なり

むかし物かたりにたまとのにをきたりけん人のたとひを思いてゝ　定家卿云うつほの物語なり云々可勘

たまとのとは殯殿(タマトノ)見葬禮記天稚彦薨逝の後下照姫天

に喪屋をつくりて殯(モガリ)すといへり或云もかりや又續
日本紀云大寶二年十二月辛酉日殯西殿太上天皇持統崩なと
あり或又魂殿とも云歟禮記には殯宮といへり聖德
太子令入定給所を夢殿といへるも同事也此事若呂
后高祖后也の事をいへる歟彼后の山陵を數百年の後赤
眉の黨の寶をとらんか爲に堀おこすに死人形美麗
にして如存仍赤眉の黨是にめてゝ千人犯之云々後
漢書にみえたり唐土には死人の口に玉を含しめて
埋みぬれはとしをふれとも形骸不爛壞云々我朝に
も上古は帝崩給時玉を含ませ奉けり
ねん佛をも心みたれすせさせむ　一心不亂阿彌陀經
天狗こたまなとやうのものゝあさむきゐてたてまつ
りたりけるにや　天狗史記天官書曰天狗狀如奔星　黃帝伐
蚩尤之時以正月十五日伐斬之其首者上爲天狗其身
伏而成蚰靈本朝月令
たすけて京にゐてたてまつりて後も三月計はなき人
のやうにて　此三月訓歟音歟了見すへし但いつれも
いたく事たかひ侍るましきなり手習君うせにしは
三月事也浮舟の卷に兵部卿宮此月つこもり比にむ
かへんとし給とあるは三月晦日歟大將は卯月の十
日となん定め給けるとある故なり又僧都明石中宮
この三月に年老て侍る母の願ありてはつせにまう
てゝ侍しなかやとりにてと語申き又むまこの紀伊
守小野尼にあひても故宮の御女一所はひとゝせう
せ給にき其御おとうとまたしのひてすへたてまつ
り給へりけるをこぞの春またうせ給にけれはと云
へり然は三月に身をなけんとせしをみつけたる事
勿論なり仍其月の中はなき人のやうなるといはん
も其の謂あるへし又手習卷にうちはへあつかふ程
に四五月もすきぬとあり是も四月五月歟又よつき
いつ月歟不審也これはさきの三月に随てよみ侍へ
し三月はなき人のやうにて其後一兩月猶おこたら
ねは前後四五ヶ月なりける歟又三月中は死人のや
うにて四月五月が程は猶わつらひけるがさりなが
ら四五ヶ月までなやみけるを僧都のいのりやめけ
るにや三月より四五ヶ月は六月七月の比にあたる
歟心ちおこたりて後に秋に成行は空のけはひ哀な
るを門田のいねかるとてとあらんは時節も叶にや
又聟の中將我しめゆはんとよみて返て又のたひ八
月十餘日小鷹狩の次てに來れりとみえたりされは

みつきにてあるへしはかりの詞も其心也
かのさかもとにみつからおりてこしんなとつかまつりしに　以前の恵心僧都千日の山籠の時姉尼の勢に依て西坂本まて下山せられける事を思ひよそへたる歟
なをこのらうしたりける物の　靈　又領したる物氣なり
なまわかむとほりといふへきすちにやありけん　生王家無等倫　八十之子孫日本紀王之子孫也
こゝにはそくのかたちにて　俗形
たちあかれて　分散
をのにはふかくしけりたるあを葉のやまにむかひて　只青葉山也非名所見八雲[illegible]聞付若菜巻畢　古歌もみちする秋はきにけり水鳥の青葉の山の色つくみれは
はるかにみやらるゝたにのゝきはより　谷の軒端不審あるによりて谷のきはとなをしたる本もあり今案に谷の軒はとは谷の端なりのきも家の端なり谷の戸ともいふ谷に戸のあるへきにてもなしいつれもにせものなり山あひなとよりみゆる所を谷の端といへる歟夕霧の巻にひさしの軒とあり手習の巻にもはるかなる軒端とありこれまた同風情なり一説云はるかなる谷の軒端にあたりてちかくみゆる心歟軒端の梅松なと云も軒に木を植事はなけれとも軒ちかき心なり
ひきほし　引干海草なり
御あるしのこと　饗飯をみあるしといふ也　日本紀に主ミアルシと云所に先饗飯といへり諸社祭に上卿飯を供時みあるしつかうまつれと仰するなり
あこかうせにしいもうとの　吾子日本紀　女をは姉をもいもうとゝ云男をは兄をもせうとゝいふなり
そのおやのみ思ひのいとおしさにこそ　御思
かへりておくし侍て　臆
いときよけにしなやかなるわらはの　差是白氏文集
わらうたさしいてたれは　藁座　圓座也
おいしうのつみをはるかしきこえて一日のすけのくとくはゝかりなきものなれは　心地觀經曰若善男子及善女人發阿耨多羅三藐三菩提心一日一夜出家修道二百萬劫不墮惡趣常生善處受勝妙樂遇善知識永不退轉得値諸佛受菩提記坐金剛座成正覺道

こと〳〵には身つからにて　悉
すこしとさまにむきて　外様
そゝや　驚破
けそうの人は　顯證人　又見所人
このこもさはきゝつれと　さは聞つれとなり　一說
云さはき來つれとなり
ありしなからの御手にて　とり返す物にもかなや世
中をありしなからの我身と思はん
みたてまつる人もつみさり所なかるへし　心ふかき
人をはつみえかましきといふなりされはつみさる
とは心あさきよしなり
くものはるかにへたゝらぬ程にも侍めるを山かせふ
くとも
おとしをき給へりしならひにとそ　落置なり玉鬘卷
におとしあふさすとあり又總角卷にもすてかたく
おとしをきたてまつりけんとあり此心なり
四辻宮大納言家申出中書御本永和二年自孟冬比今
永和第五到季春四月書寫一筆訖
永和五年三月十四日　　散位基重在判
數ならて名をさへかくすみなれともなかれてしの
へ水くきのあと
康曆第二季春後八日重申出御本見合畢
讀書雖非器依志切自基重家此一本所令相傳也
應永第十六自仲春比今到孟冬比自書寫一筆訖
不可出和箱者也　師阿
さても其かひはなくとも名計は世に立出よわかの
うら浪
此一句耻後見心畢

花鳥餘情

全


國學院大學出版部

あつまをもろ〳〵のうつはものゝうへにをき紫を萬の色の中にたとふるかことしみなもとふかき水はくめどもさらにつくる事なくくらくなき玉はみかけはいよ〳〵光をます我國の至寶は源氏の物語にすぎたるはなかるへしこれによりて世々のもてあそび物となりて花鳥のなさけをあらはし家々の註釋まち〳〵にして螢雪の功をつむといへともなにかしのおとゞの河海抄はいにしへいまをかんかへてふかきあさきをわかてり尤折中のむねにかなひて指南の道をえたりしかはわれと筆の海にすなとりてあみをもれたるうををしり詞の林にまふしてくいせをまもる兎にあへり殘れるをひろひあやまりをあらたむるは先達のしわざにそむかざれは後生の輩何ンそしたがはさらんやつゐに愚眼の及ぶ所を筆舌にのへて花鳥餘情と名つくる處しかなり

作意

紫日記云左衛門督公任あなかしこ此わたりにわか紫や候とうかゝひ給源氏ににるべき人もみえ給はぬにかのうへはいかゝものし給はんときゝゐたり左衛門内侍と云人侍りあやしくすゝろによからすおもひけるもしらす侍に心うきしりうとのおほう聞え侍りしうちのうへの源氏物語人によませてきこしめしけるに此人は日本紀をこそみたるへけれ誠にさえあるへしとの給はせけるをふとをしはかりにいみしくなんさえかると殿上人なとのいひちらして日本紀の御局とそつけたりけるいとおかしう侍るものか宇治大納言物語云いまはむかし越前守爲時とてさえあり世にめてたくやさしかりける人は紫式部かおやなり此爲時源氏は作りたる也こまかなる事ともをむすめに書せたりけるとそきさいの宮此事をきこしめしてむすめをめしいたしたりける此源氏つくりたる事さまさまに申つたへたりまいりて後つくりたりとも申いつれか誠ならん鴨長明無名抄云さても此源氏つくり出たる事こそおもへと〳〵この世ひとつならすめつらかにおほゆれ誠に佛に申てひたるしるしにやとこそおほゆれ夫より後の物語はおもへはいとやすかりぬへきものなり之をさいかくにてつくらんに源氏にまさりたらん事をつくりいたす人あらんやわつかにうつほ竹とり住吉なとを物語とて見けん心地にさはかりつくりいてけん凡夫のしわさとはおほえぬ事なり

なといへるくり事のやうには侍れとつきもせす浦山しくめてたく侍るは大齋院より上東門院へつれ〲なくさみぬへき物語や候とたつねまいらせ給けるに紫式部をめして何をかまいらすへきとおほせられあはせければめつらしき物はなにか侍るへきあたらしく作りてまいらせ給へかしと申ければさらはつくれとおほせられけるをうけ給りて源氏物語をつくりけることそいみしくめてたく侍ると云人侍れは又いまた宮つかへもせて里に侍りけるをりさる物つくりいでたるによりてめしいでられてそれゆへ紫式部と云名はつきたると申いつれか誠にて侍らん順徳院御記承久二年一切物語雖多或は有事或託事也伊勢物語は詞指事なけれども尤上手めき詞殊勝也大和は無下に劣れり其外無何物語こと〲くも不見無其詮之故也源氏物語不可說物也更非俗人之所爲紫式部書之始一條院有御覽不可說物也式部は日本紀をこそよくみたりけれと被仰于時左衛門内侍妬此綸言号日本紀御局云々誠諸道諸藝皆縮此一篇不可說未曾有下說源氏歌は劣也狭衣歌こそ勝けれと云人有と云此條心浮淺猿事也更非同日論誠に狭衣歌も少々不惡はあれとも

源氏の歌に不可及事雲泥也凡歌道は知與不知水火者歟源氏は第一詞つゝき非人間所爲不可說事也第二歌秀逸是又何人及之第三作樣也以虛言盡優美過之事もありぬへし但未見歌又不可說也但是は我朝最上也詞は更非人之所爲物也未知子細之輩者不可辨是非歟右今後撰爲大意時は則一條院比とおもへり猶非普通物歟

一　桐壺

凡五十四帖の巻の名に四の意有一には詞をとり二には歌をとり三には詞と歌との二をとる四には歌にも詞にもなき事を名とせり天台の教に四諦の法門あり一は有門二は空門三は亦有亦空門四は非有非空門也一切の言教はこの四諦にいてすこれによりて故四諦外別立法性とも釋せり眞實の道理は言教の外にあるべき物也此きりつほの巻は詞をとりてつけたる也源氏の君誕生より十二歳までの事此巻に見えたり

いづれの御時にか女御更衣あまたさぶらひ給ける中にいとやむ事なききはにはあらぬかすぐれて時めき給ありけり

此一段は發端の詞にして光源氏の母きりつぼの更衣の種姓ならびに一期のやうをあら〳〵しるしあらはせり詞つゝまやかにして旨ひろしといふへしやむ事なきはきはめて上﨟のしなをいふ位高き人の事はさしをかれぬものなればやむ事なききはとはいへりやむの二字をはやんとよむべき也

はじめよりわれはとおもひあかり給へる御かた〳〵めざましき物におとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからす朝夕の宮つかへにつけて人の心をうごかし

此一段は女御更衣の中に三品の種姓をわかてり我はとおもひあかり給へると云は大臣なとの女の女御たる人也おなしほとゝ云はきりつぼの更衣とおなじ程なる大納言の女なとの種姓をいへりそれより下らうの更衣とは非參議の三四位のしななる女なとを云べし三にわかてるにとりてきりつほの更衣は中の品也中道をたとふる心は儒釋道の三教の道にもとつけりはゝきゝの巻に其心はなを〳〵しるすへしおとしめは見おとさんとする心也

いとあつしうなりゆき　桐壺の更衣いつも違例かちに侍れは御いとまを申て母君の里へ出給をさとかちなるとはいへる也

やうきひのためしもひきいてつへく成行に　桐壺の御門の更衣にをくれ給へる事を唐の玄宗の楊貴妃にはなれ給てなけき給へるにたとへて長恨歌の詞

をかりて一巻の始終をかき侍れはその事をいはんとて楊貴妃のためしもひき出つへくとまついひ出せり作者の意趣すくれて聞え侍り

おやうちくし　二親をくしたる女御更衣たちを云也

玉のをのこ御子　人の徳をも玉にたとへ又かたちをも玉にたとふる也玉のをのこ御子はかたちのきよらなるをたとへていへりかつは又言葉のつゝき玉の緒と命のかたへもとりなし侍る也

この御にほひには　梅櫻はにほひあるゆへに人にもてなさるゝ物也去程に人に賞翫せらるゝ事をにほひとは云也

はゝ君ははしめよりをしなへてうへ宮つかへなとし給ふへききはにはあらさりき　禮記に官學とかきてみやつかへし物まなふとよめり男女の君にいてつかふるをはいつれもをしなへて宮つかへといへり其中にとりわきてすけ内侍なとのことくあさ夕に御前に祗候するをは上宮つかへといへりかくのことく心をやりてみれは前後相違なきもの也

上手めかしけれと　物の上手は我はとおもふ心ある也

おほとのこもりすぐしてやかてさふらはせ給ひ　夜者専レ夜晝同レ輦と長恨歌にいへる心にかよふ也

おとしめ　みおとさんとする心也　前ニ有之

御さうしはきりつほなり　淑景舎(しげいしや)を桐つほといふ五舎の一なり此桐壺は御殿よりうしとらのはてにあたりて弘徽殿麗景殿宣耀殿なとをすきてゆく馬道つゝきなれはあまたの御かた〳〵をすきさせ給ふとはいへり

うちはしわたとのこゝかしこのみちにあやしきわさをしつゝ　村上の御時宣耀殿の女御と藤つほの中宮と御物ねたみのありしにその御かた〳〵の人こゝかしこのみちに不淨をまきちらし侍る事をいへりさて御をくりむかへのもきぬのすそたへかたしとはいへり

こうらうてんにもとよりさふらひ給更衣のさうしを　後涼殿は御殿の西にあたれる殿なれは常の御所にちかきなり

てくるまのせんし　延喜雜式云凡乘ニ輦車一出ニ入内裏一者妃限ニ曹司一夫人及内親王限ニ溫明殿後涼殿後一命婦三位限ニ兵衛陣一但嬪女御及孫王大臣嫡妻乘輦限ニ兵

衛陣西宮抄云親王大臣中老宿人有此恩女親王女御尚侍毎出入藏人經奏聞仰闈門吉上雖職雜式毎度仰今案温明殿後涼殿はみな中のへの殿也温明殿は内侍所おはします殿也東の宣陽門の中にあり後涼殿はにしの陰明門の内にあり此まきの詞にこうらう殿にもとよりさふらひ給更衣のさうしをほかにうつさせたまひて上つほねに給はすとみえたり延喜式に夫人及内親王は後涼殿のうしろをかきるといへり物語の心にあひかなへり又兵衛陣といふは中重の門の外なり闈門といふは中重の門をいふ也

ひとかくおもふたまへましかはと　更衣の歌にいかまほしきは命なりけりとおもふやうならましかはの心也御門の御返歌なきにて御心も心ならすおほしまとへるほとはしるへきなり

みこはかくても御らんせまほしけれとかゝるほとにさふらひ給例なき事なれはまかて給ひなんとす

河海抄の説その理分明ならす先無服の殤といふは令義解云謂未成人死曰殤云々未成人とは七歳以下の人をいふ七歳以下の人の死せる時に其親類たる人のかれかためにいとまはかりを給りて服をはきぬを無服の殤といへりそのいとまは本服三月には三日の暇伯叔父姑兄弟姉妹三月之服也一月の服には二日のいとま母方の叔父叔母父かはりのおとゝい一月の本服也七日の服には一日の暇父かたのいとことおいとは七日之服也を給ふをいふなり但七歳以下の人のおやの喪にあひて服暇の事は律令格式等の文にみえさる事也所詮いまの世においては七歳以下の人は一向に服もいとまもあるへからさる事にさたまれりしかるに源氏の君三歳にて更衣に喪して宮中を退出あるは物かたりの面にては猶服暇あるへきに聞え侍り服なきにいたりては神事たりといふともはゝかるへきにあらぬを例の人ににるへからさるによりて退出あるかのよし河海にのせられたるはひとへに今案の義勢なり又本服三月の儀も無服の殤の事也こゝの證文にはならさる事也これにつきて秘訣あり別にしるすへし

をたきと云所　鳥部野をいふ也

野分たちて　たちは達也野分のやうなる風也立にはあらす

ゆけいの命婦　靫負と書てゆけいとよめり靫は矢をいるゝしこをいふ左右衛門は弓矢を帯するつかさ

なれはゆけいとはいへり命婦はいまの世に内侍の外織物を着せぬ中﨟をむかしは命婦と號せり侍（從イ）臣以下の女也藏人といふは下﨟のしなをいふ賀茂のまつりに命婦使藏人使とてある也

内侍のすけ　命婦より先に御つかひしたる人也

しはしは夢かとのみ　是は勅定の御詞成へし

ほどへはすこしまさるゝ　これよりは勅書の御詞也

宮城野の露ふきむすふ風の音に小萩かもとをおもひこそやれ　宮城野は宮禁にたとふ露ふきむすふは涙をいふ小萩かもとは若宮の御事也

くれまとふ心の闇もかたへはるゝはかり　諸をかたへとよむは則もろ〳〵の心也かたへの人かたへのあなたといふかことしこゝのかたへはかたはしの心也かたへすゝしき風や吹らんとよめるに同し

うへもしかなん　命婦の詞也内のおほせことも只今御物語あるとおなし事にておはしますと云心也

くさむらのむしの聲〳〵もよほしかほなるに　催はなみたをもよほすなり

えものりやらす　車にのりかぬる也

いと〵しくむしの音しけきあさちふに露をきそふる雲の上人　昇殿の人をは男女ともに雲のうへ人といふへし

わかき人々　これはわかみやの御かいしやくの人々を云也

長恨歌の御繪亭子院のかゝせ給て伊勢つらゆきによませ給へるやまと言の葉をももろこしの歌をも

長恨歌の歌もみち葉の色にわかれすの一首は御門の御手にてかゝせ給へると伊勢か集にのせ侍れは亭子院の御製にてあるべきにやいま一首の玉すたれあくるもしらすといへるは伊勢かよめる也貫之か歌はいまたみいたし侍らすたつねへし長恨歌の繪は亭子院の御時かゝせ給へるよしみえ侍れとその繪とて末の世につたはりたる事も侍らすしかるを通憲法師法名信西唐書唐曆楊貴妃外傳なと云書をかんかへてあたらしく繪にかきしをそいまの世には長恨歌の繪とは申侍るこれは平治の亂のあるへき事をかゝみて後白河院に御心をつけ申さんためにおもひくはたて侍るとぞあのことく安祿山かやうなる信頼かふるまひためしすくなかりける事也

その繪は平治元年十一月十五日寶蓮華院に施入し侍るとて信西一紙をかきそへてをきたるよし舊記にのせ侍る也

あらき風ふせきしかけのかれしより小萩か上そしつ心なき　あらき風ふせきしとはは丶君にをくれ給へる事をたとへ侍りしつ心なきはしつかなる心なく心くるしきよし也

なき人のすみかたつねいてたりけんしるしのかんさしならましかはとおほすもいとかなし　臨邛道士幻術をもて蓬萊山にいたり楊貴妃にあひて玄宗の心さしをつたへし時楊貴妃そのかたみの物を使者にさつけし時金釵カンザシ也鈿合ハサミ也この二の物をおの〳〵半を引折て給しよし長恨歌にのせ侍るゆけいの命婦か御門の御使にて更衣の母のもとへむかひし時かのかたみに御くしあけの調度めく物をたてまつり給ふかんさしはさみなと調度の具なれと玄宗の使はまさしく楊貴妃にあへり命婦はさもなきによりてなき人のすみかたつねいてたりけんしるしのかんさしならましかはとおほすとはかける也

ゑにかける楊貴妃のかたちはいみしきゑしといへとも筆かきりありけれはいとにほひすくなし大えきのふようひやうの柳もけにかよひたりしかたち色あひからめいたりけんよそほひはうるはしうけうらにこそはありけめ

行能自筆の親行か本にはひやうの柳の一句をのそきたりはしめはみせけちにしたれとも後には一向に略したるにや爲相卿の本には未央の柳の詞あり繪にかける楊貴妃のかたちとは長恨歌の繪につきていへるなりけうらはきよらおなし心也五音相通の故也

なつかしうらうたけなりしありさまは女郎花の風になひきたるよりもなよひなてしこの露にぬれたるよりもらうたく　此一段の詞爲相卿の本にはかゝすその心を案するに桐つほの更衣のかたちけはひをおほしいつるに花鳥の色にもねにもよそふへきかたなしといへるに又しかも女郎花なてしこにたとへ侍れは前後の詞相違するによりて此詞をすへて略し侍るにや河内か家の本によらは楊貴妃のからめいたるよそひは芙蓉の柳にたとへ侍り更衣のなつ

かしくらうたけなりしけはひはおみなへしの風になひきなてしこの露にぬれたるによそへ侍りさりなからそれもいきてありし時の事なりいまはその人もなくなり侍れは御門の御心には花鳥の色にも音にもよそふへきかたなしとおもひ給へりかくの如く心をやりてみ侍れは前後の相違もなきにや但源氏の本一様ならす人のこのむ處にしたかふへしあくるもしらてとおほしいつるになをあさまつりことはをこたり給ぬへかめり

春宵苦短日高起と長恨歌にかき玉すたれあくるもしらてと伊勢かよめるも唐の玄宗の楊貴妃を寵し給ひし時の事なりいまの桐壺の御門は更衣にはなれおはしまして御なけきのあまりに萬機のまつり事をもうちすて給ふやうなれは君王不早朝事はむなしきまなれはなをあさまつりことはをこたり給ひぬへかめりとかけりかやうの書き様心詞すくれておほえ侍るなり

御文はしめなとせさせ給ふ　御書始には御注孝經或は貞觀政要をよみ始め給ふ也博士讀曰御注孝經序五字尙復云此許ヨ、マテ次尙復讀五字如先皇太子親王等の書はしめにいさゝかかはる事ともある也

いまよりなまめかしう　なまめくに二の心あり嬌たる事をなまめくと云は女郎花の歌の心なり又生の字をなまめくといふはものゝなま〳〵しくかたなりなる心なり此物語になま〳〵のかんたちめなといふは根本種姓よき人にあらすいまはしめて公卿なとになる心也又人のふるまひにつけてならぬ事をはなま〳〵しきといふは伊勢物語に源のいたるか事をなまめくといへるかことしか様の詞は處により事にしたかひてみ侍るべき事なり

宮の中にめさん事は宇多の御門の御いましめあれは寛平の御誡に必可召見者とかき給へり必の字の意はめされてはかなふましき時のことなりこれにてうちまかせてはめさるましきよし聞え侍るなり

こうろくわん　職員令の玄蕃寮をは訓に法師まらうとのつかさとよめり玄は僧蕃は客なり僧尼と云者もむかし百濟國より來朝せしゆへに蕃客とおなしく此寮につかさとる也又鴻臚の臚は腹の前を臚と曰鴻のなく時聲をいたす處也故に鴻臚はこゑを傳ふると云心也異國の人來朝の時は通事といふつか

さわりて兩國の心さしをつたふるゆへ也
くにのおやとなりて帝王のかみなき位にのほるへきさう物し給ふ人のそのかたにてみれはみたれうれふる事やあらんおほやけのかためとなりて天か下をたすくへきかたにてみれは又そのさうたかふへしといふ　くにのおやとなるとは六條院の太上天皇の尊號をえ給へる事をいへりみたれうれふるとは須磨の浦へうつされ給へる事也おほやけの御かためとは攝政關白の天子を補佐したてまつる事也源氏の君はつゐに尊號をえ給へりしかはおほやけの御かためにはその相たかふといふ也
やまとさう　藤原仲直か光孝天皇を相したてまつり廉平か高明公を相せしはみなやまと相なり
むほんの親王のけさくのよせなきにてはたゝよはさし　親王は一品より四品まては有品也五品にわたるをは五品とはいはす無品といふ也童體の時親王宣下あるは必無品也光源氏いまたけんふくし給はすこれによりて無品の親王とはの給へり又親王になしたまふは天位につけ給はんため也しかるを御門やまとさうをおほしおほせて此君をみこにもなさせ給はぬ也一の御子は右大臣の女御の御はらにてよせおもくうたがひなきまうけの君といへるに對して源氏の君をは外さくのよせなきとはいへり御母かたによせおもき人なけれはみこにもなし給はぬはいとかしこき御をきてなるへし
源氏になしたてまつるへく　嵯峨天皇弘仁五年に男女すへて三十人に源朝臣の姓を給これ源氏の始なり醍醐の御子高明親王は元服以前源氏の姓を給ふ六條院は其例也
かけたにおほえ給はぬを　後撰　なき人のかけたにみえぬやり水のそこはなみたをなかしてそこし　伊勢
にけなからす　にけなきは無似氣也にけなからすは似也
かゝやく日の宮ときこゆ　一條院の御とき上東門院の御入内ありてふちつほにまし／＼しをかゝやくふちつほと世の人申侍り薄雲の女院もおなし殿にまし／＼し故にかゝやく日の宮とは申侍り常代の事をもよりきたるとは此物語に書たる事おほき也
おはします殿のひんかしのひさしにひんかしむきに御倚子たてゝくわんさの御座引入の大臣の御座御前にあり

西宮抄一世源氏元服御装束同親王儀但源氏座在孫庇西面北上前置圓座其下置理髪具入柳筥引入着座召源氏着座召藏人置理髪具理髪被召着圓座入曲子侯便所引入着座引入退冠者下於下侍改着黄衣拜舞入自仙花門引入殿拜舞天皇御侍倚子王卿以下侯有御遊盃酒源氏侯四位上王卿給禄本家分屯食廿具諸陣

今案親王の元服の時は晝御座を撤して大床子二脚をたてゝ出御あり源氏の元服には殿上の御倚子をうつさるゝ也いまも小朝拜なとの時は六位藏人二人殿上の御倚子をかきてこれをたつる事あり但西宮抄に天皇御侍倚子とあり殿上の御倚子をうつさるゝと見えたり此物語のこゝろと相違なきにや

大藏卿藏人つかうまつる　諸説ありといへとも下の詞にいときよらなる御くしをそくほととあれは理髪の人ときこえたりしからは大藏卿の藏人は藏人頭の大藏卿と心得へきなり

かうふりし給て御やすみ所にまかて給て御そたてまつりかへて　御やすみ所は冠者の休所なり康保二年八月御記云下侍東第一間施立屏風其中敷土鋪二枚茵一枚並用本家爲親王換衣處云々今案一世源氏元服にも下侍をもて休所とす西宮抄に見えたり又御そたてまつりかふとは元服の後裝束あらはの時にかはるへき也童體の時は赤色の闕腋の袍を着す殿上の童にも赤色なり元服の後は源氏の君は無位人也衣服令云無位黄袍也西宮記にも黄衣とみえたり元服の後は縫腋の黄袍をたてまつるへし但延喜縫殿寮式云無位淺黄也之によりて長和二年三月廿三日行成卿記云新冠兩王着黄衣其淺黄也世稱之黄衣權記の意は縫殿式の淺黄をみとりの色と會釋して世稱之黄衣といふ詞をのこし侍りしかありしよりこのかた無品親王の服式緑袍を用る時あり縫殿式の淺黄に二の心ありあさき黄とよむ時は令文の黄衣に相違なき也あさきとよめは緑の色ときこゆ權記の心なり所詮此物かたりはきりつぼの御門を延喜帝になすらへ侍れは長和以前の事也西宮抄一世源氏元服の所にも黄衣とありかた〳〵黄袍の説を用へきなり

きひはなるほとはあけおとりもやと　あけおとりとはわらはにてみゆよき人いかうふりしてみをとりするをいふなり

さふらひにまかて給て　侍は殿上の事也これにより

て殿上人をはみさふらひと歌なとにもよめり又侍臣ともいふ也

內侍せんしうけたまはりつたへておとゝまいりたまふへきよしあり　この下のことはに御さかつきのついてに御歌なとよませ給へるよしみえたりしからは西宮抄にいへることとく御遊盃酒は殿上にてありて引入大臣をはさらに御前にめされて御盃をたまへるなるべし

追案西宮抄御裝束同親王儀といへるは猶大床子の御座たるへし天皇御侍倚子は元服の儀はてゝ主上殿上に出御ありて御倚子に着し給ふて御遊の事あるへきにや是は物語の心に相違すへし

しろき大うちきに御そ一くたり　白大褂に女房のきぬ一領そへて加冠の祿に給なり小うちきは女房のきるものなり

いときなきはつもとゆひになかき世をちきる心はむすひこめつや　御門の御詠なかき世をちきる心は宮腹の御女を源氏の君の御そひふしにさため給ふ事なり下の詞に御心はへありておとろかさせ給とあるは此事なるへし

なかはしよりおりてふたうし給　長橋と云は御殿より南殿へかよふ廊なり大內の時は此所にきさはしありて東庭におるゝ道あり引入の大臣なともこの階よりくたりて御前のたつみのかたにて御前へむきて舞踏し侍るへしいまの世になかはしの局なといへるそのなかはしにてはなき也

ひたりのつかさの御馬藏人所の鷹すへてたまはり給

左のつかさの御馬とは左馬寮の御馬なり藏人所の鷹といふは鷹飼は藏人所の所掌也近衞隨身さならぬ人も御鷹飼に補せらるむかしは出羽陸奧國より鷹を貢せしも藏人所より奏する也但親王源氏の元服にむま鷹を引出物にする事はわたくしの家にてはその例あり禁中の儀にてはたしかならされともいさゝかもおもかけ有事はあゐよりもあをくかきなせるは此物語のつくり樣なり

國史云陽成天皇元慶七年七月五日己巳勅弘仁十一年以來主鷹司鷹飼卅人犬卅牙食料每月充彼司其中割鷹飼十人犬十牙料充藏人所貞觀二年以後無置官人料事停止今鷹飼十人犬十牙料永以食藏

人所村上天皇御記天德五年正月十七日召陸奥所進鷹犬於侍所覽之（助信中之）朝忠朝臣令申云故御春武中遭喪之間以源敎權爲御鷹飼以件例左近府生公用遭喪之間以源撰被補御鷹飼仍使令補撰撰此故濟男也同御記云康保二年七月廿一日仰藏人頭延光朝臣云以左馬助滿仲右近府生多公高（兄右近將監公用讓）右近番長播磨貞理（又右馬屬陳平讓）等並爲御鷹飼小右記云天元元年四月廿五日昨日從出羽國鷹八聯犬八牙令籠物忌今日御覽侍臣等不動止東帶臂鷹出自侍所候御簾下御覽了出之所衆出納等牽犬入自仙花門跪御前令覽了各牽出其後召犬飼等覽之各牽犬藏人頭蒙勅令班給鷹犬第一御鷹犬等被奉靑宮次賜近江供御所次御鷹飼次第相取之出西陣下行此事須奉宮之後給御鷹飼等然後供御所御鷹飼者也不知先例歟隨御鷹次第給犬也

右鷹飼爲藏人所之所掌證也出羽よりたてまつる鷹を御覽せ給ふ時は殿上の侍臣臂にすへて覽之犬をは所衆出納等これを引て東庭にひさまつきて覽するなり源の滿仲も村上帝の御時の御鷹飼の一也

吏部王記承平四年十二月廿七日允明源氏於中務卿親王家加冠云々引入纏頭女裝束贈馬鷹理髮女裝同記承平七年二月十六日與中務卿君詣東八條院因行明親王今日加元服先日被招之故也右近少將良峰朝臣義方理親王髮左大臣加冠云々其左大臣女裝加紅細長賜鷹馬一義方女裝加黃裝束　同記天慶五年十一月廿二日盛明源氏御元服右大將實賴卿加冠纏頭大將加馬鷹各一　右元服引入の祿に馬鷹を給例也

但此等例は禁中の儀にあらす私家の例なり　同記承平五年十二月二日左衛門督男元服云々纏頭王公及理髮者二親王には各馬一疋理髮加鷹ゝ小右記天元二年二月廿日入宮御元服仍參小一條院理髮頭中將正淸引入左大臣雅信引入祿幷馬一疋理髮鷹一聯等也　右理髮人の祿に鷹を給例也　李部王記天慶四年八月廿四日晩景詣爲明源氏五條宅其寢南廂東頭西向引入座（上敷二枚加茵）即催左衛門督就引入座觴行六七巡纏頭引入女裝一襲加小袿一重引出物馬一疋理髮纏頭了余退歸追賜馬一疋鷹一聯　右元服の時見訪王卿の引出物に鷹を給例也

今案野行幸の時は四位以下の鷹飼は狩衣に帽子をきる正月大饗の日は隨身鷹飼の裝束を着す錦の帽子括染狩襖鷹を臂にすへ枝につけたる雉を持て野

よりすくにまいれるよしを表する也いまの物語のことくは加冠の祿の鷹たれ人これをすへ又いかやうの裝束を着すへきぞや此事慥成所見なし但鷹飼のためにあらされは野裝束を着すへきにあらず藏人所の御鷹飼隨身なと常の裝束にて鷹を臂にして引入の大臣の隨身にわたすへきにやしからはゆかけをさして鞭を持へきにや

その日の御まへのおりひつ物こものなと　献物は惣名なり元服の人のたてまつるもの也その中に籠に入たるをは籠物と云又折櫃に盛たるもあり親王元服の時は献物あり王卿以下これをとりて庭中に列立する時第一の大臣一人座にとゞまりてなにその物そとたつぬれは上首の人奏云某のたてまつる御贄と申てその〳〵物の名を奏すその時大臣仰て云かしはてにたまへすなはち膳部内膳司等すゝみいてゝうけとる也一世の源氏の元服には献物なきにや但この物語の詞にかきりある事にことをくはへさせ給ふとみえたれは一世源氏の元服なれとも親王の時の例をもて献物なと右大辨うけたまはりて用意せるにや

とんじき祿のからひつ　屯食は元服の人の本家より諸陣の役者にこれをわかち給ふものなり　西宮抄に其子細みえたり親王元服の時は諸官の長官たる人各下知して調せしむこれ源氏の元服にかはる處なり祿の辛櫃は親王以下の元服にはこれを立す東宮の御元服の時の事也さて下の詞に春宮の御元服にかすまさりていかめしく有けるよしをのせ侍り

おとなになり給てのちはありしやうにもみすの内にも入給はす　桐壺の卷は源氏の君の十二にて元服までの事を書侍れとこの詞にては十二よりのちの事をふくませて申侍りはゝ木々の卷とのあはひ十三より十五のとしまての事はかけたる樣なれと此一段の詞の中にこもりて侍るへし

さとのとのは　榮花物語かくて大殿十五の宮のすませ給し二條院をいみしくつくらせ給ふてもとより世のおもしろき所を御心のゆくかきりつくりみかゝせ給へは　今案法興院は二條京極にありもとは二條院と號せるを正暦二年に法興院とは名をかへられたる也源氏の御さとの二條院はこれになすらふへきにや

かゝる所におもふやうならん人をすへて　つゐにはねかひの如く紫の上後には二條院にすみ給へる也

花鳥餘情第二　帚木

一　帚木

以歌爲卷名也此卷の雨夜のしなさためは源氏十六歳中將と申給し時の事也ころは六月とみえたりきりつほの卷には十二歳までの事ありしからは十三十四十五この三ヶ年の事はものかたりに所見なし但きりつほの末の詞と此卷のはしめの段の言葉に三年の事はこもるへきにや

ひかるけんし名のみこと〳〵しう　此發端の言葉はきりつほの卷の終の言葉にひかる君とはこまうとのめてきこえてつけたてまつれるといひつたへたりとかけるにうけていへる也

いひけたれ給とかおほかなるにいとゝかゝるすき事ともを末の世にも聞傳へてかろひたる名をやなかさんとしのひ給けるかくろへ事をさへかたりつたへたる人の物いひさかなさよ　いひけたれ給とかとは東宮の女御の此君をよしとも思ひ給はぬに付てその御かたさまよりある事なき事につけていひけたれたまふとかおほかるへしすき事とは好色の事と云說あれとも此一段の詞つゝきさはみえ侍らす光源氏といふ名をすき事とはいへる也下の詞にかろひたる名をやなかさんといへるにてきこえ侍りさてしのひ給かくろへ事とは源氏の君を高麗人に相せしめ給ひし事也隱密の子細は桐壺の卷にみえ侍りかろひたる名は末の代までの事を云物いひさかなきはいまの世の事を申侍るへし

なよひかにおかしき事はなくて　なよひはきりつほの卷に女郎花の風になひきたるよりもなよひといへる心也又おかしき事とは物をほめたる詞也笑へくおかしき事にてはなき也

かた野の少將にはわらはれ給けんかし　清少納言枕草紙に物語の名ともをいたせる所にこまのゝ物語かたのゝ少將とあり又かた野の少將もときたるおちくほの少將なとはおかしといへり又野分の卷にかたのゝ少將はふみをかくに紙のいろあひをえらひ侍るよしみえたり所詮かたのゝ少將といへる物語侍る上はそれにて事たりぬへし作物語をもて作物語の例に引けるこれ又一體なるへしかの物語に在五中將の事を本立にしてつくりなせる事はさも

や侍らんこゝにてはそれまてのさたにをよはさる事なり

しのふのみたれやとうたかひきこゆる　上の詞に内にのみさふらひようし給とあれはこのしのふのみたれは藤つほの女御に心をかよはし給ふ事をいふへし

うちみたれめなれたるうちつけのすき／＼しさはこのましからぬ　うちみたれめなれたるとはあふひの上の事也大い殿にたえ／＼まかて給いれはなり

をさ／＼立をくれす　をさ／＼と云は詞也漸又頗なと云かことしをさ／＼しきといふはその心かはれりそれは優長なる事をいへり伊勢物語にまたわかけれはふみもをさ／＼しからす古今長歌にとのへもる身の御かきもりをさ／＼しくもおもほえす此等はみな優長の心也

殿上にもをさ／＼人すくなに御とのゐ所も例よりはのとやかに　御物忌にこもる人すくなき事をいへり御とのゐ所とは源氏の君の御そうし桐つほをいふなりさきの巻にうちにはもとのしけいさを御さうしにてとみえたり

そこにこそ　足下は人をかしつく詞なり頭中將をの給ふ也そこにこそかゝる文はおほくあつめ給らめそれをみせ給はゝこのつしをも心よくひらくへきと源氏の君のゝ給ふなり

女のこれはしもとなんつくましきは　これより下は源氏と中將との問答に四段あるへし第一段中將の言葉也

まきるゝ事なきほと　わかき時はかさらすしてありのまゝなる心なり

うめきたるけしき　うめくはなけきたるなといふかことし

いとなへてはあらねと我もおほしあはする事やあらん　第二段源氏の君の心こと葉也

いとしかなりなんあたりにはたれかすかされより侍らん　第三段又中將の詞なり

とるかたなく口おしきはといふなりとおほゆはかりすくれたるとはかすひとしくてそあらめ　とるかたなく口おしきとはいたりてわろき人を云優にすくれたるとはいたりてよき人を云かすひとしきとは世間にこの二のしなはおなし程にあるへきといふ

心はあまりわろきとすくれてよきとはいつれもありかたかるへき心也此事は上らうにも下臈にもそのほと〳〵につけてあるへきなり

人のしなたかくむまれぬれは人にもてかしつかれてかくるゝ事もおほくしねんにそのけはひことなかるへし　こよなきは無此世也きりつほの巻にことなうといへる大都はおなし心也事のほかにすくれたる心也これよりは人のしなを三にわかちてまつ種姓たかき上の品の人をいふ也

中のしなになん人の心をのかしゝのたてたるおもむきも　これはいたりたる上臈にもあらす又いたりたる下らうにもあらぬ中品の人をいふなり

しものきさみといふになりぬれはことにみゝたゝすかしとて　下のきざみは下臈の種姓を云みゝたゝすかしとはきけとも耳にたゝぬ也

そのしな〳〵やいかにいつれをかみのしなにをきてか三にわくへき　第四段又源氏の詞也いかほとの種姓なる人を上のしなにをきてそれよりつき中下品の三にはわくへきそととひ給也

もとのしなたかくむまれなからみはしつみ位みしかくて　これは種姓はたかき人なれと世におとろへて官位いやしく萬にたらはぬ人を云也

又なを人のかんたちめなとまてなりのほり　なを人とは種姓いやしき人をいふされとも時世にあひて官位たかくすゝみのほる事をいへりはしめの二にわけたるはふるまひにつきて二樣ある事を云次に三にわけていへるは人の種姓に三品ある事也いま又二にわかてるは種姓のたかき人の官位いやしく種姓のいやしき人の官位すゝみのほれるとをならへていへりよく〳〵分別すへき也

なりのほれとも本よりさるへきすちならぬは　上の源氏の詞に二のしなをわかてる中にもとよりしなたかき人の位みしかきとしないやしき人のつかさすゝめるとそのけちめいかゝあるへきとうたかひをわけ給へるを中將のさため侍らんとし給へる所にむまの頭と藤式部丞と御物忌にこもらんとてまいりたるを中將此人にゆつりてさためさせ侍るにむまのかみ物よくいふ人なりけれはやかてうけとりて申侍りこれよりは十八問答ありこれは第一段馬の頭か詞也なりのほれともさるへき人ならぬは

我はと思へとも世の人はゆるさぬをいふしないやしき人の位たかくすゝみのほれる人をいへり

又本上やむ事なきすちなれと世にふるたつきすくなく　根本は上﨟なれと世にふるたつきなければ時世のおほえもおとろふるならひ也これは種姓よき人の位みしかくなるを云へし

とり〳〵にことはりて中のしなにそをくへき　中のしなとは中﨟のしなゝる人の官つかさもそれほとに相當したるを云儒道には過猶不及といひて中庸の道を至極とす佛教には又非空非有を中道と云中は二教のたとふる所なるによりてことはりて中の品をとるといふ也

さてすりやうといひて人の國の事にかゝつらひ　中のしなに又しな〳〵あるへき事を云すりやうとは諸國の守を云國衙庄園の事をとりをこなふ物也

なま〳〵のかんたちめよりは非參議の三四位とものなま〳〵とは物のなまなかなる心也はしめて公卿なとに成たる家をいふなり參議とは天下のまつり事をましはりはかるつかさ也八座より以上大納言までを參議とは云非參議とはいまた宰相にならぬ三位四位なとの事なり

すへてにきはゝしきによるへきなゝり　第二段源氏の君の詞也家の内たらぬ事なとはたなかめるといへはさてはにきはゝしきによるへきとの給へる也

こと人のいはんやうにこゝろえすおほせらるゝと　これは中將の詞なれは問答の中には入らぬ也

もとの品に時世のおほえうちあひ　第三段むまのかみか詞也もとのしなたかき人の時世のおほえならふかたなき人をいふ鬼にかなさい棒といふかことくなり

うちあひてすくれたらんもことはり　うち〳〵のもてなしけはひのすくれたる事なりもとよりかくこそあるへき事にてあれといふこゝろ也

なにかしかをよふへきほとならねは上か上はすへてうちをき侍ぬ　むまのかみか存分に上か上はをよはぬ事なれはうちをくと申也下の段に源氏の君の御事をいふに此さためには上か上をえりいてゝもなをあくましとみえ給ふといへり

さて世にありとしも人にしられす　これは下の品の人を云也たかへる事とは案に相違したるといふか

ことし
わかいもうとゝものよろしきゝこえあるを　第四段藤式部かこゝろなり

いてやかみのしなとおもへるたにかたけなる世なれは　是は源氏の君の御心なり

そひふし給へる御ほかけ　そひふしはそひやかにふすといふ心に云説あれとそれは優ならす添臥はすくれ侍り

おほかたの世につけてみるに　第五段又むまのかみか詞也

ひとりふたり世の中をまつりこちしるわさならねは　天下の政をは太政官にてこれをとりおこなふ間萬機の公務なるによりて三公九卿を置てつかさとらしむる也まつりこちしるはまつりことしると云心也ひとりこちはひとりことかへりこちは返り事こちはことゝいふ心五音相通する故なり

せはき家の中のあるしとすへき人　天下はひろしといへとも諸人ちからをあはせておさむれは中〳〵やすきなりせはき家の中の事はあるし一人のはからひなれはゆつるかたなくして大事なる心なりこのあるしはうしろみのことをいふへし

とあれはかゝりあふさきるさにて　古今のあふさきるさの歌そへにとは本の荷にことつけそへたる荷をいふ世俗におもにゝこつけと云事なり人のあつらへ物なとあつかりてあなたこなたへとするはをのか身のわつらひになる心也上にいへるはたとへなりこれよりは又女の事をいふなり

所せくおもふたまへぬにたに（せはきイ）　所せくはひろき（ひろきイ）心なりおもふたまへぬはせはき心也むまのかみか世間せはき身にたにかやうにおもふとなり

又さやかにも見てしかなとすへなくまたせ　すみつきはのかにかきたる文をよみとかんとすれはひまをついやすなれはすへなきと云またせとはほとをふる心なり

なよひかに女しとみれは　女しは女のやうなるとみれはの心なり

ことかなかになのめなるましき人の　ことなる難ある中に先二の難をあけていふなりなのめなるましきはなをさりなるましきと云心也なのめといふ詞下にもみえたり此人はうしろみのかたにつきてもあはれをしりすくしはしりかきかいひくつまをと

なとにもこれほとまてなくともとおもはるゝはかりなさけたちえんなる事のさしすきたるをいふなり

又まめ〳〵しきすちをたてゝ　これはまたまことしきうしろみのかたはかりをしりてその外の事には心をくれたる人をいふ也

みゝはさみかちに　かい〳〵しき躰なりひんのかみを耳にはさむ也

もしはあやなきおほやけはらたゝしく　公方事につきてはらの立事なり

いとあはつかにさしあふきゐたらんは　此うしろみの女わつかに何事そといひたるはかりにて心に入てもたつねきかぬをいふ也さしあふきとはあふきなとをさしかさしてゐたる躰也

たゝひたふるにこめきやはらかならん　こめきと云詞あまたの説あれとおさなかましき心こゝにはかなひ侍る也

たちはなれてさるへき事をも　こめきたる人も大かたはよけれともたちそふ程はさてもあるへきかたちはなれていひやる事のたらはぬことのあらんは

又くちをしかるへきと也これはよき中にわろき事のましるを云也

なをくるしからん　心くるしからん也

つねはすこしそは〳〵しく　これはわろき中によき事のあるをいふ也

いまはたゝしなにもよらしかたちをはさらにもいはし　人はたゝ心むけを本とすへししなもかたちもいらぬといふ心なり三界唯心萬法唯識の心也源氏一部の肝心こゝにあり

ねちけかましき　くちきゝかましき人をねちけ人と云女のわろきくせなり

うへはつれなくみさほつくりて　拾遺あしねはふうきはうへこそつれなけれしたはえならすおもふこゝろを　あはれともみさほにもゆる螢かなこゑたてつへきこの世とおもふに俊頼今案みさほつくるとはしらすかほなる心也松のみさほといふも霜雪をもしらすときはにつねなる事を云下の詞にみさほにもてつけてといふもつねにかはらぬ心也

ことさらひたることなり　ことさらにつくりいてたる心也下にも此詞あり

いてあなかなしかくはたおほしなりにけるかなと
是はあひしれる人のきとふらひて此女にいふ詞也
ひたいかみをかいさくりて　むかしの尼はたれあま
といひてひたいかみを喝食なとのやうにはさむ也
さるによりてひたいかみをかいさくるとは云なり
すへてよろつの事なたらかにゑんすへき事をは見し
れるさまにほのめかし　紫の上なとは此心むけある
人なり
あまりむけにうちゆるへ　ゑんすへき事をも恨みす
うちはなつやうなるは當座はらうたきやうなれと
誠に男を大事とおもはぬににたれは中〳〵かろき
かたにおほゆるとなりかゝる人をつなかぬふねの
うきたるにはたとへたる也
中將のうなつく　第六段なり中將の君の領納したる
躰也
さしあたりてをかしともあはれとも　第七段中將（イ右馬頭）か
詞也
ともかくもたかふへきふしあらんをのとかに見しの
はん　これは女のおとこのたかひたる事あるをはら
たちゑんせすしてみしのふをいふ也　あふひの上
の心むけに　これにかなひ侍れは中將わかいもう
との姫君は此さためにかなひ給へりとおもへり又
ゑんすへき事をはみしれるさまにほのめかしうら
むへからんことをはにくからすかすめなさはそれ
につけてわか心もおさまりもすへしといへるはむ
らさきのうへの心さまこれにかなへりかるが故に
紫の上とあふひの上の事を女の本樣にしていへる
卷の心なり
むまのかみ物さためのはかせになりて　一切の事に
はかせといふ事ありそれかいふ事か本になる也博
士は博達の士といふ心なり
萬の事によそへておほせ　第八段又むまのかみか詞
也雨夜の物語はしめは女のしな心むけのよしあし
を物にもたとへすありのまゝにかきたり此段より
は又木のみち繪所てかきこの三のけいにたとへて
人の誠ありいつはりある事をのふ此下の段には其
はしめの事すき〳〵しくともきこえんとてをの
〳〵むかし有し事ともをたかひにかたりいたすか
くの如く三段に書わけたる言葉のつゝきひとへに
法華經の三周說法のすかたをかたとれり三周とは
法說一周喩說一周因緣說一周也法說一周は方便品

也此品は直に妙法の道理を説給て上根の聲聞舍利弗にたいしてさとらせしむこれを法説と云次は喩説一周は譬喩品なり此品のはしめには法説の述成授記ありこれまても舍利弗に對しての説法なりその次の段に三車一門のたとへをかりて三乘つゐに一乘に歸するおもむきをのへて中根の聲聞須菩提迦旃延迦葉目連にさとらせしむ信解品藥草喩品までも喩説の述成授記也次に因縁説一周は化城喩品也此品は過去久遠劫に大通智勝佛と云如來の法花を説給ふを聞し人の中比退屈のおもひをなして小乘を修行せしかいま又釋尊の説法をきゝて回心向大の聲聞となれる因縁をときて下根の千二百人に次第に授記し給ふかの法理を直にとくとたとへをかりていふと過にしかたの因縁をとくと此三周のすかた今の物語の作樣にわひにたる也世俗文字の業狂言綺語の誤をあらためて讃佛乘の因縁法輪の縁とせるこゝろなり下の詞に中將いみしう興して法の師の世のことわりとき聞かせん所の心地すといへる此ことわりをおもひてかけるなるへし

なにくれのこはこやうの物　調度のかさりの香壺の茵藥のはこなとなり

ゑ所　西宮抄云畫所在式乾門內東腋御書所南有別當五位藏人頭

世はなれてたゝみなし　雅兼卿記云天永元年十二月廿一日師匡房被語事一々難憶記一被語曰繪師金岡子公望公忠也公望子深江云々子廣高也公望公忠共上手於深江者自廣高者不得其名然而彼時有賓屛風之人深江見之召廣高令見之廣高云劣也深江曰然而此野筋汝かくは書てんや廣高云不敢又曰此岩淡又可及哉廣高能見又稱不敢之由深江曰是公忠繪也彼人每畫屛風定署其裏仍放之見之處已有其名時人謂深江能知此道也云々金岡は疊山十五重廣高五重也今案墨の濃淡をもて遠近の山をあらはす也

きえてまつはみゆれと　消はをとりたるこゝろ也

はかなき事たにかくこそ侍れ　木の道繪所手書にははかなき道なりそれたに實によれりいはんや人の心をやといふ心なり

はやうまた下らうに侍し時　第九段右馬頭か詞也

かく數ならぬ身を 拾遺　かつみつゝかけはなれゆく水の面にかく數ならぬ身をいかにせん

とかくになよひゆき　男のかたより女にしたかひたる心なり
かくをそましくは　をそ〳〵しくは也
かしこくしへたくるかな　しへたくるはこしらへたる心也
せうそこなともし侍らて　文にかきらす詞にて云をも消息と云也
臨時祭のてうかく
賀茂臨時祭調樂十一月午日於北陣搆假屋有儀式饗膳勸盃等
家路とおもはんかたはまたなかりけり　家路は室家を云也
けしきはみうちそむくわたり　かの女の事也
されはよと心おこりするにさうしみはなし　此女我をまつ物と見なして男の心にしすましたると心おこりするによく見れはその本人はなきといふ心也
おやの家にこのよさりなんわたりぬる　留守の女房のいふやうその人はおやの家にありてこよひこれへわたり給ふへしそれをまつと云なり
きるへき物つねよりも心とゝめたる色あひしさま　此女ありしにかはらす男のきるへき物なとうしろみのかたを日頃よりも猶心とゝめてしをきたる也
そむきもせすたつねまとはさんともかくれしのひすかゝやしからすいらへつゝ　そむきもせすは男のたつねきたるにうちそむかすわひしろふなり又女の男にたつねまとはされんともかくれしのはぬ也河海の説いかゝとおほえ侍る
いたくつなひきてみせしかは　馬のつけすまひしたる體也
たなはたの手にもおとるまじく　董永は後漢人家貧傭力父死就主人貸錢一萬以葬道遇一婦人求爲永妻永與倶詣主人令織縑三百疋以償一月而畢辭永而去乃曰我天之織女也緣君至孝天帝令我助君償債言訖凌空而去
中將そのたなはたのたちぬふかたを　第十段中將の詞也
そのたつたひめのにしきにはまたしく物あらし　手きゝたる女なりともたつたひめにはさりとも及ふまじきと也
露のはえなくきえぬるわさなり　此女物をそめたちぬふ事などをよくするはたとへは花もみちのこと

くなるべしおりふしの色あひはかしらぬもてなしとは物ゑんしのかたのうるさきを云也
さて又おなしころまかりかよひし　第十一段又右馬頭か詞也
このさかな物をうちとけたるかたにて　指くひし女をさかな物と云なり
こよひ人まつやとなんあやしくこゝろくるしきとて　月おもしろき夜なれば大かたにいふやうなれと此女に心をかはし侍るなり
かけもよしなとつゝしりうたふ　あすかゐのうたのかけもよしは木の蔭なりみもひは寒水なりみまくさは馬にかふまくさ也一説あすか井は京にある清水也二條萬里小路にありといへりつゝしるは嚥なり文選大人賦云嚥瓊華注嚥食なり文章を口にてなす事を云こゝのつゝしりうたふも口にてうたふなれはその心たかはぬ也
律のしらへ　飛鳥井は催馬樂の律歌なり呂は双調律は平調也
をりつきなからす　古今誹諧歌人にわはん月のなき夜とよめるはたよりなき事をつきなしといへりこゝのをりつきなからすは月の夜なれはたよりある心なり
庭のもみちこそふみわけたる跡もなけれどねたます庭の紅葉ふみわけたるあともなきとは男のとはぬ事を云かくいひて女にねたますする也
琴の音も月もえならぬ宿なからつれなき人をひきやとめける　此歌は心かはせる男のよめるなりつれなき人とは本の男を云へし
わろかんめりなといひていま一こゑきゝはやすへき人のあるに　わろかんめりは男の見るまへに女の歌よみかはす事あるましき事とそらほけていへる也今一こゑきゝはやす人とは此おとこの身つがら云なりさて女の返歌に木枯にふきあはすめる笛の音とはよめり
いまさりとも七とせあまりのほとに　孟子曰七年之病求三年之艾又又穰樟七年といひてくすの木は七年になれは材になるを儒者の秀才のたとへにいへり萬の事かきりあるをは三年とも七年とも云なり源氏の君ことしは十六歳になり給へはいま七とせをへて廿餘年の齢になり給はゝ何事もおほししる

へきと云心也
中將れいのうなつく　第十二段也
中將なにかしはしれものゝ物かたりせん　第十三段
　中將の詞也しれ物はされ物なといふかことし五音
通する也これは夕かほのうへの事也　其比中將右のお
たのめわたる事なともありきかし
ほい殿の四の君によすかいてきて此女のもとへは
たまさかにかよひし也
おやもなくいと心ほそけにてさらは此人にこそはな
と　この女三位中將のむすめなるか父はなくなりて
　さらはこの人にこそはと我をたのみたるけしきか
見えしとなり
この見給ふるわたりよりなさけなう　見給ふるわた
　りとは右大臣の四君の事也此女のもとへさるたよ
　りありておとしいはせたるなり此事は夕かほの巻
に右近か源氏にかたり申すところにみえたり
おさなき物なともありしに　玉かつらの君の事也
むかし物語めきて侍りし　うつほのとしかけかむす
　めのありさまににたり末摘花の巻にしるすへし
つれなくてつらしとおもひけるもしらてあはれたえ
さりしも　此女の心につらしとおもひけるもしらて
我はあはれとおもひしはやくなきかたおもひにて
ありけるとなり
されはかのさかなものも　第十四段中將の詞なりさ
かなものはゆひくひし女なりことの音にすめりけ
んは木からしに吹あはすめると歌よめりし女なり
この心もとなきは中將のかたるとこ夏なり
とりくにくらへくるしかるへき　これらを取なら
へて見るにいつれも心にあはねはくるしきと云也
式部か所にそけしきある事はあらん　第十五段頭中
將の詞なり
なに事をかとり申さんとおもひめくらすに　第十六
段式部か詞也
さえのきは　才の伎なり
わかふたつのみちうたふをきけとなんきこえ侍しか
と　わかふたつの道うたふをきけは白樂天の秦中
吟の中の全句なり二の道と云は貧家の女と富家の
女との得失を論するなりとめる家のむすめは嫁娶
なとの事はふそくならぬまゝにはやく事ゆけとも
つゐにはその夫をかろんする物なりまとしき家の
女は婚禮なとはきと成かたきやうなれと事なり

ぬれはじうとめなとには孝わるといふ心なりこれははかせの女貧家なるによりて式部にいひきかせたるなりきこえこちもこちはことゝいふ心也

こしをれふみ　ふみとは詩の事なり作文といふも詩つくる事なり玉屑に折腰體といへはよき詩の體なりいまその事にはあらざるべし四病の中に蜂腰病と云事ありそれは上句の第二字と第五字と同聲なるを病とす同聲とは上聲去聲入聲の事をいへりかやうの病をこしをれたるといふべきにや又歌にもこしをれ歌といふ事あり

をのこしもなんしさいなき物には侍める　をのこのためしさいなき物にてあると式部かおもへるなり

はなのあたりをこめきて　をこめくはをこつくといふかことし

こくねつのさうやくをふくして　河海に云延喜式云八十種草薬廿四種草薬の中蒜是極熱草薬也云々今案延喜式典薬寮に八十種廿四種草薬と云事はあれともそれは皆本草に出せる薬種ともを草薬といへり蒜は草薬の中に不出之又極熱と云詞もかの式には見えざる事也但内膳司式に供奉雑菜の中に有蒜春冬青進五月至九月予進之よしのせたり夏秋の時分もこれを供進すれは極熱と云名を世俗にいひつけたるにやいまの世にも六月にきひる薬といひて常にこれを服用す此物語には俗なる事ともおほく用たるゆへ也

さゝかにのふるまひしるき夕くれにひるますくせといふかあやなさ　ひるまはひるを服する間を云それを晝間によそへたる也

いかなる事つけそやといひもはてす　式部そらはけていかなるかこつけ事にひるますくせとの給ふそといひすてゝにくるなり

君たちあさましとおほして　第十七段なり

おいらかにおにとこそ　おいらかはまめやかになと云詞なり

さふらひなんやとてをり　式部かしこまりて居なり

すへておとこも女も　第十八段惣説なり右馬頭か詞なり

三史五經のみち〳〵しきかたを　女の身にて三史五經をあきらかにさとりたらんはこは〳〵しくあいきやうなからんとなり

さるましきとちの女ふみになかはすきてかきすくみたる　女とちのふみになかはすきてまんなをかきすくめたるなりまんなと云はまんなの草字かはるの色葉の類を云也

五月五日のせち　五月五日の節天皇あやめのかつらをかけ給て武德殿に行幸あり内辨外辨等節會のことし宮内省献菖蒲内侍女藏人續命縷を群臣に給ふ三献をはりて六府騎射の事あり

なにのあやめもおもひしつめられぬに　此あやめはあやめもしらぬこひもするかなの歌の心とおなし出仕を大事とおもへるによりて其外の事は心につかぬよし也

えならぬねをひきかけ　えならぬねとはよりもつかぬあやめの歌なとをよみかくるを云えならぬといふ詞あまた有あしまになつむふねそえならぬといへるはたゝならぬ心也又えならぬ花なといふはいはれすおもしろき心なり又緣ならぬをえならぬといふはよせもなき心也五日のあやめえならぬにはあらねともつきもなきおりふしひきかけたるねなれはえならぬと云也

九月九日のえんに先かたき詩の心を

重陽の宴には天皇南殿に出御ありて内辨外辨等あり文人博士をめされて題をたてまつらしめておのおの韻の字を探て詩を作りて文臺の上にて講する也三献ありて氷魚を給ふ御帳の左右に茱萸の袋をゆひつく御前に菊の花を瓶にさしてたてらる近代は宴の儀たえたるによりて宜陽殿にて平座とて上卿以下着座して菊の酒を給ふよし仰らるそのよしはかりなり

きくの露をかこちよせ　菊の歌をよみかくるなり

よろつの事になとかはさてもとおほゆる　萬の事につけていまこそはなとおほゆる時のあるにも分別なき人の心にてはたゝしんしやくしたらんはめやすかるへきとなり

君は人ひとりの御ありさまを　藤壺の御事也

これにたらす又さしすきたる事なく

たらすは不足なりたらさる事もなく又さしすきたる事もなきは中道をたとふる心也藤つほの女御の御心むけをのたまふ詞なり

からうしてけふは日のけしきもなをれり　やう〳〵

として雨のはれたる心なり

中納言の君中務なとやうの　中納言の君は源氏須磨へうつろひのおり一夜たちとまり給し人なり中務の君は末つむの巻に源氏になひきたてまつりて大宮の御きそくいかにそやきこえし人なり

あなかまとて　あなかまはあなかしかましなり人々のわらふをの給ふなり

さかしれいもいみ給かたなりけり　さかしはさそかしと云詞なり

二條院もおなしすちにて　二條院は陽成院に准據せるよし河海抄にのせ侍れはさにてこそ侍らめと思給ふほとにいさゝかうたかはしき事侍りそのゆへは榊の巻に齋院の御くたりのみちつかひをいへる所に二條よりとう院の大ちわたらせ給程院のかたはらなれはとありこれにておもふ時は二條東洞院のあたりにてあるへきにや二條を東へすき給とて西洞院を上へは何事にのほらせ給へきと覺え侍り但二條を東へすき給はゝ陽成院の南の大路すなはち二條なれは西洞院をよこさまにとをらせ給ふを洞院の大路わたら云せ給とへきにや此分にて陽成院を二條院にさため侍れは又心もとなき事侍り若紫の巻に紫の姬君を二條院へわたし給へるに二條院は程ちかけれはとありむらさき上の御さとは故按察大納言の家六條御息所のあたりにて六條京極也それより陽成院まてははるかにへたゝり侍れば程ちかしとはいかてか申へき法興院は大入道殿の御所にてはしめは二條院と號しき榮花物語の第三の巻に見えたれは桐壺の巻に里の殿つくり給と云所に此所を引のせ侍りそれは二條以北京極以東也六條とはへたゝり侍れとたてこうちはともに京極なりいさゝかちかしとも云へきにやしかれは齋宮の御くたりの院のかたはらといふは法興院はおなし二條なから東洞院と京極とは三町をへたてたりかたはらといはんにさのみのちかひはあるましくは法興院を二條には准據し侍るへし

中川のあたりなる家なん　榮花物語第四云中河雅信左大臣殿ちかきところなりけり父のくらのかみすけのふのあそんといひける人のつくりてすみけるいけやり水山なとありていとおかしうつくりたてゝ粟田殿の御かたたかへ所といひおもひたりける

家なりけりと云々今案此物語の中河の家はきのかみか家にてやり水せんさいなとありて御方たかへ所になれり榮花物語と相違なきにや

ひさしく程へてわたり給へるに　源氏の君あふひの上の御里へ程へてわたり給て又ひきたかへ外さまへいてたまはん事いとをしくおほしてきのかみか中河のやとへたかへ給なり

きぬのをとなひさやかにはら〳〵ときこえて　夏もひとへかさね引倍木（打衣イ）又はりはかまをきるゆへにをとあるへし鈴虫の巻にもきぬのをとなひと夏の事にかけり

おほす事のみ心にかゝり給へれは　ふちつほの御事也

式部卿宮の姫君にあさかほたてまつり給し歌なとを　桃園式部卿宮の御女あさかほの姫君に御文かよはし給ふ事此物語にはしめていひ出して第十五のあさかほの巻に齋院に立給てのち御文たてまつり給へるにみしおりの露わすられぬあさかほの花のさかりはすきやしぬらんとあり見しおりといへるははゝきゝの巻にいへる時を云なるへし此時の歌は物語にはかゝす

くつろきかましく歌すんしかちにもあるかな　くつろくとは物のすきまありてうこきやすきを云歌すんする事も女房のうへにてはこのましからぬ事なり

とはりちやうもいかにぞはさるかたの心もなくては　源氏の君のさるかたの心もなくてとの給は大君きませむこにせんといふ心をとりておもひわかれる女とものあるを聞給てたはふれ給ふ詞也めさましきわるしとは饗の事也さてきのかみかなによけんともえうけたまはらすと申侍るはいかやうなる御さかなをまいらせてよかるへきとて覺悟せぬよしをこたへ奉るなりいつれも催馬樂のわか家の曲の詞なり

いよのすけの子もあり　いよのかみをすけといへるは長官も次官も職掌はおなしき故なり諸國の守の闕の時はすけ長官の事をとりおこなふなり故にかよはして守を介といへりすまの巻に大貳を帥といへる此例なり

このわね君やまうとのちのおや　まうとは御へんなといふかことし又朝臣も眞人もともに尸（カバ子）なり下

には朝臣ともいへりのちのおやとは繼母也
ありつるこのこゑにて物け給はる　ありつるこは小君なり
こゝにそふしたる　小君かいらへたるなり
まらうとはね給ひぬるか　これ空蟬の君のいふ聲なり小君とおとゝいなる故にかよひたるなり
いもうとゝきゝ給へ　系圖にはあねにてもあれかしをんなをは男のすゑにかく法也古今の序にすさのをのみことを天照太神のこのかみといへり天照太神はあねにてましませとも女神たるゆへなり
ひさしにそおほとのこもりぬる　これは女房たちの詞なり
ひるならましかはのそきてみたてまつりてまし
これは空蟬の君の詞なり
ねたう心とゝめてもとひきけかしと　これは源氏の君のたち聞し給て心におもひ給ふなり空蟬君の詞すくなきをなを聞きけかしとおもひ給ふなり
まろははしにね侍らん　小君か詞なり
女君はたゝこのさうしくちすこしちかひたるほとに
障子は寢殿の母屋の南面と北おもてとの中を隔たる障子也すちかひたるとは源氏の君の南おもての御ましとちがひたる所をいふなり
中將の君はいつくにそ　空蟬の君の女房の名なり
もとめつる人とおもへり　うつ蟬の君のもとめつる中將の君の湯よりあかりてきたるとおもへるなり
中將めしつれはなん人しれぬおもひのしるしある心ちしてと　源氏の君この時分中將の官にてありしかは中將めしたれはまいれるよしの給也
きはゝきはとこそ　上臈下臈のきはをいふ也
又見なをし給のちせもやと　後のあふせをたのみてもなくさみなん心なり
いといきたなかりける夜かな　いはねの心なりいもねぬもねもねぬ也きたなきは人のねこひ心なりつよくねられたるを云也
月はありあけにて光おさまれる　朝日のいてゝ月のひかりのきゆるを云なり
權中納言のこはえさせてんや　上には藤右衞門督といひこゝには權中納言といへり權中納言兼右衞門督たりしゆへなり
そのあね君は朝臣のおとうとやもたるさも侍らす

空蟬のはらに伊與のかみの子はしあるかと問給ふ
なり朝臣は紀伊守をの給ふうつせみのうみたる子
ならはきのかみのおとうとなるへき也
よのたとひにてむつひ侍らすと申　繼子はまゝ母に
むつひぬ事と世のたとへに申と也
かゝる事こそはとほの心うるも思ひの外なれと　源
氏の君この小君にあね君はもと見し人のよしをい
ひしらせ給ふさてはかゝる事にてありけりとおも
ひの外におもへる也
かたはらいたし　はつかしき事をいふ此卷のはしめ
にもあり
はゝきゝの心もしらてその原の道にあやなくまとひ
ぬるかな　帚木は空蟬の君にたとへたりありとはみ
れとあはぬゆへなり此歌は源氏のひとりこち給な
りさてきこえんかたこそなけれと小君にかたり給
ふなり
數ならぬふせ屋におふる名のうさにあるにもあらす
きゆるはゝき木　ふせ屋はいやしき屋也故にかすな
らぬとよめりはゝき木はちかくよりてみれはうす
るをきゆるとはいへりこれも女のひとり事なりき
こえたりと云はかならす人にいはねともひとり事
にいふをもそはなる人はをのつからきくゆへなり
さはれとおほせとも　さらはさてあれと云言葉なり

花鳥餘情第三　空蟬　夕顔

並一　空蟬

並の儀は先横をもて本とすうつほはま松等の物語のごとし但此物語にかぎりて竪の並あるべきなりたとへば一巻に書べき事を末をわかちて兩巻になせるがごとし又一巻の中に横竪をかねたるあり末摘花の巻ははじめは若紫同時の事を書いて末には若紫より後の事をかける故なり空蟬の巻は竪の並なり歌をもて名とせり

ねられ給はぬまゝに　これははゝき木の巻のをはりの詞につゞけてかけりいまだ中河のやどりにとまり給へる夜の事なり

なみだをさへおとしてふしたり「涙押落て又說は涙をさへに落たるなり」これは小君がことなり則次の詞には小君が空蟬の君にかよひたる事をいへり

やがてつれなくてやみなましもうからまし　空蟬の君の源氏になびきなびかぬ事はしりがたき事なり此一段の詞などはいとおぼつかなき様なりつゐには二條院の東院にうつろひし事もうたがはしき事なるべし

ふたあひ　二藍也

にしの御かた　いよのかみが女空蟬のまゝ子也

こきあやのひとへかさねなめりなにゝかあらん上にきて　女房の裝束五月五日よりはひとへかさねをきるひとへ二をひねりかさねたる物なり此時は更にひとへをきすこきとはこきうちきの事なりこき紫にそめたるべし河海には紅のいろこきとしるされたりいかゞと覺え侍り

はうぞくなるもてなし　蜻蛉の巻にも此詞あり見あはせてれうけんすべし大かたはもの〳〵しからぬ心とみえたり河海に傍側とかきてあらはなる心と釋せらるおぼつかなし

おく（空蟬也）の人はいとしづかにのとめて　此時源氏の君のかいまみは東のつま戸より西さまにみやり給へり母屋のはしらにそはめる人は空蟬の君也いまひとりは東へむきたる故にのこりなくみゆ西の御かたをいへり東よりみれば母屋の柱かくれにゐたるは西へむきたればうしろはかりみゆべし西はおくのかたなればむかふ方をとりておくの人とはいへ

り西の御方はおくにゐ侍れとわらはに見ゆるはは
しの方へむきたるゆへなるべし
いでこたびはまげにけり　軒端荻の詞なりとを十は
たみ廿みそ卅よそ四十
そこは地にこそあらめ　ちは地也又持といふ心也
いよのゆけたもたど〳〵しかるましうみゆ　六花集
に古歌とていたせり　いよのゆのゆけたの數は左
八右は九中は十六すべて卅三ありといへり雜藝（蘂イ）歌
にはかぞへずよますとうたへり又素寂が說にはゆ
けたのかす五百卅九といへり是等の說に相違ぜり
可尋決之又いよのかみ任にある時分なりおもしろ
く書侍る物ならしいよのゆけたはかつゐしらすか
ぞへずよますす君ぞしるらん此歌なり
かのまされる人よりは〻西の御方の事也うちみる所
はまされる樣なり
にぎは〻しくあいきやうつきおかしきは　西の御か
たの事也「そおゐれ戯れたるなり」
あはつけいとはおはしながら　あは〳〵しきは人の
心あさきを云へしかいま見は垣間見なり
れいならぬ人侍りて　西の御かたをいふ

わが君はいづくにおはします　後達の詞なり
はなちつるわらはも　戸いかきかねをはなちたるわ
らは也
たゞひとりふしたるを心やすくおほす　これまでは
空蟬の君のひとりふしたるとおもひ給ふなりもぬ
け給ふをばしりたまはぬゆへなり
なを〳〵しく　なを〳〵しきはよのつねなをさりに
かたらふ心なるへしなを人もよのつねの人を云也
いとにく〻てあらす　小君が詞なりあらずはくるし
くもあらぬ云心ら也
少輔のおもとなめり
おい人が源氏の君をあれはたそと問てみづから又
ひとりこに少輔の御局にて有けりとをのがとうれ
いに見あやまりたるなりたけたかき女房なれば源
氏をそれとおもへるなり小君が少輔の君をときに
つれてありくそとおもひたる也おもとは御局など
いふがごとしいま〻でたちならひ給ひなんとは小
君の今に少輔のおもとのたけにひとしくなり給は
んずると云也
わた殿のとにかひそひて　源氏の君なり
おもとはこよひうへにやさふらひ給へる　老人が源

氏を少輔の君とおもひてたちよりて物語する也

いらへもきかてあなはら〳〵　おもとの返事をもきかてあなはらいた〳〵といひていそぎいぬるなり

うつせみの身をかへてける木のもとになを人からのなつかしきかな　せみのもぬけたるを身をかふと云人からはせみのからによせて云なり

かの人いかにおもふらんと　にしの御かたの事也

左右にくるしう　源氏の君は此事ゆへにうらみ給へり姉君もまたはつかしめ給ふ小君が左右にくるしうおもへる也

並二　夕顔

夕かほ上は十九歳玉かつらは三歳なり源氏十六歳の夏より十月までの事見えたりこれも竪の並なり以歌并詞爲卷名なり

六條わたりの御しのひありきのころ　六條のみやす所の事はしめていひ出せる也

めのと　源氏の御めのと皇子の列たらは二人有べきか親王のつらならば三人たるべし下の詞にはくゝむ人あまたあるやうなりしかとの給へり大貳のさしつきに左衞門のめのとゝてあり末摘の卷に見えたり

はしとみ　下はかうしはた板なとをうちてうへにしとみをつりて外へあくるやうにしたるを云くるまにも半蔀とてありうへの蔀はかりをあくれば半のしとみとは名付たるなり

すたれなとしろう　いよすたれ又かやすたれの類なり

御隨身つゐいてかのしろくさけるをなん　源氏の君の遠かた人に物申すと口すさみ給は何の花ぞもと問給心也さて御隨身夕かほとはこたへたてまつるなり

このもかのも　此卷又椎の卷にもこのもかのものしはふるひ人とあり紫式部が心にもつくは山にかぎるべからずと思ひ給へるにや

むね〳〵しからぬ　棟々しからぬなり物の棟梁ならぬ心なり

しろきあふぎのいたうこかしたる　たき物にこかしたる心しかるべきにや下の詞にうつり香いとしみふかくとあり

いむ事のしるしに　尼になりて八齋戒をたもつなり

心あてにそれかとぞみるしら露の光そへたる夕かほ

の花　夕顔は女の我身にたとへてよめり露のひかりは源氏によそへたるべし河海に夕かほを美人にたとふる事をのせ侍りこゝには相當せざるなるべし夕かほの花はいやしき垣根に咲花なれば女も我身にたとへていへりわれと美人と自稱すべき事にあらざる物也毛詩に齒如瓠犀といへるは美人の齒をひさこのさねにたとへたる事もあれどそれもこゝの心にはいらぬ事なるべし

やうめいのすけなる人の家になん　奥入云此事九條殿の外更無ニ知ル人一なへての世の説には諸國の介也云々九條殿は月輪入道關白の事なり河海にのせたる事みなあやまれり別に是をしるすべし

御たゝうかみにあらぬすぢにかきかへて　たゝうかみに歌書事後撰十九卷の詞にあり

御心さしの所には　六條の御息所の事なり

昨日夕日の殘りなく　夕顔の宿は南むきの家西かけたるなるべし

うらもなくまち聞えかほなる　軒端のおきの事なり

ゆけたはいくつとゝはまほしう　中河のやとりにて碁うち侍りし事をおもひいたし給へばまはゆきやうにていよの守に氣とひにくゝおもひ給ふなり

むまのかみのいさめおほしいでゝ　雨夜の物語の時の事なりすきたはめらん女に心おかせ給へとあり空蟬の君はさいはひにしつほうなる人をかう思ふはなのめならぬかたわなる心とおもひなし侍ればつれなき心のねたさもつみゆるさるゝやうなり

いま一かたはぬしつよくなるとも　軒はの荻の事也ひきかへしたとしへならんはいとをしかるべし　六條わたりのとけかたかりしをさま〳〵いひなひかし給て又ひきかへしをとつれさらんはいとをしかるべきと也

さりとてよそなりし御心まとひのやうに　是は藤つほの女御などのやうにあながちなる心まとひはなきものをと六條わたりの事をおもひなすらへ給也

よはひのほどもにけなく　御息所は年もふけ給へれは源氏の君ににげなきと也

さく花にうつるてふ名はつゝめども　おちてすきうき今朝のあさかほ　槿は中將の君にたとふるなり是は槿に女をたとへたるなり毛詩云有女同車顏如舜花とあり

をかしけなるさふらひわらはのすかたこのもしうことさらめきたるさしぬきのすそ露けき花の中にましりて　侍わらはは童女なりわらは夏はひとへかさねのあこめわさみはりはかまをきるへしそのうへにおとこの指貫をきたりめつらしき出立成へし

これみつかあつかりのかいまみ　これみつかとなりのかいまみのめしろにつけたる人をあつかりといへるなり

中將殿こそこれよりわたり給ぬれ　頭中將をいふ也

あなかまとてかく物から　手にて人のきくにとあはく心なり

いてこのかつらきの神こそ　はしよりおちぬへけれは心さかしうしたると腹立也

君は御なをしすかたにて　頭中將を云　惟光かあつかりかたる也

ことねりわらはは　中少將のめしくするわらはをは小舍人童と云也夕顔の宿のわらはへ頭中將のとものものともをみしりてかそへたつるをあつかりはそはにてきゝし也

もしかのあはれとわすれかたけにいひし人にやと　雨夜の物語に頭中將のかたりし床夏おもひいて給なり

たゝわかとちとしらせて物なと云わかきおもとの侍るを　わかとちは我としなりわかきおもとは夕顔の上なり是を女房ともの我とうれいのやうに人にしらせて物なといふ也それをこなたにはよくしりたれとわさとしらぬよしにそらおほれしてまかりありくと惟光か源氏の君に語り申也

くた〳〵しけれはれいのもらしつ　夕顔の宿へ光君のはしめておはしましたる事はくた〳〵しけれは物かたりに書もらすとなり

けさう人　すかたをやつしたる體なり

いとあやしきまてけさのほと　夕顔の宿より歸給ての朝ひるまの隔もあられかたく戀しくおもひ給ふるははかなくなるへきせんへうにてありけると也

むかしありけんものゝへんけめきて　此本緣河海にのせ侍り大物主大己貴は一體異名なり三輪の大明神御事也此大神はいかなる因緣にてか色にふけり給らん神のいさむる道ならぬとはかゝる事よりよめるなるへし

たゆふをうたかひて　大ゆふはこれみつなり　于時民部大輔

よつかぬ御もてなし　よつかぬは始終あるましきこゝろなり

いつれかきつねならむたゝはかられ給へかし　はかられははかされ給への心也

ゑいきゝ給やなと　ゑいは人のきかぬをとかむる詞なり定家本には北殿こそきゝ給へやとあり在家の隣あはせに物いひかはす事也

されたるくれ竹　上にされたるやり戸口といふにおなし

かへのなかのきり〱す　詩十月篇云八月在宇九月在戸十月蟋蟀入我床下とありまと越に聞ならひ給へる御耳にさしあてたるやうにとあるは我床下に入るといへる心にかなへり

しろきあはせにうす色のなよらかなる　しろきあはせのきぬにうす色のうはきをたきるへし

いさよふ月にゆくりなくあくかれん事を　いさよふいさよひともにやすらふ心なり十六日の月はもち月よりちとおそくいつるによりてやすらふと云にや是は十五夜の明方の月なりそれも入かたの月のしはしやすらひていらぬ心にみるへきにや

かほはなをかくし給へれと　かり衣の袖なとを覆面にせるにや又扇なとさしかさして半面にはたかくれたるにやおほつかなし

夕露にひもとく花はたまほこのたよりにみえしえにこそありけれ　ひもとくはかくしたる顔をあらはしたる心なりえは縁なり

あまのこなれは　やともさためすと云心也

われからなゝりとしてうらみかつはかたらひたまふ　あまの子と女のいふにつきてもにすむ蟲をとりよせて我身の人かすならねはなのり給はぬもことはりなりとうらみかつは又かたらふとなり

あまり心ふかくみる人くるしき御もてなし　これは六條の御やす所の事なり源氏の君のおもひくらへ給へるによりて邪氣になれにや

あせもしとゝになりて　きたる物の身につくほとにぬれたるをいふへし

なたいめんはすきぬらんたき口のとのゐ申はいまこそはと　亥刻に内竪時のふたを奏す其後侍臣のなたいめんありなたいめんとは名謁を云殿上に御とのゐせる侍臣たかひに名を問れてなのる事也此つきに瀧口のとのゐ申ありとのゐ申といふも名謁もおなしきなり瀧口は二十八ある物なりいつれも亥の刻の事なれはいとかたくもふけぬにこそはと

かけり
くましくしう　くまとはかくれたるを云物のかくれ
にあるやうなるこゝろなり
物のあしをとひしくと　延喜八年清涼殿霹靂之後
貞崇法師候清涼殿之時聞大人足音是邪神所為也云
々見李部王記
いきをのへ給てそかなしき事もおほえたまひけるあ
まりに　あきれたる事には中々かなしさも覺えぬ
也ちと心をとりしつむる時になみたをはなかす物
也杜子美か詩に驚定初拭涙とつくれるも此心也
しほしみぬる人にて　しほなれたる心なり
神わさなとおほかるころにて　夕顔のうへうせ侍る
事は八月十六日の事也九月は齋月にて一日より御
神事なり卅ヶ日の穢にふれ給ふによりて參内かな
ふましき事なり
むらひにて　無禮なりみすの中なからきこゆる事を
いふなり
今朝はたにゝおち入ぬへくなん　右近の君かなしさ
のあまりに谷に身をなけてうせなんといへる事也
わかれといふのかなしからぬはなし　杜子美も死別
已呑聲生別常惻々と詩につくれり生死ともに別は
かなしき物なり
つゝみのほと　賀茂川のつゝみ也防鴨河使と云つか
さをおくも賀茂川のつゝみをつかせんためなり
ふくいとくろくして　ふくりとこえて色くろき心清
少納言枕草子とおなしき說尤しかるへし委は河海
に見えたり
あしをそらにて　空をあゆむ心ちしてと下の詞にあ
り同事なり御法の巻にも空をあゆむと云詞あり
おほいとのもいみしくけいめいし給て
けいめいはおとろくと云心にいへる說ありこゝの
ことはゝ誠におとろく心にかなへり上にもみえた
り
とはぬをもなとかととはてほとふるにいかはかりか
はおもひわつらふ　空蟬の君の歌思ひわつらふは源
氏の病惱を思ひよせてよめり問給はぬはわつらひ
給ゆへとおしはかる心也
ますたはまことになん　いけるかひなきといふこゝ
ろなり
いけるかひなしやたかいはまし事にか　いけるかひ

なしとは源氏の君の我身こそ云へき事なれとの給ふ也引ねぬなはのくるしかるらん君よりは我そますたのいけるかひなし

うつせみの世はうき物としりにしをまた言の葉にかゝるいのちよ　空蟬の世とはむなし世といふ心なり今はおもひたえたるをまたとはれ侍てその言の葉に命をかけたるとなり

なをかのもぬけをわすれ給はぬを　源氏の歌にうつせみの世とよみ給へるはもぬけをわすれ給はぬによれる事なりもぬけは蛻の字也ぬきすてたるきぬをいへり

かのかたつかたは　軒端の荻の事なり

しにかへるこゝろはしり給へりや　物思ひにしにたるか又いきかへるをしにかへると云へし源氏の君のわつらひ給しおりふしなれはかくとりなしての給へる也

かの人の四十九日　十月四五日の間四十九日にあたるなり

もんさうはかせめして願文つくらせ給ふ　重明親王家室藤原氏四十九日願文後江相公朝綱書之見文粋生者必滅釋尊未免栴檀之煙樂盡哀來天人猶逢五衰之日此願文之詞也

なく〳〵もけふは我ゆふ下ひもをいつれの世にかとけてみるへき　來世の再會を求むる心也

こうちきは夏のなりけれはまた衣かへのもたひのきぬにてそありける　もぬけの衣は夏のこうちきなり旅の裝束は冬の衣かへのきぬをてうしてつかはしたるなり

すきにしもけふわかるゝも二道に行かたしらぬ秋のくれかな　すきにしは夕顏の上の事なりけふわかるゝは空蟬のくたり也いつれも人のしらぬ事なれは入しれぬ事はくるしかりけりとかける也

かやうのくた〳〵しき事は　此一段は物語の作者の詞なり御門の御子なりともよき事はよき事あしき事はあしきにて有へきを一向に書もらせはわたくしあるやうなれはありのまゝにしるしおきたるとなり本〻にはことおほかるとは別にくはしく書たる一本あれとも是はそのうちをなを折中して省略してうつしたるといへるなり皆作事也

花鳥餘情第四　若紫　末摘花

三　若紫

源氏の君の歌　手につみていつしかも見ん紫のねにかよひける野への若草此歌をもて巻の名とせり若紫とつゝきたる詞はみえす式部卿の姫君を紫の上となつけ侍るは藤つほの女御のゆかり尋出たるによれりされは此巻の詞に秋の夕はまして心のいとまなくおほしみたるゝ人の御あたりに心をかけてあなかちなるゆかりも尋まほしき心もまさり給なるへしとあり源氏十七歳の三月より冬までの事見えたり

わらはやみ　瘴瘧也寒熱あり毎日にやむをは日おこりと云日ませをは隔日瘧と云也

ましなひかちなと　ましなひは厭術也さま／＼の事ともあり杜子美詩の手提髑髏血と云句を誦しても瘧はおつるといへり加持は眞言教の陀羅尼の事也

めしにつかはしたるにおいかゝまりて室のとにもえいて侍らぬ　圓融院瘧病をいたはらせ給時天台座主(慈恵大師也)良源僧正をめされし事は天元四年の秋の事也小野宮右府記にみえたり時人以良源僧正稱應化佛此時被聽輦車并執杖阿闍梨二人其後更被任大僧正云々

山のさくらはまたさかりにて　今の世にもくらまの花は都の花ちりはてゝのち盛也といへり　里はみなちりはてにしを足ひきの山のさくらはまたさかりなり故郷の花は散りつゝみよしのゝ山のさくらはまたさかりなり

ふしの山なにかしのたけ　河海には釋迦の嶽をなにかしのたけと云へきにやふしに對したるたけなるかなにかしのたけは惣しては所をさたむへからす別してはあさまのたけを云へきにやふしあさまと對して云ゆへなり

ちかき所にははりまのあかしの浦こそ　是よりは藏人の大夫良清か物かたりなり良清は播磨守か子なるによりて國の名所をよくしれるなり

しほちのむすめ(明石入道)　御堂關白出家し給て入道殿と申きこれによりて出家の人を入道と云事をはゝかりて多田滿仲をば多田新發とそ皆人申侍る

代々の國のつかさ　播磨國司を云國司は一任四ヶ年とて國司になりては五年目にかならすかはる事なれは代々のつかさとはいへり

かいりうわうの后　昔大香王と云王みめうつくしき女をもちけるを邊國の王四人ともに是をえん事をのそみけるほとに此女俄にうせぬ父の王母なとこひもとむるにいぬゐのかたにあたりて三十七萬八千九百里をすきて龍宮城有その龍王これをとりて大海のそこにをける事を聞て父の王ならひに邊國の四人の王共に行むかつて取かへしたる事あり吉祥天女の本縁に申侍り又娑迦羅龍王の八歳の女の母も王の妻なれは后といはんに相違なく侍り

くら人にてことしかうふりえたるなりけり　正月五日の叙任に六位の藏人は必巡爵とて従五位下に叙せらるゝ事也かうふりとは爵の事也

いてやさいふともゐなかひたらん　又一人のいふ詞也藏人大夫か云を聞て源氏の御ともの人口々におかしの「入道」の事を云也

そこの見るめも物むつかしく　あまのすむそこの見るめもむつかしく礒によりくる（かるイ）わかめをそつむ

山ふきなとの　裏山吹のきぬは表黄裏紅也花山吹は表薄朽葉裏黄也

かんさしひたいいみしくうつくし　おさなき時はいまたかんさしをはせねともおとなになりてかみあけしたらはうつくしかるへきと云こゝろ也

わかかきりなく心つくし聞ゆる人に　藤つほの女御の事なり紫の上は女御の御めいにあたりたれはいとよくおほえ給へるもことはりなり

初草のおひ行末もしらぬまにいかてか露のきえんとすらん　（伊勢物語）はつ草のなとめつらしき言の葉そうらなく物を思ひけるかな

みやうかうなとの　佛に奉る香を名香といふ牛頭栴檀なと名ある香を云へし護摩なとの餘薫か

またにけなきほとなどよのつねの人におほしなすらへて　此姫君また十歳はかりの事なれはにあはぬやうによの常のいもせのおもひをして辭退やし給んすらんたゝ今はその名はかりいひなつけなとのやうにあらんとさきをくみての給ふ也

この若草をいかてかきゝ給へつらん　源氏の君の小柴垣のかいまみし給時祖母の尼君のおひたゝんありかもしらぬ若草とくちすさひ侍りしを源氏の君のきゝ給て初草の若葉の末をみつるよりとの給ふをあま君はこれをしり侍らていかてか聞給ふらん

とおやしくおもひ給へるは誠にことはりなり
枕ゆふ今夜はかりの露けさをみ山の苔にくらへさらなん　高光集 おく山の苔の衣にくらへなんいつれか露はこほれまさるとおほ君かのはつ草のわか葉の上はとかくのおへしらひにをよはぬ事なれはたゝたひねのそても露そかわかぬはかりの返答を申給へる也
ひかたく侍るをと聞え給ふ　深山の苔はいつも露けきなれはひかたくとはいへりこゝの詞におひかなへる古歌さためて侍らむかし
かやうに入つてなる御せうそこはまたしらすなん　是まてはおほ君はいまた源氏の君には對面し給はす少納言のめのとして入つてに聞え給へは源氏の君の今の御詞はある物なり
ほとけおのつからとて　上に佛の御しるへはくらきにいりてもさらにたかふましかなる物をとの給ふこゝに又ほとけおのつからとはみつからの心さしのおさはかならぬ事は佛も自然にしらせ給ふへきとなり
おなしさまにものせさせ給ふたるをたくひになさせ給へと　同しさまとは紫の上も母におくれ給へる源氏の我も更衣にはなれ給へはたくひになさせ給へとの給ふなり
法華三昧をこなふたうのせほうのこゑ　止觀に四種三昧ありいはゆる常行常座半行半座非行非座の四種なり法花懺法は半行半座の三昧なり懺法は天台大師或説遵式つくり給て六時に六根の罪を懺悔する法門なり
さしくみに袖ぬらしける山水にすめる心はさはきやはする耳なれはへりにけりやと聞え給ふ　源氏の涙もよほす瀧の音とよみ給へるにつきてさしくみに袖ぬらしける山水にとは僧都の返歌によみ侍るなりすめる心はさはきやはするは僧都の我身の事なりさて耳なれ侍るとはいつも耳なれたる瀧のをとなれは住山の身は心もさはかぬといへる心なり又案に二首なから源氏の君の御歌なるへしすめる心はさはきやはするは僧都の事をよみ給へりさて下の詞耳なれ侍りにけりやときこえ給ふとかけり
名もしらぬ草木　白氏草堂記云雜木異草蓋覆其上綠陰蒙々朱實離々不識其名四時一色
ことしはかりのちかひ侍れは　僧都禁足の事なり

聖徳太子のくたらよりえ給へりけるこんかうすのすゝの玉のさうそくしたる　百濟國より金剛子のわたりたる事は元興寺資財帳第九云喜多迦子金剛子此等百濟國より所献なり云々たゝし聖徳太子の數珠の緒はいまた見出し侍らすさもありぬへくよりきたれる事をはつくりことにいひなすつねの事なり

夕まくれほのかに花の色を見て今朝は霞の立そわつらふ　かの若草を花にたとへてよみ給へる也あま若の返歌のかすめる空は源氏のたちそわつらふとよみたまふことをかすむるとはいへりおほめかしていふ事をはかすめいふと云へし

あはれなにのちきりにてかゝる御ありさまなからひのもとの末の世にむまれ給つらん　上の僧都の歌に光源氏をは優曇花にたとへて輪王の出世によせたり故に此詞はあるなり

いかてかのひとそうにおほえ給ふらん　是は父宮にはにたまはて藤壺の女御におほえ給をあやしくおもひ給ふなりともにひとつきさいはらなれはかやうによそならす一物に見え給ふにやとの給ふなり

はかなくをしつゝみ給へるさまなと　河海につゝみふみをたて文の事にいへるおほつかなしつゝみふみは宇治の巻にも見えたりたてふみにてはあるましきにや嫁娶記に見え侍り艶書のつゝみ様は縦令紫或紅薄様二重に歌をかきてをしたゝみて引むすひて墨を引て其を又薄様一重にて藥若は砂金なとの如くつゝみて同薄様をほそくきりてひねりてくひをいふ也是に墨を引不引は兩說なり

はなちかき　うつほの物語なかた（仲忠）ゝの大將若宮の御れうにかきてまいらせたる手本にもはなちかきと云事有

あさか山あさくも人をおもはぬになと山の井のかけはなるらん　さきになにはつをたにつゝけ給はぬといへるによりてあさか山を取出し侍り古今の序の詞を思よせたるなりかけはなるらんはかけさへ見ゆるの本歌を思なからしかも又遠さかる事をかけはなるとはいへるなり

くみそめてくやしと聞し山の井の淺きなからやかけをみすへき　是はくやしくそくみそめてける淺けれは袖のみぬるゝ山の井の水の歌によりてくみそめてくやしとはいへる也心は水をくむ程にちかつき

よりてはねたくとくやむこともあるへけれはたゝかけを見るはかりにてやみなはよかるへきといふ心なり

これみつもおなしことをきこゆ　惟光かへりまいりて尼上はいまたおなし返事を申させ給ふよしを申なり

藤つほの宮この頃わつらひ給事有て　三月四月の頃の事なるへし

宮はあさましかりし事をおほしいつるたに　是よりさきに源氏の君は女御へまいりちかつき給へることの詞にみえたり

なとてすこしよろしき所たにうちましり給はさりけん　源氏の心に藤壺の女御をなとてちとなをさりなる所もうちましり給はてかうとりあつめ世にすくれ給て人の心をのみつくさせ給ふ事よとせめての事に思給ふなりよろしきとはなをさりなる心なりあまた所にある詞なり

くらふの山にやとりもとらまほしくおほえ給へとあやにくなるみしか夜にて　六帖二 くらふ山くらしと名にはたてれともいもかりといはゝよるもこえなん今案此歌いたくかなはねともくらふ山をくらふかたによめる歌なれはこゝの詞にすこしたよりあるにや心は夜かはやくあくれはしはらくくらき所にやとりはとらまほしきとなり

京極中納言こゝの詞を取てよめる歌　こよひたにくらふの山に宿もかな暁しらぬ夢やさめぬと　やとりせぬくらふの山を恨つゝはかなの春の夢のまくらや

世かたりに人やつたへんかきり(あちきイ)なくうき身をさめぬ夢になしても　源氏の夢のうちにやかてまきるゝとよみ給へるも我身をゆめになさはやといふ心なりうき身をさめぬゆめも同心なりさめぬゆめと云はぬるかうちの夢にはあらすはかなき世をいふへし世かたりに人やつたへんは我身のありさまのためしすくなき事なり

やかてなきねにふしくらし給　なきねはねをなくをうち返していへる詞なり上東門院の御歌も大略同し心也ある事の今はなきねの夢ならていつかは君をまたはみるへき

みつきはかりになれはしるく見奉りて

みつきをみな月とかける本もあり藤壺女御たゝも

なくなり給て三月はかりになり給ふなりこの三四月の頃御心ちわつらひて御さとにまし〳〵ける時源氏の君ちかつきより給しより御懐妊ありて卯月の頃よりは六月はみつきはかりになるなりさるほとにみな月とかける本も心はちかはぬなりかくてあくるとしの二月十餘日に冷泉院は生れ給ふ十一ヶ月にあたれるにや

御めのとの辨命婦　諸本に相違あり一本云御めのと子の辨命婦云々王命婦は御めのと也其人の子を辨命婦といふ心なり親行本には辨と命婦との間に何をきりて二人の名とす辨も御めのとなりそれと王命婦との二人なり又御めのとの辨命婦と何をきらねは辨命婦は一人の名なり

源氏の君もおとろ〳〵しくさまことなる夢を見給て　たとへは源氏の北の御かたの御はらに御子出き給て御位につかせ給ふへきさまの御夢にあはするなりさておほしもかけぬとはいへり

そのなかにすこしたかひめありて　是は源氏の御子をこと人の御子にいひまきらはしたるやうの事なり河海に左遷の事といへるはいかゝとおほえ侍り左遷は朧月夜のことによれり藤壺の御事故にはあらさる故なり

此夢あふまて人にかたるなとのたまはせて　夢にはさま〳〵の夢あり思夢と云ふはおもひねの夢とてひる思ひしことの見ゆる也妄夢と云ふはすちやからもなき事を見る妄想の夢也正夢といふはまさしき夢なり殷高宗の傅説を夢に見給し類なり朕兆の夢といふは善悪につきてきさしの夢なり丁固か松を夢にみしか十八歳にして三公になり江淹か五色の筆をみしかは文藻日々にあらたになりしか如きなり源氏の君の御夢はいかゝ見給けん心もとなし

御あそひやう〳〵をかしきほとになれは　世もやう〳〵すゝしくなる時分をいふなり

かの山寺人はよろしうなりていて給ひにけり　紫のうは君心ち煩ひしかよくなりて京の六條の里に出給ふ事なり

ありしにまさる御物おもひに　謙徳公集　忘なん今はとおもふ時にこそありしにまさる物おもひはすれ　今案藤壺の御事なり

月のおかしき夜しのひたる所にからうしておはし立

たるに　此しのひたる所は誰ともしらす六條京極のあたりなるへし六條御息所の事をいへるにやおほつかなし

いたうあれたる所のこたち物ふりて　是は紫の上のうは君の御里なり

かのあま君いたくよはり給へれは　上にはよろしう成てと書て今又かくいふは老病にて再發せるにや

いはけなきたつの一聲きゝしより芦間になつむ船そえならぬ　姫君の御こゑを源氏の君一日は聞ぬやうにし侍しかとも何か聞ぬとは御めのとをはしめて思ふへきならねはたつの一聲とはよみてやり給へるなりかやうの事は世間につねにある事なり

秋の夕はまして　藤壺の御事ゆへなり

きえんそらなきとありし　尼君の歌なり

十月に朱雀院の行幸あるへし　朱雀院は後院なり天子脱屣の後の御在所也三條朱雀に四町につくられたり延喜の御宇には宇多の御門を朱雀院と申侍り十月の行幸は紅葉の賀の事なるへし

たちぬる月のはつかのほとになん終にむなしう　尼君九月中旬の頃まては六條京極の家にすみしかおなしき廿日に北山にてつゐにうせ侍るなり

あまた物し給なる中のあなつらはしさにてや　兵部卿宮の御むすめ今の北方の腹に女壹人冷泉院の女御なり又一人ひけくろの大將の室なり此外は系圖にのせす

あしわかの浦に(のイ)みるめはかたくともこはたちなからかへる波かは　芦のはのわかきによせて若浦をあしわかの浦といへるにやこゝにはわか君になすらへていへり對面なくともよらてはいかゝかへるへき心なり

めさましからんとの給へは　人つてならて聞え給はすはめさましからんとは面目もあるましからん心なり

よる浪の心もしらてわかの浦に玉もなひかんほとそうきたる　少納言のめのとの返歌なり誠は御心もしらてなひき給はんはうきたる心ちするとなりありなきこととはいまたいはけなきほとの事なれはわりなき御あやにくにてあると申侍るなり

この四十九日すくしてやなと　十一月九日比あま君の中陰はつる也この時ははや朱雀院の行幸なとも

過たるへし
たのもしきすちなからも餘所〳〵にならひ給へれは　兵部卿の宮の御事父にてはましませとうと〳〵しくならひ給ふ也
いと忍ひてかよひ給ふ所のみちなれは　上に月のおかしき夜忍ひたる所にかよひ給ふとあるその人のことなるへし夕かほの卷のはしめに六條わたりの御しのひありきとあれは忍ひてかよひ給所といふにおひかなひて聞え侍り但系圖なとには別人にいへり
立とまり霧の籬(マカキ)の過うくは草のとさしにさはりしもせし　それほと過うくはなとか立より給はぬ草のとさしなれはさはるへきにもあらぬをといふ心なり
をかしかりつる人のなこり戀しく　わか君の事なり　六帖夜もすからたつさはりつるいもか袖名こり戀しくおもほゆるかな
おやしくうとみ給て人も心をくめりしに　此人は兵部卿の宮のいまの北方をいふ也
かゝるきはひにしも何か心ほそくとも　少納言のめのとのことはなりうは君のなくなり給ていくほともなきをかゝるきはひとは云なり
たいふもいかなることにかと心えかたくおもふめのとか事ありかほにはいはぬ物から御すきことも思出侍りつるなとゝいひしをこれ光心えかたくあやしく思ひ侍るなり
あつまをすかゝきて　和琴に菅攬片攬とて神樂催馬樂にもちゐる事あり五拍子にはすかゝき三度拍子にはかたかきといへり又箏にも毎樂曲終にかくを菅攬といふと云々
屏風ともあたり〳〵たてさせ給ひ
あたり〳〵は當の字歟榊の卷にもいたやともあたり〳〵いとかりそめなりとありたるにまかせたる心なり
おましなとたゝひきひろくはかりにてあれは　むしろしとねなとあるをひきのふるはかりの事なり
をんなは心やはらかなるなんよき　源英明男女婚姻賦云至剛者男至柔者女云々在文粋
やう〳〵おきいて見給にひ色のこまやかなるかうちなへたるともをきて　やう〳〵おきいてみ給の詞

は上へつきたる詞なりあそひ物ともを姫君のおきてみ給心なりにひ色は外祖母の服いまた三ヶ月の中なれはにひ色のたくひともをき給ふをいふ也又火色を服者のきる事も其例なきにはあらされともこゝの詞はにひ色たより有て聞え待り

ねは見ねと哀とそおもふ武蔵野の露分わふる草のゆかりを　ねは見ねとゝは草のねをぬる心によめるなり業平中將妹に對してよめる歌うらわかみねよけに見ゆる若草を人のむすはん事をしそ思ふ此ねよけも根を寢にそへたるなり

かこつへきゆへをしらねはおほつかないかなる草のゆかり成らん　(寶方集)かこつへきゆへもなき身にむさしのゝわかむらさきを何にかくらん

こよなき物おもひのまきらはしなり　藤つほの御事なりゆかりを尋出て思なくさみ給なり

さかしら心つきなにくれとむつかしきすちに　これよりは姫君のいまた何心もなく源氏の君をあそひかたきのやうにし給ふ事をいふなり

並　末摘花

此巻は若紫の横竪の並なり源氏の君十七歳の春よの十八歳の春の始まての事なり歌幷詞をもて巻の名とせりなつかしき色ともなしになにゝこのすゑ摘花を袖にふれけん詞云なをかの末摘花にはひやかにさし出たりとかけり紅の花はすゑよりさけはやかてすゑよりつむによりてすゑつむ花といふ常陸宮の姫君の鼻のあかきによりてたとへていへるなり

おもへともなをあかさりし夕顔の露にをくれしほとの　夕顔の巻につゝけて發端の詞をかけり若紫の巻は三月に北山へわらはやみましなひに出給へるよりはしめてかけり此巻は若紫の巻よりさきの事をいへるゆへに夕かほの巻にはつゝけてかけるなり(信明集)時雨つゝ木すゑ／＼のうつるとも露にをくれし秋は忘れし

御いとましさ　司馬相如琴心をもて卓文君を挑といへり挑は女の氣色をとる心なるへしこゝのいとましさはいさゝかかはれり心くらへなとやうの心也戰を挑むなといふ心にかなへり

なを／＼しきかたに　よのつねなる心なり

おきの葉もさりぬへき風の便りに　夕顔の巻に藏人

少將かよはすと見えたり　秋風の吹につけてもと(後撰)
はぬかな荻の葉ならは音はしてまし(中略)
ほかけのみたれたりしさま　ともし火の影に碁打と
見給しを荻の穗によそへてかけるなり
故常陸のみこ　光孝天皇承和五年正月任常陸太守そ
のゝち貞純親王代明親等任し侍るなり
命婦はまゝ母のあたりはすみうくて　兵部大輔か左
衛門のめのとのゝちむかへたる妻は命婦か爲には
まゝ母なり
打とけたるすみか　晴むきにてはなき方をいふなり
物のあはれしる人こそあなれ　伯牙彈琴鍾子期知音
たる心なり
もゝしきに行かふ人もこそとの給て　百敷にゆきか
ふ人もこそおほけれとも命婦はかり情しれる人な
きとなり一にはもゝしきに行かふ人なれはみゝき
くにははつかしけれとものゝ心なり
かやうの所にこそむかし物語にもあはれなる事とも
ありけれ　うつほのとしかけか女(仲忠大將母)の事
なり彼女十五の年母かくれぬ女一人のこりてあれ
はやともみなこほちとりてたゝ寢殿はかりありは
となくのゝやうに成たるに時の太政大臣御願あり
て賀茂にまうて給てこの家のまへを過給ふにおひ
くし給へるわかこ君しはし立とまりておかしき木
たちのさまを見給へは此女のみるとてこほれたる
かうしのつらに立よりたりけるに人ありけもなき
所に心ほそけなるすまゐをしたるかなと哀におほ
されて賀茂にまうて給てあそひなとはてゝかへり
給にわかこ君はひるみつる人の心にかゝりてゆか
しけれは此家にとゝまり給ぬよろつの所あれおそ
ろしけなる物から心ありし人の心いれてつくろひ
し所なれは見所おほかりよもきむくらの中よりつ
くろふ人もなく心にまかせておひ出たる草木のけ
しきなと時をわすれぬ物からぬしなき宿は哀に心
ほそくむしの音みたれてきこゆるに月影はくまな
くむくらのもとよりすみわたり草はことに光をや
とせる程なといふはおろかに心ほそけなるをなか
むらん人思やられて　出たにもあまた聲せぬ淺茅
生にひとり住らん人をしそ思ふ
けにさもある事とさやうにをしなへてうちとけか
たらふへききはゝことにこそあれ　けにさもあるこ

ととは命婦か常陸の姫宮の御事をかたり申を源氏の君けにさもある事と心得給ふなり打とけかたらふきはとはさすか宮なとの御女に打とけかたらふへききはにはあらねと哀にさひしき御有様なれはさやうにけしきはのめかし聞えよと命婦をかたらひ給ふ也

こと人のいはんやうにとかなあらはされそ　命婦は御めのと子なれはかくの給なり

かりきぬすかたのないかしろなるにて　かりきぬすかたなり上に内よりもろともにまかて給ふとありそれにかりきぬすかたおほつかなしそれは内より退出のときいつくにても装束をあらためん事うたかふへきにあらす但禁中にて蹴鞠の有し時布衣をきたる例もあるにや

諸共に大内山はいてつれと入かた見せぬいさよひの月

帝王系圖注云宇多院山陵在大内山仁和寺西云々故寛平法皇かくれ給て後此所にいせかすみけるにならひの岡の松風すこく吹とかけりしからは大内山は並の岡のあたりなるへし但文永五年に山陵使を被立之時彼山陵遂以無知人云々李部王記天曆二年正月十日大内山火起不滅又承平三年四月六日天子放若狹國所献之雉於大内山云々今案大内山は仁和寺の名所なれ共こゝには内裏の心に用ひたり日本紀に内裏とかきておほうちとよめり源頼政も大内守護の武士にて三位をのそみし歌に大内山の山守はとよめりいさよひの月はやすらふ月の心相違なし但上にもいさよひの月おかしき程にとあり十六日の月をいへるにやおほつかなし

里わかぬかけをは見れと行月のいるさの山をたれかたつぬる　里わかぬ月の光をは見れとも明かたの入さの山まてをたつぬる人もなきにおもひもよらぬこととにくむ心をそへたり

かくしたひありかはいかゝし給はん　是よりは頭中將の詞なりすいしんは近衛司の身にしたかへてつるゝものなり

かのなてしこをえたつね給はぬを　玉かつらの君の事なり

そのゝちこなたかなたよりふみなとやり給ふへし　末摘のかたへ源氏の君も頭中將も文をつかはした

れといつれも返事なきはかやうのかたに不堪なるゆへなるへし

しか〳〵の返事はみ給や心みにかすめたりしに　是は中將の詞なりかすむるとは思ふ心をほのめかしたる心なり

されはよいひよりにけりと　是は源氏の心詞也

人わきしけりとおもふにいとねたし　中將の心なり

源氏のいさみんともおもはねはとの給ふをはや返事を見給ふをそらほけての給ふと心得て中將さては人によりて返事も有けりとねたくおもへるなり

いと詞おほくれんしたるかたにそ　れんするは鍊也鍊磨するなといふ心なり打をかぬ心なり

人の心のとやかなる事のかたくていとおもはすにのみあるになん　人の心とは女の心を云おほとかになくておとこのあやまちになる事のあるとなり是は大かたのことはりをの給ふなり

らう〳〵しきかたはをさ〳〵なきなゝり　命婦か云詞にてさてはらう〳〵しきかたはなき人なるへしと心得たまふなりこめかしきはおさなかましき心なり

人しれぬ御物思ひなとに　藤壺の御事なり

かのきぬたのをとも　又始にかへりて夕顔の宿の事をいふなり

てをえさし出給はぬ　文の返事のなき事なり

何やかやとよつきたるすちにはあらて　なにやかやは何かといふ詞なりよつきたるとはなれ〳〵しき心なりよつきたるすちにはあらて時々あれたるすのこにやすらひたきとなり

おほかたなるやうにてきゝあつめみゝとゝめ給ふくせのつき給ふに　命婦か源氏の御事を心に思ふ事也一度聞給ふ事を忘れ給はぬくせのおはしますと也

えひのか

香字抄曰採栴檀樹葉皮舂篩爲香故云葉皮又裛俗曰衣比列王家方に裛衣香の一名一云すへて薫物の名なり

いくそたひ君かしゝまにまけぬらん物ないひそといはぬたのみに　ことは童部の諺に無言を行せんと約束して無言〳〵とうしまにかねつくといひて何にてもうちならしてのち物いはぬ事をするなりしまと云はしゝまなり悽遑とかきてしゝまとはよめり

やすらひたる心なりさて此歌にすゝつむ花のいらへもし給はぬことを君かし丶まといひ物ないひそなとよめり此物語にはかくのことくの世俗の事をもおほく用たるなり

かねつきてとちめん事はさすかにてこたへまうきそかつはあやなき　し丶まにかねつくといふによりてかねつきてとちめん事とよめりとちむるは口をとちて物いはぬを云なりかねつきて物いはぬ事は八講なとの論義の時證義者かねといへは威儀師磬を打ならすその丶ちは論義をやむるなり其心にも通するなり

いはぬをもいふにまさると知なからをしこめたるはくるしかりけり　六帖歌心には下行水のわきかへりいはておもふそいふにまされる

さうしみはたあれにもあらす　あれにもあらすはわれにもあらぬなり

朱雀院の行幸あるへき事　若紫の巻と同時横の並なり

夕霧のはる丶けしきもまたみぬにいふせさそふる宵の雨かな　夕霧のはる丶けしきとは女君にたとふるなり

雲間まちいてんほと　雨晴れはいて給はんとなり歌の詞あるへし可尋之

なかさたのすちにてかみしもひとしくかい給へり　中さたは中頭の手跡なり上下ひとしきはちらしかきにもせぬをいふなり

大鼓をさへかうらんのもとにまろはしよせて　禮記曰鐘鼓在庭琴瑟在堂延喜四年三月廿四日覽舞樂左大臣時平公仰令推大鼓階前自打之云々今案大鼓はかならず堂下にて打事なり但寛治五年五月廿五日殿上競馬六番之時主上堀川院自打大鼓給此時置堂上也

ぬすまはれ給へ　身をぬすみてさりかたき所へゆくなり

紫のゆかり尋とり給ては　紫の姫君の二條院へうつろひ給ふことは行幸はて丶霜月の頃なり

御ゝたいひそく　李部王記天暦五年六月九日御膳沈香折敷四枚瓶用秘色うつほの物語に云ひそくのつき今案秘色はあをき茶碗のたくひをいふなり

ゆるし色のわりなくうはしらみたる　延喜十七年参

議三善淸行請禁深紅衣服參議云但淺紅輕黃未及火色者不在制限長保二年太政官府云紅紫之服堤防自存中袴直袍下襲之類或是用紅或亦用紫誡雖禁其深染未曾制其淺色　今案くれなゐむらさきはふかき色を禁色となつけあさきをゆるし色といふ制禁に及はす誰も着用する故なり常に人の心得たる禁色はたやすく着用せすゆるされもちゐる故に深色を聽色といふ說はあやまりなりゆるし色のうはしらみたるは紅の色の薄といへる心なり

うちき一かさね　袿に大小あり小袿は宮の一の人或はあるしなとのきる物なりきぬのうへに表着そのうへに小うちきをきる寸法は次第に上にきるはおめらかすなりくろきうちきとは紫色のくろみたるをいふへし

ふるきのかはきぬ　江次第云昔蕃客參入時重明親王乘鴨毛車着黑貂裘八重見物此間蕃客纔以件裘一領持來爲重物見八重大憖云々

きしき官　政官なとを云なり「儀式官なり」

朝日さす軒のたるひのとけなからなとかつらゝのむすほゝるらん　（好忠集）あさひこや今朝はうらゝにさしつらん軒のたるひの下のたま水

まつの雪のみあたゝかけにふりつめり　深山（古今）には松の雪たにきえなくに都は野へのわかなつみけり
今案松の雪はしろき綿をむしりかけたるやうなれはあたゝかけなると云にや

かの人のいひしむくらのかと　雨夜の物語に右馬頭かいひし事なり

なみこすすゑのなと
浦近く降くる雪はしら波の末のまつ山こすかとそみる

ひをたゝはのかにいれて袖くゝみにもたり　おきなに手をあたゝめさせて門あけさせんためなり
ふりにけるかしらの雪を見る人もおとらすぬらすあさの袖かな　あさの袖は朝の袖なり

わかきものはかたちかくさすと
白氏秦中吟に幼者形不蔽老者躰無溫とあるをとりて幼者といふをはしたなる女によそへ老者をはおきなにたとへたり躰無溫といはんとて火をけに火を入てもたせたるなり

まめやかなるさまに　まことしきみつきをし給ふな

り上にも此詞は有しなり
おいされはましてとりかくさるへきことかはとて
おいはえいなといふかことし
から衣君か心のつらけれはたもとはかくそそほちつゝのみ「延喜式　綾泥繪、平具、衣莒、蒔繪、古代、」いつか我涙のつきんから衣君か心のつらきかきりは今案たもとはかくそそほちつゝのみとあるは別に本様にすへき衣のあると聞えたれは源氏の君の心得すおほしたる所にあのこと少輔君にすゑ摘よりのつゝみに入たるきぬをとりいてたり
あさましの口つきや　すゑつむの歌の事なり
いまやう色のえゆるすましく　榮花物語云祐子内親王紅梅十二をたてまつりたるを内の御つかひとて中納言の局まいりたりけるか見たてまつりてうつくしのいまやう色やと申けりうつほの物語に云わらはにつゝしのこうちきわか君のいまやう色のうちき今案いまやう色とは紅梅のこきを云なりたとへはこき紅にもあらす又こうはいにもあらぬはしたの色にて此頃いてきたる色なれはいまやう色とはいへり大略ゆるし色とおなしきなりえゆるすましくといふは紅のこきかたによりたれは禁色によりたるによりてえゆるすましきとはいへり
なをしのうらうへひとしくこまやかなる　上にいへる今様色はきぬをいふなり此なをしも今やう色のうらおもて同色なるをいふにや
おり／＼の月かけ　つまかけとある本もあり月影は猶まされるにやきもしをかきあやまりてつまとよみたる本や有けんすゑつむの御もとへ月夜にいて給し時はなのやうはかつ／＼みとかめ給はぬことはあらしと思ふなり
紅のひと花衣うすくともひたすらくたす名をしたてすは　命婦かすゑつむのかた人したるなり
かやうのかいなてにたに　かいなてはをしなへてといふ心なり又すへらかなる義にや末つむの口つきのせめて命婦ほとにもあれかしの心なり
かゝるわさは人のする物にやあらん　末摘のおくられたる衣をあさましとおほしてかゝるわさは人のする物かと命婦まて心をとりしておもひたまへるなり
かの返しくはや　くはやはさあとて投たしたる心也

あやしく心たちすくさるゝとて　かやうのをくり物とりつたへたるを心たちすくさるゝと命婦をの給ふなり

心しらぬ人〳〵なそ御ひとりゑみはとゝかめあへり　源氏の君のひとりわらひをし給ふをすゑつむのことをはしらぬこたちともあやしくおもふなり

あらすやさむきあさ霜にかひねりこのめる花の色あひやみえ侍らん　政事要略衛門府風俗歌云多々良女乃花の如加以禰利好牟夜滅紫色好牟夜是はそこに有ける一人の女房の詞也あらすやはといふはしらすやなといふかことしかひねりこのむ花は鼻のあかき人にたとふる也かひねりこのむは衛門府の風俗歌よりいてたる詞なり又たゝらめの花はたゝ梅の花といへる事をかきあやまれるなるへし上の詞に見えたり

あなかちなる御事かなこの中にはにほへる花も見えさめり　是また一人の女房の詞なり左京の命婦肥後の釆女ははなあかき女なり此二人のものともや有りつらんと心しらぬ人はいふなり

あはぬ夜をへたつる中の衣手にかさねていとゝみもしみよとや　衣たになかに有しはうとかりきあはぬ夜をさへへたてつるかな今案みもしみよとやは我もみん人もみよの心なりかさねていとゝはかさね〳〵へたてたるなり

かの御衣はこに御れうに人のたてまつれる　源氏の君の御れうとて人のまいらせたるきぬをさなから末つむの方へをくり給へるなり

ねひ人ともさたむなる　末つむの御方の年より女房なとは是よりの御そも御歌もおとるましきとひはんしたるなり

ことしおとこたうかあるへければ　男踏歌は正月十四日の事なり初ねの巻にくはしくしるすへし

いとおかしかりし物こりに　此おかしきはまことにわらふへき事を云なり末摘花を見あらはしたりし事を物こりとはいふなり

女の御さうそくけふはいとよつきたりとみ給ふはすゑつむのけふの御いてたちよのつねなるは源氏のをくり給し衣裳をさなから着たまへる故なり

さしもおもはしよらすめつらしき紋をそられたりしうはきはかりそ　此一段の詞説々あり一には源氏の

をくり給へるきぬともの中にかゝるうはきも有けるを今見いて給ふなり一云表着はかりすゑつむのかたにしたてられたるをめつらしく思ひ給なり
紅はかくなつかしきもありけり　むらさきの姫君の事なりくれなゐは紅顔をいふなり
はくろめ　山海經云東海有黒齒國其俗婦人齒悉黒染
今案日本は東海の中の國なりかの俗にならふにや
昔はいとけなき女は左右なくかねをつけされは古代のおは君のならはしにて紫の姫君も十歳にあまるまてはくろめもなかりけらし
かく心くるしきものをみてあらてと　是は末摘の事なり
かみなかき女をかき給てはなにへにをつけて　すゑつむのすかたをかたとるなり
平仲　平定文かあさ名なり
けしきはみほゝゑみわたれるを　ほゝゑむは笑なり梅のやう〳〵ひらけたるをいふ索笑梅と杜子美も詩につくれり
はしかくし　仁和芹河の行幸次ニ幸ニ八條殿一爲レ作下寄ニ御輿一之使上初テ造ニ階隠(ハシカクシ)一云々見吏部王記天慶六年也　今案南階の間にはしらを二たてゝ上をふきいたすをはしかくしといふ鳳輦をひんかしむきにかきすへて左のわきより乗御下御あらんためなり
あないとをしかゝる人の御行するゑ　是は物語の作者の詞すゑつむ花の事なり

花鳥餘情第五　紅葉賀　花宴

四　紅葉賀

詞をとりて巻の名とせる也たゞし此巻に紅葉の賀とつゞきたる詞は見え侍らす試樂の日かくつくしたれば賀の日やさう〳〵しからんとあり又花宴の巻に御紅葉の賀とあり又藤裏葉の巻に六條院の行幸の所に朱雀院の紅葉の賀れいのふる事おほしいてらるとありかれこれをとりあはせて巻の名とせりしかのみならすうつほの物語に神泉にもみちの賀きこしめすへきとあり又ふち井の宮にふちの花の賀し給ふとあり又雪の賀といふ事あり承和の御時紅梅の賀をこなはるゝ事あり是等の名目を例とせるなり此巻は源氏君十七歳の十月より明年の十月までの事見えたり

朱雀院の行幸は神無月十日あまりの程なりけり　此朱雀院の行幸は宇多御門の御賀になすらふるなりそのゆへは延喜十六年三月七日行幸朱雀院有法皇五十御賀云々醍醐の御門の御時朱雀院と申は寛平法皇の御事なり五十の御賀は三月の事なるを此物語に十月の紅葉の頃にかきなしたるべし此巻に一院と申事ありすなはち寛平の御門になすらふるなりきりつほの御在位の中に一院崩御の事見えたるは寛平法皇は延喜の御門崩し給へて後かくれさせ給ふ故なり

しかくを御前にてせさせ給ふ　御賀には試樂調樂なといひて舞樂の試ともあり此時のしかくは内裏にてせさせ給て藤壺の女御に見せたてまつらせ給ふなり

花のかたはらのみ山木なり　うつほの第九云花のかたはらのときは木のやうに見え給ふ云々仲忠大將を花にたとへ仁壽殿の女御の彈正宮を常盤木にたとへていへる事なり

物おもふに立まふへくもあらぬ身の袖うちふりし心しりきや　源氏の歌は立まふべき心もなかりしかともけふの事はたゞ御前に見せ奉らせ給ふべきためとありしかばなきてをつくして奉公と思ひ侍し心さしをはさりともしらせおはしましつらんといふ心なり

めもあやなりし　あやは文なり錦などの文をめに見

るごとくうつくしき心なり
から人の袖ふる事は遠けれと立居につけてあはれとはみき　青海波は盤渉調唐樂なりから人の袖ふるとよみ給へるに相違なかるべし
かやうのかたさへたと〳〵しからず人のみかとまでおほしやれる御きさきことはのほゝゑまれつゝ　人のみかとまでの詞は唐人と云につきていたくちかひたる事は侍らすことに青海波は唐樂なれば左右の樂のわけめをさへしらせ給ひてから人の袖ふるとはよみ給へると源氏の見わけ給ひてか樣のかたさへたど〳〵しからぬと女御をほめ給へる心なり
東宮もおはします　延喜十六年の三月の御賀に有仰て令ㇾ喚ニ皇太子ニ云々此時太子は保明太子なり
木たかきもみちのかけに四十人のかいしろ　垣代也かきをしたるやうにまはりに人をたつるを云是よりは御賀の日の事をいふなり
山の松風まことのみ山おろしときこえて　朱雀院には池山ある所なり
かざしのもみちいたうちり過て　舞のかざしには誠のたち木の枝をもおり又つくり花をもかさすなりちり過たるとあれば是は誠の紅葉と聞え侍り
いりあやの程　俊賴歌云　郭公二村山を尋みん入あやのこゑやけふはまさると　顯昭注云舞には入あやとてさらにとて返して面白くまふ事によせて郭公の入あやの聲やまさるとよめるなり云々若菜卷上云かしは木の右衞門督落けんの入あやをまふとあり六條院の御賀の事なり
その夜源氏中將正三位し給ふ　延喜御記云貞觀以來奉賀時有敘位之例
御ふくははゝかたなれば三月にてこそはとてつこもりにはぬかせ奉り　むらさきのうは君九月に卒去はゝかたはみつきの服なるによて十一月の晦日に除服し給ふとなり
又おやもなくておいゝて給ひしか心くるしきさまにまはゆき色にはあらてをとて　紫の姬君は母君にはとくはなれ給てうはやしなひにてまし〳〵しをおやもなくておいゝて給ふとはいへりさて三月の服なれ共一かど心さしのほどをあらはし侍り若紫の卷にもにひ色のこまやかなるをき給ふよしみえた

り鈍色の中にもこきをこまやかなるとはいへり爰にも除服はし給へとしばらくはまはゆき色を着し給はぬなりくれなゐうす色の紫を除きてまはゆき色とはいづれをいふべきなれば紅梅もよきくち葉その外梅櫻なと名あるきぬをいふへきにや

てうはいにまいり給とて。としかはりて源氏は十八歳になり給朝拜は正月朔日の小朝拜をいふ朝賀の事にはあらす

名高き御おひ　うつほ物語云うへ世の中に名高くつたはりける御みおひあまたあるか中によしとおはすをとりいたさせ給て大將にこれついたちに朝拜なとあらんおりものせられよとて給ふ今案むかしの名ある玉の帶には落花形鴛通天なと名ある物ありしなり

內春宮一院　此一院は寬平法皇になすらふへし或又陽成院とも申へきにや

この御事しはすも過しかは心もとなきにこの月はさり共と待につれなくて立ぬ　藤壺の御產の事なり去年の三月に藤壺御さとゐし給ひて源氏の君通し給ふ三月よりは十二月は十月にあたれとも誠は四月よりの事なるへししかれは正月にあたれとももちこさるゝ程に二月十余日に御產はありしなり

身のいたつらになるへきを　後撰 哀ともいふへき人はおもほえて身のいたつらになりぬへきかな伊勢

みや御心のおにゝ　心の鬼とは心におそろしくおもふ事なり　謙德公集わか爲にうときけしきのつくからにかつは心のおにも見えけり

いかさまにむかしむすへる契にてこの世にかゝる中のへたてそ　この世は若宮の御事をそへて讀み給ふなりさて命婦か返歌にも　このよの人のまとふてふやみとはよめり子を思ふやみの心なり

よそへつゝ見るに心はなくさまて露けさまさるなてしこの花　新古今 よそへつゝみれと露たになくさますいかにかすへきとこなつの花惠子女王

さうのことは中のほそをのたへかたきとて平てうにをしくたしてしらへたまふ　箏は秦聲也世謂蒙恬爲之絃有十三象十二月其一以象閏也自一至五太絃といふ自六至十中絃と云斗爲巾をほそ絃といふ中のほそ絃は巾也平調の時は二七爲宮にて巾の緒は双調にしらふるを云なり

まろも一日もみたてまつらねは　詩云一日不レ見如ニ三月一云々

うねへくら人　釆女藏人とは爰にかきたれと藏人はうねへよりもあかりたる女官也さるによりて元三の御藥にも内膳司の御はかためをは釆女役送して女藏人につたへ女藏人はいせんのすけにはわたす也又御厨子所には釆女の中をえらひて得選となつけて得選役送して命婦につたへ命婦はいせんの典侍にはわたすなりさりなから節會の時は内膳司の晴御膳をは釆女これを供す陪膳のうねへとて執せらるゝ事也時にしたかひて上﨟にもなり下﨟にもなる事なりかやうの事はいまめかしきやうなれとすゑの代にはしる人もありかたく又ゐ中人なとのために此抄はしるし侍るによりて今更なるやうなれとことの次に申侍る也

めなるゝにやあらんむけにそあやしうすいたまはさめる　これよりは源氏の事をかけるなり

御うちきの人めして　藏人私記第十三云御髻御髮事侍臣之間撰堪事之人供無定例皆着當色袍（謂之御挿染紫色絹也納）所藏人　今案御もとゝりとり御ひんにまいる人は紫のきぬのなをしをきて祇候するをうちきの人とはいふ也

木たかきもりのかたをぬりかくしたり　（拾遺集）人の扇に大あらきのかたかきて侍るに歌よみてと侍れは　夏くれはこりすまにおふる大荒木の杜の下草かひもあらなくに今案ぬりかくしたりは泥にぬりたるをいふにや

君しこはたなれの駒にかりかはんさかりすきたる下葉なりとも　（古今）わか門の一村すゝきかりかはん君かたなれの駒もこぬかな小町おとこのこさりけれはよめるとあり今案大あらきの森の下草駒もすさめぬ歌にとりなせり源内侍のすけのあふきにも杜の下草おいぬれはとかけりおかしくもおもしろくもかきなし侍るかな

さゝわけは人やとかめんいつとなく駒なつくめる森の木かくれ　（蜻蛉日記）さゝわけはあれこそまさめ草かれの駒なつくめる杜の下かは今案駒なつくめるは源内侍のすけのいつとなくおとこをなつくる心に讀侍り

またかゝる物をこそ思ひ侍らね　（拾遺集）白かみに黒かみましりおふるまてまたいとかゝる物は思はす坂上郎女

うんめいてん　温明殿これは中の重の東の方にある殿にて内侍所のましまず所なり

うりつくりになりやしなまし　これは催馬樂の山城の歌の詞也これをとりてよめる歌六帖に有山城のこまのわたりの瓜つくりならひて後そ悔しかりける

文君といひけんむかしの人も　この文君を定家卿の本には鄂州にありけん人もかくやおかしかりけんとあり河海に兩説をいたされなから鄂州はなを物語の心に叶へりと注せられたりうりつくりの歌をうたふを源氏の立聞給ふは鄂州の女のうたふを樂天のきゝしには似たるやうなれとかの鄂州の女は十七八の物と見えたり源内侍のすけはさたすきたる齡也すこふるなすらへかたく侍るにやこれによりて愚意には文君猶たよりありて思侍りその故は卓文君としよりて司馬相如にすさめられて白頭吟と云歌をつくれり相如これを見て哀と思ひけるにや源内侍のすけも年よりて人のもてなさぬうらみありしによりて物語の作者文君をひきよせてかきたるへし

たちぬるゝ人しもあらしあつまやにうたてもかゝるあまそゝきかな　うたてはうたゝなり轉字也

人つまはあなわつらはしあつまやのまやのあまりもなれしとそ思ふ　内侍のすけは修理太夫かよふと聞給ひて人つまとはよみ給へる也

君はそらねふりしてとけてもねられぬ頃なれは　藤壺の御事を思ひ給ふ頃也

おこになりぬ　おこ／＼しくなるなりあなつらはしくなる心なり

うへにとりきはしるからんといふ　ほころひたるなをしをうへにきはうき名はかくれあるましき心也

あらたちし浪に心はさはかねとよせけん磯をいかゝうらみぬ　よせけん礒は頭の君にたとふうらむへくはその人をそうらむへき我か心は更にさはく事もなかりしと也

帶は中將のなりけりわか御なをしよりは色ふかしと　聽直衣人むかしは直衣のきれを帶に用たるなり今の世も主上の御帶は御引なをしのきれを用給ふ夏の直衣は二藍或花田を年によりて着す源氏は宰相中將うす二藍の色なり頭中將は年はまさりたれと

官ひき丶によりてこき二藍の直衣を着用すへし官のたかきは宿老の色を用ひ官のひき丶はわかき色を用るならひ也藤裏葉の巻に夕霧宰相中將のなをしの事源氏の君の給ふとて非參議のほとなにとなきわか人こそ二藍はよけれとの給へり非參議とは二位三位なとの中將をいふすてに夕霧は八座に昇進し給ふこととなれは花田のなをしをき給ふへきといふ心也榊の巻に源氏の帶をうす二あひなる帶の御そにまつはれてとあり今頭中將はこき二藍なれはわか御なをしよりは色ふかしといへる也近代直衣の帶に下襲の色をもちふ禁色人冬蘇芳（面白瑩裏濃打綾）夏蘇芳（遠單文生）四位以下非參議人冬躑躅（面白瑩裏濃打平絹）夏二藍穀おほかた今も直衣をきるほとの人はなをしの色を用ゐなをしきぬ人は下かさねの色を用へき事なるをなをしきる人の下襲を用るは略儀とそ覺え侍る

これまつとちつけさせ給へと　源氏の直衣のはた袖なり

中たえはかことやおふとあやうさに花田の帶をとりてたに見ず　石川のこまうとにおひをとられてからきくゐするいかなる帶そ花田の帶の中はたえたる（催馬樂呂石川）今案帶を人にとられたるは石川のうた便りあり又あつまちの道のはてなる常陸帶のかことはかりもあはんとそおもふとあれは帶にかことはよせあり但常陸帶のかことは少事の心也今の歌のかことはかこつ事と覺え侍り中將の帶はまことはこき二藍なれ共歌には花田の帶とのみよみならはし侍るうへ石川のこまう人にとられしもかた／＼其たよりありて覺侍りすなはち中將の返歌にも君にかく引とられけるといひかくてたえぬる中によめるも石川の曲を思ひよせたりときこえ侍り中將の返歌は內侍のすけとこれも知人なるによりてうけふしたる心なり

おほやけこととしけくそうしくたす日にて　頭中將貫首たるによりて宣下の事ともうけたまはるをいふなり

まことはうしや世の中　古歌の詞あるへし尋ぬへしとこの山なるとかたみにくちかため給へり　人の問ともしらぬよしをこたへてうき名をもらすなといへるは口かためたる心なり

おとしくさ　しせんのときおちあたるたねにせんと
いふ心なり
十月にそきさき居給ふめりし　藤壺の女御中宮に立
給ふ事なり
御こしのうちも思ひやられて　中宮の行啓には鳳輦
にめさるゝ事もあり又庇さしのいとけの車に乘給
時も有なり供奉人の行粧も乘物によりてかはる事
侍るなり
つきもせぬ心のやみに暮るかな雲井に人を見るにつ
けても　心の闇は若宮の御事を思ひ給ふ心なるべし

五　花宴

此卷は詞をもて卷の名とせり但卷の詞には南殿のさくらのえんせさせ給とありておくに二條のおとゝの藤の宴の所に藤の花のえんし給ひけりとあれはこれにつきて卷の名を花のえんといへるにやと覺え侍れとも古來花の宴とは櫻をもてあそふことをいひならはし侍るうへこれは禁中のことなりかれは私家の宴なれは猶南殿の櫻の宴をもて名目とせりと心得へきなり國史云弘仁三年二月幸神泉苑覽花樹命文人賦詩賜綿有差云々花宴の濫觴なりことし源氏の君は十九歳官宰相中將正三位なり
きさらきの廿日あまり南殿の櫻のえんせさせ給ふ
桐壺の御門を醍醐の帝になすらへ奉るにつきてかの御宇に花の宴行なはれしは延喜十七年三月六日常寧殿花宴詩題春夜翫櫻花延長四年二月十七日清涼殿花宴詩題櫻繁春日斜此兩度の例にはすくへからす皆探韻作文御遊の事あり延喜の常寧殿の花のえんも宴席をは清涼殿にてひらかれしなりこの物語の花の宴も南殿の櫻を御覽有て宴をは清涼殿にかへらせ給ひておこなはるゝ事と心得へきなり但南殿のさくらを御覽の事は村上天皇康保二年三月植櫻樹於南殿有花宴詠古詩誦新歌云々此時は探韻なとはなかりしか共南殿の櫻を御覽の例也又醍醐の御世の後の事なれと准據には引用へきにやさては朱雀院の天慶四年三月十五日仁壽殿花宴題花樹暮雲深云々これも宴は清涼殿にてあり次にこの物語の花のえんは桐壺の御門の末の年なりきさらきの廿日あまりなといへるわたり延長四年二月の宴をおもひよせてかけるにやとそおほえ侍る
そのみちのはみなたんゐん給はりてふみつくり給ふ

先第一の儒者奉レ仰献レ題次書ニ韻字ニ盛ニ中坃ニ置ニ
庭中文臺上ニ近衛次將先探ニ御料韵二字ニ置ニ莒蓋ニ
昇レ自ニ御前階ニ献レ之次ニ王卿搓（ホトリ）ニ属文ニ者文人等各
進ニ文臺頭ニ探ニ一字ニ見レ之奏ニ官姓名及所レ探字ニ也
今案探韵は各分一字詩也ことく〳〵韻字かはる也
故懐紙端作云春日同賦春夜翫櫻花各分一字應製詩
探得其字　如此書之へきなり

宰相中將春といふ文字給はれりと　花の宴の詩に春といふ韻の字はあひにあひたる事なり　源氏の君の榮花の春を思ひよせていへるなり

をくしかちにはなしろめるおほかり　をくは臆病の心なり人のをくしたる時はよそへ目かくはられすしてかならす鼻のうへかしろ〳〵と見ゆるなり

樂ともはさらにもいはす　花の宴には御遊はかりにて舞樂はなし但天曆三年三月十一日二條院花宴陽成院事也同月十二日内裏仁壽殿花宴各有舞樂即奏春鶯囀又地下伶人はかりにて殿上の舞はなき也この物語のならひ面影もあれはあるよりあをくかきなしたるなり

これはいますこしすくして　頭中將はいさゝかひさしく舞侍る事なり

珍しき例に人おもへり　花宴の日殿上の舞又勅祿を給ふ事なと珍敷例なり

詩ともかうするに　詩を披講する時は庭中にたてたる文臺をかきて御前にたてゝ文人ともは階下にすゝみて講頌するなり

かたちふへきとくち　藤つほの御心しりする女房王命婦なとの事なり

こきてんのほそ殿にたちより給へれは三のくちあきたり　三の字はこゑによむへしこきてんのほそ殿の戸三あり第三の間にあたる戸と云心なり河海にいへる相違なし

ことはりやきこえたかへたるもしかなとて　きこえたると云詞は源氏の君のおもひ給心むけを女の聞たかへてひとへになのらすはとふましきに取なして草の原をはとはしとやとよみ給へる也源氏の心ははしめよりさにてはなし問ふへき事はとふへけれともなほ露のやとりをたとらんほともてさはかれむ事のうしろめたかるへきによりてたしかになのり給へとはいへるなりしかなとてはしか〳〵の

いはれにてあるといふ心を下の歌にのへ給へり小さゝか原に風もこそふけはつゆのやとりをもとめうしなふへきいはれ也わつらはしくおほす事なくはと下の詞にかきつゝけたるは二條のおとゝのわたりわつらはしかるへき事を小篠か原の風にたとへたるへし河海の説いまたいひおはせす水原等には一向に手もつけず此物語はかやうの詞をよく〳〵思ひわくへき事なり

あふきはかりをしるしとにやとりかへていて給ふ

和泉式部假名記かへる人の扇をとりかへてとかけり又東坡詩云換扇惟逢春夢婆とつくれり春夢婆は女の異名なり唐土には夫婦の約をなすしるしには扇をとりかふる事あるなり

六の君は春宮にたてまつらんと　朧月夜は則六の君なり

まつかのわたりの御ありさまの　河海にはあふひの上の事と釋し侍れとあふひの上は室家の事なれはいふに及はす藤つほの中宮の事をいふにやそれもたゝならねとその中にもおくまりたる心むけはみゆへきなり

その日は後宴の事ありて　後宴と云名目は男踏歌の後二三月に弓の結ある事をいへりそれを花のえんに取なし侍るなり

かのありあけの人いてやしぬらん　朧月夜の君なり心もそらにておもひいたらぬくまなきなといへる詞有明の月に縁ある事とも也

きたのちん　中重の北の陣は玄輝門の方也

こきてんの御わかれに　御わかれとは内より退出し給ふ事をいへり

ひめ君いかにつれ〳〵に　紫の姫君の事なり

かのしるしの扇は櫻の三重かさねにて　手習卷云かみは五重の扇をひろけたるやうなり　今案櫻のうすやうおもてしろくうらすわうなりこきかたにかすめる月をかきたるはこき紫の雲をかきて月を出したるにや

よにしらぬ心ちこそすれ有明の月の行衛を空にまかせて　靑水僧正の歌あり明の月の行衛をなかめてそ野寺のかねはきくへかりける此歌をとりてよみ給へる也源氏をは詞をも歌をもとりてよむへき事也後成卿も源氏見さらむ歌よみは無念の事といへり

又花のえんの卷はことにすぐれて艶なる卷とも申
給へり
やはらかにぬる夜はなくてとうたひすさみつゝ　貫
河の歌の瀬々の手枕は浪まくらをいへり浪はあら
き物なれはやはらかにぬる夜はなくてといへりあ
ふひの上の事をたとへてうたひ給ふなり下の詞に
おとゝわたり給へりと書つゝけたるはおやさくる
つまと貫河の曲にあるをおもひよせて書たるへし
一日の事とものけふありし　花の宴の事なり
ふみともきやうさくに　今の文の還迹(キヤウサク)の二字をは形
迹と釋せり人の行跡のすぐれたるをいへりこゝの
詞のきやうさくも文とものすくれたる心にいへる
にや又還迹はおもひやるといふ心にも用たり推察
と云詞に還迹ともかく也それも人の行跡をみてぬ
しの賢否をしる心になれは心は通する也おほかた
心得にくき詞なりたゝ心をやりてみるへき也
おきなもほと／＼まひ出ぬへき心ちなんし侍りしと
頭中將なとまひしにつきて父のおとゝもまひたき
心のありしと也猶別にしるす事あり「殆(ホト／＼)(ホトンド)」
ましてさかゆく春に立出させ給へらは　とても事

おとゝの立出給て袖かへす處をものこしたまはま
しかは一しほめてたく後代の例にも成ぬへきと申
給ふこゝろなり
やよひの廿餘日右のおとゝの弓のけちに　二條のお
とゝにて小弓あそひありて其結に藤の花のえんせ
られし也圓融院御集弓結の比宮にわたらせ給て弓
はりの山のはさしているときはあやしく物そかな
しかりける　返し宮　さとならて弓張なから入月
は山のはにたにたちとまらなん
やかて藤の花のえんし給ふ　おほやけことになすら
へて右大臣の第にて藤の花の宴あり又天暦三年四
月十二日飛香舍藤花宴には和歌管絃等あり
外のちりなんとやをしへられたりけん　古今の歌に
見る人もなき山里の櫻花ほかの散なん後そさかま
しとよめるは花にいひをしへたる心なれは歌の詞
になき事をも心をとりてかくかけるなり定家卿の
歌はおほくは此物語よりいてたりとみえ侍りいこ
ま山いさむる嶺にゐる雲のうきておもひのきゆる
日もなしとよめるは本歌の雲なかくしそといへる
は雲をいさめたる心なれはやかていさむるみねと

心をとりてよみ侍るなりこゝの詞に相似たるやうなれはよりもつかぬ事なれど筆の次に申侍る也大方源氏なとを一見するは歌なとによまんためなりよまんにとりては本歌本説を用へきほとをしらすしてはいかゝと思給へ侍れはいときなき人のためにしるし付侍るなり

さくらのからのきの御なをし　御幸巻云六條院はさくらのからのきの御なをしいまやう色の御そひきかさねてしとけなきおほきみすかたいよ〳〵たとへんかたなし今案此物語に二所におなし御よそひの事をかけりからのきは地のいろはなにゝても文はいろ〳〵のいともしは一色にてもおりたる物也から織物二重おりものゝことし唐装束とて着する事ありそれは下かさね上のはかまなと唐の綺をもちゐるなり櫻のからのきは面しろきからのきに蘇芳のうらをつけたる物なり

しりいとなかくひきて　しりは裾なり裾は衣のすそを云なり西宮云上﨟直衣ノ下ニ着ニ下襲ニ隨レ便不ニ常事ニ云々今案袍に下襲をかさぬるをは布袴(ホウコ)と云上下用之事也直衣布袴は依レ時依レ人事也帶は丸鞆也或は皮帶ともいへり晴時は着ニ蒔繪野太刀ニ云々

あされたるおほきみすかた　御幸の巻にしとけなきおほきみすかたとありしからはあされたるもしとけなき心にや常の袍に指貫を着して裾を引はよのつねの事也直衣に裾をかくるはしとけなき出立とも云へしあされたるはされたるといふもその心たかはさるへし大きみは王の字也大人の姿なと云心也又直衣姿を則大きみすかたと云説有

ふさはしからすまつ藤つほわたりおもほしいてらる　榮花物語に枇杷殿妍子三條院后道長公女の大饗に女房の袖口こと〳〵しくいたされたるをは小野宮右大臣實資公は難せられし事あり今の物語にもこうきてんの女御のかとめい給へる御かたにて袖口とも目に立はかりいたされたるを源氏の君はふさはしからすおもひ給て藤つほわたりにはかうやうにこと〳〵しくはし給はぬものをとおもひあはせ給也

かしこけれとこの御まへにこそはかけにもかくさせ給はめ　伊勢物語のさく花のしたにかくるゝ人おほみは業平中將行平中納言のもとにてかめにさした

る藤の花をよめるといへり心は忠仁公良房の藤氏のさかへをおもひよそへてよめるよし詞にみえたり故にいま二條のおとゝを忠仁公になすらへてかけにてそかくれさせ給はめと源氏の君のの給へるも藤のはなにかけたる詞なり

よからぬ人こそやむ事なきゆかりはかこち侍るなれ　こきてんの御腹の女一の宮女三の宮なとは皆源氏の姉妹にてましますなりいやしき人こそしたしきゆかりをはかこち侍れといふ女房もありと也

あふきをとられてからきめを見るとうちおとけたるこゑにいひなして　源氏の君の扇のぬしをしらんためのはかりことに石川のこまうとにおひをとられてからきくひするとうたふをあふきをとられてといひかへたり扇のぬしをやかて心得へき也

あやしうもさまかへたるこまうとかなといふは心えぬ人なるへし　いはれをしらぬ人はうち聞て源氏の君のいひあやまり給へるそとおかしくおもひてさまかへたるこまうとかなととかめたるべし

いらへはせてたゝ時々うちなけくけはひなるかたによりかゝりて　扇をとられたる人ははや聞しりてうちなけくけはひは色にあらはれたる也源氏の君はいひすましたると思ひ給ひてその人のかたによりゐて歌をよみかけたまふなり

あつさ弓いるさの山にまよふかなほのみし月のかけやみゆると　弓の結の句あれはあつさ弓いるさの山とはいへりほのみし月は有明の影のほそとのゝ戸口を思ひ出したる心なり

心いるかたならませは弓はりの月なき空にまよはましやは　此はやよひの廿日あまりなれはやう〳〵ゆみはりの月になる比なりまよふと云は心にいらぬゆへにこそあれと源氏のうたの中の五文字にかゝりてうらみたるなるへし

いふこゑたゝそれなりうれしきものから　草の原をはとはしとや思ふといひしその人のこゑと聞なせり嬉しき物からの結語の詞おもしろく書なせりかつ〳〵うれしくはあれともいまた六の君とはたしかにしらぬ心をふくませたり

花鳥餘情第六　葵

六　葵

歌をもて巻の名とせり源氏二十一二歳の事此巻にみえたり花の宴は源氏十九の時の事をかけり故に二十歳のことは物語にかけたるなるべし舊説に此巻を花宴の同年の事にいへりこれにつきて六の疑あり一疑云二條大臣の藤宴は三月下旬の事也此巻の齋院の御禊は四月也兩月の間いくはくの日數もなし然るに朱雀院の受禪冷泉院の立坊源氏の君の任大將齋院齋宮の卜定等條々の事いつの間にをこなはるへきそや二疑云花宴巻には源氏宰相中將年十九也もし同年ならば源氏十九歳にて大將に任し侍るへししかるに若菜の巻に二十に一あまりて宰相にて大將兼給といへる彼巻の詞に相違あるへし三疑云花宴年は紫上十二也あふひの巻に新枕の事あり十二歳にて夫婦のふるまひあるへき事おほつかなし醫書には女子は十四にて始て天癸いたれは男事ありと見えたり天癸とは月の事を云也四疑云花宴の年は冷泉院二歳也身つくしの巻に春宮にて十一歳の時御元服ありとみえたれは二年の不足ある也五疑云齋院の御禊は二度あり初齋院に入給はんとて御禊あり又紫野の野宮に入給はんとて御禊あり此巻の御禊は二度の禊也其證これおほし然れば初度の禊同月にあるへしや同月の事はその例なき故也六疑云伊勢齋宮も一代に一度立かはらせ給秋好中宮の齋宮に立給事は朱雀院受禪の後の事也其に此巻に齋宮はこそ内へまいり給へかりしをさま〳〵さはる事ありて此秋入給とありされは朱雀院の御ゆつりをうけ給事は葵の巻より以前の事と知るへし此六ヶの疑にて源氏の任大將は二十一としの事とさため侍る也

世中かはりて後よろつ物うくおほされ御身のやむ事なきもそひ給へは

世中かはるとはきり壺の御門の御位を朱雀院にゆつり給事也この事花の宴の年ならすは去年の事なるへし但紅葉の賀の巻に御門おりゐさせたまひなんの御心つかひちかくとあれは去々年花のえんの後夏秋の事たるべきにやよろつ物うくとは藤つほの中宮のひたすらたゝ人のやうに院にそひさふら

ひ給へる事をいへり御身のやむ事なきとは大將になり給事也かる〳〵しき御しのひありきも憚あるへきゆへ也

われにつれなき人の　藤つほの御事也

いまきさきは　朱雀院御位につき給ふゆへにこきてんの女御を皇太后宮と申也

春の宮をそいとこひしく　冷泉院を春の宮と申事こゝにはしめて見えたり立坊は受禪の後の事なるへし

大將の君によろづをきこえつけさせ給へば　源氏の君を大將といふ事この卷よりはじまる也大將は參議より丞相までも兼帶する職也源氏は此時參議の大將也

前坊の姬宮　前坊とは東宮を辭退し給ふを申小一條院なとのことし坊とは東宮を稱するなり秋好中宮は前坊の御むすめ母は六條御息所也齋宮卜定は去年の事なるべきにや此秋野の宮に入給よし見えたり則又明年は群行の事あるべし

まづけしからぬ心のおほけなさを　藤つほの中宮にまいりかよひ給し事なり

女もいとにけなき御よはひのほと　御息所は二十九源氏は二十一これをにけなきと云也

あさがほの姬君

源氏の君につゐになひき給はぬ人なりさるから又はしたなくなとはあらぬ御もてなしを人にはことなると源氏の君もほめ給へる也

とにつけかくにつけ　まつとかくといふ詞は兎の角とかけりうさきの耳をつのといへるよりはしまれりそれよりしてとにかくにとするもかくするもとてもかくてもなといふ詞は出來れる也

心くるしきさまの御心ち　あふひの上のつはりの事なり

かやうなるほどにいとゝ御いとまなくて　これは六條御息所へいとゝとたえおほかる事をいへり

その比齋院おりゐ給てきさきはらの女三宮ゐ給ぬ

延喜式云凡定齋王畢即卜宮城內便所爲初齋院即先臨川頭秡潔禊乃入又云齋王於初齋院三年齋畢其年四月始將參神社先擇吉日臨流秡禊云々即廻歸便留野宮又云凡齋王每年四月中酉日參上下兩社祭　今

案賀茂の齋院は卜定ありて後東河に臨み給て御そぎの事ありてすぐに初齋院に入給初齋院とは大内の中大膳職或左近府なとを點してそれにて三年潔齋の事ありその年の四月に御社へ參り給はんとて祭のまへに吉日をえらひて又御はらへの事あり則紫野の野宮に入給ふこれを二度の禊と云さて中の酉の日賀茂社へ參り給て祭事にしたかひ給ふ事也毎年の御禊はかならす午の日これを修する也今女三の宮は桐壺の御門の御讓國の後卜定ありて初齋院へ入給ふへし初度の禊の事は此物語にみえす今此卷にいへるは野宮へ入給はんとての二度の御禊をいへりその故は初度の禊には勅使參議一人供奉す二度禊には大納言中納言參議以下あまた供奉す毎年の禊には公卿一向に供奉せす此卷云御けいの日上達部數さだまりたる事なれとかたちあるをえらせ給延喜式に二度の禊の勅使には大納言中納言各一人參議二人四位五位各四人すへて十二人の勅使也これを數さたまるとはいへり源氏の大將は參議二人の中なるへし是をもて是をいふに此卷にいへるは二度の禊うたかひなきもの也河海なとにも分明ならさるによりてくはしくしるす也

したかさねの色うへの袴のもんむまくらなとまて

御禊の日の勅使公卿は染裝束を着す馬にはから鞍或倭鞍を用ふ杏葉をつくる也

大將の君つかうまつり給ふ

國史云貞觀三年四月十二日丙辰賀茂齋内親王臨二鴨水一修レ禊是日使入二紫野齋院一勅二大納言正三位兼行右近大將源朝臣定一監二禊事一云々齋院御禊に大將供奉の例也

御前　地下の前駈也

あしろのすこしなれたる下すたれのさま

凡車は唐庇檳榔庇毛車等はみな檳榔をもてふく尼(アマ)眉(マユ)半蔀網代等にはみなあしろをはれり今御息所のあしろはいつれとさためかたし但尼眉にはあを末濃の下すたれをかくあしろの車には下すたれをかけすといへとも女房の乘用するには八葉の車にも下すたれをかくることに侍れはいつれにても相違なかるへし少しなれたるとはちとふるひたるをい

ふなり
ほのみゆる袖口ものすそかさみなと
唐きぬに裳をきるは下仕まてもきる也かさみは童女のきる物なり
かうけ　豪家也けんもんふりするをいふ也
人またひ　出車をは公方より點せられてその人に給ゆへに人給と名つくる也枕草子云所もなくたちかさなりたるによき所の御車人たまひひきつゝきておほくくるをいつくにたゝんとすらんと見るほとに御前ともたゝおりにおりてたてる車ともをたゝのけにのけさせてと云々
さゝのくまにたにあらねはや　かけをたにしはしみんとおもへともさゝのくまにたにあらねはつれなく過給ふと也下の御息所の歌にかけをたに見たらし川のつれなきにとあり
目もあやなる御さまかたち　目もあやはうつくしきものゝ文をみるやうの心也
後拾遺俊頼歌　紅葉はゝ錦とみゆと聞しかと目もあやにこそ今朝はなりぬれ此目もあやはめもあやなき心也紅葉のちるをいへりそのことゝみかはるへし
大將のかりの隨身殿上のそうなとのする事はつねの事にあらす珍しき行幸なとのわさなるをけふは右近藏人のそうつかうまつれり　この事第一の難義なり諸抄にもたしかならすまつかりの隨身と云は一員ともなつくる也近衞の將監將曹府生を一人つゝかりそめにめしいたしてつるゝ事を云也職によりて隨身をたまはるはかきり有て出仕のたひによのつねめしくする也その外時にしたかひて一人つゝめしわたすをかりの隨身と云也假令納言の大將以下は左は左右は右の番長一人近衞五人すへて六人の隨身をゆるされてめしくする也其うへに拜賀なとの時は將監將曹府生を又一人つゝ具するを一員ともかりの隨身とも云也いつれもみな地下のともからなり藏人のそうとは殿上の藏人の將監をいふそれを一員に具する事は例なき事也又行幸の時は左右近衞將監將曹は本陣に供奉するによりてわたくしの一員にめしわたす事もかなはぬ事也此一段の詞心得かたき事也へつになをしるすへし

てをつくりてひたいにあてつゝ
宋朝に司馬相如といひし君子の洛中に入し時はこれをみるもの手をひたいにくはふと云事通鑑といふ書にみえたり
式部卿の宮　あさかほの姫君の父宮なり
齋宮またもとの宮におはしませは榊のはゝかりにことつけて　延喜式云凡天皇即位者定伊勢太神宮齋王仍簡内親王未嫁者(若無内親王者依世次簡定女王ト之)訖即遣勅使於彼家告示事由神祇祐以上一人率僚下隨勅使共向卜部解除神部以木綿着賢木立殿四面及内外門　今案秋好中宮は去年ト定ありていまた諸司へ入給はす本の宮にまし〳〵て神齋し給ふを云也さかきのはゝかりとはこれを云也
うきもんのうへのはかまにかゝれる　西宮云女親王對面總角者着汗衫半臂下襲表袴玉帶等又齋宮齋院童女總角青麴塵汗衫半臂下襲青袴白柳帶　今案童女は晴の時は打袴のうへに表袴をきるうきもんは窠霰也よのつねにはうへのはかまをはきす
はかりなきちひろのそこのみるふさのおいゆくすゑは我のみそみん　うつほ十一云かみのうつくしきことみるをつくりつけたるやう也
ちひろともいかてかしらんさためなくみちひるしほののとけからぬに　源氏の君のちひろといはひ給につきてさためなき御心をみちひるしほにたとへてちひろのうみともさためかたきとよみ給へりいつしかにくき御心なりかし
むまはのおとゝの程に　おとゝは乙殿屋とて左右の馬場にあり五月の騎射の時中少將の着座する所也賀茂の祭大内の時は北の陣はてゝ一條を東へとをるによて左近の乙殿のほとを渡る也
しめのうちにはとあるてを　しめのほかと云事あれは注連の中もあるべきなり
かさしける心そあたにおもほゆるやそ氏人になへてあふひを　後撰第四賀茂の祭の日物見侍ける女の車にいひ入て侍ける行かへる八十氏人の玉かつらかけてそたのむあふひてふなを返しゆふたすきかけてもいふなあた人のあふひてふ名は御そきにそせし
くやしくもかさしけるかな名のみして人たのめなる

草葉はかりを　あふひは人たのめなる草の名なるべし

人とあひのりてすたれをたにあけ給はぬを　榮花物語彈正宮和泉式部とひとつくるまにて祭見給ふ式部かかたのすたれおろして紫の紙の物忌を侍たり　今案榮花にいへるは前のすたれをはあけたるなるへしそれは車の中に几丁の帷をかくるによりてくるしからさる也

つりするあまのうけなれや　御息所伊勢へくたりやしなましと思案し給所につりするあまのうけなれやと書るたよりありておもしろし心ひとつを思さため給はぬ心也御心ちもうきたるやうにとあるもまことのうけのやうなるへし又下の詞にさためかねたる御心とありみな一首の歌にかゝれる詞也

みそき川のあらかりし瀬に　車あらそひの日のこと也

さはいへともやむことなきかたは　さはいへともの詞は上におほい殿にはかくのみとにつけかくにつけさま〱にさためなき御心のやまぬ御くせをといへる詞にかゝれる也さはいへともあふひの上をはさすかやむ事なき事にはおもひ給ふと云心也

人にもさらにうつらすたゝみつからの御身につとそひたり　これは御息所の生靈なりよりましにもうつらぬなりひとはいかにもかゝるなからひにはなさけあるべき事也まめやかにみそきのあらかりしよりかゝる怨靈に成給へる也

かゝる御物おもひのみたれに御心もれいならす　これは御息所の御心もれいならさるによりてもとの宮はさかきのはゝかりもあれは外へわたりて御いのりなとし給なり

うちとけぬあさほらけ　御息所よりかへり給ふあしたなり

袖ぬるゝ戀路とかつはしりなからおりたつ田子の身つからそうき　こひちは泥をひちといふにつきたる詞也さてそてぬるゝともいへり田子もいやしき人也さなへなととりて泥中におりたつものに御息所の我身をたとへたまふなり

山の井の水もことはりにとそある　山の井の水はあ

さき契のたとへ也源氏の御心さしのあさきはこと
はりなりと御息所の述懐し給也
あさみにや人はおりたつ我かたは身もそほつまてふ
かきこひちを　源氏の返事也さなへとる田子は泥中
のあさきにおりたつものなり身もそほつまては山
田のそうつをぬるゝ心によめり是は身もひたるは
かりの戀路とよみ侍り心言葉たくひなく覺え侍り
この御いきすたまちゝおとゝの御らう　ちゝ大臣は
御息所の父君の死靈をいふなり
おほしつゝくれは我身ひとつの憂なけきより外に
これよりは御息所の心中をかきたる也
いと名たゝし　名にたつへき事也
齋宮はこそ内に入給ふへかりしを　大内のうちに左
衛門のつかさに入給へきをいふなり
二たひの御はらへ　齋宮諸司に入給はんとても又野
宮に入給はんとても東川にて御禊の事あり是を二
たひの御禊と云なり但群行の時の御禊は西川にて
ある事也
またいかなりともかならすあふせあんなれは　來世
には夫婦は行めくりあふ事をいへり
物おもふ人のたましひはけにかくあくかるゝ物にな
ん　後拾遺物思へは澤の螢もわか身よりあくかれに
ける玉かとそ見る和泉式部
宮御ゆもてよせ給へるに　榮花物語に一條院の母東
三條院にわかれ給へる事をいへるにいとゝおもほ
しいらせ給てつゆ御ゆをたにきこしめさすとあり
御ゆとはおもゆの事なるへし
宮のつとおはするに　あふひの上の母宮也
あまりわかひてもてなし給へはかたへはかく物し給
そ　大宮のあふひの上をおさなき人のやうにし給は
とにそれにしたかひてかたへの人々もかゝるよし
の給也
物にそあたりまとふ　此詞榮花物語にもありはしら
にも又人なとにも行あたる心なり
いともはかなき御かはね　遺骨の事也
こきあをにひのかみ　花田にあをけのましれるいろ
なり
きこえぬほとはおほししるらんや　ひとのなけきは

とふにつらさのまさるやうなれはきこえぬとなり

紫のにはめるかみ　花田にわかはなの人たる色なり

にはめるはいつれも服者のもちゐる色なり

つゝましきはとをさらはおほししるらんやとてなん

つゝましきははゝからはしきこゝろ也これよりも聞えたく侍れとおりふしからはゝからせ給へきををしはかりて聞えぬと也

よろつをおほしけちてよかし　なに事もあたなる世にさのみおほしいりそといふは物のけに入給ふ事をほのめかしたる詞也

御らんせすもやとてたれにもときこえ給へり

齋宮の御きよまはりのをりふしなれは穢所の文はよも御らんせしたれにてものかたへと云心也

こ前坊のおなし御はらからといふ中にも　前坊はきりつほの御門のおなし御はらからなれは齋宮も御門の御ため御めいにておはします也やかてうちすみもし給へとは御息所の事を院の御門のの給し事也

野の宮の御うつろひのほとにも

延喜式云凡齋内親王定畢即卜二宮城内便所一爲二初齋院一祓禊而入至二于明年七月一齋二於此院一更卜二城外淨野一遷二野宮一畢八月上旬卜定吉日臨レ河祓禊即入二野宮一自二遷入日一至二于明年八月一齋二於此宮一九月上旬卜二定吉日一臨レ河祓禊參二入於伊勢宮一今案齋宮はすへて三年の御神事にて其中に三度の御禊あり初齋院へ入給はんとて御はらへあるとし野の宮へ入給はんとて又あくるとし伊勢へくたり給はんとて御はらへある事也野の宮の御うつろひは二年めの八月の事也

かのいさよひのさやかなりし秋の事なん

是は末摘花の事也頭中將の歌もろともに大内山は出つれと入かた見せぬいさよひの月とよみ侍しは春の事也源氏の末つむ花におひ給へるは秋の事也さていさよひのさやかなりし秋とはいへる也

中將の君にひ色のなをしさしぬきうすらかに衣かへして　中將の君は姉妹の服三月いとま廿日也鈍色直衣平絹冬練有裏夏生無裏指貫は夏冬同鈍色は移花にて染也うすらかとは十月の更衣の次に色をうす

くなす也
ひもはかりをさしなをしてこれはすこしこまやかなる夏の御なをしに紅のつやゝかなるひきかさねて

本妻の服も三月也源氏は更衣し給はすにひ色もいさゝかこまやか也忌の淺深によるへき事也ひもはかりさしなをすは夏の紐の損したるによて取かへたるへし更衣は重服の人も兩說ありいはんや輕服は更衣勿論也しかれとも忌によりて更衣せぬも人の所爲たるへし又輕服に紅のきぬを用る事は長保三年二月一日定子皇后心喪に御堂關白張火色下襲を着し給ふよし見えたり政事要略にその子細をしるせり

木葉よりもろき御なみた　俊成卿の歌こゝの詞をとりてよめるにや嵐吹峰の木葉の日にそへてもろくなり行我なみたかな

空の色したるかみ　是も服者の用ゆる色なり

大内山をおもひやり聞えなからえやはとて

大内山はこれも大内の事也そのゆへは左大將の直廬は宣陽門の内の廊にあり右大將の直廬は陰明門の内の廊にあり共に中重の門の内也西宮抄にみえたり槿の姬君の返事はそなたの事をおもひやりたてまつれとも心のうちをはよもしらせたまはしと也心は歌の詞に見えたり

くろきかさみ火さうのいろのはかま　萱草色は柑子色と大略おなしいろあひはすわうにたうさを入てそむるよし見えたりふるき繪なとにはちときいろのましれるなり

空蟬のむなしき心地し給　源氏の君の此程の御曹司を出給へる留守の事をいへり下のてならひすて給へるもみな源氏の事也

なきたまそいとゝかなしきねし床のあくかれかたき心ならひに　（古今）こゑをたにきかてわかるゝ玉よりもなき床にねん君そかなしき

一日の花なるへしかれてましれり

一日前栽にかれ殘りたる花を折て草かれの籬にのこるなてしことよみ給て大宮に奉らせ給しその花の枝の手習の中にましりてあるをいふなり

むもんのうへの御そにひ色の御下かさねえいまきたまへる　無文の袍は夏穀冬平絹いろはつねの袍のことし冠も無文卷纓服者のさたまれるいてたちなり

御さうそくたてまつりかへて　源氏は三ヶ月の服なれは八月より十月までなり今は除服し給ふへきなり

おほしはなちつる年月こそ　をさなきほとのあはれ也しのひかたくなりてとはやう／＼けしきはみたる事なとをいへり

御硯のはこを御丁のうちにさし入て　文を書て硯にそへてをき給ふ則返事し給へといへるこゝろ也

ねのこはいくつかまいらすへからん三か一にてもあらむかし　嫁娶の三日にあたる夜餅を枕かみにをく事はまつはよからぬこと也人の死せる時には世俗にまつ餅を供する事あり枕つくゑといへりそれにかたとる也たとへは女の男のもとへ嫁入しては二たひ父母の家にかへるましきなれは偕老同穴の契と名つけてとつくといふ文字も歸の字を用たるは女は夫の家を我家と思ふへきよし也さて餅を用るもついに男のもとにて身をおへたる心也嫁娶の日しろき衣裳なとを用ゐるもこの故也榮花物語第十三にも此事ありもちゐにやはこのふた御丁のうちにさりけなくさし入れておはしましつる程ものいみすましうあはれに見えさせ給ふ云々これは御堂殿の御女を小一條院にむことり給時の事也三か一を諸抄に三坏一具の心にいへるはあやまれる事也むかしは此餅四坏もりたる故也秘說これあり別にしるすへし

いまはさるもしいませ給へ　いまはに何をきりてさるもしとよむ說あり又一說あり別に注すへし

さてもうちにのたまはせよかしな　うち／＼我等におほせ事あれかし惟光いかゝ思ひけんと少納言かおもへる也

いまきさきは御くしけとのに　御くしけとのは朧月夜の内侍のかみのことなり御くしけとのは內藏寮の外御服なと裁縫する所也しかるへき大臣の女のなる職なり

君もおしなへてのさまにはおほさゝりし　これは源氏の事也

としもかへりぬ　源氏の君は二十二むらさきの上は

十五になり給也

ゐかちに　わかきみのゐみかほなり

私云今そさるもしいませ給へとは紫上と嫁娶の事をあらはにはいはてかくしてさる文字といへるなり我むすめの辨にたいしていへる詞なれは少憚たる也わたく〳〵しく卒爾にいひふらすなといさめたる也わたなる詞はよもましらしとなり前の詞つゝき源氏のふかくはつかしく思ひ給ひてしのひてかくし給よし見えたり如此簡をまはして理を付畢但如何々々先達にたつぬへし

花鳥餘情第七　　賢木　花散里

七　賢木

以詞及歌爲卷名也此卷には三ヶ年の事あり源氏廿二歲の九月より廿四歲の夏までの事をかけり

ひたみちに思ひたち給　ひたみちは直路也

おやそひてくたり給例はことになかりけれと　村上の御女規子内親王天延三年に齋宮にたちて下向し給時御母徽子女王（重明親王女）そひてくたり給へり　いまの物語に六條御息所を徽子女王になすらへて申侍れはこれよりさきに母子あひそひて下向の例なきによりてかくはいへるなるへし

かのもとの殿には　六條京極の御家也

いてやとおほしわつらひなから　御息所の御心也

物はかなけなるこしはを大かきにて　延喜式に大嘗宮垣は拵柴爲垣由みえたり齋宮の野宮もこれに准すへし

くろきの鳥井　くろきは皮つきたる木をいふへし河海の次說を用へし

ひたきや　火炬小子二人あり山城國葛野郡の秦氏の童女をとる由延喜式にみえたり

あそひはやめて　上の詞にその事ともわかぬもの丶ねともとあり

かうしめのほかにもてなし給はて　こまの丶物語の四の卷にしめの外と云詞有

かはらぬ色をしるへにて　（後撰）ちはやふる神かき山の榊葉は時雨に色もかはらさりけり　（賀茂女集）ときはなる松にし心なれきなはかはらぬ色もいまはたのまん

ことさらにつくりいてたらんやうなり　三秋末晚之候五夜將明之天別緒依々之情虫聲切々之恨遣逢斯時ことさらに作出たらんやうなりといへり

曉のわかれはいつも露けきをこは世にしらぬ秋の空かな　（朗詠）曉のなからましかは白露のをきてわひしき別せましや　（同）大底四時心惣苦就中腸斷是秋天

わりなき御心まとひともには中〳〵ことゆかぬにや　水原抄にはなか〳〵ことゆかぬと云詞は御息所の

返歌なきを云と云々此條いかゝと覺え侍りわりなき御心まとひともといへるは御息所一人の事とも聞え侍らすそれに源氏の君の歌は二首ありて御息所の所詠一向になかるへき事おほつかなし野宮の庭のたゝすまひあさちか原になきかはしたる虫のこゑさして思ふ事なき人成とも聞すこしかたけなるをましてわりなき御心ともにはいかなる秀逸もいてきぬへき事なれと思ふやうならぬ御口つきを中〳〵ことゆかぬとはかけるとそ覺え侍る歌よまさる事をいへるとはとりをきかたきやうにおほえ侍りいかゝ

大かたの秋のわかれもかなしきにねなゝきそへそ野への松むし　これは御息所のうたなるへし源氏の歌ならは二首なから秋のわかれをよみ給へらん事物せはきやうなりあかつきのわかれとあるに秋のあはれと對せられたれは誠に贈答とこそ聞え侍れ御息所の御下りは人やりならぬ事なれは今さら又別れのかなしきとはいかゝよみ給ふへきなれは大かたの秋のわかれもかなしきにとてさしあたりたる離別をは詞の中にかくされ侍るこそ心ふかくむねとをくは覺え侍れ愚意の及ふ所を聊しるし侍り後のあさけりをまねくなるへし

くやしき事もいとおほくおほさるれと　これは源氏の心をいへり

世の人は例なき事とのみ　おやそひてくたり給ふ事也上にしるせり

十六日御はらへし給　齋宮群行の日は西川にて御禊の事あり幄の屋にて中臣御麻を奉る事ある也

ちやうふそうしなと　延喜式云凡齋內親王臨行預定監送使參議一人（或以中納言充之）辨一人史一人六位以下官八一人西宮云大臣着陣定御前大中納言各一人參議二人四位四人已上勅使中納言參議各一人四位六人長送使中納言若參議辨史中務丞各一人已上奏聞下外記云々仰式部云々今案群行の日御前と勅使とは河原迄供奉して歸參す長送使は伊勢まてしたかひ奉て上洛の時弓場殿にすゝみて事ゆへなく御下着の由を奏聞すれはきこしめされたる由職事して仰らるゝ事也

かけまくもかしこき御前にとて

宣命の詞掛畏

いとさはかしきほとなれと御返りあり宮の御返りは女別當してかかせ給へり　いとさはかしきほとなれと御返あるは御息所の御返事をいふ也さて宮の御返りは女別當かくといへり齋宮の女別當は延喜式にみえたり

みやす所御こしにのり給へる事につけても

齋王のいとけなくおはしますときは御乳母いたきたてまつりて御こしにのる事也いまの齋宮は十四になり給へとも母御息所そひてくたり給によりて同輿にてうちへ參り給也幼主の行幸の時母后の御同輿ある例になすらふへきにや御こしは葱花とて鳳輦にてはなくて一もしのたうをかねにてうちたるを御輿のむねにすふる也是は神事のときめさるゝ御こし也主上は御禊の行幸或は諸社行幸なとに乘御あり齋宮群行の日八省への御こしも則葱花を用らるゝ也

十六にてこ宮にまいり給て廿にておくれたてまつり給ふ卅にてそけふ又九重をみ給ひける　年記を勘へ侍れは御息所は十六にてこ宮にまいり給て十七のとしやかて秋好中宮をまうけ給へるなり廿の年前坊にははなれ給へり源氏の君十二のとしの事也朱雀院の立坊は源氏四歳のときなりそれよりさきの東宮にてまし〳〵しによりて前坊とは申侍り保明太子小一條院なとの例也

みかと御心うこきてわかれのくしたてまつり給ほといみしうあはれにてしほたれさせ給ぬ　其儀齋王西川に出給由をきこしめして天皇八省に幸して先大極殿の後房小安殿(コアドノ)におはしまして常の御衣をぬきて帛の御裝束にあらため給て大極殿に出給て高御座の東の御座にひんかしむきにつき給中臣御麻をたてまつる事ありてそのゝち五位藏人をもて齋王參り給ふへき由を仰す齋王の御こしは嘉喜門より入て大極殿の北の壇上にて輿よりおりて則東北の戸を入て南西の座に着し給齋王はうすものゝ地すりの唐衣目そめの裳をき給て玉のかつらをかけ給ふいとけなきによりてかみあけをばし給はす女房几帳をさすいとけなき時は御乳母いたきて座に着す次に天皇とねりを二聲めせは少納言版位にすゝみつきて中臣忌部をめす南氏次第にすゝみよりて

御簪を取て又仰の旨をうけ給はる次に額の櫛の筥をめす藏人頭內侍につけて是をたてまつる內侍御を奉りて內親王すゝみより給ふへき由を申す其時齋王御前へ參り給ふ女房几帳をさして祗候す天皇筥に入たる櫛をとらせ給て齋王の額にさし給て京の方におもむき給なと仰事ありくしの筥をは內侍これを御めのとにわたす此たひは大極殿の東の戸をひらきて壇上にて乘輿ありて昭訓門より出給勅使長送使なともそなたにまちまうけ侍り伴備は藏人作物所に仰せて黃楊（ツゲ）の木にて作らしむなかさ二寸許金銀にて松鶴をまきゑにしたる方四寸の筥に入る也勢多の頓宮にて御額のくしを撤してこの筥に入らるといへり

八省にたてつゝけたるいたし車とも　大極殿をは八省院と云たゝ八省ともいへり八省の本院なる故也朱雀門の內一町に有南限冷泉北限中御門東は東の坊城西は西の坊城をかきれる也八省の東に太政官廳西に豐樂院北に中和院ある也出車は八省の東路にたてつゝけたるへし

二條よりとうゐんの大路わたらせ給ふほとに院のかたはらなれは　齋王乘輿出昭訓門至八省東路南行至郁芳門路東折至美福門南行出東掖門經二條大路東行至京極云々洞院大路は西洞院とも東洞院とも云へし其子細帚木の卷にしるしをはりぬ

ことそきてかき給へるしも御てのいとよし／＼しくなまめきたるにあてなるけをすこしそへたらましかはとおほす　ことそきたるとは草かちなるを云にやあてなるとはあてやかなる正體のもしすかたをいふへし

世をまつりこたんにも　まつりことせんの心也

御位をさらせたまへりと云はかりにてそあれよのまつりことをしつめさせ給へるに　位をさりてなを世の政を行給ふ事嵯峨天皇の御例なり後々の世には連綿なり

おほきおとゝ心いとさかなく　二條右大臣任太政大臣越引入左大臣元慶四年三月右大臣藤原基經公任太政大臣越左大臣源融例也

こそことしうちつゝきかゝる事を見給ふに　こそは

あふひの上の事ことしは又かゝる事也
又さま〳〵の御ほたしおほかり　古今世の浮目みえぬ山路へいらんにはおもふ人こそほたしなりけれ
としかへりぬれとなにのいまめかしき事もなくて世の中しつまれり　天下亮闇の事也
むまくるまうすらきて　琵琶行云門前零落鞍馬稀
さふらひにとのゐ物のふくろをさ〳〵みえす　ことなる事なけれど秘事といひつたへたる事なれはわらはにはしるすに及はす　表
とうくわてんのむもれたりつるにはれ〳〵しうなりて　登花殿は弘徽殿の北にあり梅壺は又登花殿の西にありいつれもみなちかき殿舎なりむもれたるとは此とし月人もすます塵にむもれたる心なり
かものいつきにそん王ゐ給ふれいおほくもあらさりけれと　延喜齋院式云若無内親王者依世次簡定諸女王卜之云々今案此物語のならひ延喜以往の事をは例にひきて延喜以後の事をは今の事に書なし侍り

孫王の齋院に立給事は穆子女王眞子女王の外以往の例なし故におほくもあらすといへる也
はらきたなき　日本紀に黒心とかきてきたなき心とよめり
をしへおこせたるそかし　夜行する近衛に人のをしへてあの局のまへにてこはつくれといへるなるへし
こゝかしこたつねありきてとら一と申也　西宮大將議云宿申事大將以下少將以上宿候之中至其上﨟所申之（殿上及宿所等也）若大將候御前令次將殿上人申宿申官人候由即大將於射場殿及便所令申即乍立與奪（初問多曾卜仰云與之其音微々也）　北山羽林抄云宿申亥子時は左陣毎刻夜行丑寅刻右陣勤之丑刻物節一人申宿申候由（殿上及宿所等上﨟次將在所申之）今案宿申の近衛は其の夜大將次將の内御とのゐしたる上首の人の所をたつねて申也殿上にても又直廬にても申也大將御前に祗候之時は先中少將して申せは大將出あひてたそと問へは近衛官人官姓名を申す大將すなはちよしと仰す（よしは縦の字ゆるすと云心也）　中少

將も是におなし今の物語にいへるは近衛つかさのかくろへたるはたれにてかわるらんそれをとのゐ申の近衛人にをしへられてそのわたりにてこはつくるを大將聞侍る也この故になまわつらはしきとはかけりとら一と申は右近の宿申也此の時源氏も右大將の事なれば聞くるしくおもひ給也たつねありきてとら一と申也かくろへたる近衛司を尋る也

心からかたく袖をぬらすかなあくとをしふるこゑにつけても　あくとをしふるは夜のあくるを夜行の近衛はつけ侍れと人をあくと云詞に聞なしたればーかたならす袖をぬらす也それといふも我こゝろからの事也とよみ侍り

なけきつゝ我世はかくてすくせとやむねのあくへき時そともなく　むねのあくは心にあくをいふなり

そきやうてんの女御の御せうとの頭少將　承香殿女御は朱雀院の女御今上の御母父は明石の卷に右大臣とみえたりひけくろの大將なとの父也

かやうの事につけてももてはなれつれなき人の御心を　藤つほの中宮の御事也

いさゝかもけしきを御らんししらすなりにしを　源氏の君と藤つほとの御事を故院はつゐにしらせたまはさりし也

よやつきぬらん　わはさりし涙のもろく成行は世やつきぬらん時やきぬらん樹下集

あけはつれはふたりしていみしきことを　ふたりは辨君と王命婦となり

かのせきふしんのみけんめのやうにはあらずとも　戚夫人は漢高祖の妾趙王如意の母也惠帝の太子にて有しを立かへんとせしかどもつゐにその事ならすして高祖は崩し給ぬ惠帝位につき給てのち呂太后かのむくひせんとて戚夫人の眼をぬきて人彘となづけてかはやの中におしこめておかれし事のありしかは見けんめのやうにはあらずともと藤壺の中宮の大きさきの御心をおそれ給ふ御詞也

式部かやうにてや　式部は年よりたる女なればかみかたちはそりたるへしそれよりはみしかきとはさ

け尼の事をいへるにや
雲林院にまうて給へり　國史云天長九年四月癸酉鸞駕幸ニ紫野院一御ニ釣臺一院司獻レ命陪從文人賦レ詩御製和成賜レ祿有レ差新撰ニ院之名一爲ニ雲林亭一承和十一年八月癸巳幸ニ北野一駐ニ蹕於雲林院一閑覽ニ池塘一錫ニ宴群臣一日暮還レ宮元慶八年九月十日丁卯權僧正法印大和尚位遍昭奏言雲林院者故無品常康親王之舊居也親王出家爲ニ沙門一貞觀十一年二月十六日以此院付ニ屬遍昭一曰深草天皇給レ此居レ之天皇登遐常康落髮昊天罔レ極德猶難レ報レ恩願永爲ニ精舍一令レ學ニ天台之教一伏思元慶寺永賜ニ年分度者三人一傳ニ天台之法門一試度之道請以爲ニ元慶寺別院一成ニ親王之心願一矣院中雜事擇下遍昭門徒中堪ニ幹事一者上令ニ其勾當一勅依請聽レ之
つかひろんき　番論議也
からくとならして　花皿の音也
かけまくもかしこけれどもそのかみの秋おもほゆるゆふたすきかな　齋院にあさがほ奉りし時の歌也
むかしを今にとおもひ給ふるもかひなく　齋院になり給ふはすぢことなるとあれはむかしを今にとりかへさまほしくおもひ給ふ也
からのあさみとりのかみにて　榊に付るにたよりある色也
ちかき世にとのみなん　歌の詞有へしいまだ不考也
ましてあさがほもねひまさり給ふらんかし　朝がほは女の御かたちをいへり夕かほの巻にしるし侍りぬ
あやしうやうの物と神はうらめしうひたり右におはされける　あやしうやうの物とはあやしきさまの物と云心也よのつねならぬ心也神をうらむるやうなるをあやしきとはいへり左右は伊勢賀茂をいふこその九月は齋宮の御下りに心をつくし給ひ今は又齋院の御事によりて神をかこち給ふ事也
くろき御車にて　西宮抄云重服公卿乘黑莚車今案諒闇中といひながら源氏大將は父御門の御事に重服也
いろかはるとありしも　紫の上の返歌上にあり
まいらせ給ひにけるをめつらしき事に　中宮の東宮

へまいらせ給し事也
れいのいさゝかなる物ありけり　紅葉の枝にちいさ
き文をむすび付られたる事也
まかて給へき日まいり給へり　中宮の東宮の御かた
より退出し給へき日源氏の君内へまいり給ふなり
はこう日をつらぬけりたいしおちたり　日をつらぬ
けり日につけり兩義也白虹日をつらぬけともつゐ
にとをらすその心ざしとけかたかるへき事を荊軻
をそれたる也いま源氏を荊軻にたとへたり又冷泉
院の東宮にておはしますを太子丹によそへていへ
る詞也
木からしの吹につけつゝ待しまにおほつかなさのほ
ともへにけり　久しく文のをとつれもなくてことの
葉のかれたるをこからしの吹とは讀給へる也下の
源氏の返事に聞えさせてもかひなきことの葉のけ
にこそかれ侍りにけれとあるは源氏のかたよりひ
さしくおとつれぬ事をいへり
身のみ物うきほとに　またるゝまてになるといふ心
なり是も內侍のかみの歌の詞に付たる引歌也
心のかよふならはいかになかめの空ものわすれし
侍らん　人戀る心は空にかよへはや雨も淚もともに（元良親王家歌合）
しくるゝ貫之　君おしむ心の空にかよへはやけふと
まるへき雨のふるらん　今案なかめは時雨によそ
へ侍り心の通ふならは雨もさはるましき心也
霜月のついたち御こきなるに　故院周關の御佛事な
り
別にしけふはくれとも見し人にゆきあふほとをいつ
とたのまん
なからふるほとはうけれとゆきかへるけふはそのよ
にあふ心地して
此兩首ともに雪をかくされて讀給へり
の給はせしさまなとおもひ出聞え給ふにはしも之心
つよからすその御返も大將殿って事くはへてきこえ給
ける　の給はせしさまとは東宮のの給はせし事を女
院のおほしめし出たるをいふなり東宮の御使にも

大將殿御返事を申させ給へる也
月のすむ雲井をかけてしたふとも此の世のやみに猶やまとはん　源氏の歌中宮の御心の中をおしはかりてよみ給へる也この世のやみとは東宮の御事也
かつにこりつゝ　歌の詞あるへし可尋之
年もかはりぬれはうちわたりはなやかに　諒闇も過て事あたらしき年の始なり
さるひとつ物にて　又たくひなき心なり
宮つかさなとおほかたのたうりにても宮の御たうはりにてもかならすあるへきかゝいなとをたにせすして　大かたのたうりとは其身にとりて加階すへき年勞を云宮の御たまはりといふは三宮の年爵をいへり院の御給も是におなし
左のおとゝもおほやけわたくし引かへたる世のありさま物うくおほしなりはてゝちしのへうたてまつり給ふ　大臣致仕事は左大臣藤良世寛平八年十二月廿九日上表致仕七十四太政大臣藤實頼安和二年正月八日上表致仕七十此等の例也　今の物語左のおとゝといへは良世の例あひ叶ふ也又清愼公は致仕の表たてまつりてのち同八月十三日圓融院受禪の時更に攝政し給ふ引入の大臣も此卷に致仕し侍てみをつくしに冷泉院受禪の時攝政たるよし見え侍れは清愼公の致仕の例にちかきにや又致仕といふは七十になりて出仕すましきによりて此間もちゐたる車をも先祖の廟に是をかくる事あり故に懸車の齢ともいふ也官を辭といへ共猶政事にあつかるへきよし河海にしるされたる事おほつかなし
れいよりもうちみたれてしゐすゝみ給へるほとに　是は源氏の君の御事也
あはまし物をさゆりはのと　是は高砂の歌の詞なり
夫もかとけさひらけたる初花におとらぬ君かにほひとそ見る　高砂の歌にけさ咲きたる初花にあはまし物をさゆりはのとあるによりて源氏の君を花にたとへたる心也それもかとはそれかと云心也
時ならて今朝咲花は夏の雨にしほれにけらしにほふ

はとなく　是も源氏の我身にたとへ給也つらゆきかいさめたるを　か様に時としてとりあへすよみたる歌なとはよき事はすくなかるへしそれを後まて書とゝむるは心なきわさと紀貫之もいひし事也たふるゝはたはふれて也たはふれのやうにて後まてとかくのあつかひ草になるは物むつかしけれはようなきことゝもおほかりしかともかきとゝめぬとなり

文王の子武王のおとゝと打すんし給へる御名のりさへそけにめてたき成王のなにとかのたまはんとすらんそれはかりや心もとなからん　文王の子武王の弟と云事は史記の魯の世家に周公の自稱の詞にいへり是を後江相公の貞信公の攝政を辭する表の詞にかけり周公旦者文王の子武王之弟自知㆓其貴㆒忠仁公者皇后之父皇帝之祖世推㆓其仁㆒云々源氏の君は桐壺の御門の御子朱雀院の御弟なれは周公に比して此一句を誦し給ふなり成王の何とかの給はんすらんとかけるはたとへは周室の王位のついてのことくならは武王の後は成王の位につき給へりそれに此物語をなすらへていはゝ朱雀院の脱屣あらは今上の位につき給へき事也それに朱雀院の次に御弟の冷泉院の御位につき給へは相違する樣なるによりて成王のなにとかの給はんとすらんとは今上の御意をはかりかたきといへる心也おもしろくかきなしたる詞也

うすふたあゐなるおひ　源氏の御帯夏の直衣の色也

かのかたにて御心よせ侍しをそのほいたかふさまにて　是は内侍のかみの事を大宮のうしろことし給なり

さすかにいとをしうなと聞えつる事そと　是は大とのゝこゝろ詞なり

このついてにさるへき事ともかまへいてんに　須磨の浦に隱居の本立なり

八　花散里

以歌爲卷名さか木の末は源氏廿四歳の夏なり此卷も同夏の事をかけり

御おとうとの三の君　花散里の事なり

たゝひとめ見給しやとりなりけり　花散里へ出給ふみち中川にての事也是も源氏の君のたまさかにか

よひ給ひし所なり此巻にはしめていひ出せり
をち返りえそしのはれぬ郭公ほのかたらひし宿のかきねを　をち返りは萬葉には百千返りとかけり
つくしの五節　大貳のむすめ也是も源氏のあひ給し人也須磨の巻に見えたり
こくらきかけともこちたう見えわたりて　こちたうとはこと〳〵しき心にや木立の大なるを云へし
ほとゝきすありつるかきねのにや　中川の宿のかきねなり
いにしへのわすられかたくおもふたまへらるゝなくさめには　是よりは源氏の詞なり
みないとことさらなる世なれと　これは女御の御事を源氏の御心におもひ給ふことなり
人めなくあれゆく宿は橘の花こそのきのつまとなりけれ　女御の御歌なり
にしおもてには　三の君のすみ給ふかたなり
よへのかきねも　中川の宿の事なり

花鳥餘情第八　須磨　明石

九　須磨

以歌并詞爲卷名源氏廿五歲三月廿餘日に須磨浦に隱居し給ふ明る年卅六歲の事まて此卷に見えたり

かの須磨はむかしこそ人のすみかなともありけれ

源氏の大將須磨の浦に隱居の事はおもてには行平の中納言のもしほたれしいにしへと周公旦の二叔の議によりて東征せし事とを詮要としてうらには又菅丞相西宮の左大臣の太宰府に左遷せられ野相公の隱岐の國へなかされし例をもてかけり又伊周公はしめは播磨國に籠居せしかひそかに京へのほりしとかによりて宰府へさらにつかはされ給へりかれこれを取合せて物語につくりなせり榊の卷に文王の子武王の弟と源氏の自稱せしは周公旦にをのれをなすらへたる證據也

ひたゝけたらん　叩は人しけくかまひすしきこゝろ也

三月廿日あまりのほとになん宮こはなれ給ける

西宮左大臣安和二年三月廿六日左遷太宰府云々

わたくしさまにはこしのへてなと　蟄居せる人のはかへ出ありくをはこしをのすといふなり左のおとゝ致仕の表を奉りて隱居のよしを申なからわたくしには又ありくといはれん物のきこえをはゝかる心也河海抄の義あやまれるにや

あめの下をさかさまになしても　うつほの物語に天の下をさかさまになすともかゝることはあらしと思へと云々又日本紀に神功皇后三韓を征し給ふ時新羅王のちかひの詞に東の日更に西より出阿禮那禮河のさかさまになかれ河の石のほりて星とならんかきりは御調物を退轉せしといへる事あり是みなあるましき事のたとへなりあれなれ河はしらきの國にある河の名なり

かうしもつかさなとをとられす　つかさなととらるゝとは除名といふ事也出身よりこのかたなりきたれる官位をこと〳〵くのそきて無位の人になる事をいふ源氏も除名せられしによりて無文のなをしを着給ふとみえたり配流の人をはかならす先除名する事也除名はかりにて流罪せられぬ事もありそ

れは罪の輕重による事也源氏の除名は左遷の例を
用たる也
うつしさまにて　うつしさまはよのつねさまの心な
り
すき侍にし人を　あふひのうへの事也
いえはえにかなしとおもひたるさま　いえはえには
いはんとすれはえいはれぬといふ心なり
さまかはりたる心地もし侍るかな　あふひのうへの
ましまさす世ならはかくはあるましき心なり
心くるしき人のいきたなきほとを　心くるしき人と
はわか君の御事也いきたなきとはわかき人のつよ
くねるを云也ねきたなきと云詞也
とりへ山もえし煙もまかふやとあまのしほやくうら
みにそ行　とりへ山の煙はあふひの上の事なり
あか月のわかれはからのみ心つくしなる　江文通か
別賦云黯然銷レ魂者唯別而已矣
とらおほかみたになきぬへし　一本おにかみたにも
なきぬへしとあり心はおなしき也おそろしき物も
本心をうしなふ心なり
たいはんなともかたへはちりはみて　臺盤は殿上に
ありひさしく用られぬほとに塵はみたる也
おもふ人にかた〳〵につけてわかれ給ふ人かな　紫
の上のたのみ給へる人々に別給ふ事也母君うは君
いま又源氏君にいきて別れ給ふをいへりまゝ母の
のろ〳〵しういふ詞也
れいの月の入はつるほとよそへられてあはれなり
三條の宮よりかへり給し時中納言君にわかれ給し
曉の月の光思ひよそへられてあはれなる故に例の
月の入かたと云也上に見えたり
文集なにくれ　白樂天の詩賦をあつめたる七十二巻
あり長慶集といへり長慶年中にあつめたるゆへな
り
あかつきかけて月出る頃なれば　定家卿此詞をとり
てよみ侍る歌内大臣家の百首　春はたゝ霞はかり
の山の端に曉かけて月出る頃

御山にまいり侍を　御山とは山陵をいふなり
王命婦を大宮の御かはりとて　藤壺の中宮は出家之後三條の宮におはしますを申侍り此時朱雀院の母后をもあふひの上の母君をも大宮と申侍り皆たとふる心に大の字をくはへたりこの中に朱雀院の母后はかりは皇太后宮と申侍り
いつかまた春のみやこの花を見んときうしなへる山かつにして　春の都は春宮をよそへたまへるなり
咲てとくちるはうけれと行春は花のみやこを立かへりみよ　光なき谷には春のよそなれは咲てとくちる物おもひもなし古今
時しあらはときこえて　歌の詞あるへしいまた見出し侍らす
この御いたはりに　御はくゝみのこゝろなり
世ゆすりかなしひ　かけろふの日記云　西宮の左のおとゝなかされ給を見たてまつらんとて天のしたゆすりてにしの宮へはしりまとふゆするは動と云心なり

大江殿といひける所はいたうあれて　齋王歸京の時伊勢を發て大和路をへて攝津國におもむきて難波にて御はらへありて七日に大江の儲所につき給ふ十日に入京し給ふとなり故に大江殿は齋王歸洛の時の旅館なり夫に松はかりしるしにのこれるとなり
から國に名をのこしける人よりもゆく衞しられぬ家居をやせん　河海には楚の屈原か江潭になかされし事はかりをしるされたり此外流刑をかうふりし人は代々にたえす有し事也
二條院に奉れ給と入道の宮とにはかきもやり給はす　紫の上への歌は物語にのせすゆへあるへきにやたゝしむらさきの上の返事は下に見えたり
松島のあまのとまやもいかならん須磨の浦人しほたるゝ頃　まつしまのあまは入道の宮をたとへ侍り長雨の頃なれはついちなともさためてくつれぬらんの心にいかならんとはいへる也
みきはまさりてなん　君こふる泪おちそひこの河の汀まさりて思ふへら也貫之

いつまてとかきりある御わかれにもあらぬを
別れてはいつあひみんと思らん限ある世の命ともなし伊勢

年頃はたゝものゝきこえやあらんと　是より下の一段は入道の宮と源氏との御なからひの事也たかひに物の聞えをはゝかり給てめやすくもてかくし給へる事也

しほたるゝことをやくにて松島にとしふるあまもなけきをそつむ　鹽やくを役の字に取なしたる詞也なけきは鹽木によそへたり

浦にたくあまたにつらん戀なれはくゆる煙よ行かたそなき　後撰 風をいたみくゆる煙の立出て猶こりすまの浦そかなしき　今案後撰の歌をもとにしてよめる也源氏君の歌　こりすまのうらのみるめのゆかしきを鹽やくあまやいかゝおもはん上に見えたり

ものゝいろし給へるさまなと　二條院よりすまへ源氏の君の衣裳をしてをくり給へるを物の色とはいへるなり

中々この道はまとはれ給はぬにやあらん　子のみちをこの道とかける也わか君の御事也

あけぬ夜の心まとひにや　夢のやうなりといふこゝろ也

つみふかき身のみこそ　齋宮にては佛經なと手にふれぬ事を罪ふかしとはいふなり

あはれとおもひきこえし人をひとふしうしと思ひし　葵の上の事也

いける世とはけによからぬ人のいひをきけん　よからぬ人とは中のよからぬ人の詞にいへる歌也御門の我身によそへて内侍のかみの君をうらみ給なり

さりやいつれにおつるならんとの給はす　朱雀院の久しく世にあらんともおほえぬ心地するなとの給ふを聞給て内侍のかみの涙をなかし給を御門の御心に我ゆへにはかやうになき給はしかの人のわかれを思出してそ袖をぬらし給らんさてもいつれにおつるにかとねたみ給ての給なり

行平の中納言のせきふきこゆるといひけん浦浪
天暦御時屏風歌忠見　秋風の關ふきこゆるたひことに聲うちそふる須磨の浦浪　續古今集つの國すまと云所に侍ける時よみ侍ける中納言行平　旅人の袂涼しく成にけり關吹こゆるすまの浦風今案關吹こゆると云詞は忠見歌と行平歌とにありしかるを奥入及伊行釋に能宣か歌といへりおほつかなし此物語のことはの關吹こゆるといひけんうらなみといへるは忠見か歌の心はなはだあひ叶へり旅人の袂すゝしくとよめる行平の歌あるによりて忠見か歌を思わたりて行平歌といへるにやと邪推をくはへ侍りか樣の事は漢家本朝の書にいくらもある事也さらに記者の瑕瑾にあらざる事也その子細なほ後々に申侍るへし細流にいはく行平は忠見よりさき也忠見か歌も行平より出たるへし
枕をそはたてゝよもの嵐を聞給ふに
白樂天詩　遺愛寺鐘欹枕聽
まくらもうきぬはかりに成にけり　拾遺　涙川水まされはや白妙の枕のうきてとまらさるらん
いつそや山寺にて人々のかたり聞えし海山のありさま　わかむらさきの卷にある事也山寺はくらま寺を云やう〳〵あかしの浦の事をいひ侍るなるべしおなしき卷に人の國なとに侍る海山のありさまなとを御らんせさせて侍らはいかにも御ゑいみしくまさらせ給はんとあり此卷のつきの詞にゑの事を書つゝけたり首尾相應せる事なり
しろきあやのなよらかなる御そしをんいろなとたてまつりてこまやかなる御なをしおひしとけなく　河海にしろきあやの御衣に紫苑色のさしぬきとのせられたりさもありぬべし又しをんいろもおなし御衣のいろともいはんに相違あるへからすきぬとはいろ〳〵をかさねてきるゆへ也こまやかなる御なをしは夏の直衣地は平絹の無文にてもあれ色は紫花田年齢によりて用る也花田ならは色のこきをこまやかなると云へし
かりのなきつゝきて行こゑかちの音にまかへり　鳳櫓といひて雁の聲をはからろをすにたとへたり梶の音もおなし事也
心からとこよをすてゝなくかりを雲のよそともおも

ひけるかな　とこよは仙境をいへり春秋のかはりもなきによりて常世とはいへり鴈は北國の世はなれたる所にすむ鳥なれはかくよみなし侍る也

ともまとはしていかに侍らまし　友をうしなふ心也歌の詞なるへし可考之

つれなくさましありく　我と心をなくさむるを思ひさますと云也

入道みやのきりやへたつるなとの給しほとに　榊の巻にある歌の詞也

よゝとなかれて　あけまきの巻にもしやくりもよゝとなくと云詞もあり

その夜うへのいとなつかしく昔の御物語なとしつゝ　これも榊の巻にありし事也

まことに御そは御身もはなたすおい給へり

朱雀院の御門の源氏に御そ給へる事以前はみえさる事なれは此物語のならひとしてさきにいまたいはぬ事をも事のついてにか様にいひ出す也

まして五節の君は　五節の君は大貳の女京にて源氏にあひし人也花ちる里の巻にもみえたり

ましておちとまりぬへくなんおもほえける

菅丞相は物もしらぬむまやのをさに對してたにも口つうたをつくり給へりいはんや五節の君はなさけある人なれはなをさりにの給ふはかりの事ものちまておちとまり侍るへくおほえ給と也

昭君か胡の國へゆきけん　王昭君は胡國の王に嫁せし事は何にもある事なれは事あたらしくしるすに及はすこゝには我思ふ人なとをかやうの遠國へやりたらはいかはかりの事をかおもはんとつれ〳〵のあまりに今はなき事なれと京におもひ給ふかた〳〵のあるにつけて昔の事をおもひなすらへ給へる也

あかしの浦はたゝはひわたるほとなりけれは　日本紀に八またの大蛇の事を云に八のをか八の谷にはひわたるとかけり蔓延の二字をはひわたるとよめりかつらなとのはひわたるも同事也心はあかしの浦はすまよりみわたしなるよし也

くつしいたくて　苦痛也

もろこしにも我御門にも　伊勢物語に我御門六十餘國の中とあり我國を云ことは也

はとにつけたる世をはさらにみし　あかしの上もおはかたは心たかきゆへに我はとの種姓の人には見えましきとおもひたまへるなり
いつとなく大宮人の戀しきにさくらかさしてけふもきにけり　もゝしきの大宮人はいとまあれやさくらかさしてけふもくらしつ　赤人
山かつめきてゆるしいろのきはやかなるにあをにひのうちきさしぬきうちやつれて　ゆるしいろのうちきあをにひのさしぬきといはんとてかやうにかけてまつ二の色をいたして後に衣裳の名をあかせりゆるし色はうすくれなゐを云也青鈍ははなたにあをけのましれる色也一本にゆるし色のきかちなるにとありうすきくれなゐの黄なる方によれるを云也　三善清行請禁深紅衣服奏議云但淺紅輕黄未及火色者不在制限云々　黄かちなるとは此事也河海に黄衣の證文をひかれたるはあやまり侍る也又一本あをにひのかりきぬさしぬきとありうちきをかりきぬとかきかへたるはかり也心はおなしき也

あすかゐすこしうたひて　あすかゐは催馬樂さきにしるし侍り馬にいねかふと上に書きたれはみまくさもよしの心をとれる也
えいのかなしみ涙そゝく春のさかつきのうちに
白樂天か江州へ左遷せられし時三月三十日に夷陵と云處にとまりて元微之にわかれし時つくれる詩の句也それをいま三位の中將に源氏の別れ給ふ時におもひなすらへてもろこゑにうちすし給也此詩の心を定家卿韻の歌によみ給へりもろともにめくりあひける旅枕涙そゝく春のさかつき
雲ちかくとひかふたつも空にみよ我は春日のくもりなき身そ　三位中將をたつによそへてよみ侍る也
たつかなき雲井にひとりねをそなくつはさならへし友をこひつゝ　たつかなきとはたつきなきと云詞也かときと五音通せり又つるをかくしてよめる也つはさならへし友は源氏にたとへ侍り
やをよろつ神もあはれとおもふらんおかせるつみのそれとなけれは　中宮なにはの御はらへに大伴皇子歌問見はやあまのまし人くさ〳〵におかせるつみ

はありやなしやと
うみのおもてふすまをひきはりたらんやうにひかりみちて　道成集女院の御前にて雪のひろうふりて侍りしにこれをよみてと仰事有ければ　年ことに冬ふる物としりなからとこめつらしきふすまゆきかな　定家卿明月記云雨脚融（トホリ）レ地雷光張レ衾云々
たかしはといふものになんとりもあへす人そこなはる丶　大伴皇子さてそのころ浪風ふきてたかしほと云物いりていとおそろしくやともみななかれてしん殿もゆるくいきたなかりける人々はみななかれにけり
うみの中の龍王のいといたう物めてする物にて　これは彦火々出見尊を源氏の君にたとへて龍神の豊玉姫をあはせ奉りしをあかしの入道の女になすらへてかける言葉なり

十　明石

以歌并詞爲巻名源氏廿六歳の三月十三日にすまよりあかしにうらつたひし給ふ廿七歳の七月歸京の事まで二年の事見えたり
なを雨風やます神なりしつまらて　三月一日より同十三日まで雨風やます神なりさはく也これはいまた須磨にての事也周の成王の時周公の弟に管叔蔡叔といひし諸侯周公旦を讒すこれによりて周公東都に居る事二年その秋天大に雷電して風ふくあはこと〳〵くたふれ大木の根ぬけたり成王その時金縢の書を（此書は周公の制作なり）ひらき見給て周公の王室に功ありてさらにとかなき事をさとり給其時雨風たちまちにやみあはこと〳〵くおき大木のたふれたるもみなもとの如くになれりこれはとかなき周公を二叔の讒したるを成王の信し給ひしを天かいかりをなし給ふ故也成王のおもひなをり給へるによりて草木ももとのことくになれりいま源氏の君を周公旦になすらへて十三日までの雨風とはいへる也
かゝりとて都にかへらん事もまた世のゆるされもなくて　帥内大臣（伊周公）播磨國にくたりて後又ひそかに都にのほりて母君にあひ給事きこえてかさねて罪を得て更に太宰府へなかされ給へり榮花物語にみ

えたり
夢にもたゝおなしさまなる　すまの巻にみえたり
空のみたれ　雨風はけしき事を空のみたれと云雨順風調と云は五日の風十日の雨時をたかへぬ事也その事に對して空のみたれとはいへる也
あやしきすかたにて　蓑笠きたるすかたをいふなり
みちかひにて　篁日記　玉ほこのみちかひなりし君なれとあとはかもなくなるとしらすや
我なからかたしけなくくしにける　かたしけなくは辱の字也身もはつかしきこゝろ也
空さへとつる　くもりふたかる心なり古歌の詞あるへし
みさはもまさりぬへく　須磨の巻にしるし侍り涙の事也
いはほも山ものこるましきけしき也　野分巻に風のあらき事をいふに岩ほをも吹うこかしぬへくとあり
すみよしの神ちかきさかひ鎮めまもり給　住吉の明神は往來の船をまもり給故に神功皇后新羅をたいらけ給ふ時以船爲幣也あかしの入道御船をよそひて待けるにあやしき風ほそく吹たるよし下に見えたりあなたこなたより住吉の明神にいのり給へるかゆへにつゐには神感にあつかり給へるなり
ていわうのふかき宮にやしなはれ奉りて　長恨歌云養在深閨人不識云々詞は是をとれり　意は貞觀政要の第一にあり
かくかなしきめをさへ見いのちつきなんとするは　是よりは源氏の君の祈請の趣也上にいへるはつきしたかひてまつれる人々のくはんを云也
やけのこりたるかたもうとましけに　李部王記承平元年十一月七日始壞二清涼殿ノ南一間一ヲ因テ二去年ノ雷震一改造也其東行ノ南廊及屬二挍書殿一廊モ同改造云々
うみにます神のたすけにかゝらすはしほのやほあひにさすらへなまし　住吉明神はつくしのたちはなの小戸のしほちよりうかひ出給へる神なるによりて海にます神とは申侍り又海の中の龍王に願をたてたまふよし上にあれは龍王をも神といはんに相違あるましき也しほのやほあひは萬葉の詞又日本紀

にはしほの八百重とありしほのふかき心也八百會とおなしき也

いたうこうし給にければ　こうは困の字なるへしくたひれはてたる心也

うみにいりなきさにのほり　長恨歌に方士か楊貴妃をもとめし時の事に上は碧落下は黄泉といへるかことし

月のかほのみきら〳〵として　月のかほ須磨の巻にもあり

わたくしにいさゝかあひうらむる事はへりて　よしきよかあかしの入道の女にこゝろかけたるを入道ゆるさぬ事をうらむる也わかむらさきの巻にもおほかた見えたり

うつゝさまのひとの心にたになをくるし　うつゝさまはよのつねさま也なをさりよのつねの事なりとも神のたすけをそむかんはくるしかるへしいはんや我身のありさまはかなき事ともを見あつめたる事になりては世にしたかふへきはよからんと也

我よりよはひまさり位たかく時よのよしおほえ　これは惣して人の云事にしたかふへきよしを云なりわれより人のまさり又位たかき人又時の權門なとのいふ事には何ともあれしたかふへき心なりあかしの入道も源氏よりはよはひまされる人なれはとり申事にはしたかはゝよかるへきと也

しりそきてとかなしとこそ　このしりそくは位を辭し身をしりそくる心にはあらすたゝ人の先をせすをのれを卑下して人にしたかふ心にいへる也

とふやうにあかしにつきぬ　播磨國風土記云難波高津の宮の御時明石の驛家駒手御井のくすの木をもて舟に作るその舟のあしはやき事飛か如し一かちに七なみをとふによてはや鳥とその舟を名つく朝夕此ふねにのりて御食を供し御井の水をくむある時このふねにのらすして捨てられたる時人の歌によめり　すみよしのおほくらむきてとへはこそはや鳥といはめいつれはやとり今案明石の浦よりいてゝとふやうなるといへる風土記の心にかなへり

たゝはいわたるほと　すまの巻にのせ侍り

けうをさかすへきなきさのとまや　花をさかすなと

云ふかことし興を盛にすへき心也
いねのくらまち　いなくらのある町なり
月日のひかりをてにえたてまつりたる　わかなの巻に明石の入道の夢に月日の光を手にとると見たるその夢におもひあはすへし
おしのこひつゝ　涙をのこふ也
かゝみを見てもとの給ひし　紫の上の歌須磨の巻に見えたり
御心ちにもをかしと聞をき給し人なれは　紫の巻に北山にてよし淸か物語せし事也
おこなひさらほひて　勤行によりてやせさらほひたる心也
あはとみるあはちの島のあはれさへのこるくまなくすめるよの月　躬恒歌のあはとは阿波渡也此歌のあはとみるは海のうへにあはのやうに淡路島のうかひ出たる心也日本紀にも湖水のあはこりて島となると云事あり
かうれうといふてを　廣陵散は琴の秘曲なり嵇康か華陽の亭にして神人にあひてつたへたる曲也此神人はむかしの伶倫の變化なり
供養法たゆみて　三密六度の行法也
入道琵琶の法師になりて　琵琶ひきてありく法師なり當時の盲目のことし小右記云召琵琶法師令盡才藝給少祿云々寬和元年七月十八日
はる〳〵と物のとゝこほりなき海つらなるに中〳〵春秋の花もみちのさかりなるよりはたゝそこはかとなくしけれるかけともなまめかしきにくひなのうちたゝきたるはたか門さしてとあはれにおもほゆ
此段はあかしのはまの家にての事なれはものゝとゝこほりなき海つらとはいへり又時節を云に夏のことなれは花もみちのさかりなるよりはしけれるかけは色なきものゝ中々物さひしくあはれそふへしくひなのうちたゝきたるも物はかなくたか門さしてと聞なされあはれもまさるやうなれは時に感して心さしをあらはす事はかゝる鳥けた物のうへにてもおなし事なれは物のねすゝむる中たちとなりぬへきこゝろ也
あやしくまねふものゝはへるこそしねんにかのせん

わうの御手にかよひ侍れ　あかしの入道の箏は延喜の御門よりつたはりて三代になりぬるを女のあるかきゝとりたるはあかしのうへの箏の上手なる事を入道のかたり出たる也　せんわうとは延喜の御門を申也

山ふしのひかみゝに松風をきゝわたし侍るにやあらん　箏しらへける女のあたりをすきけるに是をきかてはいかにといひければ壽玄法師拾遺作者　松風に耳なれにける山ふしはことをことゝもおもはさりけり

君ことをことゝも聞給ましかりけるあたりに　源氏のおもひ給へるやうあかしの入道もむすめも是ほとの上手にてはことをもことゝ思ふましかりけるあたりにて我ひきける事のはつかしさよとてをしやり給と也上の詞に山ふしのひかみゝに松風を聞わたすといへるは壽玄法師か歌の詞をとりてことをことゝもきゝ給ましきとはいへり

あき人の中にてたにこそふる事聞はやす人はへりけれひはなんまことにねをひきしつむる人　文集の琵琶引は白樂天なかされて江州の司馬になれるときの事也源氏も又須磨の浦にこもり給へるおりなれは尤も便ありかの琵琶ひける女はあき人のめになれる物也ふるき事きゝはやすとは樂天をいへる也明石の入道我女をいやしき商人にたとへて申給へり上には箏の事をいひてこれよりまた明石の上の琵琶にも達したるよしを申侍らんため商人の事をいひ出せり上を結し下をおこす詞也物語の作さまおもしろく書なしたるへし

いかてたとるにか侍へらん　このたとるはたと〳〵しき心にはあらすよくたつねしりたる心にいへるなり

さうのことゝりかへてたまはせたり　入道はしめは琵琶を引たるを又箏を給てひかせて聞給へる也

ゆのねふかうすましたり　ゆの音は左の手にてことの緒をゆする事也是に上手へたのある事なり

われもとき〳〵はうしとりてこゑうちそへ給を　源氏の君の時々拍子をとりてうたひ給を入道きゝてひく事を引さしてめてきこえたる也

洒しゐそしなと　殺の字は愁殺惱殺なとも詩につく

れりつよく人をうれへしめたる心也しゐそすといふもさけをつよくしゐたる心也

めのわらはのいとけなく　あかしの上のいとけなかりし時よりの事をいふめのわらはとはむすめをいふ也

ほと／＼につけてあまた人のそねみをおひ　若紫の巻にその國のつかさなとさる心はへみすれとさらにうけひかすと有あまた人のそねみをおふとはこれをいへり

せはきそてにもはく〻み侍りなん　後拾遺後朱雀院むまれ給て一夜に　いとけなき衣の袖はせはくともこふのうへをはなてつくしてん公任同むまこのおさなき事を　おもひやれまたつるの子のおさなきを千代もとなつる袖のせはきを藤三位

されとうらなれ給へる人はとて　うらなれたるとは年ひさしく浦にすみなれたる人は浪風の音もいまはしめてきくやうにはあゐましき心也

旅衣うらかなしきにあかしかね草の枕はゆめもむすはす　うらかなしきとは心かなしきと云ふ心也うらとは心をいふうらさひしきなと云ふ同事也あかしかねは所の名をそへたり

なへてならぬ玉もかつけたり　玉も後撰にいへるしかのはらへよりおこれる黒主か歌のおきの玉もをかつく身にしてといへる心也纒頭に女の裝束をかつけたりもは女のきぬにそふ物なり

せんしかき　せんしかきとは仰書也さきの文を入道の返事書たるを云也

いふせくも心に物をなやむかなやよやいかにととふ人もなみ　やよやは人をよふにや〻と云かやうなる心也　慈鎮和尚歌　やよ時雨物おもふそてのなかりせは木の葉の後に何をそめまし時雨をよひてとふ心也

このたひはいといたうなよひたるうすやうに　さきの文をこまのくるみ色の紙に書給へるははしめなれはちきの返しはよもあらしとおもひ給てすく／＼しきかみにかゝれ侍りあのことく入道のせんしかき也このたひはさりとも身つからそ返事し給はんすらんと思ひてなよひたるうすやうに書給へ

りなよひたるとはうつくしきかみを云也
あさからすしめるむらさきの紙に　あさからすしめるはたき物の香にしめたる也
おもふらん心のほとややよいかにまたみぬ人のきゝかなやまん　戀しともまたみぬ人の問かたみ心に物のなけかしき哉　一條院　今案源氏の歌女の返歌ともに一條院の御製をとれるに似たりまたみぬ人はあかしのうへの我身の事をまた見ぬとはよめる也
しのひてやむかへたてまつりて　これはむらさきのうへの事也
三月十三日かみなりひらめきて　これはすまにての事也京にもおなしやうに故院の御門の御夢に見え給へる事也
御めいたうわつらひ給て　朱雀院の御目わつらひ給事は三條天皇即位の後御耳目あきらかならさる事をおもひよせたりそれは民部卿元方の靈によれり又寛算供奉か靈ともいへり
つみにおちて都をさりしひとを三ねんをたにすくさていかゝゆるされむ　令書の獄令云凡流移人至ニ配所ニ六載以後聽レ仕即本犯不レ應レ流而特配流三載以後聽レ仕　今案流移の人とは流罪せられたる人を云それは六年の後は公役にしたかふ事をゆるさるゝ也流罪のとかに及はさる人のことさらに流罪せられたるは三年の後つかふる事をゆるさるゝ也今源氏の君はあらはれたるとかもなくて除名せられ侍りひさしくは六年はやくは三年して出仕有へきゆへに三年をたにすくさてとはいへる也又赦に二色あり常赦と云ふは八虐の罪をはのそきて其外を免せらるゝを云又大赦と云は非常の赦とも云これは八虐以下の常赦にのそかるゝ物まてこと〳〵くゆるさるゝを云これは人主のもはらつかさとる事なれは別勅にまかする也源氏の君三年をへすといへとも赦免にいたりてはともかくも御門の御はからひたるへき物なるへし河海に徒三年の文を引たるはあやまる也五刑の中に徒罪と云は徒は奴也人をやつこにしてせめつかふを云也流刑よりはかろき罪なりその中に一年より三年まて役にしたかふ事あるを徒一年乃至徒三年なとゝ云也

よこもりてすくすとし月　世にこもりゐたるをよこもると云又人のおさなきほとをも世こもると云それは二葉の松に千代のこもるなと云かことし
てしなとにもしらせす　出家の後つかふる人をは弟子と云源内侍のすけを宮の御弟子といへる同し心也
あたら夜ときこえたり　あたら夜は萬葉に新夜とも又惜夜ともかけり惜はおしむ也いたつらにあかさんことのおしきこゝろ也
やかてむまひきすきておもむきぬへくおほさる　すくに都へのほらはやと思給也
月いれたるまきの戸くちけしきことにおしあけたり
定家卿の青表紙にはけしきはかりおしあけたりとあり明石の入道源氏を引導申につきてけしきはかりと云は源氏にこの戸くちよりいらせ給へと思へる心むけにことさらはかりあけたる心也けしきことにと云はもとよりみちひきたてまつるうへはこれより入らせ給へとわさとかましくおしあけたるへし兩說ともにその謂なきにあらす人の所好にしたかふへしこの月入たるまきの戸口は源氏第一の詞と定家卿は申侍るとかや
きゝならしたることをさへよろつにの給ふ　このはと入道の物語にせし事なとをかたり給ふなり
何心もなくうちとけてゐたりけるにかうものおほえぬにいとわりなくてちかゝりけるさうしのうちにこゝろとく入ていかてかためけるにかいとつよきをしゐてをしたちたまはぬさまなり　あかしのうへのおもひもかけすうちとけてゐたる所へ源氏の君の入たまへるをわりなくおもひ給てちかき障子のあきたる中へ心とく入てしりをさしかためてあるを源氏の君もしゐて心やふらしとおもひ給へるをそしたち給はぬとはいへる也
さてのみはいかてかあらん人さまいとあてに心はつかしきけはひそしたりける　さてのみやはいかてかあらんとはおもはせてかきたる詞なりへたての關もつゐにはかたからぬなるへしこの下の言葉にみえたり
つねはいとはしき夜のなかさもとくあけぬるこゝちすれは　古今　なかしともおもひそはてぬむかしより逢人からの秋の夜なれは

あひなき御心のおになりや　京のきこえなとおそろしく思給ふを云也

むねいとうおもへり　女かたにもはゝかりおもひて後朝の御使をおもふほともてなさぬを心やましくおもふ也

ものいひさかなきあまのこもや　人の物いひさかにくき世をといへるうたの詞也　心は流罪の身にてかゝるすきことするなとゝ都のかたへ物いひさかなき人のいひやもちさんとはゝかりおもひ給て其後はをかへのやとへよかれかちなりしを女はされはよとありそめたりし事をくやしくおもふと也

おくにまことやわれなから心よりほかなるなをさりことにて　これは紫の上へまいらせ給文のことは也

又あやしく物はかなきゆめをこそ見侍しかとはあかしのうへにおひたることをほのめかし給ふ也

しほ〳〵とまつそなかるゝかりそめのみるめはあまのすさみなれとも　しほ〳〵といふ五もしはなにことにつけてものことはにかゝりたるなりかりそめのみるめとはあかしのうへの事也

はてにしのひかねたる御夢かたりに　これは二條の君の返しの詞也

うらなくもおもひける哉ちきりしを松より浪はこえし物そと　松より浪のこゆるは末の松山よりおこれりあたしこゝろあるを波こゆるとはいへりうらなくおもふは人の心の表裏もなきを云又浦ちかくふりくる雪はの歌にもかよひてうらなくは裏のなき心によめる也

いまそまことに身もなけつへき心ちする　入道のあかしのうへのゆいこんにおもふ事かなはすは海に入ねといひしを思ふすちはかなひたるやうなれといま又あらぬすちにて海にいらまほしくおもへはいまそまことに身をなけつへきとはかける也

としかはりぬ　源氏廿七歳になり給ふ也

六月はかりより心くるしきけしきありて　みな月の比より明石のうへたゝもなくなり給ふ也むまれたまへて後中宮にたち給しひめ君也

あかしの入道そなみたにくれて月もたちぬ　六月もたちて七月になる也

はとさへ物あはれなる空のけしきに　これよりは源氏の君の御心を云也

少納言のしるへしてきこえいてしはしめの事　少納言は良清か事源少納言と云巻のはしめにみえたり
あさてはかりになりて　源氏の君明後日歸京あるへきをいふ
かきつめてあまのたくもの思にも今はかひなきうらみたにせし　かきつめてはかきあつめて也思ひは火にたとへたり
なをさりにたのめをくめる一ことをつきせぬねにやかけてしのはん　一ことは琴によせたりさてつきせぬねとはよめり此ねは又なくねのかたにいへり
あふまてのかたみにちきる中の緒のしらへはことにかはらさらなん　中の緒は六より十までの絃を云にや調子の緒なるへし
このねたかはぬさきにかならすあひみんと　琴はひかてほとをふれはちりほこりかゐてをもゆるく成ほとに此ねたかはぬとは久しからすしてあひみんと云心也
うちすてゝたつもかなしき浦浪の名殘いかにとおもひやるかな　打すてゝたつとは歸京の心をよせたり
としへつるとまやもあれてうき浪のかへるかたにや身をたくへまし　歌の心はすみなれしとまやをはあらしてうき浪のかへるかたに身をたくへんとはうらみたる心によめるなり
心しらぬ人々はなをかゝるすまゐなれと年比といふはかりになりに給へるをいまはとおほすはさもある事そかしと　源氏の女ゆへに名殘をおしみ給ふを心しらぬ人はたゝ年へたる浦をわかれ給へは名殘おしくおもひ給らん人の心はさのみある事とことわりをやりておもへる也
よる浪のたちかさねたる旅衣しほとけしとや人のいとはん　しほとけしとはしほたれたる心なり
御身になれたるともをはつかはす　このほと御身にきなれ給ふ御そともをかたみにとてとゝめをき給へる也
よをうみにこゝらしほしむ身となりてなをこのきしをえこそはなれね　よをうみは世をいとふ心を海によそへたる也このきしとはうき世のきしなりかの岸と菩提を云に對する也
ところ〳〵うちあかみ給へる　なかんとてはまつかほのあかくなるを云也

ひるはひゝとひいをのみねくらし　いをのみねくらしはねをのみねくらす也ねはぬるを云一日はぬる事はかりすると云心也あかしの入道のありさまなり

ほともなくもとの位にあらたまりて　配流の人召還の後六載の後出身の本位に叙すとは最初の位よりさらに叙する法也但三位以上をは奏聞して別勅をうくれは時にしたかひてさたまらすこれによりて源氏の君は最初出身の位にはなり給はてこのほとの官位にかへり給と云也この間のくらゐは參議の大將なれはすなはち其官位にあらたまりてやかて權大納言にあかり給也

かすの外の權大納言になり給ふ　職員令云大納言二人云々令の文のことくならは二人の外はかすより外なれは權の字をくはふへき也寛平遺誡云大納言勿ㇾ過ニ權正三人ニ云々　遺誡の心も三人のうちも權官あるへき心なりさたまれる官のほかをはいつれも權の字をくはふへきによりて源氏も權大納言といはれ給ふ也中比よりは大納言は正一人權十人になれり

わたつみにしなへうらふれひるの子のあしたゝさりし年もへにけり　一本にはしつみうらふれとありしなへうらふれは物おもひなつむ心也蛭子の足たゝぬは三とせになる事也日本紀にはひる子をあしのふねにのせてはなつとは侍れとそれは後の事也あなかちそれまての心をはいはす唯三とせといはんとてひるの子と朝綱か歌にかゝりていへる也河海に根(ネノ)國へなかされしとあるは素盞嗚尊の事におもひわたりてしるされたるにや

宮はしらめくりあひける時しあれはわかれし春のうらみのこすな　太神宮造替の事を古抄ともにはひきたれとそれは廿一年をへて作りかへられ侍れはあまりにひさしきたとへにやこれはたゝめくりあふと云詞詮要也しからは日本紀に伊弉諾伊弉冊の尊天の御柱をめくりて一ッ面テにあひ給事あれはその事を宮柱めくりあふとは申侍るへきにや蛭ノ子の足たゝぬなとにもそのよせあるやうにおほえ侍り八尋殿をたてゝ同ㇾ宮共に住給ふといへは宮はしらといはん事相違あるましきにや

かへる浪につけて御ふみつかはす　うちをくりの人

のかへるにつけて文やり給ふ也
なみのよる〳〵いかに　伊勢集　あまをふねわれたにおもひをつけてしをなみのよる〳〵まつとおもはん
なけきつゝあかしの浦に朝霧のたつやと人をおもひやるかな　あかしの浦の朝霧は人丸か歌をとれりたつやとは明石のうらをたちて宮古へのほるかとまち給ふ心なり
人しれぬ物おもひさめぬる心地して　物おもひさむるとはまさる心にいへりとたえつるおもひを人によひさまされたるやうなるへし源氏の君の都へかへり給ふを聞てたゝならぬ心也
まくなきつくりてさしをかせたり　或説にまくなきと云蟲をはらはんとてあらゝきを折てみのにもかさにもつけて行はまくなきあたらすされはみの笠きてたれともしらせぬをまくなきつくると云といへりまくなきはらふ事は日本紀にみえたる事なれと蓑笠きたるよしは所見なし又五節の君の文を遂りし日雨ふるとは見えすさらんにとりてみのかさきるへき事いかゝとおほえ侍り又河海抄には文のつかひのひしめきかる〳〵しきをまくなきのとひちるにたるといへり使のふるまひあなかち詮要たるにあらすそれもいかゝとおほえ侍りなを別にしるすへし
かへりてはかことやせましよせたりしなこりに袖のひかたかりしを　後撰　いたつらに立かへりにし白浪のなこりに袖のひる時もなし　今案よせたりし名殘は浪をいへり後撰の歌をとりてよめる也かことやせましはかこちやせましなりすまの浦にありし時五節の君の船をよせしなこりに一しほかなしかりし事をかこつはかりにおもへるとなり

花鳥餘情第九

澪標　蓬生　關屋

十一澪標

以歌爲卷名源氏君廿七歲の十月より廿八歲の八月までの事あり廿七歲はあかしの卷の末同年也

さやかにみたまひし夢ののち院の御事を　源氏の故院を御夢にみたまひし事あかしの卷にみえたり寛平御記寛平元年九月甲辰依二御夢一有下被レ行二御八講一之事上先帝遷化後諸公子勠レ力當二果行一也即任レ意遊獵不レ勤二此事一可レ謂二不忠不孝甚者一也云々先皇を夢にみ給ひて御八講をおこなはれし事此卷にいへる所と相似たり此先帝は仁和の御門を申也

いかてかのしつみ給ふらんつみかろめきこゆるわさせんと　あかしの卷云我は位にありし時あやまつ所なかりしかとをのつからをかしありけれはそのつみををふるほといとまなくてと云々故院の源氏の御夢につけ給ふことは也

あいなくうれしき事に　源氏の君の歸京をたれ〳〵もうれしき事におもひて大きさきのあなかちにくみ給ふ御心にしたかふ人なきをあいなくとはいへる也

さしもおもふ給へさりしけしきこゝろはへ　これは朱雀院の御心におもひたまふなりさしもおもふたまへさりしとは朧月夜の朱雀院を源氏の君よりつきに思たまふ心はへをやう〳〵思ひしらせたまふとなり

なとてわか心のいはけなきにまかせて　朱雀院の我心のおこなかましくてよろつを太后にまかせ給へるゆへに光君をも須磨へうつし給へし事をくい給ふこゝろ也

ちしのおとゝ攝政したまふ　天皇御元服ののちもいまた幼主の時は攝政と是をいふ復辟の表をたてまつりて君に政をかへしたてまつりてのちは攝政をあらためて關白と稱す冷泉院十一にて御元服ありてすなはち御位につきたまふ太子元服の後受禪のとき攝政の例は淸和天皇貞觀六年御元服有同八年九月忠仁公良房攝政の詔を蒙るこの例に准するなり六十三の年齡なと忠仁公の例にたかはさることなり

人のくにゝも時うつり世中しつまらぬおりはふかき山におとをたえたる人たにもしろかみをもはちす　漢高祖戚夫人を寵せしによりて趙王如意を太子にたてかへむとせし時呂太后をそれうれへて張良にはかり事を問れしに父子の間の事なれはいかんともせさる事也たゝし商山に四皓とて四人の隱士あり高祖めせとも出ぬ者也これを太子のたすけにせられは高祖もしもやおもひなをり給ふことやあらんと張良かいひしにまかせて四皓をめしてこれをつれて高祖のまへに朝し給しかは高祖大におとろきて羽翼すてになるとの給て惠帝をもとのまゝに太子にてかへられさりし事を云也

たかさこうたひしわかきみも　榊の巻にあり紅梅の右大臣の事なり

おほ殿はらのわかきみ　おほとのはらはあふひのうへをいふわか君は夕霧の事なり中比よりは太閤を大殿といひならはし侍れとむかしはかならすしもさたまらさる事也攝政太政大臣の人世の人をもくして大殿といはん事難あるへきにあらす大臣をおほい殿といふ義にはあらさる也

三月ついたちのほとにこの比やとおもほしやらるゝ　あかしのうへこその六月より懷姙したまふことし三月は十ヶ月にあたるなり

すくえうに御子三人きさきみかとならへてかならすおはしますへしなかのおとりは太政大臣にてくらゐをきはめ給ふへしとかうかへ申たりしに中のおとりのはらに女はいてものし給へしとありし事もさしてかなふなめり　宿曜道に源氏の御子三人ましますへしと申は夕霧の左大臣冷泉院明石の中宮これ也さきさき御門は冷泉院とあかしの中宮を申也中のおとりとは夕霧のおとゝはたゝ人にてましませは御門きさきにならへて中のおとりとはいへる也たゝし夕霧は竹川に左大臣とみえたりそののちの昇進は五十四帖の中に所見なしといへとも夕霧のおとゝの薨逝の事も物語にみえされはつゐには太政大臣まてあかり給へるとをしはかるへき也物語のつくりさまおもしろくかきたるへし又中のおとりのはらに女はいて物し給ふといふはすなはち明石のうへをいへりむらさきのうへあふひのうへなとにならふれははりまのかみのむすめなるによりておと

りのはらとはいへる也
こ院にさふらひしせんしのむすめ宮内卿の宰相にてなくなりにし人のむすめ　あかしのひめ君の御乳つけ少將の君の事也母は宣旨の局といひし人父は宮内卿の宰相也宣旨の名はいまは攝關家にありむかしは院なとにも此號あるへし御形の宣旨なといふ名和歌集の中にあり
ものゝついてにいみしうしのひまきれおはしたり
源氏の君の少將の君のあはらやにしのひて出給へるなり
うちつけのわかれをおしむかことにておもはむかたにしたひやはせぬ　おもはんかたとはあかしのうへの事をいへる也
けにかしこき御心にかうかしつききこえんと　これよりは少將の君の心に思へる事也
あやしくねちけたる事なりや．ねちけは口きゝかましき心にいへりたゝし爰にはおもふやうにもなき心とみえたり
そよなたかならはしにかわらんつなしにくゝそみえ給ふや　そよなはさそなといふ詞也五音通也物にくみはいつならふへきにかと女君のの給ふにつきてそれはさそなといひてさらは又たれにならひてかつなしにくゝはみえ給ふそとおちあひて源氏のこたへ給ふ也人の思はぬ事をおもはせて物ゑんしなとするをつなしにくきとはいへるなるへし
としころあかす戀しう思きこえ給し　これよりは紫の上の事を源氏の御心に思ひ給ふ也
あはれなりしゆふへのけふり　あかしの卷に源氏の歌このたひはたちわかるともしはやくけふりはおなしかたになひかん
われはまたなくこそかなしいみしと思ひしつみしか　これよりは紫の上の心に思給へる事也あはれなりし世のありさまかなとは紫の上の過にしかたの事を思出しての給へる詞也
おもふとちなひくかたにはあらすとも我そ煙にさきたちなまし　源氏の君の煙はおなしかたになひかんとよみ給へる歌をかたり給へるによりて紫の上のその心をとりてよみ給へる也
なにとかあな心うや　源氏君の詞也なにとの給ふ事そやあな心うの事やと紫の上の歌をの給ふ心也下

のたれによりの返歌は源氏のむらさきのうへを又なく思へる心にてこそかゝるありさまもみえたてまつるに思ひしり給はぬ事のうらめしきと也
たゝひとつゆへそやとて　むらさきの君ひとりをさりかたく思ふ故にこそ人のうらみをはおはしと思へとの給ふ也
すくれたりけんかねたきにや手もふれ給はす　わかしのうへの箏をの給ふ心也
五月五日そいかにはあたらむ　わかしのひめ君三月十六日誕生五月五日は五十日にあたるべし
わか御すくせもこの御事にそすこしかたほなりけりと　かたほなるとは人のおさなき時をいへりすくせのかたほなるといふは行末の事いまたさたまらぬ心也
うみ松や時そともなきかけにゐてなにのあやめもいかゝわくらん　五月五日の事なれはなにのあやめといへり又いかゝは五十日におもひよそへたり返歌のけふもいかにといへる同心也
いけるかひつくりいてたり　いける世のかひ也かひつくるはなくをいふよろこひなきの心なり
やみのよにてそくれぬへかりける　京よりの御使の見すはやみのよのにしきにてあるべき心なり
さみたれのつれ／＼なるころ　花ちる里へわたり給ふ事也
かの院のつくりさまなか／＼見所おほく　これは二條東の院の造作の事也
よしあるすりやうなとをえりいて／＼あて／＼もよほさせ給ふ　受領に人を申なしてその功に殿々門々なとをあて／＼作らする事也造内裡なとの時もかくのことくある事也
太上天皇になすらふるみふたまはり給ふ　女院もしは御位につき給はて院になり給ふ小一條院なとをは太上天皇の尊號とは申侍らすたゝし封戶年官年爵なとは差異もなけれはなすらふるとは申侍る也御封とは封戶也三宮はその／＼千五百戶なるを太上天皇になすらへて二千戶たまはりたまふ心也院司は女院かたの事をつかさとる判官代主典代なと也
ひやうふきやうの宮もとし比の御心はへのへたてすまの御うつろひのとき兵部卿の宮むらさきのう

へにきこえたまはさりしを源氏の君うらみ給ふて
となり
こそことしさはる事ありてをこたりける　むかしの
上としてことにすみよしにまうて侍るか兩年は懷姙
の事によりてをこたりし也
かく人十つらなと　十列とは東遊の舞人十人馬にの
りて裝束はあをすりといふ物をきて神社の行幸關
白の賀茂春日詣なとにめしくして社頭にて求子な
と舞てそののち馬場にて馬をはする事ありよのつ
ねは左右近の官人是をつとむ八幡臨時祭なとには
殿上の雲客舞人たり源氏の君すみよしまうてにも
樂人十つらをくし給へるなるへし
うへのきぬのこきうすきはかりを　紫もあけもみと
りも位によりて淺深あるを云也
六位のなかにもくら人はあを色しるくみえて　六位
のくら人麴塵の袍をあをいろと云也
かものみつかきうらみし左近のそうゆけいになりて
齋院御禊に一員つとめし人源氏のすまへうつり給
ふ時御ふたけつられしか歸京の後もとの位になり
ていまは又ゆけいの尉にて六位の藏人かねたり隨
身なとめしくしてこの御物まうてにつかうまつれ
る也
よしきよもおなしすけにて　延尉のすけにて赤衣を
きたる也
かはらのおとゝのれいをまねひてわらはすいしんを
給り給へるいとおかしけにさうそきみつらゆひてむ
らさきのすそこのもとゆひなまめかしく　長德二年
八月九日御裳殿于時左大臣辭左大將同日以童六人爲
隨身三年十月九日勅賜左右近衛府生各一人近衛各
三人爲隨身但停童子云々　今案わらは隨身みつら
ゆひてむらさきすそこのもとゆひするよしはみえ
たれとその裝束の色目所見なし水干たるへしやか
りきぬたるへしや隨身といへは弓やなくいをおふ
へきにやいつれもたしかなる證據を見侍らす御裳
殿は六人とみえたりこれには十人とあり
おほとののはらのわかきみ　夕霧の事也殿上わらはに
て供奉せられたる也今年七歳歟
くも井はるかに　人の行末とをき事を云也
わか君の數ならぬさまにて　あかしの姫君の事也
なにはの御はらへ　代始に八十島祭は難波にてあり

典侍の人御衣をもちて參向して解除する事ありこれみなにはのはらへの例也
ほりえのわたり御覽して　仁德天皇の御時はしめて堀れける河也
なのめなる人たにすこしあはきかたによりぬるは　あはきかたは淡々しきと云心なり遊女を賞する事を云也
いてやしまこきはなれ　おちくほの歌　今はとて島こきはなれ行舟もひれふる袖をみるそかなしき
まことやかの齋宮いかはり給にしかは　冷泉院御位につき給て又齋院かはりたち給へは六條齋宮は御息所ともにのほりたまふなり
つみふかきほとりにとしへつるも　齋宮にてましますほとは佛經をいむことなり
きえかてにふるそかなしきかきくらしわか身それともおもほえぬ世に　わか身それともはみそれをかくしてよめるなり
くたり給しほとよりなとなをもあらすおほしわたりしを　齋宮のくたり給ひしのちはなをもたゝあるましく心にかけ給ひしかともいまは我まゝなる世になりたるやうなれとみやす所のうしろめたけにの給し事をおもひいたし給て大かたの御うしろみはかりはかはらすあつかひきこえんと思ひはなれたる心なり
はなれたてまつらぬわかむとをりなとにて　齋宮にしたしくまいりよれる王氏の女を云也
さふらふ人々もやう〳〵あれゆきなとして　やとをあらして行ちる心なり
しもわたりの京極なれは　六條京極を云也
山寺の入あひのかね　朗詠歌　山寺の入相の鐘の聲ことにけふもくれぬときくそかなしき　今案これは東山の寺の鐘の聲のきこゆることなり
うへにもしかなんおもふとかたらひきこえ給て　紫の上のかたり給ふこと也
すこしおとなひてさふらひたまはん御うしろみは　御門は十一歲秋好中宮は廿になり給ふ也

並一　蓬生

以詞并歌爲卷名詞云えわけさせ給ふましきよもきふの露けさになん侍るとあり歌にはしけきよもき

のとあり是は横の並也源氏の廿七八歳の事みえたりさりなから蓬生の君の始終をかきあらはすによりてはしめは源氏のすまへうつり給て歸京の事をかきをはりには又二とせはかりふる宮になかめ給ひて二條の東の院につゐにうつり給ふ事をのせたりこれは物かたりの家にかきそへたることなり本意はまさしくよもきふのやとを尋給て露わけ給ひし事源氏の廿八の四月のことなりこれをもて横の並にはとれるなり

一かたのおもひこそ心くるしけなりしか　源氏の君にはなれ給ふなけきはかり也

たけのこの世のうきふし　薄雲女院は東宮をもち給てなくさみ給ふをいふにや

さるものゝようして　用也

それこそはよのつねのことゝて　計會すればさやうの調度なとはうりはなつもそれこそよのつねのことなれといふ也

きほうし　世俗に木男といふかことしあらくしきを云也

つやゝかにかひはいて　貧家淨掃ㇾ地といふ心なり

東坡か詩にあり

しらぬ所よりはおやなともまうてかよひしをと　しらぬところにゆかんよりはおやなともまうてかよひしをとおもひて侍從か常にこの人とむつふるなり

もとよりありつきたるさやうのなみ／＼の人は　この段はおほかた世にかゝる事のあるをいふなりたとへは種姓いやしき人も我身をおとしあふさす思あかるたくひもあり又やむ事なきすちの人もいやしき人にむすほゝれぬれは下すしき振舞をもするならひなり末摘君のをは君のありさまを云也なを／＼しきはけすしき心にかなへり

侍從もかの大貳のおひたつ人にかたらひつきて　侍從は大貳の姪の妻になりたるなり

かのとのにはこ院の御ために御八かう　十月のことなりみをつくしの巻にあり

大將とのなとおはしかよふ　源氏の君この時は大將をさりたまへれと女房なとはいひつけたる事をいふなり

たゝいまは式部卿の宮の御むすめ　兵部卿を式部卿

とかきわやせれり乙女巻に式部卿にはなり給へるなり

こまゝのの給をきし事も　すゑつむの御めのと侍従かはゝ也おさなきものゝめのとをはまゝとおしなへてなつくる也

としもかへりぬ四月はかりに　源氏廿八の歳也二月に内大臣になり給ふ

はなたちはなにかはりて　はなちる里のもとへ出給ふみちの事なれははなたち花にかはりてといへるなり

されとおほしわくましき女こそ侍れと　これは侍従かをはの少将といふ女也

もしきつねなとのへんけにやとおもへと　新樂府古塚狐云大尾曳作二長紅裳一云々狐の女に變せる時はをのか尾をくれなゐの裳になせりいまかりきぬすかたの男をみてきつねのへんけにやとうたかへりその時は尾をかりきぬの裾に變すへし男にも女にも變化する故也

すきならぬ木たちのしるしにえすきてなむ　三輪の山しるしの杉はうせすとも誰かは人の我を尋ねんわかやとの松はしるしもなかりけり杉むらならはたつねきなまし　今案杉ならはいかにも尋ぬへきたよりあるへきを杉ならぬ木たちなれと打すきかたくて尋まいれるよしの給ふなり

藤なみの打すきかたくみえつるは松こそやとのしるしなりけれ　松をしるしといふ事は上の歌にもみえたり又三輪の明神の住吉の明神の所へかよひ給ふと云ふ事あり拾遺に住吉のきしもせさらん物ゆへにねたくや人にまつといはれんこの歌を住吉の神の御託宣としるしたるを三輪の明神を待給ふ時の心にいひならはせりを神の女かみの所へかよひ給ふ事にそのよせあるにやされは源氏の君のよもきふの宿を尋給ふ心に松こそやとのしるしなりけれとはよみ給ふなるへしすゑつむの返事のまつしるしなきわかやともおなし心にて侍るへし

むかし物かたりに丁こはちたる女も　此事いまた一決せさる事也顔叔子は男子也奥入に女といへる相違せりかつらの中納言の物語いさゝかによりたる事なりそれはまとしき女をいへり常陸の宮の事にたよりあるにや

ことなるおほえなきしもけいし　下家司也
一とせはかりこのふる宮になかめ給て　これよりは
物語の家に以後の事をついてにのせたる詞也

並二　關屋

以詞爲卷名也竪の並也源氏の君廿八歳の事なから
みをつくしの卷は八月の事にとゝまるこの卷は九
月石山詣の事をかけり故に竪の並とはいふ也
いよのすけといひしは故院かくれさせ給て又の年常
陸になりて　榊の卷にきりつほの御門かくれさせ給
ふそのあくる年常陸守になりて下向せるなり
つくはねのやまをふきこす風もうきたるこゝちして
古今歌　かひかねをねこし山こし吹風を人にもか
もやことつてやらむ此歌の心こゝにはかなひ侍り
ひたちの國の事にかきなし侍るによりてかひかね
をつくはねとはいひかへたるへし兩首ともに東歌
の中也
又のとしの秋　源氏廿八歳歸京のあくるとしのこと
なり
いろ〳〵のあをとものつき〳〵しきぬいものくゝり
そめ　狩襖はぬいものをもくゝりそめをもする也又
織物をも用也一本にひものくゝりそめさまもとあ
り
かのむかしの小君いまは右衛門のすけなり　この人
もひたちにくたりて今のほる也
一日まかりすきにしかしこまりなと申す　源氏は石
山に七日參籠し給へるにや一日と云詞いかゝみる
へきにや
わくらはに行あふみちをたのみしも猶かひなしやし
ほならぬうみ　行あふみちは近江路にそへたりしほ
ならぬ海はみるめなき心にいへるにやしほならぬ
海ときけはや世とゝもにみるめなくして年のへぬ
らん　貫之
なをきこえ給へ　空蟬の君になをきゝたまへと云詞
也
女にてはまけきこえ給へからん　空蟬の身にてはま
けて御返事を申させ給へ何事かあらんと衛門佐か
さかしらする也
あふ坂の關やいかなる關なれはしけきなけきの中を
わけゝん　相坂の關は杉の木陰をとをれはしけきな

けきとはよみ給へり

いかてこの人のためにのこしをくたましゐもかな

このためにのこすいのちをえてしかなおいて先た

つくゐなかるへく（兼輔）

いかてかすくし給へきなとそ　河内守はらたちてい

まよりのちは御身の事は我はしるましきさるにて

も殘りの御よはひいかてかすくし給ふへきと也

花鳥餘情第十　繪合　松風

十二　繪合

以詞爲巻名後拾遺集の詞に正子内親王繪合の事みえたり扇あはせ双紙合根合なとみな歌をもて詮要とせり源氏の君卅歳の時の事也繪合は三月の比也廿九歳の事は物かたりに所見なきにや

前齋宮の御まいりのこと　六條齋宮はみをつくしの巻に伊勢より歸京したまふ今年廿二歳御門は十三歳になり給へし

御くしのはこうちみたりかうこ（ほどイニアリ）なとやうのはこともうちみたりの筥のふたのうへにては髪をけつる時打みたし侍れは筥の名になつけ侍るべし

さしくしの筥の心はに　さしくしの筥金銀の蒔繪の筥方四寸松の折枝鶴等をまくなり天暦三年藤花宴御膳折敷心葉藤花云々近代御前物折敷の四角にいとかねにて松枝をしていとにて葉をむすひてつるなとつくりてたつることありこれ心葉のよしなりいまさしくしのはこにもかねにて花をつくりてそへたるをいふへし此事梅か枝の巻にもあり

わかれちにそへしをくしをかことにてはるけき中と神やいさめし　この齋宮の御くたりは朱雀院の御在位の時の事也御額にくしをさしては二たひ京のかたへおもむき給ふましきよしを御門のの給ふ事あれはそれをかこつけことにてわか身にかくとをかるへき中と神のいさめ給へるにてありけるといふ心なり櫛をは髪にさせはそれを又神によそへていへり

あるましき御事なりしるしはかりきこえさせ給へ　源氏の御詞なりいまとなりて御ふみかよひなとはあるましき御ことなれはたゝしるしはかり申させたまへとなり

わかるとてはるかにいひし一こともかへりて物はいまそかなしき　わかるとてはるかにいひし一こと〻は御門のわかれのくしたてまつり給ふ時の御詞なりかへりては歸京の心なり上の詞に御やす所の御事なとかきつらねあはれにおはされてとあれはそのかたにとりなしてかへりて物はかなしきとよみ給へるなり

人しれすおとなははつかしうやわらんとおはしける

を　御門の御心におとなしきときこしめしてはつかしくやあちらんとおほしめしたるなり

うへはよろづのことにすぐれてゑをけうあることに宋の徽宗皇帝好畫此時畫及第といふ事ありこれによりて畫の上手ともおほかりけるそれははるかに後のことなれとことの次にかきのせ侍るなり

又こなたにもこれを御らんするに　こうきてんの女御の御かたにて御門の御らんせんとする心なり

この御かたにもてわたらせ給をもおしみ申給へは齋宮女御の御かたへもてわたらせ給はんと御門のおほしめすにもおしみたまふとなり

ひとりゐてなけきしよりはあまのすむ方をかきてそみるへかりける　紫の上の歌なりあまのすむかたをかくは須磨にての源氏のありさまをゑにかきたるを云なり

うきめみしそのおりよりもけふは又過にしかたに歸るなみたか　すきにしかたもむかしかきたる繪のかたにそへて紫の上のたゝいまかなしと思へるけしきを見給へは更に涙をもよほし給ふ心なり

梅つほの御かたは　齋宮の女御は梅つほにおはします故なり

この人々のとり〳〵に論するをきこしめしてひたり右とかたわかたせ給　繪合は二度ありはしめのはまつ梅つほの御かたにてうちの御繪にあはせられたり後のは御殿にて梅つほの女御とこうきてんの女御との御繪にあはせ給ふなり

むめつほの御かたには平内侍のすけ侍従のないし天徳歌合には更衣典侍掌侍命婦なと方人たり故に此繪合にも其例をうつせり

たけとりのおきな　萬葉十六に竹取老翁のことありそれは物語にいへると相違せるなり物語の大意をいはゝたけとりの翁野山にたけをとりてつかひける中にもとひかる竹一すちありみれば三寸はかりなる人いとうつくしうてゐたり三月はかりによきほどなる人となりかたちけうらなることよになくやのうちくらき所なくひかりみちたりこの子の名をさきたけのかくやひめとつけつせかいのおのこときゝめてついせうしけり此かくや　ひめのいふやうゆかしく思侍る物をみせ給はんに御心さしのほとは見ゆべしつかうまつらんこともそれにさた

むへしといひて石つくりのみこには佛の御いしのはちをたまへくらもちのみこにはほうらいの山にしろかねをねとし金をくきとししろき玉をみとしたる木ありそれか枝をおりて給へいまひとりにはもろこしにあなる火ねすみのかはきぬたまへ大とものの大納言にはたつのくひなる五色にひかる玉とりてたまへといふくらもちのみこたくみらをいれかくれゐて玉の枝つくりいてゝもちておはしたるにたくみ玉の枝つくれる祿をいまた給はらずとてきてうれふこの時かくやひめまことかときゝてみつれはことのはをかされる玉の枝にそありけるといひてかへしつ右大臣あへのおほしはもろこしのわけいといふ人にひねすみのかはかひておこせよとておほくこかねをとらすたつねえたるとてをくるかくやひめ火にやかんにやけすはこそまことゝおもはめとて火の中にうちくへてやくにめら／＼とやけぬそれよりあへなしといふことははじまりける此五人いつれも心さしとけすなりぬ

かみのよのこと　上代なり

火ねすみ　東坡詩云　氷蠶不知寒火鼠不知暑

ゐはこせのあふみ　巨勢相覽者金岡之子云々金岡寛平時人爲其子則可爲貫之同時人

左右たゆます　左右ともにたゆますあらそふ心なりよのつねのあたことをひきつくろひかされるに　正三位の物語のことなり此物かたりいまの代につたはらす平内侍は左の方人なり

右のすけ　右方の大貳の内侍のすけなり

雲の上におもひのほれる心には千ひろのそこもはるかにそ見る　雲の上は正三位の物語にある事也千ひろのそこは伊勢物語をいふなりいせの海ある故也

みるめこそうらふりぬらめとしへにしいせをのあまの名をやくたさん　うらふりぬらめは心にみふりたるをいふ梅つほもと齋宮にてとしひさしく伊勢にまし／＼けるによりて伊勢物語をかたうとし給ふ誠にことはりにてそありける

しにかへりゆかしかれと　しにかへるはたへかねたる心なり

かみゑ　むかしはきぬにかきたるをいまの世には紙にかくをかみゑといふなり

又わか御世のことともかゝせ給へるまきに　これは

朱雀院のわか御代にありしことをきりつほの御門のかゝせ給へる御ゑにかきそへ給ふを云なり

かのさいくうのくたり給ひし日の大こくでんのぎしき　齋宮の御下向の時は大極殿に行幸なりてわかれのくしを御身つから齋宮の御額にさし給ふことなり梅つほの女御の御くたりの儀式朱雀院御心にわすれかたくおほしめされて公茂にかゝせられてたてまつらせ給へるなり物かたりのつくりさまおはれにおもしろく心詞さらに及ひかたく覺え侍り

えんにすきたるちんのはこにおなしき心はのさまなど　艶に透たる沈の筥とは沈の筥をすきたるふくろに入たるをいふにや又沈をゑりすかしたる筥と心得へきにや思さためかたし河海に心葉はくりかたに梅をしたりとしるされたるそれはしかるべからすかねにてうちたる花の枝を沈のはこにとりそへられたるにてこそあらめさし櫛の筥の心葉もみなおなしきことなり

身こそかくしめのほかなれそのかみの心のうちをわすれしもせす　朱雀院の御心に齋宮の女御の御入内をほいなくおほしめしたるなり

むかしの御かんさしのはしをいさゝかおりて　楊貴妃かのかんさしを半おりて方士にさつけて爲我謝太上皇といひて舊好を尋ねしことをおもひよせ侍り朱雀院もいま太上皇にてましますゆへなり

しめのうちはむかしにあらぬ心ちして神代のことも今そ戀しき　うちの御すまゐもむかしのやうにあらねば齋宮にてまし〳〵し時のこと戀しき心なり院の御歌はしめの外とあれはひきちかへてしめの内とよみ給へり

すきにしかたの御むくひにやありけん　朧月夜の尙侍の御ことをいへり

その日とさためて　三月廿日あまりなり梅つほとこうきてんとの御繪合なり

女房のさふらひにおましよそはせて　女房のさふらひとは臺盤所をいふなりこの繪合の御裝束は天德四年三月卅日內裏歌合を摸してかきなせるなり淸涼殿の西の庇にて有㆓此事㆒臺盤所立㆓御倚子㆒南第四間爲㆓左方女房座㆒北二間爲㆓右方座㆒渡殿南北敷㆓緣端疊㆒爲㆓公卿座㆒後涼殿簀子爲㆓侍臣座㆒云々西宮記に見えたり

左はしたんのはこにすはうのけそくしき物には紫のからのにしきうちしきにはえひそめのからのきなり　天徳歌合左方洲濱紫檀机蘇芳下机紫綺地敷云々今案左方繪は紫檀の筥に入て蘇芳木にてつくれる花足にすゆ又下つくゑあるべしそのしき物はむらさきの唐の錦なりうちしきは机をすへたる地しきなりそれは蒲萄染のからの綺なり天徳のすはまもしたんすはうにてつくりてむらさきの綺をちしきとせり

わらは六人あかいろにさくらかさねのかさみあこめはくれなゐふちかさねのをり物なり　あかいろのうはきにさくらかさねのかさみくれなゐふちかさねはみな袙なりあこめは二も三もかさぬる物なり

右はちんのはこにせんかうの下つくゑうちしきはあを地のこまのにしきあしゆひのくみけそくの心はへなといまめかし　天徳歌合右方洲濱沈机淺香下机淺縹浮文織物地敷云々今案右方繪は沈の筥に入たりけそくは今めかしくせられたる由みえてなに木にてつくれるとはみえすせんかうは沈のあさきをいふ下机をつくれりうちしきは下つくゑにしける地しきあをちのこまのにしきなりあしゆひのくみは花足をからみたるくみを云にや河海には色々のいとにて結たるよししるされたりおほつかなし天徳のすはまも沈淺香を用たる地しきはあさはなたとありこれは青地のにしきなりいさゝかかはれるなり

わらはあをに柳のかさみこうはいかさねのあこめきたり　あをにのうはきに柳のかさみ紅梅かさねのあこめをきたるなり河海云左のわらはあか色右あを色は舞の裝束にかたとるといへり　今案地しき左はからのき右はこまのにしきとみえたりこれは又左は唐樂右は高麗樂にかたとるにや

うへの女房もまへしりへとさうそきわきたり　うへの女房とは典侍掌侍等なりまへは左しりへは右を云これもあか色あをいろのきぬともをきたるにや

かみゑはかきりありて山水のゆたかなる心はへをえみせつくさぬ物なれは　紙をつきてかきたれはきぬのやうにもなくたけみしかくて山水のいきほひをみせつくさぬよしなり上の詞に中納言もその心おとらすこの比世にはたゝかくおもしろきかみゑを

つとへと丶のほることをとあれは紙ゑはこうきて
んの御繪をいふにや拾遺第九詞云廉義公かみ繪に
あをむま引る所とあり
いまのあさはかなるもむかしのあとにはちなく　紙
繪は山水のゆたかなる心をみせつくさねとも上手
のかきたるは筆のいきほひありていまのあさはか
なるもむかしのあとにいたくはちぬとなり
あさかれゐの御さうしあけて中宮もおはしませは
朝餉のにしの障子をあけて御簾をかけたるべし
ひたりになをかすひとつあるはてに　歌合に員指(カスサシ)と
てあるなり天德歌合には金銀藤枝を洲濱にすへて
かすさしの前にをく花の枝にてかすをとれるにや
ひたりかつになりぬ　天德歌合左勝員九云々
しなたかくむまれさらても人におとるまじきはとに
て　しなたかき人のさいかくもいたく人におとらぬ
ほとならはさのみふかくならひそいのちとさいは
ひとはならふことはいとありかたき物ぞとおほせ
ことありてほんさいのかたをしへ給ひしにさの
み我なからつたなきこともなく又すくれたる事も
なかりしか繪にをきてはこのましく思て心にいる
丶やうにありしと源氏の君のとはずかたりに申さ
せ給へるなり
筆とるみちと碁うつ事こそ　碁は東坡も三不能の一
にいへることなり
文才はさる物にていはすさらぬことのなかにはきん
ひかせ給ふことなん　文才は無上の藝能なれは中々
いふに及はすそのほかは管絃の道に達することな
んいとありかたきことなり源氏の君の諸道諸藝を
きはめ給ふことは嵯峨の一世の源氏北邊大臣信公
の例をうつしていへるなり
こなたはまたさやかならねと　御殿のにしむきなる
によりて廿日の月はこなたへさ丶ぬよしなり
ふんのつかさめしいて丶　李部王記承年四年新嘗會
勅召ニ書司一云々稱唯仰云御手奈良之万爲禮書司即
取朽女倭琴名置之御前云々
今案物合の後にはかならす御遊あり書司は女官の
名なり和琴をつかさとるによて和琴をもやかてふ
んのつかさと云なり朽女は宇多法師につかひたる
和琴なり
はうしたまはず　御遊にさいはらうたふ人拍子をと

るなり助音するをは付歌といへり天徳歌合終頭有
御遊雅信朝臣拍子侍臣召人等候之云々
ろくともは中宮の御かたよりたまはすみこは御そ又
かさねて給はり給ふ　帥宮繪の判者し給によりて別
に祿を給はり給ふなり
かのうらうらの卷は中宮に侍はせ給へと聞えさせ給
ふ　一本中宮にさふらふとあるは理不可然よし河海
にのせ給へり愚案もこれにおなじそのゆへはすま
あかしの卷はけふの繪合に源氏の君のたてまつら
せ給へれは中宮にさふらふへきいはれなし又上の
詞に中宮はかりにはみせたてまつるべき物也
かたはなるましき一帖つゝすかにうら／＼のあり
さまさやかにみえたるをえり給ふとあれは中宮へ
まいらせをかれよと申させ給へるに首尾相叶なる
べし此つきの詞にこれかはしめ又のこりのまきま
きゆかしからせたまふとありこれかはしめとはけ
ふのすまあかしの卷のことなりこれにつきてつき
／＼の卷をゆかしくおはしめすなるへし
この御時よりとすゑの人のいひつたふへき　世のこ
とくさに延喜天暦の聖代といひならはしたり冷泉
院をは天暦の御宇になすらへ侍るなり繪合の例に
ひける天徳の歌合も此御世のことなり
山さとののとかなるしいたし御たうをつくらせ給
さかに御堂を建られたること松風の卷にもあり大
井のさとの事をやう／＼いひ出すへきたよりにい
へるなり

十三　松風

以詞幷歌爲卷名源氏卅歳の事あり繪合同じ年也
ひんかしの院つくりはてゝ花ちるさとゝきこえしう
つろはしたまふ　乙女卷に六條院はつくらるそれよ
りさきに二條の東院をつくりて花散里移ろはし給
ふ六條院つくりいでて後花散里はうしとらのまち
にすみ給ふ明石のうへはいぬゐのまちと見えたり
この東院にうつせみ末つむはかり侍從はのこりと
ゝまり侍るなり
さるやうありて寢殿はふたけ給はす　河海の說あや
まれり紫上はもとより二條院の西の對にすみ給へ
り東院のしん殿をは源氏の御やすみ所に心あて給
ふゆへにふたけ給はぬをさるやうありとはいへる

なり
むかしはゝ君の御おほち中務宮ときこえしか　醍醐
御子中務卿兼明親王山庄在(リ)二大井河畔一號二雄藏殿一
也此親王を明石上の母君の祖父と云へり
この春より内のおほゐ殿のつくらせ給ふ御たうちか
くて　繪合の巻の末にかつ〳〵いひ出せり御堂は棲
霞寺におもひなすらへ侍り故に大覺寺の南にあた
りてと下にみえたり棲霞觀は左大臣融公の山庄な
り後に寺になりて棲霞寺といふ今の清涼寺の東に
ある阿彌陀堂これなり清涼寺はその西にある寺な
り小野宮右府記永延元年八月十八日法橋上人位奝
然申請云以愛太子(アタコ)山號五臺山大清涼寺建立一伽藍
置白栴檀釋迦尊像云々この釋迦は奝(テウ)然入唐してわ
たし奉る佛なりたゝし清涼山寺といふ名はむかし
より有しなり貞觀七年の國史にみえたり又李部王
記天慶之比棲霞寺釋迦堂と記せり奝然わたし侍る
よりさきにも釋迦堂はありしなりいとおほつかな
きことなり所詮清涼寺といふはもとより有ける中
に奝然別に一堂をたてゝ三傳の釋迦を安置し奉る
にや

みふのたいふの君に申給はりて　兼明親王長男伊渉
中納言二男伊行從四位上春宮學士民部大輔云々兼
明親王は文才世にすくれ給へる人なりこのみこう
せ給ひてのち御門よりなにたる文をかつくりをか
れたると御尋ありしに伊渉申侍しはことなる物も
さふらはすうさぎのかは衣こそ候へと申されしか
はめつらしきかは衣かなまいらせよ御覽せんとあ
りしかはかの菟裘賦をたてまつれり菟の字はうさ
ぎといふもしに似たりけれはいはれもしらす申侍
りそのうへ此賦の中にはゝかりたる詞あり君昏(クラク)臣
諛(ヘツラフ)とかゝれたるさしもみこは世にすくれ給へる人
のそのあとにみれんの子の侍けるを口おしきこと
には申つたへ侍るなり
劵なとはこゝになんあれと　劵は文書のことなり
つくらせ給御たうは大かくしのみなみにあたりて瀧
殿の心はへなとおとらすおもしろき寺なり　大覺寺
はもとは嵯峨院と號せり嵯峨天皇昔日閑放之地也
瀧殿は泉殿といふが如し大覺寺にも瀧殿あり棲霞
寺にもあるによりて心はへなとおとらすおもしろ
き寺とはかけるなり

これは川つらにえもいはぬ松かけに　是は大井の里のことなり
したしき人々はいみしうしのひてくたしつかはす
明石のうへのむかへに源氏の君の御心しりのともからを京よりくたされたるなり
露のかゝらぬたくひうらやましく　源氏の君御ゆかりにかゝらぬ人をうらやましく思ふとなり
みなれそなれて　みなれ木は水になれたる木をいふそなれ木ともいへり　安藝歌そなれ木のそなれそなれてむす苔のまはならすともあひみてしかなそなれは磯なれたる心なるべし
ましてもてひかめたるかしらつき　明石入道のことなり
もろともに都はいてき此たひやひとり野中の道にまとはん　もろともに都を出はあかし入道の播磨守になりてくたりし時のことなり野中の道は淸水のある在所をいふにや
世中をすてはしめしにかゝる人のくにゝ思ひくだり侍しことも　これよりは明石入道の女にかたり侍ることなりわか身世をおもひすてたりしかはりまのかみになりてかゝるすまゐしもたゝ女君ひとりのことを思ひたてまつりし故なり任はてゝ都へのほらんと思侍りしかともふるすりやうのしつめるたくひにてはおや大臣のなきあとをはつかしめんことを思て世をすてんによきかとてと思侍りしに思ひかけぬことのいてきてまうてきたるよしなかなかとかたり侍るなり
にしきをかくしきこゆらんと心のやみはれまなくあかしのうへのおとなふるをみて井中にあらせんは入道の心にやみの夜のにしきと思侍るなり心のやみは叉子を思ふ道をいへり
あやしき三のみち　地獄餓鬼畜生を三途といふ修羅を加ては四趣と云人天をそへて六道といふ三途は三悪道なり
むかし人もあはれといひける浦の朝霧へたゝり行儘に　島かくれ行舟をしそ思ふといへることはの中にあはれなる心はをのつからこもり侍るなり都へのほる舟のしまかくれゆくを入道のなかめゐて物かなしく思ふこの外別の子細あるへからす
かの御かたみのきむをかきならす　あかしの家ゐに

て源氏の君の御かたみのきむをひきならし〻ことを思いて〻人もきくましき所なれはすこしかきならしたるなり

故郷にみし世の友をこひわひてさへつることをたれかき(わイ)くらん　さへつることは琴にそへたるなり

かつらの院といふ所　水原河海みなあやまれりかつらの院は桂川のほとりにあるへしなほ別にしるすへし

れいのくらへくるしき御心　此詞は乙女の巻にもありむらさきのうへのわか御おほえのほとを人にくらへてあらそひ給心なりなてりなしとは紫の御心むかしのやうにもなきと世の人もいふものをとは御心をとらんとて世の人にいはせ給へるなり

すくれたる人の山口はしるかりけれと　山口は山入のはしめをいふなり伊勢造宮のあらんとて十月に山口祭ありそれも杣入のはしめをいへり又鷹狩にもいへり物のはしめを山口とはいふよくなるへき人はおさなき時より見ゆるたとへなり

せんさいとものおれふしたるなとつくろはせたまふ　これは大井のさとのことなり

か〻る所をわさとつくろふもあいなきわさなり　むかしよりあるたて石なとをつくろひなをさはむかしの面影もなきやうなれはあいなきとはいへり

さてもすくしはてねはたつ時ものうく　此一段の心詞すこふる心得かたき物なり河海にたつ時もたていしもつくろふ心に釋せられ侍るいか〻とおほえ侍りこれはたゝ源氏の君の歸京の時のことをかたり給ふにやさても明石のとまやにすくすへきにもあらねはおもひはたちしかとも名殘おほく心とまるはくるしかりしとすきにしかたのことを女君にかたり給ふなり

あさきねさしゆへやいか〻と　これはあかしの姫君の母うへをあさきねさしと卑下して尼公のいへるなりいやしき腹にいてき給ふと云心なり

みこのすみ給けるありさまなとかたらせ給ふ　兼明親王天延三年八月十三日龜山に祈水祭文あり後の世までも小倉山のふもと篁の中にその水のあとあるよし或記にしるし侍り

つくろはれたる水のをとなひかことかましうきこゆ　かことかましきとはかこちかましきなり石をたて

なをされてみこのすみ給しむかしにかはりたると
水のこたへたるやうにきゝなしたる心なり
いさゝゐははやくのこともわすれしをもとのあるし
や面かはりせる　わすれしはわすれましき心なり
御てらにわたり給て　李部王記天慶八年三月廿七日
重明就棲霞寺新堂修先室藤原氏周忌法會安置金色
等身釋迦如來像一躰云々同記棲霞寺釋迦堂三僧法
花三昧六僧供新稻七千束丹波播磨國加奉事奏請之
永代長講三昧を行ふよしみえたりいまの物かたり
に常行三昧といへるこれらをおもひよせたるへし
月のあかきにかへり給　大井里に歸り給ふなり
ちきりしにかはらぬことのしらへにてたえぬ心のは
とはしりきや　明石巻云このねたかはぬさきにかな
らすあひみんと女君にちきり給しかはかはらぬこ
とのしらへとはよみ給へるなり
にけなからぬこそは身にあまりたるありさまなめれ
にけなからぬは紫の君に似たるなりはりまのかみ
の女なとゝいふへくもあらねは身にあまりたるあ
りさまといへり
さとゝをしやとの給へは　みてはいとくるしかりぬ
へきいかゝすへきといへる上の詞にて見侍れは元
眞集の歌こゝにはかなひ侍り
はるかに思給へたえつるとしころよりは　これより
はめのとの詞なり
かのとけたりし藏人播摩守か子　解官せられし藏人な
りきの守が弟左衛門尉より五位になりたるなり良
清かことなり
人かけをみつけてきしかたの物わすれし侍らねと
これよりは良清か明石のうへの女房にいふ詞なり
やへたつ山はさらにしまかくれにもおとらさりける
を　これは女房の返答なり八重たつ山は大井のさと
の山かくれなる心なりこの所のすまゐもかのあか
しの島かくれにおとらさりけるをしる人もなしと
さう〳〵しかりつるにむかしわすれぬ人のあるこ
そたのもしけれといふなり
こよなしや我も思なきにしもあらさりしを　これは
又良清か心なりこよなしやはよろつうつりかはり
てこの世ならぬやうなり入道の女をは我もむかし
は思ひかけたりしいま思へはあさましうおほえた
りいまことさらにといふよりは良清か女房にいふ

詞なり
頭中將兵衛督　此二人は系圖なき人なり
まうけの物　儲物は被物(カツケ)なとのため女の裝束を用意せる心なり
行幸まちきこえ給心はへなるへし　久かたのひかりをたのむといふは君の光を待思ふ心あるなり伊勢かひさかたの中におひだるとよめるもかつらに侍ける時七條中宮のとはせ給ける時の御返事によめるうたなりうちの御つかひの御返事にたてまつり給ふにたよりあるにや
めくりきて手にとるはかりさやけきやあはちの島のあはと見し月　明石卷にあはとみるあはちの島のあはれさへと源氏のよみ給へるうたにかゝりてあはちの島のあはとみし月とは又よみ侍るなり
右大辨すこしおとなひて　此辨源氏の君の鴻臚館にて高麗人にあひ給し時の人かと先達の稱するよし河海にしるされたる大なるひがごと也源氏の高麗人に相せられしは七歲のときなりことしはすてに卅歲になりはべりいまゝて納言なとにも昇進せすして右大辨にてあるへきことといかゝとおほえ侍り
又一本には左大辨とあり
雲のうへのすみかをすてゝ秋の月いつれの谷にかけかくしけむ　いつれのたには霞の谷をいへり故院崩御のことをよめるなり
ものともしな〳〵かつけて　大井よりめしよせられたるまうけの物を管絃せし人にかつけたるなり
近衛つかさの名たかきものゝふし　北山大將儀云補物節事定物節等中少將相共ニ於陣座定補先成府生奏付殿上少將（奏聞後令藏人給上卿云々下兵部近衛若無帶刀藏人之少將者付藏人云々）次中將執筆定書番長以下々給將曹依次召立稱唯進立弁拜（大臣之大將或於里第定云々）今案物節といふは近衛とねりの中に東遊に達したる物を物節に補すその中に番長府掌等在之これによりて春日祭賀茂祭の使の羽林東遊近衛十人召具之於社頭求子するか舞なと舞之なり陪從は府生も陪從も近衛の官人なり陪從は和琴笛等役之賭弓すまふの大將のかへりあるしの時もみなあつまあそひあり物のふしの役なりその外神樂の人長召人なとも近衛舍人是をつとむるなりその中に番長といふは近衛中結供番するをいふなりそのほかは長上とて三百六十日番をするを云一本に

名たかきとねり物のふしとありとねりといふは官人にいまたならぬ近衛なりとねりは諸司にあることなり

いはけなける下つかさ　袴きのことなり

思はすにのみとりなし給御心のへたてを　是は紫の上の詞也我思はぬことをも思はせてとりなし給ふ御心のへたてをみしらぬやうなれはわか身もへたてあるにたれはうらなき心にこそありのまゝに申たまへいはけなき御心にはかなひ侍りなんひるの子のよはひならはいかにうつくしきころほひならむとえていたきかしつかまほしくおもひ給てうちわらひ給ふなり

としのわたりにはたちまさり　七夕の契にはたちまさるやうなれとなをむねわかぬことにわかしの女君は思給なり

花鳥餘情第十一

薄雲　槿　乙女

十四　薄雲

以歌爲卷名又詞云雲のうすくわたれるかにひ色なるをとあり言葉をもとりて名とせりともいふへきにや源氏卅歳冬より卅一歳の秋までの事みえたり

冬になりゆくまゝにかはつらのすまゐは　これは大井の里のことなり

かのちかき所におもひたちねと　二條院の東院をいふ也

かしこにはとしへぬれどかゝる人もなきか　紫の君のはらに子なきことをいへり

日なととらせ給てしのびやかに　ひめ君の二條院へわたり給ふべき日なり

雪ふかきみ山の道ははれずともなをふみかよへ跡たえずして　心はふみにてなりともたえず問給へのよしなり

れいは待きこゆるをさならんとおもふによりむねうちつふれて　よのつねは源氏の君を待きこゆれとけふわたり給へるはわか君の御むかへにやと思ひてむねつぶれたるなり

人やりならずおぼゆ　人のするわざにてもなきなりあかすなにかたゝかうくちおしき身のほどならず

あかすはわか君をわたし給をいなとは思ひ待らずわが身のくちおしきさまならすたにもてなさせ給はゞとなり

おひそめしねもふかければたけくまの松に小松の千代をならへん　武隈の松は二木なればあかしの上とむらさきのうへとの二人にたとへたるべしさきの卷にあさきねさしゆへやいかゝと尼上のいひしをなぐさめてねもふかければとよみ給へり

御はかしあまかつやうの物　皇女の御はかしをくせらるゝことは陽明門院よりのことなり

いかにそや人の思ふべききすなきことはこのわたりに　おなしくは紫のうへの御はらにてあれかしきすなき玉にてあらんの心なり

わかきみのたすきひきゆひ給へる御こしつきそ　河海にひきのせたることみな僻事なり別に註すべし

そのとしもかへりぬ　源氏卅一に成給ふなり

七日の御よろこびなどに　正月七日のいはゐをいふべし

東の院のたいの御かたは　花散里東院のにしのたいにすみ給へり

さくらの御なをし　つねのなをしのうらこき蘇芳なるを櫻色といへり下の櫻人の歌に縁ある色なるべし

とにも出たまひぬべければ　外なり簾の外なり一は戸なり

あすかへりこんと口すさみして出給ふに　櫻人歌に

その舟ちゝめはとゝめなりせなは夫なりさねこしははやくは来らしの心なり

舟とむる遠方人のなくはこそあすかへりこむせなとまち見め　さくら人の心をよみ給へりをちかた人は明石のうへにたとふるなり

ゆきてみてあすもさねこん中々に遠方人は心をくとも　これは源氏の返歌なりあすははやくかへりこんと云心なり

かくしもひきくしけんとおぼす　一本ひきくつしけんとおほすとありくしは具なりくつしも同心なり

物のとゝのほりたる心なり河海には薫の字に釋す不審なり

すきたりとおほすはかりの事はしいでず又いたうひけせすなど　すきは過なり身のほどにすきたるふるまひはせぬなりさてかく卑下せぬは過不及なき中庸のだうりなり

うつしさまなるをりすくなう　いつも違例がちなる心なり

うへのゆめの中にもかゝることの心をしらせ給はねば　六條院の御子なることをうへのいまたしらせ給はぬよしなり

人しれぬあはれはかきりなくかなしくて　人のしらぬあはれとは女院ど源氏との御中のことなり

院の御ゆいこんにかなひてうちの御うしろみをつかうまつり給　これは故院の御遺言によりて源氏の君の政をしり給ことを女院の御心に日ごろうれしく思給ひしことをほのかにの給ふなり

御いらへもえきこえやりたまはす　源氏の御涙にむせび給て御いらへもえ申給はぬとなり

かんたちめ殿上人などひとつ色にくろみわたりて

天下諒闇のことなり
よゐにさふらはせ給ふ　よゐの僧は二間に候するなり御持僧のことなり
てんけんのおそろしく　五眼の一なり帝釋梵王等の照見也
ほとけのいさめまほり給ふのりのふかき道をだに　一本しんこんのふかきみちをだにとあり
そのうけ給はりしことどもとてくはしくそうするに　當代のみかどまことは源氏の御子にてましますことなり
日のもとにはさらに御覧しうる所なかりけり　陽成院の御母二條后なり業平中將かの后にちかつきまいることいせ物がたりにみえたりよて陽成の御門は中將の子といふことありそれもたしかにしるしつたへたるふみなどはなきなりうす雲の女院の御事これになずらへておもふべし
ひんかしの院に物する人の　花ちる里のことなり
なをこのかとひろげさせ給て　これはあかしの姫君のかならずきさきに立給ふべきことをおぼしよりたるなり中宮などの行啓には鳳輦もしはいとけの車などにめすことなれば驪馬高蓋になずらふる也
やまとことばには秋のあはれをとりたてゝ　春はたゞ花のひとへにさくはかり物の哀は秋ぞまされる
はかなくきえ給にし露のよすがに　六條御息所かくれ給へること秋なればかくの給へり
しのびかたきおり／＼もはへるかしと　秋の夕はしのびがたきおり／＼あるとは中宮になまむつかしきことをほのめかし給ふによりて心えずとおぼして御いらへもなきなり
まことに心ふかき人はかくこそあらさめれ　源氏の君のわが心あさきことを自稱し給ふなり
やなぎが枝にさかせたる　源氏の君の萬事にかけたる所もおはしまさぬをほめていへるなり
これはいとにげなきことなり　秋好中宮にたはふれことなど申給ふはあるまじきことをにげなきとはいへり
おそろしく罪おもきかたは　六條御息所の御事なり
思ひやりすくなき程のあやまちに　わかき時のことをの給ふなり

このみちはうしろやすくふかきかたの　これはたい
の姫君のなからひをの給ふなり
つねよりもおやかりありき給　源氏のいよ〳〵中宮
を御子のごとくし給ふなり
たゝ御ためにやさう〳〵しくと思ふこそ　そう〳〵
しきはさひ〳〵しき心なり君の御心をもなぐさめ
ばやとおもふ心あるよし紫上にかたり給ふなり
かゝるすまゐにしほしまさらましかば　すまあかし
にてかゝるいさり火などはみなれ給ふことをいへ
り
あさからぬしたのおもひをしらねはやなをかゝり火
のかけはさはけり　かゝり火の影となる身のわびし
きはなかれてしたにもゆるなりけり　今案下の思
ひはなかれて下にもゆるをいふかげのさはぐと云
は火の光のさたまらぬ心なるべし下のおもひにく
らぶればあさはかなる心なり
たれうき物とをしかへしうらみ給ふ　源氏の君の御
心をうき物とあかしのうへのうらみ給ふなり
たうときことゞも御心にとまりて　さかの御堂にて
御念佛し給ふとて程をふれば大ゐへもしけ〳〵と
わたり給ふことに又女君はおもひまきれたるとの
給へるなり

十五　槿

以歌并詞爲卷名源氏卅一歳の事薄雲の末の年と同
なり
齋院は御ふくにておりゐ給ひしそかし　あさがほの
齋院は桃園式部卿の御女さか木の卷に賀茂のいつ
きにたち給ふうす雲の卷に父宮の御服によりて齋
院をおりゐ給ふなり
こおほとのゝ宮は　あふひのうへの母は三の宮桃そ
のゝ宮は女五なりさてこのかみとはいへり
このうせ給ぬるもさやうにそくひ給ふおり〳〵あり
しかど　うせ給ぬるは式部卿の宮のことなり齋院を
源氏にあつけたてまつりたく思より給へりしを三
の宮にせんせられてくい給へりしよしをかたり給
ふなり
にひ色のみすにくろき御木丁のすきかけ　服者の所
の御簾へりもつかうにはにひ色のぬのを用るなり
くろき木丁とは木丁の手くろぬりにしてまきゑら

てんなしかたびらはこれもにひ色なり

神さびにけるとし月のらう　ひさしくふりにたることを神さふるとはいふなり齋院に申給へることばなれば神さふるはたよりあるなりらうは勞なり奉公のらうなどいふがごとし

ありしまはみな夢にみなして　父宮の御ことなり

人しれず神のゆるしを待しまにこゝらつれなきよをすぐすかな　齋院にては男女のみちはゞかりあり退出し給ふを神のゆるしとよみ侍るなりこゝらはおほきなり

さるはいといたうすくしたまへと御位のほとにはあはさめり　すくし給ふはねびすくし給ふなり御位の程とは源氏時に内大臣なり大臣などはいかにもとしたけたるがよきことなるをこのおとゝねびすくし給ふとはいひながらいまだわか〳〵しきかたましり給ふを御位のほどにはあはぬといふなり

なべて世の哀ばかりをとふからにちかひしことと神やいさめん　齋院の御返事は大かたの世のあはれを申うけ給はるにつきてあたなるふるまゐはいつきの宮の時ちかひしことあれば神はわすれずいさめ給ふべきとなり

みそぎを神はいかゞ侍けんなと　戀せしとみたらし川にせしみそき神はうけずもなりにけるかな　今案ありし世の罪はみなしなとの風にたくへてあとかたなくなり侍れと戀せしのみそきは神もうけたまはぬやらんいまもおなじ心に侍るよしの給ふなり

よはひのつもるにはおもなく　おもなくは面白なき心なり

世にしらぬやつれをいまそとたにきこえさすへくやはもてなし給ひけるとて出給　やつれすがたを見おくり給ふべくきこえまほしきとなり

おほかたの空もおかしきほどに木の葉のおとなひにつけて　これはもとのことを齋院の女房ともの思へることとなり

みしおりの露わすられぬ朝がほの花のさかりは過やしぬらん　式部卿の姫君にあさがほたてまつりし事ははゝき木の卷にみえたりそれを見しおりの露わすられぬとはよみ侍るなり

かつはなときこえ侍り　かつは我身のおとろへも思

しられたりといふは朝がほの花を見て思ひしりたる心なり下の詞におとなひたる御文の心はへとはこの心をいへり

につかはしき御よそへにつけても露けくとのみあるは　朝がほはかなき花なりさてにつかはしき御よそへとは齋院の返事にかき給へり露けくのみとは御思ひの中なれば露けき袖をうるほすよしなり

あをにびのかみ　服者の用ゐる紙の色なり

はゝゆかむ事も　四方なる物のゆかむごとくつみなきこともまねひなすにはゆがむことのあるとなり
これは物がたりの作者の心なり

さえかへりて　さらにもとにたちかへりてなり

ひんかしのたいにはなれおはして　二條院の東の對なりせんしは齋院の宣旨なり

おなじすちには物し給へと　あさがほの齋院は源氏といとこにてましませばおなじすぢといへりよそほかならぬことにてはあれどもの心なり

よろしきことこそうちゑしなど　なをさりなることにこその心なり

ふゆつかた神わざなどもとまりて　諒闇によりて十一月の神態なとも停止せるなり

にひたる御そともなれと　源氏の君諒闇によりてにひ色のなをしを着給へるなり

うすゝきいできて　世俗にうすふるふなと云心なり

こほ／＼とひきて　かきのなるをとなり

昨日けふとおほす程に三とせのあなたにもなりにけるよかな　源氏君廿七歳すまより都へかへり給ふことしは卅一まことは五ヶ年なれど三とせのあなたといへるはおほかたひさしきことには三年といひたれどなほひさしきことに三とせのあなたとはいへるなり

木くさの色にも心をうつすよと　朝顔をもちあそぶ心によそへていへり

おやなしにふせるたび人とはくゝみ給へかしとて　源内侍をおはをとゝとの給ふにつきておやなしにはくゝみ給へかしとの給ふは世俗に母のなき子をばうはやしなひにする心なり

いひこしほどになとなときこえかゝる　源内侍のすけとし寄たることをなげく詞なり

としふれと此ちぎりこそ忘られねおやのおやとかい

ひし一こと　おはをと丶といはれしゆへにおやの親とはいへりこの契は子にことばをかるなり
身をかへて後もまちみよこの世にておやを忘るゝためしありやと　身をかへては生をかへてなり此世も子によそへたる詞なり
ありつるおいらくの心けさうもよからぬ物の世のたとひと聞しと　源内侍のすけのわかやくにつきていへりしかも又月さし出てと上にあればしはすの月よにならへていへるなりよからぬ物とは十種の冷物をいふなり
あらためてなにかはみえん人のうへにかゝりときゝし心かはりを　人のうへにきくだにむかしといまと心のかはるははいなく思ひ侍るをまして我身になりてはなにかあらたむべきとよみ給へるなり
としころしつみつるつみうしなふばかり　齋院にては御神事がちにて御をこなひなどの事もなかりしなり
御はらからのきんたちあまた物し給へと　齋院の御はらからあまたあるやうにみえたれど系圖にはみえさる事なりさもこそありつらめと思やるべきなり物かたりにこのたぐひこれおほし
ひとつ心とみゆ　齋院の女房達は源氏の君とおなじ心になるを云なり
おとゝはあながちにおぼしいらるゝにしもあらねどこれよりは源氏の君御心の中をかきあらはしたるなり
むかしよりあまたへまさりて　經なり世の中の人の心のとあることもかゝることもとしをへてしりつくしたまふ源氏の御心なり
宮うせ給てのち　薄雲の女院の御事なりまろかれたる御ひたいかみ　涙に御くしのまろかれたるなり
すさましきためしにいひをきけん人の心あさゝよとて　清少納言と紫式部とは同時の人にていとみあらそふ心もありしにやしはすの月夜少納言はすさまじきものといひしを式部は色なきものゝ身にしむとい へり心々のかはれるにや
とのゐすがた　わらはの御とのゐせしまゝの姿なりちいささともはわらはけて　童氣なりおさなけなると同じ榮花物語にも此詞あり

ひとゝせ中宮の御前に雪の山つくられたりし　此中宮は薄雲の女院の御事なりよにふりたるは雪山はむかしよりそのあとたひかさなるをいふなり又花山院後涼殿の前の南の壺に雪山つくられて作文ありしことは小右記にみえたり寛和元年正月十日のことなり

君こそはさいへとむらさきのゆへこよなからず　紫の上は女院の御めいなればゆかりこよなからずとなり

さう〳〵しきになにとはなくともきこえあはせ　さび〳〵しき時はなに事となけれと前斎院には物きこえてなぐさむによしなからぬあたりにてありとかたり給ふなり

内侍のかみこそはらう〳〵しく　これは紫の上の詞なり内侍のかみはあさはかなるすぢなどはもてはなれたる人の御心をなにとやらんきゝしことのありしと心もとなくの給ふなり

さかしなまめかしうかたちよき女　是は源氏の返答なりかんの君に名のたちしことをかたり給ふなり

このかすにもあらすおとしめ給ふ山さと人こそ　明石のうへのことを源氏のかたり給ふなり思あかれるさまをもみけちて侍とはあかしのうへは人にもをさるまじき人なれば思あかれるさまを源氏の見けち給ふとの給へるなり

ひんがしの院になかむる　花散里のことなり

戀きこゆる人のおもかげに　うす雲の女院の御ことなり

いさゝかわくる御心もとりかさねつべし　あなたこなたへ源氏の君のわけ給ふ心もなきとなり

かきつめてむかし戀しき雪もよに哀をそふるをしのうきねか　かきつめてはかきあつめてなりむかし戀しきはうす雲の女院の御ことと上にいへることなり雪もよは雪のよ也雨もよもあめの夜也一説雪もよは雪もよほしと云詞なり新古今草も木もふりまかへたる雪もよにの歌は催心にかなへるにやをしのうきねは鴛鴦の契對の御かたと物語し給ふ夜の事なり

御すきやうなと所々にせさせ給ふ　故宮の御ために御誦經せさせ給ふ也

十六　乙女
以歌幷詞爲卷名源氏君卅二歳の三月より卅四の十月までの事此卷に見えたり
としかはりて宮の御はてすぎ　去年の三月薄雲女院かくれ給ふことしの三月周闋にあたれるなり
世の中色あらたまれる衣かへのほど　天下皆諒闇の服をあらたむるなりすなはち又四月の更衣のころにあひあふなり
おほかたの空も心ちよげなるに　四月は清和の天氣といふなり
こそのけふまでは　源氏の御文の詞なり下の歌にかゝりたる詞なりこその御禊の日までは齋院の御ふくにならせ給ふへしとも思ひよらざりし心なり
かけきやは川せの波も立かはり君が御そぎのふちのやつれを　かけきやはゝ思かけきやはといふ詞也
ふちのやつれは藤衣をいふそれを川の淵によそへていへり藤を川のふちにいふ事は此物語にもふちに身をなけつへしやは此春は花のあたりをたちさらでみよとあり君がみそきは齋院の御除服の事也

紫のかみのたてふみ　紫の紙にかくは藤につくるゆへなりふちは又藤衣に思ひよそへたるなり
ふち衣きしは昨　と思ふまにけふはみそきの瀬にかはる世を　ふちのやつれも昨日とおもひたればはや一めぐりになりて除服し給ふ心なりせにかはる世は古今の歌あすか川ふちにはあらぬ我やども瀬にかはり行物にそありけると侍る言葉をとれるなり
こ宮もすちことにてえみたてまつらぬなげきを　すちことには他流になりてけいつなどにも別につることとなりえみたまはぬとは源氏を我むこと見たまはぬこゝろなり
やむことなくえさらぬすちにてものせし人も　あふひの上のことなり
かくさらかへり　この詞あさかほの卷にあり
わが心をつくしあはれをみえたてまつりて　これよりは源氏の君の心に思ひ給事也
やがて四位になしてんかしと　親王の子は元服の後やがて從四位下に叙す源氏の君はよのつねの源氏の同列にあらず故に親王の子に准じて四位に叙し給はんとおぼしめしよりたれどもなをしんしやく

あるよしなり
あさきにて殿上にかへり給ふを　一世源氏の子は其蔭從五位下なればあけの袍を着して還昇すべきに冠者の君のあさぎを着することニの意あり五位の蔭たりといへどもいまだ叙爵せさる時は無位なり延喜縫殿寮式に無位は淺黄と見えたり故にあさきにて殿上にかへるとはいへり無位は黄袍と云一說ありきりつぼの卷にしるし侍りぬ一云六位のみどりの袍をあさきといへり深緑の色は藍と蘗とにて染たりあさきの色にかよひたる故也是によりて三條の上のめのとの詞に六位宿世といひ夕霧の歌にはあさみどりとやいひしはるべきとあれば六位の袍にて還昇せりといふべきにや
大かくのみちにしはしならはさむのほい侍るにより　西三條大臣良相公は閑院左大臣藤原冬嗣公の子なり大臣の息大學の道をならふ此等の例なりくはしく河海に見えたり
はかなきおやにかしこき子のまさるためしは　子のかしこきといふもはかなきといはるゝおやにまさることはなきならひなりこれは大かたのことなり舜の父に瞽瞍といふ物もあれば也又見過ニ於師一滅ニ師半德一といへり父子の道もこれにおなじかるべし
したにはめましろきをしつゝ　上にはついせうするやうにてしたにはそしるゝ心なり
やまとたましゐ　わが國の目あかしになる心なり
せまりたる大かくのすとて　せまりは窮者也除目の四品籍に內竪の窮者と云ことありたとへは大學の衆にて年ひさしくありて昇進などをせぬ心なり
うつくしとおぼしたり　うつくしは愛する心なり
あざなつくること　學生の入學の時文章院の堂監がかきくだす名簿にあざなをかくなり聖廟の御字は菅三三善淸行があざなは三耀といへり夕霧のあざなも源なにとあるべきなり
いへよりほかにもとめたるさうぞくとものうちあはすかたくるしきすがたなとを　人にかりたる裝束なればうちあはすといへりかたくるしき一本かたくなしきとありそれはやうもなくきこえたり
すぢことなるかたのましらひにて　博士ともいまだならはぬ事に思へり

をしかいもとあるしはなはだひさうにはへこふ　別にしるすべし
はなはだおこなり　おこはおこがましきと云心なり我等をかほとにもてなさせ給ふは中々おこがましくおぼえたると云なり
ほころびてわらひぬれば　ほころぶるはわらふ心なり花の笑をもほころぶと云なり
けちえんなるほかけ　けちえんははれがましき心なり
おとゝはあされかたくなゝる身にてけさうしまとはされん　あされはあされたる大きみすがたといへる心なりけさうは假粧なりついせうせらるゝ心なり一本けうまんしまとはされんとあり輕慢なり人にきやうまんせられんと思て座には出給はぬなりあまり人についせうせらるゝも身がもちくるしき物なりましてけうまんせられんは面目あるまじき心なり
はかせさいしん　才人也秀才をいふなり
けうあるたいのもしえりてもんさうはかせたてまつる　翰林の人出題するなり韵の字は切韵とて何字をもて韵とすといふ時もあり又題中に取韵といひて題の五文字の中平聲の字をとりて韵とすることもあり又何韵にても作者の心まかせにてとることもあるなり
まとのほたるをむつひ枝の雪をならし給ふへき　車胤孫康は家貧してあぶらなきゆへに螢雪をあつめき源氏の君の御子せかひの榮花にたはふれ給ふべき御身にて身をくるしめ學問したまふありがたきことなり枝の雪は窓の螢に對していへる詞なり灯をば九枝といへる義河海にいへりしかるへからすたゞ木の枝にふれるまことの雪なるべし
おとゝの御はさらなり　さらなりはさらに人の及ばぬ心をつくり給ふよしなり
うちつゝきにうかくといふことをさせ給ふ　令曰凡學生在㆑學各以㆓長幼㆒爲㆑序初入㆑學皆行㆓束脩之禮於其師㆒各布一端延喜式曰凡遊學之徒情願㆓入學㆒不㆑限㆓年多少㆒總加㆓簡試㆒其有㆑通㆓一經㆒聽㆑預㆓學生㆒但諸王及五位已上子孫不㆑煩㆓簡試㆒
やがてこの院のうちに御さうしつくりて　二條の東院に御曹司をつくりて學問したまふなり

いまはれうしうけさせんとてまつ御まへにてこゝろみさせ給ふ　これは寮試うけさせんとてまづ習禮し給ふことをいへり學生を大學寮にて試を寮試といふ試には史記をよましむるなりよくよみ得たる人を擬文章生に補す擬進士とも云なり凡儒業をつとむる人の次第道をふるには先補大學生燈燭料を給りて九年の間螢雪のつとめをなして功をつみて後大學寮にてこゝろみらる史記をよましめて難儀を問ふ五條の中三條に通するを及第とすすなはち文章得業生に補すさらに又豫樟七年といひてくすの木は七年をふれば用にたつにたとへて七年の間學問してそのゝち式部省にて課試をとく先詩賦を作る次に策(シヤク)の文をかくむかしこれに秀才進士の二科あり秀才をば方略と云方略に無端の大事といふ心なり獻策の時問題にこたへてかくことときはめたる大事なり進士をば時務策といふ令といふ書にみえたりいまの世には文章得業生二人あり秀才のためにはじめより給料をたまはりて學問したる人なりそれは方略の宣旨をくだされて式部省にて課試せらるゝなり又入學の衆の中に器ある時博士これを擧すれば大學寮にて試て又史記をよましむ及第の人を擬文章生に補すかず二十人ありこれを式部省にて試て詩若賦をつくらしむ及第の人を文章生に補すこれを進士ともいへり或は御前にて勅題を下されて試らるゝこともあり文章生に補してのちさらに方略の宣旨を蒙て課試をとくることもあり進士は時務策たりといへども方略の宣旨を蒙れば方略の試なり文章生の方略をかうふりて獻策することは當職の時と又外國の掾(セツ)になりたる時と散位の時とにかうふるなり京官に任じてのちは不二獻策一ならひなり或文章生さらに得業生に轉じて課試の例もあり或文章生にとゝまりて方略の試に及ばざることもあり源氏夕霧の君はいま此例なり朱雀院の行幸の次に御前試詩をつくりて及第し給て進士になりてやかて侍從の官に任じ侍り

はかせのかへさふべき　かへしとはるべき所なり

子のおとなぶるにおやのたちかはりしれゆくわざは　子の成人するにしたがひておやの無才のあらはれゆくをいふしれゆくはされゆく心にやおやの子におとりもて行心なり源氏の君の人のうへにて見し

がわが身もいまのやうにては夕霧におとるべしとの給ふ大將などのきゝ給ふ程にうつくしみての給ふことはなりさきにははかなきおやにさかしき子のまさるはなきといふはおほかたのことなりいまは源氏の君のわが身にひきかけての給なり

大かくにまいり給ひて　寮試の日を云なり

さのすゑをからしとおほす　寮試の時は長幼をもて序をなし人の種姓はいらす故に冠者の君も學生どもの末座に列し給ふなり

もんにんきさうなどいふなるも　史記五條の中三條以上通ずるを擬文章生に補するなり

源氏のうちしきりきさきになり給はんことよ人もゆるしきこえす　藤つぼの中宮のゝち齋宮女御の中宮に立給ふ事を源氏のうちつゝきといへりかならすしも源の姓をたまはらざれども帝皇親王の御女をはみな源氏にとるなり心は藤原氏のきさきの中絶することとなり

おとゝ太政大臣にあがり給て　内大臣轉太政大臣例忠義公兼通天延二年二月任太政大臣元内大臣但關白なりこれよりのちは連綿なり信長公淸盛公など内大臣より相國に任せるなり

いんふたぎにはまけ給しかど　掩韵にまけ給ふこと榊の卷にありしことなり

わかんとほりはらにて　致仕のおとゝの御女一人は弘徽殿の女御母は二條太政大臣の四君今一人は雲井の雁この母君わかんとをりなりいまは按察大納言の北方なり

をの〳〵十になり給てのちは　おとゝしころのことなり夕霧の君ことしは十二歳なり

なにのみこくれの源氏　世俗になにくれかくれなにやかやといふ詞は何の字の訓と音とをわけていへる詞なりそのなにくれといふ詞を又わけてなにのみこくれの源氏なとゝいへり「兎角と云詞をとやかくやとするもかくするもなどいへる類なり」こゝには琵琶の上手をかすへたつる詞なり

おほきおとゝの山さとにこめおき給へる　おほきおとゝは太政大臣をいへりこれはあかしのうへのことなり

おほえぬ人にをされきこえぬる　齋宮の女御の中宮にたち給ふ事なり

この君をだに　雲井の雁のことなり
かくいふさいはい人のはらのききさきかねこそ　あかしのひめ君のことなりかねは實なり物のさねなり
おひすかひぬれ　としの程におひたる心なりたちならぶ心なり
きんのこゑならねどあやしく物あはれなるゆふべかな　雍門周は琴を彈すいまの大臣は和琴をひき給へり故に琴の聲ならねどゝいへりおまへの木すゑはろ〳〵とのこらぬと上にいひて風のちからけたしよはしと蒙士の賦の心を思よせてかき侍る心詞たくみにおもしろくきこえ侍り
さくはうし　笏二をもて拍子にして打事なりとりあへず御遊などある時はかたはらなる人の笏をとりて我笏とをうちあはすることあり致仕のおとゝの大宮の御前へまいり給ふにはさだめてとのゐすがたなるべし笏の用意に及ぶべからずその時はあふぎなどを打ならすをもさくはうしに准していへるにや
はきかはなすりやなどうたひ給ふ　ころもかへせんやわかきぬは野原しのはらはきの　花すり催馬樂呂更衣今案冠者の君のあさきの色をあらため給はんことを思よせて大宮の御前にて殊更衣かへの歌をうたひ給ふなり
大とのもかやうの御あそびに　故大殿の致仕の表たてまつり給ひしことなり
おれたることとこそいてくへかめれ　折たるはすぐにもなきことなり
あたけこそ　あだなるふるまひなり
まことにあめの下にならふべき人なきいうそくに　源氏の君のことなり
したしきほどにかゝるは人のきゝ思ふこともあはつけきやうに　夕霧の君は内の大殿のはゝかたのおいにあたるをいふなり
すこしゆかしげなることまぜてこそ侍らめ　けとをくもてなすことをいふなり
御めのとともをもさいなみの給ふ　さいなむは罪なり御めのとゝものとかにの給ふなり
大納言とのにきゝたまはんことをさへ　按察大納言は雲井の雁のまゝ父なり
たゝ人のすぢにては　女御きさきにならぬことをい

ふなり
もとよりいたく思つきたまふこともなくてかくまて
かしつかんともおほしたゝさりしを　此姫君を大臣
殿はさしも思かしつかんともし給はですてをかれ
たるを大宮のわれこそこれほともてなしたるに
との給ふなり
いみしう心もとなければこれわけさせ給へ　これは
ひめ君のひとりことをきゝて冠者の君の中の障子
をあけさせ給へと御めのとこの給ふなり
さよなかに友よびわたる雁が音にうたて吹そふ荻の
うは風　これは冠者の君の歌なり友よびかはすはひ
め君の雲井の雁も我ことやのひとりことなり
さくしりおよすけたる人　觽の字をさくしりとよめ
り角にてしたる錐なり物のむすほゝれたるをこの
きりにてとくものなり禮記内則の篇に童子の父母
につかうまつる時に身にくする物の一なり冠者の
君の學問して父母につかうまつる時の禮儀を知給
んからに此さくしり一を身にしたかへ侍らんこと
もあるべからずさかしきさかしらなど云説も意を
やりてうたかへる説なりたしかなる證據はみえ侍
らず
左衛門督權中納言なども　此二人は内大臣の舎弟母
はたれともみえず大宮の御まゝ子なり
さてもやわらましとおほせとなをいといふかひなく
これよりは大臣殿の心におもひ給ふことなり
十四になんおはしける　雲井の雁こととし十四歳なり
夕霧に二まさり給へり
めてたくとも物のはしめの六位すくせよとつふやく
いまた五位にならざるによりて六位といふ誠は無
位なるべし上にしるし侍りすくせは夫婦の契を云
なり
色々に身のうきことのしらるゝはいかにそめける中
の衣そ　いかに染ける中の衣は冠者の君のあさみと
りとよみ給へるにつきたるひめ君の返歌なり
すきにしとし五節などとゝまりしが　諒闇によりて
五節停止せられしなり
からひ事に思ひたれと大納言のほかはらのむすめを
たてまつるに　からひは辛なり無心なる心なり
わびておなしくは宮つかへすべくと　五節の舞妓や
かて宮仕にめしとめられし事善相公の意見等に見

えたり
くしいたくて　苦し痛なり
うへの御かたには　むらさきの御かたなり
あめにますとよをかひめの宮人もわが心さすしめを
わするな　とよをかひめは天照太神を申すなり
そゝきつる　そゝめく心なり
五せちのまいれるきしきは　十一月中丑日舞妓參入
(或曉參)則有帳臺出御　寅日御前試卯日童女御覽辰日節
會舞妓進舞
こゝしう　物々しき心也又有說々
をとめ子も神さびぬらんあまつ袖ふるき世のともよ
はひへぬれは　をとめ子も神さびぬらんはむかしの
五節をおもひいてゝいへりあまつ袖ふるきは人丸
歌のをとめ子か袖ふる山のみつかきをふるきよに
とりなしたる也これは源氏のわか事をよみ給へり
かけていへはけふのことゝそおもほゆる日影の霜の
袖にとけしも　かけていへはゝいひかくれはの心な
り蘿のこけを日かけとよめは五節の舞妓の日かけ
のいとをかさしにするもこれにかたとる也又この
うたの袖にとくる霜は日かけによそへたる也

あをすりのかみようとりあへて　舞妓の裝束丑日は
赤色唐衣寅日は青色唐衣辰日は青摺唐衣赤紐日蔭
鬘等なり青摺は小忌のことなり源氏君のふみやり
給ふも辰日の事なればあをすりのかみにて五節の
君御返事を書たるなり
あふみのはからさきのはらへつのかみは難波にとい
となみて　前齋宮歸京の時は於難波有祓前齋院退出
之時は於辛崎修祓これみな神事をとく解除なり五
節の難波からさきのはらへこれに思ひなすらへ侍
り
みとりのうすやうのこのましきかさねなるに　六位
の人の文にみとりのうすやうよせあるにや
かの人はふみをだにえやり給はず　これよりは雲井
の雁のことなり
さとさへうくおほえ給つゝ　里は三條宮をいふなり
なをこもりゐ給ふは二條東院なり
とのはこのにしのたいの御かたに　花ちるさとの上
に冠者の君をきこえあづけ給ふなり
はまゆふばかりのへたて　はまゆふはうすき物なれ
ば几帳のかたびらをいふなり榮花物語第廿云そで

くちきぬのかさなりたる程うらのはまゆふにやあらむいくへとしりかたし云々これはかさなりのおほきことをたとへたるなり

とよりすくれさりける御かたちの　花ちる里のことなり

せちゑの日はうちのきしきをうつしてむかしのためしにもことそへて　内の儀式をうつすはあを馬を引に左馬寮の頭以下供奉するきしきをうつしたるにやむかしのためしにも事そへたるはよしふさのおとゝの時例にもなをことそへいつくしきありさまをいへるなり

きさらきの廿日あまりのほと朱雀院に行幸あり　非父子之時行幸上皇宮例天長十一年正月二日仁明天皇幸淳和院見國史天慶十年正月四日村上天皇幸朱雀院但母后御同宿謁太后于柏殿見李部王記其後度々幸此所抑龜山院御宇文永八年五月行幸後深草院御所長講堂之時有沙汰爲中門下御如朝覲行幸進天長等例云々

みなあを色にさくらかさねをき給ふ御門はあかいろの御そたてまつりたりおとゝもめしありてまいりたまふおなしあか色きたまへれは　内宴日主上幷第一公卿着赤色又殿上賭弓時如此見西宮抄青色袍の下襲は櫻かさね或朽葉を着用するなり

しきぶつかさの心みのたいをなすらへて御たい給ふ　御前試に勅題をたまふは延長應和康保等の例なり　又堀河院寛治四年鳥羽殿行幸に被下勅題有進士試

つなかぬ舟にのりていけにはなれゆく　放島の試には詩なと人に商量することもかなはぬなりさていとすへなけなりといへり

院の御門またさはかりのことを見てんやなと　院の御門はきりつほの御門なり

鶯のむかしをこふるさへつりは木つたふ花の色やあせたる　主上の御製也こつたふ花の色のあせたるはわか御世のおとろへをそへ給へるなり

かへとのにわたらせ給ふ　柏殿は漢武帝の柏梁殿にかたとるにや天慶十年正月朱雀院行幸謁太后于柏殿之由見李部王記

院もくらへくるしう思きこえ給ける　此詞松風卷にもあり人の機嫌をとるかくるしき心にや

大かくのきみその日のふみうつくしくつくりたまひ

て　作文は詩なりうつくしうはほめたる詞なり
かの人の事わするゝ世なければ　雲井の雁のことなり
中宮の御ふるみやのほとりよまちをしめて　中宮のふるき宮は六條御息所のすみ給し所なりその宮を六條院四面八町の中につくり入られたるなり
御としみのこと　わかなの上巻にも此詞あり
世になき上めとも　上馬なり
御車十五御せん四位五位　これは紫のうへの御うつろひなり
いまひとかたの御きしきも　花散里のことなり
こなたにたてまつれ給へり　紫の御かたへ中宮よりたてまつりたまへるなり
わらはのおかしきをなんえおぼしすてさりける　榮花物語云いにしへのきさきはわらはつかはせ給はさりけれといまの世は御このみにてさま〳〵つかはせ給ふかさみはかりをきせ給てうへのはかまはきす　是は上東門院の御ことなり
たつたひめうしと思ぬべきを　中宮をたつた姫に思なずらへたるなり

花鳥餘情第十二

十七　玉鬘

此巻は乙女の巻に次第をたては六條院卅五歳の三月より十二月までの事をいへる也おほよそ夕がほのうへは五條わたりにて源氏の君にあひそめてなにかしの院にて物にけとられてむなしくなり侍し其時は女は十八源氏は十六の時の事にやそれよりさきに致仕のおとゝのまた中將といひし時にあひ給て玉かつらの君をはまうけ侍り此姫君の四の年にしの京にやとり侍りしかめのとのおとこ太宰少貳に成てくたりしにくせられて肥前の國にして廿とせばかりすこし侍りしか肥後の國に大夫のけんといへるつはものありしか此女君をおもひかけてのかるへきやうもなかりしかば俄にめのと子なとをかたらひて京へにけのほりし時はつせにて右近の君にゆきあひてそれよりして六條院へはむかへられ給ひしことし玉かつらの君は廿二のとしにあたるべし夕かほの上また世に侍らば卅七にやなり給ふべき紫の上は廿七八と此巻にみえたれどもまことは廿八なるべし玉かつらは歌の詞をとりて巻の名とし侍り

とし月へたゝりぬれとあかざりし夕がほ露わすられ給はず　玉鬘の君三歳の時夕かほの上ははかなく成給へりそれよりことしまては廿とせはかりをおくり侍れど源氏の君の御心にいさゝかもわすれ給はぬことをいへり

この御殿うつりの　乙女の巻の終にあることなり

かのにしの京にとまりしわか君を　これよりは玉かつらの君の四つのとしつくしへくたり侍て廿とせはかりして都へのほりしことをなか〳〵とかきなしたるなり

むすめども思ひこがるゝを　少貳の女姉御もと兵部君おさな名はあてきとてあるなり

おはせましかはわれらはくだらざらましと　玉かつらの君の御めのとの詞なり

うらかなしくもとをくきにけるかな　舟子のうたふこゑなりこゝにかなへる歌いまだ見出し侍らず後拾遺第四惠慶法師歌　あさち原玉まく葛のうら風のうらかなしかる秋は來にけりしばらく此歌をか

きのす

ふたりさしむかひてなきけり　少貳が夫婦を二人さしむかひてなくとはいへり河海抄に少貳女二人と釋せられ侍れといかゝと覺え侍り兵部君はいまたあてきといひておさなき時のことなり歌などよまむことおぼつかなしおはせましかはわれらはくだらさらましものとのやしなひ君をうちすてゝはいかにおとはくだるともくたりえましき心にいへるなり

かねのみさきをすきてもわれはわすれすなと　かねの御崎は筑前國なりわれはわすれすは京のことをわすれやらぬとなり

夢などにいとたまさかにみえ給時などもありおなじさまなる女などにそひてみえ給てはなこりもこゝちあしく　なにがしの院にて夕がほのうへのうせ給つる時に女のあらはれて靈になれるよしかの卷に見えたりそのありさまかめのとの夢にも見えけるなるべしなごりも心地あしうはかやうの夢を見てはさめての後までも心よからぬとなり

この君十はかりになり給へる　玉かつらの君四のとしつくしへくだる少貳の任は五ヶ年をふれば此君十ばかりの時なり

わが身のけうをば　おやの孝養といふこゝろなり

きゝつきつゝ　きゝつたふるなり

心かけせうそこかるいとおほかり　せうそこかるはふみやりたかる人おほきを云なり

所につけたるよすかいてきて　小貳か子男女ともにその所につきたるたよりともいてきてありつきたるを云なり

大夫のけん　大夫監は正六位下相當の官なれと從五位下に叙しぬれば大夫の監と稱するなり

ふたりはおもむきにけり　少貳かおのこら三人あり二郎三郎は大夫の監にかたらはされけり太郎の豊後の介ひとりは同心せさるなり

せぬわさ〳〵もしてんと　拾遺 人も見ぬ所にむかし君と我せぬわさ〳〵もせしそこひしき公忠

ことはそたみたりける　ゐなか人のふみの詞のきゝにくゝまかりたるをたみたりと云なりいまの世にもさのみあることなり

おいおとゝ　故少貳の妻なり玉かつらの君をむまご

となのらせたるによりて祖母殿といへるなり
さりともすやつはらを人しなみには　すやつはらは田舍の詞なりすはその物にてもなき心なりいまも世俗にかゝるたくひの詞はあることなり人しなみはたゝ人なみなりしは助詞なり
きさきのくらゐにも　本妻におもひかしつかむと云心なり
君にもし心たかはゞ松浦なるかゝみの神をかけてちかはむ　肥前國松浦郡鏡明神は太宰小貳藤原廣繼が靈なり又かゝみ山は神功皇后の御鏡化して石となれるを鏡山といへり是をも鏡の神と云べきにや下の詞に松浦はこさきおなし社なりといへるにつきては石清水八幡と同體のよし聞え侍りしからばかゝみの神に二の義あるべきにこそ
あれにもあらねば　我にもあらぬと云詞なり
まてやこはいかにおほせらるゝことぞ　大夫監いなんとしたるか此返歌を聞てしばらくをさへたる也
なをほけ〳〵しき人の　おは（ちイ）おとゝのこのひめ君のつらく思たまはんことをおしはかれば老ひかみてありのまゝに聞えたると女ともそはにて陳したるなりそれをときゝかすとはいへり
をいさり〳〵とうなつきて　をいはをうなり〳〵と云詞ありこれにおなじ
まれ〳〵のはらから　おほくもなき兄弟と云心なり
いきたゝしと　いきてありがたきなり
はやふねと云物にて　はや舟は艫をおほくたつるを云ふねの雨方のせかいに八ちやうも十ちやうもむかての手のごとくたてゝおせばとくはしるなりかいそくの舟はろをおほくたてゝこくによてはやくはしるといへり
ひゝきのなたもなたらかにすきぬかいそくのふねにやあらむ　ひゝきのなたのかいぞくの舟は李部王記の面影あり河海に見えたり
かいそくのひたふるならんよりもかのおにしき人のひたふるは一向とかけり海賊の舟ならば一向のことなりさはなくて大夫監がおいきたらはいかゝはせんとなりおにしきは鬼のやうなる人と云心なり
かはしりと云所ちかつきぬと　河尻在攝津國
れいのふなこかからとまりよりをすほとはうたふこ

ゑ　清行が意見にのせたるごとくならは唐泊より河尻へは三日にゆく道なり此故に河尻と云所ちかつきて舟子はからとまりよりをす程はとうたひたるなり唐泊備前國にあり狹衣歌歸りこしかひこそなけれから泊いつらなかれし人の行衞は

このちのせいしをはむなしくすて〳〵つとすしたる豊後介わかめこをのこしをきしことをおもひて此句を誦したるなり

いそきいりぬ　都へ入たるなり

たゝ水鳥のくかにまとへる心地して　舊說に莊子の魚のたとへをひけりこゝにはかなはず一說別にしるすべし

まつらはこさきおなし社なり　筥崎宮は筑前國にあり

かの宮の五し　村上御記云康保二年八月廿八日藥師寺三綱五師等相率參陣外云々

佛の御中にははつせなむ　長谷寺は觀音なり佛と云は神に對して神佛といひならはしたればまことはぼさつなれとも佛といへるにや又觀音を則佛と云は無量壽佛涅槃し給て後一切光明功德山王佛となつけたてまつるべし佛と申さんもたかひ侍るまじきなり

わか君をばましてめくみたてまつり給てんとて　神龜元年二月廿三日勅依房前朝臣奏狀所裁下稻三千束爲長谷寺造佛料物云々今案玉かつらの君をば藤原のるり君と云藤氏の繁昌を祈請せるよし長谷寺の緣起にのせ侍ればましてと云詞をあらはし侍り一義云もろこしの人たに祈請渴仰すればそのしるしをあらはし給ふまして我君はわか日の本にむまれ給てしかもはつせへまうて給へば利生にあつかり給はんことうたかひなきと云心なり

からうしてつはいちといふ所に四日といふみのときはかりにいけるこゝちもせていきつき給へり　小右記正曆元年九月八日參長谷寺午時至椿市令交易御明灯心器等參御堂修諷誦布卅端御明三萬灯云々今案はつせへまいる人はつはいちにいたりて御あかしのことなどを用意することこの物語の心小野宮の右府の記と相叶へり

をんなはあるかきり三人つほさうそくして　あるかぎり三人はひめ君少貳の後室兵部君この三人なり

みあかしの事こゝにてしくはへなとする程　李部王記延長八年八月作願文遙祈長谷寺奉燈明十萬灯小右記云正暦三年三月參長谷寺御明十萬灯云々

いへあるしのほうしきて人やとしたてまつらんとする所に　やとぬしにしらせすしてこれよりさきにつくし人をやとしたりければあるしのほうしきてはらたつを云なり

かしらかきありく　かしらをかくとは心ちあしく思ふ心なり

人々はおくにいりはかにかくしなどしてかたへはかたつかたによりぬ　つくし人をば家のおくのかたへいれせう〳〵は外にやとをとらせ女君などをはかた〳〵へよせてもとのまゝにをくなり

ものゝはさまよりのそけば　右近の君がのぞける也

兵とうたといひし人も　寛平御記云臣家有兵藤太者云々今案むかしの兵藤太は昭宣公のめしつかはれし人の名なり此物語の兵藤太は豐後介かことなり右近が見し時は此人を兵藤太といひしをおもひ出したるなり

からうしておほえすこそ侍れ　三條があり〳〵て云詞なり

ゐなかびたるかひねりにきぬなどきて　掻練はうすき紅のきぬのねりはりたるを云ゐなかひたるとは小袖を云にやきぬなときてはうへにうすきぬをきたるべし河海のかいねりの裳にきぬきてといへるあやまれるにや

まつおとゝはおはすやあてきときこえしはとて　右近の君が詞なりおとゝはめのとを云なり

おい人はたゝわか君はいかゝなり給ひし　おい人は少貳の後家なりわが君は夕かほの上のことなり

またゝきはへる　瞬なり生て目をはたらかす心なり

三人なからむせかへる　上にいへる三人の女なり

のしひとへめく物きこめ給へるかみのすきかけ　のしひとへ舊説にうすきぬといへるあやまれりきぬと云はうらのある名なりひとへと云はうらもなき物をいへり枕草子にすゝしのひとへに對しておなしすきたれとのしひとへはかたはともみえずと書たるはねりたるはりひとへのことときこえたりはりひとへの上にのしをかけたればのしひとへとなつけたるにやかみのすきかけなどいへるわたりや

うもなくひとへとはきこえ侍るなり
この御しはまたふかゝらねばにや　つくし人はけふはしめてまうてたれはいのりの師とたのみたゝもいまた心さしのあさきをふかゝらぬとは云なり
中將どのゝむかしの御おほえだに　中將殿は玉かつらの父君致仕のおとゝのことなり三條にいひきかするによりて中將殿とはむかし申しなのりをいへるなり
あめのしたを御心にかけ給へる大臣にて　四海安危照二掌内一百王理亂懸二心中一 白氏文集百練鏡
あなかまたまへ大臣公卿もしばしまて　床ちかしあなかま夜半のきりぎりす夢にも人のみえもこそすれ今案あなかまたまへはあなかしかまし物なのたまひそと云心なり大臣公卿もしはしまてはしはしまち給へ申てきかせたてまつらんと三條が右近にいへる詞なり
し水の御寺の觀世音寺に　八幡に對して松浦箱崎といひ長谷寺に對してし水の御寺の觀世音寺といへる物語の作りさまよしなきにあらさるなり
[万]とふさたてあしから山にふなききり木にきりよせんあたらふな木を滿誓か觀世音寺をつくりし時の歌也
あなむくつけとて　むくつけはおそろしき心なり右近におそろしきことなのたまひそと云心なり
みあかしふみかきたる心はへなど　李部王記延長八年八月作願文遥祈長谷寺觀世音願御病平愈將造白檀觀音像又奉鏡一面灯明十万灯今案父御門延喜の帝の御惱の時の御事なり
おほえぬたかきまじらひをして　これよりは右近がかたる詞なり
殿のうへの御かたち　むらさきの上なり
ひめ君の御さま　あかしの姫君なり
かのきさいの宮とはえしりきこえす　藤つほの中宮をは右近が見たてまつらぬ事なればえしりきこえすといへり
またかたなりにておいさきそをしはかられたまふ　あかしのひめ君ことし八歳なり
うへの御かたちはなはたれかたちならひ給はんとなん　むらさきのうへのことなり
我にならひ給へるこそ君はおほけなけれ　源氏のむ

らさきの上にたはふれたまふことばなり

いつこかおとりたまはん　右近が心に紫の上をこそたぐひなくおもひしにいま玉かつらの君をみたてまつれはさらにおとりたるところもましまさぬとはめたる詞なり

すぐれ給へりとていたゝきをはなれたる光やはおはする　楞嚴經云世尊頂放百寳無畏光明云々今案佛の光明は眉間よりも又足下よりもはなち給へ全身をはなれたる光はなきなり其中に最上はいたゝきよりはなち給光なり人のみめのよきといふも最上は限あるたとへにいへるなり

いてや身こそかすならね殿も御まへちかく　これは右近が詞なり

おとゝの君はめてたくおはしますとも　これはめのとの詞なり

ありしさまなどかたりいでゝ　是は右近がかたる詞なり

まかり申にとのにまいり給へりしひ　罷申なり少貳などの任國へおもむかんとてはしかるべき所へ御いとまごひにまいるをまかりまうすとは云なり

はつせ川はやくのことはしらねどもけふのあふせに身さへながれぬ　はやくのことゝはむかしのことを云それを水のはやきに詞をかりていへり　古今歌吉野川岩浪たかく行水のはやくぞ人をおもひそめてし此はやくもおなじ心なり身さへながれぬはなみだ川によせていへり是は玉かつらの君のよみ給へるなり右近にあひてむかしのことを聞けは身もながるゝほとなみだにそでをぬらすとなり

井中ひこち〳〵しく　こち〳〵しきは初子の巻にもある詞なりこと〳〵しき心也女のためには物のこと〳〵しきはわろきことなり

みな見し人はさとひにたるも　ゐ中びたるをさとひたるといへりさとなれたる心なり

炋風谷よりはるかにふきのほりて　谷のふきあげと云ことなり

かゝる下草もたのもしくおほしなりぬ　玉かつらの君の我身を卑下してかゝる下草とはの給へり

ほと遠からでいひかはすもたつきいてきぬる心ちしけり　玉かつらは九條の家へ歸る右近は六條院近きわたりなれば程とをからぬといへり右近が家はま

ことは玉條なり下に見えたり

やまめ人のひきたかへこまかへるやうもありかし　こまかへるはとしよりの立かへりわかやくを云なり

わかき人はくるしとてむつかるめり　わかき人はつかふるをはちたつほとにとしおいたるとちはむつひよきとたはふれ給ふ詞なり

この君とゝの給へば　此君は源氏の自稱の詞なり玉かつらの君を我ににたるかととひたまふなり

そこばかりをかたみにみるは　右近ばかりを夕がほのうへのかたみと見給ふ心なり

しらずともたつねてしらんみしまえにおふるみくりのすちはたえしを　すちはたえしは源氏のわがゆかりにてあるとの給ふなり

中宮のおはしますまち　六條院のひつじさるのまちは中宮の御さとゐの時おはします殿なり

うしとらのまちのにしのたい　うしとらのまちは花ちる里のすみ給ふ町なりそのにしのたいの文殿にてあるを外にうつして玉かつらの君をすみ給ふべくおはしめしあてがひたるなり

女といふものゝ心ふかきをみきゝしかは　心ふかきとは六條の御息所などのやうに心ふかくて物のけなともいるを云をのづからさるましきとは心あさき人を云夕がほのうへなとのやうなる人なり

きたのまちに物する人のなみには　右近が心にも夕かほの上いま世に物し給はゝあかしの上の御おほえほとにはあるへきよし上の詞に見えたり源氏の君もさの給ふなりきたのまちは乙女にいぬゐのまちとありきたのいぬゐかけたるところなり

さりともあかしのなみにはたちならへ給はさらまし　これは源氏の君の夕がほのうへをきたの町にものする人のなみにはなとか見さらましとの給ふを紫の上のきゝ給てさりとも明石の上には立ならへ給はしとなをあかしの上をはめさましくおもひ給へるなり

わたり給はんことする〱しくしもいかてかあらむ　する〱しきは速なりめしつかふべきわらは下つかへやうの物などたつねもとむるにほどをふへければする〱しくはえわたり給ましきよしなり

いちめなとやうのもの　いちめあき人と上の詞にも

見えたり　白なみもたつ日たゝぬ日ある物をいちにいちめのたゝぬ日ぞなき　今案今の世にも宮つかへ人などをは物うるあき人などあなたこなたへ行かよふほどにをのづから聞つけて中たてするたくひおほく侍るなり

おとゝひんかしの御かたにきこえつけ給ふ　花散里うしとらの町の東の對にすみ給なり

おうなになるまですきにけるを　おさなき姫君のおとなしくなるをおうなになると云なり

中將をもきこえつけたるに　夕霧の花散里にうしろみ給ふべくの給ひしことなり

おもなの人やと　おもてつれなき心なり

あしたゝすしつみそめ侍りにける後　玉かつらの君の三のとし母にをくれてしつみ給へることを蛭子になすらへていへるなり

かゝるものゝくさのなきはとなり　くさは種なりすき物ともの心つくすたねにせんと云心なり

あやしの人のおやゝ　これは紫の上の源氏を申給ふなり

まことに君をこそ　是は源氏の御詞なりいとむしんにしなすとは源氏のぬしつき給ふことをの給ふなり心なきわさをむしんなるといへり

戀わたる身はそれながら玉かつらいかなるすちをたつねきつらむ　戀わたるは夕かほの上のことなりいかなるすちとはまことはわが御子にてはあらぬ心なり

いとまめ〳〵しくきこえたまへばかたはらいたきまで　夕霧の中將はまことにわがおとゝひと思ひ給てそのあへしらひをし給を心しれる人はおかしくおもふとなり

心のかぎりつくしたりし御すまひ　つくしにてのことなり

おやはらからとて　おやは源氏の君はらからは中將君なり

かのけんかいきさしけはひ　いきさしは氣調なり一本いきまきしけはひとあり

ふこのすけもなりぬ　豊後介も西對のひめ君のけいしになりたるなり

それもかゝみにてはいかてかとさすかにはちらひておはす　貞觀政要唐太宗嘗謂二侍臣一曰以レ銅爲レ鏡可三

以正ニ衣冠ー以レ古爲レ鏡可ニ以知ニ興替ー以レ人爲レ鏡可ニ以明ニ得失ー朕常保ニ此三鏡ー以防ニ己過ー今魏徴徂逝遂亡ニ一鏡ー矣今案人をもて鏡とするは魏徴よりおこれり又正ニ衣冠ーといへば衣裳のかたにもそのたよりあるにや人のかたちのよしあしきも鏡にて見るやうにはいかてかをしはかるべきと紫の上の給ふなり

こうはいのいといたくもんうきたるにえひそめの御こうちきいまやういろのすくれたるとはこの御れう　えひそめは面蘇芳うら花田なるをいへりいまやう色とはこうばいのこきかたによれる色なり末摘の巻にも見えたり紅梅の文うきたるはうはきいまやう色はかさねのきぬのことなるべし

櫻のほそなかにつやゝかなるかいねりとりそへてひめ君の御れう　櫻はおもてしろくうらえひそめなりかいねりはうすき紅のあやのはりたるなりつやゝかなるは色つやのうつくしき心なり是はあかしの姫きみの御れうなり

あさ花田のかいふのもんおりさまなまめきたれとにほひやかならぬにこきかいねりくして夏の御かた　海賦は大なみにみるや貝やなどおりたる文なりあさ花田なればにほひやかならぬなりこきかいねりはくれなゐのかいねりなり

くもりなくあかき山吹の花のほそなかは西の對にたてまつり給　山ふきはおもて朽葉うら紅梅なるをいふさてはなやかにくもりなき色といへり是は玉かつらの君に似あひたるなるべし

人はみぬやうにておほしあはす　是はむらさきの上の心におもひあはせ給なり

色にはいたしたまはねど　紫上の心におもひ給へど色にはいたし給はぬなり

とのみやり給へるにたゝならず　源氏のむらさきの上の心中をさとり給ひてそなたをみやり給へば紫の上はちらひ給ふをたゝならずといへり

いてこのかたちのよそへは人はらたちぬべきことなり　これよりは源氏の君の御詞なり物の色あひは無上なるといふもかぎりあるものなり人のかたちはかぎりなきものなりよけれども又あしきかたちもありあるけれともなにとやらん見ればみとをしのあるをそこひたると云心はかぎりなき心也河海の

説いかゝとおぼえ侍り
かのすゑつむ花の御れうにやなきのおり物に　柳はおもてしろくうらあをし夏は卯の花といふなりむめのおりえたてふとりとひちかひからめきたるしろきうきもんにこきかつやゝかなるくしてあかしの御かたに　しろきうきもんのおり物にこきうらをかさねたるなりこきと云はこきむらさきなり今の世にふしかねにてそむるはまねひ物なりこき紫のうちたるはひかり色ありてうつくしきなりそれをしろきにかさねたれはけたかく見ゆべきなり河海にこうはいのうすきぬといへるあやまれるかとおほえ侍り
うつせみのあま君にあをにひのおり物のいと心はせあるを見つけ給て御れうにあるくちなしの御そゆるしいろなるそへて　あをにひはあまのきる色なりくちなしそめのきぬも尼君のためしかるべきによりてわか御れうとおぼしたるをそへられたり又ゆるしいろはくれなゐのうすきなり出家の人もかさねのきぬに用ゐる例ある也河海に黄なるゆるし色とのせられたるかならずしも黄かちなるべからずたゝゆるし色はうすくれなゐと心得べきなり
けにゝけついたるとも見んの御心なりけり　そのをのき給へるをみて似あひたりけりとしり給はんためなり
山吹のうちきの袖口いたくすゝけたるをうつほにてかつけ給へり　袖口のすゝけたるとはふるびたるを云かさねのきぬもなきをうつほなりといへり
いてやたまふたるは中々にこそ　柳のきぬの色もなきをうらみ給へるなり
御てのすちはあうよりにたり　枕草子云あうよりて三四人さしつとひて絵など見るもあり　今案あうは奥の字なりあふなけなどいふもおくなき心なりおくと云はあなたなりあなたはすきにし方を云末摘の手跡のむかしさまなるをいふなり
こたいのうたよみはから衣たもとぬるゝかことこそはなれねな　末つむの歌から衣君か心のつらければたもとはかくそそほちつゝのみ末摘の巻にあり此君から衣たもとぬるゝと云事をこのみよみ給ふ也まとゐはなれぬみもしそかし　河海に説々をいたせる中まとゐの三文字といへるしかるべくおほえ侍

り下の詞にあた人のと云五文字と書つゝけ侍れはみもしといふもまとゐを云なるべし

あた人のといふ五もじをやすめ所にうちをきて　やすめ所と云は歌の第三句を云べしあるひは第一句をも云べきにや

よろづのさうし歌まくら　歌枕とは名所の歌をあつめたるをいへり能因法師か五代集の歌枕のごとし

ひたちのみこのかきをき給へりけるかみやかみのさうし　常陸の宮は末つむの父宮なりかみや紙と云は昔北野にちかき紙や川にてすきたるかみ也

うこきすへくもみえさりし　歌をよむにはしめよりやまひをさらんとすれば更によまれぬなり上手の歌は病をさらんとせねどもをのつからやまひはなきものなり

姫君にも見せたてまつりたまふへかりける物を　あかしのひめ君なり

たゝ心のすちをたゝよはしからすもてしつめをきてなたらかならんのみなん　是は女の本様なり紫上は女のよきちやうをくし給へる人なり

かへしやりてんとあめるをこれよりをしかへし給はさらんは　末つむの歌にかへしやりてんとあるに源氏の御返歌なくはさらはさてあれのやうにてあまりになさけなかるべしとむらさきのうへのさかしらし給をなさけすて給はぬ源氏の御心なれはけにもと思ひ給て御返事をかきたまふなり

かへさんといふにつけてもかたしきのよるの衣をおもひこそやれ　末摘のかへしやりてんは源氏の給はりたる柳のきぬを中〳〵なれば返しまいらせんとよみ給へるそのかへすと云詞をうしなはずしてあらぬかたに取なしてたとへは古今の歌にいとせめて戀しき時はうは玉のよるの衣をかへしてそぬるとあれば末つむのあまり夜かれのみなるをほいなくおもひ給てせめて夢にだに見まほしくて衣をかへさむとはのたまふにこそあらめわが身のなさけなさおもひしられ侍ればけにことはりにてありと女に道理をつけて返事し給へるなり心言葉たくみにかきなせりよく〳〵こゝろをつけてみるべきものなり

花鳥餘情第十三　初子　胡蝶

並一　初子

以歌幷詞爲卷名源氏卅六歲の正月のことをのせ侍り十七の卷の翌年のことなれば竪の並にとるべし

いつしかと氣色たつ霞に木のめもうちけふり　古今

霞たち木のめもはるの雪なれは花なき里も花そ散ける貫之

ましていと丶玉をしけるおまへの庭よりはしめ　朗詠早春詩云　庭增氣色晴砂綠ましてといふ詞は上のかずならぬかきねのうちといふにかけてみるべきなりいまいふ所は六條院のありさまなり

梅の香もみすのうちのにほひ吹まかひていける佛の御くにかとおほゆ　法花經云栴檀香風悅可衆心云々生佛國は極樂淨土をいふなり

はかためのいはゐしてもちゐかゝみをさへとりよせて　齒固は元三の日のことなり齒はよはひなり則よはひともよめり齒固はよはひをかたむるなりたかつき六本におしきをすゆ一のたいにもちゐ大根たちはなをもるなりこのもちゐは近江の火きりのもちゐをもはら用ふべしこれによりてやがてその國のかゝみの山のうたをなかむるなり　俊頼歌　我をのみ世にももちゐのかゝみ草さきさかへたるかけそうかへる

としのうちのいはゐ事ともして　よのつねはふると丶しのことをとしのうちといふとしのうちの立春なといふがごとしこゝのとしのうちはいまより後一年のうちのことをことふきにするなり

かねてぞ見ゆるなとこそ　むかしのうたにもかねてそ見ゆるなど丶君の御ことをこそいはひたてまつりはへれわたくしの祈りはなにほとのことか侍らんと中將の君の申給へるなり

げに千とせの春をかけていはゝむにことはりなる日なり　朗詠子日云倚ニ松根一摩レ腰千年之翠滿レ手　菅　拾遺歌めづらしき千代のはしめの子日にはまつけふこそはひくべかりけれ藤惟賢

千とせまてかきれる松もけふよりは君にひかれて萬代やへん

わらは下つかへなど　わらはゝあこめにかさみをきる下つかへは五きぬにからきぬをきるいつれもは

かまをはきるこきうちもくれなゐをもきるしもつかへははしたものよりしなくたれる女なり

おまへの山のこまつひきあそぶ　貫之集白河院子日歌序云けふはむ月の時いまたわかれぬはての子の日なり世の中のことゝして小松を手ごとにひきさくらをかしらにかさして霞とともにたちましり花とらりかひてみつからあはれ心をやりてさきのことをわすれぬけふのあそひにそありける圓融院寛和元年二月十三日戊子御二幸紫野一立二幄屋御前一殖二小松一有二和歌一題云於二紫野一翫二子日松一平兼盛獻レ之則獻二和歌一序見二小野宮右大臣記一今案御前の山の小松是をおもひよせ侍り

ひけこともひわりこなど　圓融院子日御幸檜破子居二御前一云々

えならぬ五葉の枝にうつる鶯もおもふ心あらむかし　ひけこをつけたる松の枝に鶯のすくへるかたをつくり物にせりあかしの上より姫君にまいらせたまへはことさらにおもふ心ありといへり

とし月をまつにひかれてふる人にけふうくひすの初音きかせよ　躬恒集春いたつけふうくひすのはつこゑをなきて誰にかまつきかすらん

はつねおしみ給ふへきかたにもあらすかし　おさなき人のはしめてふみかき歌よむことをいへり

はなたはけにはひおほからぬあはひにて　花散里にはとしの內あさ花田のかいふのもんのきぬををくりたまへればこれをき給ふなりこれより下の御かた〳〵もみな源氏のくはり給へるをきたまへりやさしきかたにあらぬと　かみのほうそくなきをやさしきといふなり

えひかつらしてそ　女のつくりかつらをえひかつらと云蒲陶のつるに似たる故なり

山ふきにもてはやしたまへる御かたちなど　にしの對のひめ君にはくもりなくあかきやまぶきのほそなかををくり給へり玉かつらの君のくもれる所なくにほひきら〳〵しきは山ふきのきぬにいとゝもてはやされ給へり御かた〳〵のき給へる御裝束と・もにけついたるをみんの御心とさきの卷のきぬくはり給ふ所にいへるはかやうのことをいへるなるべし

なをおもふにへたゝりおほくあやしきか　まことの

御おやならぬことをいへり
さもあることぞかし　むらさきのうへをあはつけきこゝろなき人と源氏のの給ふにたかはぬ心なり物かたりかく人の詞なり
からのとうきやうきのこと〳〵しきはしさしたるしとねに　唐東京錦茵藤の圓文の白綾方一尺八寸縁白地錦四方二寸許裏蘇芳平絹無縁なり今案白地錦を東京錦といへるなり
えひかうのかの　衣被香とかけるは衣裳をにほはす心なり裛衣香とかくは衣につく心なり或抄云あるむかし人のこゐま君のをしへ侍りし衣被香とは麝香半分沉香二分白檀三分一以上いつれもさいじやうをえらびてませしなりあまつらにてあはするなりこの外びんろうしのうは皮をこそけて粉にしてすこし入るはすゝしきにほひのする故なり當時みくさと云たきものこれなり檳榔子はたき物十兩に一分入べし惣のにほひをまとむる益ありといへり
めつらしや花のねぐらに木つたひて谷のふるすをとへる鶯　第一句にめづらしやとあればとへる鶯は心詞あひかなひ侍りはなのねぐらは春の御かたをたとへていへるなり
さけるをかへにいへしあれはなどひきかへしなくさめたる　あかしの上はひめ君のはつねもことしこそはじめてまちいてたるにともしくもあらずの歌をてならひにかきたまへるはひきかへしたるなくさめ詞なるべし
ふてさしぬらしてかきすさみ給ふほどに　源氏の君のあかしのうへの手ならひしたるはしに何事ぞかきすさみ給へるなり
しろきにけさやかなるかみのかゝりの　明石のうへはしろきうきもんのきぬを源氏のおくられたるよし上の巻にみえたり
あたらしきとしの御さはかれもやと　正月一日の夜の事なりあかしの御かたにとまりたまへることをいつしかなるやうに御かた〳〵の人々もてさはぐべきことをいへり下の詞にみなみのおとゝにはましてめさましかるとありおほかたはむらさきの御かたにこそとしのはじめなればとまり給べきにかゝれば人々めさましくおもふなり
まちとり給へるはたなまけやけし　まちとりたまへ

るとは紫の御方へわたり給ふ事也けやけしは世にすくれめさましきこゝろなり

けふはりんしかくのことにまぎらはしてそおもかくしたまふ　りむしかくのこと河海の說あやまれり大饗は每年正月に三公をの〳〵これを行ふ其時は請客の使なとありて客人をことさら招請して藤氏の一の大臣は氏の長者たるによて朱器臺盤を氏院よりわたしてこれを用るなり自餘の大臣は赤木くろかきのつくえ樣器を用るなり尊者あり鷹飼なとわたる儀あり臨時客といふは正月二三日のあいだ關白大臣の第へ客人のふときたれるを云さて臨時の客とは名づくるなり其時は臺盤なとは用ずおしきたかつきをすゆるなり催馬樂朗詠かたぬきなとあり樂器をめさす笏ひやうしにてうたふ物なり源氏の君太政大臣たるによて臨時客のこと執政の臣のことしおもかくすとは臨時客のとりみだしにてことよせて紫のうへに正たいにむかひ給はぬをいふはち給ふ心なり

とりはなちてはいとゝいうそくおほくものし給ふ　いうそくをは有職ともかけり物をしりたることとなり

とりはなちてはいつれもみなすぐれて見え給へと源氏の君にたちならひたまへはけをされてよろつをよひかたきよしなりいうそくはかたちよりはじめ藝能にいたるまでのことをいへり

おまへの梅やう〳〵ひもときて　臨時客にはかたぬきのことあり花も心ありてひもとくといへり

もゝのしらべともおもしろく　臨時客には樂器を用ず郢曲の人も笏拍子にてうたふなりしかれともこの臨時客には大饗の例になぞらへて笛の莒などをめしいたしたるにや物のしらべといへるおぼつかなし但ものゝしらへとは音曲につきて時の調子をも云べし樂器の有無にかゝはるべからず

はちすの中の世界にまたひらけさらん心地もかくやと　上の詞に春の御かたをはいける佛の御くにといへりその外の御かた〳〵は物へたてゝ聞給ゆへにはちすの花いまだひらけぬにたとへたるなり十樂の中に蓮花未ㇾ開樂の心なり

ましてひんかしの院にはなれたまへる　二條院のひんがしの院には末摘空蟬なとすみ給へり

おこなひのかたの人は　うつせみの尼君のことなり

かなのよろつのさうしのかくもん　末摘花のことなり

ましてたきのよとみはつかしげなる　古今歌はたきを髪にたとへたり是によりて髪を叉瀧にたとふるなりたきのよとみとはしらかのましりたる事なり

光もなくくろきかいねりのさひ〳〵しくはりたる　かいねりはうすきくれなゐのはりたるきぬなりはりかすいるればくろむ物なりさひ〳〵しくはさや〳〵となる心なり

さるおり物のうちきをき給へる　このおり物のうちきもすゑつむのかたに用意せられたるなりなにの色ともみえすおほつかなし

かさねのうちきなどはいかにしなしたるにかあらん　此うちきにかさねのなきをいへり例のうつほにてきたまへる心にや大かた源氏のおくり給へる小袿は柳なるべし次にくろきかいねり一かさねは五きぬのぶんなりさるものゝうちきとは表着などのことなりかさねのなきは單をかさねられぬといへるにや

ことさらに御木丁ひきつくろひへたてたまふ　花散里は源氏に對面の時木丁をへたてたるを源氏のかたよりをしのけ給へばそれもさておはすよし上にみえたり末つむは木丁をそはへのけられたるによりてはなの色あらはなれば源氏の君のことさらに木丁をひきへたてたまへるを中々女はさしも思給はぬといへるなりようゐもてなしの心あると心なきと人々のうへにわかれたるものなるべし

ふくみなへたるこそよけれ　たゝうち〳〵のすかたはきたる物のさやめかぬがよきをいふなり

こち〳〵しくさすかにうちわらひ給て　こち〳〵しくはさきの巻にもあり五音の通たればこと〳〵しきと云詞なり

かはきぬをさへとられにしのち　ふるきのかはきぬをき給しを醍醐のあしやりのとれるとかたり給ふなり

いとはなあかき御せうとなりけり　たいこのあしやりは末つむ花の御せうとゝいふこゝろなり

心うつくしといひながらあまりうちとけ過たるとおほせはこゝにてはいとまめにきすくの人にておはす　心うつくしとは末つむのことなりこゝろにおもふ

ことをありのまゝいふを心うつくしとは云なりされともうち〳〵のきたる物などのことをのこさずのたまふはうちとけ過たるなりそれにしたがひて源氏も末摘のところにてはまことにきすくの人になりてかざりゑんたちたまはぬ心なり木すくは木男など云がごとし

かはきぬはいとよし山ふしの身のしろ衣にゆつりたまひてあへなん　かはきぬをあじやりのとり給へるはいとよきことなり山ふしはあじやりを云なりあへなんはありなんと云詞なり

さてこのいたはりなき白妙の衣はなゝへにもなどかかさね給はさらん　いたはりなきとはおしからすうち〳〵心にまかせてきる心なり

おれ〳〵しうたゆき心のをこたりに　おれ〳〵しきはものに退屈する心にや又人にしたがふ心にやこてふのまきにも此詞あるなり

をのつからなとのたまひて　をのづからわするゝ事なり

むかひの院の御くら　二條院なり

すみたまはぬ所のけはひは　源氏の君のすみ給はぬところなり

故郷の春の梢に尋きてよのつねならぬ花を見るかな

よのつねならぬ花は霞にもまきるましきはなの色をよそへてよみ給へり

空蟬のあま衣にもさしのぞき給へり　下に松かうらしまをひきよせたりさてあま衣とはそへたりさるは又をくりしきぬのかたにもかゝれるなり

あをにびの木丁の心はへおかしきに　出家の人の木丁のかたひらは青鈍をもちゐる也うつせみのかたへくばられしきぬも青にびを上にかさねたれは木丁の色とおなじやうなり袖口はかり色ことなるといふはくちなしの御そゆるしいろなどをそへられたれば色ことなるとはいへり

つらきおり〳〵かさねて心まとはし給ひしよむくひなどを佛にかしこまりきこゆるこそくるしけれ　これは源氏の詞なり佛にかしこまるとは罪を懺悔する心なり源氏のすきにしかたの罪障をほとけにかしこまり申也おぼししるやとはかゝることもそなたゆへのことなれはおもひしり給ふらんとなり

かくいとすなほにもあらぬものをと　源氏の心には

よのつねならばまゝ子のきのかみなどをこそたの
むべき人のかゝるおもひかけぬすまゐなとは世の
さためなくすなほならぬよしをにほはせての給ふ
なり下にかのあさましかりし世のふることをきゝ
たまへると書たるはいよのかみなくなりて後きの
かみかけしやうしたることを聞給てかくの給ふと
あま君はこゝろにおもひいたしたるなり
かばかりのいふかひたにあれかしとあなたをみやり
給ふ　あなたは末つむの住たまふかたなり人はしな
にもよらぬ物とおもひたまへるなり
ことしはおとこたうかなり　正月十六日の節會をば
女踏歌と云舞妓すゝみいつる故なり男たうかは十
四日にあり殿上地下の四位以下の輩しかるべき所
々をめくりてさいはらをうたひまひかなつること
ありこれはむかし正月十四五日に京中の遊士月に
乘じてあなたこなたをへめぐりてうたひまひしよ
りことおこれりすゑの代に千秋萬歳といひて逸興
をもよほすことあるはこれらの餘風なり圓融院の
天元六年正月男踏歌ありし其後は記録などにも所
見なしその儀式は西宮といふ書に見えたり

ひたりみぎのたいわたとのなどに　寝殿の東のたい
西のたい又ひたりみぎのすきわたとのなどをさし
きにかまへられたるなり
夜もやう〳〵あけゆけばみつむまやにてことそがせ
給べきを　李部王記延長七年正月踏歌人踏歌西ニ行キ東ニ
行ク又西ニ行テ列立ス袋持取レ綿詞吹コトフキ了還入ル更ニ入テ置ニ御前一
此度水驛也唯進ニ湯漬一又用ニ様器一　同記云天慶五年正月十四日
參ニ康子内親王所一陪ニ麗景殿一仍被レ綿侍女授之　後設レ饗
水驛也　更詔ニ昭陽舍一設ニ盤饌一南北對座　餇驛也同記云天暦
四年正月十四日參ニ中宮一至子賜レ饗用ニ様器一　水驛
也又侍ニ院侍一須臾上皇還ニ御寝殿一踏歌畢テ賜レ饗餇
驛也九條右丞相記承平四年正月十一日踏歌飯驛水
驛被レ定レ之中宮ハ飯北宮ハ水今宮ハ飯許左大臣宿所ハ飯右
大臣宿所水左右大將ノ宿所飯云々　今案水むまやと
は男踏歌にいひつたへたる事也踏歌の人を饗應す
るにつきて酒或はゆつけなどを用るをばこれを水
驛と云事そきは簡畧する心也又飯驛とも餇驛とも
云はひきつくろひて饗應する儀なり踏歌の人の所
々をめくるを驛路にたとへたりその驛には馬をは
せてとをれは水はかりを人々のみ馬にもかふは水

むまやと云又人は飯を食し馬にはわらなどをかへば飯驛芻驛と云かことく酒肴はかりを用るを水驛といひ饗膳を用るをば飯驛と名付侍るなり又厩牧令に水路をは船をもてわたるこれを水驛といへりいまその心にてはなき也

あを色のなえはめるにしらかさねの色あひ　李部王記踏歌人裝垂纓冠麴塵闕腋袍 白下襲着二深沓一持二白杖一西宮裝束抄曰青色麴塵袍白下襲半臂白石帶深履綿花白杖今案このあを色をは歌頭以下ことごとくこれをきる熨斗袋持この二人は位袍を着するよし見えたり白杖は舞人まてこれを持なり舞童は絲鞋(シカイ)をはくといへり

との丶中將の君うちのおほいとの丶きんたち　夕霧柏木の君を云なり延長七年踏歌に左中將伊衡左の歌頭たり右中將實頼右歌頭たる例になすらへたり

さるはかうこしの世はなれたるさま　西宮抄云又召二御巾子(オンコシ)造(ツクリチ)一仰レ可レ奉二高巾子二口一又召二內藏寮一仰下可レ奉二高巾子料 冠 絹一之狀上（以絹二束為一條）又以二高巾子冠一給二御冠師等一令二調設一事畢高巾子返二納於所一但高巾子冠自レ所給レ之同裝束抄云高巾子之六位 以レ綿裹レ面云々今案高巾子冠はこしをたかくしたるかぶり白ききぬにてこれをはる藏人所よりこれをくだし給ふ六位の舞人のうちこれを着すかうこしきる物は綿の面をかうふるよしみえたり常に見なれぬすがたなるによりて世はなれたるとはいへりなを別にしるす事あり

ことふきのみたりかはしきおこめきたること　西宮云踏歌立二御前一奏二壽詞一

れいのわたかつきわたりてまかてぬ　かつけわたは內藏寮よりこれをたてまつるを內侍藏人等東階の上に迯にわたを入てもちむかへは歌頭以下舞童以上双々に舞す丶みて階をのほりてかのわたを給なり琴ひき以下のかつけわたは六位の藏人簾中よりとりつたへて庭中にしてこれをかつくるなりこれよりさきにまた机にわたをつみてをきたるをふくろもちす丶みよりて一十百千萬とかそへて袋に入てになひてきぬかもといふ歌をうたひてまかつるよし見えたりいまの世にたえて久しきことなればたしかなることはしれる人なし新儀式西宮抄延喜の御記などにのせられたる事を大かたしるし侍る

ばかりなりこれらはみな内裏の儀式なり物語にいへるは六條院にての事なれば祿のわたなどくられうよりたてまつることはあるべからずをのく\本所にまうけられたるべし

いとうつくしとおぼしたり　源氏の君の御むすこの中將をあいしたまふ心なり

まんすらく御くちすさみにの給ひて　西宮云踏歌日舞人起レ座唱ニ萬春樂一我皇延祚億仙齡萬春樂元正慶序（ケンセイケイショ）年光麗（テンクワウレイ）催馬樂也淡海三船撰之多氏相傳之　今案萬春樂はすべて八句の詩なりそれを漢音にうたひて句ごとのあはひに萬春樂ととなふるなり踏歌の舞人のたちさまにいふことなるを源氏の君のくちすさひにの給ふなりしばらく二句を書付侍り

延喜踏歌圖

歌頭　歌頭
歌頭　歌頭
歌頭　歌頭
歌掌　歌掌
東階　舞人　舞人　舞童は舞人の列にあり
後持踏掌　和琴踏掌　琴引以下の十二人をば列人とも云也此中九人は樂人也

新羅樂人　琵琶樂人
横笛、、　百支、、
篳篥、、　笙、、
銅拍子　熨斗　位袍
振桙　袋持　同

わたくしのこえんあるべしと　男踏歌の後宴は二三月の間弓の勝負あることなり西宮抄に見えたりそれは内裏にてのことなりわたくしの後宴は六條院にて御かたぐ\つどひたまふつゐでに女樂あるべきよういありされどもあらましはかりにてそのことありともみえず女樂はわかなの下にあることなり

御ことゝものうるはしきふくろとも　ふえといふときは笙篳篥もふえの中にてもるなりことゝいへば十三絃にかきらす和琴琵琶等のひき物はみなことの中にいる也箏のふくろはうるはしきはにしき二はたはりにてうらつけてことをつゝみて四所くみにてゆひたる箏よりあまりたるほとは一尺はかりことをいるゝは手もとのかたをまつさきにいるゝといへり琵琶の袋はおもて錦うらはからあやなと

にて双六の調度ふくろのやうにしりのかたをまろにしてふせくみはうすひらといふくみをぬいめはかりにをすといへりあるひはあか色のふせんれうのおもてはなたのからあやのうらつけたるこうのかたをくひのほとよりなからはかりをきりてそのきりめのほどにをゝつけてゆふ神妙なりといへり和琴の袋は箏におなじ或説に和琴の袋にはからにしきを用へからず我國よりいできたるうつはものなるゆへといへり笛の袋笙の袋もあるべきなり衣笠の前内府の雜抄に見えたり

並二　胡蝶

以詞幷歌爲卷名初音卷同年のことなり但これは三月四月のことをしるせり又竪並なり

ほかのさとにはまたふりぬにやと　外の里にもいまたかやうにふりせぬにやとうたかひ思へり外にははやふりぬへきとうちさためたる心なり春の光をこめ給へる御前なれば外にはかはるへき心なり

いそきさうそかせ給ひておろしはしめさせ給ふ　船の裝束なりやかたのおはひはたのまんなとなり

かの春まつそのはとはけましきこえたまへりし御かへりも　乙女卷にある秋好中宮の御歌　心から春まつそのは我やとのもみちを風のつてにたにみよ

女房とものわかやかに物めてしぬべきを　中宮もこの頃御さとにおはしませとかる〳〵しきやうなればこなたへと申さるゝにをよはすせめてのことに女房たちを舟にのせ給てみなみのおとゝの御まへのいけへこき出し給へるなり

かちとりさほさすわらはへみなみつらゆひもろこしたゝせて　からこのやうに出たゝせたるなり

外にはさかり過たるさくらもいまさかりにほひ　上の詞には外の里にはまたふりぬにやとかけるは此殿のうちにありて外を見ぬ人の詞なりこゝの段は外よりきたる人の見てこの御まへの花はまたさかりなりけりといへるなり

をしのなみのあやにもんをましへたるなと　おもしろき詞つかひなり浪のあやにをしのもんをおりませたるとみゆる水の面なるべし

花をこきませたるにしきにおとらす　錦上鋪花と云語ありにしきたにもうつくしかるべきにはなをさ

へこきませたらんは無上なるべき心なり禪話に用
るは又別の意あるべし
かへりころに喜春樂たちそひて　反音は呂より律に
うつるを云なり喜春樂は黄鐘調の樂なり平調にも
わたして用るにや尋ぬべし
春の光をこめ給へる大とのなれど　藏春塢或藏春閣
などいへる心なり
おほゝくゟしるく心なひかし給ふ人おほかるべし
玉かつらの卷云兵部卿の宮などの此まかきの中こ
のましくし給ふ心みえたりにしかなすき物とものの
心にうるはしたちてのみこのわたりにみゆるもか
ゝるものゝくさのなきほどなりとあり
うちのおほい殿の中將などは　かしは木の中將はわ
かおとゝいともしらぬなり
そらみたれして　空醉をする心なり
なよひさうとき給へる　さうときは心いられする心
にや
むらさきのゆへに心をしめたればふちに身なけん名
やはおしけき　兵部卿の宮はまことに源氏の御女と
心得給て紫のゆへとはよみ給へり御めいにわたれ

はゆかりの色をかことにし給ふなりふちに身なけ
んは藤の花を戀のふちによそへたるなり
おなじかさしをとてたてまつれたまふ　拾遺ぬす人のた
つ田の山に入にけり同じかさしの名にやけかれん
今案兵部卿宮は連枝におはしませはおなしかさし
との給なりたてまつれ給ふはさかつきをさし給ふ
事なり
ひの御よそほひ　諸抄にあやまれり別にしるすべし
とりにはしろかねのはなかめに櫻をさしてふには金
のはなかめに山ふき　花かめの色は花のいろにした
かひてこかねしろかねにとゝのへたるなりこの花
はつくり花にあらず下の詞にかめのさくらすこし
うちちりまかふといへる故なり
わさとのひらはりなとは　樂屋のことなり
おまへにあたれるろうを　兩方の中門の廊を左右の
樂屋にしたるなり
あくら　胡床を日本紀にあくらとよめり樂人の座を
云河海抄あやまれり
きのふの女房たちも　中宮の女房逹春のけしきにお
もひうつりて中宮に物語きこえたるなり花におれ

つゝは情を折たる心なり
鶯のうらゝかなるねに鳥のかくはなやかに　鳥は一越調の樂なりとりのかくに感じて花になく鶯も池の水鳥もさえつるかとおもひわたさるゝなり
てふはましてはかなきさまにとひちかひて　蝶は宇多院の御時つくられし舞なり李部王記に見えたり花かめに山吹をさしたれはてふの童はやまふきのませのもとへ舞ひ入といふべし一は蝶の舞に感してまことの蝶もやまふきのませへまひ入とも見えたり鳥の樂に池の水鳥とものさえつるといふに對してみるべきなり
かねてしもとりあへたるやうなり　櫻山吹の色かねて用意したるやうなり
こしさしなと　疋絹をこしさしと云は腰にさしはさむものなればなり
中將君には藤のほそなかそへて女のさうそくかつけ給ふ　女のさうそくは裳からきぬなりそれに中宮のわかほそなかをぬきてかつけ給ふ心なり
こてふにもさそはれなまし心ありて八重山ふきをへたてさりせは　上の詞に南の池はこなたにとほしかよはしなさせ給るをちいさき山をへたての關に見せたれどゝありこれによりて中宮の御返事に八重山吹をへたてさりせはとよみ給へるなり
すくれ給へる御らうともにも　中宮も紫の上も歌には功の入たまへる人々なれと時としては思ふやうにもいてこぬと也これは物語かく人の詞なるべし
ふかき御心もちゐやあさくもいかにもあらむ　これは玉かつらの君の御心もちゐをほめたる詞也心ふかきはかへりてあさくもいかにもなるわざなりといへり心ふかきは人にあざむかるゝやうなることはなきなり又あさきはなつかしく人のおもひつくかたあるなりらうありはらう／＼しきをいふなり
そのかたのあはれにはあらて下に心くるしうなん女君はおぼしける　玉かつらの君は内の大殿のきんたちを我おとゝいとしり給へるゆへに我をけしきはむをそのかたのあはれにはあらて下に心くるしくおもひ給ていかにしてか我はおなしはらからそとしらせましと思ひ給へることを云なり
おなしくはかのとのにしられたてまつりにしかなとかの殿は内の大殿を云なり

戀の山にはくしのたうれまねひつべきけしきに　い
かはかり戀の山ちのしげければいると入ぬる人まよふらん今案孔子のたうれと云ことはむかしより世のことわざにいひつたへたり孔子ほどの聖人なれども時としてたうるゝことのあることくひげくろの大將きはめて實法なる人なれと戀の山に入てはおもひまとふといへるなりくしのたうれたる本文尋ぬるに及はざるべし諸抄の說みなわやまれり河海の說相違なきにや

わざとふかゝらで折ふしの花てふにつけたるたよりことには　この一段は男のかたより花てふにことつけてふみおこせなとするを女の返しに心ねたくわひしらひたるにそのおとこ中々心たち思したふこともあり又そのまゝうちわすれたるも女のためくるしからぬことゝなりなをさりことにいらへしたりなとするはさらてもありぬへけれはかる〱しきわさなるといへるなり

なてしこのほそなかにこの比の花の色なる御小うちき　なでしこは表紅梅うら靑なりこのころの花は四月なれば卯花かさねをいふにや

いとゝわかぬところなくはなやかにうつくしげなり
わかぬところなくは不足なる所なきなり河海の說おぼつかなし

おやときこえんにはにけなくわこうおはしますめり
玉かつらの若二十三源氏三十六なり十四歲の御子にあたるゆへかくいへり右近か心にはおなしくは源氏の君の御めをかけ給へかしとおもひたるなり

さらに人の御せうそこなどは　これは右近か源氏にこたへ申詞なり

さてこのわかやかにむすほゝれたるはたかそ　源氏の詞なりさきのかしは木の中將のふみのことこれまては源氏もいまたぬしをしり給はぬなり

これはしうねくもとらてまかりにけるかな　是よりは右近か詞なり書の使かしうねくとらていにたると云なり

みる子　玉かつらのめしつかふ小女房の名なり

をのつからおもひあはするときもこそあれ　かしは木の中將これまではいまた兄弟ともしらぬなりおもひあはする時もこそあれは始終は聞あらはすべきゆへなり

けちえん　あらはれたる心なり
なを世の人のあめるかたに　玉かつらの君にむこをとりて後まことの御おやにはしらせんと源氏の君のおもひ給ことなり
めしうとゝか　大和物語このさいし(左中將のむすこ)きみの御いもうとの伊勢守にていますかりけるか御もとにかみのめしうとめきてありける人をこのめのせうとのさいしきみはしのひてすむになんありける蜻蛉日記をのゝ宮のめしうとか此物の常夏の卷にもあり
さやうならんことはにくけなくて　うはなりたちのおほからんに心えてあひしらふ人はなたらかにもちけちてもありぬべしさはなくてねたましきくせあらん人はわれもえこらへすつゐには人にあかれぬべきことなり玉かつらの御心はいまた源氏の君もよくもしり給はぬゆへなり
大將はとしへたる人のいたうねひすきたるをいとひいてらと　ひけくろの大將の北の方はむらさきの上のあね君まきはしらのひめ君の母なり大將その人にはなれたくおもひたまひて玉かつらをおもひかけたるなり
なにこともおもひしりはべらさりけるほとよりおやなどは見ぬものに　これは玉かつらの返答なり三のとし母君にはなれ侍り父君にはいまたしられ給はずさておやなど見ぬものとはの給へり
ませのうちにねふかくうへし竹の子のをのか世々にや生わかるべき　玉かつらの君にたとへ給へりをのか世々になるとはあらぬかたになり給ふへきことなりさて下の詞におもへはうらめしくいことぞかしとつゝけてかけり
いまさらにいかならん世かわか竹のおひはしめけんねをはたつねん　おひはじめけんねとは實のおやをいへるなり
中々にこそはべらめと聞え給ふを　まことのおやに今更しられたてまつらん事は中々なることやあらんとの給ふはもし子のやうにもおもひたまはずはねたくとおもふこともあるべしかつは又源氏の君を次にしたるとやおもひたまはんすらんとてかくはの給ふなり下の詞にいとあはれとおほしけりは源氏の御心なりいつかたにつけてもあはれなる心

さまなり
さるは心の中はさしもおほさずかし　玉かづらの心のうちにはいかにもまことのおやにあひたくおもひ給ふなりいかならんおりか源氏の内のおと丶に語り給はんすらんと心もとなくおもひたまへるなり
もの丶心得つへくは物し給めるをうらなくしもうちとけたのみきこえ給らんこそ　これは紫の上の詞なり玉かつらの君源氏をまことの御おやにてはなきと心えたまふへきかうらなく打たのみ給らむか心くるしきとなりこれは源氏の君のた丶もましますましき御心をしりての給ふなり
などたのもしけなくやはあるべき　源氏の返事なりむかしのゆかりにおもひよそへてたのみきこえんになとかたのもしけなかるべきとなり
いてやわれにても又しのひかたく物思はしきおりおりありし　又紫の上の詞なり源氏の君のむかし我をも御むすめのやうにおほじめしたれと又さもあらさりしをおもひいてらる丶との給なり
あな心とくおほして　むらさきのうへを心ときとおほすなり
まつたいの君の御にほひやかさ　西の對のひめ君なり
そての香をよそふるからに橘の身さへはかなくなりもこそすれ　玉かつらの君の我も母のやうにはかなくみえたてまつらんとの給へは源氏の君のた丶ならぬ御けしきの見え給ゆへにあちきなくおもひたまふなり
あさくはおもひきこえさせぬ心さしに又あまたそふへけれは　源氏の君の此ほととてもあさうはおもひたてまつらぬになをあひ給ふならは又一しほ心さしのそふべきとなり
いとかうふかき心ある人は　玉かつらの君の心ふかきことをの給へり
なつかしきほとなる御そとものけはひいとよくまきらはしすへし給て　源氏の君の女君のき給へる御そともをとかくひきすへらかして女君によりふし給ふなり
いと丶心うくて人のおもはんことも　玉かつらの君の心なり

しらぬ人にだに世のことはりにてみなゆるすわざなるを　女のならひ心さしあれはしらぬ人にもなびくはならひなるをこのとし月むつましくおもふ心さしをゆるし給はぬと源氏の君のうらみたまふなり

なにのうとましかるべきにかこれよりあながちなる心は　源氏の詞なり

ゆめけしきなくをとていて給ぬ　ゆめ／＼人にあやしまれ給ふ御けしきな見せたまふその心なり

れいならす御心ちあしげにいかなるにかなと　玉かつらの君の御心ち例ならぬをおとゝのさはきたまふことなり

うちとけてねもみぬものをわかくさのことありかほにむすほゝるらん　ねもみぬは草のねをよるぬるかたによそへたり在中將かいもうとによみてやれる歌を本歌にせりことありがほにむすほゝるゝは玉かつらの君のなやみ給ふことなり第一句にうちとけてといひてむすほゝるゝはおもしろくはへるなり

色にいて給て後はおほたの松のおもはせたることなく　大たの松の歌は六帖にも又朝綱集にも重之集にもありかの歌の心は色にやいてましとあらましことにいへるをこの物語にははや色にいて給へければおほたの松のおもはせたることなきといへりおもしろくかきたるものかな

花鳥餘情第十四　螢

廿三　螢
以詞幷歌爲卷名源氏卅六歲の五月の事又竪の並なり

いと／＼おしうおもひの外なるおもひそひて　これは源氏の君のなまむつかしき事をの給ふ事也こてふの卷のおくにある事なり

人さまのわらゝかに　にこやかなる心也

御らうのほどは　奉公の勞なといふがごとし

さみだれになりぬるうれへをし給ひて　盛明親王集九條右大臣の御四君に聞えたまひける　わびつゝもたのむ月日はあるものをさみだれにさへなりにけるかな　信明集　神代よりいむといふなる五月雨のこなたに人を見るよしもかな　うほはまつりのつかひさればいかゞはすべき五月雨にもなりにけるを左のおとゝかはらけとりて給いでやさうけ給ても久しくなりぬとて　ほとゝきすなく音ひさしくなりぬるは五月雨ながらいくよふれはぞ

東宮よりあてみやに　ためしにもひとのひくへきはとゝきすこの五月雨をいますもあらなん　今案五月はいむ月なればよろづをはゞかるを五月雨になるうれへとはいふなり

はゝ君の御をちなりける宰相はかりの人のむすめにて　夕がほのうへのをちは父三位中將といひしが弟なり官は宰相ほどの人なりそのむすめをいま宰相の君といへり夕がほの上にはいとこなるべし

とのはあいなくをのれ心けさうして宮をまちきこえ給ふをもしり給はでよろしき御返のあるをめづらしくていとしのびやかにておはしたり

此一段の詞いさゝかみにくき也源氏の君はをのれこゝろけさうし給て兵部卿の宮を玉かづらの君の下待給ふをもしり給はでかしこへ出給はんとおぼしたりよろしき御返のありといふよりは兵部卿の宮の玉かつらのきみの御返事のよさまなるをうれしくおもひ給てしのびやかにおはしたるといふ心也

つまとのあひに御しとねまいらせて　これは兵部卿宮の御座をいふなり

おやにはあらでむつかしきさかしら人の　源氏の君

の女君をかいしやくし給ふを云なり
打いでゝおもふ心のほどをのたまひつゞけたる　これは宮の宰相の君にの給ふ事をいへり
なにくれと事ながき御返きこえたまはむ事もなくおぼしやすらふにより給て御木丁のかたびらをひとへうちかけ給にあはせて　なにくれと事ながき御返とは玉かづらの君の宮の御返事を聞えわづらひ給をいへりより給てといへるは源氏の君のおくのかたのき丁のもとへより給てかたびらをうちかけ給といへるなり
ほたるをうすきかたにこのゆふつかたいとおほくつつみをきて光をつゝみかくし給へりけるをさりげなくとかくひきつくろふやうにてにはかにかくけちゑんにひかれるに　うつほ（内侍の上）うへいかでこのないしのかみ御らんせんとおぼすに御とのあぶらをあらはにともせはものしいかにせましとおもほしおはしますにほたるおはします御まへわたりに三四つれてとひありくうへこれがひかりにものは見えぬべかめりとおぼしてたちはしりてみなとらへて御そでにつゝみて御らんずるにあまたあらんはよかりぬべければいかでわらはへやさぶらふほたるすこしもとめよやとおほせらる殿上わらはへ夜ふけぬれば候はぬ中にもなかたゝの朝臣はうけたまはりうる心なりて水のほとり草のわたりにありきておほくのほたるをとらへてうふくのそでにつゝみてもてまいりてくらき所にたちて此ほたるをつつみながらうそふく時にうへいとゝく御覧しつけてなをしの御そでにうつしとりてつゝみかくしてもてまいり給てないしのかみのさぶらひ給き丁のかたびらをうちかけ給て物などのたまふにこの内侍のかみのほどちかきにこのほたるをさしよせてつゝみながらうそふき給へはさるうすものゝ御なをしにおほくつゝまれたれば殘る所なくみゆ今案うつほの物語のほたるを御門のうすものゝ御なをしの袖につゝみてさしよせ給ふは内侍のかみのなりすがたを見給はんとてのはかり事なりたとへば

車胤が紗の嚢にほたるをもりてふみをてらしてよ
みける心ばへにおなじかるべし又この物語に源氏
の君のほたるをおほくつゝみかくし給ふも玉かつ
らの君を兵部卿宮に見せ奉りていよ／＼御心をま
とはし給はんとし給へるなりさてほたるをうすき
かたにこのゆふつかたおほくつゝみをくといへる
を河海には几帳のかたびらは三重なる物なり表は
綾うらは練文沙中倍ありうすきかたとは裏のかた
なりとしるされたり几帳のかたびら夏は表裏とも
にうす物也たゝし几帳のかたびらにゆふつかたよ
り螢をつゝみをかん事はたやすかるべき事にあら
ずうすきかたといふはたゞなをしの袖のうすきか
たと云心にやしからばうつほの物語とその心おな
しくして下の詞にほどもなくまぎらはしてかくし
つればほの／＼ひかると云にて源氏の袖につゝみ
給へるをひきかへし給へると心得侍らんにいたく
ちかひ侍らぬにやいかゞ

まことのわか御ひめ君をば　是は作者の詞也わか姫
君は明石のひめぎみ也

これよりすべりいでゝやをらわたりたまひぬ　これ
は源氏の君のわが御かたにかへり給事をいへり

えならぬうすものゝかたびらのひまより　几帳のか
たびら夏はうす物也榮花物語にしやうふの三重か
さねの几帳どもをみなうすものにてたてわたさせ
たまふとかけり

なくこゑもきこえぬむしのおもひだに人のけつには
きゆる物かは　鳴聲もきこえぬむしのおもひはほた
る也その思たにけつにけたれぬ物なりいはんや人
の思はねをさへたつるなればいよ／＼けたるまし
きとよめるなり

こゑはせで身をのみこがすほたるこそいふよりまさ
るおもひなるらめ　人はおもふ事を言にいたせは心
の中もかつ／＼くつろくならひなり聲もせぬむし
のおもひこそなをまさり侍れと女君の返事にした
まへるはほたるのおもひにくらぶれば宮のは物な
らぬと云心なり

いとかろらかにもてなし給　女君の御あいしらひを
ふそくに宮のおもひ給ふなり

ほとゝぎすかならずうちなきけんかし　郭公打なき

けんかしとは兵部卿宮のおもひのほどをほとゝぎすによせてかならず歌をよみ給へき事をいへりそれも聞きとがめされぱかきつくるにをよばぬとなり夜ふかういで給につきて古今のいづち行くらんの歌をおもひよせてかくはかけるなり又兵部卿宮はかならずなみだをながし給へつらんと云心をほとゝぎすによせていへるにも相違すべからず

まことゆかしけなきさまにもてなしいでゝと　源氏の君は玉かづらの君をまことはのこりおほくててんとおもひ給ふれど御心のくせにて秋好中宮などにも一わたりはかやうにみえ給へると也

五日の日もむまはのおとゝにわたり給ひける　馬場の殿はうしとらの町はなちゐ里のましますかたなり

いけみころしみ　いけつころしつと云詞なり

つねのいろもかへぬあやめもけふは　あやめはいつもあれども五月五日には時をえてめづらしく見なさるゝとなり

しろきうすやうにて　あやめのねはしろきゆへに白薄様にかき給へりさて歌にもおふるあやめのねのみなかれんとよみ給へり

ためしにもひきいでつべきねに　續古今見かくれておふるさつきのあやめぐさながきためしに人はひかなん　貫之　今案ながきねにむすびつけたるはねをなく事になづらへてたえぬなみだの程をみせたる心なり

あらはれていとゞあさくも見ゆるかなあやめもわかずなかれけるねの　此あやめもわかずは古今のあやめもしらぬ戀もするかなのあやめとおなじあやめもわかぬはなにの分別もなき心なり下のねの一字にてあやめとは聞えたるなりこれは宮の見かくれのねを猶ふかゝらぬとをしくたしたるこゝろなり

わか／＼しとばかりはのかにぞあめる　文の詞なりかやうのことゞいひかはし侍るもとしたけては面なきといふ心なり

いさゝかあかぬ事に見給ひけんかし　あかぬ事は不足におもひ給へる心なり

くす玉など　むかし武徳殿にて五日節會行はれて騎射の事ありその時宮内省典藥官人あやめを献ず又内侍藥玉を太子以下に給時くす玉を右のかたにう

ちかけてひだりのわきへたれて二の緒をわけて腰にゆひて各拜舞するなり
中將のけふのつかさのてつかひのついでにをのこどもひきつれてものすべきさまにいひしを　手結は左近の眞手結なり五月五日にあたれり夕霧の中將左近なるゆへにをのこども引つれてまいらんずるよし申したまふなり
むまはのおとゝはこなたのらうより見とをすほど遠からず　乙女巻云むまばのおとゝつくりらちゆひて五月の御遊所として水のほとりにしやうぶしけらせてとあり
ひだりのつかさにいとよしあるくはん人おほかる比なり　官人は將監將曹府生をいふなり
いまめきたるすそこの御木丁ともたてわたし　末濃とは凡丁のかたびら上はしろくてすそを紫或は紺にそめたるなり
さうぶかさねのあこめ　菖蒲重は面青裏の紅梅なり
あふちのすそこのもなでしこのわか葉の色したるからきぬ　樗は面うす色裏青なり末濃はすそをむらさきに染めたるを云べしなでしこは面蘇芳裏青一說面紅梅裏青なりこれは花にかたどれる色なり若葉の色はなでしこのはにかたどれるからきぬなりしからはうすもよぎと河海にいへる相違なきなりこなたのはこきひとへかさね　濃打をかさねたる衣なり
なでしこかさねのかさみ　なでしこは上にしるせりてつかひともおほやけ事にはさまかはりてすけだちかきつれまいりてさまことにいまめかしうあそびくらし給ふ　つかさの手結には官人以下馬にのりて的を射るおほやけことにさまかはるとはおほやけわざは人々かたむによりて少々まいらぬもあるをこのときはこと〳〵くまいりあつまるをさまかはるとはいふべし又手結には官人ばかりゐるをけふは上らうのすけたちもいるをさまかはるともいふべしいづれも相違なかるべし
とねりともえんなるさうぞく　とねりは近衞をいふなり
身をなけたるてまどはしなとをみるぞおかしかりける　これは競馬の事を云也馬場の手結は騎射とて馬にのりてまとを射ることばかりありて競馬の事は

なきを五月五日の節會武德殿にて行はるゝ事は騎
射の事はてゝ競馬もあるなり六日又武德殿にて十
列の競馬ありその後馬弓の事あり五日は五位以上
の人のたてまつれる馬にのる六日は寮の御馬にの
りて競馬の事あり又長和三年五月十六日左大臣の
上東門院の亭に行幸ありて競馬を御覽あり則又騎
射の事もあり隨身裝束褐衣上着青地打懸布帶末額
先例用紫地錦打懸此度只用競馬時打懸云々又萬壽
元年九月十九日關白の賀陽院にてこまくらべあり
行幸行啓あり東對を馬場のおとゝにして其まへ北
南に御馬を馳たり競馬はてゝ又騎射のことあり延
喜近衞府式云騎射官人二人着皂緌緋布衫金畵緋甲
形金畵布冑形近衞四十人細布甲形銀畵布冑形
近衞府式云凡五月五日騎射官人二人皂緌深緑貲布
衫金畵細布甲形金畵冑形
西宮抄六日競馬左右十列騎尻着末額（左赤右青近代左右共青）打
懸接腰幷兩面袴（左右同）着魚形尻鞘等也又諸衞ノ騎
射及雜藝等ノ裝束皆有ニ例色目一更ニ不ニ縷記一又左右
近衞府打毬之輩裝束拍巾子ノ冠黃袍靴等各持毬杖
延喜式凡五月六日騎射ハ官人近衞惣十八人並着深緑
布衫錦甲形白布帶横刀弓箭行縢（ムカバキ）麻鞋今案騎射と競
馬とに近衞の裝束不同競馬には打懸と云物を着す
陵王の裝束のごとし騎射にはたゞ褐衣を着す二や
うに裝束わけたりとねりどものえんなるさうぞく
けさうをつくしてとは競馬の裝束のことなり
みなみのまちもとをしてはる〳〵とあれば　むまは
をば北より南へとをしたればむらさきのうへのお
はします南の町の東の對にもそのかたのわか人ど
もは見侍るといへるなり
たきうらくなそりなとあそびてかちまけのらんさう
ともしのゝしる　六日武德殿の騎射はてゝ打毬の事
あり唐人の裝束にて馬にのりて毬子をはしらしむ
るを打毬と云その時奏する樂を打毬樂とはいへる
也納蘇利も六日の競馬の日雅樂寮これを奏す勝ま
けの亂聲は必競馬にあることなり上東門院賀陽院
の競馬にも每度此亂聲はありしなり又競馬行幸に
は蘇芳菲左狛形右この舞をもて御輿を迎たてまつ
ることあり裝束のやうは保延四年四月宇治左府の
記に見えたり蘇芳菲は其體師子のごとし有子二人
面形如犬なり狛龍なる馬形二疋乘尻舞人なりこゝ

にはいらぬ事なれどついでをもて註なり
なをあるをはよしともあしともかけ給はず　けふの物見にみこたちあまたましませども兵部卿師宮などの外はよしともあしとも花散里の詞にかけ給はぬなり
ちかきよすかにて見はあかぬ事にやあらん　ひけくろの大将を玉かつらの君にあはせ侍らば不足におもふ事もあらんとなり
そのこまもすさめぬくさと名にたてる汀のあやめけふやひきつる　後拾遺　香をとめてかゝる人あるをあやめ草あやしく駒のすさめざりけり　恵慶　今案菖蒲は駒の食せぬ草なれはすさめぬといへりすさめぬは不愛なりみぎはのあやめはこなたに水のほとりにしようぶをうへたるよし乙女の巻に見えたり花散里のわが身のことになづらへて讀給へりよのつねはすさめられぬ身なれどもけふの競馬にはこのまちのおぼえあることゝちするよしなり
にほとりにかけをならふるわか駒はいつかあやめに引わかるべき　わかこまはわかこもなり五音通ずる故なり駒くらべの日なれはこまと詞をかれりにはとりは一說云こもはあやめに似ておとりたる草なり源氏の我身をわかこまに比し女房をあやめにたとへておとりたれども引わかるまじきとなくさめ給ふなり
あいたちなき御ことどもなりや　たいの御かたの歌は駒もすさめぬとよみ給ひて源氏のすさめ給はぬ事をほのめかし源氏は又にほとりにかけをならふるといひて女房に似ておとりたれども引わかるまじきとの給へりいづれもあいたちなき御歌なりと物語の家にかきとゞめたるなり
ゆかをばゆづり聞え給て　帳代のゆかをば源氏にゆづりて我身は木丁ひきへだてゝ別にふし給ふを云
すみよしのひめ君のさしあたりけんおりをばさる物にていまの世のおはえもなを心ことなめるにかすへのかみかほと〳〵しかりけむなとそかのけんかゆゆしさをおぼしなづらへ給ふ　住吉物語に中納言の姫三人ある中にひとつは宮腹にてみめも心もすぐれたりけり宮つかへせさせんとていたしたてけるをまゝ母わがはらのむすめに思まし給へる事をやすからずおもひて六角堂の別當此ひめ君にしのびて

ふけうなるは佛のみちにもいみじうてそいひたれ
四十花嚴經十二云地神常言我負ニ大地一切所レ有及須彌山一不ニ以爲レ重亦無ニ厭心一於ニ三種人一常厭倦不レ欲ニ任持一何等爲レ三一者心懷ニ叛逆一謀レ害レ人等二念レ棄ニ恩親一不レ孝ニ父母一三撥無因果毀ニ謗三寶一破ニ輪僧一如レ是三人我極患レ重乃至一念不レ欲ニ任持
心地觀經第二云世間之恩有ニ其四種一一父母恩二衆生恩三國王恩四三寶恩如レ是四恩一切衆生平等荷負善男子父母恩者父有ニ慈恩一母有ニ悲恩一云々世間所レ高莫レ過ニ山岳一悲母之恩逾ニ於須彌一世間之重大地爲レ先悲母之恩亦過ニ於彼一若有ニ男女一背レ恩不レ順レ令其父母生ニ怨念心一母發ニ惡言一子即隨墮或在ニ地獄一餓鬼畜生父母恩重經梵綱經等自餘經說不レ遑レ記

こまの丶物語　河海抄にはこの物がたりの名とあり古物語と云心なり親行本にはこまの丶物がたりとかけり又くまの丶物語と書たる本もありそれもこまをくまと五音通ずるによりてなり
今案こまの丶物語は枕草子にも物語の名にいたせり勝說と云べし

ちいさき女君何心もなくてひるねしたる所を　こまの丶物語の中にある事なるべし紫の上は見給ひてむかしの我身のありさまおもひいだし給ふとなり
か丶るわらはとちたにいかてされたりまろこそなをためしにしつべき心のとけさは　これも物語の中にあるべし源氏の君の我身にたとへての給ふなり
けにたくひおほからぬ事はこのみあつめ給けりかし
こまの丶物語に類ひ少き事ども書あつめたるべし
みそか心つきたるもの丶むすめ　伊勢物語にみそかなる所といへり隱密の所をいへりみそか心も人にかくしたるふるまひなり
たいの御かたき丶給は丶心をき給ふへくなん　上の詞にわか御ひめ君ならはかくはもてさはき給はじといへりあのこと明石の君にはよなれたる物語をだになよみきかせ給ふなみそか心つくかわろきといましめ給へり
うつほのふちはら君のむすめたちこそいとおもりかに　うつほの物語に藤原君とて一世の源氏にて右大將まさよりといふ人あり北方を二人もち給へりける一人は太政大臣の娘一人は時の御門の御いもうと后はらの女一のみこなりその后はらの九つにあ

たり給ゐて宮と申みめ心すぐれたまへりければ春宮をはじめ奉りてときのいうそく聞傳へ一心をつくすについに異人々には心つよくて春宮へまいり給ぬれば源少將と云人は出家して山にこもりておこなふはらからの侍從なかすみは御ふみをゆをもちてすきいれてやかてたえ入ぬ太宰前帥滋野のますをとてあら〳〵しくおそろしき心したる人はいきどをりをなしてうれへふみをつくりて內裏へまいりてまうしければ御門見給てさかなきことゞもを書たりければ男女の子どもまでみななかしつかはしぬみはるの大臣と云人は家に火をつけてやきほろぼして山にこもりぬこのほか源宰相さねたゞ右大將かねまさ平中納言兵部卿宮上野宮御をいのみこ（あれの女御の御はらなり）兵衛佐ゆきまさ左大將（なかたゞの父君なり）源少將此人々いかにせんとおとゝいの君達又つかひ給女房などをかたらひていひわたれどもきゝ給はでやみにけりこれをおもりかにはか〳〵しき人にてあやまちなしとはいへりすくよかにいひ出たることわざも女しき所なしとはいつれにもなさけなくもてなしてひまなきふみともゝ返ししたまはず又源宰相これはかりとしゐて聞えたるにたまさかにかへし給ふとても

苔おふる岩に千代ふる命をはきなるいづみの水そしるらん　しぬといはゞためしにもせむ物をのみおもふ命は君がまに〳〵　よめる歌これ體にのみあり又ゆきまさの兵衛佐歌をよみてあに君といふしてまいらす御返たまへとなきのゝしり給へとかゝる人の返事せぬものぞたゝ見せつれはめさましと云との給へとありこれらを難として女しきところなしとはいへるにや

うつゝの人もさこそあるべかめる　これより又源氏の詞なりうつゝの人は現世の人なりむかしをばいはじ今の人もさこそあれといふなり

こめかしきはかりを　おさなかましき心なり

詞のかきりはまはゆくはめをきたるに　物語のつくりさまを云なりものもしらぬ人の書たるはさしもなきことをこと〳〵しくはめたる心なり

まゝ母のはらきたなきむかし物語も　むらさきのうへはあかしの姫君のまゝ母にておはしませは住吉の物語その外まゝ母のはらあしきことどもかける

ふる物語をかきうつし又繪なとにもあたらしくかゝせたまひてむらさきうへにみせ給へるなり

大はん所女房のなかは　執柄家にもたいはん所あり女房のさふらひ所なり

かの人のもろともにあそひて　夕霧の雲井の雁とひひなあそびせし事をおもひいだし侍り

なをかのみとりのそでをみえなをしてしかなと　雲井の雁の六位すくせといひし事をみなをされはやとの給ふは猶雲井の雁に心をとめ給へるなり

あながちになどかゝつらひまとはし給ふるかたにゆるし給ひもしつべかめれとつらしとおもひし折々にいかて人にもことわらせたてまつらんと　夕ぎりのかたより雲井の雁をあながちにかゝつらひしたひ給ふやうならはおとゝはゆるし給ふへけれとなさけなくはしたなめられしことをつらしとおもひて人にことわらせて後と思ひいそがれぬ心なり

むかしのちゝおとゝたちの御なからひに似たり

夕霧かしは木の君の御中むかしのちゝ君たちの御なからひのやうなりとなり

かのなでしこを　玉かつらの君のことなり

ものゝおりにもかたりいてたまひし　雨夜の物がたりの時を云にや

物うんし　慍なり恨たる心なり大和物語世の中をうんしてつくしに行たりける人とあり

花鳥餘情第十五　　常夏　篝火　野分　御幸

並四　常夏

以詞幷歌爲卷名但詞にはなでしことあり一物二名なり又歌にはなでしこのとこなつかしきとあり源氏三十六歳の六月の事又竪の並なり

いとあつき日ひんかしのつり殿に出給てすゝみ給ふ　京中名跡記釣殿院號六條院光孝天皇の御所なり六條東洞院にあり今物語にいへるは六條院のつりとの六條京極なり各別の所なりうつは祭の使　かゝるほどに六月ころほひになりぬ大將殿池ひろくふかく色々のうゑ木きしにそひておひたる水のうへに枝さしいりなどしたるなか島にかたはらは水にのそきかたはらは島にかけていかめしきつりとのつくられおかしきふねどもおろしうきはしわたしてあつき日さかりには人々すゞみなどし給に十二日いとまの日にてまいり給はぬをつり殿にてけふすゝませたてまつらんけふあらんくだ物など給へよと聞え給てつり殿にいて給ぬきんたちなとさふらひ給におまへの池にあみおろし鵜おろして鯉ふなとらせよきひしおほきなるみつふうきとりいてゝせいかめしき山もゝひめもゝなど中島よりとりいでゝおかしきこ鍋ども水にひろいたてなとしてすゝみあそび給てあるじのおとゝけふこゝにてのすき物どもひとりもなきさう／＼しやなかすみとう侍從よひにやれかしふかき契ある人はよしあるおりすくさぬそよきなどのたまへばおどろきての給ひつかはしたれば三所ながらあそひとといてきてふねに乘てつり殿へまうす　今案あつき日釣殿に人々すゝみていをなとてうしたる事この物語に面かげにたるによりてのする物なり

にし河よりたてまつれるあゆおまへにてゝうし　西宮抄云禁河（堤河左衛門府攄知　野河右衛門府攄知）葛　已上夏供鮎　今案堤河は東河なり葛野河は西河なり

ちかき河のいしふしなと　亭子院御集云いしふしやうの物御まへにてゝうしてまいらす　うつほ（くにゆつり中）とりあへるいをともえらせつあゆひとこはえ一こにいしふしこぶないれさせあらまきなどそへさせておとゝ御まへに人々めしててうせさせ給ひてけうしてまいる和名云鰦（音夷和名伊之不之）性伏沈在石間者也

ひ水めして　枕草子云いみしくあつきひる中にいかなるわざをせんとあふきの風もぬるしひ水にてをひたしてもてさはぐ程に

すいはん　うつほ十二宮おとゞなどまかせ給て後すいはんしてまいらせたることあり今案水飯はいまの世にひめとなづけてくふ物なり

さうとき　もてさはぐこゝろなり

むらいのつみは　無禮なり

ゆめかたりしたまひけるをほのきゝつたへ侍ける女のなん　夢かたりは螢の巻に有りこの女は近江の君の母少將君といふ人なり

中將の君もくはしく聞給へる事なればえしもまめたたす　夕霧のことなりまめたゝぬとは實法かほをせぬを云心におかしとおもふなるべし

さやうの落葉をたにひろへ　落胤腹を云なり

おなじかさしにてなくさめん　ちゝのおとゝの夕霧にひめ君をゆるされぬ事を源氏の君の無念におもひ給ての給詞なり

いとかけりこまほしげにおもひたるを　此人々姫君のましますす處までも推參したくおもひたれど中將の實法の人にてしんしやくし給ふによりて外樣にやすらふ心なり

なを〳〵しききはをたにまとのうちなるほとは　なを〳〵しききは直人を云なりまとの內なるとはおやの所にある人のむすめを云なり

おまへにみたりかはしきせんさいなともうへさせたまはずなでしこの色をとゝのへたり　みたりかはしきせんさいとはあれこれをうへすしてたゞなでしこばかりをうへられたるを云なりなでしこは玉かつらにたとへ侍り帚木の巻に山かつのかきほあるともといへる歌よりたとへきたれるなり

右の中將はましていますこししづまりて　かしは木の中將なり

中將をいとひ給こそおとゝははいなけれ　おとゝは內大臣を云これよりは玉かつらのきみとの御物語なり

おほきみたつすらにておほえかたくなゝり　夕霧のことなりかたくなゝるは頑字なりそれは愚なる心なりこゝもたゝみたてなかるべき事にいへり

きまさはといふ人も侍りけるをときこえ給ふ　これ

は玉かつらの返答なりおほきみたつと云につきて我家の曲の詞をとりていへり雲井の雁のことなり夕霧のとりたて丶さもとおもひ給はゞおと丶もいやにてはなきやうに聞給ふよしの給ふなり

いてその御さかなもてはやされん　この御さかなも我家の詞にありこと／＼しきむこ入の作法をいふなり

さはか丶る御心のへだてある御中なりけりと　これは玉かつらの心におもひたまふことなり

いとかしこきやまとことははかなうみせて　和琴のことなり河海の説あやまれる本あるにや

このわたりにさりぬべき御あそびのおりなど　玉かつらの君の詞なり

さかしあつまとぞ名にたちたるやうなれと　これは源氏の御詞なり

御前の御あそびにもまづふんのつかさをめすは人のくに丶はしらずこ丶にはこれを物のおやとしいたしたるにこそあめれ　和琴は伊奘諾伊奘冊の二神の御代より出きたるうつはものといへども日本紀などには見え侍らず又天岩戸に天照太神のこもり給ふ神宴よりいてきたるともいへり最初は弓六張をならべてつるをうちならし丶より和琴といふ物はつくりいだしたりともいへり今の世巫の口よするとて弓のつるをうつはか丶る事よりおこれるにやふんのつかさは男官をば圖書寮と云女官をは書司と云和琴をは書司の女官あつかりまうす也名をは御たならしと云又朽女或は宇多の法師など和琴の名物なり我邦より出來れる器なるによりていつれの樂器よりも上におかる丶こと丶なれりさるによりこれを物のおやとすともいへりこの詞はうちのおと丶の和琴の上手なることをいはんとていへるなり

ことつひいとになくいまめかしうおかし　狛氏十卷抄云ことつきことつひことさい三説ありことつきは人のかほつきなとなりことつひはそのすかたかほつほみたるものからもの／＼しくけたかくこまやかにあひたる心なり自由の曲にをせみたるすがたを云事あり其心性におなじをせみたるとははやき物から閑なりたとへば人の大足にはしるにこあしにはしる風情なりことつひのことの字は事の字

なり和琴の字にあらすことさいは只人のわしくよみつけたるなり不可用之

ぬき河の瀬々のやはらたなどいとなつかしううたひたまふをやさくるつまはすこしうちわらひ給ひつゝ　ぬき河のせゝのやはらたはたまくらといはんとて下のもしを略していへりうたふ時にかやうにきこえはべるにや又をやさくるつまも貫河の詞にあり玉かつらの君の事をおもひよせてうたひ給ゆへにすこしうちわらひたまふとはかけるなるべし

さえは人なかにてはちぬわざなり　才也

さうふれんばかりそ　唐の書には想夫憐とかけりこゝには想夫戀とかく心はおなじことなりおとをおもふとよまるゝによりて女はその心してひくべしといへり

おもなくてかれこれにかきあはせたるなん　おもなくては物にはおぢぬ心なり

さるゐ中のくまにて　くまはかくれたる心なりこれは玉かつらの心なり

いかなる風の吹そひて　是は玉かつらの詞なり

みゝかたからぬ人のためには　これは源氏の返答のことばなり

いにしへ物のつゐでにかたりいで給へりし　むかしの雨夜の物がたりの次になでしこのことをの給ひしことなり

なでしこのとこなつかしき色をみればもとのかきねを人やとがめん　野宮歌合判歌順　秋もなをとこなつかしき花の色をうたがひをける露ぞはかなき　今案もとのかきねは夕貌の上の事をいへり山かつのかきほあるともおり〳〵にあはれはかけよなでしこの露此歌によれる詞なり御ぬしを内のおとゝに見せまうしたらば本のかきねをあやしみ給はんはわつらはしかるべきとなり

まゆこもりも心くるしうとのたまふ　これは玉かつらの君のこもりゐて父にしられ給はぬを心くるしきとなり

山かつのかきほにおひしなでしこのもとのかきね（ねさしイ）をたれかたづねん　玉鬘の心にはもとの事までは内の大殿も何かたづね給はんたゝとくたいめんあらせ給へかしとの心なり

こさらましかはとうちすんじたまひて　本歌あるべ

し未見出之
ことなることなき納言のきはのふた心なきにて　納言ほどのしなの人なりとも二心なくこのひめ君をおもはんは中々我にはまさるべく源氏の思ひ給ふなりひけくろの大將などの事をおもひよりたまへり
さてもてはなれいさないとりて　もてはなるゝはわが御事いさなひとるは納言なとのきはの人をいふなり
かくまた世なれぬほとのわづらはしさこそいと心くるしうは　よなれぬとはいまだ世になれぬ心なり心は源氏のひめ君をいひなひかさんほどのわづらはしさを云なり
關守つよくとも　人はせくともせかるまじき心なり
いよ／＼心やすからす思ひわたらんもくるしからん　これは源氏の御心にとやせまじかうやせましといまたおもひさためぬほどの御かたらひなればむつかしきとなり
内のおほひとのはこのいまの御むすめ　近江の君のことなり

これにこそおほえある心地しけると　かの御詞にかゝるは中々おぼえある心ちするとは面目しきなり
あたらおとゝのちりもつかず此世にすき給へる　ちりもつかぬは人にけがされぬなり此世にすきたるは過なり
おもたゝしきはらにむすめかしつきて　おもたゞしきはらとはおもておこすほどの人のはらに御むすめを得てかしつかまほしく思給ふれどいまにさることもなきは大かた御子の緣がなきやうにみえたればいまより後もおぼつかなくおもはるゝとなりおもたゝしきはらとはむらさきのうへなどに御子のなきことなり
猶ひめ君の御事あかずくちおしく　雲井の雁のことなり
くらゐさはかりと見さらんかきりは　夕霧の中將の位もあかり給て後むこにもさためんとおもひ給ふなり
かるらかにゆくりもなくはひわたり給へり　内のおとゝ思ひもかけぬに雲井の雁の御かたへわたり給ふなり

きさきがね　伊勢物語にむこがねとありかねは器量など云がごとし

こと〳〵しきゆへもつけしたと〳〵しきこともあらじと　こと〳〵しきは過なりたと〳〵しきは不及なり過不及なきを中庸の道とするなり

たてゝなびくかたはかたと有ける　心のひくかたにはかならずそのかたへなひくならひなり

おもふやうにてみたてまつらんと　これよりは雲井の雁のことをの給ふなり

心見事にねんごろならん人のねきことに　人の心を見んとておもはぬ事をもねんごろに云事なり

むかしは何事もふかうおもひしらで中々　これは雲井の雁の心なり

さるをこのものにしないたらん　をこのものはあなづりくさにする心なり

中將などのいとにけなく思侍りけんかねことも　このあふみの君をはかしは木の中將の尋出したる人なりかねておもひしにはいさゝか不足なるやうなればにやさりともことの外にはよも侍らじと女御はなをざりにおもひなし給ふなり

かくの給ひさはぐをはしたなくおほさるゝにかたへはかゝやかしきにやとはつかしげに聞えたまふ

内のおとゝのかくの給ひさはぐを女御のきゝ給てはしたなくおほさるゝことはさてはかたへの我身かやうなる物はいかほどみめかたちがよくてあたりをかゞやかすほどの事かあるそとはつかしげに女御はの給ふなり

この御さまはこまかにおかしげにはなくて　こうきてんの女御の御かたちを云なり朝ぼらけの梅のはなを見るやうなり

中將のさはいへど心わかきたとりのすくなきなりと申給ふも　かしは木の中將の心さかしきとはいへどもふかく遠慮もなくて近江君をたつねいたしたるとなり

すたれたかやかにをしはりて　はしちかなる躰なり近江の君のことなり

つみかろげなるを　河海に二の意をいたされ侍り後の一説爰には相當しはべり

かゝみにおもひあはせられ給ふに　わかかほをかゝみにて見るに近江の君のにかよひたればわが身の

すくせ心うくおもひたまふなり
かくて物し給ふはつきなくうゐ〳〵しうやある
父おとゝはじめはのそかれたるが後にはあふみの君にあひて物のたまふなり
てうたぬ心地し侍れと　双六のよきてうたぬ心ちして心やましきなり河海の一説しかるへきにや
なにかそはことゝ〳〵しうおもひたまへて　近江の君の詞なり
おほみ大つほ　延喜齋院式云大壺一合云々今案小便つゝの事なり
めうほうしのへたう大とこ　承和九年十二月二十七日格云妙法花經ト最勝王經ト經別一人毎年聽レ度ヲ隨レ業各入下在ニ近江國一妙法花幷最勝寺上其試定者始從ニ序品一盡令ニ讀誦一今案近江君といふにてしりぬ妙法寺の大徳うふやにはべりけるさりぬべきことなりこの大徳したばやにありけるによりてあやかりけるなるべし
あえ物となんなげきける　あやかり物なり榮花物語云よのあえ物にきこえつべき殿なり
こなからはつかしけにおはするさまに　こうきてんの女御の御ことなり
たきゝひろひ給はずとも　提婆品云採菓汲水拾薪設食
たゞいとあやしきしも人のひなひたる　是よりは物語の家に批判したる心なり
いといふかひなくはあらず　近江の君歌などはわろ〳〵とつゞくることをいふなり
むさしのといへばかしこけれど　かしこけれとはおそれかましけれどとも云心なりはらからゆかりなどゝまうせばおそれがましきとなり
てんがちにて　河海にはまなのましりてかと〳〵しきかとしるされたり　今案眞行草の字によりて六書の點かはるものなり　假名は草の字のなを草なるものなりかならずしもまなの文字にあらずとも筆勢のことゝ〳〵しきをてんかちなるといふべし下の詞にいとさうかちにいかれる手のそのすちとも見えずとあればかなをさうにかきたるをてんかちなると云とは覺え侍り
みなせかはにをとて　手跡のあしきことをいふなり
くさわかみひたちの海のいかゝさきいかてあひ見ん

たこの浦浪　古今　するがなる田子の浦なみたゝぬ日はあれども君をこひぬ日はなし　今案此歌の所詮はいかてあひみんの七字にあり大方歌の體はすゝろことをいひつらねたるべし萬葉に無心所着の歌の體とまうすべきにや

おほかはみつのと　大河のへを大河水とひきちがへたるにや又他の證歌ありやたつぬべし萬葉の歌の心ならはなみにおもはぬといへる心なるべし

えみしらねはにやあらんもとすゑなくもみゆるかな　女御のわか御心のをよばぬにやあらん此歌もとすゑうちあはぬよみやうにてあるとの給ふなり

ひたちなるするがの海のすまの浦になみたちいてよはこさきの松　四ヶ國の名所をよめる歌なり

それはきかん人わきまへ侍りなむ　きゝしらん人は女御の御みつからの歌とはおもふまじきとなり

まつとのたまふめるをとて　はこ崎の松と云結句を心よせのかたにとりなしたるなり

並五　篝火

以詞幷歌爲卷名源氏卅六歳の秋の始なり又竪の並なり

夏の月なきほとは　秋なれどいまたあつき比なれば夏の月と云にや又立秋節以前土用中なれば夏と云ふにや

行衞なき空にけちてよかゞり火のたよりにたくふけふりとならば　篝火の烟はたちのほればきゆるものなりそれにたちそふならば戀のけふりとても行衞なくなりぬべき心なり

くはやとて　すはやとてなどいふ詞なり

うちつれて三人まいり給へり　夕霧の中將かしは木の中將辨の少將此三人なり

辨少將ひやうしうちいてゝしのびやかにうたふこゑすゝむしにまかひたり　寛平御記　寛平二年　平利世者皇王（桓武之孫也）二世之孫皇后之弟也而聲長ニ蟬歌一初誤ニ秋虫之嘯ニ葉間一親聽ニ曲調一宛如ニ松風之動ニ曉後一爰云榮ニ閑暇一所々令レ歌乞得青見數千行幷綾羅衣裳今案歌うたふこゑを虫のねにたとへたるこの御記のおもかげあり

ゑいなきのついでに　萬よるひかる玉といふともさけのみてゑいなきするにあにしかめやも

さまよくもてなしておさ〳〵心とけてもかきわたさす　かしは木の中將は玉かつらの君を我いもうとなることをいまだしらずして心をかけて和琴をひきけるがかゝるついでにしのびはつましき心もこそいてくれとて斟酌しておさ〳〵心とけてもかきわたさぬといへりむかし司馬相如が琴をひきて卓文君が心をとりしかは文君夜相如がもとへかよひけるためしもあるにや

並六　野分

以詞爲卷名源氏卅六歲の秋八月の事也竪の並なりくろきわかきのませ　木の皮をけづれるをわかきとは云べし

春秋のあらそひにむかしより秋に心よする人はかずまさりけるを　拾遺九ある所に春秋いづれがまさるとゝはせたまひけるによみてたてまつりける　貫之

春秋におもひみだれてわきかねつ時につけつゝうつる心は　又云元良のみこ承香殿のとしこに春秋いつれかまさるととひ侍りければ秋もおかしう侍といひければおもしろき櫻をこれはいかゞといひ侍りければ　大方の秋に心をよせしかと花みる時はいつれともなし　又題しらず讀人しらず春はたゞ花のひとへにさくばかり物のあはれは秋ぞまされる　謙德公いまた宰相中將の時應和三年七月二日かの君達春秋の歌合のことあり秋のかたより　花も見つ紅葉をも見つ虫のねもこゑ〳〵おほく秋はまされり今案萬葉集の額田王の歌をはじめとして秋に心をよせたるやまとことばおほきゆへなり

野分例のとしよりもおどろ〳〵しく空のいろかはりてふきいづ　杜詩云八月秋高風怒號

草むらの露の玉のをみたるゝまゝに　古今躬恒長歌　玉のをとけてこきちらしあられみだれて霜こほり

人からのいとまめやかなればにけなきまでおもひよらねと　夕霧の君實法の人なれは紫の上を見給てにけなきまては思ひよらねとさやうならん人もかなとおもひ給へるなりにけなきとはたくひなきこゝろなり

あかつきのわかれよいまならひ給はんに　これはあるましきことなれど紫の上にたはふれたまふ詞なり

おこりあひはべりて　風の病おこりあひたるなり

をみなへしのかさみ　女郎花は面たてあをぬき黄なる色裏はもよきなり

しゝうのかにことにはふかうのかほりもふれはひたまへる御けはひにやと　かうのかほりもやかて侍従のたきものをいへり中宮の御うつり香にふれてたき物の香をもてはやしたる心なり河海に麝香の事かといへるしかるべからず

これはたゞはいへとけたかくすみたるけはひにもさま〳〵ものおもひいてらる　けだかくすみなし給へるけはひは中宮の御事なり物おもひいでらるとは紫の上をかいまみしことなり

小うちきひきおとして　衣架にかけたるを引落してきたるなるべし

こと〳〵しくさきなおいそとの給ふ　あかしのうへのかたへわたり給とては随身さきをおいたり家のうちにてのことは心まかせのことなりさてさきなおいそとの給なり

やへ山吹のさきみだれたるさかりに露かゝれるゆふはへそ　玉かつらの君のすがたを夕霧のおもひなずらへたまふ詞なり十七の巻にきぬをあなたこなたへくばり給所にくもりなくあかき山吹の花のほそなかはにしのたいにとありき給ふ人のかたちにおもひよそへてたてまつらせ給ふとみえたれは源氏の御心にも山吹は玉かつらの君ににかよひたるとおもひたまへるなり

御なをしからのけもんれうをこのころつみいたしたる花して　花文綾は有花文之綾也謝惠連詩云客從遠方來遺我鶴文綾と云同心なり或說顯文綾也けんもんしやなといふがごとしこれは夏の直衣を云當時は穀の堅文なるを用ゐるなり大略同事歟この比の花とは鴨頭草の花をいふ夏のなをし花田にそむる故なり

またあなたになんおはします　明石の姫君は紫の上の御かたにおはしますとなり

宮のいと心くるしうおほいたりしかはなむ　三條の大宮の風におち給へりしほどにそなたにはへりしよし夕霧語たまふなり

きたのおとゝのおほえをおもふに　雲井の雁をあかしのうへのおほえになずらへての給ふなり

ふきみたりたるかるかやにつけ給へる人々かたの丶
少將はかみの色にこそと丶のへはべりけれときこゆ
さばかりの色もおもひわかさりけりや　これはむら
さきのうすやうにかきてかるかやにつけたるか紙
の色にたかひたると人々とがめたるなりなみのし
めゆふと云物語によそへつ丶みれどかひなしかく
てのみひとりはいか丶ゐての山吹ふりにたること
なれとかみの色ににたるこそおかしけれとて山吹
につけ給ふかたの丶少將にやなるらん今案交野少
將はかみの色ににあひたる枝につけしを夕霧の心
にはかならずしもしかるべからず何にてもその時
にしたかひたる花につくべきとおもひ給へるにや
いづくの野邊のほとりの花よなと　いつくの野邊の
ほとりにてをりしやらんか丶る色したる花はあり
しとおほめきてこたへ給へるなり
わたらせ給ふとて人々うちそよめき　あかしのひめ
君のむらさきの御かたよりこなたへわたりたまふ
なり
みつる花のかほとも丶　むらさきのうへはかはさく
ら玉かつらの君は山ぶきにたとへし花のかほはせ

を夕霧のおもひ出たまふなり
さき／＼のをさくら山ふきといはゞこれをふちの花
とやいふべからんこたかききしよりさきか丶りて風
になびきたるにほひかくぞあるかしと　あかしの姫
君を藤にたとへたることわかなの下の巻にもあり

花鳥餘情第十六　御幸

並七　御幸
以歌爲巻名大原野行幸は源氏卅六歳の十二月のことなりあくるとし卅七歳の二月までのこと此巻にあり又竪の並なり
かくおもほしよらぬことなくいかてよからむことはと　此一段はにしのたいの姫君の御事を源氏の君いかでよからんことをもかなときこえ給ことなり
このおとなしの瀧てそうたていとをしく　さるから又源氏の君の思かけ給事なり
みなみのうへの御をしはかり事にかなひて　こてふの巻に紫の上の源氏と玉かつらとの事をたゞにしもおほすましき御心さまをみしり給へれはといへることなり
かのおとゝの何事につけても　致仕のおとゝは何事もきはをきはにし給てみたりかはしきことをきらひ給ふ事を云なり
さておもひくまなくけさやかなる御もてなし　これも致仕のおとゝの御心にあながちなることにおもひ給て事の外なる御もてなしなとのあらはをこかましかるべきことをおもひ給て玉かつらの君をしゐてしたひさまなる事はあらしとおもひかへし給ふとなり
そのとしのしはすに大原野の行幸とて　野行幸は仁徳天皇の御宇よりはじまりて仁明天皇承和二年光孝天皇仁和二年芹河　醍醐天皇昌泰元年片野　延喜四年大井川　延長四年北野　同六年大原野　これらなり中比白河院承保元年大井河行幸あり十二月の例は仁和二年十二月十四日芹川行幸行平中納言さがの山御幸たえにし芹川の千世の古道跡はありけりとよめる時なりいまの行幸は延長六年十二月五日大原野行幸の例を模してかけり大略李部王記にいへるがごとし
あを色のうへのきぬえひそめの下かさねを殿上の五位六位まてきたり　李部王記延長六年大原野行幸其装束御赤色袍親王公卿殿上侍臣六位以上着麹塵袍今案主上は赤色の御袍を着し給ふ其外親王公卿以下は皆青色の闕腋袍をきる下かさねはえひそめなりこれは鷹をつかはぬ人の出立をいへり承保三年

大井河行幸にもかくそありし
みこたちかんたちめなとも鷹にかゝつらひ給へるは
めづらしきかりの御よそひともをまうけたまへり
李部王記　鷹飼親王公卿着地摺布衣及袴（或用紫木蘭色綺袴）小襖子餌袋　今案これは王卿の鷹飼の装束なり布かりきぬの摺の文あるをきる袴もおなじあるひはむらさき木蘭地のきぬのさしぬきをもきるよしみえたり襖子は下にかさねたるきぬのことなりゑふくろをつくへし冠は巻纓のかふりをきるべし仁和の芹河の行幸に行平中納言の大鷹飼のかり衣につるを紋にぬいたるも王卿の鷹飼のことなり
そ衞の鷹飼ともはましで世にめなれぬすりころもをみたれきつゝいとけしきことなり　昌泰元年十月片野行幸左方鷂飼着赤白橡地色摺衣右方鷂飼着青白橡地色摺衣　西宮抄云鷹飼地摺狩衣綺袴玉帶鷂飼青白橡袍綺袴玉帶巻纓有下襲着鞆者有尻鞘王卿鷹飼入野之後着ニ行縢餌袋ニ承保三年大井川行幸鷂飼（殿上）兩人鷹飼兩人皆雲客也巻纓色々狩衣袴唐錦椅腰韛餌袋云々鷹飼隨身四人錦帽子狩袴腹纏餌袋云々以上各具犬飼着帽子今案諸衞鷹飼の装束先例いさゝか不同也叉はいたか飼と大鷹飼との狩衣も同じからざる也昌泰の記の赤白橡と云はあかいろのことなり黄櫨と茜とにて摺たるかり衣なり青白橡と云は青色のことなり苅安と紫とにて摺たるかり衣なり袴はきぬのさしぬき玉の帯巻纓の冠劔は尻鞘あり此外唐錦椅腰韛等は承保記にみえたり諸衞とは六衞府のすけ以下を云べし
御門の赤色の御ぞたてまつりて　延長六年主上赤色をめす上にしるせりその外延長四年十月大井川行幸にも昌泰元年片野行幸にもあか色を着御ありし也諸臣はかならずあを色の袍を着することなりたゞし第一の公卿は主上とおなじくあかいろを着することあり白川院の承保の大井川の行幸に京極殿關白にて赤色の袍唐錦袴を着し給ふこの外内宴の時の装束もかくのことし保元の内宴には法性寺關白赤色を着し侍り此行幸に源氏のおとゝまいり給はゝあか色をき給べきなり
御こしのうちより外にめうつるべくもあらず　昌泰元年野行幸之時車中之女爭瞻天顏或出半身或忘露面云々見紀納言記

右大將のさはかりおもりかによしめくもけふのよそひいとなまめきてやなくひなどおひてつかうまつり給へり　昌泰元年片野行幸右大將菅原朝臣供奉給西宮抄云公卿如例衞府公卿着弓箙又如例　今案大將は納言以下は弓箭を負事なり大臣大將は衞府をはつくらぬならひなりひけくろの大將は大納言たるによりてやなくひをおひ侍るなり

御さうそくともみななをしかりのよそひなどにあらため給ふほとに　西宮抄云天皇服白橡御衣延喜御時天皇御右近馬場改着直衣云々昌泰元年片野行幸着御赤白橡唐綾御衣入野之後着獵御衣云々　今案野に入せ給て後主上の御ふく御なをしにあらためられし例もあり又かりきぬをめされたることもありしなり

六條院よりおほみき御へとも　延長六年の例をうつせり此時六條院は宇多御門の御事なるべしいまの物語にも六條院をのつから相かなふものなり

藏人の左衞門のそう御つかひにてきし一えたたてまつらせたまふ　延長四年北野行幸のとき藏人左衞門尉源俊春を御つかひにて雉一えた中宮へたてまつらせ給へり其例をもて又藏人左衞門の尉をもて六條院へまいらせられたるなり

御せうそこにはなにとかやかやうのおりのことはまねふにわつらはしうなむ　作者の詞なりかやうのきしきかましきことは女のしらぬ事なれば口うつしにかきとむるもおぼつかなくおぼゆとなり

太政大臣のかゝる野の行幸につかうまつり給へるためしなどやありけむ　御歌にふるきあとをもけふはたつねよと侍るは仁和二年の昭宣公の例をおぼしめしたるなり源氏の君此時太政大臣の故なり

をしほ山みゆきつもれる松原にけふばかりなる跡やなからん　大原やをしほの山の小松原はや木たかゝれ千世の陰見ん今案御門の御製のふかきあとゝは太政大臣の供奉し給事をの給へり源氏の御返歌のけふばかりなるあとは大原野行幸はけふが始なればけふばかりなるあとやなからんと申し給へり

いとうちとけたる御ふみのこまかにけしきはみてもあらぬおほきをみ給ひて　源氏の御ふみなりおほきは詞の多きなり

うちきらしあさくもりせしみゆきにはさやかに空の

光やは見し　おうちきらし雪はふりつゝしかすかに我家のそのに鶯そなく家持　今案打きらしは打霧なり霧のうちふたかりたるやうなり此歌は玉かつらの君の源氏の御返事によみ給へるなり空の光は御門をたとへ給へるなり

あかねさす光は空にくもらぬをなとてみゆきにめをきらしけん　天の原あかねさしいつるひかりにはいつれのぬまかさえのこるべき　今案目をきらすは目きりすると云心なりめにきりのさえきりたるやうなり

もしこのおほしよることもあらんにはかすかの神の御心たがひぬべきも　このおほしよることゝは玉かつらの君を御宮つかひにいたしたてらるべきことゝなりこのほとはたれやらんのやうにてこもりおはすれはうぢ神なとの御つとめもあらはにしる人もなきやうなりもし御宮つかへなどありては内のおとゝの御むすめのふんならば藤原氏とこそまうすべきに源氏の御むすめなどゝ申かすめは春日大明神の御心にたがふへきと云心なり

この御こしゆひにはかのおとゝになん御せうそこきこえ給けるを大宮こその冬つかたよりなやみ給ふこと　玉かつらの御もきのこしゆひに内のおとゝを請しまうしたまへば三條の大宮の御なやみのことにしんしやくのよし返事ありたゞ源氏の御女のふんに内のおとゝは心得給ていまだこれまでは我御むすめとはしりたまはぬなり

宮もうせ給ひなば御ふくあるべきを　三條の宮うせ給はゝ玉かつらの君は祖母の服をおいたまふべきことなり

さもとりかへしすゝい給はさらんとは　すゝいとは洗濯の心なり上の詞にきよめと云ことあり下に又水の喩あることなり

にごりのすゑにまちとりふかくすむべき水こそ　にごりのすゑは濁世を云なり

おほやけさまにてさる所のことをつかさとり　宮つかへにはわたくしより思ひよりていでたつこそたけき事にもあれそのつかさにことかくるにつきておほやけさまのさためにてめしいださるゝはかるがるしきやうなれどたゞしそれもまた人がらによるへきといふこゝろなり

えひそめの御さしぬき櫻の下かさねいとなかくはしりひきて　直衣布袴なりさくらの下かさねは面白裏えひそめなり

六條殿は櫻のからのきの御なをしにいまやう色の御そひきかさねてしとけなき大君すがた　これは布袴とは見えずいまやう色の御そはつねのきぬなり下かさねとはみえ侍らずおほきみすがたはさきにしるし侍りぬ

かうしはこなたさまになんかうしと思ふ事はおほくはべるなと　源氏はかの雲井の雁のことをおもひあはせての給詞なり

そのつゐでにほのめかしいて給てけり　玉かつらのことなり

宮はたまして姫君の御事をおぼしいづるに　あふひの上の御事を大宮のおほしめしいてたるなり

いかなる御ゆつりのあるべきにかとひが心をえつゝ　この事とはしらず雲井の雁の御事とひか心えたる人々はおもふなり

うべなりけりとおもひあはすることもあるに　野分の巻にあることなり源氏の君の玉かつらとたはふれたまふを夕霧がいま見て思ひの外におもひしか事のおもむきをきゝひらきてさては道理にてありけるとおもひあはすることなり

かのつれなき人の御ありさまよりも　雲井の雁のことなりなをもあかずおもひいてらるゝも雲井の雁のことなり

ふたかたにいひもてゆけは玉くしけわが身はなれぬかけこなりけり　三條の宮は玉かつらの君のため祖母也又源氏の北の方あふひのうへは宮の御むすめなり玉かつらの君を源氏の御女といへばあふひの上のためまゝ子なり繼母は親母におなじと云本文あるによりていつかたにつけても三條宮はむまことおもひなし給へる心なり

いたしやこの御手よ　いたしやはいたましき心なり

よくも玉くしけにまとはれ給へるかな　ふたみかけこ玉くしけの秀句なり

御くしあけの御さうすく　髪上の具足を云にや

おちくりとかや　こき紅のくろみ入たるほとにそめたるを云べし

から衣又から衣からころもかへす〳〵もからころもなる　古今　から衣日も夕ぐれになるときはかへすかへすぞ人は戀しき　今案末摘花の巻の歌から衣君が心のつらければたもとはかくそゝぼちつゝのみ玉鬘巻歌きてみれはうらみられけりから衣返しやりてん袖をぬらして此巻歌我身こそうらみられけれからころも君かたもとになれすと思へはこれまてからころもといふ事三度よみ侍る故にから衣又から衣とはかさねてよみ給へる嘲哢の歌也

よしなしてといとおほかりや　から衣と云文字のおほきことなり

こよひはいとゆくりなかるべければ　ゆくりなきとは不意とかけり心なきやうなる心なるべし

ひきむすひたまふほとに　裳のこしをゆふなり

いにしへさまのことはかけはべらねば　このひめ君のこゝにわたり給ふ事いはれをいまだあかし給はねはいにしへさまのことかき侍らぬと云なり

うらめしやおきつ玉もをかつくまでいそかくれけるあまの心よ　後撰十五から崎のはらへに車よりくろぬしにかつけ物するものこしにかきつけてみると云女にをくりし　なにせんにつたのみるめをおもひけんおきつ玉もをかつく身にして黑主

よるへなみかゝるなきさにうちよするあまもたつねぬもくつとそみし　もくづは裳によそへたるなり

あかぬよしをきこえ給へと　これは内のおとゝの玉かつらの君をみ給てかへり給へはけふのことなをのこりおほき心ちするよしを聞え給ふなり

なをしはしは御心つかひし給て世にそしりなきさまに　これは源氏の内のおとゝに玉かつらの君のことを申給ふ詞なり

いまそかの御夢をも誠におぼしあはせける　内のおとゝの御夢のことはたるの巻にあり

このさかなものゝ君　近江の君のことなり

中將少將なとさふらひたまふに　かしは木紅梅の君なり

かたきいはほをもあは雪になし給ふへき御けしきなれは　日本紀第一云天照太神踏ニ堅庭ニ而陷レ股若ニ沫雪ニ以蹴散今案かたきいはほはかたき庭とあるべきことなりすさのをのみことの惡行を天照太神のいかり給へる時ますらをのわさをし給ていきほひ

をなし給時のことなりかたき庭をも雪のことくけちらしたまふ心なり天照太神とすさのをのみことは御せうとなりいま又近江の君と辨少將ともおとゝいなればあふみの君のはらたてたることをたとへていへるなり

中將も天のいはとさしてもり給なんやめやすからんとて　中將は兄なりあふみの君はいもうとなり　古今假名序注に素盞嗚尊は天照太神の御このかみなりといへりしばらくこれによるべし近江の君のこもりゐ給へらはめやすかるべきとなりかたきいはほをわは雪になし給と云ことより一類にひきたる本緣なり

つまこゑのやうにても　たとへは我いひたきことを人をやとひていはせて時々そのはしを云をつまこゑと云なり

花鳥餘情第十七

藤袴　槇柱

並八　藤袴

以詞幷歌爲卷名但こと葉にはらんの花とあり源氏卅七歲の八九月のことあり又竪の並なり

内侍のかみの御宮つかへの事を　里第ながらまつ尙侍に任せられて後に入内のことあり相違なきことなり

いかならんおやとおもひきこゆる人の御心だに　是よりは玉かつらの君の心なり

こゝろより外にひんなきこともあらば　御門の御言葉にもかゝりおもはすなる事もあらはいかゝはせんとなりひんなきはたよりなき心なり

もてはなれて人のをしはかるへかめるすちを　是は玉かつらの君を源氏のたゝはをき給ふまじきと人のおもへることとなり

うすきにひ色の御そを　三條の大宮かくれ給へるこ と玉かつらの君の御ふくの色にてはしめていひ出せりなやみたまふことは御幸の卷にみえたり

宰相中將おなじ色の今すこしこまやかなる御なをしすがたにてえいまきたまへる　夕霧の宰相中將になり給へることこゝにはじめてみえたりこれも外祖母の服をき給へり輕服直衣鈍色平絹或薄鼠色をも用る也服者の卷纓するは冠のかざりをのぞく心也

はじめより物まめやかに心よせきこえ給へは　これは夕霧と玉かつらとの御あひしらいなりいまあらざりけりとてこよなくかはらんもといへるは夕霧のまことは我おとゝいにてはなかりけるよとていつしかかはらんもなさけなかるべき心なり

うちよりおほせことあるさま　尙侍の御入内のことなり

さはかりみところある御あはひともにて　玉かつらの君入内あらばかならず御門の御おぼえあるべきことなり

人にきかすましとはへることきこえさせんに　是は源氏の御ことつけのあるを人のきかぬところにて申せと侍るよし夕霧の申給ふなり

そらせうそこを　源氏の御せうそこにてもなきことを空せうそことは云なり

御ふくもこの月にはぬかせ給ふべきを　此月は八月

なり祖母の服は五ヶ月なれば大宮のうせ給ふことは四月のことなるべし

この御ふくなどのくはしきさまを人にあまねくしらせしとおもむけ給ふけしきいとらうあり　今まで源氏の御女のよしにてあるに又三條宮の御服をなどいはゞ人のあらぬさまにとりなさむことをはゞかり給ふなり﨟ありは心ふかくものなれたる心なり上﨟しき心にはあらざるべし

しのびかたくおもひたまへらるゝかたみなれば　大宮は夕霧のためにもうはにてまします故なり

さてもあやしうもてはなれぬことのまた心えかたきにこそ侍れ　内大臣の御むすめならは源氏君はなにとて又もてはなれぬやうにはし給ふぞと心得かたくおもひ給ふなり夕顔のむかしをいまだ夕霧はしり給はぬゆへなるべし

らんのはなのいとおもしろきをもたまへりけるを　らにとかける一本ありらんは物名にらにとよむなり又一本しらにとあり紫蘭なり

うつたへにおもひもよらで　忠見家集　春雨はふりそめしかとうつたへに山をみとりになさんとや見し　蜻蛉日記うつたへに秋の山邊をたづね給ふにはあらざりけり　藐姑射刀自物語うつたへに御事をいなみのゝいなみきこゆるにも　今案うつたへと云詞うつたひにといへる心もあるなりよみやうによるべきなり

おなじのゝ露にやつるゝふちはかまあはれはかけよかことばかりも　ふちはかまは藤衣によそへたるなり

みちのはてなるとかや　かことばかりもといへる歌の末の詞にかけていへるなり

たづぬるにはるけき野邊の露ならばうすむらさきやかことならまし　後撰　むさし野は袖ひつばかり分しかとわか紫は尋ねわびにき　今案はるけき野邊とは武藏野をいへり歌の心は玉かつらの君夕霧と連枝のゆかりなくてはるけき野邊ならばむらさきのうすきゆかりをかこち侍るべきにはるけき中にてもなきほとにかこつべき事はよも侍らじと玉かつらの君のいひのがれたる歌の心はせ也おもてのことをかくしてうらをいへる歌なり下の詞にかやうにてきこゆるよりふかきゆへはいかゞといへるに

て歌の心はきこえ侍るなり
頭中將のけしきは御らんししりきや　かしは木は玉かつらをおとゝひともしらで心をかけしことなり夕霧はおとゝひとおもひてけしきはむふるまひもせざりしかいま內のおとゝの御むすめときゝひらきてはしめの心にひきかへたるなり
さても人さまはいつかたにつけてかはたらひて物し給ふらん　玉かつらを女御后になり給てよからんや又たゞ人などにてやよくましますべきいつれにたり給へるにかと夕霧の源氏に尋まうされたる也
かのはゝ君のあはれにいひをきしことの　夕がほのうへのことなり
宮の御人にていとよかりぬへし　兵部卿の宮の北の方なとゝいひてよかりぬべきとなり
けしきのみまほしければとしてろかくてはくゝみきこえたまひける御心さしをひかさまにこそ人は申なれ　夕霧の御心に源氏の君の御けしきのみまほしくてたつね奉り給ふなり人は皆此君に御目をかけさせ給ふやうにひかこゝろして申はべるよしなり
宮つかへをもなにでとも御心にゆるしてかくなんとおほせられんさまにしたがはん　是よりは內のおとゝの申さるゝ事を源氏に夕霧の語り申さるゝ也
をんなは三にしたがふものにはあなれど　儀禮云婦人有三從之義無專用之道故未嫁從父嫁從夫夫死從子故父者子之天也夫者妻之天也　今案女子は幼時は父にしたがふといへどもすでに年たけたるうへはよろつ源氏の君の御心のまゝならん三從のついてをはたかへしと內大臣のゝ給ふとなり源氏君をたゝなるましきとおとゝもとりをきたまふ心なり
うち〱にもやむことなきこれかれとしごろをへて物し給へば猶そのすちの人かずにはもていて給はで　是は源氏のうち〱にも御おもひ人ともあまたあるによりて玉かつらの君をとりたてゝ物めかし給ふことはさすがにてすてかてらに我にゆつりつけ宮つかへせさせんとし給ふと內のおとゝのうしろことに申給ふことを夕霧のかたり給ふなり
おほそふの宮つかへのすちにらうろうせんと　牢籠なり　獸をは牢にこめ鳥をは籠にこむるなりこゝの心もおしこめたる義なり又人の自由ならぬこと

をもらうろうといふその心にはあらぬなり

いとまか〳〵しきすちにも　源氏の思人にし給ふことなり

おもひくまなしや　物のかくれあるまじき心なり

後撰 いつかたにたちかくれつゝみよとてか思ふくまなく人のなりゆく

月たゝはまいり給はんことといみあるべし　九月はいむ月なるを云なり

月あかき夜かつらのかげにかくれて　惠慶集 夏なれと夏ともしらで過る哉月のかつらの影にかくれて　今案このかつらのかけはまことの木の陰なるべし

いもせ山ふかき道をは尋すてをたえのはしにふみまよひけり　かしは木の玉かつらをせうとゝもしらでふみをやりしことをふみまよひぬるとよめり

よなとうらむる人やりならす　かしは木のふみまとひけることは我心からのことなり人やりならぬことといへり

まよひける道をはしらていもせ山たと〳〵しくそたれもふみゝし　玉かつらの返事ふみまよふとはしらずおほつかなくおもひながらふみをみしとよみ給へり

いつかたのゆへとなんえおほしわかさりしに　かしは木はおとゝひと思ひてふみをたひたりしやらん又何事ゆへともおもひわかさりしとなり

をのづからかうのみも侍らしかしと　今よりはかやうによそ〳〵しくはあるまじきと玉鬘のの給ふ

大將はこの中將おなじ右のすけなればつねによひとりつゝ　うつほ云右大將藤原のかねまさあて宮をいかんとおほすちゝおとゝよき御中なりされどおやには聞え給はであて宮にきこえ給へきことをおもほすに左大將殿の中將このおほんつかさの中將なりけり御中いとよくかたらひ給てとのにもろともにものし給てあそびなとし給ふ今案ひけくろの大將もかしはきの中將もともに右のつかさなり

この辨のおもとにせめ給　玉かつらの女房達なりひけくろの大將はこの辨の局をかたらひ給ふなり

朝日さす光をみても玉さゝの葉分の霜をけたすもあらなん　玉さゝの葉分にをける白露のいま幾世へん我ならなくに　今案玉さゝの上の霜は朝日の光に

はきゆべきものなりそのごとくなる我身にてあれ
ばきえせぬさまにはからひ給へといふこゝろなり
いとかしけたる下おれの霜もおとさて　さゝの葉の
下おれたるなり
御つかひさへぞうちあひたるや　ひけくろの御使と
兵部卿宮の御つかひと行あひたるなり
わすれなんと思ふも物のかなしきにいかさまにして
いかさまにせん　義孝集わすれぬをかくわするれとわ
すられすいかさまにしていかさまにせん
人々もみなおほしたえぬへかめるこそさう〳〵しけ
れなと云　あなたこなたの御ふみともあるを玉かつ
らの君なにともおほしたえて御返事のなきをさう
さうしきといふなり
心もて光にむかふあふひたにあさをく霜をゝのれや
はけつ　此歌の心は日をは君にたとふるに取てあふ
ひは心もて日にむかふ物なれと朝をく霜をは我と
はえけたぬならひなり玉かつらの我身の宮つかへ
のこと心にもあらぬことなるうへけたすもあらな
んとかてち給へとけたんけたしもわがまゝならぬ
と云心なり

をんなの御心はへはこのきみをなんほんにすべきと
女の御心はさためて宮にそなびき給ふらんとおと
とたちはおもひたまへるなり

並九　槙柱
以歌爲巻名源氏卅七歳の十月よりあくる年卅八歳
の秋までの事此巻にみえたり又竪の並なり
うちにきこしめさんこともかしこし　是よりはひけ
くろの大將を辨のおもとか心しりをして玉かつら
の君にかよはしそめたることなり内侍のかみにな
り給ていまだ入内などもなきにかゝることのあれ
ばうちにきこしめしては御とかめもあるべければ
しばらく人にもらさじとおとゝをはじめて御かた
の人々はいさめきこえ給ふと也源氏の君も内のお
とゝもしり給はぬことなればあらはにいつの月日
とは物語にしるしとめす辨のおもとならではしる
ましき事なるべしかやうのかきさま物がたりの妙
處なりよく〳〵おもひわくべし
いし山の佛をも辨のおもとをもならべていたゝかま
ほしう　石山の觀音を佛といふ菩薩を佛といふ事玉

かつらの巻にしるしおはりぬひけくろの大將石山の觀音に玉かつらのことをいのり給へるなるべし
えましろはてこもりゐにけり　玉鬘の辨のをもとをよからずおもひ給へるによりてえましらはでこもりゐたるをいふなり
寺のけんもあらはれけんかし　石山寺の佛の驗德もあらはれたると云なり
なまほのすいたる宮つかへに　なまは生なり物のなま〳〵しきもこのましからずほのは側なりかたはらなるはたゞしくもなき心なりすいたるはすきすきしきなりへつらひかましき宮つかへの心なり
かけ〳〵しきすちならはこそ　かけ〳〵しきたえたえしき心もあるかこゝにはなまなさけかましきすちをいふにや
内侍所にことおほかるころにて女官とも内侍なども　内侍司の中に尙侍典侍掌侍女孺この四等の官あり霜月には女官どもないしのかみの御もとへまいりつとふことあるなり
すくよかなるよのつねの人にならひては　ひけくろの大將のことなり

思ひの外なる身のをき所なく　玉鬘の思ひ給ふ心也
おりたちてくみは見ねどもわたり川人の瀨とはたちきちさりしを　おりたちてくみはみねどもは源氏の君の玉かつらの君に密事なきよしなりさりながらわたり川にては我こそひきたすけんとおもひしかは人の瀨とはちきらさりしとなり
みつせ川わたらぬさきにいかてなを淚のみおのあはときえなん　地獄の繪を見てよめる歌　三途川(ミツセ)わたるみさをもなかりけりなにゝ衣をぬきてかくらん　今案此歌は三途川のうはの罪人の衣をはくことなり脫衣翁脫衣婆とてうはおほちありといへり
御手のさきはかりはひきたすけきこえん　源氏玉かつらの君と密事ありといふ河海の說大かた相違なきにやたゝし其實なくともなれ〳〵しさはことをまくらにして物かたりありしなとは實事のなきはかりなりさるにとりては御てのさきばかりひきたすけんと聞え給へるもことはりはかなひ侍るにやかのうたかひをきて皆人のおしはかりしことさへ心きよくてすくひ給ひける　源氏の君の玉かつらの君に密事なきよしはこゝの詞に見えたり「すくひは

きよめたる心なり」

みゝなれにて侍れば　きゝなれたる心なり

すゑの世にかく人のおやたちてもてないたまふ　是は紫の上を宮のうらみ給ふ事也玉かつらの君を大將にあはせ給ふことをむらさきのうへのしわざと宮の心得給ふてうらみ給ふなり

かたちもかのならびなき御光にこそ　源氏の御事也

人のやゝみあふるほどもなく　みあふるは見逢なり

夜一夜いみしううたれひかれなきまとひ　ものゝけの加持せられてうたれひかれたるけしきにくるひのゝしるなり

心さへ空にみだれし雪もよにひとりさえつるかたしきの袖　雪もよは朝かほの卷にしるし侍りぬひとりさえつるは火取の灰をかゝりしゆへにそのよはとまりし心をそへたる歌なり

けうとさかなとおもひ給へり　氣疎なりおそ〳〵しき心なり

御さうそくのことなどめやすくしたゝかにきなともしなさせ給はず　北方のうしろみかたのこと合期したまはぬことなりきなともしなさせたまはずとは人のきるべきやうにもしなされぬを云なり

なさけなき言葉　北方のひとりのはいかけられし事をなさけなきとはの給へるなり

はゝきたのかた　むかひ腹紫上のまゝ母なり

女御をも事にふれはしたなく　冷泉院の女御式部卿宮の御女乙女の卷に入內あり秋好中宮におされ給へることを云にや

おのれふるし給へるいとをしかりにしほうなる人の　河海にはいとをしと句をきりて身にしほうなる人のとありすなはち引歌におふなるとよめる歌をひかれ侍り是は身にしおふなる人とよまれ侍るにやいとおぼつかなししほうは實法なり鬚黑の大將をいへる言葉なり

一とせもさる世のひゝきに　式部卿宮五十の御賀むらさきの上いとなみ給なり乙女の卷にあり

大將の君かくわたり給にけるをきゝて　大將のかの北の方の宮の御かたへうつろひ給へることをきゝての給ふなり

さうしみはしかひきゝりきは〳〵しき心もなきもの

をきたの方はしかひきヽり心もおもひよりたまはぬを式部卿の宮のさしすきてしたまふことなり

などかはにけなからんと　などかはたくひなからんと云心なりたくひなしとほめたる詞なり

なにかたヽ時にうつる心のいまはじめてかはり給ふ　是は式部卿の宮の詞なり

いとわか〳〵しき心ちもし侍るかな　是はひけくろの大將の詞なり

おとこきんたちとをなるは　後に藤中納言といへる人なり

つきの君は八つばかりにて　後に左大辨とみえたり

なるかくるしきなけき給ふ　なるがは紫上の我身のことをの給ふ詞なり

かたきことなり　難儀なることヽいふ心なり

うちにもなめく　なめくは無禮なり

としかへりてまいらせたてまつりたまふ　西宮云尙侍新任之後詣二縫殿陣一令レ奏二慶賀之由一（諸司陣邊立レ幄為二陪女下仕候所）内侍一人出來傳奏（書司一人相副女官秉燭）給レ祿（女裝一襲入二散繪筥一）中宮御レ内者付二内侍一令レ啓二慶賀一　有二贈物一　今案ないしのかみのよろこび申にはぬいとのヽ陣までまいり内侍一人出逢て其よしを奏聞しぬればすなはち女房の裝束をたまはりて退出するのみ也此物語の玉かつらの君はやがてうちすみし給ふべきにてそきやうてんのひんかしのおもてを御づほねにしたるよし見えたり

わらはなる八らうの君はむかひはらにて　致仕のおとヽの末子なり母はかしは木同なり

大將殿の太らう君　ひけくろの大將の嫡子母は式部卿の宮の御女上に十ばかりなるおとこきんたちといへるなり

さうしみも女房などもかやうに御心をやりても　さうしみは玉かつらのことなりかやうにうちすみして心をやるべきこともかりそめのこととおもふなり

おとヽの心あはたヽしきほどならでまれ〳〵の御まいりなれば　おとヽは殿舍なり心あはたゞしきは踏歌のまぎれなり人々はたま〳〵のことなればしつかに御ゆるされありてまかて給へくきこえたるを大將はいとつらしとおもひたまへるなり

それよりとてとりいれたればしふ〳〵にそみ給ふ

兵部卿宮の御消息なり
さえづるこゑもみゝとゝめられて　我そふりゆくと
いへる心に兵部卿宮かき給へり
かの御心ばへはあさからぬもうたて物おもひくはゝりしを　源氏の御事を玉かつらの心におもひ給ふことなり
おもてをかんかたなく　かほのもちくるしきこゝろなり
よろこびなどもおもひしり給ふらんと　ないしのかみの慶賀のことなり
なとてかくはひあひかたきむらさきを心にふかくおもひそめけん　縫殿寮式云深紫綾一疋紫草卅斤灰二石帛一疋紫草卅斤灰一石八斗今案紫はあくにてそむる物なりさてはひあひかたきとはいへり
たかひたる所やはあるとおもひなくさめて　源氏の君の御かほをさながらうつしたればその人とおもひなそらへて返事を申給ふなり
いかならん色ともしらぬ紫をこゝろしてこそ人はそめけれ　三位よりはむらさきの色をもちゐるゆへに加階のことをよめるなるべし
かきをきけるよ　御門の御返事を尚侍のかきをきたるといふ心にやたゞし一本に無此詞
よをむつましみありはつべきよを　よをむつましみありはつべきよをとは尚侍の心也をしむへかめる人とは大將の心を云なりいかでかきこゆべきとおほしなやむは御門の御心にいまよりはいかてかきこゆべきとおほしなやむをみたてまつれば尚侍のかたしけなしとおもひ侍るなり
ちゝおとゝはにはかなるを　致仕のおとゝなり
ぬすみもてきたらましとおぼしなすらへて　玉かつらの君の心はうちとけぬやうなれと大將の君はぬすみもてきたるおもひをなして心ちおちゐたるとなり
かのいりゐさせ給へりしを　御門の御事なり
かの宮にもさこそたけくの給しかと　式部卿宮のことなり
さしあたりたることとなればにや　朧月夜のことはむかしのことなり玉かつらの事はいまさしあたりたる物おもひなる心なり
にけなき戀のつまなるやと　玉かつらの戀しさをの

給ふなり
かくさすかにもてはなれたることは　玉かつらの君にはなれてくやしき心なり
なとかさしもなど心やましくなどあるを　さしもちぎりしことのたがひたるを心やましきといへるなり
女はまことのおやの御あたりにも　詩云女子有ㇾ行遠二父母兄弟一と云心なり
さすかなるけしき　六條院の御をしへなれば一かどある心なり
おほやけことはあるべきさまにしり給ひなむとしつつ　ないしのかみの職につきたることはかはらずしり給へども内へまいり給事はあるまじきとなり

花鳥餘情第十八　梅枝　藤裏葉

十八　梅枝

以歌爲巻名梅か枝は催馬樂をうたへる事也源氏卅九歳の正月の事みえたり

おほむもきの事おほしいそく　あかしのひめ君の御もき十二歳也うつほのあて宮の事をおもひていへり

春宮もおなし二月に御かうふりの事あるへけれは

春宮は朱雀院の皇子今年十三歳也御元服は廿よ日の程と下にいへり是又冷泉院の二月の例を摸せり

このたひのあやうす物なとは　故院の後に又高麗人の來朝せる事あるへきにやこのたひのあやうす物といへり二條院の御くらより取いたされ次に人々にわかち給へる也

そんわうの御いましめのふたつのほうを　そうわをそんわうと履轉書寫の誤あるへしと河海にいへる誠に可然也わの字を王の草字にみなしてわの處にかきてその後又わうとよみなせるなるへし又そうをそんとよみたる事は此物かたりに御孫を御そうとかきたり承の字をそんとよめる事又うたかひなし故にそんわうをはそうわうと心得へきなり承和は仁明天皇の年號也二の方といふはくろほうと侍從との二なり

うへはひんかしのなかのはなち出に御しつらひことにふかうしなさせ給て　放出事李部王記天暦元年正月二日於太皇太后御所院柏殿西對南放出平敷々王卿座南北對鋪（以西爲上）東廂西向南上敷四位座又天暦元年三月九日車駕幸朱雀院其殿装束母屋放出南邊對鋪兩主御座（各疊上敷二枚加茵）太上皇東向今上西向又天暦元年三月十六日太皇太后御柏殿設法花八講十七日參朱雀院其殿放出安置佛像列供具東廂敷八僧座又承平七年十二月十七日陽成院七十御賀正殿西放出第三間立螺鈿倚子小右記永觀元年正月二日中宮大饗其儀一條院東對南放出三間儲公卿座北上對座立臺盤母屋懸簾庇不懸之四位侍臣座在南廂西上北面　右以此等記加料簡者謂放出者南面母屋之名也河海曰廂者誤也所詮寢殿母屋南北中央以妻戸隔之所謂子之妻戸也（或以障子爲隔）以南方爲放出以北爲

内方ニ南放出中立ニ帳臺一有レ事之時撤レ之次東放出西放出云者正殿爲ニ中央一而東西各有レ殿謂ニ之東對西對一也寢殿與レ對之間有ニ透渡殿一不レ及ニ對屋一作之時東西構ニ公卿座一子午ニ中門作ツヽケタルナハ對代トイフ也東西對ノ代也故東對母屋ナハ東放出トイフ西可レ准レ之物語若菜卷云南のおとゝの西の放出におましよそふかんたちめあまた南のひさしにつき給ふ　又云若菜參りし西の放出に御ちやうたてゝそなたの一二のたいわた殿かけて女房のつほねにて　又云寢殿のはなち出を例のしつらひてらてんのいし立たる　右物語にいへるはみな六條院の事なりこれにても放出は南面の母屋とみえたりそれににしの放出といふはにしの對の放出と云ふ心也梅か枝の卷のひんかしの中の放出とは東の對の母屋也中といふは母屋と東西との廂との間に障子をたてゝへたてたれば御帳をたてたる所を中の放出とはいへる也紫上いたき物あはせ給ふ所は六條院の東の對の放出也源氏の君も此時寢殿にはなれおはしましてあはせ給ふよしみえたりこれは西對の放出にてあはせ給ふ紫上のあはせ給ふ所とは各別より又わかなまいりし西の放出といへるは西對の放出なりかれこれをとりあはせてそ見すべき物也六條院とは對屋二ありとみえたり

八條の式部卿の宮の御ほうをつたへてかたみにいとみあはせ給ふほど　八條式部卿本康親王は仁明天皇の第五子母は從四位上滋野澤子參議貞主女なり源氏の君のあはせ給ふほうと紫の上のほうとともにしゝう黑方なりいつれも承和の御いましめの方なれはかはるべきやう有へからずたゝしみなもとはおなし說なれとものち〳〵にちとつゝその人の意巧によりて加減する事あるによりて次第にかはることのある物なり八條式部卿宮は紫上の父式部卿宮になずらへていへり又兩種方は不傳男と承和御門の御いましめの方にのせたれは紫上のを正說にすへきなりこれによりて源氏君のあはせ給ふをはうたかいをのこしていかてか御みゝにつたへ給ふとはのせたるなり

かうこの御はことものやうつほのすかた　或抄云東廚子のうへのこしに香壺ノ筥二合下腰に藥の筥二合を置此筥四合は皆同樣にて圓角なる筥なり但納

物を可レ見香壺筥には銀にて裘壺の大なるやうなる壺を入る二合に入あり薫物を納料なり此薫物は梅花荷葉侍従黒方を可レ納但此壺の中に雲母壺あるへし錦折立ありこの上に白針指の生のものにて表指しまはしたるあり號ニ入帷一藥筥二合折立同事なり一合にさきのことくなる壺三かねのさらかねのついあり一合にはかりふるいはしかひありつねの銀器の具の様に鶴のむかひたる箸臺はしかいをきていれたりふるいかねのふちに生の物をはる此箸納たる筥を帳の方につかせ西東にして可置此等にも入帷同事なり西厨子の上の腰に造紙筥二合折立あり様々の造紙あり二合なから切角の筥なり下腰に櫛筥二合丸角也皆櫛入懸子に硯あり折立あり今案母屋調度東西厨子に筥八合あり其中二合は香壺の筥なり東の厨子の上にをく一合に裘壺四つゝ入て梅花等の種々薫物雲母壺その中にありといりきらゝは銀盤に用レ之灰のうへにをかんためなるへし二條大納言入道實家母屋のつしのはこの事注申云藥の筥には紅雪紫雪かりろくひんらうしを入ると思しかこれにはつは三とて入物はかゝす候かねのついとは永久の御調度のは黒水精にて候さその藥の筥にはしろい物へにのやうなる物かつきたるとうけ給はり候也紅雪にて候やらん丸藥なとにては候はさりけるにやとおほえ候き紅雪紫雪は中堂につかはしてかちして入たる例なとも候しやらん永久のかうこの筥にはきらゝの一寸よりもひろきか入て候しはいの上にをかれんれうけに候きくしのはこにはさま〳〵の風流なとをつくりいれたる事もふるき日記には見候し永久のにはさやうの物はみえ候はてかたみねのくしくろき馬のおのなかわけたるくしはらひそ見候し心ちして候女御まいりにはくしに二枚つゝとりかさねていれ候やらんとうけ給候大かたはもやひさしのてうといまのよにはありかたき物にて候めりふけん寺の入道したてられて候けるから草のてうとたやすくいたされ候はぬやらん東山の入道くわりほくに菊のかいの候しもやけて候しとおほえ候

心葉こんろりには五えうい枝しろきには梅をえりておなしくひきむすひたるいとのさまも　西宮抄菊花宴御膳具心葉蘚花鬧組(トチクミ)云々　今案心葉の松も梅も

折枝のやうにかねにてゑりたる物なり
こうはいかさねのからのほそなかそへたる女のさうそくかつけ給　紅梅の唐織物の細長なり河海に香細長とありあやまれる也女の裝束はもかうきぬ五きぬなと也
御返もその色のかみにて　紅梅かさねのうすやうをその色のかみとはかけり
くま〳〵しくおほしたるこそ　かくしことのあるやうにといふ心なり
御すゝりのついてに　源氏の筆のついてに齋院への御返歌をかきて兵部卿宮に見せ申されたるなり
うとき人はかたはらいたさに中宮まかてさせたてまつりてと　姫君の御もきの御こしゆいに秋好中宮を行啓なし申さんと思給ふとなり
あへ物も　あやかりものなり齋宮女御すてに中宮までなり給へはあやかりものと思給ふよしなり
右近の陣のみかは水のほとりになすらへてにしのわたとのゝ下よりいつるみきはちかううつさせ給へるを　或抄云齋院よりまいれる瑠璃のつき二ある中に心は紺瑠璃には五葉の枝白には梅をゑりてといへり薰物をうつむみなもとをたつぬれは梅花は梅のもと菊花はきくの下にうつむをさきとせりいま黑方といふ字一にてくろきすかたをあらはせる也されば紺はくろき色なれはこれをくろきしるしとせりかの松は四季にかよひて萬木の長なれはすくれたる薰物にかたとれるにこそ貞松は歳の寒きにあらはるといふをもちて思にも古人の黑方を感する詞は思あはせらる冬さえこほる時ふかくその匂背寒に對せられすといへり大かたは薰物によしある木なれはこそ松にはそへられけめ
たいのうへの御いみくさある中に梅花はなやかにいまめかしくすこしはやき心しらひをそへてめつらしきかほりくはゝれり　たいのうへの薰物は八條式部卿の方の侍從黑方の外に梅花を合せ給へりかの二の方は不傳男といへは紫の上のあはせ給へるそ本樣なるへけれと梅花は時をえたるうへ春を愛し給ふ御方なれば二の匂をさしをきて兵部卿の宮は梅花を猶すくれたると判し給へるなり寛敎僧都か說にまかせて春なれは丁子をすくされたるにやはやき心しらひをそへたるよし見えたり

かえうを一くさあはせ給へり　夏の御かたなれは荷葉をあはせ給へるそのよせあるにゝたり

くのえかうのほうのすくれたるはさきの朱雀院のをうつさせ給て公忠朝臣のことにえらひつかうまつられし百ふのほうなと思ひえて　この段の詞あまたの意あり河海に思えてはいまの薫衣香百歩香なとにかよひて思ひよそへたるといへりしからはあかしのうへのあはせ侍るは薫衣百歩の二をとりあはせて新しく丁簡し出せる心にやそれはいかゝとおほえ侍り一には前朱雀院は承平の御門の御ことなり公忠朝臣もその世につかへてあはせかうに達したる人なり故に朱雀院の薫衣香といふはすなはち公忠朝臣のたてまつれる方とおなしこと也百歩のほうといふはおほよそ香氣の遠くきこゆるをもて百歩香とはいふへし一方にさたむへからさる心なり一には朱雀院の薫衣香と公忠朝臣の百歩香と二種をあかしのうへあはせ給ふといふへし百歩香は四條大納言の家より出たるよしみえたれと承相百歩香となつけ侍れはむかしよりある方なれは公忠朝臣のたてまつらんこともうたがふべきにあらす思ひえてといふ詞は梅花荷葉なとはたれもしりてめつらしからす故あかしの上はこの二の方を思出してあはせ給へるを思えてとはいへるなり前朱雀院は承平御門の御事なり西宮抄臨時部云前朱雀院初出二大内一之時乘二金餝檳榔一云々此前朱雀院は宇多御門の御事なり承平御門を朱雀院と申につきて宇多天皇をは前の字を加へて申侍り此物語には又朱雀院ましますによりて承平の御門を前朱雀院と申なりこの御時に公忠朝臣薫物方なとたてまつりし故なり

月さしいてぬれは　上の詞にきさらき十日とあり河海に二月初といへる相違せり

わらはにてゐんふたきのおりたかさこうたひし君なり　さか木の巻にあり

宮もおとゝもさしいらへし給て　助音事なり

鶯のこゑにやいとゝあくかれん心しめつる花のあたりに　うくいすの聲は郢曲のことなり心しめつる花は薫物のことなり

うくいすのねくらの枝もなひくまてなをふきとほせよはの笛竹　頭中將の宰相の中將にましませは笛竹

とよめるなり
心ありて風のよくめる花の木にとりあへぬまてふきやよるへき　風たにも心してちらさぬ花をふきやよるへきとよめり宰相中將わか横笛ふくことをよめりさて下の詞になさけなくとはかけり
霞たに月と花とをへたてすはねくらの鳥もほころひなまし　鳥のほころふるはあしたとくはしめてなく心なり辨少將梅か枝をうたふにつきてねくらの鳥もほころひなましとはよめりいまた夜ふかきによりてはつ鳥はなかぬよしなり
花の香をえならぬ袖にうつしもてことあやまりといもやとかめつ　この文ならぬは緣ならぬなりよせもなきことなり
いとくつしたりやとわらひ給　苦したるなり
いといたうからかりたまふ　からかるはたへかたかる心なり
宮のおはしますにしのはなちいてを　西の對のはなち出なり秋好中宮のましますかたなり
かゝる所の儀しきはよろしきたにいとことおほく　よろしきとはよのつねのことなりけふのことは中〳〵ことの葉にもまねひたてられぬことなれは大かいはかりをしるすとなり
きやうさくのひめ君たち　遥迹なりすくれたる心なり花宴卷にも若菜上卷にもあり
かんなのみなんいまの世にはいときはなくなりたり　いまの世の假名は弘法大師始作レ之以前假名は如ニ日本紀萬葉歌等書樣一なり日本紀假名も假レ聲書レ之萬葉集は以ニ音與レ訓與レ義書レ之なり
とよりてこそ　わうよりは奥なり昔によりたる心なりとよりは外なり末になりての心なり
よはき所ありてにはひそすくなかりし　つよき手にはかならすにほひかある物なり手にかきらす音曲はし〳〵にいたるまてつよき所あれは餘情はをのつからそふ習なりはしめからうつくしひれてよは〳〵とあれはみとをしかなきものなり
こゝにこそはかき給はめ　此一段はむらさきのうへにかたり給ふことなりさてこゝにの詞は紫の上をの給ふなり
いたうなすくし給そ　すくし給そはいたうなまんし給そといふ心なり

まんなのすゝみたる程にかなはしとけなきもしこそましるめれ　まんなのすゝみたるとはことすくして草にかきたるをいふそれはなをも見ところありかなをそのやうにかきすくさはしとけなき文字すかたになるへき心なり

またかゝぬさうしとも　巻物をも草子といふなりさうしにかく内典外典の書にも巻第一巻第二なといふ外題あり巻物かまつ本にてあるなり

けしきはみいますかりとも　いますかりともはおはしますともといふかことし伊勢物語の詞なりこゝには紫の上をの給ふなり

あしてうた繪なとを思ひ〳〵にかけとの給へは　あしての色葉はあしのはのなりに文字をかく也水石鳥なとのかたにもかきなす也中峰和尚のさゝのはかきと云文字の體はさゝの葉に似たるかことき也

いかにそやなとえりいて給ふに　御前にさふらふ二三人の女房にそのうたはいかにありしそとたつね給ふ心なり

たゝ三くたりはかりに　歌一首を三行はかりにかくをいふか又さうしの枚ことに三行つゝかき給へるかいつれも相違なかるへし

筆なけすてつへしや　班超投ニ筆硯一歎曰大丈夫當下立ニ功名異域一以取中封侯上安能久事ニ筆硯間一乎云々今案筆をなくると云詞はおなし心は物かたりにいへるにかはるへし

見給ふ人の涙さへ水くきになかれそふ　獲麟の一句はこれをかく人の涙をいふ見給ふ人の涙さへといふは見る人の感にたへす涙をなかす心なりかの一句のおこりはよからぬ事なりこゝにはたゝ絶妙の筆跡をみて自然に感涙をもよほすことに詞をかりていへるなり

さかのみかとの古萬葉集をえらひかゝせ給へる四巻　萬葉集一部廿巻平城天皇詔ニ侍臣一撰レ之見ニ古今序ニ又萬葉抄五巻一説紀貫之撰レ之一説梨壺五人抄也同廿巻抄不レ知ニ撰名一此外嵯峨御撰四巻目六中不レ見但うるはしき撰定の抄にてはなくて手本のために所々えらひかゝせ給へるにや尋ぬへし

延喜のみかとの古今和歌集を　延喜の御代に撰せられたる和歌集なれはすなはち宸筆もあるやうにいへりまことはおほつかなきことなり

からくみのひも　唐組也
おほとなふらみしかくまいりて　切灯臺にすゆる也
おとゝおやしうきたるさまかな　源氏の君の夕霧
　にかたり給ふ事也
かやうの事はかしこき御をしへにたにしたかふへく
も　これよりは源氏の君の夕霧を教訓し給ふことな
りかしこき御をしへとは源氏のむかしの桐つほの
御門の御をしへ事を思ひ出し給ふ也
つれ〳〵と物すればおもふ心あるにやと　夕霧の徒
然さうにてあれは心に思ふすちあると人のおしは
かるへきなり
いはけなくより宮のうちよりおひいてゝ　源氏のわ
か事をの給ふなり
とりあやまりつゝ見ん人のわか心にかなはす　これ
は一度みそめたらん人をは心にかなはすとも思ひ
かへしてみしのはんかなさけあるへき心なり
女もつねよりことにおとゝのおもひなけき給へる御
けしきに　これは雲井の鴈の事ちゝおとゝのなけき
　給ふことなり
おとゝのくちいれの給ひしに　源氏の口いれ給し時

致仕のおとゝのうけひき給はさりし事也
たちぬるなこりもやかてはしちかうなかめ給　致仕
のおとゝのたちてわか御かたへかへり給へるあと
にひめ君はなかめをし給ふなり
あやしく心をくれてもすゝみいてつる涙かな　雲井
の鴈の思給ふ心也
けしきはかりもかすめぬつれなさよと　源氏の君の
夕霧にことむこをとらんとおもむけ給ふ事をしり
給はぬ事はあるましきを夕霧のけしきはかりもの
給はぬをうらめしく思給ふ也
かきりとてわすれかたきをわするゝも此世になひく
心なるらん　夕霧の歌にわすれぬ人や人にことなる
とあるにうけてさそわすれかたく思給ふらんなれ
ともかきりあれはわすれてもかなはぬは世にした
かふならひなれはうらみともおもはぬと雲井の鴈
の返歌によみ給へるはうち〳〵のあらましのある
事をほのめかしたる詞なりそれを夕霧の君は夢に
もしり給はぬことなれはなにたることをかやうに
返事し給ふやらんとあやしと思ひてうちをかれす
かたふき見給へるとはかける也

十九　藤裏葉
以詞爲卷名源氏卅九歲の三月より十月までの事みえたり梅か枝の同年也
御いそきのほとにも宰相中將はなかめかちにて　御いそきのほと丶は明石姫君の東宮へまいり給ふ事也宰相中將なかめかちなるとは雲井のかりの事に思しつめるをいへり
女君もおと丶のかすめ給しことのすちを　左大臣又中務宮なとの夕霧にわか御女をまいらせんとのそみ給しこと也
かの宮にもさやうに思たちはて給なは　中務の宮の御事は夕霧のかたよりうけひきたまはぬを思たちはて給とはいへり
三月廿日大殿大宮の御忌日にてごくらく寺にまうてたまへり　李部王記 承平二年 三月廿七日皇太后穩子於二極樂寺一爲二先考太政大臣昭宣公及先妣人康親王女王氏追福修法會一今案極樂寺昭宣公建二立之一在二深草一
すきにし御をもむけもたのみきこえさすへき　三條の大宮の御事なり
おと丶の御まへにかくなんとて御覽せさす　このおと丶は源氏の君の事也
ごしも侍らしたいのまへのふぢつねよりもおもしろう　これは夕霧の源氏に申給ふこと葉也
なをしこそあまりかろひためれひざんきのほとなにとなきわか人こそふたあひはよけれ　直衣の色夏はわかき時二藍次にこき花田次にあさ花田なり非參議は二位三位の中將なとをいふ夕霧は時に宰相中將非參議にあらすふたあひはあまりわか〳〵しけれはこき花田よかるべしとの給ふ也
月はさしいてぬれと　四月一日ころと上にみえたり月さしいてたる事おぼつかなしたゝし下の詞に七日の夕月夜とありいつれにさたむへきそや別にこれをしるすへし
文籍とも家禮といふ事のあるへくやなにかしのをしへもよくおほししるらんと思ひ給ふるを　大大臣のわれはおやかたにてあるを夕霧の家禮のよしみもましまさぬとうらみ給ふ詞也家禮といふは子の父をうやまふ事也他人なれとも子に准して禮をいたすをは今の世にも家禮といひきたれりさてなにか

しのをしへといふは太公の家令の太公にときし事をいふといふ說あれともそれはあまりなる事也なにかしのをしへは內大臣の我と稱する詞也夕霧のため外舅なれは敎訓もあるへき事也家禮の濫觴には史記をひくはかり也家令のをしへまてのことはあまりにこと〳〵しきやうに覺え侍りいかゝ

御時よくさうときて　さうときはいそかしき心也人をもてなすとてとりはやしたる心也

宰相さかつきをもちなからけしきはかりはいしたてまつり給へる　天盃を給はりては庭にくたりて拜舞する也これはけしきはかり拜するは外舅の家禮をあらはす也

つき〳〵すんなかるめれと　巡流也

あしかきをうたふおとゝいとけやけうもつかうまつるかなとうちみたれ給てとしへにける此いゑのとうちくはへ給へる　あしかきの歌はおとこのみそかに女をともなひて家のかきをこえていぬるをその女のおやにつくる人のありけるをおとよめそつけつらんとうたがへる心也辨少將いまこの事を思よせてうたへるをおとゝきゝ給てけやけうもつかうまつれる物かなとの給へりけやけきは尤の字也以前も此詞はありし也こゝにははゝかる所もなくうたへるといふ心にけやけきとはいへりそれにとしへにけるこのいへのとおとゝの助音し給へる也されとあしかきの歌の詞にはとしへにけるといふ詞はなしとゝろけるを此家とかくへきを例の展轉してかくはとにとゝろけるをとしへにけるとかきなせる也故にとしへにけるとある本をはおさへてとゝろけるとよむへき也とゝろけるとは家のおちやふれたるを云なり

まかてん空もほと〳〵しうこそ侍ぬへけれ　河海にのせたる拾遺の歌はと〳〵しくもなりにけるかなのほと〳〵しきはうと〳〵しきなといふやうなる心也こゝの詞のほと〳〵しうは拾遺のいま一首の宮つくるひたのたくみのておのをとほと〳〵しかるめをもみしかなといふ心也それはおとろ〳〵しきといふ心也はや夜もふけたるほとにみちの空もおそろしかるへき心に宰相中將のいへるなりふるき詞は一定せる事なし事によりて用ひかゆへきことなり

ひたきぬしかな　かたはらいたき人かなといふ心也
ぬしは辨少將を云なり
かはくちのとこそさしいらへまほしかりつれ　辨少將のあしかきをうたひし時夕霧の我は河口の歌を返答にうたひたくありしと女にかたり給ふをきゝくるしと思ひたるは關のあらかきはかたくまほりしかともしのひ／＼には心をかよはしたりしをおやたちはしり給はていまはしめたるやうに思給へるといふ心なれは女は開くるしと思へる也
淺き名をいひなかしける川口はいかゝもらしゝ關のあらかき　女のうた也我あさき名をたつるは川口の關のあらかきいかゝまほりたりしこととそとおほめくなり
もりにけるくきたのせきを川口のあさきにのみはおはせさらなむ　弘仁式云太政官符應レ給レ考ニ陸奥國外散位三千十三人ニ事　擬郡司廿八人白河菊多剗守(セキモリ)六十人　白餘略之　右宜國府外散位等如レ件省宜承知依レ件給レ考
延曆十八年十二月廿日
今案男の返歌はかたくまもるといふ奥州のくきたの關もおのつから人まはあるなれは川口の關にのみあさきといふ名をはおほせさるへきといへるなり
あさいかなとゝかめ給ふ　あさいはあさねなり
されとあかしはてゝそいて給ふ　あかしもはてす退出の心なり
ねくたれの御あさかほみるかひありかし　六帖歌は花なるを人の朝のかほにかきなしたる也
御文はなをしのひたりつるさまの心つかひにてあるを中々けふはえきこえ給はぬを　此間はしのひ／＼に御ふみかよひはありしをけふは中々したりかほにてする／＼ともえきこえ給はていさゝかおそかりしにや物いひさかなき後達なとはつきしろひてわらひたる也
つきせさりつる御けしきにいとゝ思しらるゝはとかなたへぬ心に又きこえぬへきも　これは夕霧の文の中の詞也つきせさりつるとは女の心おきたるをいふへしたへぬ心はたへかたさに又思きゆへき心ちせしとなり
とかむなよしのひにしほるてをたゆみけふあらはる

丶袖のしつくを　此年月はしのひに袖をしほりしかともあまりにてたゆさにうちをけは涙もしつくもをのつからあらはるゝを人なとかめそとよみ侍るはいまよりは人目をはゝかるましきよし聞え侍りうちゑみててをいみしうもかきならひにけるかなとの給ふもむかしのなこりなし　これはおとゝの詞也文の中のことはにはてもつけ給はて手跡をほめ給ふこそおかしけれ昔の名殘なしとは此日比のうらみは露ものこらぬをいふ也

おとゝうすき御なをしろき御そのからめきたるか　うすきなをしはうす花田也しろき御そはかさねのきぬ也

宰相殿はすこし色ふかき御なをしに丁子そめのこかるゝまてしめるこゝあやなつかしきを　すこし色ふかきはこき花田也こゝあやはからめきたるにてはなきをいふ也

くわんふつ　國史云承和七年四月八日請㆓律師傳燈大法師位靜安於淸涼殿㆒始行㆓灌佛事㆒

ふせなとおほやけさまに　灌佛の布施には昔は錢を用たるを中ころより紙になされたりふなつゝみと名つけ侍る也

なさけたち給ふわか人は　夕霧の思かけ給ふ女房の事なり

水ももらんやは　水ももらぬとは堅固なる契を云也水洩不ㇾ通といふ詞も有也

北方さふらふ人なとは　二條おとゝの四の君雲井の鴈のまゝ母也

あせちのきたのかた　雲井の鴈の實母也

かくて六條院の御いそきは廿よ日のほとなりけり　明石姫君の東宮へ參給ふ事也

たいのうへみあれにまうて給とて　紫の上酉の日のあかつきにまうて給ふ也御あれは玉依姫の別雷神をうみ給し所をいふにやさて御生ともかくすなはちかたちをあらはし給へる故に御形ともかけり神館はたゝすと御おやとのあひたおきみちといふ所にありといへり

近衞つかさの使は頭中將なりけり　賀茂祭春日祭の使近衞つかさを用らるゝは東遊をたてまつらるゝ故也舞人陪從は近衞つかさの被官たるによて也使のいてたち又返りたちにさま／＼の儀式ある事也

なにとかやけふのかさしよかつみつゝおほめくまて
に成にけるかな　ひさしくはあはぬ心也
かさしてもかつたとらるゝ草の名はかつらをおりし
人やしるらん　折桂は夕霧のもと文章生にてありし
事を云也
かくて御まいりは北のかたそひ給ふへきを　紫の上
の事也
かの御うしろみをやそへまし　明石上也
此御心にもいまはやう〳〵おほつかなく　明石の姫
君の御心を云也
その夜は上そひてまいり給に御手車にもたちくたり
うちあゆみなと人わろかるへきを　紫上は姫君にそ
ひ給て手車にのりてまいり給ふに尼君のたちくた
りあゆみなとしてはいかにみまいらせたく思給ふ
ともみくるしかるへきよし也
人にゆつるましうまことにかゝる事も　むらさきの
うへの御子もち給はぬ事をいふ也
三日すくして上はまかてさせ給たちかはりまいり給
ふ夜　明石の上のたちかはりまいり給ふ也そのつい
てに紫の上あかしの上に御たいめんありし也

御手車なとゆるされ給て女御の御ありさまにことな
らぬを　是はあかしの姫君のいまた女御にはたち給
はねと手車なとゆるされ給ふをおとらぬとはいふ
也明石の上の思給ふ心をかける詞也
その秋太上天皇になすらふ御位給はりてみふくはゝ
りつかさかうふりなとみなそひ給ふ　長岡天皇以下
は皆謚號也位につき給へる帝の位をさりてえ給へ
るはまさしき太上天皇の尊號也位につき給はさる
人の院號ありしは敦明太子を小一條院と號せしは
かは其例なき事なりたゝし太上天皇と號せぬはか
りにて院司年官年爵封戸なとは太上天皇に一事か
はる所なしこれによりて此物語に薄雲女院ならひ
に六條院の御事には太上天皇になすらふるといふ
詞をそへたり是は誠の脱屣の御門の尊號にあらさ
るゆへ也御封の事は小一條院の院號の時は御封以
下如元と宣下せらる太上天皇の御封は法令にいま
た定られたる事なし東宮の食封は二千戸のよし延
喜式にのせられたれは小一條院は東宮時の御封を
そのまゝをかれたるよし也いま源氏の君は太政大
臣より院號をかうふり給へり太政大臣の食封は祿

令に三千戸のよしみえたり小一條院の例をもて三千戸もとのことくたるへきよし心得べきにやたゝしくはゝるといふ詞は三千戸のうへにくはゝるへきにこそ法成寺關白は度々に及て食封をくはへ給はりし事なれはそれは別したる殊恩なるへし六條院の御封の事これ等をもて了簡すべき也河海に太政大臣封戸二千二百五十戸とかゝれたるはあやまれり法令には三千戸分明也

むかしの例をあらためて院司ともなりさまことにあらためての詞に改不改の二の心あり源氏は此間太政大臣なれはそれに改て院司なと補せられたる心也又誠太上天皇の昔の例をあらためすして院司なとさためられたる心もある也

あさみとりわか葉の菊を露にてもこき紫の色とかけきや　袍色は衣服令一位深紫二三位淺紫四位深緋五位淺緋六位深綠七位淺綠八位深縹初位淺縹也深紫は紫卅斤にて染也淺紫は五斤にて染也深緋は茜に加レ紫淺緋は茜はかり也深綠は藍と苅安とにて染レ之淺綠は藍と黄蘗とにて染レ之縹は藍許にて染レ之今世四位袍三位以上と差異なきは一條院正暦の比より如レ此みたりになれり小野宮右大臣の記にみえたり又紫をふし金になせるは女工所のやすき定にしたるよりおこれり此歌にあさみとりとよめるは七位衣色也六位ならはふか綠なるへし又二位三位は淺紫なるをこき紫とよめるは一位の袍の色也かやうの歌なとには大概をもていふつねの事也そのうへ廣明參議の中納言になる時九條右大臣袍をつかはすとてこき紫とよみ給へり京極中納言も參議從三位の時紫の色こきまてはしらさりき御代のはしめの天の羽衣とよめり後撰の歌にもとつきていへる也

二葉より名たゝるそのゝ菊なれはあさき色わく露もなかりき　後撰七露たにも名たゝる宿の菊なれは花のあるしやいく代なるらん藤原正和　今案名たゝるは名にたてる也あさき色はあさみとりの心也

中納言もけしきことにかほすこしあかみて　かほのあかむとははちたる心也内のおとゝにかゝるすまるをいつしかなれははち給へる也

この水の心尋まほしけれとおきなはことといみしてとの給　おきなは夕霧の自稱の詞也

神無月廿日あまりのほとに六條院に行幸あり　康保二年十月廿三日村上天皇の朱雀院に行幸ありし例をうつしてかける也河海にみえたりかさねてしるすに及ばす

みちのほとのそりはしわた殿にはにしきをしき　莚道のうへの布單に錦をしかれたるをいふ也

ひんかしの池に舟ともうけてみつし所のうかひのおさ院のうかひをめしならへて鵜をおろさせ給へりちいさきふなともくいたり

御記延喜八年五月廿八日從ニ神泉苑西掖門一入ニ御埒殿ニ左大臣仰令レ捕ニ池魚ニ右衛門督清經朝臣捧下所ニ捕得一魚上奉レ覽則御前料理供膳餘給ニ侍臣ニ右衛門佐兼茂調御膳御厨子所一兩人階下調給臣下　此時騎射北ニ渡ル　同十八年二月廿日入ニ神泉苑東門一至ニ馬埒一下レ輿此間左右衛門以レ網捕ニ池魚ニ付ニ御厨子所一調供又南屛幔下調給ニ侍臣等ニ及ニ酉一刻ニ競レ馬

同年十月八日幸ニ朱雀院一爲ニ院造作一及御馬也左衛門督藤原朝臣請レ捕レ魚依請ニ左衛門官人ニ率ニ門部ニ令レ昇レ網參入施ニ網前池ニ得ニ鯉鮒十餘ニ唯於ニ御前ニ調供又於ニ東砌下ニ調給ニ侍臣ニ

みかとなをかきりあるゐやゝしさをつくしてみせたてまつり給はぬ事を　朝覲の行幸には帛袷をしきて上皇を拜し給ふ事あるなり

みこたちかんたちめなとの御まうけもめつらしきさまに　王卿取ニ獻物一事をいへるにや折櫃籠物なとめつらしきさまにつくし給ふ心也

むらさきの雲にまかへるきくの花にごりなき世の星かとそみる　久方の雲の上にてみる菊はあまつ星かとあやまたれける

にしきをしきたるわた殿のうへみえまかふ　御みちのわた殿ににしきをしきたるよし上に見えたり

あをきあかきしらつるはみすはうえひそめ　白橡に二色ありあをきは青色あかきはあか色ともにつるはみは入らさるに此名をえたるいと心えぬ事也こゝには舞童の裝束をいへり左はあか色にすはうの下かさね右はあを色にえひそめの下かさね也野行幸にも左の鷹飼はあか色右はあを色をきる御幸の卷にしるしおはりぬ河海につるはみの凶服の事內宴なとの例をのせられたるこゝにはかけしろはぬ事なりいはんや水原抄等の說はみなあやまり也

みしかきものともをほのかにまひつゝ　小樂ともなり

樂所なとおとろ〳〵しくはせす　樂所の用意に及はぬ事也それは大皷鉦皷をならし亂聲なとあれはおとろ〳〵しきといへり

うへの御あそひはしまりてふんのつかさの御こともめす　御記延喜八年節會雅樂寮立樂後召ニ和琴一宇陀法師書司唱歌於ニ本座一奏レ之

花鳥餘情第十九　　若菜上

廿　若菜上

この物語に上下をわかてる事は此卷はかりなり抑わかなの上を廿にたて丶下を廿一といはすして柏木を廿一にたてたるは漢書の高祖紀上を第一にして下を第二といはす呂后紀を第二にたてたるいまの例にあひかなへり曲禮上下は記者分之故に一卷の中に上下あり檀弓上下は後人注をつくるにつきて簡策繁多なるかゆへに二卷に分て上下をたてたり河海の舊說あやまれるなりわかなの上の卷には左大將の北方わかなまいり給ふとあり歌にもすなはちわかなとよみ給へり下の卷には女三宮朱雀院の五十の御賀に若菜たてまつらせ給へきよしみえたりしかれとも紫上の病惱によりてわかなのことはなくてしはすに御賀のきしきはかりあり上下の卷におなしく詞或歌にわかなと有によりて卷の名とはせるならし此卷には源氏の君卅九歲より四十一歲まて三ヶ年の事をのせ待り

女宮たちなむ四ところおはしましける　女一宮落葉宮女三宮女四宮是也

藤つほときこえしは先帝の源氏にそおはしましける　延喜御時承香殿の女御正三位源和子は光孝天皇の源氏也此女御の御はらに慶子韶子齊子內親王三人ありいまの女三宮はこれになすらふるにや

おりさせ給にしかは　朱雀院の脫屣は身盡の卷にあり

西山なる御寺つくりいてゝうつろはせ給はむほとの　新國史云仁和四年八月十七日於新造西山御願寺行先帝周忌御齋會　今案西山なる御寺とは仁和寺をいふ也光孝天皇の御願寺として仁和年中につくられたるによて仁和寺とは號せりすなはち光孝天皇の一周の御齋會も彼寺にしておこなはる又宇多天皇御出家の後延喜元年十二月に御室を仁和寺にたてらる同四年圓堂をつくらる供養あり本尊は金剛界會三摩耶形也云々又承平御門は天曆六年三月に御出家ありて四月に仁和寺に遷御あり此物語の朱雀院は承平御門になすらへて申侍れとしかも又彼是を取合せてかける也

そのつき〳〵をなむこと御子たちには御そうふんと

もありける　宇多御門をは御出家のゝち朱雀院と申し侍り承平四年に朱雀院御處分の事あり　李部王記にみえたり

女御にも心うつくしきさまにきこえつけさせ給ふ

心うつくしくそれをのみたのみ給ふ御こゝろむけ也

古院のうへのいまはのきさみに　きりつほの御門の御ことなり榊の卷にありこの院とは源氏の御ことゝなり

はかなき事のあやまりに　朧月夜のことによりて源氏の君の須磨の浦へうつり給ひし事なり

いまはた又なくしたしかるへき中となり　明石のひめ君の東宮の女御になりたまふ事也

かくすゑの代のあきらけき君として　冷泉院をは天暦の御門になすらへたてまつる也

この秋の行幸のゝち　十月を秋といへるはもみちを賞する故なり又一年を春秋といふは夏をは春にとり冬をは秋にとる故也

廿にもまたわづかなるほとなれは　夕霧の中納言廿にならんとてのまへのとし十二月の事也

それにこれはいとこよなくすゝみにためるは　夕霧は十九歳にて中納言に任せる事をいへり

左中辨なる彼院のしたしき人にて　六條院の院司かねたるをいふにや

ちりもすゑたてまつらしと　床夏の歌の詞なりちりはかりも人にあしくおもはせたてまつらしの心なり又けかされぬこゝろ也

さるはこの世のさかへ末の世にすきて　是は源氏のつねにの給ふことを左中辨物語するなり

めさましき事もや侍らん　紫の上ならふかたなくてましますことをいふなり

みなほからかにあるへかしくこそとて　ほからかは萬事に調達したる心なり

末の世にはいかなる上臈なりともよろつに心うるかたなくては人にあさむかるゝことのあるへきをいふ也

みこたちのよつきたるありさま　皇女なとのわたくしの男もち給ふ事也

いひもてゆけはみなおなし事也　みこたちのわたくしのうしろみもち給へると又おやの家にあかめら

れし人のむすめのなを〳〵しきすき物になをたちなきおやのおもてふせになるとはいひもてゆけはおなしわるさになる心也

ありへてこよなきさいはひあり　これは下におやにしられすさるへき人もゆるさぬに心つからしのひわさしたる女の事なりありへてはこよなきさいはひありめやすき事になる事もあれとそのはしめふときゝつけたる時は心つきなく覺ゆるとなり

たゝ人のなからひにてたに　よのつねの人のうへにてたにあはつけく覺ゆるにまして上らふなとのことはいふにおよはぬ事也

みつからのこゝろよりはなれてあるへきにもあらぬを　三界唯一心々外無別法のことはりなれはよきもあしきも心をはなれてあるへきにあらさる也

あやしくものはかなき心さまにやとみゆる御さまなるを　これよりは女三の宮の御ことをいふなりこれかれ心にまかせてもてなしきこゆるとはひめ君はなに心もましまさぬをめのとたちの心にまかせてもてなしきこゆるさまに院はおほしめしたるなり

いよ〳〵わつらはしく思ひあへり　院のの給ふことをきゝてめのとたちはいよ〳〵わつらはしきことに思ひあへる也

又大納言のあそんのいへつかさのそむなる　この大納言は系圖なき人なり院の別當なるへしいへつかさは女三宮の家司をのそむをいへり

かのあねきたのかたして　二條太政大臣の四の君かしは木の門衞督なとの母は朧月夜のないしのかみのあね君なり

かたはならむことはと　かたはなるはわろき事也人の思ふところかたはならん事なからんと思給ふなり

御裳きの事おほしいそく　昌子内親王ゝ御はかまきの例を思へり朱雀院の御女すなはち又御惱の時分なり

かへ殿のにしおもてに　かへとのゝ面の對をいふなり

もろこしのきさきのかさりを　周禮王后六服褘衣褕狄闕狄鞠衣展衣褖衣といへり　長恨歌傳云又命戴歩搖垂金璫明年册爲貴妃半后服用云々

御こしゆひにはおほきおとゝかねてよりきこえさせ給へり　康子内親王の御もきのこしゆひ小一條左大臣の例なり

尊者の大臣の御ひきいて物　これは大饗の例をもて御もきのこしゆひを尊者といへりおほよそ唐朝には德爵歯の三の中に一もあれは尊者といへるなり

中宮よりも御さうそくくしのはこ　御裳きにはまつ髮上の儀式あれはくしの筥もいる事なり

さしなからむかしをいまにつたふれは玉のをくしそかみさひにける　さしなからの五文字二の心ありくしをはひたいにさす物なれはさしなからとよみ給へり後拾遺　そなはれし玉のをくしをさしなから又から衣むすひしひもはさしなからこれはさすと云心也又さなからと云詞にも用る也　拾遺集大空にむれゐるたつのさしなから思ふ心のありけなるかな又さしなから人の心をみくまのゝ浦のはまゆふいくへなるらん是はさなからと云詞にかなへり此さしなから昔を今につたふれはの歌は二の心に通せるなり

御返もむかしのあはれをはさしをきて　齋宮の御くたりのとき朱雀院の御身にしみておほしめされし事をあはれをさしをきてとかける也

れいのこと〳〵しからぬ御車にて　西宮抄云太上皇御行供奉人裝束隨時無定 上皇乘車檳榔朱雀院初令出大内時車金餝檳榔 今案唐庇なとは後々に出來れる者也

まほにはあらぬ御けしきを　女三宮の御事たしかにうち出給はぬ心なり

御あるしのことさうし物にて　あるしは饗の說勿論なり

院の御まへにせんかうのかけはんに御はちなと

朝覲行幸時主上御前物は紫檀懸盤六本有打敷等淺香のかけはん可准之又御鉢は依御法體被用之鉢をは應量器といふなり出家の後の器なり宇多御門御出家之後正月三日朝覲のため延喜の御門仁和寺へ行幸ありし時は御笏靴を撤せられて叉手三拜し給へり又主上にも法皇にも同く御茶を供せし事もあり御法體の時の儀かくのことく在俗の時の禮にかはる事のみありこの物語に朱雀院御出家の後御精進物にて御鉢を用られ侍る寛平法皇の昔の跡をま

なひ給へる心也
中〳〵いとゝふかさこそまさらめ　我ためにいとゝ
　あさくや成ぬらん野中の清水ふかさまされは
かの母女御の御かたさまにてもうとからすおほしか
すまへてんやとひけし給ふ　藤壺女御は式部卿宮の
　御妹紫の上の御をは也
あちきなき大將の御事にてさへ　ひけくろの大將に
　玉かつらの君をあはせ給ふ事を紫の君のしり給ふ
やうに北方のうらみ給ふなり
としもかへりぬ　源氏四十歳に成給ふなり
きこえ給へる人々　兵部卿宮柏木の右衛門督なとな
り
正月廿三日子の日なるに左大將殿の北のかたわかな
まいり給ふ
延長二年正月廿五日甲子天子四十御賀父上皇被獻
之於紫宸殿有其儀采女調和若菜羹供進云々今案延
長二年御賀は醍醐の御門の御賀なり宇多御門これ
を献せらる此物語は鬚黑の大將の室六條の院の御
賀をたてまつらる父子の例相かはれりといへとも
ともに正月の子の日なり四十の御賀なりわかなを
調和せること一としてかはることなし此物語のつ
　くりさま大かた此定也
みなみのおとゝのにしのはなちいてに　六條院の南
のおとゝのにしの對のはなちいてなり放出の事さ
きにしるしをはりぬ
御ちしき四十枚　地鋪は唐莚に大文高麗へりつけた
　る物なり或龍鬢地鋪あり
らてんのみつしふたよろひに御ころもはこ四すへて
夏冬の御さうそく　仁和元年太政大臣賀夏冬衣裳五
　襲厩具屏風有數云々
ゆするつきかゝけのはこ　泔器有臺并蓋かゝけのは
　こは打亂筥なり
ふたりおなしやうにふりわけかみの　ひけくろの御
子二人のちに右兵衛督左大辨といへる人なるへし
河海に眞木柱の同胞男子といへるあやまれりこれ
は皆玉かつらのまうけ給へるなり故に玉鬘の歌に
もわか葉さす野への小松を引つれてとよみ給へり
但此時三四歳の子達なりふりわけかみいかゝ
しきふ卿の宮はまいりにくゝおほしけれと　まきは
　しらの上の事ゆへなり

御むまこのきんたちはいつかたにつけても　大將の
子たちは式部卿の御むまこ也
このよそえたおりひつ物よそち中納言をはしめた
てまつりてさるへきかきりとりつゝけ給へり
外記云延長二年正月廿五日御賀中務卿慶敦親王以
下同雅輔朝臣執捧物惣廿捧（筝獻之類或是影養之物盛小籠置梅柳枝）次侍
從以下執折櫃物惣廿捧（菓子等之類也）入自日華門列立庭中
（一列親王以下參議以上一列五位）名奏物各記内膳正忠望率膳部入自月
花門受捧物出自同門
この御ことは宜陽殿の御物にて　御記延喜五年正月
廿二日召保忠令吹笙曲調頗比聴因賜橘皮笙是故太
政大臣昭宣公弱冠時承和天皇爲令學習所給也寛平
中以其名物而献之其後爲宜陽殿笙令尋舊意以賜也
同延喜十七年四月廿二日此日返納宜陽殿累代書法
此殿自本納書法百九十七卷往年暫出看覽又於御書
所模取也今模寫功訖返納本所只雖大數本無細目觀
其題名或有誤謬仍新作目錄一卷細記題名裝束及其
訛謬加以置之欲後來者見之頗有分別耳又加書法三
卷足二百卷凡厥子細具有目錄即令右近少將伊衡藏
人淑行等撿納之

けにねくらの鶯おとろきぬへく　此御遊夜景なるに
よりてかくいへり
かうかそへしらせ給へるにつけて　後かそへしる人
なかりせはいたつらに谷の松とや年をつまゝし
むこの大君といはんにもことたかひて　吾家の曲の
詞也
命こそたゆともたえめさためなき世のつねならぬ中
のちきりそ　いのちはたとへたゆとも此契はかは
るましきよし也
三四句の心はさためなき世のならひならぬ契とい
ふ心なり
中みちをへたつるほとはなけれとも心みたるゝけさ
のあは雪　後かつ消て空にみたるゝあは雪は物おも
ふ人のこゝろなりけり
ともまつ雪　詩には待伴といふなり
さくらにうつしては又ちりはかりも心わくるかたな
くやあらまし　むらさきのうへをはさくらにたとへ
給へりちりはかりはすこしきはかりなり梅かゝを
櫻の花にゝほはせての心なり
これもあまたにうつろはぬほとゝめとまるにやあらん
はなのさかりにならへてみはやと　紫上の返答はあ

またにうつろはぬほとめとまるにやあらん花のさかりにならへて見はやとは女三宮を思ひよせ給へるなり

きははなるゝことはかたき物なりけり　その人のしなほとよりぬけいてゝよきをいふなり

よそのおもひはいとあらまほしきほとなりかしとおほすに　源氏の心に女三宮をよそにて思ひしはよろつあらまほしきさまにおほえしは紫上にさしならへみ給へはありかたく我なからもよくおしへたてたるとおもはるゝとなり

たつね給ふへきゆへもやあらんとそ　女三宮と紫上と母かたのいとこにておはします事也

そむきにし此世に殘るこゝろこそいるやまみちのほたしなりけれ　この世は子によする詞也

このしのたのもりをみちのしるへにて　いつみなるしのたの森のくすの木も千枝にわかれて物をこそおもへ

みさうしのしりはかためたれは　障子をほそくあけて人のとをらぬほとにしてしりさしをしたる心なるべし

これをかくてやとひきうこかし給ふ　障子を引あけんとする心也

御みやつかへにもかきりありてきはことにはなれたまふ事もなかりしを　朧月夜は女御なとにはなりたまはす内侍のかみは過分なる職にてもなき也

やう／＼さしあかりゆくに　朝日のことなり

ひめ君のおはしますおとゝのひんかしおもてに　西對のひかし面也

われより上の人やはあるへきと　紫の上としのまさり給へる事をの給ふなり

東宮の御かたはしちの御はゝよりも　あかしの姫君東宮の女御なるを申なり河海にはゝ女御としるされたり思あやまれるにや

しんてんのはなちいてをれいのしつらひてらてんのいし立たり　承平七年十二月十七日陽成院御賀正殿西放出第三間立螺鈿倚子　今案紫上御賀は二條院にておこなはるよしみえたり

おとゝのにしのまに御そのつくえ十二たてゝ夏冬の御よそひ御ふすまなとれいのことく紫のあやのおはひとも

承平七年十二月十七日陽成院諸親王源氏爲太政大臣御賀西第一間立御衣机八前（似泥繪）置御服筥八合各有黑紫綾覆　清凉記院御賀事延喜十六年儀平敷御座云々机五脚納夏冬御衣五脚積雜帛各五十疋

承平四年三月廿六日於常寧殿有中宮御賀帳臺東邊立三尺御厨子六基（衣筥十二合一基夏御衣五具冬五具）

かさしのたいはちんのくゑそくこかねのとりしろかねのえだにゐたる心はへなと

嘉祥三年仁明天皇四十御賀御挿頭臺造沈香山以金爲鶴令含御挿頭花

ひつしの時はかりにかく人まいるまんさいらくわうしやうなとまいて　延喜六年十一月十日御賀先奏萬歳樂次蘇合香次皇麞

つかさくらゐはやゝすゝみて　むかしの紅葉の賀の時は源氏中將致仕のおとゝは頭中將にて舞つかうまつり給ふいまの夕霧は權中納言かしは木は衞門督たるをいふ也

きたのまん所の別當とも　紫の上の家司なり女房をは北の方又北の政所なと人によりていひかへたりむらさきのうへは大かた源氏の室家のおほえたり北政所といはむ何事ならんや

中宮まかてさせ給てことしの殘りの御いのりにならの京の七大寺にみす行ぬの四千段このちかきみやこの四十寺にきぬ四百疋をわかちてせさせ給ふ

延長二年天子四十算布四千段十三大寺諷誦を修せらる

承平四年三月中宮御賀七大寺東西延暦極樂寺等有御誦經其布施東大興福大安藥師延暦寺各五百端西大法隆東西極樂寺各四百端奉爲中宮息災延命也

四十の賀といふ事はさき〳〵をきゝ侍にのこりのよはひひさしきためしなんすくなかりけるを　昭宣公は貞觀十七年四十賀し給て五十七にて薨す貞信公は延喜十九年四十賀ありて七十歳にて薨すかゝる例もあれと多分につきてためしすくなきとはかけるなり

宮のおはしますまちのしん殿に　中宮のおはしますまちはひつしさるのもとの御ふる宮をしゆりせられて六條院へつくりこめられたる御所なり「秋好方なり」

かんたちめのろくなと大饗になすらへて

正月二日二宮大饗事西宮記云大納言白大褂二領中納言同色一領參議紅大褂一領非參議四位柳色合小褂一領五位細屯(トン)一連云々延喜中宮式云親王以下大納言以上各白褂衣二領中納言三位參議白褂衣一領非參議三位并四位參議褂衣一領五位錦一連高唱四位五位各賜之　今案此御賀は中宮のせさせ給へるによりておほやけ事になすらへて親王公卿以下の祿大饗の例を用らる但其色目はかならすしも大饗のことくにはあらさるなり右大將の北の方の御賀むらさきのうへの御賀には祿のさたはなき也

むかし物語にも物えさせたるをかしきことには　七大寺四十寺なとへ御誦經物功德錢を施入さられ又延長四年六條院の御賀には朱雀の獄にて賑給のことありいまこれらの事を思ひて物かたりにいへり河海にのせられたる史記孟子等は今いふ事には似あはぬ事なり不可用之

うしとらのまちに御しつらひまうけ給て　この御賀は夕霧の右大將花ちる里のすみ給へるうしとらのまちのしん殿にてとりをこなはれたる也

所々のきやうなともくらつかさこくさう院よりつかうまつらせ給へり　內裏よりをこなはるゝ御賀にはかならすくられうこくさう院なとよりきやうとんしきの事をはさたをいたすなり則藏人頭せんしをかきくたす定りたる事なり

てん上人はれいの內東宮院のこるすくなし　てん上人は禁中にかきらす院の殿(テン)上人東宮のてんしやう人なとゝてそのところ／＼にゆるされて昇殿する事ありおのつからその中にかねたる事もあるへし院にて昇殿したりとも內裏にていまた昇殿せすは殿上の役にしたかふ事はかなはぬこと也

御馬四十疋左右のむまつかさ六衞府の官人かみよりつき／＼にひきとゝのふるほと　延長二年正月廿五日自宇多院被奉若菜於內裏院引出物御馬四十疋入自日華門瀧人大夫退出近衞騎之次召馬寮給之內豎奉上宣召馬頭等大臣立左杖西頭西面仰之今案延長の御賀の御馬四十疋は院よりまいらせらるゝによりて院の御まやとねりこれをひきて內裏にては近衞にわたすを御覽有りてむまれうの官人をめしてこれをたまふ此物かたりの御むまは內裏よりひかせらるゝによりて左右のむまつかさ六府の官人なとこれをひく延喜十六年三月の法皇の御賀に

御馬十疋内裏よりひかせらるゝ時この定なり時にしたかひ事によりてかはることとなるへし

れいのまんさいらくかわうをんなといふまひ　此はかまひともなを有へけれとめてたき樂なるによりて此二をいへりいつれも御賀にたよりあるまひ也但御遊をいそかるゝによて舞はけしきはかりのよしみえたり

御をくり物にすくれたる和こんひとつこのみ給こまふえそへてしたんのはこ一よろひにからの本ともこゝのさうの本なといれて御くるまにをひてたてまつれ給　延長二年十二月二十一日中宮奉㆓仕内裏御賀㆒（吏部王記）宴酣左大臣率一兩大夫自㆓中宮御方㆒執㆓樂器㆒於㆑廂當御座跪大臣第一執㆓北邊大臣清和御時書㆒（元清和七合也聞承和御時蔡琰也）獻㆓箏春鶯囀㆒枝（付木）　次八條中納言執㆓琵琵㆒次琴箏和琴式部卿親王問㆑之大臣奏曰后宮擧貞大臣講以次稱名了

承平四年三月九日奉仕中宮御賀（貞信公記）不及祿退出追給祿幷手跡和琴等本萬葉集入莒二合　今案延長二年の御賀の御引出物は中宮より内裏へまいらせらるゝ色目を李部王記にしるされたりいまの物かたりは致仕の太政大臣に六條院よりの引出物なり延長の例にはおなしからさるへし承平四年の中宮の御賀は貞信公（于時攝政左大臣）是を獻せらる攝政は人々祿を給るさきに早出ありしかはおつて中宮より祿と引出物和琴萬葉集の本なとをたまはり給ふその子細は太后の御日記にもみえたりこの例いまの物語にはいさゝか似よりたりといふへきにや

その日の御さうそくともなとこなたのうへなんし給ける　花ちる里の事なり

としかへりぬ　源氏四十一のとしなるへし

おとゝの君ゆかしき事を見給へてしかは　あふひの上の事なり

またいとあえかなる御ほとに　明石のひめ君十四歳なり

くすしなとやうのさまして　やとり木の巻にくすしなとのつらにてもみすのうちはさふらふましくやはとあり

わかれけんあか月の事も夢のなかにおほしいてられぬをくちをしくもありけるかなとおほす　これはあかしの上の入道にわかれしあか月の事いつとなく

とりみたしてうちわするゝやうなるをわれなから
なさけなしとおもへる也
さしきなきやうなれはわたり給なむとすたいの上も
わたりたまへり　源氏の宮の御産ある北の對へわた
り給へり紫の上もおなしくわたり給へると也
御むかへゆにおりたち給へるもいとあはれに
延長四年六月一日皇后産ニ男兒一村上天皇内侍奉レ仕ニ御
湯一大君前湯
六日といふにれいのおとゝにわたり給ひぬ　寢殿へ
わたり給ふ事なり
七日の夜内よりも御うふやしなひのことあり
延長元年七月廿日朱雀院御誕生七日の御うふやし
ない内裏よりせらる同四年六月一日村上院御誕生
七夜の御うふやしなひも内裏よりせらるこれらの
例也御前の物は榎木の小臺盤六前に銀の御箸馬頭
盤やうの物をすゆるなりうちきならひにきぬわた
の碁手の錢五十貫或三十貫等色々あり參入の人々
には女の裝束以下人によりてこれを給ふそれに御
うふきぬ一かさねむつき一かさねなとそへて給ふ
事也

わかおもとむまれ給はんとせしそのとしの二月のそ
の夜の夢にみしやうみつからすみの山を右の手にさ
ゝけたり山の左右より月日の光さやかにさしいてゝ
世をてらす身つからは山のしたのかけにかくれてそ
のひかりにあたらす山をはひろきうみにうかへをき
てちいさき舟にのりてにしのかたをさしてこきゆく
となん見はへし
過現因果經云至普光佛（乃然灯之異名）出ニ興于世一爾時善慧仙
人因與五百外道論議破其異見時五百人求レ爲ニ弟子一
各以ニ銀錢一枚一上レ之善慧聞ニ佛出興一今燈照王迎
請供養擊レ鼓唱レ令國內名花皆不レ得レ買悉以輸レ王
善慧聞已大懊惱欲レ訪ニ花所一忽遇ニ夷瞿持ニ花七莖一
畏ニ王制令一藏著ニ瓶中一善慧至誠感ニ花踊上一追呼就
買此女答言當レ送ニ內宮一欲ニ以上一佛不可得也善慧
告言五百銀錢雇ニ五莖花一瞿夷問曰欲レ花何用善慧
答言欲以獻佛瞿夷又問獻レ佛何爲善慧答曰爲欲下成
ニ就一切種智一度中脫衆生上瞿夷答言今此男子乃爾志
誠不レ惜ニ錢寶一即語レ之曰我今當下以ニ此花一相與上願
我生々常爲ニ君妻一善慧答曰我修ニ梵行一求ニ無爲道一
不レ得ニ相許ニ生死之縁一瞿夷即言不レ從我願花不可

得善慧又曰汝若決定不與我花當從汝願我好布施不逆人意若使有求從我求乞頭目髓腦及與妻子汝莫三生疑二壞吾施心一瞿夷答言敬從來命今我女弱不能得前併寄二花以献於佛使我生々不失此願好醜不離必置心中今佛知之時灯照王領諸官庶持妙香花種々供具出城迎佛王臣禮敬散献名花々悉墮地善慧見諸人衆供養畢已諦觀如來相好之容欲滿種智度衆生故即散五花皆住空中化成花臺後散二莖亦止於空爾時王民龍天八部見此奇特歎未曾有於是普光如來讃曰善哉汝以是行過僧祇劫當得成佛號曰釋迦牟尼既授記已佛經行處而濁善慧即脱所著鹿之皮衣以用布地解髮覆已佛踐而度復記之曰汝後得佛當於五濁惡世度諸天人不以爲難必如我也是時善慧投佛出家白言世尊我昨得此五種奇夢一者夢臥大海二者夢枕須彌三者夢諸衆生入我身内四者夢手執レ日五者夢手執レ月唯願世尊爲レ我解説普光答言夢臥海者汝在二生死大海之中一夢枕二須彌一者出二於生死一夢諸衆生入二身内一者爲レ彼作二皈依處一夢執レ日者智光普照夢執月者清凉度レ生令離熱惱此夢因縁是汝將來成佛之相善慧聞已不レ勝二踊躍一　大藏經辭字函

今案内典外典に夢をとける事おほしといへともいまの物語にいへる所は善慧仙人の五種の奇夢をとけるにすこしきもたかふ所なし但その心はかはれることあるへしまつ須彌といふは梵語に蘇迷盧山唐には妙高山といふ四寶をもてつくれるによて妙といふ地に入こと八萬由旬地を出る事は八萬由旬合十六萬由旬の山なるによて高とは名つくるなり東西南北に四州あり日月は山の半腹をめくりて晝夜を照すといへりあかしの入道の夢はあかしのうへのうまれんとする夜の夢といへりしはらく是をあはせていはゝ須彌の山は山にをきてはうへなき山なり右の手にさゝくるといふは女をは右につかさとれはあかしの上をいふなるへし山の左右より月日のさしいてたるは月は中宮日は東宮にたとふれはあかしの上の御女中宮にたちて孫に東宮を生給ふへき瑞なりみつからは山のしたにかくれてそのひかりにあたらぬといふはあかしの入道世をのかれて榮花をむさほる心なけれはかの御德をはみさるを光にあたらぬとはいへり山をはひろき海にうかへをくとは東宮つゐに御位につき給て四海

をたなこゝろににきり給ふへき心なり我身はちいさき舟にのりて西をさして行は入道般若の舟にさほさして生死の海をわたりて西方極樂の岸にいたるへきにたとふ現當二世の願望成就して目出度瑞夢なり善慧仙人の夢に須彌日月をみ給へることは普光佛一々に是をあはせ給へるすてふるその心相違せりといへとも各そのねかひもとむる所の成就せることとは出世の利益こととなるといへともなそらへて是を思ふへきなり又玄弉三藏は渡天の前に須彌の海中にあるを夢にみ給ふと慈恩傳にあり又夢に日月を呑とみるは必貴子を生ともいへり夢は無明舊習のなす所といへとも佛もおほく夢をもてたとへとして法を說給へり故に此つきの詞にもないけうの心をたつぬる中にも夢をしんすへき事おほく侍るといへりしらす物語の作者も善慧の五種の夢をふくみてかけるにや侍らんいまにこの物語の諸抄にひきのせさる事おほつかなし

水くさきよき山のすゑまて　嵯峨の御代に玄賓を僧都になされし時官牒を樹にさしはさみて歌を詠して深山に入る其歌云　とつ國は水くさきよみ事しけき都の中はすますまされり

いにしへより人のそめをきけるふちのころもにもあかしの入道は弃恩入無爲の心にて父子恩愛の道をたゝんためいにしへより人のそめをけるふちの衣にもやつるましき由を遺言し侍れと釋尊なを淨飯王の金棺をかき給ひ目蓮又母のため盂蘭盆をまうけ侍れはあかしのうへのわか事にわたりてはいかてかその恩を報せん事をおもはさらんやたゝし我をは變化のものと思なせといへるを河海には四生の中の化生をいふへきかとしるされたれと人界劫初の時こそ化生なとはありとみえたれいまの變化といふは佛菩薩の願力或は定力によりて善惡の業を感してかりにそのかたちを現する事あり變易生死とは是をいふなり布袋和尙は彌勒の變化寒山拾得は文殊普賢といふかことしあかしの入道の變化の物といへるかやうにみなしてしかるへきやらんしらすかし

さはのほかのきしにいたりてとくあひみんことをおほす　善導大師の讚に誓到彌陀安養界還來穢國度人天の心なり

あきらかなる所にて又たいめんはありなんと　あきらかなる所は淨土なり

なをたきゝつきける夜のまとひはふかゝりけるを　佛涅槃の時三明六通の大羅漢も擧身毛竪遍體血現涕泣盈目生大苦惱と大經にみえたり

よろつのことさるへき人の御ためとこそおほえ侍れ　さるへき人とはおやのことをいふなり

かくそひ給ふ御ためのいとをしきになん　尼上のあかしの上にそひ給ふ事也

ゆゝしきかねことなれとあま君そのほとまてなからへ給はなん　若宮の東宮にたち給はんを尼君にみせたてまつらはやの御心也

めつらしき事さへそひていかに心ちとなくおほさるゝらん　これは東宮の御事也

御かたにわたしきこへ給えるときこえ給　紫の上の東のたいにわか君をわたしきこえたまへるよしなり

女におはしまさんたにあなたにてみたてまつり給はんこそよく侍らめましておとこはかきりなしときこえさすれは　ひめ宮にておはしますともあなたへわたしたてまつらせ給て見たてまつらせ給はんなにことかは侍らんいはんやおのこ宮にていらせおはしませはとさまへも御みしろき有へき事なれはあなたにてみまいらせ給ふこそいよ〳〵心やすくおほえ給へとなり

まつはかやうにはひかくれてつれなくいひおとしたまふめりかしとて御き丁をひきやり給へれは　はひかくれては物へたてたる心なりいひおとし給ふは人をいひおとしむるなり源氏のゝ給ふことをさかしらなとゝ聞え給ふ事を云なりこれはあかしのうへのことなり

いとあやしきほんしとかいふやうなるあとに　梵字は天竺の文字なり十二の摩多三十五の對文なといふことあり筆跡のわるきをはほんしのやうなるといへり

かのせんそのおとゝは　あかしの入道は大臣の御すゑなり

おほやけにつかうまつり給けるほとに物のたかひありてそのむくひにかくすゑはなきなりなと人いふめりしをそんなこのかたにつけたれとかくていとつき

なしといふへきにはあらぬを　村上院の第一の御子廣平親王は民部卿元方卿のむすめの更衣はらそかしそれに御おとゝ冷泉院はきさき腹にておはしましゝによりて第一のみこをさしをきて東宮にたち給へり民部卿これをほいなき事におもひて思ひしにゝせしか其後冷泉院御物くるはしうならせ給て御子花山院三條院とておはしましゝも花山院はにはかに御位をすてゝ御くしおろさせ給ひ三條院は御目みえさせ給はすなとせしか又三條院の御子に敦明太子と申侍しは御位の御のそみなきよしおほせありてにはかに院號かうふらせ給て小一條院と申さかやうに冷泉院の御すゑいつれもすゑ／＼ともわたらせ給はぬはかの靈のするわさとそみえ侍しさて三條院の御むすめに禎子内親王と申は後朱雀院の御代に入内ありて後三條院をまうけさせおはしまして後に陽明門院と申きその御すゑのみこそ今の世まてつたへさせ給へ三條院の御すゑおとこかたはたえさせ給てをんなのかたより御子孫を殘し給へる事此物語にいへるあかしの入道のことに公私のちかひめこそあれによりたるやうなれはつゐてなからしるしつけ侍る是は物かたりつくれるよりはるかに後のことなれと世のことはかりはいにしへも今もかはらぬことなるへきをや

あやしくひか／＼しくすゝろにたかき心さしありと

　これは入道の心を云也

いにしへの世のたとへにも　まゝはゝのたとへなり

わかためしたの心ゆかみたらん人をさもおもひよらすうらなからんためはひきかへしあはれにいかてかゝるにはとつみえかましきにも思ひなをることもあるへし　わかためはまゝ子のためなり下の心ゆかみたるはまゝ母の心のゆかみたるなりさも思ひよらすうらなきとはまゝ子の心なりひきかへしあはれにとはまゝ母の思ひなをしてまゝ子をあはれに思ふへき事也

ひとり／＼つみなきときには　まゝ子もまゝ母もおの／＼とかなきをいふ也

おほくはあらねと人の心の　源氏のみ給ふ御かた／＼のことなりゆへよしとはゆへ／＼しくよきことなり

又あまりひたゝけて　叩也須磨の巻にもありし詞なり
かたへの人は思ひやられぬかし　源氏の此御こと葉にてよのかたさまの人々はしられたる心也
の給はせねといとありかたき御けしきを　是はあかしのうへの御返答なり
數ならぬ身のさすかにきえぬは　きえぬは世になからへたる心也
それも又とりもちてけちえんになとあらぬ　これはむらさきのうへの御うしろみし給ふこと也
宮の御かたうはへの御かしつき　女三の宮の御ことなり
しりふこちきこえ給に　後言なり源氏の御うしろことなり
ふくちのそのにたねまきて　あま君のわか御むすめ
あかしのうへのことをいふなり
身に人しれぬおもひそひたらんも又まことに心ちゆきけに　物おもひある人もこゝろよけなる人にうちましれはそれにひかれつゝおなしやうにみゆるとなり

おとゝの君もとよりはいありておほしをきてたるかたに　源氏の御山こもりのことなり
しんてんのひかしおもて　にしのたいのひかしおもてにまりのかゝりありきりつほはこなたに渡給へともいまは御るすのおりふし也
さるはいときやう／＼なりや　輕々なりまりの事なりみたれかはしき御あそひをいふ也
みはしのまにあたれるさくらのかけに　寝殿の南むきに階間あるへし
おとゝも宮もすみのかうらんにいて　御覧す　まりをはうへよりはみおろさぬことに人／＼心得たれと人によりてかゝる事もありしなり「すみのかうらんは東の對の西のすみのかうらんなるへし」
さしぬきのすそつかたすこしふくみてけしきはかりひきあけ給へり　ふくむとはなえはめる事なりさしぬきのそはとることなりさしぬきのすそとる事家々のつたへかはれり
しほれたる枝すこしをしをりて　資雅卿は懸の枝をこしにさしてきたるよしみえたりこれは花のえたを何となくおりたるにや　資雅卿は宇多源氏佐々木野といふ蹴鞠の家なり有雅卿の子なり有雅卿は後鳥羽院御時のまり足なり

春のたむけのぬさふくろ　ぬさは色々の紙をきりてすきたるふくろに入たるにやさてきぬのつまのすきかけにたとへたる也

はしより西の二のまのひんかしのそはなれは　階より西にみやれは二間にわたれるひんかしのはしらのそはといふ心なり

さうしのつまのやうに　きぬのかさなりたるはさうしのはしのやうなるなり

たいのみなみおもてにいり給へれは　東の對の南のひさしのかた也紫の上のすみたまふかた也

わらうた　圓座なり

いてやこなたの御ありさまの　紫上なり

宰相のきみ　右衞門督なり

いかなれは花に木つたふ鶯の櫻をわきてねくらとはせぬ　さくらは女三宮にたとへてよめり

されはよとおもふ　上の詞に大將は心しりにあやしかりつるみすのすきかけ思いつることやあらんと衞門督を思給へりされはよとは推したるにちかはぬといふ心なり

み山木にねくらさたむるはこ鳥もいかてか花の色にあくへき　かほ鳥のまなくしはなく春の野の草のねしけき戀もするかな　八雲抄かほとりは定家卿も不ㇾ知たゝうつくしき鳥なりと云常陸國にかきつはたをかほ花といふこの花さく時なくといふ　今案深山木にぬるといへはまつははこ鳥正說なり深山木は紫上にたとふ花の色は女三宮をいふへし

このゆふへよりくしいたく　頭痛なり又苦痛なり

小侍從かり　かりは名をかるなり

みかきか原　よし野の名所なり女三宮の御かたにたとふ

れいのかく　小侍從常に返事をかやうにかく也

みすもあらぬやいかに　侍從はみすのつまよりみ給しことをしらて返ししたるなり

花鳥餘情第二十　若菜下

若菜下

以詞爲卷名くはしき事は上卷にしるし侍りぬ六條院四十一歳二月のことまては上卷にあり同年の三月より當卷にみえたり四十二より四十五まてのことは物語に所見なし四十六七歳の事は又のせ侍り中間四ヶ年の事かけたるは此卷の詞云はかなくてとし月もかさなりてうちの御門御位につかせ給て十八年にならせ給ぬとかけり冷泉院は源氏四十六歳の時御位をすへらせ給へり是にて料簡有へき者なり

ことはりとはおもへとうれたくも侍るかな　柏木の右衛門督女三宮をおもひかけ奉りて小侍從かもとへふみつかはしたれは返事に今さらに色にな出そ山櫻およはぬ枝に心かけきといひ侍れはけにことはりとはおもへともさてしも思ひやまれねはうれたく思ふとなり上卷の末の詞につゝけて見るへしみな右衛門督の心をいへるなり

殿上ののり弓きさらきと有しもすきて三月はた御き月なれはくちおしと人々おもふに　殿上のゝり弓三月の例もあれと故藤つほの后の御忌月によりて停止せられたるといへり忌月の名は唐朝よりはしまる但晋穆帝后を納んとして九月九日これ忌月也いかゝと有しを禮記に忌日の詞ありて忌月の文なし忌月あらは忌歳有へしと云義あり又唐武后の時契丹を平て軍を返す時凱旋の樂をなさんとせしそれも高帝の忌月いかゝと云義ありしを晋穆帝の例を引てつひに軍樂をおこすことをえたり本朝には猶忌月をさることになれり九月九日の宴も延喜帝の御忌月にあたるによりて十月に是を行れて殘菊宴と名付られたり後江相公其文をかきたり文粹にみえたり

こゆみなとの給ひしかとかちゆみのすくれたる上手とも　李部王記承平三年三月十六日殿上侍臣於二朱雀院一歩射又天暦四年十月十五日試二春宮一擬二帯刀一坊亮以下預レ試二先騎射一次試二歩射一云々

とねりとものうけはりていとむしんなりや　とねりは左右の近衛なり

うちの御ねこあまたひきつれたりけるはらからとも

の　小右記云長保元年九月十九日日者内裏御猫産レ子女院左大臣右大臣有ニ産養事一有ニ衛重垸飯一納筥之衣等云々猫乳母は馬命婦時人咲レ之奇恠事也天下以レ目若レ是可レ有レ徴歟未レ聞ニ禽獸用ニ人乳一嗟乎

いつらこのみし人はとたつねて見つけ給へり　衛門督猫をいつらみし人はといへりしる人にしていへるなり高砂の松をもしる人とよめりいはんや有情のものをや

きてねう〳〵といとらうたけになけは　猫字の音めう也ねうは五音通なりねう〳〵となくをうたてもすらむかなといへり

是もむかしのちきりにやと　唐武宗時宮妃後身爲レ猫事あり

宮はうせ給にける北のかたを　前齋院と申人なり

とし月もかさなりてうちのみかと御位につかせ給て十八年にならせ給ぬ　冷泉院は源氏廿八歳の時受禪ありそのあくる年を在位の始めにとりて源氏四十六歳まては十八年にわたるなり十八年在位は清和天皇の例なり

おほきおと丶ちしのへう奉りて　太政大臣致仕の例はなけれとも左右の大臣致仕になすらへていへり但天暦三年正月三日是日太政大臣致仕表從ニ中務省一奏進有ニ勅答一不レ許云々見ニ李部王記一

かきりある御位をえ給へれと物のうしろの心ちして　今上の母女御贈后の事を云也

おりゐ給ぬる冷泉院　帝王系圖云弘仁十四年四月十一日遷ニ于冷然院一十七日讓ニ位於皇太子一天曆八年三月十一日改ニ冷然院一爲ニ冷泉院一

六條院はおりゐ給ぬる冷泉院の御つきおはしまさぬをあかす御心のうちにおほすおなしすちなれと思なやましき御ことなくて　冷泉院は誠は六條院の御子なれと系圖には桐壺の御門の御子にかけるそれをおなしすちとはいへるなり陽成天皇の御母二條后は業平中將まいりちかつきしかは清和の御子とはいへと誠は業平の子といふうたかひあり是によりて其一代はかりにて末の代にはつたへ給はす冷泉院の御こと是になすらへて思へし

源氏のうちつ丶き后にゐ給ふへきことを　うす雲女院 先帝御女 桐壺后　秋好中宮 前坊御女 冷泉院后　明石姫君 源氏御女 今上后

これを源代のうちつゝきゐ給ふとはいへりうす雲
秋好は姓をたまはれる源氏にてはなけれとも皇女
をはみな源氏のかたへとるなり藤氏の后にあらさ
るゆへなり

ひめみやの御ことはみかとも御心とゝめて　女三宮
の御ことなり

住吉の御くわんかつ〳〵はたし給はんとて東宮の女
御の御祈にまうて給はんとて　長保五年九月十九日
御堂關白（于時左大臣）隨身室家參二石清水幷住吉一給東遊
神樂等有レ之　今案源氏君相二具臺上一參二詣住吉一
可レ准レ之

さるへきにてしはしかりそめに身をやつしけるむか
しの世のおこなひ人にやありけん　交野大領彌益女
高藤公密通生二女子一爲二承香殿女御一生二延喜帝一

浦つたひの物さはかしかりし程そこらの御くはんと
も　身盡卷にある住吉詣のことなり

舞人はゑふのすけとものかたちきよけにたけたちひ
としき　舞人は十人石清水賀茂の臨時祭のことし六
衞府のすけともなり陪從をは歌人といふ十二人四
位五位六位各四人也是も道々のすくれたるをめす
よしみえたり又くはゝりたるふたりは加陪從とい
ふ是も兵衞の尉なるものなり春日祭近衞使の時舞
人陪從はみな近衞の官人等なり臨時祭試樂調樂を
は兵衞陣にて是をおこなふ故に陪從は多は兵衞つ
かさなり

御かくらのかたにはいとおほくつかうまつれり
御神樂もみな近衞の召人なり

おいのなみのしはのふはかり　古今長歌なみのしは
にやおほゝれん

思やうならん世中を待いてたらはと　東宮の御位に
つき給はん世をいふなり

十月中の十日なれは　一月卅日を上中下に十日つ
ゝをかそふれは廿日は中の十日なりこの故に下に
廿日の月といへり

ことにうちあはせたる拍子もつゝみをはなれて
ことは和琴なり大皷なとをうたぬをつゝみをはな
るゝといへり

山あひにすれる竹のふし　賀茂臨時祭舞人竹文青摺
袍蒲陶染下襲地摺袴合袴陪從櫻襴文青摺袍柳色下
襲白表袴合大口赤純半臂緒引帶等各閇付云々

かさしの花の色々は　臨時祭柿頭使藤舞人櫻陪從山吹但住吉詣には使なし舞人陪從のかさしは花の上を右にてさすなり諸社行幸の時東遊には使もあるなり

もとめこはつるすゑにわかやかなるかんたちめかたぬきておりたまふにほひもなくくろきうへのきぬにすはうかさねゑひそめの袖をにはかにひきはこゐはしたるにくれなゐのふかきあこめたもとうちしくれたるに　東遊譜云先一二歌次駿河舞次求子次加太於呂之調子高麗双調也

長保五年住吉詣於二御社一左府以下上達部其外殿上人合十八舞丁神主立舞相府脱レ衣被レ之云々　今案これは片舞といふことなり神社の行幸か樣の物詣の時は求子はてゝ後公卿以下十人かたぬきて舞事ありかたおろしといふ事則是なりすはうかさねは公卿の下襲の色ゑひそめは殿上人のしたかさねを云也くれないのあこめたもとしくるゝとはもみちの色にとりなしていへる詞なり

いとしろくかれたるおきをたかやかにかさしてたゝ一かへりまひていりぬる　荻をかさすことは人長の作法といへり人長は神樂にあり東遊のかた舞のことにいへるおほつかなし

住吉のまつによふかくをく霜は神のかけたるゆふかつらかもたかむらのあそんのひらの山さへといひける雪のあしたを思ひやれはまつりの心うけ給ふしるしにやといよ〳〵たのもしくなん　清輔朝臣袋草子文時卿歌　ひもろきは神の心にうけつらしひらの高嶺にゆふかつらせり

今案此文時歌ひらの高嶺にゆふかつらせりといふは雪を詠せる歌とこそ覺え侍れさらすしてひらの山のゆふかつらせん事はおほつかなし又文時を篁とかきたるは名たかへとそ覺え侍る其ゆへは關吹こゆる須磨の浦風の歌は壬生の忠見か集に侍るを行平中納言の歌のよし此物語にのせたりそれを續古今に源氏にもとつきてすなはち行平の歌と入たりたしかなる忠見か歌にて侍りかやうのことも侍れは文時を篁とのせたるも思ちかへたることはいかなるかしこき人のうへにも漢家本朝ためしある事なり又清輔ふくろさうしは源氏物語より後にかきたる物なれは篁か歌なるを文時とあやまりても

やかき侍りつらんいかにも源氏の説を本として關吹こゆる須磨の浦風の例を引へきなり

ゐひすきにたるかくらおもて　神樂面は神樂する人の面なり

入道の御かとは御おこなひをいみしくし給て　朱雀院の御事なり

二品になり給て御ふなとまさる　祿令一品親王封六百戸位田八十町二品三品封百五十戸位田二品六十町三品五十町内親王封減レ半位田減ニ三分之一ー今案二品内親王は封二十五戸位田四十町なり河海にはくはしくかんかへしるされさるなり

此宮をはいと心くるしくをさなからん御むすめのやうに　女一宮の御ことなり

空のさむさぬるさをとゝのへいてゝ　樂書曰師文之變ニ易寒暑一孫登之感ニ動風雷一云々謂ニ琴事一也琴書曰師曠晋之樂官也上ニ於琴一能易ニ寒暑一占ニ風雨一爲ニ晋平公一鼓レ之感ニ玄鶴ニ六下舞

やうこつなかるへきてのかきりを　やんことなきなり

正月廿日はかりになれは　誠は十九日なりふし待月と下にみえたり

月たゝは御いそきちかく物さはかしからんに　朱雀院の五十御賀のことなり

しんてんにわたしたてまつり給　女三の宮の御かたなり

わらはへかたちすくれたる四人　是は紫上の童女のことなりあか色はうはきなりくれなゐのうちたるはひとへをいふにや

女御の御かたにも　あを色はうはきなり

あかしの御かたのはことく〳〵しからて　こうはいさくらはうはきなりあをしはかさみをいふへし

宮の御かたにもかくつとひ給へくきゝ給て　あをにはうはき也靑丹は濃靑に黄をさしたるなり

いちこちてうにはちのをゝたてゝ　撥の絃は初絃をいふと云々調子の宮の聲を云ならは一越調は一の絃をはちと云へきにや猶尋ぬへし

柳のうす物のものはかなけなるひきかけて　柳のきぬにうすものゝ裳と心得侍るへきにや

五月まつ花たちはなのはなもみも　五月まつ花橘の

かをかけはむかしの人の袖のかそする

物のしらへこゝの物ともはしもけに律をはつきの物にしたるは　本は律呂といふ律は陽正なり呂は陰助なり然とも催馬樂には呂律といひて律を次にするなり

てんちをなひかしをに神の心をやはらけ　樂書云琴動二天地一感二鬼神一

このくにゝひきつたふるはしめつかた　波羅門僧正始渡二本朝一云々但允恭天皇文武天皇も彈レ琴給云々

きんはこかのしらへ　うつほ第三祭（かすか）　みやこ風といふことをこかのこゑにしらへこゝのめてたといふてをおり返しあそはす

院はたいへわたり給ぬ　東の對紫の上の事なり

うへはとまりて宮に御物語なときこえ給て　紫の上は女三の宮の御かたにとまり給て曉にかへり給となり

こと〳〵なくをしへきこえ給はんには　他事なき心なり

むかしよつかぬほとをあへかる思ひしさま　是は紫の上のことなり

おほきなる事ともゝ　大法なとのことなり

君こそはさすかにくまなきにはあらぬ　君は紫の上にむかひての給ことはなり

御かゆなとこなたにまいらせたれと　是は源氏の御ことなり

此宮の御あねの二の宮をなん　かしは木の室落葉の宮といふ人なり

なくさめかたきおはすてにて　おはすては女三宮のあね君東宮の御ためは御おはなれは何となくにははせていへり心はたゝなくさめかたきといはんためなり

院のうへたにかくあまたにかけ〳〵しくて　この院は朱雀院を申なり

いますこしの御いたはりあらましかはといへは　かしは木の今いさゝかねんころにも申たらは女三宮を御ゆるしも有へかりしとくやしく思ふなり

この比そすこしもの〳〵しく御その色もふかくなり給へれ　かしは木の衛門督中納言に任す中納言は三位の相當なり三位の袍色淺紫をいふなり

よその思ひやりはいつくしくものなれて　柏木の心に思ふ事なり
このてならしヽねこのいとらうたけにうちなきて　てならしヽ猫を宮に奉らんとするとみえしは宮にちかつきまいりたる事なりなにしにたてまつりつらんとおもふは六條院の御とかめを思て後悔すへき事のみえし也
おきてゆく空もしられぬ明くれにいつくの露のかヽる袖なり　この歌はてにはをいたはる歌なりいつくの文字心をやりてみるへきなり「いつくの三字をそこらなといふ詞にとりかへてみれは子細なきなり」
そらはつかしき心地して　空おそろしき心なり
かきりなきをんなときこゆれと　二條五條の后なとの類なり
す法と經とのヽしるをとも身にはくるしくわひしきほのほとのみまつはれて　大般若經御讀經燒㆓損邪氣足㆒之由稻荷明神告㆓貞崇法師㆒給事見㆓延長八年李部王記㆒
齋宮におはしましヽほとの御つみかろむへからんくとくのことをかならすせさせ給へ　齋宮寮忌語内七言　佛（タチスクミ）　經（ソメカミ）　塔（アラヽキ）　寺（テリタチ）香炬　僧（カミナカ）　尼（ツラハス）　齋（カタカシ）
この君のいとさしもしたしからぬまヽ母の御事により　夕霧のことなり
かんの君はむねつふれてかヽるおりのらうろうならすは　衞門の督なり牢籠はこヽにはおとろきさはく心なり
よへのかはほりをおとしてこれは風ぬるくこそありけれとて御あふきをき給て　風ぬるくとは檜扇をいふにやそれをはをき給てかはほりをもとめ給なり
すへていはけなき御ありさまにて人にもみえさせ給ひけれは　みすのつまの事なり
こくわうの御心やをい給はんと　御門の御心おき給はんとなり
院もきこしめしつけていかにおほしめさんと　院は朱雀院の御ことなり
かヽることなんありしとつけてけれは　かの人のふみを源氏のみ給ひしことなり
身もしむる心地して　身もひゆる心なり

うきにまきれぬ戀しさの　戀しさのうきにまきるゝ物ならは又二度と君をみましや物語より後の歌なり不レ可レ爲ニ證歌一なり

右のおとゝのきたのかたのとりたてたるうしろみもなく　此下の一段は玉かつらの鬢黒の大將にあひそめし時のことなり

二條の內侍のかんの君をは　是よりは朧月夜のことかの御心よはさもは女三宮の事なりつゐに御ほいのことはないしのかんの君の尼になり給へることなり

とくおほしたちし事なれと　內侍のかみの素懷をとけ給ふことと院の御ことに思たち給ふよしなり

はか〳〵しきさまの御うしろみならすとも　紫上の詞なり

けさなとはいかにぬふ物そ　昔の尼のかくるけさのぬひやういかゝ侍るやらん

うちわたりなとのみやひをかはすへきなからひなとにも　みやひといふ詞伊勢物語にあり此物語にはあまた所あり日本紀には風姿とかけりみやひかにたはやきたる心也又人を假粧する心にもかよひたる詞也うちわたりなとのみやひをかはすも宮つかへ人に心をかはしたる心也かやうの詞は心をやりてみるへき也

いと〳〵をしく心くるしうかゝるうち〳〵の淺ましき事をは　是よりは源氏の御心なり

ひたりすくなくたゝ人のきこえなすかたに　たゝ人の聞えなすかたになひけはおのか申事をはかへりてをろかにおほしめすとなり

さたすきにたるありさま　さたすきにたるとは年たけたる事をいふなり

院のおはしまさんこなたは猶心をさめて　院のおはしまさんかきりはかの御おきてのまゝにましまさん事なり我やうなるさたすき人を御うしろみにさためたまへるさるやうありと思ひたまへとなり

いにしへよりほいふかきみちにもたとりうすかるへき女かたに　ほいふかきみちは道心のことなりたとりうすき女かたとは色このみの事なりいつれにもそなたに我こゝろかおくれたるよしなり

みつからの御心にはなにはかりおほしまよふへきにはあらねと　是は山の御門の御事なり

みたりかくひやう　かく病は瘧病脚病の兩義ありみたりはすへて病の事なり血氣かみたれて病となるゆへなりはか〳〵しくふみたつる事も侍らすといへるは脚病の事なりとも聞え侍り

世人はあさくみるへきをさはいへと心してものせらるゝにされはよとなんいとゝ思なられ侍る　女三宮の御賀のことそきたるをくるしくもなきやうにかしは木の申給ふはかたうとして申すと心え給なり

かの御賀の日はあかきしらつるはみにえひそめの下かさね　承平七年陽成院七十賀舞童五人服赤白橡袍蒲陶染下襲

人よりさきなりけるけちめにや　衛門督は嫡子の心なり

いとゝはかなきかうしなとをたに　榮花物語佐理(スケマサ)病惱の事をいふにたちはな一もきこしめしては御身にもとゝめすとあり

れいの五十寺の御す經又かのおはしますてらにもまかひるさなの　天慶二年十二月貞信公六十賀太政官於二六十寺一修諷誦永延二年三月十四日法興院大入道六十賀公家今日修二諷一誦於六十寺一　今案御賀の時諸寺の諷誦は年齡の數を用る定る事なり五十御賀なれは五十寺にて御す經ある也かのおはします寺は仁和寺の圓堂本尊金剛界大日なるを云なり五十寺の御す經別ては又仁和寺の圓堂にて摩訶毘盧舍那の御誦經ありとなり此卷の結語の詞奇特なりかのおはします寺にもまかひるさなの御す法ありといふへきをかくかきたるなりかやうの筆法莊子なとの書にあひにたるなり

花鳥餘情第廿一　柏木　横笛

廿一　柏木

以詞幷歌爲卷名源氏四十八歳の春より秋までの事みえたりことしかほる誕生し侍り

ひとつふたつのふしことに　まつひとつは女三宮の御うしろみにくらゐなとまたあさきはとにてめしよせられりし事也

なけのあはれをもかけ給ふ人あらんをこそは　女三宮の事なり

なめしと心をい給へらん　源氏の無禮なりとおもひ給はん事也

われもけふかあすかの心地して　女三宮の御詞也

「人の世の老を果にもせましかはけふかあすかもいそかさらまし」

たらにのこゑたかきはいとけおそろしくていよ〳〵しぬへくこそおほゆれ

世繼物語時平公三男敦忠中納言ここちわつらひける時藥師經をよませ侍るに十二神のうちくびら大將といふをきゝて我くびをくゝれといふそときゝてそのまゝ死たまひぬおくひやうの人にいひつたへたり

右大辨の君　紅梅の右大臣此卷に右大辨になり給へるなり

又かく心くるしきうたかひまじりたるにては心やすきかたにものし給ふもいとよしかし　こゝろやすきかたとはおのこゝをいふ也

よとゝもにおそろしと思ひし事の　冷泉院の御事也

としころ下の心こそいとねんころにふかうしもなかりしか　これは女二宮の事也

おとゝ北の方なとはましていはんかたなく我こそさきたゝめ　或說云致仕のおとゝは清愼公の御事に准して書とおほえ侍りかの右衛門督は敦敏の少將のおとゝにさきたちてうせたまへにし事をおもへりすゑの御子紅梅右大臣は廉義公の昇進ににたり廉義公は辨少將右大辨を經給ふとみえたり世繼云あつまのかたより敦忠少將のうせ給へるともしらて馬をたてまつりたりけれはおとゝ清愼公　またしらぬ人もありけり東路にわれもゆきてそすむへかりける

御くしのすゑ所せうひろこりたるをいとくるしとおほしてひたいなとなてつけておはするに　むかしは垂尼とていまの世の喝食なとのやうにひたいかみをも又すゑをもはさむと見えたり下詞云御くしはおしみきこえてなかうそきたりけれはうしろはことにけちめも見え給はぬほとなりきぬなとの色ははなやかなるをは用すにひ色きかちなるくれなゐなとはきるとみえたり

すみそめこそなをいとうたてめもくるゝ色なりけれ

にひ色をすみそめといふ也

さらはかの御ちきり有けるにこそはと思ふやうにも見えさりし　故右衛門督と二の宮との御中おもふやうにも見えさりしをいまはのきはに二の宮の御事なと御ゆいこんありしをきゝ給へはうきにもうれしきせはましゝ侍りけるとて御息所なきたまへるなり

あやしういとこよなうおよすけたまへりし人の

これよりは衛門督の事を大将のかたりたまふ也

あまり世のことはりを思しり物ふかうなりぬる人の

衛門督のいつとなく物思ひかほにみえしは世間の事をふかくなけき給へるとおほえし也すみすきては法にはつれたる心也

かゝるためし心うつくしからすかへりてはあさやきたるかたのおほえうすらく物なりとなん　かゝるためしとは上にいふ事也心うつくしからすはよくもなき事なり道心はをこしやすくてさめやすきものといふやうにあさやきたるとはふかき心也かならすうすらくならひなれはさのみには心にかけ給ふなといさめし事を夕霧のかたりたまふ也

よろつよりも人にまさりてけにかのおほしなけくらん　二宮の事也

ことならはならしのやとにならさらん葉守の神のゆるしありきと　ことならはかくのことくならはなりならすはなるゝ心なり葉守の神は故右衛門督にたとふるなり

この宮こそきゝしよりは心のおくみえ給へ　女二宮の事を夕霧の心におもふ事なり

なとてみるめにより人をも思ひあき又さるましきに心をもまとはすへきさまあしやたゝ　みめかたちの不足なるによりて人をあく事はあるましき心はせ

こそ本にてあれとなり　又さるましきにとはなを
見るめをえらふへきならはこゝろに心をまとはす
べき事はあるましきなり一かたにさたまらぬをさ
まあしやといへり
かのおとゝはよろつのなつかしう　院の御事をかの
おとゝといへり源氏の御事也
右將軍かつかに草はしめてあをし　衞門督をも唐
名に金吾將軍といへは右將軍といふに相違なきな
り
むへ／＼しきかたをはさる物にて　むへ／＼しきか
たとは藝能の事なり

廿二　橫笛

以歌爲卷名詞にはたゝ笛とはかりあり源氏四十九
歲時也かほる二歲なり
御はてにもす經なとゝりわきせさせ給ふ　こその二
月衞門督卒去今年一周忌也六條院令レ修二誦經一給
かきかへ給へりけるかみの御木丁のそはよりみゆる
入道の宮の御返事かき損し給へるかあるを院の御
覽せるとなり
御はのおひいつるにくいあてんとて　齔ハカク
しつくもよゝとくひぬらし給へは　敦忠集五月雨の
よゝとなきつゝ郭公袖のひるまもなきそかなしき
いとねちけたる色このみかなとて　むかしの衞門督
のことをいふか又かほるのおさなたちをいふかか
さねて案わか君の行末の事をのたまふはなほ勝說
なるへしねちけたるは口きゝかましき心なり色こ
のみのみちにつきていひことのおほかるへき心な
り
うきふしもわすれすなからくれ竹のこはすてかたき
物にそ有ける　うきふしはかしは木の事なり竹の子
はわか君の事也
わか御とのゝあけくれ人しけくものさはかしく
夕霧のわか御殿に雲井の鴈の御はらに御子ともお
ほきをの給ふなり
あはれいとめつらかなるねにかきならし給しはや
かしは木のひきたまひしことのねの事也
ことのをたえにし後よりむかしの御あそひの
一條のみやす所の御いらへなり女二宮の御ことを
のたまふなり

院の御まへにて女宮たちのとり／＼の御ことども
朱雀院の御まへにての事なり
いとことはりの御思やかきりたにあるとうちなかめ
てことはおしやり給へれは　夕霧の返答なりことを
おしやるも夕きりのひき給ふことをおしやり侍る
なり
かれなをさらはこゑにつたはる事もやと　御息所の
詞なり
しかつたはる中のをはことにこそ侍らめ　夕霧の詞
なりみすのもとにおしよせたるは宮にひかせたて
まつらせ給へとの心なり、
はねうちかはすかりかねもつらをはなれぬうらやま
しく　女二宮はいまひとりねのおりふしなれはかく
いへるなり
さうのことをいとほのかにかきならし給へるを　御
息所のひき給ふなり
いとなつかしきねにさうふれんをひき給ふ思をよひ
かほなるはかたはらいたけれと　夕きりの想夫戀を
ひきて聞えたまふ詞なりおもひをよひかほなると
は女二宮の御こゝろをいふなり事とはせ給ふへく
やとてとはこの曲をはむかしをおほしめしいてゝ
もしもや事くはへ給ふとて思よりてひき侍るとな
り
ましてつゝましきさしいらへなれは　想夫戀は女の
思ふさまにはひくましき曲なり
ことにいてゝいはぬもいふにまさるとは人にはちた
るけしきをそみる　夕きりのよみ侍りことにいてゝ
いはぬは想夫戀をひき給はぬ心なり
たゝすゑつかたをいさゝかひき給ふ　女二宮和琴を
ひきて想夫戀のすゑつかたをいさゝかつけ給へる
なり
ふかきよのあはれはかりはきゝわけとことよりほか
にえやはいひける　女二宮の返歌なりことのねにた
つるほかにさらに詞をはかはさぬとなり
ふるき人の心しめてひきつたへけるおなしゝらへ
これも想夫戀の事なり
むかしのとかめやとはゝかりてなん　故衛門督のあ
らはとかめらるへき事を云なり
こよひの御すきには人ゆるしきこえつへくなん　人
ゆるしきこゆるとは女二の宮の御こともてつくし

給ふへかりし事をいふなりのこりおほくなんとて
といふまては夕きりの詞なり
御をくり物にふえをそへてたてまつり給ふ　笛の外をくり物ありときこえたり
これになんまことにふるき事もつたはるへくきゝをきはへり　向秀過ニ山陽舊居ニ思ニ嵆康ヲ聞ニ隣人吹ニ笛ヲ作ニ思舊賦ヲ
かゝるよもきふにうつもるゝもあはれにみ給ふるを
よもきふのやとにうつもれはてんはあはれにおほえてたてまつるなり
につかはしからぬすいしんにこそは侍へけれとて
御前の聲と御息所のゝ給ふにつきてにあはぬ隨身とは夕霧の中給ふなり笛を隨身してまかつる心也
よとゝもに身にそへてもてあそひつゝ　これは右衛門督のゝ給ひし事をいま思出たるなり
露しけきむくらのやとにいにしへの秋にかはらぬむしのこゑかな　御息所の歌蟲の聲に笛の音を比するなり八雲御抄にもひかれ侍り文選笛賦云蜂如聚蟻如閑衆音猥積云々
よこ笛のしらへはことにかはらぬをむなしくなりしねこそつきせね
國史云仁明天皇承和元年正月辛未內宴於仁壽殿是夕初授ニ正六位上大戸首淸上外從五位下ヲ淸上能吹ニ横笛ヲ故預ニ此恩奬ニ今案横笛二字出處也
むなしくなりしねは笛の音に我なくねをそへたるなり
おほかたのよにつけてもかきりなくきくにとは
おほかたのよにきく事とものおほきもによりたることはさそあるらんと思ひやらるゝ事なりわか御中とは雲井の鴈のことをいふうちけしきはみ心をもつくさておもふやうなる事なれはほこりならひ給へるもことはりなりよそにてきく人もあらはさそあるかしと思ふへき事也
笛竹に吹よる風のことならは末の世なかきねにつたへなん　衛門督の夢の中にきこえたる歌なりおもふかたことに侍きとは女二宮をうしろみ給へとの心にや
つたみなとし給へは　順和名哯吐小兒口哺乳冷恐不調取致也　今案小兒の乳をあます事なり
彿の道におもむきけんもたうとき事とはいひなから

康保四年七月村上天皇六七聖忌小野宮殿修諷誦和琴横笛等爲衆僧布施菅三位諷誦草云有一龍笛蓋希代之名物也云々

三宮みつはかりにて中にうつくしくおはするを

三宮は匂宮事也女御の御かたにましますなり

あなたへゐておはせとは　あなたは入道の宮の御かたをいふおなし西對にましますなり

こなたにも二宮のわか君とひとつにましりてあそひ給ふを　このわか君は薫の事なり入道宮の御かたに

二宮とあそひたまふなり

すみのまのほとにおろしたてまつりたまふを　大將の三宮をいたきまいらせてすみの間の程にすへたてまつり給ふなり

院も御らんしていとみたれかはしき御有さまともかな　これは院も又入道の宮の御かたへわたりたまふ歟たゝしおなし寢殿の中なれはみやり給ての給ふにや

みくるしくかるゝしき公卿のみさなりあなたにてそとてわたり給はんとするに　あなたはひんかしのたいの事なり

宮のわか君は　かほるの事なり女三の宮のわか君也

大將はこの君をまたえよくもみぬはなとおほして

宮のわか君を大將のまたみぬとてみすのひまよりさしいたし給ふなりわか君も源氏の君のおはしますかたへあそひにおはしたるへし

二あゐのなをしのかきりをきて　おさなきわらはのきるをなをしといふなりかほる二歳はかりの時のことなり

いとよくおほえ給へり　かしは木の目つきにゝたるをいふなり

あはれなるむかしの事かたりたるふしふしは　是は源氏に夕霧の一條の宮にての事かたり申し給ふに女二宮の想夫戀の末つかたをつけ給ひし事をもかたり聞えたるにやそれを源氏のひはむしたまふなりさうふれんをひくほとの心ならはそれほとのよういありてこそさうおうせめの心なり

さかし人のうへの御をしへはかりは　これは夕きりのおもひ給ふ事なりさかしはさよかしなり源氏の君の人のうへの事はもとかしく思給へとも御身のうへの事はさもなきよしなり

心みしかく侍らんこそ中々よのつねのけんきありかほに侍らめ　上の詞にすきにしかたの心さしをわすれすかくなかきようゐをと源氏君のの給へるにつきて心みしかく侍らんとはいつしかむかしをわすれたるを心みしかきとはいふなり

いとよきついてつくりいてゝすこしちかく参りより給てかのゆめかたりをきこえ給へは　すこしちかくまいりよるとは夕きりの源氏の御前ちかくいまりたまふ事なり一條御息所のおくりものに笛を給はりし後かしは木の夢にみえて歌なとよみたることをかたり申し給ふなり

そのふえはこゝにみるへきゆへあるものなり　これよりは源氏のかたり給ふ詞なり

かれは陽成院の御笛なりそれを故式部卿の宮のつたへて　南宮式部卿貞保親王は笛達者なり清和の御子母染殿后陽成院の御弟なりそれを紫の上の父式部卿宮になすらへてこゝにみるへき故ありとの給ふへし

すゑのよのつたへは又いつかたにとか思ひまかへん夢の中のうたに笛竹にふきよる風の事ならはすゑのよなかきねにつたへなんとありしことなり

そのけしきをみるにいとゝはゝかりて　これよりは夕きりの心なり

いましも事のついてに思ひいてたるやうにおほめかしうもてなして　夕きり笛の事を事のつゐてに物かたり申給ふおほめかしうもてなしてはたしかには申給はぬ心なりそのついてに衛門督のいまはのきさみに物かたりせし事ともを源氏にかたり申給ふなり

されはよとおほせと　これは源氏の御こゝろ也さていましつかにかのゆめは思あはせてなんきこゆへきとは笛の事をの給て夕きりのとひ申給ふ事をはきは〳〵とも御いらへなきとなり

花鳥餘情第廿二　　鈴蟲　夕霧　御法

並　鈴蟲

以詞幷歌爲巻名源氏君五十歳横笛の次のとしなり
竪の並也

よるのみちやうのかたひらを四おもてなからあけてうしろのかたに法花のまたらかけたてまつりて
御帳の四めんのかたひらをあけてうしろのかたに法花の曼陀羅をかけたる常の法會の義なり

百ふのえかうをたき給へり　百ふのくのえかうとかきたる本もありゑかうも薫え香の心なるへし

あみた佛けうしのほさちをの〳〵ひやくたんしてつくりたてまつりたる
観經云無量壽佛住立空中観世音大勢至是二大士侍立左右云々二大士は脇侍也

みつからのち經は院そ御てつからかゝせ給ける
天暦九年正月四日村上天皇爲母后被供養宸筆法花經有八講

ほとけのおなしちやうたいのうへにかさられ給へり
御帳臺のうへに佛とおなしく經の机をゝかれたるへし河海の自餘の説はみなあやまりなり下の詞におましをゆつり給へはほとけの御しつらひとありちやうたいに佛きやうを安置せるよし分明也

うちにもやまのみかともきこしめしてみな御使ともあり　御誦經の使なり内裏よりも院よりも立らるゝなり

ゆふへの寺にをき所なけなるまて　名僧とも御布施捧物なともちかへりてをのか寺にをき所なきまてつみをけるなりそうともかへりけるといふ詞につきてゆふへの寺とはかけりいとおもしろし

院のみかとはこの御そうふんのみやに　院のみかとは山の御門のことなり御そうふんの宮とは女三宮にゆつり給へる三條の宮にうつり給ふへく思給なり

まつ蟲なんすくれたりとて中宮のはるけき野へをわけていとわさとたつねとりつゝ　秋好中宮の御ことなり

おほかたの秋をはうしとしりにしをふりすてかたきすゝむしのこゑ　すゝ蟲の聲に御心をとめ給ふを思ひのほかなる御事とは源氏のゝ給ふ也

心もて草のやとりをいとへともなを鈴蟲のこゑそふりせぬ　すゝむしは女三宮にたとへたまへり草のやとりをいとふはこの世をはなれ給心なり
れいのいとわかうおほとかなる御けはひにて　秋好中宮の御事也こゝのへのへたてふかうとあるまては中宮の御返答なり
けにおほやけさまにてはかきりあるおりふしの　これは源氏の御詞也
みやす所の御身のくるしうなり給ふらん　これは中宮の御心に思給ふなり
たゝなき人の御ありさまのつみかろからぬさまにこれは中宮の源氏に申給ふ詞なりものゝあなたはあの世のことなり
けにさもおほしぬへき事と　源氏の又御返答也
もくれんか佛にちかきひしりの身にてたに　目連はしめて六通をえたるを佛にちかきとはいへり又佛に親近するこゝろもあるにやその母の餓鬼道におちたるを救度せし事盂蘭盆經にとけり
よへはうちしのひてかやすかりし御ありき　六條院の夜あけてかへりたまふ時上達部なとおほく供奉したまへるなり

廿三　夕霧

以歌爲卷名詞にはたゝきりとあり鈴蟲の卷は八月十五夜の事にとゝまり此卷は同廿日より冬までの事みえたり源氏五十歲也
をのといふ所に山さともたまへるにわたり給へり
此物語の手習の卷にかの夕きりの御息所のおはせし山さとよりは今すこしいりて山にかたかけたる家なれはとあり山城國に小野里といふ所二あり宇治郡に小野里あり又愛宕鄕に小野里ありこの小野は愛宕の名所なりひえの山よかはのふもとたかのといふ所也
松か崎のを山の色なと　松か崎はひえの山のふもとなり氷室のある所なり
すくくしうおれてとしふる人はよにたくひあらしかしと　不折してとしふる人は宮の御心をいへるにや

みつからきこえ給はさめるかたはらいたさにかはり
侍りぬへきを　是よりは宮の御詞也
心くるしき御なやみをみにかふはかり　これは夕き
りの返答なりものをおほしゝる御ありさまなとは
宮の御心なり
くるすのゝさうちかゝらんみまくさなとゝりかはせ
て
小右記云寛仁二年十一月廿五日被奉寄賀茂上下郷
之事可定申之栗栖野小野二郷上下社司各申但昨日
下社司久清進二解文一可レ尋二舊記一皇御神初天降給二
小野郷大原御蔭山一也云々亦栗栖野可レ爲二下社之
山一有下採二桂葵一之由上先年給二官符一仍件小野并栗栖
野可レ爲二下社領一者令レ仰下降二坐御蔭之山一之記文
可レ進之由上之處申云康保二年禰宜宅燒亡次燒失者
又令仰云古人所傳不然無記文如件解文并事趣又上
下社司申旨亦初被レ奉二御封於上下御社一之時上御社
十四戸下御社者十戸又神戸數有二增減一上御社七十
餘戸下御社五十餘戸此間可レ奉二一定文一除二神山採
レ葵山一之外山者不可奉寄歟被レ奉レ寄二伊勢太神宮一之
郡格云官物舍之類又右近馬場氷室埴河　美魯呂池
不可爲奉寄歟件案内先以二左少辨經賴一令レ申二前太
府一云々初知給之事也仍請二處分一經賴來二陣座一傳
二前太府命一云下社司進申文無レ所レ據又不レ進二舊記
一但至二栗栖野郷一有下採二下社葵一之山上爲二下社分一
可レ有二便宜一至二小野郷一可レ爲二上御社分一至二于山
々不レ可レ奉レ寄非二官物官舍之類一也
可奉寄賀茂上下社郷之事　上社　賀茂郷　小野
郷　大野郷　錦部郷」　下社　栗野郷　蓼倉
郷　上栗栖野郷　出雲郷　今案山城愛宕郡　之内
小野郷は上賀茂領也
栗栖野郷は下社領也寛仁二年十一月廿五日陣定あ
りて官符をなされをはりぬ此物かたりにくるすの
ゝ御さうちかゝらんといふは此所なり又宇治郡に
も小野栗栖野ありそれをいふにあらす
あさましうてみかへりたるに　御せうそこつたふる
人の事也
いと心うくわか〳〵しき御さまかな　夕きりの詞也
いかにいひつる事そとおほさるゝに　宮の我のみや
うき世をしれるとよみ給へるは夕きりの世をしり
たるかたの心をおり〳〵ほのめかすとあるにかく

よみ給へるはうけふしたるやうに侍れはいかにいひつることそとくい給ふなり

けにあしうきこえつかしなとほゝゑみ給へるけしきにて　これは夕きりのおちあひたる詞なり

こきみの御事　かしは木の君なり

御心のうちにもかれは位なともまたをよはさりける宮の御心に思給ふ事なりよそにきくあたりにたにあちす夕霧の北の方は柏木の連枝なるをいふなり

ぬれ衣はなをえほさせ給はし

六七 夕霧に衣はぬれて草枕たひねするかもあはぬ君ゆへ

としころ人にたかへる心はせ　夕霧の心に思ひたまへる事なり

六條院の東のおとゝにまうて給ひぬ

花ちる里なり

ましてかしこにはいかにとおほしやる

雲井の雁の事なり

おまへにまいり給ふ　花ちる里のおまへなり

かしこに御ふみたてまつり給つれは　女二宮の小野へ御文参らせ給なり

さるはにけもなくいと心ふかけにかい給へり　夕霧の御文の詞を云ふなり

あくらうはしうねきやうなれとこうさうにまとはれたる　こうさうは業障なり河海あやまれり

みこのきみ　女二宮を申すなり

あの人はかうてもやまて　あの人は夕霧の君を云なり

まいていふかひなく人の事によりていかなる心をくたかまし　辨の君の思かけし事なり

人しれすおほしよはる心もそひて下にまち聞え給けるを　御息所は宮はらなり夕霧にあひ給ふたると思給ふなり後朝の文のをそきを心もとなく思ひたまへるなり

心うつくしきやうにきこえ給ふてなをありしまゝならんこそよからめ　是は夕きりの御文の事なりうち〳〵の事はともかくもあれうへには心うつくしくけむきのなれたるやうにもてなし給はんこそ人めよからめいつしかあまえたるさまなる御文なるへしと御息所思給てめしよせてみ給ふなり

あさましき御心のほとをみ奉りあらはいてこそ　これは夕きりの文の中の詞なり
ことはおほかれとみもはてたまはすこのお文にもけさやかなるけしきにもあらてめさましけに
御息所のこの文をみ給てけさやかなる文章にもあらすこゝちよかほにてこよひもつれなきをあさましと思給へるなり
かくおきなのなにかしまもりけんやうに
竹とりの翁かくやひめのことを古抄に出せりそれは夫婦の故事にあらすこゝにあいかなはす別に猶たつぬへし
あいなき人の御ためにもいとおしう　女二宮のことなり
かう心くるしき事そありける
御息所の御返事に一夜はかりの宿をかりけんとある事なり
この文をあたえかくして　あたえはあたく／＼しといふ心にや
かん日にもありけり　九坎日不可出行云々凡諸事憚之日也

ひとよのつみはひたやこもりにやとあり
うきによりひたやこもりと思ともあふみの海は打出てみよ和泉式部今案御息所の歌も一夜はかりの宿をかりけんの詞につきていへる一よのとかめはひたやこもりにてつねにまいらぬをとかめ給ふにやといひなせりさすかにあらかはぬ心なり
あしとき御馬にうつしをかせ給て
移の鞍は随身のゝる馬にをくなり大將隨身をめしつかふ故なり
院よりはしめ奉りておほしなひきこのちゝおとゝにもゆるい給ふべき御けしきありしに　是は女二宮をかしは木にむことり給ふことなり院は朱雀院ちゝおとゝは致仕の大臣をいふなり
大空をかこちてみたてまつりすくすを　柏木にはやく別れ給ふ事なり
こよなうなさけなき人の御心にも侍るかな　夕霧の事を云なり
おほしたりしさまこれにおほくは御心もみたれにしそかしと
故御息所は大將の御事ゆへいよ／＼御心もみたれ

てはかなくなり給へると女二の宮の大將をつらきことに思給へるなり

おほやけしきさほうはかりの事を
おほやけしきはわたくしひれすさしさたまれることをいふなり

哀をもいかにしりてかなくさめんあるや戀しきなきやかなしき　雲井の雁の歌なりあるや戀しきは女二宮をいふなきやかなしきは故御息所也

いつれとかわきてなかめん消かへる露も草葉のうへとみぬ世を　夕きりの返歌きえかへる露は消のこる心なりそれとても始終草葉のうへにとまるましきあたし世の事をいへり

なをかくへたて給へる事と　雲井の雁のなを我にへたてゝ有のまゝにのたまはぬと思へるなり

おほつかなきにおほしわひて又わたり給へり　夕霧の又小野へ出給ふ事なり

北のかたの御をしはかりを　雲井の雁なり

つきせぬ御事はさる物にてきこえんかたなき御心のつらさを　夕霧のことはなり

その夜の御返さへみえ侍らすなりにしを　是は少將の君の御いらへなり其夜の御かへりは夕霧の御文の御返事のをそかりし事を御息所の心にかけ給ひし事をかたるなり

六條院の人々をともすれはめてたきためしに　これも雲井の雁の心に思給事也六條院の御思人たちはたかひに思ひあひ給て物ねたみなとをし給はぬ事を夕霧のゝ給へとそれとてもありつけたることならはさもこそあらめさるにても夕霧をはまめ人と申てこくしんなるためしめやすきあやかり物にせられ給へる人のあり〳〵てはちかましき事やあらんと歎き給ふ事なり

うへよりおつるなとやかいたまへらん
うつほの第三すみわたりけるそのあたりはひえさかもとをのゝわたりをとは川ちかくて瀧のをと水のこゑ哀に聞ゆる所なり
今案音なし川はきの國にあり音無瀧は小野山に有うつほにをとは川を小野山ちかきといへる音なしの瀧の事にや

なこりもいかてよからんなと　歌の中の詞をすんし給なり名殘は宮の御事なり

めにはみたまふてけりと　見る事は見たまへるといふ心なり

朝夕になくねをたつるをの山はたえぬ涙や音なしの瀧　宮の御手習にし給へる歌なり

きのふけふとおもふほとに三とせよりあなたの事になるよにこそあれ　みとせのあなたとはかしは木のうせてみとせになることなり

みこはいかゝものし給ふらんかういはこともなかりし人の　夕霧の返事なり女二の宮の御事は一からうにしらぬよし申給へり

かくもてさはかさらんにたになにのおしけあるへき身にてか　人々のもてさはくをしりなから忍ひかくれなとせはなか〳〵おこかましくわか〳〵しかるへし人きゝも夕霧はなにの人きゝもきゝ給ふましきとおほせは中々ほいの事もえし給はぬとなり

御はかしにそへてきやうはこをさきにたてたるかまもりかたなは女房ももつ事なり

くろきもまたしあへさせ給はて　服者のてはこなとは黒染にしてまきゑらてんなとはなきゆへなり

うらしまのこか心ちのみなん　一條の宮にかへり給ふを浦島の子か故郷にかへりしにたとへたる也玉のはこに付て浦島の子といへるなり

さすかにいとおしくもありまたしらぬはけによつかぬ　是は少將の君の詞なり夕霧の人にもことわらせんとの給ふ返事なり

ぬりこめにおましひとしきしかせたまひて　たゝみ一帖しきたる心なり

ひたおもてなへけれは　ひたおもては直に對面したるやうの心なり

さておかしきことは院の御みつからのくせをは　是も花ちるさとのかたり給ふ事なり

さなんつねにこのすちをしもいましめおほせらるゝゆふきりの返答なり

なをさりことゝは見たまひなから　ゆふきりの心也

昨日けふ露もまいらさりける物いさゝかまいりなとして　是は雲井の雁の事なり

松島のあまのぬれきぬなれぬとてぬきかへつてふ名をたゝめやは　夕きりの返歌也衣のなるゝとはしほ

れて身にまとはるゝ事をいへりされはとていまさらぬきかふへき名をはいかてかたて給ふへきとなり

なほ〳〵しやかしこには猶さしこもり給へるを　女二宮はいまたぬりこめにさしこもりて出給はぬとなり

おもふ心は又ことさまにうしろやすき物を　夕きりの詞なり

いとかういはんかたなきものにおもはされける身のほとは　夕霧のことはなり

いは木はりけになひきかたきは　いは木は木石のたとへなをまされり河海の磐城は詞艶ならざるにや

女ところにてしとけなくよろつの事ならひたり　女のよろつはからふを女所といふやまとのかみ色々にいひとゝのへなとするなり

大殿に御かたゝかへにとてわたり給ふにけるを　雲井の雁の父の大殿にわたり給ふ女御はこうきてんの女御の御事也

契あれや君を心にとゝめをきて哀と思ふうらめしときく　致仕の大臣の歌也あはれとおもふは故衛門督のかたみとおもふ心なりうらめしときくは夕霧の君にあひ給て雲井のかりを中空となす心なり

ないしのすけかゝる事をきくに　これ光かむすめ夕霧の思人乙女の巻に見えたり

かすならは身にしられまし世のうさを人のためにもぬらす袖かな　内侍のすけの雲井のかりへの歌也人のためとは雲ゐの雁のために袖をぬらすと也

「こゝにはしめて中宮とみえたり二條院の行啓あり」

廿四　御法

以歌爲卷名源氏五十一歲の春より秋までの事見えたり紫の上この秋うせ給へり

たゝうちあさへたるおもひのまゝのたうしんをこす　あさへたるは猶あされたるといふ詞と同しかるへしたとへはしとけなき心也花宴にあされたる父君すかたとあり河海にはあさき心に釋せられ侍り

けにいそのかみの世々へたる御くはんにやとそみえたる　いそのかみはふるき御くはんといふ心なり一本云けにちりのかすの世々へたる御くはんにやと

そ見えけるとあり河海にみえたり
しんてんのにしのぬりごめ　塗籠とはしんてんのひさしにかへをぬりまはし妻戸なとしてしせんの調度なとをゝく所をいふ也
みな人のぬきかけたる物の色々なとも　聴聞の衣かつきなとの體をいへるにや
まして夏冬の時につけたる御あそひたはふれにも　花ちるさとあかしの上の事をいへり
中宮この院にまかて給　明石中宮也こゝにはしめて中宮とみえたり二條院に行啓あり
東のたいにおはしますへけれはこなたにはまち聞え給　二條院の東の對を中宮の御休所にせらるなり寝殿にならへて東につくれり中門南階なとありこなたとは寝殿なり紫の上すみ給ふ
なたいめんなとをきゝ給ふにも　名謁は行啓の時あり行啓はまつしん殿へなるによりて紫の上もなたいめんに供奉の公卿なとのなのりするをきゝ給へるなり
かたく＼におはしましてはあなたにわたらせ給はんもかたしけなし　中宮の御詞なりかくの給てしはしは寝殿におはしますなり
御讀經なとによりてそれいのわか御かたにわたり給ふ　わか御方とは東の對なりそなたにて季御讀經のこと行はるゝなり
かくてちとせをすくすわさもかな　後拾遺たのむるに命ののふる物ならはちとせもかくてあらんとや思ふ
くらきみちのとふしひ　くらきよりくらき道にそ入ぬへき遙にてらせ山のはの月和泉式部
一日一夜にてもいむことのしるしこそむなしからす　一日一夜齋戒を持によりて安養界一日一夜の果報を受也往生禮讃云中輩中行中根人一日齋戒處金蓮
いにしへもかなしとおほすこともあまたみたまふへし　夕かほのうへあふひのうへのことをいふなり
野分たちて吹夕くれにむかしのことおほしいてゝ　夕霧大將の紫上をほのみ給へることは野分のあしたなり
すゝにまきらはしてそ涙の玉をはもてけち給ける　より合せてなくなる聲をいとにして我涙をは玉にぬかなん

ふしてもおきても涙のひるまなくきりふたかりて
是は源氏の君の御事なり
いはけなきほとよりかなしく　源氏の君三の年母君におくれ給ひしことなり
まちとり給ては心よはくもとめ給へきおとゝの御心さまなれは　過にしかなしさをさらにもとめて心にとゝめ給へきおとゝの御心さまなり此一段のことはゝ夕霧の大將の藏人少將に語りたる詞と見え侍り大將の君あけくれちかくさふらひ給ひてよろつになくさめきこゆると上にみえたれは藏人少將の御使の時もやかて申つかれて御返事のついてにかたり給へるかとおほえ侍り
うすゝみとのたまひし色よりは今すこしこまやかにて　妻二等三月服暇廿日也
かれはつる野へをうしとやなき人の秋に心をとゝめさりけん　紫上は春に心をとゝめ給ふ冷泉院のきさきの宮は秋を好み給へりしか只今かれはつる野へのけしきをみれはあはれなる物の人の心をつくす時なりけりと思しり給ひて紫上の秋に心をとゝめ給はさりけるはことはりなりけりと思しりたまへる心むけをよみ給へるなり
物おほえぬ御心にも打かへしをきかたく　源氏の御心なり
のほりにし雲井なからもかへりみよわれあきはてぬ常ならぬ世に　のほりにし雲井とはむらさきの上の事をいへりむなしくなるをは雲にのほるといふなり秋をあきはてぬととりなしたるは秋好中宮の御返歌なれはかくはよみ給へりさるから又紫上におくれたるも秋の時なれはいまより後いくとしをかさぬとも此世にあらんかきりは秋をわするましきとみ給へり兩方をかねたる心はせ比類なくきこえ侍り

花鳥餘情第廿三　幻　雲隱

廿五　幻

以歌爲巻名御法のつきの年源氏五十二歳の時の事也此巻にては正月より十二月まて月をかゝさす次第にのせたり餘巻には未たあらさる筆法也六條院の悲歎の事日々月々にわすれもやらす紫の上をしたひ給ふ心をあらはせるなりかほるは源氏四十八のとし生れ侍てことしは五歳になり侍へし

かなしさのあらたまるへくもあらぬに　春の光はあらたまれとも六條院の御心の内のかなしさはさらにあらたまらぬ心なり

さしもありはつましかりけることにつけて中頃　紫の上のいまたまし〳〵し時女三宮朧月夜なとに心をかよはし給ひしことなり

入道の宮のわたりはしめ給へりしほと　此一段は若菜の巻に有しことゝもなり

この世につけてはあかす思へきこともおさ〳〵あるましう　是よりは源氏の御心なり

さてうちすてられ奉りなんかうれはしさを　御前にさふらふ女房達の事なり

中將の君とてさふらふはまたちいさくより　中將の君をは二條のうへのまたおさなかりし時よりそたて給へるを六條院の忍ひてみ給しかとも中將の君ゆへにはちたてまつりて院のめせともまいりちかつかさりしを二條のうへうせ給て後此人をかたみと思ひ給へることをいへり

うなひ松におほえたるけはひ

河海にことおほくひかれ侍れとしはらく詮要をとりて申侍るへし文選に馬鬣松と書てうなひ松とはよみ侍り馬鬣は馬のたてかみのことくさきをするとにつきたるつかを云なりそのつかに生たる松をうなひ松とはいへりたとへはつかの松をなき人のかたみに見るかことく中將の君を紫のうへのかたみと見る心はせかたちなともめやすく故うへの御けはひにおほえたるといへるなり

うとき人にはさらにみえ給はす　文集上陽人　外人(ウトキ)不ㇾ見見(テハ)應ㇾ咲

鶯のはなやかになきいてたれは　聲華(ハナヤカ)　朗詠下

木のめくりに丁をたてゝかたひらをあけすは風もえ

吹よらし
唐穆宗毎ニ宮中花開一以ニ重頂帳一蒙ニ被欄檻一置惜花御史掌レ之號曰括香 今案三の宮の思より給へる御心はせは唐の穆宗の惜花御史をゝけるにことならすおほふはかりの袖もとめたる人の智恵よりはまさりたまへるとなり
いのちといふものいましはしかゝつらふへくともたいめんはえあらしかしとて たとひ命はいましはらくありとも世をそむきなばたいめんはあるましきと三宮に申給なり
みつからの御なほしもいろはよのつねなれと 紫上は七月にかくれたまへり源氏の君本妻の服をさらに着し給とも三ヶ月なるへし然るにあくるとしの春までも猶むもんの御なをしをき給へは餘哀忘かたきによりてよのつねの櫻色なれともあやをはき給はて平絹をき給へるなり昔式部卿重明親王は延喜の御門の御爲かきりある一暮の服をのそきても猶三ヶ年の間はわたくしの衣裳に綾羅美色を着せす食器も朱漆を用侍らぬ由彼記に見えたり私の心さしは法の外の事也
かくあさへ給へる 御法の巻にも此詞有
對のまへの山吹こそ 六條院の東の對は紫の上の住給し所なり
たにゝは春もとなに心なくきこえ給ふを
さきてとくちる物思ひもなしと女三宮はわか御身を卑下しての給ふと思給へともおりからなさけなき御詞なりと院は思ひ給てことしもこそあれ心うくもとおほさるゝにつけて故紫上はよろつにたかふふしもなかりしことを思給ふなり
又かうさまにはあらてかれはさまことにこそ これは二條のうへのことなり
人をあはれと心とゝめんはいとわろかるへき事と 是よりは院のあかしの上に語り給ふことなり
大かたの世につけて身のいたつらにはふれぬへかりし
須磨の浦へうつろひし時を云なり
おほしたるさまのことはりに心くるしきを 是よりはあかしの上の心ことはなり
つゐにすみはてさせ給ふかたふかうはへらむ しゝう道心さめすして世の中をすみはつる心也

すみはつるは所にしたかひてみるへし世にすみはつる心も有へし是は世のほかに住みはつる心なり

それはなほわろき御ことゝこそ　思ふ人におくれてかなしさの餘に遁世なとするはかならす末とほらぬ物なりにふきやうなれとよく〳〵心しつかに思ひめくらして道心おこすはそのまゝにとほるわさなり花山の法皇は弘徽殿の女御爲光女にをくれさせ給てにはかに位をさり花山にいらせ給しかとものちにはうき世にかへらせ給てはなやかなる御ふるまひともありしなり道心はおこりやすくてさめやすき物なるへし

さまて思ひのとめむ心ふかさこそあさきにおとりぬへけれ　是は源氏の御詞也

きさいの宮のかくれ給へりし　薄雲女院の御事也

としへぬる人にをくれて　むらさきのうへの御事なり

なく〳〵もかへりにしかなかりの世はいつくもつゐのとこ世ならぬに　源氏の明石のかたへをくり給ふ歌なり鴈をかりの世に詞をかれるなり

よへの御ありさまはうらめしけなりしかと　よへ明石の御かたへたま〳〵わたり給て夜中にわか御かたへかへり給しことなり御けしきをみ給ふに心くるしさにわかみのうらみはつきになりて御ために涙をなかし侍るよしなり

かりかゐしなはしろ水のたえしよりうつりし花のかけをたにみす　かは詞なりかりのゐしと云ふ心なりかりかねもかりの聲なり　後撰歌秋の夜にかりかもなきてわたるなり我おもふ人のことつてやするたのむのかりのかへるに源氏の君をたとへたてまつりてなはしろ水のたえしよりうつりし花のかけをみぬは明石のうへもおなし御心になりて花みん心もなきといへるなり

ふりかたくよしあるかきさまとはわかしの上をほめたまふことはなり

又さりとてひたふるにはたうちとけすゆへありて　明石の上をは院のうしろやすき方にはうちたのみ給しかとも又一かうにうちとけす心をゝき給へりし心をきてを紫の上はさも思給はさりしとなり人とは紫の上をのたまふなり

夏の御かたよりは衣かへの御さうそく奉り給ふとて　これは四月になるはしめなり

夏衣たちかへてけるけふはかりふかき思ひもすゝみやはせぬ　衣かへするにつけてけふは一入ふかき思の色もたちかへり給はぬことはあるましきと云ふ心をすゝみや𛂞せぬとよめるなり

は衣のうすきにかはるけふよりはうつせみの世そいとゝかなしき　うつせみの世はむなしき世なりは衣のうすきはせみの羽衣なりなつのひとへ衣をいふへし

くれなゐのきはみたるけそひたるはかま火さう色のひとへいとこきにひ色にくろきなとうるはしからすかさなりて　くれなゐのはかまの黄けそひたる也萱草色は服者のもちゐる色なり中將の君の主君の服をきたるなり主君の服をは一卉の間きたる故なり

いかにそやこの名こそわすれにけれとの給へは　葵はあふひ也中將の君のたはふれ給ふ詞なり

さもこそはよるへの水にみくさゐめけふのかさしのなさへわするゝ　清輔説よるへの水は社頭に神水とて瓶に入れたる水をいふと云々　定家説はよるへは緣なりたよりの水神社にかきるへからす古今歌よるへなみ身をこそ遠くへたてつれ云々このよるへおなしきよし僻案抄にのせられ侍り但源氏歌賀茂の祭の日なれは神社のかたへもかよひ侍るへきにや紫式部の心いかゝとおほつかなし中將君の歌の心はよるへの水は二條のうへにたとへ侍りみくさゐるは影たえたる心なりさりともけふのかさしの名をはわすれ給ふましきにそれさへはやわすれ給ふとよめるなり

おほかたは思ひすてゝし世なれともあふひはなをやつみおかすへき　源氏の歌あふひは草なれはつむといへり中將の君はかりにはいまた草の名をわすれ給はぬにや

千代をならせるこゑもせなんとまたるゝほとに　郭公のなく聲をまつ心なり千世をならせるはいはひ事なり

いもか垣ねにおとなはせまほしき御聲なり　是も源氏の御聲をほとゝきすになすらへていへり下の詞にひとりすみといへるはいもかかきねにつきたることなり

はのかにみし御おもかけたにわすれかたし　大將の

思ひ給ふなり
いかにおほかるなとまつおほしいてらるゝに
河海の引歌こゝには不相應如何法照禪師の五會讃云一々池中花盡滿花々惣是往生人此心にかなひたる歌あるへきなり
おまへのなてしこのゆふはへをひとりのみ見給ふは
我のみそ哀とはみるの歌によりてひとりのみゝ給とはかけり
よるをしる螢をみてもかなしきは時そともなき思なりけり　兼葭水暗螢知ㇾ夜　詠朗
大空をかよふまほろし夢にたにみえこぬ玉（魂イ）のゆくゑたつねよ　鴈の使を方士に比するなり
小忌にてあをすりのすかた　十一月中の卯の日新嘗會辰の日豊明節會には山あひにてすれる小みといふ物を着するなり一代一度の大嘗會にもかくのことし
いまはと世をさり給へき程ちかく　光源氏隱居のこと此詞にもみえたり
しての山こえにし人をしたふとてあとをみつゝも猶まとふかな

あとは筆跡事也
すまのせきあへぬかなしさ　紫の上の御文ともは須磨にての事なれはかくはかけるなり
めゝしく　やとり木の巻にも此詞あり
さか月なとつねのさほうよりも
禁中佛名の第二夜に柏梨の勸盃といふ事あり昔左近中將和氣某以ニ攝津國柏梨庄一寄ニ左近府一官人の酒料にあてたりこれによて佛名の夜左近府にて勸盃のことある也
祿なとたまはす
延喜十九年佛名導師雲晴律師賜ニ御阿古女一天暦四年佛名師淨導藏に三禮之間自ニ簾中一給ニ御衣一

廿六　雲隱

此卷は名のみありて其詞はなしもし其詞あらは六條院の昇遐のことをのすへきによりてくもかくれとは名つけ侍り幻の卷の終に越年の用意ありしか其程に六條院は頓滅し給ふをかの巻にしるせるよし紫明抄には申侍れと宿木の巻に六條院世をそむき給て二三年はかりさかの院に隱居し給へるよし

見えたれは此詞にて頓滅のことは河海にやふられおはりぬまほろしの巻にはかほる大將は五歳の時也匂兵部卿巻の始めにひかりかくれ給ひし後といふ詞あり匂の巻にはかほるは十四歳なり故にかほるの六歳より十三までの間八ヶ年の事は物語のおもてにはみえ侍らすしからは雲隱の巻の中にさかの院に二三年隱居し給てその後崩御し給ふ事を此巻に詞あらはしるすへきなり抑巻の名はかりありて詞をみぬことは天台の四教の法門を例に引たれと猶物遠き心ちし侍り俗書をもていはゝ毛詩の小雅の中に南陔白華華黍由庚崇丘由儀の六篇は名のみありて詩の詞はなしこれは逸詩といひてもとは詞ありしかうせたる也是によりて朱廣微といひし人詞をつくり入て補亡の詩となつけ文選の第十九の巻にのせたり朱晦庵は笙の詩といひて樂曲の名なれはその詞はもとよりあるへからすと釋し侍りいかさま篇の名のみありて詞なきことは雲かくれの巻の名のみありてその詞なきとおなしかるへし

花鳥餘情第廿四

匂兵部卿　紅梅　竹川

廿七　匂兵部卿

以詞爲卷名雲隱の後は薰大將の年齡をもて年記を立へし此卷にはかほる十四歲にて元服し始めて侍從に任し十九にて宰相中將といはれしまて六ヶ年のことをのせ侍り

光かくれ給にしのち　光君嵯峨院に隱居し給て二三年の後つゐに昇遐し給しことをいへり

かの御かけにたちつき給へき人そこらの御すゑ〳〵にありかたかりけり　源氏の君の容儀才能心操なとにつけてたちつき給ふへき人御子孫の中にとり出したてまつるへきかなきといふこゝろなりそこらの御すゑ〳〵とは夕霧の御子なとあまたある事をいへり

おりゐの御門をかけたてまつらんことはかたしけなし　これは冷泉院の御事也源氏の御子といふ事此詞にも見えたり

當代の三の宮とおなしおとゝにておひいて給し宮のわか君と　三の宮はにほふ君也宮のわか君はかほるなり二品の宮の御腹なるによて宮の若君といへりともに六條院にておひいて給へる也三宮は源氏の御孫宮の若君は御まゝ子なれと系圖には御子のつらにかきのせ侍也

いにしへの御ひゝきけはひよりは　源氏君のきりつほの御かとの御時の御もてなしよりはまされるといへり

女一宮は六條院みなみのまちのひんかしのたいを　女一宮は東宮と御一腹むらさきのうへにやしなはれ給て六條院の東のたいにその世の御しつらひわらためすゝみ給へる也

二宮もおなしおとゝのしんてんを時々の御やすみ所にし給て　二宮も東宮の御一腹梅つほを御曹司にて時々六條院の寢殿を御やすみ所にして夕霧右大臣の中の君をむかへ給へると也

つきの坊かねにて　今の東宮御位につかせ給はゝこの二宮又坊にたち給ふへき也かねはきさきかねなといふかことし

おとゝもなにかはやうのものと　やうの物は樣の字也ためしともよめりうつはものに樣器といふは本樣の器也正本のあるにつきていへる也おなしやうの物といふその心たかはすたとへはそのやうにといへるかことし上の詞によりて見かゆへき也

六の君なと　夕霧の御女藤內侍のすけの腹なり　宿木卷にほふ宮の北方になり給へるなり

さまく\つとひ給へりし御かたく\　六條院につとひ給し源氏の御思人たちをいふ

うしとらのまちにかの一條の宮をわたし奉らせ

花散里のすみ給し所なり花散里は東院へうつりすみ給ふによりて落葉の宮をうつしすませ給へるなり

三條殿と夜ことに十五日つゝうるはしうかよひすみ給けり　夕霧のおとゝの雲井の鴈と落葉宮と十五日つゝかよひすみ給ふことなりうつほの物語樓の上の卷云左のおとゝは宮のおほい殿いとうるはしうこそ十五夜つゝおはしつゝ云々

たゝひとりの御すゑのためなりけり　明石の中宮の御事なり匂宮は二條院にすみ給ふ女一宮は六條院の春のおとゝにすみ給ひ二宮らおなし寢殿にすみ給ふなり

春の櫻けになかゝらぬにしもおほえまさるものとなん　古今　殘なくちるそめてたきさくら花ありて世中はてのうけれは

きさいの宮もみこたちなとおはせす　秋好中宮の御ことなりかはるの御うしろみをし給なり

十四にて二月に侍從になり給ふ秋右近の中將になりて　かほる元服し給て十四の年の二月に侍從に任す中將には十六歲にてなり給へるよし末の卷に見えたりこゝの詞に同年のやうに書たれとも昇進の次第をかうかへ侍れはまことは十六の秋の除目に中將に任し給へるなり

御たうはりのかゝいなとをさへ　御たうはりとは冷泉院の御給年官年爵の事なり叙位の時に院の御給にて四位の加階し給ふといふ心なり

おはしますおとゝちかき對をさうしにしつらひなと冷泉院の中に對をかほるの御曹司にし侍るなり

こちしのおほい殿の女御ときこえし御腹に女宮たゝ一所おはしけるをなん　冷泉院の女御こうきてんときこえしは致仕の太政大臣の御女なりその御腹に院の御女たゝ一所おはします女一宮と申此宮をかしつき給ふ御ありさまにおとらすかほる中將の君をあつかへ給ふなり

きさいの宮の御おほえとし月にまさり給ふ　秋好中宮の御おほえの年月にまさり給ふにくらぶれはかほるの御おほえはさしもなきとおもはるゝとなり

はゝ宮は　かほるの母宮也

くい太子のわか身にとひけるさとりをもえてしかな　耶輸陀羅をは然灯佛の出世の時瞿夷女といひし故也羅睺羅のわか身にとひけるさとりとは別の因縁あるへきにやしからすは法華會上にいたりて二乘成覺のさとりをひらきて未來の記莂をさつけ給し時我爲二太子一時羅睺爲二長子一我今成二佛道一受レ法爲二法子一と偈を説給へるにて佛の御子とはさたまれることを我身にとひけるさとりといへるにや

おほつかなたれにとはましいかにしてはしめもはてもしらぬ我身は　かほるの心に思侍るやうは六條院の御子と思へはさもなきといへるはしめをしらぬなりかしは木の子といはんとすれは六條院の御子のつらに世に用ゐられ侍るこれ又はてを知らぬなり又按に無始無終の道理心地の法門にかなへれは我身にとひけるさとりといふに相應せる詞なりすなはちこの下にいらふへき人もなしといへるも法門にいひなせは誰能答者といへる心なり

わかみにつゝかある心ちするも　つゝかは恙の字をつゝかとよむ人の心をくふ虫をいへり病の心也

きさいの宮はたもとよりひとつおとゝにて　このきさいの宮は明石の中宮の御ことなりひとつおとゝはかほる中將とおなしく六條院にておひいて給ひし事なり

つゐにさる世のみたれもいてき給へかりしをも　桐壺の御門の朱雀院の東宮をひきこして六條院を坊に立ておはしますへき御心むけのありしことをいふなり

かりにやとれるかともみゆることそひ給へり　佛菩

薩のしはらく託胎して人界に生することを云なり
ものゝくまもしるきほのめきのかくれあるましきに
ものゝかくれもしるく木の間の月のほのめきたる
ことくにかほるのたちより給へる所は露にてもし
らさる人あるましきことゝろなり
袖ふれ給ふ梅の香は春雨のしつくにもぬれ
古今色よりも香こそあはれとおもほゆれたか袖ふれし
宿の梅そも　六帖にほふかの君おもほゆる花なれはお
れるしつくに我そぬれぬる
すくれたるうつしをしめ給ひ　うつしはたきものを
いふなり
おさ〳〵御心うつし給はす　給はすは給ふと云心也
老をわするゝきく　古今露なから折てかさゝむ菊の花老
せぬ秋の久しかるへく
ものけなきわれもかう　狭衣むさしのゝ霜かれにみしわ
れもかう秋しもをとる匂成りけり
ひとつ院の中にあけくれたちなれ給つゝ　薫中將と
女一宮とおなし冷泉院にたちなれ給ふなり
われから人にめてられんとなり給へるありさまなれ
は　かほる中將の生得の身香をのつからみる人こと
にめてさるはなきをいふなり
御むすめたちをひとり〳〵いと心さしたまひなから
右のおとゝわか御女をにほふにもかほるにもむこ
とりたくは思ひ給ふとなり
ゆかしけなきなからひ　いつれも夕霧のはなれぬ御
中を云なり
いといつくしうはもてなし給はす　さのみおくふか
ういつくしうはもてなし給はて此君たちにはわさ
とはなくてみせ奉らまほしく思給ふ也
のりゆみのかへりあるしのまうけ　正月賭弓はてゝ
かちの方の大將里第にして還饗といふ事を行ふな
り此時夕霧右大臣左大將にて六條院にて是を行ふ
まけかたの人はかならす早出する例なりかほる宰
相中將は右の負方なり
四のみこ常陸の宮　皆當今の御子なり五宮又同
しん殿のみなみのひさしにつねのこと南向に中少將
つきたり北向にむかへにみこたちかんたちめの御座
あり　ひさしの座中少將は奥の方につき親王公卿は

端につく是をは垣下の座といふ中少將を饗應する請伴の心なり

もとめこまひてかよれる袖とものうちかへすはかせに　かよるは袖をひるかへすなり一本とりのうちかへす羽風とあり還饗の時求子將監以下舞也

みたれぬさまにおさめたるを　かほる中將しつほうふりしたるをいふなり

にくからぬほとに神のますなと　神のますは求子の二段なり右のすけはかほるの聲くはへたるなり此結句は若菜下卷のおなし筆法也

並一　紅梅

以詞爲卷名匂兵部卿の卷にはかほる宰相中將と見えたり十九歲の正月の事をしるせり此卷には源中納言といへり同十九歲の秋なり故竪の並なるへし又宇治の八宮の姫君に心をかよはし侍ることこの卷の末にみえたり椎か本の卷と同時のことなるへし

のちのおほきおとゝ　右大臣清原夏野公小倉王の第五男なり　號二並岡大臣一又號二野路大臣一並岡は仁和寺にあり嵯峨野の路なるによて野路といふにや

こ宮の御かたみに女君ひと所おはす　まきはしらの君ほたるの兵部卿に具し給ひし時女宮一人まうけ給へりのちに匂宮の心つくし給よしみえたり紅梅の大納言にそひ給てはこの御はらに男君一人まうけ給へるとなり

このわかきみをうちにてなとみつけ給ふときは　紅梅大臣子息まきはしらの腹のわか君なりこれと匂君たはふれ給へるなり

かすかの神の御ことはりもわかよにやもしいてきて源氏のうちしきり立后のことは乙女卷若菜下卷にしるしをはりぬ春日の大明神の御うたへのことは後朱雀院の御宇長曆三年四月春日明神被レ訴二申太神宮一云度々官幣不レ請レ之依レ非二藤氏皇后一也依レ是內大臣教通公　一女可二入內一之由被二宣下一之其年十二月內大臣女眞子入內爲二女御一今案長曆の訴は物語以後のことなりしかるに物語にのせたる事おほ

つかなしもし度々に及て御うたへのこと有りしやらん

こおとゝの院の女御の御ことをむねいたうおほして

やみにし　致仕のおとゝの御女院の女御にて弘徽殿ときこえしかとも秋好中宮にをされ侍て立后の事なかりしをむねいたく思給へりし事なり

わさとうるはしきみつらよりもいとをかしく　殿上童は束帯の時總角すこれをみつらといふとのゐすかたは直衣をいふその時はみつらにはゆはすたゝときかくるなり

れいけいてんに御ことつけきこえ給ふ　東宮の女御事なり

ふるめかしきおなしすちにてひんかしときこゆなるは　ふるめかしきは故兵部卿宮のひめ君のこと也紅梅のさきたる東のかたにすみ給ふなり

この花をたてまつれは　ふところかみにとりそへたる歌なり

花もはつかしくおもひぬへく　匂宮の袖の香をいへるなり

しらす心しらん人になとこそきゝしか　信明集　色も香もまつ我宿の梅をこそこゝろしれらん人は見にこめ

この君もひんかしのをはやむことなく　匂君はひんかしのひめ君をは思ひましたまふとなり

右のおとゝもわれらか見たてまつるには　夕霧のおとゝ又われらとは紅梅大納言なとの見たてまつる時は匂宮のまめたち給ふかおかしきとなり

もとつ香のにほへる君か袖ふれは花もえならぬ名をやちらさん　兼輔集　もとつ香のあさたにあるを梅の花いとゝにほひのそはりぬるかな

人はなをとおもひしを宮のふとおもほしよりて　人はなをわか君の御にほひと思ひしなり宮は東宮御事なり

梅はおひいてけんねこそあはれなれ　梅は根よりかうはしき花なりこれを源中納言にはたとふるなり花はかりかうはしきをは匂宮によそへたてまつるなり

宮の御かたは物おほしゝるほとに　こうはいの東の

ひめ君の御事なり

並二　竹河

以歌幷詞爲卷名此卷に薫大將を四位の侍從十四五はかりといへり薫は十四の年二月に侍從に任せるよし匂の卷にみえたれはそれより後のことを此卷にいへりさて又此末にかほる中納言になり侍ることをしるせり中納言には十九の年任せるよし椎か本の卷にみえたりしからは十四より十九まて六年の事をこの卷にしるせるなるべし匂の卷も十四のとし侍從といひしより十九のとし宰相中將といへるまての事をかけりこれも六年のことをのせ侍りこれをもていへは此卷は匂兵部卿の卷には横の並なるへし但此卷には十九のとしの秋やかて又中納言になれることをしるせり匂の卷には中納言の事はみえされは十九のとしの秋よりは竪の並にあたれりといふへし此卷の末と紅梅の卷とはかほるを中納言といへは竹河の末は紅梅の卷と同時なりといふへし

これは源氏の御そうにもはなれたまへりしのちのおほい殿の　のちのおほい殿はひけくろのことなりさきの卷にみえたり御そうは御孫なりひけくろのおとゝは源氏の御子孫にはなれたりといふ也玉鬘のないしのかみの源氏の御子にあらさるゆへ也

わるこたち　わろき女ともなり人もとはぬにいふをとはすかたりとはいふ

むらさきのゆかりにもにさめれと　むらさきのゆかりとはたとへは匂兵部卿宮女一の宮なとはあかしの中宮の御はらなれと紫の上のやしなひ申されしことをむらさきのゆかりとはいへりかやうのことはさらにまきれぬことなれはわるこたちのとはすかたりはそれをいふにはあらしといへる事にさめれとゝはかけるなり

源氏の御すゑ〳〵にひかことどものましりてきこゆるは　このひか事といふはたとへは冷泉院はきりつほの御門の御子と系圖なとにもつゝり侍れと誠は源氏の君のうす雲の女院に通し給てまうけ給へるをいふことあり其事を匂の卷の始に光かくれ給にし

後かの御かけにたちつき給へき人そこらの御すゑ〳〵に有かたかりけりおりゐの御門をかけたてまつらん事はかたしけなしとありこのおりゐの御門は冷泉院の御ことゝ也又玉かつらの君は致仕のおとゝの御むすめなれと夕かほのうへのことによりて源氏の御子のつらにあつかひ給へり又かほる大將は女三の宮のうみ給ひ侍れはをしなべて源氏の御子のふんに系圖なとにものせ侍れと誠はかしは木の衞門督のたねをまきけるいはねの松といへりこれらのことをひかことゝものましりてきこゆるとはかけるなりさりながらたしかに人のしらぬことなれは人のひかおほえにやなとおほめきてかきなせり此一たんのことは心詞あひかねて凡慮をよひかたし河海の說あやまれりといひつへし

あへなくうせ給にしかは夢のやうにて　うせ給ふはひけくろのおとゝのことなり

かうのきみの御ちかきゆかり　ないしのかみのちかきゆかりは致仕のおとゝの一家のことなり紅梅の大納言なとの事なるへし

むとくに　無德なりおとろへたる心なり

くたされて　腐なり又下なり「女房の心なり」

六條院の御すゑにすさく院の三宮の御はらにむまれ給へるきみは　これはかほる大將のことなり十四にて元服して侍從に任なり

この殿はかの三條の宮といとちかきほとなれは　この殿はひけくろの大殿の御所なり三條の宮は女三の宮のおはします所なり

かの君もさるへき所に　藏人少將のことなり

かんの君の御はらからの大納言　紅梅のおとゝこの比大納言なり

藤中納言こ大い殿の太郎　藤中納言は鬚黒の御子母はまきはしらにひとりのはいかけし人式部卿の宮の御女なり

今はかく世にふるかすにもあらぬやうに　玉かつらの內侍の上の返答の詞なり

內におほせらるゝこともあるやうに　これは夕きりの詞なり「大內よりひめ君をとなり」

女一宮の女御　冷泉院の女一宮の御母女御こきてんはないしのかみのあね君にあたるなり

このとのゝ左近中將右中辨侍從の君なとも　これは

みなひけくろの御子達なり右のおとゝの御ともして三條宮にまいり給ふなり中將と右中辨とは下の棊のけんその所にいへる人なり
ゆふつけて四位の侍從まいり給へり　ゆふつけてかほるの君ないしのかんの殿へまいり給ふをいふこれよりは三條の宮のことにあらさる也
よそにてはもき木なりとやさたむらん下にほゝゑむ（にほへるイ）梅のしつえを（初花イ）「薫也」俊成卿 枯れはてゝもき木になりしむかしよりたきすてられし日をそかそふる我といへはあたこの山にしほりするもき木の枝のなさけなのよや　今案もき木は枝も葉もゝきたてたる心なりほゝゑむは笑なり花の開をは笑と詩なとにもつくれるなり
さらは袖ふれて見たまへといひすさふるにまことに色よりもとくちくヽひきうこかしつへくさまよふ
さらは袖ふれてみ給へは薫の詞なりまことに色よりもといふは後達の返答なり古今一首の歌の心をもていへりかほるはそのかうはしきことたくひなきによりて色よりもといへりとりあはせて妖豔にきこえ侍り
おとゝはねひまさり給まゝにこ院にいとようこそおほえたてまつり給へれ　おとゝは右のおとゝを申こ院は六條院の事なり
めてくつかへる　めては感なりくつかへるは覆なり反覆は人を再三感するなり
侍從の君まめ人のなを　かほる侍從なり
まへよりおなしなをしすかたなる人たてりけり　まへよりはさきよりといふ心なり藏人少將のことなり
女のことにてりよのうたいとかたうもあはせぬを呂は陰也女も陰なれはえたりかほにあはせぬ心にや又呂は双調なりそのこゑたかきによりて下こゑにあはするをかたうもあはせぬといふにや「一本には律の歌とかけり」
かたみにゆつりてゝふれぬに　源侍從藏人と少將とたかひにゆつりてかきあはせぬとなり
こちしのおとゝの御つまをと　かほるはかしは木の子なるによりて祖父のおとゝのつまをとにかよふにや

つめかくすへきことにもあらぬを　つめかくすははちたる心なり又ことにつきてつめかくすへきにもあらぬと云にや

ことふきをたにせんや　言吹は男踏歌にあることなり

たけかはをおなしこゑをいたして　おなしこゑとは以前の梅か枝此殿とおなし呂の歌をいふにや

なにそもそなとさうときて　細長を源侍從の君の纒頭にいたしたるをこれはなにそもそとてあるしの侍從にうちかけていそきいてたるなり

みつむまやにてよふけにけり　水驛のこと初音の卷にしるし侍り

たけかはのはしうちいてし一ふしにふかき心のそこはしりきや　はしうち出し一ふしは竹河の曲をうたひしことなりはしは竹にも川にもよせある詞なり

みつむまやをなん人々とかめきこゆめりし　源侍從のよへのふるまひを人々あやしかると也

その程十八九はかうにやおはしけん　姫君中の君なとのことなり

廿七八の程に物し給へは　中將と辨の君との事也

さくらをかけ物にて三はんにかすひとつかち給はんかたに　宋朝に王荊公といふ人鍾山にありて薛秀才と碁をかこむ梅詩一首をもて賭とす秀才まけて不ㇾ能ㇾ作ㇾ詩王荊公代て作れることあり後代のことなれと花を賭にすることあひにたるにや

さくら色のあやめもそれと見えわきつ　あねきみはさくらのほそなかをき給へるよしみえたりさてあね君のことをこゝにはいへり　「嫡君のこととみえたり」

こまのらんさうをそしやなと　高麗樂は右なり競馬なとにもかちのかたに亂聲をすれは右かたせ給ふによてかくいへり

にしの御まへによりてはへる木を左になして　櫻の木は二本なからにしの御まへにあるをひめ君の左の木にとりわけてとし比御あらそひ有つるかつゐににしの御木になりたると云心なり

心せはけにこそみゆめれなといひおとす　花をかせにまかせしとおほふはかりの袖はあまりに心せはきとまけかたより右のかたをいひくたしたゐ也

藏人の少將はしぬはかり思て北きたの方をせめたてまつれは　藏人少將の母雲井の鴈は玉かつらのないしの上のあねなり

このまへ申もあまりたはふれにくゝいとをしと思ひていらへもおさ〳〵せす　このまへ申は藏人少將の心はひとへにひめ君をと思へるをいとをしと中將のおもとも思へとも我まゝならぬことなれはいらへもせぬとなり

つらきもあはれといふ事こそまことなりけれ　「世俗に人のつらきはみめやすきといへる心にや」人のつらきはいかにもつらかるへきかゝへりてあはれなといふはわかれの古歌の有へきにや古今歌心たちかへりあはれとそおもふよそにても人にをおきつしら浪この心なとやかなふへからん

かのなくさめ給はんさま　いもと姫君の事なり藏人少將思うつろふへき心のなきよしは上にみえたり

この夕くれのこのけんそなりけんに　侍從の君の御碁の見證せし夕くれよりかゝる思ひはあやにくになりたるをいふなり河海にはあらはにみしことにいへり「題證なり」

むかひ火つくれは　火のつきたるにはこなたに又火をつくれはむかへの火はかならす消るをむかひ火といふそのことく人の腹をたつれはこなたに又腹をたてかくれは人のはらはたてやむなり

めくはせたてまつらましかは　目くはせて碁の手ををしふる也

けふそしる空をなかむるけしきにて心は花にうつりけりとも　中將のおもとの藏人の少將の返事也日ころの思かなはすしてことかたに思うつろふ心をよめる歌也さてたはふれにのみとりなすいとをしきといへり

藏人の少將のきみれいの人に　例の人は中將の御許也

おとゝきたのかた　是は藏人少將のおや二人をいふなり

ゆゝしきかたにてなんほのかに思しりたると　世のつねなき事を思しると也

いける世のしには心にまかせねはきかてやゝまむ君か一こと　君か一ことは姫君の歌のつねならぬ世の一こととあるをいふ也いきしにもわか心にまかせ

ねはしねといふともしなてやあちんといふ事をき
かてやゝまむとはよめるなり
てにかゝる物にしあらは藤の花松よりこゆる色をみ
ましや　松よりこゆるは末の松山波こゆる心をおも
ひよせたり
紫の色はかよへと藤の花心にえこそかゝらさりけれ
ひめ君は藤侍從のせうとなるゆへなり
うちにはこおとゝの心さしをき給へるさま　內裏よ
り御とかめあるやうは故大臣殿うちまいりをせさ
せんなとあらく申されけるなるべし
ふた所して申給へは　中將と辨の君となり
この四位の侍從右のかくとうなり　一本歌頭なり
わた花　綿にて花をつくれりかさしのわた同事也
きさいの宮の御かたに　あかしの中宮なり
さか月にもさしてひとりをしもとかめらるゝは　藏
人の少將にとりわけさけをしいらるゝをめいほく
なきといふなり
かつらのかけにはへるにはあらすやありけん　雲の
うへちかくてはさしも見えさりき藏人少將院にて
は別に見えしかゝつらのかけにはへる事のありし
とみえしとはひげくろのひめ君の簾中にて見給し
ゆへなりさて雲の上にてはさしもみえさりきとい
へり
やみはあやなきを月はえはいますこし心ことなりと
古今 春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えね
香やはかくるゝ月はえは月華也
今案これはかほるの事をいふ色こそ見えね香やは
かくるゝの心なり月はえは花の色の月にはえあひ
て今一しは見所ありしとほめたる詞なり
故六條院のたうかのあしたに女かたにてさそひせら
れける　女樂事なり
おほやけいとかたうし給ふ事なりけれは　かたうは
難なりおほやけ事はやすからぬこゝろなり
さるいみによりとみやす所にも　さきの內侍のかみ
の院へまいり給はぬはさるいはれのあるを御女の
みやす所はしり給はてうらみ給ふなりいみとはは
かることを云なり
左大臣の御むすめをえたれと　竹川の左大臣系圖

なき人なり

この二三の御そうよりほかの　夕きり紅梅のおとゝかはる中納言なとなり

さたすきにたる身のうれへ　さきのないしの上の身のうれへとは下に院の御やす所の事をうれへ給ふ事なり

たいめんなくてはたさすかにくた／＼しきことになん　入つてにはくた／＼しきことは申されぬほとにたいめんのついてをまちたるよしの給ふなり

おほい殿はたゝこの殿のひんかしなりけり　おほい殿は紅梅の右大臣の殿なりひけくろの殿の東にあたれり右大臣の大饗行ふとて人々あまたあつまり給ふをちか／＼にてきゝ給ふなり

兵部卿宮左大臣殿のゝり弓のかへりたちすまひのあるしなとに　左大臣のゝり弓すまひのかへりあるしなとに兵部卿の宮の出給ふを例として右大臣の大饗に請申給へとも出給はぬとなり

となりのかくのゝしりて行ちかふ　ひけくろの御所にてとなりののゝしるをとをきくなり

かくのみくるしきゝんたちの世中を　物思ふことのみくるしきなりみるかくるしき心なり

つかさくらゐをはなにともおもへらすすくしいますからふや　このきんたちはつかさ位につきては思ふことなきなりすくしいますからふやはすくしましますとなり

故殿おはせましかはこゝなる人に　ひけくろの御子たちもむかしならは官位のことにはおもふことなくてかゝるすさひわさに心をそみたらましとなり

右兵衛のかみ右大辨にて　髭黒の子左中將は兵衛督になり右中辨は右大辨になるいまた非參議にて八座にたにならすこれをうれへなけくなり

侍從といひしそゝのころの頭中將ときこゆる　藤侍從もそのころやう／＼頭中將になりてとしの程にあはすれは昇進しをくれたるとなり

花鳥餘情第廿五

宇治　橋姫　椎本

宇治卷

或抄云此物語はしめ桐壺よりをはり夢の浮橋まて五十四帖なへては式部かきたるよしを思へり或人の申侍るは宇治十帖はむすめの大貳三位かけり其證據あきらかなり云々まことにても侍らは班彪か史記をかきさしたるをその子班固かきつきたるに相似たるへし（大貳三位は右衛門佐藤宣孝か女賢子後一條院御乳母叙三位也）抑應神天皇と申は宇佐宮八幡大菩薩におはします其御子このかみを大鷦鷯のみこと申御おとうとを菟道稚子と申けり父みかとうちわか子をやことに愛子におはしましけん東宮にたて奉らせ給ひてけりその後みかとかくれおはしましにけれは東宮位につかせ給ふへきをいかてわれこのかみをゝきたてまつりては位につかん大さゝきのみこはやく位につかせ給へと申たまひけるをわれはこのかみなりともうちわか子を先位にとおほしめしけれはこそ太子にはたてまつらせ給ひけめいかてかちゝの御心をはたかへたてまつらんとてわれは難波におはしましにけり又うちわか子も宇治にこもり給ひにけりそのほとに國々のあまともみつき物をもちてうちにもてまいれは天皇にあらすなにはへもてまいれとおほせられけれは難波へもてまいれは又宇治へもてまいれとおほせけれはあちこちもてまいるほとになにもくち損しけれはあまともゝをのか物から袖をなんぬらしけるかくて三年をへけるほとにうちわか子のたまはく我このかみの王の心さしをたかふへからすひさしくいきて天下をわつらはさんやとてわさとなるやうにてかくれ給ひにけれは大さゝきのみこ聞きたまひて難波よりいそきおはしましていかてわれをすてゝさきにはたち給ふへきそいそきかへり給へと棺にむかひてかなしみ給ひけれはうちわか子いきかへり給ひておきゐ給て申たまはくこれは天命なりかきりあることなりいかてかとゝまらんと申給て又棺にふしてつゐにうせ給ひにけれは大さゝきのみこ素服してかなしひ給て宇治山のうへにみさゝきなとし給ひてそのゝちなん大さゝきのみかとつゐに位につき給ひにける是を仁徳天皇と申也宇治といふ名は山城の國の郡の

名也やかて里をもうちといへり是は昔よりの名なれは神功皇后の御世の歌の詞にもたな上すきてうちにとしへつとよめりこの所にすみ給へるによりて宇治わか子とは申侍る也今昔物語の宇治のうはそくの宮と申は桐壺の御門の第八の宮なり御母は左大臣の女と見えたりその御おとうと冷泉院（第十の御子也）東宮にまし〳〵し時朱雀院の母后大きさきと申侍るまし〳〵き此后わか御むまこの東宮を冷泉院にひきこされ給へるをほいなき事におほしめしてせめてのはかり事にこの八宮をとりたてもてかしつき給へりけるを六條院の御いきほひにをされ給て其こともとけすなりてそれより六條院とも此八宮御中そは〳〵しくならせ給てけれは中々より所なくて年月を送り給へるに京の御家さへやけにしかはうちといふ所によしある山里の有けるにうつろひ給へれは宇治のうはそくの宮とは名つけ侍るなり昔のうちわか子はこのかみに位をゆつりてうちにこもり給へり此八宮は御おとうとに東宮をこされてうちにかくれ侍る事ことなるやうなれとそのほいをとけすして世をうち山に名をのかれ侍るそのあとあひにたるうへともに兄弟の間のことなれはかた〳〵に宇治の巻とは申つたへ侍る也

橋姫宇治一

はし姫は歌の詞をもて巻の名とせり薫中將十六歳より十八歳までのこと此巻に見えたり匂兵部卿紅梅竹河等の巻とおなし時のことなり

その比世にかすまへられ給はぬふる宮おはしけり

その比とはいつれの時分をさためてみるへきことそや此巻にかほる中將の宇治にまうて給へることをいふとて宰相中將とかき侍り又紅梅のおとゝをも藤大納言といせ侍り是にて見侍る時はかほるの十六歳の時なるへしいかさまうはそくの宮のうちへうつり給てよりのちのことをその頃とはいふへきなりかすまへられ給はぬとはきりつほの御門の御子の數にかすへられ給はぬといふ心なり

はゝかたなともやむことなく物し給てすちことなるへき、これよりはまつもとのことを云ふなり八宮の御母は左大臣の女とみえたりすちことなるへきとは一流をことにとりたてゝ相續あるへきやうなり

父御門の御おほえにてありしとなり
時うつりて世中にはしたなめられ給へける　六條院
とうはそくの宮と御中そは〳〵しくなりしことを
いふなりはしたは半の心なりはしたなきとは物の
こは〳〵しくおそろしきことをいふ上にかすまへ
られぬといへる心なり
おなしさまにてたひらかにはしたまひなから　おな
しさまとは此度も又ひめ君のむまれ給へることを
いへりこの姫君はにほふ兵部卿宮にむかへられ給
てわか君なとまうけ給へり
いてやおりふし心うくなと　いてやといふ詞古今集
の歌　いて我を人なとかめそいて人はことのみそ
よきなとありいてはさてもなといふやうなる詞な
り
いたはしくやむことなきすちはまさりて　これはい
もうとひめ君の事なり
れいの人のさまなる心はへ　男女のみちのことをい
ふなり
池の水鳥とものはねうちかはしつゝ　水とりもさへ
つるは春の心あるなり又鴛鴦は雌雄はなれぬ鳥な
り一がしぬれはいま一もやかてしぬるといへり杜
子美詩にも鴛鴦不ニ獨宿一とつくれりうはそくの宮
北のかたにはなれ給て水鳥のつかひはなれぬをう
らやましく見給ふなり
うちすてゝつかひさりにし水とりのかりのこの世に
たちをくれけん　此歌は姫君たちの御事をよみたま
へりさてかりのこの世とはつゝけ侍りかりの子は
かものこをいふうつほの物語第二さいしやうめつ
らしくいてきたるかりのこにかきつゝ「かひの中
に命こめたるかりのこは君かやとにてかへらさら
なん」兵衞たまはりてあて宮にすもりになりはし
むるかりのこ御らんせよとてたてまつれはあて宮
くるしけなる御物ねかひかなとの給ふとあり
源氏の御おとうとに八宮とそきこえしを　こゝには
しめて八宮のけいつのやうをかきあらはし侍り物
かたりなとをつくるにはしめよりしたいにかきつ
ゝくるは無下に見所すくなきなりさきをのちのち
をさきにかくはつくりさまおもしろくみゆるな
り
いとゝ山かさなれる御すみかに　六帖五月よみの光

にきませ足引の山かさなりてとをからなくに
すなとり人
漁說文云捕魚也海にかきるへからす河にも湖にも魚とるをはすなとりといふなり
この宇治山にひしりたちたる阿闍梨すみけり　古今集喜撰法師歌わか庵は都のたつみしかそすむ世を宇治山と人はいふなり或書云喜撰法師隱ニ居宇治山ニ持ニ密咒ニ食ニ松葉ニ得ニ仙道ニ云々後冷泉院御宇永承七年に頼通公宇治の別業をすてゝ寺になして平等院となつく後に阿闍梨四口を申よせて慈覺知證の兩門徒を補せしめ侍り
心はかりはゝちすのうへに思ひのほりにてりなきいけに　拾遺けふよりは露の命もおしからす蓮の上の玉とちきれは 實方 一たひもなむあみた佛といふ人の蓮の上にのほらぬはなし 空也上人
そくひしりとかこのわかき人々つけたなる　東坡山谷なともみつから有髪僧在家僧なと詩にも作れり
宰相中將も御前にさふらひ給て　宰相中將はかほる大將のことなり
いとおもしろくかうさくになんこくらく思ひやられ侍やとこたいにめつれは　かうさくは還迹なりこゝにはすくれたる心にいへりこたいは古代なりふるめかしき心なり極樂の歌舞の菩薩の事をいへるなり
この院のみかとは十のみこにそおはしましける
雅明親王は宇多天皇の第十の御子なり御母は京極御息所なり御出家の後の御子なるによりて延喜の御子になしまいらせられたるといへり
なにこともあかぬ事はあらしとおほゆるみのほとに
あかぬことはあらしとは萬事に不足なる事なくたらいたる心なり
のりのとも　法の友なり
おもひしやうにうはそくなからおこなふ山のふかき心　優婆塞は梵語唐土飜して近事男といへり俗なから佛の道を修行する人なり佛の四部の弟子のその一なり賀茂役公小角年卅二にして家をはなれてかつらき山に入て藤の皮を衣とし松のはを食として孔雀明王の咒をみてゝつゐに仙術をえて鬼神をしたかへ侍り是を役優婆塞となつく山伏の行はこれよりはしまれりとなん 六帖うはそくかおこなふ山

のしゐかもとをなそは〳〵しとこにしあらねは
けはひいやしくこと葉たみてこちなけに　こちなけには無骨なり俗におもひやりなきことをはふこつなるといひならはし侍り
よき人は物の心をえたまふ　よき人とはたとき人をいふいやしきもよきもと歌によめるも貴と賤とをいふなりたとき人は智慧ありて物の心をはやくさとる故なり河海の説あやまれるなり
かはのこなたなれはふねなともわつらはて　いまの橋寺のあたりなるへし
しけきの中をわけ給ふに　しゐかもとの巻に云はるけき野へをわけ入給へる心さしなとも思しりぬへし宇治にも野のあるへきことは證文をほかにもとむるに及はす
山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろき我なみたかな　俊成卿歌あらし吹みねの木の葉の日にそへてもろく成行我なみたかなこの源氏の歌をとりてよみ侍り
あふきならてもこれしても月はまねきつへかりけり
招月といふことは丶詩なとにもつくれり入日をかへす撥といふこともあれは月をまねくとはいへる心しかるへし
をよはすともこれも月にはなる丶物かは　琵琶の撥をおさむるあなをは隠月といふふくしゆのしたにあり上に雲かくれたる月といひて隠月のことを思ひよせ侍る心詞たくひなく面白くきこえ侍り
むかし物かたりなとにかたりつたへて　住吉物語に姫君の琴ひき給ふを中將きゝつけ侍ることとみえたり又うつほ第四月おもしろき夕暮八宮（君イ）いま宮ひめ宮みすまきあけて琴ともひきあはせあそひ給ふことあり
御心のうちはなに事もすゝしくをしはかられはへる
拾遺廿　さゝ波や志賀のうら風いかはかり心のうちのすゝしかるらん　公任
故大納言の君の御めのとに侍しは辨かはゝになん侍し　故大納言はすなはち右衛門督同人なりこの老人は辨君といふ人なり
みねの八重雲おもひやるへたておほく　（後撰）白雲の八重にかさなるをちにても思はん人に心へたつな
おもひやる心はかりはさはらしをなにへたつらん

みねの八重雲 平幹
あしろは人さはかしけなるされとひをもよらぬにやあらん　内膳司式云山城國近江國氷魚網代各一處其氷魚始二九月一迄二十二月卅日一供レ之
今案あふみの田上のあしろにもれたる氷魚を山城の宇治にてとるといふなり
はしひめの心をくみてたかせさすさはのしつくに袖そぬれける　宇治はし姫は橋下の姫大明神と申神也離宮の神この姫神にかよひ給ふと云説あり又一説住吉大明神の宇治の橋下にかよひ給ふといふさむしろに衣かたしきの歌は住吉大明神の御歌といひつたへたり　六帖　むは玉のよむへはかへる今夜さへ我をかへすなうちの橋姫 家持
なにかそのひをむしにあらそふ心にて　郭璞詩借問蜉蝣輩寧知二龜鶴年一
かとりのなをしさしぬき　むかしは公卿も直衣に平絹を用たるへし
かたへはみねの松風もてはやすなるへし　後撰なつの夜ふかやふか琴ひくをきゝて　みしか夜のふけゆくまゝにたかさこのみねの松風ふくかとそきく 兼輔
ふち衣たちかさねかなしきことを　辨の君かしは木の服と母の服とを着したることをいふなり
としころよからぬ人の心をつけたりけるか人をはかりこちて　辨の君か人にはかられてつくしのかたへくたりしことをいふはかるはたはかられたることなり
さゝやかにをしまきあはせたるほくとものかひくさきを　かひくさきはかひてふるくさきをいふ也
めのまへにこの世をそむく君よりもよそにわかるゝ玉そかなしき　古今　聲をたにきかてわかるゝ玉よりもなき床にねむ君そかなしき
又はしにめつらしくきゝ侍二葉のほとも　二葉松はおさなき人にたとふこれはかほる大将のことなり
しみといふむしのすみかになりて
白氏文集十四紅牋白紙兩三束半是君詩半是書經レ年不レ展縁二身病一今日開看生二蠹魚一

椎本宇治二

歌の詞をとりて巻の名とせりかほる十九歳の春より廿歳の夏までのこと見えたり十九の秋中納言にはなり侍るなり竹河の巻と同時なり

うちのわたりの御中やとりのゆかしさに　南都下向の人は宇治を中宿にす後々の御幸なとにも平等院にて御儲のことあるなり

うらめしといふ人も有けるさとの名の　うらめしといふさとの名は古今の歌に世を宇治山身をうち橋なとよめる心をとりていへるなりこの源氏の詞をとりてよめる歌　元久元年七月宇治御幸の時夜戀の題にて定家卿　まつ人の山路の月もとをけれは里の名つらきかたしきの床　又名所秋歌に家隆卿　初霜のなれもおきゐてさゆる夜に里の名うらみうつ衣かな

六條院よりつたはりて右のおほい殿しり給ふ所は河よりをちにいとひろくてあるにまうけせさせ給へり　河原左大臣融公の別業宇治郷にあり陽成天皇しはらくこの所におはしましけり宇治院といふ所なり宇多天皇朱雀院と申も領し給へる所なり承平のみかとこゝにて御遊獵ありけること李部王記に見えたり其後六條左大臣雅信公の所領たりしを長德四年十月の比御堂關白此院を買とりておなしき五年人々宇治の家にむかひ遊なとありき宇治關白の代になりて永承七年に寺になされて法花三昧を修せられ平等院となつけ侍り治暦三年に行幸ありきいまは藤氏の長者のしる所なり六條左大臣より御堂關白につたはりたるを六條院よりつたはりてとはかきなし侍るなり

かのひしりの宮はたゝさしわたるほとなれは、　宇治の院は平等院をいふへし川むかひなりひしりの宮は河よりこなたなれはふねにてさし渡るほとちかきなりいまの橋寺のわたりをいへるなり

かんすいらくあそひて　村上御記應和元年閏三月十一日藤宴舟樂奏酣醉樂舞人四人云々今案酣醉樂は右樂なり船樂に其例よせあるにや

一こつてうの心にさくら人あそひ給ふ　櫻人は呂歌なり呂は双調律は平調なり双調の樂には多は一越調をわたして吹ゆへなり一越調もすなはち又呂なりかほる中將を櫻人にたとふるなり

のをむつましみとやおりけん　匂宮宇治に一夜とまりたまへるゆへにのをむつましみとかき給へるなり

のをわきてしもといとおかしけに　匂宮をとりわけて御ふみのあるをなに丶ほふらんの歌にとりなしてかき給へるなり

しるへなくても御ふみはつねにありけり　後撰 あふみちをしるへなくてもみてしかな關のこなたはわひしかりけり仲正

春のつれ〳〵はいと丶くらしかたくなかめ給　後拾 おもひやれ霞こめたる山里に花まつほとの春のつれつれ上東門院少將

いかなりけんこと丶いふせく思ひわたりし　かほるの實の父をしらさりしことなり

宮こにはまた入たヽぬ秋のけしきを音羽山ちかく風のおともいとひや丶かにまきの山へもわつかにいろつきて　後撰 松虫のはつこゑさそふ秋風はをとは山よりふきはしめけり　今案をとは山は宮こちかき所なりまきの山は宇治にいたりての ことをいへり

さかしうひしりたつかせうもされはやたちてまひ侍りけん

大樹緊那羅經云大樹緊那羅與二無量緊及無量乾無量諸天一奏二四萬四千淨妙樂音一來至佛所弦歌一一動聲振二大千一須彌山王踊沒低仰一切聲聞皆從座起猶如二婇戲一天冠菩薩問二迦葉一言少レ欲知レ足佛陀第一乃於二今日一猶如二小兒一迦葉答言非二本心一也

よこもれるとちにゆつりきこえん　わかき人をよこもれるとはいふなり

いと丶か丶ることにはなみたもいつちかいにけん　杜詩云驚定却拭淚云々あまりあきれたることには中々なみたはおちぬ物なり心をとりしつめ思ひわく時にかなしさはおほえてなかる丶物なり杜子美詩も其心をつくれるなり

あけぬよの心ちして九月にもなりぬ　人しれすねやはたえせぬきり〳〵すた丶明ぬ夜のこ丶ちのみして

くろきかみによるのすみつきもたと〳〵しけれは　黑紙はにひ色の紙をいふへし

むつかしけなるさ丶のくまを　八雲御抄云さ丶のく

まはたゝ篠のおひたるところ也
あさ霧にともまとはせる鹿の音を大かたにやはあはれともきく　後撰聲たてゝなきそしぬへきあさきりに友まとはせる鹿にはあらねと友則
もろこゑはおとるましうこそと　姫君の返歌にまかきの鹿そもろこゑになくとあるにつきたる詞なり
なき御たまにさへきすやつけたてまつらんと　藺相如か趙壁にきすありといひし玉のきすはそれよりいへるなるへし
ことゝいへはかきりなき御心のふかさになむ　そのことゝいへはと云なり
かけ／＼しきやうなれと　かゝつらふやうなる心にや下にも此詞あり河海の説おほつかなし
秋やはかはれる　三秋の中なり
さとのしるへはいとこよなうもあらかひきこえぬをかほるをうちのあんないしやに匂君の思給ふことなり
おとけたる人こそ　おとけたるはほけ／＼しき人をいふなり

くつれそめてはたつたの川のにこる名をもけかし
これは男の思かゝりてさてやまぬたとへにいふ也
御なかみちのほとみたりあしこそいたからめ
宮の宇治のかよひにあしのいたからん心なりみたりあしはみたりこゝちみたりかくひやうなといふやうなる心なりとをみちにあしをやむ心にいへり河海に媒介の人のことにいへるいかゝとおほえ侍り
我身つからのことゝはおほしもかけす　あね姫君のわか事とは思ひ給はぬなり
かの御心よせはまたことにそはへかめる　匂宮はいもうと姫君に心よせ給へるよしいひなせるなり
御返なとはいつかたにかはきこえ給ふと　匂宮の御ふみの御返は姫君の申させ給へるにや又中の宮の申させ給へるにやとかほるのひめ君にとひたまふなり
いかなる木のもとをかはたのむへく侍らん　古今わひ人のわきてたちよる木のもとはたのむかけなく紅葉ちりけり
ほとけのみそはなのかさりおとろへす　のみそは詞

なり又御衣ともよむへきなり花のかさりは瓔珞な
とのことなり又花臺なり
立よらむかけとたのみしゝゐか本むなしき床となり
にけるのな　うつほ第四神樂する所に召人うたひて
いはくうはそくかおこなふ山のしゐかもとあなそ
はゝゝし床にしあらねは
雪きえにつみて侍なりとてさはのせりみねのわらひ
なとたてまつりたり　中務集雪きえに袖はぬれつゝい
つしかと春日のゝへにわかなつみけり
雪ふかきみきはのせりはたかためにつみかはやさん
おやなしにして　しなてるや片岡山にいゐにうへて
ふせるたひ人あはれおやなし　今案つみはやすと
はかやうの草はつめはあとよりはゆるゆへにつみ
はやすとはいふなり
いつことかたつねておらん墨染にかすみこめたる宿
のさくらを　古今 深草の野へのさくらし心あらはこ
の春はかりすみ染にさけ　今案かすみの色をすみ
染といへり服者のすむ宿なれはなり
女一の宮もかうさまにて　今上の御女明石中宮の御
腹なり

すゑすこしほそりていろなりとかいふめるひすいた
ちて　いろは尋なり八尺をいふ髪そきにちいろ八尺
といふ心なり翡翠鳥名赤羽曰レ翡青曰レ翠翠小如レ
燕毛青黒色翎深青有二光彩一飛二水上一食レ魚翡大如レ
鳩毛紫赤翎點々青不レ深無二光彩一林棲不レ食レ魚今
俗呼二翠赤一曰二翡翠一云々今案翡翠はせうひといふ
鳥なりくはしくいはゝ翠は大さつはめのことくし
て水上にとひて魚を食すといへりいまのせうひは
翠にあたるなり

花鳥餘情第廿六　宇治　總角

總角宇治三

あけまきは歌と詞とをもて卷の名とせりあけまきに二あり童をもあけまきといふ髪をからわにわけたる心なり又車なとにいとにてくみてかくるをもあけまきといふこのあけまきはいとにてしたるをいふ也かほる廿歳の秋より冬までの事をかけるなり

御はての事いそかせ給ふ　八宮のこと うはそくの宮去年の八月廿日にうせ給ふことし周卉の御佛事あるへきを御はての事とはいへり

經のかさり　經机の覆なとのことなり

名香のいとひきみたりて　さま〳〵の香を紙につゝみて五色の糸にてむすひかけて佛に奉る事なり

むすひあけたるたゝりの　延喜式線柱とかきてたゝりとよめり

物とはなしにとかつらゆきか此世なからのわかれをたに　この世なからの別とは生別なりそれたにかなしましてなかきよの別はいふもをろかなるへし是は姫君の心に思給ふことなり

あけまきになかき契をむすひこめおなし心によりもあはなむ　催馬樂呂歌あけまきやひろはかりやさかりてねたれともまろひあひにけりかよりあひにけり　今案ひろはかりは八尺はかりなりさかりてはいとのさかりたるを人のさかりてねたるにそへたるなり定家卿歌にも　なかくしもむすはさりける契ゆへなにあけまきのよりあひにけん

あはすはなにをとうらめしけになかめ給ふ　これはかほるの心の中をいふなり

さるはすこしよこもりたるほとにて深山かくれには心くるしく　これはいもうとひめ君のことをの給ふなり

いとさはあらす　辨はにくきさかしら心はなくてたゝありのまゝに思わひたるへし

松の葉をすきてつとむる山ふしたに　樹下集柴のいほり苔の衣に身をやつし松の葉ならぬときはなしとか金峰山縁起役行者着ニ藤皮衣一松葉爲レ食吸ニ花汁一助ニ身命一卅餘年云々

かの御かたをさやうにおもむけてきこえたまはゝと

なむ　あね君の御心に中君をさもおほしめさはとおもむけ給よし老人のかたるなり

たのみきこゆるきさいの宮　秋好中宮御ことなり

へたてなきとはかゝるをやいふらん　かほるの屏風をゝしのけて入給ふをいふなり

めつらかなるともいかなるかたにかおほしよるにかあらん　ひめ宮のめつらかなるわさかなとの給ふをかほるのとかめ給ていつかたにめつらかなるわさときゝさためんと申給ふなり

ゆゝしき袖の色なとみあらはし給ふ心あさゝに　ゆゝしき袖の色は服者の色のいまく\しきをいふなり

名香のいとかうはしくにほひてしきみのいとはなやかに　いとはいつれも最の字の心なり絲にはあらさるなり

ふかきあしたのかねのをとも　ふかきあしたは早晨なり

いまたにいとみくるしきを　あさかへりし給ふことをいふなり

わか月のわかれやまたしらぬことにてまとひぬへきを　またしらぬあかつきおきのわかれにはみちさへまとふ物にそ有ける

なこり戀しくて　六帖五　夜もすからたつさはりつるいもか袖名殘こひしくおもほゆる哉

とのゐ人かもてあつかひけんをおほしあはせて　はし姫の卷にみえたることなり

あけまきをたはふれにとりなししも心もてひろはかりのへたてにたいめんしけるにや　これはひめ君の思給へる心なりあけまきの歌に　ひろはかりさかりてねたれともとうたふ詞をとれるなり

心葉なとえこそ思よりはへらね　心葉とはかねをえりて花のかたをする事なりあけまきの心葉はいとにてむすふやうにみえたり

月比くろうならはしたる御すかたうすにひにて　重服をぬきてもしはらく輕服をきるなり薄鈍色なり

人しれすちかおとりしては思はすやあらんと　ちかよりてわろくなる人ありこの中君はさもあるましきとたのもしく思ひ給へるなりおもはすやあらんとはちかおとりは有ましきと云心なり

れいのやうにきこえんと御せうそこあるに　姫君の

れいのやうに物へたてゝきこえんとあるをかほるの心あやまりしてわつらはしけれはひめ君の又とかくの給ひてたいめんなきことなり
ことにいてゝはいかてかはふとさることをまちとる人のあらん　姫君の中の君をと思ひ給ふともかほるの心に事にいてゝはふとうけふす事はよもあらしかたへの人の思はん事をはゝかるへきゆへなり
けにさのみやうの物とすくし給はんも　やうの物といふ詞河海に様かましき心にいへるこゝのことははやうかましきかたへも心かなひ侍れと下の詞にさるへき人にもをくれたてまつらめやうの物とありそれはやうかましき心にはかなひ侍らす又河海に上の詞により所にしたかひて心得へしといへり此注はしかるへく覺え侍りやうの物はたゝさやうの物といふ心なり上にいへる事につきたる詞なり手習巻にあやしくやうの物とありそのほか所々にみえたりかれこれをかよはして心得へきなり
かへの中のきり〳〵すはひいて給へる　ひめ君のかへのもとの屏風にかくれ侍るをきり〳〵すによそへていへるなり
すてかたくをとしをきたてまつりけん心くるしさを　故宮の御心にひめ君たちをのこしをき給ふことを心くるしくおほしめしてかほるにも御遺言ありし事をおもへはさすかに又いのちもすてかたきとなり
かけ〳〵しきすちはいつかたにも思ひきこえし　かけ〳〵しきはなはかゝりなることなり
おなしくは心たかく思ふかたそことに物し給ふらん　にほふの宮よりもひめ君へきこえ給へは心たかくおもふかたは我よりまさり給へはそなたにも心よせ給ふらんと心えはてつれは數たらぬ身はとはつかしく思たまふるとゑんし給ふ詞也
秋のけしきもしらすかほに青き枝のかたへ　信明集露はをけと我をるやとかはきかえはかくこそ秋をしらすかほなれ
おなしえをわきて染ける山姫にいつれかふかき色ととはゝや　おなし枝は連枝の心に思よせ侍りわきて染けるは猶ひめ君に心の色はそめましたるよしなり
山姫のそむるこゝろはわかねともうつろふかたやふ

かきなるらん　姫君の御返事なりうつろふかたは薰の中の君にかたらひ侍ることをよそへての給ふなり

おなしあたりにこきめくらんいと人わらへなるたななしをふねめいたるへし　いつまておなしやうにあるへきとおもひ給て三宮をすゝめたてまつりてまつ中の君にあはせたてまつりて一かたを定めんとたはかり給ふなり

女郎花さける大野をふせきつゝ心せはくやしめをゆふらん　古今　花にあかてなに歸るらんをみなへしおほかる野へにねなましものを　同　女郎花おほかる野へにやとりせはあやなくあたの名をや立なん大野は名寄の未勘國に入たり

あなかしかましとはて〳〵ははらたち給ぬ　古今　秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花も一とき　遍昭

こゝろせはくとりなし給ふもおかしけれと　かほるのあてかひ給ふ事をは匂宮知り給はて心せはくやしめをゆふらんとの給ふをおかしく思ひ侍るなり

ふなわたりなともところせけれはこと〳〵しき御やとりなともとり給はす　匂宮はつせまうてのときは舟わたりし給ひて夕霧のおとゝの領し給ふ所に中やとりをとり給へりしをそれもこと〳〵しけれははしよりこなたにかほるのしり給ふ所に宮をはやとしたてまつり給ふなり

けいめいしあへり　經營なりいとなむこゝろなり

いつかたもおなしことにこそはと思て　あに姫君も中の君もおなしことゝ辨かおもひたるなり

かのいりたまふへき道にはあらぬかたのひさしのさうしを　中の君のかたへかよふへき道にはあらぬ障子をさしてひめ君まつたいめんしたまふなり

さうしの中より御袖をとらへて　さうしのしりをさしていさゝかあけあはせて物なとの給ふにや

宮はをしへきこえけるまゝにひとよのとくちによりてあふきをならし給へは辨まいりてみちひきこゆ　にほふ宮のかほるのまねをして中の君のかたへかよひたまふなり辨君もこれまてはかほると思て引導せるなり

姫宮はしり給はてこしらへ入れんとおほしたり　ひ

め君はかやうにたはかるをはしり給はて薫を夜のふけぬさきに中の君のかたへこしらへ入れんと思給なり

しるへといさなひ給へる人の　匂君の御ことなり

山とりの心ちしてあかしかねたまふ　六帖二　雲のゐる遠山鳥のはつかにもありとしきけはわひつゝそぬる　逢ことは遠山鳥のめもあはすあはすてこよひあかしつるかな

しるへせしわれやかへりてまとふへき心もゆかぬ明くれの道　拾遺あけくれのみちにそわれはまとひぬるおもふ心のゆかぬまに〳〵能宣　今案此歌はかほるの姫君にきこえたまへる歌なり

かた〳〵にくらすこゝろをおもひやれ人やりならぬみちにまとはゝ　姫君の返歌なり人やりならぬは我こゝろからといふ心なり古今に人やりのみちならなくにといふ歌なり

ほの〳〵とあけゆくほとによへのかたより出給ふ

是よりは匂宮の御事なり

おほしほれたるやうにてたのもし人のおはすれは

たのもし人はあに姫君の事なり

つゝませてともなる人になんをくらせ給ふ　ふくろをつゝみともいふなり

よへのさかしかりしおい人のしわさなりけりと　かつけ物の事辨君のしわさと思ひ給ふなり

みちのくにかみにおひつきかきたまて　文のうへひとしくかきたるをいふなり

みそひつあまたかけこにいれて　御衣櫃懸子なり

さ夜衣きてなれにきとはいはす共かことはかりはかけすしもあらし　このかことはいさゝかの心なりかほるの中宮に實事はなかりしかとも物いひたりしことをいへるなり

こはたの山にむまはいかゝ侍るへき　かほるの夜もふけたれはたゝ御馬にて出させ給へと申給ふ心なり

心々なる世の中なりけれは　六帖　よの人の心々にありけれは思ふもつらしうきはたのます

あさやかなる花の色々につかはしからぬをさしぬいつゝ　きぬのいろ〳〵を云なり

うしろてはしらすかほにひたいかみを引かけつゝ

仲文集中宮の内侍のすけ宣旨なとあまになりたる

かもとに　かまへつゝさてもありつる世をそむく
うしろてともそおもひやらるゝ　返し　そむきぬ
るうしろてよりもこくらくにむかへん君かかはを
こそ思へ

うちはしのいと物ふりてみえわたさるゝ　帝王系圖
曰孝德天皇二年道登法師始造宇治橋　今案道昭
和尚同人也　古今　ちはやふる宇治のはし守なれを
しそあはれとはおもふとしのへぬれは
中たえん物ならなくにはしひめのかたしく袖や夜半
にぬらさん　古今　わすらるゝ身をうちはしの中たえて人
もかよはぬとしそへにける　古今　狭莚に衣かたしき今
夜もや我をまつらん宇治のはし姫

ふるの山さといかならん　ふるの山里は大和國なり
上に時雨めきてとあれは初時雨ふるの山さとの歌
は宇治の里人にいひなし侍るなり此物かたりのつ
くりさまかくのみあることなり

六條院には左のおほい殿かたつかたに住給て　親行
本に右の大殿とあり此時夕霧ははや左大臣になり
給へる故に左になをしてよむへし

世の中うつりてみかときさきのおほしをきつるまゝ
に　匂宮を御位につけたてまつらんとおほしめす事
なりさもあらは中の君をはきさきにもたてんとに
ほふ宮のおほしめしたることなり

十月のついたちころあしろもおかしきほとならんと
そゝのかしきこえ給てもみち御らんすへう申給ふ
後撰　うち山の紅葉をみすは長月のすきゆくひをも
しらすそあらまし

もみちをふきたる船のかさりにしきとみゆるに　白
川院承保の大井河の行幸に船をもみちにてかさる
とみえたり

けにとしに一夜の契りなりともかゝるひこほしの光
をこそ　萬　としにありて一夜いもにあふひこほしも
我にまさりておもふらむやそ　伊勢物語彦星に戀
はまさりぬあまの川へたつるせきをいまはやめて
よ

宮はあふみの海の心ちしてをちかた人のうらみいか
にとのみ　後撰　七夕のあまのと渡るけふさへやをちかた
人のつれなかるらん今案匂君はみるめなき事をあ
ふみの海の心ちしてと思ひ給へり

あしろのひをも心よせたてまつりていろ〳〵の木の

葉に　拾遺　いかてなを網代のひをに事とはんなにゝよりてか我をとはぬと　水原云庖丁譜にひをには紅葉を敷と云々

みし人もなき山里のいはかきに心なかくもはへるくすかな　後拾遺　みし人もわすれのみ行ふるさとに心なかくもきたる春かな

さるへき人にもをくれたてまつらめやうのものと　やうのものといふ詞は上にもありおもふへき人にをくれたてまつるへきさまの物といふ心なり

わかあまりことやうなるそや　よのつねにかはりたるあてかいを云也

すちことにおもびきこえ給へるに　匂宮をは御門もとりわきおほしめしてしゞう御一流をもたて給ふへくおほしめしてあてかいたるなり

うらなく物をといひたるひめ君もされてにくゝおほさる　在五中將のいもうとのなとめつらしきことの葉そといへるはされてにくゝ思給へは女一の宮はにほふ宮の御返はし給はぬなるへし

御心のうつろひやすきは　古今　世の中の人の心は花そめのうつろひやすき物にそありける

世の中はとてもかくても　世の中はとてもかくてもありぬへし宮もわらやもはてしなければ　蟬丸

人のくにゝありけんかうのけふりそいとえまほしうおほさるゝ　十洲記云聚窟洲在二西海中一由來地上有二大樹一與二楓木一相似而華葉香聞二數百里一名爲二反魂樹一死屍在地聞レ氣仍活云々

かく袖ひつるなといふことやなりけん　神無月いつもしくれはふりしかとかく袖ひつるおりはなかりき

あられふるみ山の里は朝夕になかむる空もかきくらしつゝ　後撰　霰ふるみやまの里のわひしきはきてたはやすくとふ人そなき

とにかくにさはりおほみなるほとに五節なととくいてきたるとしにて　おほみは十一月新嘗祭に大忌小忌と衣裳につきていふ事ありさて五節なとにかきつゝけたり五節は十一月中のうしにはじまるとしは十三日の丑日なり新嘗會は中の卯の日なり

さくりもよゝとなき給ふ　さくりなき也よゝといふもなく聲なり

御くしなとすこしあつくて　かしらに溫氣のあるを

いふなり
なにのつみなる御心ちにか　六帖三みこもりのかみにうれへてきえてしかこひつゝわはぬなにのつみそも
阿闍梨もよゐにさふらひて　よゐの加持をいふなり
おいかれにたれと　老てこゑのかれたるなり嗄字なり
かのまたさたまりたまはさらんさきに　三有といふは本有中有生有をいふ又さたまり給はぬとは中有の間を云なり
かう心くるしき御ありさまともをあまかけりてもいかにみ給ふらん　榮花物語宇治殿わかくて具平親王むこにとり給ふ親王うせ給て後三條院の御女をあはせたてまつり給しに宇治殿御物のけにわつらひ給ひてたえ入給ひにけりしはしありて具平のみこあらはれ給ひて此世になくてもあまかけりてなふり給ふよしみえたり
おほやけにもわたくしにも御いとまのよし申し給て

暇文
請暇若干箇日
牒依二某事一所レ請如レ件以牒　治病之人者治病云々
年月日　官位姓名

いかてこのおもふ事してしかな　出家のことなり「姉君の心なり」
いむ事なんいとしるしありていのちのふることゝきゝしを　いむことは受戒なり女の戒をうくるといふはひたいのかみをはやしてさけ尼といふものになるを云なり
かきくもり日かけもみえぬおく山にこゝろをくらすころにもあるかな　高光集おとゝうせ給ひてのとし新甞會の比うちへもえまいらて內侍のもとに
霜かれのよもきのもとにさしこもりけふの日影を見ぬそかなしき　今案新甞會豊明節會には小忌をきる人日かけのかつらといふ物を冠にかくる也日蔭草とはさかりこけともいふいとにてむすひてかくるは日蔭草にかたとるなり日蔭をもてかつらとすと日本紀の第一にあり是よりことおこれる也
かうなからむしのからのやうにて　蛻なり虫のもぬけたるをいふ也
そらをあゆむやうにたゝよひつゝ　御法の巻にもこ

の詞ありあふひの巻にはあしを空にてとありたゝし足を空にてはいそかしき時の事也空をあゆむは心のほれ〴〵しくうか〳〵としたる體也

けふりもおほくむすほゝれ給はすなりぬ　あけまきの君やせさらほひてむしのからのやうなれはいまはの時のけふりもむすほゝる程もなくたゝ時の間にあとかたもなくなれるなり

ゆるし色のつやなとこほりとけぬかとみゆるをいとゝぬらしそへつゝ　くれなゐのうちのきぬは氷のやうにみゆる也河海に涙の氷にいひなし侍るしかるへからさるにやぬらしそへたるは始て涙のことをいへり氷とけぬかとみゆるはうちきぬの色つやをいふと心得へし

むかひの寺のかねの聲枕をそはたてゝけふもくれぬと　夜のあくるをけふも暮ぬといへるは夜のあけて昨日の過る心也又夜のあけてけふになれはけふもやかてくれぬへき心にいへるなり

よもの山のかゝみとみゆる　雪のこと也山はかゝみをかくるといふことあまた所にあり筆者面白云にや

心きたなきひしり心なりけり　心とは身をすてすして半偈をしめす鬼に事つけていへるを心きたなきひしりとはいへるなり

おほしなけきたるさまのはつかしかりしを　これは中の君の故姫君の我身のことをなけき給しことをおもひ出したまふなり

いまより後御心あらたまらんはかひなかるへく　是はにほふ宮のいまより後思ひなをしたまふとも故姫君のしり給ふへきならねはかひなかるへく中の君は思給ふなり

かうかへたてまつらせたまはめ　勘は人を責勘する事なり

きこえしさまをもむけに忘れ給ける事と　是は匂宮の中の君に心ならすとたえおくへきこともあるへきそれをは心にかけ給ふましきとの給しことをわすれ給はてうらみ給ふとの給ふなり

つれなきは心くるしき物をと一ふしおほししらせまほし　心かへする物にもかつれなきはくるしき物と人にしらせん

女一の宮の御方に事よせておほしなるにやとおほし

なから　女一の宮の御かたに匂宮の思ひ人のあるそのたくひに思ひよせての給ふと心得たる也上にある事なり

かの御かはりになすらへてみるへかりけるなと　かほるの中の君のことをの給ふなり

宮のおほしよるめるすちはいとにけなきことに思ひはなれて　中の君を二條院にわたし奉らんとの給ふ事あるましきことにおもひ給ふ也

花鳥餘情第廿七

宇治　早蕨　寄生

早蕨宇治四

歌と詞とをもて名とす但歌にはさわらひ詞にはたゝわらひとあり薫廿一歳の春のことあり

もとすゑをとりて　神樂譜本末の拍子あり歌なとよむに上の句下の句をいひかはすことなり

君にとてあまたの春をつみしかはつねをわすれぬはつわらひかな　雲葉集都にはみるへき人もなきものをつねを思ひて春やきぬらん三條右大臣

見る人にかことよせける花のえを心してこそおるへかりけれ　おほかたにをくしら露もいまよりは心してこそみるへかりけれ　今案このみる人は中の君のことを思ひよせたる也

人の御うへにてさへ袖もしほるはかりになりて　古今我身からうき世の中になけきつゝ人のうへさへかなしかるらん

いはせのもりのよふこ鳥めいたりしよのことはのこしけり　いはせのもりのよふこ鳥のことしかとかなひたる古歌は侍らねとも心をとりていはゝ戀しくは來てもみよかしの歌大かたは相違なきにや人つてにいはせのもりのよふことりかもは人つてならぬといへる心也又いはせの森をいはたのもりとかける源氏の一本ありと云々

いまはとてこのふしみをあらしはてんもいみしく心ほそけれは　古今　かくしつゝ我世はへなんすかはらやふしみの里のあれまくもおし　今案宇治の古宮をあらさんことをいはんとてこの伏見をといへり

をのかとこよにてたにあらぬ旅ねにて　をのかとこよはすまの卷にもみえたり故郷の事をいふ也優婆塞宮のむかしの京のやけたりし所をいふなり

御ふくもかきりあることなれはぬきすて給ふみそきもあさき心ちする　あねのふくは三ヶ月なりみそきもあさきとは輕服のことをいふいつれも除服の時は河邊にてはらへをする故にかはのあさきによせていへり

はかなしや霞のころもたちしまに花のひもとくおりもきにけり　霞のころもは服の事によそへたり花のひもとくは除服事なり

あすのわたり　京へわたり給はんことをあすとてのこ

となり
わたらせ給ふへき所ちかくこの比すくしてうつろひ侍へけれは　中の君のわたり給ふへき所は二條院なりかほるは三條宮つくりいて丶わたり給ふへき故に程ちか丶るへきことをいふなり
よ中わか月とつき〳〵しき人のいひ侍める　むつましきとちはよ中わかつきともいはすいひかはすことなり
やとをはかれしと思ふ心ふかく侍るを　中務集　花のかのつまをわすれぬ春毎に宿をかれにし君をしそ思ふ
さきたつ涙のかはに身をなけは人にをくれぬ命ならまし　さきにたつ涙の道にさそはれてかきりのたひにおもひける哉
かのきしにいたる事は　婆羅密の梵語を飜して到彼岸といふ也
身をなけん涙の川にしつみても戀しき瀬々はわすれしもせし　拾遺　なみた川そこのもくつとなりはて丶こひしきせ丶になかれこそすれ　順
おなしゆかりにめつらしけなくとも　夕霧の右大臣とかほる大將とは兄弟のよしなり
ぬしなきやとのまつ思やられ給へは　拾遺　あさちはらぬしなき宿のさくらはな心やすくや風にちるらん　惠慶　今案下の詞に心やすくやなとあり惠慶か歌こ丶にかなへりぬしなき宿は宇治のふる宮をいふ也

寄生宇治五

やとり木は歌にあり詞には深山木にやとりたるつたの色とありやとり木は木のほやといふ物也藥に桑の寄生とてあり桑の木に生す又楓の樹にも生すつたをやとり木といふは木にか丶れる物なれは名をかりていへりまことのやとり木にはあらさる也
かほる廿一歲の夏より廿二歲の春までのことあり
二月に直物の次に任大納言兼大將のよしみえたり
そのころふちつほときこゆるは故左大臣殿の女御になんおはしけるまた東宮ときこえしとき人よりさきにまいり給にしかは　竹河卷に夕霧右大臣左大臣に轉するよしみえたり此おと丶よりさきにうせ給へる左大臣をいへりその人たれともみえす系圖には

藤つほの女御大藏卿修理大夫なとの女とみえたり
今上は若菜の下に位につき給ふ東宮と申しゝ事はそれよりさきの事なるへしこの藤壺の女御は東宮の御時よりまいり給て女二の宮をうみ給へり女二の宮はかほるの大將の室になり給ふ人なり
御まへのきくうつろひはてゝ盛なる比　古今　秋をゝきて時こそ有けれ白きくのうつろふからに色のまされは
しはしはいてやあかすもあるかな　朱雀院の女三宮を六條院にゆつり給しことあかてもあるかなとは不足なる事にてありしにやかゝらすもありぬへくおほえしかともかほる大將のかくものせられていまにうしろみかしつき給ふを見侍れは又かしこくとおもはるゝと也
やかてそのついてのまゝにこの中納言よりほかによろしかるへき人またなかりけり　朱雀院の女三宮を六條院にゆつりきこえしそのついてのまゝに今上の女二の宮をかほる中納言にあつけまほしくおほしめすなり
御こなとうたせたまふ　御門女二の宮の御かた藤つほにて御前のきくのさかりに御碁うたせ給ふ也
たゝいま殿上にたれ〳〵かとゝはせ給ふになかつかさのみこ上つけの御子中納言源あそんなとさふらふとそうするに　かんつけの御子はみえす中務の宮は今上の御子也中納言源朝臣はかほる大將也御前にて人をめす時にはその人の官姓かはねを奏することなり
あそひなとすさましきかたにていとつれ〳〵なるをいたつらに日をゝくるたはふれこれなんよかるへきとて　女二宮は母女御の御思のおりふしなれはものゝ音なとはすさましくにあはぬゆへに御碁をとおほしめす也　文集十六云送㆑春唯有㆑酒銷㆑日不㆑過㆑碁云々此詩の心をとりていたつらに日をゝくるこれなんよかるへきといへり
よきのり物はありぬへけれとかる〳〵しくはえわたすましきを　のり物は碁のかけものなり御門の御碁にまけさせ給はゝわか御女をかほるに給はらんとおほしめしたる御氣色ほのあらはれたるなり
けふはまつこの花一えたゆるすとのたまはすれは
まつ此花一えたをとおほせられたるはのこりおほ

かる御詞也朗詠云聞得園中花養レ艶請レ君許レ折ニ(コヲ)一枝春一

霜にあへすかれにしその丶きくなれとのこりのいろはあせすもあるかな　延喜御集　時雨つ丶かれゆく野へのはなゝれと霜のまかきにのこるいろかな

能宣集　ひきそめて世々もへにける松なれとみとりの色のあせすもあるかな　今案女二宮のたのむかけにをくれ給へることを下の心によませ給へるなり

さま〳〵に心くるしき人々の御こととも をもきゝすくしつゝ　中の君をあね君の我かはりにとの給しことをもきゝすくしゝことをいへり

右大臣殿はのきゝ給て六の君はさりともこの君にこそは　夕霧は竹川巻に左大臣に轉す右大臣はあやまれるなり但藤壺女御の父左大臣にまきるゝによりてしはらくもとの右大臣をいへるにや

水もるましく思さためんとてもなを〳〵しききはにくたらん　水もるましきは水洩不レ通といふ本文也たとへは堅密にしてすきまなきをいふなを〳〵しききはしなくたれるたゝ人をむこにとらんはたとひ水もらぬやうなる中らひなりともこのましからぬといふ心也

それたにかのおとゝのまめたちなからこなたかなたうらやみなく　夕霧のおとゝの雲井の鴈と落葉宮とふた方にもてなし給へることなり

かのあせちの大納言のこうはいの御かたをもなをおほしたえす　按察大納言女は中君の事なり紅梅巻にせうとをみてはやましと匂宮のゝ給し人也たゝし按察大納言は此時右大臣なり然ともあせち大納言といはれし時より兵部卿宮は中君をおもひかけ給へるによりてもとの官をかけるは物語の作者の詞なり

やかてあとたえなましよりは山かつのまち思はんも　二條院へむかへられすしてそのまゝ山にとちこもるをあとたゆるといふ也それよりもなを山里へたちかへらんは人わらへなるへしとの給ふ也

くさのもとをかれにける心かろさを　草のもとはよもきか本のすみかをあらす心なり此詞はきりつはの巻にもあり

かならすさるさまにてそおはせまし　故姫君世にな

からへましまさは尼にておはしますへき心なり
あなかちにめゝしく物くるをしくゐてありきたはかり　めゝしきといふ詞まほろしの巻にもあり又この巻の下詞にもめつらしくねちけてとありめさましき心なるへし又ゐては将字なり匂宮をうちへつれていて給へる事をいへりあけまきの巻にあることなり
あくるまさきてとかつねなき世になすらふるか　朝かほはつねなき花の色なれやあくるまさきてうつろひにけり
をみなへしをはみすきてそいて給ぬる　古今　女郎花うしとみつゝそゆきすくるおとこ山にしたてりと思へは　今案朝かほのはかなき色をは故姫君に思ひよそへてことにもてあそひ給ふを女郎花はいろ／＼しき花の名なれはまめなる心にみすき給へるなるべし
あさまたきまたきゝにけり　またきは速なり
あしこもとに　あそこもと也しとそと五音通也
なにゝかゝれるといとしのひてことはつゝかす　藤波に松のあらしの音せすはなにゝかゝれる花とみてまし　今案此歌の心こゝにはかなひ侍らすあさかほの歌になにゝかゝれるとよめる詞あるへししからすは露の命のはかなきをなにゝかゝれるといへる歌こゝには相かなふへしいまたみ及はす管見のいたり也
故院のうせ給てのち二三年はかりのすゑに世をそむき給しさかの院にも六條院にさしのそく人の心おさめんかたなく　水原云世をそむき給しさかの院此事大かた不レ得ニ其心ニ尤不審なり云々　河海云六條院遁世し給ける事此詞にみえたり嵯峨院は桂院か栖霞寺か云々　今案故院は六條院を申かの院うせ給て後二三年はかりのすゑ世をそむき給しさがの院と六條院とをさしのそく人の申侍りしは木草の色水のなかれにつけても涙を催し侍しとかほる大将にその時のことをかたる人の侍しと也故院はむらさきのうへにはなれ給てさかの院に隠居し給しをまほろしの巻の末に頓滅し給ふと心得たるによりて水原抄なとには心得さる由を申侍り河海には頓滅の説をはやふられたるによりて六條院遁世し給ふ事此詞にみえたるよししるされたり次に嵯峨院

を桂院栖霞寺かとのせられたるはあやまり也さかの院とは大覺寺をいふ也大覺寺は嵯峨天皇の離宮にして脫屣の後承和元年に嵯峨院にうつり給ふよし國史にのせ侍り貞觀十八年に淸和太后公家に奏し給て寺になされて大覺寺とは名つけられ侍り嵯峨天皇昇遐の後階庭不ㇾ披臺樹亦壞といへること國史にのせたり嵯峨天皇の嵯峨院に世をのかれまし〳〵ける事を今六條院の御事にかきなし侍りさらにうたかひなきことなるへし

かの御あたりの人はかみしも心あさき人なん　これよりは故院うせ給て後六條院にのこり給ふ人々のこと也

わすれ草おふしてのちなん　わすれ草は忍草の一名なり又萱草を忘憂草といふにつきて忘草ともいへりいつれも相違なきなり

かのいにしへのさるかなしひはまたいはけなく侍けるほとにて　六條院うせ給し時はかほる大將はいまたいとけなきときの御ことなり

この廿日あまりのほとは　故宮の御忌日をいふなり

かしこはなをたうときかたにおほしゆつりてよ　うちのふる宮を寺になすへきことなり

さふらひのへたう右京のかみめして　さふらひの別當は政所の別當也右京のかみは大夫なり

はゝ宮のなをいと心わかくおほときて　これはかほるの母宮也

大空の月たにやとる我やとにまつよひすきてみえぬ君かな　元良親王集　大空の月たにやとゝいるものを雲のよそにもすくる君かな

かくれのかたよりしんてんへわたり給ふ　二條院のしん殿ににほふ宮はすみ給ふ中の君は西の對にすみ給へるよしみえたり

たゝ枕のうきぬへき心ちすれは　拾遺　淚川水まされはや敷たへのまくらのうきてとまらさるらん　讀人不知

をのつからなからへはなとなくさめんことを思ふにさらにをはすて山の月すみのほりてよふくるまゝに　後拾遺　月みてはたれもこゝろそなくさまぬをはすて山のふもとならねと　和泉式部　今案をはすて山の因緣大和物語にくはしくしるされ侍り都にてをはすて山の月すみのほるといふことおほつかなして

れは上の詞になくさめんといふにつきてをはすてやまとはいへりたとへは身は都にあれとも心の中はをはすて山の月にことならぬよし也又中の君の匂宮にすてられたる心をかの山になすらへたるなり

しゐの葉のをとにはおとりておほゆ　しゐかもとのやとりを思心也

秋の夜なれとふけにしかはにやほとなくあけぬ　古今なかしとも思そはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれは

おもかくしにや　しらぬかほしたるなり人のしりたることをうへにかくしたる心也

思ふやうなる世もあらは人にまさりける心さしのほと　匂宮の位なとにつき給ふこともあらは中君を后にたて〱まつらんと云こと也

あまのかるめつらしき玉もにかつきうつもれたるを
後撰　なにせんにへたのみるめを思ひけんおきつ玉もをかつく身にして黒主　今案後朝の文の使に祿の裳きぬをかつけたる也

まゝ母の宮の御てなめりとみゆれは　六君は雲井の（藤内侍）鴈の御腹なりまゝ母は落葉の宮なり

さかしらはかたはらいたさに　これは文の詞なりかことかましけなるもわつらはしや　いかにをきけるなこりなるらんといふ歌の詞にいへり

御あはせてうせさせなとしつゝ　あはせは食物をいふ俗に朝の飯をあさあはせといへり合子にもる故にあはせといふにや

こよひのきしきいかならんきよらをつくさんと　匂宮嫁娶の後三日の夜のことなり

五位十人は三重かさねのからきぬ
李部王記天暦二年十一月廿二日丁卯夜詣右丞相坊門家娶公中女廿四日夜更漸深向右相府亭所住之東南對廂東頭西向設座以朱臺六基及銀器辨饌少臺一双以様器辨饌菓等安座右其西頭南北對設客座主公傳侍女告備饌由即出就座左兵衛督師尹卿右衛門督師氏朝臣相次加座以折敷設饌左少將藤原朝臣伊尹以盞酒安臺酒巡兩三行即入簾中侍女以一盃餠安萬蓋差之主公卒客卿起就別處命飲深賜陪從者祿五位三人白單細長各二領袴一具六位有官散位四人

各同細長二領無官三人白絹各一疋召繼以下錢二萬
今案女裝束は尋常の唐衣等也細長は貴女着レ之者
也故に別にこれをそゆる也三重かさねの唐衣は中
倍あるをいふにや腰は小腰引腰也或白或地摺或村
濃等有二差異一也

めしつきとりなとの中に　西宮抄院雜事中御隨身勤二
夜行一召繼奏時云々
今案親王家又有二召繼一式部卿重明親王嫁娶時召繼
以下錢二萬を祿に給ふよし上の記に見えたり匂宮
御事もこれになすらふるへし又知足院禪閤院の御
猶子とて召繼を具せし事もありし也とねりとは御
厩舍人なとなり

君は入てふし給てはしたなけなるわさかな　薫のか
へり給て今夜のきしきを心に思ひ給ふことなり

ふかゝらすうへはみゆれとせき川の下のかよひはた
ゆるものかは　あさくこそ人はみるともせき川のた
ゆる心はあらしとそおもふ元良親王

このみそし給へる　そしは殺なりこのみにことをそ
き簡略する心なり

やかておなしみなみのまちにとし比ありしやうに
六條院のみなみのまちなりにほふ宮のもとすみ給
し所なり六君も六條院にすみ給ふなり

かゝる御心のなこりなからましかは　薫の故姫君を
わすれ給はぬ名殘に我までも思給ふと中の君の御
文にかき給ふなり

一日はひしりたちたるさまにてことさらしのひ侍り
しも　故宮の御忌日にきやうほとけのことなととり
もち給ひてきこえ給しことをひしりたちてといふ
なりそれも中君の御ためとりわきし給ふをすき
にし人のなこりとのみの給へはいまの人の御ため
心さしあさくなるといふ心なり是はかほるの文の
返事の詞なり

一日うれしくきゝ侍りし心のうちを　これはかほる
のうちの山里をたうときかたにおほしゆつり給へ
りしなとの給しことともなり

あらすやしのひてはよかるへくおほすこともありけ
るかうれしきはひかみゝきこえさせんとそ　あらす
やはの給ふことにはあらすやの心なりしのひてこ
そよからめと宇治への事をの給ふをそらおほれし
てあらぬかたにとりなしてとを〳〵にてひかきゝ

もや侍らんちかくよりてうけたまはりさためんとかこつけてみすのうちへ入侍るなり

いとはつかしとおほしつるこしのしるしに　懐妊の女のしるしの帯のことなり

われてそさきになと　六帖 人なれは我こそさきにわすれなめつれなきをしもなにかたのまん　今案中君の我は六君よりさきにむかへられ侍るにつきにおもひなさるゝとてうちそむきたまふへきことなり

みなれぬる中の衣とたのみしをかはかりにてやかけはなれなん　みなれぬるは身になれたるなりかはかりはかくはかりなりそれをうつり香によそへたるなり

はちなきなめりかし　はつかしくもなき心也

ちかき御つしこからひつなと　御厨子小唐櫃なり

こしのひとつあるを　ひきこしのこと也

いてやなとそしらはしけにきこゆる　ことはりしらぬ御めのとなとは宮の御うしろみのかたおろかなるやうにそしり申也

あやのれう給はせなと　れうはをりちんのことなり

いとをしの人ならはしやとそ　故宮にならはされ給て人のたえ〳〵しきことをもしり給ふ也

みなあたらしみ　新參の人ともなり「女房衆なりそれには中の心をき給也」

よゐのそうのさに　かちする人を夜居の僧といふなり

うらみゝなきみきこえ給ふ　なきみわらひみといふ詞つかひなり

この御山さとはいてたちいそきに　うちのふる宮をは後の世のためにたうとき人にゆつり給へきといふ心也かほる大將の我身こゝにおこなひてこもり居侍らんと思ふよしほのめかし給ふそれを御らんししるかた有てこそはとかけるなり

山のかたをくらくなにのあやめもみえぬに　二條院の庭のつき山なりをくらきはほのくらきなり

をとなしのさと　紀伊國の名所なり音無川とてもあり

又うたてみたらし川ちかき心ちする人かたこそ　むかしおほゆる人かたをもとの給へるにつきてみそ

き川の人かたを思ひよせて戀すれはこそうきことともあれ戀せしと思なり給へるいとをしく侍るとの給ふなり
ちかき世に花ふらせたるたくみも侍りけるを　水原云ひたのたくみは母のかなしうしける女をうしなひてかたをつくりたりけれは有しにもかはらすよるになれは物なとほのかにいひける事といへり或說云ひたのたくみははかりことに花をふらせたりと云々
人かたのついてにいとあやしう思ひよるましき事をこそ　手習の君の事をいひ出んとて人かたのついてにといへりむかしの人のけはひにかよひたれはそのかたしろにいひなし給ふて薰のつねにむつかしき事をきこえ給ふをいひのかれんと思給ふ故也
あさましくもてはなれたりとなん　たりの字さりとあるへき也故姫君にもてはなれすにかよひたる心なるへし
いとさしもあるましき人のいかてかさはありけん
故姫君と一腹にてもなき人のにかよひたる心也
夢かたりかとまてきく　かほるの夢物語かときゝ侍る也
しのふ草つみをきたりけるなるへし　故宮の落胤腹の女をいふ也
いと遠き所にとしころへにけるを　常陸國をいふなり
ほとけにならんはいとこよなきことにこそあらめ
かほるの山さとのほんそんにもとの給ふにつきたることは也
れんしたる心ならねは　練は調練したる心也
さはかりのきはならねは　母君のなを人なるをいふ也
人のうへにてあいなく物をおほすめりし　故姫君の事を思わすれ給はぬ也
こめかしく事すくなゝる物から　こめかしくは人の心むけのこまやかなるをいふ又はかなくおさなかましき心にもかなへり
こたになとすこしひきとらせ給て　木蝻は木につきたる虫の名なり
お花の物よりことに手をさしいてゝまねくか　古今
秋の野のくさのたもとか花すゝきほにいてゝまね

く袖とみゆらん

わさとつくろひたてさせ給へるは中々をそきに
あるにまかせたるにてはなくてわさとしめなとしてつくりなせる花はをそくさくなり

いかなる一本にてかあらんいと見所ありてうつろひたるは　きくのうつろふは中の君のことにおもひよそへたる也

御ことさしをきたまふを　こゝには琵琶を御ことゝいふ絃の類をはおほよそことゝいふ也

その中納言もさたむめりし　此中納言謂ニ誰人一哉可レ尋レ之

いせのうみうたひ給ふ御こゑのあてにをかしきを
伊勢海は律の歌なり盤渉調も律也平調にかきるへからさるにや郢曲の家に尋ぬへし

おりてたうのはいし給ふ　拜賀なとに來る人には主人南階におりくたりて答拜揖讓の作法ある也かほる新大納言の拜賀に二條院へ來り給ふ束帯なるへし然るに匂兵部卿の宮は直衣下襲にて答拜ありめつらしきことなるへし

やかてつかさのろくたまふあるしの所にとさうしたてまつり給ふを

西宮抄大將初任事除目畢大臣以下着ニ議所座一大將暫留ニ於射場殿一令レ奏レ慶拜舞了〔此間可レ奏ニ饗事一歟〕渡ニ南階前一退出之間近衞等候ニ庭際一忽然發ニ物聲一撤レ籥放歌子レ時率ニ公卿及次將以下一出從ニ敷政門一向ニ里第一少將以上垣下公卿各着座〔上卿着ニ外座一次將在レ内〕先近衞以上六位官人於ニ庭前一歌舞訖着ニ庭中座一次公卿及中少將等座立レ机相次立ニ机食床於庭中一給ニ六位以下肴物一盃酌無算之後被物絹等各有レ差但新任大將若立ニ里第一者引可レ到ニ其家一歟賭弓勝方饗准レ是可レ知此日以ニ親王一爲ニ垣下一蓋故實耳勘物云大將上﨟不レ來有ニ親王一着ニ中將上一今案大將初任の時そのかたの中少將以下を請して大饗の事を行ふて祿を給ふ也匂兵部卿のみこを饗所へ請し申さるゝになやみ給ふ人によりておほしめしたゆたふとなり

ゑんかの御子たちかんたちめ　垣下の王卿といふはたとへは請伴するを垣下とはいふなりかいもとゝいふ事也公卿は大將より上首の公卿はむかはさるなり親王はむかふ其時大將のつき所かはる事あり匂宮も垣下の座に請し申さるゝ也河海に親王尊者

の例たつぬへきよしゝるさるおやまれること也垣下とはいふへし尊者とはいふへからす

とんしき五十くこてのせにわうはんなと

李部王記天暦四年七月七日是夕藤女御有二産養事一産婦饌衝重十六合破子食七荷屯食八具恭手錢二萬贈物兒衣襁褓各五重納二支佐木筥二合一有二白絹褁一使下大藏丞藤原守忠傳レ言云物雖二鄙陋一今宮所レ贈盍可レ有レ意報云恩問備至恐喜兼深況承二宮恩命一忻恐無レ極即纏二頭白細長一重袴一具一守忠令レ通二出門一追傳レ報賜レ祿

おほんむつきなりとそ　李部王記にみえたり

宮のおまへにせんかうのおしきたかつきともにてふすくまいらせ給へり　粉熟は五穀を五色にかたとりて粉にして餅になしてゆてゝ甘葛をかけてこねあはせてほそき竹のつゝをして其中にかたくをしいれてしはしをきてつき出てその姿雙六の調度のことくまなふ也うつほの物語内侍の上きたのおとゝよりまら人の御さかなおほみきまいらせ給それにうちつゝきてふすくまいれり

みかとの御むこになる人はむかしも今もおほかれとかくさかりの御世にたゝ人のやうにむことりいそかせ給へるたくひすくなくやありけん

嵯峨皇女潔姫適二忠仁公一宇多皇女源朝臣順子適二貞信公一醍醐皇女勤子内親王配二右大臣師輔公一同皇女靖子内親王配二大納言藤原師代卿一生二一女子一韶子内親王配二大納言源清蔭卿一後配二河内守橘惟風一村上皇女保子内親王配二貞信公一盛子内親王配二右大臣顯光公一　今案此等之例皆以脫屣の後或は崩御のゝちたゝ人のめになり給ふまさしく在位の天子の御女臣下に配することはまれなるなり嵯峨皇女潔姫のほかはたしかならさるなり漢朝には其例まゝありそれをは何すといふ也

われはまして人もゆるさぬ物ひろひたりやと　これは夕霧のおとゝの一條の宮のことをの給ふ也一條宮はきゝ給てはつかしう思ひ給ふ也

宮のわか君のいかになり給ふ日かそへとりて　子誕生のゝち五十日をはいかといふ百日をはもゝかといふその日儀式ありて餅をそなふる也

かくめゝしくねちけてまねひなすこそいとをしけれ

これはものかたりかく人のかほるのことをいふなり

四月一日ころせちふとか　四月の節に入らぬさきに三條宮にわたり給ふへき事也

ふちつほにうへわたらせ給ひて藤の花のえむせさせ給ふ

西宮記云天暦三年四月十二日於飛香舎有藤花宴。以殿上御倚子立南廂（有毯代）南廂東一二三間巻簾（垂母屋）前立四尺屏風三帖同廂西中戸東面東一間障子西面立五尺屏風二帖敷信濃廣莚中敷毯代立御倚子南簀子敷同莚同簀子中間以東敷疊公卿座當庇中戸南立五尺障子其西在御酒具赤漆火爐一口有黑漆臺同机二前其上在滿心瓶令咋金銅杓件鳥入御酒銀御銚子一口加土器臺盤炭取當公卿南前庭敷紫端疊四枚其南敷二枚殿上人座仰掃部寮令敷軒廊東小庭疊二行西面北上樂所座未剋御出召右大臣次諸卿參上次侍臣着座（四位五位北六位南）供御膳具註維時朝臣率五位六位自南庭渡西昇置物御机二基立御座西橡木作在木蘭地綺敷物臥組等御折敷四枚立御机上淺香折敷沉裏以金閇之朽葉色唐羅花文綾敷物在心葉藤花間組等件組折敷一各四加牙象臺表紫檀裏蘇芳在銀箸供膳（折敷二枚以橡木作無心葉銀等）御着四種生物干物窪坏以銀作土器（以黄土塗）之供了陪膳退下給臣下衝重供御酒（銀盞維時朝臣供之伊尹取銚子）給臣下（義方朝臣給）一獻餛飩給臣下大臣奏聞召樂所別當中納言源朝臣令召樂人別當仰藏人召之樂所參入奏調子有歌事（立文臺南庭）立置物御机供御硯紙給臣下獻題（維時）大臣奏准延長例地下人一兩獻歌召庭燎（月光明也）獻歌伊尹取文臺右兵衛佐清正講之左少將朝成藏人頭雅信朝臣秉燭地下獻歌者源循藤原兼家灌木有時々方等云々講歌大臣取御製召公卿侍臣堪歌者奏絲竹大臣納言渡西大臣取御杖源朝臣取御琴譜進御前奏云延喜御時御琴譜云々源朝臣等稱物名授頭藏人置御机琴出袋彈御兼家被聽昇殿（大臣共拜）賜祿（納言女裝源氏小袿也・御袴袿也四位白細長也）大臣給御衣一襲又以女裝給之

みなみのひさしのみすわけて御いしたてたり　天暦三年記にみえたり

みきのおとゝあせちの大納言　天暦三年右大臣師輔

公爲ニ公卿上首一
みなみのにはのふちの花のもとに殿上人のさはしたり　天暦三年南庭藤花下賜ニ近臣座一
こうらうてんのひんかしにかく所の人めして　天暦三年軒廊東設ニ樂所座一
故六條院の御てつからかきたまひて入道の宮にたてまつらせたまひしきんのふ二卷五えうの枝につけたるをおとゝとり給ふてそうしたまふつきく〵のさうの御ことひはわこんなとすさくいんのものともなり
天暦三年右大臣捧下先皇賜ニ勤子内親王一箏譜三卷上左衛門督執ニ赤笛一管一（元貞保親王笛也）左兵督衛將ニ螺箏一面一（元貞（此間保字脱歟）親王物有ニ奇音一）奏レ名而獻レ之今案天暦三年の藤壺の女御安子は九條右丞相の御女也延喜御門御女勤子内親王はすなはち九條殿の室になり給へりこれによりて延喜の勤子内親王にたまはせ給へる箏譜をたてまつり給し事を今の物語に六條院の女三宮にたてまつり給し琴の譜にかきなせるなり河海等の諸抄にもみえさることなり
ふえはかの夢につたへしいにしへのかたみのを　かしは木の右衛門督の笛なり

みやの御かたよりふすくまいらせ給へりちんのおしきよつしたんのたかつきふちむらこのうちしきにおりえたぬいたりしろかねのやうきなりの御さかつきへいしはこんるりなり
天暦三年沈香折敷四枚紫檀臺以ニ土器樣銀器一供ニ御肴粉熟一有ニ赤漆火爐銀銚子一　寛治五年萬壽元年天盃用ニ瑠璃御盞一
おとゝはしきりてはひんなかるへし　夕霧のおとゝ公卿の上首にてまいとさか月をはしめ給ふによつてこのたひは位次をみたりて天盃を大將に給ふ也
大將にゆつりきこえ給をはゝかり申給へと御けしきもいかゝありけん御さかつきさゝけてをしとの給へることはつかひもてなしさへ
賜ニ天盃一例　天暦七年十月廿八日菊合式部卿親王重明賜ニ天盃一寛弘四年四月廿七日密宴中務卿具平親王賜ニ天盃一（已上賜親王例）永延二年三月廿五日攝政六十賀攝政（御堂殿）給ニ天盃一永祚元年二月十六日朝覲行幸御堂殿賜ニ天盃一寛弘三年三月四日行幸御堂殿（于時左大臣）給ニ天盃一同五年十二月廿日後一條院御百日御堂殿給ニ御盃一（已上給ニ執政一例也）

今案此後萬壽元年宇治殿嘉保三年京極殿賜二上皇御盃一寛喜三年光明峯寺攝政永德元年室町第行幸鹿苑院大相國等給レ之也為二後學一以レ次書レ之をしといふこと河海の說はみな今案なり一かうにしらぬことなりしれらんをは知れりとせよしらさらんをは不レ知とせよこれ知也と孔子の格言もあれはしはらくさしをくはこれ故實なるへし但永延二年三月廿五日　小右記云攝政六十賀也左大臣起座獻二御盃一右大臣取二御銚子一主上給二御盃於攝政一此間被レ仰二壽言一或者云萬歲千秋云々　攝政又有二答奏一云々可レ尋レ注攝政下二庭中一拜云々　かやうの例もあれはをしといふは祝言につきたることにてもやあるらんしらすかし

さし返したまはりておりてふたうし給ふ　天盃を給ふ時は土器をめして御さかつきのさけをうつしいれてのむ物也そのかはらけをさし返しとはいふのみおはりてのちかたはらの階よりくたりて御前にむかひて舞踏して座にかへりつくこれさたまれる作法なり

君かためおれるかさしはむらさきの雲におとらぬ花のけしきか　拾遺集延喜御時藤つほの藤花のえんせさせ給ひけるに殿上のおのことも和歌つかうまつりけるに藏人藤原國章藤の花都のうちはむらさきの雲かとのみそあやまたれける

おいやきゝし人なゝりとおほしいてゝ　おいはおうといふ心さることありといふ心なり

くるまはたかくおるゝ所はくたりたるを　これによりて女の車におりのる時は打板といふ物をして車のまへいたとゑんとにわたすもの也

わかなへ色のこうちき　うすあをのすこしすきたる色也夏のきぬの色也

ほめつるさうそくけにいとかはらかにて　辨の尼君のきたるきぬ也いかなる人のほめたること上にみえたり

花鳥餘情第廿八　宇治　東屋

東屋宇治六

詞と歌とをもて巻の名とせりかほる廿二歳の秋なり

つくは山をわけみまほしき御こゝろはありなからはやまのしけりまて　筑波山は常陸國にありあつまやの君は常陸前司のまゝむすめなり是は薫大將の心さしをいふ上の巻の末にかけてみるへし

かみの子ともはゝなくなりにけるよしなとあまたあり　常陸前司の子藏人式部丞源少納言妻讃岐守妻以上前腹也　藏人右近少監童少將妻以上中將腹なり

こゑなとほと〳〵うちゆかみぬへくものうちいふすこしたみたるやうにて　拾遺　あつまにてやしなはれたる人の子はしたゝみてこそ物はいひけれ

いとまたうすきまなき　全なり

かうしんなとし　庚申經云人腹中有二三戸一爲二人大害一庚申之夜上告二天帝一記二人品過一絕二人生籍一庚申之夜不レ寢則不レ得レ上レ天許渾詩年長每勞推二甲子一夜寒初共守二庚申一

ないけうはう　内敎坊は大とのゐのかたはらにある所なり樂人舞姫なとのある所なり

うちあはぬみやひこのめる人の　みやひは伊勢物語などにあり豔なる心なるべし

この人はいもうとのにしの御かたにあるたよりに　にしの御かたはうき舟の君のことなり媒介する人のいもうとにしの御方にあるをいふなり

めのわらはゝ　女子のこと也

ほとりはみたらんふるまひ　家のぬしには見參せすしてそのあたりに經廻することなり

きら〳〵しくあてひてもおはしまさす　あてひはあてやかなるといふ心也

またころの御とくなきやうなれとも　孤露也みなしこのやうにたのむかたなき心也

ひをたにとりかへてちきりしくれにそおはしはしぬける　これはこれよりのちのことをまつかきたりまことはいまた此時までは少將はきたらさる也下にくはしくみえたり

みこの御むすめをはようせさせ給ふ君たちあらしようは用なりしなのたときはようにたゝぬ心なり

みかとの御かしつきむすめえ給へる君は
國史云正三位源朝臣潔姫者嵯峨太上天皇之女也母當麻氏天皇選レ聟未レ得ニ其人ニ太政大臣正一位藤原朝臣（忠仁公事也）弱冠之時天皇悦ニ其風操超レ倫殊勅嫁レ之清和太后其長女也潔姫（染殿后之母也）性能ニ琵琶ニ頗可ニ賞翫ニ

たゝあらゝかなるあつまきぬともを　東絶見ニ善相公意見ニうつほ（藤原君）ふときあつまきぬ三井のみそにそめ又（祭使）ふるめきたるはこふたつにあつまきぬ一はことをたあふみのあや一はこ

この御かたにまらうとすみつきぬれは　西の御かたなり宮の姫君のこのほとすみ給しかたなり

我も故きたのかたにはなれたてまつるへき人かは
こ宇治の宮の北方（中君母）のめいに中將君はあたるなり中君とははゝかたのいとこなれははなれぬ中とはいふ也

こよなき人の御けはひを　中の君の御ことなり

なてうことなき人の　伊勢物語の詞なり

なをしきてたちはきたるあり　北山抄云外衛佐等任レ意不帶之至に近衛次將帶劒上レ殿無レ妨仍宿侍之時副ニ於宿物ニ持上自餘不レ能ニ持上ニ蜻蛉日記馬頭はなよらかなるなをしたちはきれいのことなれとあか色のあふきすこしみたれたるもて

かしけたるめのわらはを　うつほ（くらひらき）めのわらはのかしけたるをこそむまめ

うきしまのあはれなりしこともきこえす　しほかまのまへにうきたるうき嶋のうきておもひのある世なりけり　今案常陸國に信太浮嶋といふ所ありこれをうき嶋といふにや又しほかまのうきしまは奥州なりそれをいふにや

かゝるほとのありさまに身をやつすはくちおしき物になん　受領の妻になりたるを身をやつすとはいふ也

かゝる御心をやむるみそきをせさせたてまつらまほしく　みそきは人のおもひをやむるはらへなりはらへには又人かたをとりなせは手習の君を故姫君のかたしろにしてかほるにみせたてまつらんと思ひ給ふなり

いてやそのほとけもねかひみて給ふへくはこそ　かほるの山さとの本尊にもといひしを中君の佛とならんとの給へる事やとり木の巻にあること也

つゐによるせはさらなりや　古今　おほぬさと名にこそたてれなかれてはつゐによるせもあるてふものを業平

いとうれたきやうなる水のあはにもあらそひ侍るかなかきなかさるゝなて物はいてまことそかし

水のあはゝはかなきことをいふ撫物の水になかれとまるをはかきなかしやる物なりたとへは中の君の我身のかはりに此人を出し給はんと思ひたまふことをかほるのかくの給ふなりなて物も人かたおなしことなり

天河をへたてゝもかゝるひこほしのひかりをこそまちつけさせめ　あけまきの巻には匂宮のことを彦星にたとへていへりこゝにはかほる大將のことをひこほしの光といへり上の詞には七夕はかりにてもかやうにみたてまつりかよはんはいといみしかるへきと中將の君の中君のことを申侍り男をはひこほしといひ女をは七夕といへる也

えひすめきたる人を　えひすは東國の人をいふ也

こつせんたんとかや　行成卿　權記長德五年十月九日於二山階寺一拜二見牛頭栴檀等一

ほとけはまことし給ひけり　經云實語者不誑語者云々

いはほの中にともいかにとも　古今　いかならんいはほのなかにすまはかは世のうきことのきこえこさらん

あくるもしらすおほとのこもりたるに　玉すたれあくるもしらすねしものを夢にもみしと思ひけるかな

御ゆするのほとなりけり　ゆするは沐浴すること也

九十月はいかてかとて　九月はいむ月なり十月はかみなし月にて髪あらふにはゝかる月なるへし

見給へこうして　みつかれたる心なり

かまのさうをいたして「降魔相か」不動尊なとのやうに忿怒の相をあらはしたる也

かの殿にはけふもいみしくいさかひ給けり　常陸殿の事也

うつしむまともひきいたして　移の鞍おきたる馬なり

かの君はいかてうしとおもはんこと　これはかほる大將のこと也

身のさははふれすなりにけるこそ　はふれすは不レ放レ埒心なり
いとおほとかなるあてさは　あてさはあて〳〵しさ也
かゝるすちの物にくみはあて人もなきものなり
うはなりになることをはいかなる上臈もにくむならひ也
いたちの侍らん心ちのし侍れはよからぬ物ともににくみうらみられ侍ときこゆ　いたちのなきまのてんほこりといふことありてんといふけたものはいたちのなき時にほこるをいふ常陸の北のかた浮舟の君をいたちになすらへていへり心は此人を宮の御かたにあつけたてまつりて心やすく思ひてわか殿にてほこるやうなれはよからぬ物ともはよのむすめなとにおのれをはつきにするやうにうらみくねるといへる也
けしきはみたる御まかけてこそわつらはしけれ　いたちのまかけといふこと手習の巻にもみえたりいたちは人をみてあやしくおもひてまかけをさす物なりうき舟の君をいたちにたとふるにつきて中の君に心をゝき給ふやうなるけしきのあるをまかけこそわつらはしけれと中君ののたまふを母君のきく事もあれは心のおにゝはつかしく思侍ると也
ふかき山のほいはみさほに侍へき　みさほは松のみさほなといふやうにかはらぬ心をいふ也
かの家にもかくろへてはすへたりぬへけれとしかけつりならんをいとをしとおもひて　常陸の家にもかくしてはいつくにもをくへけれと實の子ともにけをされてあらんかいとをしさにかくはふらかすなりしかは然也
いと心うくこの人によりかゝるまきれともゝあるそかし　この少將ゆへに宮のひめ君をもてあつかふをいふ也
かの宮の御まへにていと人けなく　二條院にて少將のなをしきてたちはきたるすかたをみし事なり
しめゆひし小萩かうへもまよはぬにいかなる露にうつるした葉そ　故宮の姫君をはしめは少將にやくそくしたるをひたちのすけの女にひきちかへられたることをいかなる露のうつる下葉そと母の中將の君のよめるなり

あやにくたち給し人の御けはひも　にほふ宮の御こ
と也
はゝ君たつやといとあはれなる文をかきてをこせ給
河海云やと屋戸宿なり但恐不レ得ニ其心一猶可ニ了見一
云々　今案宿　の義ならは三條わたりの母のわた
くしのやとりをいふへしそこにうき舟の君のゐ給
へれは母君のかたより此やとへあはれなる文をゝ
こせたると心得へし
ひたふるにうれしからまし世の中にあらぬところと
おもはましかは　拾遺　世の中にあらぬ所をえてしか
なとしすきにたるかたちかくさん　穏わひてへし
とそおもふ世の中はあらぬところやいつくなるら
ん
うき世にもあらぬところをもとめてもきみかさかり
をみるよしもかな　母の中將のきみのよめるなり
さまかへてけるもくちをしきさまて　故宮のおはしま
しゝ寝殿をつくりあらためたる事也
あやしきこ家にかくろへ物し給めるも　三條わたり
の家なり
あたこのひしりたに時にしたかひてはいてすやは有
ける　柿本の紀僧正眞濟あたこ山たかおのみねに入
て十二年山をいてすそのゝちさかの帝その苦行を
きゝ給て内供奉十禪師に補せらるそのことをいへ
るにや
人わたす事も侍らぬに　後撰　人わたすことたになき
をなにしかもなからのはしと身のふりぬらん
いかたうめのかたてにやと　青表紙云未レ勘云々土
左日記云おきなひとりたうめひとり〳〵ある中に
あはちたうめといへる人のよめる又あはちしまの
おほいこともありうつぼ　藤原君　なかとしたうめに
このよりまさのまちとをなるよしはこよひのほた
くひにいかゝみえつるとしたうめこよひのほたく
ひいとよかりそ又とこなるといふ物語にもあつま
たうめとて人のいのりしたる事あり今案いかさま
にもみこなるへし國々にある事にや
宮に御らんぜさせ給ふ　宮はかほるの室をいふ也
うちよりたゝのおやめきて入道の宮もきこえ給へは
うちは内裏なりかほるはうちの御むこなれはしう
とかたをおやめくといふ也

かの殿にこそかくなんと　かの殿は二條院の中の君の事なり

さとひたるすのこのはしつかたに　さとひたるはさとなれたるなりこゝにはふるひたる心にいへるにや

ひたのたくみもうらめしきへたてかな　飛騨のたくみは番匠の惣名也

おほとれたるこゑして　ひさいともの行かふ聲なり

かゝるよもきのまろねにならひ給はぬ心ちに　諸抄の説みなよもきを車の心にいへりしからは車の中にねたるといふへきにやしかれとも薫大將はあつまやにては車よりおりて女君とかたらひたるうへ車をはさらにひき入たるよしみえたれは車なからまろねしたるとみえ侍らす愚意に了簡し侍るに上の詞にたひのやとりはいとつれ〳〵にてにはの草もいふせき心ちするにとありしからはよもきはたゝよもきふのやとのこゝろにてこそあらめあれたる所に一宿するをよもきのまろねといはんはさらにたかひ侍るましきにや

かはらすきほうさうしのわたり　法性寺は貞信公建立し給へり尊意座主は貞信公の師檀たる故に法性房の名をとりて法性寺とはいへる也

おとしかけのたかき所に　車やるみちのたかき所よりひきゝ所にやりおとすをいふ山みちなとにある事也

かたみそとみるにつけてもあさつゆの所せきまてぬるゝ袖かな　故姫君のかたみとおもひ給ふ心なり

あま君はことさらおりてちらうによするを　あま君はおなし所にてはおりすしてちらうによするはおそれたる心なり

みちはしけかりつれと　みちのあいたは草木のかけをわけし心をいふにや

そのやまとことの葉もつきなくのみならひにけれはましてこれはといふ　やまとことの葉は和琴の事なりそれさへつきなくならひたれはましてさいはらなとにあはせんことは思ひよらぬ心也

さるはあふきの色も心をきつへきねやのいにしへをしらねは　上の詞にしろきあふきをてまさくりにしたるよしみえたり班女か秋の扇は後にすてられたることを侍從は思ひもよらて楚王の琴の聲をのみ

めてたると也
さとの名もむかしなからにみし人のおもかはりせる
ねやの月影　これもさきの巻にうらめしといふ里の
名とうちをいひしにおもひよせたるなり

花鳥餘情第廿九　宇治　浮舟　蜻蛉

浮舟宇治七

卷の名は歌をとれる也かほる大將の廿三歳の春の事也

宮なをかのほのかなりしゆふへを　匂宮の二條院の對にてうき舟の君をみいて給へること也

かの人はたとしへなくのとかにおほしをきて　これよりはかほるのうちかよひの事也

又宮の御かたのきゝおほさんことも　是は二條の中の君の御こと也

宮の御かたにはなをたゆみなく　これも二條の宮にかほるのかはらす心よせたまふ事也

つゝみふみのおほきやかなる　河海云たて文の事なり云々今案たて文は別なりつゝみ文はたき物なとのやうに文をうすやうにてつゝむ事也嫁娶の後朝の艶書なとはみなつゝみ文也此つゝみやうは舊記にみえたりこゝのたんに又すく〳〵しきたて文とりそへてあふなくはしりまいるとみえたりたて文つゝみ文二やうありとみえ侍り

このこはかねをつくりて色とりたるこなりけり　金にてひけこをつくりて緑青にて色とりたるへし

またふりに山たち花つくりてつらぬきそへたる枝に　木の枝に山たち花を造花にして卯つちの枝につらぬける也

またふりぬものにはあれと君かためふかきこゝろにまつとしらなん　またふりぬはまたふれぬなり杈椏にそへたりまつとしらなんは松にそへたるなり

おさなき人のとりつらんを　わらはの事也

御ふみのことにつけてつかひ給ふ大內記なる人の御文は作文なとの事也大內記は式部少輔兼たりみちさたとなのりするよし下にみえたり

このわたりにはいかてかうとからぬにはあらん　此わたりは二條の君とうとからぬをあやしと思給ふなり

大將はけふあすはよにおはせしなと　よにはよもといふ詞なり

あやしきまて心をあはせつゝゐてありきし人のために　かほるのにほふ君を宇治へつれたてまつりて中

の君になかたせてし事也
右近物おるとて　おるはぬふ事を云也
かくてわたらせ給なはとみにもえかへりわたらせ給
はしを　京の母上の家にわたり給なはふとはかへり
たまふましき心也
御物まうてのゝちは　うき舟の君の石山へまうて給
はんとする事也
このおとゝのいときうにものし給て　おとゝは母上
の事也きうは急也あつまやのやとへ母上のひめ君
をあはたゝしくむかへんとし給ふことなり
右近なとてこのまゝをとゝめたてまつらすなりにけ
ん　まゝは姫君のめのとをいふなるへし
けににくきものありしとおほしいつるも　二條院に
て匂宮の御手をつみたりし人をの給ふなり
かゝるさかしら人とものおはせて　六君のはらに御
子のなき事を云なり
とのにたにまめやかに思きこえ給ことかはらすは
この殿はかほる大將を申也
なにはかりのしそくにかはあらん　しそくは伊勢物
語にもあることは也中の君といかほとの親類なれ
はかやうにかよひたるらんと匂の思給ふ也
御車は日たけてそあらんといひて　母上のかたより
のむかへの事を云也
なかのふかいひつれは　大藏大輔仲信は薫の家人也
大内記道定かしうと也
ときかたは京へものして　時方は宮の家司なり出雲
權守とみえたり
右近いてゝこのをとなふ人にかくなんの給はするを
をとなふ人は大内記を云也
女いとさまよふ心にくき人をみならひたるに　これ
はかほるのことなり
時のまもみさらんにしぬへしとおほしこかるゝ人を
これは匂宮の事なり
なをあらんまゝにの給へいみしきけすといふとも
これよりは匂宮の詞なり
日たかくなるほとにむかへの人きたり　母上のかた
よりのむかへなり
とのなんおはするといひたらんに　薫のおはします
といはんとすれは京にさはかりの人のおはしまさ
ぬはかくれあるましきほとにさもえいはぬとなり

よへよりけかれさせ給て　月のさはりの事なり
おほい殿の君のさかりにはひ給へるあたりにては
　六君にならふへくは及ふましき人をたくひなく思
　ひ給ふと也
よろつにたはからんほと　今より宇治かよひの御事
　をいふ也
つらかりし御ありさまを中々なに丶たつねいてけん
　二條院にての事也「浮舟の體也」
心をはなけかさらましいのちのみさためなき世とお
もはましかは　人の心もさためなけれはいのちにか
　きらぬ心なり
よさり京へつかはしつるたいふまいりて　夜に入て
きたるをよさりといふ左衛門大夫といひて右近か
　しる人なり
す丶ろなるけそうの人をさへまとはし給て　けそう
は一には見處（ケンソ）の人をいふにやそはあたりの人をけ
んそといふへし「見證　顯證河」
又いかにそやよのたとひにいふこともあれは　我身
のとかをはしらて人のうへをはいふこと也かはる
の我とたえをはしらす女をうらみ給ふへき事也

からき丶にくき事のもりきこえたらは　中君とかほ
　る大將とのあはひのこと也
かの人みつけたる事はしはししらせたてまつらしと
　うき舟の君の事也
時方とめし丶たいふのずさのもの丶心もしらぬして
　左衛門大夫か從者して御文を右近かかたへつかは
　したる也ときかたはそのときの申次をいふ也
我はとしころみる人をもみな思ひかはりぬへき心ち
なんすると　これは匂宮の事也
ついたちころのゆふつく夜に　藤裏葉の卷にもある
　事也
さむきすさきにたてるかさ丶きのすかたも　かさ丶
きといふはまつ鵲のからすなりしかれともこの物
語には鷺をかさ丶きといへり鵲の橋を繪なとにか
くにはからすをもかき又しらさきをもかく也　家
隆御歌かさ丶きのわたすやいつこ夕霜の雲井にし
ろき嶺のかけはし此歌はかさ丶きの色をしろき物
にたとへられたり所詮かよはして用へき事にこそ
わすれ草を萱草ともいひ又忍草の異名ともいふか
ことし

京にはともまつはかりきえのこりたる雪　春の雪を
は待侍と詩にもつくれり友まつ心也
しるへのないきはしきふの少輔をなんかけたりける
いつかたにもこと〳〵しかるへきつかさなから　大
内記は詔書宣命位記なとをかくつかさ也式部少輔
は獻策省試なとつかさとる職なりいつれもこと
〳〵しき職なり
あふなからぬを　あふは奥なりあふなきは心あさき
也
この宮をいとやんことなくて　かほるの事也
かのみゝとゝめ給し一事はの給いてぬそ　かほるの
衣かたしき今夜もやとうちすし給ひしを匂宮のね
たるやうにてきゝ給ひしことをいふにや
いみしくかしつかるめるまらうとのぬし　時方をの
給ふ也
木はたのさとにむまはあれとなと　君をおもへはと
いふ心なり
この中そらをとかめ給ふ　いつかたも取はつして中
やうの身となるへきとの給ふときゝなし給て宮の
とかめ給ふ也

こきゝぬにこうはいのおり物　濃打のきぬなり
侍従もあやしきしひらきたりしを　しひらはうは裳
なり褶の字なりその裳をとり給てといへるはやか
てうは裳のこと也
ひめ宮にこれをたてまつりたらは　女一宮の御事に
や
心やすくもえみす　匂宮の文をえみぬと也
かのうへのおほさん事よろつかくれなきよなりけれ
は　かのうへは中の君の御こと也
ましりなはときこえたるを宮はよゝとなかれ給ふ
しら雲のはれぬ雲井にましりなはいつれかそれと
君は尋ねん
あやにくにの給ける人はた八重たつ山にこもるとも
これは匂宮の御ことなり
いかなる御心ちにかとおもへといし山もとまり給ひ
にきかしといふも　たゝならぬ御心ちかとおもへは
さはる事ありて石山まうてもとまるとありしかは
それもさにてはならぬ也
あり明の空を思ひいつるも　にほふ宮にあひ給し事
也

さいつころわたしもりかまこのわらはさほさしはつしてをちいり侍　日本紀云大山守皇子墮ニ菟道河一而沒歌云ちはや人うちのわたりにさほとりにはやけん人しわひもこにせん

みたらし川にみそきせまほしけなるを　戀ゆへにかくなやむとかたへの人はしらぬと女君の心に思給へる也

人すくなゝめりよくさるへからんわたりを　これより時君のこと葉也

雨ふりし日きわひたりし御つかひともけふもきたりける　なか雨のころのことなり

とのゝ御すいしんかの少輔かもとにて時々みるをのこなれはまうとはなにしにこゝにはたひ／＼まいるそととふ　少輔は式部少輔なり宮の御つかひは少輔かもとにて常にみるもの也まうとは眞人なり人を稱する詞なり

まことはこのかうの君の御文女房にたてまつり給ふといへは　かうの君は出雲權守時方也

左衛門のたいふのいへにやいると　左衛門の大夫は時方か家ぬし也

おとろきて御ひもさし給ふ　直衣の紐をはつして休息し給ふかおとゝをみ給て紐をさし給へる也

むらさきのうすやうにてさくらにつたける文を　さくらかさねはうらむらさきなれは薄様の色もたよりあるにや

むかしをおほしいつるにもえおはせさりしほとのなけき　匂宮のむかし中君の御もとへかよひ給し時の事也

浪こゆるころともしらす末の松まつらんとのみおもひけるかな　古今　君をゝきてあたし心をわれもたはすゑの松山なみもこえなん

まゝもいまに戀なきはへるはつみふかくこそみ給ふれ　まゝはかの女のめのとをいふ也まゝとはめのとをいふにや

人のかくおほしいそくめりしかたにも心もよらす　大將のむかへ給はんとて御めのとなとのいそく事をいふ也

みなこのうとねりといふものゝゆかり　內舍人帶劍具ニ兵仗一武勇者也　兼坂東掾也

むかしはけさうする人のありさまのいつれとなきに

おもひわつらひてたにこそ身をなくるためしもありけれ

萬葉卷第十六曰昔者有ニ娘子一字曰ニ櫻兒一也于レ時有ニ二壯士一共挑ニ此娘一而捐レ生格競貪レ死相敵於是娘子歔欷曰從レ古來于レ今未レ聞未レ見一女之身往適二門矣方今壯士之意有レ難ニ和平一不レ如妾死相害永息爾乃尋ニ入林中一懸レ樹經死其兩壯士不ニ敢哀慟一血泣連レ襟各陳ニ心緒一作歌二首

春されはかさしにせんと我思しさくらの花はちりにけるかな」いもか名にかけたる櫻花さかはつねにやこひんいやとしのはに

或曰昔有ニ三男一同聘ニ一女一也娘子嘆息曰一女之身易レ滅如レ露三雄之志難レ平如レ石遂乃彷ニ徨池上一（耳無池也）沈ニ沒水底一於レ時其壯士等不レ勝ニ哀頽之至一各陳ニ所心一作歌三首（娘子字曰縵兒有ニ三歌一畧レ之）

さはかりめてたき御かみつかひ　色々のうすやうをつかふ事也

いさとけなり　さと〳〵しき也用心する心なり

京よりとみの御文あるなりといふ　とみ　といふ詞伊勢物語にありいそきたることをとみとはいふなり

さらにこよひはふようなり　不用なりこよひは御返事も有ましき心也

さとひたるこゑしたる犬とも　さとひたるは里なれたる心なり又さと〳〵しき心にもかなへり

山かつのかきねのをとろむくらのかけにむかはきといふものをしきておろしたてまつる　源氏一本あをりといふ物をしきてとあり大和物語云草の中にあふりをしきて女をいたきてふせり　うつほ第一云かねまさの大將山のうつほ木にたつねきてむかはきをときてこけの上にしきて女にあひたることあり今案あをりむかはき兩本相違ありといへとも物語の證據いつれも分明なれはあはせてこれを用へし但うつほの物語のかねまさの大將の事はその川北野の行幸なり鷹飼の人はかりきぬをきてむかはきをはきゑふくろをつくる也にほふ宮も宇治のかよひにかりきぬをき給ふゆへにむかはきをはき給ふにやあをりは馬のくらにつくるものなれはこれ又ちかひ侍るへからすしちのはしかきしきのはねかき古來これをあはせもちゐたる准據なるへし

火おやうしなといふ　誰何火行とかきてひおやうしとよむ也夜行する聲也

ものはかなけにおひなとして經よむ　かけ帶なり

ひつしのあゆみよりも程なくなる心ちす　けふも又むまの貝こそふきつなれひつしのあゆみちかつきぬらん

蜻蛉宇治八

巻名は詞にも歌にもみえたりかほる廿三歳の春より秋までのことあり

かしこには人々おはせぬをもとめさはけとかひなし　浮舟の巻の末にひめ君の我身をうしなはんと思給へることはみえたりまさしく身をなけ給へることは又人のしらぬことなれはしるすにをよはすその人のおはせぬときにこそはしめてもとめさはき侍れ物かたりのつくりさまあり〱しくかきなしたるものかなや

物かたりのひめ君の人にぬすまれたらんあしたのやうなれは　住吉の物かたりにひめ君の母のめのとのすみのえにありけるかもとへうせていきけることとを云にや・・

京よりありしつかひのかへらす　母君の使也さきの巻にみえたり

おもひゆるかたなくて　思得也五音通なり

よへの御返をもあけてみて右近もいみしくなく　母君のかたへの返事云後に又なひみんことを思はなんこの世の夢に心まとはて巻數にかき付たる歌

かねのをとのたゆるひゝきにねをそへて我世つきぬと君につたへよ

たゝいかさまにせんか〱とそいはれける　わすれなんと思ふものゝかなしきはいかさまにしていかさまにせん

宮にもいとれいならぬけしきありし御返　女君歌からをたにうき世の中にとゝめすはいつこをはかと君もうらみん

いたくわつらふともきかす日ころなやましとのみありしを　うへのよへにはかにうせ給へるといふを使かくはしくもとはてかへりまいりてしか〱と申侍しかはにはかに死給へるをうせ給へるといふそとみやの心得させ給ていたくわつらふともきかぬうへ昨日の御返もさりけなくありしものをとの給

ふ也
ひと夜いと心くるしと思きこえさせ給へりし　匂宮おはして物なともえの給はてむなしく侍從はかりにあひ給てかへり給しこと上の卷にみえたり
人のいみしくおしむ人をは帝釋もかへし給ふなり
梵天帝釋は人間をつかさとる天なり帝釋は忉利天の主也或抄に宇治大納言物語に淨藏貴所か文善相公のうせたるをいのりいかしたることのあるをひけり又河海には宋玉か爲二屈原一に招魂の詞をつくれることをいへりいつれもこゝのことはにかなはす別に帝釋の人の死せるを返したる本緣あるへしかさねて尋しるすへし
人にもまれおにゝもまれ　人にもあれおにゝもあれといふ詞なり姫君のめのとのあつまひとなれはしたゝみていへる詞也
心えぬことゝもましるをあやしと思ひて　時方かおもふやうこよひやかておさめたてまつらんといふかとおもへは又めのとのからをたにみぬとなけくこれを心得ぬことのましるといふ也
こゝにはかくよつかすうせ給へるよしを人にきかせしとよろつまきらはすを　むなしきからのあるよしにてのちのことをいとなむこと也
おにやくひつらん　伊勢物語の鬼はやひとくちにくひたりといふは堀川のおとゝ國經の大納言なとの二條の后をとり返したてまつりし事をおにといへる也伊勢物語の鬼は人をたとへていふまことの鬼にはあらす又江談に小松帝時仁和三年八月武德殿松原に有レ鬼食レ人是則大恠也同廿六日帝崩御是其徵歟云々これは鬼の人をくふためし也
きつねめくものやとりもていぬらん　說文云狐妖獸也鬼所來云々寬平年中備中國に賀陽良藤狐にとられて十三日倉の下に有しことあり
さてはかのおそろしと思ひきこゆるあたりに　女二宮の御方さまの御めのとやうの人や大將殿のむかへたまへしときゝてたはかりひたしてうしなひたるらんとおもふなり
ありならはぬ人はこゝにてはかなきこともえせすはりあらふ事なとなり
大夫うとねりなとおとしきこえしものとも　右近大夫なりかはるのとのゐ人也

いとおやしくれいのさほうなとある事とももし給は
す　入棺拾骨なとやうの事也
かたへおはする人はことさらにかくなん　父母の中
にかたおやある人は京人のならひかく取おへす後
のことをするとゐ中人にいひきかする也
たゝいまはかなしさゝめぬへき事　薫のきゝ給て我
身ともをかこち給はゝかなしさはつきになるへき
事也
かの宮はたまして二三日は物もおほえ給はす　これ
は匂宮の思ひなけき給ふ事をいへり
その比式部卿の宮ときこゆるもうせ給にけれは　か
けろふの式部卿宮系圖にありきりつほの御門の御
子なれはかほる大將のをちにあたりて輕服き給也
たゝめゝしく心よはきと　この詞は上にもみえたり
こめかしくまた目にたつこゝろなり
さりやたゝこの事をのみおほすなりけり　これより
はかほるの心に思給ふ事なり
この君はかなしさはわすれ給へるを　是よりは匂宮
の思給ふ事也
まきはしらはあはれなり　匂宮の御心にまきはしら

たにかたみとなれはかほる大將をうき舟の君のか
たみとまもり給ふなり
今は中々上らうになりにて侍り　位たかくなれは身
をもくなりて人にもさいくによりあはぬ事をい
ふへし
いみしくおほしたりつるかな　これはかほるのわか
方にかへり給て匂宮の御ことをの給ふ事也
はゝのなをくしくてはらからあなるはなと　はら
からある人は跡にのこりたるおとゝいのため後の
わさをこととそきてすることといひつたへたること
なり
なかこもりし給はんもひなし　三十ヶ日の穢にふる
ゝ事なりひなしは無便なり
いきといきてたちかへらんも　行とゆきてのこゝろ
なり
きたの宮はこゝにわたり給ふ日なりけれは　二條院
に匂宮のわたり給ふ時也
しのひ音や君もなくらんはかもなきしてのたをさに
こゝろかよはゝ拾遺　しての山こえてきつらんほと
ゝきす戀しき人のうへかたらなん伊勢

こと〳〵しくうるはしくてれいならぬ御事のさまも

六の君の御かたにては人しけくうるさき事のおほきをの給ふなり

れいの人々めして右近をむかへにつかはす　左衞門大夫なとなり

しかつれなしつくりたちんけはひは　しらぬかほなる心なり

心えぬ御せうそこ侍りけるに　かほる大將歌　浪こゆる比ともしらす末の松まつらんとのみおもひけるかな　この御せうそこをいふなり

たヽこのきさらきはかりより音つれきこえさせ給し正月にうつえうつちなと中君の若君へうちよりたてまつらせ給しその時より匂宮はしり給へる也

人かたとつけそめたりしさへゆヽしく　人形は水になかすもの也

いつれのそこのうつせにましりけん　うつせはうつせ貝なり八雲御抄にも源氏をひかれたり河海にはうつせはむなしき瀬とかヽれたりおほつかなし

ゆヽしけれはえよらす　いま〳〵しき身なれは子うみたる所へもえよらぬと也

里のちきりもいと心うくかなしくなん　これもさとの名のうらめしき心也

よきはんさいの帶たちのをかしきなとふくろに入て「なをしの帶なり人に出さん用意かとなり」斑犀帶四位五位の人常に用レ之公卿服者は烏犀帶諒闇には斑犀をさすなり

六十僧のふせなとおほきにをきてられたり　三代實錄云貞觀十五年七月五日辛未延二六十僧於紫宸殿一限以二三日一轉二讀大般若經一此外六十僧をめす例おほし皆大般若經轉讀のためなり又御中陰の佛事に六十僧請せらるヽ事定例なり七僧も六十僧の中にあるへきなり

七そうのまへの事もせさせ給へり　七僧のまへは僧食の事也七僧法會は四十九日に行ふ事なり講師讀師呪願三禮唄散花堂達これを七僧と云也

ふたりの人の御心のうちふりす　匂宮とかほる大將とふたりなからうきふねのことをわすれ給はぬ事也

あたなる御心はなくさむやと　これは匂宮を申なり

きさいの宮の御きやうふくのほと　明石の中宮も式部卿の御事に輕服になり給ふなり

二の宮なん式部卿になり給ひける　匂宮の御このかみ也式部卿の闕に入給ふ也

小宰相の君といふ人のかたちなとも　かほるのしのひてかよひ給ふ小宰相君も一品の宮のめしつかひ給ふ人也

この宮もとしころいといたき物にし給て　匂君もこの人をたゝならす思給へるなりいたきとはねたき心也かほるにこゝろさしあさからぬをねたく思給ていひさまたけまほしくおもひ給ふ也

まめ人はすこし人よりことなりとおほすになんありける　まめ人はかほるなり小宰相の匂宮に心つよきを人にすくれたりとかほるの思給ふてうき舟のきみの事に思ひしり給ふ也

かくものおほしたるもみしりければ　かほるのうき舟の御事をなけき給ふをみしりて小宰相のきこえ侍るなり

このよろこひあはれなりしおりからも　小宰相のとふらひの詞をよろこひおもひたまふ也

みし人よりもこれは心にくきけそひても有かな　みし人とはうき舟の君をいふ也

なとてかくいてたちけんさる物にてわれもおいたらまし物をと　いてたちけんとは宮つかひにいたしたる事なりおいたらましは我かもとにおくへかりしものをの心なり

人しれぬすちはかけてもみせ給はす　かほるのかくおもふすちをは主にしらせ給はぬと也

はちすの花のさかりに御八かうせらる　中宮の御八講なり

五日といふあさゝにいてゝ　五日は結願の日なり朝座はてゝやう／＼御裝束をもとのことくあらたむるをいふ也

にしのわたとのにひめ宮おはしましけり　一品の宮の御事也

ものきゝこうして　こうは困なりこんの聲をこうといふ物にきゝくたひれたるこゝろなり

ひをものゝふたにをきてわるとて　延喜主水司式云凡供御氷者起二四月一日一盡二九月卅日一其四九月日別一駄以二八顆一爲レ駄准二一石二斗一五八月二駄四顆六七月三駄又日

凡供ニ中宮一氷者五八月日四顆六七月六顆今案氷物は六七月のあつき時は加増してもんとつかさより是をたてまつるなりいま物語にいへるは中宮へたてまつれる氷なるへし

しろきうすもゝの御そき給へる人のてに　これは一品の宮の御事也

中々物あつかひにいとくるしけなりたゝさなからみたまへかし　こほりをわる人に小宰相の君のいふ詞なり

このさうしはとみの事にてあけなからおりにけるを　とみの事はいそきたる事ありて障子をも引たてすしてつほねへおりたるといふ也

ひとへもはかまもすゝしなめりとみえつる人の　かほるのき給へるなをしすかたをいへりひとへもはかまもすゝしなれはさやめかぬによりてきゝつけ給はぬにやと思へり

つとめておき給へるをんな宮の御かたち　これはかほるの御あつかりの女二宮の御事なり

大貳にうすものゝひとへの御そぬいてまいれと　一品の宮のき給へる御ひとへをまね給ふ故なり

はうそくにおほゆる　傍側也もの〳〵しからぬすかたをいふ也

たゝいまはあへはべなんとて　あへはへは敢侍なり人のみぬ所にてはうすきひとへなともあへてき給へきにくるしからぬこゝろ也

御はかまもきのふのおなしくれなゐ也　これも一品の宮の御したてをいふ也

御くしのおほさすそなとは　御くしのおほくすそにたまりたるなとを云也

とりてひとつたてまつりなとし給　これも小宰相の君の氷を一品の宮にたてまつりし事を思出てかほるのまねひ給へるなり

れいの宮もおはしけり　匂宮のことなり

丁子にふかくそめたるうすものゝひとへをこまやかなるなをしにきたまへる　丁子染のひとへかたひらは夏の直衣こき花田にそめたる心にやことし匂宮は廿五歳はかりに成給へるなり

夏きること河海にみえたりこまやかなるなをしと

ゐをいとおほくもたせてまいり給へりけり　匂宮の中宮へ持參し給ふ也

女房してあなたにまいらせ給てわれもわたらせ給ひぬ　一品宮の御かたへ御ゑをまいらせ給て中宮は宮に御けさんあり大將もちかくまいりより給ふとなり

この里にものし給ふみこの　女二の宮の御こと也上の詞におほみやの御まへにてうらみきこえんとありはたして申給へる也

かやうの物時々ものせさせ給はなん　繪なとをいふ也

すきはみたるけしきあるかとはおほしかけさりけり　一品の宮をかほるのおもひかけたてまつり給ふとはしり給はぬ也

ひと夜の心さしの人にもあはん　小宰相の君の事なり

をいの君たちのかたをみやり給　夕霧の左大臣のきんたち也

ひめ君はあなたにわたらせ給にけり　一品の宮は中宮の御かたへわたらせ給へるなり

おほんはらからなれとこの君をはなをはつかしく　中宮とかほる大將と兄弟の事なり

人よりは心よせ給てつほねなとに立より給へし宮をこそいとなさけなくおはしますと思て　匂宮の御ことなりなさけなくおはしますと思て小宰相の君のおほんいらへをたに申給はぬと也

宮もわらはせ給て　此宮は中宮を申なり

宮の御二條の北のかたの御せうとなりけり　匂君の北の方中の君の御せうとうき舟の君の事なり

をはともはゝともいひはへなるは　浮舟の君の祖母とも又母とも人のいふなり

宮もいとあさましとおほして　中宮を申也

さらにかゝる事又まねふなといはせよ　中宮の御詞なり又かたりなとなせそとせいし給ふ也

せり川の大將のとを君の女一の宮思かけたる　かほる大將の今女一の宮思かけたてまつれるによそへていへる也

むかしの人ものし給はましかは　あけまきの君の事也

あさましくてうせにし人の　これよりはうき舟の君の事をいへり

きさいの宮にまいらんとなんおもむけたれは　侍從

は中宮へまいりなんと申侍るなり

この春うせ給へる式部卿の宮の御むすめ　かけろふの式部卿の御女なり

兵部卿の宮この君はかりやこひしきひとにおもひよそへつへきさましたらん　宮の君をうき舟の君におもひよそへ給へりちゝみこもはらからそかしとのたまへるなり

昨日けふといふはかり春宮にやなとおほしわれにもけしきはませ給ひきかし　宮の君を父君のいまたまし〳〵し時春宮にたてまつらすはかはる大將をとけしきはみ給し事也

水のそこに身をしつめてももとかしからぬわさにこそ　匂宮の御心のおほきことをいへりうき舟の君のことにおもひいたしたまへるなり

この宮れいの御心ならは　にほふ宮の御事なり

かの侍従はものよりのそきたてまつるに　侍従の君宮大將の二所まいり給へるをのそきてわからうき舟の君のことを思出したる也

物はさこそは中々侍りけれ　しる人にてなき人は中々はつかしくもなきことなり

かはかりおもなくつくりそめてける身におはさらんも　おもなくは面つれなき心なりかはかりの身にははちそゝやかんは中々身にあはぬといへる心也

をみなへしみたるゝ野へにましるとも露のあた名をわれにかけめや　女房とものおほくあつまりたるをかほるのよみ給へるなり

いとけさやかなるおきなことにくゝはへりとて　としよりの事としてけさやかにはゝからぬをにくゝ思ひ給ふへけれともとて此歌をよめるなり

とわれはなにかはつかしめさせ給　辨の御もとの返答なり

心なしみちわけはへなんよ　かほるの詞なり

わきてもかの御物はちのゆへかならす有ぬへき　人のみるをはち給ふことも有へしといひてたち給ふをかのをんなとちのこりなからんとおもひやり給ふを心うしと思へるなりこれは匂宮の御ことをかほるのおもひやり給へる事也

かの御方の中將の君ときこゆ　一品宮の女房たちなり

わかさもくちをしうこの御ゆかりにはねたく　さも

は詞なり一品の宮の御かたにかはるのうと〳〵しき事をみつからのたまへり

いかてこのわたりにもめつらしからん人の　かはるのおもひ給ふやうは一品の宮の御かたに宮のわりなく思ひ給へらん人にかたちひつきて御心をさはかしくおもひしらせたてまつらはやとおもひ給ふなり

かたいものかな人のこゝろはと　論語曰難乎有レ恒矣述而第七

たいの御かたのかの御ありさまを　宇治の中の君の御ことなりふとひんなきむつひとはかはるのわか御ことゝ也

れいのにしのわた殿をありしにならひて　女一の宮をみたてまつりし時のことゝ也

なとねたましかはにかきならしたまふとの給ふに　遊仙窟に女の琴ひくを聞ていへるなり

にるへきこのかみやはへるへきと　これも遊仙窟の詞なり一品宮は女二宮の御このかみなりうすものゝひとへきせ奉りてみ給しなとはかたちの似給へる心なるへし

まろこそおほんはゝかたのをちなれと　これも遊仙窟の心をとりてかけりかはる大將は明石の中宮の御弟なれは一品宮には母かたのをちにあたれるなり

我はゝ宮もおとり給へき人かは　入道宮は源氏宮の御はら也一品宮は明石の中宮の御はら也

ましてならへてもちたてまつらは　女一の宮女二の宮をならへてもちたてまつらんことは有かたからんとかほるの思ひ給へるなり

みこのむかし心よせ給しものをと　故式部卿宮のかほるに心さしまし〳〵けることゝなり

中々みな人きこえさせふるしつらんことを　故宮の御心むけは誰々も聞ふるし給ふらんをことあたらしくまねひ給ふと也

ことよりほかをもとめられ侍ると　すなはち古歌の詞をとりて思ふてふと云心なり又心の中はことはにもいはぬゆへにことよりほかをもとむるといへるにや

君にもいひつたへすさかしたちて　宮の君にも申さすをとなひたる人まつさかしたちて返しゝたるな

り
御しりうことをよろこひ聞え給めり　しりうことは宮の君のうしろことにの給ふことをかたる也
なみ／＼の人めきて心ちなのさまやと　かほるの思給ふ事なり
けにもと思わきて君をひきゆるかすへけれは　これは女房の心にかほるのことはりをきこえ給ふをけにとおもひわきて宮の君にこのよしきこえて心をひきうこかしたると也
松もむかしのとのみなかめらるゝにももとよりなとの給ふすちはまめやかにたのもしくてそはと　松もむかしのとはむかしわすれぬ人をいふもとよりなとはかほるのことはにもとよりおほしすつましきすちとあるによれる詞なりこれは宮の君の返事なり
たゝなへてのかゝるすみかの人とおもはゝ　かやうに宮つかへなともなくてひとりすみなとし給ふ人ならはおかしかるへきと也
この人そ又れいのこの御心みたるへきつまなめりとにほふ宮の御ことなり

あやしかりけることはさるひしりの御あたりに　これよりは宇治のうはそくの宮の御女ともの事なり中にもこのはかなしやかろ／＼しやなといへるはうき舟の君のことなり
ありとみて手にはとられすみれは又ゆくゑもしらす消しかけろふ　後撰あはれともうしともいはしかけろふのあるかなきかにきぬる世なれは　ありとみてたのむそかたきかけろふのいつともしらぬ身とはしる／＼　今案かけろふに二の義あり一は陽焔をいふ春陽の氣の煙のやうにみゆるをいふかけろふのもゆる春邊とよめるはこれなり一は蜻蛉といふ虫なりはかなくいのちみしかき物なり軒端にあそふなとよめるはこれなりこの歌はいつかたへもその心わたりて聞え侍りさりなから秋の時分なれはなを虫の心にかなへるにや

花鳥餘情第三十　宇治　手習　夢浮橋

手習宇治九

詞をもて巻の名とせりかほる大將廿三年の春より廿四の春までのこと見えたりはしめの年はかけろふの巻と同年のことなるべし

そのころ横川になにかしのそうつとかいひていとたうとき人すみけり八そぢあまりのはゝ五十はかりのいもうとありけり　これはかほる大將の廿三歳はかりのことなれとその比といふはおほかたその時代をさしていふべし横川になにかし僧都とは惠心院の源信僧都に思なぞらへていへり此僧都は慈惠僧正の弟子にて横川にすみたまひて顯密の敎をひろめ侍りいもうとはかりの妹といふは安養の尼といひし人にたとへたり世榮をいとひ往生せし人なりこの物かたりに小野の尼といひて手習のきみをやしなひし人なり

ふるき願ありてはつせにまうてけり　僧都の母君の泊瀬にまうてたるなり惠心僧都をばその母のはつせのくわんをんに祈請してまうけたる人なりさるによりてふるき願ありてまうてたりといへるにや

みたけさうしける　金峰山精進には後夜於ニ庭前ニ禮ニ拜金峯山ニ百度すと云々

なか神ふたかりてれいすみ給ふかたは　尼のさと小野にあり

故朱雀院の御りやうにて宇治院といひし所　李部王記天曆元年十一月三日太上皇陽成御ニ宇治院ニ遊ニ獵山野ニ又天慶八年十月十八日朱雀院宇多帝也庄牧勘文云宇治院萱原庄被レ留ニ後院ニ云々今案朱雀院は寛平法皇を申なりそれをこの物かたりの朱雀院にかきなせるなり

さやうのものいしそくへきいんをつくりつゝ　印をむすふをつくるといふなり

かしらのかみあらはふとりぬへき心ちするに　河海の説しかるへからすこゝにいふ心はたとへは狐の女に變化せるならばそのか頭をかみになしてふときかつらなとに見すへきと云心にや　樂府の古塚狐の詞に頭は變ニ雲鬟ニ面變レ粧大尾曳作ニ長紅裳ニといへりこれ狐の女に變化する姿をいへり頭變ニ雲鬟ニといふ心をもてかしらのかみあらはふとり

ぬへき心ちするといへるなるべし

五

きつねの人にへんけするとはむかしよりきけと

通の中に神境通といふことありこれは妖通報通神通なといふ差別ありきつねたぬきなどの人に變するをは妖通といふもと獸にてあるか希有に人にはくるは妖怪なる通と云なり又龍などの雲にのりて空をかけるをは報通と云過去の因行によりて龍とならはかゝる報を得へきによて果報の通といふ聲聞菩薩佛などの通をは神通といふこれは出世の修行によりて得てしかも神變不思議なる通なりそのうち二乘の通は菩薩に及ばす菩薩の通は佛にをよはぬ道理のあるべきなり

みつし所など　御厨子所は食物を調する所なり公私ともに稱する名なり

あなさかなのこたまのおにや　大木の下にゐたるゆへに木玉の鬼と名付たり

むかしありけん目もはなもなかりけんめおにゝや　朱の盤といふ繪物かたりあり文珠樓の目なし鬼のことをかける山法師なるによりて聞つけたることをいへるなり

たのもしくいかきさまを　いかめしきと云がごとしたけき心なり

おにゝも神にもりやうせられ　りやうは領なり人にはかりごたれても　人にたばかられたるこゝろなり

よこさまのしにを　横死なりひふんの死をいふなり

藥師經にみえたり九の横死をいたせり

めにみすみるなり

御くるまよせておりたまふほど　尼君これまではいまた宇治院にうつり侍らぬなり

しかしかのことをなむ六十にあまるとし　これは僧都の詞なり

うちきくまゝにをのか寺にてみし夢ありき　これは妹の尼君の詞なり

たゝ戀かなしむむすめのかへりおはしたるなめりとて　僧都の妹は右兵衞督と云人の妻にてありしか女をうしなひてかなしみのあまりに道心おこして尼になれるよしみえたりその女は中將といふ人の妻にてありけるとかや

さすかに時々めみあけなとしつゝ　目を見上なり又

見ひらくなり
いみしうかなしとおもひし人のかはりに　妹の尼のありしむすめのかはりに見んとおもへるなり
ひめ君をゝきたてまつり給て　これは女二宮のことをいふなり
ひえさかもとに小野といふ所に　大二條關白の女觀子尼になりて大原にすみ侍りしをは時の人小野皇后と號せり大原は小野郷の内なり
あかほとけ京にいて給はゝこそあらめ　あか佛はわか佛なり僧都をいふ詞なり山こもりのちかひありとも京へ出給はんこそあらめ坂本まではなにかくるしかるべきとなり
くとくのむくひにこそかゝるかたちにもおひ出給けめ　法華經隨喜功德品云面目悉端嚴爲人所喜見云々
なにかそれえんにしたがひてこそみちびき給らめたねなきことはいかてかなとのたまひ　法華經云佛種從緣起云々今案一切色心諸法の種子をは第八の阿賴耶識含藏せり染淨の緣にしたがひて現行して佛とも衆生ともなるものなりたとへは草木等の種の大地雨露の緣をかりて生長せるがことし種あれども緣なければ現行せず菩薩の慈悲ましますといふもその人の宿因なければはこれをみちびき給ふ緣となり侍るべからずはつせの觀音も小野の尼公にやしなはるべき因あるによりて浮舟の君をみちびき給ふ增上緣となり給といへるなり
われむさんの法師にて　唯識論曰云二何無慚一不レ顧二自法一輕二拒賢善一爲レ性能障二礙慚一生二長惡行一爲レ業
女のすちにつけてまたそしりとらす　法華經安樂行品云又菩薩摩訶薩不レ應二於女人身一取（所イ）レ能生二欲想一相而爲レ說レ法云々若爲二女人一說レ法不レ露二齒笑一不レ現二胸臆一乃至爲レ法猶不二親近一況復餘事
よからぬ人の物をびなくいひなし侍る時には　これは大德たちのことはなり
よき女のあまたすみ給し所に　宇治の優婆塞の宮をいふなりかたへはうしなひてとはあけまきの大君のことなり
さうしみの心ちはさはやかに　うき舟の君をいふなり
ひとりみし人のかほはなくて　宇治にて見し人のかほはひとりもなきとなり浮舟の君のやう〳〵本性

になりて思侍るなり
いといみしと物を思ひなけきて　浮舟の君の宇治にて身をなけんとせしことを思ひいたしたるなり
つゐにかくほいのこともせすなりぬと　如二本意一也身をなけんとせしことなり
うちはへぬるみなとし給へる　温氣なりぬるけのことなり
一とせたらぬつくもかみおほかる所に　業平中將としよりたる女に戀られてよめる歌の詞なりつくもかみは老人のかみのうみの藻をつくねたるにたとへたりこゝにはとしよりたる女とものおほかるをいふなり
たゝほのかに思ひいつることゝては　これよりは浮舟の君の尼君にかたる詞なり
かくやひめをみつけたりけん竹とりの翁よりも　上の詞にいみしき天人のあまくたれるをみたらんやうにとかけるにあはせてかくやひめをはいひ出せるなり
このあるしもあてなる人なりけり　僧都の母君をいふなり
むすめのあまきみはかんたちめのきたの方にて　小野尼は右兵衞督の後室なり上にしるせり又夢のうきはしの卷にもみえたり
むかしの山さとよりは水のをともなこやかなり　うち川をはあらましき水のをとゝいへりをのゝは音無の瀧といふべしなこやかは和の字なり
みしあつまちのことなと　常陸の國にてのことなり
ゆふきりの御やす所のおはせし山里よりは　夕霧の卷にあることなり
とかくさたすきにける人の心をやるめり　年よりたる尼君達の琴ひきてあそぶをいふなり
むかし見し都鳥ににたるとなし　むかしみし都の人といはんとて都鳥とことばをかざれるなり又わがおもふ人はありやなしやとゝはまほしけれど都鳥に似されはかひなき心なり
世中にあらぬ所はこれにやあらんとぞ　拾遺 世中はあらぬ所もえてしかなとしすきにたるかたちかくさん
くはしきことある人々にもしらせず　そこにある人にもくはしきことはしらせぬといふ心なり

ささうちをひて　中將も小隨身をめしくするにより ての前聲を發するなり

けふはみなはふきすてゝ　とくよりいてたち侍るを友たちともおなしくはわれもなとしたひ侍るにさまたけられてとかくうちすごし侍るけふはその人ともをはぶきすてゝいてたちたるよしかたるなり

しろきひとへのいとなさけなくあさやきたるに　あさやきたるははりたるをいふにや

はかまもひはた色にならひたるにや　檜皮色は面蘇芳にくろみありうら　花田をいふなり

心うくものをのみおほしへたてたるなん　これよりは尼君のうき舟のきみにかたらふ詞なり

いとゝなみたくみてへたてきこゆる心も侍らねど これは浮舟の君の有樣なり

いかなるにかいと物おもひしけきさまにて　ものおもひしげきは物おもひしたるさまなり

うちつけこゝろありて　うちつけは直の心なり

まつちの山となん見給ふると　小町か歌こゝにかなへり上に女郎花の歌あり下の詞に秋をちきれると中將のいひ侍り

かくしたる人の心からにやふさはしからず　くしは苦なり

心ちよけならぬ御ねかひはきこえかはしたまはんに 尼公の返事なり

よをこめたるさかりにては　世こもれるといふ詞とおなじわかき人をいふなり

あま君はやうはいまめきたる人にそありける　はやうはむかしのことなり

あたらよを御らんしすてつるとて　萬葉にあたら夜は惜夜又新夜とかけりあたらしくおしき夜の心なり

なにかをちなるさとも心み侍ぬれは　歌のことはあるべしいまたみ出し侍らず

ふえのねさへあかずいとゝおほえて　尼君の笛の音にめてゝ中將をとむるとて歌をよめるなり

この大あま君　僧都の母なり

いつらくそたち　うつほの物語にも此詞あり京くそたちともいへり童女の通稱なるべし今の世にもなにこそといふがごとし五音通せるゆへなり

いまやうはおさ〳〵なへての人のいまはこのます

中將のおもふこゝろなり

いよ〳〵めでられてよひまとひもせす　大尼君のことなり

いとおやしきことをもせいしきこえ給ける僧都かな

中將の詞なり

たりたんなちり〳〵たりたなくと　これは笛の音のかくきこゆるなりそれを和琴に尼公の引たるなり唱歌なとにおなし　後拾遺歌云　ふえのねの春おもしろくきこゆるははなちりたりとふけはなりけり

よへはかた〳〵心みたれ侍しかはいそきまふて侍し

中將のふみのことばなり

おきのはにおとらぬほと〳〵にをとつれわたる　後拾遺　荻のはに吹過てゆくあき風のまたたか里をおとろかすらむ　今案是よりはうき舟の君の心をいへるなり

とくなし給てよとて　尼になし給へといふなり

ふたもとは又もあひきこえんと思ひ給ふ人あるべしと　二もとの杉は匂宮かほる大將のふたりをおもひ出給ふにや又もあひみんといふ歌によりてあま君のたはふれことにいひあてたるべし

ふる川の杉のもとたちしらねどもすきにし人によそへてそ見る　尼公の返歌なり過にし人は小野の尼君のむすめのことをいへり

われはと思てせんせさせたてまつりたるに　ひめ君少將の尼と碁をうちたまへりひめ君にせんせさせ侍りしかまけにしかは手をなをしたるなり

きせい大とくになりて　備前掾橘良利肥前國藤津郡大村人也出家名二寛蓮一爲二亭子院殿上法師一亭子院法皇山ふみし給ふ時御ともしけるよし大和物語にのせ侍り碁の上手なるによりて碁聖といへり延喜十三年五月三日碁聖奉レ勅作二碁式一献レ之云々抱朴子曰圍レ碁者世謂二之碁聖一故嚴子卿馬浮明有二碁聖之名一也或書曰唐堯造レ碁敎二其子丹朱一一説曰不レ然碁出二於戰國之時一云々

つゐに僧都なんふたつまけ給し　もと僧都と尼公とうち給て僧都二つまけ給しことをいふなり

しみつかんことのやうに　古今さゝのはにをく初霜のよをさむみしみはつくとも色に出めや

ひるのつかひのひと所なと〻ひき〻たるなるべし
女君一ところはとまり給へるよし使の人の聞たる也
おい人の御かたにいり給にけり　大尼君のかたへはひかくれたるなり
た〻しりきこえ給へき人のとし比ことゝ〳〵しきやうにて　これはあま君のしり給ふ人の年ころことゝしき様なりしを初瀬にまうて給ふみちにてうちの院にてたつねあひ給へりと中將にかたるなり
ひとつはしあやうかりてかへりきたりけん　此ことゝ縁いまた勘得すなをたつぬべし
こもきともにゐて　上にみえたり姫君のともにゐたるわらはの名なり
しなましかはこれよりもおそろしけなるもの〻中に冥途にて鬼などにせめられんことなり
小島の色をためしにちきり給ひしも　匂宮の歌　としふともかはらんものか立花のこしまのさきにちきるこ〻ろは
はしめよりうすきなからものとやかに物し給し人は是はかほる大將のことなり

鳥のなくをき〻ていとうれしは〻の御こゑを聞たらんは　行基歌　山とりのほろ〳〵となくこゑきけばち〻かとそおもふ母かとそおもふ　今案に夜のあくるうれしさをいふなり
ともにてわたるべき人も　こもきを云なり
まろなるかしらつき　圓頂とは法師をいふなり
たちはて〻し物をと思ひ出るもさすかなりけり　恩愛の道を云なり
くらうしなしておはす　おくふかくして人に見へぬ心なり
りうの中よりほとけむまれ給はすはこそはへらめ　龍女成佛のことなり
この御まへなる人もあね君のつたへに　宰相の君をいふなり
よくもあらぬかたきたちたる人も　かたきのやうなる人なり
かみは五重のあふきをひろけたるやうに　けさ尼のかみのふさ〳〵としたる扇をひろけたるやうなり
この尼君もはなれぬ人なるべしたれならんと　中將のおもふ心なり此姫君も尼君とよそならぬ人なる

べしと見えたる事を中將のあやしく思ふ也
ひたちの北のかたはをとつれきこえ給やといふはいもうとなるべし　常陸の北の方はうき舟の君の母なりこれは紀伊守か妹なるべし
あやしくやうの物とかしこにてしもうせ給ける事
やうの物といふ詞上の卷にもあまたありあやしくやうのものはたゝあやしきさまのものといふ心なり樣の字をはやうともさまともいふなり
右のおほい殿との給へは　右大臣とこの殿といつれそと云詞なり玉かつらの卷にこの君とゝある同しことはつかひなり
いとうつくしくひねらせたまへはとて　きぬひとへのみゝをひねることなり
むかしの人あらましかはなと思いて侍る　尼君のわかむすめのことをおもひいたし侍るなり
見し程まてはひとりものし給ひき　うき舟の君の母のことなり
大將はこのはてのわさなとせさせ給て　浮舟の君の一忌のとふらひをし給ふことなり
かのひたちの子どもかうふりしたるは　元服したるをいふなり
ところのさかにや　さかは惡なり
又まろはいとおしきことそあるやと　此人をば匂宮もわりなく思給し人なるを宮にはかくし給て大將にかたり給へはへたてたるやうなれば中宮はうちいてかたくおほしめしたる心なり小宰相もやかてさ心得ておかしと思たるなり
宮のとはせ給しもかゝることを　中宮のかほるにとひ給ひしことなり
さらにやかてうせにしものと思なしてをやみなんかほるの心に思ふことなり
うつし人になりてすゑの世にはきなるいつみのほとりはかりをそのつからかたらひより　うつし人はよのつねの人をいふ黄泉は日本紀伊弉冊尊のよみつくにゝ入給へるを陽神のとふらひ給ふことみえたりそれをかほるうき舟の君のことに思よせ侍り
人のかたり侍しやうにてはさるやうもや侍らん　うき舟の君心と身をなけんとは思侍ることはよもとおほえ侍り人のいふやうにものにけとられたることはさもや侍りつらんと薰の思給ふなり

宮の御ことをいとはつかしけにさすかに　匂宮の御ことなり

いとおもき御心なれはかならすしも　大宮の御こゝろおも〳〵しさをかほるのこゝろにおもふことなりこれより下はみなかほるのこゝろをのへ侍るなり中宮の御心を也

夢浮橋宇治十

此卷の名は歌にも詞にも見えさることなり一部の名目は四句に料簡してすてに釋しをはりぬうきはしは古歌の詞に世中は夢のわたりの浮橋かとよめるをとりて夢のうきはしとつけたりその子細河海抄にいへる相違なくおほえ侍り手習の卷のをはりの言葉にもうちみん夢の心ちにもあはれをもくはへんとにやありけんと浮舟のことをかほるの思給ふことにかき侍りことしはかほる二十四歳の春より夏までのことと見えたり

山におはしてれいせさせ給ふ　月の八日山の中堂にてかほるの經佛供養し給ふことなり手習の卷にもみえたりされは例と云なり

かことかる人なん侍るを　かことかるはかこつ心なり恨かへるなり

むかし物語にたまとのにをきたりけん人の　魂殿は山作所をいふなり後漢書に呂太后の山陵をほりて赤眉の黨のおかしたることを河海等の諸抄にひけりそれはこゝにあたらぬ説なりたま殿にをきたりけん人のたとひといふはたとへは人の死せるをすてに入棺して火屋なとにをきたるかけうにしてよみかへりたることのあるへきなりそれを心にかけてもとめみるへきなり

てんくこたまやうのもの　天狗といふは星の名なり本朝に用る所は天魔類といへり

夢の心ちしてあさましけれは　此卷の名是によれり

谷の軒はより　河海に二の意を出し侍りかさねて案するに谷の軒はたゝ谷にある家の軒端なるへしむかひの山をくたる人の軒のはつれよりみゆるといはんもたかひ侍るへからさるにや

いとしるかりしすいしんのこゑも　うきふねの君のきゝしりて思給ふ心なり

まきらはしにをゝとあらゝかに聞えゐたり　をゝは

唯なりいらふる聲なり涙のまきらはしにを丶とあら丶かにいらへたるなり

けにへたてありとおほしなすらんかくるしさに　うき舟の君の尼君にかたり侍る詞なり

いとかたはことかなそうつの御心は　尼公の返答なり

けせうの人なんいかなることにかと　けせうは見證なりそばあたりの人をいふなり

きこゆへきことも侍らすた丶此御ふみを　わらはのことばなり

さらにきこえんかたなくさま〳〵につみおもき御心をは　これよりはかほるのふみのことばなり

みたてまつる人々つみさり所なかるべし　つみはとかなりとかをのかれんかたなきなり河海の說いか丶とおほえ侍り

雲のはるかにへた丶らぬほとに　尼公詞　古今あふことは雲井はるかになる神の音にき丶つ丶こひやわたらん

我御心の思ひよらぬくまなくおとしをき給へりしおとしは人をおとす心にやかくしすへたる人におとされて返事もし給はぬにやとわか心ならひに思ひ給ふなり河海に落置といへりおほつかなしほんにはへめる　物かたりのむかしの本にとなり

愚應仁之亂初避上都暫寓九條之坊困敦之秋重赴南京纔卜十弓之地爾來已歷五秋螢空感双蓬鬢遂倒之餘功夫之暇忘白樂天世俗文字之過翫紫式部源氏物語之詞篇々通至敎之命脈句々貫和歌之骨髓於是每觀覽知日新月盛及尋繹悟今是昨非遂挹河海之流盡眞源於心底被促花鳥之使寫餘情於毫端也耳文明四年龍集壬辰除月上澣桃花居士七十一歲誌焉

崇女士論

全

國學院大學出版部印

紫女七論目次 原本無目次

紫女七論（異本題號無）　系圖（イ無）附

藤（イ無）原為章撰

良門　閑院左大臣冬嗣公第六子　内舎人正六位上　贈太政大臣正一位
　利基　從四位上右中將
　兼輔　從二位歌人　號堤中納言
　　雅正　從五位下刑部少輔　雅作惟誤也
　　為頼（房イ）　從四位下太皇太后宮亮　歌人母右大臣定方女
　　伊祐　從四位下讃岐守
　　　頼成　從四位下因幡守　實具平親王男

今案紫日記云中務の宮わたりの御事を御心にいれてそなたの心よせある人とおほしてかたらはせ給ふ云々式部か中務宮具平親王へ心よせあるはこれらの由緒なるべし

為時　正四位下越後守　或作越前守儒者歌人
　惟規　從五位下　式部丞母常陸介為信女

紫日記云此〇（かみイ）式部丞といふ人のわらはにて史記といふ文よみ侍りし時云々後拾遺集にいふ父のもとに越後にまかりけるに云々又云父のもとに越の國に侍りける時重く煩て云々新勅撰集云藤原のふのりか越後へ下けるに云々難後拾遺に越後にてうせたりと見ゆ（云々イ）

惟通　從五位下　安藝守
定暹　阿闍梨
女子　紫式部母同惟規嫁左衛門權佐宣孝　今案宣孝卒後仕上東門院

河海抄云鷹（房イ）司殿從二位倫子官女也相繼而陪仕上東門院　又云源氏一部の中に紫の上の事をすくれて書出たる故に藤式部の名をあらためて紫式部と號せられけり　今按紫日記云左衛門督公任あなかしこ此わたりに若紫やさふらふとうかゝひ給ふ云々これ式部をさして若紫と稱せられたれは河海抄の此說尤あたれり

又案宣孝系圖に長保三四二十五卒とあり紫日記と合せ考るに長保三年四月二十五日に宣孝卒して後三四五年はかりやもめすみして寛弘二三年の頃にもや宮仕に出たち侍りけんかし源氏物語作りしもそのやもめすみの程にやなほ論の中にしるし侍り　系圖異本に道長公妾也後嫁宣孝と

あるは傳說の誤なり

女子（イ無 父宣孝）　賢子嫁太宰大貳高階成章因號大貳三位後一條院御乳母

榮花物語殿上花見卷云內の御めのと大貳三位云

々

女子（イ無 父同上）　辨局　後冷泉院御乳母

榮花物語楚王の夢の卷萬壽二年（イ無）八月三日後冷泉院御誕生ありて御乳母をいふ所に云大宮の御方の紫式部かむすめの越後辨（作者本別行一字下）左衞門督の御子うみたるそつかふまつりける云々大宮とは上東門院なり左衞門督とは兼隆卿なり此書樣を思ふに紫式部も萬壽二年の頃は猶存生にて大宮は侍りしとみゆ

又殿上花見の卷長元四年九月廿五日上東門院住吉まうて供奉の所に云一の車には尼四人辨の尼辨の命婦左近の命婦少將の尼君二の車には侍從のすけ越後の辨のめのと大輔（ティ）平少將美濃の小辨兵衞內侍御車のしりには宣旨三位そさふらひける宣旨は源大納言の御娘三位は內の御めのと大貳三位なり　（作者本別行一字下）此供奉に大貳三位辨乳母はみえ侍る（ナイ）に母の式部の名は見えす無なくはかならす參るべきもの丶やうにおほゆ長元四年には既に身まかりたるにや或はさはる事（藥なとのイ）ありて京にと丶まれる歟

さよのねさめ（後普光園院攝政良基公作）云紫式部か源氏白氏か文集身にそへぬ事はなしとこそ後京極殿も仰られけれ

此後京極殿の御こと（詞）は諸抄に見えすめつらしくおほえ侍るま丶に筆のついてにしるし侍り

千載集（以下作者本）云上東門院に侍りけるを里に出たりけるころ女房のせうそこのついてに箏つたへにまうてんといひて侍りけれはよみける紫式部

露しけき蓬かもとのむしの音をおほろけにてや人の尋ん

此箏の傳授にても式部か音樂上手のほとを知へし亡論の中にもらし侍るま丶こ丶にしるし侍り

七論

○其一　才徳兼備

おほよそ才徳ともに備ふる事は大夫すらかたき事になん有けるまして女にては大和もろこしいともまれなるへしこゝに古より源氏物語を論するひとたゝ紫式部か英才をのみ稱して其實徳をいはされは物語の本意もあらはれかたく式部か爲に物うき事なり（爲章）つら〳〵物語と紫日記とをよみてその氣象をはかり其事實を考るに大和には似る（ひとつふたつイ）人もなき才徳兼備の賢婦也先物語のうへにておほむねをいはゝむらさきのうへのらう〳〵しくおほとかなるものからおもりかにして用意ふかくあかしの上のこゝろたかきものか（君イ）らへりくたり花ちる里の物ねたみせす藤つほの后のあやまちをくいてはやく入道したまへるあさかほの院のふかく名をしみたまへる玉かつらのうへのさまよく人々の懸想をのかれたる總角の君の父宮の遺誡を守りたるなとさま〳〵の婦徳をしるし殊に品さためにあたなる（めイ）をしりそけて實なるをすゝめしはくれ〳〵警戒をしるしたるはしかしなから式部か心おきてなりといへともみな昔物語にかきなしてみつから賢（サカ）したてをあらは（不斷）さゝれはよむ人も只他のうはさのやうにのみ思へりたとへは本人の歌舞は優師かたくみなることをしらさるかことしまたかの日記をよみて（其イ）○おほむねをかゝけ侍るへし

紫日記に云すべて人をもどくかたはやすく我こゝろをもちひんことはかたかるへきわさをさは思はて先われさかしにひとをなきになし世をそらなるほとにこゝろのきはのみこそ見えあらはるめれ

今案人を非とし我を是とすさもしき人情たれ〳〵もかへりみはへるへきことなり

又云やゝもせはこしはなれぬはかりおれかゝりたるうたをよみ出えもいはぬよしはみことしても我かしこに思ひたる人にくゝもいとをしくもおほえ侍るわさ也

又云よろつ（學問ぶりする女也）つれ〳〵なる人のまきるゝ事なきまゝに古きほんこひきさかしおこなひ（佛道修行たてする女）かちにくちひゝらかしすゝの音たかきなといと心づきなくみゆるわさ也と思ひ（式部）給へてこゝろにまかせつへき事をさへ我つかふ人の目にはゞかり心につゝむまして人の中にまじ

りてはいはまほしきことも侍れといてやと思ほえ心うましき人にはいひてやくなかるへし物もときうちしわれはと思へる人のまへにてはうるさけれは物いふ事もゝのうくはへることにいとしも物のかた〳〵（とゝのへイ）いたる人はかたしたゝ我心のたてつるすちをとらへて人をはなきになすなめりそれ心より外の我おもかけをはつと見ゆれとえさらすさしむかひましりゐたる事たにありしか〳〵さへもどかれしとはつかしきにはあらねとむつかしと思ひてほけ（素人めきたる也）られたる人にい（式部は）と〳〵なりはてゝ侍れは（式部にいまた對面せさる人の推量）かうはおしはからさりきいとえんに耻かしくひとに見えにくけにそは〳〵しきさましてものかたりこのみよしめき歌がちにひとを人とも思はすねたけにみおとさん物となんみな人々いひ思ひつゝにくみしを（すてに式部に對面しては也）見るにはあやしきまておいらかにことひとかとなむおはゆるとそみないひ侍るにはつかしく人にかうおいらけものと見おとされにけるとは思ひ侍れとたゝこれそ我心とならひもてなし侍るありさま云々

今案式部に未對面の人のおもひやりにはしきふはえんにいろめき學問たてうたよみふりしてひとをみをとすへしとおもへらんに既に對面しては思ひの外に實躰に物和かによろつ卑下かちなるへし其（以下不作本云イ本）氣象は一部の源氏物語にておしはかるへしまた今昔物語に式部か中宮へ初參のことを書る所にいふしきふかありさまか（源氏物語事也）ゝるめてたき事ともつくり出したる人とも覺えす裳からきぬきたるすかたやうたいもてなしなといとあやしう心もとなけにてそ侍りける云々此說日記の文とよくかなひ侍れはまことにそはへらんめてたき事（以下不作本無）作り出したるは源氏物語の事なり

（上東門院）宮のおまへもいとうちとけては見えじとなんおもひしかと人よりけにむつましうなりたるとこそのたまはするをり〳〵侍りくせ〳〵（假裝の事）しくやさしたちはぢら（實に）れ奉る人にはそはめたてられて侍らまし

今按式部ものやはらかにやすらかなる人品なれは中宮も殊更御なしみふかく成たまふへしそれをかのよしめきやさしふりする人〳〵はねたみそはめ侍るへし

さまようすへて人はおいらか（穩也）にすこし心（才也）をきてのどやかにおちゐぬるをもと〳〵してこそゆゑもよしもおかしくうしろやすけれ

今案此段をよく〳〵味ふへし徳は本なり才は末也

又云をとこたにさえかりぬる人はいかにそやはなやかならすのみ侍るめるよとやう〳〵人のいふも聞とめてのち一といふもしをたに書わたし侍らすいと手つゝにあさましく侍りよみしふみなといひけんものめにもとゝめずなりてはへりしにいよ〳〵かゝる事（左衛門内侍か式部を日本紀の局と名付たりし事也）聞侍りしかはいかに人も傳へきゝてにくむらんとはつかしさに御屏風のかみにかきたることをたによまぬかほをし侍りし

今按をとこも女も此用意を思ふべし

又云なとかかならすしもおもにくゝひき入たらんかかしこからむまたなとてひたゝけてさまよひさし出へきそよき程に折々のありさまにしたかひてもちひんことのいとかたきなるへし

今案あまりなさけに引こめられてしきりにやさし過耻かしふりするかよき事ならむや又されと出すくるは勿論にくかるへし其間のよき程を思ひはからふことをとこも女も心をつくへきをしへなり

右の數件を味ひ思みるにかの品定にかきたる警戒にかなひまた紫の上以下の風儀用意は則式部かゝくあらまほしき心をきてを昔の人の上に書うつし侍りたる也されは式部か婦徳をしはかられ侍り

又宣孝は長保三年に卒して式部やもめすみなるを才女なれは上東門院にてまれ鷹つかさどの（上東門院の母倫子）にてまれ召出されてみやつかへの程に道長公けさうし給ふを式部さまよくのかれたる趣を見るへし（道長公四十三才式部か年推量るへし）

日記（寛弘五年）の文に云わた殿の戸口のつほねに見出せはほのうちきりたるあしたの露もまたおちぬに殿ありかせ給ひて御隨身めしてやり水はらはせ玉ふ橋の南なるをみなへしのいみしうさかりなるを一枝をらせ給ひて几丁のうへよりさしのそかせ給へり御さまのいとはつかしけなるにわか朝顔のおもひしらるれはこれをそくてはわろからんとのたまはするにことつけて硯のもとによりぬ

（式部）をみなへしさかりの色を見るからに露のわきける身こそしらるれ

今按式部我さかりの過たるをかへりみたる心尤殊

勝也かの源内侍か色めきたる（物語に見へたり）とおもひくらふへし
（道長公返歌）白露はわきてもをかし女郎花心からにや色の染らん
まことに式部かおとなしき心からおいらけたるも
てなしなるへし
又云（同年十月十六日一條院行幸上東門院御所イ傍注）行幸ちかく成ぬとて殿の内をいよ／＼みかゝせ
給ふ世におもしろき菊の根をたつねつゝほりて参る
いろ／＼うつろひたるも黄なるも見所あるかさまさ
まにうえたてたるも朝霧のたえまに見わたしたるは
けに老もしそきぬへき心ちするになそやまして思ふ
事のすこしもなのめなる身ならましかはすき／＼し
くもゝてなしわかやきてつねなき世をも過してまし（此詞にても身の程おしはかるへし）
めて度事おもしろき事を見きくにつけてもたゝ思ひ（出家の本）
かけたりし（逆也）心のひくかたのみつよくてものうくおも
はすになけかしき事のまさるそいとくるしきいかて
今はなは物忘れしなん思ひかいもなしつみも深かり
なとあけたてはうち詠て（ナカメ）水鳥ともの思ふことなけに
あそひあへるを見て
（式部）水鳥を水のうへとやよそにみん我もうきたる世を過
しつゝ
かれ（水鳥をさす）もさこそ心をやりて遊ふとみゆれと身はいと苦

しかむなりと思ひよそへらる（此若草の歌（水鳥の歌イ）千載集にものせられたり）
今案此述懐をみよ式部心のまゝ（すイ）ならは早く空蝉の
尼君のことくなるへきを二人の女子にほたされて
にや本意ならぬ宮仕はまことにかなしむへし
又云（寛弘六年の文）源氏の物語おまへにあるを殿の御覧（レイ）して
例のすゝろ事ともいてきたるついてに梅のえたにし
かれたる紙にかゝせ給へる
（道長公）すき物と名にしたてれは見る人のをらて過るはあら
しとそ思ふ
（式部）たまはせたれは
人にまたをられぬ物を誰かこのすき物そとは口なら
しけむ
まことに宣孝より外の人にはをらるましき式部な
り
又云わか殿にねたる夜戸をたゝく人ありときけとお
そろしさに音もせてあかしたるつとめて
（道長公）よもすからくひなよりけになく／＼そまきの戸口に
たゝきわひつる
返し此贈答新勅撰戀五に載らる
（式部）たゝならしとはかりたゝくひなゆへあけてはいか

にくやしからまし

今案道長公の懸想は年月へたるにかくつれなくていかにも出家のほゐとけんと思へる氣象思ひみるへしされは其貞節たふとむへくあはれむへし日記を委しく考さる人のおして道長公の妾といふはうたてき事なり物いひさかなき世の中なり　以上婦德を論す

扨學才は先達の稱美あまりあれともたゝ物語の上にて沙汰して日記の趣に及はす今そのかたはしをかゝけ侍るべし

日記云さるはあやしうくろみすゝけたるざうしにさうの琴和琴しらへなから心にいれて雨のふる日ことおたふせなともいひ侍らぬまゝにちりつもりてよせたてたりしつしとはしらのはさまにくひさし入つゝ琵琶もひたり右に立侍りし大きなるすし一よろひにひまもなくつみて侍る物一つにはふる歌物語のえもいはすむしすになりにたるむつかしくはひちればあけてみる人も侍らすかたつかたにふみともわさとおきかさねし人も侍らすなりにし後手ふるゝ人も殊になしそれらをつれ〲せめて餘りぬる時ひとつ二つひき出て見侍るを女房あつまりておまへはかくおはすれは御さいはひはすくなき也なてう女かまんなふみはよむ昔はきやうよむをたに人は制しきとしりうごちいふをきゝ侍るにも云々

今案式部女にて學問好めるゆへに幸なくはやくやもめになり給ふと女房ともか後言いふとなり

又云左衛門の內侍といふ人侍りすゝろによからす思ひけるもえしり侍らぬ心うきしりうことのおほう聞え侍りのし內源氏の物語人によませ給ひつゝきこしめしけるに此人は日本紀をこそよみ給ふへけれまことにさえあるへしとのたまはせけるをふとおしはかりにいみしうなんさえかあると殿上人なとにいひちらして日本紀のみつほねとそつけたりけるいとおかしくそ侍る此ふる里の女のまへにてたにつゝみ侍る物をさる所にてさえさかし出侍らんよこの式部丞といふ人のわらはにて史記といふふみよみ侍し時聞ならひつゝかの人はおそくよみとり忘るゝ所をもあやしきまてさとく侍しかは文にこゝろ入たるおやは口をしうをのこにてもたらぬこそ幸なかりけれとそ常になけかれはへりし

今案實も男子ならましかは古今ならひなき學生な（大儒イ）るへし

又云宮（上東門院）のおまへにて文集（白氏）の所々よませ給ひなとしてさるさまの事しろしめさせまほしけにおほいたりしかはいと忍ひて人のさふらはぬ物のひま〳〵にをと（寛弘四年の事也）としの夏頃より樂府といふふみ二卷をそしとけなくをしへたて聞えさせて侍りしもかくし侍り

今按此日記の趣にて式部か學窓の厨子とはしらい間に頭さし入て眞名文よみし有樣日本紀史記白氏文集なとにくはしき事は知られたり此外三史五經のみち〳〵しきと佛家の經疏諸家の日記（就中李部王の記なくはしくよみたりと見えたり）和歌の集（古今集以下い〳〵の集）古き物語（うつほ竹取正三位以下）管絃詠曲わはせ香繪かく事裁縫なと諸道に通したる趣はなを日記幷に物語の體にておしはかるへし惟規よりもおやしきまてさとく侍りしを思ふに童女の時よりも聰惠强記にして天然の才器也彼大きなる厨子ふたつに障もなく積たる書は何にてか侍りけんいともゆかしくそ侍るされは德も才もうちおひたる賢婦人の書たる物語なれは容易に看過すへからす

○其二　七事共具

父爲時は菅三品（文時卿）の弟子にて高名の學者又歌をも讀て集にも撰はれたり是を父として生れ其一兄惟規も後拾遺より初てすゑの集にも入たる歌人也それか物ならひつゝおそくよみとりかつ忘るゝ所をも式部はおやしきまてさとりしを見れは聰明自ら神童なりけらし其二をさなき程にさかしきとても女は學問とけかたき物なるを彼學窓のさまを思ふにうちつゝき和漢の積書をよみ音樂以下の業におこたらさりしと見ゆ千載集に云上東門院に侍りけるを里に出けるころ女房のせうそこのついてに箏傳へにまうてんといひて侍りけれはつかはしける（式部イ無）

露しけき蓬のもとのむしのねをおほろけにてや人の尋ん

此箏の傳授にても其樂才おしはかるへし其三　禁裏院中中宮東宮親王攝家の御かたに參りあそひて元日節會よりはしめて追儺に至るまて恒例臨時一とせの公事或は歌合繪合せ香合せ蹴鞠なと優美なることのかきりに其まなこ肥たり其四　時代もあまり

上つかたならすまた衰世たらす中葉にして文質かねたる世に生れたり　其五須磨明石住吉難波泊瀬石山宇治大原野嵯峨野西川東川江口神崎のわたり小野の奥鞍馬の谷比叡の山鳩の峯なと女にてはあまりある迄名所舊跡を歴遊したりとみゆこれ皆才氣のたすけとなれりかの鹽津山にてよめる歌は父か任國へ下りたる時なとの作なるへし（續古今集に云しほつ山といふみちをゆくにしつのをのいとあやしきさましてなをからき道かなといふを聞てよめる紫式部しりぬらんゆきゝにならすしほつ山よになる道はからき物そと　鹽津山は近江淺井郡也）　玉かつらの巻に常陸のことを書るは外祖常陸介爲信或は母の物かたりなとを聞たるにや　其六一部の意と詞とをのこにてはかくこまやかならぬ物なるを女なれはをのこの思ひよらぬ事まて筆をわたしたり女にても上の品なる人は下さきのわさをしりたまはすまして下のきさみはいかゝ上を思ひ及はんや式部たま／＼中の品に生れて思ひいたらぬくまなし　其七これらを兼備したる式部なれはかの石山の冥助をからすともおのつから此物語いてきなまし觀音ほさつを思ひかくるも後人の臆説にして式部をしらさるものといふへし右の七事うちあひたる人はをさ／＼ありかたければ前後に此物語ほとの物見えさることはりになん

○其三　修撰年序

日記（寛弘五年霜月の文）云左衛門の督あなかしこ此わたりに若むらさきやさならふとうかゝひ給ふ源氏にかゝる人見え給はぬにかのうへはまいていかて物したまはんと聞えたり

今案此文を以てみれは物語は今年より以前に出來てはやく宮中に流布してをとこかたにもよまれたれはこそ式部をさして若紫と稱せられけれ

又（同六年正月の文）云内のうへの源氏の物語人によませ給ひつゝきこしめしけるに云々

今按これは往事を追記したれはこれより先何れのとしとさためかたし

又（同年）云源氏の物語おまへにあるを殿の御らんして云々

今案河海抄に寛弘のはしめに出來てとかゝせ給へるはこれらの文によりてにやいかさまにも長保の末寛弘のはしめ式部やもめすみにて里にはへりけるつれ／＼に作りたる歟寛弘五年に道長公四十三

歳にて式部に艶言のたまひ同六年に渡殿の戸をたゝきわひ給ひしなとを思へはいたく老嫗とも見えす又みつからさた過たるよし書たれはわかくさかりなる女とも見えす榮花物語（殿上花見の巻）に中宮威子三十一二にならせ給ふをさた過給ふと書るを思ひ合すへししかれは物語は式部三十歳前後（あまりイ）にて作れるなるへし大和もろこしともに聰敏なる人は何事によらす不日に其功をなすものなれは此物語も思ひの外たやすくかける物なるへし後の人にふき生れつきを以て例するゆへに奇妙不思議の思ひをなして觀音の冥助或は父爲時かちからをそへ或は御堂殿の加筆なとさま〳〵の臆説を申すめり皆式部をしらす書を考ふるにおろそかなりといふへし

或人云榮花物語（浦々の別）長德二年の文に内大臣伊周公のかたちをほむるとてかの光源氏もかくやありけんと見ゆるなと書たり然れは此の物かたりは長德より前に出來て世に流布したれはこそ赤染右衞門も伊周公を源氏にたとへて書けめ如何答云されはこそ（爲章）曾て榮花を赤染か作にあらすと申は加樣の所おほけれはなりその榮花は赤染や紫より後の人古記をとりあつめて其間に詞をくはへて全書となしたる物とみゆ初花の卷はやかて紫日記をとりてしたてたり日記に赤染衞門清少納言和泉式部齋院中將なとの評をもしるしたれは其人々存生の日には世にもらすへき物にあらす赤染もまた同時同輩日記をありのまゝにぬすみて初花の卷をつくるへしやよく〳〵思ふへし又布引の瀧の卷は堀川院御世の事をしるしたり赤染もし存命せは百數十歳なるへしいまた左樣に長壽の名をきかす此ほかなを赤染か作ならぬ證據おほけれとも事長けれはさしおき侍るへし相かまへて浮説妄傳にまよはすたゝ本書をくはしくよみてこゝろみらるへしといへは問人なほいなかしき顏してまかてぬ（榮花物語を古くは世繼といひて男の作なるへし別にしるし侍り）

○其四　文章無雙

物語のうち和歌ならひに詞ともに萬葉古今伊勢物語うつほ竹とりなとの古躰をはなれて物や（しかるイ）はらかにおほとかにやすらかにやさしくおほよそ吾國の風流を盡したれは見る人をして倦事をしらさしむまことにやまとふみの上なき物也全篇は富貴溫潤の氣象にして官祿の文章なれとも中に山林出世あ

り市井田家あり貧困哀傷あり閑情風景は巻ことに見えて情をうつし景をかたとる事まのあたり其人にむかひ其所に遊ふかことし全體は傳にして又おのつから序の躰あり跋あり記あり論あり書ありて諸躰そなはれりかのはゝきゝの巻の品定はことに奇妙なる物なり（爲章）嘗て其章段をあらため侍りける時に序して曰く論破あり論承（義イ）あり論腹あり論尾あり麁より細にいり俗より雅に趣き繁より簡に歸し波瀾頓挫熱應伏案なといふもゐこしの文法をのつからそなはり其氣脉は悠揚として寛裕にその文勢は圓活にして婉曲なり（これ品定のみならす一部にわたりて其心をつくへし）これを漢文にて見侍らは史記莊子韓柳歐蘇にひとしかるへし女の筆にてはめつらかにあやしく式部は誠に古今獨歩の才と云へしいにしへより清紫といひならはしたれと清少納言は才氣狹小にしてさかしたちたる跡あらはにくさけおほき物なり同日にも論すへからす（以上品定序の略）或人云式部は文章を以て何にても實錄をかゝすして無用の作り物語をのこしようせすは誨淫の媒となることいとも念なき事ならすや答云之すなはち爲時か男子にてもたらぬ嘆なり男子ならましかは一部の國史を撰ひて萬代の龜鏡にそなへ侍りてまし女なれとも英才ついにおほふ事を得すしてそれに似つかはしきもの語つくりて閨門の風儀用意を敎たるがすなはち式部なり物かたりと日記とをよみて其氣象をはかるに式部はいはゆる甚しき事をせさる人なりさかしたちたる事をきらひたる人なりもし實錄めきたる事を書たらは女に似つかはしからす甚しき事也賢（カシコ）たちたる事なりしからは式部か平生の用意とは相違すへしたゝししゐて實錄をもとめは彼日記はすなはち實錄なるゆへに榮花物語初花の巻は全く之をとりもちひたりその日記むかしは定めて數十年の巻々ありぬへけれと世に傳はらさるは不幸といふへし（今傳る所の日記は僅に其殘篇と見ゆ）又云物語をよみて其旨をうる人はその身の風儀用意をかへりみてをのこも女もをのかしゝ一箇の好人となるへしもし誨淫といはゝ國風に淫奔の詩を載られたるもさなんそしるへしや美（ホメ）刺（ソシリ）勸戒は詩歌の德（源イ）なるよし先達のをしへ丁寧なりといへともわれら愚かなる意にては勸戒うつりかけ（幸にイ）うしていかにそや事たらはぬやうにおほえ侍るに〇此物語なん遠く儒佛によらすして近く和國の

人情風儀を以て美刺を言外にしらせたれは感味ふかくしておのつからすき／＼しきふるまひをにくみ實々敷心のすち厚く成行くやうにおほえ侍る式部をしらさる人は誨淫のそしりあるへしされは此物語を歌道の經典にそなへ侍らましさは侍らぬかといへは或人うなつきて吾國いちはやびた丶はしき人のむまれなれは直諫は人かたうしてその物やはらかなる諷諭なん病に應する藥にて實も歌道の本意に侍りてんといふ

○其五　作者本意

此物語もつはら人情世態を書てかみ中下の風儀用意をしめし事を好色に寄て美刺を詞にあらはさす見る人をしてよしを定めしむ大旨は婦人の爲に諷諫すといへともをのつからをのこのいましめとなる事おほし一つ二つを擧て例せは桐壺の帝の色をおとんして更衣に寵過すきさせ給ひ人のそしりをもえはゝからせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなしを上達部うへ人よりはしめ天か下のもてなやみ草にならせ給ふは帝德のはつかしき御事にして後代のみかとを諷諫し奉るにあらすや且源氏の君をわたくし物におもほして御元服より以下何事も東宮にをとらずもてなし給ひよらせずは儲位をもとりかへまほしう見えさせ給ふは叡心の淺ましきならすや弘徽殿のおしたちかど／＼しき所ものし給ひてみかとの御なけきを事にもあらす思しけちたるは后妃の德いつくにかおはしますこ丶もとをよみ給ふ女御后より以下その風儀用意をかへり見給はすはまたあしきさまのうたてき名をおひ給ふへし次にはゝきゝの卷の品定は一篇の女誡なれは女といふ女によみならはせ度こそまたうつせみと軒端の荻か圍棊の有樣闇中もぬけの衣といきたなさと教戒あらはなる物なりその空蟬か無心にしてやみなむと思ひはてたるは用意いみしき者にして式部か志なり又次に夕顏かもてならしたる扇にをかしうかきすさひたる歌はすき／＼しきとかやなをおもかりぬへしさるはあまりやはらかにおほときて物ふかくをもきかたのをくれたるよりはたして橫さまに身まかりぬ之をきく女はあたなる人にすかさる丶事を思ふへし源氏のうかひたる

心のすさひに人(夕顔)をいたつらになし我御身も堤の程にて馬より落ていみしく御心地まとひたるは貴公子の微行(シノヒアリキ)をいましむ惟光かかゝる道にゐて(源氏を)奉りたる罪は猶浅からす近習たる人是を思ふへしこれより以下のまき〳〵みな此まなこをつけてよみ侍らは其人の行跡情態(オコナヒコヽロハヘ)かゝみにうつすことく妍醜のかるゝことなく世のいましめとなりなんこと作者の本意にして徒作にはあらさるへし中にも藤壺を源氏の犯して御子をうみ後に御位につけ奉りてすなはち源氏執政し給ふはまことに公家の御鑑にして國相以下の身をひやすへき事也（是は猶此次に論す）さりとてむかし物語なれはいふもの罪を得すして聞人をのつからかへりみとなれはすなはち諷諫にして諺にいはゆる綿にて頸をしむるとかのたくひなり螢の巻にいはくその人の上とて有のまゝにいひ出る事こそなけれ善も悪も世にふる人の有様の見るにもあかす聞にもあまる事をのちの世にもいひつたへさせまほしきふし〳〵を心にこめかたくていひ置はしめたるなり云々是古き草子を論するやうにてやかて式部か意趣と見ゆれは物語をすへて作りこととのみいふへからすみな其世にありし人のうへをのへて勸善懲悪をふくめたり此本意をしらすして誨淫の書とのみ見るともからは無下の事なりまた詞花言葉をのみもてあそふ人は劔の利鈍をいはすしてたゝ柄室(サヤ)のかさりを論するかことしをよそ一部の詞花といひ警戒といひ花實かねそなへたる歌書なれは此道の全經といふも過稱には侍らしかし

○其六　一部大事

冷泉院の御事をあるひは作り○(し脱歟)物語也深く沙汰する事なかれといひ或は仔細あることなりとしきりにこれを秘し或は此趣向の見にくさにて一部の物語とりてたに見まほしからすなと申すともからも侍りともに式部か立意を知らさるものと云へし（爲章）誠に今按をしるして識者の是非をまち侍るへし

桐壺巻云源氏の君はうへのつねにめしまつはせは心やすく里すみもえしたまはす心のうちにはたゝ藤壺の御ありさまをたくひなしと思ひきこえてさやうならん人をこそ見めにる人なくもを(はイ)はしけるかなと云々

かくの如く伏案を儲けて其後つゐに淫乱ありしさ

まに書なし紫の巻にて懐姙をしらせ紅葉賀にて御誕生あふひの巻にて立坊みをつくしにて御即位これを冷泉院と聞ゆさて薄雲の巻に夜居の僧の密奏にて朕は實には源氏の御子のよしを始てしろしめしたれとも誰にとひあはせ給ふへきひともなきまゝ御みつからふるき例を考へ給ふとていよ〳〵御學問をせさせ給ひつゝさま〳〵の文ともを御覽するにもろこしにはあらはれてもしのひても亂りかはしき事（可愛）いとおほかり（可恐）けり日本には更に御覽したる所なしたとひあらんにてもかやうに忍ひたらん事をはいかてか傳へしるやうのあらむとする云々

若菜の下巻に柏木の右衞門督の女三宮へかよひたるを源氏しり給ひてさま〳〵思案の所にいはく（源心）帝の御め（妃）をもあやまつたくひむかし（いつれの世のたれをさすにや）もありけれとそれはまたいふかたことなり宮仕といひて我も人も同し君になれ仕ふまつる程に心をかはしそめ物のまきれおほかりぬへき（此物のまきれ恐るへし）わさ也女御更衣といへとあるすちかゝるかたにつけてかたほなる人もあり心はせかならすおもからぬうちましりてをもはすなる事もあれとをほろけのさたかなるあやまち聞えぬ程はさてもましらふやうもあらむにふとしもあらはならぬまきれ（可恐）ありぬへし帝と聞ゆれとたゝすなほにをほやけ（御てうあいなき人）さま（に也）の心はえはかりにてみやつかへの程物すさまし（物淋しき事也）きに心（密通の人）さしふかきわたくしのねきことになひきをのかしゝあはれをつくし見すくし（女の心に）かたき折のいらへをも云そめしねんに心（源氏）かよひそ（[illegible]の執さもありぬへし）むらん（柏木と女三のこと）けしきに出すへき事にもあらすなとおほしみたるゝにつけて故院（桐壺の帝）のうへもかく御心（曾て源氏藤壺を犯せしこと）にはしろしめしてやしらすかほをつ（源氏の悔心作）くらせ給ひけんおもへはその世の事こそはいとおそろしく（昔の本意）有ましきあやまちなりけれ

今按此書樣を思ふに（たゝ）むかしの事にても又は近世の事にても式部か見聞する所に感して書るなるへし丁寧反復その意淺からすよむ人たやすく看過すへからす伊勢物語に二條の后（業平中將通ひたりとそ）後撰集の京極御息所（元良親王に事出來たり）榮花物語に花山女御（實資公に心をかはし給ふ）麗景殿女御承香殿女御（ともに賴定卿に通せられたりと云）これらの御かた〳〵こゝろはせをもからすして私のねきことになひきたるなるへしされとも幸にして物のまきれ日の本には御覽したる所なかりしとそいともうれしき筆にて侍りもし皇胤御一代にても在原氏藤原

氏なとに紛あらはわか國の御爲ものうき事にして東海をふむ魯仲連ありぬへしさるは藤壺に源氏のかよひて冷泉院をうみ給ふはまことにあるましきあやまちにして源氏は淫褻の罪おもしといへとも皇胤のまきれおもはすなるかたにあらす桐壺の帝の御爲には正しく子なり孫なり神武天皇の御血脉なり伊勢の宗廟その祀をうけたまひ天下の蒼生其政をいたゝき奉るへしそれすら猶冷泉院の御後をすてゝ朱雀の正統にかへせるはいともきひしき筆にあらすやそも／＼一旦人倫のみたれとなかく皇統のまきれといつれかおもくいつれかかろかるへしや斷案を下しかたしといへとも臣下のこゝろにていはゝ源氏の罪をしらさるまねして皇胤の思はぬかたならぬをよろこふへししかしからは式部か立意をしはかるへしさしもに用意ふかき式部か當時宮中にも披露する物語に心得なくて書へしや此造言諷諭に心つかせ給ひていかにも／＼物のまきれをあらかしめふせかせ給ふへしようせすはうたかはしき事ありぬへしかの二條の后なとの密事を思へはをそろしきことならすや上にしるす源の心は皆式部か心にて私通のさまをあり／＼としらせまいらするなり臣下はまた薫大將のまきれを見て用意あるへしもろこしにはみたりかはしき事おほかりけりとは史記に秦の始皇は實には呂不韋か子也楚の幽王は黄歇か子なる事をしるせり讀史管見に胡致堂是を論して云古之有レ國有レ家者雖レ買レ妾必擇ニ其良一恐胡無ニ禮義廉耻一苟且邀レ腸正レ世惡ニ族類之麗一也而況諸侯乎何嬴楚悅レ色納レ姬不レ疑ニ其故一遂使ニ大賈生ニ販心一焉自レ是有ニ天下一者蓋呂姓也栢翳宗廟至レ是而絕云々鶴林玉露に羅大經もまた論して云秦虎ニ視山東一蠶ニ食六國一不レ知六國未レ滅而秦先滅矣何也始皇乃呂不韋之子則是嬴氏爲ニ呂氏所レ滅也司馬氏欺ニ人孤寡一而奪ニ之位一不レ知魏滅未レ幾而晉亦滅矣何也元帝乃牛金之子則是司馬氏爲ニ牛氏一所レ滅也云々これ他の國の事にてすらこゝろよからす況朝廷は皇神のさつけさせたまひしよりこのかた萬世一系さらにまきれさせ給ふ事なきをやもし末の世にも女御更衣のうちに心はせおもからぬうちましりて帝系のまきれもいてきぬべしやと遠くおもむはかりし諷諭をみれは式部は女なれ

ともその性質の美と學問のちからとうちあひて識見をのつから大儒の意にひとしと云へしまたかはる大將の事は天道好還の理をしめしたるおもむき羅大經か筆におなしこの一件は一部の大事にして講する人の意得あるへき事なり或人云さしもにやさしくはかなく書いてたる物かたりをさやうにこは〳〵しき道理を備て論をたつること式部か本意にてはあらさるへしや答云品定云なとかは女といはんからに世にあることのおほやけわたくしにつけて無下にしらすいたつらに死(イ無)しもあらんわざと習ひ學ねともすこしもかとあらむ人の耳にも目にもとまる事しねんにおほかるへし云々日記云すへて人はおいらかにすこし心をきてのとやかにをちゐぬるをもとゝしてこそゆへもよしもをかしくこゝろやすけれまた物語に始には源氏と藤壺の密事をいともやさしきさまにかきなし終りにはいとおそろしく有ましきあやまちなりけれと斷りたる氣象を見よ（頭書云夕貌卷にも我心なからかゝるすちにおほけなく有ましき心の報ひにかくきし方行先のためしと成ぬへきことはあるなめりと書たるも藤壺に心かけ給ふことのそらおそろしきむくひかと源のおほす事也）此外一部の中にそのひと〳〵の婦徳をしるしたるさまと日記に赤染清少納言和泉式部なと諸人を評したる所〳〵を見て紫に心をき給へつゝやかにたましひある女なりさる心より書いてたる物語なれはひとへにやさしくはかなき物と見給はゝ紫をしらす物語の本意をさくらすして只詞花言葉にのみひかるゝといふへし本意は道理つよけれとも物いひふりのやすらかにはかなくえんにやさしく書なす事女の筆にしてしかも上手のしはさなる物なりかのおそろしきゐのしゝをもふするのとこなとよみつれはあはれなりと寂蓮法師かいへるも思ひあはすへしされは代々の先達のよみかたのをしへも心はたしかにてことはのつゝけからいやしからぬやうにかとうけたまはれは前にも申ことく此物語は此道の經書にして和歌家の至寶なるへしといへは或人れいいうなつく

○其七　正傳說誤

宇治大納言物語に云越前の守爲時源氏は作りたるなりこまかなる事ともをむすめにかゝせたりけるとて后（上東門院）のみや此事を聞しめしてむすめを召出したりける此源氏つくりたる事さま〳〵申し傳へたり

參りて後作りたりとも申す何れかまことならん
（同上）無名抄に云大齋院（村上女十宮選子内親王）より上東門院へつれ〲なくさみぬへき物語やさふらふとたつねまいらせ給ひけるに紫式部をめして何をかまいらすへきと仰られ合せけれはめつらしきものは何か侍るへきあたらしくつくりて參らせ給へかしと申けれはさらは作れと仰られけるをうけ給はりて源氏をつくりけるこそいみしくめてたく侍れといふひと侍れは又いまた宮仕もせて里に侍りける折さる物語作り出たるによりて召出られてそれより紫式部といふ名はつきたると申すいつれかまことにて侍らん　今按（本頁下一字下別行）此物語作りし事古くよりたしかなる説なくて人々たゝ口にまかせてさま〲にいひ傳へたれはこそいつれかまことにて侍らんとかゝれたりけめ爲章か料簡を以て見れはいつれも誠ならすしてみな僞なりまつ大綱は爲時か作りてこまかなることゝもをむすめにかゝせたりといふは一向に文章のくさりをもしらぬ無下の人の申傳へなるへし卷々の意を見るにをとこにては思ひもよらぬ事おほくして極めて婦人の趣向なるうへ詞のつゝき一人の筆ならてはかきくたされぬくさりなり一部にわたりて委よむ人は誰とても此説にまよふへからす況前にしるしたる才德兼備と七事共に具りたるを思ふに父か力をからすとも此物語はたやすく出きなまし且又長保寛弘の頃は爲時はやく卒したるもしるへからすまたかの日記はもとより父の力をからさる物のうへ筆にまかせて書たる物なれともその筆樣この物語にをとるへしや日記をくはしく見る人は更に此妄説に迷ふへからす宮仕のことは年譜をしるして考索に備ふへし

（一條院）長保元年十一月　道長公長女彰子入内居二藤壺一十二歲是上東門院なり

二年三月　彰子立后十三歲

三年四月廿五日　紫式部か夫左衞門權佐宣孝卒（イ無）

四年五年　寬弘元年（長保六年也）　二年　三年（イ無）

今按式部か中宮へ參初たるは此二年三年の程なるへし下にひく日記の文を思ふへし

四年　中宮（彰子）二十歲此夏式部に文集の樂府を習ひ給ふ其文前に出たり

五年　中宮二十一歲九月十一日御產（後一條院御降誕也）

むらさき日記ことし七月ノ文云おまへ（中宮の）にもちかう（御前に）さふらふ人々（女房也）はかなき物語するを聞しめしつゝなやましう（にて）おはしますへかめるをさりけなくもてかくさせ給へり御有様なとのさらなることなれと浮世のなくさめにはかゝるおまへをこそたつねまいるへかりけれとうつし心をは引たかへたとしへなくよろつ忘るゝにもかつはあやしき云々

今按此文を味ふに宣孝卒して式部やもめになりてのち中宮へ參り初しか大かた里かちにて折々に參りその里すみのものうき心より浮世のなくさめには以下の述懐かましき文と聞ゆ

九月十一日御産當日の文　云大納言の君（以下六人中宮の女房）少將の君宮の内侍辨の内侍中務の君大輔の命婦大式部のおもと（御覧し）殿の宣旨よいと年へたる人々（此人宮仕に年へたる也）の限りにてこゝろ（[illegible]）をまとはしたるけしきとものいとことはりなるにまた見奉りなるゝ程なけれとたくひなくいみしとこゝろひとつにおほゆ云々

今案また見奉りなるゝ程なきは式部新參なれはなり

十二月廿九日の文に云しはすの廿九日にまいる（式部しはらく里へ下りて後まゐる）はしめてまいりしもこよひのことそかし（いつの年の十二月廿九日にや）いみしくも（うれ〳〵しき也）夢路にまとはれしかなと思ひ出れはこよなく（今は）たち（宮仕に）なれにけるもうとましの身のほとやと覺ゆ云々

今按初參の事を思ひ出たる文（詞にて）を見るにも新參のほとしられたりされは物語と日記とを見て式部か氣象とその時宜をおしはかるにたとへは大齋院より草子御所望わらん時中宮式部をめして何をかまいらすへきと仰せ合せられんに新參の式部さかしたちてめつらしき物は何か侍るへき新しく作りて參らせ給へかしとて頓てみつから其任にあたりて此物語を作るべしや一といふ文字をたにしらぬかはなる式部か謙退ふかき氣象を知らぬ人の妄傳なるへし叉爲時ははやく身まかり夫宣孝も卒して後いまた宮仕もせて里に侍りけるやもめすみのつれ〳〵にさる物語作り出たるをきこしめして召出されてそれより紫式部といふ名はつきたると申說こそまことにて侍らめとおほゆ

河海抄云西宮左大臣安和二年太宰權帥に左遷せられ（給ひし）しかは藤式部をさなくよりなれ奉りて思ひなけくころ大齋院より上東門院へ珍らかなる草子や侍ると尋

ね申させたまひけるにうつほ竹とりやうの物語はめなれたれはあたらしくつくり出して奉るへきよし式部に仰せられけれは石山寺に通夜して此事を祈り申けるに折しも八月十五夜の月湖水にうつりて心のすみわたるまゝに物かたりの風情それにうかひけるを忘れぬさきにとて佛前にありける大般若の料紙を本尊に申うけて先須磨あかしの兩卷を書はしめけりこれによりて須磨の卷に今宵は十五夜なりけりとおほしいてゝとは侍るとかや後に罪障懺悔のために般若一部六百卷をみつからうつし書て奉納しける今にかの寺にありと云々

今案河海はさもめてたき御方の御作なるにかく段々妄傳をしるしをかせ給ふ事尤いふかしくおほえ侍る作者のめてたきにつけては見る人これを信用し爲章等こときもの〻申事は百に一そのことはりありてもづさんなりと思ひけすめれとおほしき事いはねは腹ふくるゝわさなれは筆にまかせて侍る源範政朝臣か提要といふ物にも西宮殿の左遷のころは式部はをさなかるへき歟もしは生れさる前の事なるへしといへり冷泉院安和二年より寛弘元年まては三十六年なり紫日記を以て思ふに安和の頃式部たとひ生れたりともいまた襁褓(むつき)につゝまれて侍らましをさなきより西宮殿になれ奉るといふは年次をも辨へぬ無下のそらことなり石山參籠の事は稱名院内府(公條公)も八月十五夜石山寺にてかの式部か筆をたてしむかしの事或說なから語り傳へたると書給へるはうけかひ給はぬ樣(奈佐本无)なり物語のふせいそらにうかひけるまゝに忘れぬさきにとて須磨明石より書はしめたりとは式部か心のうち也それを後の人はいかに知り侍りけんと獨笑せられ侍るたゝ桐壺より次第にかきくたしたりとみるへし爲章わかき程この河海の說を信してかの自筆の般若見まほしくて石山にてあいしれる坊に逗留して其事をたつねさくり侍りしにはやくそらことにてそ侍し但源氏の間と名つけこ式部か畵像を書此頃やうの机硯なとを設けたるはいつれの世何人の好事にや

又云其後次第に書くはへて五十四帖になして奉しを權大納言行成卿に淸書させられて齋ゐんへ參らせられけるに法成寺入道關白奥書をかゝれていはく此物語世にみな式部か作とのみ思へり老比丘か筆を加ふ

る所なり云々

今按正徹法師なとも此説を信して紫式部かことのはとして藤氏の長者御堂關白殿筆を加へ給ひけるとかけり細流抄には此おく書の事をあやまりうけかはすしてされとも自然の事なるへしとあり爲章か料簡ならは自然の事までもなく一向に妄傳と申へし其故は上に載る所々段々みなもてうけかたけれはこの奥書の事も又なそらへて知へし且道長公奥書かき給ふへくはいまた殿といはれておはさん程の事成へきに老比丘の詞あたらす又寛弘より十餘年のち寛仁二年に道長公五十四歳入道して法成（性イ）寺にこもりおはさむ後たとひ齋院より上東門院へ式部か先年作り置たる源氏一部御所望ありとても入道殿今はひたすら修行專一の御心にてかくのことくいはけなき我慢のおくかき書給ふへからす此奥書といふ物のいはけなさ式部か才をおとして自慢の筆は入道殿の御爲にもものうき書さまなり無下の人此物語の奇妙なるに驚きてたかためにもよからぬ作りことゝしるへし

細流抄云凡日本の國史は三代實錄光孝天皇仁和二年八月までの事を記して其後の國史此物語を記すに醍醐の帝よりしるす心は上の日本紀にしるしつらん意なり尤廣才の所爲なり云々

今按作り物語にも似合ぬこと〳〵しき見やうなり是は榮花物語なとの評にや叶ひ侍らん此料簡用ひかたし

又云作者の本意人をして仁義五常の道に引いれ終には中道實有の性理を悟らしめて世出世の善根を成就すへきとなり

今案これも又こと〳〵しき過稱なり此外古き抄物ともに或は莊子か寓言にもとつけりといひあるは史記左傳をうつせりといひ又台家にかたよる人は天台の六十卷になそらへ四諦の法門を思ひよせたりなと儒佛の家〳〵みつからのひくかたにまかせて式部かはねにもあらぬ道理におとすめり尤五十四帖のひろき中にはをのつから儒佛の道理にもかなひ漢家本朝の故事を思ひよせたる事もおほけれともその本意儒佛の道を明さんとにもあらす實錄にそなへむとにもあらねは其意を得て講すへくなむ

寶物集に妄語戒を説て云まちかく紫式部か虚言を以て源氏物語を作りたる罪によりて地獄にをちて苦患しのひかたきゆへにはやく源氏物語を破りすて〻一日經をかきてとふらふへしと人の夢に見えたりけるとて歌よみ其より合て一日經書て供養しけるはおほえ給ふらんものをと云々

今按是は夢中の忘想なれはとかく論するも筆の費なれとも新勅撰集釋教部を見るに紫式部かためとて結縁經供養し侍りける所に藥草喩品を送り侍る權大納言宗家法の雨に我もやぬれんむつましきわかむらさきの草のゆかりにといふ歌を載られしも一其一日經書て供養の時勸進の歌とみえたり又表白といふ物も其時なと作れるにやはかなき夢をやかて現の實事に思へる人もありて式部か諷諭教戒の物語を却て妄語の罪をおほせらる〻なんまことにうたてき事にして心淺き人のまよひと成へし凡諸抄にさま〳〵の料簡臆説あれともさのみはとて只一二をわけて他を例しはべりかの宇治大納言物語なとは古き物なるにそれすら妄傳を記されたれはまして後々の説ともはうけかたき事おほくそ侍るべしすへからく物語の上にて其氣象を推はかり日記の面にてその事實を考へ侍らはあやまりすくなかるへし

そも〳〵爲章むかし竹園伏見殿聞實照院宮致親王に侍し時此物語を好て中務大輔冬仲朝臣の講釋をきゝ先考内匠頭爲定朝臣の聞書を申請共に中院通村公の御弟子なり又乘胤法橋烏丸資慶卿の御弟子なりの談義を傳へかつ中院亞相通茂卿の御説を受給へり水原河海花鳥岷江なとの諸抄に心を盡し侍りぬ其後あつまに下向し水戸侍從中納言光國卿の彰考館に侍りて李部王記御堂殿日記小右記權記左經記台記玉海明月記玉蘂記以下ちかき世の二水記なとまて數百部の舊記をよみて故實に於てはやゝ不審をはるけ侍りたれと紫家の本意はなほいふかしくのみ侍りたゝにたま〳〵紫日記を得てしは〳〵よみつゝ章段をわかち侍るまゝにをのつから其文體と情態と物語の趣にたかはぬ事をさとりて此七論を草稿して櫃にをさめ侍りたるに過しとし難波江や高津の宮のほとりなる圓珠庵契沖あさりのかり行て萬葉集の不審を傳受し侍りしついて此物語の談にをよひて愚按と符合したる事ともおほく侍しかは旅行

に友をえたる心ちによろこひ思ひ給てかの草稿を清書し侍る事になりぬたゝし先達の非をいま見ることく此七論にもきはめてあやまちおほく侍らんまゝ又後のひとこれをあらため正し給ふへし

むらさきのゆかりゆかしくたつねてもなほわけ
まよふむさし野のはら

時に元祿十六年重陽の日武州小石川の寓居にしてしるしをはり侍りぬ

安藤右平爲章撰

紫のゆかりに咲る藤原のぬしを年山先生と號してもと吳竹のそのふにねさしつゝ都のうちにそたち中頃より彰考館に參りてからやまとの文てふ文をひもとくあまりこの七論をえらひて紫家の隱德をあらはし物語の本意をしめさるゝ事たなこゝろをさすかことし千歲の下つかたに生れて式部を知る事かくのことく委しきは誠に先生は紫家の楊子雲と云てまし資矩も曾てより同し館に侍りて物語の抄物かの京極中納言の奥入よりはしめ也足公の眠江にいたるまてあまねくさくりひろくもとむといへともなを一もとのねもころに武藏のゝ草のしけみに分まよふをりしもこの論をよみて式部か婦德のまめやかなると七事のうちあひたるより冷泉院のものゝ紛れの大事なとまてとし頃のいふかしさをはるけ侍りていよ〳〵紫のうへなき色をあかすあはれにおほえ侍る事ひとへに先生のいさをし淺からすなんされは此論はかの物語の實永き名におふはしめの年五月雨の頃淸書の筆を染へきよしのもとめいなひかたくて武陽大塚の草ふかきわたり末葉の露をしたてゝその功とけ侍るつゐてにしるし侍りぬ「香竹居」伴資矩

筆とりて君か手そめのいくしほに
なをむらさきのこさまさりけり

年山先生安藤氏（字右平 諱爲章）ひろく儒佛の書をよみあまねく本朝の舊記歌書をもてあそはるゝあまりに源氏物語の七論をえらひて式部か女德を顯はし物語を歌道の經典と稱せらるゝなん實も適當の論にして古今未發の評なるへしされはあまたの抄物の眼目となりて紫の上なき色を染ますは此論なり予かつてその講席にあつかりしゆかりのかれかたく校合のついてにかの先生の歌を和し侍りける

藤原治之（定イ）

一もとのねもあらはれてむらさきのゆかりまよ
はぬむさしのゝはら

（奈佐本有同云イ本此歌无）紫家七論一帖水戸相公家安藤新介爲章所撰奇評確論可謂物語指南也翫味無飽寫以藏之

荷友軒枝（牧イ）月叟

室松岩雄
古内三千代
辻陳雄
保持照治
校

明治四十一年六月十五日印刷
明治四十一年六月二十日發行

著作權所有
不許翻刻複製

定價金參圓也

校訂編輯者　室松岩雄
發行者　東京市麴町區飯田町五丁目八番地　目黑和三郎
印刷者　東京市京橋區弓町廿四番地　高塚慶次
印刷所　東京市京橋區弓町廿四番地　三協印刷株式會社

發行所　東京市麴町區飯田町五丁目八番地　國學院大學出版部